



PL
798
.4
A6
1927
v.1

Takizawa, Bakin
Kyokutei Bakin shu

East

PL
798
.4
A6
1927
v.1-2

TE 'R' CARD

15.....

.....

.....

.....



曲亭馬琴集

上

PL

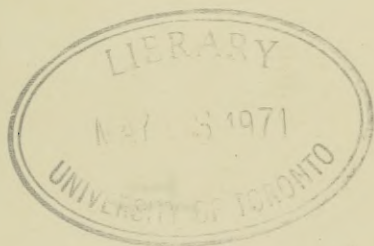
798

.4

A6

1927

v. 1



南... 八犬傳... 卷之一

夏部... 曲序五人編次

八犬傳草稿(安田家舊藏)

第七十四回... 犬傳... 草稿... 安田家舊藏

PL

八丈柳草譜(安田宗舊題)

18

4

6

727

1



南總里見八犬傳第八輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第七十四回 牛を牝々悻悻答恩錢を辞ふ

再説大田小文吾悻悻那龍種る鼠牛の突りまぬ勢は種々當るべうりなりしとせし

駭く氣色を閃りと交う左右のふ小角を楚と捕駐り然と有性ぬ怒牛の奮激

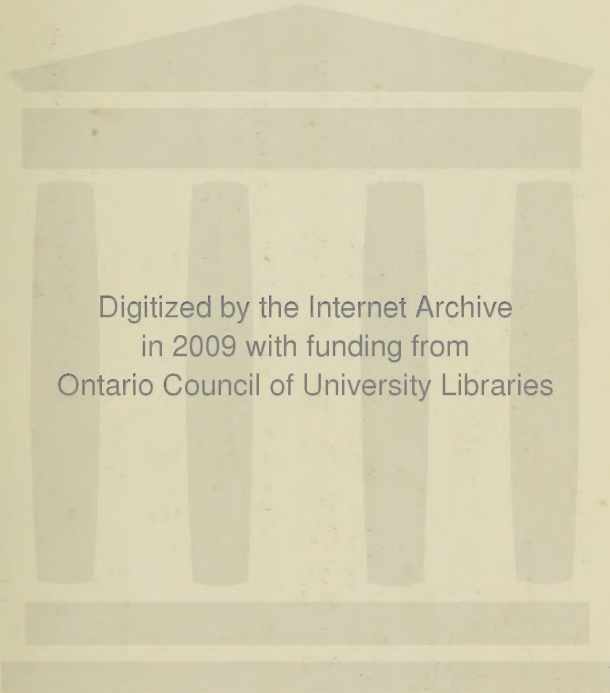
四蹄を壞し踏入まざる推倒えと角へも小文吾も亦一身の力之極に批あて一歩たも退

ろと千曳入石の地中ち見れ出る立ち如く又鳥獲か奔牛の尾を援留めも徳やと覚

えと和漢小儒まるぬ稀有の社親をわけが初子酷く蒐菟これ辟易する牛が士

們ハ亦這解の爲体を着け再服を洗く彼よくとむるよを抗尾を空市の衆皆

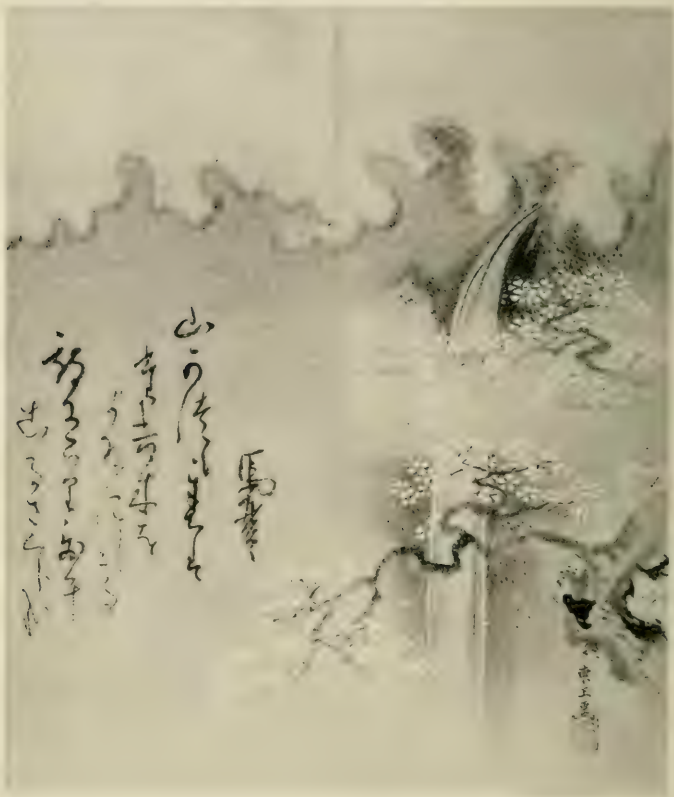
四下を取あめり怖れを近くら找しめを呆れ齊一目成りたり然程も小文吾ハ



Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

馬琴自筆狂歌（池田金太郎氏藏）

THE UNIVERSITY OF CHICAGO



山崎の春の風景

馬場

春の風景
山崎の春の風景
馬場の春の風景
山崎の春の風景
馬場の春の風景

山崎の春の風景

近代
日本文學大系 第十五卷目次

小説
月水奇縁

自序

總目錄

卷之一

第一回

第二回

第三回

第四回

卷之三

第五回

第六回

卷之四

第七回

第八回

卷之五

第九回

第十回

跋

目次

墨田川梅柳新書

九一七

一七

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

判例……………二二
 總目録……………二四

卷之一

一 卜部惟通饒岐野に狐を請ふ……………一五
 二 吉田少將野上宿に美に遇ふ……………三三

卷之二

三 光政遮雨して赤繩に繋がる……………三四
 四 班女花に寄せて黄金を賜ふ……………四三
 五 龜鶴併優して賢翁を歎く……………五九

卷之三

六 盛景影江に胤時を殺す……………五七
 七 松權九清ひて白川山に興す……………六六
 八 忍の惣太禱うて西洞院を關す……………七七

雲妙閒雨夜月……………六九

序……………七〇
 圖説……………七二
 目録……………七六

卷之一

第一套 神麿の假の宿……………八一

九 金鳥囚を告げて惟房を驚る……………六八

卷之四

十 天狗石を飛ばして松權を救ふ……………七九
 十一 春雨厚澤野に山客と戦ふ……………一〇一

卷之五

十二 光政平尾郷に妻子を救す……………一一〇
 十三 澤石淵の惡鬼怒つて少年を擧ぐ……………一二〇
 十四 墨田川の津人海みて狂女を救す……………一二五

卷之六

十五 因を説き果を示す楊柳塚……………一二二
 十六 奸を劬き冤を雪む大團圓……………一二九
 附録……………一六〇

六九 四

第二套 杜鵑の雀を觀……………一六九

第三套 しぐらゝ宿の論衣……………一七九

卷之二

第四套 泉路の雪の山……………一八二

第五套 神水枝の長巻……………一八七

卷之三

第六套 深山路の蛇斬……………三七

第七套 漢文字の種鷹(上)……………三七

卷之四

第八套 漢文字の種鷹(下)……………三七

賴豪阿闍梨怪鼠傳

序……………四〇三

總目錄……………四〇七

卷之一

第一套 天野阿闍梨本會帳の陣に使う
聖明孤山に賴家の故事を説く……………四〇七

第二套 義仲怒つて猫圍を罵る
光隆泣りて僧舎を捐つ……………四〇七

第三套 爲久粟津に義仲を制る
元實鎌倉に義高を闘ふ……………四〇五

卷之二

第四套 大軍急を告げて良人を走らす
唐船人團扇に答をよむ……………四〇三

第五套 唐船計親族を殺す
光隆夜義高を撃つ……………四〇三

目次

第九套 毎月の種鷹……………三七

第十套 孤山の勇突……………三七

第十一套 粟の渡り逢矢……………三七

第十二套 岩戸山の流の種鷹……………三七

録後……………三七

卷之三

第六套 唐刀を擧げて唐船爲久に説く
賴家に事へて義師大軍を慰む……………四〇七

第七套 日枝の山に賴家義高を誘ふ
粟津の原に光實猶鼠を論ず……………四〇五

卷之四

第八套 鶴岡社頭に賴判行僧を祀る
鎌倉營中に西行文政を説く……………四〇五

第九套 師堂の邊に重忠義高を討つ
由井の海濱に怪鼠光實を笑ふ……………四〇五

卷之五

第十套 西行猶を軍前に擧ふ
元實鶴かに唐船を刺す……………四〇三

第十一套 賴判の智願衣の歌を解く
賴子の勇唐船の流を撃つ……………四〇三

三

前編附録……………五七

卷之六

第十六套 箱根山に爲久元を喪ふ 哀河原に幽魂主を誅む……………五七

第十三套 正忠孤忠幼主に仕ふ 荻戸心烈乳汁を賣る……………五六

卷之七

第十四套 金を喪うて替女老を泣く 玉を瘞めて窮士起行す……………五七

三七全傳南柯夢 附南柯後記……………

三七全傳南柯夢

序……………六〇九

總目錄……………六一

姓氏……………六二

卷之一

深山路の楠……………六三

木精の怪異……………六二

丹波郡の傳……………六六

卷之二

第十五套 天龍川の上に忠臣節婦に逢ふ 富田の旅節に重忠竹川を賞す……………五六

卷之八

第十六套 巧兒月下に各志をいふ 榛澤營中に潛かに客を迎ふ……………五七〇

第十七套 重忠大いに義高を款待す 光實進んで唐絲を鞫問す……………五七〇

第十六套 假を弄して大姫初めて眞を認る 明を失して義高更に空に歸す……………五七〇

後編附録……………六〇一

六〇七—一〇三五

稚兒の姉夫 なら坂の侯人……………六〇七

大柏の権璣……………六〇七

卷之三

臥房の胡燈……………六〇五

華洛の倚扇……………六〇五

夜箭の驟雨……………六〇七

卷之四

前島が朝風 百度の願事……………六〇八

春の七絶……………七六

卷之五

長崎の宿の(上)……………七六

長崎の宿の(下)……………七七

主なき園の花……………七七

橋本の歌船……………七言

長町の五味(上)……………七言

卷之六(下)

長崎の五味(下)……………七五

千日寺の楓……………七五

古學南柯後記

序……………七七

年譜……………七五

刊傳氏器目……………七六

卷之一

南柯の接木……………七七

千日の夢の後……………七五

清風の露……………七六

卷之二

冬田の晩霜……………七六

遠山の夕霞……………七七

卷之三

雨後の月照……………七言

末木の點滴……………七言

米谷の酒家……………七言

卷之四(上)

池の中島(上)……………七言

池の中島(下)……………七言

浮名の婿夫……………八六

一編古學後記……………八六

卷之五

階……………七七

秋雨の笠松(上)……………九〇

秋雨の笠松(下)……………九〇

卷之六

鶯塚の新體……………九五

暮の夏の花の(上)……………九言

暮の夏の花の(下)……………九四

卷之七

天神川の添……………九美

過去の庵主……………九三

鶯塚の手斧……………九六

卷之八

夜川の野航……………九七

台歌の花桶……………九七

柴樽の雨笠……………九二

解題……………文學博士 笹川種郎(著)一六

解題

文學博士 笹川種郎

著作と人物

江戸文學の爛熟期に於ては、多くの巨匠大家を出して、一時の觀を極めてゐるが、其のうちには靈光殿の如く文壇の霸を稱したものは、曲亭馬琴であつた。馬琴の尙學と傲岸とは彼に對する嫌惡の情となり、馬琴嫌ひは少なからずあるが、其の大作の多い點よりして云ふも、其の文章の麗麗莊重なる點よりして云ふも、江戸文學史に於ける彼の地位は卓然として高いものであつた。彼は他の戯作者に比して學問があり、好んで四角な文字を用ゐたるが故に、戯作者と云ふを以て甘んぜず、他の戯作者が自ら輕んじ他より輕んぜらるゝを心外に思ひて、彼自らは標榜すること極めて高くあつた。彼の尙學も、彼の傲岸も此の點より出發してゐる。

彼に依りて戯作者の地位が高くなつたのみならず、江戸文學は巨大のものとなつた。赤木黒木

よりして、讀本に至ると、内容が複雑となり、外形が整頓して、從來に見ざる様式のものとなつたが、馬琴に至りては、二十八年の長歲月を経て、『南總里見八犬傳』一百六卷と云ふ未曾有の長篇を著作してゐる。獨り八犬傳のみならず、『椿説弓張月』にしても、未完ながら、『朝夷巡島記』にしても、『近世説美少年錄』にしても、『綱卷 俠客傳』にしても、いづれも大部の著述であつた。よし西鶴の奇警はなくとも、京傳、三馬、一九の機智はなくとも、其の描く所の人物が道徳一點張りて、人間味の乏しいにせよ（八犬士の如き）、又彼が陽には道學者風を裝ひながら、陰には猥雜の事實を、しかつめらしい顔して寫して居るにせよ、『美少年錄』を初め、『弓張月』、『八犬傳』の諸處に散見するが如き）、彼は依然として江戸作者中の泰山北斗であつた。彼に依りて江戸文學が九鼎大呂より重くなつたことは、争ふべからざる事實である。

從來彼が餘りに重く見られてゐた其の反動として、彼に對する非難も又多くあつた。彼が其の實質以上に評價されてゐるのも事實である。然し割引して見ても、彼は猶鬱然たる大家たるに相違ない。彼の人物に共鳴を感じざるものありとも、彼を江戸文學の鉅匠なりと云ふに於て、甚しい異存はあるまい。史上の人物として徳川家康は、甚だ不人望だとは云へ、彼の大人物たることは毫も疑ふべくもないと同様である。

明治以後の小説中にある假構人物の名で、今日で暗傳されるものもあるが、其の餘命二書等があるか。江戸時代の小説中、金々先生や、豊二郎の名は當時云ひ囃されたであらうが、其の壽命は長くなかつた。「海唇」の仇吉、米八の名も一ときりばもてはやされたが、今日では云ふものもない。それに比べると、「八犬傳」の八犬士や、濱路、男八、葵六、船越の如きは随分久しく言ひ囃されたものである。それも今後に於ては次第に薄らぎ忘れ果てるであらうが、彌次郎兵衛、喜多八とともに誰知らぬものはなかつたので、それほど、「八犬傳」は愛讀せられ、庚申山や、富山や、虚構の芳流閣やは小説中の名勝となつた。市井の讀書界に於ける馬琴は、此の點に於て極めて人氣ものであつた。

仁義禮智忠信孝悌の徳は必ずしも各個に擬人されないで、八犬士は總て同じやうに道德の權化である。此の點に於て百八の好漢、殊に三十六人の豪傑がいろいろ一種の特色を有し、同じ短氣にしても、魯智深と武松と李逵とは又別々の個性を發揮する水滸傳、名は好漢であるが、何れも人間の弱點を遺憾なく持つ人間性の最も多い水滸傳とは、大なる運庭があるが、梁山泊の好漢の名が今猶云ひ囃されると同じく、八犬士や、其の周圍を環る人達の名は甚だ親しみがあつた。古い源氏物語は姑く置き、小説の人物中、これほど親しみの深いものは、他に其の儔が稀である。

朗々誦すべき七五調の美文であるためではあるが、伏姫の富山の段の如き、濱路が深夜信乃に別れを告げて怨言を吐く段の如き、芳流閣上の格闘の如きは、長く暗誦されてゐたものであつた。一方には龍の講釋にうんざりしながらも、『八犬傳』は非常の人氣があつた。信乃や毛野や、小文吾、道節、理八、莊助、大角などには各々蠱虺々々がある程に、滿天下を動かしたものである。古今の小説中、『八犬傳』ほど人氣のあつたものは少なからう。作者としての馬琴は決して不人氣者ではなかつた。

然し馬琴の作が斯かる人氣を博したのは、作者の文才以外に何か原因があつたのではあるまいか。他の作者が社會相を寫し、通を並べ、穿ちを事としてゐたのに、馬琴は國民性や民族精神に觸れてゐたのである。『八犬傳』の勇士は、いづれも理想化されたものではあるが、國民性と共鳴するものがあつた。『弓張月』に於ても、『俠客傳』に於ても、馬琴は民族精神を寫さうとつとめてゐる。今日の人よりして見れば、其の共鳴點は少なきにせよ、武家時代の精神は之に依りて簾掲せられてゐた。馬琴の著眼は高遠であつた。これ固より他の作家の企て及ばざる所にして、馬琴獨得の壇場である。彼の作が人氣を博したのは、此の點が與つて力大なるものと思ふ。

馬琴の人物は甚だ好かないが、彼の偉大なる所は決して之を閑却視しない。猶頼山陽の作には

景東するが、其の人物には感心も兼ねるが如しである。若し今日の世に在らざれば、馬琴や山陽やは、面白くない人達であらうと想像せられる。然し馬琴は精力家たるとともに、極めて秘密家で、又勉強家であつた。假りに支那の大詩人李白を天才、同じ杜甫を地才と稱する評語を採用するとは、馬琴は天才よりも寧ろ地才であつたらう。即ち努めて怠らず、謙ます、謙りに謙つて、彼は斯かる大作をものし、斯かる地位に到達したものである。八十二歳の高齡に至るまで、晩年明を失ひても、猶著作に耽り、倦まなかつた。彼は晩年家庭に於て慮まねなかつたが、身を持すること謹直に、悪聲外に漏れぬほど、割合に品行がよかつた。此の點に於て彼は多くの製作者と全く其の選を異にしてゐる。唯々彼はかたくな頑にして人間味が少ない。江戸兒に似合はない、あく抜けのしない、執念深い點が頗る多い。

『大に』（大に）『金金金平』を彼の處女作とすると、其の板行年月は安永九年にして、彼が十四歳の時であるか、これには疑ふべき餘地がある。寛政元年板の（目録）『盡用面二分狂』には、彼が二十四歳の作であるが、これよりして八十二歳までの述作は實に數多く、如何に彼が精力家であつたかを裏書してゐる。

著作目錄

俳諧古文庫 罔 兩 談 廿日 盡用而二分狂言 實語教幼稚講釋

花春風道行 龍宮繪鉢之木 鼠婚禮塵劫記 銘正夢楊柳

登坂寶山道 花よりの團子食氣物語 御茶漬十二因縁 荒山水天狗鼻祖

笑府鈴裂米 編壽海無量品玉 高尾千字文 在于爰身成金言

心學晦日莊子 報鱗鱗狂言 堪忍五兩金言語 曲亭增補萬八傳

四遍指心學草紙 しょほ／＼兩見越の松かこ 堀田川柳の禿筆

阿部清兵衛一代八卦 押繪鳥寶漢高名 加古川本藏編目 補正成軍慮智輪

尤筆節用御宇盡 庭莊子珍物茶話 大黒神黃金柱礎 北國顯慶眼方便

龍宮苦界玉手箱 彦山權現誓助詞 武者合天狗俳諧 寶山狐修怨

時代世話足利染 足利染拾遺亂形 御慰忠臣藏之致 鼻下長生藥

大權書技草緣組 子 寬惠案文當字詞 增補鱷蟹合戦 繪本大江山物語

假面舞臺餘史 彼岸櫻勝花談義 鯨魚大品革羽織 料理茶話即席話

藏子名所圖繪 無茶盡押兵 風見草婦女節用 世談口緝星羅形

六代日圖東漢名阜月落際 十部 國盡女用文章 露

錢鑑貨寫繪 雙喻義理與線輝 駟人形肢體機關 人間萬事塞翁馬

花見話風盛衰記 備前搦盆一代記 視藥霞報條 繪本曾氏勳功記

繪本武王軍談 化鏡丑蒲鐘 俳諧歲事記 夢 秋

足手書草紙畫賦 買給紙薦野弄話 曲亭一風京傳張 父隸字津宮物語

五段淨瑠璃酒肆 敵討蚤取眼 致訓跡之祭數單 春駒象碁行路

浪速秤華兒芬輪 繪本漢楚軍談 繪本天神記 繪本復讐錄

養得類名鳥園會 初老了簡年代記 衣責任 太平記忠臣講釋 野夫鶯歌曲詠言

筆研作種蒔三世相 六冊懸德用草紙 三 羈旅漫錄 同後半之卷

鑑草筆の一本 畫本歷世傑 月水奇緣 閉兼附珍紋圖彙

花洛之水 濟沸西遊記 宿屋賓客 俟待開帳唱 曲亭傳奇花釵兒 小說比翼文

鼓笠雨談 開帳地口提灯 曲亭傳奇花釵兒 枝鳩

小夜石言遺響 敵討二人長兵衛 曲亭傳奇花釵兒 小夜中山宵啼碑

解題 著作目錄 七

新研十六武藏坊

松株本三階奇談

著作堂雜記

四天王廟盜墨錄

新編水滸畫傳

勸善常世物語

二代源賴朝泰打札所誓

三國一衣物語

敵討 賭壯夫

北國三勇士傳

復讐阿姑射之松

妙黃粉巖道明寺

大師河原撫子話

猶奴牝忠義合奏

武者修行木齋傳

椿説弓張月

女筆花鳥文章

益石里山記

敵討誰也行燈

石堂丸荷萱物語

墨田川梅柳新書

敵討裏見葛葉

新累解脫物語

標註園の雪

巷 葦坂堤庵

敵討 雜居寢物語

戲子三十六字萬邊色紙

三七全傳南柯夢

松浦任用媛石魂錄

院久柳巷話説

敵討枕石夜話

敵討 禪幽室

敵討 鼓澤布

島村蟹漢仇擊

不老門化替若水

雲夢間雨夜月

括頭巾漸編紙衣

俊寛僧部島物語

旬殿寶々記

頼豪阿闍梨怪取傳

松葉清史秋七草

敵討 兒手拍

敵討 白鳥關

敦舞伎傳介忠義話説

小鍋五手石入船

敵討 身代名號

夢想兵衛助蝶物語

勻全伽羅柴舟

均鏡奉加助太刀

敵討 賽八丈

小女郎蠶蛛怨亭環

山中麿之介雜物語

稻馬内禪後難棚

昔語 質屋庫

常 夏 草 紙

華也敵野寺鼓草

鏡妻女清々

松之月行月尚繼

燕石置志

古夢南柯後記

青藤藤綱模倣案

竹馬の約

梅灘吉兵衛發心記

千葉館世繪雜話

鳥嶺山鷓助刺

紫雞の記

絲樓春雛奇縁

敵討赤井な物數奇

傾城道中雙六

浪の蒲桂々潮

行半鍋須磨酒室

敵討勝乘掛

美濃蓑衣八丈綺談

皿一皿縛談

野路鈴與作春柳

おかめ八目

南總甲見八夫傳

朝夷巡鳥記

皿一屋訓

巳嶋金男道成寺

薩名辻寒兒仇討

歸齋藤竹筒説話

女護鳥恩愛俊寛

月都大内鑑

龜王丸蛤島臺

比翼紋日黒色揚

津模標判官染

河子寺縁起

再榮花川譚

手毬唄三人長兵衛

雲雀山後日囀

女同放言

百物語長者萬燈

伊豫笠童女純友

盤州將棊合戦

春の海月の玉取

雪貞長者鉢木

義經千木櫻

鴉一考論

伊波傳毛起

籠に成竹取物語

弘法大師暫筆法

信田鉄手白旗拳

安達原秋の産樹

宮戸川三社綱船

あで度六三之文庫
かくく

女阿清夜鯛太刀魚

月宵吉阿玉之池

照子池浮世宣誓

吾一傳記

寄浦橋河原祭文

女夫織玉川晒布 諸時雨紅葉合傘 襲褌辻花染 金毘羅船利生纏

梅櫻對の姉妹 童蒙話赤本事始 殺生石後日怪談 耽奇漫錄

縁結文定紋 傾城水滸傳 苑園小説 大和莊子蝶宵舞

姫萬雨長者鉢木 牽牛織女願絲竹 近世説美少年錄 今戸土産女西行

雅俗要文 風俗金魚傳 漢楚賽擬選軍談 遊世 商人盡日歌合繪詞

代夜待白女辻占 新編金瓶梅 調書 俠客傳 千代清良著聞集

水滸後傳批評半閑窗話 本朝水滸傳前編總評 本朝水滸傳を讀む竝批評

三途平妖傳國字評 禽鏡 續西遊記國字評 判官太郎白狐傳

物之本江戸作者部類 後の爲の記 過世結彌生籬草 稗説虎之卷

編著 稗史外題鑑批評 白鼠忠義物語 新島玉石童子訓 女郎花五色石臺

此等の著作のうちには草雙紙も多く、隨筆も少なからずあるが、馬琴の特長は寧ろ讀本であつた。洒落の下手な、機智に乏しい、いやに堅苦しいことばかり並べ立てる馬琴には、黄表紙、洒落本は其の得意な冊でなくして、歴史を取扱つた讀本が最も適してゐるのである。彼の不朽な名聲は之に依りて獲得したのである。

然し多くの讀本に於ては、京傳のそれと甚しい軒輊はなかつたが、源爲朝を題材にした、朝夷三郎を取扱つたり、南朝に注目したり、關東の兵亂に興味を持つやうになりて、彼の舞臺は廣くなり、其の結構は複雑に、其の規模は雄大となつた。支那小説の彼に及ぼした影響によるとは云へ、彼の見識の高かつたことが與りて力あるのは云ふまでもない。されば馬琴を知らうとするには、『弓張月』と『八犬傳』とに求めねばならぬ。八犬士の性格が現實を離れて餘りに理想化された弊と、『弓張月』に怪獸などを出して興を殺いだ獨りよがりなどはあるが、歴史小説の地位を確立させて、小説の向上を計つた功に至りては、洵に偉大なものと云はなければならぬ。

同じ隨筆にしても、『女同放言』『燕石雜志』『菟園小説』などは、京傳の『近世奇跡考』や、種彦の『用捨箱』『還魂紙料』のやうな、風俗文藝に参考となるべきものではなく、主觀的で、割合に馬鹿氣た、下らない、馬琴一流の厭味がある。此の病弊は又彼の小説中に見えるし、『物之本作者部類』や、『伊波傳毛記』等にも散見してゐる。然しよし此等の病弊があつて、近來馬琴に對する人望が極めて減少したにしろ、彼が江戸時代に於ける大文豪たるに於ては、更に異存がない。

傳 記

馬琴は明和四年六月九日、江戸深川に生まれた。父は澁澤大右衛門興成と稱し、智慧伊豆の稱ありたる松平信綱の一門なる、幕府旗下の士、松平信成に仕へて其の家宰となつたが、故ありて浪々の身となり、深川高松通淨心寺の傍にき、やまなる住居を營みふるうちに、妻吉尾氏との間に馬琴を設けたのである。馬琴に兄二人あり、長を左馬太郎、東崗舎羅文と號し、次を清次郎と稱した。馬琴、幼名を佐五郎、後に清右衛門、諱は解、字は璋吉、晩に篤民と稱し、曲亭馬琴と號し、著作堂、莫笠漁懸、鸞翳、々同陳人、魁哲子等の別號がある。また曾て諱を興邦、字を子翼、亭々亭、鳥水と號したこともあつたことは、其の著『俳諧古文庫』の中に見えてゐる。曲亭馬琴の號に就いては、彼自ら其の出所を説明して、曲亭は、『漢書』陳湯傳及び『大明一統志』に見えたる山の名で、『巴陵曲亭の陽にたのしむと云ふことあり』といふに出で、馬琴は、『下訓抄』野相公の句に、『と、馬禱に非ずして、琴を彈くともあたはじ』とあるに取つたと云つてゐる。

安永二年、馬琴七歳の折、初めて、『鶯の初音にねむる座頭かな』の句を作つた。九歳にして父を亡じ、十二三の頃、さる武家の小者となつたが、其の廣邊に堪へ兼ねて、『木枯に思ひ立ちけり』の歌『一』一句を壁に書き残して出奔し、長兄の仕ふる旗下の士戸田大學頭の徒士となつた。幼より文學の書を愛讀し、十五歳の折には、俳文にて『弔鶯辭』を作つてゐる。

二十二歳にして戸田家を去り、あまたこなたと仕へ歩きしたが、遂に誓を以て身を立てんとし、幕府の書師山本宗洪の門に入りて名を宗仙と呼ばはつたが、久しからぬうちにこゝろをもち、東に奔り、西に走り、深川仲町のはとりにて筆耕を業とし、微かな生計を立ててゐたが、二十四の時、當時文壇に名聲をたたる山東京傳の門を叩き、其の門人大業山人（其の寓居大業山永代寺に近かつたから、これを以て號としたのである）と署して、（戸田）書用面二分狂言を著はした。翌くる寛政三年、馬琴は神奈川に赴いたが、又江戸に歸りて京傳の家を訪ふと、恰も京傳が「書種畫の世界錦箱裏」「仕掛文庫」「娼妓絹籠」等の洒落本を著はして忌諱に觸れ、處罰を受けた時であつたので、京傳は馬琴を其の家に寄食させて、代作させた。寛政四年板の京傳作四種の中「書語教幼稚講釋」「（此）龍宮御針（此）之本」は馬琴の代作であつた。既にして書肆葛屋三郎の家に寄託して、其の請のまに／＼述作してゐたが、翌寛政五年、馬琴二十七歳にして、飯田町中坂の屋敷商會田氏の寡婦百に入夫となつた。之よりして盛んに述作したが、多くは草雙紙であつた。然し寛政七年板の「高尾新字文」は中本形で、彼が讀本を作つた初めである。

享和二年、京阪に旅行し、往復百餘日、歸つて「旅漫筆」を著はした。翌文化元年、月水奇談（一）を著はし、これよりして方を讀本の著述に専らにし、ついで「（一）稚枝鳩」「（一）嶽石遺書」「（一）拾遺

弓張月（前編）、一四天王剽盜錄（二國）、一夜物語（等）を出し、矢つぎばやに趣向を凝らして公にしたが、世評極めて好く、大阪にては、操人形、歌舞伎に仕組んで之を行ふほどに名聲の噴々たるものがあり、馬琴の名は遠近に聞えて、文壇の寵兒となつた。特に『弓張月』は前後六年に互り、編を更ふること五、二十九卷の長きに及び、未曾有の長篇として、其の續篇の出づるを待たれたので、馬琴は之を好機として、一意大作の著述に従事した。

馬琴の名が高くなり、其の著作のもてはやされるとともに、其の傲岸で人に屈しない性質と、其の頑かたくなの習癖とは、屢々他と衝突することを珍らしとしなかつた。京傳との間にも距たりが出来、其の弟京山とは頗る宜しからず、公事の累を受けたため、書肆角丸屋甚助を惡み、葛飾北齋と争つたなど、馬琴の性癖は隨處隨時に現はれて、年とともに執拗くなつた。

『八犬傳』第一輯が印行されたのは、文化十一年、馬琴四十八歳の時である。文政七年、五十八歳の折には、家業を長女の婿新六に譲り、剃髮して笠翁と稱し、飯田町を去りて長子宗伯の住宅なる神田明神の下、同崩町に移り住んだ。

彼の右眼が漸く明らかでなくなつたのは、天保四年の事であつたが、同六年には子宗伯が三十八歳にて歿し、同八年には女婿清右衛門（舊名新六）の病歿するあり、翌九年には、馬琴の左眼も

見えなくなつて、同十一年には、全く明を失ふこととなつた。彼が七十四歳のことである。しかし天保七年八月十四日、彼が古橋の頼筈を柳橋の萬八樓に開いた時は、出席の人数八百餘人、其のうちには東條琴臺、大窪天民、菊池五山、谷文晁代理谷文一、波邊峯山、長谷川雪且、歌川國貞、園芳、貞秀、廣重、溪齋英泉、柳川重信、柳亭種彦、瀧亭鯉丈、爲永春水、屋代弘賢等の名も見えてゐる。明を失ひても、精力家であつた彼は、猶稿を廢せず、殆んど手ごつて草稿を續けたのは、『八夫傳』の終りに近い原稿を見ても、其の苦心の尋常ならざることが知られる。然し天保十一年になりては、全く一字を書くを得なかつたので、亡見宗伯の妻みちに文字を教へて筆せしめ、多大の困難のうちに、同十二年八月『八夫傳』は完結を告げたのである。

『八夫傳』は大成したが、『美少年録』の續篇なる『新局玉石童子訓』『女郎花五色石臺』『新編金瓶梅』等の稿をついで、死に至るまで其の業を廢さなかつた。是れよりさき、天保七年、書畫會興行の後、家を四谷信濃坂に移して、わび住居に晩年を送り、『八夫傳』大成の年の春には、ひねくられて、下方ではあつたが、長く連添つて、今では老の寢覺めの茶飲友達であつた老妻も歿し、僅かに嫁と孫の太郎とを便りに、寂しい生活を送つてゐたが、嘉永元年十一月六日、享年八十二で老木の朽つるが如く身まかつた。小石川茗荷谷清水山深光寺に葬り、生前作るところの著作堂隱

譽養堂居士を其の法號とした。文名一世に高き彼のこととて、其の葬儀に會するものは幾千人であつたと云ふ。彼も亦惠まれた人であつた。

復讐小説 月水奇縁

五卷。享和三年、馬琴三十七歳の作で、半紙形の讀本である。馬琴が讀本としての著述は、之を以て嚆矢とする。葛飾北齋畫。前年京攝に旅行した結果として、此の書の發行書肆は、大阪の文金堂である。

文章は漢文調で一體にぎごちなく、何となく支那小説じみて、山鷄だの、狐だの、白猿だの、亡靈だのを盛んに用ゐる、總て因縁づくりに出來上つてゐる。南蠻より將軍足利義持に貢した山鷄を江州の刺史佐々木高員に預けられたのに發端して、其の山鷄を飼養する永原左近が侍女を手打にし、其の亡靈が榮つて、左近は凶賊石見太郎の刃に殺れる。左近の遺兒源五郎は後に關東の植杉氏に仕へて熊谷倭文となり、左近の後妻羽女が三上和平に連添うて生まれた一女を玉琴と云ひ、倭文と玉琴との情事、植杉氏の内亂、倭文、玉琴等の退轉、途中計らさず三上和平及び羽女との邂逅、和三和女の最期、玉琴の横死など、事件は因となり果となり、其の末、倭文が石見太郎を

討つて讎を復し、鎌倉に歸りて、植杉房顯に住へ、極樂寺に父母及び御平、御女の墳墓を築き、此の傳によつはる靈狐の祠を邸内に建つると云ふに終つてゐる。

墨田川梅柳新書

六卷。高師北齋畫。文化三年、作者四十歳の作。

梅若傳説を取扱つて、謠曲の「隅田川」と、「班女」と二本とし、作者一流に編み出したものである。

後鳥羽、上御門、順徳三帝に住へ奉つた吉田少將惟房が陸奥の國司となりて東下する途下から美濃國野上宿にて、長が女兒花子と云へる白拍子と契りを結び、松稚を生み、其の後之を京に起へ取りて、梅稚を生んだ。此に平相國清盛の孫左馬頭行盛の庶子に行稚なるものあり、心様ねちけたるものにて、比叡山月林寺に登りて、僧となつたが、信濃の住人仁科三郎の義子となりて、仁科半九郎盛景と名乗り、二人の子を設く。男子は忍の惣太、女子を龜菊と稱した。惣太は大膽不敵の曲者で、早くより家を逐電し、みゆき女を奪ひ取り、之を賣つて淫商に耽つた。其の妹龜菊も奸智に長けたもので、幽霊に扮して旅人を驚かし、逃げ惑ひて残せる行李懷物を其の父平

九郎が拾ひ集めるを業としてゐるが、松稚の爲に見顯はされて、辛い目に逢つた。龜菊は之を怨んで、吉田惟房一家を殲にせんと、深く思ふ所があつた。然るに平九郎盛景の近き邊より出火したので、折ふし病に臥したる龜菊を葛籠に入れて平九郎は遁れ出でた途にて、惣太一類の賊に劫され、葛籠を捨てて置いたのを、偶々惟房に獲られ、龜菊は院の御所に参り、遂に後鳥羽上皇の恩寵を受くる身となつた。然るに龜菊は惟房を讒して之を殺し、猶も吉田一族を滅ぼさんとしたが、松稚は、天狗と見せかけたる赤塚軍介に助けられ、其の母班女前は途に梅稚を奪はれ、梅稚は敢なくも忍の惣太の爲に殺される。松稚、赤塚軍介、粟津六郎は惣太の首を打つて、弟の讎を復し、墨田川の邊なる柳の下に塚を築いて梅稚を葬つた。班女前は愁傷やる方なく心も亂れ、船人の止めるも聴かで、渡船に乗りて、中流に到れるとき、向岸の柳の下で大念佛の聲するを耳にし、梅稚丸の横死を知る。船中にて乗り合はせたものどもは、何れも盛景の手の悪者共にて、班女前と知りて生捕りにせんとひしめく。船人騒ぎたる氣色もなく、襦追つ取りて、悪漢共を一人も残らず打つて棄てる。此の船人まことは赤塚軍介にて、班女前を大念佛の假屋に案内し、此にて松稚、粟津六郎等と邂逅する。班女前の狂氣も靈鏡の力に依りて治り、蓬髪して尼となる。松稚は盛景、龜菊等を誅したが、承久の變起り、後鳥羽院は隱岐の國に流され給うたので、松稚は

之に扈從し、院御の後、歸洛し、四條院に住へ奉りて、絶筆を再興したと云ふに終る。梅若傳説に承久の變を織り込みたるところに、作者の工夫がある。

雲妙聞雨夜月

五卷。歌川豐廣畫。文化五年作。作者四十二歳。

市川歌舞伎十八番の一なる「鳴神」を仕組んだ作である。「鳴神」の狂言は謡曲「一角仙人」に基づいたもので、元祖市川團十郎が貞享元年、江戸の中村座にて「門松四天王」と云ふ外題で上演し、元禄十一年九月、再び同座にて、「源平雷傳記」と題し演出してゐる。二代目團十郎は「雷神不動北山櫻」の外題で、屢々演出した。

開卷第一に雷獸圖を載せて、馬琴一流の考證があるのみでなく、卷之四の終りに、一、親僧雷神が雷獸の家に歇り、雷獸に代りて雷を行る物語は、『授神記』以下の小説に見えたる阿香の事を作らば、後へたりとは見ゆれど、云々とありて、再び辯じてゐる。

近江國武佐の蘇夫雨田武平の一子嘉太郎なるもの、物の命をとりたる報いにて閻死したる父や亡き母の菩提を弔へんため早くより法師にされて、西啓と稱したが、攝津國神崎に近き久々地

眞言院に入らば修行し、七年程怠らば勸んでゐた。或時山中にて鹿の交尾するを見て心動き、行くともなく神崎の遊女屋のほとりにも迷ひ、遊女蓮葉の爲に請ぜられて、一夜を明し、遂に近江に出奔した。同國小幡の友定物右衛門の飼下を吹き奪ひ、大津の市にて鬻ぎ、東國に向つて旅立ちした。此に瀬田の片ほとりに住む伊原二郎武章なるものあり、娘を妙、子息を太次吉と云ふ。二郎生計の爲に西啓が賣りたる牛を購つたが、物右衛門の訴へに依り、相模底倉に在る兄伊原太郎五武素を尋ねんとて出立した其の留守に、掃手のものに踏ふ込まれ、病に臥したる妻元江は頓死し、子供二人は引き立てられた。

二郎武章は兄を訪うて、始めて其の若い妻に紹介されたが、此の女は神崎の遊女蓮葉であつた。蓮葉はもと浮れ女であつたから、年をいた武素よりも新來の武章に秋波を送つたが、武章はかへつて其の無禮を懲らした。武章の二子は一たびは詢問されたが、固より證據のないので、一まづ家に歸された。兩人は父の冤罪に陥るを恐れ、秘死せんとする。詢問した役人山田信二郎詮通之を助けて、扶助してやる。鶴々故郷に歸つた武章は事の顛末を知り、牛を吹き取つた悪僧を探し求めんと再び東國に旅することとなつた。西啓法師は底倉に程近き無名寺の住職となり、鹿嶋白雲、黒雲を手下とし、法橋にて里人を欺き、其の虛名遠近に聞え、俗姓山田なるを以て兩

田法師と稱へ、遂に兩田を合はして、イナカ雷法師と稱した。武秦の妻蓮葉は無名寺に詣でて、雷法師の西齋なるを知りて、心動き、武秦が鷹鷲の入つた茶を飲んで急死したので、これ幸ひと雷神上人を其の家に招待せんとする。時に近江より東下した武章は端なく此の曠僧を觀破し、斬つてか、り、誤りて蓮葉を殺す。曠僧は素性が發覺したので遂に遁す。武章は、兄の愛養した鷹鷲の窟に遺書を結びつけて放ちやり、領主の許に自首して、潔く判を受ける。遺兒二人は鷹鷲の窟に、りつけたる遺書に依りて、父の最期を知り、復讐の念湧くが如くであつた。

兇僧雷神は近江の旅路にて、雷獸を助けて其の家に宿り、雲中を飛行し、雨を呼び、嵐を起し又水脈を絶つ術を得たが、淫酒に懸念する時は其の術忽ち破ると、固く戒められてゐた。雷獸の妻よみ頼まれて、愛智川武佐の間に術を施し、雷雨激しく、物右衛門の牛小屋に落雷して、多くの牛を殺した。然し雷神は雲よみ足を踏み外して、一たびは捕はれたが、岩戸山に立籠り、廻遁した白雲黒雲の二悪僧を従へ、山中にて觀音寺城の水脈を絶ち、城中の士民を枯渴させんと、壇を築き、呪法を執行した。武章の遺兒妙は、夢想の告にて得たる觀世音の小像と鏡とを像にして、岩戸山に分はせり、鏡の中にうつる蓮葉の姿で、雷神の妖術を破り、觀音の靈像にて之を居縮めて、弟太次吉及び山田詮通と、雷神初め兇賊二人を打ち取ると云ふ筋である。

賴豪阿闍梨怪鼠傳

十卷。葛飾北齋畫。文化五年作。

賴豪阿闍梨は三井寺の僧であつたが、皇子御誕生の祈りをして其の功を奏したので、御祈りの勸賞は請ひに依るべしとの事であつたから、三井寺の三摩耶戒壇造立の赦許を賜はつた。然るに延曆寺が之を妨害して赦許の取消となつたので、賴豪は憤懣し、其の亡靈八萬四千の鼠となりて叡山に登り、佛像經卷を噛み破つて、これを防ぐに由なかつたから、叡山にては賴豪を一社に祭り、之を鼠の禿倉はこくらと稱した。

此の傳説に依りて、源義仲、其の子美妙水冠者義高と、猫間中納言光隆、及び其の子新太郎光實との間に起れる争鬪、義高が源賴朝をつけねらひつすること、僧西行の明識、畠山重忠の精忠などを配合して、其の終りは悪七兵衛景清の傳説を取り入れて、義高が賴朝の狩衣を刺し、雙眼をくり抜いたと云ふことに結構してゐる。例の馬琴の物識も癖は到る處に散見する。

源義仲は數度の合戦に平氏を破り、叡山に登りて、鼠の禿倉を見る。義仲京に入りて勸賞を行はれたが、平らかでない。後白河上皇は山門の大衆に命じて之を誅せんとし給うたが、義仲は院

の御所へ押し寄せたので、上皇は猫間中納言光隆を敎使として之を慰諭し給はんとされる。義仲は光隆を罵り、光隆の臣竹川正忠は憤慨して義仲の捕ふる所となり、光隆は之を憤はんとして家寶の金の猫を義仲に贈り、遂に自殺した。義仲は源範頼、義經に攻められて、粟津に敗れ、奸臣石田爲久に射殺された。義仲の子義高は頼朝の娘大姫の婿となるべき定めであつたが、討たれると聞いて、宇野小太郎行氏を召連れて出奔し、乳母唐絲の住家なる武藏國入間川のほとりに暫し世を避けてゐた。然るに石田爲久の郎黨堀江光澄の知る所となり、唐絲は反問苦肉の計にて行氏および其の妻棧橋(唐絲の女)を毒殺し、義高を殺させたが、此の義高まことは唐絲の實子大太郞で、實旨目となつて唐絲の許で育てられてゐた大太郞が眞の義高であつた。石田爲久は唐絲高を殺した爲に御臺所政子、大姫君の怒りを買ひ、誅せらるべしとの事であつたから、唐絲を殺して其の罪を遁れようとしたが、勇婦唐絲の爲に、爲久の臣光澄は殺された。義高は粟津に判りて、夢に頼豪阿闍梨に逢ひ、のくりなくも僧西行と猫間光隆の弟新太郎光實とに邂逅した。西行は頼朝に召見せられて、和歌武道を論じ、光實は義高の跡を追ひかけ、由井ヶ濱邊にて、義高の幻術に逢ひ、勇むといへども、施すべき術がなかつた。西行は頼朝に辭別して奥州へと旅立たんとする。頼朝は猫間中納言より義仲に贈つた金の猫を賜はつたが、西行は里の童に取らせて、顧みな

い。破落戸風九郎が其の金の猫を童より奪ひ取りたるを、猫間新太郎取り返して、猫は再び萬正の家に戻つた。唐糸は頼朝に恨みの刃を返さんと、人無き折を窺ひて切つてかゝるを、畠山重忠の妻嫩子に妨げられて、遂に捕ふる所となり、釋迦堂が谷の南なる巖窟内に押し籠められた。美妙水冠者義高は、箱根山にて爲久主従を討ち取り、ゆくりなくも行氏夫婦の亡魂に出逢ふ。猫間の忠臣竹川正忠の妻なる葎戸は、十枚の金に身を賣りて、畠山重忠の子重稚の乳母となつたが、一子千江松の横死は、はしなくも義高が妖鼠の術を破るべき奇薬を送ることとなつた。

文治三年の二月もまだ三日四日といふ頃、残んの雪も解けそめて、梅綻べる野末の藪も白きにすがれ、紅は、二三輪にして開きもそろはず、山は遠く聳えて、日の没ること遅く、水は近く流れて、柳先づ暮れんとす、林に歸る鳥は、月を載きて女を呼び、北へとてゆく鷹は、霞の網にかゝるかと思はる。日没り果てば、寒さ冬よりも堪へがたく、風はなほ地を吹いて、馬蹄の迹再び氷るなるべし。

相模國諸越の原に野臥せるを弓中に美妙水冠者義高は隠れてゐたが、榛澤六郎に誘はれて柳營に入り、此にて頼朝を撃たんとし、妖術破れて果さず、大姫は孝と貞とに身を置きかねて自刃し、唐糸も事の成らざるを見て刃に伏した。重忠も頼朝も言を盡して、理を説いたので、義高も光實もともに志を離し、光實は兜の鐙を切り、鉢を鋒尖に貫いて、復讐になごらば、義高は頼朝の狩

衣をあまたたび朝し通し、刃を取り直して、我と我が兩の眼をくち抜き、耳目は煩惱の奴と悟つて、こゝに迷ひの門を開き、義高は栗津に行ひをすまじ、嘉間家も日出たて再興し、頼業阿闍梨の靈を伊豆下田の近郷に祀し、子輩權現と稱した。各卷の終りに自評が附いてゐる。

三七 全傳南柯夢 古夢南柯後記

六卷、葛飾北齋畫。文化四年、作者四十一歳の作。古夢南柯後記八卷、北齋畫。文化八年作。

此の書は、『南總里見八犬傳』、『椿説弓張月』と共に、馬琴の三大奇書と稱せられてゐる。文化四年、書肆榎本平吉の爲に著作したものであるが、翌五年三月旅行せられると、賣行が甚だ覺束なかつた。然し世評は喧しく、次第に賣行を加へたのみか、大阪中座にて、『舞扇南柯話』と云へる外題で、同年九月十七日より上演したため、一層高評を博したので、書肆は是非にと編纂をどうせが、既に全編を書き畢つたので、馬琴は之を断つた。然し南柯夢の名を繼げば、それにて澤山と強ひて誇うたので、遂に『古夢南柯後記』の續作があつたのである。

大和國五條新町の赤根屋半七が、鳥の内美濃屋三勝と云ふ垢搦女(遊女の一種)と、大阪千日の菓所の南側をいたたら畑で情死を遂げたのは、元禄八年十二月七日のことであるが、間もなく淨瑠

瑞、狂言に演ぜられて、非常に有名となつた。今日でも演ぜらるゝものは、『萬屋半七 艶姿女舞衣』である。馬琴は此の有名なる心中男女の名を假りて、一篇の歴史小説を編んだので、『槐宮記』に依りて、南柯夢の趣向を立てた。

金園寺の楠の一枚天井より思ひつき、米谷山の靈木を伐つて赤根半六は出世する。半六が楠を伐らんとして取り落した斧で、丹波都たはひと云ふ盲人が命を落す。半六の妻は丹波都の娘おさんを連れて歸り、養育して、今はの際に、其の子半七の許嫁とする。然るに半六は慾に迷ひて、我が子半七を蟻松典膳の娘園花の婿とせんとし、旅役者の笠松平三を語らひ、荒熊の姿にておさんをつかはせる。然し平三は悪人でないので、おさんの孝貞に感激して、笠屋夏なつの弟子となし、幸若の舞を稽古させて笠屋三勝と名乗らせる。半七は無理やりに園花の婿となつたが、おさんに情を立てて、夫婦とは假の名ばかり、まことは臥牀を一つにしなかつた。領主續井順昭の一子吉稚丸は、近臣今市至八郎、布施蝶九郎と云へる佞奸の者共にそゝのかされて、三勝にうつゝを抜かしたが、三勝は半七に義理があれば、其の言ふ所に従はない。蝶九郎、至八郎は三勝を欺き、之を奪ひ取らうとしたが、家老厚倉二郎大夫から三勝を逢に引き攫ひて、若君の迷夢をさまし、汗名を雪けとの密旨を受けた半七は、蝶九郎、至八郎に鼻を明かさせ、白河山の籠で、三勝を手にか

けて殺さんとしたが、三勝が刃の下で語る物語で、初めて許嫁であつたお通を知ら、相伴ひて江州多賀に退轉し、此にて一女お通を生んだ。やがて夫婦談合して東國へ赴かんとする道すがら、信州寄掛の宿にて半七は病の牀に臥し、かくて三勝は心は夫子（お通）に引かれつゝ、彈かてかなほぬ絲竹の、笛さへ音さへたぢかねれど、その身はこゝの門に立ち、かしこの簷下（お通）に佇めば、われにひとしき物たべの、目鼻のあたり切り抜きし、紙の假面もあやしげに、霞もつ髻を曲物の、檜の駒に竹を棹、三條の絲をかけ聲も、くり返し、同じ唱歌を一日にいとぞ申しける。と唱ひつゝ、はとつ街を徘徊する、あはれな境遇となつた。然し半七と邂逅して、半七は其の手厚い介抱で病も治り、大阪に赴いて、長町で入髪の高ひをする。七年以前に奈良を追はれた半八郎は九郎此の假の宿を襲ひ、お通を奪ひて去らうとするを、半七追ひすがりて半八郎を斬り、鱧九郎はお通を抱いて水に投ずる。

此へ園花の母敷浪が尋ねて来る。敷浪は園花の兄曾太郎に助けられたお通を伴ひて来たので、それを三勝に渡す。護身囊の中から出た三味線の撥の片割で、敷浪は三勝の實母であつたことが知られる。半七と三勝とは義理と人情とに迫られて、千日の墓所で夫婦心中を遂げる。赤根半六も激極後悔して自殺し、南柯の夢が覺る。

「書賈木蘭堂、嘗て南柯夢の續編を版せんと請ふ、然れども彼篇は既に全く局を結びて、絶えて一物も遺さず、これを續くとも勞して功なし。」と云ひながら、千日墓所にて情死したのは、半六敷浪等が子に代りての自殺と苦しい説明をして、「占夢南柯後記』は作られたので、あらずもがなの續編である。

小復
說鱸
月
冰
奇
緣

自序

夫神靈怪異、稗官野史之所不載也、有出於臆度之外、而至理之存者焉。噫呼天地之大矣、萬物之曠矣、惡乎有、惡乎不有。且人人之視聽、不越几席之外、而履趾亦不出里巷之內、非以情攝、則以理格焉、是亦井蠶而已。予稟性疎庸、一書一棗之外、絕無嗜好、每空寂之時、喜錄閭里碎言、聽友之晤譚、日積稍久、漸篇盈。乃題曰「月水奇緣」、聊借釋氏、刀山劍樹之喻、以寓化人解脫之微意、雖未免持水弄月之誚、然可自懲惡、獎善、讀者鏡焉、庶幾迷津之一筏矣。

享和二年歲在癸亥春二月上浣、曲亭蟬史書於著作堂南總紅梅深處。

復讎小説月水奇縁總目錄

通計十回

全部五卷

全傳稱光帝の應永三十四年より、後花園帝の享徳二年に至りて凡そ二十七年の奇談を記す。藻を綴るに、或は雅あり或は俗ありて、専ら章部の解し易きに基く。曲士の杜撰多かるべし。僅かに戯文の一體を脱れたる耳。

卷之一

第一回

蠻^{まん}夸^{くわ}貢^{こん}鳥^{てう}釀^{らう}禍^か
國^{こく}宰^{さい}試^し鼠^そ探^{たん}獄^{ごく}

第二回

授^{こう}二^に物^{ぶつ}一^{いつ}老師^{らうし}説^{せつ}二^に因果^{いんぐわ}
投^{てい}二^に千金^{せんぎん}一^{いつ}寃^{いん}塵^{ちん}素^そ二^に解^{かい}脱^{だつ}

卷之二

第三回

觀^{くわん}音^{おん}堂^{だう}靈^{れい}靈^{れい}筋^{しん}救^{きう}二^に相^{さう}女^{にょ}一^{いつ}

第四回

激賀山強弓走二阿しやうがまにびょうきうあしるはしらしむ
隔樓絃管蓮情わうをへだててけんくわんごうをなほこぶ
停船釣竿敍思ふねをもちめてうかんおもひをあらぶ

卷之三

第五回

驚獼猴二倭文憩三茅簷こころをおどろかして、づえほうえんにむこ
逐二野猪二武漢登二雪嶽つちよをわうてたげくませつづくにのぼる
吉野河枯樹海遭春よしのがほのこじゆふた、ひはるにあふ
妹夫山壽松親折風いもせ、あまの、ゆしやうみつからちかせにくじく

第六回

卷之四

第七回

忠臣促駕歸鎌倉ちゆうしんをうながしてかまくらにかへる
貞婦典身赴二岐岨ていふ、みまをりて、こにおもむく
陷二仇家二玉琴死レ節まうかにおちりてたまごとせつにしず
過二客店二倭文感レ操かくてんをききてしうえさうをかんず

第八回

卷之五

第九回

壯士听レ詩謝レ恩

孝子占レ夢復レ讎

陰陽和合熊谷坡

劍鏡寄過馬籠嶺

第十回

姓氏目次

○武將

足利成氏

佐々木高員

植杉憲忠

植杉房顯

○夫人

膳手

○陪臣

永原佐近

海部大膳

中村兵衛

○孝子

熊谷俊文

○婦女

唐衣 和女

玉琴

漣漪

六田虔婆

○劇賊

石見太郎

海道二

夜叉五郎

○處士

三上和平

上市丹治

○家吏

上市喜内

郷平

軍内

○鴉師

丹藏 丹平

○醫家

足立貂景

早瀬麿庵

○浮屠

拈華老師

通計二十有七人

附評

○禽獸

舶來山雞

閑室題鼠

千年靈狐

檻中豺狼

雪中野猪

白毛獼猴

○寶品

羽佳寶刀

玄丘明鏡

○郡縣

江州滋賀

相州鎌倉

和州吉野

信州岐州

武州熊谷

月氷奇縁總目錄 畢

星彩滿天朝北極
源流是處赴
東溟
為臣為子須
忠孝
莫負宣尼一卷經



白虹時

切玉紫

氣夜干

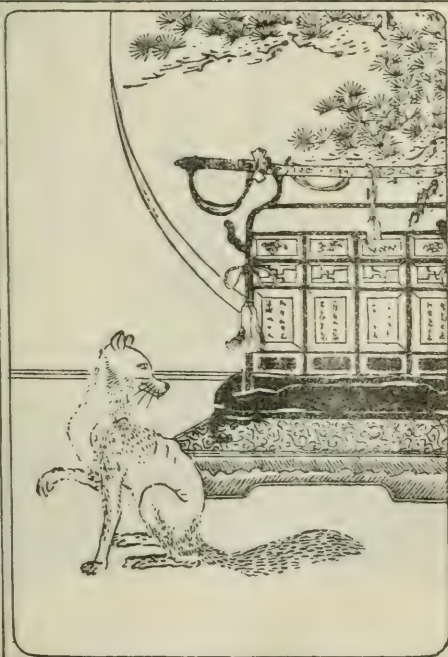
星符上

笑客動

匣中霜

靈明

千年形已變



三德性无靈

萬般物象
些能鑒一
個人心不
可明匣內
中洲鸞鳳
活臺前高
挂鬼神驚

五色山禽錦鴝鷄

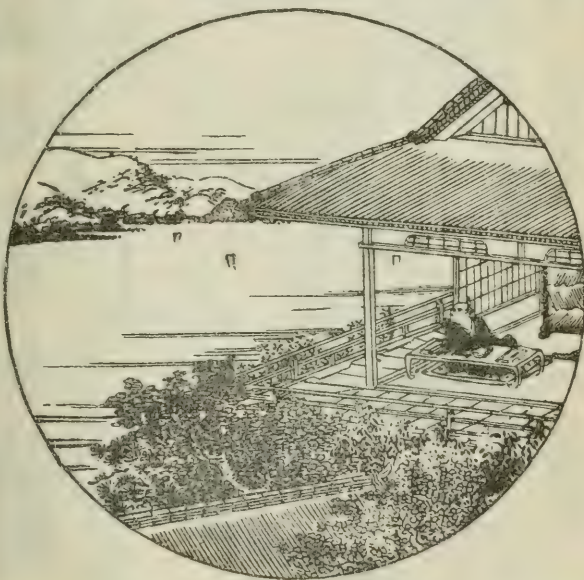


滿身金錦世應稀

第一篇

江州志賀
舊都

山色水光湯
 旭斜空無鷄
 犬有啼鴉千
 村為落皇都
 迹不見人煙
 空見花



月氷奇縁 卷之一

東都 曲亭馬琴 著 編

第一回

蠻夷貢鳥釀殃
國宰試鼠探獄

天に風雨の變ある時は五穀みのらず、國に干戈の難ある時は萬民困窮す。本朝元弘建武の兵亂より以來、鬪戰やむ時なく、邦潰え民疲れ、瘦狗原野に斃れ、春燕林木に巢つくる。足利尊氏公より三代義満將軍の治世にいたり、天下初めて泰平に歸し、士民や安堵す。應永四年夏四月、義満公北山殿に隱居し、室町の營中を四世將軍義持に譲り給ふ。爰に於て義持嚴父義滿に代り天下の政を執り行ふ事數年、王化四海に布き、四夷來貢す。時に稱光帝の應永三十四年、南蠻國より駿馬一匹と山雞一雌を貢る。義持公馬を營中の廠に繫かせ、山雞を江州の刺史佐々木高員に屬け養はせらる。抑々佐々木氏の鼻祖宇多天皇の龍種敦美親王、はじめて源姓を賜ふ。王の來孫兵庫頭成頼、無屬の臣となりて江州佐々木の城に居住し佐々木氏と稱す。すなはち高員は成頼より五代源三秀義六世の嫡孫、佐

渡人道道興の係嗣にして、江州觀音寺に在城し、北陸七州を管領して、多賀、六角、淺井の支佐、おのの一城の主たり。高員件の山鷄を見給ふに、この鳥尋常のものにはあらずして、その形孔雀より大きく、頭に丹朱の鷄冠をいたゞき、身に金鉾の五采を具足し、鮮明炫燿もつとも愛すべし。笈には金銀珠玉を鑄め、龍鳳花卉のかたちを刻み、飾るに眞紅の綱をもてせり。高員欣然として宣はく、「今執事、管領、君寵に誇る者多しといへども、邂逅南蠻來貢の奇鳥をもて予に預け給ふこと、家の面目何かこれに如かん。深く籠中に養ひ、巢の内に雛を得て、將軍の御感にあづかるべし。しかれども異邦の名鳥、四時の寒暖を察し、籠畜ひせん事いと安からじ。孰か我に代りて、能く此の鳥を養ひ狎けん」と宣ふ。時に一個の武士、諸士の班を進み出で、「君公願はくは此の鳥を臣に畜はしめ給へ。」と云ふ。高員これを見給ふに、その人年紀二十八九、身丈高く面色白し。頭に一頂の烏帽子を戴き身に縹緗の素袍を被たり。この人は是れ佐々木の遮流永原左近尚綱と名告り、すなはち高員の老臣なり。左近頓首していへらく、「臣前年好みて和漢の名鳥を養ひしに、終に籠飼ひを誤らず。夫れ山鷄あるひは錦鷄と號く。この鳥みづから毛の色よきを愛し、水にその影を映して終日去らず、終に眩き溺れ死すといふ。昔魏の時南方山鷄を獻す。帝その鳴き舞はん事を欲ひ給へども由なし。公子蒼舒大いなる鏡をその前に著けしむ。鳥己が形を鑑、たちまち鳴き舞ひて止む事を知らず、終に死するとかや。

葦仲將これを感みて作れる賦あり。このこと異苑に詳かなり。されば唐の李商隱が破鏡の詩にも

玉匣清光不復持一菱花散亂月輪虧

秦臺一照三山鷄一後便是孤鸞罷舞時

と作れるは是れなり。同じ心を人丸の和歌に

山どりのをろの初尾に鏡かけとなふべみこそなにこそぞりけめ

と詠めり。又この鳥宿る時は雌雄必ず峽を隔てて栖す。萬葉集に

思へども思ひもかねつ足引の山鳥の尾の長き此のよを

とよみ、又ながくし夜をひとりかも寐むと詠す。山鷄その性人に馴れず。これを養ひ押けんこと容

易からずといへども、臣なほ別に手投あり、公疑ひをやめて養はしめ給へこと、言語水の流る、こと

く、和漢の故事を擧げて請ひ求めければ、高員心の中大いに悦び、莞爾として宣はく二われ汝がこと

を忘れたり。今この鳥を預くべし。元是れ室町家より預り奉る鳥なるをもち、若し等閑にして誤ち

あらば、汝が一身を喪ふのみならず、その罪全くわれに歸す。汝その性短慮なれば、われその過ちあ

らんことを惜る。日夜よく心を用る、謹みて疎かにすることなかれ。左近唯々として命を受け、己が

預り守る志賀の屬城に庭籠を修造ひ、四方に高く築牆を構へて狐狸の害を防ぎ、又或時は衣袴に養ひ

て、これを内房の窗下に置き、左近みづから餌飼ひしてこれを養ふ。左近が妻唐衣は鎌倉の管領足利持氏の執權植杉憲實の家士熊谷勘解由が女なり。去年男子を生みて乳名を源五郎と喚べり。この兒生まるゝ日、父左近湖水に釣して一尾の巨鮪を獲たり。こゝをもつてその兒に名づくるに、聖人鱈を得て伯魚と名づけ給ふ故事に倣ふ。この年内父熊谷勘解由身まかり、嗣子なきによりてその家斷絶す。故に左近鎌倉より唐衣が妹和女を呼びむかへて家に養ふ。和女容貌絶麗にして、眉は遠山の緑を色なき、肌は芙蓉の露を凝らす。花、音、鶯、音、秋波人をして春心を動かさしむ。男に同藩の士に三上和平武漢といふ者あり、齡未だ壯年満たず、よく射藝に通じ、又好みて碁を圍てり。左近も又碁碁を嗜み、共にその家志賀にあるをもつて、常に交加ひて斷金の友とせり。和平一日簾開より和女を窺みて密かに懸想し、あはれ男たるもの婦を妻らばかかる佳人をこそと、且暮思ひわづらふと雖も、有繫に左近は廉能の士なれば、白地にその事を告ぐるに影護く、只いたづらに遠山の花を眺めて、風の過ぎんことを愁ふるに似たり。二鼠はやく逝ぎて應永三十五年、正長と改元あり、正月十八日勝定院義持薨じ給ひ、家弟義教箕裘を承けつぎて將軍に任せらる。今茲三月左近が家の山鶏、卵五つ生みぬ。左近喜びに堪へず、取りてこれを見るに、その卵おのづから五色の光澤ありて、大小馬瑙の如し。すなはち三つを巢に残し、二つを白金の器に盛りてこれを縁几に置き、家吏上市丹治を

呼びて云へらく、「われ日来養狎の功成りて、名鳥はじめて卵を生みぬ。明日これを主君に獻じ、褒賞にあづからばやと思ふなり。奴婢はすべて臆忽なるものなれば、もし誤ちて打碎くこともあるべし。誰にもあれ許しなくして此の一室に入ることなからしめよ」と命ずれば、丹治かしこみて立ちぬ。左近只管心よろこび、獨り卵を眺めて、猶その巢の中の養ひを工夫するに、暮春の天氣遅々と朗かに、白鳥紙窗を射て竹影を畫き、暖風肌膚のるみ、閑室睡眠を催し、おもはず几に倚りそひて坐寐みけるが、少選ありて覺めて几上を見るに、器中の卵一つ失せて只一つありければ、こはいかにと驚き、又身を側て身後を省みるに、射然腰に衣を被けたり。左近勃然として是れを除き、「誰か我が裳に衣を被けたるぞ。」と高やかに呼ばはれば、侍兒漣瀟走り出で跪きて云へらく、「妾家公の假寐し給ふを見て、もしくは風邪の患へやあらんと私かに衣を添へ參らせし。」と言ひも訖らざるに、左近怒り心頭に發り、忽ち漣瀟が髻を掴み、「汝孰か許しを得て、猥りに此の室に入りて卵を失ひけるぞ、はやこれを返せ。偽り陳して欺かば、なほ苦痛を受くべきぞ。」と拳をあけて髮際を續け撃てば、毛髮亂れて顔變み、「家公許し給へ、妾實に卵を知らず。」と叫ぶ。左近ます／＼憤り、猶強く打たんとする時、丹治走の來て諫むらく、「君日來の寛度にも似けなく、など女兒を鞭うち給へる、少刻怒りを收めてこれ問い給へ。」といふ。左近、丹治を礙と疾視み、「こやつ何の顔ありて我が前に舌を動かすや。細

に我三人を此の室に入る、こと勿れ。」と命ず。汝墮弱にしてかかる禍を引き出せり。汝早く退け、われ賊婢をうち殺してのち新刀を試すべし。」と敦固きて罵る。丹治その色を察て諫めがたきを知り、口を鉗みて再び言はず、すこ／＼として退きけり。左近怒り猶解けず、終に麻索をもて強く縛め、只管責め問ふといへども、漣漪「知らずく」と争へば、左近いよく焦燥ちて、兩個の奴僕に命じ、渠を庭上に引き出し、櫻樹の杪にぞ繫がせける。時に左近が妻唐衣、その妹相女と共に走り出で、夫の袂にすがりて言へらく、「漣漪その罪輕きにあらねど、渠惡意あるにはあらじ、良人一片の慈愛を施し、まけて免し給へかし。」と言を竭して諫むれども、左近更に肯んぜず、「凡そ刑罰の事は女子の知るところに非ず、渠卵を偷むにあらずば、必ず破碎けるものならん、そのこと分明ならずして免すは法にあらず。もし強ひて諫めんとならば我が妻にはあらじ。」といふに、唐衣姉妹返すべき言なく、顔に袖を覆ひ、氣を飲み、聲を忍び、深く彼を哀憐す。左近はその人となり廉直にして、性烈火の如しといへども、よく事を決斷して人を憐むの心深かりしが、此の時已に禍の來べき端にやありけん、遂に諫めを容れざりけり。侍婢等主人の猶怒らんことを恐れ、姉妹を扶け引きて後堂に出でぬ。哀むべし漣漪、身は喬木の枝に繫がれ、鞦韆の戯びにひとしく、髪は櫻樹の梢に亂れて、花に柳のまつはるに似たり。雙手團々として索皮肉を破り、淚潸然として樹下の土濕ふ。下に無心の奴僕ありて、杖を

あけて之を打つ。打てば枝條を揺り動かして花徒らに散亂す。只是れ冥府閻羅城の罪人、冥鬼の杖に追ひ立てられ、更に大喚大叫喚の呵責を受くるに髣髴たり。痛まし、いかな心神既に惱亂し、眼を見ること能はず、口言ふこと能はず。三井の晚鐘无常を告げて、粟津に歸る草鴉も、我が身を啼くかと疑はる。漣漪今は苦痛に堪へず、聲を振はして言へらく、「家公歟ふは縛めをゆるし給へ、實をもて告げ奉らん。」左近これを聞きて呵々とうち笑ひ、「汝苦痛に堪へずば早く首伏せよ、我其の後釋すべし。」漣漪また云く、「妾元來惡意なし、誤らて卵を破碎き、家公の怒り給はんことを怕れて、密かにこれを捨てたり。その罪千引の石よりも重しといへども、家公上分の憫みを垂れて、妾が一命を宥し給へ」と云ふ。左近冷笑ひ、「さこそあらめ。さるをなぞて疾く言はざりし。將釋きて得きすべし。」と言ひつ、木屐を穿けて庭上に下り立ち、楯より降りたる一條の索を目ざし、只一刀にすつばと斬れば、漣漪地上に轟と落ち、俄然として息絶えたり。兩儀慌忙き、一個はこれを抱き起し、一個は槽架の水を掬びて口中に沃ぎ入るゝに、はや鎌切れ爲何なし。左近はじめて怒りをさめ、「遣の婢白業自得、死すとも誰をか怨みん。」と言ひつ、亮隔引きたてて裏面に入れば、奴僕等刑罰の刻急きを見て、心中且恐れ且哀み、屍を扛きて外面に出でぬ。このゆふべ偷寒雨瀟々として窗竹暗く、漏刻枕に響きて夜おのづから間かなり。左近はなほ一室にありて、心鬱々として樂します、ひとり燈を掲げて書紙

をひらき、史記の李斯が傳を讀むに、

太倉之鼠飽_レ食而不驚、廟下之鼠穢_レ食而畏_レ人

といふ所に至りて、燈花を結びて陰暗く、忽地後に瓦墮々々といふ音しければ、首を回らしてこれを見るに、一隻の老鼠驚き走りて穴に入りぬ。左近心怪しみ、なほ燈を幽にして、額を几案に著け、陽睡してこれを窺ふ。少選ありて鼠又穴を出でて几の下に走り來り、再三四下を顧み、既に主人熟睡の貌を視て、遂に几上に走り登り、前足をもて器中の卵を抱く。この時許多の鼯鼠忽然と走り出で、前に進める一つの鼠、老鼠の尾を銜みて後に引けば、次の鼠又その尾を銜へ、衆鼠連々として次第にその尾に附きて逡巡りし、力を合はせて更に引きゆくこと數百歩、已に穴に入らんとす。時に左近几を敲と打ては、羣鼠この響きに驚き、卵を捨て尾を分ちて穴に入りぬ。左近この光景を見て甚だ慙愧し、「嗚呼鼯鼠もなほ食を偷むに智あり、人間却りて邪正を照るに眼なし。今鼠の卵に突するを見るに、先の一卵もこれがために盗まれしこと疑ふべからず。しかるを吾智淺く慮ひ足らずして是れを曉らず、罪を漣漪に歸著せて猥りに呵責す、渠苦痛に堪へず、みづから不正に陥ちて無實の罪に死す。われ過てりく。昔時唐の蘇味道茂稜して兩端を持し、久しくしてのち邪正おのづから分る。古今廷尉の訟へを聴き獄を斷むること實に容易からず」と亡語ちて、疑念忽ち散れ、只管後悔して、深

く瀟瀟が死を憐み、厚くこれを葬らせ、僧を供養し善事を修し、もつばらその亡靈を弔祭ひけり。

第二回

授三二物一老師 説二因果一

せんきんをあたへてさんき 素・醉・脱一

是の年の夏、永原左近が家に怪異こそ出で來にたれ。靈婆朝起きて汝がんとするに、柄杓おのつから躍り出でて庵涌を走る。者はいかにと驚き看れば、釜、鍋、粥のたぐひ悉く板架を離れ、或は梁の上に附き、或は棧板を走る。奴婢等これを見るもの六神無主、累なり仆して頭を擧ぐるものなし。少刻して群響しつまりぬ。一人心を鎮めて左右を視るに、器皿は棚にあつて、平日に變ることなし。「そも爲怪る事なめり」と衆皆集ひより車語る。左近これを聞きて、「是れ狐貉の所爲なり。世になき事にしもあらず。猥りに浮説を傳ふべからず」といひて怪しまず。是れより後、晝は何となく家鳴り動き、夜は鬼魅の哭聲きこえ、すべて怪異のみ多かりけり。一夕妻の唐衣、獨を圍りて庭に登かんとするに、縁づらに一條の麻索ありて脚に捕筒る。こゝに在るべき物ならねば、あやしみつ、手にとりて見るに、この索血臭きこと言ふべうもあらず。「是は識し」と思はず手を放せば、その索行くわくと蠢くこと蛇の如く、おのづから長くなり短くなり、たちまち裳に纏ひつきければ、唐衣たまた

ず一聲と叫びて、欄をば遙か彼首に投げやり轉倒して息絶えたり。妹相女この聲に驚き、欄を照らして走り出づるに、唐衣付れ死して歩廊にあり。何の所以とは知らねども、衆皆慌忙き、口に藥を沃ぎ入れ、扶けて臥病に伴ひとかく驚るに、少選ありて甦醒ると雖も、兩足索の纏はりしと思ふあたり腫れ上りて、痛み忍び難し。左近中夜人を走せて醫師を招き、針灸補寫の術を竭さしむるに、曉天に至りて發熱し、是れよの食を絶ちて苦痛はなほだし。女弟相女よく仕へて湯劑を進め、左近も枕邊にありて看護するに、病人動もすれば鬼魅に覺はれ、彼處には女の立てり、こゝよりは鬼の來るぞ、あら恐ろし助けしよと叫ぶ。論議時なく、全身盜汗して、四肢漸々に枯槁れたり。是れ全く瀕瀕が窶魂のなす所なありと、左近ます、後悔して、修験の道士道孝の老師を招いて病厄を禳はしむ。護摩壇の餘煙はのほりて一朶の雲をなし、水晶の念珠は東ねて百八の露を搦る。しかれども更にその驗なく、病者ます、裏へて向死とす。左近今は術計竭きて爲何なし。ある人教へて云く、三井に稀世の客僧あり、その名を拈華老師といふ。この僧もと華人にして、近曾園城寺に寓居せり。よく般若に通じ正覺に具足し、過去未來劫を察して吉凶を判斷し、精鬼を驅りて苦病を退治す。はやくこれを招きて令政の病を治せしめ給へ」と薦むれば、左近大いに悦び、禮を厚くして彼の僧を招く。次の日老師來れり。左近出で遊へて心を見るに、貌は松と共に瘦せ心は絮を將て沾ふ、身に忍辱の鎧を被足

に縹縁の鞋を穿き、右手に解虎の鐔を採り左手に降龍の鉢を捧げ、囂然として几ならず。右近頼に信伏し、すなはち迎へ拜して云く、「老師頼ふは荆婦が鬼病を濟ひ給へ。僧いへらく、「足下の宅地、禍の根ふかし。生死は佛も遁れたまはず、貧道いかでか救ふべき。且婦人の死且夕に迫り、足下又劍難の相あり。よく我が及ぶ所にあらず。」と袖を拂ひて出でんとす。左近急に引きとゞめ、「老師いかなれば一術を惜しむ給ふぞ。冀はくは禍を讓ひて福を迎へ、荆婦が鬼病を濟ひ給へ」と再三再四請うて止まず。僧その言の信あるを察、ふたゝび座に就きて云く、「禍も除き難く病も治すべからず、是れ天なり。しかはあれど足下原忠義の士なり、よりて捨つるに忍びず。われに一口の戒刀一面の明鏡あり、今これを授くべし」と法衣の袖よりとりいだし、則ち示して云く、「この劍を羽佐と名づく、輪に山鶴を裏りとせり。又鏡を立丘と號す。背に蘭菊を鏤たり。劍は令郎源五郎の防身刀として生涯身を離させ給ふべからず、鏡は家の良に掛けおくべし。この二物おのづから精鬼を驅るに足れり。夫れ劍は陽物にして威あるものなり、鬼は陰にして形なきものなり。形なきものをもて威あるものに出ふ、是の故にその妖しみを銷鏢して勝つこと能はざらしむ、故に鬼は劍を畏る。鏡も亦陽物にして至明なるものなり、精は亦陰物にして偽變なるものなり。偽を以て至明に當る、この故にその形を暴著して逃るゝこと能はざらしむ、故に精は鏡を畏る。むかし抱朴子その畧をいへり。看よ後三日にし

て哭なきあり、百日にして二物ものを失うひ、二十五年を経て福わだこはじめて消除せいじゆし、又一年にして大おほいに福さいはひあらん。予よが言こと妄まやならず、後のちみづから悟さとることあらん」といひ訖をりて席せきを立たんとするを、左近急さきんに家け穢たいに命いのちじて準備じゆんびの有あり施物せぶつを持もち來きたらしめこれを進すすめて云いく、「聊いさか師しの恩おん惠ゑを謝しゃし奉たがる。願ねがはくは納なめ給たまへ。」僧そうじ辭ことして道みちへらく、「我われはこれ飛あんぞの身みなり、いかでか一物いちぶつの禮れい謝しゃにあづからんや。」と云いうて敢あへて受うけず。遂つひに筆ふでを請こひ求もとめ、壁かべにむかひて偈けを書かして云いはく、

鐵てつ經けい辭こと瀾らん

金きん燭じゆく沒ぼつ地ち

奇き鳥ちう變へん飛ひ

靈れい獸じゆ走そう龍りゆう

不つ夫ふ不ふ兒に

爲あたレ鱈たら爲あたレ鮫じゆ

解かい三さん脫だつ一いつ囚きう

二に物ぶつ自じ至し

菊きく逢ほう重じゆう陽やう

丹に々に是こ是こ華け

須す見けん囚きう緣えん

件けん々々存ぞん字じ

僧そうじ偈けを書かき了しまり、筆ふでを捨すて卒そつ然ぜんとして去いりぬ。左近此さきんの教けうへに従したがひ、劍けんを源げん五ご郎らうが護ご身しん刀たうとし、鏡きやうを良らの柱はしらに挂かければ、唐たう衣いが病びやう苦くはじめて聞きありて、覺しやく理りの柴さいも忽たちち散さんず。然しかれども病びやう者しやは日ひ々々におとろへ、後のち三日さんじつにして終つひに空むなしくなりぬ。妹いも相あ女によが歎なげきは更さらなり、左近さきんが愁しゆう傷かういと切せつにして、世よを空うら蟬せみのから衣ぎぬも記念かたみの薰かほなつかしく、哀あは悼たう日ひを遂たうて過あ七しちの追お薦せんに聞きなく、且かつ指さ華け老らう師しの言こと神しんの如ごときに驚きやう嘆たんし、猶なほこの後のち如何いかなる福わだこかあらんと、みづから齋しやいして無む異いを祈いのるに、劍けん鏡きやうの衛ゑ護ごやありけん、その後のちは家け内ないに怪あやしみもなく、亡な妻つまの中ちゆう陰いんも待まちつとは無なしに早い晚わんたちて、既すに立た秋あきの節せつとなりけ

れば、親族集會りて、まだ壯年の鰥にて在さんは嬰兒の爲にもあらず。かつ婦妻なき家は内事に費あり、はやく後妻を娶り給へかし。誰彼と擇まんより相女然るべし。源五郎が爲には從母なり、是れに増すものやある、これ歎きの中の喜びなめり。」と驚むれば、左近も初めの程は固辭みけれども、その言、悉く理あるをもて、黙止し難く、「しからばまづ相女が思ふ所をも聞きて給はるべし。要別意なきに於ては、近日主君に請ひ、婚を調ふべし。」といふに親族喜びて相女にも此の事をいひ聞かせ、もつはらその準備をなしぬ。浩かる處に三上和平は、相女を眷戀してより忘る、違なく、しばし永原が家に至りて妻女の不幸を慰問し、よそながら相女が顔を見るを十分の樂しみとして、徒らに月日を送りけるが、信と心づきて思へらく、我斯くまで思ひに沈みながら、一言を通ぜずして空しく戀ひ死なんはいと口惜し。とまれかくまればまづ禰氏をもて婚を談じて見ばやと、遂に早瀬蟹庵といふ醫師を語らひ、左近に此の事を言はせければ、左近これを聞きて、「三上氏の事はわれ平生その爲人を知れば、秦晋とならんに妨げなし。しかはあれど此の事に於ては障りありて調ひ難し。そは後に知らるべし。」と答ふ。蟹庵力なく立ち歸りて、和平に返言す。和平大いに望みをうしなひ、左近が故障ありと云ひしは如何なる所以ならんと狐疑して、いよく愁へ悶え只忙然と引き籠り居たりしが、二旬過ぎて後、蟹庵訪ひ来て、「左近こそ後妻を娶るなれ。」と云ふ。和平、「何人の女をか娶る。」と問へば、足

下縁なし。前妻の妹婿なり。」と答ふ。和平驚きて、「こは口惜し。われ永原が前妻世に在りし日このことを計らば、相女はわが妻にてあるべかりしを、怒ひに猶豫して萬事悉く齟齬うたり。所詮縁なきにこそあらめ、世の中の美人薬一人には限らじ」と急ち思ひを轉し、その後は此の事わすれたるが如く、彌左近と睦まじかりける。そのころ大津の驛に一個の退糧人あり、もとは播州赤松の家士にして岩見太郎といふ。なにと定めたる生業はなけれども、親族に富家多く、扶持するものありとて、驛舎に金を貸し、その息錢を得て家事の助けとし、奴僕五六人養ひて、その家おのづから貧しからず。時は八月二十三日の夜、偷兒二人岩見が家に忍び入る。主人出で合ひて、たちまち二賊を捕めとり、強く縛めて一室に入れおき、左右に燭を點じて座席を輝らし、その後は出であふ者なく、食野遠くして貯響幽に聞ゆ。兩賊調眼色はせて云く、「猜するところ主人は武夫なり、天明けば何地にか將れゆき新刀を試すにこそあらめ。かかる家に来ぬる不運さよ。よしそれとても一度は劍下の鬼となるべき身の、今更何か悔まん。」となか／＼に覺悟して列び居たり。時刻やう／＼移りて寂寞に堪へず、首を回らして四方を見れば、左邊の壁に一張の懸幅を掲げて、紙中七言絶句を録したり。一個の偷兒少しく漢文を讀んじ得たりけん、これを讀むに其の詩に云く、

秋雨瀟々江上村

綠林豪客夜知聞

相逢不_レ用_二相廻遣_一

世上如今半是君

偷人之物を聞て大いに驚く所に、家僕案を捧げ来て兩賊の前に居ゑたり。禦器はなほだ綺麗にして、杯盤前につらなる。兩賊いよく「睽_レ睽_レきて蹲踞_レりれば、主人立ち出でていへらく、「邂逅の來臨、申夜饗すべきものなし。もし龜味を嫌ふことなくば、儕解けて喫し給へ。」といふとき、老僕出でて縛めを解く。兩賊さては食に飽かしてのち殺すならんと、顔色たちまち蒼然めて、飯を食らふに心なし。主人こゝを見て、「二萬あやしみ給ふな、原是れ惡意あるにあらず。吾も二萬と業を同じくする、石見太郎といふ盜賊なり。これ一たび赤松家に仕へしが、故ありて播州を退去き、近曾この大津に來りて賊をなすといへども、官もこれを知ることなし。ゆゑいかになれば、他方に支黨なく、盜むところの衣服は切り綻ばし、絮あるものは夾服とし、袷には絮を入れ、或は補ひ、或は染め、刀劍は切り解きて装りをはなす。家内に染家あり衣上ありて繡刺に違なし。斯くの如く賊仗を直に售らず、猥りに質に當かず。是をもて今日首と胴と離別せず。また二萬には黨羽何程かある。われ急に計較あり、もし志を傾けて吾に従はば、萬事を指揮して扶助すべし。」といふ。兩賊思ひ寄らずこの言を聞きて、大いに悦び、「こは悪もしき家僕かな。誰か君に従はざらん。吾が黨羽十人あり、二人が名を海道次、夜叉五郎といへり、自餘の夥には山峯の羅猿、濃松の仁介、颯の傳助、埋火の權九郎、矮の

三平、腕の六蔵、因果の頑西坊といふ。是れ皆怪有の潑皮といへども、渠率なきをもて、動もすれば
諍論を仕出し、つひに事をなし難し。今この兩人君に従ふほどならば、孰か推辭むものあらん。」と言
をはなちて答ふれば、石見太郎快然にうち笑ひ、「早速の同意幸ひ甚し。密事は緩やかにかたるべ
し。まづ飯を喫し給へ」といへば、兩賊たちまち饑ゑたる虎の肉を獲たる如く、貪り食らうて飽くこ
とを知らず。酒食をはりて石見が云く、「密談別事にあらず、知州佐々木高員は富み数郡を領し、軍實
の黄金志賀の屬域にあり。われ之を偷みとらんと思ふこと久しといへども、この地は永原左近これを
成り、妻害堅固にして容易く謀び入り難し。しかるに頃日少しく便宜を得たる事あれば、速かに思ひ
立たんとす。吾們今月晦日の烏夜に乗じてしのび入るべし。おの／＼には過年より小船に棹さし、粟
津に來りて會し給へ。凡そ遁形に五つあり、金遁といひ、木遁といひ、水遁といひ、火遁といひ、
土遁といふ。金遁は銅鐵のうちに匿れ、水遁は水を得て隠れ、皆その物を獲る時は置く。明の冷謙と
いふ者、よくこの術をなせしと聞く。われいまだ此等の術を學び得ずといへども、垣を踰え壁を挖す
事をよくす。古人も「事は密なるに成る」といへば、必ず洩らすべからず。」というて圓金三十兩とり
出し、その日の資料としてこれを與ふれば、兩賊ますます悦びつ、鶏明に及びて辭し去りぬ。すでに
提月にもなりければ、石見太郎は竹生島に遊ぶとて、船中に酒食を設け、家僕に棹さこせて琵琶湖を

遊覽し、船を粟津のかたに繋ぎて、日の暮る、を俵ち居たるに、甲衣のころ海道二、夜叉五郎、八人の偷兒を將て、快船にうち乗り來り會す。石見衆賊に相見え、準備の酒食をもちてこれを款待し、是れより亦船を唐崎の邊に艀ぎ寄すれば、早晩夜深け人定まりて、夜半の鐘聲賊船に到る。石見一時刻はよきぞ。」と船底より阜服と眼罩をとり出し、衆皆一般に裝はせ、つひに陸地にすゝみ行く。已に永原が前門にいたれば、羣犬頻りに吼えかゝるを、石見袖の中より魚肉の入りたる樽黍をとり出して投げ與ふれば、犬は忽地尾を振りて、却つて賊を愛す。その間に石見太郎閃りと衆艀を跳りこえ、裏面より門扉を開きて衆賊を引き入れ、石見まづ客房の方に忍び行きて見れば、庭廣く山低く、泉清らなり。即ち池を遶りて樹木ある方に到れば、怪しいかな女の歎く聲す。石見燈罩を擧げてこれを見るに、櫻樹黄葉の下陰に一個の女兒、髪は蓑衣を被ける如く、左右の腕を縛められ、淫々と泣き居たり。石見驚とせしが、左右に人なければ心を鎮め、「婦人いかなれば中夜こゝには居給ふぞ、何の科ありてか斯く縛めを受け給ひし。釋きて參らすべきや」といへば、女兒涙を滿然と流し、「婦しき人の言や。妾は此の家の侍兒津濟といふ者なり。山鷄の卵の事より、この身無實の罪に死して遺恨止む時なく、この家に祟りあらせんと、まづ内政唐衣の命を絶つところに、道高の妙智方に聞てられ、再び寛みを報ゆる事能はず。君わが爲に客房良の柱に掛けたる鏡を把斷て、この縛めを解きて給へ、

その報いには黄金の在所を教へ參らすべし。」といふに、連の石見も胸轟き思はず毛起ちて覺えしが、元より不敵の劇賊なれば、さあらぬ態にうち點頭き、「いと安きことなめり、いで鏡をとりて得さすべし」といひつ、客房に潛び入りて見れば、果して柱に鏡を掛けて錦の袋に包れたり。採りてこれを見れば、世に類なき明鏡なり。心悅びてこれを納め、外面に出でて鏡を小賊に交付し、又元の所に立ち歸り、漣漪が冤鬼にうち向ひ、「心安かれ、鏡は既に遠ざけたり、さらば縛めを解くべし。」と明晃々たる刀を引き抜き忽ち素を切りとけば、漣漪つと立ちあがり、「骨嬉し、君が一刀に煩惱の羈を斷ちぬ。あれ見給へ、山の後なるは庫なり。財は客房の南にあり、卒こなたへ」と前に立ち行くかと思へば形は消えぬ。石見奇異の思ひをなし、すなはち進みて寶藏の前に至り、鎖を解門けて、唳笛を吹き鳴らせば、衆賊こゝに集ひ来て、金を偷み去ること數萬兩、石見悉くこれを船に運ばせ、なほ飽かずやありけん、おのれ一人のこりとゞまり、内房にしのび入れば、次は主人の臥房と見え、豎幽にして窗下に山鶏の窠あり。石見ひとり笑みて走り寄り、二つの鳥を出しもあへず、鳥の頭をかいつかみ、引きちぎりてぞ捨てたりける。左近軒翫きの音に驚き覺め、腰刀を拿りて走り出づれば、石見はやく燈をうち滅して逃げ行くを、逃さじと追ひ趕くる。二人つひに客房の庭に會して、東風西風挑み戦ふ。この夜野干玉の暗にして、さらに黑白も別たれば、閃く刀の光を試に、踏みこみ、切り結

石見やうやく峯哀へ、叶はすして逃げ走るを、いつちまでも追ひ行きしが、櫻樹の下に至る
ところ、左近思はず一條の麻索に躓き、たちまち撲地付れければ、石見得たりと取つて返り、肩尖
深く劈り割けたり。あはれむべし水原左近、一朝の怒りに事を過ち、終に瀟灑が冤魂に縁はれ、石見
が白刃に命を断ちて、ながく泉下の鬼とならば、詩あり證とす。

善悪無レ分 總 喪レ軀

只 因ニ怒ニ釀ニ禍ニ危ニ

勸君堪忍 須ニ誠ニ信ニ

短慮從來 是禍基

月水奇縁卷之一

月水奇縁卷之二目錄

第三回

観音堂靈箭救二觀子女一
滋賀山強弓走二阿紫一

第四回

隔レ樓絃管運レ情
停レ船釣竿叙レ思

月氷奇縁 卷之二

東都 曲亭 馬琴 著 編

第三回

観音堂靈筭前救二相女一

満賀山強し走阿茶一

是の夕永原左近が第宅には、親戚を招きて宴決せし暫安をひらき、酒麩に喪深けて、二更に客退き、家内の奴婢等大いに酔ひて熟睡し、主人の横死を知る者なく、五更の左側に至り、初めて覺めて大いに驚き、察家情にきて沸くが如く、鎌倉四女、源五郎を抱きて走り出で、良人の屍を見るや、涙は雫の玉も貫きあへず、懸置手足の措く所を知らず、共に朝に伏して死なんとこそ哭きける。わら、家史書内これを留めて、「こはあさまし、物に狂ひ給ふにや、今この凶事に臨みて自刃し給はば、君が筋義は立ちぬべし、然れども何人かよく幼君を養育せん、只幼君の成長をまちて難はぬ、家公の體恨の散らし給ふこそ、死するに勝る信なれ」と言を漏して諫むれば、相女は唇歎きて道へらく、「妾人近殿の妻となりていまだ一月にも満たず、しからに今主君の遺書財を奪はれ、加之あづかり奉る

山鷄を殺し、良人横死し給ひてその仇をだに知らず、君公これを聞き給はば、必ず一家を罪せらるべし、わが身はさらに惜しむに足らず、源五郎は義子なり、われ此の兒の罪せらるゝを見るに忍びず、ゆゑに先だち死して歎きを見ざるに若かじ」と又劍を抜きて死なんとするを、喜内忙はしく劍を奪つて、「不可々々、諍譎にも二十六計走ぐるを上とす。夜に紛れてこの地を立ち去り、何地の山林にも身を匿し、時をまちて幼君に仇を討たせ、再び古主に還召されんことを謀り給へ、是れ忠孝兩全の計なり」といへば、和女けにもとその言に従ひ、漸く涙をとめて羽作の寶劍を身邊に踏み、源五郎を懐に抱きつゝ、若狭路にやゆかんと東國にや下らんと議するに、喜内道へらく、「僕が弟丹治、鬪に家公の命せに違ひ、その夜亡命して未だ信耗を聞かずと雖も、思ふに僕兄弟生國大和なるをもて、和州に逃れ奔りたるなるべし。他方は中夜通路なし。幸ひこの志賀の屬城は家公の預り守りたまへば、白川山を越えて都に出で、直に大和に到るべし」と、主従三人探るものも探りあはず、雞鳴。明。こる白川を望して走り去く。只見る疎林路黒く、琵琶湖波白し、風は萬葉の稻に戦ぎ、蟲は百草の露に鳴く、水は孤村を抱きて遠く、山は一徑に通じて斜なり。たどるノも白川の巔に至れば、東しらみて夜向明する時しもあれ、松の蔭蔚より山客五六人走り出で、「吾們頃日賭に輸けて、久しく夜寒を凌ぎかねたり。よき行客ぞ買路錢を得よ」と集きさへぐ。喜内是れを見て大いに怒り、「無智の鼠賊、など

て頭を養ふことを知らざるやと罵りつ、腰刀を抜きて迎へず、雲飛雲不飛これと戦ひ、立地人を男り伏せたり。しかあれど等はもて衆に敵し難く、喜内全身に傷を受け、流血眼に入りて撃つ刀しどろになり、遂に賊の爲に討たれければ、衆賊走りかゝりて相女に迫らんとす。相女は足も地につかず、源五郎をしかと抱き、西の坂路を逃げ走ること五六町、賊なほ逐ひ來りて事既に急なり。時に路傍なる觀音堂の裏に一聲、僧高く響き、箭一つ來りて前に進みし賊の鳩尾骨に弾と立つ。賊従これに驚き恐れ、首を抱へて逃げんとするに、箭なほ際を亂す如く飛び來て、山賊悉く射死さる。相女これを見て遙かに大士を伏し拜み、家父熊谷勘解由、世に在りし時深く觀世音を信じ給ひぬ。又父の志を繼ぎて、常に觀自在の御名を唱へ、現當二世を斬り奉りしが、今この危急の時に臨み、かかる奇蹟を見る事は、父が信心の餘慶によるか、又はこの兒の天運を得たるか。傳へ聞く和武天皇の延暦年中、坂上田村將軍鈴鹿山に賊を討つの日、菩薩千の智慧箭をもて邪徒を折き給ひしと。聞けるは昔看るは今、奇なるかな奇妙なるかな」と亡語し、尙歩みふりて拜せんとするに、忽ち觀音堂の門扉を開き、裏面より一個の武夫、烏巾に面を包み、手に一張の弓を執り、腰に三羽の征矢を挿み、悠然として立ち出でたり。相女これを見て大いに驚き、面を背けて逃げんとするを、彼の人弓をもて遮り留め、二人怪しむ給ふな、小人は永原氏の祖友なり」と申を脱れば、三上和乎なり。相女再び駒轟

き「然として言なし。和平路傍の石に腰打歇け、小人前夜友人を訪うて茶を圍み、曉に及びて家に歸らんと永原氏の門前を過るに、家内事ありと覺しくいと嘆がし。怪しみ立ちよりに縁故を聞き、その歎ある事を知れり。因りて婦人と令郎を尋ぬるに、後難を思れて逃奔せりといふ。小人その中途に過ちあらんことを察し、家に歸らずして直に迹を尋ひ、婦人より先に來りて爰に待つこと久し。果してわが思ふ所に逢はず、母子山谷に苦しめらるゝを見り。こゝをもちて大士に募供の弓箭を請ひ奉り、すなはち射て賊を殺しぬ。元長永原氏とは金剛の契りあり、その危難に臨み争でか救はざらん。幸ひなるかなわが嫡母鄰國にありて老いを養ふ。その家窮めて貧しといへども、膝を容るゝに男の婦人令郎を携へ、彼處に至りて時を俟ち給へ。われ又時々書を寄せて扶助すべし。是れ尤も薄品たりといへども路費の資けと給へ」とて懷中より圓金數塊取り出してこれを與ふれば、淑女再生の恩を謝し、深くその篤惠を悦ぶ。時に和平觀音堂の方に向ひ、手を抗けてさし招けば、堂の裏より一個の老漢走り出づ。和平淑女に云へらく、「この後最も老實なり、これをして送らしむべし。夜已に明けたり、人の怪しむこともあらん、この所にて袂を分つべし。」というて、則ち後に路程の事を示し、和平終に幸崎の方に去りければ、淑女は彼の老漢に助けられ、都の方にたどり行きぬ。斯くて佐々木高員朝臣は、左近が家の凶事を聞きて驚き給ひ、「軍須財を失ふこと最も愁ふべし」といへども、黄金は猶得

べし。室町家より贈與け給ふ由嶋を殺すこと、わが家第一の職なり。しかれども左近横死し、家族
毒り去るうへは爲何なし。早く左近が首を切りて足利殿に謝し奉るべし」と、一紙の願狀に左近
が首級を添へ、京都に便して鳥を殺すの罪を謝せらる。義教將軍あへてこれを咎めず。左近が首級を
返して厚く葬らせたまふ。高尾西に向ひて君恩を拜謝し且思へらく、盜賊黄金を奪ひ去り、左近の
爲に殺さる、手疑ふべからず。しかはあれど賊何の故にか由嶋を殺すべき、是れ財を奪むものは賊
にして、鳥を殺すものは狐狸の所爲なるべし。禽獸が分地に棲みながら、何ぞ予が愛する鳥を食
らふや。如かじ湯賀山を釣りて悪獸の根を絶たんにはと、逃に三土和乎を召し官はく、「汝元より用心
ことを能くも、今別孝百人を授くべし、明日湯賀山に登りて狐狸を狩り、その餘の鳥獸を捕らへば
す」と諭じ給へば、和乎かしこみて家に歸り、もつぱらその準備をなすとこゝろに、その夜三土和乎に和
平が門前に人馬の音す。家内怪しみ立ち出でてこれを見れば、許多の提灯に踏を照らして三土和乎
従し、一團の宮人烏帽子直衣に身を裝ひ、美輿して入り來り、主人に見えん事を請ふ。和乎嘗て
人を知らず、心疑ひ出で迎へてその來由を問へば、宮人いへらく、「下官元人給にあらず。湯賀山中に
棲む十年の白狐なり。仄かに聞く音が、屬電柱に降り國主の怒りにあひて、種類を絶られんとす。
明日是下の筋前に臨みて死を絶ら、に術なし。元來吾が山嶋に值せず。そは是下も知り給はめ、

願ふに一片の無愛を垂れわが眷屬を救ひ給へ、厚く報い奉らん。」といふ。和乎これを聞きていへらく、汝等すでにその災を知らば、奚ぞ遠國に移らざる。」「白狐云く、「吾が眷屬二千五百あり、事急に於て悉く尙れ知らせ難し。和乎又いへらく、「是れ君命なり、これをいかにせん。しかはあれど今その言を聞いて争で些の情なからん、汝はや眷屬を告げ衆狐をして穴に匿れしめよ。明日もし狐一たびわが眼に遮らば、むなしく弦を鳴らさん、二たび眼に遮らばその尾を射ん、三たび眼に遮らば射てこれを殺さん。若が曹よく自愛して禍を避けよ。」「白狐拜謝して出づるとおもへば、忽ち遠を失らす。既に曉天に到れば、和乎列卒を領て滋賀山に狩りするに、狐悉く穴に隠れて獲る事なし、偶野狐馬前を過るものあれば、和乎驚ひを定め勢りに地上を射てこれを走らす。よみて終日にして一狐だも獲ず、空しく城に歸りてこの事を訴ふ。高員勃然として宣はく、「志賀坂本の山最も廣し、など狐なからんや、これ予に戯るゝなり。われ元より和乎が能く射ることを知る。それ戦ひに臨みて敵を射ることは難く、山に登りて狐狸を狩ることは易し。その易きをだもなすことなくば射ることを知らざるに劣れり。予が縁を食みながら予が命に違ふ、その罪最も輕からず。」と忽ちこれを放逐せらる。和乎違命の罪を得てその事を明らかに訴ふることを能はず、終に江州を立ち去りけり。

第四回

隔 襖 管 運 情
停 船 釣 竿 鏡 思

星霜已三十餘年を経、永享年間、將軍義教の治世、關東の管領四位羽林是利成氏の執權、横濱右京大夫憲忠、よく管領を輔佐して民を養育し、國家を治めて東國無雙に歸す。時は永享十二年春二月、憲忠の室勝手夫人、藏姑峯構垣に地香の實し、相州梅澤の驛を過り給ふに、年歳五つ六つの女兒、西の巷より走り來つ、大橋の前に立ち舞を放ちて泣き叫ぶ。夫人憐の問より是れを見て心怪しめ、人をして女兒を呼び來らしめ、自ら隠してその故を問ひ給へば、女兒嘆きていへらく、「わらはは太田國の首の、頃日父と共に平城と叫いふ里に遊びしに、はからずも精客に勾引られ、山河に船を經ること十日ばかり、今日しも大磯とやらにいへる驛に伴はれ、一軒の商家に至り、南門に雲を立たせ置き、精客まづ裏面に入りて主翁と前議す。妾その家の光景を見るに、まつたく商人にあらず、是れ妓院にして、妾を鬻賣るなるべしと思ふにいと悲しく、遂に逃れて此處にきたれり」といふ。夫人これを知きて深く哀み給ひ、「この兒田舎に生まれ、しかも幼稚しといへども其た才氣あり。汝をの精客を見知りたるぞ。二女兒誦きて二その人而黒く眼裏にして宿あり。わらはは瀧刻かの驛に負はれき

たる時、數れに松葉をうてその衣襟に縫ひおきぬ。もし探索めんとならばこれを目標にもや。」といふに、夫人ますく、難曉し給ひ、「鴨手雁手の手段よく賦を挿ふるに足れり。この完成長の後、驍明はかり知るべし」といひ、遂に隨従の武士を分ちて大磯に至らしめ、驍長に御れて、松葉をうて衣襟に刺したる者を携さしむるに、忽ち搜し出して、彼の前客を捕め來ぬ。夫人すなはち女兒を携へ前客を引かせ、鎌倉へ歸りて鎌倉の憲忠に語り給へば、憲忠見の作作きを感じ、前客を曉問せしめ給ふに、積悪忽ち發覺れて終に首を刎ねらる。是れより憲忠夫妻かの女兒を愛し給ひ、その名を玉琴と呼びて日夜團に侍らしめ、詩賦管絃を習はせ給ふに、よくそのことを習ひ得たり。加之、憲忠夫妻の心を知り、眞實かに給事す。此をうて夫妻ますく、愛し給ふ。光陰矢の如く、玉琴既に破瓜の春を迎ふ。その心賢きのみならず、顏色又絶麗にして、立ちて晚風に近づけば、蝶舞を逐はし、坐して秋水に臨めば、芙蓉を數くの姿あり。時に憲忠の老臣海部大膳、年老いて手無し。憲忠これを哀み、玉琴を大膳に賜はり、大膳が女兒とし養はせ給ふ。これによりて玉琴給事を辭して大膳が養女となり。初めて春公の養を忘れて、問ある時は書を讀み歌を咏じ、又ある時は玉指をたわめて琴を彈す。その曲蕭々として雨の零つるに等しく、近くこれを調ふれば、流泉の碧嶂より來るごとく、遠くこれを聴けば、鶴の青冥より下るに似たり。こゝに一個の才子あり、その名を藤谷俊文といふ。即ち憲忠の近官にして、

その宅地大膳が家に鄰り、兩家の屋椽相對ひ、僅かに垣一重を隔てて、樹木その間に交はる。倭文いまだ妻を娶らず。嘗て玉琴が妹喜、西施の媚ありて、衣通、小町が風あることを聞きて、密かにこれを懸想す。よみて玉琴樓上に琴を操るをば、倭文も又樓に登りて笛を吹く。已にその聲を聞き、その曲を知るといへども茂樹に遮られ、遙點にして面を見るに由なし。漸く九月に至りて、一夕思惟を過ぎ、木の葉黄ばみ落ちて枝條孤疎になり、初めて遠く見ゆ。こゝに於て玉琴も倭文が風流士なるを知りて心にこれを愛す。いまだ體語を交へずして懸情の情、互に深く、更に體簡を寄するに氷人なきを恨む。時に倭文一語書を寫りて樂れ松山を調ふれば、玉琴も眞宗琴を抱きつ。想夫慙を懸けて聲妙に歌うたり。東西の節奏笑ふ如く恨む如く語る如く訴ふる如し。しかれども終に志を遂ぐる。ことなく、懸想ます。深かりけり。爾る程に海部大膳はその頃舞に針を賣める如く、言語を縛りし君を欺き、密かに國家を奪はん。企つること年あり。然るに今般君命によりて玉琴を食ひ奉りて心懷ほすして思へらく、玉琴女子と雖も權利なり、而も夫人に養育せられ君恩いと深し、深わが密謀を知らば必ず洩らすべし。しかじ欺き殺して後の患へなからしめんにほと、心に一つの計を生じ、菟如葉山中の獵夫に命じ、荷もて鼠を生捕らせ、これを繋ぎ置きて肉を興へず、その飢ゑ怒るを待ちて、家裏縛平、郡内に計を授け、次の日玉琴を召びていへらく。吾頃日頻りに鼠の肉を食らばん。

とを思ふ。しかれどもその市に鬻ぐものは目を經て味ひ美ならず。汝わが爲に由に登りてこれを探らんや、もし行くべくは郷平、郡内を従へ行かしめん。玉琴元より孝なり、父の命せを得て暫かんことを求む。大膽大いに悦び、俄頃にほがに奴婢に命じて酒食を調へしめ、既に遊山の興を添ふれば、玉琴父に辭別し、彼の兩儀を領て遠く山に遊ぶ。只見る黄葉連出を裝ひ、秋色乾坤に滿つ。水瀾々として谷滑かに、風飄々として松冷やかなり。石は藪を帯びて赤く、峯は雲を味いて白し。牧童犢を牽きてのほり、漁夫薪を負ひて歸る。玉琴只管輿に乗じ、此處に至り彼首に走り、かの二儀が従ひきたらざるを知らず。郷平、郡内これを見て、潛かに山の腰を逃り、溪間の九折なる所に匿れ居て玉琴が來るを待つ。玉琴既に芒茅の藪奪りたる所に來れり。時に前面の谷瓦碎々といふ音して、一隻の狼忽然として走り出で、玉琴に近づくこと咫尺の間なり。されども玉琴、蘭を探りて左右を省みるに違なく、終にこれを知らざりけり。是れ郷平、郡内狼をこゝに繋ぎおき、玉琴が來るを見てこれを走らせ、直に食らはしめんと計れり。しかれどもこの狼久しく圍に繋がれ、その心已に臆し、人を見て却りて恐れ、路を横ぎりて走り去りぬ。一漢計の成らざるを見て、いかにせんと商議するに、郷平いへらく、一只目の暮るゝを待ちて山中に捨ておき、中夜猛獸の食となさんば如何。郡内云く、この計不可なり。この山人家近く、元深山にあらず。もし令弱無事にして家に歸らば、かへりて吾們罪せらる

べし。是れ様を守りて免を待つなり。只路に迷へりと偏り、中途に日を暮し、歸路花水橋にてこれを計らん。郷平「この計妙なり」と覺び、なほ樹下に酒まり居れば、秋の日暮れ易くして、漁寺の鯿音杵かに聞ゆ。玉琴初めて左右を顧みるに、傍に人無し。心あわてつ廻りに、藪内、郷平と連呼べば、雨雲忙はしく走り出でて云へらく、「令弱などで朝霧に漫行し給ふや。吾門大いに尊ね奉らむたり。去來歸り給へ」と促せば、玉琴藪を納めて由を下る。一徑木路を行かず、僅かに熊夫の通へる徑を通りて、中途いづらに日をくらす。この夕月暗く風いと驟がし、已に花水橋を渡る處に、郡内後より玉琴が帯ととりて、河に濺々と突き墮し、一人跡をも忘すして逃れ去りけり。玉琴叶時水中に突せんとする時、釣艇の棹さし来るあり、船橋腹を出で、玉琴橋上より墮つ、故に水中に溺れずし。舟裏に喉と伴あり、漁者驚きて船を止め、これを見るに一女子船底に倒れ死せり。これを傳へんとするにその名を知らず、これを救はんとするに藥劑なし。よつてまづ水を掬ひて口中に注ぎ入る。に、齒を切りて水下らず、所爲なくみづから水を含み口より口につしいる。に、水初めて喉を通りて蘇れり。漁者問うて云く、「郎女何の過ちありて水中に投まんとはし給ふや。玉琴いへらく、「爰求めて入水する者にあらず、家傳の爲に誑られて水中に落つべかりしか、幸ひにしてこの船に入らぬ、是れ再生の恩なり。漁者又いへらく、「しからば君が家に送り行かんと如何。玉琴大いに惶び、もろし夫然

くんばこの上の幸ひなり」といふ時に雲月を吐き、金波河水に映す。二人その光につきて初めてその面を見るに、漁者は藤谷倭文なりければ、相ともに且驚き且喜び馳ぢて暫く言なし。稍ありて倭文云く、「われ漁獵を好みて時々この川にあそぶ。今宵又闇に乘じ、ひとり扁舟に棹さしてはからず佳人に遇ひぬ。もし是れ桃花の水源にあらずは、必ず織女の天降れるならん。遂かにその面を知りて未だ一話を通ぜずといへども、意若にあることは疾く知り給はめ、尙一々の縁ならんや。願はくは枕席をすすめて借老の契りを結ばん。」玉琴これを聞きて滿面紅を注ぎし如く、胸震きて答ふること能はず。既ににしていへらく、「女子父母の許しを得ずして身を人に任すべからずと雖も、今危難郎によりて免れ、鎌倉郎によつて恙なし。恩を得て報ゆることなきは高天に等し。この夜の青蓮妻みづから歸むること能はず。たゞ百年の命をして郎が一夕の情にかへん。」遂に苦を尋とら得て枕とし、既に楚臺の夢を結ぶ。月は房を照らして蟻織も輝み、風は袂を走りて石枕も懐むべし。身を淺妻の淺ましきまで世に浮き君のうき名は立てそ、可憎の病體よ夜半に人を驚かす、薄情の狂瀧よ二更に曉を鳴ぶ。遂に則ち衣を被ぎ、對坐して泣き又共に臥して抱つ。「恨むところ別れやすく會ひ難し。天明け人知らばいかにせん、卒君が家に送り行かん」といへば玉琴いへらく、「家尊は罪智者なり、郎送り行き給はば必ず疑ふべし、妾ひとり家に歸らん。」倭文泣にもと其の音に従ひ、舟を捨て陸にあがり、相携へて

路を走り、その門前に杖をわかれて僕等は自己が家に入り、玉琴は門外にのみて人の起き出づるを待
つ。漸る程に郡内、郷平はその夜家に歸りて玉琴を山中にて見失へり。といふに、大膳僞りて驚き
怒り、二人を鳴り退け、別に人を走らせて探索するに、衆皆逢はずして空しく歸れり。大膳借かに郡
内郷平を驚く賞し、花水橋にて溺死せしめたることを聞きて、掌を拍ちて大いに悦び、なほ人の疑は
んことを恐れ、夜明けなほ再び尋ねべし。というて寐ねぬ。諸朝門者起きて門扉を開くに、玉琴つと
裏面に走り入る。門者これを見て驚き忙て、一聲、令愛歸り給へり。と呼ばれば、大膳この聲を洩
れ聞きて心疑ひ、立ち出でんとする處に、玉琴早く父の前に跪る。大膳これを見て呆れはて、默然
として居たがしが、熱その衣服の水に濡れざるを見ておもへらく、玉琴水中に投げ、溺れ死せしと
いふとも、衣服は必ず濡れん。今衣服の濡れざるを見れば、狐狸の假に玉琴と仮けたるか、若しく
はその靈魂の迷ひ來れるかと狐疑して心中安からず、即ち試みに問うて云く、前夜郷平、郡内歸り來
て爾を山中にて見失へり。といふ。われ驚き悲しみて普く尋ね索めしものき。今その恙なきを見て、
食はじめて咽を下るべし。爾何人に導かれて歸り來りしぞ。玉琴いへらく、山中に迷ふにあらず、
歸路花水橋にして彼の兩僕に溺き落され、己に溺れ死ぬべかりしを、河伯の哀みを蒙り歸り來ぬ。故
に水中に陥るといへり。女流の身も又恙なし。大膳その言を實なりとしてます。驚き、僞る聲り

て輦半、郡内を呼び出し、「不忠の賊獲、何の怨みありて玉琴を殺さんとは謀りしぞ。」と責め問へば、郷半既に事の發覺れたるを見て、口を開かんとする所を、大膳只一刀に斫り殺す。郡内これを見て六神無主、「これ吾們的知る所にあらず。」といひり訖らざるに、首立地まへに落つ。大膳罪を兩僕に假託けてこれを誅し、河伯を祀りて假に玉琴が無事を賀す。玉琴はやくその色をさとりて、身に禍あらんことを恐れ、是れより君命に歸著へて憲忠の内廳にまゐり、膳手夫人に給事し、家にあること稀なりければ、大膳ますくこれを憎み、密かに毒をもて殺さばやと思ひけるが、また思ひ轉し、玉琴怜利しといへども一女兒なり、事何ほどの事をなさん。吾これが爲に心を勞するは、所謂鵲を割くに牛刀を用ゐるごとし。事の洩れざるうち早く謀をめぐらして憲忠を亡ふべしと、潛かに管領成氏の嬖臣に黄金を贈りてその志を結び、昔時憲忠の伯父氏憲入道、前管領持氏の命に違ひ誅せられたる事を憲忠深く怨み、成氏を京都將軍に護言し、管領職を奪はんとす。と流言せしめければ、成氏これを傳へ聞きて大いに驚き給ひ、近曾管領の威權衰へ、予弱官たるをもちつて、關東の成敗事ら憲忠の手より出づ。もし憲忠を奪せば國家殆危からん。はやくこれを誅すべし。と武士を帷幕の裏に匿しおき、政事の密談あり。と俄に憲忠を召す。憲忠これを知らば、士卒僅かに六七人を領て營を登り成氏に見え奉らんと、正廳の歩櫓を過りたまふに、たちまち帷幕の裏より武士走り出で、「君

命なり」と組み著く所を、憲忠、一心得たり」と頸を搦み十歩許り投げ退くに、武士二人又左右より組まんとす。憲忠これにも恐れず、右に挂へ左に支へ、たゞちに膝下に組み布きたり。しかれども大紋の直垂身に撞崩り、進退自由ならざりければ、一人走りかゝり槍をもて憲忠の肩を刺す。憲忠その槍を握りて抜かしめず、言下に一首の和歌を咏す。

なき身とも思ほざりせば歎くらむかかる今はに残す言の葉

時に武士等刀をもて只寸々に砍り著くるに、憲忠さらにも身を動かさず、二人を膝下に組み布きながら、端然として死し給ふ。時に享徳元年十二月朔日なり。憲忠の従宰等上君宮せられぬと聞きて、いかでか命を惜しむべき、みな營中に討死せり。是の日憲忠の館には、營中凶事あることを知らず、夫人膳手苑に出でて早梅を賞し給へば、玉琴來りて剣口を質す。浩かる處に後門の邊より一個の士卒、全身に血を沃ぎつゝ、走り來ていへらく、「憲忠營中に害せられ給ひ、従宰皆共に戰死す。早くその屍を遷け給はずば當に危かるべし。臣この事を告げ奉らん爲逃れてこゝに來れり、身只王と共に死せざるを恨みとす。」言ひ訖りて自ら劍に伏して死す。夫人これを聞きて大いに驚き、「是は其もいかに。」と號哭び、愁傷ほとく死なんとし給ふ。玉琴諫めていへらく、「相公落命のこと孰かこれを歎かあらん、歎かしといへども返ることなし。相公の賢弟式部少輔房顯、いま京都にましませば、暫く難を遣

けて後、これと商議し、君公、讒死の汗名を雪ぎ給へかし」と萬方勸めつゝ、扶けて後堂に律ふ折から、後頃に四方幕屋として、耳邊に讒聲發り、軍士前後に涌出して、一個の老將身に紅縷甲を被、白髪置れて芭花の如く、馬を庭前の樹下に騎りする、鞭を揚げて夫人をさし招き、「われ管領の命を受け、今より憲忠の家督を承ぐ、吾に従ふものは活き、われに叛く者は死なん」と喚はり、士卒に下知して夫人を捕めんとす。玉琴驚きこれを見れば、假父海部大膳なり。士卒みな敵となりて左右前後援兵なく、事すでに急なりければ、爲何なく長押の肩突刀を奪り、遮りとめて戦はんとす。大膳目を瞷らし、「父に仇する賊女兒、何の面目ありてか挑み留めんとするや」と罵れば、玉琴微笑して、「父に仇するを是しとやせん、君を殺するを是しとやせん」とぞあざむきける。大膳益々怒りを發し、刀を揮ひてこれと戦ひ、たちまち玉琴が肩突刀をうち落して既に砍らんとす。時に壯子一人槍を挿りて走り來り、「熊谷倭又爰にあり」と呼ばはりつゝ、直に槍を奪り伸べて大膳を刺き殺し、猿呼ばはりていへらく、「われ前に進みて敵を拂はん、玉琴は夫人を守護し、わが後に從ひて來るべし」と、右に衝き左に當り、遂に一條の血路を開き、後門より走りいづるに、敵兵あへて挫ふること能はず。夫人は辛うじて虎穴を逃れ、西を望みて走り給ふ。嗚乎讒佞の人を傷るや、その毒蛇蝎より甚し。海部、君を殺する逆徒といへども、成氏讒を信することなくば、それ憲忠を如何。詩あり證とす。

堂々八尺欄
舌上有龍泉

莫聽一寸舌
殺人不見血

月氷奇緣卷之二 畢

月水奇緣卷之三目錄

第五回

驚^{おどろ} 彌^や 巒^{らん} 倭^わ 文^{ぶん} 憩^い 茅^ま 簪^{かん}
逐^お 野^の 猪^ち 武^ぶ 漢^{かん} 登^{とう} 雪^{せつ} 獄^{ごく}

第六回

吉^{きち} 野^の 河^か 枯^こ 樹^{じゆ} 海^{かい} 遭^あ 春^{はる}
妹^{いも} 夫^む 山^{さん} 壽^{じゆ} 松^{しょう} 親^{しん} 折^せ 風^{ふう}

月水奇縁 卷之三

東都 曲亭 馬琴 編著

第五回

驚 彌 兼 倭 文 惣 茅 簀 一
逐 野 猪 武 漢 登 雪 嶺 一

斯くて膳手夫人は倭文、玉琴に扶けられ、日夜徒蹠にて走り給ひしが、漸く菟姑峯、足拍を経て、敵兵已に遠ざかりければ、始めて隴の颯を逃れたる心地して、都を望して落ち行き給ふ。刺路に楓たはりて、足破割れて血を流し、溪泉前に漲りては、脊石に踏かりて魂を失ふ。百歩兼めば百歩勞れ、一里走れば一里憊む。倭文精悍しく介抱けまゐらせ、手を抜き腰を押し、とかくして駿河州に至りぬ。かくては人の疑ひや負ひなんと、こゝより行装を更めて、村婦の伊勢宗廟に進香する形に扮ちて、簀笠に面を匿し、袷に白布の淨衣を被て、足に夏布の裏鞆をひすび、夫人、玉琴一般に裝束し給へば、倭文も遮日笠をかみ、とうち戴り、身に荒布の袴を被て、腰に兩刀を跨り。時は季冬にして湖風膚を犯し、陰雲雪を結みて寒氣堪へ難し。笠は山に似て戴けども富士を見るに由なく、

杖は足高を助けて歩めども裾野に達し、花洛の方はいかばかり遠江もゆき／＼て、三河と聞けば武
 夫の矢射の橋もありながら、梟の軒蔭も敵かと驚き、虎の尾張も踏みこえて、竹の都路程近み、嘯か
 でおこる神風の、伊勢の驛路の鈴鹿山、風に捲り、雨に沐ひ、一條の客路萬里の山河、見るとこ
 ろ悉く魂を傷ましめ、聞くとこゝろ總て駭を纏つ。已に近江路に至りて、行人に京都の光景を
 問へば、「都も近曾山名、細川が雜執によりて合戦止む時なくて、いと騒がし」といふに心驚き、進
 まんとするに路を喪ひ、歸らんとするに家もなく、進退こゝに窮まりぬ。倭文、夫人に言さく、「今の
 世の人心、笑みの中に刃を匿せば、都とても遇ふ難し。臣が父和州吉野の麓六田といふ所に在り、元
 邊邑の寒士と雖も大いに義氣ある者なり、姑く彼首に身を寄せて、都の形勢を聞き定め、緩やかに
 事を謀り給はば宜しかるべし」と言す。夫人宜しく、「まことや萬里の身は繋がる舟の如し、左にも
 右にも良からん方へ行けよかし」彼の古今集にも

吉野の山の彼方に宿もがな身のうき時の懸れ家にせむ

と諷みたりしも、かかるときにこそあらめ」とうち泣びて聞え給ふ。玉琴これを聞きて忽ち「噫」と
 哭きければ、倭文驚きてその故を問ふに、玉琴いよ／＼なげきていへらく、「妾が父母も大和の里人に
 して、同胞もありき。妾六つの年遠く東路にさまよひしを、幸ひにして夫人の鴻恩を被り、深窓に養

はれて鍾愛類なく、晝は鼎をつらねて食し夜は錦の衾を襲ねて、榮耀身に餘るにつけてもなほ父母は慕はしく、臥しては懐ち覺めては恨み、光陰徒らに十餘年を経たり。大和といへど家路も詳ならで、父母同胞の面影だに知らず。今圖らずも故郷に歸りながら、却つて父母を訪ひ難し、牛死は元より常なければ、いかに亡き人の數にや入り給ひけん。天神にも撞てられ、地祇にも拊てられ、かかる浮世を経ることよ。」と、凄然として哭きければ、夫人諫めて宣はく、「やよ玉琴歎くこと勿れ、父母世にしあらば争で廻り會はざらん。妾頃日嘗て二人の模様を見て情由ある事を知れり。是れ年庚相應の夫妻なり。今妾媵して爾を倭文に妻はすべし、よく倭文に齊眉きて貞操を竭し、父母に事へるの思ひにかへよ。」と宣へば、二人は只願顏に汗し、深く夫人の恩惠を悦べり。是において都には入らずして直に大和を望して走りければ、兩三日を経て吉野の麓ちかくなりぬ。抑大和、河内の際、山多く路嶮し。深谷地を帶りて崖岸の形を鑿もて穿ち、高嶺天に横たはりて崗脊の勢を刀して削りなせり。向上ぐれば青壁萬尋に高く直下せば碧潭千仞に深し。この日八九里の路を走りて、夫人、玉琴人に澤河れ今は一步も運ぶ難し。倭文所爲なく林の中に山の靈廟あるを見て、門扉を開きて婦女主従を導はせ、己は橋下の石に腰打掛け、刀を斃りて肩尖に倚せかけ、靜かに四下を眺むれば、幽林の裏狐穴を藏し、香木の間泉、壺を得て、貝何となく物賣し。時に顔邊に直利と書して倭文が刀おのり

から鞘を離れ、空中に閃き昇り、刀鞘のみ手に残れば、「是はいかに。」と慌てつ、鞘を仰見れば、一隻の白毛獼猴、かの刀を奪りて樹上にあり。倭文大いに怒りて、「この畜生何ぞ人に戯れ、や。」といひつ、礮して驚かせば、猴はこれに怖れて、枝より枝に傳ひ梢より梢に遷れど、終に刀を放さず。倭文ます／＼焦燥ちて云く、「誰に、死虎生鼠に及ばず、といふ事あり、今この身漂客となるをもて禽獸にすら蔑らる、武士戰場に兵器を失ふさへ羞とす、泥んや畜生の爲に腰刀を奪はれ、何の面目かあらん」と、拳を握り齒を切り、沙土を疾視みて立ち居たり。夫人は玉琴と共にこの聲をもし聞きて、山靈廟より走り出で、この光景を見て驚き給へども爲何なし。玉琴いへらく、「もしこれを驚かして走らせなば、是れ賊に糧を齎しむるなり、たゞ賺して復るには若かじ」と、徐かに樹下に歩みより、手を抗けて猴をまねけば、猴もまた手を抗けて人を招く、倭文これを見て心に一計を生じ、身邊の刀を抜きて、假にその指を切る形をなして見せければ、猴も又かの白刃をもちてみづからその指をきるに、忽ち指二つ二つりに従ひて竝々と墮つ。猴はその性血を見て恐る、ものなれば、これに驚きて刀を投げ捨て、何地ともなく逃れ去りける。倭文幸うじて刀を復しけるが、時刻既に移りて下鞘に及べり、「もし中途に目を暮さばいかにせん、去來走りたまへ。」と促しつ、是れより忙はしく路を走るに、同雲捲き重なりて天結陰、雪霏々と降り出し、看達山に銀御車まり、老樹に玉龍の蟠るが如

く濱の村に上り、市といふ村に至れば、日に暮れてはるかなる林のうちに一軒の白屋ありて、燈の
光隠々と見ゆ。三人等しく彼廂に走りつきて見れば、柴門半ば開きて、一個の老翁巾着を担ぎ折り笑
きつ、一個の壯健と對坐せり。倭文呼門して云く、「是れは六田まで過る行客なるが、申渡日を待ち
て一歩も動徐び難し、願はくは一宿を恵み給へ」と聲高やかに呼ばれば、老翁これを聞き、「款
には六田と詠めど、土俗は六田とぞいふなる。爰よりは飯貝を過り、下市を経てその路をあらねど、
雪天中夜に及びてはいと艱難なるべし。只恨むらくは寝ぬるに食なく、食するに糧もなし。もれこれ
をだに厭ふことなくば、一夜を明し給ふに何か苦しからん」といふ。倭文いへらく、吾儕は元旅客の
身にしあれば、敢て美食を乞ひ、温かに寝ることを求め、たに一宿の恵みあらば足りなん。老翁う
ちうなづき、「しからば是に來て火に煖み給へ」といふに二人は嬉しく、裏面に入つて地炕の端に圍坐
し、倭文首を回らして座右を見れば、主人の生計獨大とおほしく、豬鹿の皮を多く積み累ね、壁に二
張の弓を掛けたり。席は破れて地板あらはれ、簾は傾きて乾葉風に戦く。老翁三人の形狀を熟觀し
て、貴客は京都の人か東國の人なるべし、近習四海亂れて、貴介の公子良家の婦女、邊を山林に遊
けて、近この地を通り給ふを見る。貴客もその中にこそあらめ。喬木は風に折れ易く、位高きは却
りて危し。愚老が如き家に一日の貯難なければ、夜鎖すねども賊の恐へを知らず」といふ。倭文深く

その清貨を羨み、遂に黒野をとり出し、柱に一篇の詩を題して云く、

一個蒲團 一個鍋

荒年不レ怕ニ賊來多一

山前財主 三更夜

狗一轟時便打レ羅

老翁これを見て大いに悦びて云く、「この土地は人家稀にして山賊多き所なるに、なぞて早く宿をば

求め給はざりし。」倭女いへらく、「われも婦人を携へたれば、疾く宿を借るべかりしを、中途白毛彌猴

のために腰刀を奪はれ、筒様々々にしてその刀をとりかへし、おもはず日をくらしたり。」と、計を

もて猴の指を傷りしことを仔細に説了れば、老翁が傍に坐したる壯俊猛然と立ちあがり、簀下に控

けたる蓑笠をとりて外面に走り去れり。老翁これ見て云く、「貴客密言して禍を引き出せり。貴客

が指を傷らせし業は、頑犬が寵愛する所の家狙にして、すなはち彼廂の檻中にあり。愚老は二十年來

寤となりて一步も門を出でず。兩側の頑兎ありて愚老を養ふ。渠等心猛く力飽くまで強し。今日猴

を山中に牽きゆきしが、忽地その指を傷られ来るを見て、兄弟大いに憤り、里の兒等が撒潑せし

ならん」と兄は近郷に行きて、専らその傷けたる人を探索む。貴客これを知らず、漫りに誇りてその

ことを語るをもて、弟この事を兄に告げ知らせ、社影を驅り催して、その怨みを報いんとするものな

らん。早く此處を逃れ去り給はずば必ず禍あるべし。」といふ。倭女はこれを聞きて大いに後悔し、

兩個の婦人は目急きたる如く、採る物も採りあへず、已に立ち出でんとし給ふ時、老翁一圓の敗蓑と一枚の蓑をとり出して云く、「婦人その儘にて走り給はば、必ず見咎めらるべし。兩位の婦人これを取たまへ。」とて蓑を夫人に被せ參らせ、薦を玉琴に被せ、又別に野豬皮一枚を倭文に與へて云く、「是れ極めて醜穢といへども、一つには雪を凌ぐべく、又一つには波兄弟を欺くべし、幸走り給へ」といへば、三人深く圭翁の厚情を感じ、已に柴門の外に走り出づれば、積雪路徑を埋みて東西を知らず、雪花襟に入り頭冷く、雪吹笠を扇りて頭たゆげなり。漸く十町ばかり走りける所に、忽地後面に鶯と人聲聞えければ、倭文後を顧みて云く、「後面に人聲の聞ゆるは、當に我を逐ひ來るならん。玉琴は夫人を扶けて先に走れ、われ爰に在りて渠等を防ぐべし。」といふうちにも心せかれ、玉琴精悍しく夫人を誘ひき、素雪を踏みて走り去く。倭文少刻望羊みて追人を待つに、その後は闇として人の來る事なければ、初めて心を安んじ、直に夫人の蹄を慕ひて走りけるが、誤行ひけん遂に夫人、玉琴等にあはさず、心忙てなほ頼りに走せぬくに、忽地足に一片の絹搦筋りければ、あやしみて手にとり見るに女眼の片鱗なり、天色朦朧として模様分明ならずと雖も、玉琴が肩敷の袖に尋常たり。こゝに於てますます心驚び、四下に脚をくばつて熟視れば、彼首には毛髮散亂し、是首には袈衣の收れたるあり。倭文これを見るより胸膈割くるが如く、天を仰ぎて長嘆し、「吁前門虎を防げば後門狼をす

すむ。夫人、玉琴山客の爲に殺さるゝこと疑ふべからず。吾誤りて夫人を虎穴に陥れ、手足ありながらこれを救ふこと能はず、今は何をか刺すべき」と腰刀を抜きて既に吐に傳てんとする所に、忽地溪間の藜竹瓦碎々として、一隻の野豬直に走せ來り、東南の嶺を望して去りにけり。時に一個の獵夫頭には席帽を戴き、身には短襦の短袴を敷て、足に草袴袴を穿き、手には一條の竹槍を拿りて、乾の坂踏を馳せ下る。倭文は野豬の荒れ來りしに驚き、いまだ手を下さざりけるが、雪明に彼の人を透し見て思へらく、この獵夫人と玉琴を殺しぬるに違ひなし、遽引き寄せて討たばやと、彼の老翁が贈りたる野豬の皮を筋ぎ、踏傍に伏して待ち居たり。程なく獵夫走り來て、倭文を見て野豬なりと思ひ、槍をとり伸べて刺さんとするを、倭文岸壁と起き、老獵何ぞわが主を殺したるや」と罵りつゝ、刀を掲げて砍らんとするを、彼の人急に槍をもて遮り止め、壯士過ちすべからず、汝は是れわが兒倭文に非ずや」といふ。倭文その聲を聞き、驚を定めてこれを見るに、是れ家父の壽郎治なりければ、大いに驚き、忽ち刀を棄て投げて地上に拜伏し、「不孝の兒過りて父を害せんとす、その罪萬死も猶輕し」といふ。壽郎治倭文を熟視て云く、「汝面上に怨氣表はる。何によりてかく隠しき。倭文云く、今今この地に於て主君の夫人殺されたまひぬ、故にその仇を報いんとおもふのみ」と壽郎治いへらく、「何をもちて夫人殺され給ひしといふや。倭文云く、「こゝに女の片袖と敗裳あり、是れ夫

人の被給ひし装なり。又毛髮路上に散置せり、是れ夫人殺され給ひしにあらすや。壽郎治これを聞き、掌を拍つて何々と笑ひ、汝徳角の頭より鎌倉にあつて、この地方の事を知らず。是を大和河内の間、鎌倉、泉を掃らんとするに、必ずまづ此等の物を路上に捨ておきて、これを誘引くなり。猪、麋、これを見て近邊に死人ありと思ひ、その屍を食らはんとして平坦に来るを、或は、陥を設け或は射殺し、刺殺す。父は兒を野豬なりとして刺かんとし、子は父を喰なりとして喰らんとす、竟いかなし、昔時周の剡子鹿皮を掛けて鹿茸に入り、獵夫の筒先を免れしは孝なり。汝は猪皮を被ぎてわが槍前に向ひしは忠なり。われ近曾憲忠滅亡の事を聞きて、母と共に深く汝がことを愁ふ。然るに今夜路に兩個の婦女に逢へり、言語東國の人なるをもて心疑ひ、彼首の松下に憩はせおきぬ、これ憲忠の夫人なるべし、早く彼家に至りて見奉れ」といへば、倭文大いに悦び、父子うち連れてその所に至り、中途父に逢ひたることを説話れば、夫人も玉琴も孩兒の母に會へるが如く悦び給ふこと限りなし。壽郎治云く、夫人已に雪中の長途に疲れ給へり。われ頭、毛を見ろと雖も、常に山林を家とすれば歩行なほ健なるなり。われ夫人を負ひ奉らん、倭文は侍兒を共け掖きて來れ」と言うて、壽郎治夫人を負ひ奉れば、四人等しく路を急ぎ、六田の郷にたどりつきぬ。

第六回

吉野河枯樹 泣遭レ春
妹夫山壽松 親折レ風

羅夫壽郎治は勝手夫人、玉琴等を引きて家に歸り、老妻刀白を呼びて夫人を拜させ、妻房に燵を
 點して夫人を息ませ申せば、刀白俄頃に器具を清めて夕喰をす、め、寢屋には親子二人座を占めて、
 十年別離の苦樂を慰めけり。刀白は世に轉しけに、倭文が身後を撫でていへらく、「雪が總角の頭鎌倉
 に赴きしより、只をりくの音耗は聞けど、その面貌は夢にさへ幻の如く思はれしが、射然かか
 丈夫となれり」と鍾愛言語に表はる、は慈母の情なるべし。壽郎治飄然としていへらく、「我もその後
 はたえて膝兒に逢はざりしに、去ぬる年鶴が同應神廟參詣の序を得て、渠が第宅に言づれ、已にその
 成長りしを知る。故に今宵中途に會ひて早くわが兒なることを知れり。もしかかる事なくば遂に骨肉
 を過つべし」と山中の事をもて齋神説話れば、刀白驚きてその無事を悦びけり。壽郎治飄然としてい
 へらく、「倭文は幼稚きより憲忠に仕へて君恩尤も深ければ、君家の爲には死をもて忠を竭すべし。然
 るに汝無用の女兒を携へきたること是れ何事ぞ」といとすけなう問ゆ。倭文慎みていへらく、「父の言
 せざることに侍れど、渠は海部大膳か養女なりといへども、その心假父に似ず忠義の志厚くして、

鎌倉没落の刻より夫人に從ひて、今こゝに聚れり。壽郎治頭を擡りて云く、「無爽利しきといへども思慮なきに足らず、女子はその心一定ならざる者なり。特に大膳も薩軍のうちに討たれしと聞けば、軍國に忠義をつくし、ひそかに假父の仇を報はんとするも知るべからず。われ今東を呼び出して歎み、卿かもその言語濁らば、われ額を擡でて暗笑とすべし、爾その時一刀に飲り殺し、速かに種のおへを絶つべし。」と一既に刀自をもて玉琴を呼び來らしむ。倭文は父が言を聞くより胸うち騒ぎ、なほその事を言ひ辭かんとせしが思へらく、今怒ひに實をもち告げば、父母却りてわれ色に迷へりと思はん、又いはざれば玉琴を殺すべし。左せん右せんと驅も斷るゝばかり、適かに套房の方を見れば、玉琴、刀自に語はれ來て壽郎治が前に坐す。倭文、「吐唾。」と刀夾に手をかけつゝ、も一度は父を驚り、又一たびは玉琴をうち守り、今や一話の間答に生死の際を定むるよと、眼裏に涙を含み、父が暗笑を待ち居たり。壽郎治廓體にて玉琴にいへらく、「愛姫は海部氏に養はれ給ひしと聞く、假父軍中に討たれ給へば、さこそ方便なからめ。」といふ。玉琴微笑みていへらく、「妾が大膳に養はれしは昔々明月の中にして、一日も愛しみを受けず。只夫人の恩澤こそいと深けれ。故いかにとよれば、妾が父母もこの大和の人なりしが、妾幼穉き時野人に勾引されて、遠く東國に赴きしを、幸ひに憲忠の君所に參りて人となれど、父母兄弟の面貌だに知らず。もしこの邊にざる事や無かりし、女兒を失ひしといふ事は

聞き給はざりしや。」といひつゝ、もはやうち涙ぐめり。壽郎治夫妻これを聞きて綱眼色せ、「あら訝し、父母はこの州の人にて幼き時扱されしとや。そはわが方にも覚えあり、父母の記念とすべき物やある。」といへば玉琴懷中より和錦の符箒兒をとり出し、「この裏に臍帯ありて、永享七年十一月某の日女兒照子と記せり。是れなん親の記念なり。」といふ。夫妻慌しく符箒兒をうち聞き、「是れまがふ處なきわが手迹なり、是は女兒にてありけるか。」「そも爺娘にておはするか。」と、逃に走り寄りつゝ、且悦び且歎く。少選ありて壽郎治云く、「呼わが兒等過世いかなる契りありて、斯く憲忠の鴻恩はかうぶりける。只命のあらん限りは更に忘るべからず。」と心勇みて見ゆ。倭文はこの光景を見て又手、只默然として思ふ事あるが如し。刀白は袖もて涙を拭ひ、「却しも今夜はいかなる吉日にやありけん、倭文無事にして家に歸るのみか、生別れせし照子にあひぬ、十年別離の苦樂、争で一夜に語り塌さん。」はや夜もいたく更けたり。寢ねつゝ、語るべしと天に歡び地に喜び、父母は臥房もとめに行きぬ。玉琴はその背影を日送りて、倭文が身邊に走り寄り、聲を呑みてなけきければ、倭文つと席を遷けて云く、「知らざれば爲何なし、などで斯くみだりがはしき、われも幼き時女弟あつて世を早うせしとは聞きしが、かかることは聞くら及ばず、父母いかなれば露ばかりも實をば告げ給はざりし。鋼鐵の鏽は磨きても磨かめ、身中の穢れは淨め難し。兄弟既に禽獸の交はりをなせり、今はいかに悔むとも返ら

だ、其速かに死すべし」と遂に腰刀を扣かんとせしが、これを見ていへらく、「是れはこれ父母の賜なり。父母いかに鳥獸を切れとて賜はんや。身將に死なんとしてなほ人倫の死を遂げ難し、兄弟吉野の川上に投みて、長く妹夫の中をきかん、たゞ恨む所二親年老いて君家又危窮存亡の秋なり、この身君父に仕へる事能はず、恩をもて仇とし、汗名を千歳に残す事、何なる過世の業因ぞ。玉琴これを聞きていよ、歎きていへらく、「わが身幼穉きより父母に擯てられ、成長りて父と頼む者は君を継する逆徒にして、偶牽絲の縁を求め、兼葑玉に倚るに至りて、言語道斷兄弟夫婦にならんとは。天上の月老も頼み難く、地下の氷人も何かせん。出雲州にありといふ産靈も寓言か」と或は恨み或は憤ら、心亂る、許りなり。時に遠寺の鐘聲きこえて、誰が爲に無常を示す。速かに死すべし」と、倭文雨刀を腰に跨み、柴門扉を押し開き、二人吉野川を望して走りけるに、白雪秀壁に滿ちて、吉野の甲に雪れる白雪、と詠みたりしも、かかる時節と知られたり。走りては雪に跡を印し、跣ぎては雪に體を彫り、既に吉野の川上に至りて直に投まんとせしが、倭文河水に映る衣を見て云く、「是は御座の御章なり、これを被て死するときは、死後なほ君への恐れあり」とこれを脱ぎて川上の松に投げかけ、二人佛名數聲唱へつゝ、身を躍らせて水中に飛び入らんとせし折しも、忽地後面に火の光閃きて、彼處にや行きけん、此處にや走りけん」といふ聲は方に二親なり。屍を見すると、怪し、暫く行き過ぎ給

ふを俟ちて死すべし。」と、二人遂に枯葦の裏に身を潛め、頭を擧げて彼首を見れば、壽郎治蕪火を擔りて先に進み、刀白は夫人を誘ひ掖き、猖狂の如く走り來けるが、早くも松の杪に衣を掛けたるを見て、三人聲を放ちてぞ哭きける。少選して壽郎治いへらく、「見よや二人はすでに水中に溺死せり。吾妹子が寢きたれ髪、と人丸が詠みたりしも、ともに大和の猿澤なり。こゝは女夫の中を割く、よし野といへど何かよからん。兩個の亡魂なほ水中にとゞまらばわが言を聞け、夫人も聞き給へかし。元彼等は同胞の兄弟にあらず。われ往昔江州の佐々木高員に仕へて、三上和平武漢と名告り、老臣永原左近と親友なり。然るに左近が委唐衣、男子源五郎を生める明年、鬼病によりて身まかりければ、左近前妻の女弟相女をもち籠室とす。源五郎はすなはち今の倭文、相女はすなはち是れなる刀白なり。左近相女を娶るの刻、高員より預けまたひし山鷄を喪ひ、左近も又賤の爲に殺さる。相女後難を恐れ、源五郎を抱きつゝ、家を捨てて逃れ出で、遂に山客に逢ひて巴に危かりしを、われこれを救ひて大和の知己を憑み、暫く身を匿ぼするうち、われも君命に違ふをもて爲退隱人、この和州に來りて獵夫となり、月夜き年逝きて後、遂に相女を妻として玉琴を生みぬ。しかれば渠等兄弟の名は有りながら、倭文はわが兒にあらず、相女が爲には内姪にして、倭文と玉琴とは従母兄弟なり、彼等夫婦となるとも何の妨げかあらん。吾過ちて早く此の事を告げず、生前の歎き死後の怨み、何かこれに増すこと

あらんと漲り落つる河水に向ひ、凄然として哭きける。羽女は記念の衣を抱き、思ひせく狀にていへらく、「渠等白刃せず、また君公服御章を脱ぎおけるは、身を禽獸に比したるなるべし。兒はその羞を知るといへども、母は却りて羞を知らず、貞を破つて再び嫁るも、倭文に難を討たざん爲なり。されば幼少きより官遊がせ、永原の姓を憚りて、外祖父熊谷勘解由の姓を嘗らせ、その成長を樂しむける、母が頼ひも泡と消え、掌中の珠を奪はれ、插頭の花を散らせし如く、老い跳うて枯れやらぬ、強顔かりける命かな」と記の衣を腋に當て只管恨み歎きければ、夫人も渠等が心中を猜したまひ、涙訣を濕し給ふ。時に枯鹿をかき分けつ、「倭文、玉琴爰にあり」と汀の邊に走り出づる。三人これを見て、「奇嬌し、いまだ死なでありけるか」と、或は手を携り袖を扣き、欣喜雀躍かぎりなし。倭文父母の前に跪きて云く、「不孝の子蘆葦の裏にありて二親慈愛の深きを感じ、初めて天を戴かざる爲あることを知れり。抑わが父の仇とする者何人ぞや。和女いへらく、「傭の父暗撃に討たれ給ひ、何人の所爲なることを知らず。その仇をだに知るならば、いかで今まで告げざらん。只女丘の鏡を藏せる者、是れ父の仇と知るべし。倭文勃然として云く、「父非命に死してその怨みを雪ぐこと能はず、不孝是れより大なるはなし。たとひ仇人題ありて天に置れ、鱗ありて海に潛むとも、首を挽きちぎらでおくべきやほ」と面色變じてぞ憤りける。和平これを見て云く、「倭文いたくな愁へそ、左近を殺せし

者はわれなり」といふに衆皆或は驚き或は疑ひ、共に呆れて惘然たり。和平又いへらく、「色慾邪淫の
人を傷るや、賢愚を分つことなし。孔子は、「色に易へよ。」と教へ、釋氏は五戒の上におく。吾昔相女
を眷戀してこれを娶らんと思ふうち、左近相女をもて禮室とす。こゝにおいてわが計較たちまち齟齬
し、遺恨更に止む時なく、終に朋友の信義を忘れ、竊かに左近を襲ひて相女を妻とせんことを計る。
その頃大津に石見太郎といふ退釋人あり、渠よく開牒の術を得たりと聞く。すなはち石見をかたらひ
て、左近が領與るところの山鷄を殺させ、これを罪として左近に自殺させんとす。時は正長元年八
月晦日、石見太郎に内應して志賀の屬城に謀ばするに、誰か知らん渠は 賊魁にして、その夜軍
須財數萬金を偷み、且女丘の寶鏡を奪ひて山鷄を傷し、終に左近を殺害して直に江州を立ち去れり。
されども一たびはわが宿志を遂けたれば、恩をもて相女が節義を折き、これを妻として弱子源五郎を
養育するに、自他親疎の別ちなく、鍾愛日々にいや倍り、邪念たちまち滅して、遂に源五郎に討たれ
んと思ひ、まづ渠を武士とせまほしく、緣故を求めて鎌倉に赴かするに、落魄たる一窮士、その資料
を辨じがたく、女兒照子を木齋術に賣らんと、平城に至る中途、照子を見失ひてその事成らさ、却り
て女兒に生別れ、既に天罰の身に近づくことを曉りて、深くその事を匿し、なほ辛うじてその資料を
調べき。今日はこれわが死すべき日なり、汝倭文速かに吾を討ちて亡父の孝養にせよ。」といふ。玉琴

は只顧泣き沈みて、頭をだに擧げず。倭文つくづく、和平が説話を聴きにいへらく、假令亡父の仇なりとも、二十餘年養育の恩あり、いかでか刃に奪るべき。且父を殺す者は右見太郎なり、輩を討ちて足りなん」といかに奨むれども肯かず。泪女猛然と立ち上り、倭文が腰刀を奪りて引き抜き、亡父の仇當知よ」といひつ、和平が肩尖二寸許も傷つけ、その刀を以て自己が肚に傳つれば、衆皆、「こはいかに」と驚きて之を勸る。泪女息を嚙と吐きて道へらく、「前夫とは一句の親しみあり、後夫とは二十年の恩あり。恩愛をもていはば何れか重しとせん。然れども公道をもて論すれば、後夫は前夫の仇人なり、いかで一刀怨みざらん。既にその姦計に陥りしを知らず、讎を復はんとして卑りて仇家の婦となれば、死しては前夫に罪を贖ひ難く、活きてはわが兒に教ふるに言なし。こゝをもちて後夫に傷けて前夫に論し、更に自刃して後夫二十年の恩に換ふ。やよ倭文速かに石見とやらんを討つて孝道を全くせよ。」又玉琴に言へらく、「今より後備はわが兒に非ず、父をもて父とする事勿れ、母をもち母とな思ひそ。よく倭文に齊肩きて操を誤つべからず、倭文も又妻が孤となりしを憐みて、生れ見すつること勿れ」といふ聲も細りつゝ、鮮血滾々と滾り、白雪却りて紅に變ず。玉琴は慈母の忠言を聞きて更に答ふること能はず、身を雪中に投げうちて、雪より先に消えんとぞ歎きける。和平この光景を見て云く、「泪女しばらく俟て、吾今下土の縛導すべし。昔時拈華老師この羽仕の寶劍と

玄丘の鏡を左近に授けて、一篇の偈を示せしと聞く。羽佳はすなはち翟なり。吾前には雌雄の山鷄を殺し、今又夫妻翟の劍に死す。因果亦復斯のごとし、今や倭文が腰刀に貫かれ、聊か孝道を完からしめん。」と和女が持ちたる刃を抜きとり、みづから駐をかき破り、和女を抱きて水中に飛び入りたり。三人「吐嗟」と見るうちに、紅波俄頃に漲りて、和女が骸は妹山の方に流れ、和女が屍は夫山の方に漂ひ紀の路に流れく、これを救はんとするに及ばず。古今集よみ人しらず、

流れては妹夫の山の中に落つる古野の河のよしや世の中

是れをもてこれを啼すれば、古人未來を詠するに似たり。楊震が四知に云く「天知地知人知我知。」と。それ隠慝は一旦身を利すといへども天ゆるすことなし、後人和平が事をもて自ら戒めとすべし。

詩あり證とす。

三光有影誰能動

萬事無根只自分

雪隠鷺鷥二飛始見

柳藏鸚鵡一語方聞

月永奇縁卷之四目錄

第七回

忠臣從歸三鎌倉一
貞婦與身赴敵軍一

第八回

陷二仇家一玉琴死レ節
過二客店一倭女感レ景

月氷奇縁 卷之四

東部 曲亭馬琴著 編

第七回

忠臣 促駕歸鎌倉一
貞婦 典身赴岐州一

是の時玉琴は父母の溺死するを見て、愁傷更に遣るかたなく、共に此の河の津とならんと、汀渚の上はたかりに走りよるを、倭文しづな忙はしく抱き留め、「こは物に狂ふか、父母の顧命を何とか聞きし、少刻心を鎮めて自ら思量せよ。」といふ。膳手夫人も又諫め給はく、「若が父母已に恩愛節義の爲に死す、これ子を思ふの深きに非ずや。さしも平昔は爽利しくて、義理をよく論り得し身の、などて斯く愚かなる。只よく性命を全うして、父母の志を空しくすべからず」と宣へば、玉琴君命の重きに固辭いかな難く、暫くその死を止まりけり。倭文又いへらく、「備と吾とは元讎敵なれど、備の父二十年養育の恩ありて、既に謝するに死を以てす、且繼母の顧命最も重し、争で潘楊の好みを破らん。たゞ願ふ所速かに石見太郎を討ちて、先考尊靈に手向けんのみ。しかはあれど今仇人の所在を知らず、特に夫人邊邑に零落

し給へば、身を放にして仇を探索せ難し。他日君家の存亡を定むるのち、これを撃つとも遅からずと雖も、恨むらくは二十餘年の星霜を経て、石見が生死を知らず。加一帯が相貌を視しこと無ければ、面前これと會するとも、何を以てか手が、りとせん。よし遮英運を皇天にまかせ、夫人世に出で給ふの後まで、仇人の無事を祈るべし。と致へ諭しければ、玉琴良人の志を聞き給めて心を安くし、漸う涙を止めける。この時夜已に明け、旭日岩邊に昇りて丹景白雪に映じ、紅輝晃々として満山酔へるがごとく、十分の好景なり、倭文忽地に心づきて云く、「前夜上市の危難より、只管雪中を奔走して、夫人いと、罷病れ給はん。自家の事によりて君を苦しめ奉るは不敬なり不忠なり。早く六田に歸るべし。」と、夫妻夫人を扶け掖きて立ち歸らんとする所に、只見一帯の人馬川上を望して馳せ來る。こは敷か身方かと疑ひつゝ、稍間近くなるまゝに、眼を定めてこれを視れば、一個の武夫、身には芟鬪の環、棒搦の袴褶を裝束し、腰に金造の兩刀を跨みて馬を眞先に進め、士卒四五人をして來りしが、夫人の川上に立ち給ふを見て馬より飛び下り、即ち迎へ拜していへらく、小人は中村兵衛重頼と名乗りて、植杉式部少輔房顯の老臣たり、扱も憲忠相公滅亡の後、管領成氏その寔地を没收し給ふに、鶴が岡應神廟の神士、十紙の願狀と十領の鐵衣を進る。成氏これを見給へば、嘉吉三年より今享徳元年に至りて凡そ十年、憲忠毎年大神に請ひ給ふ所の願文たり、その畧に云く、

伏請屬關東無事、教三管領成氏、武運長久壽命延永、備仰神明衛護、仍獻甲冑一具云々。

成氏これを讀みて始めてその誠忠を感じ給ひ、忽地謠言を信じて忠臣を失ひし事を後悔ありて、憲忠の舍弟式部少輔房顯を鎌倉の執權と定め、栗地舊の如く復し與へ給ふ。茲をもて整懷一時に開けて榮達共に優れり。よみて房顯の命を受け、昔の所在を部して索ね參らざるに、この地に濟び給ふと聞き、迎へ奉らん焉來れり。と、備細しく説べ了りて房顯の書簡を進れば、夫人これを讀みて大いに悦び厚く重頼を賞し給ふ。倭文、玉琴歡喜に堪へず、雲龍の天に升る心地して、遠く鎌倉に送行り奉らん。といふ。夫人宣はく、「若曹は鎌倉没落の日より妾を扶けて艱難を共にし、誠忠更に他人に譲らず、今妾關東に歸るに及びては、房顯に執して高轍を與へ、その勳功を表はすべけれども、倭文は天を戴かざるの仇あり、又玉琴は父母新たに歿して汎瀾未だ乾かず、茲をもて從へ行かしむるに忍びず、只速かに仇を復ちて再び歸り仕へよ。妾は夫婦の爲に洗塵けて再會を待つぞ」と宣はば、夫妻は餘りの赤さに、頼りに涙に咽びけり。かくて重頼、準備の大橋に夫人を上せ參らせ、士卒前驅後從して既に鎌倉に歸り給へば、倭文玉琴四五里送り奉り、その夜六田へ歸りけるが、今年も已に暮れて享徳二年となりぬ。新玉の春立返りて孤霞家前に登え、輕風剪々として柳條を動かし、霖雨瀟々と

して殘雪を銷す。梅開いては年の新たなるを知り、鶯啼きては日の明かなるを覺ゆ。朝に愁へを抱きては花に坐しても心を慰め難く、夕に恨みを含みては月に對しても思ひを遣り難し。玉琴が父母の申陰だに終らば、速かに家を立ち去りて仇入を探索せしと、仲春の頃までは佛會追善に違なくて、早くも彌生になりぬ。まづ東國に赴くべしと已に行装を齊へんとするに、圖らずも倭文眼疾を患へて、事延延に及びぬれば、大きに焦燥ちて日々に藥劑を服るれども此の功驗も無く、卯月の初めに至りては只暗々として黒白も分ち難く、終に青盲となりぬ。かくては何れの日か仇を復いん、もし宿志を遂ぐる事なくば生きてかひ無し自殺すべしと愁へ悶ひねば、玉琴いと悲しみて、或は茶摘村の花籠に祈願し、或は吉野の藏王に歩みを運びて、只管良人の眼疾平癒を結るほか他事なし。既に彌生の時に至りて、開室煮まるが如く、倭文數日の煖熱に纏結れて餘病を生じ、二三日起き上らず、湯をもて沸くを止むる如く、搗ちて加へし疾病に、玉琴こは如何にせんと愁へ悲しぶ所に、近郷に人の媒對して活業とする老婆ありて教へて云く、平城に足立紹景といふ醫師あり、この人今の世の瓊瑤光佛にして、治疾を施す者活きまといふことなし。老婆幸ひ一面の識あれば、行きて迎へ來るべし。といふ。玉琴夫きに悦び、彼の 慶業に就きて、紹景に治療を請ふ。夫の日紹景來り、倭文が容體を診て云へらく、天れ眼疾に外感あり内毒あり、外感治し易く内毒は治し難し。不佞信是下の病症を

考ふるに、病根最も深く、よく草根木皮の及ぶ所にあらず。然れども水母の眼なきも蝦をもて眼とす、之を治せん事難きにはあらねど、只一種の藥物ありて得難きのみ。「倭文夫妻聲を等しくしていへらく、「得難き薬種とは何ぞや。「紹景云く、「白毛獼猴の心なり、是れを主薬とし、餘薬に合はせて服るなば、立地に愈えつべし。「倭文これを聞き悦びて云へらく、「小人去年上市を過りて葛師の家に白毛獼猴あるを見たり、是れ世間未曾有の物にして、主人これを愛すること兒の如し。もしこれを得ば病癒連かに治すべしや。「紹景頷きて云く、「これをだに得ば、一句許りにして愈ゆべし。只恐らくは彼の獵夫惜しみて與へざるべし。」と云ひて歸れり。夫妻膝を促せてこの事を商議するに、忽地、度婆きたりて、「紹景國手何とか宜ひし。」と問ふ。玉琴醫師の言をもて仔細に説話れば、老婆云へらく、「上市は此處より遠からず、我まづ彼處に至りてこのことを計り見るべし。」と忙はしく去りけるが、暎黄に歸り來て云へらく、「老婆蘇張が辯をもて説けども渠あへて背かず。」もし五十金を得ばこれを售るべし。」といへり。可歎かかる寒家に争で五十塊の黄金あらん、只黄なる物は田圃の菜花、圓きものは籩下の鹽鼓のみ、夫妻よく思量し給へ。」と云ひ捨てて走せ去りけり。倭文大きに望みを失ひて云へらく、「我今此の生計なく、盤纏の尙存りたるは過七の布施と病中の雜費に用出して、今は朝に覺けども夕の糧なければ、いかにぞ五十金を調へ得ん。良薬面前にありながらなほ得難し。彼の六度經に説く所の大龜

の妻屬衆の心を食らはんとせしに一般、勞して更に功なきなり」と太息きて止まず。玉琴慰めておへらく、「丈夫なでかく方便なき事を宣ふぞや、木蘭齋とかいふ花街程遠からぬと聞けば、身を煙花の婢となしても金をば調ふべし。慙心に敗意めて病を増さしめ給ふな。倭文稍沈吟していへらく、「大丈夫その癖を花街に降れ、羞しめを受けしむること豈本意ならんや。かつ親母の願命なほ耳底に止まれば、體を放ち行るに忍びず。然れども黄金調はざれば病愈えず、病愈えざれば宿志を遂げ難し、左せん右せん」と首鼠兩端に持して更に決せざるを、玉琴再三請うて典身に一決し、明日慶慶を招きてこの事を商議し、専らその信れを待つ所に、詰朝老婆前門より驟然として入り來りて云へらく、「一夫妻僉伴々々、老婆昔花街に行かんとせしに、一個の行客ありて令正を一身價百金に養へん」と宣ふ。この財主は岐西馬籠の豪家にして、近曾大和の山水を遊覽し給ふなり。縁ありてか令正の花籠明神に焼香し給ひし時闖窺たまひ、もし他の婢妾となるべき人ならば妾にせん。」とて則ち人をもて老婆にこの事を商議させ給ふ。是れ兔を狩りて虎を獲るの機伴なり。この財主もと行客の事にしあれば、明日故郷に歸り給ふ。彌行かんとならば轎子をもて迎ふべし、もし又行き給はずば速かに回報せん」と約しおきぬ。思ふに空しく苦海に墮落して、昨は平族を伴ひ今日は源姓と睡る人より、はるかに益したる幸福ならん」といふ。玉琴はその心良人の爲に黄金を調へんと思ふのみなれば、別に思

慮を用ゐるに及ばず、即ち行かんことを約しければ、老婆悦びて裳を褻け、又忙はしくまぎ去りけるが、少選ありて轎夫に一挺の轎を譲らせ、行客の從僕を伴ひ來て倭文夫妻に引合はせければ、かの僕一紙の身契を取り出し讀み聞かせて、倭文が印信を歎きせ、身價一百金を選與しける。然において玉琴辭別けんとして騎別るゝに忍びず、涙を潸然と落して云へらく、「わが身を賣らざれば病を治しがたく、病を治せんとしてこの身を賣れば又看疾する者なし、日の光やぶしわかねぞ野干玉の目さへ見えぬを、隻身となりて若し疾く愈ゆる事なくば、終に飢ゑにや臨みたまはん、是れ湯きを止めんとして飲を飲むに畏ならず」と云ひつゝも轉倒し、聲を放ちて歎きければ、老婆憐しく扶け起して云へらく、「心細き事な宜ひそ。黄金だに餘りあらば人を儲ひても事足りなん、老婆も又折々來り訪ふべし」といふ。彼の僕も又慰めて云へらく、「小人が主人は信陽第一の豪家なり、もしよく仕へて寵遇を得給はば、豈祇この百金のみならんや、更に餘分の恵みあるべし、早く泣きを止めて轎に乗り給へ」と勸む。倭文涙を止めて云く、「やと玉琴、我對夫妻前世の作業悪しければこそ、かく百折千磨を受くるなれ。もし分鏡の契り竭きすば、夫妻先聚る事もあるべし、只願わが事を懷熱みて性命を傷ふことなかられ。われ病だに愈えば行きて會ふべきぞ。」玉琴いよ、泣きて云へらく、「妾かの地に至りなば、はやく鶉音を致すべし、只日夜立望して再會を俟ち侍る。」と云ひつゝ、壁前裏より敗れし梳具匣をとりの出

して、鬚髯を將疑くる。玉琴今既に村落中に埋もれて、更に粧粉を彌さすと雖も、性格きたる顔色は、野花編に目に艶はしく村酒人を酔はしむるが如し。夫妻戀情としてなほ別る、に忍びざれば、老嫗玉琴を引き放ち、扶けて轎に扛き乗する。倭文、驚云ひ残せし事こそあれいと手して探りつ、嵐もして立ち出づるに、誤つて高縁を踏み外し、忽ち撲地仆れければ、玉琴驚きて走り出でんとするを、從僕これを押し止め、轎簾を撲裏と下せば、轎裏に一辭、噫と哭くをも管はず、遂に轎を遠き出し、足に信せて騙せ去りけり。王昭君が胡地に適し、鞞明が妻の宮裏に捕はれしも斯うぞあらめと思はれける。彼の度、妻は五七兩の辛苦錢を得て、俄に得つきたりいと悦びぬ。所謂張公酒を啜して蘇公醉ふの類なるべし。

第八回
隨二他家一玉琴死節
過二客店一倭文感二操

斯くて玉琴は轎裏に打ち上せられ只管走りけるが、忽地一軒の客店に毛れば、妾にて轎より下し、彼の玉琴を引きて行客の前に出づ。玉琴顔を擧げてその人を見るに、年紀可六旬にして眉白く、髭長く、相貌すべし國惡なり。信濃もて織りたる調の布の涼影に、鞞帯をむすび、庫右には、朱鞞の腰刀懸しけし螺鈿の刀架に掛けたり。かの人玉琴を見て大いに悦び、近く招き寄せて云へらく、お

のれ吉蘇の深山邊には住めど、昔は常に都にも交加ひて情の道も知れるものを」と、いとなめけに云ふ。玉琴は何と云ふべき言さへ無くて、淺隈の山のあさましきまで、更科川のさら／＼に思はぬ人に思はるゝは、岐岨の挂橋渡る心地して、菅の曠野の露よりも涙は袖に繁かりける。彼の人この光景を見て心の中に憤ると雖も、男女の間は威をもて挑み難ければ、只緩やかに計らふべしと、玉琴を携へて信濃へぞ歸りける。日を經て馬籠に至りその家を見れば、大塚藁を連べ閨闈陣を合はせたり。奴僕十人許り出で迎へて主人の展歸を賀す。玉琴はかかる田舎に似氣なき主人の活業、何をかするぞと疑ひ惑ひて心いよ／＼安からず。それより四五日を経て主人玉琴に調話きて云へらく、「われ頃爾が爲に萬方心廻すといへども、何の恨みありてか斯く活けみ殺しみはするぞや。既に若干の黄金をば費しながら、なほ反目にして見らる。縦ひ木價珠菩薩なりともいかで些の情なからん。汝自らよく思量せよ。」といふ。玉琴これを聞いて云へらく、「わが身いくその黄金に換へたれば、家公の心を固辭むとにはあらねど、いかにせん妾には夫あり、今止むこと無くて身を他に任せたれども、心は他に任ずること無し。女子は一庭を踐ますとかや、田刈り麻刈り柚木樵るとも厭はじ、その餘の事は宥し給へかし」と、更に従ふべき色なかりければ、主人ます／＼憤りけるが、漸怒りを藏して思へらく、渠いかに操を成るとも、恩をもてこれを挑まば、つひに志を轉じてわが心に隨ふべしと、その後は衣

服器物のたくひ、すべて婦女子の愛すべき物を與へけれども、玉琴更に獲へる色なく、手にだに取る
で只管優文が事のみ思ひ煩ひける。一日主人玉琴に問ひて、「汝鏡を愛するか。」玉琴云へらく、「鏡は
日間の具にして、女の必ず嗜み持つべきものなり、孰かこれを愛でざらん。」主人すなはち一面の鏡を
取り出して云く、「是はこれ鏡の武帝の菱花鏡にも勝れり。我これを秘藏する事久しといへども、今
汝に贈るべし。」と彼の鏡を與へければ、玉琴手に取りてこれを見るに、背面に蘭菊の模様を鑄てる丘
の兩字ありければ、初めて莞爾として、「この鏡に銘ありや。」と問ふ。主人云へらく、「之を丘と名づ
けて、その徳精鬼を銷鑿するなり。」玉琴云く、「しからは家公の名を右見太郎とは云はざるか。」主人こ
の言を聞きて、思はず手に持てる扇を取り落して云く、「汝何としてかわが名を知れる。」玉琴已に主人
の舊名を知りてければ、忽地柳眉を揚立て、星眼を睜開き、稍久しく疾視けて云く、「汝はこれ妾が丈
人の仇人なり。」汝往昔、「江州志賀に於て、丈人永原左近を殺害し、軍須財數萬金と此の寶鏡を奪ひ去
れり。」と母親臨終に語り給へり。既に汝が故をもて、わが二親も非命に死し給ふ。妾今此處に来るこ
と旨難の浮木に遇ひ優鉢羅の花を見る如し。たゞこの身翅なくして良人に告げ知らせがたきを恨むこと
敦にきて罵る。右見冷笑ひて云く、「汝蚊蚋の山を負はんより、早く心を轉じ悔ひを反して我に従ひ、
生涯歡樂を極めよ。」玉琴いよ、怒りて云く、「われ過ちて冤家の婢となれども、幸ひに身を穢さず、

いかでか共に天を戴かんや。」と云ひつゝ、鏡を抱いて外面に走り去らんとするを、石見太郎忙はしく遮り止め、「汝いかに悶くとも、大和まで百里の山河を隔てたり。われ恩をもて養へば汝かへりて、『仇なり』と罵る。これ鉦刀を銃しとして莫邪を銃しとするに同じ。もし強ひて去らんとならば、房に繫ぎてもわが心を慰むべし。」と責む。この時玉琴は隙を窺ひて逃れ去らんと思ひければ、その後は一言の間答にも及ばず、頼りに走り去らんとするを猜し、石見まづ手中の鏡を復さんとすれば、玉琴遽さじと争ひしが、遂に力敵し難きを知りて、彼の明鏡を高くさし上げ、庭の井欄へ投げ入れたり。石見勃然として大いに怒り、忽ち玉琴が髻を掴みて膝下に引き布き、眼を瞋らして云へらく、「長舌の愚婦などて斯くは強顔き。風は花を散らすに心無し、花衰へて風に向ふ。われまづその舌を斷たずんばいかにぞこの熱腸を冷ますべき。」と明晃々たる腰刀を引き抜き、玉琴を引き起して、その刃を面前に衝き附けていはく、「汝いよ／＼従ふまじきや。」玉琴雙手をもてその刃を掴みて云く、「生きて仇を復ふこと能はず、死して鬼となりて怨みを雪がん。」その言いまだ訖らざるに、石見怒りて刀を引けば、玉琴が千の指刃に従ひてばら／＼と墮つ。時に前山に一曲の山歌牧笛聞えて、涼風颯々と春かにその曲節を吹き送る。石見玉琴が隻手血に染みて悶え苦しむを見て、刀をもてその頬を衝き動かして云く、「雉は其の雌を慕ひて野に焼け死し、鳥は口の悪きに憎まる。汝指なくて猶争はんとするや、もし

走らんとならばその足を削るべし。又罵らんとならばその舌を齧つべし。」と云ひつゝ、刀を横さまにし、口中に刺し貫かんとするを、玉琴口をもて刀尖を疑と嚼はゆれば、鮮血口中より流れ出でて目も當てられぬ分對なり。石見怒りて刺さんとすれども、玉琴更に刀を放さず、忽ち刀尖二寸許り嚼み折りければ、石見終に玉琴が首を打ち落し、手下の小賊海道二、夜叉五郎を呼びて云へらく、「吾二十年来十度居を下へ十たび名を更ふるといへども、いまだかかる奇事に逢はず、永くこの地に止まるべからず。」と云うて二賊に命じ、玉琴が屍を楊柳の下に埋めさせ、人を井に入れて鏡を携求させけれども、水深くして取り得ざれば、所爲なく俄頃に家財をとり收め、その夜何地とも無く出で去りけり。嗚呼、琴身を捨てて良人の難病を救ひ、遂に仇家に陥りて仇人の手に死す。楚の申包胥が、天定まりて人に勝ち、人定まりて天に勝つ。」と云ひしも、今玉琴が身の上によと、田夫山妻も皆これが爲に袂を濡らしけり。却も倭文は五十金をもてかの白毛無敵を買ひとり、これを結景に投じて樂刑を調へ、すなはちこれを服るるに、不日して兩眼明らけく、七月の下旬に至りて全く快かりければ、まづ馬籠に行きて玉琴に告げ知らせばやと、彼の度要に行客の姓氏を問へば、元來旅客の事なるをもち、老婆も一詳かに知らず。」と答ふ、こゝに於て倭文心惑ひ、玉琴すでに岐嶺に赴きてより五七十日に及べども、一度の信耗無きは如何にぞと、一人躊躇ひて、又暫く家に止まり、その音耗を得つに、八月に

及べどもたえて一紙の鴈書も來ること無ければ、今はいつまでか期すべきと、遂に啓行して岐祖に赴き五七日經て、馬籠に至り、彼か是かと尋ぬれども、それぞと知れる者も無く、あまりに索めかねて中途に日は暮しつ、漸飢ゑに躡みしが、只見山間に一軒の家あり。衡門半ば開きて裏面に燈の光見えければ、走り入りて呼門するに、屋は大いなれども寂寥として人ありとも見えす、もし内房にや在るらんと、庭ある方に行きて見れば、月光門下に滿ちて前面に子舍あり、彼處に人影こそ見ゆれと、なほ進み寄りて見れば、玉琴白團扇を採りて一人前縁に立てり。倭文十二分の嬉しさに夢現とも辨へず、「倭文こそ來れり。」といへば、玉琴良人の聲を聞きて、「号嬉し、よくぞ來り給へるものかな。」と云ひつ、走り寄りて迷膝き、左右言も無くして數行の涙に咽びけり。少選して倭文云へらく、「爾に別れてより彼の薬物を調へてこれを服るしに、文月下旬に至りては眼疾已に平愈せり。よりてこの事を知らせまほしく思へども、袂を別ちて後、黄犬の音も無く所在も詳かならねば所爲なく、暫く響音を俟ちしかど、あまりに待ち侘びて尋ね來りしも、分鏡の契り盡きずして、今宵圖らずも通り會ふことの嬉しきよ。」といふ。玉琴もや、涙を止めて云へらく、「妾も疾く音耗せまほしく思ひしが、主人更にこれを許さず、まづ云ふべきはこの家の主人は石見なり。」と、「や。」と云ひつ、刀を提げて立ち上らんとする裳を引きとめ、「猶それにこそ説話はあれ、渠いまは爰に在らず、武藏國新島村と云ふに在りて、

かりくこへ通ひ来るなり。今夕は家僕も紅坂に行きて幸ひ人もあらねば、夜と共に語るべし」と伴ひて臥房に入りぬ。倭文寐もやらず、仇人の年紀、相貌を尋ね問へば、玉琴簡様々々如此々を備細告げ知らす。倭文欣然として云へらく、「既に石見が形状を聞きつ、亦その所在を知れり、今は少刻も躊躇すべからず。明朝速かに起行して新島に至るべし」と、心殊更に勇めり。玉琴又告げて云く、「石見は常に十餘人の小賊を従へて嚴備厳し、性急りて親らし給ふな。彼の女丘の籠も我が護し持てるを見たり。遠からず郎が手にこそ返らぬ、妾頃此處に在りて身を藏さず、疾くにも絶えん魂の緒の心細くもながらへける、そも幾その辛苦とか思ひ給ふか」と云ひつゝ、も打ち涙ぐめり。倭文深くその苦節を感激し、或は悲しみ或は喜び、會話説き明さずして早晚秋の夜更けたり。唐の李商隱夜半の作あり、いひ得て好し。

五更三點萬家眠
鬪鼠上堂蝙蝠出

露欲爲霜月暗煙
玉琴時動倚窗絃

倭文は長途の寒れにや思はず日睡みけるか、忽地涼風扇を犯せば、驚き覺めて左右を見るに、夜は空しく明けて、玉琴は傍に在らず。「こは何地行きけん」と起き出でて四圍を視れば、家はまだ新しけれど人の住めるとも見えず、席薦さへ無くて鼠糞散り亂れ、簀には蠅絲盡終りし空房に獨り臥

したりしかば、只惘然と呆れはて、なほ疑ひつゝも庭前に立ち出で見れば、楊柳の下の土、少し高き所に一張の短冊ありて朝露に添濡れたり。何心なく取りてこれを見るに、玉琴が手にて一首の和歌を記せり。その歌に云く

山鶏の尾上に遠き秋の月さてや鏡の影隔つらむ

倭文これを吟じて大いに悲しみて云く、「玉琴玄丘の鏡を復さんとして、仇人の爲に殺されしこと疑ふべからず。我にこの事を告げんため幽魂假に形を現はし、なほその壘を知らせんとて、此處に一首の歌を止めて、分鏡の契り空しきを歎く。嗚乎節なるかな義なるかな」と、數行の感涙禁ずること能はず、少選してや、心を鎮め、篋の下に唾きかゝりし菊の花を手折りて壘の左右に挿み、墨野をとり出して彼の短冊の背に、

妹山の岩根におけるわれをかも知らずて妹が待ちつゝあらむ

とぞ書きつけける。是れは拾遺集に載せたる人丸の詠歌なりしを、時にとりてかく思ひよせたるなるべし。斯くて短冊を樹下に倚せかけて神牌とし、瓦獸の落ち碎けたるを拾ひとりて闌伽桶に換へ、水を汲まんとて井欄の上に立ちよりて瓶索を引くに、怪しむべし兎々たる一面の明鏡木髻に懸りて上れり。驚きてこれを取りあけ見れば、昔面に玄丘の兩字あり、倭文悦びに堪へず、袖をもて鏡を拭ひ、

自らその面を照らし亡語ちて云く「鏡と人と共に出づる、鏡かへりて人歸らず、復婦の羞なし、空しく明月の輝を留むと、陳の德譚が恨みしもうべなり。」これをもてふた、び教を断すれば、我に鏡を得させん趣なり。町玉琴、身死して猶吾を助く、われ立地に石見を討ちてその冤魂を慰すべし」と、樹下に向ひて合掌し「賢妻の靈魂速かに天界に生ぜよ」と、少刻酒を酌んで拜し了り、かの明鏡と短冊をとりて懐に挟め、猛然としていへらく「石見は足利千鈞の仇なり。縦ひ重虎にして復ありともよく逃るゝことを得んや」と、直に門外に走り出で、東を望みて馳せ去りけり。今この地を喚びて妻鏡といふこと、後人もしくは玉琴が事をとりに名づけたるか。又一説にこの地は治承、養和の年間、木曾義仲屬城の古迹なり。昔義仲愛するところの鞍馬、大島の反折橋より墮ちて斃す、よりにこの地二里の間を埋馬と呼びけるを、後に倭文が妻此處に塙はるゝをもち、茶田より西を埋馬嶺とし、車を籠妻嶺と喚ぶといふ。亦籠妻より數町東の街道に誓あり、懸か誓と喚び做す。倭文この所に來りて數その妻を哀悼し、少刻誓の前に立ちて頼りに繫繫せしより誓が誓の名ありといふ。夫れ陽人は事を告ぐるに語を以てし、陰東は之に告ぐるに夢を以てす。その事妄言に近しといへども、この人にしてこの奇事あり、亦何ぞ疑はん、其行あり證とす。

月暗秋窗 蕉葉橫 破徹風透 悲幽情

遠逢^{とほくこが、にあつて}客^{ゆめ}夢^{のこゑとこゝろ}殘處

絃^{げん}絶^{たつて}玉^{たま}琴^{きん}聞^{きこ}二^い聲^{こゑ}

月氷奇緣卷之五日錄

第九回

壯士さうし 听しん 謝しゃ 恩おん
孝子かうし 占夢せんむ 復ふ 讎しん

第十回

陰陽いんやう 和合わがわ 熊谷くまがや 坂さか
劍鏡けんきやう 奇遇きぐう 馬蹄ばてい 詭嶺きりやう

月氷奇縁 卷之五

東都 曲亭馬琴 著 編

第九回

壯士 听侍 謝恩

孝子 占夢 復讐

熊谷倭文は馬籠の山亭を走り出で、足に任せて路を急ぎければ、八月二十六日に武州深谷といふ孤村に著きぬ。此處より新島村へは龍原、新堀を経て二里の行程を隔てたれば、すなはち深谷の客店に宿を求め、次の日新島に至りて、潛かに石見太郎が所在を尋ね問ふと雖も、現至る所名を更へ形を變ずるをもちて更に知る者なし。これより兩三日高柳、熊谷の邊を徘徊して仇人を探索ぬるに、未だその便りを得ず、倭文大いに望みを失ひ、所爲なく亦寥々と深谷の客店に立ち歸りけるが、先に一個の行客來りて鄰棚にあり。倭文は紙門一重隔てて一室に引き籠り、獨り燈火に對ひて歎息し、仇人の所在知れざるを怨み、且玉琴が枉死を憐み、心中鬱々と樂しまず、遂に肘を枕として少刻目睡みける夢中に、人ありて告げて云く、備仇人の所在知れざるを歎く事なかれ、遠からずして宿志を遂ぐべ

きぞと告ぐると思へば驚き覺めぬ。倭文夢裏に示現を得て大きに悦び、起き上りて猶この事を判するに、遠寺の鐘聲かすかに聞ゆ。時に鄰村の行客聲高やかに詩を吟して云く、

一個蒲團一個鍋 常年不怕二賊來 多一

山前財主二更夜 尙一睡時便打鐘

倭文これを聞いて思へらく、この詩は我去ぬる葦上市の蕪夫の家に憩ひし時、屋柱に題せし漫歌の詩なり、これを吟するもの抑何人ぞやと疑ひて、竊かに綾糸の間より調査れば、年才一十四五の壯俊、蒲團の上に夷語せり。倭文これを見て忽地曉り、上市の老翁、一見一人持てり。と云ひしが、若しくはその流子ものによつと獨語ちて、已に立ち出で詩を吟するの緣故を問ひ詰めん時、外面より一人來る者あり、彼の行客問うて云へらく、「何人の便宜は甚疾、一夜の人云く、「大哥覺び給へ、石見太郎が所在を知り得たり、運明日箕田村の八幡山に遊ぶ、その歸路を窺ひてこれを熊谷吏に討つべし」と行客云く、「是れ尤もよしと雖も、今一人を抜きぬれば、縋りに手を下し難し。彼の人これを聞き沈吟す。倭文二人の説話を聞きて大いに怪しむ、「石見はこれわがために千鈞の難なり。運等何人なれば石見を仇人とは云ふや」と泣きつ、猛然と綾隔を押し開き、二人が中間に坐して云へらく、「兩位の貴客怪しむ給ひそ、小人もここに宿借る旅客なり。今彼首にありて二萬の話を聞けば、石見をもちて仇とし

給ふ。抑石見はわが父及び妻の仇人なり。二雋は又石見に何の室みかある。彼の二人聲を齊くして云く、「石見は我們的の爲には古主の仇なり。貴客石見を仇とし給ふは永原家の郎君にはあらずや。」倭文云へらく、「すなはち左近が兒にして熊谷倭文と名告る者これなり。」二人これを聞くより忽ち席を謙り、頓首して云へらく、「僕等は先君の家吏上市丹治が頑兒にして、兄を丹藏といひ弟を丹平といふ。愚父丹治往昔江州に在りし時、山鷄の故をもて家公の命せに違ひ、その夜逃奔して故郷上市村に歸りて獵戸を業とす。その後江州の風聲を聞くに、家公は賊の爲に死され給ひ、總室幼君四方八落に離散し給ひ、家兄喜内も白河の山中に於て、山客に殺されしと承り、老父大いに驚き、「常に舊恩を報すべきはこの時なり。」と、直に大和を啓行し、幼君の所在を尋ね奉らんとせしに、圖らずも風濕を患みてその事かなはず、つひに壁となりて、徒らに光陰を送れり。わが兄弟早く母に後れ艱難の中に人となる。老父常に兄弟に教へて云く、「われ久しく壁となりて古主に仕ふること能はず、汝等その所在を尋ねまらせ、われに代りて忠鯁を竭すべし。」といへり。しかるに去ぬる六月、六田の處婆來りて、「家狙を買はん。」といふ。僕戯れに、「五十金を得ばこれを賣るべし。」といひしが、兩三日を経て彼の老婆金を携へ來り、獼猴を買ひもて去く。老父その金を納れたる搭膊を見て怪しみて云へらく、「この裂れは古里國の西洋布にして、往昔南蠻山龜を獻りし時、これをもて笈の表裝とす。是れ

世に稀なる物なり。この裂れを藏せる人、恐らく古主の郎君ならであるべからず。と、乃ち老婆に騙
猴を買ふ人の年庚、相貌を問へば、老婆備細しくこれを説く。こゝに於て老父いよ／＼驚き、その夜
僕等に語りていはく、「六田の退糧人は古主の郎君なるべし。われ熟考ふるに、萬年一個の行客、兩
個の婦人を携へ來てわが家に憩ひ、「六田に知己あり」と云ひしが、われ思ひ誤ちたる事ありて、中夜
その人々を走らせき。今日度婆が説くところ、形容その人と相肖たり。汝等明日六田に至り、その人
いよ／＼郎君に極まらばこの金を返錦し、兄弟共に仕へて先君の仇を復のべし。」と命ず。僕等これを
聞きて初めて驚き、明日六田に至らんとするその夜、老父頼りに病みて湯薬口に入らず、二十日許の
にして身まかりぬ。兄弟哀悼に堪へず、大歎息果てて後、六田に行きて君を訪へば、鄰人教へて「昨
信濃へ行くとして起程し給へり」といふ。僕等その不遇を怨み、直に蹄を慕ひて信州に至る所に、岐祖
の馬籠にして途に一個の女兒に逢ふ。彼の女兒云へらく、「二公古主に逢はんとならば、はやく武州深
谷に行くべし。且古主の仇人を石見太郎といふ。渠いま新島村にあり。まづ彼處に至らば石見が所在
を尋ねよ。仇人の便宜を得るの日は古主に會ふべし。」と教ふ。僕等怪しみつゝ、再びその名を問はん
とするに、忽ちその形を見ず。こゝにおいて神明の郷導し給ふことを曉りて、昨々この地に來りて、
まづ弟丹平を新島村に行りて潛かに石見が所在を探索させ、僕は専ら郎君を尋ね奉る。然れども君

が臉を見知らねば、去ぬる年柱に題し給ひし詩を吟じて、暗に手掛りとせしに、今夕果して仇人の所在を知り、又幸ひに郎君に遇ひ奉る。是れ全く神の衛護によるなるべし。」と、兄弟備細に説き了りて、丹藏皮腰帯より圓金五十塊とり出してこれを倭文に返しけり。倭文倩山を聞きて長嘆し、「中途兄弟を導きたる者は亡妻玉琴が幽魂なるべし。」といひて、和平、粗女が吉野川に投みし事、及び玉琴が幽魂に會ひて立丘の鏡を得たりしこと、一五一十説話れば、丹藏、丹平或は怒り或は駭きて云へらく、「泪娘々數年六田に居給ひしを、老父咫尺の間に在りながらこれを知らず、是れ蹙へて家にのみ籠り居し故なり。」と頻りにこれを後悔す。倭文儼然として云く、「われ聞く、至性は金を辟くと、われ備の家の獼猴を得て難疾立地に愈えたり、豈五十金を惜しまんや、只心よく納めよ。」再び金を返しけれども、兄弟更にこれを受けずしていへらく、「僕等いまだす功なし、いかにぞ賞祿にあづからん、強ひて返し給はば此の處より辭し去るべし。」といへば、倭文爲何なくこれを收めて云く、「若曹は實に天下の義夫なり、しばらくその意に従ふべし。」他日われもし志を得ば、十倍してこれを報いん。夫れ易にいはいく、二人心を同じうすればその利金を斷つと、これ二人心を同じうして事をなせば利順ならずといふことなく、石の堅きをもよく破り金の堅きをもよく斷つと云ふ。われいま左右の翼を得たり。これ全く丹治が、誠忠によるものなり。」と厚く兄弟を賞して、その夜主從仇人を討つべき謀を

定め、明日早天に丹平を新島村に行りて仇人の信を聞き定めさせ、今夜熊谷坂に於てこれを討つべし」と、已にその準備をなす。この日多く夏布を買ひてこれを裁縫てさせ、丹藏兄弟は鶴戸を業として常に竹槍を使ひ得たりければ、濟かに市中に出でて標槍を買ひ來り、過午に至りて倭文は丹藏を將て客店を立ち出で、既に熊谷に至るころ、や、黄昏に及びけり。客店の男女その故を知らず、この光景を見て大いに怪しめり。抑武藏國熊谷坡は東西四里の曠野にして、田畝南北に連なり、廣落五土に隔たり、行樹は旅客を導き石沓は馬蹄を溼す。こゝをもちて夜は人迹を絶ちて行李も過る事なし。倭文は丹藏と共に吹上村の樹下に座を占め、専ら丹平が信をまつに、日すでに暮れて東西を分たす。時に丹平蕉火をうち振り走り來て云へらく、「仇人今箕田をたちて家に歸る。渠徹備徹にして十人の小賊を従へたり。その中白髮長髯にして面色赤く皁夾服を被たる者これ石見太郎なり。衆賊は僕兄弟これを討つべし、郎君には只管石見を遮り留めて走らせ給ふべからず」といふ。倭文雀躍していへらく、「往時正長元年八月晦日わが父石見の爲に討たれ給ひ、今享徳二年に至りて茲に二十六年。今日は是れ先考の亡月忌日なり、この日宿志を遂ぐることに皇天の應報あるに似たり、特にこの地は熊谷直實の古里にして坡を熊谷と喚び做す。わが姓も又熊谷、正に是れ仇を討つべき祥瑞に違へり。速かに準備せよ」と坡の草に火をかけて篝火とし、三人身には暴布の單衣を被て一條の交結帯を絞び、手

足に袖套、襦袴を穿けて紅き帕首を齧めたり。主従已に装束して暗令を定め、倭文は羽佳の劍を探りて坡の中央に立てば、丹藏は槍を引き提灯、丹平は朴刀を掛けて左右に従ひ、來遲しと待ち居たり。時に東の坡より提灯の光隠々として來るものあり、是れ石見太郎なり。十人の小賊等前後を守りて、既に面前に近づけば、倭文途を遮りて云く、「賊魁 石見太郎わが言を聞け、往昔正長元年今月今日汝が爲に討たれたる永原左近が兒源五郎、令姓氏を更めて熊谷倭文と名乗れり。近曾汝が手に死したるわが妻玉琴が苦節の郷導によりて此處に俟つこと久し。汝已に逃るゝに踏なきことを知らば速かに勝負せよ」といふ。石見その多勢ならざるを侮り冷笑ひて云く、「黄口の孺子我をもて仇とするは、蟻蜂の蠶車に向ひ、夏の蟲の火に遭ぶなり。既に足利將軍といへどもわれを征すること能はず、汝身の分限を知らず來りて虎髯をひかんとす、あれ首を刎ねよ」と下知すれば、石見が傍にありける海道二、腰刀を抜きて切りてかゝるを、丹藏槍をもて迎へ戦ふ。衆賊これを見て三人をとり圍み、洩らさじと挑み戦へば、丹平右に當り左に挂へ、直に小賊三人を砍り伏せたり。倭文は石見と戦ふこと十餘合にしていまだ勝負を決せず。このとき薄火既に滅えて四面暗夜となりければ、衆皆刀の閃くをすかし見て徒らに空を切り、賊徒交撃して傷く者多かりける。時に坡の兩邊に數百の松明にはかに爆と連なり擧り、人東西に徘徊して、暗に夜戦を助くるに似たり。丹藏は火の光につきて再び海道二と戦

ひ、遂に槍をとり伸べて海道二を刺し殺す所に、夜叉五郎走り来て丹藏を斬らんとす。丹藏忙はしく
迂へ戦はんとして、誤ちて坡を踏みはづし水田の中に轉び墜つ。夜叉五郎これを見て坡を飛び下り、
丹藏を砍らんとするとき、丹平助け来て、夜叉五郎をたゞ一刀に砍り殺し、槍の竿を拿もて前に引け
ば、丹藏槍に携りて水田より立ち出づるに、全身清凍れとなりて恰も田鼠の漕ぎを渉るに似たり。茲
に於て丹藏倭文が事を問へば、丹平いへらく、「鬪に火の滅えたる時郎君を見失へり。丹藏大きに驚き
て再び坡に上り、兄弟西をさして馳せ行きけり。斯くて倭文は行樹下において石見と戦ふこと五十
餘合、時に倭文誤ちて路上の石に跌き、忽ち撲地と仆れければ、石見走りかゝり刀を揚げて切らんと
するを、倭文臥しながらその足を切り拂へば、石見刃にしたがひて礮と跌ぶを、倭文身を蹴して起
き上り、肩尖より臍をかけ切りて兩段となす。石見は常に鍵條衣を被て敵を防ぐの準備とせしが、今
倭文が一刀に兩段となること、羽佐の寶劍にあらざばいかでその堅きを破るべき。倭文すなはち石見
が首をとりて立ち上れば、丹藏兄弟中井の方より走り來り、この光景を見て大いに驚び、主従たがひ
にその意なきを祝しけり。この時小賊等悉く討たれて更に敵する者なかりければ、倭文仇人の袖を
斷離りてその首を裏へ、遂に三人西を望して走せ去りけり。

第十回

陰陽和合熊谷坡
 劍鏡奇過馬籠嶺

斯くて倭文は丹藏、丹平と共に路を走ること三里許り、已に熊谷寺の邊に至る頃、夜は尙二更の左側にして、一軒の酒樓店上に一個の方燈を掛けて、清禁貨食の文字を記し、又別に兩個の招牌を掲げ出したる聯句を録したり。倭文首を回らしてこれを見れば、

有レ酒如レ線過レ對則見
さけありいとどろのごとくしやくにあへはすなほちあらはる

有レ餅如レ月過レ食則缺
もちありつきのごとくしよくにあへはすなほちかく

とぞ書きたりける。是れすなほち楊大年と丁公の聯句なり。倭文これを讀みて、この店酒を賣り餅を濁ぐことを知りければ、三人身を轉して裏面に走り入れれば、鬪宅の男女、倭文等が衣服の血に染みたるに驚き怖れ、衆皆外面に逃げ去りけり。丹藏これを見て呵々と笑ひ、「渠等吾儕の異形なるにおそれ、賊なりと思ひつらん。郎君も定めて亂急給はめ、丹平酒を持ち來れ」と云うて自ら地爐に柴を折り焚きつ、濡れたる衣服を乾かせば、丹平酒を變めて倭文に勸め、兄弟も又飽くまで喫す。倭文はその性酒を嗜まざりければ、衣を更へんとて内房に行きて見るに、前面に庭あり、蕉葉破れて紙窗寒

く、闇叢集いて莎庭深し。時に疎林の中に玉響聞えて奇かに看經の聲す。倭文思へらく、「前面の蘭若
は熊谷寺なるべし、往昔文治年間、熊谷直實、久下直方と封疆論して浮世を觀じ、名利を脱離して身
を釋門に投じ、終にこの寺を創むとかや。或は蓮生は直實ならんか。」と亡語ちつ、懷古の兩情頻りに
して、庭上を徘徊し思はず數十歩進み行けば、この所熊谷寺の墓門に通ず。化臺上を積みて妖折を埋
み、石鱗石を累ねて蔭翳を成る。茲において頻りに父母、玉琴が事を思ひて千百の涙禁すること能は
ず。すなはち石佛を拊して云へらく、「父母我を生むといへども孝を享くるの日なく、玉琴我と苦辛を
共にして歡樂を共にせず、夫れ死亡は老少を論ずること能はず、縱ひ千年鐵門の限ありとも、終に
一個の土銀頭となること皆斯くの如し。」と身を歎ちてなほ望羊みけるが、豹脚蚊頻りに身を刺しけれ
ば、忽地心つきて立ち歸らんとする時、隱々として白光日に遮る。「怪しや。」と熟視れば、一個の
女子綺素夾服を被て飄々と來れるなりけり。只烏暗くして何人なる事を知らず、近くなるまゝに思は
ず交面はすれば是れ亡妻玉琴なり。倭文哀悼しみに堪へず、「わが妻などて下土には歸らず、なほ火
宅に迷ひ來りたる。我今々石見太郎を討ちて宿志を遂げたり、今は怨みもあらじ、只速かに天界に生
じ給へ。」と云ひつゝ、口中頻りに佛名を唱ふ。玉琴は良人の聲を聞くよりも、身を石塔に倚せかけ
只管派に咽びければ、倭文いよ／＼悲しみて遂に一巻の提婆品を閱讀す。少選して玉琴いへらく、「郎

に別れしより前面なる酒樓に來りて歌妓となり、酒客の席に備はれて、憂きを常なる生計も、わが身のことは厭ふに足らず、只郎が事おほつかなかく、つひに圖らず病に染みぬ。その精舎は連生法師基を開きし靈場と聞けば、病苦を忍びて夜々佛に參し、花を捧げ香をすゝめ、郎が難疾平癒して宿志を遂げ給はんことを祈り奉りし結願の今夕にあたり、郎には眼病疾く愈えて仇人を討ち給ひ、圖らずもめぐり會ひし嬉しさよし。さるを妾をもて下里人とし給ふは、郎が心に秋たちて身を脱蟬の客氣にや。』といと恨みて聞ゆ。倭文さらに曉り得ずして云へらく、『われ岐岨の馬籠にして抵日備の幽魂と話を接し、女丘の鏡を拾ひ得て仇人の所在を知る。記念の短冊こゝに在り、且わが僕丹藏、丹平といふもの備の嚮導を得てわれに會す。豈世間二人の玉琴あらん。もしその幽魂にあらざば狐狸のわれを魅すなるべし。』と、遂に疑ひを抱きて決する事能はず。玉琴これを聞きて思はず衣襟上生冷氣として云へらく、『妾六月六日より轎子に乗りてゆく中途、夢ともわかず一個の老翁來りて云く、『汝馬籠に至らば性命危し、我と共に來れ。』と云うて轎子より出し、手を携へて行くと思へばこの地に來れり。未だ嘗て馬籠に行きしこと無し。』といふ。倭文ますます心疑ひ、『こゝは事を論ずるの地にあらず、われとともに來るべし。』と夫妻酒樓に立ち歸る。この時丹藏、丹平はなほ酒を飲み居たりしが、少刻倭文が見えざるを怪しみけるところに、倭文は玉琴を將て歸り來り、委しく前事を説語れば、兄弟これを

聞きて半信半疑し、さらには是非を辨ずること能はず、倭文疑心なほはれず、慌しく懷包紙を開き、馬籠にて得たりし短冊を見るに、これ空しき白紙にして、みづから書きし妹山の歌のみ背面に尙存りければ、こゝに至りて始めて曉りて云へらく、「わが夫妻危難に逢ふこと數回なりといへども、みな幸ひにして免れたり。既に今宵仇人を討つの時、闇夜たよりを得ざりしに、四下あやしきに鬼火おこりて、これを祓く。是れ全く神明の我を祓け給ふなるべし。」と云へば、衆皆皇天の應報あることを感激せり。この時酒家の主人はひとり家に残り止まり、廚下くりやのもとに隠れ居たりしが、四人の説話を聞きて鈍々と這ひ出でて云へらく、「小人はこゝの主人なり、却も去ぬる六月、一個の老翁この婦人を將て來て云く、「この女兒琴道を善くす。暫く汝が家に留めよ。八月晦日に至らばその夫こゝに過らん、その時夫に返すべし。」と云つて見えす。小人甚だ怪しき思ふといへども爲何なく、すなはち家に留む。今夕果してその言の如し。」と語る。その事符合するをもて、倭文ますく、神の祐たすけを感佩し悦びて云へらく、「われは植杉憲忠の家士熊谷俊文といふ者なり、今夜熊谷坂において父の仇石見太郎を討てり。この石見は賊魁にして官にも探索ね給ふと聞く、他日和縣わが事を問はば姓名を道すべし。荆妻暫く爾が養育に逢ふ、是れ又一奇縁なり。吾們これより江州に赴けば、今夜はこゝに宿すべし、是れ聊が荆婦が病中の經用を測するなり。」と圓金二十塊とり出して與へければ、主人大きに悦び、家族を呼び

來て俄に酒食を設け、萬方四人を饗しけり。曉天におよびて倭文夫妻少刻目睡みけるに、一個の美人頭に妙常冠を戴き、身に文縠の華袿を被て、蛾眉人を移し、蓮步穠郁として夫妻の枕上に立ち、鶯音をひらきて云へらく、「われは是れ志賀山中に千年を経る白狐なり。往時正長元年わが二千五百の眷屬、三十和平に助けらる。われ一度澤枯の恩を謝せんとすれども、いかにせん和平は隱隱の奸賊にして福を降しがたし、こゝをもてわれ暗に爾等が衛護神となりてその危難を救ふこと數回、嚮に老翁と變じて玉琴をこの地に送り來りしはわが夫なり。われ又假に玉琴となり石見が爲に殺されたりと見せて彼を誑り、又その梅魂と變じて爾に明鏡を授けて仇人の所在を告げ知らせ、或は丹藏、丹平が嚮導となり、或は暗夜に火を擧げて讎を討つの扶けとせり。倭文夢裏に問うて云へらく、「白狐わが夫妻を守りて危難を救ひ給はること感ずるに堪へたり。只疑ふ女丘の鏡はその徳妖魔を銷鏢す、しかるに明鏡、寶劍に觸るゝといへども、その本身をあらはさざること甚麼。」白狐云く、「愚かや、凡そ劍鏡を怕るゝものは鬼魅、野狐の屬なり。われ千餘年を経て已に神通を得たり、何ぞや明鏡を怕るべき。往古金華の神劍と鏡を怕れず、その事宋人の小説にも云へり。或は搜神記に載する所の千年の老狐、張茂先に戯れ、或は太平廣記に説くところの老狸董仲舒を試むなど、此等はみな人間に化す妖精なりと雖もなほ劍鏡を懼れず。聞かずや本朝一條帝の在位、靈狐宗近を助けて雄劍を作り、遂に三條

功鍛冶の號を止む。なほ疑はば馬籠の山亭にきたりて楊柳の下を見よ。というて忽地金光を放ち、西をさしてぞ飛び去りける。これ南柯の一夢なり。夫妻覺めてのち丹藏兄弟に説話れば、二人深く靈狐の神通を讚美せり。この時すでに夜向明とすれば、四人遂に酒家を立ち出で、路を急ぐこと數日、九月九日馬籠の山亭を過りて楊柳の下を見れば、鶺鴒に倭文が插したりし菊おのづから根を生じ、數莖の蘭菊爛漫と咲き亂れ、樹下に一つの穴ありけるが、白狐たちまち穴口にあらはれ出で、再三倭文を顧みつ、再び穴に置れて見えす。衆皆これを見て感涙を止めかね、すなはち樹下に額拜きて靈狐の宿徳を謝し、遂に山亭を出で去りけり。後人靈狐を讚する句あり、要を摘みてこゝに記す。

穴居知雨

狗齋若神

謝人鹿覆

稱首丘仁

今妻籠の東、野頭兜觀音の間に和合といふ村あり。倭文この地にして疑心を散じ夫妻再び和合せしより名づくといふ。又和合に酒店ありて美酒を醸す、その名高し。是れ玉琴一口酒家に身を寄せたる餘波なりと云へり。斯くて倭文夫妻は九月十三日江州志賀に至り、孝妣の墓を尋ねるに志賀の外城に出あり、山の半腹に三基の墳墓あり、一は先妣唐衣の墓、一は侍兒津瀧の墓なり。先考左近が墓はその中央に在りて圓月大阿居士の六字を刻し、星霜既に二十餘年を経で、石は稜々として野草に埋み、墓誌泯滅して菴苔生す。倭文すなはち石見が首級を墓前に供し、再拜して云へらく、「不肖の男怨敵石

見太郎を討ちて尊靈を慰し奉る。乞ひ願はくは憤りを解き、電みを散じて天界に生じ給へ。」と拜しをはれば、玉琴、丹藏兄弟も共に墳墓に謁す。こゝに於て懐古の哀情頓りにして、少刻涙に朝びけり。その後倭文墓の左邊を見るに、碑ありて偶を讀みつけたり。石面青苔生じて、僅かに正長元年九月某日華老師遺五の數箇字見ゆ。倭文書を拂ひ文字を携りてその碑を讀むに、

鐵鏹辭詞 金剛沒地 奇鳥雙飛 靈獸走隱

不夫不見 爲驢爲牡 幹鹿二囚 二物自至

菊逢重陽 丹々是華 顏見因緣 件々存字

倭文讀了り歎じて云く、枯華老師道高博識、二十六年前すでに未來を説き給ふ。鐵鏹を辭すとば、鐵鏹は香の土文が古事、寶劍の異名、是れ寶劍家を去るなり。金剛地に没すとは、金剛は鏡の異名、寶鏡石見に偷み去らるゝを云ふ。奇鳥雙飛とは、山鳥の死するをしめし、靈獸隱を走るとは、白狐の難をすくふを説く。夫にあらす見にあらすとは、和平、耐女とわが夫妻のことなり。驢となく鹿となるといふも、假父和平は知りてわが父の驢、玉琴が死せすしてこゝに牡となるを云ふか。二囚を解脱して二物おのべから至るとは、和平自刃し石見首を授けて、鏡と劍とふたゝび合ふことを表示す。菊は重陽に逢うて丹々これ華まるとは、われ後に馬鏡を過りしは九月九口にして、丹藏、丹平が奇遇

を説き給ふなり。是れをもち思ふに、わがこの劍を引佐と號く、羽軍は即ち罷なり。又鏡を丘と喚ぶ。宣室志に狐一名は立丘校尉、すなはち立丘は狐なり。老師鏡と狐と蟹の四種をもち、わが生涯の吉凶禍福を論じ給ふなり。と仔細に傳の心を説き示せば、衆皆因果の免れ難きを曉りて、老師の權智无量の方便を讚美せり。この時性々木高員朝臣は壽算既に八旬に及び、志賀の屋敷に居給ひければ、倭文營に登りて、石見太郎を討ちしことを公ふ。高員懼びて宣はく、石見は賊魁にして即ち天下の罪人なり早く殺首すべし。と武夫に命じて大津の申明亭にかけさせらる。この高員、倭文を召して宣はく、爾が父左近はわが氏族たり。爾今より我に仕へよ。倭文謹みて云へらく、臣稚きより藤形憲忠に仕へて主恩深し。爾を復ゆるの後一度歸り仕へんと約せり、是をもち尊命に應じ難し、後年もし兒學たば、君が馬前の卒となして萬恩を謝し奉らべし。と言しければ、高員その義に仗るを感じて留め給はす。これに金帛を賜うてその純孝を賞したまへば、倭文恩惠を拜謝し、遂に、玉琴母藏兄弟を領て鎌倉に歸りける。時に管領成氏、賢弱多病によつて總州古河に隱居し、藤形式部少輔房顯及び藤形治部大輔持朝に管領を譲り給ふ。これを扇谷、山内の二家と號し、關東の兩管領と稱す。倭文は鎌倉に歸りて憲忠の後室に拜滿し、再び房顯に仕へければ、房顯その誠忠至孝を賞して老臣の列に加へたまふ。こゝにおいて倭文極樂寺に父母及び和平、淑女が墳墓を築き、又第宅の中

に靈狐の叢祠を造りて、春秋二季にこれを祀る。今江戸金龍山に熊谷稻荷と稱する神社あり、亦淺草本法寺（號三長龍山）にも同名の神社あり。後人若しくはこの白狐を祀るものか。その後玉琴三男二女を生めり。倭文誓約を違へず、冢子を佐々木の家臣となし永原左近と名告らす。この人後年故ありて室町家の寵遇を得、取用せられて越前介に任じ、江州野洲郡永原の域に居住す。こゝをもて永原、熊谷の兩家振々として富貴を係嗣に傳へ、四海無事にして五穀豐登、萬民泰平を樂しみけるとなん。詩ありて證とす。

誠忠 賄濁世一 巨孝 奉二家艱一

銳志 雪レ冤日 史生 記 莫レ刪

蓑笠隱居、視に呵し案を拊し、譯して云く、「盜跖、孔子に戯れ、王莽、周公に比す。郭智の鬼神に迫り、桌雄の世に横行する、君子大人なほこれと争ふ事能はず。夫れ隱匿齷媒の富、一日身を利するといへども、天網終にもらすこと無し。左近は元忠良の士、誤つて一婢を殺す、その餘殃甚だ速く、石見は是れ殘匿の賊、財を偷み人を害す、天誅もつとも還し。嗚呼これを是とせんや、彼を非とせんや。天の人を罰する、時ありて必ずもらす事無し。冊を開くの童蒙みづから勸懲とせよ、白居易讀史の作あり重ねて證とす。

周公恐懼流言日
若使當年身便死

王莽謙恭下士時
至令眞僞有誰知

月水奇緣卷之五 畢

傳曰、怨耦曰仇、嘉耦曰耦、未曰有、奇耦、奇耦所謂奇緣也。友人馬琴翁所_レ述_ル月來奇緣、其言愈奇、而愈高。文章、巧猶當_レ其時、觸_レ其事、錦心燦、繡口鮮、葩競發、秀粲怒生。自古恍惚怪異之事、何所_レ不_レ有、齊諧之言、不可_レ誣也。月來者、取_レ長語、月下翁、賢_レ水人、復_レ撮_レ合_レ蟠湖之光、及_レ菱花之明、以_レ緝_レ妖狐山竊之事、說_レ人所_レ疑惑、陳_レ奇緣所_レ繇生、要皆感激之所_レ、而體_レ藻昧之耳目、欲_レ使_レ觀者、津津_レ焉感興也。夫惡_レ混_レ、毒_レ種_レ、謀_レ事、情_レ于不意中、隨_レ險_レ艱_レ、萬_レ苦_レ千_レ辛、豈_レ非_レ花時_レ之風雨_レ乎、可_レ惡_レ甚_レ者也。琴翁所_レ以_レ作_レ此_レ、編_レ、其言、則足_レ利_レ公_レ制_レ、字_レ內_レ、杜_レ權_レ勢、其_レ時_レ有_レ觀_レ之_レ臣_レ、羣_レ邪_レ之_レ盜_レ、誣_レ誠_レ忠_レ、曠_レ貞_レ操、當時不_レ諱、以_レ傳_レ、矣_レ、春某、與_レ來_レ、茶_レ談_レ及_レ、遂_レ耳_レ熟、不_レ日、作_レ、琴翁自_レ、即_レ著_レ、神_レ彩_レ之_レ稱_レ、於_レ四_レ方_レ、勸_レ懲_レ之_レ、處_レ施_レ氏_レ、遺_レ豐_レ、矣_レ、余_レ因_レ、敍_レ所_レ、以_レ爲_レ、月來奇緣、庶_レ幾_レ、俗_レ士_レ愚_レ婦_レ著_レ、意_レ、以_レ觀_レ之_レ、則_レ爲_レ、勸_レ懲_レ之_レ、助_レ云爾。

江戸 東 秋 颿 誤

曲亭先生、姓瀧澤名解字瑣吉、一號著作堂、藏書馬琴、家于東都御前、交友呼爲三級笠
隱居、蓋先生每屬文、託諸警悟稚蒙、雖不坐作聲價、世人欲香名尚交、真滑稽
之嫌也、小人得其所、述月氷奇緣五卷、以贖刊、凡四方賜顧君子、認印裝爲記、冀
不_レ至_レ誤_レ。

浪華書肆 文金堂森本太助欽白

墨田川梅柳新書

墨田川梅柳新書を刊する例

吉田少將の事、極めて詳かならず、但誦秘鈔といふものに、野上の花子が詠へる歌につきて、彼の少將の事を載せたり。亦松稚梅稚の事、世にはさまざまにいふあり。梅花無盡藏の説は且くおく、或は梅稚は、

人皇六十五代 花山院の寛和二年丙戌三月十五日に没するといひ、寺或は八十四代 順徳帝の承久

二年庚辰二月十五日、野人の爲に横死すといふ。よしやその事おほろかなりとも、白楊青苔いく春秋

を経て、古墳當時を見るに堪へたり。夫れ前に詳かならざるも、後に細しうなりもてゆくは、草紙

物語の常なり。この書も又その類にして、婦わらはべの爲にとてすなれば、只善を勸め悪を懲らし、

正を擧げ邪を退くることのみ違はず。しかはあれ、墨田河原に筆をそゝぎて、木母寺の柳のいとなが

くとゞめん上にもあらず。牛島に角組むよしあしにつきても、見ぬ世の面影を鏡が池にうつせるぞ、

また是れ畫師のわぶくれなりける。渡守の烏帽子著たるいにしへは、郷の名も今には異なるべし。平

井、牛島、關屋、須田村、柳島などは、ふるくも呼び來れると思し。葛飾は和名鈔國郡の部下總の條

下に加止志加とあり。さればこそ伊勢物語に、むさしの國としもふさの國との中にいと大きな河あ

り。それをすみだ川といふとは書きたれ。今は利根川を兩國の封疆と定められて、葛飾は武藏に屬くとぞ。亦夫木集を見れば、中ごろすみだ川に橋をかけたる事もあり。彼の集に、康元元年後深井常平兼將軍宗尊親鹿島の社に詣でけるに、すみだ川のわたりを見れば、彼のわたり今はうきはしあればとありて、俊光朝臣、

すみだ川むかしは聞かず今こそは身をうきはしのある世なりけり

今の橋場といふ處、その餘波ならんかとある人いひけり。亦古本更級日記に、下ふさの國とむさしのさかひにてある、あすた川とぞいふ在五中將のいざこととはんと詠みけるわたりなり。中將の集にはすみだ川とあり。かゞみがせ、まつさとのわたりの津にとまりて、夜ひとよかすくものなどわたす云とあり。こはすみだ川を東にてはあすた川と稱へたる一證とすべし。今も彼のわたりの村に、須田といふ處あり。これも元は阿須田なるを、上畧して須田とも呼び、又須田をすんだなど詛りつらんを、都人はすみだ川と書くにやあらん。こは女人嫁衾の説にい、なほ考へおける事もあれど、名所記めけばこゝには漏らしつ。

今この草紙は、東鑑、盛衰記、承久記にも見えざる、根なき言の葉さへしけらし、つまを戀ひ子を慕へる、狂女が昔物がたりを、關屋の里の雉子、受地村の雪雀にも思ひよせて、梅柳新書と名づく

るものは、梅稚うめわかしの事を宗むねとして作つくればなり。

文化内寅のとし三月十五日

著
作
堂
識

墨田川梅柳新書を刊する例

墨田川梅柳新書總目錄

全本六卷

- 一 卜部尊通降儀野に狐を訪ふ
- 二 吉田少將野上驛に美に遇ふ
- 三 光政避雨して赤繩に繫がる
- 四 班女花に寄せて黄金を贈ふ
- 五 龜鞠俳優して賊僧を欺く
- 六 盛景影の江に胤時を殺す
- 七 松稚丸酒かに白川山に狼す
- 八 忍宗太醉うて西洞院を廟がす
- 九 金龜圖を告げて借房を隔る
- 十 天狗石を飛ばして松稚を救ふ
- 十一 春雨厚原野に山客と戦ふ
- 十二 光政平尾郷に妻子を殺す
- 十三 澤石淵の悪鬼怒つて少年を獲つ
- 十四 墨田川の津人憐みて狂女を渡す
- 十五 因み説き果を示す楊柳塚
- 十六 奸を勵き冤を雪む大團圓

墨田川梅柳新書 卷之一

東都 曲亭主人 著

卜部惟通嵯峨野に孤を訪ふ

おかし後鳥羽、土御門、順徳院、三代の天子に仕へ奉りし、吉田少將惟房、一説に惟貞といふ人ありけり。その先忍見足尼命より出でて、雷大出の後胤、卜部吉田家の庶流たりといへども、故ありて家世久しく衰へ、いと衰しかりつるに、惟房の父卜部惟通といひし人、去ぬる安元治承の間、平家政を執つていと時めけるころ、所縁ありて左馬頭行盛基盛の子清盛の孫なりの家に扶持せらる。然るにいく程もなく世の中おほいに亂れ、頼朝は豆相に起り、義仲は北越に出で、東軍百萬、威勢猛く攻め上れば、平家防禦に策なく、安徳帝を衛り奉りて、氏族親族など遠しく洛を落し、攝州八部郡須磨の浦に假の皇居をなしまゐらせ、且く敵の英氣を避けたりしかば、惟通も行盛に従ひて、須磨の内裏にぞ参りける。かくて三年あまり支へつゝ、百遍千遍の合戦に、源氏動もすれば勝に乗りて、その鋒朝日の昇るがごとく、平家の陣はしるみかへりて、有明の月にひとしく、なほ西を投して落ちん

とて、俄頃いつしげんに夥おほの樓船ろうせんを泛うかめ、先帝せんてい安徳やすだて、天皇后てんこうご建禮門院たんでいもんいんを乗せ参らせ、讃岐さぬきの八島やしまに引き退きしが、又こ
 こにも足を留め得ず、長門ながのの赤間あかまが關せきに盾籠たてこもりしを、いたく攻められて再び船ふねにうち乗り、高麗こま唐土たうど
 の果はてまでもと漕こぎ出いづるを、源氏げんじの兵船へいせん八方はつぱうよりとり巻きて、一騎いつきも漏もらさじと攻めたつれば、平
 家はこゝに勢いきほひ究きよまり、宗徒そうたの大將たいしやう或は討死うちじし、或は生拘せいこられ、今はかうと見えしとき、行盛ゆきもり潛ひそかに
 惟道ただみちに私語ひそかごとき給たまひけるは、一足ひとあし卜うらなはずが恩顧おんこの家縁いけのこにも勝かりてかし。今般いまはまでも立ち去さり給たまはざる誠心まことこころ
 のうれしさに、後の事ごとのことをも聞きえまゐらするにこそ。抑おほ行盛ゆきもりが年來としごろのきかよひつる、小櫻こざくら初花はつはなといふ
 二人ふたりの女房にようばうあり。往さきに養和元年秋七しち月げつなり洛を出いづる時、小櫻こざくらは男子おんしを産うみ初花はつはなも有身ありみりて臨月りんげつに程近ほどちかきを、
 しかくゝの處ところに忍しのばせおきてしが、こゝにありては軍慮ぐんりょに聞きなくて、絶たえて一度いちどの音耗おとつれもきこえず、
 よでに五年いつとせの春はるを過すしぬ。足下あしもと元來もとより武藝ぶげいに富とみて心こころさま勇ゆうし、一方いっぽうを切きり脱ぬけん事はいと易やすかるべけ
 れば、直ただに洛ろくにかへり上ありて彼等かれらがちからともなりて給たまはるべし。こはわが記念きねんとも見給まへとて、
 備前びぜん家次けいじがいとわかくて打ちたりける短刀たんとうの、鑓やりに自他平等じたへらうとう即身成飾じくしんじやうしやくと鐺たがり入れたる一振いっしんと、背せに梅
 と松まつを鑄出そでだしたる鏡かがみ一面いっぺんをとり出いでて與あへつ、他事たじなくたのみ聞きゆるに、惟通ただと彼の兩品りやうしんを受け納なめ
 て、一仰いっやうせ承うけりぬ。心こころやすかれ、この事ことようつたへまつらん。と應こたへながら、去いらんともせず。依然いぜん
 として、萬よろずの船ふねにあり。行盛ゆきもりはかくいひ捨てて、前左少將ぜんざしやう有盛ありもり重盛ちゆうせいと共ともに、敵たかの船ふねに飛び乗り、

當るを幸ひに切つてまはり、思ふほどの戦して、二人ひとしく討死し給ふ。惟通は思慮ふかき人なれば、ととも一方を切り脱けて落つる身なり、いかにもして先帝を救ひ出し奉らばやとて、つと身を起し、秋の野にちり布く木の葉のごとく漕ぎ列べたる船どもを、此彼と乗りうつり、先帝の御船に飛び入りて見奉れば、二只今二位の禪尼、君を八歳抱きまゐらせて、御劍を腰に帶び、千尋の底に沈み給ひぬ。とて、典侍以下の女房達、船の艫軸に臥しまろび、聲を揚げて叫び悲しみ給へば、惟通もいまさらに驚かれ、手足は震へ麻るゝやうにおほえて、御船にありける唐櫃に、尻をかけんとしたりしかば、忽地に目眩き、鼻血さりと流れ出づ。帯相時忠卿見給ひて、「肉侍所の御箱なり。狼藉なせそ」と宣へば、惟通大いに駭き怖れ、潮を沃ぎかけて身を清くし、伴の唐櫃を負ひ奉りて、近く寄せたりし、源家の侍伊勢三郎義盛が船に到りて、「われは吉田の庶流に、卜部惟通といふものなり。平家重恩の人にもあらねば、源氏に對して恨みもなし。只假初の所縁ありて、前左典醫行盛に伴はれてこゝに來り、今先帝の御船に参りあひて、圖らさも神鏡の御箱を守護りて來れり。このよし大將軍に申させ給へ。」といへば、義盛聞きて時を移さず、惟通を將て大將の船にまゐりしかば、義經斜ならすよるこびおほしく、伴の唐櫃を受けとらせ、頓て惟通を厚く待し給へり。時に文治元年春三月二十五日、平家の氏族悉く滅びじせ、神軍内侍所は故なく洛へ返し入れ奉りしかど、寶劍は海に沈みてふたゞび出

づる事なし。「もし惟通守護り奉らずば、内侍所もいかになり給ふらん。こは全く彼が頼なれば、宜しく勸賞あるべし。」とて、法皇河院よりこの旨丁寧に仰せ出されけり。「さらば一所懸命の地をも宛て行はれ、官爵をも制度せらるべきか。」と聞えしかど、惟通更に承け奉らず。「今思ひもかけず朝恩に浴し、久しく衰へたる家を興さん事、歡ばざるにあらず。しかはあれ、惟通司も人の福に由りて、身の福を謀るに忍び候はず。且近曾壇の浦にて討死せし、平行盛に妾腹の兒二人あり。彼の人洛を落つる時、小櫻といへる女房には、既に男子出生し、初花といへる女房は有身りてありけるを、人の家に潛はせておける由を聞きぬ。今はその兒おのゝ五歳なるべし、あはれこの度の勸賞に、彼の二人の稚兒を賜はらば、その往方を索ね出して、惟通が子とし養ひ成長るのち出家させて、父祖の後世をも弔はせ候はめ。これ行盛が年來の恩恵を報さんと思ふのみ、この事許させ給へかし。」と願ぎ奉るに、法皇聞食して御感淺からず。「惟通が申すところ義あり信あり。まけて行盛が子どもを助け得さすべし。」とて、縁由を鎌倉へ仰せつかはされしかば、頼朝卿謹みてこれをうけたまはり、「行盛は平家の嫡流朝敵の首領たり。その子幼少しとも助けおくべきものにあらず。さは申せ、天下に信を失はじとの院宣を、固辭み奉らんやうなし。しからば惟通が望み申すに任せられて、行盛が子どもを養はせ、年十五に及ばば佛門の徒となすべし。また初花とやらんが腹なりける兒女子ならば、彼が

隨意養育しゆいよういくまふこと勿論むろんなり。もし男子なんしならば、これ又もろともに出家しゆつがいたさすべし。かくの如く仰せ
含めらるべうもや。」と回答こたへへ奉らせらる。この時とき當今たうこん羽鳥はつとりは、幼少せうせうくおはしませし程に、天下てんかの事
大小たうせうとなく、院いん河かより制度せどし給ふなれば、法皇ほふやがてしか仰せ出されけり。惟通しゆんは忽ちたちに望み足り
て深く歡び、行盛ぎやうせいの遺言いごんを心あてに嵯峨野さあがのの奥おくに索ねゆきて、まづ小櫻せうおうの女房にようぼうを訪ふに、初めは鎌倉
より獲し出さるゝかと疑ひて、左右さうぶなくそれぞともいはざりしを、惟通しゆん赤心せきしんをあかして、事審ことしるみかに
告げしかば、あるじの老女らうにょや、涙ぐみて、「扱はその方かたさまの人にてやおはする。抑おし行盛朝臣ぎやうせいしやうしん西海さいかいに
漂泊へんぱくしたまひてより、たえて音耗おとづれもあらずとて、小櫻せうおうの局つよくは日暮ひぐさ憂うれきに思ひ沈み、ながき羽は著つに首くびを
へあけ給はず、つひに去年こぞの神無月かみなしつき黄泉よみの客きやくとなり給ひぬ。かくかはりゆく世の中の人ごゝろも常
なくて、耐しのきまゐらせし一人ひとりの老らう黨たうも、やうやくに心かはりしおのが世經よこんとてや、稚君わかしんを捨すておき
て、いづ地ちともなく逃にげ去さりにき。わが身は里さとに久しく住めど、深ふかき思おもひを棄すけたるにもあらず、聊
かの縁ゆかりありて、年來ととこあるじまゐらせたれば、稚君わかしんの事ことあまりに痛いたましく、なほ家に養育よういくみて、一ひと棟たての
飯いをわしら進すすらするのみ。さるを朝廷てうていより御免ごめんしを棄すけたまひて、世をひろく生育そくち給はんは、こま
なき幸さいひにこそ。稚わはいづ地ちぞ、こや晴々はるはると呼びたつるに、おいと應こたへて破やぶれたる藤ふじ色いろの邊へたより、
年とし紀き五ごッつばかりなる童わらわ引ひき捨すてたる高蒲たかふを摘と頭かぶしつゝ、走はせ來きれり。世につれ、時に隨したがひて、日ひやけ

の額ひらひにふりかゝる總角あひまきのいつ櫛くしげつりしとも見えず、垢うがつきたる單衣ひとへぎぬも、針目はりめあらはにして、臂はたへを裏うらむに堪たへざれば、これなん行盛ゆきさかの遺腹わいふく子かと思ふに、惟通ただとほ漫まに落涙らくなみし、さてあるじに淺あやからぬ志こころをよるこび聞きえ、折おふし携たへたる物を残のこしとゞありて、この日の贈かたくりとし、また初花はつはなの女房にようばうを訪たづはんとて立ち出でづるを、老女おきな一ひとしぼしと引ひき留とどめ、いまだ初花はつはなのなりゆき給たまふをしらでや坐まする。彼の婦人かみは仁和寺にんわじの片邊かたへだにかくれ住すみて、折々しばしばに小櫻こさくらを訪たづひもし訪たづはれもしてかたり慰なぐさめたまひしが、産うみ給たまひたるは姫ひめにて侍はたり。然しかるに今鼓彌生いまつゆひの下旬したまつ、平家へいけの氏族しゆじゆ親族しんじゆ、みな壇だんの油あぶらとやらんにて滅たび亡なせ一行いっぎやう盛朝さかあさ臣しんも討死うちじし給たまひぬ。』と聞きえし程ほどに、初花はつはな甚いたく叫なび悲かなしみて、終つひに大澤おほさわの池いけに沈しづみ給たまひしとぞ。その時ときまでも侍しりつる春雨はるあめとかいへる乳母ちち、ふかくうち歎なげきて、幼わかき姫ひめをかき抱かかり東國あづまくににしろべあれば其處そのところへ下くだりてこそ、左ひだりも右みぎもすべけれ。』とて、旅たびたつ朝あさこゝへも立ちまりて、藏くらに稚わかの事頼ことたのみ聞きえたりしは、いぬる二十日ふたつひあまり七日ななひ八日やっぴつの頃ころかと覺おぼえし。小櫻こさくら世よを去さり給たまひしより、初花はつはなもいよゝ心こころほそけにて、いつか頭あたま殿との行ゆきに會あひ参まらせて、二人ふたりの兒こたちを遣つかし侍しるべきなど宣のたまひて、折おふしは稚わかの安否やすひも問とはせ給たまひたるに、行盛ゆきさか朝臣あさしん討死うちじあり。』と聞きく、愁傷しみづらのやる方かたなきにか、幼わかき人を遣つかしおき大澤おほさわの池いけの水屑みづくとよより給たまへる、御ごこゝろのうち推量おしあられていとあはれなり。しかれば彼處あそこに尋たづねゆき給たまふとも、絶たえてそのかひあるべからず。』と物ものがたるに、惟通ただとほますく遺體しんたいに堪たへす。な

は彼の春雨がのきたる園を問ふに、東園とのみ聞えて、審かにほしらす」と云ふ。かくてあるべきにあらねば、稚き人の手を引きてこゝをたち出で、さりとともと思ひて仁和寺のほとりに赴き、里人に縁由を告げて初花の事を尋ぬるに、彼の老女がいへるにつひ違はざれば、力なく立ちかへり、人に就きて事審かに奏し聞え奉れば、法皇いと憐みおぼして、「行盛が女兒の住方定かならずばいかんせん、これをば緩やかに索めべし。今携へ來れる稚き者を養育まんに、一畝の田一束の稻もちたでは便なからめ」とて、近江國志賀郡にて、莊園一箇處を賜はりければ、惟通ふかく朝恩を謝し奉り、歸て彼處に家作りしつ、件の孤をば行雅と名づけて、愛でやしなひぬ。惟通元來一子あり、柳王とよびて今茲七歳なり。妻は産後に身まかりしが、いぬる養和元年、行盛に従ひて惟通落を落つるの日、稚きは手足まつほりなり」とて、摩山月林寺の仲圓阿闍梨とは、その身從弟なるをもて、そのころ惟通三歳なりけるわが子柳王も、彼の寺に預けおきてしに、これをも家に迎へとりけり。成長るの後吉田少將惟房といへるはこれなり。さて惟通は幼少きよりこの二人に養を結ばせて兄弟とし、行雅は年も劣りたれば弟なりと定め、諸共に物學ばせて、慈愛に親疎あらざれば、これを傳へ聞くもの惟通を稱し、一室に當世の義士」とぞいひあへりける。

一 吉田少將野上宿に美に遇ふ

光陰は流るゝ水よりも委みなく、行稚や、長立ちにけれど、人のこゝろざま許り、親にも似ざるも
のかた。その左馬頭行盛の庶子、入道相國清盛の曾孫として、よき事にはつゆほども心をとめず。行
ひ放にして、よろづ危忽に見えしかば、惟通をり、折檻の教訓を加ふるといへども、絶えてこれ
を用ゐることなし。又惟通の一子柳王は、學問武藝に志篤く且身の憤みふかくして、その才、父に
も勝れる如し。時に建久四年癸丑二月十五日、惟通は行稚が爲に袈裟念珠度牒、すべての器具を執
りと、のへ、又行盛の記念なりける備前家次が、自他平等即身成佛の短刀を授けて戒刀とせさせ、す
なはち叡山月林寺に登して、仲圓阿闍梨の徒弟とす。今茲行稚十四歳、その期に違はん事をおそれ、
この事豫て宮に聞え奉りて、かくはなしけるとなん。又わが子柳王^{十六}歳には別に日下下へて元服さ
せ、吉田惟房とぞ名告らせける。しかるにこのごろ後鳥羽帝、只管武藝を好み給ふをもて、樂合に仰
せて覺えある武士十人を、北面西面に召されしが、惟房も弓馬劍法を嗜み、その業既に熟せりと聞召
され、「父惟通は仕官ねがはしからずとも、その子はいかで青雲の志なからん、彼の者を進らせよ。」
とて、丁寧に仰せ下されし程に、惟通、「かかるを推辭奉らんはいともかしこし、さらば参れ。」とて
洛に上しければ、聽て惟房を藏人になされ、家は北白川の邊にて賜はりぬ。元來伶俐しかりしかば、
君の御おほえもいと愛でたし。わが家を興さんものは、必ずこの子なるべしとて、父はふかく嬉しむ

思ふに、蓋つれば虧くるふらひにて、その身老の政を登りも果てき、建久七年の秋のころ、惟通徹初
の病書に臥したるより、鍼灸薬餌も驗ならず、終に身まかりけり。惟房いたく悲しみて送葬形のこと
く執行ひ、忌どもをばりて後、奉公舊のごとくしつ。忠勤拔草なるをもて、官位年々に昇進し、いま
だ五六の齡をも超えざるに、四位左少將になされける。かかる幸福は世にもまた稀なり、今は事みな
嫡家にも勝りて、世の人の思ひよき厚く、養ふ思はざるものなかりしとぞ。かくて建仁二年壬戌の
春、少將惟房陸奥の國司に任ざられ、彼の國へ赴き給ふ。家縁には粟津六郎勝久、松井源五純則以下
の老童若黨、前驅後從して旅だちぬ。これらは舊臣の子孫にて、彼此よりまゐり集會ひたる者どもな
り。これより先建久九年二月二日、後鳥羽院隱居させ給ひて、位を一の皇子、爲仁王に譲り給ふ、
土御門院これなり。しかれども天下の政は後白河日崩す。建久三年三月の舊きを追うて、院後鳥羽より制度せ
させ給ひし程に、今度惟房を陸奥の國司に任ざられつるも、院の御はからひと聞えたり。かくて惟房
は洛をたちていく日といふに、美濃國野上なる、長が家に宿り給ふ。この長が女兒に花子といへる白
拍子は、その名高く洛にも聞えて、漢にしては趙飛燕、和にしてはこの比の洛の静、池田の侍従には
勝るとも、更に劣るべうもあらず。青春既に二十二歳、いまだ夫をしも定めずその姿こそ艶麗なれ、
心はたえて淫れたることなく、かかる活業をなす女子には、類あらずして人みな賞しけり。然るに

長は惟房のこゝに歇り給へるを、いと面目ある事に覺えて、さまざま饗應しまゐらせつゝ、女兒花子が舞の曲は、巫山の雲をも招くべく、籊錯らせる物の調べに、軒の春雨音そへぬ。正に是れ野の花却りて艶はしく、濁江の月風情あり。天籟る部にも又かかる美女はありけりとて、惟房只願身を側て、目を斜にして坐せしかば、花子も又都人の風流びたるに心ときめけるなるべし。さて席を換へて夜の設けするに、長はわが手に對ひて、「羽生の小屋のいぶせき旅簾は、殿もさぞな寂寞しくおぼすべき、枕方に参りて慰め進らせてよ。」といふも心あり顔なり。花子はなほ恥ぢらひて立ちぬるを、女の童に案内させて、わりなく臥房に薦めしかば、少將も風なきに靡く青柳のいとにくからず思しつゝ、一夜の夢を結び給ひぬ。さる程に惟房は、詰朝野上をたちて路をいそがし、日に歩み夜に宿り、奥州宮城郡の府に著きて、遷庭を治め給ふこと三年に及び、元久二年の春任限既に充つるによりて、洛へかへり上るとて、路の叙よければ、此度も又野上にとまりて、長が家にあるじさせ給へば、長は女兒ともに出で迎へ、管待し始めに彌増したれど、花子は何とやら顔色變ましげなるを、惟房見そなほしてふかく異しむ、情由を問はんとし給ふ折しも、長がかき抱きたる嬰兒の、年は二ツばかりなるがやがて膝をはなれて、惟房のほとりちかう参りしかば、「こは何ものの子なるぞ。」と宣はするを、長含睨みて、「これなん花子が産み侍りつる、殿の御子にておはするなり。しかも郎君にてわたらせ給へば、

この二年が程はそまふく風にも當てじとて、靡さへす急ぎ養育み侍りといふ。惟房聞きて眉根をよせ二われ注にこゝに宿りしとき、花子と一夜の契りなきにあらねど、ゆくを送り来るを迎へ、櫻曲をもて人を慰むるを、身の務めとすなる者の産める子を、わが胤なりといへるもおほつかなし。又かかゝる事あらば、たとひ千里を隔てたればとて、鷹の翅に書を寄せても、とくに聞ゆべかりしを、この子は躑ひもならひ、今は歩みもする程なるに、絶えて告げ來さざりけるは、いともこゝろ得ぬと宣へば、長かさねて、「この事を聞え參らせざりしは、花子が身の賤しきを羞ぢてなり。常言に、「樹を接げば花も獅竊むべし、人の胤は盗み難し」とぞいふなる。この種子の面影の、殿に宵給ひたるや否、八つから照らして見給へかし」といふ。この時までも花子は一言を交らへず、只物おもしろき氣色なりしが、つと立ちて一面の鏡を携へ來つ、少將のほとりにさし出すを、惟房とりて打ちかへし、左見右見てうち驚き二奇なるかなこの鏡は、わがもてるものと露違はず、彼處の櫛奇もて」と仰すれば、長こゝろを得て旅櫛奇もて來るを、うち開きてとり出し給ふ鏡も、模様花子が鏡にひとしく、昔には松と梅とを鑄なして、作者の名字長短までそれかこれかと見紛ふばかりなれば、花子母子はさらなり、惟房いまゝ、異しと思して、「わがこの鏡は、往時文治元年三月二十五日、埴の浦にて討死せし、前左馬頭平行盛の所藏なるを、故ありて亡父惟通より相傳せしが、これと彼とは元一對なり。いかにして

その一面を、花子が手には入りたるやらん。かならず縁故こそあらめ、聞かまほし」と宣ふに、花子は涙さしぐみて、はかみしく應へもせず。長も涕うちかみつ、且くしていへりけるは、「この鏡には異なる物がたり侍り、今は何か匿み侍らん。この花子は長が女兒にあらず、左典駁行盛朝臣の遺腹子にて、初花といへる女房の産み給へるなれば、さてぞ花子と名づけ侍る。今は二十餘年のむかし、行盛洛を落ち給ひし時、初花をば俱せられ、嵯峨野にふかく潛ばせ給ひつる頃しも、懐胎りておはせしかば、いく程もなくその月に臨みてこの姫をな産み給ふ。長は行盛恩顧の老黨山田太郎政綱といひしもの女兒にて、春雨と呼ばれ侍り。母は世を早うして父のみなるを、それさへ主に従ひて戰場に赴き、わが身は初花に傳きこゝらせて、嵯峨の隱家に侍りしに、かかるときとて味氣なき世のた、すまひこそ悲しけれ。正しく入道相國の曾孫にてましませば、御産の結り臺目鳴弦など、彼の式この壽きとて、榮え時めき給ふべきに、盛衰は一炊の粟をまたで食糧ばすまでもなく、菓屋に雨露を凌ぎかね、姫の産聲揚げ給ふさへ、人に聞かれじと思へば心くるしく、とかくして四年あまり、五年の春にあふかびなく、平家の一族は、落屋の島の内裏を攻めせられ、行盛朝臣はさらなり、わが父政綱も討たれぬ」と、後に聞きたる悲しさは、比へんやうもあらざりき。又同じ思ひに沈む人なきにしもあらで、是れも彼の朝臣の愛で給ひし、小櫻と申せし女房には、男子出で來給ひて、ともに嵯峨に住

み給へば、逃に憂きを訪ひ訪はれ給ひしに、その前つ年に小櫻は、なき人の數に入りて、跡には稚子の
のみ残り給へば、初花は只身ひとつにかこたれて、泣きあかし哀傷やるかたなかりけん、ある晩に
しのび出でて、大澤の池に投み給ひぬ。その時わが身の胸くるしきは、今語るにもなほ勝れり。元來
平家の黨と聞くときは、木を伐り草を刈り拂ひても、搜し出されて命とらるゝと、人皆いひ罵る
にいよ、淺ましくて、初花の亡骸を索め出して、送葬する事も叶はず、俄頃に軀をかき抱きて隱家を
走り出で、小櫻の産み給ひし稚子の事をば、潛かに主人の老女を相語ひおきて、この美濃國に聊か所
縁あれば、幸うじて逃れ來たれども、主従が露の命繋ぐべき便なきに、この家の主人光二郎といふ者
の妻となり、軀をば一婢の子なり」とと偽りて養育み奉らするに、成長り給ふ隨に、姿いと姪婦にて、
心ざと又みやび給へば、夫光二郎も深く慈しみ、絲竹の調べ立ち舞ふ事を、その師に就きて習はせ
侍り。然るに夫光二郎は、四年前より中風とやらんいふ病にて、起居も自在ならず家はますます貧し
うなりにつれば、已むことを得ず、かく白拍子となりながらを侍りしも、原を志にあらざれど、
軀にこそ父御の素生をも聞え進らせたれ、夫にはなほ明白に告げざれば、彼又止むべきにもあらず。
軀も又光二郎が年來の庇みを覺せば、更に固辭む氣色もなくて、かかる活業し給ふにぞ、今は野上の
花子とて、人もしりたる舞臺と、なり給ひぬる幸なきよ。一さはあれ平人の妻とはなきじ、活業なれば

いかにもせん、人の爲に酒宴しよせんの興きようは添そふるとも、淫おほれたる心もて、身をみな放はなしたまひそ。と諫いめもし、
 さもおほして二十歳ふたぢぢ過すぐるまで、なほ處女ぢよぢよにておはせしを、過すぎつる年とし、殿とわが家いへに宿やどらせ給たまへば、
 かかる貴人あてごともに縁えんぢひ給たまひなば、發はな跡あとでたまふよすがともなりなにかと、叔おぞ我われからわりなく薦すすめし、
 その夜よの契ちぎり空そらしからず、この稚君わかぎみを産うませ侍つかりつれど、面おものあたり縁えん故ゆゑを申まさずば、殿とにも實事まことと
 はし給たまはじ、よしや實事まこととしたまふとも、平家へいけの黨ともしよなりと聞きえなば、側まへへも居ゐる給たまはじ。とやせま
 じかくやせまじとおもひ屈くし、かへり上のまらせ給たまふ日を、只ただまつと待まちつほどに、待まちつよ稚わかよと呼よびつぎ
 に、稚君わかぎみの名なをもいつとなく、侍まつ稚わかと稱よへ侍つかりしこと首尾おもひよりを告つげ申ませば、花はな子こも漸お頭かしらを擡もちけ、いへ
 ばえにいはで已やみなん事ことならねど、父ちちの名なさへあかし侍つかりつる、わが上ういと、恥はづかしけれ。平家へいけに因よ
 あるものをよも慕たひまるらするとも、洛みづへは俱ともし給たまはじ。されどこの兒こは、君きみの胤いねにて侍つかるなれば、
 養やしなはんとも棄すてんとも、御おんこ、ろに任まかせたまへかし。わらはは今いまより尼あまとなりて、ところ定さだめず墨染すみぞめ
 の袖そでは結むすべど、結むすび果はてぬ縁えんと思おもひたえなん」とて、かき口説くちごときつ、よ、と泣なけば、惟ただ房ふさつくゝと
 聞ききて、或あるは驚おどき或あるはよろこび、思おもはずも膝ひざをす、め、赤繩あせなづな一ひとたび足あしに繫ひけば、終つひに婦夫むとをなすと
 いふ、こはみなけふの事ことなりし。抑おさわが家いへ衰おとろへて、亡な父ちち惟ただ通と久くしく流浪ながしなし給たまひつるころ、且またく行盛ゆきさか
 の家いへに身みを寄よせ給たまふに、いく程ほどもなく薄平うすへい標すゑを削くるに及び、父ちちも行盛ゆきさかに俱ともせられて西海さいかいに赴おもむき、彼かの

人討死せし口まで、猶立ち去らで在せしかば、行盛その誠心を感激し、『後の形見に。』とて家次の短刀と、この鏡とを贈り與へ、小櫻初花の産める子どもの事をたのみ聞えしかば、亡父これを承引きて、一方を切り脱けんとするに、敵の兵船遮り留めて、輒くも脱れがたき折しも、不圖内侍所を得たりし程に、これを携へて義經の船に赴き、この功をもて行盛の子どもの命乞し、忽地朝廷の御免しを稟けたりと、わが物ごと、ろしれる頃より、常にいひ出で給ふをもて、われ又よくその事を知れり。そはかかる事ありとて、惟通みづから嵯峨野に尋ねゆきて、小櫻の産めりし行碓を、わが子として守り育て、叡山月林寺へ登して出家させたる事、又初花の産めりし女子の往方を索ぬるに、たえてしれざりし事、惟通は建久七年の秋世を去り、わが身院後鳥羽の寵遇を得て、こよなく昇進したる事、審かに説き聞かせ、さて宣ふやう、「亡父命終らんとし給ふ時、惟房を見返りて、『わが死後たゞ心にか、れるは、行盛の女兒の事なり、もし環會はば養ひとりて、汝に妻はすべう思ひしに、その事成らで死ぬるこそ恨みなれ。汝父が志を繼ぎて、普くその行方をたづねよ、われ貧しかりしむかしより、義に于て違ふことなし。たゞこの一條のみ黄泉の障りともなりてん。』と宣ひつる、遺言いとことわりなれば、今に妻を娶らず陸奥にありける程も、彼につききこれに語りひて、ふかくも索ねつるに、おもひきやその人は花子にて、しらす契りを締ばんとは、待稚はわが兒なり、花子は今よりわが妻なり。さる

にてもこの鏡は、樂昌公主が故事にも勝れり。こは行盛の賜にて、初花より受け傳へけん」と宣へば、花子も春雨も、海月の骨にあへる心地しつ。袖の涙はまだ乾かねど忽地面に咲みを含み、「この鏡は行盛の洛を落ち給ひし時、とり忘れ給ひしを、頭殿の形見なり」とて、初花の愛で藏め給へるを、長が花子に進らせたるにて侍り。寔に宜ふところを聞きまつれば、假初の縁にあらず。昨夜燈に花を結び今朝又喜び鶺鴒とやらんの、軒端ちかう鳴きつるもこの吉祥あるべきにこそ。やよ待稚君も歡びおほせ、こは父上にまします」とて、花子もろとも扶け引きて、なほそのほとりに歩ますれば、惟房これを膝にかき載せ、「今までしらぬわが子にあふも、松と梅とを錯出したる、二面の鏡の儻きにて、花子は我を待つより名づけ、我は實植の松を得たれば、待を松に更めて、松稚とこそ呼ぶべけれ。既にこの松あるからに梅もやがてぞ生ひ出づべき、歡びこれにます事なし。まづ縁由を老黨にもしらせばや」とて、粟津松井以下の家諫を召し集會へ、松稚花子春雨が事まで、落ちもなく語り給へば、衆皆大いに歡びて、或は雪の松に操節を釋し、或は十八公の衆えをぞ祝きける。その時惟房春雨に對ひて、「汝が年來の苦心忠義あり、實に女の丈夫なり。はじめ初花に傳きて、又よく花子を養育みたらば、春雨の老女と呼ばんも事に稱へり。今花子とともに洛へ將て上るべきに、夫光二郎とやらんはいかにしつる」と問ひ給へば、春雨うけ給はりて、「數にもあらぬこの身さへ、かく丁寧に聞え給ふ御

惠みの嬉しきよ。夫光二郎は去年の夏身まかり侍りて、しかるべき親族もなく、一子太郎二郎といふもの、今年十七歳になりぬ。彼幼きより武藝を好みて、賤の手業に心をとめず、常に家にしもあらぬを、けふは殿の入れせ給ふをもて、呼びよせて侍り、あはれ御目を賜はらせ給へかし。」と申すにぞ、惟房にそれ召せ。」と仰するに、太郎三郎馳て母の後方に参りつ。その形容鄙には似たなき壯俊にて、物の用にも立つべく見ゆれば、惟房なほ近く召されて、「汝彼處にて縁故はよく聞きつらん。母が誠心を棄けつぎて、わが家に仕へなば、松稚が股肱とも頼み思ふべし。汝が祖父は平家の侍にて、山田太郎政綱とか聞きぬれば、父光二郎が字を象り、山田三郎光政と名告れ。」とて、まづ見参の引出物に、太刀烏帽子などを賜はらするに、春雨はいふも更なり、花子もふかく歡び聞え、「こよなき御惠みのわが方さまの人々までに、及ほし給ふにつきても、畷山月林寺に登し給ひつる行稚とやらんは、母こそ異れ、妾が兄上にて在すなれば、いとつかしうおほえ侍り、いかに恙なくやおほする。」と問ふに、惟房點頭きて、「彼の行稚が事に于ては種々の物がたりのあれど、一朝には説き盡しがたし、そは後に委しうしらすべし。」と應へ給ふ折しも、遠寺の鐘聲音づれてや、初更にもなりければ、春雨は席を更めて、杯を勧めまゐらせ、夫婦君臣みな歡びを盡すに、杯の數もかさなりて、惟房不圖見かへり給へば、蒸襖のこなたに料紙の硯箱ありて、上に扇を載せたれば、押しひらきて見給ふに、

夏はつる扇と秋のしら露といづれかさきにおきふしの牀

と筆の運びもつたなからず、女の手して書きたりける、歌のこゝろは班婕妤が故事を思ひよせて、男に捨てられたるを、秋の扇に寄せて詠めり。こは花子が筆にやあらんと宣ふに、花子深く恥ぢらひて、「宣ふごとく妾が筆のすざびに侍り、縁由を申さずば他し人に見えぬるかと、疑ひおほさんが、この三年が程、君を慕ひ参らせて、歸り上り給ふ口を、けふか翌かと待ちわびつゝ、馬士のをのこにも言告げて、只これのみを問はせ侍りつるに、「此の度は美濃路を過り給はず」と聞えしかば、とても洛へはるく、と慕ひ上るべきよすがもなし。思ひ屈して死なんより、ともかうもなりなんとて、淺はかなる女子の心もて、辭世の歌を遺しながら、幼き人の袖に携りて、愁ひに絆となれば、なほ聲蟬の裳さへ脱ぎ得で、一日二日と泣きくらせしに、はじめ聞きつるは空言にて、忽地走衆の告げ來りて、「又爰に宿らせ給ふ」といひ罵るに、いと淺ましくも娛しくて、この扇さへとり隠さず、見られまゝらせしこそ面なけれ」とて、事の本末を物がたれば、みな駭然とうち驚き、「もし殿の歸洛十日とも後れんには、再會はあり難けん、さは由々しき事にこそ」といひあへりける。惟房聞きて宣ふやう、「士は己を知るもの爲に死し、女は己をよろこぶものの爲に容るといへど、一夜の情に百年の命をかへんと思へる事、そも尋常の心ならんや。よくこの志移らずば、偕老の誓何かは違はん。花子はわ

が國の班婕妤にして、なほ幸ひあるものなり、しからばこれをも班女と呼びて、憂きを忘れぬ夫婦が爲に、警めともなすべし」とて、氣色よろしく見え給ふにぞ、この時より花子を穉して、人みな班女前と申しける。さる程に少將惟房は、粟津六郎に、奴隸十餘人を殘し留め、「春雨、山田三郎等と共に班女松稚の供して、跡より上るべし」と仰せて、次の日、野上をたちて殊さらに路をいそがし、日ならず洛に歸り著きて、言の次に班女松稚の事をも聞えあけ給ふに、兩三日後れて彼の人々も恙なく上洛せり。因りて黃道吉日を下み、班女と新に婚姻の席を聞きて、いよく睦まじう見え給ひし程に、その年の終りにまた男子出生し給ひぬ。「さればこそ鏡の梅をも得たれ。」とて、これをば梅稚丸と名づけ、鍾愛いづれ淺からざりけるとなん。

墨田川梅柳新書卷之一 終

墨田川梅柳新書 卷之二

東都 曲亭主人 著

三 光政避雨して赤繩に繫かる

吉田少將惟房の館には打ちつゞきて、松雅梅雅出生し給ひ、班女前亦賢良なるに、春雨老女義に仗りてこれに傳き、粟津山田以下宗徒の家隸、君に仕へて私なれば、一當家の繁昌このうへあらじ」とて、上下安堵の思ひをなしぬ。しかるに叡山月林寺の仲圓阿闍利は、惟房の親族にて坐せしかば、つねに消息してその安否を問はせ給ふに、ある日山田三郎光政うけたまはりて、彼の寺に参りけり。この序をもて光政は、幸崎明神に詣でて立ちかへるに、赤塚といふ處まで來ぬる比及、見る／＼雲のたゞすまひ、山際いと闇くなりつ、時雨のさと降り來りて、八の好景忽地に没し、風又いたく吹きあれて、琵琶の浪音名にも似ざれど、雨衣さへもたせざれば、辛うじて道の次なる、酒屋の軒下に避雨し、しばし霽るゝを待ちたりける。この酒屋のあるじが名を軍介と呼びて、こゝろざま勇く膂力人にすぐれて、拳法相撲を嗜み、義に仗りては財をも惜しまず、頗る志氣ある壯夫なり。こゝ妻を浮草と

呼びて、近曾妻りぬ。又妹に鴉崎といふ處女ありて、よろづふつ、かならで、姿は舊都の花にも劣
らず、膚は比良の雪よりも清くて、年まだ二八とか聞ゆれば、これが爲に心を焦し、あはれわが妻に
もがなと思ふものおほかり。この日軍介は矢走の船便り聞きに湖水のかたにのきて、家にしもあらね
ば、鴉崎は破浮草とともに店をまもりてあるに、山田三郎が年紀二十をも過ぎしとおほしき美男に
て、太刀の飾り衣服のいろなども、すべて女子の愛すべき装ひなれば、芙蓉の眸に、いく度か秋の
波をかよはしつゝ、いと憎からず管待して、少しおくまりたる座敷に請じ、袴の裾にかゝりたる、蹠
揚の泥もわが手して揉みおとし進らせけん、紐さへむすぶ縁となりて、男は従者にしらせじとし、女
は、嫂に覺られじとて、迷に戀の關守をたばかり、しばし手枕ならふるに、はやくも雲散り雨散みに
ければ、光政も今はとて立ち出でつゝ、浮草にも思はざる鹿みの程をよろこび聞え、洛の方へ歸りゆ
けば、鴉崎は今更に、あふにかひなき別れをはかなみ、なほ降れかしと思ふ雨のあやにくに晴れわた
れど、胸のみいと曇るめり。かくて後山田三郎は、主の使してをり、叡山に登る毎に、軍介が店
に憩らひ、外ながら鴉崎を見もし見られもしつ。三たびに一トたびは、いと稀なるあふせもありて、
潛かに住家をしらせ名をも告げて、心くまなく相語ひけり。兄の軍介はかかる事ありともしらず、
ある日妻の浮草に妹が重をいひ出でて、「彼も今は年來になりぬれど、わが家元來貧しければ、婿を

らむよしもなし。さればとて丈伸びたる若草の、笹をも超え人も結ばば、生涯をあやまつ事なきにしもあらず、とかく然るべきかたへ給事させて、都の手ぶりも見做はせたらんに、兄が家にあるには勝るべし、この事何とか思ひ給ふこといへば、浮草も、いと理にこそと應へて、聽て鳩崎に情山を聞ゆるに、鳩崎は彼の人のいよ、遠くなりゆかんとて、いと物憂くはあれど他家に縁結びて、夫定めせられんよりは、なほ身の幸なりとおもひかへし、左も右もとうけ引きつ、潛かに山田三郎が来るをまちて、わがうへを告げしらせばやとおもへども、待てば又その人も、この二十日あまりは影だに見せず。軍介はその日より、彼此人に語りひて、妹が給事すべき由をたのみ聞ゆるに、ある人の償きを得て、吉田少將惟房の館へ参りつかふるに締まりしかば、鳩崎歡び思ふこと限りなく、寔に光政どのとは過世よりの縁にやありけん、洛にはやんごとなき御方もいと多かるに、彼の人の主君にておはします、吉田の家へまゐり仕ふるこそうれしけれ。とは思ひつ、人にしらすべうもあらねど、何となくいそがれて、遂に北白川の館へまゐりしかば、聽て班女前のほとりちかう召しつかはれたり。しかれども衣食足る家には禮節ありて、男女席をおなじうする事あらざれば、はじめ思ひしはそらだのめにて、光政と面あはする事かなはず、わが上を告げ遣るべき使もなく、只山鳥の峯上を隔てて、い夜をあかすに異ならず、徒らに兩三箇月を過す間に、なんとなく心持あしうおほゆるは、思ひの雲

の晴れぬのみかは、月の障りも常ならず、只管酸のものを嗜みひと日くとたつほどに、腹のあたり
ふくよかになりしかば、もし赤塚にて彼の人と假初の密事に、情の種さへ宿せしかと思へば我ながら
浅ましく、いよ、逢はまくほしけれど、絶えてよすがもなかりける。されども山田三郎は、かからん
こと思ひがけねば、ある日辛崎のかへさに、軍介が店に憩らひ、從者に晝食たうべさせなどするに、
鳩崎が見えざれば、いと本意なく立ちかへりて、この後月林寺に到るごとにふたゝび三たびその家に
立ちよりぬれど、終に思ふ人にあはず。扱はいひし事も僞りにて、彼いづ地へか嫁入りけん。鳩の海
照る月ならで、移るに安き人ごゝろかなと恨みながら、うちつけにその往方を問ひも定めずやうやく
思ひたえて、遂に彼處へは憩らはずなりぬ。その頃しも班女前は松稚梅稚二人の幼きを將て、吉田
の神社へ詣で給ふ事ありけり。家隸には松井源五純則、山田三郎光政、この日の俱をうけたまはり、
春雨老女はさらなり、鳩崎も五七人の侍婢とともに冊きまゐらせ、被目深にいと花廳に裝ひて、白川
の館を立ち出づるに外めづらしき女どちは、鳥も箆を出でて茂林に入り、魚も網を漏りて荷下に遊ぶ
に異ならず。彼方此方見かへるに、はからずも鳩崎は山田三郎と目を注はせ、遂にこはいかにと胸う
ち騒げども、人日いふせければ、つゆばかりも言葉を得かけずして空しくかへり別れけり。かかりし
程に山田三郎は、鳩崎がおなじ館に給事することを、はじめてしりて不審しみ、その夕つら／＼思ふ

やう、わが母子、近曾常家に召し出されて、君恩又莫大なれども、いまださせる奉公をたさず。しかるに鳩崎みづから禁めずして情をはこび、そのこと發覺れたらんには、忽ち不忠の人となるべし、さは結び果てぬ縁なれども、愁ひにおもひたえよといはば、彼いたく恨みて殊をや惹きいだすべき。人傳ならでこのよしを聞えまほしと思ひつゝ、只管こゝろを苦しめける。こゝに又松井源五純則は、その心ざま粟津山田には遙かに劣りて、人の才を猜み、おのが權に誇り、財を見ては志を移し、色を好みて義に違ふこと多けれども、口に忠言を吐きて君を欺き、その權威かへつて彼の二人が上にあり。件の源五、班女前吉田詣の折しも、影の侍婢を見るにその顔色鳩崎におよぶものなく、寔に花の中の花なるに、彼亦山田三郎におもひを運ばし、しばし此方を見かへりたるを、源五はわれにこゝろありとして、惑ひあくがれ、思ふ程をも聞ゆべき、媒もがなとしのびにその人をえらむに、羣柏といふ童屬従のいと伶俐しきが、許されて後堂へも常に參るなれば、彼をこそと思ひて、さまじくまに賺しこしらへ、汝わが爲にこの艶簡を、かかる人に贈りたらば、何にまれ欲しとおもふものを進らすべし。かならずしも人になしらせ給ひそ」と語りひ課せて、袂よりそとさし出すを、羣柏受けとりて、「こゝろ得侍り」と應へもあへず走りのくにぞ、源五は世にも嬉しけにて、既に戀のかなへる心持せり。さて羣柏は彼の艶簡を懷に挟めて局のかたに判り、忽地に思ふやう、鳩崎は雨夜の品定め

にも、山田三郎どのの事をこそいひも出づれ。源五どのの事はたえて聞えざるを、今明白に鞭簡のしを告げんには投にかへさる、こともあるべし。とかくこれは山田どののよりと傷りて、その回答をも聞くこそと深念しつ、童には似けなくて、戀にはいとおとなびたり。かくて羣柏は鳩崎が傍に人なきを見て、親く歩みより、「こは山田三郎どののより進らせ給ふなり。」酒めきて、源五が鞭簡をうし出すを、鳩崎はとる手も遅しとうち披きて讀むに、思ひの外なる筆のあやに、いと不審しければ、やがて巻きをさめつ、羣柏に對ひ、「これは御身が傷りにて、山田ぬしより贈り給ふにはあるべからず。誰にか頼まれ給ひし、もし明白にその人を聞え給はずば、忽地に訴へあけて、辛き目見せ侍りてん。なほそれにては置み給ふか。」とて、氣色あしう問ひ詰むるに、羣柏大いに迷惑し、「實はかかる筋なり」とて、源五が頼み聞えし事、わがたばかりを私語せば、鳩崎聞きてしばし尋思し、「今まのあたりこの鞭簡を披露せば、その罪御身が上に係り給はん痛ましさに、これをば火に投れて灰ともなすべし。もしこの志を矯しとも思ひ給はば、わらはがたのみ進らす事を、うけ引き給ふべきか。」といへば、羣柏一語にも及ばず、「とく聞え給へ、われその事をなし果し候はん」と答ふ。「しからばこれを山田ぬしへ進らせて給はれかし。又源五どのとやらんが返辭いかに」と問ひ給はば、「未だ便宜なくてしり難し」と答へ給へ。かくて後わらはよきに計り侍らん。よくこゝろ得給へ」と諭しつ、箒で便りあ

らばとおもひて、寫めおける一封に、又一筆書きそへて、これを羣柏に遞與しければ、うち點頭きて外面へ出でぬ。このゆふべ山田三郎光政は、宿寢して寢よとの鐘をまち顔に、ひとり燈に對ひて物の本讀み居たるに、思ひもかけず羣柏が手より鳩崎が消息を得て、且うれしみ且いぶかしみ、封皮切りときてこれを見れば、過ぎにし頃よりこの館にまゐり仕ふれども、告ぐるに由なくて徒らに月日をおくりし事。班女前が吉田の神社に詣で給ひしとき、親しく見えながら、一言も聞えずして本意なく別れし事など書きつけ、さて赤塚にて既に御身の胤を懐胎り侍りつるを、しらでこへ参りに、今はや、月もかさなりていかにともすべなし。このごろの心苦しき、さこそと察し給へかし。とてもかくても露の玉の緒、絶えなんと思ひ定め侍るなど、いと哀れに書きとゞめ、又別に、くはしうは見参にて申すべけれ。今宵後園の樹の枝に、紙を結びさけておき侍るなり、それを柴にして、如此々々の處まで潜びて來たまへ。ころは甲夜の聞すぎてこそ、と書きそへける。光政は首尾打ちかへしつ讀みくだちて大いに驚き、彼既に有身りて月も重なりたらんには、縦ひ故郷にての事にもあれ、ひそかに語りひたるものは我なれば、その罪いかでか脱るべき。こはよしなき調戲して、この福を醸せしこそ越度なれ。さればとて彼ひとりを苦しめんも、丈夫のこゝろにあらず、とまれかくまれ彼處に潜びて逢はばやとおもひながら、その夜は障ることありて終に果さず。鳩崎は、光政が相圖を違へ

たるを深く恨み、次の日再び艶簡書いたし、め、彼の羣柏を相請ひて贈り來したれば、山田も憚ると
にはあらねど、かかる事にて黙止せしなり、今宵はかならず逢ふべしと回書ものして、又羣柏に還與
せしを、松井源五闕窺てふかく怪しみ、竊かに彼の童を物陰に招きよせて、縁由を詰り問ふに、始め
こそいはざりけれ。いたく威されて終に脱るゝに言葉なく、「始めは如此々なり、終りは同様々々な
り。」と、おちもなく告げしらせ、彼の回書をさへとり出でて見せにければ、源五は打開きて讀みもを
はらず、忽地怒れる氣色面にあらはれ、數回大息吐きていへりけるは、「汝愁ひによしなき詭りして
却つて彼等に謀られたり。然れば汝はわが斷腸の仇なり、所詮刺し違へて死するの外なし。」といきま
きて、刀の鞘を握りもてば、羣柏驚き恐れ、顔色土のごとくになりて、只、「恕し給へ〜。」とて泣き
にけり。源五はこの形容を見てから〜と打笑ひ、再び聲を低うしつ、「やよ羣柏深くな恐れそ、こは
わが戯れなり。なほ童なる人を憎しとて何とかせん。しかはあれど、今又たのみ聞ゆる事を、懲りさ
まになし果さずば、その度は恕し難し。承け引かんともうけ引かじとも、心を定めて回答へ給へ。」と
て、威しつ賺しつこしらゆれば、羣柏は命とられんが悲しさに、おそる〜諾ひしかば、源五は額を
さしよせて、しばし私語きつ、やがて光政が回書を忙はしく巻きこめて返し與へ、やをら内外に立
ち別れぬ。彼の源五何事をかさ、やきけん、しるもの更になかりける。

四 班女花に寄せて黄金を賜ふ

この時彌生の中旬にて、園の花色香妙に咲きみだれ、盛りも今二三日に過ぎじと見ゆるものから、少將惟房は、毎日に院の御所四辻殿へまゐりて、家に在することも稀なれば班女前も自ら籠りがちにはあれど、聖見んとおもふ心のあだざくら、夜はあらしの吹かぬものかはとも詠めるものを、無下に青葉となさんもいとほしとおほして、ひとり蠟ちかうたち出で給ふ折しも、さら／＼と吹き入る、風に轉ばされて、裳のほとりに來るものあり、とり揚けて見そなはするに、よくも巻きこめざる艶簡にして、山田三郎が鳩崎への回書なり。うちもおかれず潛やかに讀み果てて、これをば袖の裏にかくし、さもあらぬおもちにて、春雨等を召しつどへ、けふは殊さら麗かなるに、松稚梅稚を伴ひて、園の花見せばやと思ふなり、とく用意せよと仰するに、皆うけたまはりて俄頃、幕を張らせ、毛氈布きまはしなどする間に、班女は幼少き二人を携へて出でさせ給ひ、晝日遊びくらしめてかへり入り給ひぬ。かくてその夜もや、更けゆくころ、班女前はひとり起き出でて、燈を掲げ、宿寝りして後方に臥したる鳩崎をよび覺しつゝ、ほとり近くまねきよせ、この艶簡よみて聞かせよとて、一封をいだたさせ給へば、鳩崎はそのころを得ず、小夜深けたるに何事のおはしまして、かかる事を仰するかと不審しみながら、半ば讀みもをほらす大いに驚き、こは山田どのより、今宵彼處にてあはんとての回

書なるに、いかにしてかこゝには藏め給ふと思ふに、只願胸のみ打ちさわぐを、座女はなほさらぬ風情にて、「その艶簡おほえありや。」と問ひ給ふにぞ、今は置すことなく、許し給はじと思へばなか／＼に心を定め、赤塚の遊雨より、山田三郎と密會ひて、有身れるをもしらす此の節へまるし事、松井源五が草柏をもて、艶簡を贈り來せしより、彼の童を媒として、始めて筆に言の葉をかよほせし事など、或ははづかしみ、或はかしこみて涙さしぐみつ、申しけり。座女前つく／＼と聞き給ひて、「しからばこの艶簡をばいまだ見ざるか。」と宣へば、「問はせ給ふごとく、只今讀み侍るぞはじめなる、何ものか進らせけん、いとほらあしくもはかりけるものかな。」と申すに、座女前點頭きて、「これは人の見せたるにはあらず。わが身さきつ時、しか／＼の處にて拾へるなり。おもふに草柏が誤りてとり落せしか、源五が彼の童を相語ひて汝等を罪せんために、しかからはせたるなるべし。汝は斬參の事にしあれば、縁故はよくもしるまじ。彼の山田三郎は、年來わが身を養育みたる春雨が一干なれば、松稚梅稚が爲には、よき後盾ならんとて、殿にもわきて恩惠高くおはしますを、よからぬ所爲をしいだして、家の法度を犯す事、人たるものの心ならんや。縦ひ汝がこゝへ参らざる前に契りたりとも、今もろともにその家に仕へながら、なほ筆に思ひを述べ、情をはこべる罪は、いひとくとも脱れがたし。しかはあれ、その善悪はわが心ひとつに定むべきにあらず、殿には四辻殿にまゐり給ひて、いま

だ退き給はねば、かへり給ふを待ちて聞えまるらせ、ともかくも御こゝろに任せ侍るべう思ふなり。
やよ鳩崎よくわがいふ事を聞けかし。弱人の風俗にて、戀にその身を過つ事、世になき例にはあらねど、物に迫りて枉死し、身後の恥を曝すものは、親兄弟にもいくその哀しみを見せ、愚かなるもの
譬へにもいひ出でられて、終にその恥辱を雪むるの時なし、況んや君に仕ふるもの、罪をまたずして
自ら刃に伏すなどは、たえてあるべき事にもあらず。よしや汝は何とも思へ光政はよく辨へてもあ
りなん。いかにさはあらぬか」と宣へば、鳩崎は始めより頭をだに擡げ得ず、情ある主の言の葉を顧
みる程鈍ましく、只涙のみはふり落ちて、袖さへ絞りあへざりける。班女前もいと事わりにおほしけ
ん、重ねてその事をば宣はず、俄頃に物を思ひ出せしおももちにて、わが身けふ園の花を詠ぞし歌の
いまだこゝろに稱はざれば、枝にも得著けざりしに、今はからずも一首の趣向を得たり。汝彼處にゆ
きて、築雁のほとりなる、ふりたる櫻の外面へ木垂れし枝に、これ著けて來れかし。小夜深けたれば
とていたく怕れて、人な驚かしそ」と仰せつゝ、墨すり流してさら／＼と書きつけ、その短冊を遞與
し給ふも、元よりこゝろありけなり。鳩崎はなほ果てしなき涙は物かは、胸の中さへかきくれて、立
つ足も定かならねど、生命の己みがたきに、獨り園に出で池を繞り木陰を潛りて、彼の木の下に到り
しかば、山田三郎は相圖を違へず、溝よりこゝに竊び居りて、月明りにと見かう見つ。木立の間を洩

れ出でて、「なぞてかくは遅かりし。いと待ち憂かりつる。」とて潛めきまれば、鳩崎やがて走りより、いはでまづふる袖の雨も、音漏らさじとやわが爲に、池の蛙もしば鳴きて、月さへ更に嵐なり。光政かいよせて、その背を拵ておろし、「過ぎにし事はきのふより、筆にしらせたれば、且く措く。御身が此の頃の物思ひ、さこそと推量る程わが身に迫りてとかくいふべうもあらず、只一ト度は思ふかきりをも聞えてこそとて、かく後くらき事をなしつ、とく涙をとめ給へ。泣きては果てしあらじ」といふに、鳩崎やうやく臉をかき拭ひて、「いふべき事も聞くべき事も、今はそのかひなき身となりぬ。そはけふ御身が返事し給ひつる玉章を源五にや謀られけん、わらはだに見もせぬを、斑女御前の拾ひたまひて、夜も深け人も定まりてのち、かかる侘事ありし。」とて、首より尾まで涙の隙に物がたり、彼の短冊をとり出せば、光政は聞きて事毎に針もて胸を刺さる、如く、「わが過ちをわれから責めて、理なき身を恨むる外なく、なかなかに思ひたへながら、なほ不審しき真夜中に、その短冊を著けよ。」とて、この樹の下に來し給ふは、わが潛びて居る事をしろし食してや逢はせ給ふ、こはおふけなし。一と畏みて、彼の短冊を押し戴き、月影にこれを見れば、

山かざの吹きし折らずば散る花も、又來る春にあはざらめやは
と書き給ひぬ。光政しばく打吟じて、忽地に濟々と落涙し、一色に耽りて忠も義も忘れたる愚者を、

憎しとも思されず、花に嵐の譬へをもて自害をとめ給ふとおほし。抑野上に在せしときは、もろ共に生ひたちて姉と呼び弟と呼ばれ、わが母の主君ともしらずで過ぎぬれば、年來の愛きには仕へざるものを、今少將の御内にて何がしありと人もしる身の幸はなべてみな、君と親との恩恵なるに、よし忠臣とならずとも亂離の人となり果てなば、母が多年の誠忠をも、徒事となさんこそ、不忠のうへの不孝なれ、こは面なしとて己が隨に、死するにも死なれざる情ぞ絆しなりける。」とて、物には勇き壯夫も、女々しきまでにかき口説けば、鳩崎いよ、悲しびて、「寔に御身とわらはとは、過世よりの悪縁にや。一つ館へ給事に、参るは後の妹ともしらずで漫に歡びしを、今はた思へば淺はかなる、女ご、ろにて侍るなり。とてもかくても脱れ得ぬ、罪とはしれど有身りて、五月餘りとおほゆれば、その子も人の形つくり、父にや肖けん母にや肖けん。そをよもしらず聞きより、くらきに歸すがいとほし。」とて、今やはじめて思ひしる、親の心の鳥夜を照らす、眞如の月も西の天へ傾きて、遠き寺々の鐘の音聞けばいと深けたり。光政猛に心づき、「かひなき歎きして時をうつし、斑女御前のいかばかり、待ちわびてや在すらん、あふせも今宵を限りなり。只潔く立ち別れ、刃の鏢となる日にあはめ。そはともあれ被處の花に、とく短冊を著け給へ、とく／＼」といそがしたて、是れかそれかとてさし出でたる枝引き裁めんとするにはからずも、一ツの財布を探り當て、うち驚きつゝ鳩崎をさし招き、「これ

見給へこの枝に、夥の黄金をかけられたるは、班女御前が吾儕に、私かに賜はる物にこそ。これをもてふた、び歌のこゝろを考ふるに、山嵐にちる花も、折らさば又來る春にあはん。さらば笛を脱れ出で、歸參の時を待てよとは、花ものいはねど存命ふる、たつきにせよとてかけ給ひし、謎も財布もいと重き、恵みは季札が朝に勝れり、こは思ひかけずと許りにて、且かしこみ且感する、聲さへしのびしのびなる。鳩崎ももろともに、忝きにはふり落つる、數行の涙とゞめかねて、流れゆく身を泣くのみなり。かくて山田三郎は、彼の財布と短冊を、おし戴きて懐にし、暫し彼方を伏しをがみ、かからせば甲冑の間に、母にも見えて外ながら、身の暇乞をもすべかりしに、行きては歸る時しなき、別れとはなむけるかな。きは夜もあけば例なき、鴻恩を空しうせん。誘給へ」といそがして、下插りの袖解きもあへず、閃りと櫻の枝に投げかけ、これに携り携らせて、築垣を越えんとするに、鳩崎は目眩きて、足さへさらに定め得ず、危くも又携る手に、杖も揺へて罪々と、散りかゝる花は雪ならで、雲の極わたれる心持し、辛うじて外面へ、やをら下りたちて息も喘ぎあへず、近江路を投して逃れ去りぬ。話この下になし。さる程に班女前は、獨り森ねもやらで在せしに、鳩崎終にかへり來れば、彼等かしこくもわが心をしりて、奔りつらんとしつゝなほ目睡みもし給はぬに、春の夜なれば短くあけて、少將兼房も、四辻殿を退きて、直に歸り給ひしかば、班女はしのびやかに、山田三郎と

鳩崎が事を聞え給ふに、惟房うち點頭きて。「いしくも計りつるものかな。彼等もしその過ちを人にもいはれ、われも面のあたりに聞くときは、いかに助けんと思ふとも、家の法度は破りがたくて、已むことを得ず首を刎ねるにも至るべし。しかれば、光政が一旦の過ちによりて、その母春雨が年來の忠義を空しうせんも便なし。彼が色に惑ひて、君と親とに遠離るは、としの弱きが致すところなり。原來その志の信なる事はわれよくしりぬ。必ず逐ふべからず。」とぞ宣ひける。春雨はこの言を傳へ聞きて、感涙雨のごとくにて、わが子の往方はつゆばかりも念とせず、いよ、君の爲には死を用てし、高き恩恵に答へたてまつるべしと、思ひ定めぬるもまた哀れなり。扱も松井源五純則は、羣柏を相語ひて、山田三郎が薙簡を主君出居のほとりに捨て置かし、彼等を罪せんと謀りつ、なほ心もとなれば、彼の二人が逢はんとて、相圖を定めたる、園の木陰に立ちかくれ、この夜の形容をもしらばやと思ひつるに、班女前春雨をもていはせ給ふやうに、殿には今宵も四辻殿に参り給ひし程に、退出給ふころは夜もいたく深けぬべし。弱ものののみを具し給へば、道の程もおほつかなきに、汝今より御迎へにまゐり候へ。」と仰すれば、源五大いに迷惑して、殿には夜深けて院の御所を退き給ふ事しば／＼なるに、なごて今夜のみかくは宣はすると怪しみ思ひながら、君命辭するに言葉なくて、しぶりもやられず出でのきぬ。扱も光政も鳩崎もたえて阻める人なくて、輒く脱れ去りにける。これ皆班女の恵み

にて、源五が僻みし心をもよく量りて、彼を遠離け給ふになん。かかりしほどに源五は夜あけて後、主の供して館にかへると即て、山田三郎を尋ぬるに、「昨夜鳩崎を將て奔りたり。」と聞えしかば、驚き怒りて彼此に人を遣はし、その往方を捜し索むるに、とみに知るべうもあらざれば、いよ、腹にするかねて、「さても者奴等は果報よきものなり。首刎ねらるべき罪を犯して奔れども、追ひ捕へらるゝ事もなし。かくては忠義を竭さんも無益なり、賞罰正しからぬ家に仕へては、末たのもしからず。」など罵るといへども、粟津六郎をはじめ、皆しらず顔してありければ、源五ます／＼疑ひ惑ひ、もしわが謀計を羣柏が漏らして、君にもその事を聞えたるかと思ふに、忽地影護くなりて、彼の童をあらせては、よき事あらじと深念しつ。ある夜竊かに羣柏を縊死し、屍を智茂川へ衝流して、なほ人の疑はんことを恐れ、白川の館にふりたる杉の樹ありしかば、このほとりに彼の童が草履をもてゆきて、脱ぎ捨てたるやうに拵へおきけり。さて詰朝、「羣柏が見えざる。」とて、人みな普く尋ね廻るに、北面なる杉の木の下に、脱ぎ捨てたる草履あるを見て大いに驚き、「こは羣柏は天狗などいふものに、誘引はれたらとおほし。世に神がくしといふ事なきにあらず、彼は幼きより父母を喪ひて、親族もたえてなき者なれば、殿にも憐れがり給ひつるに、鞍馬愛宕の峯に遊びて、幾年経るとも歸らざば、いとも奇しき身の果てなり。」といひあへりしを、洛中洛外の良賤聞き傳へて、北白川の天狗屋鋪とぞ稱へけ

る。衆人はかくもいへ、少將と班女のみ件の事をしりて在せば、羣柏が往方定かならぬも、源五が所爲にはあらぬかと疑ひおほして、はじめの程は彼を用る給はず、よろづ粟津六郎のみに委ね給ひければ、源五はますく、面目をうしなひて、ふかく憤りおもふといへども、更に色にもあらはさず、信しけに仕へける、いと憎むべき佞人なり。

五 龜鞠俳優して賊僧を欺く

こゝに亦曩に叡山月林寺に登りて、沙彌となりたる行稚は、成長るにしたがひて、心さまいよ、正しからず。師父の教誡をも用るずして、行ひ放なれば、親しきも憎みおもはざるものなし。その身平家の嫡流朝敵行盛の子にしあれば、とく喪はるべき首なるを、惟通に繼がれたれば、心を菩提の道に委ね、眼を寂滅の教へにとめて、なき父母の後世、一門の冤魂得脱をものはかるべきに、出家人の作行をつゆばかりもなさずして、酒を嗜み色に惑ひ、十七といふ秋に辛崎の農家、なにがしが女兒を誘ひ出し、往方もしらすなりにけり。こは惟通の病死せしころなれば、彼の家より探し索むる事なども思ふ程にはせざるによりて、輒く脱れ課せて、彼の女子を携へ、しばし信濃路に足をとめてたるに、元來その性便なれば、彼の國の住人仁科二郎平盛遠といふものの庇みを棄け、遂に盛遠が義子となりて、仁科平九郎盛景と名告り、次の年鎌倉に赴きて、只願奉公を望みけるに、ある人の吹

學によりて、執權義時朝臣の舎弟、北條相模守時房の御内に召し加へられ、こゝにて子ども一人まで出生す。しかるに冢子惣太九歳、女兒龜輪七歳なりける頃、盛景親子忽地鎌倉を追放せらる。その故いかにと尋ぬるに、彼の平九郎盛景、年來身の行ひよからず、しばし若殿原を大磯化野坂の遊里に誘引ひしかば、これが爲に財を喪ひ、色に溺れて奉公等閑なるもの夥なり。こゝはみな仁科平九郎が所爲なり。と衆評一決せしをもて、かかるもの召仕はれんには、土庶の風俗ますく亂れなるとて、俄頃に追放せられたり。されど年來食りたる財少なからねば、駿河なる喜瀬川の郷に居を下りて、女兒龜輪に歌舞俳優を倣はせ、ゆくすゑはその色をもて世を安くわたらんとはかるに、冢子惣太は幼少きより膽太くて、動もすれば友どちと物あらがひをしいだし、おのれに年の勝れるにも傷けなどし、又常に父母の金錢を盗み出して、口腹の爲に用ひ盡し、後には他に借りて返す事なければ、その解りみな父母の上に係りて、これを償ふに少々の事にあらず。佞奸邪智なる平九郎すら、わが子の悪行に呆れ果て、ある日懲らさん爲に甚く打擲せしを、惣太はふかく恨みけん、その夜手ぢかなる五兩あまりの金と、父平九郎が行稚と呼ばれしむかし、月林寺にて祝髪せし時、行盛の記念なり。とて、惟通より相傳したる、備前の家次が自他平等即身成佛の戒刀を盗み出し、いづ地ともなく走せ去りて、ふた、び歸らず、こは惣太が年十二歳の春なり。父もこれに驚きて、普くその往方を索ねしかど、た

えて音づれあらざれば、母は只顧憂き事に思ひ細り、長き病著に貯祿も残りすけなく、遣ひ果せるかひなくて、死出の旅路に赴きしかば、平九郎は妻と愛子をうしなひて、追に心ほそくやありけん、ますます龜鞆を慈しみ、只その成長るをたのみに年月のたつを待ちわびぬ。さる程に龜鞆は、立舞ふこともほやく熟し、眉は初春の柳葉に似て、雨の恨み雲の愁へを含み、顔は三月の櫻に異ならず。風情月の意を藏せり。寔にその容止の勝れたる事、鎌倉はいふもさらなり、洛にも父類あらじと見ゆるにぞ、三五の秋の半ばより、白拍子といふものになりて、父を養ふ便りとせり。いぬる建久年中、この喜瀬川に龜鶴といふ白拍子のありけれど、それにはなほ遙かに勝りて、このごろはいと稀なる、田樂刀玉などすべて俳優をもよくし、鬼女怨靈に打撈つときは、花の顔忽地にいとおどろしく、眞僞を慢つばかりなれば、その名都鄙にかくれなく、これが爲に心蕩け、魂を奪はるゝもの少なからず。龜鞆はかく姿こそ美麗なれ、心ざまのよからぬ事は、父にも兄にも劣らざれば、只錢あるに媚びを獻じて、實の情は露程もあらぬに、なほ曉らすしてその強に係り、産を破り家を喪ふ不幸の子弟いと多かりし程に、その親たるものふかく憤り、所詮鎌倉に聞えあけて、龜鞆を追ひうしなふべし、もし彼の親子があらそひ阻まば、縦ひ間撃にしても、この福神を譲はめなど、かしがましく罵りあへれば、平九郎もれ聞きて冷笑ひ、こゝにて世わたらずば月日は外に照らぬものかは。さらば洛へ上

りてこそ運の程をものはかるべけれ。今は影の年を經たれば、洛の人も我を行稚なりと、認れる者はあらじと尋思し、俄頃に家財を清却して、龜靴を轎に乗せ、飽くまで廣言吐きちらしつ、遂に喜瀬川を起程ちければ、凡そ子をもたる人として、これを歡ばざるはなかりしとぞ。かくて龜靴親子は、その日一里あまりのゆきて、薩陀山のこなたなる、倉澤といふ處に宿かりたるに、鄰れる座敷に弱き旅僧とおほしき二人來て、假初に路の疲勞を問ひ慰めしが、彼の僧やがて紙門を細やかに開き、面のみ半ばさし出していへりけるは、「見まゐらするに近會喜瀬川に名だたる、白拍子の君にこそ。愚僧は二島の神社のあなた、何がし寺の法師なれば、日來彼の郷をも行きかひをるをもて、はやくその人とはしれり。さて親子づれにて旅だち給ふは物詣なるべし、何れの靈場へか参りたまふ」と問ふに、平九郎答へて、「否さる樂しき旅にもあらず。洛はわが故郷なれば、今度おもひたちて上るにて候」といふ。兩僧聞きて、「さは遙けき路なりかし。わが身出家人にあらずば、尾張路まではもろともに赴くべきに、形に恥ぢてかからん事は影護し。洛はよろづ風流びたれば、いよ、世渡るかひもありて、息女の名も猶高く聞えなん、今宵は江口に宿りを求めし、圓位法師が風情あり」となごうち戯れ、「とく睡り給へ」といひかけつ、紙門を舊のごとくに引き立てて、各臥房に入りける。平九郎も龜靴も、合宿は法師なるにこそ、乃放し、啓行せしその日なれば、甚く疲勞れて熟睡したるに、忽ち龜靴が叫苦ぶ

一聲に平九郎驚き覺め、岸破と起きて見返るに、燈滅えて善惡をわかねば、大いに焦燥しながら彼此をかいて探り、「龜鞠々々」と呼び寤せども、たえて應へなきに、ますく周章き、鄰れる紙門に探りよれば、人の出入る程ひらきてあるにこゝろ疑ひ、衝と入りてよく視れば、縁づらの遣戸さへ明けはなちてあり。天は結陰りたれど、月も出ぬとおほしくて、彼處より引くあかりに、なほ四隅を尋ぬれば、二人の僧も臥房にはあらず。さては者奴等は念秩にてありしを、曉らすして女兒を奪ひ去られしこそ口をしけれ。いで追ひとめんといきまくを、主人もれ聞きけん、燭を乗らして忙しく走り來れり。平九郎見て、「如此々々の事あり。」と告げもあはず、刀を取つて追はんとするに、行李さへ盜み去られて、一物も遺し留めねば、憤りに堪へず。裳を棄けて直に庭門より走り出づるに、こゝより脱れ去りたりと見えて、一帶の草皆踏みわきてありしかば、これを葉に追つ蒐けつゝ、薩陀山の麓に到れば、折しも雲月を吐きて、路もいとあかきに、件の賊僧一人は龜鞠を小腋に抱き、一人は平九郎が行李を背負ひ、飛ぶが似くに彼の山へ走り登るを、叶嗟と心あせれども、遙かに後れたれば、左右なくも追ひ著き得ず。龜鞠は心飽くまで退しければ、かかる時にも敢て騒がず、かき抱かれつゝ、鬚結ふり解きて、丈なる黒髪を亂し、みづから小指を嚼み切りて、その鮮血をもて満面をあやしう彩色りたるを、賦はしらすして山の半ばなる、地藏堂のほとりまで來にけり。この所路狭くして鑿手は青

山峽々と聳え、龜手は蒼海渺々として、水際に至りて數百丈、見るにさへ口眩くる、彼等はものともせず、こゝにきたりてはじめて足を停め、抱ける龜胸を扛きおろせば、こはいかにさしも美かなりし姿は、忽ち惡鬼羅刹と變じて、引きも裂くべき勢ひなれば、二人の賊僧おどろき怖れ脱れ走らんとするるとき、一人岨を踏み外し、撲地と倒れて滾び落つるを一人扶けおこさんとて、その手を楚と握りあひしが力及ばずしてもろともに、底さへしらぬ海原へ眞逆さまにぞ陥ちたりける。龜胸は思ふ程に謀り謀せて莞爾とうち笑み、裳の塵をかき拂ひて、舊の路へ立ち歸らんとするに、「こやノ。」と呼びかくるを、誰ぞと見返れば人もなし。いと怪しと思ひながら、又走り去らんとするに、呼ぶ事はじめの如くなれば、さすがに男々しき女子なれども、何となく身の毛いよたちて、行きも憚める氣色なり。時に地藏堂の扉を、裏より左右へきと開き、頭巾日深に被たる荒男、獨歩に搖ぎ出でて、龜胸が後より項髮撫手と引つ掴み、汝甚だ膽太し。鬪の二人は欺くとも、いかでか我を誑き得ん、さらば妖の程を現はすべし」と罵る折しも、平九郎はや、この處へ追ひ來り、この形勢を見て、なじかは少しもたのたふべき、手ごろなる杉の枯枝あるを見て、搔き取りはやく打つて蒐れば、彼の男は龜胸を突き放ち、刀を引き抜きて逆へ戦ふを、平九郎つと入りて、直に刃を打ち落せば、彼も覺えある者にて、かゝい潛りつゝ、引つ組みたり。元來巖石尖なる細路の、石滴さへ溜り流れて、いと滑かなるを、上を下へ

と挑み争ふ程に、終に組んだる手を放ち、平九郎は離手の谷方へ顛びかかり、荒男は離手なる海に滾び落ちて、生死もしらまなりにけり。龜輪は父がいと危かりつるを見て、只と背に汗を流し、彼此を走り繞りつ、せんすべなげなり。されど平九郎はさいはひにして、ふかくも陥らざれば、藤蔓にとりつきまどしつ、辛うじて舊の處へ跛ひ登りしが、こゝに來りぬるときは、彼の荒男に敵せんと思ふのみにて、龜輪が異なる景運を認めず。この時はじめてその模様を見て大いに驚き、全く妖怪なりと思ひしかば、矢庭に石を拾ひとりて打ちかけんとするを、龜輪瞻映掌きて「や父御、わらはをいかにし給ふ。」と叫ぶ聲音の疑ふべうもあらぬわが女兒なりければ、眼を定めて熟視るに、例の俳優して鬼女に打扮ちたるなれば、から／＼と打笑ひて、まづその故を問ふに、龜輪は二人の賊僧を誑かんと爲に、指を嚙み切りて顔を染めたる事、彼の賊どもこれに膽を冷し、脱れ去らんとして悞つて海原へ滾び落ちし事、又盜まれたる行李刀なども賊が背負ひて陥りたれば、とり復すに由なき事、是彼すべて物がたれば平九郎ふかく愁へて「行李の裏には路銀をも入れおきたるに、今是れを失ひては、洛へ上るよすがもなし。さればとてこゝより喜瀬川へ立ちかへらば、世の胡盧となりなんも口をし。」とやせましかくやせまし」として、親子さし對ひて談合するに、龜輪地藏堂を指さして「彼の男が堂の内より出でたるをおもふに、夜な／＼こゝにありて引割する、山客の魁首なるべし。しかれば彼に些の物

なき事はあるまじきに、尋ねて見給へ。」といへば、父もけにと承引きて、まづ外面よりさし覗くに、
たえて人もあらざれば、即ち堂の内に入りて見るに、只一ツの笈に木像の阿彌陀を安置したると、酒
の香のみして、裏に物なき瓢一ツの外に一箱の錢もなし。こは用なき笈佛に、わが影の路銀を換へて
何かせんと打腹たちて、其處を走り出でつゝ、打ち落したる荒男が、刀を拾ひとり月影にこれを見れ
ば、鑰に八ツの文字ありて、自他平等即身成佛と鐫り著けたれば、忽地駭然とうち驚き、「この短刀は
わが稚かりし時、卜部惟通より授かりしを、六年以前惣太が家出したる夜に、携へゆきたるものにこ
そ。しかれば彼の荒男は、我が子惣太にてありつらんを、年を経て稚貌もうせ、しかも眞夜中なるに
こゝろ遽しければ、それかとも思ひかけず。父が手づから千尋の底へ、覗びおとせしこそ淺ましけ
れ。こは、何とせん」とて、愁傷大かたならざれば、龜胸も忙然と逢けき海を直下して、兎惣太が必
死を哀れみ、悪獸もなほその類をおもふ、恩愛の一條のみ、善惡邪正の差別なく、漫に落涙したりけ
る。且くして平九郎は、彼の笈を扛きおろし、「これもわが子の形見なれば、われは今よりこの笈を用
て、廻國の行者に打扮ち、縦ひ路すがら人に一錢を乞うても、洛までは至るべし。御身は又笈を深く
して、田舎女兒の假初に、物詣する如くに見せて、父が先方後方にたち、道連ならぬおももちして、
進まず後れず來給へかし。阱もて虎を獵るものは、その皮を剥がんが爲、綱して籠を漁らものは、

その甲を取らんが爲なり。御身あまりに妍くて、且装ひも花麗なれば、却つてかかる禍あり、しかしたまへ。」と説き示せば、龜胸も、「いと理にこそ。」と語ひぬ。さて平九郎は、件の戒刀をば龜胸にかくしもたせ、わが身は笈を背にして、行者の模様にかいつくろひ、再び倉澤の旅宿へは歸らさ、親子山路を西へ下りて、浦田川を渉る時、龜胸は河水を沃ぎかけて染めたる顔の鮮血を洗ひおとし、舊の美女となりしかば、この川の西なる森を、女體の森と名づけしとぞ。又惣太が淡び墮ちたる處を、親しらす子しらすと呼びて、今もて薩陀山中第一の難所とす。こはみな後人口碑に傳へ聞きて、かかる名をさへ設けたるなるべし。

墨田川梅柳新書 卷之三

東都 曲亭 主人 著

六 盛景影江に胤時を殺す

仁科平九郎盛景が冢子惣太は、十二のとしに喜瀬川を逐電してより、武藏國江戸の片ほとり忍が岡まで逃ひ來けるに、酒屋何がしといふもの情ある男にて、そのよるべなきを憐み、家にとめて小廝となし、兩三年養ひおきたるに元來心こまよからねば、忽地再生の恩を忘却し、主人の錢居多盜みとりて逃けさりぬ。然るに惣太は成長るに及びて身長六尺にあまり、臂力人に勝れて、習はざるに相撲柔術をよくし、且袁彦道が伎にさへ關けて、只顧不義の財を貪り、彼此を徘徊して悪しき友とのみ昵び相語ひ、よろづおのが隨に舉動へども、その徒も彼が右へ出づるものなくて、みな忍の壯夫とぞ稱へける。こは忍が岡にて成人ればなり。かくて惣太は東海道を竊び行き姝き女子を拐してこれを遠き漢へ賣り遷すに、その身價少々の事にあらず、みな淫酒の爲に遣ひ捨てけり。又入間寸平太、麻羽惣哲といふ二人の支黨あり。彼等は行僧に打撈ちて惣太に隨ひ、諸共に悪行おなすといへども、そ

の出没武藏野の逃水より定かならざれば、鎌倉より追捕せらるゝにたえてその所在しれず。さて寸平太磨哲は、龜鞠親子が薩陀山さつたつたの麓に宿かりし夜、惣太が親族なる事をしらねば、途よりつけ來りてその家に歇り夜深けて龜鞠を劫し、行李とともに奪ひ去りて、山ふかく逃れ登りしに、忽地龜鞠が俳優に謀計られて、二人齊しく海面へ墮び落ちぬ。惣太も亦木立に月の影さへ暗くて、父平九郎なりとは思ひかけず、しばし挑み戦ふとき祖を踏み外して前に滾び墮ちたる寸平太が上に落ち重なりし程に、聊かも身を傷らず、思ひの外汐も干て僅かに膝の節を浸すばかりなれば、やをら身を起して見返るに、寸平太は落つる時、岩石に頭を打ち碎きけん、腦みそ出でて死したるが、愿哲は手足を少し打ち傷れるのみにて、巖の間に挟まれて蠢き居るを惣太呼びかけて、「そは惣哲にはあらぬか。」といへば、彼も又惣太が爰に落ちたるをしりて、且驚き且歡び扶け起されて跋ひ出づる手元に、寸平太が負ひつゝ、落ちたる行李を探り當て、「かかる物あり、こはいかにすべき。」といふに、惣太忙はしくかい探りて、「是れを徒らに流しやるべきにあらず、我もてゆかん。」とて、自ら取りて楚と背負ひ、二人辛うじて遙かに西の濱方より上り、再び舊の山路に登りて見れば、旅人も美女もいづ地行きけん影もとゞめず。翻へ地藏堂に置きたりし、笈さへなくなりにつれど、命拾ひしを身の幸ひにして、山を東へ走り下り、夜あけて件の行李を見ればさ、やかなる牌を著けて、仁科平九郎と書い寫

してあれば大いに驚き、さては昨夜眞哲等が奪ひ去りし女は、わが妹龍崎にて、獲み取ひしに反な
りけりと思ふに、さすか淺ましくて縁由を密語せば、眞哲聞きて深く懸懐せり。もと此の惣太は眞哲
無雙の奸謀なれば、眞兄弟の事をあへて思ひ遣るにもあらねど、又おぼつかなき所もあれば、このび
て喜瀧川に到り、外ながら眞哲に父の事を聞かざるに、平九郎は如此々々の故ありて、いねる日龍崎
を時て旅だちぬ」といふ。こゝに於て惣太が疑念、始めて辭けてからく、とうち笑ひ「わが妹の人と
組みて一度も後れをともし事なきに、いひがひなくも摩陀山より渡ぼし落されたるは、父と携ふ戦へ
ばなるべし。千引の石は動かすとも、親には疑たれぬものかな」と眩くにぞ、眞哲もうち笑ひ、やが
て足踏越えして相模路に赴きけり。扱も平九郎盛景は、かかるべしとは思ひもかけず摩陀山にて踏銀
行囊を失ひ、加筋千尋の底へ滾ぼし落せし荒男はわが子惣太なりと辨して、こゝろ更に樂しませ、
彼が傳見なる笈を用ゐて、龜園の行者に打掛ち、龜崎をばつほ折姿にかい續はせて、親子先方陣方に
たち、晝は人の門に立在みて、一腕の飯を乞ひ、夜は月漏る樹陰に臥して、千種の味に露を拂ひ、と
かくして三河國矢野の郷まで來れる折しも、鎌倉武士とおぼしきが、夥の從者を騎て追ひきたり、矢
庭に平九郎を取つておさへ、藤々と縛めければ、平九郎大いに驚き、「こはこゝろも得ぬ。われにおい
て過ちなし、人違へなし給ひそ」といはせもあはず、彼の武士群をふり立て、「汝等に天の難に係りな

がら、なほあらがひ脱れんとするが。近曾忍の惣太といふ癖者、東海道を編歴し、その身は笠を戴き、笈を脊にして、廻國の行者に打扮ち、又二人の支黨を行僧に打扮たせ、専ら人の女兒を拐奪し、非道の行ひをなすこと、既に鎌倉に聞え、執權義時朝臣の命によつて、普く探り索むる所に、今汝が棟樑を見れば、年齢こそ少し長けたれ、惣太が骨相書にこれ一般。かくいふは鎌倉殿恩顧の侍、伊庭十郎胤時なり。いかにわが眼は違はじ、とく首伏して後の答を覽れよ」といきまきあらく責め問へば、平九郎ふた、び驚き、忍の惣太といふは、わが子惣太が事なるべし。さてもはじめ惣太を奪ひ去りし兩賊も、彼が支黨にてありけるかと思ふに、緣故さへ告げかねて、まづ一呆れまどへるのみ。且くしていへりけるは、「某はさる怪しきものにあらす、年來駿河なる喜瀬川に住居いたせしに、打ちつづきて身の幸なく、妻を喪ひ手を先だて、世に捨てつ世に捨てられ、諸國の露場を巡拜せんとて近曾故郷を出でたるなり。元より腰に一錢を携へず、又身に刀劍をも帯びず、これにてその人にあらざる事を察し給へかし」といふ。胤時聞きて冷笑ひ、「汝言語を巧みにして陳ずるとも、誰かこれを實言とすべき。所詮論は無益なり、とく笈を展め檢よ」と下知すれば、皆「承りぬ」と應へしつ、笈の扉を押し開けば、裏には木像の阿彌陀一軀を安置せしのみ、是れかと思ふものもなし。胤時見て、「その木像こそ怪しけれ引き出せ」と焦燥てば、一人心得て、掻いとり捧けてもて來るを、胤時と見かう見

るに、木佛の背に札をあげて、金三十兩餘りを匿しおきぬ。こゝさは疑ふべうもあらぬ惣太なり、かかる
證據ありながら、なほ偽りぬる憎きよ」と罵りて、胤時腰なる鐵扇を抜き出し、平九郎が背に四ツ
息も絶ゆる許りに打ち擲き、笈をば從者に脊負はせつゝ、引き立てゆくにぞ、盛景は呆れに呆れて更に
いふべきところをしらず、我は今まで木像に金の隠しあるをしらず、親子もろ共にいく度か飢ゑに臨
みたる悔しきよ、寶の山に入りながら、手を空しくして縛めらるゝのみならず、彼の金の故をもて、
賊ならずともいひとぎがたし。こは何としてよかるべきとばかり思へど、せんすべなく夢路をたどる
心持せり。この時日もや、暮れなんとして、雨さへしと、降る程に、龜豹は父より遙かに走り過ぎ、
矢矧の橋の上にて待ちあはするに、暫しあれども來ることなければ、こゝろ怪しみて又舊の路へ立ち
歸り、目今父が縛めらるゝを見て、大いに驚き、これを救はんとして走りよらまくせしが、借と心づき
て、こは必ず故あるべし。まづその緣故を聞きてこそと尋思しつゝ、竝松の陰に躲れ居て、首尾を立
ち聞きつゝ、いよ、驚き慰へ、薩陀山にての事を告ぐるとも、その賊はわが兄なれば、猶支黨とせら
るべし。父もこれを思ふ故に、明白には告げ給はざるならん、かかれば彼の武士主從を謀計り、父を
救ひいだすべしとて、既にこゝろを定め、直に間道より走りぬけて、胤時等が來るべき、道の次に只
ひとり、降り來る雨にひたと濡れながら溝然と泣き居たり。伊庭十郎胤時は、仁科平九郎盛景が、鎌

倉を追放せられし頃は、なほ總角にてありしかば曾て認らず、只顧忍の惣太なりとおもひ恨まりて、東の街へ引きたてのけば、一里塚のほとりにいと麗麗なる少女の身は濡れにぬれて、涙の雨さへ降りまざり、よ、と泣きて立在るを、ふかく怪しみてしばし見かへり、みづから立ちよりてその故を問ふに、龜鞠答へて「妾は鎌倉米町なる商人何がしが女兒にて、人肉經紀に拐掣され、わりなくこの處まで伴はれ侍りぬ。殿は正しく鎌倉武士と見えさせ給ふに、家路に送り給はらば、再生の鴻恩忘れ侍らじ、あはれ救はせ給へかし。」といひもあへず、また潸然と泣きにけり。胤時點頭きて「汝を拐掣したるはいかなるものぞ、者奴にはあらぬか」とて、盛景を指し示せば、龜鞠見て「宜ふごとく彼のものなり。さてははやくも殿の生拘らせ給ひたる儘しごよ」といふ。このとき平九郎盛景は、女兒がわれを救ふかと思ふに、その事さへ心もとなければ、いまだ言語をかけるに、却つて父を贖なりと告ぐるを聞きて、ふかく恨み噴るといへども、又明白に親子が上をいぼるるを思へば、別に謀やあるなど、こゝろに問ひ心に答へて、終に何事をもいはず。胤時は龜鞠に敵かる、をしらず、義時の仰せに因つて、日來惣太を索ねめぐり、只今頼め捕つたる頼太を説き聞かせ、「汝こゝろ安くおもへ、われかたらず鎌倉へ將てゆくべし」といへば、龜鞠ます／＼よろこべるおももちして、後方につきてのく事いまだいくばくならず、影の江といふ所に到るに、日は暮れぬも頼りに降る程に「今宵はこゝ

に明さん。」とて、胤時衆人を領て村長が家に敲りぬ。さて従者は一室を敷しく圍繞みて、平九郎を守りかつ、かはるゝ外面へ出でて物食ひなどするに、みな龜胸を憐みて、ふし柴折り燒きてぬれたる衣を乾させ、二舌が脛は年來鎌倉にありながら、米町にかかる美女のあることをも知らざりし。もしけふ惣太を捕へずば、御身は忽地川竹の瀬にや沈みなん、寔に危き事なり。」といふ。龜胸聞きて、「宣ふごとく、不意殿たちの庇みによりて、恙なく故郷に歸り侍る歡ばしきは、いはすとも察し給へ。鎌倉までは遙々の路なれば、なほ憐愍を願ぎ奉るのみ。折ふし雨夜の徒然なるに、心ばかりの杯をも勸めて、慰めまるらすべうは思ひながら、貯祿なければそれもすべなし。疲勞れ給はば瘵癖を打たせ給へ。何にまれわが身になすべき程の事は推辭み侍らじ。」と應へつ、始めて莞爾とうち咲めば、老いたるも弱きも、魂不覺に天外に飛びて、この少女の爲ならば、命をも惜しまじと思はざるもなかりけり。そが中に一人の男膝を進めて、「わが主從鎌倉を出でし日より、彼の惣太を捕へんとて、居多の國々を縦横に徧歴し、朝には星を戴きてたち出で、夕には月に送られて宿り、一日片時も安き思ひをなきざりしに、既にその賊を擄め得たれば、些の歡びを盡すもよかんなん。よしや一椀の村酒なりとも、この少女に酌をとらせて、頃日の疲勞をわすれんはいかに。」といふに、老いたるは頭を掉りて、「否、彼の惣太は、尋常の輩者にあらず、通宵よく守れ。」と、殿の仰せつる物を、何の暇ありて酒

もり遊あそぶべき。」とて承引うけひかず。彼の男重かさねて、「常言ことわざに、死しせる虎いは生いける鼠ねずみに及およばずといふを聞きかずや。彼の賊あしいかに猛まくとも嚴げんしく縛ばめたれば檻けの獸けに等ひし。酒さけを飲のまじといふ人は見みて在あせよ。又飲またのまんと思おもふ者は、一人ひとりばかり我われと共に來き拾しへ、のきて酒さけを買かひもて來きつべし。」といへば、「おい。」と應こたへて二人ふたり人ひと裏うら後に身みづくろひし、松まつふりてらして走り出でしたが、いく程ほどもなく二樽ふたさかの酒さけに、敵たかよき程ほどとり添そへて歸かへりもて來きぬ。さて件の酒さけ數かずを安やす掛かべ、おの／＼圓坐えんざして杯こぶちを右みぎにのぐらし、左ひだりに巡めぐらし、酒さけめきあひて飲のむ程ほどに、龜物かめものはかかる席せきに物もの馴なれたる白拍子しろはくしの事ことなれば、彼かれに強しひこれに勸すすめしかば、ほじの賢さとしぶりたりける老お若わ若わも堪たへかねて、諸人もろびとを掻かきわけ出でで、引受ひきうけ／＼飲のみにければ、夜よのいたく深ふかくるをしらす、北きたの／＼泥ぬの如ごとく醉よひて、豎たてに臥ふし横よこに寝ねび、果はては鞆たづなの聲こゑのみ高たかし。龜物かめものこれを見て、今いまは心易こころやすしと嬉うれしみ、潛ひそかに父ちちか傍そばに歩あみ寄よりて、懐ふところなる短刀たんとうを抜き出でし、縛ばめの索はふつと切り解ときて、しばし密語ひそかごとく折をりもあれ、一人ひとり酒さけを暗たまごらもの、なほ睡ねちでありしかば、この景迹あかりあとを見て大おほいに驚おどき、聲こゑをふり立てて衆人もろびとをよび覺おますを、平九郎へいくさぶは二聲ふたこゑとも叫こゝろばせず、走りかかむつ、枕方まくらたなる、刀やを奪うつて了ちゆうと切きれば、敵たかと倒たれて死ししたりける。衆人もろびともこの胖響ものおとにやゝ覺さめて、「こはいかに」と騒さわぎ惑まどへど、酒さけの酔よひ未まだ醒さめず、起たきんとしては鞭むちし轉まぶを、平九郎へいくさぶは得えたりと刀やを打揮うちかりて、向むかう腕うでのきらひなく、當あたるを幸さいひに、一人ひとりも残のこさず切きつて廻まれば、鮮血あせちあふれ出でづ

る徳目より、酒の香もる、屍は、秋の巷に歸らぬ、酩酊の林に臥せたり。伊庭十郎胤時は、すこし間を隔てて、鑑り燈に對ひ、鎌倉へ聞えあぐる驛織の書呈を書い寫めてありけるに、野原邊かに聞えしかば、筆を止めて耳を働づるに、近く人の言音するを「誰ぞ」と聞へば、「矢張り作はれぬらざたる女子なり」と答ふ。胤時見て、「今外面の頼りに騒がしきは、何事ぞ」と問ふに、鑑時「その事にはべり、殿の従者いたく酔ひて、物あらがひをしいだし、打ちあひて傷くものも多ければ、しらせ申さへ爲に参りぬ」と賦けば、胤時大いに驚愕して、彼等犯人を守りながら、酒を食ひて同士打をいたすこそ越度なれ。いでわれゆきて鎖めんと匂ひきて、月引提付つゝ、小疇き廊下を走り來るを平九郎は、杉戸の陰に隠れ居て、遣りまがして丁と切る。構むべし、胤時は「駒より歸まで、藁竹割に切り伏され、軀わかれて兩段にたりぬ。しばしもあらず、胸胸は彼此をかき探りて、三十兩の金をも奪ひ返し、足を翹て鮮血を踏みて出で來り、財布を打ちふりて父に見れば、盛景亮として、伊庭が従者の藁箆を取つて、胸胸にもうち被らせ、鞆くこゝを脱れ去りて、徑より山越えに、洛を獲して走りける。此の夜は、通宵雨いたく降りて曇時も小止みなく、村長が圍宅の男女は、みな腹痛のかたに臥したれば、たまたまこの事をしらす。天明けて後の物がたりは、書いてつけんにくたくしければ事畧ぎぬ。

七 松稚丸潛びて白川山に獵す

この時華洛北白川には、松稚丸十七歳、梅稚丸十五歳になり給ひぬ。兄弟と器世に勝れて、その心ざま正しく、松稚はその人となり武藝を好みて、只願弓馬劍法を事とし、梅稚丸はその性文事を嗜みて、日夜讀書筆學にあかしくらし給へり。父の惟房朝臣は、年來子どもの行ひに心をつけてつらく尋思し給ふやう、むかしわが父、義に依つて行稚の一命を申し乞ひ、既に叡山月林寺に登して、祝髪せさせ給ふといへども、彼の人出家の行ひをなさず、遂に逐電して今にその往方を聞く事なし。朝家の榮り、わが家に及ばざるはこよなき幸ひなり。とはいへ亡父の志、忽地徒事となりて、冥土黄泉の下にても、さこそ口をしく思すらぬ。せめてわが子どもを、一人は出家さして、行盛一家の後世を弔はせばやとて、まづ班女前に情由を告げ、さて宣ふやう、「松稚は嫡子にして心ざまも勇ましかれば、法師となる事を嫌ふべし。梅稚は幼きより閑雅なり、出家させんには、彼その器に稱へり。しかれば今より仲間阿闍梨に進らせて、經をも讀み習はずべうも思ふなり。此の事いかにかあるべき。」と宣へば、班女前も丈夫の言語悉く理あるに推辭み難く、殊更行稚の往方なくなりたるを歎き、是れに代らせて出家させんと宣はする、志の添くて、不覺に落涙し給ひけり。是をもて梅稚は、去年の春より叡山月林寺の仲間阿闍梨に参り仕へ、行童の如くにて在しける。元來其の容姿の艶びた

る事は、聞かんとする春の花、圓ならんとする秋の月にも比ふべく、よろづ女子にして見まほしき風情なるを、「無下に法師になし参らせんは、いとほしき事なめり」と、人みな申しあへるとなん。是れは扱おき、仁科平九郎盛景は、影の江の郷にて、伊庭十郎主従を歎き殺し、龜鞠を將て間道より華洛に上り、西の洞院六角のあなたに、ふりたる空房あるを借り得てこゝに居を卜め、その氏を更めて、赤石平九郎と名告れり。豫ては彼の三十金をもて、龜鞠が衣裳の料とし、彼に白拍手をさせて、容易く世をわたるべうおもひはかりたるに、洛へ上り著きしころより、龜鞠は風のこゝちとて打臥したるが、次第に病劇しうなりて、醫師も幾人となくものするに、みな「瘵病の重きなり」といふ。平九郎は命綱とも頼み思へる女兒の、いと危く見ゆるに、安き心もなく、熊膽、眞珠、人參のたぐひ、すべて價にかゝはらず、よきといふ程の藥劑を用ゐるに、件の金も忽地に遣ひ盡し、此の衣服調度に至るまで、悉く清り却ひて、家はなほ住居すれど、萬の空房に異ならず。かくは神無月の上旬に及びて、龜鞠が病著や、怠り果て、平九郎もはじめて安堵ぬ。されど山田の晩酌利り乾すを見て、歳の豊けきをしりながら、今は一椀の飯に乏しく、千度うつ碯の音を、寐ぞめ／＼に聞くといへども、衣を更へる便もなし。かくては思ひし事もみなさらだのめにて、龜鞠を白拍子になすことかたく、さればとて半人の妻などにせんはいと口をし。とやせまし、かくやせましとて顔りに心を苦しめけり。しか

るにこのころ洛外に一つの奇談あり。こゝに白川の東、山中といふ村の長、女兒ひとりをもてり。年紀既に二八を過ぎて、容止も又醜からず、父母はこれか爲に婿を遣むに謀する人も多かり。さら程に彼の女兒は幼きより家に養ふ小厮何がしと、しのび／＼に相語ひて、水もらすまじく契れるを父母はたえてしらすりける。さて婚嫁定まるに及びて、彼の小厮は主の女兒を誘引ひ、もろ共に走れるを父いたく怒り、影人を出して追ひ留めさせ、暫しもおかす撃き戻して、小厮を縛め、うちも殺す許りに打擲せし程に、彼憤りに堪へざりけん、その夜みづから香を嚼み斷りて死ににけり。女兒は父母をうらみ小厮を哀み、忽地物升はしうなりて惑ひ出で、村稍盡なる池に飛び入りて、遂にうたかたの泡と消えぬ。さればにや雨のそほふる日など又さらでも々々れには、彼の女兒が幽魂、池の畔に立ちあらはるゝを、見たる者もありとて、只霧々と風聞す。平九郎親子は、この物語を傳へ聞きて、彼の村長が慮りの淺はかなるを冷笑ひける。この日小春の天いと麗かなれば、龜鶴は久しく寐亂れたる髪を梳らんとて鏡に對ひ、わが顔色の瘦せ衰へたるを見て、數回歎息し、父を見かへりていふやう、一男子病むときは家衰へ、女子病むときは色衰ふ。今わが身久しく病みたるをもて、父いよ、貧しくなり給へり。もし急を救ふの智劃を用ゐすば、身の病は愈ゆるとも、貧の病は治しがたし。わらはなく顔色の衰へたるを見て、これにつきて謀あり。彼の山中村の長が女兒入水して夜々池の畔に

幽魂の立ちあはるゝと風聞するこそ幸ひなれ、年来習ひ得たる俳優して彼の幽霊に打替り、その處にゆきて往來の人を驚かさば、里人はいふも更なり、雖も聞怖ぢする旅人等周章きて逃げ惑ひ、或は行李を連れ、或は懐の物を落して走り去るべし。その時、わが父連につきて、拾ひあつめてかへり給はんに、此の得つかざる事はあるべからず、この謀計いかに侍らん」といへば、平九郎大いに歎び一室に御身はわが手ながら、身色兼備はりたる少女なり。さらばしかせん」とて、次の日より親子もろ共に、由事村の池の畔に到り、龜鶴は年経る櫻の處になりたる裏に隠れ、平九郎は山の陰について相圖をさだめ、人の来るを見れば、父まへその暗號するに、龜鶴は白き內衣を被ぎ、長なる黒髪をふり亂し、やをら處より出でて、桔尾花の中に立在り、物をばいほでそなたを見かへりし形容は、更にこの世の人ともおほえず、國王殿前の呵責を脱れ來りて、喉々として怨みを隔人に訴ふる、陰重ならじとも思はざるはなく、これを見る人魂をうしなひ、逃げまどひて手にもたる物の落つるをもしらぬ、平九郎はその後方より落せるを拾ひたるに、折ふしは物のあるもありけり。さらぬだに一犬形を吹えて百犬聲を吼ゆるが世の習俗なれば、つたへ聞くものふかく怖れて、申の刻過ぎては、彼の池の畔を過るゝもなく、賑々たる麗草人を推きて、暗雲霧に啼くのふなれば、平九郎親子は始めにも倒さ、むなしく彼處に立ちあかして不意なく歸る日も多かり。かかる折しも松羅丸は、從者僅かに兩

三人を將て、終日白川山に追鳥獵し、日もや、暮れなんとするころ、山を下らんとし給ふに、樵夫とおほしき男、松雅をつくなく見えて、「この山中の西なる池の畔には、近曾怪しき物の出づるとて、申の刻よりたえて山を下るものなし。御覽候へ、暮も山の腰をめぐりて、けふも早暮るゝにちかし。おなじくは巖の家に歡りて、詰朝洛へ歸り給へかし」といふ。松雅點頭きて、「われもその事を聞かざるにあらず。しかれども、人死するときは三魂天に昇り、六魂地に歸り、ながく人間に嚮作すべき理なし、たま／＼臨終の惡念を引きて、或は幻に怨みを述べ、或は夢に救ひを徴むること、古くよりいひ傳ふめれど、多くは狐狸のわざくれにて、眞の冤鬼にはあらず。われ今彼處を過る序に、その眞偽を試すべし。」と宣へば、彼の男呆れ果て、「いと弱く見え給ふに、さても膽の太き人にこそおはせ、よしなきちからわざして、可惜命とられ給ふな。」といひかけて走り過ぎにければ、松雅は一人の従者を見かへりて、「汝は我より先に歩みて筒様々々にせよ。われその機に臨みて、謀あり。」と仰すれば、彼の人はこゝろを得て、遙かに走りぬけたり。松雅又殘る二人の従者をば道次に退け、その身は樵夫のみ通ふ捷徑より、彼の池ちかく來給へば、入相の鐘遠く聞えて、高峯の颯いと寒けし。平九郎はこの五七日、たえて人にあはねば、自今松雅の従者が只ひとり來るを見て竊かに歡び、早くこれをしらすれば、龜鶴つと出でて薄の中に立ちあらはるゝに、彼の従者はいたく怕るゝおももちして、「阿

鳴と叫びつゝ、逃去りけり。平九郎は彼が物を落さざるをいと本意なく思ひけん。行くともしらす
途につきて、西の山路を走せ下りぬ。龜狗はかく劫して舊の處へ殺れ入らんとするに、思ひもかけ
空虚の中より、袴裝束したる若人、豁然として跳り出で、足を揚げてと蹴れば、龜狗は身を轉し
て地上に倒れ、膝に肘を打たせて、息もたえぬなれども、苦痛を忍びて逃れ去らんとするを、若
人やがて襟上廻み、膝下に布きて動かさず。この人は是れ松雅なり。松雅は獨り桂徑より龜狗が後方
に出で、彼が従者を驚かす間に入りかほりて、虚の中にかくらひ、既に假面懸なりと認めて驚くこれ
を捕へ給へり。その時龜狗は、龜の鳴く許りなる聲して「慙し給へん」と叫びければ、松雅からか
らと打笑ひ、「汝甚だ膽太し。夫れ暗きところには神問あり、明らかなるところには王法あり。かく怪
しき打擲して人を劫すは、物を取らんとての謀計なるべし。今人を追うて壁の方へ走せ下りしは何
ものぞ。なほ外に支黨なき事ばあらじ、とくいへ、とく告げよ」とて、いきまきあらく責め問ひ給へ
ば、龜狗偽り悲しびて、「事發覺れれば逃るゝに言葉なし。妻は滋賀の山里に住居するものなり。家
は究めて貰しきに、祖母と母と三年以來長き病著に打臥しければ、父なるものも活業なしがたく、ま
た良業ありといへども、貯繰なければ用ゐる事かなはず。父は祖母の爲に慙へ、わが身は母の爲に悲
しび、こは道なきとしりながら、近曾此の處に怪しみありといふにつきて、親子夜な／＼しのび來

りて、漫に人を驚かし、携へたるものを取り落す事などあれば、拾ひとりて薬の代とし、祖母と母を養ひ侍り。日下楚へ下りしは妾が父にて、外に相談へる人はなし。こは寔に一日の出来心に侍り、かく見られ侍るから、いよ／＼この身の過ちを悔いぬ。あはれ命を助け給へかし。」とて、誠しやかに申しける。松稚凡つく／＼聞きて、「汝みづからおもへ、人を劫し掠むるはこれ賊なり、縦ひ親の爲なりとも、盗みして孝ならんや。白香父を救はんとて虎と戦へば、猛虎驍然として争はず、蔡顯母の爲に悲しみ告ぐれば、赤眉の賊もこれを殺さず、故に至孝は天地を感動す。汝がなすところは、冢を負うてその臭きを説くを厭ひ、泥を投げてその汗れをいふを諱むのたぐひにて、親を賣りて賊をなし、なほ賊なりといふ人を憎む。その罪尋常の盗人にも勝れり。今こそおもひしるべけれ。」といひ懲らしめて引き起し、始めてその面を見給ふに、世に比なき美人なれば、心の中ふた、び驚き、人の心態ばかり、貌の醜美にもよらざるものなり。この女子、もし富貴の家に寵遇を得て、發跡づることあらんには忽地に家をも亂し、國をも亡ぼして夥の人の殊を讓すべし。今これを殺して後の愁へなからしめんにはと尋思し、刃の柄に手をかけ給ひしが、否々われ廷尉にあらざれば、私に人を誅すべき理なし。只いたく懲らして久後を誡めばやと思ひ反し、腰なる列率索をとり出でて、龜鞆を襖の幹へ縛り著け、墨斗に筆を染めて、まづ彼が額に鬼といふ一字を書き寫し、又左右の腕をまくりあけて、

鬼鬼にあらす、孝孝にあらす、もし心もて眞の鬼となさば、身も随ひて頭なき鬼とならん。と書きとめて、再び龜鞠に對ひ、「われは吉田少將惟房の嫡子松稚丸なり。けさ酒びやかに遊山してのかへさなれば汝を殺さず、汝みづから懺悔してかさねてかかる惡念を起す事なかれ。」と説き示し、遙かに東の方を招き給へば、二人の家隸は少し程をおきて、道次に立在みたるが、忽地西の山路より走り來つ。この件の事を見もし聞きもして舌をふるひ、且松稚丸の智勇を稱贊いたしたり。さる程に松稚主従は、籠を差して下り給ふに、はじめ偽りに走りたる従者も途に待ちあはして縁由を聞き、且驚き且感じ、こゝよりみなひとつになりて家路へいそがしまゐらせける。さても平九郎盛景は、鬪に逃げ走る人の迹につきて、遠く籠へ下りしに、終に見うしなひて徒らに立ちかへれば、思ひもかけず、龜鞠は額に鬼といふ字を書かれ、いたく鞭に縛りつけられてありしかば、驚き鞅掌ててその索を解き去り、さまざま闘りて故を問ふに、龜鞠は松稚に厳しく懲らされたる緣故を審かに物語り、左右の腕を褰けて見せければ、平九郎齒を切り、「われ今こゝに立ちかへる途にて、一人の従者に、藤の弓に鐵矢とりそへてもたし、又一人の従者が拳に鷹を居ゑさして、東へ過りたる若人は、彼の松稚ならん。彼が父惟房とは、昔總角のころ義を締めて、兄弟の因さへあり。しかるにわが身、行盛の子として弓矢の家生まれながち、法師となり果てんことの口をしきに叡山を逢電し、かく命運徹く

て、凄しく世を經るに、彼は官職としく、に昇進みて、いと時めくも猶ましきを、剝へこれが小兒の爲に、わが愛子を喪はれんとし、飽くまで屍見せられたるぞ恨みなる。我もし立ち歸る事の少し早かりせば、彼の小冠者を立地に、打ち殺してすてんぬのを、正しく途にのきあひながら、しらで過ぎある悔しさよ」ととて、露の上り／＼、暫し罵りて已まざれば、龜物はいよ、憤りに堪へず、一聲叫びて仆れしかば、平九郎屈草でて雑々に勸るに、やうやく避生でたれど、職付されしとき、打たたる。猶ふたゝび痛み出でて、立居も自在ならず、かくては歩より家路に歸らんこと覺つかなしとて、父が肩に引きかけつゝ、その夜の明方に、幸うじて西の洞院へ立ちかへりぬ。しかりしより龜物は、頼りに心痛して、再び長き病著にうち臥しけり。こほみ六積惡の報いなりとは思ひもかけず、親子は只顧に世を憤り、人をうらみて非を改むるの心なし。わきて龜物は松籬にいたく苦められたる憤りのためて忘る、隙あらねば、しばし、暫息し、わが身十二分の顔色はありながら、夜光を泥中に捨てて終に玉人にあはず。もし命ありて時と感を得たらんには、惟房一家を、壊してこの憤みを散らさでやわくべきや」と獨りこゝ、惡念さらに強増しぬ。抑女子の美にして邪智深きはその青靨霜より真し。人かの毒に觸るゝときは、終に死亡を脱れず。宜なるかな承久の播磨は、「この龜物が三寸の舌より起ちて、あさましや一院（兼房）は申すもさしなむ。中院（十圓）暫院（十圓）徳みな進き嶺峯に

遷され給ひぬ。只憎みても憎むべきは、古今一種の青婦なり。

八 忍の惣太磨りて西洞院を闇かき

忍の惣太は先づ頭、神陀山にて危きを脱れ、伊智と共に伊豆の山家を徘徊して、長月の初めに武藏へ立ち越えんとて、相模路に出で逃すが、暮の風聞を聞くに二年來鎌倉より遣捕せさせ給ふ、忍の惣太といふ兇賊、いぬる月某日、三河國矢野にて伊庭十郎胤時に生拘られたりしに、その夜、影江の旅宿に於て、胤時主従を歎き殺し、忽地逃げ亡せて住方しれず。よりに鎌倉より圖々へ公文をなし下され、穿鑿いと嚴重なり」といひ罵るにぞ。惣太聞きてふかく怪しむ、「我はさる覺えなきに、かかる流言して油斷させ、不意に強め捕らんとするの謀計ならん。然れば鎌倉に程遠からぬ、武藏に到らんはその強に係るなり。さはあらぬか」といへば、磨昔もけいと諾ひて、二人諸共に途より取つて遁し、ふた、び西を投して走る事數日に及び、伊智伊勢の間に且く鞍を置て、その年の霜月に、大和路に出でて洛に上り、ある日の夕暮に、磨昔を將て西洞院なる酒店に到りて、半日の酒を盡しつと走り出づるを、主人遮しく引き止めて、「こは酒の費を忘れてや行き給ふ、いと漫なり」と言ひけ、惣太點頭きて、「磨昔は持ちあはしたる錢なし。重ねて來るときに與ふべし」といひかけて出でんとするを、主人引きとめたる袖を放さず、「御身が聲音を聞くに、關東の人とおほし。洛は定めて旅なるべし、い

づ地に宿かりて在する、名告りたまへ。人をつけて參らすべうもや。」といひもをはらざるに、惣太聲をふり立てて、「さても怪有なる奴かな。かばかりの錢を債らんとて、旅宿を問ふことやある。その儀ならばすべきやうあり。」といきまきつゝ、忽地拳を握りかためて、片頬も開むばかりに打ちたふし、踏みにじりて動かせず、酒保小廝なんど、この形勢を見て、且驚き且怒り、主人を救はんとて立ちさわげは、悪音奮然として押し隔て、小廝がもてる物を奪ひとりて、置きならべたる酒の甕を悉く打ち碎けば、數十斗の酒ながれ渡りて、門に泉を湛へたり。惣太はなほ武りに勃誇りて、端近なる火桶を取つて投げ出すに、その火障子に飛びちるにぞ、衆皆いよ、驚きまどひ、打ち消さんとて走せ廻る間に、そと懸哲に注目して、いちはやく出で去りけり。むかし抱朴子いへることあり、「百尋の室も分寸の巖より焚き、千丈の坂も一蟻の穴より潰る。」うべなるかな老幼最も心を用ゐて慎みおそるべきものはこの災なり。惣太等が悪虐さらに比へんに物なし。さる程に祝融俄頃にあれて、一院後鳥羽御所もほど遠からぬに、事急なれば御中奉るまでもなく、吉田少將惟房院を負ひたてまつり、殿上人少々供奉して、高倉を東へ御幸なしまるらせける。まいてや皇妃以下の女官たちは、おもひ／＼に出で給ふ。かかる折しも平九郎盛景は、女兒龜鞠が久しく病みて起臥も自在ならざるに、近鄰に祝融の恐へありて、いかにともせんすべなければ、ふりたる葛籠へ龜鞠を入れて楚と脊負ひ、東の巷を投

して遙かに脱れ去り、や、富小路まで来りにければ、やをら葛籠を担き下し、一息せんとて汗押し拭ひたるを、惠哲は物ありと見て途よりつけ来り、つと走り蒐りて葛籠に手をかくれば、平九郎は大いに怒りて、襟上掴みて引き戻し、「こは不敵なる盗賊かな。人も人によるものを、可惜命うしなひせ」と罵りて、刀を閃かしつゝ、切らんとすれば、惠哲は石をかいとりて、はらり／＼と投げつくるを、平九郎物ともせず、隙間もなく切つてかゝれば、叶はじこや思ひけん、足に括せて逃げ走るを、いつ地までもと追つ蒐けたり。忍の惣太は少し後れてこの處を過ぐるとして、路のほとりに重やかなる葛籠のあるを見て、密かに歎き、押しなほして負ひゆかんとする折しもあれ、忽然後に音して、人影出で来れば、守あしかりけりと驚き慌て、終に葛籠を捨ておきて走り過ぎぬ。さても少将准房は、後鳥羽院を負ひ奉り、からうじてこの河までまゐりしに、失火も輒くうち滅したれど、しかるべき公卿はいまだ追ひ著きたてまつらす、あまりにかろしく見えさせたまへば、御迎への御車を待ちあはして、還幸おしまるらせばやとて、暫時路傍に立在みて情由を聞えあけ奉るに、院もいたく走らして、頼りにも苦しくおほせしかば、まづこゝにて憩はん、いづれへなりともおろし居る候へこと仰せける。されど一枚の蓑だになくて、地を踏ませ奉らんはいともかしこし、いかにままじとおもひたひたひて、と見れば何ものか連れけん、ほとり近う一ツの葛籠ありけり。このうへなどへ居る奉る

べし」とて、各朝服の袖を離断らして葛籠の上にかきね掛けさせ、これを假の褌として、やがて其處へおろし奉れば、怪しむべし人ありと覺しくて、葛籠の裏にて頼りに呼ぶ聲す。院は申すもさらなり、惟房以下の徒大いに不審しみて、連忙しく抱きあげ奉らんとする時、忽地御車きしらす音ちかく聞えて月卿雲客影御遠く察ひまゐらせ、やうやく参りあひければ、惟房朝臣すなはち御車へうつし乗せ奉らる。後鳥羽院は、日今葛籠の裏にて女子の聲せしを、いと怪しくおほせしかば、「彼何ものにかあらん、ひらきて裏を見よ。」と宣はするに、六位の官人うけたまはりて、件の人を扶け出せば、年紀二八ばかりなる女子にて、いと実れたれどその嬋娟なる容止は、雲の上にも又比なき美人なり。正に是れ富小路の名に負ひて、龜崎が發跡づべき時節到來したりけん。一院御車の裏より見そなはして、なんとなく愛でさせ給ひ、惟房朝臣を近く召して、「彼が父は何ものなりや、その素性を問へかし」と仰すれば、惟房歩みよりにて、龜崎に對ひ、「汝は何人の女兒にて、何の故ありて妾には捨てられたる、緣故を審かに申すべし」と問え給ふに、龜崎は事の形容を視て、こは尋常の御車にあらざ、もし上上に在さまば、院などにて坐すらめと思ひて、屢眼を斜にして媚びを獻じ、手を地上におきて申すやう、「妾は白拍子にて龜崎と呼ばれ侍り、父は武士の浪人にて、原は信濃國の住人、仁科二郎平露遠が族に赤石平九郎盛景と申すものなり。わが身久しく心痛の病によりて、起臥も自在ならざ

るに、今宵近郷に失火あるをもち、父盛景わらはを萬能に扶け入れ、みづから背負ひて走り出でたる途中、盜賊に出であひぬとおほしかりつるが、それを追ひ行きやしぬらん、こゝには見え侍らす。しかるに只今人ありて、萬能の上に尻をかけ給ふかと思へば、忽ち清々しくなりて、病體に愈え侍のぬ。と申す。惟房聞きて、「寔に至徳の玉體に布かれ奉れば、彼が病の立地におこたりしといふも故あるかな」と感激して、縁由をきこえあけ奉るに、一院御せけるやう、「彼が父は前年考まかりたる仁科盛遠が族なりと申せば、零落せりといふも平人にはあらさ。院彼の女子を見て捨てがたまふもひあり、汝彼を養ひて嫁とし、御所にまゐらせかし。この事を委ねんも惟房が外にありともおぼしめさず、朕がこゝみを得てよきに計り得させよ」と、密やかに仰せしかば、惟房朝臣目を頼め、「こゝは淺まし、十善の君として、賤しき白拍子などに、玉體を汚され給ふべきかは。只願思召しかへさせ給はふ事こそ願はしけれ」とて、なほ言語を濁して諫め奉れば、院御氣色あしう見えさせ給ひて、「惟房何をか申す。むかし白河院は、賤の女子を召されて、鍾愛比なかりき、祇園を御見せられたり。今の女子はそれに勝つて、深々卑しめ給ふべきにあらず。且汝養ひて進らせんに、なでう世に怪しめらるべき。再び諫むる事なかれ」と宣ひて、惟房に青侍二人を従はして、こゝより身の軛を給はり、やがて還幸なし給ふ。惟房朝臣は、なほ御所までも参りて、諫め奉らばやとて、しばし御車を目送りつゝ、と

さまかうさま思ひたのたひ給ひしが、一院は日來大臣の諫めをも聴き給はず、よろづ御心の隨に舉動ひたまふなれば、惟房などが申しとゞむるとも、諾ひ給ふべからず、まづ院宣にしたがひ奉りて、後にすべきやうもあらんと深念して、青侍一人を残しとゞめ、今にもあれこの女子を尋ぬる人あらば、潛かに惟房が第八案内せらるべし。」と聞えおきて、今一人の青侍には、龜鞠を扶け掖かせ、北白川へ歸り給ふ。途にて惟房の家隸ども主の迎へにとて、まるれるに行きあひ給ひし程に、忽ち從者影にぞなりにける。

九 金鶏凶を告げて惟房を陥る

かくて吉田少將惟房朝臣は、龜鞠を將て家に立ち歸り、班女前に院宣の趣を告げて、彼の女子をよきに勸り給へ。」と仰すれば、班女前やがて春雨を召びて、龜鞠に浴み、沐はせ、新しき衣一襲をとり出でて、ふるぎを脱ぎかへさせ給ふに、寔に玉を欺く美人にて、霞被軽く装ひては、趙后新粧に倚り、金步靜かに運びては、澤妃舊怨を舒ぶかと怪しまる。正に是れ春風一粟の野花、手折り來りて餘香濃やかなりといへども、外面如菩薩内心夜叉、浮屠家の憎みも宜ならずや、浩かる處に富小路に残りとゞまれりし青侍、平九郎盛景を誘引ひて來りしかば、惟房呼び入れて對面し給ふに、影の年を経て面影こそ少し衰れ、疑ふべうもあらぬ行離なれば、心の中驚き怪しみながら、たえて言語には出し

給はず、はじめてあふがごとく待して、その名字を問ひ給ふに、平九郎は通路青侍が物語にて、一院
龜鞠を召させ給ふ。」よしを聞きしかば、深くよろこび、聊かも憚る色なく、伴はれてこゝに來りし程
に、彼とはやく主人の心を猜して、行稚なりとは名告らず、それがしは仁科盛遠が族に、赤石平九郎
盛景と申すものなり。年来關の東にありといへども、頼むべき主もなければ、近曾洛にのほりて、西
洞六角の片ほとりに住居せり。然るに今宵舞馬の難あるをもち、女兒龜鞠を葛籠に入れ、駈れて富
小路まで來れる折しも盜賊に出であひ、これを追ひ留めんとして、其處にありあはせず、仄かに聞く
上皇後鳥羽院龜鞠を見そなはして、忽地たちまち寂慮さいりよに稱ひ、彼を御所に召さるゝとか、こは官龜の浮木にあへる
をりなほ稀なる僥倖なり。偏ひとへに羽林相公羽林は左右の吹擧を仰ぎ奉ると稱なづ爽かに舒べにけり。惟
房朝臣は早く、盛景に院宣の趣をしられて、ふた、び驚き、勉なまじひに匿してはあしかりなるとおぼし
て、すなはち龜鞠を養ひ、叔重の義をもつて御所へ進まりすべし院宣を承りたる首尾を、密やかに説
き聞かせ、まづ休足あるべしとて、家隸栗津六郎、松井源五等に仰せて別室に誘はせ、厚く饗應し
給ひける。彼の六郎源五は、をさく行稚を認めたるものどもなれば、事の爲體をふかく怪しみ、い
かに見忘れ給へるか、紛ふべうもあらね行稚丸にて候。と密語き申せば、惟房朝臣點頭うなづきて、我も
はじめよりその人とはしりぬ。しかはあれ、彼を行稚なりといふときは、亡父の志を破り、いはさ

れば君を獻くに似たり。むかし先考彼と義を締ばして、惟房が弟と呼ばせ給ひしに、彼の人不良の志を抱き、離別遙かに年を経て、今又おふけなくも院宣によりて、彼が女兒を姪とよぶ事、室にふかき因縁ならん。もし行雅志を改めて、再び出家いたすに於ては、舊惡をも償ふべく、實に一家の幸いな事。事のこゝに及ぶまでは、すべての人こしらすべからず。われも又彼の親子が素性を、班女にも告げまじことぞ宣ひける。さる程に、次日日蓮殿御所より、龜駒を召さるゝことしぼく、なれば、惟房朝臣巴むことを得ず、みづからこれを伴ひて、院の御所に参り給ふ。その装ひ美を盡して、人の耳目を驚かせり。一院後鳥羽殊に歡び馳して、惟房には夕告と名づけ給へる御朝一振を賜はりぬ。この喪制長さは僅かに九寸五分にして、輪に金の鶏にはとりあつけらるゝ。もしこの制を傳く時は、人ありて苦心を扶めば、輪の鶏忽地聲を發す。又その主殺罰の氣を發せば、又輪の鶏聲を發す。こゝをもて夕告の名あり、かく奇異なる寶制なれば、後鳥羽院殊さら秘藏まし、りるを、今度の恩賞として、惟房朝臣に賜はりけるとぞ。抑この君は、文武に涉獵し給ひて、御讓位の後も、土御門院、順徳院、天子二代の間、天下の政は、なほ一院より制度し給へば、よろづ愛でたくましますに、天魔の所爲にやありけん、白拍子龜駒を御寵愛ふかくして、後宮の粉黛もこれが爲に顔色なきが如く、加之龜駒が父平九郎盛景を、五位の檢非違使になされし程に、彼の親子飽くまで君寵に誇り、その

成勢同を差ぶる者なし。これ併しながら、一院の御計らひにまるといへども、露景は朝敵の手搦として、還俗亡命の沙門なり。今はからざる富貴を得たる事、總て惟房の庇みによれば、惣て先非を悔いて、彼の人爲にはよく誠心を竭すべきに、さはなくしていぬる頭龜胸が、松羅丸に恥ぢしを懲らつれたるを含みて、親子竊かに志を合はし、惟房一家を滅ぼして、その所領さへ押奪はんと謀りぬ。室に抱は人にして、心は腹にも方れりといふべし。こゝに又松井源五純則は、當初葉柏を欺き殺せしころより、惟房も彼はたのもしけなしとおぼして、そののちほたえて用ゐ給はず。あねどもなきがごとくなるを、源五はみかく恨みて、密かに野心を養ひながら、相討ふべき人もなかりし程に、數年黙止して色にも出さざりけるに、龜胸が父平九郎判官景盛は、行旅の遺蹟を、行箱丸なる事をも知り、又兼て親子が、院の御おほえ他に異にして、よろづおのが難なるを見てみかく歡び、ありては自家に交加ひて阿彌誦ひ、何事にまれ、心くまなく聞え給へ。命にかけてうけたまはり給べし。いと、いと眞實やかに問ひぬるに、露景も心に拘れば、こはまきわが方人なり、と思ひて厚く接待し、いつも問答交々として立ちあひかゝるを、人さるにしらざりける。今はは雁に暮れてあら玉の春立ちかへり、四辻衆には、庭の拜禮、朝觀の行幸など高むでたくと行はせ給ふにも、龜胸はその形勢、后妃のえ寄らねば、恐るゝは素の賢きは歎きぬ。惟房朝臣いと羨ましく覺えて、しばしば諷め奉れども、

院たえて用ゐ給はず。龜鞠又この序をもて、彼の人をあしざまに申しなすによりて、いよ／＼疎み果て給ひて、君寵忽地に衰へたり。惟房朝臣は諫言容れられざるをもて、こゝろ鬱々としたのしませり。ある日御所より退りて貝願に嘆息し、われはじめ亡父の志に恃り、且君命に違はんことをおそれて、龜鞠を進らせたるは、一生涯の過ちなり。鑑ひ今に至りて彼の親子が素性を申しあかすとも、一院既に龜鞠が舌頭に感はされておほしまさば、實言とは聞召すべからず、嗚呼悲しきかな、世の中これよゝ亂れんには、みな惟房が罪なり。所詮龜鞠が命を斷ちて、天下の禍を除き、われ又自害せんにはと、すでに心を定め、その夜人定まりて、心中の機密、なき後の事をさへ密かにかい寫め、詰朝松雅丸に宣ひけるは、われこのごゐは公務に暇なくて、久しく月林寺の阿闍梨を訪はず、又梅稚が安否を聞かねば、御身けふ叡山に参りて、この一時を阿闍梨に進らせ候へしと仰すれば、松雅丸こゝろを得て、父の書簡を受けとり、從者をばいと驚して、やがて比叡に赴き給ふ。惟房今は心易しとおぼして、恩賜の寶劍々告を懐にかくしもち、衣冠帳かに裝ひて出でたまふ。松井源五太刀を持って後方に従ひ、廊下を過る折しも、怪しいかな主君の輜のうちにて、鶴一聲鳴きにけり。かくて惟房參内し給ふの後、源五つくも、思ふやう、彼の々告の寶劍は、そのおし殺氣あるときは、鶴の金鷄聲を發すると傳へ聞きたるに、今主の懐にて、鶴の鳴けるこそ不審しけれ。察するところ龜鞠殿父子の

威勢を新納み、潜かに刺し殺さんとて、かの朝を懐にしたるものか。よしうなくとも兵刃をかくし
もらて院参せば、杖道の罪いかでか脱れん。生平にまづ参内して、後に院の御所へ参らるれば、いま
だ事を委せざる以前に、早く彼の人にしらすべしとて、遠しく鎌山を尋い寓め、心しりたる下郎に
もたして、赤石平九郎判官盛景が事へ遣はすに、盛景は四辻殿へ参る途にて源五が使に付きあひ、馬
上にその書を授き見つゝ、或は驚き或は歎びて、彼の使をばこゝより歸らせ、鞭を鳴らし足掻をはや
めて、直に一院の御所にまゐり、源吾が密書をもて、首尾を龜胸にしらすれば、龜胸はわが怨みを
復すべき時到来ぬとこゝろに笑みて、やがて院の玉座ちかう参りて、薄然と落涙し、誠やち吉田少
將惟房日本龜胸父子が君寵他に越えたるを祈禱み、けふしも短刀を懐にして、妻を殺さんと謀りぬ
る由、人ありて告げ侍りぬ。君の爲に捨つべき命なりせば、露ばかりも惜しむに足らぬと、是日に人
の恨みに因つて、君を驚かし奉らんは罪いとふかし。たゞ速かに身の暇をたまはりて、軒漏る月を友
とせし、舊の住家にかへさせ給へかしと申しもあへまよ、と泣きて轉輾せば、一院ふかく驚きたま
ひて、こゝは奇怪なり。惟房刀剣をかくしもらて院参せば、問はずして道心明白なり、忽にすべから
ずと宣ひしが、殊に御怒の色見えて、赤石平九郎判官盛景に謀を仰せられ、専ら非常に備はし
給ふ。惟房判官は機密の漏れたるをしり給はねば、朝より退りて、四辻の御所により、南面なら

孫座の下に立在みて、后町のかたを窺ひ給ふに、時ならずして鶴の聲しぼ／＼す。龜鶴はこれ聞き
て、なほその氣色をあらはさせん爲に、何氣なきおももちして、袖に一面の琵琶を抱き、颯ちかう立
ち出づるを、惟房は軍旗をさとかき揚げつゝ走り入り、夕告の劍を抜き抜頭して跳りか、れば、龜鶴
はやく手にもてる琵琶を酒と投げつゝるを、ものともせず切り拂ふに、四の緒かけて一刀に、琵琶は
左右へ飛び散つたり。その隙に、龜鶴は奥ふかく走り躲るゝを、なほ討留めんとしてふり揚ぐる劍の下
に、盛景つと走りよせて、矢度やぶに組み伏せんとするを、身を潜めて投げ退けたり。時に相圖や定めけ
ん、北面西面の勇士、物の陰より走り出で、右より左より組み留めて、われ生拘らんと闘げば、惟房
朝臣遂に志の遂けがたきを見て、愕然として長嘆し、「むかし伯邑考の顔已を罵りて、誰の罪にあ
へり、恨むらくは君を聖王になし奉ることすたはず、忠心却つて死後に逆臣の汗名を残さんことを」と
といひもあへず劍を腕に衝きたてて、組まれたるまゝに死し給ふ。時に承久二年二月八日、行年四十
歳と聞えし。この時一階は、事の形勢を聞直してまず／＼怒らせたまひ、惟房衛府の重職にありなが
ら、御所に於て劍戟をふるふこと、古今未曾有の格事悪唐和漢に例すくなし。早く彼が妻子を擲め捕
りて進らすべきによしを、平九郎判官盛景に仰するにぞ、盛景時を移さず使の廳の官人影を將て、北
白川へ馳せ向ふ。かくて後一院は夕告の短刀を更めて龜鶴に賜はるゝ。この鶴の聲しぼ／＼聲を發せし

たもて、汝が身に悪なき事を得たも。故に賜はる所なり」と宣はすれば、總輔は昔恙を拜謝して、いと面目を施しけり。

後鳥羽院の第一の御子、土御門院は、いぬる承元四年に位を御弟皇子守仁王に傳へ給ひぬ。願徳院これなり。よみて後鳥羽院第一院と稱し奉り、土御門院を新院と申せしなり。

墨田川梅柳新書卷之三

墨田川梅柳新書 卷之四

東 部 曲 亭 主 人 著

十 天狗首を飛ばして松籬を救ふ

少將惟房討たれ給ひし事いまだ聞えぬば、班女前は粟津六郎勝久と春雨の老母を呼びつどへて、端ちかう立ち出で、色妙に香ひ濃やかなる庭の紅梅をいとおもしろうながめ給ふ折しも、田中八郎とかいふ壯士、絶の袖を引き斷られ、烏帽子も打ち落されて、大わらはになりたるが、庭門より走り入り、縁づらに衝と参りて、嘴ぎ／＼、まうすやう、「さても殿には、恩賜の御劔を懐にして一院の御所へ参り給ひ、潛かに龜鞘殿を刺さんとし給ひけるに、機密忽地に漏れたりけん、赤石平九郎判官盛景、豫て力士を帷幕の陰にかくし置き、矢庭に討ちとり候ひぬ。この事はやく聞えし程に御供なりけるものども大いに驚き、とせんかくせんと罵章す。時に使の聽の官人四方よりとり圍み、惟房が家隸を脱すなどと呼ばはりて、既に搦め捕らんと聞く。さる程に、志ある徒は、奮撃突戦して主と共に屍を曝し、下郎は逃ぐるもあり、又おめ／＼と生拘らるゝもあり。それがしはこの事をしらせま

ゐらせん爲に、からうじて脱れ来れり」とと告げもをほらざるに、衆皆こはいかにとおどろき執掌て、班女前は疾さへ發りて撲地と倒れ給ふ。春雨遽はしく袂け起し、且誦め且勵まして、さまんゝに勸り進らせけり。そのとき粟津六郎膝をすゝめ、近曾一院（後鳥羽院）龜物殿に逃はされおはしまして、非道の御行ひいと多かるを、殿のしばし、苦諫し給ふ事は、粗人のしるところなり。然るに殿には、鸚に院宣によつて、叔姪の義を締むり、龜物殿を四辻の御所に進らせ給ふ事、元來その志にあらず。加へば彼の婦人の父、赤石平九郎判官は、班女御前の舎見行稚丸なり。この人わかし月林寺の逢電し、還俗して仁科平九郎と名告りぬ。殿にもはやくその人とは知召せども、明白にいふときは、父の志を成るに似たり。云はざる時は君を欺くが如し。遮莫盛景先非を悔いて舊の沙彌とならば、甚く憎むべきにあらず。思ふ仔細あれば、彼が行稚なる事を、班女にもしらすべからず。と官ひき。僕つらゝ、殿の胸膈を察し奉るに、かかる惡縁に繋がれし、彼の父子が世を亂さんや、見つゝ居らんは不忠なり。所詮龜物殿を殺して、禍の根を斷たばやと思ひ詰め給ひたらんに、孤忠徒事となりて、却つて朝敵逆臣の汗名をとゞめ給はんは、かへすくも口をし。」とて、齒を切りて拳を握りかため、遺恨に堪へず見えければ、班女前も春雨も、はじめて聞ける少將の、仇は兒とも古主とも、しらで過ぎなばなかくゝに、身を恨むるまでの歎きはせじ。こはゆくりなし淺ましとて、夢とも史にわきまへず。班

女前は殊さらにも、恩に背き養ひたがふ、悪人の妹をも、妻としめぐみ給ひぬる、一赤きを思ふ程、面目なきはこの身なり。今はとて手おかなる、護身刀を引き抜きて、自害せんとし給ふを、六郎春雨左右より押し止め、「こは物にや狂ひ給ふ。今朝しも叡山へ、松雅君を命し給へるは、殿のおもひ給ふ所あればなるべし。しかれば阿闍梨へ寄せたまふ御書の中に、後の事なども書き遣し給ふかとおほし。もし恩義の重きを顧み給はば、松雅梅雅の先途をも見届け、亡君の浮名を書めんとはおほさまや。」とさまゝ、諫めこしらへ、やがて刀をとりかくせば、「さてはなほ死するにも死なれず。」とて、いよ、うお泣き給ひける。浩かる處に金鼓遙かに響き、外面懸塵と塵劇がし。粟津六郎耳を側て、「討手の軍兵はや近づくとおほえたり。一天の君に對ひたてまつりて、弓を引くべきやうはあらねど、しまし。禰を避けんが爲なり、それがし殿、いたすべし。春雨は姪女御前の御供して、近江の方へ落ちられよ。」と、いそがしつ、傍にそば高く引折りて織つらに立ち出で、田中八郎に對つていへりけるは、「御進必死を脱れて、火急の難儀を告げ申すこと、實事にあたりあり。只今討手の向ふかとおほゆるに、見て來給へ。」と指揮すれば、「承る。」と應へもあへず、走の出でんとする庭門より、矢一ツ來つて八郎が鳩尾骨壊い。兵と立てば、撞と倒れて息たえたり。吐唾と驚く主従が猶豫して進みかねたる處に、松井源五純則、十王頭の厲當に膝鐵懸けて、髯の壯者を引牽し、弓矢携へ真先にすゝみ入り、「朝敵の家

隼と呼ばれて、首を木の幹に曝されんよりはと思ひかへし、官軍を侮たずして、われまづこゝに向う
たり。既に家中の老弱、われに與するは宥し、背くは悉く殺せり。やをれ六郎、命惜しくば降参し
て、斑女前をとく逃せし。みづから逃はば後悔せん、いかによいかにと呼ばれば、栗津六郎切然と
して大いに怒り、「その祿を食んでその家を斃す。關戸の鼠輩、鳥合の兇賊、縦ひ稻麻竹葉にとり寄く
とも、いかでか六郎を擲め得ん。殿の本意を遂げ給はざりしも、汝が内通しつるにこそ。天罰思ひし
らさめ」と罵りて、二尺八寸米なす太刀を抜きかざし、羣りひかへし真中へ、會釋もなく切つてか、
れば、春雨もかひなくしく、長押し掛けたる長刀引提げ、面もふらま挑み戦ふ。忠臣義女の刀尖に、
薄五忽地辟易し、一崩れに逃げ走る。春雨は逃ぐるを追はず、引き返して遑ほしく、重器路銀など
を一包として腰に著くれば、斑女前も一面の鏡を取つて袖に抱き、主従諸共に後門より走り出で、行
くこと未だいくばくならず、只見れば一員の大將、七八十騎の士卒を將て、飛ぶが似くに馳せ來り、
件の大將斑女前と見ると即て、馬に拍入れて路を横ぎり、「惟房逆心によつて四辻殿を闢かし奉りしか
ば、立地に誅せられ、「その妻子を擲め來れよ」と仰せを承け、赤石判官發向せり。正に是れ喪家の殉
難裏の魚、逃ぐとも何地までか逃すべき、とく縛めを受けよ」とぞ呼ばはりける。斑女前も春雨も、
絶えてあはさるゝことが増しか、行確丸かとおもふにも、いと怨みはいやまして、一言の回答に及ば

す。なか／＼に必死を究め、立ち向はんとするところに、粟津六郎勝久、鷹直に走り來つて、「こゝはそれがしにうち任せ、白川の山越えして、東のかたへ落ち給へ」といひも了らず太刀閃かして、大勢の眞中へ巴の字十文字に懸け散らし、西を打てば東を靡け、蒐け抜け／＼切り立つる、その隙に春雨は班女前を扶け掖き、山路を望して落ち延びけり。盛景これを見て大いに焦燥ち、あれ討ちとめよ。」と叫べども、粟津六郎只一人の太刀風に、影の軍兵うち靡き、小松生ひたる丘の上に、むら／＼と逃げ登れば、盛景も力及ばず終に彼處へ退きぬ。六郎元より深入りせず、松稚梅稚の事いと心もとなければ、聽て雲母越を投して引いてゆく。盛景は彼を討ちもらしては、後難量のがたしと敦圍き、馬の頭を立て直すを、「しぼし／＼。」と呼びかけて、松井源五純則同志の別輩を領て出で來り、「惟房が二男梅稚は、去年より叡山月林寺にあり。また嫡子松稚は、今朝父の使して彼の山に到れり。こは惟房豫て後の事をおもひはかり、子どもを遠く落さんと計較なるべし。もしそれがしに上座をわかちて授け給はば、東の果てまでも追ひ懸けて、搦め進らせんこといと易かりなん。それがし向に班女前粟津六郎等を生拘るべかりしに、手勢多からねば心ならず走らせたり。曲けて源五が申す旨に任せ給へ。」といふ。盛景聞きて莞爾とうち笑み、「寔に汝が今度の働き感するに堪へたり。人窮まるときは却つて猛獸窮まるときは嘯まんとす、かならずしも小敵と見て獲ることなかれ。これは是れわが秘藏の短

刀なるを、汝がかねて知るところなり、且くこれを預くべし。松隆梅稚なほ大君の御威徳に伏さずして敵するならば、これをもて首かきおとし、首級を洛へ登せよ。われ亦諸國へ屬託して、青奴等が口へを驅りとあん、努懈ることなかれ」と詭きをはりて、自他平等即身成佛の短刀と、四五十人の士卒を別ちて授くれば、源五は欣然として領掌し、短刀をとつて腰に掛け、近江路を追ひのけば、盛景は惟房の館を焼き拂はせ、まづ事の爲體を申さんとて、四辻の御所へ参りける。この日松稚丸は、父の使して齋山月林寺に到り給ふに、折しも仲國阿闍梨は、西谷へゆきて未だ歸りたまはずと聞えし程に、即ち梅稚丸の子舎に入りて互に善なきをよろこび聞え、四表八表の物語して待ち給ふに、やうやく申の刻過ぎて阿闍梨歸り給ひければ、松稚は梅稚に引かれて阿闍梨に謁し、父の言語を述べ、書簡をとり出でて進らせ給ふを、阿闍梨すなほ文箱を開き、封皮押し斷つて見給へば、思ひもかけぬ遺書にて、盛景龜鞠の事、又みづから思ひ定めたる一件の事を書き寫し、もし本意を達ぐることなくば、いよく黒白を申す者なく、わが一族をも誅せられ、佞臣ますく、時を得て、世の危き事鶏卵を累ぬるがごとけん。奥州は、むかし惟房が三年の任に、恩顧の國人なきにしもあらず。子どもらは一日の難を逃け酒かに陸奥へ下りて國人をたのみ、もし世の中亂れて、君の御大事に及ぶことあらば、いそぎ洛へ上りて、死をもて忠を盡し、その紱を得ば、父が孤忠を聞えあけて、救免を蒙り給へ。そ

の餘の事は偏に阿蘭梨の憐愍を仰ぎ奉ると書き給ひければ、「こはそもいかに」と打驚き、件の遺書を
 彼の兄弟に見せ給へば、松稚梅稚かはるゝに讀みくだち、周章大かたならざりけり。その時松稚は
 梅稚に對ひて、「阿蘭梨坐さざりしかば、かく時刻も後れ、今ははや白川へ討手の向ひつらめと覺われ
 ば、母の事いよ、心もとなし、われは走せかへりて母御を救ひ進らすべう思ふなり。御身はわが從者
 を將て、とく落ち給へ」と宣へば、梅稚聞きもあへず、「こは見上の仰せとも覺えず。死するとも、活
 くるとも、兄弟もろともにとこそ思へ。などで梅稚をも伴はんとは聞え給はざる」と恨み給ふを、松
 稚頭をうちふりて、「兄弟もろともに死地に入らん事は、謀の拙きに似たり、殊さら御身は脆弱にし
 て武の道に疎し。強ひてゆかんとするは却つて不孝なり」とて、わりなく止め、既に走り去らんとし
 給へば、阿蘭梨は驟りにその勇敢を稱讃し、「やよ松稚、下郎一人は残りおくとも、二人の家隸は將て
 のき候へ。汝ひとりを放ちやらんは、我も又胸くるし」と宣はするに、松稚これを固辭みがたく、か
 ひがひしげに打務ちて、はじめ將て來給ひたる二人の家隸をいそがしつゝ、山を走せ下り給ひけり。
 この二人の家隸は、鹽屋藤三、大野小七郎と呼ばれて、おほえあるものなり。惟房朝臣、後の事をお
 ほして、この二人に供させ、松稚を深山へ登し給ひたりとぞ。さても栗津六郎は松稚主従下山の後へ
 走せ参りて、阿蘭梨海邊に見え、惟房一院の御所にて討たれ給ひし事、家中の壯士等松井源五に語

らはれて、主を討たんとしつる事、赤石判官盛景、討手として馳せ向ひ、白川の館を放火し、亦姪女前は春雨に挟け替かれて、東のかたへ落ち給へる本末を審かにせしかば、阿闍梨はさらなり、梅稚は父の横死をかまじび、六郎が精忠を賞嘆して宣ふやう、一阿闍梨西谷へ赴きて、歸り給ふ事の晩かりし程に、父の遺書を今少し前に披見して、はじめて事の確據をしりぬ。又家兄君は母の事、心もとなしとて藤三小七郎を將て、洛へ走せかへり給ひし。と物がたりて、件の遺書を見せ給へば、栗津六郎は讀みもあへず不覺に落涙し、それがしこへ參る事の早かりせば、松稚君を洛へは歸し奉らざるべきに、今は退ふともかひあらじ。既に志賀の方には、討手の大勢うち出でたらんが。しからば松稚丸は引きかへして、東濃路へ走り給ふべし、とかく猶豫すべきにあらず、とく出でさせ給へしと申しつゝ、主従もろともに草鞋穿きしめて、仲間阿闍梨に別れを告げ、笠を深くし裳を折りその日の黄昏に由を下るに、松稚の殘しおき給へる下郎は、緣由を聞きて驚き恐れ、いづ地ともなく逃津うせけり。栗津六郎この景邊を見て、「徒等はありとも恐心に足懸ひなり。只此女御前松稚君こそおぼつかなければ、誘給へ遣ひつゝ參らせん」と急がし立て、梅稚を引きて、湖水を北へ走せたりける。扱も松稚丸は、藤原藤三、大野小七郎を將て、志賀の方へ赴き給ふに、日もや、暮れなんとして、一叢くらき森林の中より、松井源五純則、影の兵を引きてゆくべき路を遮り留め、「松稚丸よく聞き給

へ。惟房逆心によつて、謀伏し給へる事、是非に及ばず。それがし幸ひに赤石判官の庇みを得て朝敵餘頼の汗名を脱れ、迎へようざん爲にこゝへ来れり。古主の好みに首をば繼ぎて進らせん、とく／＼参り給へ」と呼ばれば、松稚齋然として太いに怒り、「不忠の匹夫、主を賣りて榮利を計らはん」とすとも、天いさでか怒すべき、さらば思ひしらせん」と罵りて、太刀引き抜き懸け入り給へば、小七郎藤三も主に覆れじともろ共に、鶴翼魚鱗に列なつたる多勢が中へ割つて入り、嘘き叫んで戦うたむ。源五が大勢に比ふれば、九下が一毛なる主従二人、志は勇しといへども頼く切り腕けんやうもあらず。とかくして松稚は一方を切りひらき、つと走り抜けて見かへり給へば、藤三小七郎は討たれたり。こゝにて死なんは父の志を空しうするなりと思ひかへして、湖水の方へ走り給ふを、敵透間もなく追つ蒐けて、既に危く見え給ふ。こゝに比叡が辻に道祖神あり、この日二月某日祭禮の宵宮なりとて、赤塚下坂木の里人等、おもひ／＼の装束して日の暮るゝを俟ちあはし、只今神輿を假屋へ擡け出さへとす。折しもあれ、松稚を逃すな」と聲々に罵りて、影の兵矢を射かくること、比叡山おろしに幸崎の雨吹き掃ふに異ならねば、里人等驚き怕れ、神輿を捨てて逃げうせけり。松稚は左右の手に二振の太刀を抜きもちて、射る矢を切りはらひ／＼、透を見て腹を切らんと思ひ給ふに、事急にして便りを得ず。叶咲只今討たれ給ふべう見えたる處に、神木とおほしくて、社頭にいくとせか經りたる

衫（かみゆび）の袖（そで）より、はら／＼と礫（ついで）を打ちかくること、金の飛ぶが如く、忽ち物ありて飛び下りるを見れば、面（おもて）は袈裟（けさ）の如くにして鼻高く、全體（ぜんたい）金色（こんしき）に光りわたりたるが、手に長き鉾（こ）を引提（ひき）け討手の兵（へい）を四角八面（しやうかくはつめん）に葎（わら）きたつる、その勢（いきほ）ひ驟然（しゅうぜん）として、更に當るべからず。源五（げんご）はいふもさらふり、兵士（へいし）ども大いに怕（おそ）れ、「こは疑（うたが）ふべうもあらぬ比良（ひら）が嶽（たけ）の天狗（てんぐ）なめり。この衫（かみゆび）には彼の君（きみ）のきり／＼、懇（こん）ふと問（と）またり。天狗（てんぐ）礫（ついで）に打斃（うちころ）され、可惜（あつちらひ）命（いのち）うしなふな」と罵（のの）りあひ、われ先に逃（に）げんとするに、足元（あしもと）疎（そ）くして目に跌（おち）き、われとわが刃（やいば）に身を擡（た）き、或は途（みち）をうしなうて、湖水（うみ）に落（お）つるものもあり、見ぐるしかりける形（かたち）勢（いきほ）なり。さる程（ほど）に討手の兵（へい）遠く逃（に）げ去（い）りしかば、松稚（まつち）に不思議（ふしぎ）に必死（かならず）を覽（み）れ、彼の妖怪（やかい）にす、み對（たい）ひて、「そも御身（おんみ）は棟（むね）か神（かみ）か。何（なに）の因縁（いんえん）ありて、松稚（まつち）を救（たす）ひ給（たま）ひし」と宣（のたま）へば、彼（か）のもの塵（ちり）さほとちかう来（き）りつ、假面（かめん）をかい遣（や）り捨（す）つるを見れば、妖怪（やかい）にあらず。年紀（としご）四十（しじゅう）あまりにして、身丈（みぢ）高く筋骨（こつぽう）いと逞（たくま）しき男（おとこ）なれば、いよ／＼不審（ふしん）し給（たま）ふに、この男（おとこ）なほ近くつゝいて申（まを）すやう、そのがしは赤塚（あかづか）の商人（あきんど）にて、軍介（ぐんけい）と呼（よ）ばる、ものなり。この十五六年（じふごねん）のむかし、わが妹婿（いまいと）時（とき）と申（まを）すもの、御節（ごせつ）に給（たま）事（こと）いたせしころ、傍輩（はろばい）の壯（むさ）後（ご）、山田三郎（やまださんらう）と密通（ひそつう）し、事發（みせ）覺（め）れて男女（おとこめ）もろともに殺（ころ）さるべかりしを、御（ご）母（はは）公（こう）直（ちか）を御前（ごぜん）備（ひ）みおほし、潛（ひそ）かに一包（ひとづつ）の金（かね）を賜（たま）はりて、二人（ふたり）もろともに落（お）さし給（たま）ひぬ。よつて屋崎（やさき）は山田三郎（やまださんらう）と共に赤塚（あかづか）に来（き）るといへども、それがし又（また）其（その）の不義（ふぎ）を責（あ）めてよせ著（し）す。彼等（かれら）今は東（あづま）のかた

に往まひて、鳩崎うが産うめる子こも年来としごろになりぬるよし、風の便たりに聞きえたり。わが身みは民間みんかんに人となれど
 も、いと弱よきより義ぎに仗たつては財たからを輕かろんじ、恩おんを報くするに死しをたも辭かせず。折せあらば吉田きちだの家いへに一いつ層そう
 の力を竭つくし、妹あねが再生さいせいの恩おんに答こたへ奉たらんとは思おもひながら、館たねへ出で入いる身みにあらねば、心こころならずも影かげ
 の年月としつきを過すし彼かひき。しかるに今宵いまよひ縁ゆかり故もとはしらす、忽たちまち地ぢ松まつ稚わ丸まると迷まよふなと呼よばはりて、影かげの兵へい頼たのり
 に矢やを射いかけ、君きみ危あやく見みえ給たまふ。このときそれがし思おもふやう、松まつ稚わ丸まると聞きえしは、恩おん高たかき吉田きちだ家の稚わ
 君きみなり。さらばとて救きうひ進まらせんとするに、里さと人ひと等ら恐おそお怖おそれて逃にげ走はれば、これこゝろを相あ言いふに及およばず。
 幸さいはひなるかな、當社たうしやじんじ神事かみごとの宵よ宮みやにて、神輿かみこしを出いしたてまつる、それがし嚮導かうどうの役やくに當あたりて、兼かね田た彦ひこに
 打うちてり。加かへこの衫かみを昔むかしより、天狗てんくの憩やすみひ處ところといひもて傳つたふれば、彼か是こゝろ早はや速すみに思おもひよせて、濡ひか
 に件くだまの樹きに攀よぢのぼり、天狗てんくと見みて道みち取とり等に膽いそを冷ひやさし、終つひに危あやきを救きううて、はからずも年とし來きの志こころざし
 をいたせり。家いへには妻つまもあひ女むすめ兒こもあひて、みな心こころざま信ま々くしきものなり。誘いざ給たまへ、伴ばんひ進まらせん。」
 といふ。松まつ稚わ丸まるは情じやう由よしを聞ききて、成な瀬せ斜しやならさず「鳩崎うが事は、わがや、殿たんごふごころなれど、母ははの物ものが
 たりにてよくその事ことをしりぬ。我われいま家いへ壞やぶれ父ちち疎そせられて、身みをよすべき處ところなしと雖なも、このほとり
 は洛らくちかくして、世よを濟たぶに便たりよからさ。且かつ汝なんぢが家いへを係か累らひせば、妻つま子の歎なげきも痛いたまし。我われは只ただ獨どく行かう
 して、母ははと弟あにに索たづねあふべくおもふなり。」と宣のたまへば、軍いくさ介すけはじめて惟房みづむら朝あ臣しん滅めつ亡ぼうの事ことをしりて大おほいに

驚き、しからば船にめされて、先づ品村（北嶽が辻より御水へ一里の外にあり）へ赴き給へ。もし討手ふた、び来らば、そのたびは逃れがたし。幸ひ河に一艘の小舟あり、それがし棹をとつて渡しまるらせ、何國にもあれ、留まり給はんところまで、御供つかまつるべし。とて、信々しく聞ゆれど、松權はつや／＼これを諾ひ給はず。汝今宵家にしらせずして遠く去らば、妻女兒がいか許りか心くるしく思ふらめ。我、苟も身を脱れんとて、人の妻子を苦しめんやは。と宣へば、軍介聲をふり立てて、それがし纏ひ半年一箇月家にあらざとも、妻女兒が立地に限ゑて死ぬるものかは。家を離れ妻子を顧みざるも、義のおもむく所あればなり。とどて女々しき事を宣はするぞ。と焦燥ちて、わりなく船に乗しまるらせ、みづから棹を取つて漕ぎだみし程に、その夜の亥の刻といふに、栗本郡なる品村に著きにけり。夫れ伎倆たまたま等しき事ありといへども、その爲まところこよつて善惡迷に墮なり。昔松井源五が草帽を殺して、これを天狗に託せしに懲なり。今赤塚の軍介が恩雠を救ふに、又これを天狗に託するは剛なり。嗚呼彼を處とせんや。是れを處とせんや。剛と懲とは相観て心を用ゐる事同じからず。賢へば附子の大毒なるも、症にしたがつて用ゐる時は、寒濕の聖薬とするが如し。膀胱回陽に、に至つてこの能毒をしろべし。

十一 春雨厚澤野に山客と戦ふ

さて梅稚丸は、粟津六郎に扶け救かれ、美濃路を投して走り給ひしが、遂にて母公見君にゆきあ
 ひ進らせんとて、或は急かに走り或は緩やかに走り、こゝかしこに逗留し給ひし程に、彌生の上旬に
 至りて、やうやく武藏國まで來給ひけり。ある日の晝昏に、戸田河といふ大河を打ちわたり、曠野の
 すゑなる古墳の邊を過りたまふに、墳の陰に一ツの狐ありて人のごとく坐し、物の本を讀み居たり。
 粟津六郎これを見て、「こは怪有なる奴かな、いでや走らして路の疲勞を慰めまらせん。」といひもあ
 へき、石をかい拾ひてばらりと打ちかくれば、狐はいたぐおどろき驚てて速なく逃げじせ、跡には
 彼の間子のみ残りける。六郎これを取りて見るに、影人の名を寫し朱を以て點を引いたるもあれば、
 いや、怪しむ、やがて梅稚丸に見せ参らするに、梅稚丸又そのこゝろを曉り給はず。後のかたり種とも
 なるべきものなりとて、これを僕に扶め、この夜は平尾の郷宿盡所なる家に宿りて御め給ふに、
 主人の男はやく粟津六郎を見て、「こは勝久にあらずや、よくも來給ひたる。まづ裏に入らせ給へ」と
 いひつゝ、さし出す。燈にて六郎其の人を見るに、山田三郎光政なれば、且驚き且歎び、門方に立在み
 給へる、梅稚丸にもしかん、のよしを聞えまらする間に、鴉崎も走り出で、やがて主従二人を奥ま
 りたる座敷に請ひまゐらせけり。そのとき粟津六郎は、山田三郎を近く招きてはからざる對面を歡び
 聞え、さて惟舅朝臣滅亡の事を物がたり、又俱しまゐらせたる稚君は梅稚丸にて坐する事、班女御前

松稚丸のこと、奥州下向のことなど、首尾を密語くにぞ、光政は思ひしより、梅稚のおとなび給へるを見奉るにも、深く君家の滅亡しうら歎けば、塙崎も薫撫のこなたにて、縁由をまれ聞き、女兒玉柳を呼びて、光政が後方に居ならび、夫婦もろともに申すやう、一身の過ちを今さらし、申さんも面ぶせなれど、それがし等弱かりしとき、色に耽りし越度によつて、すでに罪せらるべきを、斑女御前のいとほしみ深く、母春雨が誠心を思召し出されて、助けがたきを脱さし給へば、のく末達き東路の擧生の小屋に住居して、里の壯俊に劍法を教へなどするを生活とし、はやくもこゝに上とせあまり五年の春をむかへたり。又是れなる末通女はわかし塙崎が、御簪にありしとき懐胎りたるひとり子にて、名を玉柳と呼びて候。さればかく親と子ど、こゝに存命へ果てん事、みなこれ君の恩澤なれば、君家の事奉母の事、日として忘るゝ隙もなく、歸參の願ひ切なれど、罪を贖ふ功もなく、みづからこの身を恨むるのみ。しかるに今度不慮の事出で來りて、殿には誅せられ兄弟の稚君はさらなり、斑女御前の御ゆくへを驥り索むることおほろけならず。此のわたりもいと嚴重なれば、驕りに心苦しくて、もし洛にあるべくは命にかほり進らせて、舊恩を報いたてまつらんと思ふのみにてせんすべをしらす。索め奉らんにも御往方定かならねば、ます／＼思ひくしたる折しも、はからずして梅稚丸、わが家に立ちよらせ給ふ事いまだ君臣の縁竭きず、時に頼める面目なり。只願はくは身の罪を宥免あつて、奥

州下向の御供に召し加へ給へかし。しからば且くこゝに逗留なし進らせ、しのび／＼に班女御前松雅丸に索ねあひ、御母子の再會を計り候べし。」とて夫婦かはるゝ、かき口説きて、數行の蕩漫に及びけり。梅雅丸は彼等が信々しき志を感じおほし、きのふにけふは事かへて、立ちよるべき陰もあらねば、汝夫婦を頼み思ふところなり。抑敷山を出でしより、母と兄とのゆくへをしらす。もし捕にれば、幸やとおもひやる、わが心うさを察せよ。」と宣へば、光政等いと理におほえさまん、慰めまらせけり。かくて鳩崎は、女兒玉柳と共に庵野に到り、夕餐もて出でて感應したてまつれば、粟津六郎は、盛景父子、松井源五が奸悪、又権房朝臣の書き遣し給へる難事を、あるじ夫婦に説きしらすれば、光政も鳩崎も或は怒り或はうち歎きぬ。さて夕餐も果てしかげ、光政が申すやう、「そわがし則法を教ふるを生活といたまなれば、日にノ、里の駐候などの詣來ること繁し。しかるの母屋におき参らせんは懼りなきにあらず。彼首の庭を隔てて、背門にさ、よかなる座敷あり、この處世を濟び給ふに便りよし。又それがしは明日より病ありと偽りて稽古をとめ、夜毎に六郎とかはるゝ、班女御前松雅丸を索ね候べし。」もしこの路に來給はんには、逢ひ奉らざる事あるべからず。」と申すにぞ、梅雅丸も粟津六郎も、「こは然るべし」とうけ引きて、この夜より彼の別室に移り住み、「班女松雅を待ちあはしてもろ共に陸奥へ下るべし。」と議し給ふ。さる程に朝夕の食事何くれとなく鳩崎玉柳のみ持ち

運びして、物乏しからず應しまるらするに、玉柳はその年方、稚稚に一ッ劣りて、三五の春にはあれど、彼の君より猶おとなび、鶯の子とともに、かかる田舎の野陰には生育でども、此處なる鶯音、ふつ、かなる舉止もなく、容止も又艶妖なるに、春風時來つては、南枝花開くことはやく、梅雛丸のらうたけて、女子にも勝れる姿匂やかなるに生こ、あつきて、たのむの鶯の翅に言の葉をかよはし、忍が岡のしのびのくに、ことづてやらん水ぐきの津もがなとて、頼りに思ひくしながら、溝石にいひよる折もなく、只徒らに心を焦しけり。父の歎きは巽にして、書は鳩崎を漫行きさせ、夜はみづから彼此を徘徊して、斑女松籬にひきあひ参らせんといたせども、たまたま着うれだに聞くことなれば、もし走り過ぎやし給ひけん、又搦はれやし給ふ、と思ふに安き心もあらず。このとき斑女前は、春雨に介抱せられ、果てしなき東路の破藪に消えやらぬ雪を寒み、山河の音かしましき、旅の宿の寐覚々々に、亡き夫のこしかた、愛子の行末を思ひつゞけ、涙にいと朽ちまざる、袖は人日と裏むにかひなく、わが子は後か先かとして、この山本彼處の樹陰に立在み給へば、思ひのほか日數程ふりて、彌生中の四日といふに、武藏國戸田川の南なる厚澤野邊を過りたまへば、日も既に暮れて人跡稀なる松原に、野臥十人ばかり野火焚いて圍坐したるか、彼の主従を見て私語きあひ、忽境はらノ、と走り出でて遮り音め、斑女前の笠の内を、會難もなくさし覗き、一こは野陰なる女子かな。年こそ少し

長けまされ、賣らば猶よき價得つべし。誘給へ。」とて左右より、わりなくその手をとらんとするを、春雨押し隔てて寄せもつけず。「こは狼藉なり。女子と思ひ侮りて、後悔せそ。」といきまけば、野臥共軼然とうち笑ひ、「この老女頭は冬かれの尾花を袢ね、腰は案山子の弓を張れど、口は猛くもほざいたり。者奴、臆引き裂きて、息の根とめよ。」と罵りて、むら／＼と走り懸るを、春雨は刀を閃りと抜き、前に進みし荒男の、諸膝薙ぎて切りたふせば、「こは思ひの外手剛き奴かな、我打ちふせん。」とどよめくを、春雨は物ともせず、右に挂へ左に支へ、命を限りに戦ひけり。梟雄無敵の野臥等も、輒く捷を取り難くて、二三人引きわかれ、手毎に野火の焚きさしを投げかくれば、その火芝生に飛び散りて、夜風のまに／＼發と燃えたち、頼りに此方に吹きつくれば、春雨今は防ぎ難ね、班女前も裳を焼かれて、足の踏むべき處もなく、只頼袂掌て給ひしが、信と心づく事ありて、遽はしく懐より松梅の鏡をとり出し、野火に向つて擲ち給へば、時しもあれ岩間の石湯、決然として滾り、聽てその火を滅しとめたり。夫れ鏡はこれを月に象る、月はこれ太陰の精なり。今明鏡の徳をもて、暫時に猛火を防ぐ事、實に奇なりといひつべし。春雨はこれに力を得て、矢庭に二三人を切り倒すと雖も、その身も又あまた深手を負ひ、勢ひ竭きて轉し軼べは、一人の野臥その刀を奪ひとつて、胸をか刺さんとする處に、誰とはしらす松の樹陰より打ち出す手裏劍に、彼の鷲鳩尾骨を打ちぬかれて、のけ様に斃

れは、悪徒等これに舌を振ひ、駭然としてす、み得ず。時、一人の武士、刀を引提け、構間より跳り出で、「盗賊逃ぐることなかれ」と呼ばはりて、忽ち三人に手を負はし、一人を切つて兩段と六す。その刀尖電光の如く閃きて、更に當るべうもあらねど、残る野獸共、逃ぐとも逃さじと思ひたえて、已むことを得ず打つてかゝるを、彼の武士は、只纏もて草を刈るがごとく、或は切り伏せ或は葦ぎ什し、一人も残さず討ちとめたり。この人はこれ別人にあらず、山田三郎光政なり。件の光政置しく刀の血を拭ひ納めて、春雨を抱き起し、「やま母御母御痛。三郎にて候ぞ、疵はいと淺し、いかに心はつき給ひたるか。」と呼び活ければ、春雨活と眼を開き、「狼狽へたりや光政。斑女御前彼處に坐せり、とく勸り進らせて、身の罪を贖はんとは思はず、死になん／＼とするこの母を勸りて何にかする。年は聞けても悪かきは、昔にかはらざりけり。」と、わが手を勸ます怒りの聲に、臍口よりさつと流る、鮮血は泉に異ならず。斑女前は思ひもかけず、山田三郎が來たるを見そなはして、歡び給ふこと斜ならず一珍らしや光政。汝不思議に主を救ひ、母の仇その處を去らずして討ちとる事、前の罪を贖ふに足れり。われ少將に代り參らせて、今ぞ汝を免すなる。まづわが事は心とせず、春雨を勸りてよ。やと春雨、心持はいかに。「と問ひ給へば、春雨は只掌をうちあはしつゝ、不覺に落涙し、「わが子御免しを蒙りて、こゝより傳きまるらんには、春雨が生きてあるに勝るべし。」とく光政を召し供せられ彼

が家に赴き給へ。光政何とて躊躇ふぞ、誘引ひまらせよ。といそがせば、山田三郎は、絶えて久し
 き班女前に見え奉るうれしさと、母の深手の悲しさに、諭をかき拭ひつゝ申すやう、「某等この年
 來こ、よりの程近き平尾の郷に住居ひて、親子三人僅かに口を飼ふのみ。然るにいぬる日梅稚丸、粟津
 六郎を將て入らせ給へば、あまりに忝くて、ふかくしのぼし、なほ班女前松稚丸に逢ひ奉らん爲
 に、夜毎に彼此を徘徊しつるかひありて、一ツの望みは遂げながら、來ることの遅からずば、母をい
 かでか撃たすべき。思へば遣り憾けれ。と只願に悔い歎き、又母の耳に口を寄せて、「誘わが肩にか、
 り給へ、家に伴ひ進らせん」といはせもあへず、春雨忽地頭を擡け、「やをれ光政家まで生きてのくべ
 しとも、おほえぬ母を伴はんとて、王君を尊閑に致しなば、重き罪を免されたるかひあらんや。鬮に
 梅稚丸、汝が家に入らせ給ひぬとかし。しからば只心もとなきは、松稚君の御のくへなり。汝夫婦心を
 竭して索ねあひ進らせ、班女御前の御心を休めよ、いふべきは是れのみなり。いでわが手療治するを
 見よ」といひも了らず、刀を咽喉に突き立てつゝ、うつぶしになりて死にけり。山田三郎は、哀傷
 やる方なけれども、母の遺言に聽まさされ、齒を切りて寄りもそはず。班女前も一稚きよりかき抱か
 れしこの身なれば、母とも思ひつるものを、定めなき世のた、すまひに、武藏の果てなる路傍の草葉
 の露と消えぬるがいとほし。とて泣き給ふ。されば外にも無常を告ぐる、遠き寺々の鐘の數、かゝな

へ見れば手の刻なり。かくて山田三郎は、母の屍をしぼしも置かば、慙歎に傷られたことを悲へ、泣く泣く減え残る野火をかき集めて、一片の煙となし、斑女前もろともに、念佛數遍唱へつゝ、家路に誘引ひ奉れば、斑女前は彼の鏡を拾ひとつて、光政を見返り、「汝もしれる二面の鏡は、いぬる年、兄弟の子どもに分ちとらせよ」と古殿の仰せしかば、梅雅には一面を與へて山田に奪し、この一面は松雅に與へしを、わが身落を落つるとき、袖に捲きて出でたりしが、もしこの鏡なかりせば、終に焼かれて亡せなむとて、鏡をもて野火を防ぎとめし事を物がたりたまふに、光政ふかく悲憤し、彼の日本武尊の故事など申し出でて、やゝ蓮村の邊まで来る折しも、松井源五純則、影の兵をもて猛に八方よりの茶げば、光政はさわざたる氣色もなく、頭をめぐらして信と見れば、おのゝくに矢を刺ひて、すほといはば射ととらんと構へたり。時に源五聲をふり立て、「光政われを認めりや、われ今度延尉察景ぬしの代官として、關東に下向し、權男の妻子を驅り索むるなれば、更にむかしの源五にあらず。しかるに頃日梅雅主従を汝が家に舍藏ふこと、しる人あつて訴ふるをもて、今夜自らむかつて捕め捕らんとする處に、はからずして斑女前をこゝに見ること、虎を狩らんとしてまづ罠を得たるが如し。汝無謀なく斑女を逃し、又誘導して梅雅主従を捕め捕らせなば、この矢箭をゆるすべし。心を定めて思答せよ」と呼ばはれば、斑女前はいふもさらなり光政はその景唐を思ひ観て、清く心に

堪へざれども、影の矢面に立つたれば、進退こゝに窮まつて、いかにともせん術なし。さもあらばあれ逃る、だけは逃れて見ばやと思ひ返し、詭つていへりけるは、「王事豈いことなし、誰か身を捨てて、朝敵に與すべき。」一日古主の恩義に黙止しがたくて、今こゝに及べり。然れば梅雅主従を出さん事、仔細あるべからず。さはいへ、栗津六郎は、萬夫無當の勇士なり。今斑女御前を伴ひかへりて、いよ、こなき志を示さば、彼ます／＼心を放さんか。その油断を見すまして、掬め捕るとももし手にあはずば、おの／＼首打ちおとして遷すとも、この二ツのうちは違はじ。わが謀畧に従ひ給はば、一卒をも喪はずして、預は御邊の一人のうへにあらん。いかに承引き給ふべきや」といふ。源五聞きてしぼし思案し、汝がいふ所理あり。是れ蚯蚓をもて魚を釣るの謀なり。然れども、汝一日の難を脱れん爲に遂りて、彼等を落し遣るべうも量りがたし。よてわれはこの大勢をみて、直に出口々々を遠巻にし、その相圖を俵つべきぞ。故なく事をなし果さば、古朋輩の好み、我ち又あしくは報はじ。勞働ることなかれ」とて、誘りがに説き示し、遂に一方を聞かすれば、山田三郎は、源五がみづから掬め捕らんといはざる事は、全く栗津六郎が勇きに怖る、なめりと猜して、こゝろの中竊かに歎び、「心安かれ此の真夜中はすごすまじ。號笛を吹くを聞かば、事なりぬとしり給へ。」と應へつゝ、影の捕人に送られて斑女御前を伴ひまゐらせ、平尾の郷へ立ちかへる。嗚呼前門虎を防ぎば、後門更に泉

を進む。山田墨津の兩忠臣、縦ひ笑哈が勇、陳平が智ありと云、細く與女梅稚の脱れ給ふべうは見ざりけり。

墨田川梅柳新書卷之四 畢

墨田川梅柳新書 卷之五

東都曲亭主人著

十二 光政平尾郷に妻子を殺す

山田三郎光政は、松井源五が影の兵に送られ、班女前を伴ひて、平尾の郷に立ち歸るに、既に門方ちかくなりしかば、源五はこゝより引きわかれて、郷の出口々々を遠巻して、もつぱらその相圖をまつ。また粟津六郎勝久は、甲夜に光政と共に宿を出で、粟鴨のかたへゆきていまだ歸らさず。これも班女松種の往々をしらんが爲なり。光政はまづ裏の容子を張ひて、門よりは入らず、潛かに庭門なる片折戸を押しひらきて、班女前を誘引ひまゐらせ、月の影もいと暗き、樹立の間を繞りゆくに、何思ひけん、走りかゝりて、忽地班女前に手拭はませ、刀の下緒を抜き出して、矢場に縛めんとすれば、班女は阿母と叫ばんにも當たらず、かき拂ひて走り退かんとし給ふに、袷の袖を松の下枝に引きとめられ、袖はさら／＼と離れつゝ、懐なる鏡を携地と落して轉輾びたまふを、起しも立てず、膝々と縛めて、松に焚と繋ぎ留り、鏡と片袖を拾ひとつて懐に挟めつゝ、梅種丸の坐す別室のかたへ

竊ひそび行く。光政みつまさが胸むね中ちゆう更さらにしるべからず。こゝに亦また光政みつまさが女め兒ご玉柳たまやなぎは、梅うめ稚わ丸まるが家いへに來き給たまひつるは
じめより、濟すけかに懸か想そうして、思おもひ絶たゆる隙ひまはあらねど、さすがに父ちちの主しゅ君くんにてましませば、かしこく
ていひも出でさず、下したのく水をすい噴ふきかねし、心こゝろの蕪あ及およびなき、月つきの都みやこ人ひとにあくがる、を、梅うめ稚わもいちほ
やく氣け色しきに曉さと得とりて、あはれとや思おもひしけん、晴は昔むかしの夜よはじめて、房むすぶ門かどに音おとづれ給たまひしに、あやにくに
守もる人ひとの繁さかければ、本もと意いなく歸かへしまるらせしが、今いま宵よは父ちちの山やま田たも、栗くり津つ六むつ郎らうも家いへにあらねば、玉柳たまやなぎ
甲か衣ひより用もち意いして、その音おとづれを待まちつに、寢ねよとの鏡かがみも更さらけそめて、遣つかひ残のこしたる雨あめ戸どの隙ひまより、
春はるの月つき圓まるかにさし入れ、外とち面めんに立た在ありむ人ひとありけり。玉柳たまやなぎは障しょう子しに映うつる影かげを見て、彼かのの君きみなりとこゝろ
痛いたしく、そと起おき出でづる折ひしもあれ、山やま田た三さん郎らうは、足あしを跪つて息いきを呑のみて、梅うめ稚わを跟つけ來きり、遣つかひの外とち
に懸からひ居ゐたり。とはしらすして玉柳たまやなぎは音おとさせじとて諸もろ手てをかけ、障しょう子しをやをら引ひきあくれば、梅うめ稚わ
やがて入り給たまふを、光政みつまさ閃ひらりと跳はり懸かけて、梅うめ稚わを取とつて押おへ、一ひと刀たぐきと刺さす。刺さされ、なほ反へね
覆かへさんとし給たまふを、數あまた回たがひ刺さす程ほどに、やうやくよわり給たまひける。玉柳たまやなぎはこれを見て、凄あはしくも悲かなしく
て、やよ母はは御お起おき出でて給たまへ、梅うめ稚わ君きみの撃うたれ給たまふ母はは御お々々と叫なび泣なき、聲こゑを限かぎりに呼よび立たつれば、
鳩うずら崎さきしく走はり來きつ。只ただ見みれば夫おつと光政みつまさは梅うめ稚わ丸まるを刺さし留とどめて、腕うでに首くびを切きねんとす。叶あはれと驚おどきつ
と寄よりて、かよわき婦かみの力ちからにも、思おもひ凝こりたり。一生いっせい懸か命めい、袖そでに香か線せんり卷まき、かろうじて解とけ

とる、刀さつ尖さきくるひて鳩崎たづみが乳の下ふかく搔かき切きらにぞ、「阿呀」と叫こゑびて轉まし廻まぶ。妻の苦痛くつうをものともせず、光政みつまさは再び中なか刀やいばを引き抜ひき、血ちに塗ぬれ給たまふ梅稚うめこの頭髻たがきを纏つかんで引ひ起おこすを、玉柳たまやなぎ今いまはと思おもひたえ、父の刃やいばにわが袖そでを、まきかけて握にぎりもち、胸むねのあたりへ衝たきたてて、身みれ苦くるむ形かたちに、父も思おもはず腕たゞしきし離はれ、刀やいば放はなして控たうと坐ざす。妻と女兒むすめは潰つぶれる、鮮血ちしほ引ひかせて左右さゆうに毆うひ寄より、鳩崎たづみ阿あとする息の下に、夫を恨にくめしはこうち瞻望せんぼうし、嘯光政せうみつまさどの、夫さへ思おもはしるものを、志こゝろ黙しむにも劣おとり給たまへば、とかういはんもかひなけれど、利慾りよくに惑まどひて主君あきみを殺ころす、悪人あくじんとは思おもひかけず、この年とし來くるわが郎かみとて、齊肩かしらける身みの口くちをしさよ、「抑おさむかしは假初かりあはに、近江おうみの契ちぎり債ちんとなり、助すけかるまじき命いのちなりしを、班女はんめ御前ごぜんの憐あはれおぼし、密ひそかに喝ひつゝ裏うらの、かねには花はなを散ちらしそと、教諭せしへの歌うたはわが爲ために、聖ひじりの書ふみにも勝まされり」とて、朝あさ暮ゆふにいひも出いで、寐ね覚ざめにも思おもひ出いでて、「夜よの衾ふすまは狭すくとも、洛はなの方かたを後方あとへにせず、われもままじ」と宣のたまひしも、みな虚言せうごにてありけるかな。僕かみへ見みれば去年こぞに今年ことしは、母御おんもさこそ老おい給たまはめ、わが兄あにもいかにやあらん。身みの過あやちより君きみと親おやに、遠とほ疎そかる不忠ふちゆう不孝ふけうを、贖あがふべき心こころはなく、塵々ちんちんしきも事ことによれ、とても深手ふかを負おひ給たまへば、梅稚うめこ君きみの魂たま緒いとのいと覺おぼつかなくはあれど、妻つまや女兒むすめが面おも前まへ、死しをもてかくまで謀たくむるを、露つゆ許ゆるりも思おもひしりて、理ことわりとも聞きき給たまはば、心こころの限かぎり勤いたりまゐらせ、それにても事ことたらずば、御亡骸おんなきがらを葬はうむりて、腹切はらきつて亡うせ給たまへ。いひあはさね

ど玉柳が、健氣に自害し侍るを、哀れとは見給はずや。こはわじんなり淺まし。とて、かき口説きつ
つま、と泣けば、玉柳も涙雨のごとくにて、一ませたるものと思さんが、梅種君を想思して、いひよる
よすがも愁ひに、過世に縁締びけん、彼の君よりかよひ路も、や、一夜さになりぬれど、人めの闇の
關守に、打ちあけても得相語はず、昨夜はあはで歸し進らせ、今宵はたまノ、手代を、鼓ぶるかひに
曉の、鶏遅かれと思ふ思ひきや、わが房門にて、父にあへなく弑され給ほんとは、一夜を千夜また
のしみし、あふせはなくとも同じ日に、君と冥土へゆくべくは、生きて歎きをせんよりは、なか／＼
嬉しかるべけれど、主を弑せし三郎が女兒とて伴ひ給はずば、親子は元來一世ときく、ひとりや踏え
ん死出の由に、今より惑ひ侍るなり。妻を殺し手を殺し、誰がため慾に執りたまふ。よからぬ人のを
ほり路や、主を内海の故事に、悪ならぬ身は終にまた、竹の節に貫かれ、木の抄に集けらるゝ、悪人
の女兒といはれなん。わが後の名は惜しからで、悪人なる親といはせんが、いと悲し。」と云ふ聲の
振るにも猶よわりのく、母は悲歎に堪へかゝて、肢體をしほる紅の、涙に鮮血も滲ましたり。光政は
つゝと聞きて冷笑ひ、「あなかまや、妻子の爲を思へばこそ、世に出でんとかくはせしを、わり
なく留めしめながら死するは、世の常言に今もいふ、親の心を子はしらすとも、鳩崎はなぞてもものを
もわきまへざる。われ今度厚澤の野末にて、丘女前影の野臥に苦しめられ、母春雨も討たれたる後へ

行きかゝり、彼を伴ひて立ち歸るに、蓮村のこなたにて、思ひもかけず、松井源五が弓矢を連ねて八方よりとり圍み、梅稚丸を汝が家にかくし置くこと、告ぐるものあるによつて、今ゆきむかふところなり。とくく、班女前を逃し、梅稚主従を擁め拂つて出さば、一旦舎藏へる罪を放べ、よきに吹擧せん。」といふ。その時われつら／＼思ふに、むかしはさ、やかなる過ちを責めて追ひ放し、今そのよるべなきまゝに、勘當を許さん。」といふ故主の志頼もしからず。さらば班女梅稚を源五に還し、この孫累を脱れなば、却つて世に出づる便ともなるべしと思案し、しばし班女前を預け給はば、餌として粟津六郎に心を放さし主従を生拘るか、もし又手におはすは、各首を刎ねて進らせん。」と諾ひ給ひし程に、源五はわが門方より引き別れて郷の出口を固めたり。我は又庭門より入りて裏の窓子を張望ふに、粟津六郎は未だ歸らず、さらば者奴が歸らざる間にと思へば、心願りに違はしけれど、怒ひに牛拘らんとせば、汝等に阻められ、事後れて六郎が立ち歸らば、悔のともかひあるべからずと、是れを慮り、まづ班女前を庭の木陰にて刺し殺し、梅稚が爰に到るを躑け來りて、一刀に撃ちとめたり。よしや汝等が物に狂ひて死ねばとて、今に及びて止むべきか。」と、ほごきにはざいて身を起し、鶏崎が乳の下なる刀を丁と抜き取りつ、なほ片息なる梅稚の首を刎ねんとて立ちよるを、きはさせじとて、妻女兒が、よろめき／＼止むるを、右に蹴倒し左に踏み居る、鮮血に滑りて捨り減す燈火、

撲地と倒る、屏風の下に、布かれて蠢く鴉崎が、あやなき暗さいほひに光政は探りよつて、梅稚の首をふつと掻き落し、髻引提はて庭門に走り出で、號笛を吹き鳴らせば、松井源五四五人の従者を將て、生垣の陰を立ち出で、「われ前よりこゝにありて、事の爲體を見聞せり。拔羣の働き心地よし心地よし。」と賞すれば、光政莞爾と打咲みて、「粟津六郎いまだ歸らざれば、梅稚を生拘らんも易かめれど、しらせ候ごとく妻子は光政が心の如くならず、事後れてはと陸みて、まづ班女を殺し、今亦梅稚の首を刎ねたり。いづ實檢あるべし。」と述べをはりて、古實の如くさし出せば、源五は刀の鞘に手をかけて、左の足を踏み出し、「諸惡本來無明來實檢直儀何處有南北。」と唱へて楚と見るに、疑ふべうもあらぬ梅稚の首なり。光政亦班女前の首を見するに、處々血に塗れたれど、裏みたる片袖は、甲夜に認れるその人の挂なれば、聊かも疑はず、従者に二ツの首級をもたし、また光政に對つて、「かかればわれも諸方の圍みを解くべし。今にもあれ、粟津六郎がかへり來らば、汝たばかりでこれを討らとり、首を旅宿にもて來られよ。いにしへより勇士多しといへども、妻子の殺して已を悔くするものは稀なり、かならず恩賞あるべし。」と説き示し、旅宿を望して歸りけり。光政は暫しそなたの目送りて、馬の處にふんとするに、粟津六郎轉久は、いつの程にか歸りけん樂山の後より走り出で、「主君の難敵逃ごじしと噂かけ、太刀を打揮り切つてか、れば、光政も抜きあはして、受けながし受

けながし、雨戸一枚盾にとつて二十餘合ぞ戦ひける。この太刀音をまれ聞きてや、晴六郎過らせると呼びとめ、手廻して走り來たまふ人は、斑女前と梅稚なり。勝久こゝを見て且怪しむ。且歎び、こは、いかにとばかりにて、園子の外へ跳び逃げども、なほ疑ひは解けざりけり。そのとき山田三郎は斑女梅稚を座敷に請じ、又粟津六郎を招き入れ、こゝにはじめて千行の涙禁することあたはず。且くして申すやう、六郎はいふも更なり、斑女御前梅稚君も、光政が苦肉の計は知召さざるべし。時しもあれ今宵に至りて、梅稚君わが家に坐する事を松井源五にしられ、剩ハそれがし厚澤野より斑女前をとまひ進らす途にて、源五が黨に弓矢をもて圍まれ、一旦その鐵を避けん爲に彼がいふ所に從ひ、故なく斑女前を伴ひまゐらせ、家に歸ることは得たれど、奸智に圍けたる源五なれば、もし間諜者をもて、事の眞體を張望はする事もやとおもひはかみ、畏ければ斑女御前を長く縛め奉りて、木の下に繋ぎ留め、潛かに鴉崎を呼びて、落しまゐらすべき謀を相語ふ折しも、梅稚君しのびやかに、玉柳が臥房へ通ひ給へり。こは心を得すとて、又別室の方を見かへれば、彼處にも人影す。やがて闖窺るに、これも又梅稚君なり。こゝにますゝ怪しければ、斑女御前のもたせ給ひし、鏡を照らして月影に、彼と是とを熟視るに、女兒が方にかよふものは、眞の梅稚丸にあらず、全く獸の形にうつれり。さては彼のもの妖怪なり。老婦人に變ずるときは、死して後もしばしがほど、本形

あはれはさすといふ。幸ひなるかなこの妖怪の首を刎ねて、源五を救き、今宵の危難を脱るべし、とは
思へども班女前を救ひ奉るに計なく、事急にして深く思ひ廻らすに及ばず。只鳩崎が身を殺して、
かはり奉らんといふに任せ、まづ彼をもて、班女御前を別室に誘引はして、御母子の對面をなし進ら
せ、わが身は遽はしく立ちよつて、妖怪を斬き留めしを、玉柳は縁故をしらで、只願叫び泣く程に、
鳩崎はしり來りて憐れしむ、いたく憐むるおももちして寤を蒙り、なほあらそひ止むるときに、燈
火さへうち滅して、くらきに紛れて妻の首と妖怪の首をうち落し、やがて源五に遷與せしなり。しか
るに鳩崎が首は、血をもて斑かに染みかくし、向に班女御前、松の枝に引きかけて引離し給ひし袖を
もて覆みたるに、梅津丸の御首露ばかりも違はねば、源五もこれにこそ、心を放して寤はず、遂に歎か
れて歸り去りぬ。かくとはしらで玉柳が、靦をうらみ世をはかなみ、父が刀を掻い取つて、死するを
さにはあらずとも、いはぬ心のやる方なきは、わが胸さかを貫くより、苦しかりしこと辭たてて泣か
ぬはいとゞ丈夫の、泣くに勝りて哀れなり。班女前は袖にあまる涙を絞みあへ給はず、光政はさま
むなくも、鳩崎は久しく仕へしものならぬに、一日の恩を感じ、命に代るのみならず、愛子の死す
るを悲しとも、いはで首を打たせけん。實に春雨が嫁にして、光政が妻なりし。そも世に幸なき人は
あれど、たゞ一日に財を喪ひ、妻に後れ子を先だて、君を救へる忠臣と、いはれもしいはせざる、

主従ばかり味氣なきものはなし」とて泣き給ふ。梅稚丸も諸共に「われは法師となるべき身の、人を
 ば救はで思ひもかけず、夥の人に歎きを見すれば、後の世こそと推量られいと淺まし」とて身をは
 かなみ、不覺に落涙し給ひけり。粟津六郎はじめより、默然として居たりしが、掌を丁と打ち「光
 政一家の誠忠は、勝久がおまぶ所にあらず。それがし今宵巢鴨より歸り來れば、捕人の兵郷の出口
 を圖めたれば、梅稚君の事いよく心もとなく、溝を渡り草を漕り、忍びやかに徑を経て立ちかへる
 に、光政が主君の首を打ちて、源五に選別する闕窺憤怒りに甚へすして、ほと／＼忠臣を害せんとせ
 り。今縁故を聞きて思ひ出せし事こそあれ、いぬる日梅稚君、こゝへ來給ふはじめ、戸田の東なる塚
 原にて、年老る狐物の本を読み居たれば、われ磔を打ちかけて走らせ、彼の書籍を取りて見るに、一
 冊の簿にして、夥女子の名を記し、朱をもて點を引けるもあり、今將おもへば、彼の狐が里の女子の
 艶びたるを選みてその名を記し、既に事の成れるには、讒を付けたるものかとおほし。彼の簿令にあ
 りや」と申せば、梅稚丸懐より簿をとり出して、聞き見たまふに、果してその中ほどに、平尾の玉
 柳と寫して、いまだ點をば引かず、みなこれを見て默然とおどろき怪しみ、「さては頃日玉柳が、梅稚
 君に懸想せしを、彼はやく知りてその人に變じ、女兒が房にかまひけり。備し今宵火急の難儀にあは
 ずは、終に玉柳は狐の爲に浮さるべかりしを、光政いしくも撃ちとめて、一事兩用をなし得たり」と

て、栗津六郎殊更に首を練うて責めす。そのとき山崩三郎は、袂の明鏡をとり出でて、ふた、は妖怪
の類に照らせば、梅稚丸と見えたるも、忽ち年をる狐と變じ、血に塗れて舞たり。玉梅はなほ驚
れずしほし死したる如くなりしが、「阿彌」と叫びて頭を掻き、今一件の物かたりき、事の如くは備き
待て、はじめてわが身の幸ひをしる、みなこれ爰の慈悲なるを、淺き女の心から、手として見て
りし、不幸の罪ゆるさせ給へ。よしやこの身を浮きすとも、狐を男へ誘ひて、女子と人といはれな
ば、さぞな恥ぢしかるべきに、今死するこそ儲しけれ。父の顔のみ見れば、梅は爰には、き水の、
ありとはしれど涙ました、首は供の手に懸し、かかろ今表に死體にも、あふことかたきを頼れとも、
見せなばさば梅稚君、なからん長に一蓮の迦向をじといひかけて、卒然として息絶えたり。悲歎の時
刻おし作りて、鹿近くなむし女は、栗津六郎縁つらに立ち出でて、星の光さうる御土の、人々明け
續首なりとしらば、澤をふた、び寄せ來らん、談給へ」といそがしつ、丁と打つ手裏剣、ぬらひ
まがはず松が枝より、霧と噴つる霧者は、松非意丸が手のものなり。先取走り下りて首打ちおとし、
刃の釘頭を押し破りて、靜かに膝にをさる、梅丸が眼力手練の勢れたるを驚いてじます。栗津六郎驚
怖として、御事の謀なかりせばこの霧者も討ちとめかたし。梅稚君なるかな、男なるかなにと、互
に賞し賞せられ、すてに發足の用意るよほすに、光政は彼の鏡を玉女前にかへし送りせ、又梅稚に申す

やう、いとまかしこけれど人目をしのび給ふ爲なり、玉柳が脱ぎ捨てたる衣服をめされ、篋を深くして出で給はばやいと申すにぞ。班女前聞き給ひて、「せめてその人の衣裳なりとも身に著け給はば、追薦ともなりぬべし、とくく。」と宣ふに、梅稚丸は玉柳が衣引き奪ひて、田舎女の旅する如くに打拵ち給ふ。時に裏津六郎は、光政に對ひて、「それがし御供つかまつれば、御母子のうへはいと安し。御邊はなき人々の屍をもとりをさめ、後より追ひつき給へ」といふ。班女梅稚もろともに、「六郎よくぞ申したる。ゆくべきかたは陸奥なり、光政はしばしこのほとりに濟び居りて、松稚丸を作ひ参らば、いかに嬉しかるべきこととて、わりなく宣はするに固辭みがたく、山田三郎はこの曉家に留まり、主従三人は水鳥の、菓糖のかたへ赴き給ひぬ。

十三 澤有淵の悪棍怒つて少年を鞭つ

かくて班女前梅稚丸は、裏津六郎勝久に郷導せられて、鳥越の郷近く來給ふに、班女前は通夜の心づくしに、密さへ賣りていたく憐み給へば、裏津六郎は小草刈り布きてしばし憩はしまるらせ、なほさままぐに介抱す。梅稚は又、薬を進らすべき爲に清水を汲まんとして、茫茫たる春の野を、ゆけどもゆけども逃水の果てしなきまで索給ふに、忽地いとおどろくしき荒男、木陰よりつと出でて、梅稚に猿轡とかいふものを銜ませ、軽らにかき抱きつ、かすみ隠れに走り去りしかば、六郎遙か

に見て驚き怒り、草葉踏みしだきて消ひのくに、斑女前は驚うちつわざ、一やよ勝久、とく消ひ留めてよ、と唾びかけつ、おなじ野もせをたどり給ふ。さる程に栗津六郎は、路五七町消ひゆきしが、忽地彼の荒男を見うしなひ、頼りに焦燥ちて木の陰叢の中、すべて物のかくるふべき處はおちもなく、素ねめぐるに終に逢はず。斑女前の事も又心もとなければ、やがて舊の路へ立ちかへれば、とり遣れ給へると見えて、松梅の鏡、草の纏の上にありて、その人は半さま。こはいかにとます、と驚いて、しばし呼びまゐらすれど、只誰のふ應へするにぞ、我ながら鈍ましく、山田三郎がいくその心を起し、妻子を殺して救ひ奉りし主君を、われ忽地に奪はれて、何の面目かあるべき。已みなん、と驚りかこち、刀を引抜きて既に腹を切らんとす。滑かる處に笠深くしたる旅客二人、行樹陰より走り出で、「勝久過ちせそ。」と呼びとむるを見かへるに、前に進みし弱冠は、松稚丸にてありければ、栗津六郎或は驚き或は歡び、且く死を止まりて、まづ斑女梅稚の事、山田三郎鳩崎玉柳等が事を聞えまゐらせ、「始めは筒様々々なり、終りは如此々々の形勢なれば、とても忠義を重うることあたはたと思ひたえ、今こゝに及べる折しも、はからず恙なき尊顔を拜し、歡ぶかひもなかりに、申しとく言詰りなき身の過ちこそ前なけれ。」と、うち萎れて申すにぞ、松稚聞きてふかく慰へ、「光政一家の忠義によつて、救ひ得たる母と弟のふた、び虚空に落ちいること、天なり命なり。さればとてこの儘に

止まんや、心の限り索めて、救ふべくは救ひ、もし救ふべからずば、仇を撃ちて後にともかうならんこそ、丈夫の志ならめ。我いぬる頃、比叡の辻にて源五が徒に撃たるべかりしを、鳩崎が兄赤塚の軍介といふものに救はれ、母と梅稚の行方をしらん爲に、且く美濃尾張の間に立ち忍びて、や、けふこ、に來れり。こと物がたりて、軍介が義あつて勇きを誨護し、聽てこれを引きあはし給へば、粟津六郎は只顧に破産し、「この兄にして彼の女弟あり。寔に御邊兄弟は、世に稀なる義士烈女なり。今情由を聞きて、汗顔にたへず。」といふ。されど軍介は聊かも誇る事なく、「恩を蒙けて恩を報ずるは人の常なり。それがし妹鳩崎に別れてこゝに十五年、かれ恩義の爲に死せり。」と聞くこと、わがよろこび生前の對面に勝れり。」といひて、更に歎きの色を見せず。粟津六郎はこれに勵まされ、「再び手分して、姪女梅稚を尊ね養はせんとぞ議したりける。抑梅稚を奪ひよつたる荒男は、忍の惣太なり。件の惣太いぬる年洛にて事をしだし、麻羽の御哲と共に、この武藏に逃げくだりて、隅田村の東なる漆が淵といふ處に隠れ住み、行ひます。残暴にして彼此の女子を畧し賣りけり。しかるにこの日惣太は、梅稚丸のつほ折姿にかいつくらひて、笠深くし給ひたるを、眞の女子なりと見てければ、湯島のはとより跟け來り、清水を汲まんとて、ひとり舊の路に立ち歸り給ふを、矢庭に掻き抱きて直に漆が淵へ走せ去りぬ。このとき應哲も、とし十二三なる女子を拐し來れるを、一條の棒を取り

て、只願馬も懲らす處へ、惣太は確しく歸り來りて、門方より梅稚を轆と投げ入れつゝ、その身は家の真中に無手と坐して原所に對ひ、さてもけふは幸なき日なり。たま／＼影の金になるべき女子かと思ひて奪ひ來りしに、見よ、男の女に妖けたるなり。もし行童などに徴むる和尚あらば、價廉くとも遣るべし」といふ。應哲聞きて、「我も西の堤にて、この女童只一人を得たり。這奴まだ愛押れざればにや、動もすれば走り去らんとするが憎さに、打てば又かしがましく泣きて已まず。我は今より漆の便り聞き定めて、よき相手あらば、これが事を談合すべし。見貴かならず奔らせて、化骨折らせ給ふな」といひも果てす遣はしく出で去りけり。惣太はじろ／＼と左右を見廻し、「やよ女童、甚くな泣きそ。翌はよき家に給事さして、白き赤き衣、三つも四つも被すべきぞ。又男童は、火を焚き水を汲み、柴を燃り、門を掃け。汝何の故にか女の衣を被て、あやしき打搦したる。われ頃日聞きしことあり。倘しその人ならんには、こよなき獲なり。縁故は緩やかに問ふべし。さて終日走りて甚く疲勞れたり、汝等わが後方に來りて、臀より跣まで、打ちもし捺りもせよ。さらば一睡りせめ」といひかけて、枕掻きよせ、長やかに打臥せば、梅稚丸は敢て固辭み給はず。彼の女童がなほ澆然と泣き居たるを目もてその心をしらし、もろともに主が後方に立ち廻りたゆげなる御膝の上に、惣太がむくつきき毛氈を被せて、白く細やかなる手してあちこちと打ち給ふ。嗚乎痛ましきかな、きのふは金屋

頸障の下に養はれて、蓮府槐門の貴族を友とし、けふは村落茅舎の中に捕はれて、田夫野人の奴隸となり、珠玉を泥中に投けてしばし光を裏み、黄金を紗の裏に交へて、人にしられん事を憎れ、是れさへ堪へ忍び給ふ、御こ、ろの中こそ哀れなれ。惣太はいともどかして、足をもて梅稚を撲地と蹴たふし、又女童をも蹴たふして、つとその身を起し、汝等は物の用にたたぬ奴かな。さすれといへば、蟻の友の度わたるやうに捺り、打てといへば、鶴の籠の衝むごとくにうつかくてはいつまでも、わが疲勞を忘るゝことはさらなり、たえて目睡むことを得ず、よし／＼汝等にはたのます、われ全一杯を傾けて、快く睡るべし。さもなき奴ばらに腰をうたせんとて、却つて疲勞をましたり。と罵りつゝ、柱に掛りし瓢をとつて走り出でしが、又立ちかへつて戸を引きよせ、外面より鎖を楚とさし固めて、堤を東へ急ぎのきぬ。梅稚はつく／＼と、身の行末を思ひ給ふにも、憂きは亦われのみならず、女童が蹴られたる儘に、よと泣きて起き得ざれば、やがて引き起してさま／＼に勸り慰め、汝は何國のものにて、何地にてか勾引されたる。父母はなにとかしつる、世の常言に、同病相憐むとぞいふ。われには置むべきにはあらず、郷貫をもしらせ候へ。とて、丁寧に問ひ慰め給へば、女童や、涙をとめて、うれしき人の仰せかな。われは洛ちかく住める人の子なるが、近屬父のゆくへなくなりて、母ちわが身も故郷を追ひ放され、父にあふこともやとて、母子二人遠く東路に迷ひ來りぬ。しか

るにけふ、この川下なる堤にて、前の男が酔ひたるおもちして、わりなくわらはを將てゆかんといふを、そはさせじとて、母の争ひ留むるを打ち倒し、わが身を引提けて來りしなり。母は持病に罹りあり、父にはあはれず、妾には別れ、思ひ細りて死に給はめ。猶それまでもなく、世をうらみ身をほかなみ、淵瀬に投み給はずやと、おもへばいと悲し。とて、聲を惜しまず泣きにけり。梅稚は見しよりも聞けば、憐れもいやまして、「いかに女子、こ、は鬼の極なり。虚々居らば忽地に、活地獄に墮されて、遂に一生を慢つべし。彼等が歸り來ざる間に逃げ去りて、母にも逢ひ父をも素ねよ。われも又虜はれて、妾にあるべきものならず、いざ」とて帶をしかと締ばし門の戸引きあけんとし給ふに、外面より鎖したればえ聞くべうもあらず。背門も又かくてあれば、まさに是れ綱の魚、笥の鳥に異ならず。こは何とせんとて躊躇ひ給ひしが、ふりたる紙窗の、格一ツ二ツ破れたるあり。こ、よひこそと思ひて、まづ女童を抱き揚げ給ふに、今更に物怖ろしく覺えて胸うち騒ぎ、女童はなほ足さへ數以惑ふを、兎角して扶け出し、「右よ。」「左よ。」と指し示し給ふに、はや見えすなるまで走りわけば、續いて潛び出でんとし給ふ折しも、門の戸ぐわらりと引きあくるに驚きて見かへり給ふ片頼一瓢を投げつけし。是れあるじ惣太なり。時に惣太大いに嘯つて、梅稚の襟上かい懸みて仰けり。まに引きたふし。惣に似たる眼を腫らし、狼に似たる聲を高くし、「この畜生膽太くも女童を放ち遣り、その身

も逃^にけ支度^{じたく}をするこそ、たとひ女童は逃^にがすとも、いかで汝を奔^はらすべき。近曾^{ちかご}吉田少將惟房が孩兒、松稚梅稚とやらん、その母班女前と共に洛を逃^にけ亡^なせて奥州へ赴^ゆくよし、これを捕ふるものには、夥^{おほ}く賞錢^{しょうせん}を賜はらんとて、處々に榜文^{ぼうぶん}を出し、その人を索^{もと}むる事は、半打^{うしう}つ童、綱引きする種^{あま}が子も、たえてしらざる事なし。われはじめより、汝が異^ひしき打拵^{いでぢ}を見て、彼の松稚ならまは、必ず梅稚なるをしる。しかはあれ、いまだその相貌^{さうぼう}を認^みらねば、まづ腰^{こし}を持^もちて試みるに、その爲^{ため}すところ全く平人の子にあらず。なほ委細^{くわいさい}をしらへんに、酒を買ふと偽^{いつはり}り、里にのきて是彼問^{こゝろ}ひ定^{さだ}むれば、汝の年^{とし}、夷^{あや}梅稚の骨相書^{こつさうしょ}につの違^{ちが}はず、今はいかに陳^{ちん}するとも脱^{だつ}れがたし。惟房が孩兒なりとはやくいへ、梅稚丸とはやく名告^{なこ}れ、とくいへ、とく名告^{なこ}れ。といきまきて、藤卷^{ふぢまき}の桿棒^{こうぼう}を閃^{ひら}かし、骨も搦^なけよと打ちかくるを、梅稚丸は酒^{しゆ}り脱^{だつ}けくかくし持^もつたる小太刀^{こたが}を抜^ひいて、しばし柱^{はしら}へ給^{たま}ひしが、惣太が焦燥^{あせ}つてうちこむ棒^{ぼう}を、續弱^{つづじやく}き射^やに遮^さりかね、終に小太刀^{こたが}を打ち落^おされ、肩腰^{かたこし}の厭^{いと}ひなく、打たる、急處^{きふしよ}に口^{くち}咄^あき、撲地^{はた}と割^われて死^しし給^{たま}ふ。活^かかる處^{ところ}に外面^{うへめん}に、間近^{まぢか}く人の來^くる音^ねすれば、惣太は鞅掌^{あわ}てて梅稚丸に、蒲團^{ふだん}うち被^かくる程^{ほど}もあらせず、京家^{きやうけ}の武士^{ぶし}と覺^{おぼ}しきが、從者^{じゆしや}二人に呼門^{よめん}はせ、上坐^{じやうざ}におし直^{ただ}りて惣太に對^{たい}ひ、我^{われ}は赤石^{あか}判官^{はんくわん}恩顧^{おんこ}の老黨^{らうだう}、松井源五^{まついげんご}新助^{しんすけ}なり。忍^{しのぶ}の惣太^{そうた}うけたまはれ、汝が家に吉田少將惟房が孩兒、梅稚丸を舍藏^{しかざう}ふ事、儘^{まま}かに知^しつて來^{きた}れるなり。陳^{ちん}する事なく、彼を出^だせば一

且合體の罪を放べ、夥の賞錢を賜ふべし。とく／＼といそがせば、惣太聞いて呆れ果て、果全く梅稚を舎藏へるにあらず。けふ鳥越の曠野にて、女の衣を蔽たる美少年に行きあひぬ。その爲體いと怪しければ、引き寄り來つて穿鑿すといへども、彼一應に實を告げず。威しの棒の急處に當つて忽地に息絶えたり。此のものの梅稚丸ならんか、いさ實檢し給へ。とて、被せたる蒲團を引き退くれば、源五は見て大いに驚き、これ疑ふべうもあらぬ梅稚なり。やをれ惣太、梅稚は朝敵管房が手にして重き罪人なるを、なでふ繩に打ち殺すの理あらんや。者奴早く縛めよ。と下知すれば、二人の從者走り入りて、左右より繩をかけたとするを、惣太は突き除け拂ひ退けて、ほとりへもよせ著けず。源五大いに焦燥つて、太刀引き抜いて何き懸れば、惣太はやく身をひねりて、鞘をしかと握りとめ、刀尖よりの源五まで、得と見くだしてふかく不審しみ、あら心も得ぬ、この刀に自他平等即身成佛と鐫りつけたり。こは何人より得給ひし、緣故をしらせ給へ。われも亦いふべき事あり。と叫びて、刀を丁と突き放せば、源五も又これを怪しむ。この短刀は、われ洛を出づるとき、主君赤石判官盛景みし、手親これを預け給へり。松稚梅稚なほ虎狼心を逞しくして、王命に伏さずば、これをもち首を打ちおとし、洛へ上りよと仰せしなり。然るに汝、刃を見て怪しむ事却つて怪し。といふ。惣太聞いて、彼の赤石判官盛景と稱する人は、初めの名を仁科平九郎盛景とはいはずや。と問ふに、源五泣きて、一定

に汝が問ふごとく、わが主君しゆくんの原もとの名なは、仁科平九郎と申せり。汝いかにして是れを知りたるぞ。といへば、惣太からく、と打笑ひ、しからば赤石判官はわが父なり。汝等はわが家隸いひのこなり、こは無禮かたじけなくならん、とく下り居れ。といひもあへず、源五等三人を撲地はたと蹴退けつひけて上座うへくらに無手むずと推しなほり、われわかし總角あひまきのころその刀やいばを携へて、駿州喜瀬川なる父の家を逐電おそし、すでに六年を経たる秋のなかばに、ある夜薩陀山さつたやまにて、父盛景ともしらず、挑み争ふ時彼の刀をうしなひ、終に悞あやまつて千仞ちぜんの磯いそに轉ころび墮おつといへども、身を傷るに至らず。天明よあけけて後、行李ざうりに著つけたる牌かたを見て、はじめてその人は父なるを曉得さとれり。しかりしより以來こゝろ、たえて親同胞おやほらからの往方ゆくへをしらず。近曾世ちかひらの風聲ふうせんを聞くに、龜鞠かめまとかいふ白拍子しろばやし、後鳥羽上皇の寵を得て、彼の父子おやこの威勢いきほひ、攝政關白家にも勝るといふ。わが妹の名も又龜鞠かめまとは呼べど、件の龜鞠かめまは、赤石氏あかishiなりと聞えし程に、よもわが親同胞おやほらからなるべしとは思ひも懸けずいよ／＼ふかく世を潛ひそぶ、忍しのぶ惣太そうたが在處あつちをば、いかでか父もしり給はん。時なるかな。われ今梅雅うめなが首くびを打うつて洛はへ上らば、これにましたる家裏いへづらなし。さらば上洛じやうらくの用意よういせん、汝等供せよかし。と説とき示す、言語ことばも更さらにほこりかなり。源五聞げんごいて冷笑ちやうわろひ、一問ひとふにおちずして語るにおつるとは汝が事なり。われ實まことは松井源五まついげんごにあらず、吉田の家やに因よる江州赤塚えしゆあかづかの軍介ぐんかいと呼よばる、ものなり。又從者またしむらひに打うちたる、一人は松雅丸まつな、又一人は吉田の忠臣ちゆうしん裏津六郎勝久うらつむろかつひさなるをしらずや。さきつ時淺草ときあさくさにて、

梅稚君を汝に奪ひ去られ、班女前も往方なくなり給ひしかば、勝久進退究まつて見えたる折しも、松稚君その處にゆきあひ給ひ、われも亦この君に従ひて、近州よりこゝに來れば、勝久ぬしの物がたりによつて、班女前梅稚丸の一五一十を審かに聞き得たり。さる程に汝を索ね出して、梅稚君を救ひ進らせんと議する處に、逆臣松井源五純則、十四五人の兵士を將て、松稚君を追ひ來る、時に一人の老翁源五が來るべき路に立ちて、草を結びあはし、草を結びあはして待つともしらす。源五が徒一擧走に追ひ留めんと闘けば、忽地草の根に跌き、象蹴倒しに轉墮ぶを、吾儕これを撃ち取り、やがて源五を生拘りぬ。その時松稚彼が殘逆を責めて首を刎ね、件の老翁が好意をよるこび聞えて、その名氏を問ひ給へば、老翁答へて、「われは江洲比叡の辻の道祖神なり。いぬる月某日、この逆賊、夥多の虎狼をもよほし、主君を射て殺さんとして、剽へ神輿を射たり。よつて汝が黨を結けて、神罰の掲馬きをしらしむ。且梅稚を奪ひ去りし辭者は、盛景が棄子忍の惣太といふものぞ。彼年來夥の女子を拐擄す、暴惡たえて比ふべきものなし。家は漆が淵にあり、おのゝ早く行き向ひ、源五が如此如此の故によつて、盛景より預け得たる短刀をもて彼を誘はば、事おのづから顯然たらん。但し定業は神佛も救ひがたし、惜しむべし挿頭の梅花、開落十六年ならんとは。といひをはり、忽地に見えなくなりぬ。わが主從神救の對然なるに感佩し、且く汝を試みん爲に、源五が徒の太刀衣裳を取つて、

われは源五に打拵ち、松雅君と勝久ぬしは、従者に打拵ち、この短刀をもて誘へば、汝果してその實を吐けり。いざ松雅君、梅雅丸の仇、思ふ隨に撃ち給へ。と申して、自他平等の短刀を渡し奉らせ、やがて後方に居かはれば、栗津六郎は腰に著けたる袱包より、源五が首をとり出し、刀尖に貫きて高く指し揚揚、主に引副ひ詰めよせたり。そのとき松雅丸は、惣太をしぼし睨み著け、見よ奸賊、源五は既に誅したり。われ今弟の仇を報い、又父の仇たる、盛衰龜麴を討たんと欲す。臆せしか、なごて勝負を決せざるぞ。とて、いきまきあらく責め給へば、惣太は只呆れに呆れ、茫然として居たりしが、今は覺れぬ所なりと思ひたえ、刀の鞘に手をかくるをも、半ばまでも抜かせず、忽ち惣太が首を打ちおとし、やがて栗津六郎、軍介等と共に、梅雅丸をたすけ起し、さまんゝに連れて呼ば活け給へば、梅雅やうやく甦生でて、細やかに見聞き給ふ、眼の裏に玉なす涙を含み、兄君意なくてましませしか。六郎、母公はいかにし給ひつる。と問ひ給ふに、栗津六郎は、いよ、面なくして、はかなくしく應へませす。松雅丸は惣太が首を掻いよせて、やよ梅雅。御身が仇人はこれ立地に撃ちとりぬ。痛ましや御身既に内破れ骨露けたれば、とても藥餌の濟ふべうもおほえす。もしいひ遣す事あらば、聞え給ひてよ。と宣へば、梅雅丸いと苦しきにて、智もなく勇もなき梅雅が臨終に、何事をか申すべき。しかはあれど、わが身こゝに來つる時見れば、彼處の出崎に一株の柳あり、ねがはくはこの樹の下に

骸を瘞めて給はれかし。出家せよ、五戒をたもち、人をも濟ふべから我故に、玉柳が命を願ふ事いと便なくも罪ふかし。しかれば彼が名にしおふ柳の下に埋もれて、ながく望みを果さすべし。加藤かしこけれど、わが父の乳名を柳王と申せしと聞けば、是彼柳に由縁あり。さば青塚の主となりて、白楊の陰に睡るとも、母の歎きの面のあたり、只見るごとく思はれていと悲しく侍るあり。又父の形見なる寶鏡は、今なほ挾めて懐にあり。しばらくもわが影を留めつるものなれば、これを母御に進らせて今より後は、海無とも鬪せと申させたまへ。聞ひべきは是れのみ。と、宣ふ聲も息きわて、唧々しき蟲の音の霜に衰るに異ならず、あへなく粹切れたまひけり。時しもあれ誓哲は裾に梅稚の靴をし給ひける女童を引き抱へ、息も吻きあへき走り來るを、それが母なりと覺しくて年紀四十に近き女が「遠せ」と呼びかけつ、遙かに後れて追ひ蒐くる。誓これを見返りもせず、つと裏に跳り入れば、彼の女童は軍介を見て、精わが父。と叫ぶを軍介は聞きもあへず、豁然として走りかへり、只一刀に誓哲を乾竹割に切り倒せり。そのとき母は辛うじて走りつき、と見れば夫軍介が誓哲を切つて捨て、血刃引提げて立つたれば、且驚き且歡び、おそる／＼ほとり近く歸りて、さていふやうに比叡に近なる道祖神の祭禮に、御身は天狗に懸まれ給ひしと聞えし程に、女兒淺草ととも夜泣き聞したるに、それは虚言にて實は松菰丸を伴ひて往方なくたりつるなり。こは憎し」とい

詰朝、朝家より官人あまた出で來り、忽地家を破却して近江の住ひを許されねば、いとゞ悲しくも便なく御身に環會はん爲に淺船を將て、東路に迷ひ來つ。剩へけふこの渡にて、淺船を尊はれ悲しみに悲しみをまして、彼此を索ね呻吟ひしに、淺船逃れ來りければうれしと思ふかひもなく、前の男が行きかゝりて、ふたゞび女兒をかひ颯みて走せ去るを追ひつゝ、こゝに來ぬるといふ。淺船は又梅稚の死し給へるを見て驚き悲しみ、鬪にこの人わらはをさへ脱さし給へば、輒く逃げ去り給ひつらんと思ひしに、あへなくも殺され給ひぬるよ。あな痛まし。とて泣きにけり。軍介つくんと聞きて、松稚丸に申すやう、「彼は、僕が妻にて、浮草と呼びこれは女兒にて、淺船と名づけ候。然るに淺船が、梅稚君に扶けられて、一度こゝを脱れ去りしこと、軍介が身にとつては敢て幸ひともおほえ候はず。彼もし残りとゞまりて、梅稚君の命にもかはり進らせなば、斯く面ふせなる思ひはせじ」とて、只願後悔したりしかば、松稚丸宣ふやう、「軍介は義に仗つて、われを救ふにその妻子を顧みざれば、梅稚はまた軍介が女兒を憐み、これを脱さして身を殺すに至る。善にかならず善の報あり、惡に亦惡の報ありて、惣太は終に討たれたり。我のゑに權くも浮草淺船とやらんを苦しめたるこそ、いとほしけれ」と宣へば、粟津六郎涕うちかみ、梅稚丸横死の事はすべて六郎が一身に係れり。それさへ後の忠義を思へば、おめくと、存命へぬる胸くるしさはいかならん。察し給へ」とて悔い歎けば、

軍介いと理なりと思ふにぞ、鳩崎玉柳がほかなき物がたりを、浮草浅船に説きしらせ、人みなしめり
がらなるに、天さへ雨氣つきて、ながき春の日も暮れなんとすれば、松雅は粟津六郎、軍介等に仰せ
て惣太等が屍源五が首を、川原へ投げ捨て押し流さし、やがて梅雅の携へ給ひし鏡を取りて懐にを
さめ、遂になきがらを昇き出さして、遺言にまかせ出崎なる柳の下に葬らし給ふ折しも、思ひもかけ
ず月林寺の仲間阿闍梨、二人の徒弟を將て、行脚し給ふにあひ参らせ、松雅ならびに以下の人々驚き
あやしみ、いかなる故ありて老軀をいとはず、かく旅をばし給ふぞ。と問ふに、阿闍梨答へて、「われ
汝等兄弟の事いと心もとなきに、陸奥行脚と披露しつ、その往方を見きはめんとて來りしに、ゆくり
なくもこのところにて、環會ふうれしよ。と宣へば、松雅も又その好意の淺からざるを歡び聞え、わ
がうへ、母公のこと、梅雅丸横死のこと、すべておちもなく告げたまへば、阿闍梨はふかく哀悼まし
み、二人の徒弟と共に讀經引接して、亡魂を弔ひ次の日かれこれの道俗を相語ひて、一七日夜の天念
佛をとり行はせ給ひけり。時に順徳院の承久二年春三月十五日、梅雅年才僅かに十六三説に朝野人
の爲に死して、玉樹を墨水の南岸に埋み、ながく路人行客の衣襟を濡らさしむ。哀れはかなき世の
中なり。

十四 墨田川の津人憐めて狂女を渡す

班女御前は鳥越の曠野にて、梅稚丸をあやしき男に奪はれ、打ちつゝきたる恐傷に忽地心も亂れ、
路もなきところへ、を呻吟ひつゝ、中一日をおきて、三月十七日の曠昏に、武藏國と下總國との境な
る墨田川原に著きたまふ。名にしおはば、いざこととは人部鳥と、在五中將のよみけるは、戀ゆゑな
り。われは又予のゑに憂きをみやこ鳥、わが思ふ人はありやなしや、何地へ供して逃水の、雲か霞か
はてしたき、浮世に暫しすみだ川、存へばこそ歎きもよめ、おもひ出づれば鳥飾や、まゝならぬ身の
よしあしに、難波もふるき都鳥、こゝは東の都鳥、都のさらはなつかしからで、都の人の戀しとて、
ひたもの狂ひて河原に立在み、いかに船人などてわが身は渡さぬぞ。夫れ衆生はこの岸たり、又皆提
は徳の岸たり。煩惱便ち中流たり。われも弘誓の船に乗して、渡し候へ。と宣ふにぞ、船人は只今體
ぎ出す暫を止め、この物狂はしき上流の、わが一葉の舟の中に、押しあうて乗り給はんはいと危しい
と危し、今この人々を渡し来て、御身ひとりを渡すべし。しばらく待たせ給へ。といふ。狂女はこれ
を聞きもあへず。墨田川の渡守にてあるならば、日は暮れぬ。はや船にのれといはで、氣長き事を聞
ゆるものか。乗せまばわれは渡の上を、ひとり渡らぬ。と駈きて、よめめきつゝ、なほ進み給へば、
船人は別章きて扶け乘し、既に中流に到る時、向ひの出崎なる柳の下に當りて、頼りに鉦鼓念佛の
聲すれば、狂女耳を測てて、あなたふと、あれは何の供養にか。と問ひ給ふに、船人答へて、彼の法

事につきては、いと哀れなる物がたりあり。聞き給へ。一昨の日、京家の美少年陸奥へ下るとて、淺草野路まで來給ひしを、物とりの人肉經紀が、わりなくも向ひの岸邊なる隠家に伴ひ、齧おのがいふ隨ならぬを怒りてしばし、打擲し、終に打殺したりとぞ。その折しも、洛の親族兩三人、索ね來て立地に仇を撃ち、遺言にまかせて、彼處の柳の下に葬りしに因ある行脚の聖行きあひて、丁寧に廻向し、又昨日より大念佛供養し給ふなり。撰よしなき長物がたりに、はや船が蓄いて候。誘々あがり給へといふ。狂女は熱うち聞きて涙さしぐみ、ういかし船人、その少年の名は、梅稚丸、父は古田の何某、又索ね來りし親族の中に、兄の松稚といふ人のありとは聞えずや。と問ひ給へば、船人點頭きて、詳しき事はしり候はねど、さる人にもあるべし。と答ふれば、狂女甚くうち泣きて、そはわが子の梅稚なり。兄には今般にあひけんを、なぞて母には息の内に、見えて歎きを増さし給ふ。今は中々あふことも片田舎の土となりて、無常の風に戦くなる、玉緒柳抜き捨てて、亡骸なりとも見まほしとて、くいひの八千たび百千度、かき口説きて歎き給ふを、哀れとは聞かで乗り合はせし、猿屯、親木匠、農夫、野客等羣立ちて班女面をかい懸み、岸に引揚けんとして聞くを、船人達はよく押し隔て、こはなにすろぞ。といはせもあへず、衆皆からしと打笑ひ、わが儻を何人とか思ふ。赤石判官盛景のしの仰せを裏け、かく思ひ、に打撈ちて、班女、松稚、梅稚を索ねめぐる間諜者な

り。はからず今の問答を聞きて、松稚はこのわたりに濟び居ることを猜し、又この物狂ひを班女前
 りと知り得て、まづこれを生拘り、しかして松稚を搦め捕らんと欲す。妨げせよ。といきまけば、船
 人騒ぎたる氣色もなく、一さ聞きては一人も怒しがたし。覺醒せよ。と罵りて、轆振り揚げて一人が肩
 間を破と打ち碎けば、残る者ども大いに怒り、刀を抜きつれて、前後左右より切つて惹るを、船人は
 物ともせず、打ち倒し突き落し、腰を折かし胸を突き、潤ぎ上らんとするをば掃ひ除け、押し沈めな
 ぞする程に、打たる、ものは船に驚れ、逃げんとするものは水に溺れ、一人も残らず死したりける。
 その時船人は、轆を利と投げ捨て、班女前を岸に扶け上して芝生に居る垂らせ、さて申すやうに後
 室には未だ知召さざるべし。僕は昔再生の恩を蒙りし、鳩崎が兄に、赤塚の軍介と申すものなり。
 松稚君は、仲間阿闍梨、粟津六郎等とともに、大念佛の僧屋におはしました、只後室の御往方のみ、心
 苦しく思ひ給へり。さるあひだ、もしこの渡へ來給ふ事もやとおもひばかり、僕湖水のほとりに人
 となりて、船の上の事にはよく心を得たれば、求めてこの河の渡守にかはり、彼此人をわたしつ、
 外ながら問ひもし見もして、心を盡しぬるかひに、端なく環會ひ奉るのみならず、盛景が問謀の奴ば
 らを打ち殺せしこそ心持よけれ。誘給へ、負ひて参らべし。と申しける。かかりける處に、松稚丸、
 仲間阿闍梨、粟津六郎、鳩崎、淺船等、早くもその事をしりて走り來り、軍介がこよなき働きを稱讃

し、諸共に斑女前を具け抜いて、假屋のおくまりたる處に入れまゐらせ、さまざまに動れども、只黙然としておはせしかば、松稚丸二面の明鏡をとり出し、「夫れ鏡は靈明にしてよく善惡をわかつ、よつてこれを智の靈明に象れり。又その形を月に取ひて、水徳を備ふ。こゝをみて世俗鏡を婦人の神と稱す。思ふにわが母、鳥越の曠野にて、この寶鏡一面を遺し給ふをみて、その智裏暗く、て忽地御こゝろも亂れ給ひけん。とく醒め給へく。」と宣ひて、彼の鏡を指しよせ給へば、斑女前當然と心持清々しく覺めて、身の不覺なるを怪しみ、松稚、梅稚、阿闍梨、軍介夫婦、淺船等が一件の事を聞きて、或はうれしみ或はうち泣き、かくおのゝ悪なく面をあらはしながら、只梅稚のみ、なき人の數に入りぬるこそ悲しけれ。そも平尾の窮難には、光政夫婦が忠義に救はれ、脱れがたきを脱れたれば、未だのもしとのみ思ひて、終に激えのく燈の光を増すとにしらざりし」と聲を限り泣き給へば、仲間阿闍梨宣ふやう、「佛は涅槃の山に入り、凡夫は生死の海に沈む。後れ先だつ世のならひ、さればいきとし生けるもの、誰かは命に限りなからん。死の縁として生を去り、東の果てなる上となるも、皆これ世の囚なり果なり。逆縁なりともその子の爲に、歎き止めて一蓮の蓮向あらまほし。」と諫め給へば、斑女前はなく、塚の傍に歩み出でて、掌をうちあはし、南無西方極樂世界、三十三萬億、同號同名阿彌陀佛。わが子を給へかし。南無阿彌陀佛、々々々々々々と唱へたまへば、草叢の老弱衆

口同音くどうおんにみな佛名ぶつみやうを唱となへけり。

墨田川梅柳新書 卷之六

東都 曲亭主人 著

十五 因を説き果を示す楊柳塚

班女前は、その夜すがら梅柳の墳墓に對ひて、たえず念佛して坐すれば、夜は既に深きまじり、歸鴈稀に飛んで行客の腸を斷たし、潮水岸を洗うて、旅泊の枕を驚かす。星落ちて漁火遠く、鐘度つて春鷗翁く。今往古來幾春秋、花開き紅葉散りて流水委む間なし。觀すれば夢の世、寤むれば又夢の夢たるを見ず、「彌陀佛々々々」と唱へ給ふに、怪しいかな、忽ち墳の下に聲ありて、諸共に念佛す。あな不審しとて口を鉗み給ふに、彼の念佛も忽地止み、又「彌陀佛」と唱へ給へば、彌陀佛と唱ふ。こは墳の主か舒かと、疑ひ惑ひ給へば、眼前柳の陰に朦朧と立ち現はれしは梅柳なり。班女前、向して、流る、涙泉の如く、「逆縁の廻向には、迷ひの雲の立ち掩ひ、煩惱の浪高くして眞如の月は影も見ず。闇きよりなほ闇き、道には呻吟ひ給ふらん。庶莫なつかしき、わが手の面影今こゝに、暫しも見るぞ嬉しき」とて、携りよらまくし給ふに、立つとは見えて赫遊の、苦しきまでに引き

も得ず。梅稚すこししりぞきて、不孝の子先だち進らせて、御歎きの色あまり深く見えさせ給ふが痛ましければ、因果の脱れがたき道理をしらしまうして、ふつに思ひ断らし奉らばやとて、假に空蟬の殻をかへして、見え候のみ。夫れ生前に無智の凡夫も、死して神靈となる時は、過去を知覺し未來を明察す。情惟みれば、わが家代忠義篤實にして、或は薄命に係り、或は殃危にあへる事甚だ故あり、事長けれど聞き給へ。むかし高倉院の承安年中に、天下旱魃して魚鱉は泥に吻き、行人は野に斃る。時にわが曾祖神祇史卜部朝臣惟永といひし人、奏すらく一傳へ聞く武藏國豊島郡、淺茅が原に池あり。又この池の上にふりたる松と梅あり。兩樹の枝、水の上にごさして、その下に三ツの龜、甲は鐵のごとく、腹は銀に似たるあり。今この龜を焼いて卜筮し、又その血を劍と鏡に刺らして、龍神を祭祀し給はば、立地に雨ふるべし。蓋し朝の形はこれを織月に表し、鏡の形はこれを望月に表す。龜は北方の神にして、女武と稱するこれなり。夫れをば水、北は陰、月は純陰の精にして、宜しく陰雨を致すべし。と申す。帝諾ひ給ひ、相國清盛に仰せて、淺茅が池の靈龜を捕らし給ふ。爰に此の頃彼の三ツの龜、惟永の夢に來つて告げて云く、今度の旱魃は、清盛暴虐にして、臣その君を凌ぐの象なり。平族もし言を謹み、行ひを改め、君を敬み忠を竭さば、禱らして雨ありなん。抑わが族、彼の池に栖むこと數千年、一日淫祀のために焼かれんは、いかでか悲しからざるべき。御身速

かに奏しかへて、わが病を救ひ給はずば、その榮り兒孫に及ぶべし。強ひて一言を告げて、救ひを徵
むこといふかと思へば、愕然として夢は覺めぬ。惟永半ば信じ半ば疑つて、心いまだ決せざるに、次
の口武藏國人、二枚の靈龜を進りしかば、已む事を得ず、良工に二面の鏡と一振の刀を作らし、彼
の龜を燒きて卜筮し、またその血を鏡と刀に刻りて精雨するに、雨を得たること三尺、萬物發生し、
諸民歡樂す。さる程に惟永朝臣、一時に面目を施すといへども、夢の告け心に懸れば、彼の短刀に、
自他平等即身成佛の八の文字を鐫りつけし、鏡とともに鏡取の龜山なる、古寺に寄進せしむ、平基
盛清盛の子寺僧に購ひ得て秘藏し、その子なる左馬頭行盛に傳ふ、今この鏡と短刀これなり。しかるに次の
年、惟永朝臣過らまつて官職を止められ、嗣ハその身も隱ひて世を去りにければ、祖父惟通弱冠
より彼此を漂流し、治承の始めふた、び洛にたち歸りて左馬頭行盛に扶助せられ、文治元年、八島の
敗軍に、行盛彼の鏡と短刀を惟通に與へて、孤を託せしより、此の兩種はからずしてわが家に
り、刃を授けて兄弟と稱し、鏡に因つて夫婦となる、これ龜の榮りいよ、兒孫に及ぶべき類本にて、
一期の福福これが爲に讓せり。且淺茅が池の二樹を換して、鏡の背に銘なしたる、松と梅とは同類の
松梅梅羅が榮枯に係り、又自他平等の短刀を惟永靈場へ寄進すといへども、遂にその藪に返ること、
先人惟通行羅を出家させんと欲すれども隨はず、梅羅を法師にせんと欲すれども果さず、その名を

龜と呼べる毒婦の爲にわが家をたふさるゝ、祥にして、みな彼の靈龜の祟りなり。この故に我に德行あれども衰へ、彼に悪行あれども榮ふ。又是れ因果の道理にあらずや。且祖父惟通内侍所を救ひとり奉りし功によつて、わが父一日家を興し給ひしことなど、すべて鏡の因縁を引けり。しかれども曾祖の餘殃を祖父と父との修善に贖ひ盡し、彼の龜今はわが家の護神ともなり、兄君遠からずして父の仇を報い、家を興し給ふべし。今生に善を修する人は來世に人その善を返し、過世に悪をなせし人は、今生に人その悪をかへす。忠臣用ゐられず、才子の不幸なるも、慣るべからず。すべて貧富得失を、我一生の事として、世を憤るはその見狭し。賢才の人薄命なりとも、過世あしかりけりと思ひて、いよいよ善事を修さば子孫は必ず榮ふべし。さるによつて盛景龜鞠等が、一朝に威勢を得たるも怪しむに足らず。これ併しながら彼等今生の積悪、來世の報いを俟たず、その欲するところ大なればなり。わが母みづから悟つて、煩惱の絆を脱離し、衣を墨田河の墨染に更へて、世を淺茅が原の草の門に厭ひ、ながく象教に心を委ねたまはば、自他成佛の誓ひなしかるべからず」と告げをはり、墳の後に入ると見て、風に拂ふ柳の露の霏々と顔にふりかゝるに驚き覺め給へば、是れ假寐の夢なりけり。そのとき班女前は、始めて因果の道理を聞悟し、寔に悔稚はわが爲の善知識なりとおぼせしかば、天明けて後、仲圓阿闍梨、松稚丸并に以下の人々に、夢見し首尾を物がたり、速かに尼となりて、淺茅が

原に住み果てんと思ふよしを告げ給ふに、衆皆彼の因縁を聞きて深く感悟し、「さてはこの殃危一世の浮沈にあらず、月日はわが爲に照らし給はぬかと思ひしに、天運循環して衆達達からざるをしろ、たのもし／＼とぞ歡びあへりける。かくて班女前は、梅稚丸の新願忌日に、仲間阿闍梨の弟子となりて剃髮し、法名妙龜尼と申しける。少し盛りは過ぎたまへど、散りちをほらぬ花の姿を、墨染の袖にかへ給ふ、いと殊勝なる發心ぞかし。既に大念佛も供養結願せし程に、次の日妙龜尼は、人々に送られて、淺茅が原に到り、池のほとりを見給ふに、汀の二樹も松のみ繁えて、昔の木だちなるべくあれど、梅は枯れけん迹もなし。是れも二人の子どもらが榮枯を示すかとおほせば、かくぞ日遊び給ひける。

ありし世をみぎはの松に飄はせてしるしの梅はくちや枯れぬる

かくばかりわが佛はかはりけむ淺茅が池に水かゞみ見て

きて何處にか住むべきと議し給ふに、池にそうて近ごろ何がし法師が縮びましたりしといふ草庵ありけり。「これ究竟なめり。」とて松稚丸は、栗津六郎、軍介等に仰せて、里人に彼の空庵を購はせ、俄頃に蜘蛛網かき拂ひ、薦布きまほしなどして、尼公を入れまゐらせたり。しかるにいと怪しかりしは、纏に衆皆池のほとりに立在みけるとき、松稚の携へ給ひし、松梅二面の鏡、自他平等の短りとし

伴はれて裏に入るに、班女前は尼となりて、持佛堂にさし向ひ、看經して坐しければ、ます、不審し
 しみ、やがて近うまゐりて、蹶る。尼公は光政を見かへりて、鉦うち止め、「汝何としてかく後わつる
 ぞ」と問ひ給ふに、光政答へて、「某彼の日、松稚君にあひ奉らん爲に、戸田の北在家に立ちしのぶ
 折しも、俄頃に心持あしうなりて、進退自在ならず。心の外に口をすぐし、やうやく病著おこたりし
 程に、陸奥へ下らんとて此處を過り、はからずも異なる御姿を見奉りて、更に思ひ惑ひ候。」と申す。
 ときに妙龜尼は、梅稚丸枉死の事、忍の惣太が事、松稚丸軍介と共に、松井源五を討ちとり、その日
 惣太を殺して、梅稚の仇を報い給ひし事、仲圓阿闍梨、粟津六郎、浮草、淺船等が事、且遺言に任せ
 て、梅稚を墨田川原の南出崎なる柳の下に葬り、彼の幽魂の告げによつて、鏡と短刀の縁故を知り、
 因果の道理を曉りて尼となり、この池の邊に住み果てんと思ひたまふ、一件の事を首より尾まで、お
 ちもなく物語りたまへば、光政は聞く事ごとに嗟嘆して、梅稚丸の横死を悲しみ、「玉柳が故をもて、
 柳の下に葬られんと宣はせしこと、光政が生前の面目にして、女兒が死後の醜倅なり」とて、不覺に
 感涙に咽び、さて浮草に對ひて、思ひもかけぬ再會を喜び聞え、只願軍介が俠氣を嘆賞して、淺船に
 も名告り會ひ、やがて梅稚丸の墳墓にまゐり、その終焉にあはざるを情い歎き、その夜は淺茅が原の
 草の庵に、來しかたゆく末を語り明し、詰朝浮草、淺船に、尼公の介抱を丁寧に頼みおきて、妙龜尼

に身の暇を申し、「松稚丸に追ひつき奉らん。」とて西を望して立ち出でけり。然れども、洛ちかき深山に身を隠さん。」と宣へるとのみ聞えて、その往方もさだかならず。只あふを限りと思ひ究めて、大河内伊勢伊賀攝津丹波の山々にわけ登りし程に、その年は既にくれて、あくれば承久三年の春近江國にあらぶる、高峯々々を攀ぢ登り、ある日比良が嶽にわけ入れば、いと怪しくも谷を隔てて、頼りに木刀うちあはする音、裾に響きて聞えけり。

十六 奸を鋤き冤を雪む大團圓

そのとき山田三郎光政は、木刀の音を聞きてふかく怪しみ、思ひきや正木樵る斧の響ならで、かかる山中に、劍法をまなぶ人のあらんとは。いとひとりごち、いと心憎く思ひしかば、藨の根にとりつき藤藨に携り、からうじて其の處にゆきて見るに、夥の天狗あつまりて、劍法を試みるなりけり。光政いよ、怪しみながら、なか／＼に立ちもかへれず、しばし見物してありければ、天狗ども見をへりて大いに怒り、「者奴われ／＼に憚る氣色もなく、却つて嘲り味ふにこそ、憎みてもなほ憎むべけれ。いで暴慢の鼻柱、打ち拗いでくれんす」と罵り、左右より打つて蒐るを、光政かい潛りつ、木刀を奪つて、忽地に打ちたふせば、「こはいひがひなし」と教團きて、皆むら／＼と走りかゝるを、光政これを物ともせず、前に柱へ後には捕ひ、野馬の如く閃き、雪花のごとく飛びかゝり、手を蓋して戦ひけり。

浩かる處に木立の隈よりもの聲して、「各同上討ちすべからず」と呼びとめつ、搖ぎ出づるを、光
 政估と見返れば、影は天狗なれども、面は紛ふべくもあらぬ松稚丸にて、粟津六郎赤塚軍介も同じ容
 なる打拵して、左右に従ひ、ひらめなる石の上に、藁圍坐しかして居ならべば、影の天狗ども一帯に
 引き退きて再び敵せず、かけたる備面を脱ぎ捨つれば、皆一般の壯士なり。光政はこの景迹を見て、
 驟然とうち笑ひ、木刀を投げすてて、松稚丸のほとりちかく参り、その恙なきをよろこび聞え、且異
 しき打拵し給へる、縁由を問ひ奉れば、松稚丸宣ふやう、「われ父の仇盛景父子を討たん爲に深くこの
 山中に被れ、折々唐夫蕨師の、物の用にたつべきをえらみて、竊かにこれを相語り、既にその徒十餘
 人に及べりしかれども、彼等の背力の人に勝れたるのみにて剣法をしらず。こゝをもて粟津六郎赤
 塚軍介と、かはるゝに件の徒に兵法を教ふるに、今に至りては藝術や、熟せり。さは奥ばにして
 事の洩れん事を怕れ、いぬる年比叙の辻にて、軍介が天狗と見せて、われを救ひたる吉き例に倣ひ、
 おのゝ天狗に打拵させて、世の疑心を避くるものなり。夫れ萬幸は得易く、一將は得難し。今はか
 らず光政こゝに来ること、歡ぶべし」と宣へば、粟津六郎軍介等も、彼を問ひ、我を語りて、別
 後の會話、一朝に盡すべうもあらず。光政はわが身病におかされて、梅稚丸の臨終にあはざりし遺憾
 はさならぬ、すべて妙龜尼浮草が物がたりに開けりし、一件の事を申し出でて、君臣僚友懷舊に堪へ

ず、十餘人の徒もひとり／＼に名告りあひて、各水魚のおもひをなれど、しかるに今茲承久三年五月のなかばより、世の中猛に亂れて三院後鳥羽、土六條ノ宮、御門、順徳二宮冷泉宮遠き島々に遷され給ふ。緣故を尋ぬれば、後鳥羽上皇、近曾白拍子龜鞠を御寵愛のあまり、攝津國長江倉橋の兩莊を下されけり。しかれども地頭これを聞けわたさず、龜鞠ふかく憤りて、頼りに歎き申せしかば、一院後鳥羽關東に仰せ遣はされ、「急ぎ改易すべき。」よしを制度せさせ給ふに、義時朝臣申しけるは、「地頭職の事、上古は二かりしを、故右大將家朝平家追討の勸賞に、日本國の總追捕使に補せられ、平家追討六箇年の間、纜を討たせ手を撃たせ、或は従者を損ぜられて、忠勤を勤みつる者どもの勳功に隨ひて、分ち賜はりたる領地なるを、義時が計らひとして、改易すべきやうなし。」と申して從ひ奉らす。一院いよ、安からず思召しけるを、龜鞠さま／＼に申して、「とかく義時一家を滅ほし、妾が父赤石判官盛景を武家の棟梁となし給はば天下の事、よろづ御ころに稱はせ給はざることは侍らじ。」とて、強ひし申し勧め奉りしほどに、一院御ころ、決し、廷尉盛景に仰せて、在京の武士を相語はし、又國々の兵士を召されけり。盛景ははや天下の執權職にも補せられたる心持して、恍惚と走りまはり、藤原が家に寄り向つて計議をなすに、在京の武士は、盛景が奸佞なるを憎み思ふといへども、院宣みんせん遞る、所なくて、召しに應ずるもの多し。一ころばまつ光季を討たんこととて、京都の守護伊賀判官光季が、京極高辻子なる

家攻めさし給ふに、光季終に討たれけり。この光季は、義時朝臣無二の人とたのみ思ひて、京都の守護に居ゑおかれしを、一院忽地に討たせ給ひしかば、事既に鎌倉に聞えて衆議區々なり。しかれども義時朝臣は、騒きたる氣色もなく、相模守時房義時、武藏守泰時義時を兩大將と定め、東軍數十萬騎を起して、これを二手に分ち、五月二十二日の曉方に、洛を望して推し行かしむ。かかりしかば五月晦日より諸處の合戦始まりて、京方散々に敗北し、大炊の渡、株瀬川、蒲原の殺所をも阿容々々と攻め破られ、六月九日には、宇治川をも軋く渡されて、東軍既に洛に入ると聞えたり。こゝに吉田松稚丸は、今度の合戦京方忽地利をうしなひて、事難儀に及べる由を傳へ聞き、大いに驚きて、粟津山出赤塚すべての黨を集會ひ、一父の先見違はずして、彌、蕭、蕭の下より起り、朝家の御大事此のときにあり。松稚丸勸の身なりとも、推参して君の御先途を見たてまつり、仇人盛景父子を撃つて、忠孝兩つながら至うせんと欲す。誘いせけとて、とる物ら取りあへず、手勢わづかに十餘人、主従素肌歩立にて、近江路より打つて出で、三條河原に止せ著けたり。この時日もや、西山に没りにければ、松稚丸主従は、「四辻の御所へや参らん、又敵軍にや懸らん」とて議する折しも、京家の落武者とおほしきが十騎あまり、立つ足もなく逃げ來れり。是れ則ち別人にあらず、赤石平九郎判官盛景主従なり。この盛景不義の榮利のみ思ひはかりて、女兒龜輪とともに、只願一院に御隠謀をす、め奉り、北條氏

を滅ほして、おのれ天下の執權たらんと較計みしが、京方毎度敗軍して、宇治川の防禦叶はねば、盛景は猛に事の出で来しごとく周章きて、四辻殿へも参らず、戰場より逐電して、家を喪ふ狗、綱を漏る魚に異ならず。只一足も落ち延びんとて罵りあひて来れるなり。松稚主従はこれ仇人盛景なりと見てければ、吐と噓いて遮り留め、一騎も漏らさず討ちとりて、矢庭に盛景を生拘り、松稚は刀をその胸前に突きつけて、彼が年来の隠匿を責め問ひ給ふに、盛景終に置すことを得ず。影の江にて伊庭十郎を欺き殺せしをばじめとして、白川山の假東はさらなり、しばし、惟房朝臣を讒言し、且源五が内通によつて、是非を問はずして彼の人を殺し、今度一院に申し勸めて、義時朝臣を滅ほし、おのれ天下の執權たらんと望める事に至るまで、父子の奸計悉く白状す。松稚聞きて刀を放べ、我なほ教勸の身なるをもち、爰に汝を殺さず本院の御所四辻に引きのきて、縁由を聞えあはせ、父が忠死の體末を申し謹らめ、御免しを得て後に仇を報ゆべし。とく、這奴を引き立てよと下知しつ。主従頗りに路を急がし四辻殿へ参り給ふ。抑三條河原にて松稚主従に撃たれたる盛景が十餘騎の従卒は、去年の春惟房朝臣滅亡のとき、松井源五に語らはれ、班女前を搦め捕らんとて隠きたる吉田の家隸なり。神明その不義を憎みて、爰にその舊の主君に誅さし給へり。天網恢々疎にして漏らさずとは、これらをやいふべきこととて、聞く人舌を押ひけり。扱も四辻の御所には、東軍洛中に亂入すと聞えし

程に、一院後鳥羽殊に驚き給ひて、「その夜より鳥羽殿へ入らせ給ふべき。」由を仰せて、慌しく腰輿に
あされ、御世の殿上人には、出羽前司重房、内藏權頭清範、女房には伊賀局白拍子龜鞠、この四人の
外には、従ひ奉るものもなし。姑射仙宮の玉の牀も、けふを限りかと見かへらせ給ひて、寂慮も聲に
安からず。東洞院を下りに御幸なしまるれば、朝あさに出でましける、七條殿の軒端を外ながら
のきノ、て、や、作道を過り給へば、誰とはしらず兵士十人あまり、松明をふりてらし、御迹を慕う
て走せ参れり。一院遙かに御覽ありて、「あれは何者ならん。」と問はせ給ふに、みな、赤石判官にもや
候はん」と申す。一院聞召して、「けにかかる時に、一方を切り乾けて走せ参らんものは、盛景が外に
ありとも覺えず。」と宣ひて、

迷ひ出づる世はくら闇と思ひしが月は赤石の浦に來にけり

とあそばしければ、龜鞠、

月景はさこそ赤石の浦なれど雲居の秋はなほも戀しき

とよみも果てざる處に、彼の兵士ちかく走せ参り、一人の弱官眞先にす、み出で 御輿の眞前に頓首
し、膝んで申しけるは、「臣は吉田少將惟房が嫡子松稚丸なり。かしこけれど君至尊の玉體をもて、賤
しきものに肩を比べ、膝を組むを樂しむとし給ひ、后妃采女のやんことなきを聞かせ給ひて、白拍子

を御寵愛まし、聖王の直なる政に背きて、郵りに武藝を好ませ給ひ、倭人盛景、淫婦龜胸が舌頭に迷はされて忠臣を害し、朝へ功ありて罪なき武臣を滅ぼさんと企て覺せしかば、天照大神の御葉として、即つて天神地祇に托てられ、日本國中に御身をおかせ給ふ處もなきが如くにらせ給ひぬ。臣が父これを陸み思ふ故に、しばし諫めたてまつりしかと用ゐられず。已む事を得ず龜胸を殺して、君の爲に外の根を斷たんとするに事成らず。盛景父子おのれが奸惡の發覺れん事を怕れ、その是非を問はずして、當座に惟房を誅し畢らぬ。こゝをもて惟房は忠心を抱いて即つて逆臣とせられ、臣等が身に及びて追捕嚴重なりき。然れども父が忠死の歸末を申し諦らめん爲に、一日深山に隠れてやうやく性命をたもち、今度の合戦、官軍遂に破れたり。と聞きて深く驚き、救勸の身たわといへども推参して、君の先途を見たてまつり、父が寸忠を全うせまほしくて、俄頃行走せ参る折しも、三條河原にて盛景主従が落ちゆくを生拘り、これを責め問ふに彼父子が年來の奸惡、審かに白狀せり。原盛景は、平行盛が遺腹子に、行稚と呼ばれし者にて、臣が祖父卜部惟通彼が命をひして、叡山月林寺に在し、體て祝髪なさしむといへども、身の行ひよからず、彼の山を遠電して、信濃國の住人仁科盛遠が猶子と稱し、仁科平九郎盛景と名告りて鎌倉に奉公し、その後科あつて彼の地を追ひ放され、ほど經て洛へ上れり。又盛景が棄手に、忍の惣太といふ惡徒あり。去年二月十五日、臣が弟梅稚

丸、武藏下總の堺なる、墨田川の上にて、彼の惣太に打ち殺さる。臣その日神明の禱導を得て、立地に惣太を殺し、弟の仇を報い候ひき。抑盛景父子三人の暴悪、更に比ふべきに物なし。その二二をいはば如此々なり、簡様々々なり」とて、伊庭十郎を殺せし事、白川山假鬼の事、惣太が影の女子を畧し賣りたる事、盛景おのれが榮利のみ慮り、龜鞠と示しあはして、頻りに御隠謀を申しすすめし事、すべて白状の趣悉く聞えあけ、又申すやう、「君始めて龜鞠を召さる、とき、惟房龍顔を犯して諫めたてまつりしかど聽き給はず。しかるに惟房は龜鞠が父を行稚なりとしりながら、速かに申し斷らざりけるは、孝と義の二ツに絆されたる、一時の迷ひに似たれども、盛景先非を悔いて舊の沙門とならんには、深く咎むべき條なしと思ひて黙止せしを、君はやく取用ましめて、剩へ判官になされしほどに、小人忽地に時を得て、惟房いよ、告げ奉ることを得ず。さるによつて惟房は、身死して亂逆の悪名を得んことを厭はず。龜鞠盛景を殺して、天下の禍を除かんと謀りけるは、盛景父子恩を稟けて報ふに仇をもてすればなり。その不忠不義、枚擧ぐるに違あらず。ねがはくは仰せを承けて盛景が首を刎ね候べし」と申して、粟津六郎山田三郎に下知して、練継きたる儘にて、盛景を引き出せしかば、龜鞠はいふも更なり、一院大いに呆れ給ひて、忙然としておはしませしが、松碓が申すところ、悉く思召し當らせ給ふことのみなるに、已むことを得給はず、「盛景を誅すべきよし

を仰すれば、松雅欣然として即て盛景が首を刎ね、太刀の刀尖につらぬきて、軍介にもたし又申さう、「既に盛景を誅したるといへども、なほ龜鞠あり。彼は君を迷はし國を亂る、その罪蘇祖妃楊太眞に勝れり。しかれば馬毛驛の故事に倣ひ、ふた、び仰せを承けて龜鞠が首を刎ね、これを東軍にしめて、義時を寛め候べし」と申す。一院はその事いと難儀に思食して、何とも仰せ出さるゝ事なかりけるを、松雅尤なほ理を盡して、斬らんと請ふこと頼りなれば、出羽前司重房、内藏頭清範等、諸共に申し勸むるによつて、やうやく松雅が申す旨にまかせ給ふよしを仰せける。龜鞠はこの景運を見て齒を切り、竊かに夕告の懷劍を抜きかけて、君を劫しまらせ、身の危窮を脱ればやと思へども、たえて色にも黷はさず。御名残を惜しみ奉るおももあして、玉體に近づかんとするに、忽地その懐に聲ありて、鶉の音高く聞えしかば、松雅吐嗟と跳り掛つて、龜鞠を膝下に引き伏せ、夕告の懷劍を奪ひ取つて首をふつと掻き落せば、粟津山田以下の郎等みな萬歳を唱へけり。抑この夕告の寶劍は、一院當初惟房に賜はりけるを、去年の春惟房朝臣、竊かに盛景龜鞠を刺さんと思ひ定め、この寶劍を懐にして、院參し給ふ時、忽地龜鞠の聲せしによつて、松井源五これを怪しみて、早く盛景に申ししたれば、惟房朝臣志を遂けずして討たれぬ。その時一院更めて、彼の劍を龜鞠に賜ひてけり。しかるに龜鞠、目今君を劫し奉りて、おのが刑戮を脱れんとするに、夕告忽地聲を發して

玉體たまぐたいに近ちかづき得えず。はやく松稚丸まつちまゐに曉さと得えられて、しかもこの劔つるぎをもて首かうべを刎はねらるゝこと、因果いんぐわ觀くわん面めんの理ことわり、かくぞあるべき。これ併ひしながら松稚まつちまゐの孝心こころ、こゝに天てんの社たけを得えて、父ちちが冤むつ枉つうを雪よめ、國くにの爲ために奸かんを鋤すき、家いへの爲ために仇あだを撃うつ、有あり難がたかりし績いさをしなり。かくて松稚丸まつちまゐは、一院いちゐんを鳥羽とほどり殿どのへ入いれ奉たり、その夜直よたひに盛景龜鞠せいききまが首級しゆきゑを携たづへて、武藏守むさし泰時朝臣たいじの屯たむろに致いたりて、盛景龜鞠せいききまが奸惡かんあく、わが身み亡なつ父ちちの孤忠こちゆう、事こと密ひそかに演說えんさつし、彼かの首級しゆきゑをさし出いだして、「とかく穩便かんびんのはからひこそあらまほしけれ。」とて、申し寛かたむる事こといと丁寧ねんじやうなり。泰時朝臣たいじ縁由えんよしを聞ききて、ふかくその忠孝ちゆうかうを嘆美たんびし、盛景父子せいきふしが首かうべを受うけとつて、やがて件くだんの趣おもひを鎌倉かまくらへ申まさせ給たまふ。然れども義時いぎとほの憤いきどほりつひに解とけず、本院ほんいん後鳥ごてうを隱岐いんぎ國くに、新院しんいん順德じゆんとくを佐渡さど國くに、六條宮ろくじやうを但馬たにま國くに、冷泉宮れいせんを備前びぜん國くにへ遷うつし奉たる。又土御門とごもん院いんは、後鳥ごてう羽院はつゐん第一だいいちの御子みこにて、いぬる承元じやうげん三年さんの春三月しゆん、御心みこころならずお居ゐさせたまひて、今度こんど一院いちゐんの御金おんかねてにもか、づらひ給たまはざれば、關東くわんとうよりも兎角とかくの言ことに及およばず。然れども土御門とごもん院いんは、「人界じんがいに生しやうを稟うくること、是こゝれ父母ふぼの恩おんなり。しかるに一院いちゐん配所はいしよに坐おほすを、わが身安然あんなとして洛みやこに居ゐらんは不孝ふかうなり、われも遠國えんこくに住すまめ。」とて、この山鎌倉やまかまくらへ仰おほせつかはされける程ほどに、義時いぎとほ以下いげの武臣ぶしん憐あはれ奉たり、「此この上うへは力ちから及およばず。」とて土佐國とさへ遷うつし奉たる。これより先松稚丸まつちまゐは、直言ちよくけん用もちゐられざれば、ふかく望のぞみをうしなひて、再び泰時朝臣たいじに見まえ、むかし紂王ちゆうわう無道むだうなりしを、武王ぶわう天てんに代かわつてこれを討うち、庶民しよみん土炭とたん

を脱れたり。夫れ臣として君を討つ論、孟軻にいたつてよく辨明すといへども、後世なほ心に快しとせざるか、彼の殷紂は殘獨の亂王、武王は蓋世の聖人なり。さは今をもてその是非を比すべからず。況んやわが國は、神日本磐余彦尊神武天皇統を傳へ給ひて、こゝに百有餘代、未だ臣として君を謫す事を聞かず、三綱子。君臣。父は國の基なり。もし一日の威勢をもて、君臣の禮を失ひ給はば、何をもて民を忠孝に導き給はん、努思ひ留まり給へかし。」とて、諫言數刻に及びしかば、秦時大いに感伏し、「申さるゝ所悉く理なり、しかあれど、天下の一大事は父義時が豫り行ふなれば、弱輩の秦時いかにともすべきやうなし。御邊の忠鯁においては、關東へ申沙汰し、日ならず吉事あるべし。」と回答へ給へば、松稚丸頭をうち掉りて、「伯夷叔齊は首陽に餓死たり。わが直言容れられずして、いかでか賞を受くるの理あらん。只ねがはくは、一院の御供して、隱岐嶼へ赴くことを許し給へ。心を盡して仕へたてまつり、亡父が誠忠を全うせんには。」と聞え給ふ。言の願思ひ定めたる容なれば、秦時ますます嘆賞し、「この事仔細候はじ。」と諾ひ給ひければ、松稚丸は旅宿に退きて、一封の書簡を書き寫め、山田三郎赤塚軍介は武藏國へ赴き、松稚丸が仙輿に従ひ奉りて、隱岐國へ赴く一件の事を、母公妙龜尼に申し、「粟津六郎は、月林寺に參りて仲國阿闍梨に情由を告げよ。」とてよくその心を得させ、又比良が嶽より從ひ來れる十餘人の壯者を厚く賞して、おのゝ身の暇を給はり、粟津山田赤塚等、

いかに申せども一人も從ひ行く事を許さず、別れを決して出で給ふ。さる程に一院は、承久三年七月十三日に、隱岐國に移され、海部郡刈田郷なる、あやしき庵に入らせ給ひて、

我こそは新島守、隱岐の海のあらし浪風こゝろしてふけ

かくあそばされつゝ、萬敬慮を傷ましたまふ。形なき鄙の御住居に、松稚丸ひとり心力を竭して、慰め冊きまゐらせ、常住坐臥御ほとりを去ることなし。一院は、頼りに惟房朝臣の諫言を思食しあはされ、なほ父にも勝れる松稚丸の誠忠のひたすら御感あつて一寔に歳寒くして松柏の後に凋むをしり、國亂れて忠臣志を移さざるを見る。朕もし昔の身なりせば、汝を重く用ゐるべきに、そのかひなき

こそいとほしけれ。」と宣ひて、すゞろに御衣の袖を濡らし給へば、松稚丸は忝さに、感涙を留めかね、且く御前を退出けり。かくて影の年を経て、一院崩御ましくければ、松稚丸ふかく悼み奉り、

御中陰果てて後洛へかへり上り給ふ。帝四條院承久三年三院連國一遷され給ひし以前、懷成親王哲院親德帝

在位僅かに四箇月にして推しおろし奉り、高倉院の御孫、茂仁親王を位に御けまひらせ、後堀河院と申し奉る。この君在位十三年にして、位を秀仁親王に傳へ給ふ。四條院これなり。その孤忠純孝を感じ

おぼし、父祖の舊領に、加恩の莊園數箇所をまし給はりて、やがて三位になされしかば、松稚丸終に絶えたる家を興して君恩を拜謝し奉り、是れよりして吉田三位惟徳と名告り給ふ。栗津山田赤塚これ

らの老黨はいふもさらなり、十餘人の壯士もこの事を傳へ聞き、衆皆處々より走せまゐりて、欣ぶこ

と限りなし。今茲仲岡阿闍梨八十餘歳にて遷化し給ひぬ。よみて惟徳朝臣はたゞ一日もはやく母公妙
鏡尼を迎へまゐらせんとて、勝久光政軍介等を將て、武藏國へ下向し給ふ。この序をもて、梅稚丸を
一社の神に祭らん事を奏し奉り、日數経て淺茅が原なる鏡池庵に到著し、慈母の恙なきを歡び、又そ
の老鏡を給へるを悲しみ、十とせに餘る起臥を、問ひもし問はれもして、洛へ伴ひ奉るべき爲に、下
向しつるを聞え給ふに、尼公一切うけ引き給はず。われ今御身が忠孝を全うして、世に出で給ふを見
るからは、一日も生き延びんことを願はず。殊に年來の宿願を遂けて、明日は西方極樂に至らんと
す。何の違ありて洛へ上るべき」と宣ひしが、果して次の日浴して新しき袈裟法衣を著け、禮盤の上
に結跏趺坐して、念佛數聲唱へつゝ、大往生を遂げ給ふ。辭世の和歌あり。

なか／＼になきたまならば末の世を守らむとおもふ人の子までも

惟徳主從哀悼に堪へず、遺言に従ひて、鏡が池のほとりなる丘の上に葬りぬ。今の妙龜山これその
墳墓なりといふ。さるあひだ惟徳朝臣は、先考先妣、春雨、鳩崎、玉柳等が追繼の爲に墨田川の南出
崎に一字の道場を建立し、又梅稚丸は、叡山寄寓の因もあれば、梅稚山王權理と神號して、柳の下に
寶倉を建て、毎年の三月十五日に、大念佛供養あるべき由を定めおき、さて浮草、淺船等をも召し俱
して洛にかへり、吉田の神社と比叡の辻子の道祖神に幣帛をたてまつり、白川の館と、志賀のほとり

にて討死したる、田中八郎、鹽屋藤三、大野小七郎等が妻子眷族を索ね出して、厚く扶助し、すべて生ける者には秩祿を行ひ、死せる者には追善を修し給ひし程に、よろづ昔に立ちまさりて、その家ながく榮えけるとぞ。

附 録

或人問ふ、「叟が毎歳著はすところの神史、總て烏有先生に託して勲徳の挂徑とす。今この梅柳新書も、亦その類なるべし。梅稚の事もつばら謠曲に傳ふるをもちて、世の人口に膾炙すること久し。しかれどもふかく物にしるせるを見ず、叟何に据つてこれを作る。」余答へて云く、「梅若物語」といふものあり、今罕に傳ふるは中葉の人の筆するところとおほし、角田川の謠曲はこれより出でたるなるべし。亦萬里居士が梅花無盡藏に梅若の事を論ず、この外に所見なし。但し秋夜長物語に梅稚の事見えたり。しかして世に傳ふるところと遙かに異なり。こゝに抄出して後人の批評を俟つのみ。

秋夜長物語に云く、後堀河院の御宇、西山の瞻西上人もとは北嶺東塔の衆徒、勸學院宰相律師教戒といへり。教戒いさ、かなる思ひありて、山を出でて他に住まんとしけるが、さすが齋王山王の結縁もすてがたく、同坊同侶のわかれも名残をしくて、あかしくらしけるが、あるとき石山に七日こもりて通夜す。その夜の夢に美少人を見て、こゝろに忘れずうかれありきしに、三井寺の邊にて雨にあひて、聖護院の御房の庭に立ちよれり。しかるところに二八ばかりの美少人、花を手折りてたすみ居たり。是れは三條京極に住み給へる花園左大臣の子、梅若と申すにてごありける。律師が

夢に見たるおもかけにすこしもたがはねば、いよく思ひまさりつゝ、かの少人のつかへる童をかたらひ、文をおくりければ、少人の心をあはれみ、律師をまねきて一夜あひけり。これより後律師、山にかへりてもなほ戀慕のこゝろやまず、ふししづみてあかしくらせり。梅若此のよしを聞きて、かの人ほかなくなりなば、なからん跡を問ひてもかひなし、縦ひしらぬ山路なりとも、たづねのかんと思ひたち、童一人を俱して出でけれども、あゆみなれぬ道につかれて、辛崎の松のかげにやすらひ、あはれ天狗こだまなりとも、われをとつて比叡山へるてのほれかしなどいふ所に年たけたる山伏来て、いづちともなくうげひゆきぬ。梅若うせたりとて、山門三井寺大いにさわざ、山門の衆徒教戒律師以下、如意嶽より亂れ入り、三井寺に火をかけてやきはらひぬ。その後梅若歸り來にけれど、わが事故に佛閣殿舎、火災に罹りしを悲しみ、泣く／＼文を書き、童にもたせて律師につかはし、瀬田の橋の下に身を投けておなしくなれり。律師まどひ來り、はかなき骸を岩の狭間より奪ね出し、血の涙をながせどもかひなし、その夜やがて葬りをさめ、遺骨を首にかけて諸國修行し亡跡ねんころに曳ひにけり。

以上秋夜
長物語

按ずるに、長物語に年たけたる山伏、梅若を奪ひ去るとあるを取りて、後人松若天狗に奪ひ去らるゝと作しかへたるか。また教戒律師、梅若の遺骨を携へて諸國修行すとあれば、武藏國墨田川の畔など

にもて来て瘞めしるしに柳を栽る、その後寂山の因に山土權理と祭りしにや。きはいへ秋夜長物語といへども、男色まんしよくうじん羅敷らふうきたる説どもを輯録せしものなれば、これを本説とも定め難し。蛭龍子むしりゆうこは世にいふ愛護あいご若わかつのこと、彼の長物語の梅若うめわかつに因つて作り設けたるものなりといへり。余が注に著はしたる俳諧はいかい歳時記さいじ梅種塚うめねづか大念佛だいねんぶつ洪養こうようの條下にこれらの説を引かず。彼の書は倉卒くらそつの際ときに稿こうをばりしかば考へもらしたるもなほ多かり。亦問ふ、都鳥みやこどりは伊勢物語いせものがたり粟田あわた川がはならでも、都鳥みやこどりをよみたる古歌こたありや。答へて云く、都鳥みやこどりは彼かの川がはに限らず、外またにも夥おほよめり。八雲御抄やつかむりに、みやこ鳥みやこどりはすみだ川すみだがはならで京みやこちかき川がはにもありとしるし給へり。この事既に蛭龍子の辨わづらひに審しらかなり、その古歌こた左ひだりのことし。

後拾遺集ごしゆいしふに和泉わいせんにくだり侍りけるに、都鳥みやこどりのほのかに鳴きければよめる和泉式部、

こととはばありのまに／＼みやこ鳥みやこどりみやこの事をわれにきかせよ

この歌家集うたがしあひにも見えたり。又古今著聞集またここんちやくもんしふ、少將内侍の歌に、

春はるにあふこゝろや花はなのみやこ鳥みやこどりのどけき御代みよのことやとほまし

十六夜日記じゅうろくやにじに、すみだ川すみだがはにこそありと聞きしかど、都鳥みやこどりといふ鳥とりの、はしとあしとあかきは、此こののうら漣うらなみにもありけりとありて、阿漣あなみ、

こととはむはしとあしとはあかざりしわが住むかたのみやこ鳥かと

頓阿草庵集雜

あれはてし是れや難波のみやこ鳥今も堀江の川に鳴くなり

蟠龍子は頓阿が歌をもらせり。なほこの外にもあるべし。」

亦問ふ、「木母と稱ふる寺は、梅若の梅といふ字を分ちたりと覺し。然れども梅は毎に从ひて母にあらず、母に従ふ者は梅なり。木母を梅とする事、慥かなる説ありや。」答へて云く、「俗説辨に、湖海新聞を引いて曰く、北朝山濤字致遠。赴召宋神宗問曰。卿自三山路一來云々神曰自三山路一來。木公母如何。濤云。木公正傲歲。木母止含春。木公松。木母梅也。稱曰除二中書。」

今按するに、梅或はこれを柑といふ。柑音は南、説文、又爾雅釋木等に見えたり。史記貨殖傳に、江南柑梓を出すとあるも梅の事なり、母と母と字形相似たり、母を母に悞るか、毎を母に悞るか、未だしるべからず。かかれども梅を木母と稱する事、後人の杜撰にあらず、その稱へ來る既に久し。梅は和俗字か、字書にはたえて見ることなし。木母精舎の名目われこれをいかにもいひがたし。梅若の梅といふ字を分ちたらんとおもふは推量の説なり。よしや梅に因つて名づくととも神宗梅を木母とす、なほ別に故あるべし。」

右無用の辨に似たれども、聊いささか或問わくもんを附録ふろくして、もて好古君子かうこくんしの一昧さやくに備ふ。余が管見くわんけん、なほ僻説へきせつおほかるべし。この書きよこ正ただの冬ふゆ、十二月上浣じふにがつじやうわんはじめて草くさうを起おこし、今茲ことし丙寅正月ひやくにんげんがつ下浣げわん稿かうを脱だつす。おなじ年の七月二十三日しちがつにじふさんびつ更に校正かうせいすとて、卷まきのをほりにかいつける。

蓑
笠
隠
居

雲
妙
閒
雨
夜
月

崖 跖 (離宮)

而 鳴 神 寺 旒 因 權 與 於 隄 夏 亦 亦

川 中 半 而 必 崑 相 楚 亦 龍 志 岐 是

己 樛 因 子 夷 豸 所 希 故 更 子 慶 妙

旒 以 翻 雷 雲 詳 羽 覲 末 儻 賢 亦 也

學 讚 止 宜 燐 壬 回 戲 場 亦 其 蒙 昧

雙 太 倉 勃 凡 能 煩 惱 既 中 司 樛 靠

言 許 声 脚 色 且 聽 耳 回 以 釋

文 忍 个 明 卷 勿 著 作 堂 申 以



圖するところの獸は震雷記に

出づ。その書に云く、明和二年

乙酉七月二十二日、相州大山に

落つ。土人捕へて東都におくり

兩國橋の上にて、縦觀にせしと

かや。その形猫より大きくほゞ

鼯に似て毛は鼯より黒し、爪五

本ありて甚だ逆し、常には軟弱

にして人に狎る。もし剛ふらん

とするときは、猛くして當りが

たしといへり。

又一種は、近曾浪速人の版せ

し閑田次筆といふものに見えた

り。その書に云く、享和元年五

雷獸圖

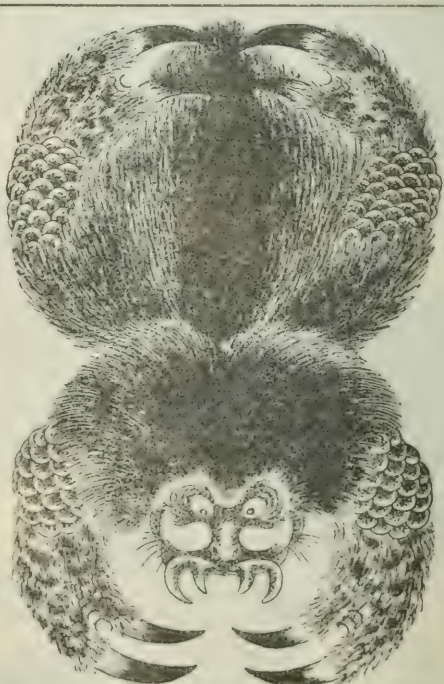


今按ずる小信儀地名考
み説とららの藪の科山の雷
獸亦これに似たり

月十日、此の獸藝州九日市なる
鹽竈へ落ちて死す、大いサ一尺
四五寸ありしとぞ。この外にも
くさくさあるべけれど、その近
きを出して證とす。

雷鳥は、加賀國石川郡白山權
現の杜の中にある。この山に雷
といふ蟲あり、形蛙の如し。
件の鳥好みて彼の蟲を食らふ故
に、頓て雷鳥とよべり。五糶如
に、謝豹は蟲の名なるを、杜鵑
をも又謝豹とよぶといへるに同
じ。雷鳥は大いサ鳩の如く、形
も又鳩に類し、首は鷄の雌に

其二



今接するは群書纂要の雷鳥を
指す首みても其の形よくとらえられ
るべし

似て少と許り鶏冠あり、毛は黒
 白相雜りて、柴石鶏といふもの
 の如く、その足に毛ありと、彼
 處の人語りき。又飛驒國乘鞍嶽
 にも、この鳥影ありとぞ。雷の
 鳴る時に雲の上を遊行し、雷霆
 と共に落つる獸を、漢には雷公
 と呼べり。和名鈔神靈類に、雷
 公、一名は雷師、和名伊加豆知
 一は云ふ奈流加美と見えて、今
 の俗火又と呼ぶものは是れなり。
 王充が論衡には、畫工雷公の狀
 を圖す、連鼓の形に似たり、一
 人これを椎つといひ、又李肇が



國史補に、雷州に雷獸をし、人とつて食らふといひ、又千寶が搜神記に、晋の扶風に楊道和といふ者あり、夏露靈桑の樹の下に震ふ、道和鋤を以てその股を折きしかば、遂に地に落ちて去ることあたはず、昏丹の如く眼鏡に似たり、毛角長き事三寸餘、形六畜に似て頭獼猴に似たりといひ、又謝在杭が五雜俎に、雷の形人常に見るものあり、大約雌鷄に似て肉翅あり、その響雷ひ撲つときは、聲を作すといへり。夫れ古人の雷公を説く

雲妙聞雨夜月圖説



後鳥羽院

あら山の松乃ありけり
 くらひくやせくつとゆる
 雷のもろふ舟

藤原家隆

あれをり越のちり峯よとむも
 まのをふのみく夜をありとつね

や、必ずしも同じからず、或は人に似たりといひ、或は猴に似たりといひ、或は鶏に似たりといふ、怪しいかな。近曾本邦の諸雜書に、雷公の圖説を載す、これも亦その形の互に異なるを見れば、雷獸に種類多き事誣ふべからず。土佐の山中信濃の深山、安房の二山など、春夏の間雷獸を獵り出し、捕つてこれを食らふといへり。かかれば李家の説も亦誣ひ難し。震雷記に云く、雷は陽氣地氣を誘うて升起、地中の硫黃硝磺もろともに升起て天に到り、太陽の天火これに乗じて、空中に交はり入り、忽ち發聲奔騰す、是れ則ち造化の火氣なり。又別に此の火氣を好む獸ありて、雲中を遊行し、偶人家に墮つ。雷と獸とは一物にあらず、世の經籍に載する所、火を食らふ鶏、火に處る鼠、雲中に飛行する鳥、皆この類なりといへり。同書に亦云く、或人曰く、白山の雷鳥は、大明一統志に載するところの松鷄なりといへり。古本には松鷄とあつて、校正の本には鶉鷄とあり。この鳥好みて松を餌とする故に、松鷄と名づけたるか、されば和歌にも、松を詠みあはせたるにてしるべしといへり。世に雷鳥を圖するを見れば、野鷄に似たり、予これを北國の人に問ふに、鳩に類すといふ、よつてこゝに圖するものは、北國人の説を取れり。

夏の夜電のする方を向上ぐべからず、動もすれば睛を傷り、甚しきに至つては忽地瞽となるものあり、これを治するに玉蜀の殼を用ゐる、傳貯へおくべし。

寫本雷震記に云く、雷に撃たれたるもの二人あり、俯したるものは活き、仰ぎたるものは死せしといへり。雷のいたく鳴るときは、うつぶしになりて在るべきなり。梨春老人の云く、雷に撃たれて昏絶したるものには、その人を仰けきまにして、活きたる餽を胸の上に置くに、鯛動揺すれば即ち蘇生す。又雷火に肉を撃られたるには、降真香を燒きて、その煙にて燻せば、すなはち愈ゆ。雷を怕るゝ人は、陰餘りありて陽足らざるが故なりとぞ。すべて彼の人ほ、造化の邊をへ踊する事、胡明仲にも勝れり。予その説をよみするをもて、こゝに十が二三を擧ぐ。かゝる理は聞きおきて益あるべければ、いま鳴神法師が小説を作るに就きて、世の童子等に示すものなり。迅き雷は聖者もおそれ給へり、しかれども深く懼るゝと恐れざるとは、その症の陰陽虛實によるのみ、亦咎むるに足らざる。丁卯季春、馬琴再び識す。

雲妙間雨夜月日録

卷之一

第一套 神崎の假の宿

第二套 柱觸の牛を親

第三套 しぐるゝ宿の濡衣

卷之二

第四套 東路の雪の山

第五套 柞が枝の蓑蟲

卷之三

第六套 深山路の枝折

第七套 倭文手の稚鷹上

卷之四

第八套 倭文手の稚鷹下

第九套 卯月の舞雲雀

第十套 鏡山の朝雲布

卷之五

第十一套 桑の真弓逢矢
第十二套 岩戸山の瀧の絲

總目錄をばり

雲妙開雨衣月日録

雲妙間雨夜月 卷之一

東都 曲亭馬琴編次

第一套 神崎の假の宿

近江國愛智郡觀音寺の城は、佐々木判官氏頼、年才僅かに十一歳なりけるに、建武三年某月はじめてこれを領せしより、守山愛智川の間、民屋夥建てつゞき、繁昌をさく華洛に劣らず。そのころ同じ郡なる武佐の山里に、雨田武平といふ獵夫ありけり。元より大慾無慚の白徒なりしかば、後世の事などは露許りも思はず、只且けても暮れても獸獵を事として、物の命をとる事いくそばくぞといふをしらず、そが報いにや年の齡五十といふ春、あしき病におかされ、苦惱七日ばかりにして、死にぞ死したりける。武平が妻は先だちて世をはやうし、一子嘉太郎やうやく十二歳になれり。それを調續ぐべき親族もあらで、家はきはめて貧しかりつる程に、近鄰き人嘉太郎を憐み、「亡き父母の後世をも弔ひ、將た己が身のおきどころにもせよ」とて、武佐の長光寺に將てゆきて、彼を法師にせよほしき由をこのふ聞ししかば、住持こゝろよく承引きて、この日より寺に養はし、次の年嘉太郎に親養せ

して、法名西啓と賜びてけり。かくて西啓は長光寺にあること六年に及び、道心ますます堅固にして、鶴の木の茂きをわけ、鷲の嶺の高きを仰ぎて、出離生死の要道を修することいと切なりといへども、つくんと我がうへを省みれば、父はいやしき獵夫にて、その死にざまさへ宜しからねば、人わが素性をいやしめて、歸敬する事なからんには、華池寶閣の裏に坐して、許多の徒弟を扶助し、一切衆生を濟度せん事、たえて適ふべからず、さらば故郷を離れてこそ、夙願をも果さめと思ひたち、豫て思ふ旨を師の坊に告げて身の暇を給はり、親しかりける里人にも別れを告げ、縁を求めて攝津國なる神崎の郷村、久々地の眞言院といふ大刹に投りて修行し、一念希求の志ます／＼懈る事なく、爰にあること亦七年になりぬ。されば同宿の法師ばら、より／＼これを嘆賞して、「この人久後は踰伽成就の行者たるべし」といへるもあり、又その才の長けたるを妬しと思ふもありけり。夫れ始めあり終りある者は只聖人のみ、わきて出家は出家後の出家を堅固にせよといへる、これ古人の金言なり。西啓は人面のあたり己を賞美する程に、自らゆるしてや、慢心發り、後には人を人とも思はず、假初の問答にも經文を引いていひ懲らし、總て年の増したるかたにも、口を開かする事なかりしかば、はじめにも似ず興さめて、みな憎しと思はざるはなし。ころしも九月の末旬、西啓法師は一日不圖學寮を立ち出でて、近き山の腰を漫行するに、木々の葉よき程に染めなして、錦を織りかけたる如し。

彼の御室の兒をそ、のかして、割籠を埋め失ひけん、由なし言さへ思ひ出でられ、なほ彼此を御す
るに、秋の日はや、西に傾き、尾上を隔てて狹牡鹿の、牝呼ぶ聲も聞ゆなり、「こは思ひの外に遊び過
しつ、今は退りなん」と獨りごちて、後をきと見かへるに、忽ち草の葉のさら／＼と動くを、何ぞと
て熟視れば、蹠がぐれに狹牡鹿の、や、その牝を慕ひ来て、淫れんとするにぞありける。室に前
世の業因にはありけん、亦父が殺生の惡報にやよりけん、西啓はこの形容をと見かう見て、年來の道
心立地に失せはて、慾火肚裏に燃え春心眼底に動き、思はず太息つきていふやう、「天地開闢けをめし
より、いきとし活けるもの、男は女を思ひ女は男を慕ふ、これ陰陽自然の理にして、教へされども
おのづから知る、然るをわが釋教に、これらの事を禁じて、事の情に慥れるはいかにぞや、われ不幸
にして孤となりしより、心にもあらぬ出家して、この煩惱をなまにこそ、世の常言に、「和尚は色中
の餓鬼なり」といへるぞ宜なる。よしなやな名山靈地に住持して、衣食住の三つに富むとも、手とい
ふもののなかりせば、孰にか遣し孰にか與へん。さればむかし天竺にひとり沙門ありけり、野に出
で感ずるところありて其の精を泄らしつ、その精草の葉に掛れり、時に牝鹿來りて彼の草を食みぬ、
この鹿遂に有身りて生めるものは、形狀人にして頂き一つの角生ひたりと、援いて經文にあり、世
にいふ「角仙人是れなり」かかれば道のいと高きも、又齡の傾きたるも、只この迷ひあるにこそ、多

間の比丘が寡婦に染著せし故事は、説いて大莊嚴論に見え、清水寺の僧が進命婦に懸想せし緣由は、載せて宇治拾遺にあり、志賀寺の朝寛、大原野の尼がごとき、みな是れ悟りの中に迷ひを生じ、迷ひ極まりて更に悟りの門を開けり。遮莫知らぬ後の世をたのまんとて、今生を徒にすぐさんは、いと愚かなる所爲なり」と、己が利根に惑はされて、多年の意樂を忘却し、三世の諸佛を誹謗して、魔業の火坑に陥る事をしらず、頓の愆念を果さんと、思ひ立ちけるこそ淺ましけれ。西啓はかく思ひつゝ、處も去らでありけるが、亦思ひ返すやう、こは淺まし、われには天魔の乗りうつりて、この妄念を起させけるにや、實に忘れたり、無住法師が山居の歌にも、

聞くやいかに妻よぶ鹿の聲だにも皆與實相不相違背と

かく詠ぜしこそ尊き道心なれ、われ過てりわれ過てり、高祖大師許させ給へ、彌陀佛々々々とうち念じて、足ばやに走り去るに、なほ夢路をたどるやうに覺えて、ゆけども／＼寺に到らず。こはこゝろも得ぬ、常には熟れたる路の、などてかくは行き慢ちけんと不審しみ、と見れば柴垣高く引きまといひたる内に、茅葺の屋の棟見え、近く琴の爪音聞え、遠く人の笑ふ聲す。西啓はこゝにはじめて神崎の長が家なるを曉得つて、意の中ます／＼あやしみながら、さきの愆火のまだ滅えやらねば、戀する人の手ぶり見まほしくて、彼首此首とたち繞れば、北面なる諸折戸の半ば開きたるありけり。其處より

遙かに見入るに、水に富みたる地方とて、池を掘らず、庭は芝生にて奇石よき程に居きならべ、秋の草花はみなすがれにたれど、常磐木の間に黄蘗のもみぢ色濃く染めて、夕映もたまし。巖山は究めて高からねど、芝罘丸が須彌山をうつし、秋の桃は更に紅にして、西王母が千歳を羨ます。いかなる月日の下に生まれたるものか、この慾界の仙窟にはあそびあかすらん、世に法師ばかり影なきものほあらし。」と魅きて、思はず足の進むまゝに、やをら折戸の裏に入るに、忽地人の氣色するやうなれば、敍あしかりけりと思ひて、走り出でんとする折しも、女の童二人假山の陰よりつと來りて、西啓が法衣の袖を引きと、め「蓮葉の申せと侍り、今宵は指す事あれば、もとめても布施すへき折なるに、はからずも御僧の立ちよらせ給ひぬるぞ嬉しき、まけて誘ひまゐらせよ」とあるに、御迎へにまゐりつゝ、「いざ給へ」といふもわりなし。西啓聞きて大いに驚き、「愚僧はさるものにあらず、人たがへなるべし。」と回答へもあへず、ふり放ちて逃げんとするを、女の童は留めたる手たにのるべし、莞然とうち喚みて、「さのみな思みおそれ給ひそ。彼の蓮葉の君と申すは、この花街に全盛比なし、いにしへにその名聞えたる、江口の君にも劣り侍らず。さるからに夜毎に通ふ客の数は、濱の眞砂より多く、いく日と定めて來ませるすら、あふせはいと騒々なるに、彼方より請はれ給ふは、過世よくこそおはすなれ。世の中を厭ふまでこそかたからめ、假の宿りは惜しむに足らず、とくく。」と戯れて、

體て裏に冊き入るゝに、木だちを隔てて向ひの方に、いと清らなる座敷あり、綱代天井に星のうらを裏みて、長押牀間の風流なる、みな唐木もて造れり、調度又俗ならずして、琴棋書畫處せきまで飾り立てたる、綺麗莊觀いふべくもあらず。扱女の童どもは、西啓を上座に居らし、一人はまづ茶を参らし、一人は、「この事申さん」とて、奥に走り行きぬ。暫しありてさと聞く蒸襖と共に、留奇南えならず薰らし、いと晴れやかに装ひて、年紀は二十の上を一ツといひて二ツとは過ぎじと見ゆる遊女、西啓がほとりちかう出で来りて、なれ／＼しげに會釋し、「わらはは蓮葉と呼ばれ侍り、尊き聖僧をかか席に迎へまゐらすれば、さぞな物うくおほさんが、「佛の慈悲は穢土を嫌ひたまはず」とぞ承る。希はくは放やかに坐して、濁世相應の要門、凡夫出離の直路とやらんをも、示し給ひね。」とてうち啖める容止は、如來の三十二相にも、遙かに勝る心持しつ。西啓はあやにくに、胸のみひたと轟きの、はしなくも應へず、しば／＼背向に見やりつ、「しげにいはるゝ如く、罪障ふかき身をしりて、後世のいとなみあらん事は、いと有り難くこそ。」といへば、蓮葉もいとうれしと思ふ氣色にて、「とく／＼物まゐらせよ。」といふ。この時口も暮れにければ、女の童は障子建てこめて、菊燈臺に燈を點し、やがて銚子杯をもて出でたり。かくて蓮葉は、みづから杯をあけて丁寧に勸むれば、西啓も推辭みがたなく、漫に酔うて前後をしらす、袖片しきて臥したりけり。さる程にその夜もや、明けにけれど、西啓

が宿酒いまだ醒めず。蓮葉みづからその枕方に立ちよりて、「聖僧起き出で給はずや、天ははや明け侍りぬ」といふ聲の、寐耳にや入りけん、西啓岸破と起きて見かへれば、我にもあらで淺ましや、鞆帳紅間の中に臥したり。こはいかにと呆れはて、忙然としていふ所をしらす。蓮葉この形勢を見て、「聖僧のあやしみ給ふも理なり。あまりに罪ふかくおほえ侍れば、今は縁故をしらし申すべし。曠昔こころざす佛事ありと申せしは偽りにて、實は人を避けんために、やとひまるらせたるにて侍り。かくのみにてはなほ怪しともおほさんが、この頃わらはが方へ、只願と來ませる旅人あり、この人は鎌倉武士にして、形無下に醜く年さへいと老いたり。それを厭ふにはあらねど、財寶ある身を誘りかに、人の忌むべきことのかぎり云はる、も口をしく、けふは如此々々の病あり。」「聖は約束の客あり」とて、いくよき返せどこりすまの、昨夜は逃る、道なきに、聖僧をこ、に止めまるらせ、晝より坐する客なり」と、いひこしらへて彼の人を、漸う歸せし芋環の、いともくるしきたばかりなり。人を濟ふは御佛の、誓にもれぬと聞くものを、元來獨り臥し給へば、世に憚りの關もあらじ。とくく、歸り給ひぬ」と、一五一十を物がたれば、西啓日驚き日呆れて、數回嘆息し、「わが寺の清規嚴重なれば、縦ひ一夜さなりといふとも、俗家に止宿せし法師は、再び寺門に入れられず。さるを柳巷に臥したるをや、こは何とせん」とて後悔す。蓮葉もその事を聞きて今更に痛ましく、「西行法師の江口に宿り、件

空上人の室積にかまひ給ひしをば、世の人ちよくしりて侍り。よしや柳巷に臥し給ふとも、心清くば人も咎めじ。さのみな恨み給ひそ」と、さまんゝにいひ慰むれば、西啓頭をうち掉りて、「われに於て墮ちずといへども、誰か是れを誠とすべき。已みなんゝ、今はいかに悔ゆるともかひなし、早まかるべし」と出て出でんとすれば、蓮葉も慰めかねて、練一匹と鏡一面をとり出し、「こは數ならねど心ばかりの布施に侍り。さる事ありとは思ひもかけず、聖僧を苦しめまらする事、みなわが身の罪にして、後の世いとおほつかなし。よきに導き給へ」とて、練と鏡を贈りけり。西啓はふたたび三たび固辭して後、彼の二品を受け納め、「事のこゝに及ぶこと、みな前世の悪業とこそ思へ、争で御身を恨むべき。縁あらば亦もあふべし」といひかけて別れしが、是れより互に捨て難き思ひありて、蓮葉も何となく彼の法師の住方いとほしく、名をも聞き、處をも問はざりしを、遺憾く思ひけり。これみな故ある事にして、西啓一たび佛門に入るといへども、父が役生の悪報によつて、牝戀ふ鹿に妄念發り、更に神崎の花街に酔ひ臥して、いよく菩提の心うせたり。されば古人も、出家は出家後の出家を、堅固にせよとはいへるなるべし。汗れを洗ふに水多からざれば、水のみ濁りてその汗れ脱ちず、過世の悪業を滅せん爲に出家する者、精進勇猛ならざれば、遂に煩惱の垢を脱すことかなはず、その罪却つて俗子に勝る事あり、悲しからずや。

第一套 杜騙の牛を親

さても西啓は、寺の清規を犯して、いひとくに言葉なく、よしや辛うじて歸る事ありとも、出家の勤めも物うしとて、眞言院へは立ちもよらず、なほ二三日は高畑の在家に隠れ居て、ゆくすゑ來しかたのことを思ひつゞくるにも、身の過ちは悔しからで、只その人の前影のみ忘れがたく、西方淨土の蓮臺は、ねがふにいと遙かなり、我はながれの里におふる、蓮葉こそ結しけれど、惡念さらにいやまどども、我のみかくは思ひこがるれ、彼またわれを思ふにあらねば、とばかりにしてそれちかひなし、愁ひに身を耽ちて、いひもしらせず徒らに、別れたる本意なきよと、はかなくも思へぬわしが、估とこ、ろづきて、こはわれながら愚かなり、誰をまたんとて貯積もなきに、いつまでかくてあるべき、一度故郷に立ちかへりて、ともかうもせめと尋思し、蓮葉が與へたる練を賣りて踏費とし、近江を投していそぎける。眞言院には、那の日西啓が歸らざるをいぶかしみ、次の日人を出して、その往方を索ね問はするに、惡事千里を走るといふ常言にもれず、「一件の法師は神崎の花街に聲ひ臥し、世の聞えを憚りて、遂電したり」と風聞す。同宿の法師ばら、早くもこの風聞を聞きて嘲も笑ひ、「彼の青道心あまりに我慢の鼻をうごめかして、遂に魔業に墮ちけるぞや、淺まし／＼」と私言きあひしかば、住持も聞きがたくて、聽て近江の長光寺へ消息して、縁由を告げしかば、彼の地の道俗傳へ聞

きて、親しきも疎きもなべて苦々しくぞおほえける。かくて西啓は攝津國を旅だちて、いく日もあらぬに近江路に入りけるが、又思ふやう、われ往に故郷を出づるとき、「もし一山に住持して、錦の袈裟を掛くるにあらずば、再び歸らじ」と廣言せる事もあるに、今この形勢にて阿容々と立ち歸り、後指さされんは面ぶせなり、さればとて路銀も既に盡きたれば、なほ遠く走らんも思ふに任せず、とせんかくせんと進退こゝに究まりぬれど、さすがに聴おて武佐へは立ちも歸らず、大津草津の在家に乞食して、漸く飢ゑを凌ぎつ、日をおくるに、ある日守山より鹽を負はして歸る黄牛あり、野洲川を渡さんとて、牛飼は彼處の岸に牽きすてて、日今轆ぎ戻す船をまつに、彼の牛しばし牛飼が足を舐りて已ます。この時西啓もおなじ汀に立在みしが、この形勢をいぶかしみ其の故を問へば、牛飼答へて、「これ別に仔細あるにあらず、この牛久しくわれに押れたるをもちて斯くの如し。凡そ畜類のこゝろ穩かなれば、その友を離るものなり、この牛われをもちて友とするにこそ」といふ。西啓點頭きて、「けにさる事あらん」と抑この牛は何地へゆきて、何地へか歸るにや」と問ふに、牛飼かさねて、「これは愛智川の彼方なる小幡の間丸、友定物右衛門ぬしの牛なり、彼の人鹽を齎ぎ給ふ故に、かく日毎に牛に鹽を負はせて、草津守山よりはるくと牽くなり」と、回答へもあへぬに渡守、衝と船をさし著くれば、申なる人は陸に上り、陸なる人は後れじと乗りかはるに、牛飼も牛を船に牽き乘し、西啓もこ

の川をわたして、おのが様々にのりもてゆきぬ。然るにこの日西啓は、道すがら思ふやう、一橋に黄牛が牛飼の足を踏みしは、彼が脚絆に入蓄きたる鹽の氣を嘗むるなるに、彼悟らずして、弄れたる故なりといへり。我これに就きて謀あり、靴く彼の牛を得て路費とし、鎌倉などへ赴かば、彼處は元來帯けき地方なり」と聞けり、かならず發跡づる日もあるべし。かく故郷ちかく呻吟ひて、しれる人に面をあはし、變々しきをしられんは、いと口をし。」とひとりごち、こゝに初めて賊心發り、次の日竊かにおのが頭より手足に至るまで、悉く鹽を塗り替へ、やがて小幡に赴きて、物右衛門が家に音なひ、「愚僧は攝津國より來れるものなり。主人にそと聞え奉るべき事あり、このよし申させ給へ。」といふ。折しも物右衛門只ひとり、端近くありしかば、みづから出で迎へて、先づその人を見るに、法衣なども無下に垢つき破れて、海松の如くかき垂れ、物ほしけなる法師なれば、こゝろにふかく怪しみ、「あるじ物右衛門はすなはちわれなり、何事のありて訪はるゝにや。」と問へば、西啓忽地清然と落涙し、「緣故を申さねば、不審しと思すも理なり。真愚僧は武佐の山里なる獵夫、雨田武平といふものの一子なり。父は年來殺生の報いにや、今は十三四年のむかし、奇しき病に係りて身まかり、わが身は幼きより出家して、攝津國なる何がし寺にあり。しかるにいぬる夜の夢に、父の武平告ぐるやう、「われ世にありし時、物の命をとりたる報いにて、畜生道に墮ちたるが、遂に生をかへて牛の手

と生まれ、今現に江州小幡の問丸、友定物右衛門が家にあり。されば月に嘯ぎ霜に嘯ぎ、旦より暮るるまで、重荷を負うて往來する、その苦しさ比へんに物なし。汝急ぎ彼處に到り、我を乞ひ得て苦惱を救へ」といへり。その見し所まぎろしけれど、人にはそれも語られぬ、心の中の悲しみは、いはずとも察したまへ。父の先途を見んために、竊かに寺を出でながら、沙彌の身にては路費に宛つべき財へもあらざれば、道すがら乞食しつ、辛うじてこゝに來れり。歎はくば施主大檀那、父を放して賜ぎ給へ。これ莫大の慈悲ならん」と、誠しやかに述べしかば、物右衛門聞きて大いに驚き、「かかる奇談は物の本にてこそ見れ、今面のあたりこの因縁を聞くからに、いかで一頭の牛を惜しむべき。われ馳かりしころ、武佐のほとりに雨田といへる僧夫ありて、よからぬ死をなせしと聞きしが、さては御身はその人の子なりけるか。わが家には牛三ツも四ツもあり、何れが御身の父なるべき、みづからえらみ給へ」とて、即て牛小屋に誘引へば、西僧は爲難せたりとこゝろに睨み、彼の黄牛を一目見るより、「是れなん夢の告げに違はず、馳なつかしきわが父、淺ましき御身の果てや」とて、忙はしく走り寄り、大聲あけて泣き居たり。牛はその性體を嗜めば、忽地鹽の氣を嗅いで、長やかなる舌を出し、西僧が頭より、項耳の根嫌ひなく、嘗めまはし嘗めまはせば、物右衛門感涙をとゞめかね「けに、信形は牛なれど、生をかへてもその子を思ふ、恩雫のやるかたなさは、かくまでにあるものか」と、信

だちて再び西啓を面屋に伴ひ、妻にも酒かに縁故を説きしらし、夫婦手づから酒食を拵掛して、厚く饗應し、さて錢七貫文とり出でて、これを西啓にとらせ、「こは心ばかりの施物なり。これをもてしほしの飼料ともし、よく孝養をつくし給へ」とて、いと丁寧に聞えつゝ、彼の牛を牽き出してあたへしかば、西啓合掌してあるじ夫婦を禮拜し、件の錢を肩にしつゝ、牛を牽いて出で去りぬ。闔宅の老弱は後にこのことを聞きて、みな驚き怪しみけり。かかりしかば西啓は、輒く物右衛門を騙り課せ、次の日牛をば大津の市に牽き行きて、三兩の金に換へ、俄頃箠杖など、見ぐるしからず整へて、東海道を行脚せり。「夫れ智慧もなく多聞なきは、人身に似たる牛なり」と大論にいへり。亦善導の曰く、「施と戒と禪定孝養等の福分を行はざるもの、これ畜類に等し」といへり。然るを西啓は不義の財を貪らんとて、牛を指して父と呼ぶ。彼が心ざま牛にも劣りて、その悪虐懲ふべきにも物なし。凡そ此の草紙を闕する童子等、こゝに至つてますゝ西啓が不義不孝を憎まざらんや。しからば各いかに父母に孝養を盡し、世になき後は追善忘ることなく、天堂に生じ給はんことをねがふべし。人の心は常の主なし、善に志すときは善人となり、惡に志すときは惡人となる、只忘れても放すまじきは意の駒の手綱なり、劣々油斷すべからず。

第三套 しまゝるゝ宿の濡衣

こゝに又江州瀬田の片ほとりに、伊原二郎武章といふものありけり。原は上野國琵琶が窪の郷士、伊原太郎五武泰の弟なり。件の兄弟いぬる建武の頃、新田左中将義貞朝臣の手に屬し、數度戰場を離たりしに、義貞歸路の雪と消え給ひし後は、兄弟四落八落になりて、互にその生死をしらず。武章も世ははやかうと思ひしかば、近江路に足をとめて、瀬田の片ほとりにかすけき住家を求め、親子四人ともかくもして年月をおくりぬ。しかるに妻の元江は、この二年以來、持病の續繁に身もほそりて、首のあがる日は稀なれど、女兒妙十五歳、二男太次吉十三歳になりつ。兄弟殊に孝心ふかければ、歌ぎ水汲む所爲はざらなり、母の看病等閑ならず、しかはあれ戰世の事にしあれば、いよ、生活の便なきに、武章はなかくに身を捨てて日傭をかせぎ、大津の商人等がために、牛を牽いて妻子を養ふといへども、外の牛のみ牽きありきては、賃錢も人なみには得とらず、いかにもして牛一頭を飼はばやと、年來その用意して、毎日に五文十文の錢を殘し貯へける程に、や、三兩の金を得たり。かくてある日武章は、大津の牛市にて、いと遅しき黄牛を買ひ得たりしかば、ふかく歡びてわが家に牽きもて歸り、妻にも年來の心つくしを物語れば、妻も子供も諸共に、「よき本錢得たまひぬ。」とて歡びける。浩かる處に思ひもかけず、相州底倉より、兄太郎五武泰が書簡到來す。「別れてより一度も絶えて音耗を聞かざりしに、こは料らざる僥倖なり。」とて、武章忙はしげに封皮押し切りて讀み

も果てず、まづ二人の子どもを近く招き、妻にも彼の書簡を示していへりけるは、「この世に在するとも頼みがかかりつる兄武泰どのは、この十年あまり以来、菟姑峯のあなた、底倉といふ山里に坐せしなり。これ見給へ、底倉の住人木賀十郎光輔は、新田舊好の武士なるが、わが身はからずも彼の人に扶持せられ、富むにはあらねど、妻子を養ふに乏しとも思はず。然るに光輔ぬし、鎌倉殿（源氏の嫡男 義隆の嫡子）時鎌倉にありて關の八州を管領す、故に鎌倉と稱せり。の仰せによつて、久しく攝津國に在番し、近曾歸國せられしが、光輔彼の地よりのかへさ、いかにしてか御身が瀬田に佗住居することを仄かに聞いて、如此々々の事なるぞ、汝は未だしらすやと宣はするに、はじめてその便宜を得て歡びに堪へず、下郎丁介といふものゝさし遣はし、飛札をもつて示すものなり。とく／＼來りて光輔どのへも御禮まうし給へ、定めて再會の日近かるべし、因つて具にせすと書きたまへり。かかれば暫しも猶豫しがたし、羣はつとめて彼の地へ旅立ち、遠からず歸り來つべし。妙も太次吉も母の看病はいふもさらなり、牛にもの食はすることなど必ず憚らでよく留守せよ。」とて、事の顛末是彼と説きしらし、俄頃に旅の用意す。妻も子供も神ならねば、これを最期の別れとは思ひもかけず、「わが父の發跡で給ふ時來ぬ」と、歡び勇む。理なり。かくてその夜は父子夫婦、旅路の別れを惜しみて寐もやらず、や、明けふんとするころ、二郎二郎武章は、ふかく藏め置きたる兩刀を跨み、底倉より使せし下郎丁介とともに、相模路をさして立

ち出づれば、妻の元江は病をおして、一人の子供に扶け掖かれ、門方までもと送り出で、「神無月もけふ慰のみにあれど、去年よりは寒さもはやう覺ゆるに、路すがらの雪も深かるべし。申さずともよあづの事に、心を用ゐて風引き給ふな。別れといへば東の間も、思ひやりせらるゝ」と、いひかけて涙さしぐめば、武章も見かへりて、「わがうへはともかくも、御身よく深養して、歸り來る口をもち給へ」と、言葉すくなに聞ければ、妙も太次吉もおとなしく、「爺をさまはやく歸らせ給へ」と、涙聲して呼びかくる、心ほそきは理と、思へば父も胸くるしく、應へすててぞ出て去りける。是れはきておき友定物右衛門は、ある日活業の事につきて、大津に赴きたるかへさ、驟に時雨の降り來るにこそ、瀬田の長橋走り脱けて、伊原武章が軒端に笠やどりす。元江は物右衛門がそほ濡れて、せんすべなけなるを見るに忍びず、臥しながら、此方へ」と呼び入れ、「何地の人かはしらなぞ、途にて雨にあへるばかり便なきものはなし。いとふりたれど蓑も侍り、苦しからすばうち被きてのき給へ。やよ妙よ、背門の裏に掛けたる蓑の、薄かき拂ひて進らせよ」と、いと信やかに聞ければ、物右衛門「否この頃の日和癖なり、且く尻かけて居らば、やがて霽れゆくべし。うち捨てておき給へ」と回答へつゝ、傍を見かへれば、さゝやかなる竹縁ひきはらひて、大きやかなる黄牛を繫ぎおきぬ。つらく見れば、その毛色のいぬる日法師が、「父なり」とて、乞ひもてゆきしわが牛に、露許りも違はねば、心の

中ふかく怪しみ、やを立ちよめて牛の額を撫づるに、牛も養はれし上やしりけり、額をひたとすりつけたり。こは紛ふべくもあらざりけり、とは思ひつゝ、氣色にも見せず、何ごゝろなきおもしろして元江に對ひ、この牛は久しく養ひ給ふにや、又近習得給へるにや」と問へば、元江答へて、「それは近曾大津の牛市より、夫が買ひもて來りし」といふ。こゝに至つて物右衛門は、ますます疑念を生じ、この家の貧しさにて、かかる牛を買ひ得んこと、容易き所爲にあらず、かならず故あるべしと深念して、この日は何事もいはず、程なく天も晴れにければ、告別して走り出で、直に小幡に立ち歸りて、その妻の奴隸等呼び集合へ、「けふなん如此々々の事ありける。我いかに思ひ廻らせども、一切こゝろを得ず。彼の牛いかにしてか、瀬田の寒家にはあるらん」といへば、衆皆疑ひ迷ふのみにて、是非の分別に及ぶものなし。そが中に日來彼の牛を牽きたりける下主男、み出で、「是れにて思ひあはする事あり、いぬるころ僕件の牛を牽きて、野洲川に船まちせしとき、一人の弱法師も亦汀にあり。そのとき彼の牛僕が足を舐るを見て、法師其の故を問ひしかば、僕答へて、「この牛われに押れたるもて、斯くのごとし」と申しき。しるるにその後狎れざる牛を牽くに、足を舐ること押れたる牛にかはらず、こゝをもて思ふに、脚絆に自然と鹽の入みたるを嘗むるにこそあれ、其の法師はやくこれを猜し、おのが肢體に鹽を塗りなごし、父と偽て騙りとりたるものならんか。かの日僕は鄰村へ

使つかひして、面おもてのあたりその人を見ざれども、彼かれも是こゝも別人にはあらじ。」といふに、衆みな皆みなはじめて曉さと得とつて大おほいに驚おどろき、舌したをふるつてその奸わる智せにおそれあへりしかば、物もの右みぎ衛ゑん門もん踰あしずりして、「けに汝なんぢがいふことく、這しやつ奴やつは騙かた馬りに極きはまれり。牛うしはわが家いへ衣い食しょくの根もとなるに、輒たやすく騙かたりとられしこそ安やすからね。思おもふにわが笠かさ宿やどりせし瀬せ田たの寒ひん家かは、彼かれの惡あく僧そうが隠かく家れがならん。このよし聞きえあけて、思おもひしらすべし」と罵ののりつゝ、忙いそはしく袴はかま引き被かけて、村むら長ながが家いへにいたりて談だん合ごふし、詰あけ朝あさ觀くわん音おん寺じの城しろにまゐり、首は尾しを訴うへければ、領りやう主しゆう氏ぢ頼ら俄ご頃きにに下げ知ちして、影あまたの捕とら人りをさし向むけらる。武む章ぢやうの家いへにはかくともしらで、元もと江えはふたり二人の子こ供どもとともに、夫をとの事ことのみ思おもひやり、「旅たびだち給たまひてより十日とつかになりぬ、今いまごろは底そこ倉くらとやらんへ行きつきて、兄あに君ぎみにも對たい面めんし給たまはめ。然しからば年とし來らの物ものがたり、とやあらんかくやあらん」とて、長ながき留守るす居ゐの徒つれ然ぜんを、慰なぐさめあへる折をりしもあれ、鳥からかほくと啼なきつれ、軒のき端はちかく飛とびめぐれば、元もと江え耳みみを側そばて、「あらおほつか、鳥から啼なきの忌い々々しきよ。このごろの夢ゆめ見みもこゝろよからぬに、胸むねさへいたくうち騒さわぐぞや、もし爺てい々々の上うへによからぬ事ことの、ありといふ祥さむがにはあらぬか、いと心こゝろもとなし」といへば、妙たへは太た次じ吉きちと目めを見みあはし、「あまりに思おもひ屈くし給たまへば、さ、やかなる事ことも心こゝろにかゝり給たまふならん。よしなき事こと宣のたまひて、病やまひをまさし給たまはんは、大おほいなる身みの損とんなり。いかに太た次じ吉きちさはあらぬか。」といへば、太た次じ吉きちうち點う頭づきて、「けに姉あね御ごの宣のたまふ如ごとし。けふは殊ことさら顔かほ色いろも、惱なごましけに見みえ給たまふ。」

藥煎じてまるらせん、いざ」とて兄弟もろともに、立つてゆく廚の戸を、破る、ばかりに丁と蹴いら
き、瀧田の村長と友定物右衛門を嚮導にて、佐々木家の兵士五七人、むら／＼と走り入り、「伊原二郎
二郎はいづれにある。いぬるころ悪僧と示しあはし、小幡の間丸物右衛門が牛を騙りとつたる事、證
據分明なれば、領主氏頼朝臣の仰せによつて、召捕に向ひたり、とく／＼出でよ」と呼ばれば、妙
は思はず手に持ちし、茶碗を撲地ととり落せば、弟が胸も板の間へ、さくと碎けて飛び散つたり。元
江は大いに駭きて、病の牀を坐行り出で、「こは思ひもかけぬことを承り侍り、夫二郎は家にあ
らねど、元來法師にしろ人も侍らず、彼處の牛はいぬる月、日はおほえねど大津より、夫が買ひもて
來りしものを、人たがへなし給ひそ」と、いはせもあへずかや／＼と冷笑ひ、「あらし風には倒れも
べき、草屋の内に住みながら、彼の牛を買つたり」と陳ずるとも、その謂れ更になし、目にもの見せ
んと驚りも果へず、一人の兵士走り蒐りて、元江が背を丁と打てば、「阿呀」と叫びて御座に、顔
る、を見むきもやらす、殘る兵士もろともに、小屋のうら簀子の下までも、阿ある限り素ぬれども、
幾間もあらぬ草屋の、外に躲るふ處もあらず、「扱は主も悪僧も、すでに曉得つて逃げ亡せたり。這奴
なりとも將てゆくべし」とて、臥したる元江を引き起せば、常にさへ痛む人の、はからざる苦惱に迫
り、打たれたるとき昏絶えて、甦生るべき氣色あらねば、人の子どもは亡骸の、仕方後方にとり著

きて、「こは何とぞん母御なう、晴々母御とて呼び活くる、聲も涙にたちかぬで、泣くより衛はなかりけり。憐れをしらぬ壯士の、これをさへ物ともせず、「こは思ひの外にもろき奴かな。もし空死したらんも量りがたし、村長はよく屍を守れ。物右衛門はその牛を牽いて、もろともに來れ。」と下知し、泣き沈みたる妙、太次吉を轟々と縛めて、引きたて、歸りけるとぞ。

雲妙間雨夜月卷之二

東京 曲亭馬琴編次

第四卷 東路の雪の山

伊原二郎武章は、武泰が奴隸丁介に嚮導せられ、夜を日に繼いで相州底倉に到着し、兄太郎五武泰に對面す。そのとき武泰がいふやう、「われは鷹飼の事にこそ、些とばかりこそ、ろを得たれ、武泰なく文もなく、よろづ御身に及ばすといへども、木曾どのの蔭を蒙り、かく人なみに世を渡れど、御身はいと幸なく、瀬田の片ほとりに住むと聞けば、年來の艱難さこそと思ひやらるゝなれ。御身はいまだ知り給はじ、わが妻は五年以前に身まかりしが、われも今は小動の、五十にあまれど子はもたず、實にてあらんこそ、心やすからめと思ひつるに、いぬる月主君在陣のかへさ、攝津國より一人の婦を俱し給ひて、武泰が後の妻にとて賜びぬ。やよ蓮葉、わが弟の近江より來れるに、出でてあひ給ひね。と呼びたつれば、「阿」と應へつ、次の間の蒸襖を押しひらきて、蓮葉は花やかに化粧し、夫の後方に居ながら、武章に對ひていふやう、「わが身不思議の縁にて、太郎五どのにつれそひ侍るに

こそ、絶えて久しき同胞の、環會ひ給ふと聞けば、いと歡ばしく侍り」といふ。この蓮葉が神崎にありし時、西啓を留めて、「客あり」と僞りこしらへ、わりなく歸せし人は別人にあらず、武泰が土井木賀十郎光輔なり。光輔攝津國在陣のつれづれ、不圖蓮葉が許にかよひけるを、彼その老いたるを嫌ひて遂にあはず。光輔は齡も傾きて、ふかく色を好むにおらねど、彼が折にふれてほこりかなるを置り、影の金をもて蓮葉を請出し、故郷に將て歸るといへども、木賀が妻嫉妬みつよく、氣色はみて見ゆるに、世の聞えも影護くて、今さらにもてあまし、伊原太郎五に賜びて、彼が後妻とはせしなりのされば蓮葉は始終意地を立てとほして、光輔に強面ありしが、なほその人にも劣りたる、武泰に妻はされて、心ます／＼樂しまねど、野中の家の一しぐれ、しばし晴間をまつにこそ、つひには憂きを忘れ水の、久しくこゝにすむべきやはと思ひかへし、さあらぬさまに齊眉きけり。武章はわが兄の髪らいと暗みたるに、嬖はいと若くて、似あはしからぬ夫婦なり、やうあらんと思ひながら、明白には問ひかねて、ふかく心に怪しむのみ、禮儀を正しく挨拶す。蓮葉は原遊女の、うきたる中に人となれば、武章がや、四十に近くはあれど、齡よりもいと若く、物のいびざまへ風流びて、わが夫には遙かに立ちまされるを見て、密かに羨み、夫の言葉をまたきして、みづから酒食を拵掛し、只管すゝめ襲すれば、武章は却つて傍痛くぞおほえける。かくて次の日武泰は、衣服一襲をとり出して、弟が

身のまはりをよきにかい繕はし、主君の宿所に將てゆきて、縁山を聞えあぐれば、光輔呼び入れて對面す。そのとき武章は兄が後方に平伏し、「寔に君の導きによらば、兄弟再會の日もあらじ、今日のこと事みな君の賜なり」とまうすにぞ、光輔大いに歡びて、「汝たち兄弟は、山踏ある武士なり、いかでか牛を牽き馬を追ひて朽ち果つべき。今よりこゝに移り住み候へ。我は數ならぬ小名なりといへども、心のおよげん程は扶持すべし。」とて、懇切に聞ければ、兄弟はいよ／＼その恵みの淺からざるよしを謝して退出ける。かくて武章は、兄武素が家にあること五七日に及びて、當處の鎮守伊豆箱根の權現、三島明神へも參詣し、名所古蹟を歴覽するに、いぬる建武のころ新田左中將、この山にて合戦ありし事などを思ひ出して、頼りに懷舊の情に堪へず。今茲も暮れんとして、餘日いくかもあらぬに、妻の元江が病著いかにかあらん、子どもらもさぞな待つらめと思へば、歸心矢のごとくにて、既に發足のこゝろがまへは致せども、兄も嫂もあまりに信々しく管待すにぞ、猛に別れを告げがたくて、心ならずも逗留す。彼の太郎五武素は、心たらはぬものなれど、天性鷹を好みて、鷹養の所爲にくはしかりき。さるによつて鷹の癢つく事のあるときは、一種の草を摘みとりてこれを附くるに、忽ちに愈えたりけり。これ則ち花山院の御時に鷹飼晴頼が、薬師佛の靈告に感得したる名方なるを、武素不思議に是れを傳へて世にもらさず、又木賀光輔も、その性鷹を好むをもて、太郎五を扶持し、夥

鷹を飼はするに、妖鷹の術よのつねに勝れ、いぬる秋の追鳥狩などにも、獲究めて多かりしかば、光輔ふかく歡びて、雪の山と名づけたる、白斑の鷹を武泰にたびてけり。この鷹稀なる逸物なるに、武泰よく養丹らして、こゝろの隨に使はれしかば、主従の思ひをなし、寵愛いといや増しぬ。さて武泰は、弟を且く留めつるに、させる養鷹もせざれば、山田の鷹鳧なりとも、夥とり得て飽かせばやと思ひて、ある日の朝まだきに、彼の雪の山を拳に駕急て、丁介に犬を牽かし、健の方へとてゆきぬ。武章はこの日しばらく兄が歸るをまちたれど、あまりにつれぬなるに、わかき幾とさし向ひつゝ、居らんも影護ければ、猛に箱根權現へ詣でんとて、忙はしく立ち出で、やがて彼の神社に参り著き、近江なる子どもらが上に恙なく、妻の病著をおこたり果さしたまへとて、しばし丹誠を凝らし、遽に舊の山路を歸り來るに、常にだに定めなき、この山のたゝすまひに、今降寒の折なれば、みるゝ雪雲布き満ちて、雪霏々と降り出し、巖はあやしげに銀の虎を造りなし、沙は妙に時ならぬ花を開かし、玉露路徑を埋めて、野も山もみな注連の内かと見ゆるに、風又烈しければ、吹きとられじと笠を傾け、袖をかきあはして、辛うじて底倉に走り著きぬ。さる程に蓮葉は、水性のうつるにはやく、催初に武章を見てしより、日暮に思ひを焦し同胞にはありながら、わが夫と彼のひと、かくまで劣り勝りのするかな。わが身過世あしくして、わくつけ男と眠れるは、千里の名馬が齒櫛櫛を著けられたる

に異ならず。さらば彼の人をいつまでも留めおきて、密やかに相談はば、心をやらんぶすが、これに
ます事なからめと思ひて、信々しく款待せども、武章は禮儀を正しくして、打ちとけたる氣色を見せ
ねば、いひかけんやうもなく、いよ、思ひ惑ひしに、この日夫は家にしもあらねば、よき折なりと思
ひて、まづ身の辨ひをなすに、巳の刻を過ぐるまで、なほ化粧果てす。しかるに武章は、箱根権現へ
とて出でゆくを、いと本意なく思ひて、引きも留めまほしくはありしが、結びかゝりし密に、手を
放ちがたければ、わりなくもとゞめ得ず、いと遺憾しくて、やうやくに髪を結びをほり、今ははや
歸る比及ならんとて、爐に枝炭を影おこしつ、一壺の酒を煖め、彼の人退しと待つほどに、と見れば
門の雪間をわけて、袖も裳も眞白になりつ、笠さへ拭淨にかへり來るもの、是れ武章なりしかば、
蓮葉連忙しく出で迎へ、「あなや通路のさぞな寒けくおはしけん、けふは朝より天のけしきの雪を備し
たれば、裾にとゞめまるらせつれど、聴かすしてさる辛きめにはまひ給ふなれ。湯もわかして作り、
まづ足を洗ひ給ひね」と信だちて、背の雪を打ちはらひなどするを、武章はかたく辭退し、「わが兄は
未だ歸り給はずや、さらばその湯は残しおき給へかし」といふに、「いな湯はなほ多し、心くまなく遣
ひ給へ」とて、籠て鹽に汲み入れて、さし出すを押し戴きて、龜まわりたる手足をあたまめ、寝たる
裳を引きおろして、爐のほとりに座を占め、濡れたる衣を乾かすに、酒の香芬として、一壺の酒爐の

灰に埋けてあり。かくて蓮葉は折敷に鮭のすばやりをもちたるをもて來りて、武章にいふやう、「叔々折からの雪なるに、三杯をかたぶけて、寒さを凌ぎ給はんや」といふ。武章聞きて、「雪はます／＼深し、わが兄のさこそ難儀におはすべけれ。歸り給ふに程もあるまじきに、わが身ひとり安然として、争でか口腹を食ふべき、とゞめおきて兄に進らせ給ひね」と回答へて、ふた、び見返りもせざりしかば、蓮葉微笑みて、「さてものがたき人にはある、武泰どのは割籠も偏提も、丁介にもたし給へり。今ごろは道の次よき山寺などに入りて、飲みもたうべもして、心たのしくおはすべし。よしやる事なくとも、好む所爲には飯をも忘るゝものぞかし。さらばわが身まづ一杯をこゝろみて進らせなん」とて、只管に飲むほどに、諭やうやく櫻花の如くになりつ、しば／＼芙蓉の眼尾をかへして、武章を見るに、武章は面を背向にして聲をもなさず、蓮葉は既に酒氣を帯びて、慾火禁する事を得ず、身をすりよせつ、いふやう、「武泰どのは心たらはぬ人にて侍れば、傍輩にも蔑られ給ふを、日來口をししく思ひつるに、御身もろ共に木賀どのに住へ給はば、わらはが爲にもよき後備なり、叔々は内室の長き病著に臥し給ひぬと聞え給ふに、夫婦ひとつに眠り給ふ事もなくて、枕さみしくや坐しつらん、さばなかりつるや」といふに、武章は應へもせず、火箸をもて爐中の灰を掻きなどし、こゝろに十二分の怒氣ありといへども、兄の面に靨でて、その氣色を見せず。蓮葉また杯を舉げて、酒をなみ／＼と漉

へ二叔々いかなる事の心に稱はざるやらん、妾が好意をもて、勤め進らする杯を、手にだもとり給はざるは、禮儀なきにあらすや、近江にありて内室と酌み給ふほどにはあるまじけれど、まけてこの一杯を受け給へ。こはなほ過ぎたりと覺さば、半ばは減らしてん。」といひもあへず、六七分飲みかけたるをわりなくもさし著くれば、武草薙は忍ぶに堪へず、拳をあけて杯を唯一打ちに打ち落せば、酒は爐中にさと零れ、灰は眞白に飛び散つて、蓮葉が黒髪も梢の雪の如くなりぬ。そのとき武草薙は眼を睜り、辭をふり立て、「汝は原遊女の、媚びを獻じ色を賣り、人を誑したる俗眼もて、我を見誤へ、頼りに艶言をもて挑まんとすとも、われは犬白物の行ひをなすものにあらず。偷し再ねてみだりがはしき舉動をせば、妓とはいはせず。頼打ちゆがめて、息の根とむべきなり」と罵りつ、衝と立ちあがりて荒らかに、頃日わが臥す客房に入りぬ。浩かる所に太郎五武泰は、獲の髯を丁介が肩にかけ、犬を牽かし鷹を惹き、銀の針を掛けならべたる如き、菅蓑の袖拂ひもあへず、主従雪を踏みだきて歸り來るに、蓮葉はこれを見れども出でも迎へず、頼りに涙さしぐみて、唯ぶつ／＼と啼くを、武泰は打見やりて心あやしみ、蓑脱ぎ捨てて丁介に足を洗はし、白紙の鷹を遮りければ、丁介これを受けとつて、犬を牽きつ、背門の方へのきぬ。かくて武泰は爐の邊にひ、らぎ居て、龜まりたる手足を煖め、つらく見れば蓮葉が、いと恨みたる氣色なるを、何事とも思ひわかず、その故を問はんとす

る折しも、二郎二郎武章は、行装を整へて、客房より出で来り、「わが兄唯今歸り給へりや、この雪にてはさせる樂しみもなくおはしけん。さて某假初に逗留いたす事、はや八九日に及べば、近江に残せし子どもが事、亦長き病著に起居も自在ならぬ、妻が上もいと心もとなければ、此の度はまづ立ち歸りて、彼等にも安堵さし、春にもならば妻子を伴うて参り候べし」といふ。武泰聞きて、「妻子の事を思ふは理なれど、けふも申の剋になん／＼とす、殊さら雪のいたく降るを、猛に思ひ立ちて歸らんといふ事心得がたし、雪の霽る、をまちて、翌あさての頃に發足し給へかし」といふを、武章かさねて、「一日の懈りは十里の損あり、某妻子の事をおもへば、一日も千秋の如し、縦ひ暮るるに近しとも、今よりゆかばなほ四五里はやすく行くべし、まけて放ち遣り給へ」といふ。その氣色の思ひ定めたるに、武泰はふたゝび留めず、獲の鼻を指し示していふやう、「頃日させる響應もせざれば、せめて魚鳥の肉になりとも飽かせばやと思ひて、雪をおかしつゝ、この鳥を捉らして歸りしかど、かくまでいはばいかにせん、今茲は餘日もあらぬに、道すがら恙なく歸り著き給へよ。われは既に齢半白に及びて、子といふものもなし、姪の妙甥の太次吉も見まほしくごある。亦木賀どのも懇切に聞え給ふなれば、春は必ずこゝに移り住み給へ」といふに、武章謹みて、「わが爲に寒けきを厭はず、獵りくらして歸り給ふを、その響應に著かずして退らんは、實に罪ふかし。某今聞え奉るべき一

言あり、みづからこれを察し給へ。わが兄は心ごま正直におはせば、人もしかあらんと思ひ給ふなれど、夫婦の間なりとも、頼みがたきは世の人ごゝろなりかし。況いて婦人は永性なるものなれば家内の事といへども、打任してよき事あり、又あしき事あり、中人以下の家を治むるは國を治むるより容易からず、故いかにとなれば、禮節整はず威勢行はれざればなり。相構へて武章がふたゝび参るまでは、定まれる出仕の外、放鷹などにも出で給ふな、とかくに内の守を固くして、人の侮りか防ぎ給はん事、ねがはしく候一事、信だちて告げしかば、武秦うち點頭きて、「われかならず御身が諫めを用ゐて、翌よりは遊山殺生すべからず、阿、雪もをやみなきに、今一夜さ留まる事はなるまじきや、いよ、歸らんとならば、今夜の歌りまで、丁介を將てゆき候へ。」といふに、武章頭を掉りて、「彼も又人の子なり、けふは終日わが兄の具し給へるを、又煩はさんは心なきに似たり、はや退るべし」といひかけて、縁づらに立ち出で、忙はしげに草鞋の紐を結び、蓑の襟をかきあはしつゝ、笠を深くして出で去りけり。武秦はいと遺憾ければ、暫しそなたを目送りて、蓮葉に對ひ、「わが弟この雪の厭はずして、懼しく歸りたるには故こそあらめ、而より御身が腹立たしげなるは、何事ぞ」と問ひもあへぬに、蓮葉猶に聲を發して、よ、と泣きて鞭轉ぶにぞ、武秦は益々呆れ果て、「これ何故に泣くぞ、泣きては事のしらるべくもあらず、丁介がもれ聞かんも面ぶせならずや」といふに、蓮葉やうやく身

を起して、目を押拭ひ、「武章の畜生、己が行ひの邪なるを聞きて、女は水性なるものにて、夫婦の間も頼みがたし。」といひつるけにくさよ、御身は今朝より狩に出で給ひて、寒さも一しほなれば、歸り來まさんときに進らせんと思ひて、一壺の酒を温めおきつるに、彼放飲盡し、酔ひに乗じてわらばに調戯れ侍りき、そのみだりがほしき事いふべうもあらぬに堪へかねて、甚くいひ懲らん侍る折しも、彼御身が立ち歸り給ふを見て、周章きて逃げ隠れ、さすがに影護ければ、妻子の事心もとなし。「といひこしらへ、慌しく歸り去りたるなり。彼實に妻子の事を思はば、鏝に調戯れて、獸なす行ひはし侍らじ、御身が弟にはあれど、心態を比ぶれば、今降る雪と爐の縁におく炭の如しかかる後ぐらき事あれば、春に至りても彼のものふた、び來侍らじ、よしや面皮を厚くして來つるも、よせもつけ給ふべ。」とて、泣きつ口説きついきまきせはしく、誠しやかに告げしかば、武泰聞きて大いに驚き、半ばは信じ半ばは疑ひて、暫しものをもいはさりしが、忽地かや／＼とうち笑ひ、「わが弟はものの道理をわきまへたれば、さる不正事をやる人にあらねど、そは一時の酔興にてぞあるべき、かならず心にとめ給ふなよ。われも又聞かざる如くにてあるべきなり。」といふに、蓮葉ふた、び泣き流れて、「御身は何事にも心よわく在すなれば、弟にさへ蔑られたまへり。いかにしてかこの憤りを忘れん。」とて、なほくど／＼と罵るにぞ、武泰はいと苦々しくおほえて、さま／＼にいひ慰むる

程に、兩三日を経て蓮葉は、やゝ武章が事をいはずなりぬ。けに淫婦の夫を誑き、骨肉を破る事、刀
劍にも勝れり。わきてこの蓮葉がときは、攝津國にありしとき、西管を落して客を避くるの案山子
とし、今又武章に調戯れて、却つてこれを讒言す。婦人は才色十分ならずとも、心さま正しく柔順か
なるを最上とす。身は柳巷花街にありて、こゝろは無何有の郷に遊びし傀儡女さへあり。巻を開くの
兒女輩、こゝに至つてます／＼行ひを慎み、義りを身後に遺さじと思ふべき事肝要にこそ。

第五套 柞が枝の蓑蟲

こゝに又伊原二郎武章が子ども妙、太次吉は、囊に捕手の壯士に縛められて、母の横死を救ふ
事を得ず、亡骸を見かへりつゝ、涙と共に引かれゆきぬ、心の中推量られて哀れなり。かくて佐々木
家の執事職、山田信二郎詮通といふもの、氏頼の命を稟けて、件の兄弟を引き出さし、毎日に責の問
ふといへども、彼等いかでかその縁故をしるべき。然はあれ、もし父の往方を明白にいはば、追人忽
地に彼の地までも掛りて、いかなる憂きめにあひ給はんも量りがたし、只しらすといふにはしかじと
深念し、いかに問はるれども實事を告げず、「父は陸奥の方に由縁の者あれば、それを尋ねて下る」と
とて、假初に旅立ち侍りしが、審かにも聞えおかねば、里の名もその人の名もしり侍らず。縦ひ命
をめさるゝとも、しらざる事をいかにせん、只此のうへの御情には、速かに責め殺してたべ。母は死

して日數程ふれども、手としてこれを葬る事を得ず、父又寤柱に上つて、罪せらるゝ事あらば、顯身の世を貪りて、存命ふるともかひはなし。わが母もろともに、極樂淨土とやらんへ赴き、今の苦難を脱れ付らば、うれしかるべし」といふ。そのいふ毎にわろびれず、姉も弟も健氣にて、死を極めたる形勢なれば、誼通密かに感激して、且く狐屋に退かし、なほその言行を張ふに、彼等縁執の中にありといへども、禮讓を亂さず、弟は姉をゐやまひ、姉は弟をあはれみ、晝は終日夜は終夜、觀音菩薩の御名を唱へて、母の爲に菩提を弔ひ、又心中に祈念して、「わが父をいつまでも彼の地に居らし給へかし、父はかかる事をしらず、虚々と歸り來まざば、忽地に縛あられて、明賣の筈に命をかりなん、南無觀世音菩薩、大慈大悲を垂れ給へ」と一向に念願し、外にて聲品にうち相詰ふを、もれ聞きても耳を側て、倘しわが父の歸り來て、捕はれやし給ふとて、只戰々々々と、薄き米を踏むこと、ちし、おのれノ、が身の上は、露ばかりも念ひとせず、母を追慕し父を懇念し、袖は涙に絞りあへぬ、哀傷いふべくもあらざりけり。信二郎詮通は、彼等が舉止を熟視るに、孝順にして半點も疑ふべき事なし。爰に事の起りを考ふれば、二郎二郎夫婦のもの、牛を杜騙るなどの癖者ならば、子を教ふる事、に及ばんや、その子の伶俐しきを見て、父母の賢良なるを推量らる、我もしこれを救はずば、天神ともに怒つて、國に禍を降すべし。しかなりくとひとり點頭き、馳て縁由を國司氏頼に聞え

あけ、一某頃日二郎二郎が子どもを甚く責め、厳しく問ひ候ひしに、彼等實に父の往方をしらす、且その父が罪さへ疑はしきに、その子まづ落命せば、痛ましき事にこそ、加之彼の兄弟が孝順なる事、如此々々なり、悪按をもて判断する時は、物右衛門が牛を杜騙りしは、悪僧が一己の所爲にて、二郎二郎は贓物なりともしらず、これを買うて禍にあへるなるべし。故いかにとなれば、その父賊をなす程にて、子を教ふる事はようせじ。あはれ彼の兄弟を放ちかへして、母の葬りをとり營まし、その孝心を果さし給へかし。」と申せしかば、氏頼聞きて、「けに汝が申すところの如くならば、不便の事なり、さらばそのもの共を赦して家に歸らせよ。されど二郎二郎は赦しがたし、今にもあれ立ち歸りぬとしらば、速かに捕め捕つて縁故を鞠問せよ。彼牛を竊むにあらすとも、買ひたるものに問ふにあらすば、悪僧が往方をしりがたからん、必ずしも忽せになせ」と仰すれば、詮通唯々として退き出で、妙、太次吉を呼び出して、國司の仁惠を説きしらし、直に瀬田へかへし遣はし、牛かばその主にとらせけり。さる程に妙、太次吉は、圖らすも縛めとけて、夢路をたどる心持しつ、その日の薄暮に、我が家に走り歸りて見れば、門は大きやかなる釘もて鎖されたるが、いとゞさへ頼れ頼きたる草屋の、この二十日あまり人も住まらずなりにければ、雨雪に壁さへ落ちて、齧り入らんも自在たり。淺ましと見る程に兄弟まづ涙のみはふり落ちて、暫し立在みたるが、「母御の亡骸はいかに坐すらん、近

鄰の人を驚かして、死恥をかかし奉らんは、便なき所行なり、密かに門の戸を毀じて見ん」とて同胞力をあはしつゝ、引き放さんとするに、固く打ち付けたれば、かひなき力には及ぶべくもあらず、一さらば彼處より潛り入らんには、とて、諸共に壁の頰れより入りければ、内には鼠の糞のみ堆高く、近曾の喪嵐に、屋棟も半ばは吹きとられ、折しも夕月の影隈なく漏りて、白晝の如くなるに、と見ればあな無意や、元江はいぬる日、打ちすゑられたる儘、仰けさまに付れてあり。今嚴寒の時節なるに、屋棟の頰れより降り入れたる雪霜に、亡骸をとごられて、思ひの外に腐爛れはせねど、盜賊の所爲とおぼしくて、些とばかりの調度はさらなり、なき人の衣服さへ剃ぎとりて、赤裸にしたるを、饑ゑたる犬の銜みや去りけん、壯臂のあたりを、した、かに喰ひとりて、白き骨をあらはし、大腸なかく引いて、赤子の胸衣といふものめきたり。これを見る兄弟は、忽地目も眩れ神銷え、よゝと泣きつゝ、亡骸の、右と左にとり著きて、共に死ぬべく歎きしが、妙はさながらに年も勝りて、かかるときにも狼狽へず、はふり落つる涙の間に、上なる蔽衣を脱ぎて母の屍にうち被せ、弟を見かへりていふやう、いかなれば吾儕は、かくまでに過世あしくて、母御非命に死し給ふのみならず、その葬りだになすことかなはで、衣服を剥がれ軀を傷られ、三七日ははやたてど、只一本の花も手向けず、尊き聖僧の引接にて、追善佛事を営むすら、四十九日がその間は、魂囘申有にありとさく。況んや呵責の笞

にて、はかなく世を去り給ひしかば、いふべき事も聞え給はず、今般の心くるしさも、思ひやられて
痛ましや、死してはかへらぬものなりとも、只一言は幻にも、ものいうてたゞ母御なう。妙にて侍
り太次吉も、御傍にさむらふぞ。親子は一世ときくものを、此のまゝ別れ進らする、本意なきを憐
れとは、神も佛も見給はずや。わが爲には月も日も、照らし給はぬ世なりせば、この身も共に責め殺
し、獄屋の鬼とはなしもせで、かかる憂きを見よとてか、歸せし人の恨めしとて、口説きては泣き
泣きては口説く、外にはしらぬ袖の雨に、入相の鐘おとづれて、いとゞ無常を告げわたれば、弟もお
なじ思ひにて、一やよ姉御あまりにいたく悲しみて、病み頼ひ給ふなよ。御身に不慮の事あらば、わが
身は何となり侍らん。筆さま家に居給はば、心づよくもあるべきに、旅にある親をまつは、世の子ご
ころに侍れども、吾門は引きかへて、かかる時にも、爹様を、立ち歸らして給はるな。』とて神や佛に
掌を合はし、祈念を凝らすは何事ぞ。曩に旅だち給ひし日を、これ今生の別れとは、爹々も家々もし
り給はじ。いつくまでも在すると、思ふものから二親に、孝行らしき仕へもせず、悔いてかへらぬ
事ながら、折ふしは母御の心に、忝りし事もありつらん、許させ給へ南無阿彌陀、南無阿彌陀佛。』と
唱へつゝ、髪も果てたる亡き母の、額の髪を撫であけて、兄弟面をうち見あはし、又濟々と泣きに
けり。かくてあるべきにあらねば、妙はやうやくに志を勵まして弟を諫め、浅ましき亡骸を、人に

見せんは靴のうへの辱なり。夜のうちにともかくもして、かくさばやと思ふなり、涙をとめて用意し給ひてよ。」といふに、太次吉はこゝろを得て、もろ共に立ちあがりしが、棺を買はれたつきなれば、偷兒がとり残せし、ふりたる四斗桶に荒索を掛けて、母の屍を担き納め、體て枋をきし通し、兄弟後方先方になりて、既に擽け出さんとするに、姉は年十五歳、弟は二つ劣りにて、かよわき少年の、いとゞ哀傷に力なく、いく度か押し縮められ、姉が轉べば弟も跌き、又打き出でてはよめきよろめき、歩み悩みて息を吹き、挽けき肩を休めつゝ、月は甲夜よりありけれど、涙に道も見えわかず、されど孝子の一念にて、足は躓へ身は衰るれども、これを厭はず家を出で、里を離れ十四五丁あなたなる、丘の麓に昇きもてゆき、さて葬り果てんとするに、鋤も鐵もあらざれば、いかにせんとてためたひしが、この秋の霖雨に、崩えたりとおほしくて、大きやかなる杵の根の、洞のごとくにならたるあり。是れ究竟なめり。とて、やがてその穴に担き下し、兄弟互に土を運び、辛うじて埋め果て、横の小枝を手折り來て、墳の左右にこれを立てて、同胞堂をうち合はし、涙を手向けの水にして、諸共に申すやう。わが母は生涯慈悲をもつほらとして、假にもあしき行ひをなし給はねど、一日も安き思ひをせで、剩へ非命に果て給ふこと、過世の悪業ならば軟くに由なし、草葉のかけとやらんにて、参々の事を心うくおほすべきが、妙、太次吉等が命にかへても、参々を救ひ進らすべし。

ねがはくは煩惱の絆を斷ちて、忽ち佛果を得給へかし。南無西方極樂阿彌陀佛、大慈大悲の觀世音安養世界に導き給へ、南無彌勒尊生菩提」と廻向しつゝ、退かんとするときに心數みてやがつくりと、妹を太次吉が、慌忙きて抱き起し、「心持はいかにおはする」と、問はれて顔をうち寄り、「妹なればこそ弟なればこそ、甲夜より御身が毎事に勤りて給はるを、そのたび／＼にいひはせぬ、心で稱めて居たりしぞや。日來親しき友どもも、遠通りして見ぬ恋する、人の落ちあはかくまでに、形なきものならんとは、今ぞわが身に思ひしる、もつべきものは弟なり。既に母御の亡骸は葬りつゝ、なほ心にかゝれるは、爹々のうへなり。かくともしらず歸り來て、忽ち病められ、又も非命に死し給はば、今の悲しみに彌まして、とやあらんかくやあらんと、先繰りかぜらるゝ程、活きたるこゝらあらぬなり。所詮牛を竊みたるものはこの妙にて、父のしれる事ならずと遺書し、母御と共に輪廻の土ともならば世の人の、言の葉するにかかる身と、爹々にもまれ聞えなば、この里へは立ち歸らで、職を逃げ給ふべし。又御身は生残りて、箱根とやらんへ尋ねゆき、緣由を告げ申し、爹々に孝行し給へよ。賢きものぞ聞きわけしか、やよ／＼」といひこしらへ、後向かしてしどけなき、帯を結ばんとすれば太次吉は、見かへりつゝ、走り退き、「こは心も得ぬ事を宜ふかな。身を殺して親を救ふ、そのたばかりは、譯ふれど、御身は女子の事にしあれば、縦ひ牛を盗みしと、書き遣し給ふとも、誰か實

事と聞き侍らん。殊さらに箱根とかいふ由は、こゝより路も百里に餘りて、二條三條に別れたる、捷徑ありと聞くものを、わが身彼處まで行き普かず、父先づ歸り給はんにも、もし途にて行きあはずば、徒事となり侍らん。かかれば牛を盗みしは、太次吉なりと書き遣し、わが身縊れて死に侍らん。姉御こそ生残り、はる／＼箱根へ到らんより、國の堺に待ちつけて、参々の歸り給ふに逢ひ、何處へなりとも立ち退きて、母御の菩提わがなき邊、弔うてたべ。」といひ果てて、帶引き解き柞樹の、枝へさりと投げかくれば、妙は瞞てて抱き留め、「御身を殺す程ならば、かかる事をいひはせじ。共に親子にはあれど、女子は萬いひがひなくて、物の用には立ちかぬる、此の身はたえて惜しむに足らず、とかくにわが身を殺してたべ。」いなられこそ縊れ侍らめ。」とて、果ては互に諫めかね、とも音に泣きて聲を惜します。かくて太次吉は志を勵ましつ、恨める氣色にていへりけるは、「生残れと宣はするを、あしう聞き侍るにあらねど、太次吉は年も劣れば、親の爲に死ぬる事を、ようせまじと思ひ給ふか。そは情あるに似て、情なく侍り。」といふ、言葉に信は現はれて、妙はます／＼胸苦しく、「活きよといふも死なんといふも、みな是れ父の爲なれど、かくのみいひて時を移し、今にも参々の捕はれ給はば、後悔するとかかひなし。御身しかいふ上は、力及ばず兄弟諸共に死なんには、後の恨もなかるべし。」とはいへ参々さまこの事を、傳へ聞き給ひなば、さこそ本意なく思すらめ。死するは不

孝としりながら、死なでは親を救ふに由なし。三千世界にありとある、懶き人も同胞が、今の歎きにはよも過ぎじ。」うきは歎くまじ歎き給ふな、今を限りのこの身には、後世こそいと大事なれ。また甲夜なるに人や見ん、とくく。」といふに太次吉は、塊をとつて杵の背に、縁由を書き寫し、年號月日のその下に、伊原二郎二郎がむすめ妙、兒子太次吉と書きをすれば、妙も下括りの紐をときて、杵の枝に投げ掛け、兄弟西に打向ひて、元來賊をなさざる事は、御佛こそしろしめさるべけれど、まごまご盗賊の汗名を遺して、父母を恥かしめ侍らん事、いと悲しくは侍れど、前世の悪業ならば、それも術なし。只ねがはしきは、父が此度の禍を脱さして、久後悪なからん事を、母の菩提はいふも更なり、ひとつ蓮花へ導き給へ」とて、なほ且く念をれば、夜はやうやくに更闇けて、山風のいと寒けきに、鳩の淵づら浪たかし。これや三途の渡かと、思へば見れば今さらに、覺悟究めし身も冷めて、姉は弟を勵ましつ、弟は姉を勵まして、程よき石に足を邁て、枝なる紐に携ひつ、兄弟しづかに聲をあはし、念佛十遍ばかり唱へもはてず、既にかうよと見えたる處に、雄手の木陰より、野袴したる武士一人、するくと走り出で、「やよ待てしよし」と抱き留むるに、又一人の旅客、これも嚮より露手の木の間に、事の容子を窺聞きし、吐嗟走り出でんとせしが、我より先に彼處の武士、兄弟の死をとめしかば、なほその故をしらんとて、出でもやらす窺ひ居たり。そのとき件の武士は、妙と

太次吉に對ひて、「われは日頃館の仰せを棄けて、汝等を鞠問せし山田信二郎詮通なるが、いまだ見忘
れはすべからず。われ汝等が純孝をしる故に、館に聞えあけて、放ちかへすといへども、なほ心もと
なき所あれば、従者をも俱せずして、密かにその後を跟け來り、首尾を竊聞きして、不覺に袖を濡
らせしが、既に母の亡骸を葬り果て、更に父を救はんとして、同胞互に死を究め「活きよ。」「死なん。」
といひ争ふ健氣さ、實に蓋世の孝子なり。われ當國の執事として、而もこの件の事に管り、是非を決
斷するに當つて、斯かる孝子を殺しなば、われのみならず館の御馳辱なるべし。汝等かならずしも死
すべからず、よきに扶助を得させん」といふに、兄弟は見はてぬ夢のこゝちして、しばし顔うち瞻ら
れ、「しからは父を助け給はるか」と、いひも果てぬに旅客、木陰より立ち出でて、詮通がほとりにつ
い居るを、妙、太次吉は月光にすかし見て、そは參々にておほせしと、いふにいはれぬ歡しさも、後
の難儀に思ひくらべて、涙にものをいはせたり。さて旅客は前よりたもちかねたりし、涙をしば／＼
押し拭ひつゝ、詮通に對ひ、「某はこれなる者どもが父にて、伊原二郎武章と呼ぼる、者なり。
久しく村落に零落れて、親族東西に離散せしが、兄武泰といふもの、相模の木賀光輔に住ふる由、告
げ來したるによつて、いぬる月彼處に赴き、や、歸り來るに、今朝もしれる人の伊勢國へゆくにあ
うて、わが身一室枉に係り、妻の元江は横死して、二人の子供は獄屋に繋がれし」と傳へ聞き、飛

ぶが如くに走せ歸り、計らずも今爰にて、妙、太次吉が父を救はん爲に、繼れんとする時に來蒐り、不覺の落涙に、はしなくも出でやらず、しばし事の爲體を張ひしが、彼等忽ちその死に赴くを見て、ますく驚き引きとゞめんとするときに、貴邊いちはやく彼等を救ひ給ふに安堵で、まづ外ながら姓名をしらまほしさに躊躇しつ。恩惠感謝に堪へずして、少く名告り申すなり。原來彼の牛はこといはんとするを、誑通咳してこれを聞かず、外々しく見かへりて、旅客よく聞かれよ、彼の二郎二郎とやらん、昔は由縁ある武士にもせよ、今は當國の窮民なるに、其許の形容を見れば、兩刀を跨り、廣き近江にはおなじ姓、おなじ名の人なき事はあらじ。國司の仰せによつて、わが索ぬる二郎二郎ならば、名告りては出づべからず。彼牛を盜むにあらざとも、その原をたゞさすしてこれを買ひとり、利へ賣りたる上の往方定かならねば、いかにいひとくとも脱れがたし。もし明白に罪なき由を聞えあけんとならば、牛を杜觸りたる惡僧を索ね出し、面のあたり決斷せば、身の惡善をいはすして、事おのづから分明なるべし。かばかりの事を思ひわきまへず、親子の恩愛に感湧し、狼狽へて名告り出づるおももちすとも、誰か實の二郎二郎なりと思ふべき。いはぬはいふに勝るといふ、世の常言もあるものを、よしなき人を憐みて、連係せられ後悔あるな。されば古歌にも、

山吹の花色ごうもぬしやたれとへどこたへもくちなしにして

知らぬは知らでいはぬにしかず、我も又聞く事なし。こや妙よ、太次吉よ、父が往方はしれずとも、汝等に罪はなしと、既に御赦しを稟けながら、國司の仁恵を仇にして、死なんと思ふは惑ひなり。牛を盗み妻を殺す、鬼の子なりといはるゝとも、父とは鳴きそ冀蟲の、身の善悪ははるゝ日あり。こゝろ得たるか」と諭されて、親子一度に、「噫」と應へ、感涙とゞめかねたりける。かくて詮通は妙、太次吉が手を引いて、わりなく伴ひたち歸れば、遺憾しげに同胞が、見かへる足もしどろなり。目送る父も茫然と、木隠るゝまで立在みしが、頻りに詮通が好意と、子どもらが孝心を感激して、しばし元江が墳に廻向し、忽地身を起しつゝ、太やかなる息を吹き、「山田氏の庇みによつて、子どもらが事は心易しといへども、身の濡衣はいまだ乾かず、妻の仇身の仇は、牛を賣りたる悪僧なり。義に假初に面をあはして、その名はしらせれども、素ね出さでやは」とひとりごち、しのび／＼に彼此を徘徊して、さまざまに心を盡せしかど、絶えて悪僧の往方をしらす、一寸鏡しばしは曇る身の憂きに、家を失ひて生活にたつきなく、定めちやらぬ放蕩に年も暮れて、春も三月の中旬になりしかば、盤龍も既に塌きていかにとも備なし。かくては仇を素ねん事もこゝろに任せず、一度底倉に起きて、兄武泰に縁由を告げしらし、談合せばやとて、遂に東海道を下りけるとぞ。嗚呼彼の妙、太次吉が至孝なる、父が寛科によつて、兄弟縁組の中にありといへども、父の往方を告げずして、そのこゝろおのづか

ら直く、終に解けて母を祭り、なほ父を救はんとて、死を求めて生を得たり。されば詮通模陵の手段あつて、是非を察すること明鏡の如く、その子を救ひてその父を縛めず、是れ併しながら天、孝子の至誠を憐み給ふにあらざるや。世の黄童この條に眼を著けて、善を獎まし惡を退くるよすがともなる事あらば、作者の幸ひ甚しからんかし。

雲妙閒雨夜月卷之二 終

雲妙間雨夜月卷之三

東都 曲亭馬琴編次

第六套 深山路の枝折

西啓法師は、五慾の火坑に墮落して、いぬるころ近江路にて、物右衛門が牛を杜騙りとり、潛かに大津の市に牽きゆきて路銀に宛てて、遂に鎌倉を投してはしりけり。元より急がぬ旅なれば、東海道にて冬も半ばをすぐし、ある日箱根山を越ゆるとて、底倉よりは東のかた、十町ばかり籠なる山寺に立ちやすらひて、彼此の風景を眺むるに、境内究めて廣からずといへども、由緒ある精舎かとおぼしくて、本堂には無名寺の二字を大書したる額を打ち、いぬる正慶二年夏五月、義貞朝臣鎌倉を攻め給ひし時、彼の地に於て討死したる大館宗氏以下の墳墓あり。又建武二年十一月下旬、箱根竹の下兩處の合戦に討死せし、官軍宗徒の兵士等が墳墓ありけり。院内寂寥として、人ありとも見えざれば、聽て走り出つるときに、門前にて樵夫の山より歸るにあへり。そのとき西啓彼の樵夫を呼びとゞめ、「この無名寺とやらんは、名だたる徒の墳墓もあるを、などてかく物ごみしけなる。そも何れの時に、

何人の建立したる、いまは住持もなきにや」と問ふに、樵夫答へて、「彼の道場は、何人の建立したるといふにもあらず、開基の老僧は、もと新田の家臣、船田何がしが子なる故に、主君の一族、伊豆相模にて討死し給へるをば、墳墓を築きて其の菩提を弔ふに、始めの程はさ、やかなる庵室なりしが、彼の僧經濟にかしこくて、節儉を常とし、年を経て堂宇全く成就したるに、いく程もなく件の住持は六十餘歳にして、近曾遺化し給ひぬ、しかるに平生吝嗇ふか、むける故にや、臨終二日に至つて、往生を得遂せず、その死にぞまいと淺ましかりき。さる程に年來檀越の布施なども、錢も散らさずして、貯へたりと見ゆるものから、その足をとらんとて人によ貸しけん、又賊難をおそれて、土中に埋めたれけん、歿後にこれを穿鑿すれば一物もなし。さて弟子の弱僧後住となりしが、夜は何となく物の凄まじくてもねられず、よりに同宿の所化、小僧、斬義意までも居らすなりし程に、遂に先住の寗魂夜なく、現はれ、「わが物返せ」とて、理住の弱僧を責めしかば、彼の僧怕れて逐電しつ。その後檀越の徒、さまざまに談合して、後住を定めんとするに、然るべき老和尚は貧地を厭ひて來らず、又物にもあらぬ弱僧は、いたくおそれてうけ引かず。この故に可惜道場の忽地無住になりて候。おのれは無名寺の檀那にもあらず、家も遙かに遠ければ、彼の寺の事にか、づらふ身にあらねど、風聲近郷にかくれなく、いと苦々しくおほえ候」と、田舎人の心ゆるやかにて、問はぬ事まで長々し

く物がたれば、西啓聞きて、「けにかかる事もありません。十戒五通の老法師も、最後の妄想によつて、宿覺を喪ふ事あり、憐むべし／＼。」と回答へつ、鉦うち鳴らし廻向する間に、樵夫はやがてわかれ去りぬ。かくて西啓は、東の山路をのくこと又十餘町にして、はや日も暮れなんとす。さても此の頃の日の短さ、此のわたりには宿かる家もなし。よしや夜はふくるとも、大磯小磯までもとて、なかなかにいそぎもやらず、とかくして山を下り、袖敷が浦曲を過るとき、夜はすでに更闇けて、磯うつあら浪千鳥の聲、いと寒さも身に入みて、さやけき月に送らる、折しもあれ磯剛松の木陰より、おどろ／＼しき大男つと走り出で、西啓が胸さかを無手と奪り、笠の内をさし覗きつ、いふやう、「打ちつきたる幸なき、いく夜か浦風に吹きすさまれて立ちあかしつるに、たえて一人の旅客にあはず。たま／＼羅に係れる者は、巻りばえなき佛法鳥なり。遮莫その蔽襪剝ぎとりて、一杯の酒に換へなん。いたくな怕れそ。」といひも果てず、雄手の拳を握り固めて、打ち仕事んとふり揚ぐれば、西啓は騒ぎたる氣色もなく、もつたる錫杖とりなほして、荒男が向膺を、丁と拂へば横さまに、撲地と顛ぶを踏み躪えて、見むきもやらずのかんとす。滑かる處に、頭は毛毬の如く、衣は海松の如くなる賊僧、忽然と走り來つ、「禿驢逃ぐるると脱すべきか。」と呼びかけて、朴刀引きぬき斬らんとするを、西啓佔と見かへりて、秘密の印相を結びかくるに、彼の賊忽地筋骨疎縮みて、立つたるまゝに動き得

す、只目を睨り口を開き、いとッせん衝なげなれば、始め打ち倒されたる荒男、この形勢を見てますます驚き、やうやくに起きかへりて、砂に手を著き額を理め、「神僧ねがはくは怒りをきめて、吾が儂を放し給へ。よしや彌勒の世にはあふとも、再びこのわたりにて、旅客を惱まし候はじ、惱まし候はじ。」と勸解びしかば、西啓見かへりて冷睨ひ、「汝等などはじめの猛威には似ず、この禿驢を畏るゝぞ。いで打て、いで切れ。」といふに、賊はます／＼額づきて、歸伏氣色にあらはれたり。西啓かさねて、「汝等引剝をいたしながら、物もてるも物もたぬも、見わき得ざるこそ鈍ましけれ。われは是れ雲水飛錫の拳門なり、縦ひ身の皮は剝がるとも、とらすべき物なし。そも汝等が面魂、物の用にまたつべく見えながら、いかなれば此の浦の白波とは身をなしたる。まづその名を告れ。」といへば、荒男頭を掻き、「かく歸降し奉れば、何にまれ宜はする事は違背かじ。冀はくは彼の男が、筋骨の固やかになりたるを放べ給へ」といふを、西啓聞きもあへず、呵々とうち笑ひ、「われ這奴が事を忘れたり、さらば免すべし。われとともに來よかし。」といひかけて、二三十歩あなたなる、松の根に尻をかけたなり。そのとき件の賊が手足、舊の如くになりしかば、是彼呆れて顔うち見あはし、二人もろともに西啓がほとりに來つて、左右に蹲踞し、きていふやう、「吾が儂は越の國たて山の麓に生まれ、おなじ郷に生ひ育ち、父母はわが稚きより、寺にのほして手ならはせ、物よましなどせしが、露

ばかりも做ひ覺えず、父母世を去りて後は、いよ、身の行ひを放にして、親族にも疎まれ、諸國を流浪して、近曾この相模路に漂泊し、縁の森に立ちかくれて、引剝とはなりたるなり。然れども柝を得ざりしに、底倉なる無名寺といふ山寺の住持、年來客嵩ふかくして、死にざまあしかりしかば、同宿の生道心等、彼の亡魂の迷ひ出でんかとして、害怕れて居らすなりし山を傳へ聞き、吾が儕竊かに示しあはし、ある夜件の寺に潛びよりて、先住の冤魂に打撈ち、只ひとりとり残されたる、後住の青道心を威せし程に、彼いたく駭き怕れて、往方もしらす逐電し、忽地無住の廢寺となりぬ。よりて吾が儕、彼の寺を柝とし、夜は彼此を徘徊して、旅客を劫す。僕は名を黒映の雲介と呼ばれ、彼は白映の雲厝と名告り候。抑神僧は何れの靈場より來給ひたる、法諱は何と稱へ給ふやら、と眞實だちて問へば、西啓茫然とうち啖みて、「わが俗姓は雨田氏にて、近江國武佐の山里に生まれ、はやく父母を喪ふが故に、祝髮して攝津國に成長り、一度靈山の雲を仰ぎて、法名西啓と呼ばれしが、嘗て寂滅の教へを甘んぜず、密かに孝謙の寵遇を羨み、且く流水に身をまかして人間に遊ばんとす。しかるにけふはからずも、底倉をよぎるとて、無名寺の爲體を、樵夫が物がたりしたりしが、外事のやうに聞きつるに、さては先住の冤魂は、汝等が計策にてありけるか。伎倆少しくその趣を得たるに似たれども、その謀なほ拙し。世を憚り逆を埋め、無住の山寺に躲れたりとも、別にしいだした

る事なくば、何の樂しみかあらん。われ今事の顛末を聞きて、更に奇計をめぐらし、輒く里人を賺しこしらへて、彼の寺の住持とならん事は、聖あさての内にあり、汝等しほし彼所を立ちほなれ、われ彼の寺に住持すと聞かば、頭を圓らかにして旅僧に打扮ち、西啓法師が徒弟なり。」と稱へて、無名寺に尋ね來よ。しからば酒に富み肉に飽き、かく浦風に吹きすまされて、命を的なる世を渡るには、杳かにまさりなん。」と説き示せば、白映黒映大いに歡び、「もし斯くの如くならば、僥倖これにまさ事なし。師父既に吾が儕を愛し給ふこと子のごとくなるに、いかでか父母の思ひをなして、隨從せざるべき、ともかくもよきに計策を給へ。聖より且く彼の寺に、立ちも寄り候はじ。」と應へければ、西啓うち點頭きて、「汝等明白に彼の寺へ尋ね來る日、龜忽の舉動して、里人に曉得られな、よく諳んじて如此々々にまうせ、われ又箇様々々にいふべし。」とて、なほその事を説き知らすれば、兩賊ます／＼笑坪に入り、肝膽を傾けてこれを聞き、互に再會を契るほどに、思ひの外時もうつりて、曉方近くなりしかば、西啓やをら立ちあがりて、浦曲遙かに別れ去れば、白映黒映は、舊の松陰に立ち驟れて往かもしれずなりにけり。嗚呼彼の兇僧、原何等の惡星ぞ、心虎狼にして今亦その翼を得たり、奸計愚民を詭くに足るとも、天羅終に漏らす事なけん。只憎みても憎むべきは、梟獍たるこの外道なり。是れはさておき無名寺の理住は、前の院主の弟子にて、年も弱く才學も、無下に拙き生道心にはありし

かど、山寺の事なれば、檀越もゆるして法筵を嗣がしたるに、白映黒映にはかられて、先住の幽魂、なほこの寺に愛惜すと思ひ惑ひ、頼りにその祟りを怕れて、人にもしらせず行装しつ、何地ともなく逃げ去りしかば、檀越の良賤このことを歎き、後住を居ゑんとて、もつばらその人を索ぬるに、抖擻行脚の老僧までも、事の容子に聞怕ぢして、われ住持せんといふものなく、遂に無住の空院となりて、狐狸その栖を得たりけり。さるほどに西啓は、白映黒映に別れて、次の日ふたゝび底倉の山家を募化し、その夕ぐれに、無名寺のほとりなる、草舎に宿を投めしかば、あるじの夫婦、信やかに款待して、夕餐をすゝめ、四表八表の物がたりの序にいへりけるは、「師父はなほ弱く見え給ふに、名利を捐てて雲水に伴はれ給ふこと、いと尊く覺え候、何れの靈地より出で給ひし。東國の人とは見え給はぬものを、苦しからずば結縁の爲に、名告り給へかし」といふ。西啓聞きて、「愚僧は津の國なる何がしの院の徒弟なり、故あつて近曾彼處を辭し去り、諸國を修行して、普く衆生を濟度せんと思ふのみ。されば露に宿り風に喰らひ、身は野晒しの旅に死なんと願ふ身なれば、名告らんも嗚呼がまし。かくてぞなか／＼に、觀念を勸むるなかだちは多けれ。」と、いと殊勝めかして回答へするにぞ、夫婦はます／＼感激し、「師父固より衆生濟度の志、ふかくましまさば、暫しこの里に止まりて、しふねき人の家魂を鎮め、すたれし寺を興し給はんや、しからばその功德莫大ならん。」といふ。西啓聞きて、

心の中濟かに歡び、なほしらず貌して膝をすゝめ、「いはるゝところ如何なる故ぞ、まづ審かに物がたり給へ」といへば、主人かきねて、「こゝに來給ふ時に見給ひつらん、わが家の西のかたに、少し引き入れたる竝松の隙より見ゆる大門は、無名寺といふ道場なり。開基の僧、年來香齋み深かりしが、遷化の後さまぐの怪異あり。よりにて後の院主をはじめ、みなおそれて逐電し、久しく無住になりて候へば、檀那講中さまぐに謀合して、彼に相語ひ是れを誘へども、その祟りあらんかと詰みて、絶えて漸めに應ずる人なし。師父もし彼の靈魂を得覽せしめ、且く彼所に住持し給はば、一郷の幸福なれり。いかに諾ひ給はんや」といふに、西啓答へて、「夫れ難航は渡さざる衆生もなく、慈悲は掩はざる邦國もなし、苦を抜き樂しみを興ふるは佛の慈悲なり。靈魂得觀の事は仔細なし、入院の事は只今議すべからず。われ今夜彼處に止宿して、その爲體を試みんと思ふに、嚮導し給へ」といひかけて、はや行囊を背負ひ、錫杖を引提けつゝ、出でんとすれば、主人大いに歡びて、猛に松明を振り照らし、先に立ちて誘引ひゆくに、それが妻はなほ心もとなけれど、さりとちと思ひかへして、片折戸のほとりまで送り出で、「わが夫、とくのきてとく歸り給へ、かならずしも虚だのみして、虚々と夜を深し、例の冷き堂にて、項をな拵でられ給ひせ」といふ聲も、山川の音のかしがましきに隔てられて、初更の鐘のみ幽に聞ゆ。かくて西啓は、あるじに嚮導せられて、無名寺に到り、松明をあけさして彼此

を見るに、板縁には獸の蹄を印し、裏には鼠の糞の堆高く、雨垂に壁の張著け剥けて、蚯蚓の涎を引き、本尊の脚に蜘蛛の綱をかけたして、奇しき白光を操り、護摩壇の灰は狸の尿に濕りて、臭氣鼻を掩ふに堪へたり。そのとき件の男は、よせかけたる席薦に四疊を座の中央に敷きならべ、西啓を安坐さしていふやう、「おのれははや退るなり、冥はつとめてまゐり訪ひ奉るべし。もし寒ければ、何にまれ打ち折りて燈火し給へ。」とて、よろづ丁寧に聞えおきて歸りしが、その夜は妻と共に、西啓が事をいひもて出でて、明くるともなく夜を明し、横雲のや、引き渡す頃、近郷き徒を起して前夜の事を告ぐるに、随もあり頼もしく思ふもありて、みな諸共に彼の男を先にたらし、無名寺にのきて見れば、西啓は甲夜のままに端坐して、異なる氣色なれば、件の男、「さればこそ。」とて進み對ひ、「近郷き里人等、みな心もとなく思ひて参れり、いかに怪しき事もなく候ひしか。」と問へば、西啓衆人をちかく招き、かの男を見かへりていふやう、「世の風聞そら言にはあらず、前夜前住の冤魂、面のあたりあらはれて、其の冤苦を告げ、頼りに濟度を求めしかば、われ法を説き寂を示し、且金剛經一卷を讀みて引接せり、今ははや得脱疑ひなし。それに就いて問ふべき事あり、檀越の輩はさならなり、年來この寺に疎からざりしものをば、悉くよび集合へ候へ。」と、誠しやかに聞えしらすれば、衆人渴仰隨喜の涙をかきはらひつゝ、數回西啓を禮拜し、「寔にこの師父は活佛におはせばこそ、

さしもしふねき寤魂の、頼に成佛はしたるらめ。何がし男は、早飯の用意して進らせよ、彼がしは五
七人の壯俊と共に、講中にふれしらせよ。」とて、おの／＼その手わけをいたし、僅かに二三人を残し
おきて、西啓に陪従さし、その他の者どもは、忙はし淨に走り去りしが、極折敷に至るまで、心を用
ゐたりと見ゆる家具を、一人さし擔ひ来て、飯を盛り、羹を添へて、これを西啓にすゝめ、いと丁寧
に饗しけり。さる程に彼此の里人等、悉く無名寺に羣參して、所せきまで居ならぶを、西啓信と見
まはして、「今こゝに来れるもの、誰か先住の金をあづかり、その入寂を幸ひに、知らず顔していひも
出でざる。明白にしらし候へ。」といふに、絶えて答ふるものなし。西啓又聲を高うし、「われ前夜先住
の寤魂と問答して、よくその人をしれり。かくてもなほ後暗き心もて脱れんとせば、闔宅の老弱その
榮りを衰け、たえて一人も活くる者あらじ。或は時疫、或は瘧疾、種々の難病にかゝりて、死地をう
らさんよりは、一言の下に先非を悔いて、惡報を脱れ候へ。いかにやいかに。」と呼びかくれば、忽地
年の齡五十あまりなる男、しぶり／＼這ひ出でて申すやう、「かく發覺る、上は匿むによしなし。果
年來前の院主より金を預り、これを彼此の人に貸して利子を債り、借る人よりは謝銀を受け、院主よ
りは辛苦錢を得て、その蔭を蒙ること久しかりしに、院主既に世を去り給ひしかば、よからぬ心發り
て、密かに同宿の法師を相語り、その手形を盗みとらしたれば、皆わが物の心して候ひしが、けにあ

しき事はすまじきものなり。近曾先住の寃魂、夜な／＼あらはれ出づると聞く如くに、人しれすいくその心を苦しめ、終に淨願梨の鏡にうつされて、事ごと、に及べり。預りたる金の數は如此々々なり、手形に添へて返し奉るべし。師父願はくは、わが身わが妻子の命を救ひ給へ」といふ。これを聞くもの面をあはし、衆皆舌を巻きて、いよ、西啓を尊敬す。西啓又件の男に對ひ、「善いかな、懺悔には五逆十惡も頓滅せざるることなし、汝速かにその金をとり來れ、我加持して、後の禍を禳ひ得さすべし。なほ惑ひはれずして、一錢たりとも偽りかくさば、我も又救ひがたし。努忽にすることなかれ。」といふ、そのいふ所のノ、しければ、彼の男いたく威され、顔色蒼ざめて、やがて家に走りかへり、人に貸したるをば、おのれが金を加へて其の數に合はし、手形とともにもて來りて、これを西啓に遞與しければ、西啓は里人等に、金と手形を引きあはさするに、すべて二百餘金あり、これを舊のごとく押し包みて、村長がほとりに置かし、扱いふやう、「この金寺に返るといへども、その主歿したれば、別にとらすべき人なし。しかれば先住の爲に、追薦の法會を修行し、なほ餘れる金をもて、橋を修葺し路を造り、莫大の功德をなさば、亡魂の追善はさらなり、一郷の良賤、必ず冥福を蒙るべし。その期までは誰にもあれ、この金を預り候へ。」といへば、里人等聞きもあへず、「なでふさるおそろしけなる金を、束の間も藏めおくもの候べき。師父しばらく行囊のうちに藏めて、ともかくも

はからひ給はるべし。」とて、わりなく金を西啓に與へ、又もろともにいふやう、「師父願はくは、今より住持して、この寺の光をまさし給へかし。」この所究めて貧地なりとも、吾が僧心の及ばん程は、聞き奉るべし。」といふ。西啓聞きて、「われ其の初め、行脚の志ありて、いまだ日本半國をも廻らす。然るを衆人に抑留せられて、この山に老い朽ちん事は、情愿にあらす。さはあれ今懇に留めらるゝを、無下に振り捨てて別れ去らんは、弘通濟度の發願に違ひなん。我に同行の徒弟二人あり、彼等駿河路より後れたるが未だ來らず。よしや遅くとも、兩三日の間には尋ね來つべし。そのもの共と談合して、さて回答をすべきなり。」といふを、里人等なほ懇切に勸めて、この日より院主と稱へ、俄頃内外の掃除して、檀越の黨、米薪何くれとなくこれを寄進し、かはるん、給侍して、齋應まします厚かりける。活かる處に白映黒映は、豫て示しあはせし事なれば、頭髮を剃りまろめて、行僧に打拂ち、底倉の在家を律制して、「かかる行脚の僧の、東へ過るを見給はずや。」とて、尋ねまどへるおももあして問ふに、里人等はこれ西啓が同行の徒弟ならんと猜して、篤く敬ひ、無名寺に誘ひひてかくと告ぐれば、西啓やがて白映黒映を呼び入れさし、假に別後の情を述べ、又里人等にとゞめられて已む事を得ず、且くこの寺に住持するよしを聞えしらせなどするに、件の兩人もよきに應へて、いと睦まじきに相話ふにぞ、里人は冤魂得脱の始め終りを物語りて、頗りに西啓を稱讃し、暇告して歸

りけり。かくて西啓は、奸計既に成就して、歡び思ふこと限りなく、白映黒映に、里人等を誑きたる趣を説きしらし、「われ汝等がかねての物語と、又里人等が氣色を猜し、かかる寺に遺物のなきこととはあるべからず。密び／＼に先住より金をあづかり、しらすがほして居るものなくはと思ひしかば、「筒様々々の事ありし」と偽り、いたく威せし程に、忽地に二百餘金を得たり。汝等既に衣食住にこと足りなん、必ず兪忽の言行して、妖の皮を見られな」と説き示して彼是十金づ、別ち與へしかば、二人の賊僧大いによろこび、「わが師の神機妙算は、釋迦も達磨も量り知り難からん。仰せうけ給はりぬ、こゝろ易く思ひ給へ。」と囀答へして、もの／＼しく冊く程に、西啓は俗姓雨田なるをもて、自ら雨田法師と稱へ、白映を白雲と呼び、黒映を黒雲と呼び、言を巧みにして、里人を誑きしかば、虛名近國に洋溢し、毎日に老弱羣集して、結縁の爲十念を受け、又病疾あるもの加持を請ふに、乞ふものこゝろの信より、功驗あるも多かり。こゝろをもて愚民ます／＼信をまし、その徳甘雨の枯槁を起すがごとく、その名四方に雷同すればとて、遂に雨田の二字を合はして、雷法師と喚び做せり。夫れ賢と佞とは、その行ふ所相似て、その欲するところ天地懸隔す。昔周公、國の爲に上にくだつて、本は讒諂を脱れ給はず、漢の王莽逆を謀つて士にくだるとき、時の人これを賢なりと思へり。常言にいふ、盜跖が犬彘を吼ゆ、夫の盜跖は魁首なり、彘は聖人なり、しかれども犬の彘を吼ゆるもの

は、只その主を知つて、賢愚邪正をしらざればなり。嗚呼賢愚をしらずしてこれを護るは、所謂盜跖が犬なり、邪正を鑑みずしてこれを信するは、所謂王莽が徒なり。一犬形に吼えて、羣犬聲に吼ゆ、しかれどもその吼ゆる所以をしらず、一言衆言を引いて、これに従はざるものなし、しかれどもその行く所をしらず。されば西啓等が奸悪はいふもさらなり、里人これが爲に惑はされしは、奇を好むの懐ちなり。彼最も憎むべし、これも又誡むべし。

第七卷 倭文手の稚鷹上

こゝに又伊原太郎五武泰が妻蓮葉は、郷に武草が近江へかへりし後、夫は籠り勝にて、放鷹遊山せす。まいて蓮葉を門方へも出さざりしかば、毎日に夫婦對ひをりて、なすこともなく年も暮れ、春も二月の天麗かたるに、蓮葉は絶えて漫行することを得ず、剩ハ疎ましき夫と、永き日暮しと對ひ居るなれば、目上に霧の出で來たらんやうにて、心鬱々と樂しまず。しかるに頃日、無名寺の雷神法師が法驗、掲焉き由を傳へ聞き、むかし見しその人とは知らねども、せめて彼の寺へ詣でなば、少しは心はるけくもあるべしと思ひて、しばし夫をすめこしらふれば、太郎五聞きて、「無名寺は古主新田殿一族の墳墓もあり、此の春は物に紛れて、われも未だ參らず。御身わがかはりに詣でて、はやく歸りたまへ。」といふに、蓮葉ふかく歡びて、俄頃粧扮し、よき衣服を被吏へ、丁介を將て無名

寺に詣でしが、羣集に押し隔てられて、法座の邊へはよりも著かれず、人の後方にありて、つらくと彼の雷神法師を見るに、いぬる秋神崎にて、假初に一夜さあかさしたる西啓法師なり。こはいかにと胸打ちさわけど、ものいふべうもあらねば、この日はむなく立ち歸り、兩三日のち又夫に告げて、無名寺へ詣でんとするを、太郎五絶えてこれを許さず、「わが弟近江へ歸るとき固く誠めて勤仕の外は放鷹遊山する事なかれ。」といひき。されば我さへ籠り居るに、御身は婦の事なり、一度は彼の寺へ詣づるとも、しばく參らんことしかるべからず。武草がこゝに來ん日も、遠からじとおほゆるに、今しばし待ち給へ。」といはせもあへず、蓮葉は臆を揚げ聲をふり立て、「御身いかなればかくまでに、弟を恐れ給ふぞ。彼が家には彼を守る神あり、わが家には我を守る神あり、彼いかでかわが家の事を管子知らん。わが身近曾はいたく病の發るから、尊き神僧の加持を受けて、病苦を助からばやと思ふものを、妻は死しても弟のいひつる事は守り給ふか。さる頼もしけなき夫なりせば、つれそひ居るともそのかひなし。女々しき人に養はるれば、親族にさへ蔑られ、この煩惱をなす事よ。」とて、或は罵り或は打泣きて怨すれども、太郎五は氣を忍びて、とかうの回答もせず、さればとて夫の許さざるを、ひとり彼の寺へはゆきがたくて、蓮葉は人知れず心苦しき日をおくり、既に彌生の始めになりつ。二日の夕ぐれに籬棚へ桃の枝を挿さんとて、ひとり庭へ立ち出で、臂ぢかなる枝を手繋めて丁

と折るに、青き猪婆蛇その枝に登り居たるが、打驚きけん蓮葉が手元へ、さら／＼と走り來れば、一阿
叫と呀びて持つたる枝をうち揮るにぞ、猪婆蛇は覺の縁に打ち中てられ、仰様になりて流れけり。
ともしらすして蓮葉は、もし袂にや入りけんとして花を打ち捐てて、裳を褰け袖をうち拂ひ、いと興な
くて内に入りぬ。かくて詰軒奴隸丁介、ほの嘆きより起き出でて、茶釜に水を汲み入れ、茶を煮飯を
炊ぎなどする音を聞きて、主人太郎五臥房を出でて手を洗ひ、まづ雪の山鷹のに餌飼を致し、窗の戸
引き明けつ、庭の桃櫻をながめ居るに、蓮葉はいぎたなくて、絶えて一朝も夫と共に起きたる事な
ければ、この旦も熟睡して未だ寤めず。丁介はや、茶を煮果てて、これを主人に進らすれば、太郎五
はその茶椀を掌にのして、こゝろよけに飲み盡すと見えし、忽地茶椀を礮と投げ、一聲高く叫びつ
つ、血を吐くこと夥多し。丁介はこの形勢にいたく驚き、走りよりて、「こやく／＼」と呼び活くるに、
太郎五ははや俯しに仕れて絆断れたり。そのとき蓮葉は、只ならぬ聲に驚き覺め、こは何事ぞとて起
き出でしが、夫が血に塗れたるを見て仰天し、主従さま／＼に勸るに、救ふべうもあらざれば、猛に
近寄り徒を呼び集合へて斯くと告ぐるに、衆皆太郎五が死様の異なるを怪しみて、縁故を問ふに、
蓮葉答へて、「わが身は頃日心持あしければ、今日も日はさめながら、なほ臥房に侍りしが、夫まづ起
き出でて、雞程もなく死し給ひぬ。その爲體わらはも心を得がたし。やをれ丁介、汝何をか進らせた

る、明白に聞えよ。」といふに、丁介も又不審し、「僕別に進ませたる物なし、家公は日來朝茶を好みたまふなれば、ほの嗜きより茶を煮たてて、只一椀を進ませたるのみなり。」といふ。蓮葉聞きて冷笑ひ、「朝茶を喫みて死するものならば、世の老爺婆々は毎朝に死なでやはある。こはなほ仔細なくては。」と責め問へば、丁介いよ、思ひ惑ひ、「仔細ありやなしやはしらず、僕みづから水を汲み入れ、自ら煮たる茶を進らせて、かくなり給ふ事は非に及ばず。只この上は僕面のあたり、この茶を喫みて試み候べし。もしこの茶に毒あらば忽地に死なん、さもなくば疑ひを散らし給へ。」といふに、皆「然るべし。」と應へけり。かくて丁介は大きやかなる茶椀に、なみ／＼と茶を汲み入れ、吹きさましつゝ、喫むこと半ばに過ぎず、忽地面土の如くなりて、「叫苦」と一聲叫びもあへず、九孔より血流り、撞と顛びて死したりける。蓮葉はいふも更なり、これを見るもの舌を掉ひ、「さればこそ茶に毒はありけれ、うち覆して見ん。」とて、一人茶釜を引きおろし、目策の中へ流しかくれば、果して青き猪婆蛇の煮爛らかされたるが、茶殻とともに出でしかば、衆人ます／＼驚き呆れ、「かかる毒蟲の入りたる茶ともしらず、飲みもし飲ましもさしたる主従の幸なさ。思ふにこの猪婆蛇兎に落ちて、水瓶の中に流れ入りたるを、手元のほのぐらかりしかば、丁介やがて茶釜に汲み入れたるとおほし。彼もし猪婆蛇ありとしらば、いかにいふともこの茶をば喫むべからず。かかれば誰を恨み誰を仇とせんよすがもな

し、何事も過世の悪業なりと思ひ諦らめ給へ。」とて、様々にいひ慰むるに、蓮葉ははじめて曉得り、さてはきのふの夕ぐれに、わが身襦の枝を手折りしとき、揮り落したる青蛇、あやにくに匍に落ちて、今朝丁介に汲みとられ、事ここ及べるなり。われも人なみに起き出でたらば、もろ共に命を顧すべかりしを、果報は寐てまでといふ常言は空しからず、扱も危かりしと思へども、その事はいひも出です。夫暴に身まかりて、手といふものもなき家の、心ほそきを察し給へ。差夫何とせん。とかき口説く。人めばかりの袖の雨、晴る、もいと早かりけり。かくてあるべきにあらねば、人をもて主君木智どのへ、武泰の頓死の事を聞えあけきし、是彼の扶助を得て、野邊おくり形のごとくとり營み、丁介が屍は、それが由縁の者にとらせなどするに、木智光輔も太郎五を惜しみ思ひて、「早く近江へ人を走らし二郎武章を呼びよして、家督の事を申し出でよ。」と、丁寧に聞えしらしにけれど、蓮葉はこれらの事には思ひもかけず、夫が死したるを身の幸ひにし、この便宜を得て西啓をわが家に呼び迎へ、過ぎにし秋の見はてぬ夢を、語り慰めばやと思ひしかば、それとはなしに近郷き徒にいふやうに無名寺の雷神上人とやらんは、世に稀なる善知識におはするとぞ、かかる名僧の引接にあはば、亡靈もいかでか佛果を得ざるべき。聖ははや初七の遠夜になりて侍れば、わらはが爲に彼の神僧を招待してたびてんや。」といふ。人みなこれを聞きて、彼の僧を蓮葉の意中の人とは思ひもかけ

す、各、「宜なり」と應へて、一人口よく利く下郎を無名寺へ遣はし、縁由をいはせけり。この時雷
神法師は、奸計をもて忽地山院の往持となり、白雲黒雲等と共に、晝は日に彌陀を稱へ、夜は腹に酒
肉を葬り、しのび／＼に非法の歡樂を事とせしが、ある日人來つて、木賀光輔が郎黨、伊原太郎五武
泰が後家、亡き夫の爲に翌の夜招待せまほしきをいふ、その言語いと丁寧なり。雷神聞きて思ふ
やう、木賀は此の邊に名だたる武士なり、今その郎黨に因まば、主の光輔に頼るよすがともなるべし
と深念し、行くべきよしを慮へて、その人を歸さしぬ。さるほどに連葉は、よろづその準備して、
次の日此の人に酒飲ませ、飯たうべきしなどする事も、晝の中になし果てて、夕暮には悉く歸ら
し、さて薄やかに舞捲し、衣裳を被更へ、彼の人遣しと待ちたりけり。是れはさておき伊原二郎二郎
武草は、去年の冬信二郎詮通が庇匿になつて、寛村の隠跡を脱れ、子供等さへその人の蔭を蒙りて、
觀音寺の城中に件はれしかば、ふかくその恩恵を感謝し、唯此のうへは半を賣りたる賊僧を索ね出し
て、妻の元江が爲に寛みを雪ぎ、身のぬれ衣を乾すべしとて、近國はおちもなく、心を竭して徧歴す
といへども、絶えてその往方をしらず、冬もくれ春も二月になりけるが、既に貯蓄盡きて、いとゞ
せんすべなかりしかば、底倉へ赴きて、見武泰に縁由を告げ知らし、その扶助を得て、夙志を果さん
ものゝと專思し、彌生の初めに近江路を立ち出でて、夜を日に繼ぎて走りける程に、三月七日の夕ぐ

れには、底倉へは僅かに一里ばかりを隔てたる山里まで來にけり。暮れぬ先にと思へば、心しきりに忙はしく、と見れば村稍盡所なる糞の桶に、烏影羣れ居て、いとかしがましくなく聲の、何となく耳にきほり、入田の鐘も常よりはうら悲しく、忽然に肉動きて、神も引き入る、やうに覺えしかば、しばし被所を見かへりつ、うゝあな心もとなし、子どもらが上によからぬ事や出で來けん、又わが兒の家に、幸なき事やありけん、扱もたまならぬ鳥の啼きざまかな」とひとりごち、又連忙しくいそぎゆくに、日は既にくれて、天さへ結陰り、七日の月は影も見せねど、去年來し門の稚松も、七松居士が面影して、朶をかへす立てりけり。武章つと入りながら、「いかにわが兒は恙なくおはするか、二郎二郎を参り候へ。」と呼門へば、蓮葉この聲をまれ聞きて、蒸襖の間よりさし覗き、周章きて套房のかたに走りゆき、猛に紅粉を洗ひおとし、喪服を被更へてやうやくにたち出で、「叔々來給ひつるか、まづこなたへ。」と誘引ふにぞ、武章は襖が衣服の色の忌はしきを見て、扱はわが兒は世を去り給ひにきと猜しながら、端なくも問はず、草鞋を解きすてて對ひ坐し、寒暖を述べ、又わが身こゝに來つる緣故、元江が横死子供等が事を聞えしらすれば、蓮葉はしばし目を押し拭ひ、「寔に御身兄弟は、過世あしくおはするなり。」叔々寔に係りて、妻を喪ひ子に別れ、あから草にもとて、はるらくとこゝに來給ふかひもなく、わが夫は節句の朝、頓死して果て給ひぬ。その故は如此々なり、筒様筒

様なり。」とて、青猪婆蛇の事、丁介が事、おちもなく物語るを、武章は聞きも果てず胸を打つて、哀悼の涙壺きあへず。つらく思ふに、兄が最期の爲體、疑はしきことあれば、猶しばく問ひ詰らむるに、それかと思ふよしもなし。あはば冤いはん角せんと、道すがらのこゝろがまへも、こゝに至つて事みな休す、愁傷やるかたなかりけり。かくて武章は、やゝ紅涙を拭ひをさめて、蓮葉が頃日の懶かるべき心竭しを悼み聞え、又數回嘆息し、「今日までも知らざりし、兄の亡日の思ひきや、今宵初七の連夜とは、せめて夜とともに廻向いたさめ。」といひかけて、つと座を立つも力なく、あくる家廟の亮隔も、香の煙に賦りし、すぎこしかたを杉原の、掃の位牌にうち對ひ、思ふ限りをかき口説く、稱名の聲幽なり。浩かる所に雷神法師は、黒雲を將て外面に立在み、まづ蕉火をあけさして、門柱なる表札を仰ぎ瞻つ、「こゝなりけり。」といふに、黒雲やがて走り入り、「無名寺來臨せり。」と呼門ふにぞ、蓮葉ふたゝびこゝろ慌て、折あしとは思へども、さらぬ面もちして出で迎へつゝ、客房に誘引ひ、黒雲をその後方に坐らして、茶をすゝめ打合睽みていふやう、「きのふ猛に申し入れて侍りしに、うちおかし給はで、來給ひつるぞ忝き。」といふ聲も、面影も露たがはず。この姉姉は、神崎にてあひ見つる蓮葉なりとおもふにぞ、雷神忽地胸うちさわぎ、こはいかにも問ひかねて、言語すくなに應へしつ、目を斜にしてこれを見れば、蓮葉もまた物いひたけにて終にいはず、庖温の方へ退出つ、思ふ

やう、稀なる便宜を得て、彼の人を呼びにけれど、あやにくに武章こゝに來りしかば、うちとけては相話ひがたし、慙ひにこれを匿さば、あしかりなんと尋思して、家廟のこなたなる襖の間に顔さし入れ、叔々御身も去年の冬、詣で給ひたる無名寺に、此の度入院し給ひつる雷神上人は、攝津國なる何がし寺より來給へりとぞいふなる、法名は西啓と呼ばれ給ふが、道徳尋常に勝れて、近曾先住の靈魂を鎮め給ひし程に、里人等仰ぎ尊みて、毎日に詣つる者いと多かり。かかる善知識にて坐すなれば、今宵なき人の爲に招き奉りしが、只今來給ひつるなり。御身彼所に參りて、勞りを申し給へかし。といふに、武章見返りて、「そはよくぞ招待し給ひたる、さらば對面いたすべし」と回答へし、刀を引提けて客房に赴き、雷神にむかひていふやう。某は今宵志す、なき人のためには弟にて、年來近江の瀬田に住ひて、伊原二郎二郎と呼ぶる、ものなり。寺務繁多にておはすべきに、法足を回ける、こと、雀躍すくなからず」といふ。雷神聞きて、「さては太郎五どのとやらんの舍弟なるよ、慈傷推量られて候。其所はあまりに端ぢかなり、まづ此方へ」とて燈の門をさし向くる、火光に限なく面をあはし、武章信と見て、小膝立て直しつ、刀に手をかけ、「珍らしや去年の九月、大津なる八町繩手の牛市にて、假初に面をあはせし、牛盜人未だ見忘れはすべからず、汝小幡の商人、物右衛門とやらんが黄牛を杜騙りとりて、われに賣りしより我が家忽地連係せられ、妻を喪ひ子供に別れ、いくそ

の艱苦にあへる事、みな是れ汝ゆゑなれば、山を伐りすかし野を焼き枯らしても、素ねあはでやはと
思ひつる、夙望終に空しからず、草らすら今あひぬるなり。妻子の仇わが身の仇、思ひしれ」と罵り
もあへず。跳りか、つて組まんとすれば、雷神大いに驚きて、走り退きつ、臂ちかなる、短髪とつて
投げ著くる、武草はやく身を反り、刀を抜いて切り拂ふ、白刃の光は電の閃くに異ならず、如法闇
夜のめつた打ち、黒雲は只呆れ果て、足音させじと這ひ廻る、眼前へ突き出す刀光に、鼻をのがめて
浮雲やと、思ふ許りに物いはず、走路たづぬる折しもあれ、蓮葉はかくともしらず、高坏に果子を盛
り、咆溜より来て來るとて、心つきなく引き開くる、懐の方へ黒雲が、霧直に逃げ出づるを、武草は
逃さじと、飛び蒐つて了と砍る、圍ひは剪れて蓮葉が、睨より乳の下まで、ばらりずんと研りさけ
られ、「阿呀」と叫びて仰儀に、剣る、音ともろともに、庭にも握と地響きし、跳り蹶えたる築碁のあ
なたに一聲阿々と、笑ふは正に雷神か、それかあらぬか文なき闇に、思ひ惑ひて嫂とは、しらぬ屍
を踏み越えて、「扱は只今研り臥せたるは、伴僧にてありけるか、家廟の御燈を借りてや見ん、咆溜の
燈火をもて來給へ、阿嫂々々」と喚びたつれど、應へなければいとゞなほ、せきにせきたる壯士が、
血刀引提けて外面へ、喘ぎくぞ追うてゆく。雷神はこのときまでも、屏風の背に躲れ居て、息もせ
ざりしが、蓮葉が阿と叫びたる聲にて、既に研り伏せられたるは、彼の婦人なるべしと猜して、大い

に望み^{のぞ}を失^うひ、武章^{ぶしょう}は黒雲^{くろぐも}を追^おつ蒐^あけて、外面^{うへめん}へ走^はり出^いでしかば、この隙^{ひま}にとて忙^{いそ}はしく、蒐^あれ去^いりつづ思^{おも}ふやう、一^{いっ}牛^{ごう}を賣^うりたる事^{こと}かく發^は覺^{かく}れては、この所^{ところ}に足^{あし}を留^{とど}めがたし、怪^{あや}敷^{まし}なる奴^{やつ}に撞^つ見^みうて、寶^{たから}の山^{やま}に入^いりながら、手^てを空^{そら}しくする事^{こと}よと叱^つき、闇^{やみ}に紛^まれて徑^{みち}より寺^{てら}へ走^はり歸^{かへ}るに、武章^{ぶしょう}は黒雲^{くろぐも}を追^おつ蒐^あけ來^きつて、遂^{つひ}に藁^{わら}所に追^おひ逼^{せま}り、逃^{のが}さじと打^うつて蒐^あれば、黒雲^{くろぐも}聲^{こゑ}をふり立てて、一^{いっ}賊^{ぞく}あり賊^{ぞく}ありと呼^よばはる程^{ほど}に、白雲^{はくぐも}開^{ひら}きて樺^{ひら}林^{りん}を横^{よこ}たへ、火^ひ打^{うち}の男^{おとこ}を密^{ひそ}に走^はり出^いづるに、件^{くだ}の男^{おとこ}は武章^{ぶしょう}が閃^{ひら}かす刀^{やいば}の光^{ひかり}に驚^{おど}き怖^{おそ}れ、忽^{たち}地^ぢに逸^あ巡^{めぐ}りし、藪^{くさ}の中^{なか}にぞ隠^{かく}れける。されど一人^{ひとり}の惡^{あく}僧^{そう}は、蒐^あえある者^{もの}なれば、物^{もの}ともせず防^{ぼう}ぎ戰^{せん}ひ、黒雲^{くろぐも}は老^{おい}れたる卒^{そと}堵^と婆^ばを抜^ぬきもち、白雲^{はくぐも}は棒^{ぼう}をうち揮^ひり、左右^{さうぶ}より引^ひきはさんで、崖^{たけ}ぎ仕^しさんと岡^{おか}きたり。その隙^{ひま}に雷^{らい}神^{じん}は、有^ありあふ金^{かね}をとつて行^ゆ囊^{ぶくろ}の内^{うち}に入れ、また慌^{あわ}しく逃^{のが}け去^いりしが、ほとり近^{ちか}なる里^{さと}人の門^{かど}を破^{やぶ}りに打^{うち}ち破^{やぶ}き、只^{ただ}今^{いま}無^む名^な寺^{てら}に崩^{くずれ}入^いつて、防禦^{ぼうえい}に術^{じゆつ}なし、とく／＼來^きつて救^{すけ}ひ給^{たま}へ」と呼^よびさまし、やがてこゝより逸^あ雷^{らい}す。里^{さと}人^{ひと}等^らはこの聲^{こゑ}に驚^{おど}き病^{やま}めて岸^{がし}破^{やぶ}と起^おき、手^てに／＼蕉^{せう}火^かをふりてらし、長^{なが}柄^{へい}の鎌^{かま}を拿^とつて、無^む名^な寺^{てら}へ走^はり來^きつ、其^{その}處^{ところ}かこ、かと激^{げき}動^{どう}きて、築^つ籠^{ろう}の外^と面^{めん}より蕉^{せう}火^かを高くさしあげ、盜^{たう}賊^{ぞく}を逃^{のが}し給^{たま}ふな、衆^{しゆ}皆^{みな}加^か勢^{せき}の爲^{ため}に來^きれり」と呼^よばはりぬ。そのとき武章^{ぶしょう}は、火^ひの光^{ひかり}にて柱^{はしら}ふる惡^{あく}僧^{そう}等^らを見るに、當^{あた}りの人^{ひと}にあらざれば、再^{また}び思^{おも}ひ恐^{おそ}ひつ、さては霧^{きり}に祈^{いの}り仕^ししたるは、雷^{らい}神^{じん}にてあんなれ、この惡^{あく}僧^{そう}等^らも支^し黨^{たう}とは見^みゆるものから、里^{さと}

人等ふかく感はされて尊信し、かへつてわれを賊なりとおもへり。かかれば目今この所にて、いひとくともいひ解きがたし、多勢を敵手に人をも殺し、われも傷けられなは、慮りの足らざるに似たり。さればまづ立ち歸りて、彼の賊僧が死せりや、いまだ死なであるやを見定め、明白に領主へ聞えあけて、事を亂さんにはと諒思し、刀を抜いて園子の外へ走り出づるに、悪僧等もその本事は今よくしりつ、引續きて追はんとせざりしかば、武章は角門より走り出でて、太郎五が家に立ち歸るに、客房はなほ暗くして音もせず、こは不審しと思ひながら、内に入りてしばし蓮葉を呼ぶに應へもなし。怖れて出でざるにこそと亡語ち、やをら掻い擽りつ、咆溜の燈火を手燭にうつし來て、殞れたる人を見るに、雷神にはあらずして、鍊蓮葉なりしかば、こはノ、いかにと驚きて、手燭を撲地ととり落せば、又舊の闇になりつ。あなうたてやと眩きて、とかくして燈を移せど、こゝろ忙はしければ、わが袖にさへふり減され、かくする事再び三たびにして、やうやくに燈をともし、蓮葉を抱き起して、さまざまに勸めしが、急所の深處なるに、既に締断れたれば、救ふべくもあらず。しばし忙然としてありたるが、天をうち仰ぎて嘆息し、いかなればわが身かくまでに薄命なる。世わたる爲なれば、貧しき中にこゝろを竭し、たま／＼養ひ得し牛ゆゑに、妻を喪ひ子にわかれ、力に思ふ兄君も、なき人の數に入り給ひぬるさへ驚きに、今宵はからず環會ひし、賊僧なりと思ひ懼らし、嫂

を殺したるは、いかなる魔我都美の神の所爲ぞ。われに十二分の理ありとも、かくては罪を脱れがたし、たゞ潔く自殺せんにはとて、刀の鞘に手をかけしが、又思ふやう、縁故をいはずして死するときは、死後なほ浮名を雪むるによしなし。かかれば彼の支黨の悪僧を引きとりふべかりしに、今は這奴等も磁々と、彼所には居るべからずとはおもひながら、その爲體を見ばやとて、門を固く鎖して、ふた、び無名寺に走りゆき、外面より張ひけり。さる程に黒雲は、からうじて勇士の太刀先を斃れ、密かに白雲に甲夜のことを告げしらし、「既にかくの如くなれば、彼の人は後難逃れがたしと思ひて、遂より逐電したるにこそ。人にしられぬ間に、とく／＼影をかくせ」といふ。白雲聞きて大いに驚き、慌忙きて黒雲と共に、暫近なる衣服寶錢を奪つてこれを背負ひ、いづ地ともなく逃げ亡せけり。里人等はかくともしらず、既に盜賊は追ひ失ひつ。院主は何所に坐するやらん、今まで居給ひたる法師達さへ、猛に見えざるこそ心得ね。彼所にや行きけん。」其所にやあらん。」とて、いと驚しく尋ね惑ふを、武璋は垣の此方にもれ聞きて、さればこそ我が思ふに違はね、這奴等悉く逃げ亡せたる上は力及はず。われ今その迹を追うて、この地を立ち去る時は、人必ず鏢を殺して、身を隠せりといはん。よしや夙志を遂げずして、怨みを泉下に遺すとも、過世の悪業ならばそれも備なし。常言に忠臣の狗となるとも、寵離の人となる事なかれといへり。夜もあけば木質殿に聞えあけ、面縛

して罪を俟たん。さはいへ近江なる子供らが、母を喪ひ父に捨てられ、心ほそくもあるべきに、今又わが身死せりと聞かば、とやあらんかくやあらんと、思ひやるさへ恩愛の、その面影は目に見えて、猛き心もよわり果て、五臓を絞る遺恨の涙、玉ちる袖もうら寒く、春の夜なれば短くて、早ほのふくと明けにけり。かくて武章は、再び兄の家に立ち歸りて、一十一を書い寫め、さて近鄰き徒に告げて領主に訴へ、その裁斷に任せんとて、蓮葉が亡骸には衣をうち被せ、家廟に到りて父母はさらなり、兄太郎が法名を稱へ、生ける人に物いふ如く、事の首尾を審かに告げて、身の暇を申し、背門の遺戸を引きあくれば、日來太郎五が養ひ狎らして、雪の山と名づけたる白斑の鷹、鳥籠の中にあり。あるじが身まかりて後は、はかなくしく餌も飼へざりけん、諸羽の光澤も去年見しさまにはあらで、氣色いと衰へたり。これも又なき人の像見と思へば、彼の鷹にうち對ひていふやう、「鴻鵠速く書を寄せて、蘇武が十九年の苦辛を告げしといふは、羌を誑る寓言にもせよ、陰崖黒柏嶺の蒼鷹、白蛇を殺して寃みを雪めたる例もあり。汝は原勇武の鳥、しかも義あつてぬくめ鳥を殺さず、明朝放ちやるときに、それが飛びゆくかたに向ひて、終日鳥を提らすとかや、一朝鳩と化すときは、三枝の禮をしれるなるべし。われに于てさせる恩遇なしといへども、われまた汝が主の弟なり。汝もし心あらば、江州觀音寺の域に到りて、わが子どもらに書を贈り得させんや。いかに聞きわきたるか。」といへ

ば、今までうちしをれたる鷹、奮然として羽搏きし、立たまくほしき氣色を見すれば、武章ふかく感激し、「さてはこの鷹おのづから靈あり、猶豫すべきにあらず。」とて、猛に硯を引きよして、兄太郎五が身まかりしこと雷神がこと、又慢つて、嫂、蓮葉を殺し、いひとくに言語なければ、この身を殺して罪を贖ふ由を書い寫め、ふたりの子ども父が今般の心中を察し、賊頭陀雷神を撃つて寛みを雪めよ。彼が舊の名は西啓と呼ばれしとぞ、年の齡いまだ二十に至らず、相貌は筒様々々なり、と審かにこれを記し、堅く巻きこめて鷹の足に結びつけ、やがて足皮を解き捨てて、鳥の隨意放ちやれば、鷹は見る／＼蒼天を飛揚しつ、雲に紛れて失せにけり。武章はしほしうち驚めて莞爾とし、今は心安しとて、なか／＼に騒ぎたる氣色もなく、まづ近鄰き徒に告げしらして、領主へ訴へを申さんとて、直に外面に立ち出でけり。憐むべし武章は朴實にして、冤枉に世を狭め、また慢つて、嫂を殺せり、豈是れ宿因の業果ならずや。されば蓮葉は日來夫を侮りて、はじめ武章に調戲し、再び雷神に聚會ひて、不良のこゝろを發せしかば、天その不貞不義を憎みて、忽地に罰し給へり、故あるかな雷神が墮落したるも、彼が奸計より起れり。又この青婦手づから夫を青殺せよといへども、ふり落したる猪婆蛇にて太郎五あへなく死したれば、その罪脱れがたきに似たり。しかれども彼幸ひにして武章に殺され、意中の較計行ふに及ばず、こゝをもて心は汗れたれども身は汗さず、實に一大幸事なり。又太郎

五武泰は、年既に半百に及びて、われには似けなき淫婦を娶りしかば、これが爲に面叱せられ、禍遂にその身に及びり。夫婦は人の大倫なり、縦ひ主命なりとも、思慮あらばいく度も固辭むべき事なるに、玉を抱きて罪ありといふ、常言をばしらざりけり。又雷神は奸悪を逞しくして里人を迷はし、一日浮雲の富をふすといへども、いく程もなく武草に看破せられ、喪家の狗となりし事、亦是れ神佛の冥罰にして、天網終に漏らす事なし。今この四人を論ずるときは、武草のみ絶えて罪なし、罪なくして罪を得たるぞ、過世の業因なるべき。しかりといへども善報なきにしもあらで、その子おのゝ至孝なり、名を揚げ家を起さん事疑ふべからず。善き事は露ばかりなりともせよ、悪しき事はさゝやかなりとてする事なかれと、むかしの人のいひけん、又うべならずや。

雲妙閑雨夜月 卷之四

東京 曲亭馬琴編次

第八卷 倭文手の雅鷹下

木智十郎光輔は、伊原武章が自ら罪を訴へ申すによつて大いに驚き、まづこれを禁獄して、家隸且利長綱といふ者を、太郎五武泰が家へ遣はし、蓮葉が屍を展檢さして、これを葬らし、武章が訴書を披見して、なほ縁由をかんがふるに、その畧に云く、無名山寺の雷神法師は、無頼の惡僧にて、武章が宿恨あるものなり。件の惡僧去ぬる年、近江國小幡の問丸、物右衛門が牛を驅りとりしより、竟に冤枉に係りて、武章が妻非命に死し、ふたりの子供又いくその艱苦を稟く。しかるに武章、はからずも昨夜武泰が家に到りて、雷神に撞見ひ、これを撃たんとするに、彼はやく燈燭をうち滅しつ、闇夜に紛れて逃げ去らんとするを追ひ留むるとて、慢つて嫂蓮葉に手を負はし、立所にその命を絶てり。かかれば身の罪は悔いて證なし、只願はくば雷神が往方を兼ねて追ひ留めさし、武章が爲に寃みを雪がし給はば、ながく恩惠を泉下に甘心すべしとぞ書いたりける。光輔は元來武章が才を愛でおも

ふ事深かりしかば、事の爲體を問ひ考へていとほしみ、貞利長綱をもて、雷神が往方を撈索めさするに、雷神はさらなり、白雲黒雲も夜のうちに透電して、往方定かならき」と申す。光輔聞き、「しかるときは武章が訟へ、片言にして取用しがたし、彼の法師が日來の行ひごまは、里人等こそよくしりつらん。呼び集合へて問ひ考へよ」といふ。長綱これを承り、纏て彼の山院に程ちかき、里人等を呼び集へ、この一件の事を説きしらして、雷神が人となり、また彼の寺に住持したる始め終りを問ふに、里人等はなほ彼の惡僧に難れられて、武章をいたく憎み思ひしかば、先住の室魂を濟度せし景速を述べ、只願その道徳を稱讚していふやう、「吾が們彼の清僧の稚育をしらすといへども、その法驗の灼然なるは、面のあたり見るところなり。況いて日來柔和忍辱にして、露ばかりも邪淫貪婪の行ひなし。思ふに武章、恨むる事ありて、嫂を殺し、罪を雷神法師に假託けて、命を助からんと計るものか。しかるに彼の清僧、ふたりの徒弟を將て、いづ地ともなくうせ給ひしは、豫て抖擻の宿望を果さんとするの志ふかく、ながく山院にとゞまるの氣色なかりしが、今武章とその黒白をいひあらがはんもむづかしとおぼして、速を埋め給ふにこそ」と、異口同音にまうすにぞ、長綱即ち里人等が申す趣を主君に聞えあはしかば、光輔いよ、せんすべなく、「不便ながら武章は死刑に行ふべし。しかばあれ彼も由緒ある武士の果てなるに、縛首刎たんは情なし。古實にまかし、無名寺にて腹を切らすべ

し。」と仰せけり。さる程に互利長綱は、生命を武章に傳へしらし、既にその準備を致すに、頃しも二
月の中旬なれば、無名山寺の櫻花爛漫として、誰をまつかと哀れなり。かくてそのほとりに敷皮布か
して、木の間に白き幔幕を張らし、足輕の雜兵五六人武章を守護し、引いて敷皮のうへに坐らす
るに、また一人白木の小四方に、短刀を載して其の前に居う。互利長綱牀几に憑りて正面にあり、雜
兵夥左右に列み居て、非常を警むる事いと嚴重なり。武章は淺葱上下被て、髪を切り放ち、中々に
臆したる氣色もなく、まづ長綱に對ひて、領主の恩恵を謝し、たひらかに座を占めて、徐かに襟を
引きわくれば、介錯の兵士、切柄したる刀の目釘を濕し、すらりと抜いて後に立つ、そのとき互利長
綱は、武章に對つていふやう、「御邊今度の災害は、主君木曾殿をはじめとして、長綱等に至るまで、
いとほしみ思ふ所なり。自ら罪を訴へ申さる、心操の健氣なるをもて、萬推量りてこそ候へ。いひ遣
す事もあらば、何にまれ聞えたまへ。」といふに、武章答へて、「この身薄命にして、終に平生の志を
演ぶるに及ばず、兄は毒毒に命を隕し、おのれ又こよなき罪を得たり、只恨むらくは悪僧雷神を走ら
して、生きながらその穴を啖らはざる事を。これも又審かにいひがたし、近江に残しおきつる子
供等が事、さすがに心にかゝるものから、彼等幸ひにある人の庇みを受けたれば、道路に餓死するま
でには至らじ。しかあらずともいかにせん、彼等もし今日の事を傳へ聞き、この地へ索ね來ること

あらば、最期の爲體を聞えしらし、怨敵雷神が行方をしらば、父母の讎を報いて、孫累の汗名を奪むべし。」と、言告げ給はるべし。」といふ。長綱聞きて、「委曲その意を得たり、心易かれ」と應へつ、頻りに涕うちかみしかば、雑兵等に至るまで、不覺に袖を濡らしけり。折しも春の夕ぐれに、入相の鐘おとづれて、霏々と降りかゝる花の吹雪と諸共に、今ぞ消えゆく武草が、水の刃押し戴き、「介錯たのむ。」といひもあはず、雌手の腹へ突き立てたり。浩かる所に木質の近臣、汗馬に鞭を鳴らして、驚直に馳らし來つ。門外に馬騎りはなちて、境内に走り入り、かくと見て大いに驚き、「領主の命あり、しばし刀を引きな繞らし給ひそ。」と呼びかけて、嘴ぎくほとり近く走り著き、長綱に向つていふやう、「主君、僕をもて、武草に問はし給ふ事あり、締急なれば直に問ふべくや。」といふを、長綱聞きもあはず、「仔細に及ばずとく／＼。」と應へしかば、近臣聽て武草が耳に口をさし寄り、「鷹飼の事は御邊の兄太郎五武泰、その奥妙を究めたるに、近曾死して、つごにこれを受け傳ふるものなし、就中傷きたる鷹を療治するの奇力、こゝに至つてながく亡びん事いと歎かはし。御邊その舍弟として、平口聞ける所ありなん、もし一言を惜しますして後世に傳ふるときは、その益尤も甚しからん。この由を問はんとために、領主の命を棄けてこゝに來れり、回答を聞かまほし。」といふ。武草見かへりて答へんとするに、心神既に惱亂しつ、數回息を嚙き、聲をふり立てていふやう、「鷹飼の技はおのれ好ま

ざるをもて、絶えて聞けるところなし。元來武泰はその術の洩れん事を厭ひて、書き留めたるものも
あらず、しからば傳へ進らするによしなし。しかりといへどもわが兄久しく領主の鹿みを蒙り、おの
れ又兄が恩賜の雪の山鷹の名に託して、書を子供等に寄したる事もあれば、いかでか等閑に思ひ奉
るべき。武章が歿き後に、無實の汗名を雪め、ふたりの子彼の悪僧に環會ひて、讒を報う事あらば、
今よりして七日が間に、武章が墳墓の邊に、靈草忽地と生すべし。それこそ鹿の妙藥なりと、しろし
めされよ。」といひ果てて、突き立てたる短刀を、雄手の方へ引き繞らし、「誘介錯」といふ聲と、共に
首は前に落ち、軀は俯しに倒れける。時に享年四十餘歳、いとほしかるべき齡なり。かかもしかば長
綱は、武章が屍を無名寺の墓所に瘞まし、さて里人等呼びていふやう、「この所ふた、び無住の空院
となりたれば、汝等かはるべくよくこれを衛り、もし武章が土饗頭の邊に、めなれざる草の生ひ出づ
ることあらば、告げ知らし候へ。」と聞えおき、遂に近臣と共に立ちかへりて、主君光輔に武章がいひ
つる事一五一十を演説す。光輔聞きてしばく嗟嘆し、ふかく望みを失ひて、氣色樂しからず見えた
るが、さりとともと思ひけん、次の日より毎日に近臣を無名寺へ遣はして、武章が墳を見せけるに、第
七日の朝まだきに、番守の里人走り來て訴へ申すやう、「吾儕豫て殿の仰せを稟けて、日々に武章が墳
を守りて候に、昨夜只一夜の中に、彼の墳より異草生ひ出でて、莖の長する事一尺五六寸に及び、

律草萌え茂り、花開きていと与やなり。雖て知らざると仰するによつて、走り奔れり。と云ふ。光
 輝これを聞きて、「さねばこそ武草が誓言成しからず、われゆきて圖のあたり墜定すべし」と云ふ。馬をホ
 き出せよと急がしつ、且利長嶺以下五七人の近原を翻て馬にうら騎り、伴の衆人に勸導さして、
 新名寺に到り、主従その草を見るに、葉は細くして長たなく、葉は河原柳に似て、四方より出でて相
 對ひ、葉の大きき一寸四五分もあるべく、葉の薄より小枝を垂じて、黄なる花開きたり。光輝は執事
 と見てふかく嘆賞し、長嶺を祀かへりていふやう、「武草は蓋世の表十なり、見武草が爲に、龍庭の思
 を報さんとて、今般に一言を遺し、身死して龍の神樂を傳ふ、これ當に貴にいふ弟切草なるべし。む
 かし人皇六十五代花山院の御時に、龍庭神樂といふものあり、葉に類しき事神の如し、龍の臣とこと
 あるときは、草を按きてこれを傳ふ、人草の名を問ふに疑していはす、然るに家弟露はにこれを洩ら
 せしかば、時頼怒つてその弟を殺せり。これよりして時の人、龍の良樂を知る事を得つ、その草を名
 づけて弟切草といふといへり。然るに今の人は、草の名のみしりて、その形狀を審かにしれらもの
 なし。或は弟切草に雲龍なりといふ、今これを見るに雲龍にあらず。時頼はその家方を洩らせざるを念
 つて弟を切害し、我は國法の欺ましがたし、武草が弟を切らして、この雲草を得たり。嗚乎弟切草の
 名故あるがた。世むべし武草、冤苦を抱きて終に仇を復す事を待す、一瞬映を續して、身命に死せ

ども慍むる事なく、兄が爲に恩に答ふ頗る奇なり。疑ふらくは里人等、彼の雷神に誑かれ、深く惑ひて武章を誣ひたるものか、いと不審し。」といふ。その言未だ終らず、忽地一人の行僧、二人の俗客を將て、門内に進み入り、と見かう見て、「こは思ひの外にわが寺の荒れたる事よ。」といふ。光輔主從里人等、この聲を聞きて不審し、首を回らしてその人を見るに、曩に逐電したる無名寺の後住なりしかば、里人等冷睨ひ、「貴僧はいぬる年、先住の寃魂におそれ惑ひ、行方なくなり給ひしが、何の顔ありて、阿容々々と歸り來給ひたる。」と問ふに、後住の法師莞然として、「小僧愚なりといへども、一院の住持たり。いかで女々しく亡魂に驚かされ、不覺の舉動をいたすべき。しかはちれ事急なりしかば、人に告ぐるに及ばず、出でてより影の月を経たるをもち、さ思はるゝも理なり。今説くところを聞きて、疑ひを晴らし給へ。」と回答へつ、光輔がほとり近くすゝみ對ひていふやうに愚僧當院に住持して、いく程もあらざれば、いまだ領主に見参に入らざりし、扱も去年先師遷化の後、沙彌同宿等、おのが隱慝の發覺れんかと防み、種々の流言をもち、その非を掩はんと計較み、先師の寃魂夜な夜な顯はれ出づるといはせしが、狐狸のわざくれにやありけん、その頃さる怪異出で來にけり。かくて沙彌同宿等、先師年來の苦心を積み、石壇修造の爲に、檀越布施の金錢を、人に預けおかれし手形を盗みとり、みな諸共に逃げ去りぬ。是をもて愚僧先師の夙志、徒勞にならん事を歎き、密かに彼

の輩の往方を探り問ふに、一人の沙彌近き山里に躲れ居る由を傳へ聞き、なほ其の虚實を知らん爲に、里人等にも告げず、只ひとり其の所に到りて、ある人にこれを問ふに、その人答へて、「件の沙彌は今朝甲斐國へとて旅だちつ、もし追つ蒐げ給はば、必ず逢ひ給はん」といふ。愚僧これを聞きて、心しきりに忙はしく、再び寺に歸るにおよばず、思はずもゆき／＼て、甲斐國なる臺が原まで追ひ到り、彼の沙彌が幽けき山寺に寄宿するを、辛うじて尋ね出し、縁故を問ひ諱らめたれど、われも彼も出家人の事なれば、その地の領主に訴へて、罪するまではせず、追ひ詰めたるに、憤りを散らして立ち歸る途中、黒駒の驛に宿かりし夜、中風にやありけん、俄頃に物いふ事を得ず、宿の主も何國のものなる事を問ふ由なければ、縁由を村長に告げ、所持の路銀もあれば、家に止めておこたり果つるをまつほどに、彼所に年を超えて、やうやくに平愈しつ、物いふ事も生平に異らず。よりにてきのふ黒駒を發足し、宿のあるじと村長に送られてかへり來るに、藤木のこなたなる松原にて、面魂いかめしむなる法師二人、うち粗語ひつ、ゆくを聞けば、一人がいふやう、「吾儕底倉の無名寺にて冤魂に打ち拵ち、生道心等を驚かし、その後雷神に従ひて、しばし酒肉に飽きたるが、善き後は必ず悪しきものにて、忽地その事發覺れ、舊の山客になりぬ。山客は山にて果つるといふ常言も、今こそ思ひ知らるれ」といふに、又一人呵々と笑ひ、「そは何をかいふ、山客にはあらず川だちなるべし。山にもあれ川

にもあれ、こゝらわたりを狼狽へ廻りて、捜し出されては悔ひとも及ばず。洛へや上るべき、陸奥へや下らん。」といふを、悪僧徒に跟きてこれを聞き、扱は先師の冤魂は、狐狸の所爲かと思ひしに、この悪僧ばらがなせしなり。引き拂へて責め問はば、なほ細しきを知るべけれど、かかる悪棍に物いひかけて、却つて毛を吹き疵を求めやせんと、黙止して見逃したり。」と、一五一十を物がたれば、黒駒の村長は、客店のあるじとともに、又説くこと前の如し。光輔主従はいふもさらなり、里人等今この物がたりを聞きて初めて曉得り、「あな鈍ましや、先住の冤魂を濟度したるにはあらで、みな雷神が豫てふかくも計較みたるを、今日までも知らざりし、いと面なし。」と眩きつゝ、後住の意なく歸り來れるを歡び、村長と宿の主を勞ひて又いふやう、「この寺は先住の冤魂、現はれ出づるといと風聲高く聞えしころ、沙彌同宿忽地に逐電し、師父も往方なくなり給ひしかば、こは全く物の怕ろしくて、逃げ去り給ひぬるとのみ思ひたる折しも、扨撒の旅僧來りて、「彼の冤魂を鎮め得せん。」といふに詭られて、今まで師父をあしざまにのめいひ罵り、彼の凶僧を尊信して、活佛の思ひをなせしこそ悔しけれ。師父が藤本の松原にて、見脱し給ひつる悪僧は、それが徒弟にて、白雲黒雲と呼ばれたるものならん、そはかやうくの事あり。」とて、雷神白雲黒雲等が事を密かに聞えしらし、又武章が横死、弟切草の事に至るまで、おちもなく物がたれば、住僧聞きて大いに驚き、「悪僧各位にも告げずして、

漫に遠く出でたるゆゑに、かかる不思議の事さへ出で來つ、みな是れわが悞りなり」と後悔して、慙愧面にあらはれたり。光輔は是彼のいふ所を聞きて嘆息し、「和尚山院の住持として、人にもしらせず只ひとり、佻々しく人を追ひ留めんといたせしは、ことなき越度なり。又里人等が私に雷神を留めて後住とし、判へこれに惑はされ、武章を冤けたること、その罪愈輕からず、みな是れ慮りの淺きによつて、この件の殃を惹き出せり。かかれば住僧は今より艱苦を厭はず、彼此を募化して、山院を相續し、里人等は力を戮して、この寺をとり立てて、且武章が菩提を弔うて、前の罪を贖ふべし。この事もし等閑ならば、その度は許し難し」と、屢いひ懲らし、黒駒の村長客店の主には、引出物をとらして、甲斐國へ歸らし、いよ、武章をいとほしみて、その子供を憐み思ひながら、近江とのみ聞えて、在所定かならざれば、彼等を扶持する由なきを遺憾し、「武章が子ども、この地へ尋ねて來よかし。」といへりとぞ。かくて光輔は、彼の草を採りて、傷きたる臈に傳くるに、その功神の如くなりしかば、「こは疑ふべうもあらぬ弟切草なり」とて、菜園に移し植ゑ、鍾愛いと深かりける。

按ずるに越後名寄卷十六に云く、弟切草は、諸郡野原村里皆生ず、葉一二尺ばかり、葉は河原柳に似て短く先圓し。表色紺にて、背は白く青し。葉は四方に出でて相對す。葉の大なるもの、長さ一寸四五分、葉の際より小枝を生ず。夏の末五出の小黃花を開き、年々宿根ありて生じ、甚だ繁

茂す。寺島曰く、云々。晴頼の記まへにし
るすがごとし



金瘡、打傷、一切無名の悪瘡腫物に、葉を抜き淡き紫色の汁出づるを傳けて良し。○海船齋し來
る繪の具に綿胭脂といふものあり、俗に生胭脂といふ、紫色なり。弟切草の生葉をしほりて、汁を
綿に浸せるものといふ。我が朝にてこの草を漸う近世知れりといふ。本草胭脂の集解、種々の草花
の汁にて、綿を染めてべにとする法あり。また蘇木の煎じ汁に胡粉を浸し、綿に塗りて生胭脂を贋
せる物あり。生胭脂は血を止むるに甚だ效あり。○貝原云く、本草濕艸下の蛇銜草は、おと切草に
似たり。同書劉寄奴、集解、時珍説、畧おと切草に似たり。○大洋子云く、按ずるに二種あり本書
にいふは功能よわし、一種小草あり、ひめおと切草といふ、功能甚たおほし、選ぶべし。○馬琴云
く、予が異に著はしたる俳諧歳時記、弟切草の條下に、これらの説を漏らせり、因に今茲に録す。
弟切草、むかしは知る人稀なりしにや、近頃よく人も知りて、かく審かに説く事となりぬ。

第九套 卯月の舞雲雀

伊原二郎武章が子供妙、多次吉は、いぬる年より山田信二郎詮通が庇みを稟けて、江州觀音寺
の城中にあり。詮通深く彼等が孝心に感激し、家に養ひてわが子の如く慈しむ、手習はし物讀ませ、
又多次吉には弓馬翺法さへ教へけるに、武藝その器に堪へたれば、未だいく程もあらぬに、年長けた

る方にもち勝ちてぞ見えし。かくて次の年月月上旬詮通はある口の弓を射んとて、妙と多次吉を將て庭に出づるに、日來好みて雲雀を畜狎け、簀より出して高く舞はしなどするに、雲雀は主の手に従ひて、或は上り或は下り、進退こゝろに任せずといふことなく、終に逃げ去らずして、簀にかへり入りしかば、詮通ふかく寵愛して、この日も雲雀を簀ながら庭にもて出でて、的を射果つるまでこの鳥をも遊ばせばやとて、手づから簀の門をひらき、さて多次吉とともに、矢なみ繕ふにぞ、雲雀は廳て簀を出でて、蒼天を指して翔ひ揚る折しも、雄手なる岬より、白斑の鷹忽然と落し來つ、雲雀を逐うて矢庭に捉へんとす。詮通信と見て大いに怒り、「あれ射てとれ。」といひも果てぬに、多次吉は唯今刺うたる弓矢を、きり／＼と縛きかため、丁と發せば過たず、鷹の直中を射たりしが、鷹は矢を負ひながら、雲雀を無手と搔い掴み、端然として死したりける。その時詮通は、妙、多次吉と共に、走りよりつ、件の鷹を見るに、既に死したれども倒れず。雲雀は痛く攔まれて、これもはや死してけり。詮通憎さも憎しとて、廳て鷹を引き起せば、その容尋常にはあらで、全體雪より白く、窟にこれ秋麩の道を得て、楚王の爲に鷲を落せるにも、をさ／＼劣らじと見ゆる逸物なり。頂は盤を載せたる如く、羽毛は白銀を延べたるが如く、前にむかへば腹のみありて羽翼見えず、後にまはれば飛線毛上に落つるかと思はる。剪れるときは軒の如くなるべく、眼の光は明星に似たり。尾翹、多助、背、待

尾、鳥羽、石打、芝引尾、唯一枚に覺みなして、體ひろく馬を遠くし、懸爪、鳥柄、歸り子の指の尖に至るまで、善相ならずといふ事なし。詮通これを見て大いに驚嘆し、妙多次吉にいふやう、「この鷹はこれ稀なる良禽なり。我今雲雀を失へるは、いとほしむに堪へたれど、この良鷹を射殺せる事、それにも勝りて遺憾甚し。一時の怒りに乗し、よくも認めずして射したるは、詮通が生涯の悞なり。」とて、後悔大かたならざりければ、弟は姊と面をあはし、「射藝鍛練の人なりせば、殺さでも射て捕るべきに、拙き矢前のなぐれ當りが、鷹の不運に候ひし。」と回答へつ、矢を引き抜けば、詮通は又鷹をうち反し見て大いに怪しみ、「あな不審し、この鷹の足に、一封の書翰を結びついたり。扱は主ある鳥にこそ、やうあらん解きて見よ。」といへば、多次吉忙はしく彼の書翰をとりて打開き、讀み了らず大いに驚き、「こはわが父武章が、今般の遺書にて候ひし。」といひつ、涙をかき拭へば、妙は更なり詮通は、「こは、いかに。」と呆れ惑ひ、「とく讀みて聞かせよ。」と、言ふに兄弟がはるん、讀めばなほ胸塞がりて、涙に聲も隠口の、初めには太郎五が、蠱毒にて死したる事、又雷神が爲體、その骨相に至るまで、審かにこれを寫し、雷神を撃たんとて悞つて娘蓮葉を切り殺せし一五十一、太郎五が日来鍾愛の鷹、雪の由に書を託して、最期に一言を告ぐる趣を書寫し、「怨敵雷神を撃ち溺らして、遺恨甚しといへども、悞つて娘を殺せし罪をいかにせん、よりに自ら領主に罪を訴へて、刑

を受くるものなり。二人の子ども父が志を繼ぎて、惡僧雷神の往方を索ね、宿恨をはらし得させよかし」と、讀みも果てずはふり落つる、涙は泉の涌くが如く、聲を惜しまず泣きにけり。詮通もいと理なれば、これを慰めていひけるは、「飛鳥心ありて書を百里の遠きに傳ふといへども、人は眼眩くして、絶えて知覺らず、忽然一箭に射殺させしは、われも遺憾しくおもふなり。しかはあれど物に定數ありて、みな天に係るといへば、武章が横死は更なり、この鷹も又惜しめどもかへらず。とかく何事も定業なりと思ひ諦らめ、父母の怨みを雪めんこそ、又なき追福ならめ」とて、言語を竭して諫めしかば、妙、多次吉はいよ、打泣きて、諸共にいふやう、「わが同胞殿の御庇みによりて、路頭にも呻吟はず、親とも師とも思ひ奉る、その御慈しみの深き事は、琵琶の湖水といふとも及ぶべからず。しかるに過世あしくて、父も母も非命に世を去り、剩へ仇人の往方をしらす。加之わが伯父の、手押れし鷹のはるふくと、父が使をいたせしに、とも知らずして射殺せし、思は鳥すら知るものを、人として豈孝行の心なからんや。願はくは今より身の暇をたまはりて、底倉へ起き、面のあたり父が張せたる迹をも見て、最期のやうをも尋ね問ひ、雷神が往方を索ねめぐり候べし。この事許し給ひね。」と、かき口説きつ、同胞が、今は只父の像見の遺書に、むなしき鷹を抱き添へ、袖の雨呼ぶ鳩吹の、鳩ならなくに二つの枝の、枝にはなれし歎きせり。詮通聞きて眼をしばたき、「兄弟の哀傷さる

事なれども、よしや思ひたちて底倉へ到ればとて、仇人なでふ彼處にあらんや。他は、腹を殺したるものの子なりなど、縁故をしらざる里人等に、いはれんは父母の羞なり。善には善の報いあり、惡には惡の報いあり、もし志移らざば、天運循環して、居つ、雷神が在處もしるべし。曾我殿原が苦心十八年にして、や、宿志をはたせり、それさへ北條といふ後盾なくば、剛敵前經を狙撃つ事をようせじ。況いて汝等この地を離れ、誰に便りて望みを遂げんと思ふ、何事も詮通にうち任せよ。」といひ諭して、丁寧に教訓し、頼りに彼の鷹が人にも勝りしを嘆賞して已ます、終に人倫の禮をもて、城外の曠野に葬るに、奴隸等鷹を埋むるとて土を起すに、上中より觀世音の小像を得たり。これなん妙多次吉が亡き父母の、二世の直過なめり」とて、即てその所にさ、やかなる堂を造りて、彼の觀世音を安置し、武泰、武章、元江が位牌を、菩薩の御前に居る、更に一つの竿石を建てて、靈鷹塚と彫りつけさし、且亡者のために、追薦の佛事を修行したりしかば、妙、多次吉は、詮通の高恩を感謝しつ、底倉へ赴く事を思ひ止まり、毎日に彼の觀音堂へ詣でて、父母、伯父、雪の山が菩提を帯ひ、仇人雷神の往方をしらし給へと、禱る外他事なかりけり。かくて詮通は主君氏頼に、妙、多次吉が事武章が事、雪の山が信義雷神が隱匿、總てこの件の事を審かに聞えあけ、並に物右衛門が牛を贖りたりたるものは、雷神といふ惡僧が所爲にて、二郎二郎武章は、知らずしてこれを買ひしより、遂に連

累かさねされたる、縁よ故もとを申まうしあかし、妙たへ、多次たじ吉きちが至し孝かうの爲ため體たいを聞きえあけしかば、氏うぢ頼より深ふかく賞しょう美うびしつ、「二
郎にらう二郎にらうが横わう死し、彼かの鷹たかの事こといと不ふ便びんなり。汝なんぢ妙たへ、多次たじ吉きちとやらんを補たすけて、惡あく僧そうが往ゆ方へを索たづね、怨うらみ
を報むかはせよ」と仰おほせけるにぞ、詮のり通みちうけたまはりて家いへに退しりぞき、即すなはち主しゆう命めいの趣おもむきを妙たへと多次たじ吉きちに説ときし
らし、「多次たじ吉きちが武ぶ藝ぎ、今いま一いち兩りゆう年ねん手て練れんせば、われ諸もろ共どもに諸しよ國こくを徧へん歴れきして、宿しゆく望ぼうを果はたさすべし。皆みな是これ國
司しの恩おん澤たくなれば、必かならずしも仇あだに思おもひなせよ」といふに、姉あねも弟おとも感かん涙なるを拭ぬぐひあへず、いよ、志こころざしを勵はひ
ましつ、多次たじ吉きちは益ますく武ぶ藝ぎに心こころを委ゆたね、且かつ同どう胞ぱう日にち夜や己おのれを責せめて、よく詮のり通みちに仕つかへしかば、奴ぬ婢ひもこ
れが爲ために羞はぢちて、その誠まこと心こころを稱ほ讃めぐるはなかりける。

第十卷 鏡山の朝雲布

扱さても兇きん僧そう雷らい神かみは、底そこ倉くらにて武たけ章ちやうが一いち刀たうを脱だつれ、その夜よ取とるものも取とりあへず、彼かの山やまを逐ちゆく電でんし、斥さ
して往ゆくへは定さだめねど、是こゝ首かしこと立たち濟しび、ゆき／＼て近あふ江みなる、鏡かみ山の麓ふもとを過とぎるに、此この處ところは故ふる
郷さとへもほど遠とほからねば、知しりたる人ひとに逢あひもやするとして、昔むかし熟じゆれたる山路やまぢなれば、人ひとも通とほはぬ間ま道ちを
經へて、守もり山のかたへ繞めぐり出いでんとす。頃ころしも五いつ月がつ四よつ日にちの事ことなるに、天てん俄にはか
盆ぼんを覆かへすが如ごとし。山やま路ぢなれば笠かさやどりする家いへもなく、樹この下もとに立た在すみつ、晴はるゝを俟まちつに、雷かみの鳴な
る事こといと烈はげしく、雷らい眼がんを射いて晴あ望きみがたし。しばしありて雷らい聲せいをよまひ、雲くも霽はれて夕ゆふ陽ひの輝はに斜な

なり。日くれてはいと、難儀なるべしと思ひて、濡れたる衣も絞りもあへず、樹の下を走り出でて、行く事いまだ五六町に及ばず、と見ればふりたる橋の間に挟まれて、苦しげに呻くものありけり。いと怪しくて近くなるまゝにこれを見れば、おどろ／＼しき獸なり。雷神これを見かう見て思ふやう、こは世にいふ雷獸なるべし、推量するに、このもの霧にこの樹の上に落ち掛り、勢ひに乗してかかる大木を打ち裂きたるに、終に木の裂目に挟まれて、雲に乗る事を得ざるかと覺し。世には未熟なる雷公もあるものかな。さらば助け得さするぞ」といひしらし、錫杖を突き入れなどし、とかくして掻き出しければ、その獸忽然に見えず。「扱も逃足の疾き奴なり」と打笑ひつゝ、又ゆく事二三町にして、不圖胸のあたりを掻い探り、こは虚氣し、日のくれぬ間に、此の山路を過らんとて、心忙はしかければ、晴間を俟ちたる樹の下に、頭陀袋を忘れたり。「彼のうちには蓮葉が像見なる鏡さへあるものを、山路なればいまだ人も取るべからず、走り歸らばや」とひとりとごち、即てとつてかへさんとするに、日は忽然に没り果てて、いと暗うなりつゝ。あな怪しきかな、まだ暮るゝには程もあるべう思ひつるに、かくては頭陀袋を取らん事も便なし。今宵は守山に宿かゝて、翌の朝まだきに再び此の山下に立ち歸り、それを索ぬるとも廻からじと尋思して、遂に守山を指して急ぎにけれど、野千玉の鳥衣なれば踏にや迷ひけん、行けども／＼里へ出でず。こゝろ頻りに焦燥ちて、右か左かと思ひたゆ

たふ折しも、遙か前面に火光ちら／＼と見えしかば、扱は彼處に人は住むなりと嬉しくて、かの火を
目當に辛うじて、その所に行きて見れば、果して谷陰に一軒の草舎ありけり。頓て諸折戸をほとく
と敷くに、内より女の聲して、「誰」と問ふ。雷神答へて、「これは山路に迷ひたる旅僧なり、顛はくは
この夜を聞きし給へ」といふ。彼の婦これを聞きて立ち出で、荒れたる折戸を開きつゝ、いふやうにこ
の所は人を宿する家にはあらねど、驚にわが夫のくりなき懼ちたるに、御身に救はれ侍りしとぞ。
この再生の恩恵あれば、竊かに宿し進らすべし。然りとも聲すべき飯粒もなし、露宿せんには勝れる
方もあらんかとなり、かくても厭ひ給はずや」といふに、雷神は深く怪しみながら、その事は端なく
も問はず、「縦ひ一椀の飯は給はらずとも、一夜をあかきし給はば、望み足りなん」と回答するにぞ、
婦點頭きて、「さらば此方へ」といふ。雷神は誘引はれつゝ、入りて見るに、家のさま尋常にはあらで、
太古の穴居めきたり。家の内に燈火をおかねど、明きこと晝の如く、おくまりたる處にも引きめぐ
らして臥したるは、これが夫にや。是れさへ怪しきに、日今あるじの婦が、「夫の必死を救はれたる恩
恵あれば」といへるにて思ひあはずれば、この處は雷獸の情なめりと思ふに、つらく彼の婦を見れ
ば、家の内の明きも、これが身の中より、光を發つにてぞありける。怪しき事限りなけれど、愁ひに
脱け去るとも、外の宿かる家のなければ、せんすべをしらず。われにもあらでうち曙り届れば、婦う

ち笑みて、「客僧は長途に疲勞れ給ふならん、櫛は垂れねどこ、には蚊といふもの絶えてなし、とく睡り給へかし」といひかけて、棚なる木枕をおろし、さ、やかなる藤の綱代屏風を建てめぐらし、「この處御身が臥房に侍り」と云ひ知らすれば、雷神は鹿みの淺からざる山を喜び聞えて、屏風の内に臥したれど、何となくうちとけては睡られず、とくこの夜のあけよかしと思へば、夏の夜もいと長くて、や、丑二の比及になりつ。浩かる處に誰とはしらず、外面に來て門の戸をあら、かに敲き、「海神のおん使なり、翌の節句には武佐、越川、小幡の間に、朝雨を沃けよとなり。この三日が間は、こ、の木番なるに、必ず懈り給ふな」と、高やかにいひしらし、内にも入らで歸りけり。雷神はこれを聞きて思ふやう、「世にいふ龍神雷公を役ふの説、實に故あり。節句なれば降らせずともあれかし、旅路の雨は我も憂きものを」と叱けば、あるじの婦枕方に來て、「客僧未だ睡り給はずや」と問ふに、雷神答へて、「未だ睡り候はず」といふ。婦かさねて、「然らば頼み奉るべき事あり、甲夜には物に紛れて、法號も問ひ侍らざりし。御身は何と呼ばれ給ふにか」と問ふ。そのとき雷神は、屏風掻い遣りつ、起き出でていふやう、「愚僧が法名は西啓、號を雷神と稱するなり。頼み給はんとは何事にや」といふ。婦含笑みて、「さてはわが爲にはよき名にておはするなり。今は何か懸み侍らん、わが夫は嚮に御身に救はれたる雷公に侍り。しかるに大木の裂目に挟まれたる時、いたく腕を折傷きしかば、翌の朝雨に

出でがたし、元來下界へ落ちて、人を驚かし物を毀ふ事は、天帝の深く誠め給ふなれば、このこと
明白には聞えあけがたし。御身雷神と呼ばれ給ふこそ幸ひなれ、詰且わが夫にかはりて、武佐小幡の
ほとりへ、雨を降らして給はれかし」といふ。雷神聞きて大いに驚き、「愚僧は久米の仙人にあらず、
いかでか雲に乗り雨を降らす事をようせんや。こは思ひもかけざる事なり。」とて固辭みしかば、雷
公の婦又いふやう、「雲の上を飛行すること、容易からずと覺すめれど、その事は術あり。まけて承引
き給ひね。」と、頻りに頼み聞ゆるにぞ、雷神はいと心もとなく思ひながら、かくまで云はれて推辭む
事を得ず、しぶく諾ひながら、なほ安からぬ氣色なれば、雷公の婦慰めていふやう、「わが夫再生の
恩を稟け、聖父夫の役にかはり給へば、いかで些との報いをせざるべき。しかれども御身は積愆の人
にして、絶えて積善なし。今より志を轉し、行ひを改めて誠の道に入り給へ、わらは今一術を傳
授し侍りなん。その術をもて衆生の爲に施し給はば、久後恙なかるべし。もし身の爲にして、恨みあ
る人に冠せんと計り給はば、身をじほすも又その術にあり、御身雷神と呼ばれ給ふ事、今宵の因に相
稱ひて、名詮自性の理にこそ。」と、丁寧にいひ諭し、さて雲中を飛行し、雨を呼び風を發し、又水
脈をとゞむる術を教ふるにぞ、雷神は數回にして、その呪文を記え得たり。雷公の婦又いふやう、「既
にこの術を得給ふとも、淫酒に懸念するときは、その術立地に破るゝなり。只先非を悔いて、徳を

積つみ給たまへかし。」と、しばく教訓けうくんし、一つの壺つぼをとり出し、一條ひとえだの條せうと共に、これを雷神なるかみに授さづけていふやう、「御身おんみ翠あすの朝あさ、雲くもに乗りて武佐むさ小幡せうはたの邊ほとりに到いたらば、壺つぼなる水みづを條せうの葉はに浸ひたして、幾度いくたもしばやかに揮かり給たまへ、よき程ほどに雨降あめふるなり。水みづの竭つくるを期まとして、このところへ歸かへり給たまへ。必ずしも勢いきほひにまかして、踏ふみな外ほかし給たまひそ。」と、よろづ其その心こころを得えするに、夏なつの夜よはやく明けあけなんとす。折せりしもあれ一朶いちだの雲くも、猝然しゅうぜんとして門方かどばたに起おこれば、雷公かみうりの婦指つよゆびさして「とくく彼の雲くもに乗り給たまへ、時刻じこくは今いまぞ。」と急いそがしたつれば、雷神なるかみは壺つぼを抱かかき條せうをとつて、閃ひらりと雲くもに乗りつれば、飄々へうくとして雲くもに入る鳥とりのごとく、氣きに裏つまれ風かぜに吹ふきあけられ、やがて中天なかをらに到いたりけるとぞ。

因あなにいふ、門人もんじん琴驢きんろうこの段だんを清書せいしよする夕ゆふ、予よに問とうて云いく、「兇僧きようそう雷神らいじうが雷獸らいじうの家いえに歇とまり、雷獸らいじうに代かりて雨あめを行かる物語ものがたりは、搜神記そうしんき以下の小説せうせつに見みえたる、阿香あかうの事ことを作り換かへたりとは見みゆれど、こはあまりに理外りぐわいの談だんにはあらずや。」といふ。予よ答こたへて云いく、「浮誕ふたん詭論きりろんは小説者流せうせつしりゆうの常談じやうだんなり、しかれども雷獸らいじう人を備やとうて雨あめを行かるのみを、理外りぐわいとして難なんずるはいかにぞや。世よに狐きつね狸ねこのひとを妖たからす事ことは人常ひとつねにいふ、狐狸こりりと雷獸らいじうと何なにの差別さべつかあらん。羣書纂要ぐんしよさんえうに、雷公らいこうは猪ぶたの首かしらにして、手足てあしおのおの兩ふたつの指ゆびありといへり。雷獸らいじう雷鳥らいてうの圖說ずせつ、粗卷端ほろまわらんに載のすといへども、なほ盡つくさざるをもち、再またびに證しやうすべし。

『信濃地名考』に云く、蓼科山に栖む鳥は、世に圖する種なり。畫圖に少しの差ひあり、戴冠立たす尾も長からざるのみ、雄の形しやむに似て高さ二尺許り、黒色に白斑あり、烏鷄の如し、丹頂の肉あり。雌なるもの黄雌鷄に似て、胸のうち黒く白斑あり、窟穴に栖み松の翠を啄むといへり。

○後鳥羽院御集「しら山の云々 見えたり」或はこの山蓼科夜半に鷄鳴ありなどいふは、虚談なるべし。一歳水無月の末に登山す、あら野に一夜を明して、五十餘町を登る。この日霧ふりて山に入聲絶えたるにか、かの鳥六七見えたり。つくみ見るに羽さき圓く、高く飛びさらん事をはかりて、數輩東西に立ちわかれ、笠をかざし杖をならして追ふ。をどり甚たたけくして、しかも聲なし、二たび押へて終に石中に逃げ入り、たゞ籬一ツを得たり。雌雄石の間にありて籬を呼ぶ、その聲蟲の鳴くが如し。幽栖の鳥人に驚きて聲を出さず、鷄鳴は妄談なるべし。籬大いさ鳩の如し、高さ五寸ばかりに丹頂いまだとゞのはず。○又この山科に異しき獸あり、夏月雷雨の起るとき、小さき獸石穗にあらはれ、飛んで雲に入ること蝨の如し、須臾に雨盆を傾くるが如しといふ。あるとし暴雨の後、山より死して流れ出づる小さき獸二ツあり、大いさ小犬の如くにて灰毛なり、頭長くちばし半ば黒し、尾は狐の如くふさやかに、利爪は鷲の如し。吉澤云く「按ずるに、霹靂の地、樹木に爪の痕あるもの是れなり。土佐國海邊には、夕立ちこらんとし、岩の上に小さき獸あり、鳥銃もてうち得て、かみなり汁

と呼べるものは是れなるべし。近年六月十日暴雨に、農夫野外を逃げはしるに、雷光一發し、いかづち耳もとにひゞき、二人の間に落つるものあり。さきなる背に飛びつき、肩を踏んで騰らんとするを、跡なる猛者走りかゝりて、かの獸を大地に投げつけ、押へてからめ得たり。村人雷をとらへたりとさたして、見るもの市の如し。その獸の狀、右にいふものに少しもたがはず、近江國かゝる村にて、くはしく見たる人のかたりし、是れさらにうきたる事にあらず。明和七年閏七月、伊奈郡麻如し。○左
當レ作レ右。

馬琴云く、「これら近世印行の書といへども、みな實録なり、狐狸は人親しく見るが故に、その怪を説けども怪しまず。雷獸の説は疑ふものあり、予が管見必ずしも博士ぶりて、蛇足の辨をなすにあらず、只その聞けるところを談するのみ。」琴驢遂に筆を添へて、予が言をもて此の卷のをほりに記せり。

雲妙閒雨夜月卷之四 終

雲妙開雨夜月卷之五

東京 曲亭馬琴編次

第十一套 桑の眞日遣犬

延文二年五月四日の朝、近江國愛智川武佐の間雷雨甚しく、琵琶湖の水を卷き揚げたりとおぼしく、鮒鮓など活きながら雨に糺りて降る事夥し。節供なれど民間は戸を垂れこめて、櫛は昨夜の儘に釣りも下さず、或は松葉折り焼きて、時ならぬ蚊遣火を燻らし、あるは心ほそき聲して、普門品を讀むもありけり。こゝに小幡の商賣友定物右衛門は、いぬる年國司の威徳によりて、失ひつる黄半をとり復し、忽地に憤りを消らしけるが、今年はなほ牛の數おほく養ひ殖して、鹽を草津へ積み送り、活業のたつきいよ、宜しかりき。しかるにこの日の雷雨に、牛小屋の屋根を吹き剝られ、牛はみな直ぬれに濡るゝにぞ、物右衛門は慌忙きつゝ、牛牢の男どもを屋の上にのぼし、鹽薦を葺きかけて、雨漏を禦ぎとゞめんとて、主従いと罵しく罵りあふ折しも、雷火一發して、車輪のごとき天火、頂の上に落ち懸ると見えし、直に屋棟を衝き破り、繋ぎたる牛の間へ掉と落つる音、天地を響

かして、恐ろしなどいふばかりなし。これに驚きて彼の黄牛はきらなり、近曾あまたの金をもて、購ひ得たりし牛ども、五七頭斃れたり。こゝろよわき男どもは、忽地に氣を失ひ、屋棟より滾び落ちて、背を駈らするもありけり。そが中に猛き牛牽ありて、これを事ともせず、物ありて棟桁にとり著きつゝ、雲に乗らんとするを、鞭もて矢庭に打ち落し、押へて索をかけたるが、暫しが程は煙に裏まれ、物の恐ろしさに絶えてこれを知る者なし。かくて雲散りて雷鳴もをさまりつ、物右衛門は人を醫師の家に遣はして迎へ來らし、火傷したる者、氣を失ひつる下男下女等を見するに、醫師は騒ぎたる氣色もなく、目今雲に裏まれ、暴雨と共に零ちたる小鯨、行潦の中にありてひち／＼と反ねるを「あれとりて得させよ。」といへば、一人の下郎心を得て、即て彼の鯨をもて來るを、醫師受けとりて、昏倒えたるもの胸の上に載するに、鯨はなほびち／＼と反ねたり。且くして死したる人、云というて蘇りつ。醫師これを見て、さもこそと亡語ち、楊起が簡便方に見えたる、參、歸、麥門、五味子の四味を調合して、「これとく飲ませ。」といふに、下女連忙しく煎じ果て、二三貼つゞけて服用したりしかば、その人こゝろ清々しくなりぬ。又雷火に火傷したる者には、降眞香を焼きて、その煙にて燻すに、溜汗塌きて立地に乾き癒えたり。かく幸うじて恙なき事を得たれども、物右衛門が妻は、雷聲に打驚き、聲となりけるが、これのみは治すべきやうなしとて、附子一味を煎じ用ゐるに、汗

出でて心持は常の如くなりけれど、耳は絶えて聴くことを得ず。こは物右衛門が深く思ひ考へずして、武章を係累きたる前の悪報なるべし。物の劇ぎ鎮まり、醫師も歸りて後、彼の猛き奴隸物右衛門にいふやう、「今朝の霹靂にて、夥の牛を殺し、家刀自は壘となり給ひ、その餘のもの過半幸き日を見たれど、僕不思議に雷公を生拘りおきたり。思ふまゝに仇を報い給へかし」と、いと誇りかにいふ。物右衛門これを聞きて冷笑ひ、「むかし朝夷三郎、和泉小次郎などいふ勇士すら、雷公を生拘りしといふ事は聞きも傳へず、かかる時にはざる戲言は云はぬものぞ」と云ひ諭して、實事ともせざりしかば、件の奴隸大いに焦燥ち、「扱はおのれ昔の勇士に勝れり、實言か虚言かまづ見給へ」といひかけて、牛小屋に走り去り、索かけたる儘肩に引き擔ぎて來るを見れば、雷公にはあらで法師なり。落ちたる時に甚く臆を打ちたるにや、半ば死せるが如くなるを、衆皆恐るゝと見かう見るに、年の齡未だ三十に至らず、面の色白く頬髯青く、眉黒く唇赤し。主夫婦は云ふも更なり、これを見るもの大いに呆れて諸共に云ふやう、「雷雨のとき河魚の降るは常の事なれど、天地開闢より以降、法師の降りたるといふ事は聞きも及ばず、又世に雷婆々など呼ばるゝはあれど、そは雲に駕り雨を行るものにはあらず、口囂しくて聲の雷に似たるをいふのみ。もし海坊主などいふ物の、龍に纏揚けられ、小魚と共に降りけるにや、いと怪しき事なり」といふ。當下物右衛門は、熟とこの法師

を見て大いに驚き、是れなんいぬる年、武佐の飄夫雨間武平が一子にて、いと早くより出家せし、西
隆といふ法師なりと名告りて、わが家の黄牛を杜撰りとりたる惡僧なり、汝等きは見ざるや」といへ
ば、衆皆掌を拍つて呵々と笑ひ、「寔にしかなり、這奴義には黄牛を盗み去り、いま又夥の牛を殺せ
り。あな憎し、とく國司の御館へ引きて、縁山を訴へ給へ」といさまきつ。物右衛門が妻は尋ひて、
縁山を定かには聞きも知らねど、や、雷神を認りにければ、ますく恨み憤り、涙さしくみ罵りけ
り。さらばうち捨て置くべきにあらずとて、物右衛門は事審かに村長に告けしらし。これと共に雷
神を牛牽共に扛かしたつ、觀音寺の城へとて急がすれば、彼此の老弱早く傳へ聞き、雷公の法師にな
りたるを見んとて羣集し、所々に立在みしかば、街も狭うなりにけり。この日觀音寺の城には、端午
の佳節たるによつて、佐々木家の諸臣、主君に慶賀を申して退出けるに、山田信二郎詮通も、亭午の
比及に家に退きしが、妙は詮通の妻の代参として、鎮守の神社へ詣でたれば未だ歸らず、太次吉は詮
通に佳節の祝儀を述べ、出仕の勞れを問ひ慰むるに、詮通は書院の縁頼に飾りたる、高浦太刀司矢首
鐙を指さして、太次吉にいふやう、「端午に旗を立て弓矢首鐙を列ぬる事は、等持院尊氏卿、兵馬の權
を執り給へる時、五月五日に始めて始まる。こゝをもて吾兵の基業として、兩陣の形勢を作り、角を
吹き鼓を鳴らし、五回五色相反の旗を揚げて、互に先後主客の用をなし、挑み合うて後凱旋の景迹を

もて是れを賀す、名づけて草教といふ。草教の事、靈尻三絃編に見えたり、或説に、是れを藤森舍人親土の故事とするは誤りなるべし、こはいと愛でたき例なるに、去年月延文三年四尊氏卿薨じ給ひ、新將軍義詮朝臣、箕裘を承嗣ぎて、天下の御守たるによつて、わきて演武草教の嘉例、懈怠すべからざるよしを、仰せ知らし給ふとぞ。かかれば詮通がごとき數ならぬ陪臣も、いさゝか草教の趣に擬し、弓矢首鏝を列ねたるが、思ふ所あれば弓矢も尋常のものにはあらで、桑と蓬をもて造らしつ。いにしへに云く、禮の内則、鶴林玉露等の説、桑弧蓬矢、子生まれてこれを射て、もて四方の志あるを示す、その父母これを教へ、これを嘗むを第一義とすといへり。夫れ桑は神木なり。方書その功を稱すること最も精細し。又一種山桑あり、桑に似て材弓矢に中るといふものはれなり。又蓬は禦亂の草なりといへり。本草木下集解、正字通等の説。こ、を以て我この弓矢を節物とす。今日毎家に菖蒲を葺き蓬を挿すも、その心同じ、菖蒲は蛇毒を解くに功あり。この三種の草木、もて百邪を征すべし、故にわが家は桑と蓬の弓矢をもて、藥玉に代ふるものなり」と説き示すに、太次吉ふかく感嘆して、膝の進むを知らず、なほその細しきを問はんとする折しも、小幡の物右衛門「訴へ申すこと候」と呼門ひつゝ、あやしけなる法師をいたく縛めたるを、五三人の奴隸に扛き擔はし、村長と共にこれを縁頼の下に引きする、皆つゝ申すやう、「さてもこの朝驟雨に、雷公いたく鳴りて、物右衛門が半小屋の上に落ちかゝり、物右衛門が妻は聲となり、その餘或は昏倒ひ、或は火傷

せし者ありといへども、幸ひに命恙なし。しかるにこれなる奴隸心ごま猛くして、矢處に落ちたる雷公を敵き伏せ、遂に縛め得て候ひしが、こは實の雷公にはあらで、往に西啓法師と名告り、物右衛門が家の黄牛を杜撰りとりたる悪僧なり。怪しき事なけれど、その落ちたる時に賭を打ちたるか、口酔へるが如くにて、問へども應へだにせず、よりに引き來りて訴へ申すなり。いと、いひも果てざるに太次吉は、すは父母の仇ござんなれと、袴のそば袖みあげ、飛びもかゝるべき形勢なるを、雷通尻目にかけてこれを止め、端近う立ち出でつゝ、雷神と見かう見て、物右衛門等にいふやう、「このもの霹靂と共に墜ちたるは、理外の奇談なり、必ず別に故あるべし。そはとまれかくもあれ、往に黄牛を奪ひ去つたる悪僧ならば、是非を論ずるに及ばず、さらに放しがたき癖者なり。とりな逃しそ」といひ諭し、俄頃には兵五七人を呼びていふやう、「兇僧昏絶すといへども、驚かさば醒めな。背をいたく打つて見よ」といへば、雜兵等こゝろを得て、一人拳を握り固め、やと聲かけて暖と打てば、雷神動ちたる眼を睜り、且驚きかつ呆れて、思ひ惑へる氣色なりしが、しばしありて、そも我をばなどてかくは縛めたるぞ」といふ、そのとき詮通膝立てなほし、刀を抜き立てつゝ、雷神を信と頼まへていふやう、「汝小幡なる物右衛門が牛小屋に墜ちて、縛められたるを知らすや。故あるかな汝いぬる年、物右衛門を欺きて、黄牛を奪ひ去り、瀬田の二郎二郎といふものに賣り與へて、彼を連累せり。捕む

へし二郎二郎は、妻を喪ひ子に別れ、剩へ底倉にて汝に撞見ひ、直に撃ちとらんとして、あやまつて、嫂を切害し、自ら罪の脱れがたきを知りて、領主に訴へて死を賜びをはんぬ。しかるに是れなる少年は、彼の二郎二郎が兒子にて、太次吉と呼ばるゝものなり。只管父母の仇を復さんと思ふのみ、日夜寢食を安うせず、その孝心天に通じ、神明これを憐み、居ながらその仇人にあふ事、是れ併しなから汝が牛を盗むの悪報、再び物右衛門に生拘らるゝ、天の綱は遂に漏るゝことなし。とくく首状せよ。」といふに、太次吉は怒氣面に現はれ、刀の柄を握り詰めて、雷神をしばし瞰まへ、「汝は共に天を戴かざるの能なり、たゞに撃ちも果すべけれど、今手を下さざるは、國司の仰せをまてばなり。無頼の兇僧雨田の西啓、緯號雷神と呼ばるゝものなりと名告りて、天誅に伏せよ。」とぞ罵りける。雷神これを聞きて冷笑ひ、「小ざかしき童が仇人呼ばはり、さほど聞きたくば名告りて聞かせん。いぬる秋神崎の遊女、蓮葉に謀られて、寺に歸る事を得ず、暫し故郷に立ちかへりしころ、小幡の商人を欺き、牛を奪ひ去りて是れを路銀に換へて、鎌倉へ赴くとて、ゆき／＼て箱根路にて、始めて白雲黒雲に會し、底倉の里人を計策りて、無名寺に住持せしが、思はずも汝が父に認められ、その事發覺れて、彼の地を脱れ去り、昨夕鏡山の麓を過るとて、雷獸の栖に夜をあかし、これに語らはれて、愛智川小幡のほとりへ、朝雨を降らするとき、興に乗じて不覺に雲を踏み外し、悞つて物右衛門が們に捕めとら

る、といへども、われ國司をも屑とせず、況いて黃口孩兒何とかする。さらば退りなんこと飽く
までに廣言し、つと身を起せば雜兵ども、逃さじと聞くと、足を飛ばして撲地と蹴み倒し、續いてか
かるをふり拂ひ、唱ふる呪文に奇なるかな、縛めの素自ら、放弗と斷離れてはらりと落つれば、詔
通大いに怪しみて、「それ柄めよ」と焦燥つにぞ、雜兵等笞を揚げて、打ち倒さんと羣だちしが、われ
にもあらで象棊倒しに、破々と倒れけり。雷神はさらこそと冷笑ひ、袖ふり拂つて去らんとするを、
物右衛門村長は、奴隸とともに立ちふたがり、脱しては後日の越度と、思ふばかりを共力にて、遮り
留めんとすれば諸共に、掉と轉覆びて動き得ず。詔通焦燥つて長押なる、薙刀の鞘を外し、囊直にか
けんとするを、ものくしやと身を反り、かい潜り躡り越ゆ、その疾きこと電光の閃くごとく、また
陽炎の沖るに似たり。太次吉これを見て大いに怒り、縁の柱に掛けたりし、桑弓に蓬矢を刺ひ、まづ
引き發さんとすれば雷神が、再び唱へる呪文とともに、一朶の叢雲忽然と天降りて、彼の兇僧を引裏
み、霹靂一聲天地を動かし、さと走る電は、碎けて人の眼を遮り、雲層遙かに雷神が、往方は知れ
ずなりにけり。詔通太次吉は雷神を走らして、遺恨やるかたなく、仆れたる雜兵、村長、物右衛門等
は、漸くに蘇でたれど、皆果れ果ててせん術をしらず。濡かる所に妙は、鎮守の神社より歸り來つ、
雷神が事を聞きて大いに急きたち、太次吉と共にこれを追ひ留めんとするを、詔通忙はしく呼びと、

め、「汝等志はさる事ながら、悪僧既に幻術をもて、雲に駕し風を起す、追ふといへども勞して功なし。彼日今脱れ得たればとて、天の罪はよも脱れ得じ、必ずしも急りなせそ。」と教訓す。理に迫められて、姉も弟も齒を切り、拳を擦りつ、漸く思ひ留まりけり。その時詮通は、物右衛門を近く呼ばし、「汝巽に牛を盗まれたる時、輕忽に訴へて、二郎二郎を冤けたる、その過ち甚し、然りと雖も又雷神を搦め得て訴へ申せしかば、偉かに前の過ちを贖ふべし」とく退出よ。」といひ懲らせば、物右衛門大いに畏みて、村長に伴はれ、牛牽の奴隸等を將て、小幡へ歸りしが、夥の牛は殺しつ、妻は尊となりて、是れより活業の便を失ひ、奴隸等には皆身の暇をとらし、物右衛門自ら杖を肩に當てて、僅かなる鹽の計賣りをいたし、夫婦辛うじて露命を繋ぎしが、後にはいかになりゆきけん、知る人もあらずなりぬ。誠むべし物右衛門、巽に無實の訴へによりて、武章を連累し、夫婦非命に死し、父子離散す、その艱苦比へんに物なし。痛ましいかな武章、清貧顛直にして、盜賊の汗名を負へり、こゝをもて天人と共に怒りて、物右衛門夫婦、又この殃危にあへるなるべし、七度素ねて人を疑へといふ、世俗の常言宜なるかな。さる程に雷神は、火叉の術をもて、城の東なる岩戸山に飛び去り、頭を回らして彼此を直下せば、谷陰より煙ちら／＼と立ち上れり。雷神是れを見て、「かかる深山にも住む人はありけり」といひとち、その煙を自當に少し山を下れば、山賊とおぼしき悪僧、只一人さし

向ひて、木の枝を折り焼きつゝ、一壺の酒を熾むるにぞありける。そのとき一人の悪僧は、足音を聞きて雷神を見かへり、「こは如何にしてか、吾僧がこゝにあるを知りて來給ひつる。寔にはからざる再會なり。」といふ、この悪僧等は別人にあらず、白雲黒雲なりしかば、雷神も深く歡び、「わかこゝに來れるには甚だ故あり。汝等は又いつの比より、こゝに來り住むぞ。」と問ふに、二人答へて、「吾僧底倉を脱れ去るといへども、師父の往方をしらず、しばし足柄山に隠れて待ち合はせしが、終に音耗なければ、程ちかくありて捜し出されんかと陸み、二人もろともに東海道をのほりつゝ、一昨日この山にわけ入りて、又萬の山客とならんとす。正に是れ一壺の酒、師父を引いて別後の情を述ぶる事を得たり、まづ三杯を酌み候べし。」といひもあへぬに、雷神酒の壺をとつて、谷底へ投げすつれば、白雲黒雲大いに驚き、「などで吾僧の好意を、かく仇にはし給ふ、御身飲まずば飲までもあれかし、けふの命の瀕なるものを」と眩くにぞ、雷神莞爾とうち笑みて、「さおもふも理なり、われ昨夜鏡山の雷獸に、奇術を傳授せられ、雲に駕し風に御す、隱形飛行はいふも更なり、水脈を斷ち泉を漏らす事をさへよくす。只諱む所のものは色と酒とのみ、もし淫酒を近づくとときは、わが術忽ち破れて、再び行ひがたし、汝等も慎みて酒をな飲みそ。わが今酒を撒てたるも、この故なり。」と説き示し、さて物右衛門が爲に生捕られたること、觀音寺の城中にて、縛めの索を脱け、詮通が薙刀を肩とせさりし

爲體を、いと猛く物がたり、又いふやう、「彼の二郎武草とやらんが兒子、今觀音寺の城中、山田詮通が家にありて、我を「親の仇なり。」と罵る。這奴等悉く掴み殺してんと思ひつるに、彼の武草が兒子太次吉とやらん、わが諱む桑弓をもて立ちむかひしかば、これと敵しがたくて、その矢前をのがれ、こゝに飛び來つて、輩らずも汝等にあへり。所詮這奴等を世にあらせては後安からず、まづ術をもて城中の水壇を斷ち絶り、國司氏頼を初めとして、城中の奴原を饑渴に苦しめ、けふの恨みを消らすべし。汝等はやく里にゆきて、密びやかに調伏の祭器を買ひもて來よ」と、その意を得さし、懷より金三枚あまりとり出して投げ與ふれば、白雲黒雲一議にも及ばず、「然るべし」と應へつゝ、金を受けとりて、二人諸共に走り去り、次の口にてたつて準備全く整ひしかば、雷神は峯の上の瀑布に、注連引き纏はし、ひゝらきたる岩の上に座を占めて、種々の供物を高机に置き並べ、さて白雲黒雲を呼びていふやう、「われ今日より七日の間、斷食して法を修し、城中の水壇を堰き留むるなれば、人はさらなり樵夫山兒にいたるまで、近つかする事なかれ」と聞え知らすれば、二人諾ひて、壇の下に番次せり。かくて雷神は、しばし天地を禮拜し、口に呪文を唱ふれば、靈鬘として雲起り、霧又ふかく立ち升りて、忽地その形状を見せず、只ふり鳴らす寶鐸の音のみ、をり／＼幽に聞えけり。

授も妙、太郎吉は、仇人雷神を打ちちらして遺恨に堪へず、彼既に幻術を得て、飛行自在なれば、尋常の敵手にあらず、只このうへは神佛の冥助を仰ぎ、丹誠を凝らして祈願し奉るの外あるべからずとて、同胞志を同じうし、まづ城外の觀音堂に詣でて、大慈大悲の冥助を請り、又父母の靈位を拜して、心中の鬱憤を訴へ、そのかへさ雪の山名が塚に詣れば、日はや西にかたぶきて、夏草の葉末にかよふ夕風に、螢三ツ四ツ吹きあけらるゝなど、晝の暑さをとりかへす心持ぞせらるゝかくて同胞は、塚の傍に櫛を挿し、石傍を掘りかけて、念佛十遍ばかり唱へつゝ、やをら身をおこさんとして見かへれば、年紀二八ばかりなる美女、白き單衣の袖長きを著て、黒髪をふり亂し、物おらはしき氣色にて立在みたるが、妙、太次吉をつくんと見ていふやう、「痛ましや孝心類なく坐せども、過世あしくていと早く父母を喪ひ、幾その艱苦に面憔悴せ給へり。されど續き事も今暫しが程なり、素ね給ふ雷神は、城外の岩戸山にあり。彼奇術をもて、城中の水壇を斷ち絶り、國司に寇せんと計較めり、この術を破らんには、色と酒とに如くものなし。さればとて桃々しく近づき給ふな、貝筒操簡様に計策りて、大功をたて給へかし。」とて、審かにその謀を説き示し、又觀世音の小像と、一面の鏡を妙に授けていふやう、「この尊像は往昔觀音寺の本持佛なるが、彼の寺頽廢の後、久しく上中に埋もれ給ひし、御身同胞が至孝によつて、再び出現し給へり。これを守り奉りて由に登らば、萬に

一ツも過ちなかるべし。又この鏡は、わらはが爲には主なりける、太郎五武泰ぬしの妻になりし、神崎の遊女蓮葉が彼の里にありし時、雷神に贈れるものなり。これをもて誘引ひ給はば、雷神必ず計策の隙に入りなん、努疑ひて大事をな悞ち給ひそ。」と、丁寧に聞きしらしつ、塚の後に入ると見えし、一團の烽火發と燃え、形は消えてなかりけり。妙、太次吉は忙然として、暫し面をあはし、「彼は疑ふべうもあらぬ、雪の山が魂魄なめり。」とて、頻りに感涙を拭ひあへず、「彼の靈鳥死して猶わが爲に忠あり、その志人に勝ること遠し。嗚呼奇なるかな。」と嘆賞して、再び鷹の塚を拜し、遂に觀世音と鏡を懐にして、城中に立ち歸り、詮通に緣由を告げにければ、詮通聞きて深く驚嘆し、且歡びていへりけるは、「土中出現の尊像、むかし觀音寺の本尊にてましまさば、郊外の小堂に置き奉るべきものにあらざりし。今立地に雷神が在所をしる事、昔この御佛の靈驗にこそ。」と稱讚し、「まづ國司に訴へ申さん。」とて、その夜俄頃に出仕して、主君氏頼にこの作の一五一十を聞えあけしかば、氏頼大いに驚き、「もし城中に水乏しくならば、忌々しき大事なり、汝はやく妙、太次吉を扶けて、彼の惡僧を退治せよ、我又夥の勇士に命じて、彼の山の麓に屯さすべし。とくく準備せよかし。」と仰すれば、詮通諷みて承り、やがて家に退きて、妙、太次吉に國司の仰せをきこえしらし、俄頃はその準備をいたしける。かくて次の日、妙は黒髪を剪りて、頭髻短に垂れ、尼の形狀に打扮ち、素き羅衣に早き

袈裟を被け、花桶に酒を入れて蓮の花を挿し、胸には鉢を著け、項に觀世音の小像と、蓮葉が鏡を掛
け、左手に撞木を握りもち、左手に花桶を引提げ、軛まだきより城を出でて、たゞひとり岩戸山へ赴
くにぞ、太次吉は詮通とともに、腹巻に小手髷當し、蓑を著け笠を深くして、樵夫の山擲きする體に
打捨ち、妙が跡に跟きて、同じ山路を登りゆけば、鏡うたる勇士許多氏頼の命を受け、藪の樹間こた
ち隠れ、もし彼の惡僧脱れ去る事もあらば、撃ち留めんとて少しも油斷せざりける。さら程に妙は、
花桶を提げ鉢を鳴らし、觀世音の寶號を唱へつゝ、岩戸山へ攀ぢ登れば、深き谷地を帶りて、崖岸の
形を鑿もて穿ち、高き嶺天に横たはりて、崗槽の勢ひを刀して削り、煙霞泉石分明にして、雄奇絶妙
只この峯にとゞめたり。日は照りながら木の下暗く、細き葛に縁りては、松柏の巖に登り、長き藤に
憑きては、桃源の淵に至る。向上ぐれば青壁萬尋として眼に遙けく、直下せば岩潭千仞として、すべ
て神を僞ましむ。羊腸たる前路に駒を押されては、背に玉なす汗を洩し、躡々たる荆棘に足を踏ち
られては、裳を紅の血しほに引けり。辛うじて登りゆく程に、聆々然として幽に寶籙の音すなり。
扱は徒所こそ、雷神が籠れる窟ならめと思ふに、足の運びもすゝみつゝ、やゝその所に判りしかば、
白雲黒雲これを見て、左右より遮り留め一樵夫炭焼の翁といへども、こゝまでは登り來る事なし。知
らさやこの峯は、三寶の靈窟金仙の幽栖にして、女人を禁止す。とくく麓へ下れかし」と、いと荒

やかにいひ諭せば、妙は莞然とうち笑みて、「妾女子の身にしあれど、おなじ佛の御弟子なり。況いて近曾人を索ねて、彼此の高峯に登り侍るものを、徒勞に歸り侍らんや。彼所に聞ゆる寶鐸の音にて、なほ深く籠り給ふ人ありとは知り侍りぬ、あはし給へかし」といふを、白雲黒雲聞きもあへず、「いなわが師の坊は、淫酒を見ること齋のごとし、もとより女人に慕はるゝ、青道心にはあらず。もしは木の端竹の折、深山がくれの朽木ならで、虚ついでからきめ見な。とく／＼歸れ」と罵る聲、いと器しかりしかば、雷神遙かにこれを聞きて、「やよまで理を盡さずして、女子を打たば恨むべし。われ面のあたり説き諭して、歸さんものを」といふ聲のみ、深き狹霧に見えわかず。すは雷神よと嬉しくて、妙はそなたを向上ぐれば、雲霧忽地吹き霽れて、巖の上に一人の法師、端然として坐したるが、襦衣の橡染に、ながき紐を結び垂れ、括緒の袴の白きを著こめて、白檀の高履を穿きながら、品の端に尻をかけ、右に水晶の念珠を爪繰り、左に鏽銅の寶鐸を揮り鳴らし、圓なる頭の毛一寸あまり伸びて、枝ながら栗を見るに似たり。荒薦布きたるうへに高机を居ゑて、桑、荒稻、甘菜、菜辛の和物を置きならべ、影の燈明山嵐に吹かしたつゝ、滅えんとしては又明く、雌手より落つる瀧の上に、注連引き纏ひぬ、室に是れ魔切の行相、物凄まじき形勢なり。その時雷神は、熟と妙を直下し、「女人何の故ありて、只一人この深山に登りたる。われ近曾大願を發して、七日潔齋す。今日すなはち結

願に當れば、女人を忌むこと最も甚し、とく／＼歸り候へ。」といふ。妙はこれを聞きて、しばし雷神を瞻望、一さては宿願のおはしまして、山笠りし給ふにこそ、わらはは雲の妙間と呼ばれて、愛智川のほとりなる、何がしが女兒にて、同じ里に稚きより、互に思ひ思はれたる、結髪むすぶかみの夫侍りしが、年の齡も面影もよく、師父に似て侍りし。然るにその夫いかなる故にか、猛に頭髪を剪りて家を出でしより、絶えてその往方を知らず。人のいふを傳へ聞くに、「この岩戸山にわけ入り、行ひすましてあり」ともいひ、「又果敢なくなりぬ」とも聞えて定かならず。戀慕愛惜やる方なく、かかる浮世にすみ染の、衣の袖は雲なれや、涙の雨のみ絶えず降る、妾が爲には月も日も、照らし給はぬかと身を果敢なみ、もし夫世にあらば、諸共に御佛に事へて、二世の結縁を祈りなん。又世になくばその人の、菩提を弔ひ侍らんとて、憂きに引かる、梓弓あづさゆみ、そりも捨てねば、髪は、切り捨てながら煩惱の、纏まとあやなく縁はりて、闇きより闇きに入る、惑ひを解らさし給へかし。導き給へ。」といひかけて、潸然となく面影は、雨を帯びたる柳の眉、露を含める海棠の、花物いふかと疑はれ、雷神思はず太息つき、「世には似たる事もあるかな。我もまた千早振る、神崎の蓮葉が、露と消えにしなき魂ならで、玉と欺く少女が容色、物いひ様まで彷彿たり、と見るは惑ひか、物ありて我が行法に障礙やする。あな忌はしや忌はしや」と呟きつ、嚴に掛けたる火雷神の、畫幅に對ひて寶鐸たねふり鳴らし、暫し念じて眼を開

き、見れば又とにかくに、蟄りかねたる穴熊の、鞠の月の輪うち曇り、我にもあらで静然たり。且くして雷神又妙にいふやう、「やよ女人、むかし齋藤時頼が、嵯峨野の隠家を訪うたる横笛も、あはで空しく歸ると聞く。往がもしらぬ人を索ねて、かかる高峯にわけ登り、猛獸の牙にかゝらんは、いと悪かなる所爲ならずや。さはその夫はこの山に、山籠りせしといふ事の、證據ありてか。」と問ひにければ、妙は懐より一面の鏡をとり出しつ、雷神が方にさし向け、「これなん夫の像見に侍り、入りにし方は山鳥の、をろのはつ尾に影とめて、峯上を隔てて寝よといふ、かかる證據の侍るなり。憐れとは見そなはせ。」と、いひ誘はれて雷神は、鏡に映るわが影を、と見かう見れば認めある、蓮葉が形見なる、鏡山の麓にて、雷雨に慌てて遺したる、それかあらぬかなほ近く、見まくほしさに不覺にも、崖岸破と踏み込らし、滾々と轉覆び墜つるにぞ、白雲黒雲呆れ惑ひ、手を取りて扶け起せば、雷神は面なげに白雲を見かへりつ、「われ悞つて轉び落ち、肩を打たして痛み堪へがたし、汝はやく麓に下りて、薬を買うて得させかし。とく／＼。」といそがし立つれば、白雲は頭を撫で、「行けとならば行くべけれど、心残りがせらる。」と、眩きながら立ち出でしが、「思へば我は春の鶉、花を見捨ててこの山を、さりとてはあな憎し、妍まし。」とて袖搔きあげ、這奴をと拳をふり揚ぐれば、「そは何するぞ、とく行かすや。」と叱られて、是れとはばかり手もあなく、裾野にかゝる早松茸、あらば人にやとられ

んと、握りし拳ふりめぐらし、戯れて足ばやに、麓をさして走せ去りけり。雷神は又黒雲を見かへりて、「白雲ひとり遣はしては、道草食うて事果てじ。汝ものきて伴ひかへれ、解りなせそ。」といふに、黒雲いなどもいひかねて、しぶりながら天うち仰ぎ、「日盛りは過ぎたれど、横日は晝よりなほ暑し。思へば我は峯上の蟬、寄りも添はせず榎松の、梢の風に吹きおろさる、あな妬し。」と眩きつ、われを忘れてこれも又、憎やと拳をふり揚ぐれば、「そは誰をかうつ氣人、まだ行かずか。」と急がされ、「かかる榮螺は湖水になし、あらばとらして進らせん。」と、いひ紛らかして走せ去りけり。木がくる、まじで日送りつ、雷神又妙を見かへりて、「いかに雲の妙間とやらん、御身が夫の像見なりとて、見せつる鏡は何とやらんこゝろ憎し。いま一度見せ給へ、こゝへく。」と招かれて、いとゞ恨みはます鏡、恥かしながらとさし出すを、とらんとせしが雷神は、空を顧んで、「阿。」と叫び、再び撲地と倒れけり。妙は勃る面もちして、花桶なる酒を數回、雷神が口に沃ぎ入れしかば、おもはず受け飲む味酒の、身はそのまゝに酔ひ臥して、遂に破るゝ火又の術、巖に懸けたる火雷神の、晝像より火出でて、忽地發と燃えうせたり。すは爲課しつこの間にと、妙は裳を引きあけて、漲り落つる瀧津瀬を、估と見あぐればはてしなき、數十丈なる巖の頭に、引き纏ひたる注連を、如何にして切り捨てん、翅ほしやと夕こえて、深山嵐の吹きしをり、はしなく聞ゆるはし鷹の、聲もろ共に一團の烽火、西の方より飛び

來り、懐に人ると見えし、妙は猛に身も軽く、瀧の裏のく玄鳥ならで、濕るゝを厭はず裾踏みかへし、嵩に縁りて閃々と、登り詰めたる若鮎と、見えて兎く準備の懐劍、すらりと抜きて注連の、真中丁と切り捨つれば、天油然と結陰り、降りそゞ雨は銀の、篠を亂すに異ならず。電光閃なくして、山鳴り動けど動かぬ孝心、雫々しき少女が髪ふり亂し、暫し念する普門品、「これや雲雷鼓掣電、降雹澍大雨觀音力の靈驗、猶も見せ給へ。」と祈請しつ、逆まき落つる瀧壺の、あなたへ閃りと飛び下るれば、燐火は妙が懐より、發と燃え出でて又舊の、西を行してぞ飛び去りぬ。とも知らずして臥したりける、雷神は雨に打ち起され、驚き覺めて直と立ち、漲る瀧を估と見て、扱は少女に謀られたり、あな腹だたし。」と大いに聲つて、鷹直に飛び免るを、妙はさわぎたる氣色もなく、觀世音の尊像を、つとさし著くれば奇なるかな、雷神忽地手足縮みて、思はず尻居に撲地と坐し、又立ち上らんとする折しも、誰とはしらす樹陰より、打ち出す銚鏡に、額の真中打ち碎かれ、さしもの兎僧よわり果てて、仰様に仆れけり。浩かる處に太次吉は、詮通と共に腹巻の上に蓑笠著て、白雲黒雲が首を、太刀の鋒につらぬき、樹陰よりあらはれ出で、二いかに雷神、いぬる日觀音寺の城中にて、名告りあうたる武章が兒子、伊原太次吉を認めりや、嚮に恩人山田詮通ぬしとともに、二人の惡僧を誅戮し、わが姉汝が魔術を折くをまわちて、今こそ宿志を遂ぐるなれ。天罰國罰思ひ知りつらめ、怨みの刃受けよ。」

と罵り、走りよりにて首をかかんとするに、雷神は始めて夢の覺めたる心持し、「やよ待ち給へ云ふべき事あり。」と叫び、身を起して嘆息し、「われ幼きより空門に入りて、父母の菩提を弔はんとせしに、妻戀ふ鹿に妄想發りて、俗手に勝る罪犯を作れり、差夫迷へるかな。いまや煩惱の雲晴れて、眞如の月を見るぞ嬉しき。」と懺悔しつ、妙が鏡を乞ひとつて、灌壺に撲地と投げ入れ、高野大師十喻第七、水月喻の句を吟ずらく、

桂影團々塵廓飛

千河萬器各分暉

法身寂々大空住

諸趣衆生互入歸

水中圓鏡是僞物

身上吾我亦復非

如々不動爲人説

兼著如來大悲衣

吟じ了つて合掌し、「いざ立ちよりにて父母の、怨みを復し給へかし、南無阿彌陀佛」と念すれば、「心得たり」と太次吉が因かす刀の下に、首は地上に落ちたりける。かくて妙、太次吉は、詮通と共に麓に下りて勇士等に會し、皆連立ちて觀音寺の城に立ち歸り、國司氏頼に復讐の爲體を聞えあせしかば、氏頼は彼の同胞が此度の功績を褒賞ありて、手づから引出物影給はり、且觀世音の利益、雪の山が忠魂を稱贊し、新たに數間の堂宇を建立して、彼の觀世音を安置し、祈願所にすべき由を聞えしらし、

次の口件くぐんの同胞はらからに、詮通のりみちをさし副そへて底倉そこくらへ遣つかはし、武章たけあきらが靈墳れいふんを祀まつらし給たまふ。さる程ほどに妙たか、太次吉たじきちは國司くにしの恩おんを拜謝はいしゃして、詮通のりみちに伴ともなはれ、日ひを経て相州底倉さうしうそこくらに到著たつちやくし、父ちちの墓はかに詣まうでて無名寺むななみに影あやみに施せ物ものを寄進きしんし、日本にっぽん賀光輔がみつほに見參けんざんして、仇討あだうちの事ことを告つげにければ、光輔みつほ深くその純孝じゆんかうを感激かんげきして、太次吉たじきちに弟切草おとぎりくさの事ことを物語ものがたり、その種たねを附屬ふろくして、鷹飼たかひの事ことを傳授でんじゆせり。こゝに至いたつて底倉そこくらの里人さとびと等は、いよ、雷神なるかみが奸惡かんあくを知しりて、武章たけあきらをいとほしみ、その子こどもの孝心かうしん比類ひるいなきを嘆賞たんしやうす。さて詮通のりみちは妙太次吉たじきちを將みて、近江おみへ歸かへりける日ひ、室町殿むろまちどの彼の同胞はらからが事ことを聞召きこしめし及およべれ、「太次吉たじきちは鷹飼たかひの事ことにくはしき山やまなれば」とて、氏頼うぢよりに仰おほせてこれを洛みやこへ召よしのほし、莊園じやうえん數箇所かずかゝしよを給たまはりて、近臣きんしんに召よし加くはへ給たまふ。よりて太次吉たじきちは、姊あねをも洛みやこへ伴ともなじて、然しかるべき武士ぶしに婚縁こんえんを結むすばせんとて、詮通のりみちとともにその事ことを相語かたがひしが、妙たかは承引うけひく氣色けしきなく、「仇人かたきなるかみ雷神なるかみが幻術まじゆを破やぶる謀まかりこにもあれ、わが身み一度ひとたび頭鬢かみを切り、法衣ほふいを著つけたるに、今更人いまさらひとの妻つまとならんは、還俗えんそくの尼あまに等ひとしかるべし。かくは長く象教しやうかうに心こころを委ゆたね、父母ふぼの菩提ぼだいを弔ととはん事ことこそ願ねはしけれ」とて、いかに勸すすむれども聽きかず、遂つひに祝髮しゆくふつ受戒じゆかいして、妙雲尼たううんにと法名ほふみやうす。このとき觀音堂くわんおんどう成就じゆうじゆしたりしかば、氏頼うぢよりやがて妙雲尼たううんにをもち、彼の堂だうを守まもらせ、堂料だうりやうを寄附きふしけり。然しかるにその夜よ氏頼うぢより、詮通のりみち、妙雲尼たううんに、太次吉たじきち等らが夢ゆめに、觀音寺くわんおんじ再興さいかうの大願だいがんを祈おこし、日夜にちや普門品ふもんぼんを誦とくす。經きやう山やまに五色ごしきの鹿しかあり、又またこの山やまに雪山せつさんといふ沙門しゃもんありて、觀音寺くわんおんじ再興さいかうの大願だいがんを祈おこし、日夜にちや普門品ふもんぼんを誦とくす。經きやう

せり。件の鹿讀經の聲を聞きて感極隨喜し、遂に雪山が草庵のほとりを去らす。しかるに獵人雨田武平これをしりて、まづ普門品を讀み習ひ、ある日雪山が鹿になきを窺ひ、其處より五六町を隔てたる谷陰に到り、弓矢を伏せて普門品を讀むに、五色の鹿讀經の聲に引かれて、彼の谷陰に来るを、武平忽地に射て其の皮を剥ぎ、洛に携へ行きてよき價に沽らんとす。折しも武泰武章が父、伊原武俊といふもの、新田氏光に従ひて京都にあり、武平が鹿の皮を見て、數十金をもて是れを購ひ、やがて行賸として秘藏せり。この業因これ彼に及ぼして、獵人武平まづ奇病に係りて世を去り、その子雷神法師は、妻呼ぶ鹿の聲を聞きて墮落し、且物右衛門を誑らんとて、畜生を父なりと稱し、又武泰武章夫婦は横死せり。されば彼の五色の鹿は、神崎の蓮葉と生まれて、雷神が道心を折き、武泰武章に寇し、沙門雪山は鷹に生まれて、又雪山の山と呼ばれ、武章父子が信義孝行を憐み、これが爲に身を殺し、觀音寺の本持佛を上中より掘り出さして、堂宇建立の宿願を果せり。又小幡の物右衛門が父は、その比洛にありて、件の鹿の皮を媒し、武俊に買はして、おのれ潛かに利を得たるものなり。この惡報によつて、その子物右衛門、雷神に牛を盗み去られ、又武章を電撃、その身も終に墮落す、みな是れ脱れ難き因果なり。爰に漸く前生の惡報竭きて、妙、太次吉が巨孝、親の寛みを雪むるのみならず、雷神も又最期に悟道せり。然るに鏡山の雷獸、潛かに雷神法師を誑ひて、雨を降らさし幻術を傳授し

て、桀を輔けたるぞ許しがたき罪犯なる。見よく近きにこれを罰するものあるべきなり。」と告げ給ふと見つ。覺めて後互にこれを語るに、露ばかりも遣はず。かくて次の日本樵二人、鏡山にわけ入りたるに、雷雨猛に烈しかりしかば、老樹の虚に伏して雨を避け、雷聲をさまり雨霽るゝをまちて、やや家路に歸らんとするに、見馴れざる獸二頭、龍に纏かれたるにや、腹のあたり細やかに縊れ、頭碎けて木杪にかゝれり。「こは未曾有の物なれば。」とて、樵夫等やがて引き下し、扛きもて参りて國司へ訴へ申せしかば、氏頼はさらなり、詮通、妙雲尼同胞これを見て、されば觀世音の示現空しからず、こは雷神法師に奇術を授けたる雷獸にて、神龍の纏き殺したるなめりとて、ますく善惡應報の錯はざるを畏み、いよ、忠孝の志を勵まし、妙雲尼は道心堅貞にして、九十餘歳の長壽をたち、太次吉は詮通が女兒を娶りて、子ども夥擧げ、子孫足利家に仕へて、その家ながく榮えけるとなん。

録雲妙聞雨夜月後

○巫山靈靈〔杜工部〕巫峽中霄動。滄江十月雷。龍蛇不成蟄。天地割爭廻。却振空山過。深蟄絕壁來。何須妬雲雨。霹靂驚楚王臺。○咏雷公〔韓偓〕閑人倚桎笑雷公。又向深山霹靂作。怪松必若有蘇天下意。何如驚起武侯龍。○天日山聞雷震〔蘇子瞻〕已外浮名更外身。區々雷電若爲神。山頭只作嬰兒看。無限人間失箸人。○冬乾〔宋喬年〕陌上冬乾泣老農。天留甘雨付春工。阿香急減雷霆手。莫放人間有臥龍。○壬子聞迅雷有感〔宋元晦〕誰將神斧破頑陰。地裂山開鬼失林。我願君王法天造。早施雄斷答羣山。○納涼房望雲雷〔空海〕以下係和人作雲蒸壘似淺雷波。空如地。飄々風滿房。祁々雨伴廻。天光暗無色。樓月待難至。魑魅媚殺人。夜深不能寢。○寄雷〔作者不詳載萬葉和歌集卷七〕天雲近光而響神之見者恐不見者悲毛此歌夫木集爲人麻呂作○〔後鳥羽院〕むら雲はなほなる神の聲ながら夕日にかよふさゝがにの露○〔隆信朝臣〕秋をまつひかりも近くなる神の音にはたてぬ風ぞすゝしき○〔衣笠内府〕しらざりきはるけき空になる神の見ぬ物からに人をこふとは○〔爲家卿〕なる神の音羽の山の夕立にせきのこなたも水まさりつゝ○すぎにける關のこなたになる神の音羽の里の夕立の空○〔俊成卿〕なる神の聲をさめたりいなづまのひかりばかりぞただちの空。

蓑笠隱居曰、和漢咏雷電者最多、今不_レ追_二枚舉_一、因拔_二率十之二三_一、附_二之篇後_一、集爲_二是書證_一若_レ右。

賴豪阿闍梨怪鼠傳



二月鼠の穴をふさぐ。つくづく汝がいたづらを思へ。家に居て人を恐るゝは、足の裏に疵持ちけらし。油をのむこと世の酒にひとしけれど、いつしか沉醉を見ず。粟を盡し器をそこなふは殊更にいはじ、大棗をかむ牙にふるれば病を生ず。はづかしき文をちらして、男女の中をも妨げ、怪しき菓をつくりて、源平の亂をきく。何をへつらひて、佞人のためしに引出でられ、いかにすゝめてか、書を焚く代の宰相となしぬる。神佛のたふときも、尿糞に汚したてまつる。草の根をはむ月の鼠は、俊成卿のうらみなりけり。つくづく汝が危きを思へ。それ人の賢しきや、萬木籠をまき吹矢を儲け、騎をぬりて往來もたやすからず。けはしき城をたのむとも、聽を防ぐ手段はあらじ。杳かなる空をながめては、鳶のつかまん愁へ忘るべからず。桁走り障子のほり、早業得たり顔なるも、思はず耕にかゝりて、いかばかりの辛き目見ららん。虚死して仕合に、東坡が袋をにけたりとも、生捕られてなまなか張陽が文をうけなん。或は鈴を頸にさけて兒童の戯れとなり、あるひは筆の用に髭をぬかれて老の悔いを残せり。あやまりて晝鼠とあなづられ濡鼠と笑はれ、更に吹鼠と苦しみて、人の爲にぞ愧はれぬる。我さへかなしきを、焼鼠となりて狐狸の命とらんこそ、淺ましく罪深けれ。

つくづく汝が尊きを思へ。日よみの初めに呼ばれて位司賤しからず。百敷のかしこきも、甲子をむかへて年の號あらため給ふごかし。新玉の春立ちかへれば子の日の御賀あり、子祭といへるはいづれ

の長者ちやうぢやの傳つたへたる、からの日本の歌うたにもよめり、海原うなほらやもしほの陰かげに友ともよぶなまこは海鼠かいそとかかれ、
 秋風あきかぜの尾花おはなが末すえに妻つまこふ鶉うづらは田鼠でんたの化くわしたるなりけり。烏羽玉うはたまの闇くらき夜よは雷いかづちともなれり。象ぞうといへ
 る獸けものすらかつ恐おそぢ懼おそれぬる。麝香鼠じやかうねずみは筑紫つくしに住すみなれて、こと國くにに行ゆかず。被かづき姿すがたの若わかやかなるは嫁よめ
 入いり給たま虚事そらごとにぞ。どこの乙子おとこを七郎しちろうとは申まうす。新左衛門しんざゑもんとつけるは、さかやきすりての後のちなるべし。
 大ねら小ねら、將はたら二十日鼠つかねずみと名のり、月々十二つきぐにじふにの子こをうむ。誰たれが家いにか取り盡つし得えん。もし白子しろこ出いで
 て福ふくの神かみにや愛あいせられん。汝なんぢが隠里かくれざとは何處はところの邊へたりぞや。武藏野むさしのの鼠穴ねすあなにや、出羽でほの境さかひの鼠ねずみが關せきなるか、
 信濃しなのの奥おくの鼠ねずみ宿しゆくなるか。日出あたき身みをもて、假初かりそめの世よをむさぶる、などか歸かへらんことを思おもはざる。
 窮鼠きゆうそかへりて猫ねこを嚙かむの志こころざしありとも、三井みつゐの頼豪らいごうが千疋せんびやくの勢いきほひすら、本意ほんいを遂とぐる事は猶なほ聞きこえざり
 (けり) 右去來みぎきり鼠ねずみノ賦ふ。

怪鼠傳既落成。引用ノ古書籍散軼。有二座右。偶閱ニ。去來鼠賦。乃用ニ賴豪事一爲落句。且レ繕寫シテ而換ニ於序編一。筆ノ稍久。而倚レ机ニ假寐。若有二人告ケル予者。曰。世傳。賴豪憤死。爲鼠ト。祀レ之ヲ。號ニ鼠廟一。甚ク其言妄ナル也。顧フニ昔者都城。必祀ニ四神一。以鎮ニ四方一。子。則北方。武神ナリ。世俗謂フ之ヲ子ノ聖ト。或謂フ之ヲ鼠廟ト。鼠モ亦子也。凡ソ宛ニ禽獸一於十二支ニ。皆リ以降レ已ク。然リ。以レ之ヲ觀レ之ヲ。則說ニ賴豪故事一。嫁ニ諸鼠廟一者。軍記ノ附會耳。予俯ニ而笑シ。仰ニ而覺ス。竟レ使ニ僮子一執燭ヲ。併ニ記ニ予ノ之作一。

文化丁卯正月甲子

曲亭馬琴識

賴家阿闍梨怪鼠傳總目錄

第一套

天野岡鷲使二木曾殿陣一

第二套

義仲怒罵猫間一

第三套

爲久粟津射義仲一

第四套

大姫告急走良人一

第五套

唐絲計殺親族一

第六套

擧血力一唐絲説爲久一

覺明叡山説賴家故事一

光隆憤捐館舍一

光實鎌倉闖義高一

唐絲入間川留客一

光澄夜擊義高一

事讎家義婦慰大姫一

第七套

日枝山賴豪誘義高一

粟津原光實論二猫鼠一

第八套

鶴岡社頭賴朝認二行僧一

鎌倉營中西行談二文武一

第九套

藥師堂邊重忠詰二義高一

山井海濱怪鼠笑二光實一

第十套

西行與二金猫戲章一

光實竊刺二惡棍們一

第十一套

賴朝智解二麻衣歌一

嫩子勇禦二唐絲逆一

右前編五册

魁菴子 批評 賴家阿闍梨怪鼠傳總目錄 終

賴豪阿闍梨怪鼠傳 卷之一

東都 曲亭主人著述

門人 魁雷癡叟批評

第一套

天野岡鷺木會殿の陣に使す
覺明叡山に賴豪の故事を説く

平家世をとつて二十餘年、官位人臣の上を極め、威勢宇宙の間を鎮むと雖も、行ひ天理に背きしかば、時運やうやく傾きて、前兵衛佐賴朝は、伊豆の蛭が小島より起つて、關左十箇國を畧し、木曾の冠者義仲は、信濃の安曇郡より出でて、北陸二十八郡を伐りしたがへ、互に牛角の勢ひを秉つて、戦ふ毎に勝たざることなし。抑木曾義仲と聞えしは、清和天皇の後胤、六條判官爲義には孫、帶刀先生義賢の孤にて、賴朝とは正しき従弟どもなりけり。然るに兵衛佐賴朝は、思量餘りあつて嫌忌ふかく、一族たりとも驚れたる人をば、終にわが仇となりちやせんとして、妬く思ひたまふなれば、今義仲の武威盛んなるをもちて、心の中のどやかならず。既に氣色にあらはれしかば、相模國の佳人石田

太郎爲久といふもの、ある日佐殿にまうすやうに近頃は頻りに物おもはしく見え給へり。倘し木曾殿の事、御心にかゝり給ふにあらすや。爲久年來木曾の郎黨小室太郎とは親しき友なり。密かに信濃へ立ち越えて小室をかたらひ、假に義仲の手に屬きて、君の御爲にあしかるべき筋あらば、機に臨みて反間の謀を行ひ、終には木曾殿に白滅さして、眼上の癩を除き進らすべし」とて、いと信だちて申しけり。頼朝これを聞きて、「平家の大敵ならばさもありなん。木曾はおなじ源氏にて、深き怨みもなきものを、始終の事を思へばとて、正なき事をせんは由なし。」とて許し給はざるを、なほしばく請うてゆかんといふに、黙止しがたく思して、「かくまでいはば汝が望みに任すべし、かならずしも聞者とな曉られそ。彼の人異議なきに于ては、ながくその手に屬きて、軍功を馳み候へ。」と仰すれば、爲久欣然と領承し、やがて堀江藤次以下の郎黨を將て信濃に赴き、遂に小室をいひこしらへて、木曾殿の營に留まりつ。元來この石田爲久は、勇あれども義をしらず、とあれども便佞なり。こゝを以て強ひて今度の密謀を申し行ひ、義仲に白滅さして、おのが榮利を圖るとは、木曾殿終に曉らすして、たゞわが武勇を慕はしさに、身方すとおほせしかば、心くまなく相語ひ給ひぬ。けに古より今に至るまで、兩雄はかならず並び立たず。廉頗、藺相如が終りを全うせしは稀なり。さる程に壽永元年三月のころ、藏人行家が不覺、一條忠頼が讒言によつて、頼朝、義仲忽地に中あしうなりにければ、佐

殿みづから數萬騎を引率し、上野と信濃の堺なる臼井峠まで押し寄せ給ふに、義仲はその鋒先を遣げん爲に、とるものもとりあへず、俄頃にはいに越後へ退きたまふ。そのとき石田太郎爲久、未會殿の轡づらを牽きとめて、「あら心も得ぬ。殿には鎌倉の大軍に聞き怕ぢし給ふにや、いと正なくも見え給ふものかな。」と時けば、義仲冷睨つて、「今頼朝と雖雄を決せんは大事のまへの小事なり。兩虎食を争ふときは、狐その窟に乘ると、頼朝が鋒先を避くるは義仲が恥にあらず。討つべき平家を討たずして、同士軍せばそれこそ世の胡虜ならぬ、勇むも事によるぞ」とて騒ぐ氣色はなかりけり。兵衛佐頼朝は、義仲既に越後へ引き退きぬと聞き給ひて、「人の隱便を存ぜんに、今更勝に乘るに及ばず。」とて、聽て鎌倉へ引きかへし給ふ途中、武藏國月田川の畔なる青鳥野に陣どつて、天野藤内遠景、岡鷲四郎義眞に宣ひけるは、「汝達是より越後にゆきて、義仲にいはんやうは、平家朝憲に背き奉るによつて、追討の院宣をなし下さるゝ上は、夜を日につぎて逆臣を討ち滅ぼし、宸襟を休め奉るべきに、さはなくして謀反の企てある由明白に風聞せり。然あれど、今度越後へ引き入らるゝ條神妙なり。いよ、殊なる存念なくば、子息義高を此方へ遷し給へ。頼朝父子の義をなして、女兒大姫を妻はし、一家の好みを盡すべし。この旨承引なきに于ては、忽地軍兵をさし向けて、誅罰を加ふべし。」と慥かに申せ。とて、直に彼の地へ遣はし給へば、岡鷲天野の兩使は、汗馬に鞭を鳴らして越後に馳せ行き、佐殿の言語を

憚る所なく述べたりける。義仲これを聞きて、宗徒の郎黨を集合へつ、評議あるに、石田太郎爲久、古老の意見をもちまたすすみ出で、「何條御曹司を人質として鎌倉へ遞し給ふべき。彼に勇將あつて寄せ來らば、我に猛卒ありてこれを防ぎ、勝負を一舉に決し、安危を百世に定め給はん事勿論なり」と居丈高になつて申すにぞ、今井四郎兼平、案じ入つたる面地にて、「否々、先度は穩便に引き給ひぬるを今更に變改あらば、平家追討の初一念は外になりて、東國、北陸の大谷戰に、夥の兵士を失ふべし。元より御趣意なきに于ては、稚君を鎌倉へ遞されん事、ねがはしく候。」といふに、或は兼平が意見を是とし、或は爲久が申し條を潔しといひて、衆議さらに一決せず。その時義仲しほし思案して、「石田が申すところも一理あれど、彼は新參のものなれば、只願武威を逞しうせんと思ふなるべし。兼平が所存、予が意に稱へり」とて、今茲十四歳になり給ふ、嫡男美妙水冠者義高を召して、「御身を兵衛佐の堀にせんとて、申し來さるゝに黙止し難くて遣はずなり。相構へて悪びれず、一方の固めともなり給ひね。」と聞えしらし給ふに、美妙水冠者は、「承り侍り。」と應へて、臆する氣色なかりける。この御曹司は、母上世を早うし給ひしかば、手塚太郎光盛が妻、唐絲といふもの、乳母に召されて守り育て奉りぬ。かの唐絲は今井四郎兼平が妹なり。そのとき義高は、父の邊を退出て唐絲を招き、「目今如此々々の仰せを稟けたれば、われは鎌倉へ赴くなり。歸り參らんほどの像見に。」とて、笠懸七番を

射て見せたまへば、唐絲はこれを最期の遣りとや思ひけん、不覺に涙さしぐみけり。かくて義仲は、
岡鷲、天野を靈應さし、きて近く招きよして宣ふやう、「汝達立ちかへりて返辭を申さんには、「申し來
ざる、起驚き入つて覺え候。義仲謀叛の心がまへありなんどと風聞あるは、全く讒者の流言か、更
に信用あるべからず。又美妙水冠者が事は、未練の少年なりといへども、厚意黙止し難ければ進らす
るなり、不便がらせ給ふべし。義仲かくてあるなれば、平家追討の事心安くおほされよ。」と信と申す
べし。」と返答あるに、天野、岡鷲畏まつて、「かかるうへは御曹司を伴ひ奉りて、一日もはやく立ち歸
り候はん。鎌倉殿のさこそ待ちわび給はめ。」とまうす。さて義仲は、「誰をか義高の侍として鎌倉へ
遣はすべき。」と詮議あるに、「唐絲が兒子大太郎は、生得病身にて物の用に立ち難し。義高と同庚な
る小扨從に、宇野小太郎行氏といふ者ありけり、これは唐絲が夫光盛が甥なり。また兼平が女兒に橋
橋とて、ことし十五になりけるを、いと稚きより、彼の小太郎に妻はする結號は有りながら、小太郎
未だ十五歳にも満たざれば、婚姻に及ばねど、その心ざま恰惻しければ、彼の行氏然るべし。」とて、
兼平光盛がえらみ出して頼りにまうしす、めしかば、義仲即ち宇野小太郎行氏をもて、義高の御供と
さだめられ、鎌倉の使者と共に發足をいそがし給へば、恩願のものども遣りを惜しみ、おもひ／＼の
進物して、首途を視きまうすにぞ、義仲は宋徒の郎黨二十餘人が妻子を見かへりて、「今汝等が夫の

見がはりに、義高をば鎌倉へ遣はすなり。頼朝東國の大軍を將て寄せ來り、われ又北國の兵士をもて防ぎ戰はば、家隸影を討たすべし。世の靜かならんことのみ思ふ故に、一子を棄てたるぞ。」と聞え給ふに、女房どもは「噫。」とばかり應へつ、感涙をとゞめかね、かくまで家人を憐み給ふ、わが君の御恩恵を、仇には報い侍らじ、と思ふこゝろをいへばえに、いはで袂を濡らすにぞ、それが夫どもは面をあはし、千々の社の前渡りして、照る日の下に住まざるも、いかで不忠を存すべき。」と、異口同音に申して泣きぬ。かくて美妙水冠者義高は、岡鷲、天野に伴はれ、宇野小太郎を將て越後を旅行ち、口を經て青鳥野の陣に到著ありしかば、頼朝即ち對面あつて鎌倉に携へ歸り、これが爲に一室を修理はして、信やかに款待し給ふやうなれど、實は人質なれば、政子、大姫にもあはし給はず、出居なども嚴重に衛らして、もつはら用心し給ふに、政子前は、佐殿の意を曉り給はねば、大姫が婿がねなりとて、日毎に女房たちをもて、丁寧に慰めまうさし、「わが女兒は、年もまさりて三五の春も暮れ行くに、なほ兩三年はとく過ぎよかし。愛でたく婚姻を盡はして、夫婦の睦まじきを見まほし。」とぞ宣ひける。さる程に木曾義仲は、數度の合戰に平家の大軍を打ち靡かし、彌竝玫瑰伽羅谷に十萬騎を壘にせしより、その威勢破竹の如く、壽永二年七月には、はや洛ちかく攻め著けて日枝に屯を構へたり。この地は木曾山の尖きに似ず、眼にめづらしき湖水の風景、八つの眺望も妙なれば、軍議の

眼に、大夫坊覺明以下、僅かに三十騎の兵を將て、彼此を逍遙し給ふに、日吉八箇の末社の内に、鼠の禿倉といふありけり。義仲覺明を召して、「これは何なる神を祀るにや。」と問ひ給へば、覺明答へて、「三井の長吏、實相房の頼豪が神になりたるにて候。」と申す。「こは何故に鼠の禿倉といふならん。」と、不審し給へば、覺明かさねて、「むかし白河院の御時に、三井寺の頼豪阿闍梨とて、有驗の權者ありき。この時后腹の皇子わたらせ給はざりしかば、主上心もとなく思召すのあまり、彼の頼豪をめて、「汝皇子を祈り出してんや。尙し效驗あらば、勳賞は乞ふによるべし。」と仰せ含められ、程に、頼豪畏まつて、「年來ふかき望みの侍るなる、救護相違なくば、皇子の御誕生勿論なり。」と奏して、本寺に立ち歸り形の如く支度しつ。肝膽を擧きて祈りける驗にや、承保元年十二月十六日に、皇子誕生まししくけり。主上斜ならず御感あつて、頼豪を召さし給ひ、「申せしに違はず法驗灼然なり。今度の勳賞には、何事をか乞ひ奉るぞ。」と御氣色ありけるに、頼豪は、「園城寺に戒壇を建てて、寺門年來の本意を遂げ候はん。」とぞ奏しける。主上聞召して、「こは思ひもかけぬ事かな。もし三井寺に戒壇を救免あらば、山門の衆徒憤りを含みて、鬪諍已む時なるべし。僧位僧官に望みをかけ、寺領坊領を給はらんとならば、いか許りにても乞ふによるべし。戒壇の事は思ひ絶え候へ。」とて、救許なかりしかば、頼豪形を改めて、禱言は汗の如し、豈出でて再びかへるの理あらんや。鬪に勳賞は乞ふに

よるべし。」とあるをもて、身命を擲ち、皇子をば斬く祈り出し進らせて候に、今更に赦許なきは遺恨の至りなり。枉けて夙望を遂げさし給へかし。」とて、或は怒り、或は歎き、道理を述べて愁訴すといへども、終に諾はせ給はざれば、頼豪深く恨み奉りて、大悪念を發し、「わが夙望稱はずば、今に皇子をばとり復し奉るべきなり。」と罵りつゝ、退出しが、ふかく持佛堂に籠り居て、殺を斷つて人にあふ事なく、眼はくほくんと落ち入りて、蠹みたる古朽木の如く、白髪は長く生ひ延びて、銀の針を磨ぎ立てたる如く、手足の爪も切らざれば、全體垢に染みて、護摩壇の障子よりも黒かりける。主上事の爲體を聞召して、激慮さらに安からず、「いかにもして彼を寛めよ。」と仰せて、大江匡房卿を遣はされけるに、頼豪は猶うちとけずして、いく程もなく死ににけり。この故にや、皇子は僅か四歳にて承暦元年八月六日に隠れ給ひぬ。敦文親王と申せしは是れなり。その後山門の座主大僧正良眞、教を承けて皇子を斬り出し奉りけるに、怨靈しばし障礙をなし、山門といふ所あればこそ、わが寺に戒壇を免されぬ。さらば山門の佛法を滅ぼさんとや思ひけん、頼家が怨靈大いなる鼠と變り、谷々に充滿ちて經文を啖らふ程に、衆徒驚き懼てて、踏み殺し打ち殺し抔すれば、鼠は愈多く出で來りて、いかにも術なし。こは全く頼家が榮りなめり。」とて、それを寛めん爲に鼠の禿倉を造り、一社の神に祭りしかば、程なく鼠は鎮まりぬ。今よりは百年あまり前時の事なりと聞き傳へて候。」と申しければ、

義仲つくんと聞いて、一寔に三井寺に山門ある事、我に頼朝あるが如し。頼家が遺恨理に覺し、夫れ子は北方の神なり。こゝに來つて思ひ合はすれば、先に、清盛が家の馬の尾に、鼠の葉を營みしと聞きたる事あり。是れ僻しながら、義仲北國子の方より起りて、南年の方なる洛に入るの道にして、鼠の禿倉に囚あり。さらば頼書を寄せん。とて、總て覺明に筆を執らし、「義仲急地平家を討ち亡ぼして禁錮を守護し、官位は頼朝に超えて、征夷大將軍になるべらば、神田許多を寄進べし」と所念しつ、上差の鎬を抜いて、件の願書とともに神前に納め給ふ。この日の事は、隨兵三下騎が外に絶えて知る者なかりしかば、世には聞えず成れりとなん。

第二套

義仲怒つて猫間を罵る
光隆憤りて館舎を捐つ

平家はつひに支へ得ず、主上安徳を守護したてまつりつ、周章きて洛に落ちにければ、義仲やがて後白河院のおほします、法住寺殿を鞏固し奉り、高倉院第四の御子尊成親王を位に即け奉る。後鳥羽院是れなり。翌年改元あつて元暦とぞ申しける。この君、なほ幼くまし、ければ、天下のこゝと大小となく、院白より制度したまふにぞ、頼りに義仲の軍功を御感あつて、勳賞は乞ふによるべ

し。何にまれ望ましき事あらば、聞えあけよ。」と仰せしかば、義仲畏まつて、「未熟の邊將、偶功業をなし得て、一時に逆臣を奔らし、萬機の政を還し奉る事、君の洪福によつてなり。若し朝恩空しからずば、征夷大將軍になし下さるべうもや。」と奏するに、「征夷大將軍は輔く宣下有り難し」とて、臨時の除目を行はれ、義仲を左馬頭になされて、播磨國を給はりしが、いく程もなく更めて備中國を下されけり。義仲これを不足とし、「手裏覆す繪言は、昔も今も變らざりき。僅かに一箇國の受領を経んとて、碎身粉骨の軍はせざりし。かくては君の御おほえも心もとなし。」と嘆き給へば、石田太郎爲久その氣色を見て、すはわが便宜を得たりと歡び、密かに義仲に申しけるは、「殿は未だしろしめされずや。上にも鎌倉殿のみを愛でたきものに思せばこそ、敕諭相違して、征夷將軍になし給はざるを腹だたしく思さずや。加旃下郎などに至るまで、殿をばその器に堪へずと思ふにや、頃日街の風聞をきくに、「鎌倉殿こそ征夷大將軍になり給ふ。」と申すなれ。この事もし實事なれば、一世の恥辱、末代まで瑕瑾なるべきか。早く賢慮をめぐらし給はずば、猿禽盡きて走狗煮らるゝの悔いあるべし。」とて、例の佞言をもて、義仲の憤りたまふやうにいひ爲へたりけるが、街の風聞は虚言ならず、壽永二年八月に、左大臣藤兼實公、敕を承りて、前兵衛佐頼朝朝臣を征夷大將軍になされけり。義仲は年の齡いまだ四十に足らで、元來性急の猛將なれば、夙望を果さずして、却つて頼朝に超えられたる

を置り、思ふ事いと深かりけるに、石田爲久傍にありて、燃ゆる火に薪を添へしかば、義仲の怒氣いよ／＼煽んになりて、よろづあら／＼しく言行ひ、にはかに洛中を亂暴して、攝家花門の貴族をも屑とせず。兼平これを諫むるといへども、爲久密かに柱へしほどに、忠言いたづら事となれり。その爲體平家の、悪虐にも過ぎたりとて、三公百官、舌を掉つて怖れあへるにぞ、上皇御自河の大いに驚きおぼして、山門の大衆に仰せつかはされ、「急ぎ義仲を詰問有るべし」と議したまへば、義仲ますますいきどほりて、直に院の御所法住寺殿へ押し寄せて、牛北面、山法師等をきん／＼に追ひちらせば、是彼度をうしなひて逃げよどひ、「天台座主明雲僧正は、敵の射る矢に命を賣し、八條宮も撃たれ給ひぬ。」と聞えしかば、上皇大いに御周章あつて、しばらく木曾を寛めたまはん爲に、猫間中納言光隆卿を敕使として、六條西洞院なる義仲の宿所に遣はさる。此の時義仲は六條西洞院大膳大夫信業が故の家に在り 光隆卿 救を承けて、急ぎ彼處にゆき向ひ、家臣竹川因幡介正忠をもてかくといはせければ、義仲聞きて、「何に猫間が来りしとか。犬こそ放鷹の用にはたて、猫を畜ひて何かはせん。とく追ひ走らせよ」と下知すれば、中納言の難色答へて、「いな獸の猫には侍らま。猫間中納言光隆卿の敕使にたたまふなり」といふに、義仲呵々とうち笑ひ、「さらばこなたへ通せ。」とて、烏帽子の緒掛結びつゝ、出で迎へて、救を聞かるともせずや、「猫どのたま／＼来りたまへども、この宿所には、鼠もあらず。元よりわれは

子の方なる北國より出でたれば、猫は仇とも思ふなり。抑御邊は山猫の子か、草野猫の父か、花壇に狂うて鼻つらこすられたまふな。」と飽くまで嘲哂せられ、主の後方にありける因幡介正忠、こらへかねてつと進み出で、「木曾どのにはいまだ、猫開の縁故をしろしめされずや。抑主君光隆卿は、七條の坊城王生の邊なる猫開といふ所に在するをもて、世の人猫開中納言と唱ふ。譬へば信濃國木曾といふ田舎におはせしをもて、木曾殿といふが如し。且彼處を猫開と稱ふる事は、昔光隆の先君王生の中將、世にいまそかりしとき、井を掘らして不意も金の猫を得たまひつ。その形容活けるが如く、金花の猫王といひつべし。されば彼の猫を當家に傳へたまひてより、羣鼠ふかく竄れて注進の内に入らず、これ未曾有の物なれば、世の人御館のほとりを斥して、すべて猫開と呼ぶ程に、やがて家號ともし給へるなり。そはともあれかくもあれ、救使を獸に比し給ふは、天魔の所爲か、いと淺ましく。」とて、いきまきあらく述べたりけり。義仲これを聞きてますく冷笑ひ、「この白徒何とかいふ。猫開と名告りて來ましたれば猫と呼ばんは過ちならず。浪風しぐめる世を鎮めんには、武士こそ物の用にはた、鼠取らずのえせ公家に、物食はせよ。」と下知すれば、石田太郎爲久、「承りぬ。」と應へつゝ、豫て用意やしたりけん、大きやかなる石決明に堆く飯を盛りたるを、恭しげに捧げもちて、光隆卿の前に居立たり。猫開殿は鬪より只顧呆れはてて、一言の問答に及ばず、只淺ましとのみ思ひ給ひ

たるに、今この光隆にあひて、心の申深く憤り給ふと雖も、徳便の御使なればと思ひ返し、見むきもやらで在せしむば、義仲大いに焦燥して、自ら折敷を光隆卿の膝にさし著け、「食らへ」「食らへ」と責めたりければ、正忠忍びかねて、石決明を捲いて、義仲へ投じ著くれば、飯は席上に散亂して、ときならぬ雪を降らしぬ。義仲ははやくこれを避けて、只は其の身にあたらずといへども、怒り忽ち心頭に發りて聲をふり立て、「こは奇怪なり」と罵りもあへぬに、爲久つと走りかゝつて正忠を組伏すれば、驚きかゝつて捻ぢ返し、上を下へと揉みあうたり。義仲は石田が勝ち得ざるを見て、益々焦燥ち、やをれ者ども」と呼ばはれば、郎黨影走り来て、正忠が頭髮を取つて仰様に引き倒し、押へて素をかきたりける。正忠は慙ひに義仲を撃ち得ざれば、遺恨さらにやる方なく、怒れる眼に朱を注ぎ、「君號かしめらる、時は、臣死すべしといへり。只恨むらくは木曾が、願ひ引き裂き捨てざる事まゝと罵れば、義仲これを背向に見て、「驍填が車に逆ひ、橋衛海を埋めんとすとも、そは效なき事なり」とものども這奴を引きたてよ」と下知しつゝ、席を蹴立てて奥に入れば、郎黨わがて正忠を引きたてんとするに、なほ罵りて動きもやらねば、衆皆手をとり足をとり、宙にかきもて、廊のかたへ出でぬ。光隆卿は思ひの外なる狼藉に、敕命を述ぶるに便なく、却つて家練を喪はば靴の上の靴なりとおぼせしかば、ひとひ残りしとゞまられたる石田爲久に向ひ、「王事監いことなし。光隆尙くも、敕命に依つて爰

に來りながら、家臣を捕はれたり。」といはれんは、私の恥のみならず、君命を恥かしむるに似たり。其許よきに申し宥めて、正忠を給はり候へ。」と宣へば、爲久はや、落ちたる烏帽子をとつて威儀を繕ひ、「見そなはする如く、義仲猛きに誇つて朝威を輕んじ奉れば、家臣の事などはいかに申すとも聽くべうはおほえず。しかあれど、それを償ふ程の贈物あらば、爲久よろしく申しこしらへて見候べし。」といふに、光隆卿しばし沉吟して、「わが家武人にあらざればめでたき兵具などは持ちも傳はず。何をがな進らすべき。」と問ひ給へば、爲久重ねて、「夜光の珠は、十五城をもて換へんといひし故事あり。日今御家臣の物語りありし金の猫は怪有の珍器なり。是れをや贈り給はんか。」といふに、光隆卿聞きて、こは思ひもよらぬ、先祖傳來の重寶をいかで他人に與ふべき、と許りいひては、正忠を救ひがたし。とやせましかくやせまし、と案じ煩ひたまひしが、「いなく。金の猫は目をよろこばするのみの。」もてあそ 斷び、忠臣は家を守るの寶なり。よしや百萬の財寶ありとも、家を守る忠臣なくば、遂に他人の物となるべし。しかなりなくと思ひかへして、再び爲久にむかひ、「いはるゝ所その意を得たり。金の猫は立ち歸りて後に贈り來すべし。正忠が事は、年來召仕ひて不便のものなり。偏に其許の憐みを垂けて救ひ得さし給へ。」とたのみ聞え忙はしく車に乗りて、中途より雜色を壬生の館へ走らしつ、金の猫を義仲の宿所へおくらし、その身は直に内に參りて、事の爲體を奏し奉るに、攝政殿はさらなり、

上皇聞召してますく、驚き給ひ、義仲既に一天の君を怕れずば、此の後も又いかなる事をか爲出すらん、假に彼が憤りをとかんにはとて、俄頃に征夷將軍になされしかば、世の人朝日將軍と稱ふ。こは彼の趙盾を、夏の日に譬へしに異ならず。旭は昇ること速かなれども、日映くして仰ぎ視るに由なければ、その猛き威光に比べて、しか呼べるなるべし。是れより先爲久は、光隆卿の贈り來されし金の猫を義仲に獻り、さまざまに言葉を竭して、正忠が一命を申し乞ふと雖も、義仲は賄賂を見て面をやはらぐる人ならねば、件の猫を手しにだに取らず。兼平も又主を諫めて、「敕使の家臣を搦め捕らし給はば、朝敵の汗名を脱れがたし。速かに放ちかへし給へ。」と申す折しも、重ねて内より敕使を立てられ、「義仲先度の望みに任せられ、征夷大將軍になさるべき。」旨を仰せ下されしかば、義仲これにこゝろ折れて、正忠を放ち歸らし、金の猫を爲久に預けて、即て參内し給ひけり。是れはさておき、猫閉中納言光隆卿は、義仲の狼藉によりて、救命を述べずして、いたづらに歸りし事、わが身ひとつの不覺なりと、世にも面なくおほせしかば、内より御咎めのなき間に、とちかくもならばやと心を決め給ひながら、さもなきおもちして館に退き、妾腹の弟にて、いまだ冠を給はらざりける新太郎光實とて、今茲十六歳になり給ふが、臂力人に勝れて武藝を好み、心ざまさへ信やかなれば、此の光實のみにありし事どもを聞えしらし給へば、光實大いに驚き怒りて、わが子舎に退き、いかにもして兄

の寗みを雪がばよとて、ひとり肝膽を掻きたまひぬ。かくて光隆卿は、一室に入りて心しづかに看經し、終に自害して失せ給ふ。時や、推し移つて、女の童が始めて主の自害をしりて、泣きつ叫びつ走り参りて、光隆の北の方八重垣に告げ参らすれば、光實も走り來つ。こはそもいかにと許りに、屏風搔い遣り輓び入り、血に塗れたる亡骸の枕方後方にとり著きて、共に滅えぬべく泣き給ふ。かかる所に竹川因幡介正忠は、や、放されて義仲の西洞院の宿所を走り出でしが、矯しとも思はねば歸るに足も進みかねて、壬生の邊近く來れば、六條坊門の森の梢に烏夥羣れ居て、かはく、と鳴くに、何となく胸うち騒げば、「あら覺束な。」と獨言ちつ、館の門内につと入るに、妻の葎川待ちわびたる氣色にて、端近くあり。夫の歸り來るを見て、耳の根に口をさしよせ、「日今如此の事あり。」と告ぐるに、正忠甚く驚きて、遠侍を走せ過ぐるも夢路を辿る心持しつ。忙懼きて参りしかば、舍弟新太郎光實を始めとして、皆枕方に圍居しつ。八重垣の方はこの春出生し給ひける、鈴稚と申す稚君を抱きとり、「かく幼きを遣しおきて、自害して果て給ふ、心強きはわが夫なり、痛ましきはこの子なり。」とかき口説き給ふ。愁傷を慰めかねて、乳母等もみな諸共に泣きにけり。その時正忠は八重垣の方を様々にいひ慰め、扱申すやう、「我が君木曾に恥ぢしめられて救誕を述ぶるに及ばず、空しく歸り給ひしかば、救慮測り難しと畏みて、自ら刃に伏し給ひけん、御心の中思ひやられ侍る。加藤當家の

重寶たる、金の猫をもて、正忠を憤ひ給ふ御仁恵は、忝き事いふばかりなけれど、いひかひなくも思ひ奉るかし。正忠が故をもて重器を失はし、剩へわが君を自殺さして、阿容々々と存命ふべきかは。直に義仲が宿所に走せのきて切死せんには」と敦周きつ、袴のそばをかいとつて、立ち上らんとしたりけるを、光實「暫し」と呼び留めて、共に遺恨の涙を唾へ「正忠が述懐我もこそことは思へど、仇は數萬騎の大將なるを、はかなくしき事もし出さず、大死して忠ならんや。思ふ仔細あれば、只總便に送葬の營みをせよかし。」と諭し給ふに、正忠も遠に北の方の御嘆きと、幼君の御事痛ましくて、且く必死を思ひ留まり、後の事などを丁寧にものして、託孤の忠義を盡しけり。

第三套

爲久東津に義仲を射る

光實鎌倉に義高を圍ふ

後白河院は、猫間光隆驍の自害して失せたるを聞召すといへども、義仲のおもはん程を敬慮にかけられけるにや。又彼の驍の救誼を述べずして歸りつるを、こよなき越度なりとて怒らせ給ひたるにや、家督なんどの事はさらなり、却つて莊園をも召し放されけり。かかりし程に、その方さまの人々は、いとさへうら悲しきに、海士の小船の楫をたえて、澳に漂ふ風情にて、泣く／＼館を出で給へ

ば、譜代の家隸給事の女房も、みな四落八落となりて、竹川正忠夫婦の外に隨ひ奉るものもなし。そのとき新太郎光實は、正忠に宣ふやう、「汝夫婦が信々しきは、兄君にもよくしりて在せばこそ、前口の危難を救ひて、幼き人の事などを頼み給ふなるべし。もし再生の恩を忘れずば、嫂君母子をともかくもして養育み進らせよ。我は又苦に寝ね枕とし、義伸を撃つて金の猫を取り返し、會稽の恥を雪めて孝養に供へんと思ふなり。」と聞え給へば、正忠うけたまはり、「仰せを固辭むにはあらねど、おのれこそ、灰を呑み身に漆をさしても、君の仇を撃つべきものなれ。北の御方稚君には、妻にて候葎戸を傳けおかんに心もとなき事はあらず。まけて正忠をも俱し給へ。」といふ。光實重ねて、「いな、わが仇を狙ふは易く、汝が夫人と幼君を養育むは難し。その難きを捨てて易きを取るは程嬰杵臼が羞づる所なり。努思ひ止まり候へ。」と諭し給へば、理に迫められて、正忠ふた、び固辭み得ず、男泣きにぞ泣きにける。かくて光實は、嫂八重垣の方に暇乞し、引きわかれて出でんとし給ふに、八重垣の方宣ふやう、「御身志は勇くおはせど、いまだ壯年にもあらぬ身ひとつにて、仇を狙ひ撃たんとし給ふはいと危く侍る。申すまでには侍らねど、鎌倉などに縁をもとめて兵衛佐を後盾にし給はずば、さる大敵は討ち難からん、かならずしも兪忽の舉止をして歎きをまさし給ひそ。」とて、目を押し拭ひつゝ、聞え給ふに、光實も遣りはをしけれど、ひとり心を鬼にしつゝ、いとかひなくしく打撈ちて、

往方も定めず出で給へば、正忠夫婦は、八重垣の方を扶掖き、鈴稚丸をいだきて、碓礮の片ほとりなる、嵐山の麓にかすけき住家をもとめて、主従こゝに膝を容るゝに、その家は大堀川を前にあてて、風景いふべうもあらねど、物おもふ身は慰むよすがにもあらず。きのふまでは乳母、納女に冊かし給ひし鈴稚を抱寝し給ふに、母君にかはり奉るべき津戸も、千江松といふ一子ありて、いまだ懐をばなれねば、給事もおもふに任せず、主従四人なす事もなく、けふと暮し翌と明す程に、冬の終りになりにけり。聞ければ元暦元年正月中旬に至りて、鎌倉に義仲の亂暴聞え、彼の人法住寺殿を攻め落し、明雲僧正、八條宮を害し奉りし事明白に風聞せしかば、頼朝大いに驚き給ひて、「且く平家追討の計策を闇き、まづ逆臣義仲を討滅ほし、宸襟を休め奉れ。」とて舍弟蒲冠者範頼、九郎義経を兩大将として、東國の大名數多差副へ、「とくノ上洛して、一擧に勝負を決すべし。」と急がし給へば、範頼、義経二手にわかれ、宇治、勢多より押し寄せ給ふに、佐々木高綱が先鋒して宇治川を渡せしかば、輒く洛に責め著けたり。この折しも義仲は、「行家を責めよ。」とて、樋口二郎に軍兵影屬けて、河内國へ遣はしたれば、身方以ての外に無勢なり。かくては洛中にての合戦かなふべからず。急ぎ木國信濃に退き、重ねて雌雄を決せん。」とて、近江路をこゝろざして、粟津が原まで落ち給ふに、頼みきつたる郎黨は、是首彼首にて討たれ、今井四郎兼平が五百騎のみ残りける。その時木曾殿は、兼平

と馬の頭をおしならべ、「かからせば洛にてともかくもなるべかりしに、慙ひにこゝまで落ちたれど、敵間近く追ひ來れば、遁れ果つべうもおほえす。さるにても石田太郎爲久が見えざるは、討たれやしつらん」と宣へば、兼平答へて、「何條石田が討死致すべき。獨に都を落ち給ふ時、這奴が手の者共を將て、範頼の陣に馳せ加はりたるを慥かに見たり。爲久が事につきては日頃諫め奉りしが、今はみづから思ひあたらせ給ひけめ。楯親忠、根井行親、手塚光盛、大夫坊覺明、小室太郎などこそ、目ざましき戰してみな討死はして候なる。しかはあれ、兼平かくて候へば、千騎が一騎になるまでも心づよく思されよ。誘たまへ、路をひらきて進らせん。」と申しもあへず、羣立つたる多勢の中へ囁と喚いて馳せ入りつゝ、縦横無礙に戦ひしが、五百騎の兵上も或は討たれ或は落ちうせて、後には表仲と兼平と主従二騎になりけり。義仲は爲久を鎌倉の間者とも知らず、彼が舌頭に惑はされて、征夷將軍に望みを掛け、物體なくも君を恨み奉り、はからすも朝敵となりたる事いと淺ましと覺せども、後悔其の詮あらざれば、今は是れまでぞ、誘もろ共に討死せん」とて、再び敵に掛け向はんとし給ふを、兼平いそがはしく押し止め、今さらに一騎二騎の半武者を討ち取り給ふとも益なきに似たり。兼平防矢つかまつるべきに、彼處の森に走り入りて、心しづかに御腹めさるべし。」と申しもあへず、間近く追ひ來る敵を柱へて、散々に射たりける。さる程に未曾敵は、兼平に諫められて、向ひの關の松陰に馬の

足掻を早給ふ。頃しも正月二十一日の事なれば、比叡山おろし寒けきに、谷の水も解けやらす、霜の柱に踏さへ滑りて、深田に馬を乗り入れつ、打てどもノ、行かざれば、せん術なきに心も勞れ、今井や續くと見かへり給ふを、石田太郎爲久が狙ひよつて發つ矢に、内兜を穿ぶかく射させ、馬の頸に額を當てて俯しになり給へば、石田が郎黨堀江藤次光澄、同じく藤五陰重兄弟二人深田の中に跳び入りて、義仲をひき落し、やがて首をぞとつたりける。今井四郎兼平は、木曾殿討たれ給ひぬと見てければ、なじかは些とも猶豫すべき。弓をからりと投げすてて、太刀を眞額に抜き挿頭し、西を撃つては東に靡け、南を撃つては北に走らし、十五騎に手を負はして七八騎を切つて落し、爲久にあはんとするに、たえて石田を見ざりけり。兼平已に力究まりて、今はかうよと思ひしかば、鏡踏張り、鞍壺に衝立ちて、大音聲に名告りけるは、一旭將軍木曾殿の御内に於て、四天王の隨一と呼ばれたる、中三権頭兼遠が四男、今井四郎兼平が討死するを見て、武運竭きてん時の、手本にせよや殿原にとて、太刀の鋒先を口にくはへ、馬より落ちて死ににけり。いと目ざましき最後なり。扱も石田太郎爲久は思ふ隨に義仲を謀り謀せて、範頼の陣に馳せくははり、粟津が原の合戦に、敵の案内をしつたれば、圍ひよつて義仲を射て落し、郎黨堀江に首をとらせたれば、今度の軍功第一番と稱せられ、こよなき面目なりとおもへり。かくて樋口二郎も河内より歸り來て、洛に入るの日、遂に虜となりて首を刎ね

られ、洛中洛外の反亂忽地に靜まりければ、爲久はいそぎ鎌倉に馳せ参りて、去年よりの爲體を審かに聞えあけ、嚮に義仲の預け給ひし金の猫を鎌倉殿に獻るに、頼朝は彼の猫を見そなはして、細工の凡ならざるを賞美し、「爲久が計策その機を漏らさず神妙なり。」とのみ宣ひて、重くは用る給はねど、石田はみづから許して人に誇れば、いと愛でたしと思ふもの多かりけるに、秩父重忠これを冷笑つて、「爲久は己が榮利をはからんとて御一門の中を裂き、紂を輔けて紂を殺す、その心ざま虎狼に等し。かかる佞人は武士の風上にもおくべからず。」とて、爪弾して蔑しけるとぞ。こゝに猫間新太郎光實は、義仲洛の軍に負けて、近江の方へ落ちゆくと聞えしころ、寄手の軍兵に紛れ入りて、彼此と走りめぐりにけれど、つひに當の敵に逢はず。義仲は石田爲久に撃たれしかば、忽地望みを失ひて、彌世の中を形なくおほえ、遺恨やるかたなきに、自殺せばやと思ひしが、又思ふやう、我が身幸なくして仇を他人に撃たするとも、その子義高、今なほ鎌倉にありと聞く。縦ひ義仲は撃たずとも、その子を撃たば志をいたすに庶し。且く彼の人のなりゆくを見んにはとて、自ら元服して、漕がに鎌倉に走せ下り、もつばら便宜を伺ふといへども、「義仲討たれて後は、義高も徹しく閉ぢ籠められて坐する。」とのみ聞えて、輒く狙ひよるべうもあらず。殊更都鄙の愚劇がしきに、民間といへども他所より來れる者を止めねば、光實ぞひなく又近江路をこゝろざして歸りゆくに、路すがら思ふやう、美妙

水冠者義高は、朝敵義仲が子なればとて、若し鎌倉にて謀せられなば、今度も又わが志はいたしがたし。よしや影の月日を凝るとも、義高を意なく世にあらせざば、誰を仇として寛みを雪がんと思ふに、いと心もとまければ、あらゆる神社に祈請しつ、仇人の命乞をするの外さらに他事なかりける、心の中こそ健氣なれ。

評に曰く、この段軍記の古實を失はずして、ひそかに許多の脚色を説き出し來る。所謂、義仲北方子の方より發りて鼠の祠を祭り、光隆南方花落にあつて金の猫を贈り、竟に猫鼠の寛を縮ぶに至る事、是れ一部の楔子なり。

頼豪阿闍梨怪鼠傳卷之一 終

頼豪阿闍梨怪鼠傳 卷之二

東京 曲亭主人著述
門人 魁菑癡叟批評

第四套

大姫急を告げて良人を走らす

唐祿人間川に客をとゞむ

美妙水冠者義高は鎌倉に赴きてより、既に三年の春を迎へて、や、十六歳になり給へば、政子御前まさこごにぎみ只管婚姻を急がし、去年の冬より準備して、その事を聞え給ふに頼朝は、「いまだ遅からず。」とのみ應へて、させる氣色もなく、今に至りて政子大姫にあはし給はねど、折ふし侍ふものどもが、雨夜の月日評に、「御曹司はかくこそおはせ、譬へていはば、容止は何がしに似て、それにも立ちませり、心ざま又温順にて、木曾の山里に生育ち給ふには似けなく、よろづ風流やかにまします。」と申すに、大姫は年の齡二八を過ぎて、元暦元年大龜十七歳なるときは、仁安元年の出生なり。東鑑、盛衰記等を閲するに、子に通ず。しかれば大姫の年紀古記とあ、生ご、ろさへつき給へば、待つにわびしき桃夭の佳會を、いつとはず、かかる事作物がたりにおほかり。

打ちつけに問はねど、色に出づるなるべし。しかるに今茲正月中頃より、思ひの外のこと出で来て、
義仲忽地に滅亡し給ひければ、義高も朝敵の嫡子なればとて、嚴しく一室に閉ぢ籠められ、宇野小太
郎行氏北條九代記に海野小太郎幸氏に作る。が外には参り仕ふる者もなく、若し逃げ亡せ給ふ事もやとて、遠外に守護
の武士をつけられたり。義高は身の形なきにつけても、父の討死はいふも更なり。今井、手塚等を始
めとして、みな粟津野の露と消え、乳母唐縁が往方さへ定かならずと聞えし程に、愁傷いふべうも
あらず。とても覺れぬ命なりとも、せめて顯身の息の内は、父母の菩提をも弔ひ、又みづから後の世
の準備をもせばやとて、朝な夕なに讀經しつ。歎きの中に春も暮れて、いと濕りがちなりける五
月のころにはやなりぬ。行氏はこの年來いと信やかに冊きしが、義高の物思ひを見たてまつるも心憂
くて、さまざまに諫め勵まし、或日又まうすやう、「かしこけれど、大殿朝敵の名に係りて、果敢な
く討たれ給ふといへども、君は三年がほど鎌倉に在して、その事に與り給はず。加藤大姫君の婿
がねにてましませば、鎌倉殿にもいかでか憐みおほさざらん、いたくな思ひ屈し給ひせ」と口こそ
いへ心には、わが身稚き時父母を喪ひて、君思他人よりもふかし。もし洛にあるならば、花々しく討
死して、年來の御情に答へ奉るべかりしを、懃ひに生き残りて、絆ともなる妹と背の、結城せし棧橋
は、いかになりけんともしらず、君を思ひ身をはかなみて、いと懃めかねしかば、暫しも憂きを忘

れ給ふよすがに、義高に申しすゝめて、主従折々雙陸を撲ちけるに、興に乗じては夜をあかす事もおほかり。かかりしかば大姫は、義高この程の物おもひに病みもわづらひ給はんかとて、只その人の事のみを問ひもし言ひも出で給へば、政子御前は又大姫の思ひほそり給ふに心苦しく、ある日姫君に宣ふやう、「義高頃日は雙陸を好み給ふよしを聞きしかば、かかるものを進らせばやと思ひて、豫て細工にいひつけおきぬ。あれ見給へ」とて、二ツの木偶さし對ひて、雙陸を撲つ機關を女の童に昇き出さし、又宣ふやう、「昔唐の女皇帝は、楊貴妃と雙陸を撲ち給へるとき、重三重四を乞ひけるに、おもふ儘に勝ち給ひたるよろこびに、その夕日に緋を入れさし、五位に准へ給ひしより、朱三朱四と呼ぶとかや。又源氏物語に、近江の君も是れを嗜めり。御身夫婦も睦ましく、かかる遊びをし給へかしと思ふばかりの贈りものなるに、こは御身より進らせたまへ。これにつきても、一日もはやく婚姻あらまほしとのみ祈り侍り。」と聞え給ふに、大姫は、「おふけなき母上の御慈しみにこそ。」と歡び聞え、やがて女の童をもて件の機關を義高の住ませたまふ子舎に贈り遣はしたまひぬ。かくて兩三日を經て、何がしの局とか呼ばるゝ老女、諸折戸の此方より、忍びやかに行氏を呼び出し、「御曹司は柳營いふ。の御爲に、正しき増ながら、義高の心中量り難しとて、潛かに失ひ奉れと仰言ありける由、大姫君もれ聞き給ひて、いたゞ驚き恐へ、「いかにもして今宵の中に鎌倉を出し參らせよ。」と宣はするなり。こ

こを出ではなれたまふまでは、許多の女の童にうちかこまして、人の思ひかけぬやうに計らひ侍りて
ん。とく／＼用意し給へ」と密語せば、行氏聞きもあへず、走り入りてかくと告ぐるに、義高はさわ
ぎたる氣色もなく、「こは薄て思ひつることよ。されど、大膽が志を仇にはせじ、脱る、程は脱れて
見んと思ふなり。汝よみしく計らひ候へ」と仰するに、行氏こゝろを得て、ふたゞ諸折戸のほとり
に立ち出で、彼の老女に今宵の暗號を譯しあはせ、主従俄頃に旅の準備して暮るゝを遣しとまつ程
に、既に時刻にもなりしかば、老女は髯の女の童の中に、義高主従を打ちかこまし、輒く出しまゐら
せんとす。そのとき行氏おもふやう、一日脱れたまふとも、忽地追人かゝらば、わが身ひとつにて、
争でかこれを防ぎ得ん。猶誰りて、後やよく延し奉らんにはとて、嚮に大姫より贈り給ひたる木俣の
機關を、義高の居室に操り置き、主従終に龍潭の危きを脱れ、武藏のかたへ走りけり。さるからに宿
寢の武士は、通宵木俣の雙陸を撲つ音を聞きて、義高未だ寢ね給はずと油断して、次の日、巳の刻
過ぎる頃及に、漸くその亡きを曉つて、大いに驚て、やがて縁由を注進す。折しも頼朝は公文所に出
でて、西國合戦の安危を問うて坐せしが、件の告げを聞きて、列み坐たる武士を見返り、「誰か義高を
討ち留め來らん」と仰するに、衆皆、「噫」と許り應へて、政子、大姫の恨みたまはん程をおもふ故に
や、我うけ給はらんといふ者なかりつるに、石田太郎爲久遙けき末座より進み出で、「某馳せ向ひ候

べし」と申しもあへず、席をあら、かに立ちて、直に宿所に走り歸り、俄頃^{にはか}に手分^{てわけ}して、家隸堀江藤^{いへつこほりえのとう}二光澄^{じみつあきら}をば武藏のかたへ遣はし、その弟藤五陰重^{おととうごかげしむ}をば甲斐國^{かの}の方^{かた}へ遣はし、その身は伊豆箱根^{いづはこね}を越えて、駿河路^{するがぢ}までとこ、ろざし、主從^{しゅじゆう}三人、二手^にに別れて追つ蒐^かけたり。さる程に美妙水冠者^{しみづのくわんじやうしんか}義高^{よしたか}は、宇野小太郎行氏^{うのせうたろうゆきうぢ}を將て、夜は通宵路^{よらすがらみち}を走りて、晝は木の陰岩^{かげいは}の狭間^{はざま}に立ちやすらひ、鎌倉^{かまくら}を出でにしよみ第三日^{ひふぐれ}の曠昏^{ひらふぐれ}には、武藏國高麗郡川越^{むしらのくにこまろはりかはこえ}のあなたなる人間川^{まにがわ}まで落ち延びぬ。こゝに又義高の乳母^{めのと}唐糸^{たうし}は、往に義仲葉津^{よしのはづ}にて討たれ給ひ、兄兼平^{あにかねへい}、夫光盛^{むつみつり}も討死せしと聞えしころ、一子^{ひとりこ}の大太郎^{おほたろう}、姪^{めひ}なりける榎橋^{えのはし}を俱して、信濃路^{しんぬろ}をまどひ出で、武藏國入間川^{むしらのくにいりまがわ}の上^{うへ}に來りて、こゝに僞居^{たごひまひ}し、年來^{としごう}手なれたる琵琶^{びわ}、和琴^{わごん}などを、郷^{さと}の小女^{せうにょ}等に教ふるを生活^{なまはひ}とし、親族^{おやうぢ}三人ともかくもして、憂^{うれ}き月日を送^{おく}るに、大太郎^{おほたろう}は稚きよも多病^{おほやまひ}なるが、この春^{はる}いたく眼を病^めみて、つひに盲目^{めしひ}となりしかば、これをば琵琶法師^{びわはほうし}にせんこ、ろがまへにて、明暮^{あきふし}絲竹^{しちく}の技^{わざ}を教へけるに、その性音曲^{さがねまがた}を嗜^{たしな}まざるにや、人なみに習^{なら}ひも覺^{おぼ}えず、よりにて打ち懲^こらざる、事^{こと}しばしなり。これらは私^{わたくし}の上^{うへ}にして、心苦^{こころくる}しとするに足らぬど、唐糸^{たうし}は貞願^{ひんげん}に義高^{よしたか}の御形容^{おんかたち}はいかにおはすらんとおもひやるにも、大太郎^{おほたろう}がいひがひなく、稚^{せいな}きよも軟弱^{よわく}しくて眼^めさへ見えなかりにければ、心^{こころ}のみ焦燥^{いらだ}ちて、相語^{あひかた}ふ人もなかりしかば、榎橋^{えのはし}はその氣色^{けしき}を見て、いと道理^{ことわり}と思ふにも、妹脊^{いもせ}の縁締^{えんぢ}びたる、行氏^{ゆきうぢ}が事^{こと}こゝろにかゝりて、そなた

の室のみ瞻望むれど、音耗すべきよすがもなく、いと慰めかねたりける。かかる處に義高主従や、この所に來給ひしが、日もくわ人も疲勞れて歩みなやみたまふにぞ、行氏が申すやう。二日今彼處にて里人に問ひて候へば、「こゝは武藏の入間河原なり」と申したり。けふも既に暮れて、遙々と來たまへば、今宵はこのわたりに宿を投めて、且く氣力を養ひ、翌は朝まだきより走りたまへかし」と申すにぞ、義高點頭きて、「われもさ思ふなり。しかるべき家もあらば、宿を投めて見よ」と宣へば、行氏こころを得て、河原にそひたる草の門に立ちよしが、主人はいかなる者にかあらん、慰むに物いひかけて、身の大事になりやせんと躊躇ひて、忽幸には呼門ひ聞えず。主従門に竹立みて、内の容子をばひぬ。かかりける程に、霧に行氏が路を問ひたる里人は、川越の越三といふ惡棍なるが、義高主従の凡ならぬ影容を見て、こは今朝村長よりふれししたる落人なめりと思ひしかば、そのゆく所を究めんとて、密かに跟け來りて、岸の蛇籠に身を借せつ、間近く張ひ居たるに、義高主従は、宵闇の黒白もわかで、後方に人のあるをしらす。この時唐締は、物習ふ少女等も習ひ果てて歸りにければ、大太郎に鏡並琴を教ふるとして、

さりともとたのむの瀬を頼みにて人間の川にけふぞ入りぬ

といふ歌を、くり返し、唄はするを、義高もれ聞きて行氏が袖を引き、「今唄ふなる古歌の心は、

わが身の上をいふに似たり。いかなる人の住家ぞや、いともゆかしき爪音なり。」と密語きつ、猶竊聞し、思はず時を移し給ふ。かくて唐絲は大太郎に教ふる事數回にして、終に熟え得ざりしかば、うち腹立てて聲をふり立て、「御身既に十六といふ年なれば、童にはあらず。武士の子と生まれて廢人となりし事、身の不幸なればいはんやうなし。か許りの技を熟ゆる心なくば、何をもて行末口を闊ふべき。あな鈍ましや」と罵りもあへず、壁に掛けたる胡弓をとつて、背を了とうつ程に、大太郎は、「許し給へ許し給へ」と泣き惑ひ、掻い拂りつ、逃げ退くに、唐絲は猶打たんとて走り蒐るを、棧橋吐嗟と携り留むる袖荒らかに振拂つて、外面まで追つて出れば、義高主従見るに忍びず、聽て大太郎を掻い遣りつ、唐絲を遮りとゞめ、「こは何事にて候。我々は旅客なるが、今宵宿を投めんとして、たゞ今こゝに来れるものなり。緣故はしらざれども、目も見えぬ人とおぼし。まけて許し給へ」と勸解るを唐絲は見もやらず、走りこえて又打たんとする折しも、棧橋がおくれ走せにさし出す紙燭の光に、はじめて面を見あはし、「こは御曹司にてましませしか。そは小太郎ぬしにはあらずや。不意し、漫なり。」と申すにぞ、義高も且怪しむ且歡び、「けに紛ふべくもあらぬ唐絲母子、棧橋なり。この所にとは思ひもかけねば、纏にも聲はききながら、汝等なりとはしらざりき。大太郎が替者となりつるも、さこそ便なく思ふならめ。寔に不思議の對面なり。」とて、いと丁寧に聞え給へば、行氏も唐絲等が恙な

きを祝して、はからざる再會を歡び申すに、唐絲は近まどりして何事もいはず、不覺に目を押し拭ひて、「まづ、此方へ」とて、義高を誘引ひ進らすれば、行氏は椶橋に大太郎を扶掖かし、みなもろともに片折戸の内に入るを、越三は楚と認めて、ひとり點頭き、舊の河原を走せ歸りぬ。ともしらすして唐絲は、忙はしく塵かき拂ひなどする間に、椶橋は温湯を桶に汲み入れて、義高の足を洗ひまゐらせ、又行氏が蹴揚の泥を濯ぎおとして、主従を上座に居らし、蚊遣火くゆらして、款待いと信やかなり。そのとき唐絲は大太郎を呼びて、親族三人、義高のほとり近く侍りつ、長途の疲勞を問ひ慰め、さて申すやう、「君の恩の高きこと、誰かは他に思ひ侍らん。そが中に唐絲、昔君の乳母にめされて、襁褓のうちより守り育て奉りき。また兄兼平、夫光盛は、御内に于て、四天王と呼ばれたるものどもなり。縦ひ後等程にはあらずとも、彼の地に到つて君を竊み出し奉り、鎌倉を攻め落して亡君の怨みを雪めばやと、明暮肝膽を掘き侍れど、兄も夫も討死して、粟津が原のあはれ世に、生き残りたる大太郎は、物の用にたつものならず。いひがひなきは女子なりと、身をはかなみつるに思ひきや、主従の義なきは盡きず、はからずもこゝに來まさんと、きていかにして鎌倉を出で給ひし、御形容も脱しけなり。縁由をしらし給へかし」と申すにぞ、義高點頭きて「母上は産後に身まかりたまひぬと聞えて、御容止だにしらす。鎌倉へ赴く日まで、十五年が間養育まれたる、乳母は母に異ならず。かく

不意く環會ふよるこぼしさを、いはずとも推量せよ。しかるに義高鎌倉に人質となつて、父の最期にあひ奉らず、利へ頼朝深く心をおきて、密かに謀せられんとせらるゝよし、大廳が告げたるによつて、斥して往方は定めぬど、一昨の黄昏に鎌倉を脱れ出で、こゝまで迷ひ來りし」とて、三年が程の憂き事を、聞えしらし給ひしかば、行氏も機關の人形をもて、直寢の武士を欺きたる事を物語るに、唐絲はぢらなり、棧橋、大太郎等も吁と感じて已まざりけり。そのとき唐絲は估とこゝろづきて、外面を見返り一戰ふく風にも心おかるゝ、落人の御身なるに、かく端近くおき進らするは、慮りの淺きに似たり。棧橋は納戸に誘引ひ奉りて、夕餐を進らせよ。大太郎は調べをこなくとも、筑紫琴を擗擗らして、旅路の調子を慰み申せかし。さらばわが身は郷にゆきて、酒を買ひもて來つべきなり。足裏の痛み給ふには、酒を吹くにしくはなし。行氏も疲勞れ給ひつらんが、わが身の歸り來るまでは、意んで留守してたべ。」と、是彼に聞えおき、柱にかけたる瓢をとつて、素火燭ふりてらし、熱れたる路なれば鳥夜をも懼はず、忙はしく走り去りしかば、棧橋は義高と行氏を、おくまりたる一室に誘引ひて、夕餐をまるらせ、大太郎は琴かきならして、今様をなんうたひける。

第五套

唐絲が計親族を殺す

光澄夜義高を撃つ

かくて唐絲は、河原にさうてゆくこと十町あまりにして、郷門なる酒屋に到りて、瓢の酒を買ひ、これを引提けて歸り來るに、二十一日の月さし登りて河風いと涼やかなり。世を滑ぶ人を宿らざるらすれば、只顧にこゝろ忙はしく、砂を踏み反さじとするに、外日もふらず、わが家ちかくなりぬる頃、鏝打つたる鉢巻に、篠小手したる雜兵十人あまり、後方より駆け來り、「唐絲やらじ」と呼びかけて、左右より組まんとするを、こは狼藉やといひもあへず、閃りと避けて撲地と投げ退け、續いて懸る一人が駒さかどつて突き戻せば、十歩あまりよろめきつゝ、筒りに任せり。殘るものもけこの形勢に辟易して、左右なくば打ちも免らず、行くべき路に立ち塞がりて、逃がじとのみ闇をぬるの時捕手の大將軍と見えて、面赤く髯蒼く、豚のごとく肥えふくれたる兵士一人、さへ出でて膝を高うし、みやをれ唐絲、汝女子なれば穩便の制度を以て、旅宿に召しつれ行かんとするに、却つて尾籠の働きをなす事奇怪なり。かくいふ某は石田太郎爲久が家隸に股弦腹心と呼ばれたる堀江藤一光澄なり。いぬるころ、粟津が原の合戦に、木曾殿の首級を賜はつて、比類なき功名を顯はしたるをば、

音に聞きてもしりつらん。しかるに、今度義高鎌倉を逐電して、往方定かならざれば、わが主爲久、鎌倉殿の仰せを稟け、某また一方の討手を承つて、この地に發向せし處に、義高主従は汝が家に舍藏ひおくよし、これなる男が訴へによつて直に馳せ向ふ折しも、いま汝が郷門なる酒店より出づるを見たれば、跟け來りてこゝに及べり。汝は今井四郎兼平が妹にて、手塚太郎光盛が妻なる事は、我よく知りつ。膂力の勝れたるさへ女子には稀にて、太刀おはする事なども、兄夫に劣らずと豫て聞き及ぶといへども、それを怕るゝ光澄にはあらず。もし志を轉して、義高主従を討つて出さば、朝敵餘黨の連累を脱れ、却つて大いなる俸俸にあふべし。心を定めて回答へせよ」と敦圓きあらく説き示せば、惡漢越三も又光澄が後方にありて、甲夜に義高主従を認らたる爲體を演説し、かく證據分明なれば脱れがたし、とく義高を出して、汝等母子の首を續け」といふ。唐絲は既に證人を出されて、いひとくに言葉なく、さすがに命や惜しかりけん、光澄に對つていふやう、「君臣の義脱れがたくて、一旦義高を舍藏ひ侍れど、發覺るゝうへは是非に及ばず。兒子大太郎は哲者にて世わたる使もなき者なり。これをば盲目法師の長ともなし下され。わが身は鎌倉殿に給事を許されて、貧苦を忘るゝよすがともならば、しるべして義高を討たせ進らすべし。さはいへ、朝敵の嫡子なりとも、乳母の身としてその君を討たする事、過分の恩賞をおもふのみにあらず、偏にわが子のいとほしき故なり。又宇野

小太郎行氏は、年こそ弱けれ、影の中よりえらみ出され、義高の傳として、鎌倉までも参り仕ふる程のものなれば、武勇も尋常にはあらず。彼その主を討たして、切死する程ならば、平治の金王丸に彌まして、いくその兵士を損ひ給ふべし。彼をばかやうノ、に欺きて、後やすくいだすべきに、御身潛かに覗ひよつて、義高を討ちとり給へ。とて、その謀を密語きければ、光澄深く歎びて、「この事宜よ、偽りなくば、大太郎には影の賞錢をとらして、一生を安らかにおくらし、又汝をば御臺所政手御前に聞えあけて、大姫君のほどもかく召仕はる、やうに、爲久吹撃いたさるべし。しかるを當座の難儀を脱れんとて、誠しやかにいひこしらへ、或は落さんとし、或は鬪首を討つて欺かんとせば、義高、行氏等はいふもさならり、汝等母子が首も杪に棄けらるべし。心を得たりや、いかに」と云ふに、唐糸點頭いて、「疑ひは人によりなん。このこと實言か、虚言か、御身自らわが庭の木陰に隠れて、妾がせんやうを見給へ」といふ。光澄聞きて、「さらばしかせん」とて、唐糸を先にたたり、悉皆忍びやかにその家のほとりに至りて、雜兵等をば河原の前後を遠巻きさし、また越三をば背門の方に立ちしものばしつ、光澄はひとり片折戸の内に潛び入りて、生垣の陰にかくろひ、且く唐糸が暗號をまわぬ。美妙水冠者義高は、かかるべしとは思ひもかけず、大太郎が琴の音に聞き入りて、しばし假寐し給ひしかば、行氏は出居の方に退きて、唐糸が歸るをまつに、棧橋は三年が程、戀しとのみ思ひ

つる、その人のほからずも來れるを、海月の骨にあふ心地して、うれしさいふべうもあらねど、今更に耽かほしくて、忽卒にはいひよらず、もろともに端居しつ、更けのく月をうち眺めて行氏を見かへり、忘るなよ程は雲居に隔つとも空行く月の廻りあふまでと、伊勢物語に見えたるは、別れて後を契る感なり。我が身も又ふりわけ髪かみの昔より、御身が妻の名はありながら、世の恩劇しきに隔てられ、いまだ一日も齊料さいりょうき侍らず。されど縁あればこそ、空ゆく月の廻りあふ、今宵は影も限なきを、いかに見結ふにやあらん」と、もてる團扇うちあはを額ひんねに當て、ほのめかしつ、問ゆれば、行氏も微笑みて、「さいはる、をあしうは聞かねど、よしや結髮けつぱつはあるにもせよ、主君危急しゅきんききゅうの秋にして、往々ゆくへさだめぬ旅家に、結むすび果てなん嫌いや脊せにあらず」とかくわが事は思ひ絶え、いかなる人にも伴はれ給へかし」といひかけて、立たんとする裳もを引きとめ、廻まわり一乗ひとじょうこの添臥そひはし侍らすとも、親おやの許ゆるせし妹いもと脊せを一退ひけよ」と宣のたまはするは心強こころし。御身に不慮ふりょの事あらば、わが身ひとり存命ぞんめいふべきかは。末すえおほつかなき仰おほせせならば、この身まづ死して歸かへの道みちを余あまうし、心操こころをもらし侍らん、然しかなり」と、いひもあへず、行氏が刀をとつて抜きはなさんとするを、「こは知感ちかんなり」と押しとゞめ、刃やいばを奪うばひとらんとするに、なほ歎なげきじと争あらそふ折ひしも、素麻すまを掻かきわきつ、一ひとやよ棧橋せきはし、恨あはれせと一ひと呼よびとめて、二人が間に走り入る者、これ唐織からおりにてありしかば、棧橋せきはしも、行氏も、こは思ひかけずとばかりに、刀やいばを捨てて走り

退くはなしのみたる消影を、青絲はと見かう見て、「今彼處より竊聞きて一人が心操はよくしりぬ
行氏にしの色に愛でざる忠信、穢情か命を惜しまぬ貞節、いづれを何れとわき難き、この夫にしてこ
の婦あり、誠に一世の奇耦なり。木曾殿滅びましまさば、今茲は婚判さすべきに、義高因徒となり
給へば、さる私の志を致さんやうもなく、打ちつけにこそいひも出でね棧橋が心の中、いかばか
り悲しかりけん、しかるに今宵はからずも、御曹司の御供して、行氏こゝに來ませしは、縁盡きざる
祥にして、久後またのみあり。夫と齊肩き、妻とよぶ事、神の御こゝろもてなし給ふとかいへば、俄
染の契りなりとも、婚判の儀にして、本意遂はさして給はれかし。わが子太郎は蕃者なり。御身夫
婦はこゝろをひとつにして仕へなば、君の御爲にもあしからずし。けふは日子さへよきに、この事御曹
司に聞え奉り、姑なり媒なり、叔母が手酌に、妹と春の千年を覗き侍るべし。買ひもて來りし酒
もあり、さほとて瓢を引提けて、壺酌のあたへゆく影を、ふし拜まぬばかりにて、棧橋が舞ひは
前の帳みに引きかへて、待つ間わびしき杯より、色にははやく出でけらし。かくて唐絲は銚子に土
器とり蓋へて携へ出で、世にありし昔ならば、麗々の儀式もあるべきに、きのふの年魚のしら飯に、
味ひ薄き梅酒、彼處にて弾く大太郎が、調べをさなき筑紫琴を萬歳樂とも聞き給へ」と覗きて、土器
を一人が間に居るたりければ、行氏終に回辭むことも得ず。果全く妻を娶りて後の榮えを思ふ身に

あらねど、棧橋が心操こころはせもいとほしく、かく了寧ねんごうに聞え給へば、まけて仰せおほに従ふべし」と應へして、もろ共に座ざを占しわれれば、唐絲斜ななめならず歡たのびて、まづ棧橋かほらひに上器かほらひをとりあげさし、みづから銚子さしなべをとつて、なみやかに湛たへたるを、棧橋は押しいたゞき飲のみ果はてて、行氏ゆきうぢに勸すすむ。行氏飲のみて棧橋かほらひに返し、三々九度さんくぐどの數かずにも満みちぬ。その時唐絲ななめつと立ちて、上座かみくらに居ゐなほり、思おもはず呵からくと笑わらひけるが、怪あやしきかな。行氏夫婦ゆきうぢ心こころ神かみ俄に頃まに憫あはれ亂らんし、五臟ごぞう六腑ろくふを絞しぼるが如ごとく、見みあはず顔かほはもろ共に、上かみのごとくに色いろ變かり、我われにもあらでいきまき薬くすりく、一い不ふ審かしや今いまこの酒さけを飲のむとやがて、こゝち死しぬべく覺おぼゆるは、われも御身みみも、面おものあたり、同じ苦痛くつうに堪たへざるは、命いのちを縮ちぢむる毒酒どくしゆなりしか。こは、不思議ふしぎ。」と疑うたひ惑まどひ、夫ごうとつとは妻つまを介抱かいまうし、妻つまは夫ごうとつとを助たすげんと、思おもふばかりに足たたたず。折かたしも聞ゆる琴ことの音ねに、軒ひさの松風まつかぜ聲こゑをへて、

「風かぜ從はきくやよりこゑいよくうらむ

夜つゆ聲こゑ彌や恨うらむ 及つひは二みやう朝うてう朝あ涙なみだ不だレん林ぎ」

と朗詠らうえいしたる納戸なんどの方かたを、唐絲見返みかへりて、聲こゑを低ひくうし、「弱わき人ひとたちを無む下げに殺ころすは鬼おに々々しくも思おもはんが、苦痛くつうも暫しばしど辛抱しんぱうせよ。御身みみ二人ふたりを活いけおいては、今宵こんさつ御曹司ござうじを討うたするに、手足てあし蚤ちぢ縁はなれば、已やむことを得えず。いぬるころ軍用ぐんようの爲ためにとて、兄兼平あにかねへいよりあづかりおいたる毒石どくせきを、買かうて來きた酒さけに浸ひし、冥土めいどへ遣嫁よめあす較計かくけいとも、しらで手段てだてに乘のりたるよ。」といふに、二人はますく驚おどき、「さては慾おぼ

に惑ひて鎌倉へ内通し、君を賣り、奸を殺す、大悪人ともしらざりし口をしきよと教團きて、向上ぐる眼中朱を沃ぎ、刀を杖に行氏が、立ち上らんとしては幾度か、尻居に撞と轉鞭べば、棧橋いと、悲しみて、吾儕夫婦はともかくも、木曾殿の御内にて、四天王と呼ばれたる人の妻子にあひながら、守り育てたる主君を殺して、世に立てんと思ひ給ふは、計られて今死ぬる棧橋等より悪かならざるも佛もある世には、及ばぬ顯ひに猿猴の、月日は照らし給ふまじ。この年來かくまでに、物の道理も辨へぬ、人ならなくに淺ましや、天魔の所爲にてはべるべし。自ら曉つて悪心を、轉してたべ叔母御なう、喩々叔母子」と聲たてて、かき口説くを外に聞き、「今というて今死ぬる身の、念滿一遍まうさいで、賢しがほなる諫言すな。さらば縁故をしらすべし、わが身鬻に消買うて歸る途にて、石田が郎黨堀江藤二、夥の兵士をもて犇々ととり巻き、汝義高を倉藏ふこと、越三といふ者の訴へによつて慥かにしる。嚮道して討たせすば、汝等親子諸共に、首を杓に梟けらるべし。又尋きして討たせなば、兒子大太郎には夥の金を賜はり、汝等をば吹擧して鎌倉殿に給事さすべし」といふ。とても脱れぬ御曹司を倉藏はんとて、わが子を殺さん事いと悪かなり、と思ひ返し、頼く承引きて歸りしが、御身夫婦に挂へられ、爲損じてはと深念して、この殺生をするにこそ。鬼とも醜ともいはずいへ、子を殺し身を亡ぼして譽められん事は夢思はず。百年も二百年も長生して、御身夫婦かなき迹は、よき

に弔ひ得さすべきに、けふまでの壽命なりと思ひ諦らめ、三途の川も手を引きあうて、十萬億土へ旅だてと、嘲哂せられて棧橋が、齒を切る遺恨の涙。行氏いよ、堪へかねて、一太刀なりともこの恨み、はらさでやはとよめきく、切つてかゝる刃の下に、立ちもあがらでかい潛れば、爪音繁き清響きの、琴の調べもいと迫めて、修羅の太鼓に異ならず。行氏こゝろ勇しと雖も、筋骨痛へ癩れて思ふにまかせず。打ち落さるゝ刀と共に、仆れかゝる隔ての襖を、内より了と蹴開きて、義高奮然と走り出で、「事の容子を彼處にて聞きぬ。暴悪非道の乳母唐絲、天罰思ひしらせん」と罵りもあへず、太刀抜きかざし跳り蒐つて切らんとす。折しもあれ庭の本陰より閃きたる手裏劍に、義高咽喉を打ち抜かれ、仰様に仆れ給へば、奥に聞えし琴の音は、絶えて忽地寂然たり。行氏夫婦は面のあたり、主を救ふに由なくて、拳を握り眼を怒らし、遙か向うを信と見れば、堀江藤二光流、半垣の彼方よりあらはれ出で、徐やかに歩みより、行氏等には目もかけず、聽て義高の首搔きおとしつ、燈にさしつけて得と檢め、懐中より一包みの金をとり出して、これを唐絲がほとりに置き、「室に男子も及びがたきあるじの婦が今宵の働き。立ち歸りてかくとまうさば、爲久はこそ歡び給ふらめ。こは當座の賞祿なるに、大太郎とやらにとらすべし。又唐絲は某と共に鎌倉へ起きて、自ら縁由を聞え、給事を願はるべし。路次の轎子は村長より來すべきなり」と聞えしらし、遂に義高の首を携へて、外面

へ走り出で、暗號の笛を吹きたつれば、遠きしたる雜兵等、一つ處に集ひ来て、この夜の首尾を就しつゝ、主に従つて立ちかへりぬ。行氏は手を空しく主君の首級を遊さじとて、たたまくしては轉輒び、頓悶元悶燥つ忿怒の面色、髻ふつとふり斷つて、髪も逆立つ隈尻に、主の亡骸を見返りて己みなん己みなん。今ははや御曹司の待ちかね給はめ、只遺徳きは、生きながら唐絳觀子が肉を喰らはず、丸ツの世に生を續くとも、怨ハるべきやは。と怒りの聲音も共に、刀を腹に突きつれば、榎橋も落ちもつたる義高の御佩刀を、咽喉へがばと衝きたてたり。覺期はしても唐絳が、見るに忍びずねぢかへる、障子の内に聲たかく、「行氏、榎橋しばし待て。息の内に只一言聞えしらべき事あり」と呼びかけて齧手の障子をきと聞く。日頃異なる大太郎、替者にあらぬ打搦は、萌葱の鞭巻に、白地の錦の直垂被て、黄金作りの太刀を佩き、漆籠の弓に、鶯の羽の征矢取りをへて、旭の旗を後に立て、牀几に尻をかけたる形容、威風凛然としてあたりをはらひ、天晴大將軍と見えいと怪し。今般の夫婦は再び驚き、「假言の大太郎、さては汝も母とひとしく鎌倉へ降参して、我高君を害せしよ」といはせもせず、莞爾と打笑み、「汝等いまだ縁故なしらざれば、さ思ふも理なり。今は何んが置むべき、我こそ旭將軍木曾義仲の嫡男美姫水冠者義高なれ。かくのまいはばなほ不審しく思ふべし。抑わが父いと早くより、平家を滅ぼし海内を掃き清めんとするの志おはせしかば、豫

て遠き慮りを廻らし給ふに、わが出生したるところ、光盛が妻唐糸も又一子を産めり。よつて光盛が子大太郎と、我を襁褓の中よりとりかへ、大太郎をば義高と呼ぼし、その母なる唐糸をもて乳母とし、我は假に光盛が兒子となりて、大太郎と名告ること、偷し敵に妻子を奪はれ、或は一日寄手の圍みをとかせん爲に、人質などの時に臨み、輒く敵を欺くべき父義仲の計畧なり。さるからに、此の事は光盛夫婦、兼平等が外にしるものなく、我も又しらざりしが、往に鎌倉より人質を望めるころ、父われを潛かに召して、始めて縁故をしらし、父子の名告りをし給ふと雖も、敵に漏れん事を憚りて、生得多病なりと披露しつ。父討たれたまひし後は、盲者と偽りて人に交はらず。唐糸又たく打ち懲らして、苦肉の計をせしなり。かかりける程に、一年以前、頼朝狐疑の心ふかく、堀にせんといいこしらへ、義高を求めしとき、わが父こゝろよく領掌あつて、光盛が兒子大太郎に、行氏を傳けて鎌倉へ遣はし給へり。こゝをもて今宵唐糸が堀江藤二に同意して、義高を討たんと承引きしも、眞の義高にはあらずして、わが子大太郎なればなり。一さあはあれ奸智に長けたる石田が徒、輒く主を討たせなば、疑念を發す事もや」とて、唐糸いよ、志を示さん爲に、汝等に毒酒を與へて大太郎が討たれしぞ、彼等親子の忠義なる」とはいへわれ故に、可惜壯俊共を殺す事、いと不便なり」といひかけて頻りに嗟嘆したりしかば、堀へ忍びたる唐糸が、泣かじとすれどしかすがに、置きどころなき袖の

露、一瞥きは人の命にて、手を殺し、顔を殺すも、忠義の爲とはいひながら、二年以來逢はざりし、わが
子かとも名告られず。それさへ夢きに横橋が、思はれ思ふ妹と首の、縁祝く杯が、命を續ける毒
酒とは、産靈も知り給はじ。姪は女兒に異ならぬ、その婿がねはとりわきて、行末頼む世の中に、
ありとありとふ親ご、ろ、誰かは憐れをしらざらん。苔の花に夜嵐の、毒としりつ、酌をとる、叔母
はさながら天狗道、熱鐵を呑む如くにて、焰の息を吻きたりし。といひ果てて涙さしぐみつ。わが子
より猶いとほしむ、人の信に義高も、感涙を押へかね、かかる忠義の家聲を養ひ給ひし父義仲、いか
なれば武運全からざりし。けふは則ち亡日にて、いぬる正月二十一日、敵に端なくあふみなる、比叡
山おろし寒けきに比良の雪さへ深けれど、淺くも石田にはかられて、射かくる矢走石山の、かたきは
大軍、身方は小勢。逃れた田に落つる鷹の、落ち残つたる五百餘騎、我からさきにと討死し、果て
は兼平只一騎、瀬田の入り日に暮れそめて、無常を三井の鐘の聲、世に聞えたる名將も、時にあは津の
夢の跡、思ひ出づれば口をしや、父の仇人を撃たんとて、名を變へ影を埋みつ、死して再び世にか
へる、義高が心づくしも、汝等が忠義に比ぶれば、屑にもあらざりき。死するも忠、生くるも孝、
みな是れ過世の因果ごと、思ひ諦めら成佛せよ、南無阿彌陀佛。と唱ふれば、行氏夫婦思はずも、苦
痛を忘れて坐行りより、扱は事みな討手を欺く謀にてありけるかな。ともしらすして、飽くまでに

悪口致せし事、省みれば更に面なし。恩の爲に身を殺すは、臣たる者の常なるに、かく丁寧に聞え給ふ君の仰せは、わが爲の善智識にて候なり。義高志なく在すうへは、心にかゝる雲もなし。なほ會話の凱歌は、草の原より聞きはべらん」と、末期の一句潔く、刃を揃んで雄手より、籠手の肋に引きまはせば、はれはせじと横橋が、一ッ逆を替ひつゝ、恨みもはる、夏月、酉を仰ぎて唐絳が、臨終處むる念佛と共に、夫婦忽ち息絶えたり。その時義高は唐絳を見かへりて、「汝が愁傷理なれども、密計敵に洩れきこえば、彼等が忠義も夫死となるべし。われは堀江が遣りたる金をもて路費とし、日本廻國の行者に打扱ちて、よむ／＼身方の兵士を集めん。汝は直に鎌倉に赴きて頼朝を刺し殺し、累なる室みをはらせかし」といふに、唐絳涙をさめ、「君の仇、兄夫の仇、今又わが千太郎と横橋夫婦を失ひつるも、皆頼朝故なれば、縦ひ十重二十重の鐵壁城なりとも、近寄つて本意を達せなん。君は又其の虚に乗じ、北國の勇士を相語ひ、谷七郷に御旗を進め給へ」と主従が、酒めき／＼譏しあふ。かかる處に堀江藤二が下知によつて、村長は影の莊管に轎子昇かしつゝ、松明ふりてらして出で來るを、唐絳は遙かに見て、義高に目注し、籠て障子を引きたてたり。かくて村長は引出物の衣裳一襲を、出居の方にさし入れさせ、「堀江主の仰せによつて、御迎へに参りぬ。誘給へ」と呼門へは、唐絳聞きて點頭くのみ。まづその衣裳をとつて、古りたるを脱ぎかへ、やをら乗りうつる轎子を、莊客

ばらばら出出して飛ぶが如くに走りぬ。さる程に義高は、豫て用意やしたりけん、兵具は脱ぎて笈の内
に納れ、六十六部の妙典を奉納する。廻國行者の打撃して、錫杖を引提け、錘を鳴らし、一空を出
でて暫し三人の屋に廻りし、さてひとり／＼に亡骸を、庭の叢陰に押しうづみて、假に葬り果て、
曉けゆく天を眺めつ、川原傳ひに出でゆくを、甲夜より物陰に隠れて、後の夜までもよくその形
勢をしらんとして、ひとり残り留まりたる悪鬼越三、かくと見るより雲を凝待、身を低うしつひや
に跟け來り、「義高やらじ」と無手と籠むを、狙ませもはてず錫杖もて、鳩尾骨破と突き砕けば、血
反吐に塗れ倒る、庭を、諸舞拂つて川へ送りし、一聲阿々とうち笑ひ、怒々として療たちぬ。

評に曰く、この段殊に演義の體に似ず、専ら傳奇の趣にならへり。しかれども、動靜云爲、お
のづから許多の脚色あつて、當時を見るが如くしかり。當にしろべし、文辭の野なる、作者いよ
いよ筆をくだして、婦幼の爲に便溺すること、實に已むことを得ざるがごとし。披閱するもの、こ
こに至つて嘆息せざるはばあるべからず。

頼家河蘭梨怪鼠傳卷之二 終

頼家阿闍梨怪鼠傳 卷之三

東京 曲亭主人著述
門人 魁菴癡叟批評

第六套

血刀を擧げて唐絲爲久に説く
隣家に事へて義婦大姫を慰む

石田太郎爲久は、おのが身を後やすくせん爲に、鎌倉殿の命を插みて主従二騎、三手にわかれ、義高を追ひ蒐けて討たしめんとぞ急がしける。然るに、「義高は入間川のほとりにて、堀江藤一光澄が手に討たれ給へる。」よし津進ありしかば、爲久は駿河路よりとつて返し、宿所にあつてこれを俟つ。此事未だ披露に及ばずといへども、世に隠れなかりけるにや、大姫傳へ聞きて、大いに愁傷し、日夜寢食を絶ちて、殆死なんとし給ふ程に、女房たちも慰めかねて、いと痛ましく覺えしが、政子御前は殊更に齒をくひしぱりて、石田をにくみ、女房たちを見かへりて宣ふやうに「美妙水冠者は柳營の女壻にして、大姫が借老の夫なり。よしや武衛頼朝をいふ。一旦狐疑の御こゝろあつて、彼の人を、討

て」と宣はするとも、頼が悲傷は更なり、わが思はん程をも遠慮すべき事なるに、爲久何等のものなれば、歴々の武士を闇きて、かく嗚呼なる舉動はしつる。只速かに爲久主従が首を刎ねて、義高の亡魂を祭り、大姫が鬱胸をほらせよ」といきまきつ、或は罵り、或はうち泣き給ひけり。女房達は、この御形勢を見て、いよく手に汗を握り、「仰せ寔に理にお任せ侍り。」とのみ應へて、立つにたちかねたり。母子の哀悼かくの如くなれば、頼朝潛かに驚き愁へて、胸くるしくはおはすれども、今はその詮あるべきにあらず。かかりける程に、爲久はこの營中の風聲をもれ聞きて、あきれ果て、「こは思ひの外なる事かな」と泣きて、安き心もなかりしかば、直塾して居たりけるに、堀江藤二光澄、義高の首級を携へ、唐絲を將て入間川より歸り來つ、いと誘りがに「一五一十を演説して、唐絲を伴ひ來れる由を聞えしらし、聽て義高の首級をとり出して、實檢し給へ。」と云ふに爲久はよくも見ず、いと苦々しき氣色にて、光澄に云ふやう、汝も豫てわが肚裏は猜しけめ、在鎌倉の大小名多かる中に、他人の言語を待たずして、爲久今度の討手をうけたまはり、義高を誅戮せしは、不時の恩賞を庶幾ふのみにあらず、彼の主従を世に在らせては、我を仇として狙撃たんといたすべし。然るときは、夜も安くは睡られず、今このときを失はずして、義高主従が首を刎ね、公事によつて私の趣意を遂げなば、名利兩つながら全からんと深念し、既に汝が拔萃の働きによつて、輒くその首級は得たれども、

事なき案に相違して、却つて身の一大事とは成りたるなり。その故は簡様々々なり」とて、大藏の懇傷、政子の嘔り、是彼を説きしらし、又云ふやうに「牝驪使して、武衛ふかく内を怖れ給ふなるに、愛子の悲狀見るに思ひず、且んにかき口説かれて、爲久主従を謀せらるべし。量りがたし。汝何とか思ふこと聞へば、光澄聞きて驚き呆れ、顔色土の如くになつて、そのいふところをしらさ。爲久しばし流吟して、聲を低うし、一竜騎かきの如しといへども、汝幸ひに唐糸を將て來れり。これわが罪を贖る、活路となるべきものにこそ」と云ふに、光澄思はず膝をすゝめ、「そはいかなる謀にて候ぞ」とく聞えしらしたまへ」とていそがせば、爲久後方を見かへりて、いよ、聲を密め、「わが謀外にあらず。今唐糸が首を刺ね、これを政子御前に獻りて申すべきは、爲久もとめて義高の討手を受けるといへども、絶えて切害の心なし。追つ免け奉りて穩便の地に濟ばし進らせばやと思ふをもて、そのこと他人に譲らず、家嫌にも密かに思ふ程を聞えしらし、彼此に部して、御後方を索ねしかば、本月二十一日家嫌江光澄と申すもの、武州入間川のほとりに追ひゆきて、彼の君の在所をしれり。しかるに今井四郎兼平が妹は、手塚太郎光盛が妻にて、其の名を唐糸と呼ばれ、美妙水冠者の乳母なるが、彼の川の上にあり。その夜御曹司圖らさず唐糸の家を宿かりて、絶えて久しき對面を喜び、向後の事を頼みおほし召すよし、懇切に聞え給へば、唐糸又他事なき面もちして、厚く待過し、遂に義高

主従を毒殺して、首級を光澄が旅宿にもて来り、恩賞を乞ふ事、傍若無人なりしかば、この景遠を見
るもの憎みおもはざるはなし。光澄案に相違して、心の中庸章すといへども、いかにとりまてなけれ
ば、假に青絲を賞美して鎌倉に將て歸り、縁由を申すに至つて、篤久が較計忽地に亂断し、一たび
は御曹司の落命をいとほしむ、又一たびは青絲が景遠に齒を切り、立地に毒婦を斬て、身の罪
を贖ふ奉るといはん。この時謂敷を碎いて素手を救ふの言なり。汝日今青絲を誘引ひてわねに見参
さし、わが晴美を待つて手をくだせ。彼は名におふ兼平の妹なり。思ひ悔りて罪もな漏らしと密
語けば、光澄耳を傾けてこれを聞き、掌を打つていへば、はるは、孔明ふた、び生まれてこの國へ来
るとも、その謀いかでか君が右に出でん。微妙もおほま嫉つこと稱賞し、忙しく退出しが、且くあ
りて光澄は青絲を尋て廊下より環り入り、これを東面なる欄干の比方に跪かて一隊人青絲を將て
参りぬ」といふ。そのとき篤久は銀杖の費障子をさし聞き、長袴の裾踏みかへさして、ほとり近く立
ち出で、青絲を信と見やりていふやう、「其許が今度の功績は、光澄が物語りにて聞けり。嫌ながら見
識遅しく、曲れる木曾路を立ち離れて、直なる柳營に参りつかへんと業ふこと、いと神妙なり」と
賞すれば、青絲驚きとうち笑みて、「邪を去り、正しきに歸けば、恥なしといふことの持るにや。親
族を殺し、主君を辱して、はるふくと参りつることは、殿の威を家りて柳營に参りし、わが手を安ら

かに養はんとおもへばなり。光澄どのにはせ給ひし事の偽りならずば、あしからず酬いし給はるべし。」といふ。爲久聞きてうち點頭き、「給事の事は仔細なし。光澄まづ當座の引手物をとらせよ、とくとく。」といふ。言下に、光澄はそのこゝろを得て、「承りぬ。」と應へも果てず、つと身を起して、唐糸が後方に立ちまはり、刀を閃りと抜きかざして、聲をもかけず砍らんとするを、唐糸はやく身を返り、刀を撲地と打ち墮せば、こは口をしとて刺副の、解刀を抜かんとするを、その柄にだに手をかけさせず、落ちたる刀を把ると見えし、光澄が首前に顛び、軀は後に倒れけり。爲久は、眼前郎黨を打たして大いに怒り、隙間もなく打つて蒐れども、唐糸騒ぐ氣色なく、刃の下を潛り脱け、手首を拿つて冷笑ひ、「女子に似せなき白刃の賜、關王宮への給事は、わが身にたえて頼はしからず。いと正なくも見え給ふ。」といはせも果てず、爲久はいよく急きたちて、聲をふり立て、「やをれ唐糸、汝降人として光澄を斬害す、謀叛問はずして顯然たり。家隸の仇逃さじ。」といきまきつ、ふり拂つて又刺きかくれば、唐糸はるかに飛び退きて、「輕輕に給ひそ爲久どの。いま光澄を殺せしは御身の爲を思ふに侍り。然るをなほ曉得らずして、また唐糸を殺し給はば、何をもて御身の罪を贖はれん。これ石を抱きて淵に沈むに異ならず、あな鈍まじや。」とうち含咲み、丈夫に勝る勇敢識量、飽くまで廣き胸前より、とり出したる懷紙に、拭ひをさむる血刀の、つかの間もなほ油断せず、寄らば砍らんす面色

に、爲久は刺きかけし刃を擧ぐに挿きかねつゝ、間ちかくも迫り得ず、きつとにらまへていへりけるは、「こゝろ得がたき汝が遣給。光澄を切害して却つて我が爲と稱する事、その利害おほつかなし。事をば兩端によして脱れんとはかるとも、誰かる、爲久ならず。そのいふところ理なくば、咫尺も其處をやは去らせじ」と勢ひ猛く詰り問へば、唐絲ますく冷笑ひ、「さてわが身しらじと思ひ給ふ賊の義高討たれたまひしかば、大姫の愁傷、政子の慍怒甚しく、御身一箇のうへに係りて、薄氷を踏むこゝろ、あしつゝときまかうさま思ひわづらひたまふことは、霧にこゝへ來りしとき、下郎が物がたりするを竊聞きてよくしりてぞ侍る。かくは今わらはを欺きて刺し殺さし、この首をもて白の罪を宥められんと謀りたまふならんが、そはいと淺はかに侍り」といふ。爲久はずでに機密を言ひ當てられて、こゝろ駭き、猛かに刃を鞘に納めて、氣色をやはらけ、「我愚かにして未だ了得らず。密かに説き示し候へ」といふ。唐絲かさねて、「殿思ひ見よ。わが身は木曾殿恩顧の郎黨、兼平の妹光盛が妻にて、しかも義高の乳母なり。よしや唐絲が謀計りて、彼の君を討ちたりといふとも、こゝに至つて人かならず疑ふべし。況いて政子御前は、その性伶俐しく坐すると聞く。且事に臨んで人を疑ふは婦人の常なり、爲久その身の罪を脱れんとて、唐絲が枯首をもてかくは誑くなりとあしく猜し給ひなば、毛を吹いて疵を求め、草を打ちて蛇に驚くの悔いありなん。其の時何を證據として、いひ解かんとは思ひ

給ふ。然るを淺くも人を謀りて、唐絲だに殺さば、身の安穩を得たりとし給ふは、釜の中に友を追ふ魚、組の上に餌を拾ふ鳥に似たり。嗚呼危いかた危きかも。さるによつて、唐絲が只一刀に光澄を殺せしは、御身が爲にあらすして又何ぞや。速かにその首をもたして營中に赴き給へ。さて申さるには、「爲久歎めて義高の討手を承りしは、討ち奉るべき爲にあらす。實は竊かに助け奉りて、深く潛ばせ進らすべう思ひつるに、家隸にて候堀江藤二光澄、如此々々の處にて、御曹司に追ひ着き恩賞をたまはらんとて、忽ち主命を忘却し、ぞひなく討ち奉りて歸りしかば、爲久が謀ての思念、いたづら事となつて、遺憾やらかたなく、直に光澄が首を刎ねて候。然れども家隸が親は、すなはち爲久が誤らなり。かくてもなほ憎しとおほし召さば、速かに腹かき切りて赤心をしらし奉るべし。」と聞えあけ、只管助齋をもて、その左右に救ひを求め給へ。しからば十が上ながら、事の變ふのみならず、これより身の僥倖を得給ふべし。その便宜を得て、唐絲を「從弟女なり。」といひ爲へ、給事をさせ給ふに至らば、わが身、政子、大姫に陪從し、をり／＼御身を吹擧し侍らん。御身一トたび内寵を得て、食祿ともにす、み、肩を比ぶるものなくば、いかで今日の如くならんや。かくてもなほ唐絲を殺さんとし給ふか。みづから思量して惑ひ給ふな。といふ。爲久つく／＼聞きて大いに歡び、小膝を進ましていふやう、「われ才短く思ひ足らずして、其許を殺さんとしたる事、省みれば更に面なし。」

且く敵の思ひをなすといへども、既にその好意を聞くうへは、われに于て疎意あるべきからず。其許は寔に女丈夫なり、われ今光澄を撃たして、右の腕を失ひつると思ひしが、却つて其許を得て千鈞の普力をましたり」とと嘆賞し、厚く是れを感戴しつ、つひに堀江が首級を携へて警中に奉り、唐絲がいへるごとくに聞えあはせ、肅然もて左右に救ひを求めしかば、女房たち又普請を請ひて石田が罪なきよしを執しもうすにぞ、政子御前の憤りやうやくに解けて、却つて爲久を侍持のものなりとおぼしける。さる程に爲久は、密かに御曹司の首級を伊豆の修善寺に奉りて、既に迫善の佛事をとり營みしかば、政子傳へ聞きたまひて、いよ、爲久を疑ひ給はず。しかばあれ大難は、只突棹の深乾く隙なく、一義高の菩提のため、尼にならばや」として、頼りにその事を申さし給ふにぞ、母君はいと、胸くろしく、いかにもして大難を慰め、なき人の事を思ひ忘るゝよすががなとて、女房達を集合へ、とせましかくやせました」と問ひ給へば、みな答へ申すやう、一人の心を和ぐるは管絃にしく物なし。その扱に長けたるを召さし給へかし」と申せんがば、政子、「しかなり」と回答へ給ひて、専らその人を案さし給ふ程に、石田太郎これ聞きて、まは究竟の事こそ出で來にたれと訝かに歎け、或日何かしの局とか呼ばるゝ、老女に就きて、唐絲が事を聞えあはせ、一彼は爲久が従弟女にて、夢道に嫁なる事は、をさく、俊蔭が女兒にも劣り候はじ。頼君一たび彼が爪音を聞召さば、忽地に愛でおぼして、降り

くらす霖雨なげあめに日光ひのめを見給ふがごとく、御こゝろも立地たちどころにはるけくならせ給ふべし。加旃しかのみたらすよろづにこ
 ころ利きたるものなれば、おん側かたはらに召しおかせ給ひて、しかるべからんものなり」と信だちて申せ
 しかば、政子御前聞き給ひて、「その唐絲とやらん、爲久が従弟いひこめ女ならば、忌むべき者にはあらず。と
 くその者を參らせよ」と仰せ下されしかば、爲久畏まつて、猛たはかに衣服調度の準備こころづえをいたし、唐絲
 を晴はれやかに粉粧よそははして籠かごて營中えいぢゆうに進らせけり。かくてぞ唐絲は、堀江を打つてわが兒の仇を報い、
 また爲久を説き伏せて、思ふまゝに鎌倉殿に給事を致し、折なげを伺ひて賴朝を刺し殺し、亡君親族の恨
 みを写うつめて、義高を世に出し進らまへう思ひしかば、營中えいぢゆうに參り仕ふるに及んで、ますく萬事に心
 を用ゐ、信まことやかに言行ごうこうふ程に、政子も大壺も、さるおそろしけなるものなりとは知り給はず、年來給
 事の女房たちにも立ちまきりて、愛でたき者におほしける。是れは扱あておき、堀江藤二光澄が弟、藤五
 蔭重かげしげは、前日義高を討ちとめんとて、その身は甲斐、信濃しんぬを斥うして追つ蒐かけたりしに、「義高は早武藏
 の入間川にて、見光澄が討ちとりぬと聞えしかば、途みちよりとつて返し、鎌倉に立ちかへりて、傍輩はろばいの
 若輩わかたぐに事の容よう子をきけば、「主しゆの爲久、白みの罪つみを脱のがれんとて、事を光澄に託かこつ、矢場やばに首かうを刎はねて、こ
 れを營中えいぢゆうに進まらせたりといふに、蔭重大いに驚きて、深く主を恨み引き籠りて居たりけるを、爲久わ
 りなく召し出して、影かげの引出物をとらし、「汝が兄、忠義拔萃ちゆうぎはくすいにして、我に代つて死したれば、吾今よ

り汝を見る事、光澄を見るが如し。かかれば主従の恩義いよく厚くして、聊かも疎意あるべきにあらず。必ずしも他のいふ事を實事として龜忽の舉動なせそといふ。その言語いと丁寧なるに紳され、陸軍忽地説き惑はされ、小人の淺ましさはつくふと思ふやう、いぬる正月二十一日の合戦に、わが身一番に深田の中に飛び入りて、木曾殿を馬より引き下したれど、その功却つて見に超えられ、日頃口をししく思ひつるに、わが兄既に世を逝りて、主君又かくの如く懇切に聞え給ふを、なほ恨み奉らんは物體なしとて、終に兄が討たれたる縁故を問ひ尋らめず、いよく信々しく仕へけり。

第七套

日枝の由に頼豪義高を誘ふ
栗津が原に光實猫鼠を交闘す

美妙水冠者義高は、大太郎と行氏夫婦が忠義の爲に命を隕せしかば、容易く石田が黨を吹き課せて、遂に唐絲に立ちわかれ、その身は廻國の行者に扮裝ちて、彼此を廻歴し、おなじ年の秋の頃、あるゆふべ江州粟津野に來にけり。いぬる正月二十一日、父左典康義仲朝臣、この所にて討死し給ひぬると、豫て聞けども眼前見れば、又哀悼の涙に袖もひたぬれて、勇きこゝろもしかすがに、よはの月影さやかにて、三井寺の鐘無常を示し、既に二更になりにけり。とても宿かる家もなければ、今宵は

こゝに野宿して、通宵廻向し奉るべしとて、これかとおろふ墳のかたはらに笈扛起おろし、鉦うち鳴らす稱名も、頼宣の琵琶の海づらに、調べすゞしき浪の音、夜も四ツの緒に深げそめて、草葉に落つる秋の螢も、今はこの世になき人の、魂かと思えてあはれなり。義高はしばし父の墳墓に額つきて、心中の鬱憤を誣へ、幽魂の衛護を祈り、先考尊靈願生菩提と念じつゝ、と見れば睡手なる木立の間に結び捨てたる紫の門あり。主は法師とおほしきが、出でて未だ歸らざるにや、戸は引き立てたるまゝに、燈火の光もせず、斜なる竹縁をつらぬきて、吹竹の春しり顔に、萩、薄の生ひ出でて、園蚤早く秋を告ぐ。あれたるまゝの住居なり。折しもあれ、今まで晴れたる天俄然に結陰りて、月はなほ半額を顯はしながら、さと降る驟雨に、義高は忙はしく笈を紫の門の軒下に打ち入れ、縁つらに尻をかけて、暫し晴るゝをまつ程に、睡魔頗りに睡窟を催して、思はずも假寐すれば、忽ち瓦簾々々と肝響するに、驚き覺めて見返れば、いと大きやかなる鼠、笈の中に見えおける旭の影を引き衝へ、湖水を西へ走のゆく。義高ます／＼驚き怪しみ、鼠頭槍をかいふつて、逃さじと追つ蒐けつゝ、ゆくともしらす須臾の間に、琵琶湖の汀を打過ぎて、嵯峨なる高峯に追ひ到れば、鼠は巖石の下に躲れて、忽ち見えすなりしかば、義高大いに嘆息し、われ苟くも清和の後胤、朝日將軍義仲の嫡子として、頼朝に世を決められ、乞巧囉齋の出發して、ひとり諸國を徧歴する事、只頼浮屠家に依頼して、父の苦

襦を帯はん爲にあらず、密かに萬好の武士を相語ひ、義兵を揚げて仇を報い、孝養に備へんと思ふに
あり。しかるに今、鼠の爲に前代の旗を奪み去らるゝ事、我ながらいと怪し。世につれて、かく々々
しくなりぬれば、き、やかなる毛類にも悔らるゝ、口をしきよ。死虎は牛鼠にしかずといふ世の常言も
懶げれ、よし速英、この瀬うち砕きても鼠を追ひ留め、旗を空しくはすべからず。李廣が虎と見た
るは物かは、念力徹る勇士の刀尖、千引の鐵もうち砕かば、などか推かさらん」と罵詈雑言、鬚眉を
とり直し、奮然として走りよる。時に不思議や、崖のトより一道の白氣陰々と立ち井り、巖石自ら
二ツに裂けて、内に一人の老僧あり。髯は松と共に瘦せ、萬根の鬚長く黄ばんで、枯野の薄を逆
に掛けたる如く、二十枚の爪尖く伸びて、朽木の枝に茸の生れるに異ならず。瞳の光人を着て、喘息
は狭霧となる。苦の衣は垢つき敵れて、かき棄れたる蛇、海松に似たれば、今も苦海の底に沈みて、
真如の月は澄まぬなるべし。義高はこの怪異を見るといへども、怖るゝ氣色もなく、歩を並まし、わ
が旗を竊み去りしは田鼠の巢を造らん爲にかと思ひつるに、この妖僧が所爲にてありけり。汝はこれ
果か藪か、いで妖の皮を剥きてん」と、罵も應み蒐らんとするに、怪しいかな、杖節忽地へ轉れ、
われにもあらでついたり。其のとき老僧は閉ぢたる眼を睜開きて、義高を睨き、「善いかな壯士、
きたれ、われ、汝をまつこと久し、かならずしも怪しむべからず。われは是れむかし白河の帝を眼み

奉り、憤り世を辭したる二井の長史頼家阿闍梨が神靈なり。思ひ出づれば腹だたしや。綸言汗のごととはいへど、諾ひしことをかへされて、御禱りの勸賞相違し、わが宿望を果されず、縁故は山門より、挫へ奉るをもて黙止されたれば、その寛みを雪がんだめに、數萬の風となつて、經卷を破損せしに、わりなく一社の神に祭られ、わすれて年を経しものを、いぬる壽永二年の秋のころ、義仲はじめて入洛の日、わが禿倉に詣でて願書を寄進し、官位頼朝に超えて征夷將軍となり、宇宙の權を執る事あらば、神田數十町を寄せて、當社に修覆の莊殿を加ふべし。と、丹誠を凝らして祈請せられしかば、われ速かに納受して、その軍威を助けし程に、戦はずして平家は洛を落ちにき。然るに後白河院敕慮反覆し、義仲が軍功勸賞は乞ふに任ざるべし。と仰せ下されながら、望み申すところの將軍は赦許なく、却つて頼朝をもてこれに任ぜらる。されば義仲の鬱憤を、わがありし世の怨みに思ひくらべて、更に舊怨を惹きぬる事、亦是れ輪廻の然るところか、われは白河の御宇に憤死し、義仲は後白河院を恨めり。この故に、わが靈ながく義仲に憑はりて、その心ざまをあらしくしくし、卿相を罵りはづかしめ、院の御所を火攻するに至つて、上皇大いに驚き給ひて、やがて義仲を征夷將軍になされしかば、一旦その宿望を遂ぐるに似たれど、武運全からざれば、しばし洛に跋扈せし、榮華は盧生が夢の世や、只一炊の粟津野に、朝の露と消えぬること、いとほしとおもへども、天命の歸する

所は、わが神力にも及びがたし。然るに、汝その志、遅しく、父の寵みを雪がんとて、諸國を廻歴し、密かに舊好の兵士をかたらふをしる。さるによつて、われ妖鼠の神通をあらはして、この由へ誘引ひつ、われと汝と宿因ある事を説きしめし、今より影のごとくに憑きしたがひて、もつはら奇術を行はし、或は敵陣に間諜を用ゐる、或は合戦の場に臨みて、進退に便りよくせんと思ふなり。ちかく來れ。」といふ。義高これを聞きて大いによろこび、欣然として阿闍梨のほとりに對峙し、「わが父世にいまそかりし時、ふかく心願をかけたらし頼豪阿闍梨の神靈とはしらす、肉眼眩くして、ほと／＼神威を犯さんとせり。阿闍梨設し義高を擁護して、出沒自在ならしめ給はば、虎に翼を添ふるが如し。直に鎌倉の營中に忍び入り、頼朝が首を捻ぢ斷つて、孝養に備へん事、瞬の間にあり。」と、いと勇ましく應へけり。頼豪かゝねて、「やよ義高、血氣の勇に挂るべからず。奇術よく人を征するとも、又講むべきものなきにしもあらず。猫間光隆の弟、新太郎光實、復讐の志篤く、曩に義仲の討死を聞きて大いに望みを失ひ、更に汝が在所を索ねて、見に咫尺の間にあり。これは猶怖るゝに足らず、只彼の頼朝が、朝暮座右に置きて愛で、昔黄金の猫は忌み憚るべし。これは是れ、昔天台の圓珍、異朝に經を得て歸朝のとき、船中鼠に佛經を噛み破られん事を愁へ、紫磨金をもて一ツの猫を造り、是れを船中に安置す。件の猫おのづから靈あつて、その在るところ、羣鼠穴を出でず。圓珍入寂の後、彼

の金猫きんねこ忽然こつぜんとしてゆく所をしらず。遙はるかかに春秋しゆんじうを経て、坊城ほうじやう、壬生みぎの中將、井を掘らして、これを土中に得たりしかば、ふかく秘藏ひざうしてその子光隆みつたかに傳ふ。光隆みつたか院使いんしたりし時、義仲よしのぶに面叱めんしつせられ、家隸いどのこ正忠まさただを擒とらとせらるゝに及んで、彼の金の猫きんねこをもてこれを噴ふふ。その後義仲よしのぶ洛ろくを落おつる日、石田いしだ爲久むねひさ彼の猫ねこを竊ぬすみとつて頼朝よりともに獻たまれり。因よつてその猫ねこ今なほ頼朝よりともの座右ざうじやうにあれば、輕々かろくしく近ちかづくべからず。今より後三年ごさんねんを経て、八月某日やうがつたがひに至らば、件の猫ねこ忽地こつち營中えいぢゆうを出づる事あらん。そのときを待つて宿志しゆくしを達とけよ。しかれども秩父重忠ちちぶしゆうしゆう聰察そうさつにしてよく人を識しる、怪あやしまるゝ事なかるべし。いで妖鼠ようその呪語じゆごを長ながけんとして、呪文じゆもんを唱となふること三遍さんべん、義高よしたか頼よりともにこれを讀よんす。頼家よりともその強記きやうきを稱なづし、「今いまははや心やすし。さらば、旭あすひの旗はたをかへし得えせん、とくく歸かへれ。」といそがしつ、懷中ふとこに手てをいし入れて、件の旗はたとり出せば、義高よしたか雙たうの手に捧たげ受うけて、なほ後來ごらいの吉岡きちおかを問とはんとするに、裂さけたる巖石がんせきおのづから蹙しゆくぜん然ぜんとして起きかへり、頼家よりともを内に包つみて、舊ふるの如ごとくになるとひとしく、霹靂へきれき一聲いっせい、脚下きやくかに震おり、俄頃にわかに山鳴やまなり震動しんどうし、高峯たかたけの上より鷲直しゆぢくに轉まび落おつると、おどろき見て、楠柯なんがの夢ゆめは覺おめにけり。義高よしたか假寐かりねの夢ゆめやぶわて、うち仰あぎ見みれば、秋あきの雲行定くもゆきさだめなく、早晩じつしやうはれて月影つきかげも、隈くまなく照てらす鳩とよの海うみ、明石あかしも須磨すまも外ほかならず。日枝ひえはほるかに聳そり立ち、その身みはなほ粟津野あづつのの草くさの庵いほりの簷下のゝにあり。あるじはいまだ歸かへらざるにや、裏うらは寂しゆくとして音ねもせす。さては夢ゆめにてありけるか、夢

かと思へば眼前、旭の旗はわが手にあり。夢にもあれ現にもあれ、頼豪阿闍梨の靈、われを誘引ひて妖鼠の術を授け、護神となりて本意を達せざんと示されし事、是れ詳しながら因あり縁あり。夫れ太倉の鼠は食に飽きて驚かず、庭下の鼠は穢れを食らつて人を畏る。貴賤強弱異なりといへども、われはこれ託社の鼠、頼朝これを懸べ、これを濯がんとはかるとも、つひに捕ふることを得じ。況いて猫間光實とやらん、わが父を狙ひ撃たんとして果さず、いま又われを脅として在處を索ねぬぐるとは、燒野の雉子猫古巢を追はれて、せんすべなきの人目ばかり、忠孝の名に盗人猫、鳩のまねしつる烏猫、猫間の親族數を盡して討ちとらんと闘くとも、死灰に等しき灰毛猫、忽ち死出の山猫と、六すべきものを面のあたり、環會はで遺恨しんと我を忘れて高やかたに、ひとり言して呵々と、うら笑ふ聲に覺めたりけん、一叢くろむ庭の松の、木立の間に人ありて、笠を敷寝に臥したるが、矢伸して身を起し、義高を透し見て、「其處にもひとり修行者のおはするよ。われも甲夜よりこゝに来て、宿のうおもひたるが、折あしく主人は居らず、今にも歸り來べきかとて、待ち草臥れて假寐し、其許の來給ひたるをしらす。はや更闌けたりと見ゆるに、大津へは行きがたし、一樹の陰、一河の流れ、おなじ宿にも他生の縁、いざさらば夜とともに語りあかして、迭代りに旅路の憂きを慰めなん。許したまへ。」といひ懸けて、木立を出でて竹縁に、押しならびつゝ、尻を掛くる。その人はこれも父、觀音の靈

場を巡禮する優婆塞にて、年の齢もいと弱く、是彼方り勝ちせず。義高はわがほかに人はあらじと思
 ひたるに、この優婆塞に物いひかけられ、手に持ちたる旭の旗を、懐しく懐にさし入れつゝ、見
 かへりていふやう、「梢を屋棟とし草を褥とし、足の止まる處にて夜をあかすは、修行者の常なれば、
 足曳の山犬に送られては、獵夫が門を敲き、八百日行く濱千鳥を友として、海士が家に宿かるゆふべ
 もあれど、難行苦行は後世の爲とおもへば慥しとはせねど、かく可惜夜の月を瞻めて、言敵のなき
 ばかり物足らぬものはなし。そも其許は元何國の人にて、はやくより世を厭ひ給ひたる。父の爲か母
 の爲か、或は結びも果てざりし女郎花の香をなつかしき、色情ゆゑに惑ひ出でたるにはあらまや。さ
 らばなほ聞かまほしう候」といへば、順禮の優婆塞答へて、「われはつぎねふの山城に人となれど、未
 だ定まる妻もあらず、なき父母の爲、兄の爲、開威き花山法皇の流れを汲む、大慈大悲の楊柳水、
 三十餘箇所の靈場を、順禮せんとて出でたれど、なほ故郷のわすれがたくて、いまだ遠くは立ちも去
 らず。また其許は何國の人ぞ。」「さればこの身は、信濃路の山里に生育ちて、都の手ぶりは見もしら
 ず。」「しからば、都鄙の物語を迭代りに聞かしもし、聞きもせば興ありなん。」「こはおもしろし。」と
 こごり寄る。秋の浦風身に入ひて、湖水にかよふ鐘の音を、山城の行者儂へて、「さてもこのころの
 夜の長さ、あれ聞きたまへ、今うつ鐘は子の刻なり。さは子の刻にて思ひ出でぬ、信濃には鼠が驛と

呼ぶ處ありと聞きしが、元來鼠といふ獸は晝はふかく穴に隠れ、夜は出でて食を盜む。されば園に賊家に鼠、いぶせきものの譬へに引く、いと憎むべきは是れなり。」といはせもあへず冷笑ひ、「其許は鼠の悪しきを説いて、未だその善きをしらず。夫れ鼠は靈中の靈なる物、抱朴子に鼠の壽二百歳、人に憑つてトす、その名を仲といふ。よく一年中の吉凶、及び千里の外事をしるといへり。されば世俗鼠をもて、大黒天の使者と稱す。故あるかな、大黒は水徳の神にして、北は子の方その色黒く、すなはち水を司る。又本草綱目金石の部に、黄金の氣は赤くして、夜火光及白鼠ありといへり。亦是れ世俗白鼠を福の神と稱ふる事、本草の説によれり。かかれば鼠は靈中の靈なるものにして、愛すべき獸ならずや。われをもてこれを見れば、只憎むべきは猫なり。蒙貴と異名せられて、主の膝に睡れるぞおめけなる。或は枕中の魚肉を奪ひ去り、賓の饗應を缺かして盜人の名を恥ぢず。あるは爐の灰に糞を埋めて、十里臭氣を傳ふ。狎るゝにはやくして、忘ること又速かなり。三年これを食ふといへども、一トたび去つてはその主を省みせず。彼を佞人に喩へたるも又うべならずや。」といふ折しも、あるじの法師は、さゝやかなる白張の燈籠を引提げつゝ、わが庵ちかく歸り来るに、二人の行者が縁つらに尻をかけ、聲高やかに相語ふを聞きて潛かに異しみ、笠を脱ぎて燈籠の火光を掩ひ、徐やかに歩みて背門のかたより繞り入り、この物語を竊聞くとは、件の二人はたえてしらず。山城の

行者、猫をあしきまにいほれて喜ばず、これを見かへりていふやう、「夫れ猫は、居家必用の獸なり。
田夫これを養うて稻穀を守らし、由妻これを愛して十二時を辨ず。古人五徳を擧げて賞斷いと深
し。又朱翼に云く、猫の時は十二時を辨ず、子は時の先なり。このゆゑに、猫は鼠をもて食とすとい
へり。詩人猫を賦して將軍と稱へ、英雄小人を罵りて鼠輩と卑しむ。かくてもなほ鼠を勝れりといふ
や」と聞へば、義高頭をうち振りて、「女三の草薙をもれ出でて、淫奔の婦せし昔物語はあれど、
佛縁うすくして釋迦の涅槃に参りあはず。伎者の時を得がほなるも、一朝寵衰へては草野猫となり
下り、宿なし猫と賤しめらる。それに勝れる鼠の徳、窮鼠蟬つて猫を食む。眞如此く」と教諭きて、
胸ぐらとつて引きよするを、左右へふつと拂ひ除け、直につけ入る手首を握りもちて、もろともに庭
へ関りと飛び下りて、打ちつ打たれつ追ひつかへしつ、しばし挑みあふ程に、義高の懐よりはらり
と落つる旭の旗を、あるじの法師拾ひあけて、「これなん木曾の白旗」といひも果てぬに、義高が唱ふ
る呪文に奇なるかな、旗は法師の手をはなれ、関きつ、主の懐に、入るさの月も影くらし。さては
と點頭き山城の行者が、苞より抜き出す月の光を、物ともせずふた、び唱ふる呪文と共に、數萬の鼠
忽然と羣り出で、裳にまつほり袂に入るを、ふり落し切りはらへば、鼠も人も雲霧と、消えて跡なく
なりしかば、山城の行者は更なり、法師もあきれて引提けたる、燈籠撲地ととり落せば、發と燃えた

つ火光にて、二人は面をあはしつゝ、これはと許り踏み滅す燈籠、善悪もわかぬ野干玉の、闇の扇を引きあけて、法師は内に入りにつけり。彼の山城の行者は誰ぞ、猫間新太郎光實なり。又あるじの法師は誰ぞ、佐藤憲清入道西行なり。

評に云く、石田爲久、唐絲を殺して身の罪を脱れんとす、佞人の毒計かかる事多かるべし。唐絲はやくこれを推して、光澄を殺し、つひに爲久を説破して、羅家に到る階梯となす。臨機應變、石田に勝れること遠し。又蔭重が引出物を得て、兄の死を問はざりしは、所謂使ひがたく、よろこばし易き小人の所爲にして、評するに足らず。はた頼家が舊怨を雪めんとて、鐘を義高に託せしは、又是れしふねき法師の淺見いと苦々し。夫れ己ををさめ、人を征するは、徳にあつて衛にあらず。天慶の將門、彰親を七人に埋じて敵將を歎き、大江山の賊飛行を千里に放にして、良賤を劫といへども、一朝その菓やぶる、におよんで、瓦礫とともに碎けたり。されば義高蒿に寝ね、勲を枕として、父の仇を報はんとするは可なり。惜しいかな善を積み、徳ををさめて、しづかに天命を待つことをしらす。猫間光實の柔順にして、かへつてその志金石のごとくなるには及かず。事ある實言にかゝるといへども、世の童子等よく見るときは、善を喚まし惡を退け、迷ひの門を閉くことあるべし。且猫間の論に至つては、もつぱら一編の大意を明す。この書はじめに、義仲子の方、

北國より出づるをもて楔子とす。義仲鼠の禿倉をいだし、鼠の禿倉を楔子とす。鼠の禿倉、金の猫を出す、金の猫を楔子とす。金の猫、西行をいませり。事々物々、楔子あり、楔子は、物をもて物を出すの謂ひなり。

西行畧傳、西行始めの名は憲清、依藤太秀郷の後裔、藤原康清が次男なり。弓馬の家業に達し、また好んで書典を讀み、管絃をならひ、和歌をよくす。曾て奥州の郷里を出でて、京師に到り、鳥羽上皇に仕へ奉りて、左兵衛佐に任せられ、北面の衛士たり。上皇の眷思あさからず、朝暮詠歌をもち、御製に應ずと云ふ。大治二年の十月、上皇鳥羽新造の離宮に幸し、障子の丹青を題して卿相に歌を詠まし給ふに、憲清その列に應りて、十首を奉る。上皇大いに歡感あつて、御劔を賜ひ、中宮また御女五襲を賜ふ。憲清纏頭して退り出づ、人皆これを羨まざるものなし。憲清素より遁世の心あり、遠巡として年をおくる。こゝに佐藤憲康といふものあり、乃ち憲清が氏族なり。曾て手を携へて朝より退り、かつ交加ひて睦み晤語ふに、ある日憲清がいふ、「予が先祖秀郷、坂夷を征して朝廷の藩護たりしより、その餘慶我が儕にいたりて、朝恩や、厚し。人間の浮榮えは久しく恃むべからず、彼の山林の下、豈係慕しき處ならんや。」憲康聞きて感泣し、遂に世を遁れん事を相約す。憲清その詰朝鳥羽院に候ひて、かへさに憲康が門を叩くに門外に人衆まり、家内

慕りかなしむ。評しみてその故を問へば、家奴がいふ、「昨夜主人俄頃いふまゝに身死みみちる。その母七十餘歳、その妻十九歳なり、こゝをもちて悲歎かなしみいよくふかし」といふ。憲清聞きて大いに驚き、ますく哀念あはれをもよほして、頼りに遁のがれ去らんとす。しばく致仕あしすれども許ゆるされず。已やむことを得ず、櫻いを解といて祝髪しゆはつし、名を圓位えんゐと改む。ときに崇徳院しゆとくゐんの保延二年秋八月なり。その後名のちを改めて西行と稱なづふ。年來相従あひつふ家人あり、彼また剃髪ていはつして西住さいぢゆうと名づく。憲清このとき妻あり子あり、これを捨てて隠かくれ去れり。草舎くさや、柴扉しばい、閑雅いんがをもつて生涯しやうがいを安くせんとなす。一年、伊勢人いせにん神宮かみみやにまうで、直ただに關の東に赴おもむかんとす。遠江國とんげい天龍灘てんりゆうなんに至りて、武夫ぶふの乗船じゆうせんに便たよる、船中せんちゆうの人最もおほし。武夫ぶふこれを怒いかつて西行さいけいを打うつに、頭かうべやぶれて血流ちゆうけつれ出づ。しかれども慍いかにれる氣色けしきなし。西住さいぢゆうこれを見て泣なき怒いかり且哀あはしむ。西行がいふ、「予塵よちりを出いでしより以來こゝろかた、固まことに前程ぜんていのこゝにおよぶをしれり。不虞ふよの禍わざはひなほこれより大なる事ありとも、絶たえて憂うれへとするに足たらず、汝速なほすみかに故郷こきやうに歸かへるべし」といふ。西住已やむことを得ず、東西とうざいに相あひわかる。西行さいけい獨行どくかうして佐夜申山さよのまかやまを越こえ、大井河おほいを渡わたり、駿河すまらの岡部おかのべを經ゆり、宇都山うつのやまを踰こ越こし、清見きよみが關せきをよぎり、富士山ふじさんを眺望てうぼうし、足柄あしづに至り、相模路さましぢに出いでて、鴨立澤かみたちさわの詠よみあり。裳ももぞを武藏野むさしの露つゆに拂ふつて、笠かさを白河しろがの月つきにかたぶけ、笠島かさじまに實方じつかたの墳ふみをたがねて、祐野すけのの薄うすを吟うたじ、奥羽兩國おくうの長藤原秀衡ながふじはらひでゆりを訪まうて又洛またらくに歸かへる。秀衡ひでゆりは西行さいけいの親族おんしゆくなり、昔むかし

に留むれども、西行邊に留まらず。その至るところ、かならず和歌を詠じてこれを過ぐ。時の人傳
 贖して、以て日順とす。かくて美濃路に到りて、再び華洛に入り、又杖を四國に曳かんとして、幣
 を曾茂の神社に奉り、洛を出づる事を告ぐ。時に仁安二年の十月、四天王寺に赴き、路に江口の
 里を過りて、宿を遊女に求むるに許さず。和歌を詠じて過ぐ。かくて讃岐の松山に到りて、崇徳院
 の御廟にまゐる。玉の牀の歌詠あり。これを燈壇に手向けたてまつりて、覺之同國善導寺の御に
 わすび、且くこゝに留まる。西行出家の後、その妻難染して尼となり、この女兒をある人の家に附
 託けて、再び是れを贖ふ。年を経て、西行長谷寺に遊ぶ日、ひとりの尼の談するを聞く。まづ
 和歌を詠じてこれを語る。尼又これを聞きて走り出づ。これを見れば舊の妻なり、「なほお今何處に
 ありや」と問へば、「高野山の麓に往みはべり」と答ふ。互に別後の情を述べて別れ去りぬ。その後
 西行、偶女兒の所在を訪ね、人に憑つてこれを呼ぶ。見女、「父の来れり」と聞きて、且喜び且泣
 きて出でてこれに見ゆ。西行世を遁る、時、この女兒僅かに四歳、こゝに至りて既に成長す。西行
 その恙なきを見て、喜んでこれに告げていふ。「汝が母現に高野山の攀徹にあり、寧ろ苦樂を他人と
 共にいたさんより、ゆきて慈母に従へ」といふ。女兒その旨を棄けて、つひに彼の家を去り、母と
 共に住みて孝養最も厚し。かくて治承二年の九月、西行ひとりの伴侶とともに西國に赴く日、又江

口をよぎりて途に縣車にあへり。路傍の庵にひとり、尼あつて、雨の漏るに慌忙たるを見て、問答の歌あり。ゆくり、安藝の賊島にやうで、歩みを筑紫にすゝめ、宇佐八幡宮を拜し、鐘御船に河つて更に鑑州に歸り、長陽野をかきめて南都に到り、春日社に詣で、三笠山を眺めて東大寺に遊び、俊應法師と和歌を誦す。後また高野山の麓に到りて、居ること数十日、ふたたび奥州に赴きて撰集抄九巻を撰む。時に清永二年の春、善導寺の副坐にあり。文治二年の秋、奥州におもむき、秀衡を訪はんとす。中途、鎌倉に遊びて鶴が岡に詣つといふ。是れより以下は、この草紙の第四巻に見たり。

豐雷子云く、東鑑、撰集抄、西行物語、出家集等を採するに、西行、粟津野に住みける由は見え、これは是れ野史の寓言ならん。作者第七套に至つて、纔かに西行の二字を説きいたし、いまだ彼は原いかなる人、又何によつてこゝにありといふことをいはず。よみて婦幼のために、その畧傳を述べて、始終を審かにせり。

吾が簡、養後翁、嘗ていへることあり。世人二月十五日を西行忌とす、この説疑ふらくは非ならん。按するに、草庵和歌集類題の部に、

西行上人の跡の雙林寺に住み侍りしころ、二月十六日、人々來て佛事おここひ、歌詠みし

事をおもひ出でて

昔とぞ又しのぼる、跡とひしその二月の春のおもかけ

頼 阿

かかれば、西行は、建久九年二月十六日に入寂せられしを、後人その二月の望月のころといふ歌によりて、十五日なりと思へるにや、件の歌は辭世にあらす。また望月の頃といへば、決定十五日と云ふにはあらざるべし。十四日より十六日までを、望月の頃といはんかといへり。抑西行上人は出塵清標凡ならず。また詠歌の絶妙なる、玉をつらねずといふことなし。俗に保延三年に離れ、世を建久九年に下る。すべて六十二年の際、一巾、一衣、一杖、一鞋、東西南北して、思ひの至らざる隈もなく、前後意をおなじくす。實に蓋世の一奇人、前に敵なく、後に對なし、宣なるかな、數百年いまに至りて、黄口の童もよくこれをしる。その詠歌に至つては、枚擧ぐるに違あらず。予海聞を差がずして、漫に毫を染め、篇後に數行を記すことを許さる。寔に附驥の面目なり。

賴豪阿闍梨怪鼠傳 卷之四

東都 曲亭主人著述
門人 魁菑癡叟批評

第八套

鶴岡社頭に頼朝行僧を認る

鎌倉營中に西行文武を談す

文治二年八月十五日、源二位頼朝卿鶴岡の八幡宮へ詣で給ふ。折しもひとり行僧、石の鳥居の傍なる大銀杏樹のほとりを徘徊す。奉幣了つて、近臣をもて彼の行僧を問ひ給ふに、佐藤憲清入道圖位なり。此の度長源坊にかたははれ、大佛造作の沙金を募縁の爲、奥州の親族藤原秀衡が館へ赴くなら、道の次に當社へ参詣いたし候」と答へ申しければ、頼朝卿聞召して、「さては西行にてありけるよ、彼人は和歌はさらなり、弓馬の家業拔羣なるよし、豫て聞くところなり。やうこそあらめ、營中へ將てまるれ」と仰すれば、近臣承り、緋の趣を西行に聞えしらし、これを俱してまるりけり。頼朝歸館の後、大場景能、秩父重忠、石田爲久以下、弓馬の古實にこゝろを得たる武士、十餘人を集

合へ、さて西行を呼び入れて對面あり。頼りに文武の古實を尋ね問ひ給ふに、西行答へて、「貧僧在俗の口は、先祖秀郷朝臣より相傳の武藝、をきく、その奥旨を存すといへども、一度空門に入つて以來は萬事悉く忘却す。又和歌はその到るところ、見るに付き、聞くに付き、思ふにまかして僅かに三十一字を詠み出づるのみ、敢て得意とするにあらず。しからば又何をか申すべき」と固辭み申して、さうなくは云はざりけり。そのとき頼朝は、ほとり近く候じたる、秩父重忠にそと注目し給ふにぞ、重忠はやくその意を曉得り、膝を進めつ、西行を誘はんとて云へりけるは、「平家の公達は、華洛におほして、雲の上人とのみ交參ひ給ひしかば、歌人も多かり。坂東武士は、心ごまこそ勇けれ、和歌などは聞くだにならはず、いと無念の事なり。重忠が如き、田舎侍のかくいふは嗚呼なれど、年頃疑はしとおもふ一ツ二ツを問はまほしき事あり。

菅家の歌に、

青の間や都のそらにすみもせで心つくしのありあけの月

又、弘法大師の歌に、

忘れても汲みやしつらむ旅人の高野の奥の玉川の泉

この二首、いかにともこゝろを得がたし。菅家のおん歌、青の間や都のそらにすみもせでとは、筑紫

より華洛は東にあたるなるに、宵の月の東より出でざることやはある。また紀の玉川は、毒水なりと世俗のいふは、左のわすれても汲みやしつらむ云々の歌によりて、唱へ出せるとおほしきに、世に六玉川とて、六箇國の清流水を選び出すほどにて、毒水を取り入れたるはいかにぞや。夫れ玉とは賞美の詞にして、玉琴、玉笛、玉鋒などいふ是れなり。もし高野の奥の水、毒あらば玉川とは稱ふべからず、縁故をしらし給へかし。」と信だちていふ。西行含咲みて、「秩父どのの不審いと理にこそ。こは傳寫の誤りなるべし。菅家の御集には、

宵の間は都のそらにすみぬらむ心つくしの有明の月

とあり。かくてこそ歌のこゝろは、有明の月と共にあきらかなり。菅丞相罪なくして罪せられ、太宰帥に左遷あり。筑紫は西の涯りなり。故に西國に漂泊せし懶さを、曉の月の西に没るに譬へ給へり。さればこの有明の月も、宵には東の方、華洛の空にこそすみつらめ、我も年來華洛にありて、九重の雲居に奉仕したる身の、今は西國の果てに遷り來にけりと、人間の一期盛衰を、一夜の月の出沒に譬へ給ひたる述懐の詠歌なり。又忘れても汲みやしつらむ云々の歌は、世に弘法のよみ給へる山いへど、慥かなる所見なし。されど歌の意をもていふときは、玉川の清流水を賞翫のあまり、高野の奥にもかくめでたき水はあり、忘れても汲めかし、大かたは汲むにてあらんずらんといふなり。汲

みやしつらむとは、今や牽くらむ望月の駒、今やさくらむ山吹の花、など詠める手爾乎葉に等しく、忘れても汲むであらう、汲めかし、とよみたるかと覺し。さて玉川は舊多磨川と書きて、武藏國比企郡にあり。この水多磨郡に合流するをもて、多磨川といふか。和名鈔には太婆とあり。磨の字を婆と讀むが古實なり。その後、好事の人、某の玉川是れの玉川とて、六玉川の名をおはして、歌ども數多あり。かかれば、高野のおくの玉川とよめるも、弘法より後の人の作ならんか。山川には石毒蛇毒などある常の事なれば、今は紀の玉川に毒あるかはしらす。彼の歌をもて論ずる時は、毒水といふにはあらじ。すべて歌のこゝろをよくも考へ得ずして、臆談をなす人あらば、訛もつて訛をつたへ、久しくして曉らざる事あり。譬へば、

山寺の春の夕ぐれ来て見れば人相のかねに花ぞちりける

といふうたは、何となく春の夕ぐれに、霏々と花のちりかゝるが、あはれにいとをかしと詠みたるにて、さながらその氣色を見るごとし。これを後の人はあしう聞きて、入相の鐘を撞けば、かならず花の散るものなりとこゝろを得、花に鐘は禁忌のやうに思ひあやまちたるにや。近ごろのうたには、花のために鐘をにくむこゝろをさへ詠み出せし」とと辨審かに説き示せば、重忠ふかくかんぶくし、鎌倉殿をはじめて、羣臣みな噫と感じて已まき。閑談いと興に入るほどに、頼朝卿、西行に對つて宣ふや

う一世の人のいふを聞くに、むかし左馬頭頼光朝臣、ある夜の夢に、漢土の養山基が女兒椒花女といふものより、水破兵破の矢、雷上動の弓を得て、秘藏せられしとぞ。しかれどもわが家にては、かかる事は口碑にも傳へたる事なし。又彼の水破兵破と稱へたる矢は、いかなるものなりけん。その形だに聞きも及ばず。且養山基は、周の時、楚の共王の上將にして、百歩の外に柳の葉を穿ちたる弓の手だれなり。史傳を按ずるに、晉と楚と、楚失磯と云ふ所にて合戰致せし時、養山基は萬弩にて射殺さる。又その女兒に椒花女と云ふものありけるよしは、彼の國の書にたえて見えず。加、その説をみず者、養山基は百餘歳にして、父子終に仙境に入るといふ、いと怪し。彼の水破兵破といふ矢、實にありけるにや。わが家の事を他人に問ふはいと鈍ましき所爲なれど、其許は弓矢の古實に精細しき人なれば、かくはいふなり。もし考へもあらば、留意なく聞えしらせ候へ。年來の疑ひを解くべきに、と宣へば、西行、法衣の袖をかき合はし、一宣ふところ寔に高論なり。養山、椒花女が事は論するに足らず。是れは頼光弓矢の家業に長け給ひしかば、なほその所爲を高くせんとして、何れの比よりか嗚呼なるものの、かかる不思議をさへいひ出せるなるべし。故いかになれば、水破兵破といふ矢、別にあるにあらず。碎羽も、彗羽も、矢のゆく聲をもて呼ぶのみ。鏑に目あるは聲あり。その音、風に逆ひて鏑といふが如し。又日なき鏑は聲なし。發つときに、透としてゆくものなれば、透發といふにや

あらんずらん。かくは申せ、なほふかき縁故あるにや、老法師が僻案を申すまでなり。又雷上動は、易の卦によりて名づけたるか、別に仔細はあるべからず。」と答へしかば、君臣ますく感激し、賓主笑壺の會にぞありける。されば西行は、終に誘はれて文武の故實、その要畧を談する程に、頼朝ふかく悦び給ひて、近臣俊兼に仰せて、悉くこれを書き記さし、又西行に宣ふやう、「今日はからずも、貴僧と閑談を得て、年來の疑念を一時に解くのみならず、弓矢の古實、ながくわが家に留まる事を得たり。こゝに候する武士は、みな頼朝が股肱耳目の家人なり。今試みに問ふべし。當座の衆中、孰か最も弓矢の業に富みたる、最眞斟酌の議を用るずして、明白に指し示し給へかし。」と宣へば、西行莞然とうち笑みて、「この席に列なりたる勇士は、皆これ麒麟閣の功臣にも勝れり。就中大場景能は、老功の武士なるべきか、往時保元の戦ひに、この人筑紫の御曹司八郎の矢面に向ひながら、九死を出でて一生を得たり。彼の爲朝は、古今未曾有の強弓、百發百中の達人たり。よりて彼の人の矢面に立つもの、一人として生きて歸る者なし。然るに景能僅かに薄痕を負ひて引き退く者は、これその弓矢の古實に熟したる故なり。問はし給はば分明に候べし。」と申すにぞ、頼朝うち點頭きて、景能を近く招き、「かかる事やありし、物がたり候へ。」と宣へば、景能はいと面目ある氣色にてさて申すやう、「愚者の一得思ひの外なる褒賞を得て、殆と迷惑つかまつり候。但し勇士の用意すべきものは武具なり。

就中縮め用ゐるべきものは弓矢の寸法なり、と僕弱官の頃より心づきて候ひき。されば鎮西八郎は、吾が朝無雙の弓とりなり。しかれども弓矢の寸法を案するに、その涯分に過ぎたるか。僕保元に御父義朝朝臣に従ひ奉り、次炊御門河原に向ひ候とき、不意に八郎殿の弓手にあへり。時に爲朝、弓を彎かんとし給ひしかば、景能竊かに思ふやう、是れ尋常の武者態にあらず、八郎御曹司にてぞあらんすらんとて、走らして敵の弓手に馳せたり。者れば爲朝は鎮西に人となり給ふから、騎馬のとき、弓はいさゝか心に任せざるがごとし。景能は又東國に生育ちて、よく馬に馴れたり。こゝをもて絆相違して、弓の下を越ゆるに及んで、景能が身に中らず、馳て膝に當りつ。もしこの故實に及ばずば、忽地その一箭にて射殺さるべかりし。されば勇士は、たゞ騎馬に達すべきなりと、いよ、その準備懈り候はず。」と、憚る氣色もなく申せしかば、衆皆再び耳を側て、「けに業は道によつて賢し、もし西行にあらずば、よく景能をしり難かりぬべし。あはれこよなき面目かな。」とき、めきあへる折しも、政子御前唐絲を使として、美酒一樽と伊豆の浦の甘海苔、鎌倉山の菌など、種々調理したるを進らせて宣ふやう、「不意き珍客を得給ひて、羣臣を集合へ、うち晤晤はしたまふ由傳へ聞き侍るに、今宵は秋の最中にて、月もまつべき程なり、よりてとりもあはず、是れ進らせ侍るにこそ。」と聞えあけさし給ふに頼朝氣色よく見えて、馳て件の偏提を開かし、唐絲に酌をつかまつらして、これを

西行にすゝめ、重忠、景能、爲久等にも賜びてけり。かくて酒酬に及べる時、頼朝卿、唐絲を見かへりて宣ふやう、「今の世にも未練の壯俊は、弓の本末もしらざるものあり。しかるに汝は武藝にさへこゝろを得たりと、攻子、大姫が物語にてしれり。この席に侍るこそ身の幸ひなれ。日來武藝につきて思ふこともあらば、いへかし。」とぞ宣へば、唐絲答へ申すやう、「絲竹の技は、幼きより習ひたるに、よくもせねど、人なみには侍るべし。武藝はいかで學ぶべき、こは迹なき事に侍り。」とて推辭むを、石田太郎爲久、信と唐絲に對ひて、「鎌倉殿のかく丁寧に宣はするを、推辭み奉るは却つて無禮なり。元來女子の事なれば、深く思ひわきまへたる事なくとも、そは許し給ふべし。一言も申さずば、興なき所行ならんかし。」といふその意、重忠、景能等が文武の問答を妨く思ひて、「唐絲はおのが従弟なり。」とて、薦めて給事に進らせたる者なれば、せめてこれが才學なりとも人にしられて、鼻を高くせんと思ふなるべし。時に重忠、唐絲に對ひていふやう、「爲久の申さるゝところいと理なり。君の仰せを固辭み給ふは畏かるべし。日今鎌倉殿の宣はせし如く、武藝不鍛鍊の壯俊を罵りて、弓の本末も知らずといふ。されど弓矢には名目甚だ多し。悉くこれを記えたらんも、又一藝に庶し。和漢の名目、弓矢の故事、聞かまほし。」といふに、頼朝も又しばしば責めて已み給はず。こゝに唐絲、終に推辭む事を得ずして申すやう、「しからば幼稚かりし時、父のいひつる事、又從弟にて侍る爲久等が、

人と晤談ふを聞きたるなど、只ありの儘に申すべし。或は聞き慢り、或は思ひ違へて侍る事多かりな
ん、殿たち教へたまひね。」と微笑みて應へしかば、西行これを聞きて、「武士の武藝を談するは、平生
の事にて珍らしからず。女房の才學の程をしもしらば、いと興あり。」といふに、賴朝いよ、氣色よく
て、とく／＼といそがしたまへば、唐絲はなか／＼に臆せず、遂に弓矢の名目をまうしつ、「夫れ唐土
の博士の説に、弓はこれを張るときに、穹宗然たり、故に弓といふ。弓は穹なり、その末を簾和訓ゆ
はずといひ、又弰和訓ゆ
はずといふ。骨をもてこれを作る。弰々然として滑かなればなり。中央を弰和訓ゆ
はずといふ。人の握り持つところなり。材を用ゐること六ツ。幹、角、筋、膠、絲、漆これなり。木強きと
きは、及ぶところ必ず遠し。角の勢ひ順なるときは、發つところかならず疾く、筋の力銳きときは
必ず深し。これを合するに、膠をもてするときは和す。これを纏ふに、絲をもてすれば固し。これを
包むに、漆をもてすれば霜露これを損ぜず。六の材ともに美にして、又天時工巧相應す。これ上みの
良き所以なりとかや。又わが國の故事をいへば、上頭を月とし、下頭を日とし、彌より第一籐を、
はつかけといふ。第二籐を、ひめそりといふ。第三籐を、しづやかかけといふ。第四籐を、八幡巻と云
ふ。第五籐を、とりうちといふ。第六籐を、せんだんまきといふ。第七籐を、押付といふ。第八籐を
矢すりの節といふ。第九籐を、をからみといふ。これ握りもつところにして、漢に弰といふものは

れなり。第十一籐を、矢つめおろしといふ。第十二籐を、ひきた、きといふ。第十三籐を、をとこし
 といふ。第十四籐を、引懸といふ。その下は、やすめ緒なり。又弦は鳥の下四寸を、しかけといふ。
 その下を、大ふくらといふ。又その下を、はずだまりといふ。その下を、手たまりといふ。兔の上三
 寸を、またしかけといふ。弓は表裏陰陽に則り、日月星辰の象を具へて、天の二十八宿、地の三十六
 禽、みなその氣をこめたりとぞ。凡そ文武の兩道を具足したる人、これを弓とりといふべし。されば
 君子はかならず本を務む。このゆゑに正調を失すれば、これをその身にもとむといへるにや。ま
 た矢は釋名とかいふ書に、矢は指なり。言ふこゝろ、指し向ふところありて、迅疾なるものなれば
 なり。又これを箭といふ。前進むの謂ひなり。周官の司弓矢は、八矢の法を掌るものなりとなん。
 矢の本を足といふ。足またこれを鏑和訓かといふ。鏑は敵なり。言ふこゝろは、以て敵を禦ぐべし。
 齊人これを鏑和訓といふ。鏑は族なり。いふこゝろは、そのあたるところ、みな族滅す。關西にこ
 れを釘といふ。釘は鏑なり。いふこゝろは、鉸刃あり。その木を括和訓といふ。括は會なり。言ふ
 こゝろは、弦と會す。括の旁を又といふ。言ふこゝろは、形又に似たり。また我が國の制、大鏑、
 小鏑、音無鏑、所謂日無鏑、同矢頭細萍、小鳥華、眠萍、金磁頭、暮日、戲、村濃矢、擘、鏑等の
 數種有り。又の左を、矢くひと云ふ。右を、けらといふ。矢くひのしもを、箒卷と云ふ。羽の中央

を、やりほといふ。四羽なれば、そのしもを云ふ。やり羽のしもを、走羽と云ふ。そのしもを、かけ羽といふ。矢竹の中央を、中の節と云ふ。そのうへを、袖すりと云ふ。中の節のしもを、すり節といふ。そのしもを、射つけの節といふ。鎌のうへを、根かつぎといふ。根かつぎよりうへへ地水火風とこれを數へ、羽の中央を空とすとかや。かく聞きて侍れども、矢一ツ發すすべもしり侍らず。たゞ口にいふのみにて、鸚鵡の人の口まねしたらんやうにて、殿達かたはらいたくぞおほすらん、耽かはしさま。」といふに西行は、しぼく唐絲を尻目にかけて嘆息す。頼朝は、おもひの外なる唐絲が才學の、男子にも勝れるを感じおほし、「さすがは爲久が親族なり。かかる女子を傳けおくときは、生侍にも勝りて、大姫がよき護たり。」と、しきりに褒美したまへば、羣臣各これを榮とするに、爲久は鼻のあたりを嗚呼めかして、したり顔なれど、重忠のみ唐絲を稱讚めず、冷笑ひてぞ居たりける。かくて唐絲は、暇たまはりて御前を退出たり。且くして西行法師は、猛に外面をうち瞻ぎ、「怪しや鎌倉殿を恨むるものありて、今現に薬垣の外邊を徘徊す。重忠は四相を察する人なり。とく出でて見たまへかし。」といふに、諸臣大いに驚き怪しむ、「西行は文武の秀才なりと聞きしかど、天文、地理、卜筮、説相の事をさへようするとは、いまだ聞きもおよばざりし。しかはあれ、今鎌倉殿の御前にて、かくいふは定めて見るところこそあらめ。こは聞きも捨てがたき珍事かな」とて、互に面をあはしつ、

絶えて口を開くものなし。重忠は鎌倉殿の仰せをまちて、眺々しく身を起さざるを、頼朝見そなはして、敢て騒ぎたまふ氣色もなく、「重忠などて猶豫せる。西行のいはるゝところよしあるべきことぞで、とくく。」といそがし給へば、重忠は、「阿。」と應へも果てず、長袴の裾かいとりて、やがて遠侍のかたへ退出つ。

第九套

薬師堂の邊に重忠義高を誅する

山井の海濱に怪鼠光實を笑ふ

猫間新太郎光實は、いぬる年、粟津が原にて不意くも義高に環會ひ、既に宿志を述べて怨みを報はんとせしに、義高怪鼠の術をもて、忽地に身を躲し往方しれずなりしかば、大いに望みを失ひて、猶彼此を遍歴し、心ならずもはや三年を経るほどに、つらく思ふやう、義高既に幻術を得て、出沒不測なり。我今孤獨にして、漫に環會はんとするとも、勞して功なからんか。縁の趣を按ずるに、彼かならず頼朝を父の仇とし、これを狙ひ撃たんとて、鎌倉近く徘徊する事もやあらんずらん。曩にわが嫂に致訓もあれば、ひそかに鎌倉に赴きて、柳營昵近の武士に就き、わが夙志を告げ、鬱憤を訴へ、武將の威徳を權りて、仇を報はばやと深念し、今茲文治三年の春の末、鎌倉に赴きて、潛びやか

に秩父莊司二郎重忠が宿處に到り、緣故を審かに告げにければ、重忠聞きて、「義高は眞に石田爲久に撃たれ給ひぬるに、今なほ彼の人存命へたまふこといとく怪し思ふに、爲久が撃ちたるは體ものにてありけめ。しかる時は鎌倉殿を仇とし寃はでやはある。こはゆ、しき御大事なり、まづ重忠が家に潛びて坐せ、ともかくもして宿志を遂げさし進らすべし。」と承引きて、よろづ信やかに款待すといへども、義高の事はいまだその證據を得ざるをもて、佯々しく鎌倉殿へは聞えあけず、只意の中に含みて、しのびく、にその往方を索ぬる程に、光實をば假に家隸とし、いと下郎に打撈して、毎日にこれを將て、谷七郷を漫行きしつ。これは重忠主従、眞の義高を認らざるをもつてなり。しかるに八月十五日、鎌倉の營中において、西行法師、猛に外面をうち仰ぎ、「日今辯者ありて築垣のほとりを徘徊す。」といへりしかば、重忠はこれかならず冠者義高なるべしと筋しながら、明白にはいはで、遂に頼朝の仰せを稟けて、忙はしく門外へ出でんとする時、まづ正門のこなたに、主の供まちしてありける椿澤六郎と、猫間光實のみに緣由を告げしらし、只この二人を將て、遽忙しく外面へ走り出で、御所の四隅を巡歴す。浩がる所に藥師堂のこなた、溝渠の邊を、編笠ふかくして武士の浪人めきたるが漫に徘徊し、つくくと裏を見入れつ、日今重忠主従が出で來ぬるをやしりたりけん。道を横ぎりて避けんとするを、重忠きつと見て、「あのもの將て來よ。」といへば、椿澤六郎、「承りぬ。」と應へか

けて、喘ぎ／＼これと呼びとめ、「秩父どのの呼ばし給ふなり。此方へ参り候へ」といふ。件の浪人見返りて、「わが事にて候か」といふ。榛澤かさねて、「秩父殿の召さし給ふに、とく／＼参り候へ」といそがせば、しぶりながら編笠を脱いで、雌手に引提げ、伴はれてほとり近く來にけり。そのとき重忠は、道の次なる柱石に尻をかけ、彼の浪人を招きよして、これを見るに、面色白く、眼睛秀で、身丈高くして筋骨逞し。身には黒き袴の、未の時は遙かに過ぎたるを被て、腰に朱鞘の小刀を跨へ、つゝいるたる形容たゞびとならず。重忠、と見かう見て嘆賞なし、「天晴健男なるかな。武勇もさこそと思ひやらるゝなれ。そも誰が家の子ぞ、年は幾許春秋ぞ、名は何と呼ばるゝにや」と問ふに、浪人答へて、「僕は飛驒の乗鞍嶽の麓に生育ちて、名もなき下士なり。年紀は未だ二十に至らねど、父母もなく兄弟もなし。此の度遊學の爲、この地へ赴きたるにて候」といふ。重忠聞きて、「さては青雲の志ありて、鎌倉へ來れるにこそ。重忠屑ならねど、もし樹を擇ぶに及ばずば、所領にかへて扶持すべし。いかにわが家に奉公すべくや」と問へば、浪人左右の手を膝に累ねおきて、「好意は欽はしく候へど、未だ志す方も見果てざれば、思ふまゝに遊歴して、後に必ず庇みを蒙るべし。目今は仰せに隨ひがたく候」と答へしかば、重忠うち點頭きて、「しからば力およばず、なほ時節もありなん。飛驒より鎌倉へ出づるには、必定木曾路を過りけめ。信濃は聞ゆる山國なれど、名所もいとおほし。山

は、姥捨、朝間、風越の峯、恨の山、うらこの山、いくら山、等取、阿計呂、阿都佐山、有明山、浦
の山、夢科山、一隔山、位山。川は、筑摩、相染川、鹽田川、梓川、御言川。里は、伏屋の里、更級
の里、悪の里、美妙水の里はわきて見どころもあるべし。牧は桐原、望月、野は信濃野、菅の荒野、
伊奈野。原は、園原、蕎麥が原。橋は、木曾の棧、久米路の橋。湖水は、諏訪の湖。關は、樗の
關の蹟。温泉は、東間の御湯、七くりの湯。犬養の湯、信濃の御湯。神社は延喜式に載せられたるも
の十箇郡、合はして四十八座。この外の小社は枚擧ぐるに遑なかるべし。これら何れが最も好景なり
し、聞かまほし。」と詰り問へば、浪人答へて、「僕元來文もなく武もなければ、只いたづらに見過ぐ
して、ひとつも覚え候はず。」といふ。重忠微笑みて、さもこそとて懐より石筆をとり出し、腰なる
扇をさとひらきて、

夏くればふせやが下にやすらひてしみづの里にすみつきぬべし

かく書寫けて、これを浪人にあたへていふやう、「こは見參の引出ものなり。其許遊歴しをはらば、必
ずわが家に來給へ。そのときの割符とも見るべきなり。」と聞えしらすれば、浪人はその歌をしぼり、
吟じて押疊みつゝ、懐に挟め、「芳意寔に謝するに堪へたり。もし縁あらば、再び見參し奉るべし。」
と回答へ果て、光實を尻目にかけて、つと身を起し、由井が濱の方へ過り去りぬ。猫間光實は、重忠

の後方にありて、彼の浪人は粟津の草庵にて、猫鼠を論じたる廻國の修行者に露ばかりも違はず。こ
 は疑ふべくもあらぬ義高なりと見てければ、舊怨さらに彌まして、名告りもし飛び蒐りて撃ちとるべ
 う思ひながら、重忠はやくその氣色を曉得り、しばく見返りて、目をもてこれを抑留する程に、遂
 に手を動かす事を得ず。義高既に立ち去りて、ゆくことや、二三町に及びしかば、堪へかねて直に追
 ひ蒐けんとするを、重忠忙はしく押し留め、「彼の浪人を義高なりとは、我も又はじめよりしらざるに
 あらず。しかるをしりつ、見逃したるは、彼幻術を得て容易く搦めがたければなり。ざるを御邊血氣
 の勇にはやり、もし謀られて返撃などにせられなば、年來の志をいたづらになすのみならず、死し
 て後も、なほ世の胡盧なるべし。これこそ粹みな慮りの浅きにあるなれ。よしや義高出没自在にし
 て、人の耳目を瞞ますの術ありとも、往昔より妖術をもて、本意を遂けたる者を聞かず。漢の張角、
 我が朝の將門など、或は愚民を惑はし、或は敵將を誑くに足れども、天兵一トたび至りては、瓦石
 とともに碎けたり。しからば義高も、しばし放ちおきて、竊かにその妖術を折き、一舉して拉ぐべ
 し。ゆめ飄りたまふな。」とひそめきて教訓したりければ、光實は齒を切り、拳を擦りて思ひとゞま
 りつ。重忠又林澤六郎にいふやう、「義高既にわれに認められたれば、この地に足を留むべからず。彼何
 所をさして去るやらん。主従二手にわかれてこれを見究めば、攻むるにも防ぐにも便りあり。汝は、

東の方、葛西谷より屏風山のかたへ向へ。光實は、又この條を眞直に、由井の濱のかたへ赴き候へ。われは、西の方、小袋坂をさしてこそ向ふべけれ。寄り集ふところは鶴岡一の鳥居際にて、おの／＼一つに聚まるべし。」とて、よくその手分を定め、又光實にいふやう、「御邊義高に追ひつき給ふとも、たゞ密やかにその後方に跟けゆきて、ゆく先を見究めなば、其所よりかへり給へ。彼になしられ給ひそ。」といひ諭しければ、光實これを諾ひて、主從遂に三方へ立ちわかれけり。かくて猫間光實は、義高を追ひ蒐けて遂に走り著き、その後方に跟きて、ゆく／＼由井の濱に到るに、日も暮れなん／＼として、往來の人も迹絶えたり。そのとき光實思ふやう、われ今仇と共に咫尺の地を踏みながら、手を空しくせんは、大丈夫のせざるところなり。重忠の教訓あるに似たれど、天の時はふたゞび得がたし、地の利又究竟なり。もしこゝにて怨みを復さずば、何の時をか期すべきとて、間一町ばかりおきたるに、濱邊にそうて白砂を蹴たてつゝ、急に追ひ廻り、既に名告りかけて砍らんとするに、奇なるかな、義高の形臆朧として見えす。こは口惜しと、いきまきて彼此を估とにらまへて立在めば、思ひもかけず、その容積に等しき大鼠、忽然と現はれ出で、行くべき前を遮り留めたり。光實是れを見大いに怒り、「這ごさんなれ。義高が妖の皮引き剥ぎ捨つべし。」と罵りもあへず、刀を抜き跳り蒐り、その真中を一刀刺すに、手に障るものなし。こはいかにと呆れ惑ふ折しも、頂きの上に呵々と笑ふ聲

し、「いま返撃ちにせんも容易けれど、汝が志の健氣なるに放して、立地にその命を絶たす。みづから曉つて思ひとまればか」といひこらし、又呵々と笑ふ聲して、さとおろしくる風とともに、しら浪高くうちあけて、はつと羣だつ千鳥の外には、目にかゝるものもなし。光實頻りに義を見て勇むといへども、いかにともすべなく、今こそ重忠の教訓をおもひだして、只いたづらに刀を引提げ、大息叩いて立つたりけれ。

評に云く、西行上人、鎌倉の營中に招かれて和歌を論じ武藝を論ずる條は、東鑑以下の諸説に根きて、實録の趣に粗あへり。その辨に至りては、是れまた先達の論をとり出でて、これに作者の發明をまし加へ、穢みな出所あらざるはなし。この段のみ、演戲雜劇の體を脱落して、閱者に倦かざらしむ。只恨むらくは無用の辨なりとて、婦幼の爲に厭はるゝ條多からんか。又いふ政子の唐絲をもて、頼朝へ進らせたる甘海苔は、往々東鑑にも見えて、この頃もつばら賞翫したりとおほし。但時節仲秋にして、海苔を賞するに少し早かるべし。又いふ、大場景能が保元の合戦に爲朝の弓勢を論ずる條は、東鑑と少しも違はず、こは實録のまゝを撮合せり。又清水の里の歌は、堀川後度百首、大進が歌なり。今按するに、信濃地名考にいはいはく、しみづの里にしみづの驛あり、いにしへの官道なり。信濃なる清水と詠まれたるはこの地なるべし。今松本の城南理橋村のうち、

わづかに清水しみづてふ地名見ゆ。所謂いはゆる驛まちの跡なるべし。每郡こほりごとにしみづの地名あれど、官道わうごわんにはあらずといへり。こゝに重忠くたんの件うたの歌をとり出でて、義高よたかを驚おどかしたる、いとよし。又夫木集むきあつに、二條大皇后ひごの肥後ひご堀川御百ほりがわみもも歌うたに、

おりたちてしみづの里さとに住すみぬれば夏なつをば外よそに聞きわたるかな
この外、なほあまたよめり。

頼豪阿闍梨怪鼠傳卷之四 終

頼家阿闍梨怪鼠傳 卷之五

東京 曲亭主人 著述
 門人 魁菴癡叟 批評

第十卷

西行猫を郵童に與ふ
 光實稿かに悪鼠を刺す

西行法師は、こゝろならずも鎌倉殿に抑留せられて、文武の長談に、秋の日はやく傾けども、興なほ酣なり。「今宵は、三五夜中の月も隈なかるべし、夜と共にかたり明し候へ」とて、頼朝丁寧にとゞめ給へども、西行つひに留まる氣色なく、奥州へは路なほ遙かに候へば、彼の地の事をなしをはり、歸路また見參に入るべきなり」とまうして推辭みしかば、頼朝すべなく、巽に義仲追討のとき、石田太郎爲久が分捕しつるよしにして進らせし猫を、ほとり近く置きたれば、これを把つて西行に與へ、「けふはからずして老師を煩はすといへども、させる款待をせず、遺憾甚し。これは當座の引出物とも見給へ」と賜はすれば、西行もその志の信なるに固辭まず。彼の金の猫東鑑以下銀の猫とすを受けて

後いふやうに貧僧不思議に貴所に値遇して、暫時逆旅の疲勞を忘るゝに似たり。然るに又この布施を受けて、此の報いをせではあるべからず。つらく貴所を相するに、今宵朝難あり、深くおん愼みあるべし。然りと雖も、子の時をだに過し給はば、練おのづから安かみなん。今一首の腰折あり、よく記憶し給はば、後かならず曉得る事あつて、みづから禦ぐに足るべきなり。」と密やかに説き示し、さして詠み出せる歌、

よれば又左にも右にもいとにくしふくろばしてよ木曾の麻衣

吟すること、三度にして遂に別れを告げ、忙はしく退出けり。そのとき頼朝はつくづく歌のこゝろを考へ給ふに、未だ發明する所なし。重忠もまた歸り來ざれば、何とやら心中穏かならねど、元來智勇御容にして、天の生せる英雄にて坐すめれば、絶えて氣色にも顯はし給はず。西の比及に、後室に入りて政子、大姫と共に、夥の女房たちを集合へ、唐絃に筑紫琴を操拵らさして、この夜の月を賞したまふ。大姫はいぬる年より、義高の事おもひ忘るゝ隙もなく、世の中を形なく思せしかば、花にも月にも、心留まるべうはあらで、羅綺にも堪へぬおん容止の、いといたう細りて、雨に惱める春の鳥の、嗚に迷ふ風情なれど、「今宵の月を見ざらんや、病はこゝろより起るなるに、親をも慰め、みづからも慰め給へ。」とて、母公の強ひて物し給ふに、なほ葦居らんは畏しとおほして、侍兒等に冊かれ、

病を推して、その席につらなり坐しけるに、北條以下、和田、秩父などと、在鎌倉の武士、その内室をもて、いと愛でたう造り建てたる杯臺を、思ひくんに進らせて祝儀を申しける。そが中に秩父重忠の内室嫩子は、心態の伶俐しきのみならず、よろづ雄々しき婦人にぞありける。かかれば頼朝は、重忠が今に回報をまうさざるを、訝しみおほす折なるに、潛かにこの事を問はんとて、北條、和田以下の内室には、みな暇を給はりて退出さし、嫩子ひとり小夜深くるまで引きとめて、女房達もろとも、ぐゑんじの歌骨牌をとらしつ。或は又、四表八表の物がたりさして、頻りに大姫を慰め給ひける。是れより先、西行法師は、申の下刻に及びて、や、營中を走り出で、今宵は金澤までもとて忙しく走りつゝ、と見れば、道の次に年八ツか九ツかばかりなる賤の子、大きやかなる龜の眞中を索もて確と結び下げ、小石砂のうへともいはず、ぐわらりくと引き摺りけり。そのとき西行は、しばし立在みて呼びとめて、「子どもよ、その龜をゆるせ。われその代によきものとならせんぞ。」と、いひもあへず、法衣の袖より金の猫をとり出して見するに、件の童おほいに歡び、龜をば直に溝渠のうちへ投げ捨てて走り來れば、西行見かへりて、「よくこそ放したれ。是れもてゆきね。」といひながら、後さまに金の猫を遞與し、金澤をさして走り去りぬ。されば、童は思ひもかけず、よき物得つとこゝろ喜しく、袖に抱きて若宮小路を南へ、濱邊を直にかへりゆく。折しも忽地後に人ありて、「こや／＼。」と呼

びかけた。その打拵、身には襪染の上總木綿の、いと短き單衣を被て、頭に眞菅のふりたる笠を戴き、手には白布の甲掛をして、足には新藁の尻切を穿き、身丈矮く、面色赤く、眼は圓にして木兔の如く、鼻は横たはりて石榴に似たり。この人は、是れ生平に鶴岡神手洗井の邊に出でて、放龜を鬻ぐを活業とする、横手が原の風九郎と呼ばるゝ悪棍なり。件の風九郎、この日も影の龜を兩個の襖に養ひ、或は索もて廣の鳥栖木に括りさけ、終日八幡の社頭にありて販賣し、なほ賣り残れるを切してうち擔ひ、家路をさして歸るなりけり。そのとき童は風九郎をみかへりて、「阿爺公よ。けふは常よりも遅かりし。もろともにとて呼びかけ給ひぬるか。」といへば、風九郎點頭きて、「汝はなほ幼きに、などてかくひとり遠くは遊ぶぞ。鶴岡の流鏝馬みんとてか。送りて得せんに、われと共に來よ。」といふに、童歡びて後に立ちて行くほどに、風九郎又いふやう、「汝は向に行僧によからぬ物を貰ひたり。われ酒かにこれを見て、いと苦々しく思ふなり。その猫見せよ。」といふに、童は頭をうち振りて、「いな、是れは御身に賣らしたる龜と換へたればいとほし。いかで坐にみする物かは。」と氣色ばむに、風九郎冷笑ひて、「さる忌はしきものを何にかせん。憐むべし、汝この猫を家にもて歸らば、立地に間を蒙りて、翌まではよも活きじ。命をしからずば、ともかくもせよ。」といふ。童聞きて大いに驚き、「そは何故ぞ、縁故をしらし給へ。」とて急がせば、風九郎重ねて、「汝はこの猫を尋常の弄物

と思ふべけれど、それは花柄天神の香爐なり。神のいとほしき給ふ物なればとて、社僧これを隠めおきて人に見せず。しかるを彼の惡僧盗み出したれど、神罰にて走る事を得ず。怒心にもてあまし、きて汝に與へたるなり。ともしらすして歸らば、忽地に罰を蒙るのみならず、社家より大いなる祟りあらば、父も母もいかなる辛きめを見んも、又しり難し。汝はわが家ちかき里の子なればかくはいふなり、命をしからずば、ともかくもせよ。」といひも果てぬに、童は忽地に氣色變りて、手にもたる金の猫を撲地と投げ捨て、よゝと泣きつゝ、いふやう、「よからぬ和尚に欺かれて、たましく買ひ得たる龜をば失ひつゝ、却つておそろしげなる物と換へたり。こは何とせん」とて蹉跎りし、思ひくしたる形容なり。風九郎これを見て潛かに歡び、慰めていへりけるは、「汝年なほ十にも足らねば、神も免し給ふべきか。いたくな泣きそ。われ汝が爲にその猫を花柄にもてのきて、竊かに返し奉るべし、あな物體なや。こゝら邊には犬の糞多きに、などて捨てたる。猫は糞なりとも犬をば嫌ひたまふものを。」といひつゝ、忙はしく捐てたる金の猫を取りて懷に挟め、又いふやう、「われ今これを天神に返し奉りて、勸解まうさば、汝が命はいふもさらなり、父母も又恙なかるべし。さはいへ、もし親に告げ、他にも物語る事あらば、遂に神罰を脱れ難し。その度は勸解ぶるとも、決して許し給はじ。勿此の事をいはずとならば、よきに暗話して得させんに、是れもてはやく歸れかし。」とさまんに賺しこしらへ、賣り

残りたる龜の、而も大きやかなるを、一ツとり出して與へしかば、童は目を拭ひつゝ、件の龜を重やかに押し戴き、「阿爺公よ。よきに勸解し給はれかし。もし神の憎み給ひて、夜の中に、とりも殺し給はんかと思へば、淺ましくもいと悲し。よしなき物を得たり顔に、暫くも喜しかりつる悔しさよ。」とて、猶噉りあけて泣きも止まざれば、風九郎はいよ、笑ひを忍び、「あ、汝は怜愍しき童なり。人にだに語らば、再び咎め給ふ事はあらず。我もしこの處にて逢はずば、可惜命を失はして、父にも母にも、幾ばくの悲しみをさすべかりし。死したる童は必ずゆく、彼の賽の河原といふを知らずや。一才より以下の稚子が、拾ふ小石の罪重み、一重積みては父の爲、二重積みては母の爲、三重積みては自の爲と、積みも果てぬにおどろしき、鬼の筭に打ち崩され、積まねば積めとて打ち罵られ、地藏菩薩の袖の下に、身は躲せども隠れぬ罪障、娑婆にて親のいふ事聽かず、木攀りしたる報いにて、劍の山へ追ひあけられ、水戯りせし報いにて、血の池へ追ひ入れられ、撮凌ひせし報いにも、餓鬼道の苦難を稟け、科なき犬を撃ちたる報いは、畜生道へ墮つるとかや。死しては咲かぬ花よりも、枕園子にならぬは僥倖、さる怖ろしき黄泉の旅へ、行きともなくばこの猫の、ねの字も人になしらせそ」と猫撫聲にいひ懲らされ、童はいよ、忍びかねて、涙と共に青涕を、絞りもあへず泣き沈み、「悲しき事を聞き侍り。縦令友どちの夥計を省かれ、毎日に灸を灼るるゝとも、けふの事を争でか人に語るべき。」

といひつゝ、猶も立ちかぬれば、風九郎やをら手をとつて引き起し、「何事も命は物種、聞きわきたらば仔細に及ばず。とくく歸れ。」と急がされ、童はおのが手にもてる、龜の項より縮める齡の、萬代を經し心持して、風九郎をふし拜み、家路を指して走せ去りぬ。かくて風九郎は、暫し其方を日送りつ冷笑ひ、「さてもうまき童かな。捨賣りにしても二三百金の價物はあるべし、まづ拜謁。」と戯れて、懐よりとり出す猫は、海より出づる二五の月と、共に輝く柴麿黄金、と見かう見て莞爾とし、ひとり點頭きおしいたゞき、擔箱の枓肩にして、ゆかんとする後方より、擔索を無手と引き留めたり。風九郎驚として、そは誰とて見かへれば、これもわが里近く住む、農夫何がしが一子に、峨々太郎と呼ぼる、十六才の大童、あしきことには年より長けて、只管に酒を好み、彼此にて物あらがひす、と名たる溢れものなりける。されど、風九郎もおほえある癖者なれば、騒ぎたる氣色もなく、呵々とうち笑ひ、「こはたれなるらんと思ひつるに、餓鬼大將の峨々太郎、祭禮の神酒の喫らひ酔ひ、獨り心たのしくてか、正なき事をなせそ。」といへば、峨々太郎も又呵々と冷笑ひ、「我は絶えて酒を飲まず、まसान事は汝こそすれ。人は猶しらじとや思ふ、若宮小路より迹を跟けて、かれもこれもよく見たり。汝ひとりによきことさせんや、その猫よこせ。」といひもあへず、懐に手をさし入るゝを、身を反りて拂ひ除け、「それしられては一大事。よしなき猫をとらんとて、言葉にかどの瘦犬の子、棒喫らはせ

んこと敦圀きて、擔簾を揮とうち下し、纏て杓を掻い取り、早く諸懸丁と輝かんとするを、峨々太郎
蹴り躑え、杓を撲地と打ち落し、つと入りて引き組んだり。されば夜の鶴岡、手故にあらで悪棍の、
慾に惑ひし一生懸命、一の鳥居の浪打際に、寄せては返し組んでは別れ、蝴蝶に狂ふ猫蛇の争ひ、或
は奪ひつ奪はれつ。果ては頭髻を取りあうて、捻ぢ摔がんと挑む程に、もろとも輓び懸りし、路の末
權の掛稻より、ぐきと突き出す朴刀に、是彼胸骨貫かれ一苦こと叫ぶ聲と共に鮮血まじり、忽地
無常の風九郎、峨々太郎も臥し累なり、砂を掴んで死してけり。時に掛稻の間ひきわきて、血刀引提
け立ちたる壯俊、背布の袷衣に、菅蒲皮の形したる萌葱木綿の袴高く括り揚り、藤鞆の長き雨刀を帯
びたり。まづ半身を顯はして雄手雌手を見かへり、徐々と歩み出でて、頼かわりせし手拭を掻いと
つ、刃の血を拭ひ去り、やをら鞆へをさめて、風九郎が屍のほとりなる金の猫を取つて、つら／＼
見つ、押し戴き、一時なるかな。わが家の重器、圖らずして復る事、神明未だ扱て給はず。今よりこの
猫をもて、義高が妖鼠の術を破らば、その首を得んも又遠からず。あな喜ばしとひとり言して懐
に楚と挟め、袖うち拂うて去らんとすれば、前より張ふ人ありて、ゆく前を立ちふさぎつ。又立ち戻り
て道を引きかへ去かんとするに、こゝにも又人ありて、そのゆく前を立ちふさぎつ。されば壯俊は右
へ去かんとすれども去き難く、左へ去かんとすれども去き難し。前は渺々たる蒼海にして、後は藪澤

なり。とうまかうさまくねりあひて、三人洲濱しづまに立ちならび、佶かむてと面をあはしつゝ大いに驚おどろき、「こは秩父殿。」「榛澤氏はんざいし。」といふに、主従手しゆうじゆうを舉げて、「音なせそ光實みつざねぬし。」「しからば前まへより何事なにことも。」「とくと見たり。珍重ちんじゆう々々。」「いざもろ共に。」とのふ汐しほの、月つきを燭あかりに歸かへるなるべし。

第十一套

頼朝よりともの智麻衣ちあまぬいの歌を解とく

嫩子なほこの勇唐絲ゆうたうしが逆さかを律りつばぐ、

この夜頼朝よりのとも卿きやうは、重忠ちゆうしゆうの内室ないしつ嫩子なほこと夥多あまたの女房にようぼうを集合つどへ、唐絲たうしに琴ひを弾ひかし、政子まこと、大姫おほひめと共に月つきを眺ながめて秋情しゆうじゆうを慰なぐさめ給たまふに、襄さきに西行法師さいぎやうほふしのいひつる事こと、とにかく心こころにかゝり給たまふものから、人にもしらせず、つくゞと彼の歌うたのこゝろを考かんがへ給たまふに、いまだそのよしを曉さと得とらず。杯さかづきの數かずもかさなり、興きやうますノ、醒さなる比ころ、廊ちやうだうへ登のぼかんとてつとたち給たまへば、唐絲たうしはやくその氣色けしきをしりたりけん、後方あひだに従したがひて臘塗ろうぬりの「匣はんでふ」に銀しろがねの水注みづさしを取添とりそへ、廊下ちやうかを繞めぐりて外面とあかたに待ち居まちたり。そのとき、頼朝よりともは廊ちやうだうにありて、なほ彼の歌をしばノ、吟ぎんじかへしつゝ、忽地たちまち曉さと得とり給たまふやう、「よれば又左またとにも右みぎにもいとにくし。といふ上の句くは、國字ひろがなのくの字じ二ツを左右さゆうにして、中ちゆうへしの字じを加くふれば水みづといふ字じになるか。にくしの二にくは、くの字じ二ツなり。また下の句くに、ふくろばしてよ木曾きその麻衣あまぬい、とある、こ

の麻衣あしの衣ぎに、上かみの匂におの、よればまたの、由よしといふ字を加へて、袖そでといふ字になるなり。いとにくしの絲いとは、唐絲たうしに象かたどり、木曾きのその麻衣あしとは、彼の唐絲たうしこそ木曾きのその殘黨ざんたうなれ。この清水しみづを進まらするとき、密ひそかに袖そでを綻ふやうばし、これを避けよといふ謎なぞなめりと、審つゝに發明はつめいし給たまふ折をしも、漏刻ろうこく遙とほかに響ひびきて子の刻ときになりぬ。さればこそとて、やをら袖そでを綻ふやうばして、僅わずかに縫日ぬいひのところへを殘のこし、さらぬ密ひそにて甬かほを出いで、「とく／＼水みづをもて。」と宣のたまはすれば、唐絲たうしつと參まりて、水みづを進まらする面おももちし、傍かたへより頼朝たのちゆう卿けいの右みぎの袖そでを無手むずと引ひつ掴つかみ、氷こほりなす懐劍くわいけんを抜き出いしてゆふやう、「今は何をか匿かくむべき、妾わがは石田いしだ爲久たけひさが從弟いとこにはあらず、實まことは朝日あさひ將軍かうげん木曾きのそ義仲よしのぶの御内みうちに於おいておはすなれば、一太刀ひとたち恨うらみ奉たらばやとて、爲久たけひさを計策なまか手塚てづか太郎ちやう光盛みつせいが妻つまなり。君きみの仇あだ、兄夫あにぢの仇あだにておはすなれば、一太刀ひとたち恨うらみ奉たらばやとて、爲久たけひさを計策なまかり、かく給事みやづかへして侍はべるなり。時來ときつて今宵こゝろたま／＼咫尺しせきし奉たれば、縦たてひ脱ぬれんとし給たまふとも脱ぬし奉たるべうもあらず。さらばおん首しるしを賜たまはりてん」といひも果はてず、刃やいばを閃ひらめかして胸前むねさきを刺さんとするに、頼朝たのちゆうは身に寸鐵すんてつを帯おび給たまはざりしかば、女めなれども侮あなり難おほく思おもひして、横よこさまに三間さんかんばかり、轟いんごうの飛とぶが如ごとく閃ひらめと飛び退とき給たまふに、豫かねて綻ほころばしたる袖そでなれば、さらりと斷離ちぎれて、いたづらに唐絲たうしが手てに残のこり、土ぬしは欄干らんかんの下もとに立ち給たまひつ。唐絲たうしは、只ただ一刀ひとつかたなにと思おもひつるに、こは目をしとて、なほ追おつ蒐あけて撃うち奉たらんとするを、頼朝たのちゆう信しんと見みそなはして、「癖物くせものあり。寄よれや支さへよ。」と呼ばよはり給たまふに、後聽おく

なれば武士一人も侍らず。嫩子は、常ならず鎌倉殿の人を呼び給ふ聲いと慌しきを洩れ聞きて、つと身を起し、長押にかけたる薙刀を掻いとり、「女房達續き給へ」といひかけて、驀直に走せ參れば、二十餘人の女房達、我後れじと羣たちて、目今頼朝卿を追つ蒐け奉り、廊を二たび三たび走り繞る唐糸を、左右よりとり圍み、おの／＼短刀を鞘ながら打ちふりて、生拘らんとして聞けば、唐糸大いに焦燥ちて、星眼を睜き、朱の唇をひるがへし、長なる黒髪をふり亂しつ、もの／＼しやといきまいて、西を打つては東に當り、北を靡かしては南を挂へ、四角八面、縦横無礙に挑み戦ふ。その疾きこと雷光の走るが如く、又陽炎の立ち昇るに異ならず。雄々しき勇婦の刀尖に、影の女房當りがたくて、動もすれば撃ち靡かされ、踏み反す裳は紅に、留奇南發と薫らして、脛さへ露はなるは、山風に吹きおろさるゝ春の花、空にしられぬ白雪の、勻ふかと怪しまる。政子、大姫は殊さらにうち驚き給ひて、小薙刀を衝きたて、前後の杉戸を楯にして、勝負いかにと見給ふに、奮撃突戦、半响ばかりして、主客もろ共に大いに疲勞れ、互に發と引きわかれ、一息吻いて立つたりける。油斷を見て嫩子は、薙刀を水車の如くうちふり、「唐糸やらじ」とかけんとするを、懐劍もて拂ひ除け、つけ入らんと競ひか、れば、嫩子は二足三足退きつゝ、薙刀を夏利と捨て、「や」と聲をかけて、唐糸が懐劍を丁と打ち落し、怯むところを突き倒し、押へて索をかけたたりける。唐糸猛しと雖も、その身鐵石にあらざ

れば、初度の戦ひに腕も撓みて、嫩子に敵しがたく、勢ひ竭きて生拘らる、といへども、なほ頼りに罵りて已まず。「今宵もし嫩子なかりせば、いと危かるべきに、さすがは重忠が妻なり。いとも微妙き舉動かな。」とて、政子、大姫は更なり、頼朝卿ふかく賞嘆し給ひけり。浩かる處に秩父重忠かへり來て、鎌倉殿に義高のことを密語き申し、又風九郎、岷々太郎がことを聞えあけ、曩に西行に賜はりたる金の猫は、元來猫間光隆卿の家藏なるが、いぬる年、如此々々の事によつて、光隆卿これを木曾義仲に贈り、家臣竹川正忠を贖ひ得たり。然るに義仲は、その性猫を忌み嫌ふをもて、これを石田爲久に預けたるを、木曾殿洛没落の日、爲久は御方の陣に馳せ加はり、猫をば分捕せしとまうしこしらへて、鎌倉へ進らせたりとぞ。又西行法師は無慾の桑門なるがゆゑに、金の猫を賜はるといへども、愛惜のこゝろ露ばかりもなく、御所を出でていく程もなく、賤の子にとらせたるを、悪棍風九郎彼の童を賺して件の猫を掠めとり、遂に岷々太郎といふ溢者にしられて、これを争ふ折しも、猫間光實、忽ちに二人の悪棍を殺して、猫を輒くとり復しつ。この光實といへる人は、猫間光隆卿の舍弟なるが、妾腹なればそのころ冠を賜はらず、平人にて新太郎と呼ばれたる是れなり。光實復讐の志切なりと云へども、義仲粟津野にて戦死ありしかば、夙志を遂ぐるに由なし。よりてその子義高なりとも撃つて、亡兄の冤魂を慰めばやとて、この兩三年が間廻國の修行者に打撈ち、圖らずも粟津が原にて、

義高に撞見ひしが、義高妖鼠の術を得たれば、立地に本意を遂ぐるに及ばず、近比鎌倉に來りて、重忠を憑み申さるゝに黙止しがたく覺え、密かに扶持して假に家隸とし、毎日にこれを將て、谷七郷を徘徊し、専ら義高の在處を携り索むると雖も、慥かなる證迹を得ず。こゝをもて佻々しく訴へまうさざりしが、今日西行の言によつて、面のあたり彼の人、この地に立ちしのぶをしれり。しかれども隱形不測の妖術あれば、且くこれを放し、その妖術を破りて後、一舉して拘捕るべう思量して候。」と彼はおちもなく聞えあけ、また鬪に光實、山井が濱にて、ふたゝび義高を撃ち漏らしたる爲體を述べ、扱申すやう、一件の金の猫は、鼠妖を折くの奇特あり。願はくば猫をその舊に復して、光實に賜はり、彼の人の宿志を果さし給へかし」と密びやかに申すにぞ、頼朝大いに驚き給ひ、「さては義高なほ死なす、不思議の幻術を得たるかな。寔に西行の先見掌を指すが如し。誰かしらん、唐絳は兼平が妹、光盛が妻にして、頼朝を狙ひ撃たんとする者とは。然るに御邊の妻媼子が、比類なき働きによつて、輒くこれを搦め得たり。」とて、はじめて西行の歌を説きしらしたまふに、重忠はふかく感激し、西行法師は凡人に在らずとて、頻りに是れを稱贊せり。頼朝また宣ふやう、「義高が事は、政子、大姫に知らすべからず。もしこの事世に聞えなば、わが最愛の女兒を喪ふべし。思ふに爲久は、唐絳に謀られ、これを營中に給事さしたるか。又義仲に荷擔して、彼と志をあはし、頼朝をうしなはんとする

ものか。所詮爲久を生拘りて鞫問せざば、いかにとも知りがたし。まづ光實に御邊の家傳をさし副へて、爲久を搦めとらし候へ。且唐絲が事は、その從類を穿鑿すべきものなり。忽になせそこと仰すれば、重忠うけたまはりて、外面へ退出、猫間光實と横澤六郎に機密を告げ、「早く爲久が宿處に走せ向ひ、生拘り來るべし。」と急がせば、猫間、横澤、欣然として領掌し、雜兵夥を將て、飛ぶが如くに石田が家に走せてゆく。さる程に重忠は唐絲を引き立てて、公文所の前戟に炬火を燒かし、その邊に唐絲を引き据ゑ、宿寢せし青侍にこれを守らし、重忠自ら義高の在處と爲久等の事を責め問ふに、唐絲はなかくに臆したる氣色もなく、「義高君の事は、露許りもしり侍らさ。爲久、又わが方人にあらず。わが身その始め、石田が家傳堀江藤二を撃ちて、却つて爲久を説き伏せ、彼に便りて營中へ給事いたせしは、鎌倉殿を一大刀恨み奉らんとてなる事、勿論なり。且石田も木曾殿の仇なり、堀江兄弟も、又義仲の御首をあけたる者なれば、まづその家傳を撃ちて、十が一の憤りを散らしつ。世の人のいふを聞くに、鎌倉殿は寛仁大度の大將にて、重忠主また理非明斷の良臣なり」といふしかるに、今その君臣の言と行ひを見れば、聞きしにも似ず。よしや木曾殿武威に誇り、天氣を犯すの罪を得給ふとも、義高君に何の科かおはすべき。さるを鎌倉殿、忽地に婿舅の義を忘れて、その根を斷ち、その葉を枯らさんとし給ふは識量甚だ狭し。もしこれをしも諫め得ずば、何をまて御身を

良臣といはん、その愚かなること石田に勝れり。かくいふを憎しと覺さば、とく／＼首を刎ね給へ。
 わが身女子なれど、恩のために死なんは本來の面目なり。」と回答へてその後は、問へども終に物いは
 す。重忠これを聞きて、且感じ且歎じ、聽て縁由を聞えあぐるに、頼朝暫し沉吟して宣ふやう、「唐絲
 女流なりといへども、その志奪ふべからず。われ其の忠義に愛でて、立地に殺すに忍びず。便宜の
 地に土牢を修理ひて、厳しく禁獄いたすべし。」とぞ仰せける。かくて鶏明曉を告ぐる比及に、猫聞
 光實、榛澤六郎はいたづらに歸り來りて、重忠に告げていへりけるは、「某兩人、直に石田が宿處へ
 走せ向ひて候に、門戸を引きよしたる儘にて、裏には人もなし。事の爲體いと怪しければ、近鄰の武
 士、或は市人等呼び起して、その往方を尋ね問ふに、皆答へていふやう、「今夜子の比及に、誰とは
 しらず石田が家に呼門ふものあり。何事ともしかとは聞えず。只唐絲の二字と、とく脱れ去り給はず
 ば、禍忽地その身に及ぶべし、といふを聞きぬ。扱は彼の人、罪の脱れ難きをしりて、逐電したる
 ものならんか。」といふ。よりにてなほ爲久を追ひ留めんとするに、時は遙かに後れ、且その往方をしら
 ず。事の體爲怪しければ、まつ走り歸りて候。」と演説す。重忠これを聞きて眉を寄せ、忽地膝を拍ち
 ていふやう、「石田を呼び出したるは、義高の妖術ならんか。爲久は彼の人の爲に父の仇なり。義高奇
 術あれば、はやく唐絲が事をしつて、その罪爲久を係累し、もろともに首を刎ねらるゝことあらんか

と危あやみ、爲久主しゅうぢう從を誑がた引き出し、手づから撃うつて怨うらみを復かへさんとする物ものなるべし。見よ／＼爲久主しゅうぢう從が首かぶは、今夜こゝろ地上じやうに落おちて、翌あすは馬蹄ばていにかけらるべし。しからば、これを追おはすともあれかし。といふに、猫間ねま光實みつじつも、横澤よこさわ六郎むつらうも、重忠ちゆうぢゆうの聰察そうさつ世よに勝すれたるを感かん伏ふくし、終すまにふた、び爲久むつひさを追おはず。朝あさ重忠ちゆうぢゆうは、爲久むつひさがことを聞きえあけしかば、頼朝よりとも卿けい、さもこそと點頭うづなきおほして、いよ、唐絲たうしが獄屋ごくやを急いそがしたまへば、重忠ちゆうぢゆうすなはち、釋迦しやくぢやう堂だうが谷やつなる南みなみの巖窟いんくつを切り聞きかし、いと嚴重じゆうじゆうに造つくり建てて、其所そのこゝに唐絲たうしを籠こめ置おき、籠守ろうしゆりをして日夜にちやこれを守まもらせけり。今いまなほ釋迦しやくぢやう堂だうが谷やつの南みなみにその蹟あと残り、内に石塔いそくたふ數あまたあり。鎌倉かまくら志しに云いく、相傳あひたづなふ、唐絲たうしは、手塚てづか太郎たうらうが娘むすめなり。一い説せつに光盛みつせいが妻つま、頼朝よりともに仕つかへ居ゐけるが、木曾きそ義仲よしなかつの爲ために頼朝よりともを殺ころさんとて、脇差わきさしを懷くわい中に懸かけ置おけり。つひに露あはれて、この土つちの籠ろうに入れ置おかれけるとなん。東御門ひがしのみかどの山やまの上うへにも、唐絲たうしが土つちの籠ろうといふところあり。しかれども非ひなりといふ。以も今いま按あんするに、唐絲たうしが事こと、東鑑とうかん、衰盛さいせい記きに載のせず。たゞ口碑こうひに傳つたふるのみ。こゝをもち、その説せつ區々くゝくゝにして詳つまじかならず。女流ぢよりゆうの刺客しやくかくは和漢わかんに罕まれなり。是これはさておき、頼朝よりとも卿けいは秩父ちちぶ重忠ちゆうぢゆうをもて、潛ひそかに義高よしかかの在處あゐりかを索たづねさしたまふ程ほどに、有一ある日ひ、又また重忠ちゆうぢゆうを呼よびて宣のたまふやう、「つらく／＼緣故ことゝめを案あんするに、唐絲たうし大事だいじを爲し損そんじて、われに防禦ぼうぎよ等ら閑かんならざるをしるから、義高よしかかふた、び深かく躲かくれて、佻々たうたうしく身みを動うかすべからず。しかれども平家へいけの殘黨ざんたう、若もし義高よしかかに附つきき従したがはば、ゆゝしき大事だいじならん。眞ま

心もとなきことは、華洛に多し。御邊いそぎ妻子を將て上洛し、京都の守護時政と心をあはして禁闕を守り候へ。又猫間光實においては、鎌倉に残しおき、密びやかに義高を索ねさすべし。よりに件の金の猫は、彼の人に返し與ふべきに、その趣をいひしらし候へ」と仰するにぞ、重忠承りて宿所に退り、事の趣を光實に聞えしらし、俄頃に行装を整へて、内室嫩子と、今茲三才になりける嫡男重稚を將て、梅澤六郎以下の家縁を召し従へ、八月下旬に首途して、只顧に路を急がし、日數十日あまりにして京著し、源廷尉の舊の迹、堀河の宿所に入つて、北條時政このころ時宗京都にありに、鎌倉殿の仰せを傳へ、もつばら禁闕を守護し奉りけるとぞ。

評に云く、この卷すべて楔子あり。この事前まへに評するが如し。頼朝鶴岡詣を楔子とす。頼朝西行ごうを出す、西行を楔とす。西行金猫ごねのねこを出す、金猫を楔とす。金猫、前童及び風九郎、峨々太郎ごごを出す、風九郎、峨々太郎を楔とす。風九郎、峨々太郎、猫間光實を出して、其の猫本ねこもとに復る、是れ正棧ただかきなり。又文武の評論ひらけを楔とす。文武の評論、景能、重忠しむたけを出す、重忠を楔とす。重忠、西行の詠歌よみかを出す、詠歌を楔とす。詠歌、義高、唐絲からいとをいだす。唐絲、嫩子なほこを出す、これ奇棧きかきなり。古人こじん云く、楔子は無中の有生むちゅうのうせいにして、みな憑空ひょうくうの語なり。今按いまあんするに、楔子は蓮はすを斬るに、藕中の絲くわちゅうのいと、その斬るに随つて翫つきざるがごとし。また置曇氏おきどんしに、十二因縁いんえんの説あり、亦是

れ浮屠家の契子なり。

或人問ふ、頼朝の西行におくるものは、銀の猫なり。しかるをいま、金の猫とするはいかにぞや。答へていふ、金はそのいろ黄にして、その性土に應ず。金と成るときは、彼の猫はじめ土中より出づるによろし。かつ金は秋氣殺戮の主なり。光實これをもて、義高の妖を征し、復讐の宿志を舒ぶるによろし。又金花猫王の説、載して搜神記に見ゆ。金花は、初にいふ二毛なり。猫はその形虎に似て、その毛黄色を帯ぶるものを佳しとす。故にこゝには金の猫とするか。作者の用心、すべてかくの如くなる事おほし。今悉く評するに及ばず。

附けていふ。この書八巻を全本とす。今第一巻より第五巻まで、疊いて前編とし、矯辛既に落成す。六巻より以下大尾に至るまで、なほ作者の肚裏にありて分曉せず。來春はならず、その稿本を乞ひ得て、續いて全編とすべし。○又いふ。作者自らいふ。この書、第二巻と、第六、第七、第八巻を得意とすと。然るときは、この編中得意の作文寡なし。閱者をして遺憾多からしむ。とよりて、今その聞けるところをもて、後編三巻の大意を附録す。

第六卷

後編の上冊とす

近日嗣出

大意

箱峯に義高、石田爲久を撃つに始まり、渡月橋邊鈴稚主從閑居の話、竹川正忠夫婦忠義の段、半ばにして終る。閱者泣然として涙をたるゝの巻なり。

第七卷

後編の中冊とす

大意

正忠が妻律戸、恩の爲に身を賣りて嫩子に従ひ、鎌倉に赴く中途、正忠幼主を懐にして、之と東海道の旅館に逢ひ、遂にその子を殺して主を救ふ話なり。

第八卷

後編の下冊とす

大意

大姫深く義高を追慕して再び病をなすに始まり、義高鎌倉の營中に跋扈し、唐絲大姫節に死し、光實金の猫を以て妖鼠の術を破り兄の冤みを雪むるに終る。

賴家阿闍梨怪鼠傳引用羣書要語

〔貓〕（本草綱目卷五十一獸部）時珍曰。貓。苗茅ノ二音。其名自白呼。陸佃云。鼠害苗。而貓捕之。故字從苗。禮記所謂迎貓爲其食田鼠也。亦通。格古論云。一名烏圓。或謂蒙貴。卽貓。非矣。亦云。亦有病以烏藥水灌之甚良。世傳薄荷醉貓。死貓引竹。物類相感然耳。（今按）我俗傳。貓疫以銅屑雜魚肉餌之必愈。近曾試之。似有功效。然此藥餌遲則亦竟不活。

（西陽雜俎後集卷八）段成式云。貓。日睛草。及午。豎斂如涎。其鼻端常冷。唯夏至一。口煖。其毛不容蚤蝨。黑者闇中逆循其毛。卽若火星。俗言貓洗面過耳。則客至。楚州謝陽出貓。有褐花者。靈武紅毗撥及青聽色者。貓一名蒙貴。一名烏員。平陵城古譚國也。城中有一貓。常帶金鎖。有二錢飛若蛺蝶。土人往々見之。

〔貓睛〕（朱翼）貓睛辨二十二時。子爲二時。先故貓食鼠。

〔納貓〕（徐宗本納貓法）凡買貓用斗桶等物。以袋盛之。勿令人見。至家計一筋一根。和貓置於桶內。盛之。每過水溝缺處。將石置之。使不過家。從吉方歸。取貓出。拜堂竈犬畢。將貓筋插于土堆上。使不在家撒屎。然後復牀睡。

勿レ令レ走レ出レ爲レ法ト也。

〔和訓〕(和名類聚鈔)猫ハ和名ハ禰古萬。似レ虎而小。能ク捕レ鼠ノ爲レ糧ト。

〔契沖雜記〕猫モ猫子待ノ畧カ。鼠ノ類ニつらねコトいふあれば、ねコトのみいふは畧語ノ中ニこ

とわり背クべし。猫ノ性ハ、鼠ニても鳥ニても、取トリ得テんと思はねば、とらぬ物ナリ。よりて待ト

つけたるか(真淵ノ頭書云)猫ハ只睡ねむり獸ノ畧ナルべし。けものけノ字、反カこナリ。或人苗ノ

字ニつきて、なへけものといふはわろし。(今按)或説ニ「あさくままぬ」を猫トす藏小夜フけてあ

さくままぬにあひぬるかみえひきくまのうちふれてなく。

〔猫命婦〕(小右記)長保元年九月十九日。内裏御猫産ル。女院、左大臣、右大臣有テ産養事有

衝重ツイダ椀飯納レ宮之衣等。猫乳母。馬命婦。時、人笑レ之奇怪事也。(枕草紙)上ニさふらふ御

ねこは、かうぶり給はりて、命婦ノおととて、いとをかしかりければ、かしづかせ給ふが、は

しに出たるを、めのとのむまの命婦、あなこまや、いり給へとよぶに、云

〔靈猫〕(本草綱目獸下云)藏器曰。靈猫生ニ南海ノ山谷ニ。狀如狸ノ。自爲牝牡。其陰如麝ノ。

功亦相似。異物志云。靈猫一體。若シ雜ニ入ハ麝香ノ中ニ。罕ニ能ク分別。用レ之、亦如麝馬。

(今按)香狸。神狸。淨猫。皆靈猫之類。

〔鼠〕（羣書纂要）コトヨブ 鼠呼レ猫ヲナリ。

〔山猫〕（野史）山猫ハ生ニ八丈島ニ。形最長大。常栖山中。捕鳥爲糧。動入人

家。衡コト去テ小兒ヲ啖レ之。

〔鼠〕（本草綱目卷五十一）時珍曰。〔家鹿〕即人家常鼠也。以其尖喙善穴。故南陽人謂

之ヲ〔鼯鼠〕。其詩最長。故俗稱〔老鼠〕。其性疑而不果。故曰鼠首鼠。嶺南人食而謂

之。謂爲〔家鹿〕。鼠字篆文。象其頭齒腹尾之形。

〔正字通〕鼠賞曰切。音晉。六蟲。善竊。晝伏。夜動。四齒無牙。前爪四。後爪五。尾文

如織。無毛。俗稱鼠爲〔耗蟲〕。易繫辭。艮爲鼠。〔雲仙雜志〕山中謂鼠爲〔社君〕。

又〔水鼠〕穴水旁。岸隙。似鼠而小。食菱芡魚鰕。又〔水鼠〕（東方朔云）生北荒積氷下。

皮毛柔。可席。

〔鼠王鼠母〕（西陽雜俎）舊說〔鼠王〕其溺一滴成鼠。一說〔鼠母〕頭脚似鼠。尾若口銳。

大如水中者。性畏狗溺。一滴成一鼠。時鼠史多起於鼠母。鼠母所至。虛動

成萬。萬鼠其肉極美。凡鼠食死人目睛。則爲鼠王。俗云鼠嚙人上服。有喜。嚙

衣。欲得。有蓋。無蓋凶。

〔璞〕（西京雜記卷六）玉之未理者爲璞。死鼠未屠者亦爲璞。月之日爲朔。車之軸亦謂之朔。名齊實異。所宜辨也。

〔仲〕（抱朴子）鼠百歲則色白。善憑人而卜。名曰仲。能知一年中吉凶。

〔鼠戲〕（五雜俎）長安鼠丐者有鼠戲。鼠至頑。非可教者。不知何以習之。

〔捕鼠〕（祕苑俗解）捕鼠法。蟹ノ中ノ黄ナル物ヲ陰乾ニシ、安息香、鼈甲、芸香ト共ニ和ゼ、屋ノ中四方ノ壁ノ上下ニテコレヲ焚クベシ。鼠自然ト走り出テ人ノ前ニ至ル。捕ヘテ野外ニ送ルベシ。殺シ傷ムルコトナク、悉除キ去ルノ良法ナリ。

〔和訓〕（和名類聚鈔）鼠ハ昌與ノ反。和名禰須美。○又鼠一名〔見えひきくみ〕（祕藏抄）に見ゆ。

又（よめのこ）といふ。（定頼家集）に見えたり。

〔鼠國〕（述異記）西域有鼠國。大者如狗。中ナル者如兔。小ナル者如常鼠。頭悉白。商賈經過其地。不祈祀。則嚙人衣。○（按）我俗謂爲鼠隱里者是。

〔火鼠〕（正字通）火鼠出西域及南海火州。山有野火。鼠產于中。甚大。人取其毛。績

之。號火浣布。遇汗燒之。即潔。

〔烏鼠〕（事文後集）烏鼠。山鼠。尾短。形如家鼠。鼠在內。烏在外。爲牝牡。

〔田鼠〕（月令）季春 田鼠化ニ爲ル鼯鼠

○鼠ノ種類最多シ〔鼯鼠〕（郭璞云）其大サ如ク拳ノ。其文如ク狗ノ。（說文云）鼯鼠ノ小鼠也。食ニ人及ニ鳥獸ヲ。雖レ至レ盡ル不レ痛。（和名鈔云）鼯鼠上ノ音ハ奚。和名阿未久知ト。鼯鼠天ニ亦有ニ鼯鼠ト。和名乃良ト。亦有ニ鼯鼠ト。和名豆良ト。亦有ニ鼯鼠ト。和名毛美。（鈔云）俗云。無佐佐比ト。亦有ニ鼯鼠ト。和名以太知ト。亦有ニ鼯鼠ト。一名〔鼯鼠〕。和名字古呂毛知。常在ニ土中ニ行ク。若見ニ三光ト。即死スル者是ナリ矣。（今按）鼯鼠ノ性畏ル檐馬ト音ハオト。若シ樹間掛ク之ト。則鼯鼠不レ壞ク其根ト。

文化丁卯仲冬上浣

飯 俗 著 作 堂 主 人 集 錄

相貓兒法

詩訣

貓兒身短最爲良 眼用金銀尾用長

而似虎威聲要喊 老鼠聞之立便亡

又詩云

露爪能翻瓦 腰長會走家

面長鷄種絕 尾大懶如蛇

又法。口中生三坎捉一季。五坎捉二季。七坎捉三季。九坎捉四季。花朝口咬頭牲耳薄不畏寒。純白

純黑純黃若有貓兒。此樣毛色不必揀。看花貓法身上有法。又要四足及尾花俱得過方好。

右吳郡俞宗納貓法重錄于怪鼠全傳後編簡端

文化第肆丁卯年冬十二月上浣

飯 臺 曲 亭 蟬 史

賴家阿闍梨怪鼠傳後編目錄

第十二套

箱根山爲久喪元

賽河原幽魂諫主

第十三套

正忠孤忠仕幼主

葎戸心烈賣乳汁

第十四套

喪レ金誓女泣レ老

瘞レ玉窮士起行

第十五套

天龍川上忠臣逢節婦

富田旅館重忠賞二竹川

第十六套

巧兒月下各言志

極澤營中密迎客

第十七套

重忠大款待義高

光實進鞆二問唐絲

第十八套

弄_レ假_レ大_レ姫_レ初_レ認_レ眞_レ かをろうしておまひめはじめてしんをしろ

失_レ明_レ義_レ高_レ更_レ歸_レ空 めいをりつしてよしがさらたぐわにきす

前後兩編統計一十八套完 ぜんごりゅうへんとうけいじつじふはつじゅうまつたし

目録 終

賴豪阿闍梨怪鼠傳 卷之六 (後編上冊)

東京 曲亭主人著述
門人 魁菴癡叟批評

第十二套

箱根山に爲久元を喪ふ
賽河原に幽魂主を諫む

石田太郎爲久は、その夜さり、唐絲が賴朝卿を撃たんとして嫩子に生拘られ、わが身の隠匿、忽地に發覺れたるをしらでありけるに、亥中の頃及に頻りに門を敲く者ありけり。門卒これを怪しみて、「誰ぞ。」と問ふに、その人答へて、「己はむかし、爲久主に再生の恩を稟けたる者なり。その事は主人も知らず坐すべけれど、仔細を述ぶるに及ばず。潛かに火急の一大事を告げまるらせんとて來れり。御内において一二の人に見參せまほし。このよしとくくまうし給へかし。」といふに、門卒等いよ、怪しみて、一人走りゆき、石田が老黨堀江藤五陰重に、かくと告ぐるに、陰重聞きて眉をひそめ、やがて立ち出でつゝ、物の隙よりさし覗くに、夜間なれどいと明く、絶えて見も馴れざる男、只ひとり

門外に立在あり。こはやうあらめと思ひしかば、忙はしく走り入りて、主君爲久に緯の體爲を告げにければ、爲久もそのこゝろを得ず。「汝まづ出でて縁由を問へ。夜間なるに、かならずしも内へな入れそ。」といふに、陰重ふた、び外面に到り、やをら物見をおし聞き、件の男に對ひて、「こゝに來れるは何人ぞ。かくいふは石田どのの御内において、さるものありとしられたる堀江藤五陰重なり。事あらばしらし候へ」と呼びかくれば、彼の人近く進み寄りて、聲を低うし、「故ありて明白には名告りがたし。今夜營中に椿事出で來にたり。その故を尋ぬるに、唐糸先に爲久ぬしの吹擧によつて、大龜君に給事いたせしは、原その志鎌倉殿を一太刀うらみて、亡君、亡父の仇を報はんとするにあり。しかれどもその便宜を得ざりしが、今宵はじめて鎌倉殿に咫尺し、矢庭に撃ち奉らんとするに事成らず。重忠の内室、戀子影の女房達を集會へて、遂にこれを擲めたり。さるによつて、重忠仰せを棄けて、唐糸を鞠問し、一味の徒を穿撃するに、彼明白にはすといへども、爲久ぬしに御疑ひ係り、俄頃ごんごんに討手の兵を向けらるべしとて、營中ほと／＼騷動す。もし虚々と家に在さば、殃忽地その身にわざはひおよんで、白刃の首にのぞむ時、臍を噛むともそのかひあらじ。己そのわかし、爲久主に人知れず、庇覆の恩恵を棄けたるものなれば、その恩を報さばやとて、告げ進らするにこそ。」といひ果てて、飛ぶがごとくに走せ去りけり。陰重はこれを聞きて大いに驚き、直に主のほとりに參りて、彼の男がい

ひつる一五一十を告げにければ、爲久聞きもあへず、呆れ惑ひてせんすべをしらす。且くしいふやう、唐糸われに志をよするおももちせしは、復讐の爲にてありけるよ。然らば彼の老女、鬻に汝が兄、藤二光澄を引き入れて、義高を撃たしたるも故あるべし。惟ふに光澄が撃ちとつたるは、眞の義高にはあらざるか。冤まれ角まれ、我唐糸を『従弟女なり。』といひ虚構へ、營中へ進ませたれば、彼に連累さるゝとも、罪いひとくに言語なく、脱るゝに道なし。悔しきかな、われ慮ひ淺くして這奴に賣られたり。抑この事を告げぬる男『昔人しれず恩を稟けたり。』といひつるも、絶えて思ひあはする事なし。彼も是も不審しき事のみなれど、手を束ねて死地につかんは、いよ／＼世の胡盧なるべし。さらば遠き縣などへ脱れ去り、時をまちて身の慢ちを申し賠償なん。然れども従者夥將て走らば、道果敢のかずして便なき所爲なり。この事沙汰すべからず。』と密語きて、とるものも奪りあへず、主従只二人、馬にうち跨りて、後門より走り出で、鞭を鳴らし、足騒を跳らし、貌姑峯路を望して脱れ去りつ。かくすとすれど門卒等、既に縁由をしりてけるに、只今爲久が、堀江藤五只ひと將て、慌しく走り出づるを見て、さればこそとて彼に告げ、これに聞えしらし、たゞ上を下へと驟動す。原來倭奸邪智なる爲久が下風にたつものどもなれば、主の先途を見届けんともせす。主のもの我かもの、總て貯蔵へたる金銀衣服、おの／＼手に當るを幸ひに分配し、夜に紛れて逐電し、みな散落になり

けり。さる程に、爲久主しうじゆ従は、投なして往方ゆくへを定めねど、只願ひたすらに馬を走らし、貌姑峯路はこねぢにわけ入るに、あまりにいたく馳はせられたれば、馬をば乗り斃たふしつ。主従しうじゆかう歩行より湖水こすゐの畔ほとりまで來にけり。ころしも十五夜の月、山の挾はに傾かたむきて、曉あけがた近くなるほどに、芒花むぎはな、女郎花むすめはなの風に戦そむぐも、跡あとより追はるゝ心持こころして、立ち休やすらふべくもあらねど、いたく疲勞つかれたれば、地藏堂ぢざうだうの前面むかひなる松まつの株くせに尻しりをかけ、主従しうじゆ面おもてをあはしつゝ、忙然まうぜんたる折せりしもあれ、天あまとぶ鷹かりの音ね、草葉くさはに聚あく蟲むしのころまでも、わが身の秋あきと慰なぐさめかね、爲久嘆息たんそくしていふやう、「いぬる元曆げんりやくのはじめには、近江あふみなる湖水こすゐのほとりにて、義仲よしむねを射いて落おし、こよなき功名こうみやうをあらはしたるには似にず、いひがひなく、貌姑峯はこねなる湖水こすゐの畔ほとりに斃たふれ來て、投なしてゆくべき方も定めず。人の世よのたゝすまひ、かくまでもはかなきや」と身の惡報あくほうは思おもひもかけず、世よを憤いさどほり、人を怨うらみて眩くらくにぞ、陰重いんぢゆうも今いまさらのやうにおほえしが、心こゝろよわくてはと思おもひかへし、主しゆを諫いさめていへりけるは、「あな殿とのには、なぞて日頃ひぐらには劣おとりて女々めめしき事を聞きえ給たまふ。さしも平家へいけの大敵たいてきを追おひ落おして、洛みやこに足あしをためさせず。その威勢いきせい旭あさひのさし昇のぼるに譬たとへられたる、木曾きそ義仲よしむねを謀はかり謀おして、輒また討うちとり給たまひぬるものを、よしや唐絲たうしに連係まきあひせられて、鎌倉かまくら殿とのに疑うたがはれ給たまふとも、しばしこれを避さけ、便宜べんぎを得て、絆この本末もとすえを聞きえあけ給たまはば、いかでか思おもひかへし給たまはざらん」と信まだちていひ勸ほませば、爲久聞ききて又またいふやう、「然しかりといへども、われ俄頃にわかに影あまたの路みちを走はらしたれば、馬うまも斃たふ

れ、自らまた飢る勞れて、この山を踏えがたし。今にもあれ、追手か、らばいかにして喰ぐべき。汝謀あらばとくしらせよかし。」といふに陰重も何となく、わが跡見られて物凄まじく、暫く黙然としてありけるが、忽地道次なる地藏堂を指さしていふやうに、「こゝは名にしおふ賽の河原とて、のほろくだりの旅客も、この地藏菩薩へはかならず詣つるとぞ。しからば此の供物なき事は候はじ。同じくは彼所の堂内に懸ひ給へ。曉けゆくとも人にしられずして、主従が穢を凌ぐに便りあり。誘給へ」と袖を引けば、爲久やうやくに氣色をよくし、「けに地獄にも佛はありけり。さらば彼處に休ふべし」と云ひかけて、やをら立ちあがる折しも誰とはしらず、地藏堂の内より打ち出す銃銃に、前に進みし陰重が、吭ぐさつとつらぬかれ、鋒白く項へ出でて、流るる鮮血と共に、一聲高く叫びもあへず、仰けうまに撲地と仆れて、忽地息は絶えてけり。爲久これを見て大いに驚き、こはいかにと周章し、身を轉して松の後に躲れんとする所を、ふた、び打ち懸くる銃銃に、石田は右の手首を松の幹へ籠ひつけられ、雄手をあげつ、引き抜かんとして身を悶搔くを抜かしも果てず、又うち出す刃は電光石火の如く、左の腕もあけたる儘に、傍の松に籠ひ留めたり。かかもしかば爲久は、洛の山にとりすといふ大文字の火の如く、又斷紙鳶の梢にかゝりたるごとく、手をひらき、足を踏み鳴らし、「我を放せ、これを放せ」と叫ぶのみ、絶えてせんすべなかりけり。時に地藏堂の扉を内よりさと押し開き、武士の

浪人めきたる壯俊、身には早き單衣の、涅のごとくなるを裾短に被て、腰に朱鞘の兩刀を十文字に跨へ、手に一蓋の編笠を引提けて、徐やかに歩み出で、篤久を估と睨まへて云ふやう、「覬覦の盜臣、三寸の舌は劔より鋭く、人を殺して榮利を謀りし天罰、おもひしりつらん。われは是れ朝日將軍木曾義仲の嫡男美妙水冠者義高なり。わが父遠き慮あるによつて、この身は總角のころより、假に唐絲が一千大太郎と偽り稱へ、又眞の大太郎は義高と呼ばれて鎌倉へ赴き、入間川の上にて汝が家隸堀江藤二とやらんに撃たれ、唐絲、また行氏、棧橋を毒殺して、貳なき志を示し、遂に堀江藤二を砍つて汝を説破し、鎌倉に給事して、頼朝を狙ひ撃たんと約せしかば、われは諸國を徧歴して、舊好の勇士を語らひ、義兵を起さんとするの外更に他事なし。然るに去ぬる年の期果てたれば、近比鎌倉を年が間は鎌倉に立ち入るべからず。」と示されしが、今茲やうやくにその期の果てたれば、近比鎌倉を徘徊し、密かに唐絲へ計をあはして、既に事を起さんとする折しも、遂に重忠に怪しめられて、いたづらに黙止せし程に、絳忽地に齟齬し、今宵唐絲が生拘られたる事は、われ幻術をもて、早くこれを曉り得つ。よりにて汝もまた頼朝に疑はれ、唐絲と共に罪せられなば、いよ、遺恨なり。こゝをもて甲夜に汝が門戸を敲き、「むかし人しれず再生の恩を稟けたるものなり。」と偽りて急を告げ、この所へ誘引きよしたるは、皆これわがなせしなり。曩にわが父、不意く朝敵となり給ひ、哀れ粟津の松原に

て、汝に撃たれ給ひぬる恨みは、一言に場しがたし。おもひしれ、天の彰々たる事、曇らざる鏡の如し。笑みの中に刃を隠し、頼朝が聞者となりて、わが父を陥れたる悪報にて、今かかるせめにあふみなる、湖水を爰に湖の、汀に曝す死蓋は、汝に出でて汝にかへる、主従が身のなる果て、今義高が義兵を起す、軍神の血祭は、これにます犠牲なし。あな心持よし。と罵り迫りて、刀を閃りと引き抜けば、爲久益身を悶掻き、「穢きかな。美妙水冠者、義仲の滅亡は武威に誇つて、一天の昔を畏れず、その暴逆平家にも超えたればなり。さるを爲久をもち、仇なり。」と罵るはいかにぞや。縦ひ恨みあるにせよ、などで名告りかけて勝負は決せず、刃を飛ばして腕を折かし、進退自由ならざるを撃たんと謀るは、勇士のせざる所なり。」といはせも果てず、義高呵々と嘲笑ひ、「夫自者の爲久を撃つに、なでふ武道を用ゐるべき。よしや一旦の謀にもあれ、汝遙々と信濃に來りて臣附し、わが父亦寵用して恩惠日に厚かりしに、情なくも遠矢にかけて射て落したるは、是れ勇士のする所か。頼朝汝を賞美して、重く用ゐるざるぞうべなる。しかるを我を穢しといふ、汝が清しとするはなぞや。」と責め問ふに、爲久再び應へせず。頭を低れて聞かざるがごとし。その時義高、勃然として大いに怒り、刃をうちふりて、爲久が眼上へいくたびか閃かし、まづ左の足を打ち落して、暫し苦痛をさし、又右の足を削り落せば、鮮血滾々とした、りて、二匹の紅絹を引くに似たり。義高はこれを見て、さもこそとう

ち喉のどみつ、腰こしの番つがひを又一太刀、ぼらりすんと切り放せば、腸はらわたながく地に引きて、章魚乾たこましたたす磯家いそけの簀すい、或あるは時ならぬ山藤やまふぢの、松まつにかゝるに彷彿さもたり。かくて義高は、爲久が左右の腕かひだをうち放すに、軀むくろは地上ちぢうに撞ぶつと落ち、手首てくびはなほ松まつにのこりて、怪あましき茸きのこを見るが如し。かくて二段四段ふたまたよきだに切りはなち、さてその首くびをうち落して、地藏堂ぢぢうだうのほとりに引提ひききけ來つ、これを搔かき拮すゑて膝ひざを折り、堂だうを合あはし、今月こんげつ今日こんにち、奸賊せんぞく爲久主従しうじゆうを誅戮ちゆうりくして、亡父ぼうふ尊靈そんれいに手向たむかへ奉る。當あたの敵かたき賴朝らいぢゆうも遠とほからすして復またかくの如ごとくなるべし。尊靈そんれい速すみかに納受なうじゆうして、天堂てんたうに生なまじ給たまはん事ことこそ願ねがはしけれ。南無阿彌陀佛なむあみだぶつと唱となふれば、怪あましきかな、男女おとこをんなの聲こゑして、もろともに念佛ごふみす。その聲耳こゑみみのほとりにあり。義高ぎたかふかく訝いぶかしみて、左右さきごうを信しんと見返みかへれば、巽さきに人間川にんげんがわにて忠義ちゆうぎの爲ために命いのちを願ねがせし、宇野小太郎行氏うのせうたろうゆきうぢと、その妻つま棧橋せんかきなりしかば、義高ぎたかいよ、これを怪あましみ、且かつ哀悼あいだうに堪たへすしていふやう、汝等なれらは若草わかしぐの結むすびもはてす、もろともにその根ねにはかへれども、忠節ちゆうせつ比たなきをもち、西方さいほう極樂ごくらくの無熱池むねつちなる、竝頭へいとうの蓮花臺れんげだいにあらんすらんとおもひぬるに、なほ三熟さんじよくの苦惱くたうを稟うけ、妾執めかけの雲くもに誘さそ引ひはれて、迷まどひてこ、に出いでたるよ。汝等なれらはいふもさらなり。唐祿たうろくが顛さかつちも、志こころざしを舒のぶるに及およばず。事發ことあらは覺はれて擒とりこになりたるをうち歎なげき、今幻いままぼろしにあらはれしか。將聞はたきえしらする事ことやある。と問とふに、行氏ゆきうぢ、棧橋せんかき躑躅しゆくじゆくして、漕然そうぜんと落涙らくなみし、暫しばくしてまうすやう、賢察けんさつのごとく、臣等おみらが横死わうじは、原忠義もとむつぎの爲ためなれば、絶たえて泥犁じりき邪よみの阿あ

責を受けず。今倅いまのこひに忒利とつり天宮てんきゆうにありて六道どうろく能化のうけの教主けしゆ、大悲だいひ深極しんごく地藏ぢざう尊そんの濟度さいど利益りやくによつて、靈たまを
靉姑峯まごねに通かまはして、加持あじ羅伽山らかさんの静しずけさを思おもひ、神かみを賽さいの河原かはらに遊あそばして、恆河こうが沙可度さかどの草くさ葉はを伴ともへ
り。されば六環ろくわん金錫きんせきの響ひびきを聞ききては、松吹まつふく風かぜも羨うらやます。一顆いつくの摩尼まにの光ひかりに愛あでては、汀渚みづはの石いし
も屑くずならず。只臣ただのおん等らが忠魂ちゆうこんは、ながく君きみのおん衛もとりたらん事を思おもふのみ。皆是みなれ地藏ぢざう大菩薩だいぼさつの引ひ接せつ化け
導みちによつて、こゝに偶たま見え奉たもる事ことを得えたり。然しかるに唐締たうぢは、その心こゝろさま雄むさ々むさしく、その謀はかりつたな
きにあらざめれど、頼朝よりとも卿きやうの時運じゆうん高大かうたにして、事成じやうじやうらざるをいかにせん。わが君きみ日ひ今いま、石田いしだ太郎たうらう主ぬし従じゆ
を攀つかち給たまひぬれば、復讎ふくしゆの本意ほんい遂いとげ給たまへるに、なほ頼朝よりとも卿きやうをも打うち滅めつほし、御父おんちち義仲ぎぢゆう朝臣あそみの志こゝろを繼つ
がんとし給たまふは究きまめてよろしからず。速はやかに思おもひ止とどまり給たまはずば、却かへつて彼かの人ひとに辱はづかしめられ給たまひな
ん。今は是こゝれまでなり。はやく山林さんりんに隱居いんきよして、先昔せんせきの菩提ぼだいを弔なぐさひ、後世あつちのいとなきこそあらまほし
けれ。」と夫婦ふうふひとしく諫かんめけり。義高ぎかうつくづくと聞ききて、頭かぶをうち掉かり、「汝等なんぢらがいふ所ところことわりある
に似にたれども、勝敗しょうばいは時運じゆうんにあり。始めより事ことの成ならざるをおしはかりて、仇あだを撃うつつの志こゝろを轉ころかせ
んは、子こたるものの道みちかは。田横たわうは孤島ことうに没まつ、豫讓よじやうは戰衣せんいを刺さす。勇士ゆうしのする所ところかくぞあるべき。
もし事成じやうじやうらずば、われ死しなん。復讎ふくしゆの事は思おもひと、まりがたし。汝等なんぢらふたゝび諫言かんげんなせ。一ひとといきま
きて承引うけひく氣色きしきなかりしかば、行氏ゆきうぢ又また申まうすやう。一ひと君きみの御心ごこゝろにしては、さ官つとまはするも理ことわりなれど、爲久たけひさ

こそ憎みてもなほ憎むべきの仇なれ。鎌倉殿は、平家の悪逆を討ちて宸襟を休め、敕命を稟けて、先君を追討し給へるものを、これさへ仇として狙ひ撃たんと計り給はば、反逆の罪脱れがたけん。加旃頼朝卿は、武運めでたく坐する事、いにしへにも例を聞かず。日本國の總追捕使を賜はりて、宇宙を掌握し、事みなおもふに任せざるはなし。伯夷叔齊が清潔にならひ、餓ゑて首陽の山に死すとも、彼を撃たんは天に逆ふならずや、いにしへにも、天に順へば生き、天に逆へば亡ぶといへり。努思ひ止まり給へかし。一といはせもあへず、義高忽地氣色變り、一やをれ行氏、汝頻りに頼朝の時運を稱す。平家富士沼の水鳥に驚きて、不覺の濃りを得たりしも、實盛が口のさかしきより起りて、自方の英氣を折きたればなり。不吉の諫言聞くも忌はし。と焦燥ちて、つと身を起し砂を蹴たて、原の山路に歸らんとするを、行氏、棧橋忙はしく左右の袂に攜り著き、なほ諫めんとしたりしかば、義高怒つて袖引きはらひ、刀を抜いて丁と砍れば、今までありつる夫婦が形、煙のごとく滅えうせて、湖水のかたに鶯鷺の、とも音遙かに聞えつ、天はほのふ、と聞けわたり、山の袂しろくなりにけり。

第十三套

正忠孤忠幼主に仕ふ

荻戸心烈乳汁を賣る

竹川因幡介正忠は、いぬる壽永二年の秋、主君猫間光隆卿、木曾義仲に面叱せられ、憤りに堪へ
ずして自殺し給ひ、その家忽地に滅亡せし程に、光隆の舍弟新太郎光實は、木曾を狙ひ撃たんとて、
洛を忍び出で、家隸等はおのがさまんゝに離散しつれども、正忠ひとり託孤の精忠を竭すに、その妻
雀戸、また夫に劣らぬものなれば、夫婦かひんゝしく、光隆の後室八重垣の方と、幼君鈴稚丸のおん
供して、嵯峨の片ほとりなる大井のわたりに赴き、こゝにさゝやかなる草舎を造りかけて、しばし身
の居きどころとして、艱苦の中にはや三年あまりを経て、貯祿物も既に竭きたり。加旃正忠に老母
ありて、年の齡七十にあまり、目は言ひて耳は聴からず。立居さへ自在ならぬに、一子千江松なほい
はけなければ、是彼手足まつはりにて、萬便なきことのみなれば、夫婦が忠孝尋常に過ぎたれば、い
よ、志を移すことなく、君に事へ親に事へて、身の貧しきを憂しとせず。然るに八重垣の方は、年
頃積るもの思ひに、いといたう身も細り、光實は出でたまひしより、絶えて一たびも信れなかりしか
ば、これにつけ彼につけて、心ほそきもいやましつ、牡鹿鳴く嵯峨野の秋と詠じけん、うら悲しさを
身ひとつにして、長き病著に臥し給ひしが、病口にまして首の上るべうもあらず。齋師も肩根をよし
て、「おこたり果てなん事、覺束なし。」と密語くにぞ、正忠、雀戸は、いよ、安き心なく、數もあらぬ
夫婦が衣服、太刀、髪飾りなど、調度に至るまで、清却して棄を調へ、眞珠、熊麿、人参、す

べて價貴きを厭はず、療治等閑ならずものせしが、頃しも十月の下旬なれば、且聞の風も寒けきに、物みな清り竭してせん術なし。只此の上は神佛の冥助を禱る外あるべからずとて、夫婦迭代りに、清涼寺の釋迦堂、清水寺の觀世音に參詣し、八重垣の方の疾病平癒なさし給へと、禱る外他念なかりけり。しかるに、鈴稚は僅か四歳にて坐すれば、いまだ乳房を放れ給はぬから、母上は久しく病み體ひて、近曾乳汁といふものは露ばかりも出でざるに、なほ縁はりて懷を放れ給はず。是れさへ病人の鞠くるしくおほさめとて、葎戸はさまゝに鈴稚をいひ慰め、賺しこしらへ極いとりて、外面へ走り出づるに、いたくむつかりて、いよ、母君のほとりを放れたまはざれども、なほいかにもして、おのが乳汁を進らせんとするに、生ものしりて、口のほとりへもよせさし給はざりしかば、正忠も葎戸もこの形勢にせんすべなく、かかりせばはじめより、葎戸が乳をもて養育み奉るべかりしに、母君の手して育て給はば、慰むすがなりなんと八重垣の方の宣はせしも、今に至りては仇となりて、俄頃につききはなち奉り難し。もし乳ばなれにて、稚君さへ病みもわづらひ給ひなば、いかに悲しかりなん、と思へばいとゞもしほ草、ほしもあへぬは涙なる。正忠が一子千江松も、鈴稚と同庚にて、いまだ母の懷をはなれず。貧しき家に主従が、差別もなく住ひすれば、よろづに心おきのみせられて、晝は終日、夜は通宵、葎戸が信やかに看病しまゐらするを、八重垣の方は、しばく推辭みて、「わが病著

はきのふけふの事にしもあらず。果てしなき介抱を、餘りに信々しくものせられては、却つてこゝろ
苦し。且正忠が母刀白は、目も盲ひ、立景も自在ならぬを、われ故に等閑ならんはこゝろにあらす
只わらはが事はうち捨てておけかし」と宣はするに、刀白は心ざま正しき趣なれば、かかるとき、物
の用にもたため身の、愁ひに長生して、子にも嫁にも、一層の艱苦をよさする事よとて、葎戸に介抱
せらるゝを憂ひ、をりノ、夫婦のものにいふやう二人の子として親に不孝ならじ、と思ふはざる事な
れども、譜代重忠の主君、かく妻々しくなり給ひて、危急存亡の秋に當りては、親をも看みまべから
ず。われは老いくだちて、餘命いく程もあらぬ身なり。只後室のおん病著、又稚君のおん御末、い
かにおほすらんと思ひやれば、御身夫婦が心の中さへ掻草られて、一日もはやく往生せまほしきぞか
し。かくまでもおほ母を頼らんとて、給事を疎かに致さば、速かに縊死して、後やすすせんものか」と
と教訓す。正忠、葎戸これを聞きて、「なでうわが母の教へをもて、主君を等閑にいたすべし。かくま
でに思ひ給はば、何事も御心の隨にてあるべし。かならずしもよからぬ事をして、正忠等を不孝の子
とはいはし給ひせ」と應へしかば、刀白は歡びて、とにかくに夫婦が手助けせんとして、掻い擽りつゝ、
曲突にふし茶折りくべて、飯を炊き、薬を煎じ、或は孫の千江松が守などして、痛きことのみな
れど、これをとゝめなば、又その心に恃らんかと、明白にはいひがたく、世とて時とて形なやてひと

りの親に孝養を、盡すにも盡されぬ、貧しき家には人しらぬ物思ひのみおほかり。」と夫婦面をあはしつゝ嘆息し、こゝろで泣きて日を送るに、八重垣の方は日に／＼病はおもくなりて、頼みすくなく見え給ふに、この二三日は薬の價も塌きにければ、正忠夫婦はいよゝ思ひ屈まりて、潛かにこの事を打議らふに、荻戸がいふやう、「人の壽命に限りありとも、湯薬をも進らせず、見殺しにしたてまつらんは遺恨ならぬ。わが身今、五ツも六ツもわかかりせば、花街に身を賣りても、些の金は調ふべきに、捨つる操のそれよりも、よるとし浪こそ悲しけれ。よき思案はおほさずや。」と膝さしよして問ひにければ、正忠聞きて頭を傾け、「健男のいと猛きも、智あるものの才學にも及びがたきは只金なり。さればとて、御身を宿遊女などにせば、われはとまれかくまれ、主君の恥なり。かかる事はいひも出で給ふな。塞に夫婦が孤忠をば、神も佛も憐みたまはざるにやあらん。慾に惑はぬ身にも、今ほしきは瑤錢樹なり。」と思ひ逼りて日來には、似けなき愚癡も哀れなり。荻戸も又目を押し拭ひ、「とばかりにては果てしも侍らず。つく／＼思ひ廻らすに、わが身幸ひに乳汁の出づるに、お乳嬢母に身を賣らば、川竹の瀬にたつほどにあらすとも、手を空しく居らんにはますべきなり。さは覺さずや。」といへば、正忠聞きもあへず、うち點頭き、「よくぞこゝろのつき給ひし。鈴稚君は、生ものしりてそなたの乳汁は飲み給はず。千江松も、はや四才なれば、飯粒にて養育まば養育みなん。そなた爰にあらすなりて

は、いよ、便なかるべけれど、今の難儀には思ひかへがたし。法隆寺の門前に、免口婆々として、遺嫁給事なんどの媒妁して、生活とするものありとぞ。われ彼所にゆきて相議ふべし。しかりともこのこととを、八重垣の方にしらし奉りては、病著の障りともなり、又わが母もいと々懶くぞ覺すべきに、期に臨みては、とも角もいひこしらへなん。まづこの事は意中に秘め給へ」と齋語けば、葎戸そのこ、ろを得て、しのびノ、に示しあはし、さて正忠は免口婆々が家に到りて、件の事を談合するに、免口婆々これを聞きて、「わが方にも些の心あてあれば、遠からず回答し侍らん」といふに、頼もしく思ひて歸りつ。その次の日は、八重垣の方の病著、すこしおこたり給ふやうにて、この四五日、いかに勸めても善だにとり給はざりしに、今朝は半盞の粥を啜り給ふから、葎戸等は枯槁の雨にあふ心持して、欽ぶこと限りなく、正忠は清水寺の觀音に詣でてこのよろこびをまうし、そのかへきに、免口婆々が家を訪うて、昨日の回答を聞かんと立ち出でぬ。かくて葎戸は八重垣の方の枕方において、肩腰を擦りまらせ、江湖上の物がたりして慰めまうすに、千江松が外面にて、いたく泣く聲したりしかば、八重垣の方首を擽けて、「やよ葎戸、千江松がいたくむづかるに、とくゆきて乳を飲ませかし」としばし宣ふに、うちもおきがたくて走りのき、やがてわが子を竹縁に引き揚げつ、膝に掻き乗して乳房を衝ますれば、小春の唇さし入れて、彌生のころよりも暖かなれば、千江松は乳を吸ひなが

ら目睡まどろみつ。と見れば山緒ある武士の内室、清涼寺詣すとおほしくて、行轎たごりのものの戸をほそやかに開か
し、従者夥將ともごとあまたるて、渡月橋をねりのくにぞ、荻戸遙かに見おくりて、「一世にある人の物語は、かくこそあ
りけれ。わが主八重垣のおん方も、昔のさまにて在さば、やは芳り給はじものを、掌たぶらこかへす人の世
の、榮枯えいこは春の花よりもなほはかなし。」と獨りごち、また來しかたを思ひ出づる折しもあれ、免口婆
婆はいばばはしく走り來て、荻戸にいふやう、「お乳の人に_ひ出で給ふは御身なるか。きのふ主人のたのみ聞え
給ひしに、幸さいはひよろしき方のおはしまして、頓とんに召めひ養かへんと宣ふかし。こは東にて權勢ある殿なる
が、近會京上ちかごころさつうりし給ひつるに、この曉あかつきは、鎌倉へとて歸りたまふ。よりて東へ將て下らんとまりの
彌行やぎやうかんとならば、目今伴いまいまたりひはべるべし。」といふ。荻戸これを聞きて、先づ千江松を障子の内に抱き
入れて、そと枕をさし、舊もとの縁えん類るいに出でて、免口婆々に對ひ、「給事の事は、豫かねて思ひ定めて侍れば、
時ときをしも嫌きらはねど、折をりふし夫は東山へゆきて、いまだ歸り來ず。しばしまたし給はば、身の暇いとまをまう
して参り侍りなん。」といふを婆々聞きもあへず、「いな、さる緩やかなる事にはあらず、御身も見給ひ
つらん、目今清涼寺へ詣で給ひし夫人は、すなはち乳母を養へんと宣ふぬしなり。」轎のりものの内より御身
を見そなはして、「乳の間も廣からぬに、年紀としごころもよし。購あひなひ得て伴ひ來よ。」とて、家臣何がし殿に仰せ
しかば、かく案内し進まゐらするになん。しかれば、しばしも猶豫いうよし難がたし、直ただに談合し給ひね。」といひか

けて外面を見かへりつゝ、さしまねくに、忽地行装したる武士、年齢は四十ばかりなるが、従者二人將てすゝみ入り、葎戸にいふやうに「故ありて今主君の名はしらがたけれど、免口とやらんがいふごとく、此度鎌倉へ將て下り給ふなれば、いと火急の事なり。いよ、参らば、身代は十金と定めて、金は残りなく遮與すべし。何事も心忙はしき折なれば、手形は後日に人をもて受けとらするとも、そは遅きにあらず。とく／＼参り候へ。」と聞えしらし、籠て懐中より、小判十兩をとり出でて、縁頼におきならべしかば、霜に後る、菊の花の、一輪開けるに異ならず。葎戸はこれを見て思ふやう、この事はかねてより、夫も覺期のうへなれど、常にかはりて歸りの遅さよ。さればとて待たんとせば、この談合はと、のひがたし。寔にこの十枚の金は、八重垣の方の齡を延ぶる仙境の菊花水、不死の神藥なるものを、夫婦親子の愛惜も、忠義にますことやはあると、よわるこゝろを鬼にして、彼の人にへりけるは、「目今ももうせしごとく、夫は家に侍らねど、かくいそがして身價を賜はするに、推辭み侍るべうもあらず。家には久しく病む人ありて、その藥の價にとて、わが身を賣り侍るかし。それさへ悲しきに、姑はいといたう老い疲ひ、わが子はなほ幼くて縁由を聞えおかんも便なし。今にもあれ、夫が歸り來てかくとしる心やりまでに、一筆遣し侍る間は、許し給へかし。」といふに、彼の人點頭きて、「それ程のことは何か厭はん。用意あれ。」とゆるされて、葎戸は隔はしく、彼の金をとつて

障子の内に走り入り、力なき手に搦り流す硯の墨も婦夫も、うすき縁とうち歎き、涙ににじむ紙屋紙の、かひなきことを縲りかへし、筆にいはする暇ごひ、姑のことがわが子のこと、書き遣すさへ悲しさの、寒がる駒とともに裂く、小刀ならぬ筆の鞘、よしあししらぬ稚兒の、寐貌もこれが見をさめかと、思へば斷るに剪りかぬる、書簡卷きこめて封皮して、今朝食み残す白粥も、今この糊とならんとは、思ひかけねどその人の、思ひかけよと貼りておく、出居の柱はゆがみても、直きこゝろは神ぞしる。千江松が腰に著けたる守袋をそと開けて、伴の金を押し入れつゝ、只一重なる附紐に、しがらみつくる恩愛の、口にいはいはぬ生別れ。屏風かい違りさし覗けば、涙ははふり落つれども、泣かじと袖を噛すや／＼と、睡り給ひし面影の、頼みすくなきを見れば猶、涙ははふり落つれども、泣かじと袖を噛み締めて、屏風引きよし走り退き、窗の横口に背を曝す、姑のほとちかうゆきて、その耳に口をさし寄し、一母御よ、何事かはしらず、正忠殿にあはんとて、人の詣來給ひたるに、歸りの遅きも心もとなし。妾は山田村のほとちまでいゆきて、歸り給ふを見ば、いそがして伴ひ來侍りなん。家の内なりとて心を緩し、斷離れたる席薦の縁に足をからまれて、地炕へ轉び入り給ふな。八重垣の方も稚君も、よく睡りて坐するに、千江松さへ假寐して侍るなれば、この間にこそと思ひ侍り」といひしらすれば、刀白點頭きて、「わが事は思ひ過ぐし給ふな。正忠にあはんとて人の來ませしとは、こゝろもと

なき事にはあらぬか。あなわが子は何してをるぞ。朝夕の薪炊はさらなり、お主の看病、孫が介抱、走り使も嫁ひとり。ならばぬ手技に熟る、身の、懶しとせぬ心操が、痛ましきよ。」と見かへれど、見ることかたき旨日の、これを別れとしらざれば、いと苦しき葎戸が、あけていはれぬ辭別「たゞ健かにいつまでも、夫の孝養うけ給へ。しばしなりとも物思ひを、さしまるらせじとていひこしらへ、欺き申す不孝の罪、免し給へ。」と合はす掌に、神ならぬ身の餘念なく、刀白が爪繰る珠數よりも、嫁は涙の玉ごます。かくて葎戸は外面へ立ち出でて、彼の武士に對ひ、「さこそ待ちわび給ひけめ。誘給へ。」といふに、彼の人は、準備の轎を、折戸の内へ掻き入れさし、「是れへ。」と指挿に葎戸は、「憚りあれど見苦しき、わがざま隠せと宣ふを、推辭み申すは心つきなし。許したまへ。」といひかけて、乗り移る後先より、はや掻け出す下部が息杖。脛響に千江松は、忽地に目をさまし、葎こゝろにも不審しければ、慌忙き走り來つ、「母御いづ地へのきたまふ。わが身を伴ひ給へかし。」といふもまはらぬ舌ながら、走りめぐりて母親の、袖に携りてよ、と泣く。免口婆々さし寄りて、「かかることもあらんかとして、今來る途にて拾うて來たり。是れ進らせんに大人しう、留守し給へ。」と賺しこしらへ、袂より出す落栗を、さゝやかなる手に受けて、莞爾と咲めるわが子の顔を、見る葎戸は笑栗の、毛毬もて胸を刺さるゝごとく、涙見せじと引きおろす、簾もかこの鳥が啼く、東へとてゆく首途とも、し

らで見送る稚兒を、迹にのこんの雪と見し、花はむかしの嵐山に、思ひあはする栢山の、四鳥の別れかくやとて、翅しをれて托かれゆく。後の歎きはいかならん、推量られて哀れなり。

評に云く、石田爲久奸智をめぐらし、義仲を欺きて臣附せしより以來、その恩頼朝に勝れたること遠し。しかるを射てこれを殺す、その謀甚だ穢し。こゝをもて悪報つひに脱れず。また義高に欺かれて、貌姑峯山中に元を授けたり。見つべし、作者、二ツの湖水を以て人心の清濁と、因果の淺深を示すこと、頗る奇なり。亦云ふ。正忠、葎戸が誠忠は、更に愚が評をまたずして、懲惡、勸善の素意、顯然、かつ鈴稚、半熟りて、葎戸が乳を飲まず。若し、しからずば正忠その妻を活らんや。

賴家阿闍梨怪鼠傳 卷之七 (後編中冊)

東京 曲亭主人著述

門人 魁菑癡叟批評

第十四套

金を喪うて替女老を泣く
玉を埋めて窮士起行す

悲しきかな、四才の稚兒、愛別と離苦とを曉得らず、扱も正忠が一千千江松は、纒かなる落栗もて
免口婆々に賺され、歸るときしも定かならぬ、母親を放ちやりて、彼の栗を只管に愛でたきものに思
ひしかば、「これをもて行きて、祖母さまに見せばや。」とひとりごち、忙はしく折戸の内に走り入らん
としたりしが、誤つて門方なる溝の中に轆び入り、半身漬薄れになりて、よゝと泣きつ、這ひ出でん
とするに、水は深からねど蹈みこみたる足を抜き得ず。いと術なかりける折しも、麥蒔き果てて立
ちかへる農夫等、この形勢を見て慌忙き走り寄りて、千江松を引きあけ、左右の腋へ手をさし入
れ、引提けて竹縁のほとりに將てゆき、「母御よ、とく出で給へ。この兒は只今、溝の中に轆び墮ちた

るを扶けあげたり。やよ／＼と呼ぶほどに、刀自聞きてうち驚き、「おい。」と應へて、漸くに身を起し、柱にとりつき障子に傳ひ、頓にはたちも出でかぬるを、農夫等は待ちわびて、千江松を縁頼に扛きする、呼びすてて皆歸りけり。そのとき刀自は探り出でて、千江松が猶すゝりあけて、泣くをしるべに掻い探りよすれば、腰のあたりはすべて泥に塗れ、その臭きこといふべうもあらず。刀自はこの景迹に呆れ果てて、まづさま／＼に刺り慰め、さていふやう一日頃はひとり遊ばぬに、折あしくて母は家にしもあらず。よしなや、漫行きしてこの悞ちはいたせしならん。かく裳の濡れたれば、さぞな冷うあるべきが、被更もなきをいかにせん。今にもあれ、母が歸り來てこれを見れば、いたく腹たててうちも慙らしもせでやおくべき。かさねてはこゝろして、溝のほとりなどへは立ちなよりそゝとはいへ草履も紐つけて穿かするものを、只ひとり遊ばするは、みな親の心つきなき所爲にして、そなたに無理き事はあらず。よしや、わが眼は見えずとも、彼所の川原へもて出でて、せめて裳の泥のみは洗ひおとして得させんに、暫しこれを被よかし。」とおのが紙衣を脱ぎ捨てて、後むかして解く著紐に、結び提けたる稚兒の、守袋に葎戸が、遣せし金のあるべしとは、しら櫛の杖探り取り、紙衣を聽て打ち被せつゝ、泥水たる、を引き提ぐる、三ツ身の衣の汗れ目も、孫にめのなき恩愛の、いと深けれど豫て聞く、淺瀬のかたへ歩み寄れば、流るゝ水も大堰川、音いと々恐ろしき、鬼ならなくに婦

の留守、いとも危き洗濯の、老の拳の力なく、押し洗ぐ衣をあら川の、浪のまに／＼巻きとられ、こ
は何とせんと周章し、忙はしく杖をもて、其所か是所かと掻い探れど、委みなき瀬に押し流され、か
へらぬ衣も後悔に、思ひくしたる顔の色は、流るゝ水よりなほ青く、「かかりせば葎戸が、歸り来るま
で待つべきものを、只その人の手助けせん、と思ひしよりこの懊ちして、缺代へもなき拾の、あは
れ孫には今宵より、何を被すべき、うたてや」とひとり言して忙然たり。かくてあるべきにあらざれ
ば、刀自は徒らに杖にすがりて、舊の縁頼に這ひのほるを、千江松は待ちわびて、「祖母さまよ、衣を
洗うて給はれかし。とく被せ給へ」といそがせば、刀自はいとゞ面目なく、「さればとよ。由なき所爲
して、そなたの衣は川の瀬に、押し流されて往方しれず。爹も姉も歸りなば、いひ譯もなか／＼に、
汗れたる髓にておかば、ともかくもして葎戸が、被すべかりしを慰ひに、角を飲つて牛を殺し、枝を
擘めて樹を枯らす。皆是れ祖母が恨りなり」と、暗語ぶるを聴かず蹶跳し、「なぞて衣をもて來給は
ぬ。寒し／＼」と聲ふり立てて叫ぶるゝ、刀自は胸苦しく、「さぞ寒からん、堪忍せよ。風ひかせじ」と
と掻きよせて、懐あけて抱き入るゝ、折しもあれ、竹田四幡介正忠は、清水寺のかへさ、免口婆々
を訪ふに、彼家にあらざれば、なほ彼方を索ぬるとて、思ひの外に時をうつし、やゝわが家に歸り來
つと見れば葎戸は居らずして、母刀自只ひとり端ちかう出でて、赤裸なる千江松を、かき懷きたる

も訝しければ、やがて其のほとりに參りて、「正忠只今歸りて候。八重垣の方はいかに坐すらん。今朝にかはらせ給ふ事もなくおはしますにや。葎戸はいづ地へのき候ひし。千江松はなぞて大人しう留守を致さず、立居も意にまかし給はぬ、祖母さまに抱かれたる、あまり甘やかし給ふから、いつまでも手をはなれず、去年には劣り候。」といと苦々しけにいへば、刀自聞きて、「いな、孫を叱り給ふな。これが抱かる、には物がたりあり。八重垣の方はそなたが出で給ひし後、鈴稚君を抱擁し給ひてなほ覺め給はず。嚮に誰にかありけん、正忠にあはんとて來ませしかば、葎戸は山内村の邊まで行きて、そなたの歸るやいなやを見んとて、走り出でしが今に歸らず。千江松は母の迹を追ふたるにか、門方なる溝に墮び入りて、泥に塗れたるを、近鄰き人の來かゝりて、卽て引きあげて給はりつれど、只一ツなれば給衣の汗れたるを、被せておかんが痛ましさに、前なる河原にて、洗ひ清めばやと思ひて、もて出では出でたれど、忽地水に巻きとられ、悔いて詮なき悞りを、聞えしらするも面伏なり。日來そなたも葎戸も、孝行にして給はるから、起居にさへ心をつけて、「何事もすな。」といひ給へど、せめて些の手助けに、成りなん物と辛うじて、人竝ならぬ老が身の、たましく事も毛を吹いて、疵を求めし鈍ましきよ。」と只顧羞ぢたる物がたりを、正忠は聞きもあへず打驚き、「千江松が給は、失ひ給ふとも惜しむに足らず。もし御身悞つて川へ鞭び墮ち給はば、千悔すともおよびがたし。この後はみづ

から誠めて、川原などへ出で給ふべからず。かく危きに近づき給ひて、恙なきは正忠等が僥倖なり。緯の起りは、目も見え給はぬ母と、孩兒に家を成らせたる津戸が不覺より出でて、母の懐ちは露ばかりもなし。さるにても八重垣の方の、久しく覺め給はざるぞ心もとなき。鈴稚君もろともに、熟睡してや坐する」といひつゝ、立ちて奥在りたる、屏風搔い遣りさし覗けば、無慮やな、八重垣の方はいつの程にか緯切れたり。ともしらすして鈴稚は、冷き乳房にとりつきつゝ、正忠を見て莞やかに、うち睨み給ふも淺ましく、こはノゝいかにと驚き膠て、涙を拭ひあへなくも、死したる人を抱き起し、聲を限りに呼び活けつゝ、藥を口にさしいるれど、はや程経ぬれば驗も見えず。刀白は今、正忠がただならぬ呼聲に、慌しく千江松を懐よりかきおろして、屏風の内に探り入り、かくと聞くより腰たたす。空しき枕にとりつきて、よゝと泣けば千江松も「祖母さま寒し冷し」と赤裸にて走り來つ。友音あはする鈴稚は、何事とも思ひわきまへねど、主従親子もろともに、われから濡る、袖の雨、晴間はたえてなかりけり。けにや終にのく、路とは豫てしりながら、きのふけふとはしらざりし、正忠が哀悼は、比へていはんやうもなく、苦しき胸をうつ蟬の、もぬけの骸のいつしかに、變り果てにき母君の、懷慕ふ鈴稚を、引き退くればなほ泣聲も、たかき卑しきおしなべて、母子一世の別路は、とゞむるよしもあらざりき。刀白はいよゝ泣き沈み、せめてわが眼の見ゆるならば、末期の水も進ら

せて、唱名す、め申さんに、睡り給ひぬと思ふから、浮世の夢の覺め給ふも、見えす聞えす人はかく、老いては存命ふかひりなし。老少不定といひながら、老樹の刀白は朽ちもせで、若樹の花をこゝろなく、散らす無常の嵐山、歌により詩に作るとも、わがこの歎きは述べもつくさじ。況いて身まかり給ふ君の、息の内なる一言も、遣し給はねばいと、なほ、口をしくこそおぼすらめ。たとひ命に限りありとも、なぞてわが身をかはらして、迎ひとりては給はらざる。朝な夕なに繰る數珠も、おもふに任せぬ玉の緒は、さてもつれなき世の中に、神も佛もなき事か。と老のくり言くりかへす、片輪車よるべなき、母の歎きを慰めかねて、正忠は鼻うちかみ、「今朝のみは八重垣の方の、おん顔の色もよくて、薔などす、め進らすれば、こゝろよく受け給ひしを、今さらおもへば、燈の、消えなんとするときに、しばし光をますといふ、常言もあるものを、こゝろもつかで清水へ、詣でたるさへ悔しきに、葎戸が我を呼ぶとて、漫に出でて歸らぬは、いと淺はかなり。」と咳きて、思はず向上ぐる出居の柱に、一封の書翰を貼りて、書きおきの事と寫しつ。「こは訝し」と亡語ち、身を起して引き剝がし、封押し切つて始め終りを讀みも果てず仰天し、「惜しむべし葎戸は、葉の價に身を賣りて、鎌倉へ、赴くよ。」といふ聲のいと高きに、泣き沈みたる刀白も頭を掻け、耳を側て、「正忠、そは何とかいふ。葎戸は主君の爲に身を賣つて、東地へ赴くとて、書き遣したるものありとか。あな痛まし、豫てより夫婦

談合せし事ならば、我が身にも聞えしらし、告別して出で行かざる。忠義に捨つる身なりせば、それをわりなく留めはせじ。老いては事に備めりとて、わが子も婦もかくまでに隔つるならめ」と怨すれば、正忠いと本意なくて、「こは物體なし。なでふ母御をあしく思ひて置したるにて候べき。もし給ふ如く、八重垣の方のながき病著に貯祿竭きて、藥を運らするよすがもなく、わが妻にも乳はあれど、それも種君は飲み給はず。所詮乳人に身を賣りて、些の金を調へばやと、葎戸がいふにまかして、夫婦しのび／＼に給事すべき媒介をかたらひしが、八重垣の方はさらなり、始よりわが母に、この件のことを告げざるは、しばしが程なりとも、物をおもはし奉らじとて、示しあはせし夫婦が誠も、みな仇となりて候ひし」と聞えしらすれば、母親は袖もて見えぬ目を拭ひ、人を恨むは老の愚癡。婦が忠義もいたづらに、その身價は調ひながら、今般の益にもたざりし、と告げもやりなば葎戸は、悔しくもあらん歎きもせん。耳は疎くとその遺書の、聞かまほしきに讀み給ひぬ。とく／＼といそがされ、又巻きかへす水葦の、迹も涙に見えわかねど、正忠聲を高やかに、

「心あわたゞしけれど、一筆遣し進らし侍り一掬も免口婆々とやらん、たゞ今参りつること、鎌倉武士の威權あるが、この曉には故郷へとて旅だつに、乳母を將て下らんとて、それが家隸なりける男を嚮導して、直に談合せよとぞいふなる」とにもかくにも、御身の歸り給ふをまちて、事を定

めんとするに、東の間も許さず、もしそのいふにまかし侍らさば、忽地事の破れとなりなん。けふにしあらずば、一トたびは別れ奉りなんものを、怒ひに見もし見られもし侍らば、いと名残のをしかりなん。老いくだち給ふ母御のこと、なほいはけなき千江松がこと、鞠くるしければ審にはまうさず。生まれ出でてより以來、わらはが懐ならでは睡らざりし、夜寒き今宵はいかにかしやすらん。健かに見えても、あしき蟲ありと、醫師のいごつることを忘れ給はで、よろづのたうべものななどに、心して勸り給へかし。爰は毎月に灼る侍りつるに、今より後は怠りがちにぞあるべき。ころは神無月なれど、彼はなほ拾一ツに侍り。綿入れたるものを、綴りおぼして被せんこ、ろがまへに、さ、やかなる裂どもを掻きあつめて、戸張せしま、に侍り。母のなき子と憐みて、もし縫刺て得させんといふ人もあらば、ともかくもして被せ給へ。野干玉の夜の鶴、子を思ふ苦しきは、大堰川よりもなほ深く、夫に別る、かなしさは、嵯峨野のおくの鹿よりも、なほやるせなく侍れど、何事も忠義に思ひかへて侍るか。さて身價は十枚と定めて、残りなく受け得て侍れば、千江松が腰に著けたる守袋に秘めおき侍り。」

と讀みくだすに、刀白はいよ／＼耳をさし寄し、「あなおほつかた。今一遍その條を讀みかへし給へ。」といへば、正忠かさねて、

「身價は十枚と定めて、残りなく受け得て侍れば、千江松が腰に著けたる守袋に秘めおき侍り、これをもて、八重垣のおん方に薬をまゐらし、もし餘りあらば、稚君には日來ほしがらせ給ふ鳩の車、母御には久しき願ひにておはする、黒谷の血脈を乞ひ得て進らせたまへかし、遠く東路へ赴きては、天とぶ鷹の翅ならで、信せんことはかりがたし、とおもへば八百口の落の眞砂、かぎりなくも物くるほしくて、筆のはこびもおほつかなきまでに、かくなんぞ」と讀み果つれば、刀自は頻りにはふり落つる、涙と共に咳き入りて、噎と叫びつ、轉輾べば、正忠慌てて扶け起し、「心持はいかに坐する」と、問へども刀自は應へせず、とり携る様にして掻い繰りながら正忠が、刀の鞘をしかと奪り、閃りと抜いて我とわが、吭へぐさと突きたつを、灸所は少し外れたれば、大事の深手に漬る、鮮血は泉の涌くがごとし。正忠は思ひかけず、母の自害に周章し、吐曉と抱き留むれども、とゞめかねたる今般の苦痛、見るに忍びず聲をふるはし、「こは何故にか自殺し給ふ。物にや狂ひ給ふらん、淺ましや悲しや」と叫びつ呼びつ身ひとつに、思ひ罷れて介抱も、届かぬ孝子の哀傷に、なき疲れて瞻り居たる、鈴稚丸千江松も、この景迹に驚きまどひ、「あなたと叫びて正忠が、左右の袂に携り著く。刀自は絶えなんとする息の下に、「やよ正忠。老老れて物に狂ひ、自害すとな思ひ給ひそ、千江松が衣服の紐に括り著けたる守袋に葎戸の身價のありともしらす。河原へも

て出で、裾の汗れを洗はんとて、推し流されし十枚の金は、嫁が忠義も水の泡、あはれはかなき後室の、末期の益にたたすとも、むじんに捐てはわが子と嫁に、再び向くべき面なさに、刀に伏して稚君の、介抱も後易く、わが子に忠義を盡させん、と思へばこそかくはなれ。されば葎戸がをらすなりて、君もその子も稚きに、男の手にて養育まば、母さへ絆となるならば、曾子とやらが孝ありとも、諸葛とやらんが忠ありとも、兩つながらよくせんや。凡そいきとし活ける物、命惜しまざるはあらざめれど、長生すれば恥多しと、いにしへ人のいひけんも、今わが上に思ひしる。前世の悪業にや、死にたうても得死なれず、正忠夫婦が忠難も、わが身なかりせばかくはあらじ。只速かに迎へとり給はれかし、と三年が程、讀み奉りし彌陀經の、功德なれば後の世も、思ひやられて悲しけれ」とかき口説く言の葉も、常なき風に誘引はれて、絶えなんとする玉の緒を、繋ぎかねて正忠は、數回歎息し、「君家の艱みに身も瘠せて、思ふに任せぬ母の事、尊閑なりし反哺の孝、頼むは死出の山鳥、熊野の牛王は汗すとも、主親の爲とのみ、誓ひし事も徒らに、老少無常迅速の、理のみは偽りの、なき世なりけり。神無月いと時雨れてわが袖の、朽ちぞ増る」と打嘆けば、刀自は苦しき息を吻き、「稚君は何所に坐す、孫は何所。」と呼びかけて、見まくほしきに掻い探れど、見るも山なき盲目の、たどりかねつゝ、闇きより、くらきに歸る常世の旅、永き別れも過去未來と、わかつ袂に離切れて、撲地と軋

べばもろともに、よ、と泣く稚兒を、正忠左右に引きよして、六すぢの涙四ツの袖と、共に五臓を絞
りけり。且くして目を押し拭ひ、稚君も千江松も、わが身と共に一つ日に、三人の母に捨てらるゝ、
生別死別とかはれども、かはらぬものは恩愛のみ。逝きにし人の迷ひ給はん、われも迷へり是れはど
て、いかなる過世の悪報にて、忠義の爲に葎戸が、煎じ詰めたる身價は、延年不死の良薬とも、なら
で流轉の海に入る、ゆくへも絶えてしら浪は、よすれど歸る時しなき、母の自殺もこれゆゑと、思へ
ば金はわが爲に、讎敵にてありけり。」と悔いの八千たび百千たび、身の憂き限りかき口説く、いと
不覺の歎きなりの。かくて正忠は、志を勵まして、母の脱ぎ捨てたる紙衣をとつて、千江松にうち被
せ、鈴稚丸を勦り慰め、屏風引きめぐらして、八重垣の方と刀白が亡骸を置き、さて近鄰き里人を語
らひて、その夜二ツの棺を送り、心ばかりなる追善の佛事をいとなみて、初七日は過ぐしつゝ。さらぬ
だに慰むかたもなき宿に、幼き主従は母を慕ひて泣きくらし、泣きあかす程に、正忠いよ、せんすべ
なく、家をば人に售り與へて、些の路銀をと、のへ、鈴稚丸を懐にし、千江松が手を引きて、東路
へ旅だちけり。そのころ、葎戸が往方もしるべく、光實の在所を索ねて、縁由を告げ、是彼に談合
せば、若君を養育むたつきなからずやはと、俄に思ひたちけれど、洛を出でていく日もあらぬに、鈴
稚の咽喉に物出で来て、飯粒も吐裏に納まらず、乳房ならではと思へど、貰ふべき便もなく、日に

日によわりゆくに胸くるしく、藥餌に路銀を遣ひ失ひしかば、いよ、救ふべき策もなく、いと口をしと思へども、千江松に乞兒さして、ながき冬の夜をあかしかねつ、山鳥の尾張路を過り、武士の矢矧の橋は渡れども、渡るにかたき世を潛びて、三河に鄰る遠江の、荒磯に狎れし友千鳥、なく聲細る鈴稚は、たのみすくなく見えにけり。室に是れ苦中の苦、正忠が孤忠さらに比なかるべし。されば子を視ること親にしかず、臣を知ること君にあり、當初光隆、金の猫をもて彼を購ひたる、亦うべならずや。

第十五套

天龍川の上に忠臣節婦に逢ふ
富田の旅館に重忠竹川を賞す

葎戸は果敢なくとも、十枚の金に身を賣りて、彼の武夫に誘引はれ、轎に扛き乗せられて、ゆきとゆく程に、堀川の邊なる衛門の内に到りつ。こゝなん重忠の宿所にて、件の武夫は家隸榛澤六郎なりけりとば、後にこれをしれり。このとき重忠の一子重稚は、年僅かに二ツなるに、乳母なるもの俄頃にほかに病み臥し、剩へ鎌倉より御教書到來して、「重忠速かに下向致すべき。」由を命ぜらる。よつて榛澤六郎は、菟口婆々を呼びて縁由を告げ、「早く乳母を將てまゐらば、辛苦錢は乞ふに任すべし。」といふ。

に、菟口婆々その心を得て、總て葎戸を没引す。しかるにその日、重忠の内室嫩子は、洛のなごりに清涼寺へ参詣せしかば、途にてそのことを聞き、渡月橋の邊にて、竊かに乳母に参るといふ女を見るに、いと寒しけれど、由緒あるものの妻なるべく見ゆるに、彼ならば重稚に冊けおくともよろしかりなんとて、直に榛澤に仰せて、葎戸を召し養へさしたるなり。されば重忠都に上りしこと、義高追討の爲なれば、敵に聞えん事を厭ひて、世に披露せざりけり。こゝをもて榛澤は、葎戸に主君を名告らす。さて堀川へ將て來りて、まづ彼のをうなに浴さし、髪を梳らし、新しき衣服一襲を與へて、綺羅やかに装はし、この夕より重稚の乳母に参らせたり。元來葎戸は心さま怜愍しく、信ある女なれば、重稚早く馴れ親しみ、嫩子もいと愛でたきものに覺えて、舊の乳母にも勝れりとす。憐むべし、葎戸は八重垣の方身まかり給ひて、わが身價は良薬に、換ふる由なく、妬も、自殺して失せぬる事は夢にもしらざりし。その曉に旅立ちて、蹈みもならはぬ東地へ、主の供して下り、月に洛の山を見返れば、嵯峨野の方へのゆく鷹も、對に離れてわれぞ泣く、涙氷りて朝霜に、稚兒の寐覺を慰めつ、行轡に日數經て、道なほ遠江なる、天龍川のほとりまで來にけり。をりしも十一月の上流にて、川々は涸る、頃なるに、思ひの外雨三日雨降り水高ければとて、左右なく船を出さず。重忠ぞひなく富田に駕を駐めて、天龍川のおくを待ちぬ。浩かる所に重稚俄頃に發熱して、次の日より瘡瘡の氣

色見えしかば、重忠は心ならずも且く保養させんとて、なほ富田に逗留せし程に、痘瘡の日子も漸くにたちけり。「さらば翌あさての頃は、必ず川を渡さん。」とて従者等にも、「その準備をせよ。」といふに、各旅宿の徒然を懶く思ふなれば、歡ぶ事大方ならず。大人すらかくの如し、況いて重稚は長き旅寢に倦きて、「彼處へゆかん。其所へ伴へ。」とてむづかるに、葎戸も賺しかねたり。嫩子は、屢重稚の泣く聲するを聞きて、「さこそわが夫のいぶせく覺すらめ、婢どもゆきて慰めよ。」といふに、悉皆心得果てて、重稚の側へ参りつ。暫しこそありけれ、いひ慰むる事などもおなじ容なれば、ながく稚きを樂しまするに足らで、むづかる事まず／＼甚し。折しも一の婢、慌しく走り來りていふやう、「目今外面に、をかしき物たべの参り侍り。その打扮親子かと覺しくて、編笠深くしたる男、行囊を脊負うて、その上に年三ツか四ツ許りなる稚兒をかき乗し、又同じ程なる稚子に烏帽子めきたる頭巾を被せ、鼓を打ちて舞はし侍るに、庭門に呼び入れて、鬨さば、いと興ありなん。」といふを、葎戸聞きもあへず、「その者を呼び入れ給へ。」といへば、皆羣立ちて走り出で、庭の折戸を押し開き、招き寄すれば葎戸は、重稚をかき抱き、風あてさせじと細やかに、あくる障子のかみならぬ、身は只假初の闕窺に、冬の柞の一樹たつ、霜の柱を踏みわきて、父が鼓に朗詠も、訛言なれど手振よく、

大底往時心總苦

就中腸斷是秋天

と白香山は口順のど、秋よりもなほ堪へがたき、北山下風烈しきに、霏々と降る雪は、鷲毛に似たり
稚兒の、挿頭す扇の手も龜み、閃りと飛んで散亂す。痛ましきかな鈴稚は、驛路に病みて竹川の、背
にかゝる患難に、正忠は路費も盡きて、千江松に舞舞ひさし、露露をつなぐたつきとは、定めなき世
のならひにて、ならはぬ旅も東路や、驛家に宿札打つたりける、秩父二郎重忠が旅館の庭に呼び入れ
られ、うたひつ舞ひつなかくに、彼此人は慰むれど、慰めかねし親と子が、心ぞ思ひやられたる。
荻戸は障子の隙より見れば、怪しや物たべの稚兒はわが子に似たり。こは訝しと思ふにぞ、胸まづ轟
くを押し鎮めて、と見かう見れば千江松なり。笠にて面をかくせども、紛ふべくもあらぬ夫の背に、
負はれ給ひし鈴稚は、いといたう憔悴へ、見しには變る面影は、故こそあらめ間はまほし、わが身の
こゝにある事を、しらでや來つると悶えつゝ、心の中も舞の手も、ともに亂れをうち離す、鼓の調べ
いとせめて、奏で果つれば婢等は、笑壺に入りて散動みたち、二世わたりにあれど、雪天に寒きも
厭はで、幼き者のよくこそしつれ、物とらせん。」といひかけて、皆裏に入りければ、荻戸は押し拭
ふ、涙見せじと微笑みて、「稚兒が舞の手に慰められ、重稚丸は目睡み給ひぬ、潛かに臥房へ入れ奉ら
んに驚かし給ふな。」といふに、衆皆點頭きて、間毎の襖開け閉てに、心してなほ奥の間へ、人相告ぐ
る鐘の聲、諸行無常をわが上と、いさしら雪の降りはえて、願あはぬ風を寒み、庭に立在む千江松

は、漕々と泣きて父を見かへり、「爹爹ちちやうまいたう寒く侍り。しろきものの降るになぞ、いつまでかこ、に居給ふ、とくのき給へ。」と引く袖を、わが子の頭にうち被けて、「疾勞つひれもせめ、寒くもあらん。只今ただいま御達ごたちの物給はるに、しばし待てかし。」といひ諭せば、背にも又ひとり、鈴稚丸すずわかまるは雪より先へ、消えろがごとき泣聲なみこゑに、ゆり賺せどもをやみなき、吹雪ふきゆきは襟えりに吹き入れて、鳥肌とりはだとなる主従親子しゆうじゆうおんこが、馬うまほしけに待ちわぶる、雀色時過ぎすずめいしどきすぎがてに、暮れなんとすれどなほ明き、庭白妙にほしろたへになりにけり。浩かる所にところ、雀戸すずめらどは、菓子積かしづみみたる折敷せしきを携へ、さらりと聞く障子の音おとに、正忠まさただおもはさうち仰ぐ、笠の内かさのうちにより面おもてをあはし、こは吾妹子わがむすめともいひかねて、籬芭まがきの陰かげに躲かくひつ。さすがに羞はづる襦袢じゆばんの袖そでに、拂はらへど解とけぬ六ツの花はな、四ツになる子は眼まなこはやく、「あな母御ははごよ。」と走りより、のほらんとすれど縁側えんがはに、つかへる胸むねと胸むねくるしき、雀戸すずめらどは外々ととしく、「さてもうたてき稚兒わかごや。いかに物のほしきとて、わらはを母ははとはなめけなり。鎌倉殿かまくらどののおん覺おぼえめでたく、北條ほつじゆう、和田わだにも劣おとり給はぬ、重忠しゆうたすぬしの嫡男ちやくなん重稚丸しゆうわかまるの乳母ちのちなるに、その手に乞食こつじきさすべきか、由よしなき事をいふものかな。」と叱しかり退のくるは傍輩はうばいに、聞きかせじと思ふ親おつの慈悲じひ、とは知らずして千江松せんえまつは、伸び上のびありつ、引き留とむる、衣つまの褌ふんどしに發はと薰かる、留奇南ととぎなんもたえて聞きわけぬ、いはけなければ有理ことわりと、思ふに母は心よわくて、引かれし隨まに揮かりも放はなさず、「やよ幼わかごきものよく聞きけかし。舞まひの褒美ほみに賜たまはする、この菓子かしはほしからずや。花はなもあり紅葉もみぢもあり、い

と美しきにたうべよ。」といひつ、折敷をきしつければ、千江松は頭をうち押り、「菓子も餅もほしう侍らず、母御よ乳を飲ましてたべ。」といふ聲高しと葎戸が、心をおくに人や聞く、洩らさじとすれど袖にさへ、漏るゝはおのが涙なり。さればとて愁ひに、心よわくてはと思ひかへし、涙紛らす聲をふり立て、「憐愍かくれば馴れくしく、物いひ態のけにくきよ。汗れ垢つくその手もて、寄りな著きそ。」と引き拂へば、拳放して仰様に、撲地と帳びて泣く聲も、たたまくほしき雪の松、半ばは雪に埋れたり。葎戸叶と走り下りて、扶け起し抱き寄り、吹き温むる手の甲は、熟柿に似たる霜瘡に、剪らぬ爪さへ幼稚くて、劬勞するよと掻き揚ぐる、産毛のまゝの項髪も、むすばぬ夢の心持して、我を忘るる恩愛に、思ひ迫りて泣き沈む、その一聲ぞ誠なる。正忠も忍びかねて、編笠脱ぎ捨てつ、笹の陰をたち出でて、葎戸にいふやう、「はからざる再會、歡ぶに堪へたれど、身の變しきを省みれば、迷の恥なり。名告りあはんも面ぶせなれど、爰にて遇ふは若君の命竭きさせ給はぬなるべし。元來夫婦離別の事は、主君の爲なれば歎くに足らねど、そなたの遣せし身價は、筒様々々の事によつて、わが母誤つて大堰川へとり落し、剩へ八重垣の方は、その日はかなくなり給ひしが、母も又自殺してうせ給へり。首尾は如此々々なり。」と締密かに説きしらし、又いふやう、「かかりしかばわが身ひとつにて、碓君と千江松を養育しては、嵯峨野に住みも果てがたく、そなたの行方、光實のおん在所を

しらんとて、坐に彼の地を旅だちたれど、生得質弱き鈴稚君、乳ばなれにて疳の蟲出で、道路病み患ひ給ふ程に、さらぬだに野へ薄き路銀もすでに遣ひ果し、わが兒に乞食さしながら、日に歩み夜に宿り、爰までは來つれども、稚君は口中に物出で來給ふから、飯を押し潰しなどして進らすれど、それさへ咳き入りて受け給はず、乳汁あらばと思へども、こは貰ふべきよすがもなし。八重垣の方世にいまそかりし日は、そなたの乳さへ飲み給はさりし稚君も、餓ゑては人を選び給はず、往來の婦を見かへりて、その懐へ指さし給ふ飢渴の責に、介抱の術も竭きて死を待つのみ。夥の金に身を賣らし、人の乳母となしぬれば、わがものならぬ乳なりとも、いまの危窮は忍びがたし。義理を捨てて義理に稱ふ、夫婦が信は神ぞしる。とく／＼その乳を、稚君に進らせ給へ」と一五十疋をわきてぞかき口説く。律戸は聞く事毎に思ひかけざる憂き數の、丈夫の物がたりに、いと胸のみ塞がりつゝ、手の放たれぬ瘡にて、涙も拭ひあへざりしが、やうやく頭を擽け、「わがうへには月日も照らしたまはず。守袋に遺し置く、金さへ夫婦が仇となりて、母御に自害さしましたる、身の罪こそいとふかけれ。男の手して幼き、主君とその子を介抱し、憂き旅をし給へば、百折千磨の患難を、さこそと推量して侍り。今の主君重忠ぬしは、理非明斷の良將にて、善を擧げ惡を退け、慈悲ふかくおはすれば、折をうかゞひて名告りしらし、古主と夫の上を告げて、頼み聞えなば猫間の家、再興の便宜も爰にあ

あんな、と思ひながら給事して、いく日もあらねば、思ふのみにていひも出さず。宜ふ如く、十枚の金にこの乳を賣りては、わが子なりとも私には飲ましがたければ、生死の際におはします、鈴稚君には何事も、思ひかふる恩義はなし、そを憎しとて離たれ、罪なはる、とも厭ふべきかは、いさ津戸が懐にて温めて進らしなん。あな痛ましや。」と鈴稚をやから抱きとり、襟かきわき、乳房を口に齧ますれば、千江松はこれを見て、姐しと母に纏り著き、「なぞて松には飲まし給はぬ、わが物なるに」とむづかりて、抱かれ給ふ鈴稚の、附紐穿つて引き除くるを、「そはせぬものぞ」と言ひ諭せど、善悪もしらぬ稚兒は、猶縁はりて泣き叫ぶ。「左も右もはる乳を、一ツはわきてわが子にも、飲まさる、事ならば、この煩惱はせぬぞかし。聞きわきて、彼の菓子をたうべよ」とと謙せども、只いな、と跣躑し、掻い遣れば又携り著くを正忠あらやかに抱き除け、「こは嗚呼なる患者かな、汝幼くとも侍の子なり、君臣上下の禮儀をしらまや。常言に一寸の蟲にも、なほ五分の魂ありといへり。我儘すればとてさすべきか。」といきまきて威しの拳ふり揚ぐれば、なほ聲高く泣き叫ぶ、親はこれにも心おかれて、屢見返る障子の内より、「津戸々々」と呼びたつるは、傍輩の聲音なり。「をい。」とはいへど立ちかねて、心せく程鈴稚は、乳のひびきに頃日の、微音を忘れて餘念なく、絞り寄して飲み給へば、千江松はいよ、悶えて走り寄りつゝ、鈴稚の襟上應んで仰様に、引きかへせば鈴稚は、乳房放してわ

つと泣く。これや冥土の阿鼻叫喚、餓鬼道の苦しきも、かくやと許り正忠も、とゞめかねてせんすべなく、わが子を捉つて膝に引き布き、刀引き抜き胸前を、ぐさとつらぬく一トゑぐり、叫苦と魂銷る幼兒より、母はわが身を刺さるゝおもひ。庭の白雪忽地に、鮮血に染みて時ならず、散り布く紅葉に彷彿たり。折しもあれ障子の内にけはひして、猫間の忠臣竹川因幡介正忠、怨敵義高が妖鼠の術を破るべき奇薬を投れるこそ神妙なれ、秋父重忠對面せん。」と呼ばはれば、一度に乗す銀燭の、障子にうつりて白晝の如し。葎戸あはよと立たまくせしが、思ひ定めて走りも退かず。正忠はなほわろびれたる氣色なく、徐かに刀を拭ひ納め、縁頬に進み寄りて、前面を信と瞻望ぐれば、裏より障子をきと開かし、二郎重忠野袴に行駈して、黄金作の太刀を佩き、威風凜凜として端ちかく立ち出づれば、右に嬾子ありて、重稚を舊の乳母に抱かし、左に挨拶六郎ありて、手に銀の壺と稚兒の破衣をもてり。そのとき重忠は、正忠に對つていふやう、一姓名豫て聞き及べど、おもふに勝る夫婦が忠信、絆の眞末は彼所にありて審に聞けり。しかるに正忠鯁忠にして一子を殺せし事、人情にあらずといふ、後世の議論もあるべけれど、こは已むことを得ざるにこそ。易牙が桓公に佞媚して、其の子の肉を食ましめたと、年を同じうして語るべからず。嗚呼この夫にしてこの妻あり、されば千江松があへなくも命を隕せしこと、いと憐むべく惜しむべしといへども、時に當つては亦是れ家邦の忠死なり。われ近曾

洛にあつて、義高退治の計畧をめぐらし、江家の博士に就いて、密かに彼の術を破る奇方をしれり。その方七歳未滿なる男子の瘡瘡の癩を取り、又七歳未滿の男子、その心の臟の血をとつてこれに合はし、猫間の重寶たる金の猫の眼を塗りて、彼に進むれば、その術忽地やぶれて再び行ふ事を得ず。かくはあれ、いと得がたき藥劑なれば、遂に望みを絶ちたるに、時なるかな、わが子重雫、近曾瘡瘡を患みて將に愈えなんとす。こゝに漸くその一藥を得たれども、生きながら幼兒の心の臟とらんこゝに不仁これより甚しきはなし。絶えてこの奇藥調ひがたしと思ひつるに、思ひきや、正忠今その子を殺して、破鼠の良藥成就せんとは。且金の猫は糞に爲久が鎌倉殿に獻りしを、光實に返し與へ給へり。抑重忠不意くも、深く猫間光實に頼まれて、わが家に養ふこと久し。且重忠が竊かに洛に上りしも今又俄頃鎌倉へ立ち歸るも、義高退治の事に預るを以てなり。さるにても、年暮うして松柏の操を知り、家哀へて忠臣の志を守るとは、御邊夫婦が事さかし。彼重雫が瘡瘡の癩は、藏めてその壺にあり。それく」といふに心を得て、椋澤六郎進み寄り、件の壺をさし出せば、正忠これを取つて茫然とうち咲み、「はからざりき。光實主は、重忠どのの庇みを受けて鎌倉にいまし、津戸又その家に給事いたさんとは。設し千江松が心血をもて、義高が幻術を破らば、孩兒が忠我は父に勝れり。歡びさふらへ津戸」と勇む良人に勵まされ、泣かじと袖を噛み締むる、妻の歎きは有理と、おもふ心

を鬼にして、正忠はかひなくしく、袖搔ぎあけて千江松が、疵口より手をさし入れ、絞り入れたる壺の中に、ありと聞くなる天地の、雨にはあらぬ血の涙なみだかかれとてしも産まざりし、親の手自子を殺し、その血を取つて忠臣と、誦めらるゝ身の薄命、これも過世の悪業か」と、夫婦目と目を見あはして、縁頬に置く壺を、榛澤六郎受け捧げて進らすれば、重忠夥數回押し戴き、小を以て大に易ふ。千江松が非命の死は、猫間の家再興の礎なり。義高を退治せん事、今は實に難からず。その績を賞せん爲に、律戸は今日より身の暇をとらするなり。鈴稚の乳母となりて、夫婦忠義を竭されよ。」と仁あり義ある暇の賜。律戸聞きて膝をすゝめ、仰せ歡ばしく侍れども、参り仕へていく程も侍らず。身價を返しまるらする、便なきをいかにせん。」と推辭むけしきに、嫩子は、向よりたもちかねたりし涙を、や、拭ひ納め、「否々、その事は心易かれ。いぬる日わが身清涼寺の賽かへりまうしに、具したる下部が、大堰の邊にて、拾ひたる物あり。」と告げしかば、堀川へ歸りて後、これを見れば稚兒の衣にして、紐ひもに著けたる守袋まもりふくろに十枚の金あり。ぬしあらば返せかし。」といひしらして、榛澤六郎に預けおきたりしが、向に夫婦の物語にて、そは律戸が身價なりと猜したり。彼の金既にわが手にあれば、露ばかりも施したる恩義はあらず。しかれば頃日重稚を養育ましたる報いには、千江松が像見の衣に、添へてとらする十枚の金、迹懇あとんんころに弔ひてよ。」と説き示せば、榛澤聽て律戸が返す恰あはせに、亡骸を裹むにあ

まる袖の露、守袋もけふは又、佛を頼む母親の、その身價は六道銭、四ツになる子をひとり清る、
死出の山吹色見えて、移れば變る死顔も、是れ見果めかと、逆縁ながら、親の廻向も阿彌陀佛、導き
給へと念じけり。濕り勝なる夜の雪の、深き惑ひを解かんとて、重忠はつと身を起し、「破邪の良藥手
に入りたれば、鎌倉へ走せくだり、なほ光實と事を議りて、義高を討ちとるべし。正忠夫婦は鈴鐘丸
を介抱して、我が従者に打雜り、潛びて彼の地へ來られよ。心得たりや」と勵ませば、正忠は「阿
と應へつ、葎戸に注目し、禁むる涙の玉の屑、雪にも瘡せる庭の梅に、春を契るや開蓮の、天龍川
に時を得し、實に不思議の陽報なり。」

評に云く。この巻殊に忠臣節婦、義士孝子の上を述べて人情を竭せり。但動らすれば、文辭戲
曲に類すること多し。こゝをよみて、その語路野なりといへども、おのづから雅教、讀む者をして倦
かざらしむ。目貧家の身賣、花街に趣かずして乳母とす。奇にしてますノ、妙なり。

頼豪阿闍梨怪鼠傳卷之七後編中冊 終

賴豪阿闍梨怪鼠傳 卷之八 (後編下冊)

東京 曲亭主人 著述

門人 魁菴癡叟批評

第十六套

巧兒月下に各志をいふ
棒澤營中に淫かに客を迎ふ

文治三年の二月も、まだ三日四日といふころ、残んの雪も解けそめて、梅ほころぶる野末の藪に、白きはすがれ紅は、二三輪にして閉きもそろはず、山は遠く聳えて日の没ること遅く、水は近く流れて柳まづ暮れなんとす。林に歸る鳥は、月を戴きて友を呼び、北へとてゆく鴈は、霞の綱に罹るか
と危まる。日没り果てては、寒さ冬よりも堪へ難く、風はなほ地を吹きて、馬蹄の迹ふた、び氷るなるべし。相模國に諸越と呼ぶ原はふるき名所にて、歌どもあまたあり。こゝにをる野獸の乞兒等は、晝は彼此人の側そばに携りて錢を乞ひ、あるは金門さし覗きて、飯のあまれるを乞ひ、夜は樹の陰、草の上を臥所として、いかなる夢をか結ぶ。主ある犬には劣りたる身も、命はなほ惜しきものにて、荒蕪

におく霜を防げども、孫長が高き志には似ず。駝を任けて枕とはすれど、顔回が樂しみはしらす。
飯桶といふものに、飯の餓して餓せる、魚の餓れて肉の破れたる、何くれとなく受納め、飽くときは
懈り、餓うれば求食り、彼の寒苦といふ鳥の、夜も明けば巢を造らんと鳴くものから、明くればはや
忘るゝに似たり。されば片岡山の旅人、臥見野の老翁がたぐひ、その後は聞えず。世に棄てられて羞
をもしらぬものどもなれば、かくても一生をおくり果つべう思ふにや、いと思かなり。こゝに少許
引き入りたる小松の間に、怪しげなる草舎あり。竹をもて柱とし、藁を垂れて壁として、僅かにひと
りを容れつべき末黒の蓑を折り敷きて、臥密の牀とも見ゆるかな。さは囃の住家得たり顔なるぞ、
この徒が中にては、頭だちたる者なるべし。甲夜の程は、おのゝ野火を焼きて餘寒を凌ぎ、圓居
して來しかたを問ひ慰め、彼所の乳母が物をしみなる、其所の主人がいかめしけなる、人のうへわが
うへ、心のゆく隨なる物がたりして、果ては魚屋の門に引き捨てたる、鱒日黒といふ魚の、頭つき合
はしたるが如く、打臥したる藁の隙を漏る月影は、いぶせくもあらぬにや。鼯の聲は時ならぬ蟬の鳴
く音に似たるもをかし。浩かる所に、桐の葉の紋著けたる提灯を、影の奴隸に棄さし、野袴に長き兩
刃を帯びたる武士、南の方より出で來れり。この人は是れ別人にあらず、重忠が郎黨榛澤六郎なり。
當下榛澤は、臥したる丐兒をと見かう見て、そと注目すれば従者等、圭の意を得て、矢庭にご兒を引

き起し、提灯をさし寄せて、「出でよ／＼。」と急がせば、丐兒等は大きい驚き、「こは何事ぞ。」と、ふ聲も、寐惚れて夢の心持せり。榛澤六郎微笑みて丐兒等に、「ふやう、」汝等ふかくな駭き恐れそ。秩父殿の仰せを稟け、潛かに問ふことありて來れり。原是れ私の趣意ならねば、等閑におもふべからず。そも汝等が名は何とかいふ、亦何によつて野鼠とはなりたる、審かに告りしらせよ。時宜によりて不意き幸あるべきぞ。」と説き示せば、衆皆畏みてつゝゐるなり。時にひとりの丐兒、年紀は二十四五なるが、土埃に面ぐるのみして、海松の如くかき垂れたる破衣に、藁の索を帶として、腰の下胸の上に着毒ふき出でて、尖胸國の夷めきたるが、おそる／＼這ひ出でて申すやう、「僕は鼻聲の布哲八と呼ぼれて、元來鎌倉米町の商人、某が愛子なり。一子なれば父母の寵愛世に勝れ、鵠の車、竹の馬、よろづの翫弄物なんど、いへばさらなり。仙餅、團子、砂糖餅、一聲泣く時は前に列なり、二聲泣けば四輪を懸かし、いふこと毎に成らざるはなし。かく甘やかに養育まれて、米は飯櫃より生くものとおもひ、錢は錢箱より生くものと思ひ、四恩のおふけなきをしらず、三綱の鴻なるをしらず、學ばすれども學ばず、讀ますれども讀まず。商人の家に生まれて賣買の事に疎く、おのが儘に生育つ程に、忠孝の道を踏み違へて、大磯通ひに親の身代を誦ひはたし、親族の強意見も、馬の耳に吹く風と聞きながし、色と酒とに身をもち崩すを、なほ憎しとも思はぬにや、二親ながらのく末を思ひくし

て身も細り、はかなくなりては、一周忌も間はぬ間に、早生まれたる郷に得住ますなりて、家さへ人に賣り、うかれ出でたる不孝の天罰、忽地報いし難病は、足ることしらぬ樽酒の、むかしの榮華は夢と覺めて、正銘打つたる薦被り、貫ふ陶の糝粉汁も、身はなきものと思へども、物を食はねば脾胃なくも、あるにかひなき懶さを、憐み給へ」とかき口説く、涙に涙を咬りまぜて、いと長やかに物語れば、故澤聞きて嘆息し、「子を養ひて教へざるは、これ親の懐ちなり、教へてこれを學ばざるは、その身を愛せざるなりと、司馬溫公のいへるぞうべなる。世の人多くは愛に溺れ、手に教へずして孝を求む。これ愛するに似て愛するにあらず、實はその子を棄つるなり。然はあれ、父子の道は天性なり。縦ひその父、父たらずとも、子はもて子たらずばあらじ。不賀八が不孝の罪、かくこそあるべけれ」といひ懲らす。その次なるは法師なり。剃りて再び伸びたる頭の毛、枝葉に似て斑なる、髯は野老に異ならず。こは色中の餓鬼大將、梵妻ぐるひ、般若湯に、師父の遺物の檀那の布施も遣ひ果せし伽藍堂。更に五戒はたまたずして、只一蓋の傘に、三界无安と悟りを開きし、土守の郷隨得寺の角鄰坊とご名告りける。これらを宗徒の草野物として、手長の愚念太、色狂人の抜太郎、空拜の四九次郎、股火の阿太郎、橋の木の川太郎、掃留搜の犬總太、風拾の爪之介と、おの／＼名告る來し方の、懺悔にいと小夜深けたり。榛澤は丐兒等が、長物語をつくら、聞きて、奴隸にもたせし提灯の、火光

にそれか是れかとて、見れども索ぬるその人に、似たるは絶えてなかりしかば、呵々とうち笑ひ、揃ひも揃ひし瘦犬ども、汝等に所用はなし、活けるかひなき身を聊たば、近曾求めし新刃の刀、試して見ん。と云ひもあへず、鯉口四五寸抜きかぐれば、「呵呀」と叫びてもろ共に、掌を摺り、窺へたる足を曳き、崩れ立つたる周章は、八聲の鶏に駭きて、夜行の百鬼忽地に、銷えて迹なくなる如く、右往左往に逃げ失せたり。なほ臥したるもあらんかとて、榛澤は彼此を見かへりつゝ、樹がくれたる草舎に借と目を著けて、ひとりの奴隸を招きよし、密語けば心を得て、次第に耳をとりかほし、點頭きあうて窺ひ寄せれば、梢を渉る鐘の音に、月没り果てて松風の、調べも春の聲ながら、寒さは更に近えまきる、草木も今を睡り端、驚かさばやと席戸擦り、跳り入る奴隸等を、内より丁と搔い毟み、撲地と投ぐるを飛び踰えて、組み伏せんとて競ひ懸るを、内にては寄せたてじと、或は搏り退け衝き倒し、練りうたする人碌、螽の飛びに異ならず。この勇力に辟易して、後方なるはず、み得ず、色めき立つたる折しもあれ、薦簾をかき揚げて、のるぎ出でたる乞兒が打撈、身には襤褸を被たれども、目に錦鋪を羨ます、日暮飢渴に迫れども、壮裏三畧に富みたりけん、實に不敵の面魂、手に一條の提頭槍を掌つて、奴隸等を廻まへ廻らし、乞兒の小屋にも門戸あり。薦一枚もこの身の城郭、呼門ひもせず狼藉せば、高き卑きの敵手はええらまず、逆縁ながら丐兒が手の中、目に物見せん」と罵つたり。時

に榛澤す、み對ひて、まづ懐中より一枚の骨相書をとり出し、うち開きつ、左見右見て、やがて奴隸を退かし、さて丐兒にいへりけるは、「天晴力量聞きしにたがはず。縁故を告げざれば、訝しく思ふは理なり。我は秩父殿の郎黨に、榛澤六郎と呼べる、ものは是れなり。密かに主君の命を受けて、こゝに來れるは、望むところあればなり、承引かんや、いなや」といふ。丐兒聞きて冷咲ひ、「こは思ひもかけぬ。在鎌倉の緋紳多かる中に、牛打つ輩もよくしつたる、重忠ぬしより野臥の、丐兒に所望を宣はするは、そは聞ふにも及ばず。新刃を試す二ツ胴、命の所望にこそあらめ。とてもこの身は野ざらしの、果ては餓ゑたる犬を肥す、惜しくもあらぬ五尺の軀、一寸試しは腕なりとも、二寸試しは膝なりとも、天地へ返す命の人物、切柄注めて用意あれこと、應へも果てず礮と坐し、騒ぐ氣色はなかりけり。榛澤六郎は、この形勢を見てますく感嘆し、「吾々、わが望みはさる筋ならず。聞きも及びつらん、先年江州粟津にて討死ありし、木曾義仲の嫡男、美妙水冠者義高君は、正しく右幕下の堀がねにて、大姫君に妻はし給ふべかりしに、義仲滅亡のころ、御曹司は鎌倉を脱れ出で、武藏なる入間川の上にて、石田太郎爲久が家隸たる、堀江藤二光澄に撃たれ給ひき。さるによつて大姫君の愁傷大かたならず、哀慕の涙に御身もほそり、長き病著に臥し給ひて、今ははや三年あまり、四年のはるは歸れども、歸らぬ人を思ひつゝけて、近會は、病いよく重やかに見え給ふ。原是れ想ひ病みの事なれ

ば、良齋りやうさいの匙さしにもすくひがたく、輔瀉ほしゃ鐵灸てつせんきうの術うちよしなし。こゝをもちて母君政子御前ははきみまさこごごぜんいといたう歎なげき給たまひ、もし義高ぎたかに似にたるあらば、良賤りぜんを擇えらばすむて参まゐれ。そを義高ぎたかなりといひこしらへて、大姫おほひめを慰なぐさめなん。彼かの人存命ひたがひへ給たまひぬと聞きかば、姫ひめが病膏いんぼうの、なでふおこたり果はてざらんや。とて、竊おぼび／＼にその人を索たづねさし給たまふ。その事はすべて重忠ちゆうしゆがうけたまはりなるに、この諸越もろこしが原はらなる乞兒かたがに、年としの齡こゝろはさらなり、その面影おもかげさへ、彼の御曹司ごそうしによくにたるあり。と告つぐる者ものあるによつて、今夜こんやその徒ともがらを驚おどろかし、今亦いままた汝なんぢを熱視つらくみれば、御曹司ごそうしの骨相書ほすがたに露つゆばかりも錯たがはず。汝假なんぢかりに、木曾きその御曹司ごそうしなり。と稱こゝろへ、鎌倉かまくらに参まゐらば、こよなき忠節ちゆうせつならん。聞ききわきたりや。」と密ひそめき告つぐれば、丐兒かたが聞ききてうち笑わらひ、「乞食こじきの小屋こやにも富ふとはいへど、これは又餘あまりの事ことなり、寐ねて待まちつかひに果報くわんぱうはありとも、鎌倉殿かまくらでんの婿むこがねに、はかる丐兒かたがは鷹とびを鷹たか、かかる僥倖さうじんは夢ゆめにだも見みがたし。よしや面影おもかげの似にたればとて、ひとつ館たてに住すみ給たまひし良人りやうじんを、いかでか見忘みわすれ給たまはん。こは實事まこととも覺おぼえず。」と回答こたへへ果はて入いらんとするを、棲澤せいさく忙いそがしく呼よび留とどめ、「世よにも稀まれなる身の幸ちゆを、思おもひ惑まどふは愚おろかななり。義高ぎたかしく鎌倉かまくらにいませしかど、終つひに一度ひとたびも大姫おほひめ君きみと面おもてをあはし給たまはずりし。加しか旃のみたらす、汝なんぢが言行たごころなひを見るに、すべて丐兒かたがの模様もように似にず。これを木曾きその御曹司ごそうしなりといふとも、誰たれか質物にしものと思おもふべき。狐疑こぎなせそ、とく参まゐれ。」と言語ことばを竭つくしていひ諭さとせば、乞兒かたがはしぶ／＼承引うけひきて、「こは面おもぶせなる雇人やとひどかな。かくまでいは

これば脱れがたし、しからば仰せに従ふべし。いざ給へ」として身を起すに、松澤ふかく歡びて、手を揚げてさし招けば、準備やしたりけん、ほとり近き木陰より、鞍置馬を牽き出し、奴隸が負うたる柳原に、のしてさし出す狩衣は、路次の人目をしのぶ摺、うち被せてかき乗すれば、馬上ゆらりと諸手綱、拳短にかいくり毛、向蹠蹴出す従者が、橐傘、建傘、鉾、太刀持、前驅、後従の行列を揃へて、七種踏ます春の駒、足掻もよしや義高を、義高にする偽りは、偽りならぬ元の枝の、杖もて夜の露拂ひ、乗し連れたる提灯も、これや燈の花婿君、榮枯反覆面のあたり、かかる例は日本にも、韓にもあらぬもろこしが、原を真直にねりのきぬ。

第十七套

重忠大いに義高を款待す

光實進んで唐絲を鞆問す

さても鎌倉には、大姫君ふかく義高の横死を哀悼し、晝は終日、夜は通宵、思ひ忘る、隙もなく、鴛鴦の傘は涙に氷りて、相思枕上の塵、拂ふに由なく、けふと暮し翌と明して、すでに三周の忌日も過ぐし給ひしかば、「只願に尼となりて、彼の君の後の世を弔はまほし」として、父君にも母君にも、をりをり申さし給へども、「いまだ盛りにも至らざるわが女兒を、いかでか尼になすべきか」として許し給

はず。さればにや、此のはるは、姫の病著、いよ、重やかに見え給へば、政子御前は、ますく心安からず、秩父二郎重忠は、機に臨みて謀畧ある人なればとて、竊かにこれを召さして、仰せあはされたる事ありけり。さる程に二月はじめの五日の日に、重忠營中に参りてまうすやう、清妙水冠者義高君は、なほ存命へてこの世に坐するなり。曩に石田が郎黨、堀江藤二が撃ち奉りしは、眞の義高にあらず。それは唐絲が子に太太郎といふもの、主の身代りに死して、爲久主従を駄きたるなるべし。さるによつて、御曹司は今なほ恙なくて、諸越が原なる巧兒の隊に入りていませしを、重忠が家隸澤六郎幸うじて作ひ参りつと聞えあはしかば、政子御前ふかく歡び給ひて、重忠には影の引出物を賜はり、聽て縁由を大姫君に聞えしらし給ふに、姫は只、枯れたる枝に春の花を見、海月の骨にあふ心持して、氣色清々しくなり給ふ程に、傳きの女房達これを祝し、兩三日の後浴み、櫛らし進らするに、御身の瘦りこそ、初めの如くにはあらね、立居などは平生に異なる事なかりしかば、政子御前ふかく歡びおほして、鎌倉殿にかくと聞えたまへば、頼朝朝うち點頭き、さらば重忠に仰せて、義高を饗應さすべきなり。と宣ひける。かくて重忠は、饗應使を承りて、俄頃に山海の珍味をつらね、椀、皿、折敷なども萬新しきを旨とし、影の女房を給侍とし、件の巧兒を上座なる、錦の棚に引き上し、嫩子をもて、「衣服を更へ給へ。」といはすれども、巧兒はこれをうけ引かず。一我は平生路傍に睡

り、橋下に臥し、蔽れ垢つきたる衣のみ被なれたるに、かく綺羅やかなるを被せられては、巾々に膚寒かるべし、錦を被ても巧兒は巧兒なり。また羹食を被ぎても大姫の夫なれば、誰かは侮り卑しむべき。あな結氣や」と回答へつ、欄の上に足踏み反らし、蔽衣の裏引き反して、鬘を拾ふ傍若無人、餘念なき爲體に、嫩子は只呆れ果て、再びいふよしなかりけり。沿かる所に女房達は、手にノ、桃飯珍膳をもてまゐりつ、所せきまで巧兒のほとりに居ゑたり。寔にこれ飯は精を厭はず、膳は細きを厭はず、相模に名だたる秦野の蘿蔔、鎌倉飯は更なり、武藏なる足浦の長辛螺、牡蠣、淡菜貝、伊豆の浦の打蛇、柄川酒、上野には刀根川の鱒、下野には稻葉の牛蒡、常陸の椿魚、上總なる大瀬浦の鯛、下總の浪子、紐苜、眼黒鯉、すべて關の八州の野菜、海味を調理しつ。あるは上盛の飯器に盛り、或は九曲の酒地に漉へ、美を盡さずといふ事なし。そのとき秩父重忠は、烏帽子の掛緒結びあけて、長袴の裾引垂らし、廊より繞り入り、小太刀を脱ぎて出居の方に上躡し、いぬる元春の始め、木曾殿討たれ給ひしところ、御曹司は不覺に營中を潛び出でて、行方もしられずなり給ひき。されば木曾殿朝敵となりて討たれ給ふとも、御曹司は鎌倉に在して、その事に興り給はず。將堵君にて坐するなれば、鎌倉殿にもいと不便におほせしかど、往方定かならざれば、索ね出しまゐらせん事、總追捕使の威勢にもすべなくて黙止し給へり。よりに重忠仰せを受けて、しのびノ、に御在所を索ね奉り、

かく意つがなくて歸り入らせ給ふ事、こよなき僥倖さいはいなり。加之しかのみならずし重忠饗應使しやうおうしをうけ給はり、荆婦つばにて候嫩ふたは子は、婚姻こんいんの介添かいだへをうけたまはり、今日こんにち黄道吉日わうだうじつなれば、大姫君おほひめぎみを妻あまはしたまふべしとて、専らもっぱその用意よういあり。重忠夫婦しゆちゆうふうふが面目かみめ、これにます事やある。豫かれて定められたる婚姻こんいんの時刻じきは、酉とりの刻こなるに暮くる、には程ほどあるべし。まづおん箸はしをとり給へかし。」といと恭うやしく申すにぞ、丐兒かたあき聞きて冷笑あざわらひ「父義仲ぶぎちゆうが武功ぶくうを媚そねみ、閒者かんじやをもて行おこなひを亂みださし、朝敵あすてきの名を負おはして、討滅うちほろほしたる頼朝よりちゆうがはらきたなさ。錦にしきの囊ふくろに毒石どくせきを裏つめる如ごとき、泉雄いづゆ老奸らうかんの主しゆうに仕へる重忠ちゆうちゆうが賢かしこがほは、一ツ穴あななる老狐ふるうらね、王莽わうまうが謀ぼう師し阿滿あまんが股肱ここうに勝まされり。打揃うちそろうたる主従しゆうじゆうが穢けれたる響應きやうおうは、えこそ受けじ。」と罵のりもあはず、忽たちまち地はたと躓ひちらせば、飯いひは座中ざちゆうに散亂さんらんし、轉まろび碎くだくる磁器じぎの、反はねかへりて重忠ちゆうちゆうが、額ひたひをはつしと打うち破やぶれば、あなやと驚おどろく嫩子ふたはこと、もろともに立ち騒さわぐ、女房にようばうたちを重忠ちゆうちゆうは、尻目しりめにかけておし留とどめ、懐ふところなる紙かみをもて、徐しゆかに額ひたひを押し拭ぬひつ、いふやう、「鎌倉殿かまくら豫かて重忠ちゆうちゆうに宣のたまひつる事あり。『義高ぎたかを丐兒かたあの隊むれに入れて、いくその艱苦かんくを受けさしたるは、頼朝よりちゆうが悞あまちなり。何なににまれ彼かが意こころに悖もとらず、よく款待もてなせよ。』と仰おほせしに、衣服いふくを進まらすれども脱ぬぎ更かへ給はず。椀飯わんはんを進まらすれども箸はしをだにとり給はず。かくまで不興ふきやうを被かる事こといと畏かしこし。女房達にようばうも驚おどろくべからず、わが妻つまもいと不覺すずろなり。」といひ懲こらすにぞ嫩子ふたはこは猶なほ口くちをししく思へども、夫がつとの言語げんご重おもやかなるに頭かうべを低たれて默然もくねんたり。かかりしかば女房達にようばうは、

缺けたる折敷を拾ひとの、席上を掃ききよめ、是彼運びかへして、次の間へ退出しかば、重忠かぞねて嬖子にいふやう、「一口不興を被るとも、冤もかくもして慰めまらせまば、仰せを棄けたるかぢもなし。近來わが家に交加する何かしの子の、いと稚くてよく舞ふものあり、豫ていひしらしたる事もあれど、今ははや参るべき比なり」といふ。その言いまだ終らず、取次の武士、慌しく廊の方に來りて重忠に對ひ、「呼ばし給ひたる者共の参りて候に、召さるべうもや」といふ。重忠聞きて、「そのもの呼び入れ給へ」といそがせば、こゝろ得果てて走りさる。去る程に、竹川因幡介正忠は、その妻葎戸と共に、風流びたる打撈し、鈴稚丸には頭巾戴らし、項に山猫舞はす箱を懸けさして、廊よりねり出でつゝ、廣縁に居ならびて、夫婦は拍子をととり、聲をあはし、

女三の宮の翠簾をもち出でては、戀する人の媒やすらん。馬の命婦の膝の上にねぶりては、翁丸も遠く追はれけん。五つの徳を備へては、千々の鼠の穴に躲るゝ、王氏がうらみ、津陽が悲しみ、こゝに傳へて山猫の、山めぐりするを見給へ。

と唄へば、舞はす鈴稚の、手ぶり稚くいと興あり。可兒はこれを估と見て、「あな思はしき傀儡師や」とく退出よ」と焦燥てば、重忠莞然として正忠等に對ひ、「傳へ聞く、義仲朝臣はその性猫を誇み給ひしとぞ。かかれば、いま汝達の御曹司に憎まるゝも故なきにあらず。これを又重忠が心つきなきなれ

ば、怪しむべからず。とく／＼退き候へ。といふに、正忠夫婦はふかく望みを失ひ、一推辭み奉るにはあらねど、これなる小兒は久しく病みわづらひて、漸くにおこたり果てたれど、氣力いまだと、のほす。しかるに鎌倉殿の瑠君を慰め進らせんとて召さるゝ事、こよなき面目なれば、難きを嫌しこしらへて参りつるに、舞はしも果てず退出よと、宣はするはいと本意なしと眩けば、巧兒これを聞きて呵々とうち笑ひ、「實にたま／＼來つるものを、無下に歸さんは不便なり。物とらせんに近くまるれ。」と呼びかけられ、望む所と正忠夫婦は、鈴稚丸を扶け引き、義高をにらまへつゝ、聽したる氣色もななく、前み寄るを巧兒はなほほとり近く呼びよしつゝ、足を曳ばして鈴稚の胸さかすと蹴たふせば、「あな」と叫びて仰様、撲地と倒るゝ幼子の、項に掛けたる箱の中より、閃き落つる兜の鍔形。巧兒が足は忽地に、寝れて暫し忙然たり。正忠夫婦は、鈴稚の倒るゝを見て、且怒り、且痛ましむ、連忙てつゝ、扶け起し、津戸これを抱きあげれば、正忠は累なる恨みに堪へも思はず、巧兒に打ちて蒐らんとするを、重忠忙はしく押し止め、「こは無禮なり」と叱り退くれれば、正忠は面を切り、腕を擦りてひひらき居つ。そのとき重忠は、落ちたる兜の鍔形を把つて、巧兒のほとりにさし寄し、「御曹司見給はずや、是れなん御父義仲朝臣、討たれたまひしその日まで、插頭し給へる鍔形なるが、石田爲久に射落され、久しく深田に埋もれて泥の中にありけるを、近衛兼津の農夫等不意く掘り出し、「こは疑ふべ

うもあらぬ木曾殿の像見なり。」とて、聽て鎌倉へ進らせたるを、山猫の箱に藏めて、密かにこれを試みたるは、人の疑念を解かんとて、重忠が寸志なり。さればこそ圖るに差はぬ御曹司、足をもてこの鉄形を蹴給へば、不孝を責めてその足癒れ、争ひがたき矩度尊重、かく凄しく在すとも、かかると思議を見つるから、今は假物ならんかと疑ふものもあるべからず。さほおほさすや。」といふを、再見聞きもあへず大いに驚き、「そはわが父の像見なりとか、物體なし」と信だちて取らんとする鉄形を、重忠はやく懐に挟め、「豈此の鉄形のみならんや、兜とともに鎌倉殿より、堀引出にこそ進らし給はめ。父子の親しきも禮節あり、衣服を更め拜見あれ。それ／＼鐵子、はやく衣服を進らせよ。」といふに、鐵子立ちよりにて、衣紋揃へて更へさする、羸僕の袖も忽地に、錦色ます下襲、薄紅梅の花の兒、弟枝はあらぬ木曾殿の、一子と見えて意氣揚々、衆皆ふたゝび怪しみけり。その時重忠は、正忠夫婦を見返りて、「幼きが思ひもかけず、からき目を見て懼れけん。されど御曹司に衣服を更へし進らしたるは、汝達が續なり。祿賜はらん、遠侍へ退り候へ、長居は畏かるべし。」と心ありけにしらすれば、正忠やうやく氣色をやはらけ、「貴人のほとり近く召されし事、願ふに稀なる儘なり。よしやうち懲らし給ふとも、幼きは罪のゆるし給ふべし。見参の本意とけて候へば、歡びありて恨みなし。」と、口にはいへどやる方なき、遺恨の涙見せじとて、葎戸に注目し、鈴稚を劬りて、夫婦杉戸を

引き開けて、墨畫の松に木がくれたり。さる程に重忠が、婿君を慰めかね、思ひくしたるおももちにて、嫩子にいへりけるは、「御曹司はとにかくに、樂しからず見え給ふに、興をそへんとして興をさます、山猫廻しが悞ちの高名、衣服は更へさし進らせたれど、碗飯もめされず。かかる事には得も馴れぬ、夫婦が徒らに心を盡さんより、大姫君の琴の調べに、年來の心操をしらし給はば、猛き御曹司の御こゝろも、いかでか和ぎ給はざらん。」婿の席に臨み給ふまで、對面は許されずとも、翠簾を隔てて玉琴を操侍らし給はずや。」と、まうしす、め候へよ。われ又用意の俳優あり、とくく。」といそがせば、嫩子聞きて訝しみ、夫のこゝろ得がたけれど、問はまほしさも問ひかねて、聽て奥へぞまゐりける。且しありて、垂れこめたる几帳の内にははひしつ、はや擦持らす琴の音に、重忠はつと身を起し、端近う立ち出でて、「ものどもおせし。」と呼びかけつ、舊の所にかへり居れば、庭の樹陰に人ありて、「うけたまはりぬ。」と回答へけり。さる程に猫間光實は、櫻澤六郎とともに、鐵の鎖もて唐絲をいたく縛め、諸折戸の方より引き立て来て、紅梅ふかき高縁の、あなたへ撲地とおし居ゑたり。この胖帯に驚かされ、爪音に心をすませし丐兒は、閉ぢたる眼を開けば、無慙なり唐絲は、土の牢より引き出され、去年見しまゝの日の影も、我より暮る、黒髪の、亂れて顔へふりかゝる、眼おちいり頬骨出で、手足はさながら麻鼓の、あさましきまで瘦せ饒ひ、命つれなき囚徒の、けふを限りと思ふに

ぞ、わろびれもせずつゝいるたるを、大姫はるかにかん窺ひたまひて、「あな痛まし。唐絲が身より出せる
鎌なれば、鎌も今に解けやらす、見しには變る面影の、いとおどろくし」とて、調べも亂れうち曇
る、唱歌を聞きて唐絲は、耳なれたりと頭を傾け、「此の爪音は、わが手づから致へ参らしたる彼の姫
ならん。心にくし」と打仰ぎ、巧兒と面をあはしつ、「こは若君か」と許りに迭に驚き驚かれ、よら
まくすれど縛めの、鎌に引かれて挫と坐す。重忠はこれを見て、「思義もおのが身の甜や」と口頼みて
巧兒に對ひ、「御曹司は彼の老女を、よく認りてぞ坐するならん。彼は未曾殿の御内にて、四天王と呼
ばれたる兼平が妹、光盛が妻なりとぞ。然るに彼のもの石田爲久を誑りて、營中に給事し、鎌倉殿を
撃ち奉らんと謀りたるが、忽地に事發覺れて、去年の秋より、經迦堂谷なる土の牢に籠めおかる。
もし叛逆の犯人ならずば、今宵婚嫁の祝儀に申し宥めて、命ばかりは助け得さすべきに、和親との
ひては、御曹司もまた巧君の爲に、這奴を責め伏せて、謀反の淵源を問ひ極め、うしろやすくし給は
すは、何をもてか播揚の好みを結び給へりと申さん。然ればいよ、放し難き難者なり。こゝをもち、
重忠豫て家隸等に命じ、這奴を眼前に引きすゑたり。光實、林澤は琴の一曲をはるまで、唐絲を拷問
せよ。一と、言語猛にあらたまる。主の指揮に光實は、怨みも春の庭もせに、咲き匂ふ梅も時を得顔な
る、枝へし折りてさし身す、舞樂にあらぬ呵責の筈。梅澤も立ちならび、枝ぶりあけて丁と打てば、

花紅はなぐれなるにちりかゝる、軒のきの松風吹きかよふ、琴ことの調たまべも玉たまの緒むも、絶たえよとて右左より、又ちうりやう了々りやうと打うつ程ほどに、苦痛くつうさこそと思おもひやり、巧かたる兒こが唱となふる呪文じふもんとともに、光實みつざねも榛澤しんざくも、引ひき留とめらるゝやうにおほえて、ふり揚あげたるま、腕動かひどうごかす。こは怪あやしやと面おもてをあはし、われにもあらで持もつたる枝えだを、雙さう方か一度いちどにとり落おせば、唐絲たうししづかに見かへりて、「殿とのたちなどて打ち給はぬ。婿君むこぎみの款待もてなしにうたすや、撃うて。」と身を寄よすれど、幻術けんじゆつに遮さり留とめられ、光實みつざねはさらなり、榛澤しんざくもいと口くちをしと焦燥いらいだちつ、遂つひにせん術すてなかりけり。巧かたる兒ここれのみてうち笑わらひ、「いひがひなきものどもかな。いで義高よしたかが首伏はくごらうさするをみよや。」とて、臂こせかななる刀やいばを拿とつて前まへみよる。後方あとへに聞ゆる漏刻ろうこくの、數かずかぞふれば暮六くれむツなり。七ツをまして十とあまり、三みすぢの絲いとも音ねを絶たゆれど、巧かたる兒こはなほ刀やいばを抜ぬきかけて、縁えん頼ごに歩あみよるを、重忠ちゆうちゆう急いそに押おしとゞめ、「こは仇かたき々々しく見え給ふ。はや婚姻こんいんの時刻じこくになりぬ。鎌倉かまくら殿どのへ心こころやりには、白親手ひつがひてを下くださんとし給ふは、よしあるに似にたれど、鷄にはとりを撃うくに牛うしの刀やいばを用もちゐるべからず。努思ゆあおもひ止とまり給へかした」とこれを諫いさめ、さて光實みつざね、榛澤しんざくにいふやう、「汝等なんぞらは唐絲たうしを老樹らうじゆの梅うめの幹かみに繫つなぎ、すべり出でて休足きうそくせよ。とくゆきね。」といふに、光實みつざねは仇かたきに氣色けしきを曉さと得とられじと、勇いさむ意こころの駒こまをさへ、繫つなぎ留とむる樹この下したに、唐絲たうしを残のこしおき、榛澤しんざく六郎むつらうもろともに、外面そとのかたへ退出まどせしかば、重忠ちゆうちゆうは縁由えんよしを、鎌倉かまくら殿どのへ申まさんとて、やをら蒸襖むしあたまの内うちに入りぬ。

第十八卷

殿を弄して大姫初めに眞を認る
間を失して義高さらに空に歸す

我も美妙水冠者義高は、頼朝卿を狙ひ撃たれたために、諸越が原に到りて、丐兒の隊に入り、かくては重忠もわれをしらじと思ひたるに、はからずも棲澤六郎に誘引はれて、鎌倉に立ち歸り、唐絲に環會ひて、この中の中密かに歡び、や、傍に人なきをみて、ふた、び呪文を唱ふれば、奇なるかな、影の眞忽然とあらはれ出で、唐絲を縛めたる、鐵の鎖を噛み斷りしかば、唐絲は久しく居縮みたる手足ごへ舊のごとくなりつ。こは怪しやと思へども、わが身をかへりみる遅なくて、忙はしく縁頼に這ひ寄り、言葉はなくてまづ不覺に目を押し拭ひ、しばらくしていふやう、「頼朝が命運高ければ、計策しながら打ちもらし、いひがひなくも生拘られて、土の牢に押し籠められ、とても活くべくは思はねど、御曹司の事のみ、とにかく心にかゝりつるに、今宵恙なき御顔を拜し奉る數ばしさを察し給へ。君今鎌倉に歸り入らせ給ふ事、何とも思ひわきまへ難し。その故をしらし給へかし」と密やかにいふも、なほ人や聞かんとて、義高は首をめぐらし、彼此をみかへりつ、いふやう、「眞に汝に別れし後、千苦萬苦を厭はず、一味の兵士を招き集めんとするに、勢ひ微にして事ならず。あるときは衆

津が原に旅寐して、猫間の族に怪しめられ、又あるときは鎌倉を徘徊して、重忠に認めらるゝといへども、頼家阿闍梨の神靈に妖鼠の術を授けられ、出没自在なれば、彼等が爲に謀られず。爲久等をば去年の秋、箱根山にて首を刎ね、近曾弓兒となりて、頼朝が潛行させんとときに、狐ひ撃たんと計較みたるに、重忠昨夕、その家隸に命じて、われを營中に誘引ひし、却つてしらすがほなるも、そのころに物ありとおほし。遮莫、頼朝が首を撃たんこと今宵にあり。歡び候へ」と密語く折しも、蹙然として人の来る音するにぞ、義高は目をもてこれをしらすれば、唐絲はうち黠頭き、杉戸の影へ懸れけり。浩かる所に女房たち五七人、手にく燭を乗り、或は鎌子、土器を捧げもちて前にたち、嫩子は大姫の手を引きて、おのく義高のほとり近くまゐりつ。さて嫩子がまうすやう、「産靈は今もおほして、姫君今宵御曹司にまみえ給ふといへども、未だ晴れなるおんはからひには侍らす。おん命の程もおほつかなきまでに、いといたうおもひほそり給ふが痛ましければ、竊びやかに婦夫の杯をとり結ばし進らせ、かさねて在鎌倉の武士に令れしらし給はんとなり。よみて嫩子仰せをうけて、姫君を誘引ひ奉りぬ。」と述べしかば、女房たちおのく、「千秋萬歳。」と唱へて、土器を勧め、三三九獻の式も果てたり。大姫は名のみにて、今宵初めて良人の貌を、見もし見らる、恥かはしさに、いふべき事はなかく、肩の間に月出でて、夜を争ふかと疑はれ、頼の上に花開きて、春を含むに似たりけ

り、蟬の羽のごとき鬢の、黒くて勻やかなるに、錦の鞋、綾の帯、留奇南の薰衣をもちて、沈魚落雁の容止、羞花閉月の粧飾、かかる美人はいと稀なるべく見ゆるに、義高また將帥の氣象あらはれて、面色白く、髭鬚青く、眼秀でて身丈高し。寔にこれ花の山に月を瞻め、金の盤に玉を盛るが如く、劣らず勝らす坐するとして、みな愛敬つきて、興するも風情あり。春の夜なれば短くて、寐よとの鐘聞の程に、嫩子は耳を側てつゝ、莞やかにうち笑み、「あな心なし。いつまでかかくてあらん、誘女房たち、臥戸の用意し侍りなん。姫君はなほ暫し坐して、年來の心盡しを語り慰め給ひね。」と信だちて、みなもろともに奥へ退りぬ。大姫は嫉捨山に、照る月を見るこ、ちしつ、さし對ひてはうひ／＼しくて、いひ慰むるよすがもなく、面ほてりして打掩ふ、長き袂も綾錦、たたまくをしき風情にて、やうやくに膝を進め、「君はあへなくも武藏なる、入間川とやらんにて、撃たれ給ひぬと聞えしかば、その悲しみの數まして、存命ふべくも思はねど、おん容止をも認り侍らす。被ぎも果てぬ涙の磯に、弘誓の船を待ちながら、なからん後も冥土にて、何をたつきに名告りあはん」と思へば、いとゞ形なき身を、うち歎くにもあまりあり。然るにけふしも不意く、ふたゞ縮ぶ婦夫の縁は、神と親との恵みにてありけるものを、四年が程恨み奉りぬること恐れけれ。昔の懶き今の歡しき、思ひやり給ひなば、玉椿の八千代までもと、言の葉ずるに露ばかりも、聞えしらし給へかし」とかき口説けばうち點頭き、

「寔に御身が心操を、いかでか仇に思ふべき。その誠心に愛でて、憑み聞ゆる密事あり。承引き給はんや。」と問へば、大姫は聞きもあへず、「こは問ひ給ふまでも侍らず。百年の苦樂をともしする、君のためには火にも入り、水に没るとも、八百萬の神をかけて、仰せに戻り侍らじ。」と聞き果てて茫然とし、「さは誓ひ給ふから偽りはあらじ。案内して撃たし給へ。」とは又誰を。「おん身が父頼朝を、今宵臥戸へ案内して撃たしたまへ。」と密語くにぞ、胸うち騒ぐ當惑に、そは何ゆゑとも問ひかねて、さし俯きて坐せしかば、義高いよ、聲を低うし、「驚き給ふは理なり。縁由は委細に告げずとも、御身が父は、わが爲に父の仇なる事は、よく知りてぞおはすらめ。亦兼に頼朝の需めに應じて、鎌倉に來り、次の年の五月、入間川のほとりにて討たれたるは、眞の義高ならず、唐絲が孩兒に應じて、鎌倉に來るもの、我に代りて命を殖せり。絳長やかなれば、今全く聞えしらすに及ばず。義高年來、灰を呑み、身に漆するの志を移さず、只頼朝を狙ひ撃たんとはかれども、彼人るときは城郭あり、出づるときは從兵多し。孤獨の身にしては、そのほとりへも近づき難く、徒らに年月を過ぐしたり。しかるに御身に哀慕せられ、こゝに來りて、櫻雲花の新郎と呼ばるゝ事、方に是れ時あり命あり。父の讎には共に天を戴かず。況いて彼とひとつにをりて、この夜を他に過ぐさんや。こゝろ夫にあるならば、案内してわが宿志をはたさし給へ。」とうちあけて、いはるゝ程なほ淺ましく、はふり落つる涙を

拭ひ「何せはさることなるべけれど、子として父を撃たしては、こゝの獸に劣り侍り。この事のみは許し給へ。」といはせも果てず眼を腫らし、「しからば只今誓ひ給ひし言の葉は、何とか聞かん、かくいひがひなき心ざまならんとはしらす、大事を聞えしらしたる悔しきよ、夫婦の縁は是れまでなり。」とくゆきて父に告げよ。「といひかけて、つと身を起す良人の裾を、引きとゞめつゝ、目を拭ひ、「親子の思義重ければ、一トたびは推辭み侍りしが、婦の上には天に誓へし、夫に思ひかふるものなし。今宵案内し侍らんか、わが身を輔くるものなくば、いと危かりなん。」といはせも果てず杉戸の陰より、「その事は心安かれ、わらは附き廻り侍るべし。」と應へするに、大姫はうち驚きつゝ、そは誰もやと見かへり給ふに、思ひがけなき、これ唐絲なりしかば、「あな何の程より其處にはありし、假そめならぬ縛めの、輒く解けたるも評し。」と宣ふ間に唐絲は、そのほとりに参りつゝ「鐵の鎖だに輒く解かし給ひぬる、御曹司の奇術もて、鑊倉殿を撃ち給はんに、誰か當るものの侍るべき。然るを姫君、襟を兩端になして脱れんとしたまふとも、唐絲かくて侍るから、案内はよくしつたり。いざ給へ。」といそがすにぞ、大姫は遂に脱るゝに言葉なく、漸くに立ち給へば、義高欣然として唐絲にいふやう「汝その形容にて窺ひ入らば、直森の武士に怪しめらるゝ事もあらん。人目の關を踏まんには、姫が袿衣にしくらのなし。大姫それ脱ぎてとらし給へ。」とくゝ。「といそがされ、涙まだ乾ぬ袖かいとりて、唐絲に被

せ給へは、義高呪文を唱へつゝ、燈燭一度に弗と打ち滅し、主従三人密語きあひ、身をかすまして潛びゆく。その夜も既に更闌けて、櫓、廊、室、助鋪、間毎々々の寂として、宿直の近臣熟睡せり。大姫遙かに指さして、「彼處なる几帳の内こそ、わが父の臥房なれ。」と潛めきて告げ給へば、義高聞きて莞爾とし、「然らば唐絳は、大姫と共に臥房の後方にたち廻り、もし脱れ出づる事もあらば、撃ちとめよ。」と密語けば、唐絳は、「こゝろ得侍り」と應へつゝ、姫を誘引ひ雄手なる、廊をうち繞り、房の彼方へ潛び入る。大姫は今さらに、是れをかざりと見かへり給へど、晴さへ胸さへうち曇り、涙にしかと見えわかぬ、鐵行燈の下に立ち、良人のうへもわがうへも、風の前なる燈花なり。孰れか先へ滅えなんと、こゝろ一ツにおきかねて、進まぬ足をやう／＼に、裳結り蒸襖を、そと引き開けて入り給へば、義高しばし目送りて、「今は心安し。」とじ語ち、やをら走り前みて、几帳の内へ打ち入らんとする折から、臙臙として立在むものあり。義高是れに猶豫して、熟視れば行氏夫婦なり。そのとき行氏は、棧橋と共に、義高の左右に躡蹠し、「御曹司いまだ曉得り給はずや。鎌倉殿の時運高大にして、宿志を遂げ給ひがたし。たゞ速かに志を轉して、先君のおん菩提を弔ひ給へかし。」と諫むれば、義高勃然として大いに怒り、「汝等生ける日は、我と志を同じくし、わが會稽の怨みを雪むるを、草の原より見つべしと、誓ひつるには似けなく、しば／＼敵の時運を稱して、諫むるはいかにぞや。

われ今仇を報いん事歸きの中にあり。其處退かすや。」と焦燥せば、行氏重ねて申すやう、二君が言過て、嚮には平家なほ西海にあり、宇内援藏の時にして、仇を撃つによろし。今や四海靖治に及んで、人の心鎌倉に歸降す。彼は徳を布きて民を安附し、君は邪法をもちて人を眩惑す。彼には智勇の士卒多く、君は一臂の援けなし。加之、大姫君に逼つて、本意を遂げんとし給ふは、いとものこ、ろ得ぬ。父の仇を撃つものは、孝なりや將不孝なりや。もし果して孝ならば、その事道理に辭はず。大姫君今夜復讐の案内し給ふときは、君その妻を虐けて、父を殺すの大罪を犯さし給ふならずや。かくては神も衛り給はず、佛も感みたまはず。神明佛陀にみはなされても、本意を遂げ給ふよしありや。」と憚るところもなく、理を述ぶるに、義高頭をうち揮つて、「謂れなき諫言かな。爲義保元に敗走して、義朝は父を殺すの罪あり。安徳帝西海に没み給ひて、頼朝また君を弑するの罪あり。今願をもちて逆を討つ、何の妨けあるべき。」と敦圍きて襍踏み反し行かんとするを、行氏、棧橋は、猶縁はりて引き留むれば、「こは嗚呼なり。」と焦燥ちつ、刀を抜いて切り拂ふに形は消えてなかりけり。義高は、「さうこそ。」と冷笑ひ、抜きたる刀を掌り直して、几帳の邊に走り寄り、「起きよ頼朝。父の仇を報いん爲に、義高來つて枕方にあり。起きよ。」と呼び覺し、几帳をさらりと切り落せば、内には臥したる人もなく、薰籠に掛けし麻衣に、一首の歌を書きたりける。義高はこの影迹に、忽地望みを失ひ、原來敵

にも防禦の術あり。やうこそあらめと立ちよりにて、彼の麻衣の歌をみれば、

夏来れば伏屋が下にやすらひて清水の里にすみつきぬべし

と讀みちをはらす、大いに驚き、「われ重忠に謀られて、漫に深入りしつるかな。遮莫、何程の事かあらん。もの／＼しや」と罵りて、薰籠の真中破れと破れば、顯はれ出づる金の猫、赫突と光を發ち、餘光散徹して、義高を射るとみえし、奇なるかな義高は、さながら酒に酔ひたる如く、蹠々として尻居に坐し、一道の白氣その懐よりたち沖り、忽地夥多の鼠と化し、西を指して飛び去りぬ。されば義高は、妖鼠の術破れて未だ覺めず。時に宿寢の武士十人餘り、ばらくと押取り巻き、「や」と聲かけて祖まんとせしかば、義高是れに驚き覺め、太刀閃かして「と破れば、間ちかかりし兵士兩二人、首遙かに轉び墮ち、軀倒れて血に塗る。残る兵士等はこれにも怕れず、屍を跳りこえて打ちてかゝるを、義高は縱横に飛び繞り、前後に當り、或は眞甲を破り割り、或は腕をうち落し、猛勢彗然として、その勇敢に當る者なく、血は流れて濁々と、屍は横たはりて累々たり。さる程に義高は、拄ふる兵士を盛しにして、なほ奥ふかく前み入れば、西面なる緞障子の内に、人のけはひするあり。是れなん頼朝なるべしとて、しばしも擬議せず、血刀引提けて走り蒐れば、忽地内に聲高く、

昔見し野中の清水かはらねどわが影をもや思ひ出づらむ

とうち吟じ、障子をきと開くもの、亦これ斥す仇にはあらで、ひとりの行僧、袴の行囊を背負ひ、手に一條の杖を突き立て、欣然として立在みたるが、義高をさし招き、「御曹司われを忘れ給へりや。前に近江なる粟津が原に庵を結び、しばし住みけるころ、御身猫間光實ぬしと、猫鼠を論じたる夜、端なく面をあはしたる、憲清入道西行なり。貧僧奥州よりのかへさ、はからずもこゝに來りて、ふたび見ゆる事を得たり。御身復讐の志はさることながら、木曾殿朝敵となりて討たれ給へば、仇を報ふによしなし。ゆめく思ひ留まり給ひね。」といはせも果てず、「慈悲忍辱を旨とする出家人は、勇士の志を知るべきにあらず。汝成敗に就きて、是非を論ずる、その心ざま俗子に劣れり。いでその願切り放ちて、息の根止めんと、誓りつゝ、刃をうち振りて破らんとすれば、「光實、正忠これにあり。」と名告りかけて、左右より走り出で、西行を推し隔つれば、葎戸も一刀を腰にして鈴稚丸をかき抱き、夫の後方に引きそうたり。そのとき光實は、刀の柄を握りもちて、義高にたち對ひ、「汝往に粟津野にて、妖術をもて形を隠し、その後、山井瀆にてわが刀尖を脱るゝと雖も、家臣竹川正忠が孩兒、千江松が忠死によつて、家の重寶たる金の猫の睛に、千江松が鮮血を塗り、こゝに輒く妖鼠の術を破りぬ。抑わが兄光隆は、義仲が爲に罪を得て憤りに世を逝り、家命遂に凋落せり。義仲既に誅伏すといへども、わが怨みなほ竭きず、汝を撃つて復讐の志をはたさんとす。恨みの刃うけよ。」

と呼ばはり、刀を閃りと引き抜けば、義高叫々と冷笑ひ、「こはもの／＼しき光實が廣言。いぬる年、山井濱にて反撃ちにすべかりしに、その志の切なるに放しおきつ。敵手は嫌はず、とく來れ」と太刀さし挿頭して立つたりける。憎さも憎しと光實主従、抜みて撃たんとす。浩かる處に、東面なる正廳の内より、「雙方ともに健り給ふな。鎌倉殿の御座近し、重忠仰せを受けて申すべきことあり。」と呼びかけつ、翠簾さら／＼と巻き上ぐれば、夥の燈燭晃きわたりて白晝の如く、上座には前右大將頼朝卿、装束して立ち給へば、政子、嫩子、左右に侍り、重忠その傍にあり。光實主従は、この光景に怒りを厭へ、少し引き退きて、縁由を問はんとするに、義高は、すは頼朝ごさんなれと、會釋もせず跳り蒐るを、重忠はやく身を起して遮り留め、「御曹司既に石田を討ちて、復讐の本意遂げ給へるに、今又鎌倉殿を討たんと謀り給ふこと、更に道理に稱はず。又光實ぬしは、木曾殿滅亡の後、その子なりとも討ちて、怨みを雪めんとし給ふ事、大いなる惑ひなり。これ併しながら、無名の鬭戦、私の宿意によつて、父母の遺體を傷ふべき事かは。しかりと雖も、無下に志を折きがたし。こゝをもて義高ぬしには、鎌倉殿の狩衣を進らせ、光實ぬしには木曾殿の兜を進らせ、是彼豫讓が故事に倣ひて、夙志をはたさし給ふにこそ。みなこれ幕府の寛仁大度、勇士を惜しみ給ふにあんなれ。おのおのこれを刺して、心やりともし給へかし」と述べ終り、携へたる狩衣を義高のほとりにさしおき、

兜を光實に遞與しけり。義高これをみて怒れる聲をふり立て、「卑怯なり頼朝。みづから撫懼に倣つて脱れんとするとも、われ決して放さず。この狩衣何かはせん。」と罵りもあへず、投げ返すとて引きあぐれば、裏より轉び出づるもの、これ大姫の首なり。光實もこの爲體にこゝろ怪しみ、伏したる兜をとり起せば、又これ裏に唐絲が首級あり。是に至りて光實はさらなり、義高も心ありけなる贈りものに、默然として、猛勢始めには似ず。重忠莞爾として、件の二人に對ひ、「大姫君は孝と貞とに身をおきかね、自害して失せ給ひしかば、唐絲も事の成らざるを見て、自ら刃に伏したり。さるによつて、大姫君のおん首級は義高ぬしに進らし、唐絲が首は光實ぬしへ贈り、その子をもて父に代らし、その臣をもて君に換ふ。かかれば彼の豫讓が空衣を刺したるに勝れり。今は迷に復讐の志を絶ち給へかし。」と説き諭すにぞ、頼朝聊宣ふやう、「われ往に範頼、義経をもて、義仲を討たしたるは、敕諭によつて、都下の劇を鎮めんとするにあり。豈その己に勝れるを諱みて、親族を殺すべき。然るに義仲は、却つて頼朝を疑ひ、唐絲が子太郎とやらんを義高なり。」と偽り爲へ、鎌倉へ來せし事、われ之を猜したり。是をもて石田爲久が請ひに任し、義高を撃たしたるは、眞の義高ならざればなり。義高頗りに頼朝を仇として撃たんとすれども、我は是れ禁廷の御衛り、天子の武將なり。いかで私怨の怨みに當らん。又光實の愁訴寔によしあり。今度義高が妖鼠の術を破りたる功をもて奏聞し、鈴稚

丸に猫間の家を繼がし、官祿舊のごとく安堵せらるべし。鈴稚成長までは、光實これが後見を致し、正忠夫婦、いよ、忠節を勵むべし」といと信やかに宣ふにぞ、政子御前は忍ぶにあまる涙を袖に裏みかね、大姫が命を懸して命をひせし心捧を憐み給はば、義高早く志を轉して、一家の親しみを竭し給へ。光實も又唐祿が忠死に愛でて、怨みを散らし給へかし」といひかけて、又泣き沈み給へば、敏子も目を瞬き、大姫君をはりに臨みて、只恥かはしきは、四年が程、實の良人をしらすして戀ひ慕ひぬるは、唐祿が子に大太郎といふものなりと、今時聞きては、年來の御操も仇になりけるよ。と宣はせし御こゝろさへ、推測られて痛まし」とかき口説けば、西行も又言語をつくして、是彼を諫めけり。義高は、つくふ、とうち聞きて嘆息し、「我が心石にあらず、絶えて轉ばすべからずと雖も、仁義に敵する刃はなし。光實の意如何にぞや」と問ふに、光實も又嗟嘆し、「けにいはる、ところ理あり。いざもろともに」と應へつ、刀を抜いて兎の鉞を、ばらりすと切りはなち、鉞を刀尖につらぬきて高くさしあげ、敵の首をかくぞ得し、今は恨みも散れたり」とて、正忠夫婦を見かへれば、正忠、葎戸聲をあはして、三たび凱歌を掲けたりける。その時義高も、刀をもて狩衣を數回刺し徹し、刀尖をとり直して、兩つの日子をくり出し、流る、血を狩衣にて押し拭ひつ、聲を勵ましていふやう、一始めありて終りなきは、大丈夫にあらず。わが眼あればこそ頼朝を見るなれ。耳目は煩惱の奴、

今脱離して象教に歸す。われ入間川の上にありしころ、唐絲が千太郎と呼ばれ、假日暗となりたる
をおもへば、緯のこ、におよぶ、前象にてありけんかし。されば今より、無絃法師と名を更め、唐絲
に習ひ得たる琵琶、和琴を寐覺の友とし、琵琶湖の上に住み果つべし。棄恩入無爲報恩者、行氏夫婦
が死後の諫めも、こ、に迷ひの門をひらく、善知識にてありけるなり。南無阿彌陀佛」と唱ふれば、
西行法師進み對ひて、「義高ぬしの發心に、導師といはんも嗚呼なれど、大姫はいふもごらなり。唐絲
行氏夫婦が爲に、ながく廻向し進らすべし。」とて、掛けたる袈裟を脱ぎて、二ツの首級を裹み、終に
義高を扶け引きて、近江なる粟津原に赴き、義仲の墳のほとりに兩つの首を埋葬し、萬住みける草庵
を義高入道に與へしかば、義高はこ、に行ひすまして、絶えて交はらず。光實は鈴稚丸と共に、正忠
夫婦を將て、洛に歸りのほりしが、賴朝卿縁由を奏聞ありければ、すなはち救免あつて、鈴稚丸を
猫間の家督と定められ、光實は無位より四位の少將に昇進して、その家永く繁昌せり。かくて賴朝卿
は、賴豪阿闍梨の靈を伊豆國下川の近郷、中の瀬村といふ處に祝ひ祀り、一社の禿倉を建てて、子聖
權現と稱へ、北條時政に仰せて、春秋の祭禮忘ることなく、執行ひ給ひければ、彼の惡靈遂に祟りを
なさず。却つて源家の守護神とならんとて、祝が夢に見えたりとぞ。今現に豆州中ノ瀬の鎮守なる、
子聖の神これなり。この神餅を忌み嫌ひ給ふとて、中ノ瀬一郷は、年のをほりに餅を揚がず、元日に

は焼飯に青菘をとりあはし、羹として雑煮に代ふ、いまだその縁由をしらす。

評に云く、世に傳ふ、悪七兵衛景清、頼朝卿を狙ひ撃たんとするに事成らさず。頼朝卿その精忠を

憐み、これに狩衣を賜はりて、晋の豫讓が故事に擬す。景清空衣を刺し、日子をくり出し、日向國

に退きて住みぬ。世にこゝを日向勾當と號する由いへり。然れども、その事何れの書にも見えず。

按ずるに、東鑑に、建久三年正月二十一日、平家の侍上總五郎兵衛忠光、魚鱗を眼上に覆ひ

左の眼盲ひたるごとくにして、前幕府朝頼を狙ひ撃たんとす。事あらはれて、これを六連の海邊に

梟首すといふ事見えたり。景清が事は、これに因つて作り出けたる根なし言なり。義高の事も、亦

これに準へて見るべからん。

亦いふ、この書、すべて雜劇の趣を寫して、方に逆戲三昧の筆力を振へり。設しその有無を問

ひ、不經を笑ふ人は、史傳を讀むに過ぎず。何ぞ小話とするに足らんや。

賴蒙阿闍梨怪鼠傳增補引用羣書要語

「猫五德」(揮塵新語) 萬壽寺有_ニ彬師_ト者_一。善_ク誦_ス。嘗_テ對_シ客_ニ。猫_ノ其_レ旁_ニ。彬_ト謂_ク客_ニ曰_ク。人言_フ貓_ノ有_ニ五德_一。今吾_レ此_ノ猫_ニ亦_レ有_ニ之_一。客_{問_フ其_レ說_ヲ}。曰_ク。見_レ鼠_ヲ不_レ捕_ル仁_也。鼠_{奪_フ其_レ食_ヲ而讓_ス之_ヲ義_也。客_{至_テ設_ク饌_ヲ則_レ出_ル禮_也。藏_ス物_ヲ雖_レ密_カ能_ク竊_ス食_ハ之_ヲ智_也。每_ニ冬_月入_ル窻_ニ信_也。客_{問_フ之_ヲ}。爲_レ之_レ絶_{倒_ス}。明_{麻_{戒_{王_兆}}云_{元_{續_{筆_記}}}}}}

「安三宮猫」(源氏物語若菜上) 御几帳どもしどけなくひきやりつる、人けぢかくよつきてぞ見ゆる。からねこのいとちひさく、をかしけなるを、少しおほきなるねこ、おひつゞきて、にはかにみすのつまよりはしりいづるに、人々おびえ騒_{さわ}ぎて、そよくと見じろぎさまよふけはひども、きぬのおとなひみ、かしがましき心ちす。ねこはまたよく人にもなつかぬにや、つないとながくつきたりけるを、物にひきかけまつはれにけるを、にけむとひこじろふほどに、みすのそばいとあらはにひきあけられたるを、とみにひきなほす人もなし。右_{障_{門_{督_{宮_{を_{け_{さうし_{奉_{る_{段_{なり}}}}}}又_ニ若_{菜_{下_{う_ち}}の御_ねこのあまたひきつれたりける。ほらからどもの所々にあかれて、此の宮にもまるれるが、いとをかしけにて、ありくを見るに、まづ思ひ出でらるれば、六_{條_{院_{の_{ひ_{め_{宮_{の_{御_{か_{た_{に_{侍_{る_ね}}}}こご、いと見えぬやうなるかほしてをかしうはべりしが、はつかになむ見たまひし、とけいし給}}}}}}}}}}}}}}}

へば、ねこわざとらうたくせさせ給ふ御こゝろにて、くはしくとはせ給ふ。からねこのこゝろに
たがへるさましてなむ侍りし。云々○又女宮の御ちともまうで給はで、大殿へぞ忍びておはしぬ
る。うちふしたれどもあはず、見つる夢のさだかにあはむ事も難きをさへ思ふに、かのねこの
ありしさま、いとこひしと思ひいでらる。

〔猫牝牡〕（本草綱目）時珍曰。俗傳牝猫無牡。但以竹帚擊斗。祝竈神而求レバ之。亦多ス。
此レ與下以鶏子祝竈。而拘レ鶏者相同。俱理之不可推ス者也。

〔猪肉〕（時珍曰）易簡方云。凡領防蟲毒。白少食。猪肉則盡不能害。此レ亦隋書
所。謂猫鬼野道之盡乎。肘后治鼠瘻核腫。或已潰出膿血者。取猫肉。如常作。空
心食之云。不傳之法也。

〔咆哮〕（五雜俎）咆哮。猫互相戰フ之聲。

〔銀猫〕（東鑑）文治二年八月十六日午ノ刻、西行上人退出。頗雖抑留。敢不レ拘之。二
品頼朝以銀作猫被充贈物。上人乍拜傾之。於内外與ニ放遊。嬰兒。是請ニ重源上人、
約諾。東大寺料爲勸進。沙金赴奥州。以此レ便路巡禮。鶴岳。云々。陸奥守秀衡入道
者。上人一族也。

〔鼠腹〕（莊子逍遙篇）鷦鷯集於深林。不過一技。偃鼠飲河。不過三滿腹。

〔鼠膽〕（酉陽雜俎）鼠膽在肝。活取則有。

〔聚鼠〕（五雜俎）安息香能聚鼠。其煙白色。如縷。直上不散。又狼糞煙。亦直上。

故蜂取用之。

〔投鼠〕（賈誼策）諺曰。欲投鼠而忌器。鼠近於器。尚憚不投。恐傷器。其

器。況貴臣之近主乎。

〔鼯鼠〕（荀子）鼯鼠五技而窮。註。技。才能也。五技。謂能飛。不能上。能緣。不

能窮。樹。能遊。不能渡。谷。能穴。不能掩。身。能走。不能先。人。

〔鼠祠〕（太平記）白川ノ御宇ニ、江ノ帥匠房ノ兄ニ、二井寺ノ賴豪僧都トテ、貴キ人有リケルヲ

被召、皇子御誕生ノ御禱リヲ被仰付。賴豪敕ヲ奉テ、肝膽ヲ碎キテ祈シケルニ、承保

元年十二月十六日皇子御誕生有リテケリ。帝敬感ノ餘リニ、御斬リノ觀賞宜ク依ル請ト被宣下。

賴豪年來ノ所望ナリケレバ、他ノ官祿一向ニ是レヲ閣キテ、園城寺ノ三摩耶戒壇造立ノ敕許ヲ

申シ賜ハリケルニ、山門又是レヲ聽キテ、款狀ヲ捧ゲテ禁庭ヘ訴ヘ、先例ヲ引イテ、停廢セラ

レント奏シケレバ、無レカ三摩耶戒壇造立ノ敕裁ヲ被召返ケル。賴豪是レヲ怒ツテ、百日ノ間

髪ヲモ不剃、爪ヲモ不切、爐壇ノ煙ニフスボリ、曠悲ノ炎ニ骨ヲ焦シテ、我、顛ハカハ、即身
 ニ大麗縁ト成ツテ、玉體ヲ惱マシ奉リ、山門ノ佛法ヲ滅サント云フ惡念ヲ發シテ、遂ニ三七日ガ
 中ニ壇上ニシテ死ニケリ。其ノ怨靈果シテ刑毒ヲナシケレバ、頼豪ガ斬ヲ出シ奉リシ皇子、
 未ダ御母后ノ御膝ノ上ヲ離レサセ給ハデ、忽ニ御隠レ有リケリ。其ノ後頼豪ガ亡靈、忽ニ鐵ノ
 牙、石ノ身ナル、八萬四千ノ鼠ト成ツテ、比叡山ニ登リ、佛像經卷ヲ嚼ミ破リケル間、コレヲ防
 グニ無レ術シテ、頼豪ヲ一社ノ神ニ崇メテ其ノ怨念ヲ鎮ム。鼠ノ禿倉是レ也。盛衰記亦之。同ジレ
 「二竹塚」盛衰記一清盛、左衛門佐タリシ時、大内ニテ鷲ノ聲ヲナス化鳥ヲトル。是レ毛シヨウ
 ト云フモノ也。毛シユウハ鼠ノ唐名也。博士ノ山ニ、清盛取止ムルコト吉祥也トイフ。南臺ノ
 竹ヲ召シテ、中ニ籠メテ清水寺ノ岡ニ埋メラレタリ。御惱ノ時、敕使立ツテ、宣命ヲ含メル時、
 毛シユウ一竹ガ塚ト云フ是レ也。要レ

「鼠賦」去來が鼠ノ賦に、どこの乙子を七郎とは申す。新左衛門とつけたるは、さかやきすりて
 の後なるべし。大ねら小ねら、々々前編の卷端に、この鼠の賦を出せり。しかるに備書あやまつ
 て、新左衛門々の一條を脱落す。○又二月令に、「田鼠」化爲如鼠、前編爲を鷹に似ものは悞
 也。

鼠ノ種類最モ多シ。〔鼯鼠〕又〔田鼠〕〔鼯鼠〕〔隱鼠〕竝ニ同シ。〔偃鼠〕又〔鼠母〕〔鼯〕竝ニ同シ。此餘
有ニ鼯鼠〕〔竹鼠〕〔土撥鼠〕〔黃鼠〕〔貂鼠〕〔鼯鼠〕〔食蛇鼠〕〔蟻鼠〕今不能悉注スルコト焉。書肆
豪奪シテ之綉梓太ダ急ハレバ也。

文化五年戊辰正月

著作堂主人再錄

三七全傳南柯夢

附南柯後記

三七全傳南柯夢序

淳于芬家。廣陵。宅南有古槐。生豪飲其下。因醉致疾。一友扶生歸。夢一女。衣使者。曰。槐安國王奉邀。生隨。二使。上車。指古槐。入穴中。大城朱門。題曰。槐安國。有二騎。傳呼曰。駙馬遠降。引生升廣殿。見一人。衣素練服。朱華冠。令生拜王。王曰。前賢尊命。許入女。蕭芳奉事。君子。有三億靈數十。奉樂執燭引導。金翠步障。珍瓊不斷。至一門。號金儀宮。一女子號金枝公主。儼若神僊。交驩成禮。情禮日洽。王曰。吾南柯郡。政事不理。屈卿爲守。敕有司。出金玉錦綉。僕妾車馬。施列廣衢。饒三公主行。夫人戒子曰。淳于郎性剛好酒。爲婦之道。貴在柔順。爾善事之。生累日至郡。有官吏僧道。音樂來迎。下車省風俗。察疾苦。郡中大理。凡二十載。百姓立生祠。王賜爵錫邑。位居三輔。生五男二女。榮盛莫比。公主遇疾而薨。生請護喪赴國。王與夫人素服。慟哭於郊。備儀羽。葆鼓吹。葬主於盤龍岡。生以貴戚。威福日盛。有人。上表。女象謫見。國有大恐。都邑遷徙。宗廟崩壞。事生齋壇。時議以生僧形之應。王因命生曰。卿可暫歸本里。一見親族。諸孫無以爲念。復令二使者。送出一穴。遂寤。見家僮擁舞于庭。二客濯足于陽。斜日未隱。西垣。餘尊尚滿。東牖。因與二客。尋古槐下穴。洞然朗朗。可容一榻。上土壤。

爲三城廟臺殿之狀。一有蟻數斛。二大蟻素翼朱首乃槐安國王。又窮一穴。直上三南枝。一羣蟻亦處其中。卽南柯郡也。又一穴盤屈。若龍蛇狀。有小墳高尺餘。卽盤龍山岡也。生追想感歎。遽遣掩塞。是夕風雨暴發。且視其穴遂失。羣蟻莫知所之。國記有大恐。都邑遷徙。此其驗矣。右陳翰槐宮記

槐宮記は淳于棼が故事なり。陳翰嘗て棼が夢に感して、榮枯得喪の理を推すこと、沈既濟が枕中記に一般。皆是れ寓言といへども、蒙昧を醒すに是れり。予も亦取る事あつて、三勝半七が奇撰を述べ、名づけて三七全傳南柯夢と謂ふ。事は米谷山の楠南柯に起つて、千日寺の南无佛に畢る。文辭荒唐にして、君子の一曝を惹くに似たり。然れども艶曲淫奔の脚色を借らずして、勸懲の微意毎卷に存す。閱者の利害、彼と此と如何。因つて數行を卷端に題すと云ふ。

文化四年丁卯夏孟

飯台 蓑 笠 隱 居

三七全傳南柯夢總目錄

卷の 一

深山路の楠

木精の怪異

丹波都が傳

卷の 二

稚兒の婦夫

楯取の佞人

大柏の權輿

卷の 三

臥房の胡越

華洛の喬居

夜橋の驟雨

卷の 四

眞葛の朝風

百度の願事

夜半の月魄

卷の 五

羈旅の宿の上

羈旅の宿の下

土なき園の花

卷の 六

活下の楸册

長明の五味

千日寺の柩

三七全傳南柯夢總目錄

姓 氏

園 <small>その</small>	笠 <small>かさ</small>	丹 <small>に</small>	布 <small>ふ</small>	厚 <small>あつ</small>	列 <small>りゅう</small>	續 <small>つづ</small>	世 <small>よ</small>
	屋 <small>や</small>	波 <small>なみ</small>	施 <small>せ</small>	倉 <small>くら</small>		井 <small>い</small>	家 <small>か</small>
	三 <small>さん</small>		蝶 <small>てつ</small>	友 <small>とも</small>	傳 <small>でん</small>	順 <small>じゆん</small>	
花 <small>はな</small>	勝 <small>かつ</small>	市 <small>いち</small>	郎 <small>らう</small>	春 <small>はる</small>		昭 <small>せう</small>	

阿 <small>あ</small>	鏡 <small>かがみ</small>	笠 <small>かさ</small>	赤 <small>あか</small>	蟻 <small>あひ</small>	續 <small>つづ</small>
		松 <small>まつ</small>	根 <small>ね</small>	松 <small>まつ</small>	井 <small>い</small>
		平 <small>ひら</small>	半 <small>はん</small>	典 <small>てん</small>	吉 <small>きち</small>
通 <small>つう</small>	篠 <small>しの</small>	三 <small>さん</small>	六 <small>ろく</small>	膳 <small>ぜん</small>	稚 <small>ち</small>

敷 <small>しき</small>	蟻 <small>あひ</small>	赤 <small>あか</small>	今 <small>いま</small>
	松 <small>まつ</small>	根 <small>ね</small>	市 <small>いち</small>
	曾 <small>そう</small>	半 <small>はん</small>	全 <small>ぜん</small>
	太 <small>た</small>	七 <small>しち</small>	八 <small>はち</small>
浪 <small>なみ</small>	郎 <small>らう</small>	郎 <small>らう</small>	郎 <small>らう</small>

三七全傳南柯夢 卷之一

東都 曲亭馬琴編次

深山路の楠

永正年中の事かとよ、奈良の都に、續井順昭なんいへる、やんごとなき人いまそかりけり。その先祖を尋ねれば、佛門より出でて武家に交らひ、法筵清衆の五戒を棄てて、兵家鬪戰の六具を事とし、建武の播亂に、軍功拔羣なりしかば、忽地に家を興し、大和半國を領してより、累世武威をうしなはず、文を備へ武を備へたる家隸ども多かり。順昭かく家富み昌へて、薪には桂を科り、米には珠を科り、身に錦綉を製ね、口美味に飽きて、只管閑雅の遊興に耽り、このごろ世に弄ぶ茶法を好して、京師の北山なる金閣に倣ひ、新たに茶亭を造らんとて、名だたる番匠等を召しつどへ、龍門の瀧、岩下の水、蓮池、鏡湖池、丸山八海石、春日の社、夕佳亭、すべて寸分も違はず繪圖に寫さし、既に吉日をえらみ、作事を興さんと議せられたり。抑金閣と聞えしは、應永年中の建立にして、鹿死院義満公の別荘なり。閣は三重にして、七間の露盤に、二尺八寸の鳳凰を戴かし、第一重を究竟頂と名づ

けて、廣さ三間四尺八寸、第二重は潮音洞と稱へて、東西七間、南北五間半、岩窟に觀世音と、四天
 王を安置し、第二重は、法水院と呼びて、廣さ第二重に等しく、こ、にも又觀音勢至を安置せり。こ
 れらを摸して、作り出さんこと、なしがたきにあらねど、潮音洞の天井は、楠の一枚板をもちて造ら
 れたれば、唯この良材にのみ事缺きて、思はずも目を經る程に、顯昭顯りに焦燥らて、ある日老黨を
 集會へ、叔も此度茶亭の天井に用ゐるなる楠は、得難きに似たれども、當國は連山波濤の如く聲え
 累なひて、樹木森然たり、されば往昔より、楠木樵る山兒等が、斧を入れる日はなけれど、山のあ
 らはになりぬとも見え幸。人も通はぬ谷陰などに、生ひたちたらん楠の、わが求むるほどなるも、
 究めてなしとはいひがたし。聖より影の樵夫をもち、殘る限なく索ねさせよかし。と仰せけり。その
 とし蟻松典膳豊度と呼ぶる、老臣、列を出でてまうすやう、當國添上郡、米谷の山間は、伊賀より
 通ふ順路なるが、彼の山の半腹より、街道を南のかたへ木重れたる楠の大木あり。その枝東南へさ
 し出でたること、大約八九十丈に餘り、樹の下常に闇くして、旅客晝も路に惑へり。もしこの楠を
 挽かし給はば、四面七五間なる板となすべし。と申すにぞ、顯昭ふかく歡びて、筑紫湯か陸奥の果て
 などにありといはば、思ふに任せぬ事もあらんに、かかる良材の、わが知る山より出づる事は、はか
 らざる幸ひなり。などて筵には聞えざりし、とく／＼その楠を伐らすべし。と仰するに、乳母子な

りける、厚倉二郎太夫友春、すゝみ出でて諫めけるは、「怒特討の梓樹を伐り、陸亭の古木を倒して、怪巖に遇へりし事は、唐山の書籍に記して、君もよくしりてぞ坐すべき。千載を經る樹には、かならず木精あり。これを伐る者祟りをうけし事は、枚擧ぐるに違あらず。是れ僻しながら、樹の人に殃するにはあらで、天その驅客を櫓み給ふかと思し。彼の米谷なる楠も、山兒等が斧を斃れ、既に千載の大木となりて、その木下闇、旅客の煩ひとなるを、枝だに伐り透かさざるは深き故ありぬべし。かかる事は、いく度も思ひかへし給はば、後の患へなからんか」と、いはせもあへず、順昭忽地氣色かはり、「やをれ友春、かばかりの事を汝にいはるべきか。物の祟りなどして恐れ惑ふは、婦女子のうへにあるべし。わが采地に生きとし活けるもの、おのれノノが世を經るは、みな是れ誰が疵みぞや。既にその澤を蒙り、その恩をしることあらば、物の用にたたまくこそ思ふらめ。まいて草木は非情なり。汝山なき事を申して、衆人をなまどはしそ。翠はつとめて彼の山に赴き、みづから下知して、楠を伐らすべければ、典膳は樵夫等に令れしらして、用意せよ」と急がしつゝ、衝と座を立て奥に入れば、厚倉ふたゝび諫むることを得ず、みな諸ともに退出けり。かくて順昭は、次の日の早日に厚倉二郎太夫以下影の従者を將て、米谷山に到るに、蟻松典膳は先だちて、樵夫等を集へて伺候せり。その時順昭馬より下りて、牀几に尻をかけ、件の楠を向上ぐれば、枝葉參差と入りちがひて半天を覆

ひ、幹の太さは十歩にして、なほ繞り果つべうもあらざれば、莞爾として左右を見返り、「物は求むるによつて集まるといへど、得ると得ざるとは、その人の徳にあり。われ又今茶亭を造らんとするに、天この良材を與ふ。これわが徳なり。時をうつさず伐らせよ」と下知するに、いと老い虯ちたる樵夫二三人、おそろく領主のほとり近う出でて申すやう、「畏けれど、面のあたり聞え奉るべきことあり。殿の御威徳をもて、この樹を伐れ」と宣はするを、固辭へ奉るにはあらねど、この楠は昔より、神とし崇めて、楠木樵る男も立ちよらず、落葉搔く童も近つかず。見そなはする如く、周りには注連を引きまといひて、人の慙ふことだに許さざるを、無下に伐らし給はんには、かならず大きやかなる祟りあるべし。加旃、幹は石よりも堅やかに見えて、靱く斧もたち候はじ。廣き大和の山々を索ねんに、この樹に劣らざる楠の、なきこともあるまじければ、けふより百日を限りて放べ給へ。わかきものどもを伴ひて、外を索ね候べし」とまうすにぞ、影の樵夫等も、三人の翁が後方につき、もろともにかき口説けば、願聞きもあへず、かやノ、とうち笑ひ、「汝等草鞋大王の故事を聞かずや。腐ちたる草鞋も崇め祀れば靈驗あり。愚民これを悟らず。この樹の叢經たるを奇として、遂に神とし崇むればこそ、鬼魅罔雨の柙とはなるなれ。汝等伐らばとく伐れ。もしわが命に従はずは、かかるべきぞ」といきまきつ、刀をすらりと引き抜いて、注連を丁と切れば、左右へふつとわかれ

飛んで、船もはらりと散亂せり。樵夫等はこの形勢を見て戦れ慄き、「さらばまづ枝をおろし候はん。」とて、五七人桶の梢に攀ぢ上り、枝より枝へ長やかなる麻索を結び著けて、八方へ引き渡し、おのの斧をふり揚げて、一二の枝を丁と打てば、斧は閃りと反ねかへり、少し削られたる木皮の間より、鮮血さつと流りて、樵夫等が面上にふりかゝると見えし、上なる七人墮ちきて、しばしもたまらず拵と墮つれば、下なるものは壓しに打たれ、或は斧にて手足を傷られ、半死半生なるもの十餘人、墮ちたるものは即死せり。さすがに勇き順昭も、この爲體に舌を振ひ、思ひたのたふ氣色なるを、二郎大夫早く曉得つて聲を低うし、「かくあるべしと思ひつるをもて、きのふ申せしを用ゐたまはず、罪なき樵夫を殺し給へり。過つて改むるに憚ることなかれとか、今は是れまでなり、努思ひとゞまり給ひぬ。」と諫むるに、順昭は一言の回答もなく、只顧に歎息し、やがて馬にうち乗りて、既に歸らんとしたりしが、蟻松典膳を近く招き、「樵夫等がこと、その妻子の嘆きも不便なり。死したる者には棺を與へ、傷きたるものには、薬をとらせよ。」と聞えおきて、轡づらを引きかへせば、従者等列を整へ、草葉の露を拂ひつゝ、奈良を望していそぎぬ。領主さへかくのごとくなれば、樵夫等はしばしもこゝにあらんことのおそろしくて、或はその友の屍を担ぎ、或は病めるを扶け掖きて、おのが家にぞ歸りける。こゝに城下郡、佐保莊なる柴賣に、赤根半六といふものありけり。先祖は楠正勝譜代恩願

の家隸なりしが、明徳三年二月のころ、正勝千早の城を落ちて、天津川に漂流せし後は、大和なる親族をたよりて、佐保莊に住家求めしより、今の半六に及びて既に五代、久しく片山里に零落し、柴を賣りて活業とすれば、文學に疎き身も、朱買臣が青雲の志を羨み、いかにもして舊の武士にならばやと思ひながら、家貧しければ、發跡づるよすがもなく、妻を娶りしより十年に餘りて、その名を簞篠と呼べるが、これも山緒ある武士の浪人、何がしが女兒にて、はやくより孤となり、いくその艱苦に人となりたれば、物の哀れをもよくしりて、心ざまの正しき事は、富めるかたにもたち勝り、夫を諫め、手に教ふるなど、女子にはいと稀にて、一子半七も、今茲はや、十才になりつ。この兎母にや似たりけん、その性の怜悧しきはさらなり、容止端正にて、ふり亂したる鬢髪も、なんとなく勻やかに、垢つきたる針目衣も、おのづから鄙びず、「柴賣の兒にはいとほし」とて、親しきも疎きも、稱めざるはなかりけり。然るに赤根半六は、この日樵夫に驅り催されて、米谷山に到り、はからずも杪より落ちたる者に蹴仕され、株にて膝を打ちしかば、「二三間轉びのきて、簞篠の中に臥したるを、樵夫どもは只一足もはやく歸らんとて、慌忙しき程に、半六が簞篠に、覆ひ躲されて臥したるをしらすして歸りにければ、遂に半日あまり昏絶りて、物の善惡をわきまへず。日も暮れ夜も深けのくまに、梢を過ぐる山風に、楠の葉末の露吹きはらひ、はら／＼と降りか、れば、一滴の白露、半六が

咽喉のどに入りて、俄にはに避い生かし、こはそも爰ここはいづ地ちなるらんと、まどふ心を推おし鎮しづめて、つら／＼けふの事ことを思おもへば、打うたれし時に昏た絶たりたるを、樵きこ夫ら等らが情なさけなく、うち捨てて歸かへりけん。さても危あやき命いのち拾ひろひぬ」と獨ひと語りちて、やをら身を起おこせば、耳みみに馴なれたる溪水たにづみも、何なんとなく凄しみまじく月つきさへ入いりて路みちもわかねば、ます／＼呆あれて茫ぼう然ぜんたる折をりしも、誰たれとはしらず、楠くすのきの下もとにうち相かた語らふ聲こゑすれど、野の干ば玉たまの闇やみなれば、咫し尺せきの間あひもたえて見えず。あやしや、彼か處こにもわれに等ひしく、捨すてられたる人ひとありけんとて、既すでに呼よびかけんとせしが、なほ疑うたひて、その相かた語らふを聞きくに、一人いちじんがいふやう、「いかにわが神力しんりきを見たりや。たとひ領りやう主しゆ、この國中こくうちうの人ひとを鞠つくして來きるとも、何なん程ほどの事ことをしいだすべきこと、誘ほりかに聞きゆれば、一人いちじん答たへて、「いな／＼さはいひそ。もし知しれるものありて、暮ひ日びして足あ下こを疊すらせ、その根ねに鹿ひ尾び菜さいの烹に汁じゆを沃そぎかけ、しかして後のち斧きを入いれなば、今いまの廣くわう言げんもかひなからん」といふに、はじめの一人いちじん、いたく驚おどける聲こゑにて、「やよみわそぎ、忌いむことはいはぬものぞ。事ことのその期きに及およぶんには、天てんなり命めいなり。もし縁こゝろ故もとをしりて、われを研きるものあらば、終つひには活いけみ殺ころしみ思おもひしらせん」といふを、一人いちじん聞ききもあへず、呵あく々と冷あ咲わひ、しふねきことをいふものかな。みづから天てん命めいなりとらば、怨うらみすとも止とみねかし」と回い答たへて、その後のちは音おともせず。半はん六りくこれを聞ききて思おもふやう、三みつ輪わ出での神しん木ぼくに、千ち歲さい經けいる杉すぎありとは、世よの人ひとのしる所ところにして、今いまみわそぎと呼よびかけしは、三みつ輪わの

杉にて、彼處の木精、この楠が歿せらるゝを訪へるなるべし。こはよき事聞きぬと歡び、その夜の明くるをまちて山を下るに、思ひのほか健かにて、足の運びも常にかはらねば、只管に路をいそぎて、佐保の莊へ歸りけるとぞ。

木精の怪異

半六が妻齋條は、「米谷山にて、人夥死したり。」と傳へ聞きて、安き心もあらざるに、日は暮るゝに夫は立ちも歸らざれば、いよ、あやしみて、一子半七を走らし、彼此と問はずれども、定かにしれるものもなし。あまりに思ひかねて、通宵門方に立望みつゝ、明けゆくころより、里人を郷導とし、彼處に素ねのくべしとて、飯も常よりははやく炊ぎ、その準備してありけるに、半六恙なく歸りしかば、嵐の後に花をながめ、兩夜に月を見る心地して、や、宿を撫でおろし、半七とともに、夜べよりの心づくしをかたり出でて、歡ぶこと限りなく、「いづ地にか宿りたまひたる。歸らじとならば、人に言傳てても聞え給ふべきに、寢よというても半七が、共に目睡まで明し侍り。安堵て後はなかく、に恨むも心やりなるを、あしうな聞き給ひそ。」といふ。半六は只茫然とうち喚みつゝ、草鞋靴ぎすてて地杭の邊に座を占め、「きのふ直に歸らざりしは、如此々々の故なり。」とて、墮ちたる人に賦作され、息絶えてありし事、一伍一什を物がたり、さていふやう、「常言に過ちの功名といへるがごとく、われ

はからずも、身を立て家を興すべき時を得たり。その故は、昨々米谷山なる菅竹の中に臥して、楠の木精と杉の木精がうち相語ふを聞くに、彼の楠を伐らんには、「墓日をもて木精を整らせ、麁尾菜の煮汁をその根に沃ぎかくる時は、斧を入るゝに容易し」といへり、わが先祖は、弓馬の達人なりと聞けるが、嗟、曠墓日の射法、家に傳へて今に喪はず。われ彼の楠を斫つて、領主の所感に過はば、絶えたる家をも興すべし。この事人にもらしたまふな」と密語くにぞ、半七は父の怪談に味を進めて、顔うち晒りたるに、筆篠しばし深念して、「木精のみづから滅ぶべきよしを聞かせしは、いと怪しくも侍るかな。しかはあれ、領主の威勢をもて、伐ることのかなはざるを、おほつかなき言をたのみて、爲損じ給はば、世の胡處となるのみならず、罪得がましき所爲ならずや。又爲課をたまふとも、その榮りあらんには、わが身はさらなり、半七がゆくするも不佞なり。又榮りなきにもせよ、先祖は楠殿に住へて譜代相傳の家隸なりし」と、日來いひ出でたまひながら、心きたなく榮利を計りて、さすがに古主の名にし負ふ、楠を伐りたまはんは、名詮自性の理とやらん、末榮ふべくも思はれず。智恵才學にも及びがたきは、世の人の貧幅なりと思ひたえ、時を待ちたまはんこそ、遙かに心安からめ。まけて思ひ止まりたまへ」と、いと賢くも聞ゆるを、半六聞きも果てす頭をうち擡り、「物を思ひ過すは、婦女子の生平なり。いにしへの人も、天の與ふるを取らざれば、却つて禍を受くとこそい

へ。尋常にして彼の樹を伐らば、栗りを棄くることもあらん、法をもてする時は、怕るゝに足らず。又楠は古主の名氏なれば、伐らじといふこといと愚かなり。世に久米氏に仕ふる人は、主の名氏なりとて、米を食はでやはある。かくいふもわが身ひとつの爲にはあらず。御身こゝに嫁りてより、既に夥多の春秋は經れど、身には襤褸、口には糞、それを懶しと思ふ氣色も見せ給はねど、わが子乍ら人並に勝れたる半七を、世にもしらぬ深山木となし果てん事、いとほしからずや。婦恰惻しくて、牛賣りそこなふとぞいふなる。かからん筋は、御身がしるべきにあらず、何事も打ちまかせ給へ。と回答へて、聽き納るべうは見えざりし。實にや信言美ならず、美言信ならず。愚かなるは良薬の苦きを憎み、才あるもの亦人の諫めを阻む事多し。籬條は、日來より思ふ事をば思ふがごとく、よくもあしくもなし果つる、夫を今も諫めかねて、袖に露漏る言の葉も、たらはぬ此の身とばかりに、強ひてはふた、びいはざりけり。かかりしかば半六は、次の日奈良に赴きて、蟻松典膳が宿所に呼門ひ、「これは佐保の莊なる、赤根半六と呼べる、ものなり。密かに聞え奉るべきことありて参れり。願はくは對面を許させたまへ」といはせければ、典膳やがて呼び入れて、その故を問ふに、半六は膝行頓首し、「領主近曾、米谷の楠を伐らせんとし給ふに、怪異ありて果し給はずと、風聞するは實なりや。僕輒く、彼の輒を伐つて進らすべし。この事申さん爲に、推参いたせし。」といふ。典膳これを知

きて冷笑ひ、「汝いかばかり膽の太くて、かかる戯言をまうすぞ。彼の樹を伐らんとしつるものは、立地に命を預せり。是れ木精の祟りなり。博士の説に、木の精を彭候といふよし白澤の圖に見えたりとぞ。もし命に缺替あらば許すべし」と回答へするに、半六容をあらためて、「扱は、僕が身の賤しきをもて食言とし給ふか。いかで貴人に對ひて、故なき事をまうすべき。千載経る樹には、木精ある事をしり給へども、これを伐るに法ある事をしり給はねば、勞して功なきのみならず、夥の人を傷ひ給へり。しかるにわが家、不思議に木を伐る法を相傳す。領主の御威勢は、肩を比ぶるものなく、百萬の強敵といへども、肩とし給はざる御身をもて、唯一株の楠を斫り果さず、世の胡盧となり給はんは、勞痛し。僕世々この國の民として、妻子を養ふこと、みな領主の賜なりと思へばこそ、命を的にして、寸忠を竭さんとするに、用ゐられざるは不遇ならめ。せひに及ばす」と呟きつゝ、いと本意なげに出でんとするを、典膳忙はしく呼びとゞめ、「うらし汝がいふ如くならば、莫大の忠節なり。しかれども突めてなしがたき事なれば、併々しくも信ぜざりし。いよ、爲課すべきや」と問へば、半六莞爾として座に復り、「生きとし活ける者、誰か命の惜しからざらん。もし木精の祟りを忍かば爲課すといふとも、僕立所に死すべし。又爲課せば罪せられん。かく危きをしりつゝ、申すをもて、虚費を察し給ひね」と、憚る氣色なく答へしかば、典膳やうやくに納得し、まづ縁由を聞えあけんとて、

半六を退かし、直に出仕して、首尾を述べしかば、順昭大いに歡びて、「我も愁ひにして已みなん事を、口をしくは思ひながら、眼のあたりなる柴りに怕れ、重ねて彼の樹を斫れ。」といふとも、衆人承引かじとて黙止せしが、半六とやらんが訴訟へ、聞くもいと潔し。まつ彼が隨意計らはして、成る成らざるを試み、いよ、爲果せたらんには、一廉の賞錢をとらすべし。とくく。」といそがせば、典膳うけたまはりて宿所に退き、ふたゝび半六を呼び出して、領主の仰せを説きしらし、「汝が一世の浮沉こゝにあり、思ひ悔りて爲損する事なかれ。事成就せば賞錢は、望みの隨なるべし。」といふ。半六額つきてこれを聞き、「僕元來賞錢を願はず、先祖は河内の正勝に仕へて、數代武夫なりしかど、楠家没落の後、いと寒々しくなりて、祖父のときより柴を賣り、活業といたせども、さらに武士の志を失はず。あはれ此の度の恩賞に、舊の武士となし給はば、先祖への孝、身の面目、これにますこと候はじ。もしその期に至りなば、よきに執し給はれかし。」と希へば、典膳點頭きて、「その事は仔細なし。汝いづれの日に、かの樹を伐るべき。」と問へば、半六答へて、「明日より七日が間は、齋して法を行ひ、第八日に至らば事成るべし。しかれども、件の大木を、僕一己にて伐らば、徒らに日を費さんか、既に斧を入れて、その柴りなきをしらせ進らする後は、樵夫等に仰せて斫らせ給へ。」といふに、典膳しばし優へて、「さらば第九日めに、われ樵夫等を將て彼の山に到るべし。かならず時

目を遣へな」と、互に固く約束し、半六は暇賜はりて、己が家路に歸りけり。さる程に赤根半六は、次の口より齋して、墓目の射法を修し、第七日めに至りて、鹿尾菜の煮汁を桶に汲み入れ、米谷山に擔ひゆきて、桶の根に沃ぎかけ、さて詰旦、斧麻索などを用意して、ふた、び彼の樹の下に到れば、奇なるかな、さしもの大木、一夜の中に凋みて落葉堆高く散り積り、株の間に、大きやかなる穴出で来て、蟬に等しき蟻ども、數限りもなく、その穴を跋ひ出でて、皆悉く死してあり。半六はこの形勢を見て、且怪しみ且歡び、扱はこの桶の木精は蟻なりけり。桶の古木には樟腦を生じて、蟲の著くことなしといへるは、虚言にてありけるなり。今は心易しとひとりごち、落葉を掻き集めつつ、用意の火繩をさし著けて、死したる蟻を燒くに、殊さら大なる蟻一匹、なほ死にもやらでありければ、前の夜、三輪杉と相語へるは這奴なるべしとて、斧もて額を打ち碎き、もろ共に灰となせば、煙高くたち昇りて、西北を斥して空引きつ、半天にして消え失せたり。正に是れ、蟻の思ひも天に昇りて、窻みを天帝に訟ふると、世の常言も故あるか。むかし董昭之は、蟻を助けて福を稟け、又桓謙といふものは、蟻を殺して福にあへるよし、載せて搜神記に審なり。輪廻應報の理は、蟻といへども漏ることなし。されば半六、この樹を伐つて、一日身を立つるに似たれど、終に南柯の夢と覺めて、その兒半七憂苦に迫り、父よ母よと鳴く蓑蟲の、蓑屋が軒の木がらしに、花も紅葉も難

波なる、身のよしあしを語はる、これその縁起なり。

丹波部が傳

そのとき半六は、只管雀躍に堪へず、「豈は新東の日限なるに、われまづ一枝をおろしおきて、この奇持を示さずば、この功他人に奪はれたん。しかなり／＼」とひとりごちて、さら／＼と攀ぢ上り、街道の方へさし出でたる枝に素を著けて、木の上に身を固め、腰なる斧を脱き出して、ちやう／＼はつしと祈る程に、思はず斧の柄を脱けて、髷へ敲と落つる折しも、伊賀路より大和を経て、山城へ出づるにやあらん、背に裏の獸も、小妻木綿のや、破れし、櫛の筥に竹の杖、木立いぶせき山路を、たどる／＼来る盲人ありけり。親子と見えて只一人、年まだ七つか八つばかりなる、小女兒に手を引かれ、谷より木垂れし楠の下を過らんとする處に、半六がとり落せし斧、彼の盲人が笠の上に閃き懸り、項をさつくと取り拆かれ、「叫苦」と一聲叫びもあはず儼しに仆れしかば、女兒は周章きつゝ、「爹様なう」と呼び活くる、涙に聲も立ちあつ居つ、せん備もなく見えたりけり。浩かる處に藤條は、猛き夫を諫めかね、わきてこのことの覺束なく、午後運ぶに假託けて、三里の路をはる／＼と、半七を伴ひて、はしなく麓に望しか、り、吐唾と走りよるべなき、旅客が血に塗れて、生死も定かならざるを、いかにせんとて泣き叫ぶ、稚き人の心の中、思へば見れば痛ましく、彼の三峽の哀の猿、腸

を斷つ許りにて、共に濡らせる袖の隙より、持てる割籠をとり落せば、半七もかひなくしく、左右に立ち繞り、濟はんとするに華はなし、心づきなく簾條が向上ぐる峯の樹の上にて、枝をおろすは夫なり。さてはと曉ればいとゞなほ、淺ましくも悲しくて、此首の一人は聲を揚せ、わが夫なう、參々なう、とくだり立ちて旅客を、救ひたまへ。と呼びかくる、聲は御に響きあひて、手にとるごとく聞えしかば、半六ます／＼心驚き、件の案にとりすがりて、杪ながらに下り來り、この爲體を見て色をうしなひ、やをら盲人を抱きおこして、腰に著けたる吉野捲より、用意の定心丹をとり出し、その口に含ますれば、簾條はもて來りし、土瓶の温茶を飲ませなどし、きまんに介抱せしほどに、盲人やうやく息ふきかへせば、女兒は涙をかき拂ひ、やよ參さま、心地はいかにおはする。と、いふをしるべに携り寄せ、おさんは恙なかりしか。誰人ともわきまへねど、人里遠き山路にて、かかる介抱を受くること、世に有りがたき庇みなり。と、いふ言毎に息きれて、苦痛に堪へず見えければ、半六はその耳に口をさし著け、いかに旅客、われは佐保の莊にて、赤根半六と呼ぼる、ものなり。しかるに領主の仰せによつて、この峯なる楠の枝を、目今おろさんとするに、思はずも、斧の柄脱けて傷けし事、過ちなれば勸解ぶるに由なし。心づよく思ひ給へ。わが宿に作ひ歸り、療治して進らせなん。何國の人ぞ名告り給へ。と、問ふも面なき風情なり。盲人苦しき息の下に、濟々と落涙し、しらぬ大和

路にたどり來て、仇にもあらず恨みもなき、人の手斧に命を墮すも、みな前世の悪業ならめ。わが身はもと鎌倉の管領家、扇谷殿に仕へて、丹波太郎孝基といひしものなるが、故あつて退轉し、世わたる效のなきまゝに、夫婦竊かに談合して、ふりにし跡をつぎねふの、大和物語にあらねども、難波の浦の蘆刈が、あしかる縁と思ひたえ、女兒おさんが三歳のとき、飽かぬわかれに妻を去り、富貴の家に給事へ、發跡づる日もあらば、ふた、び環會はんとて、華洛へ上せし次の年、わが身はからず眼病を患へ、つひに瞽者となりしかば、稚き女兒を養育むに便著なければ、髪を剃り、わかかりしとき嗜みたる、四節の絲に繋ぎとむる、命かひなき琵琶法師、丹波氏をその儘に、丹波都と名告りて伊勢に起き、北畠家の城下に足を駐め、能住居すること五年あまり、六年の今におよべども、別れし妻はいかにかしけん、音耗なきも理なり。わが相模より移り住みて、伊勢にありともしらざるべし。しらせんとおもへど彼も又、いづ地にかあるやらん。華洛といひしを心あてに、女兒おさんに手を掖かし、引折りて短き旅衣、妻に逢はんと思ひたちて、竹の都をまどひ出でし、只一寸の竹杖も、折れては死出のやまと路に、露と消えなんはかなきよ。とてもかくてもこの瘡にて、存命ふべくも思はねど、恩愛のやるかたなき、泣かじとすれば聲蟬の息の内より惑ひぬるは、只この女兒があればなり。八歳といへど年弱にて、十一月七日の出生、丹波太郎孝基が女兒おさんと、父が手づから書いつ

けたる、臍者は今もなほ、女兒が項に掛けさして、護身囊の中にあり。又わが背負ひし獸包は、異國東來の樂器にて、その形阮に似たれど新ならず、三條の線をかけて弾くに、千萬無量の音を發す、鄭聲なれど味ひあれば、たゞ私に三味線と名づけ、年來秘藏するといへども、世に稀なれば入らしらす。されば夫婦が別れし時、この三味線の撥を拆き、再會の記念とせし、その片割はこゝにあり。親のなき子と憐まれ、人の情に生育たば、戀しゆかしと思ひ子の、おさんが母と名告りあふ、割符ともなるべければ、これは女兒にとらせたし。望みがましき事ながら、この三味線はわが體と、共に瘞めてたび給へ。もし後の世にこの樂器の、行はる、日もあらば、朽ちぬ名のふを呼ばれん。いと、いひ遺す言の葉は、今も大和の城下郡、三味田の里に佐保の莊、丹波市と呼ぶ三の郷を、三條の線に象りしは、是れこの緣故なるべし。簞篠聞くも痛ましくて、一世に形なきものの限り、我に増すことなからめと、思ひしより、昔にはかなきは、人様々の浮世ぞかし。過ちとはいひながら、旨ひし人をあやにくに、斧もて殺すは仙人の、茶に見惚れつ、幾世經し、故事とは逆にて、これも木精の榮りかと、思へば人の上ならず、よしやこの儘果て給ふとも、女兒御は吾儕が子とも嫁とも守育てて、亡父の跡世にしろる、母御に環會はし侍らん。雲々しけれどわが夫も、由緒ある人にて侍るなるに、一子の半七も、今茲は十歳になりぬれば、わが子の愛に人の子を、思ひ比べて痛ましや。これも過世の因縁な

りせば、成長る後半七に、おさんどのとやらんを妻はして、この過ちを償ひてん。寤みを散れて成佛あれ」と、聲も涙にかきくれて、いひ慰むれば半六も、臉を瞬きく、「簀篠いしくもいひつるよ。我このおさんを養育みて、半七が妻とせすば、この身も終に刃に伏し、汗名を路頭に遺すべし」と、思ひ定めし誓言に、丹波都はいと頼もしく、思ふ心をいへばえに、岩間の石滂涸れくくに、溢れし鮮血はとゞまれど、留めかねたるこの世の名残、おさんはよ、と泣き沈み、「日も見え給はぬ参さまの、一人はさこそ便なからめ。わが身諸共冥土とやらんへ、作ひ給へ」とかき口説く、聲のみ聞けど全般にも、見ることも難き女兒の貌、胸苦しさを思ひやりて、引き退くる簀篠が、勸むる念佛に半七も、うら悲しさに堪へかねて、親子々々が掌と、聲とを合はして、「彌陀佛」と、唱ふる中に睡るが如く、丹波都は締斷れてけり。けにや世路は旅に似て、ゆくも歸るも別れては、しるもしらぬも終の友、後る、も先だつとも、夕の煙とたたぬはなし。儂なきものは命なり。さる程に簀篠は、おさんを賺しこしらへて、半七と共に伴ひ歸れば、半六は日の暮るゝを待ちて、密かに丹波都が屍を扛きもてゆき、佐保の願成寺に葬りつ、彼が遺言に任して、三味線を其の處に埋め、跡了寧に弔ひけるとなん。

三七全傳南柯夢 卷之二

東都 曲亭馬琴編次

稚兒の婦夫

蟻松典膳亞度は、曩に赤根半六が、米谷の桶を斫らんといひしこと、なほ覺つかなくはあれど、既に約束の日子にもなりしかば、夥の樵夫を將て彼の山に赴けば、半六は先だちて、山の半腹にこれ待ちあうけ、飄く爲課せたるよしを聞えしらして、もろともに樹の下に到るに、さしもの大木、俄頃てんぜんに湖然と落葉したるを、一この枝を斫りおとして、幹にもところく、斧の刃を入れたりけり。典膳は此の形勢を見て、且怪しむ且歡び、半六を見かへりて、一人の才あるとよなきとは、貴賤をもち論じがたし。野夫にも功者ありとは其許の事なり。曩の廣言空しからずして、領主も本意遂げ給ふ事、吹擧せしわが身に于て、こよなき面目なり」とて、只管嘆賞して已まず。半六聞きて、聊かも誇りたる氣色なく、「こはみな領主の御威福によつて、思ひし隨に成就せり。なほこの上の底みには、はじめ願ぎまうせし事を忘れ給はで、よろしく聞えあけ給はるべし」といふに、典膳點頭きて、「そはこゝろ安か

れ。ともかくもして、其許の風願を果させんこと、わが胸中にあり。」と應へしかば、半六ますく、
 阿彌誦ひ、さして樵夫に對ひて、「見らるゝごとく、已既に法をもちて木精を滅却し、その枝をおろし、そ
 の幹に傷けて、柴りなきをしらしたれば、おのゝく力を發はして挽き給へかし。」といふ。樵夫等は面
 のあたり、この奇特を見し事なれば、皆もろ共にこゝろ安堵て、しばしが程は、稱讃して鳴りも已
 ます。この日を手斧始めとして、件の楠を挽くに、七間四面の版二枚、五間四面の版四枚を得たり。
 その餘材、梁とし棟とすべきものは、枚擧ぐるに違あらず。順昭縁故を聞きて感復斜ならず。只
 この一本をもちて茶亭を造らし、これを審雨堂となづく。その號、南柯の蟬の故事に、稱へるご不思議
 なる。魏王の宮殿に蟬あり。審雨堂の三字を寫したるよし、後撰記に見ゆ。有在間に典藉は、頼りに半六を吹擧し、彼が先祖を尋ぬるに、
 楠正勝の老黨たりしとご。子孫凋落れて五世に及ぶといへども、今に武士の志を喪はず。弓馬の
 奧義も、をさし、家に傳へ、舊い武士にならまくほしうはあれど、家貧しくて、さるもがもふし。
 縦に家に巨萬の財を積むとも、金銀は失ひ易し。此の度の恩賞には、一握りの米にもあれ、領主の祿
 をばらいて、家臣の數にも入る事あらば、本望なるべし。といへり。けにその面魂物の用に立ちか
 ねまじう見え候に、あはれ莫大の御度みをもて、鞍を執り、蓑を牽かし給はばや。」と、信だちて申
 すにぞ、順昭氣色よく諾ひて、「能を擧げ士を薦むるは汝が職なり。功あるものをいかで賞せざらん。」

事の序あらば召し出すべきに、まづ當座の賞錢をとらせよ」と仰せける。然るに、輪男吉羅丸、今茲十歳になり給へば、鎧の被初めあるべし」とて、専らその用意をせらるゝに、年果の上旬に及びて、茶亭も成就したりしかば、頼昭これ彼慶賀の折をもて、赤根半六を召し出し、五十貫の酒地を備はりて、郡山北方なる、五條の村主を命ぜらる。かくて半六は年來の宿志を遂げて領主に拜謁し、丹波郡が女兒おさんを一妻の姫なり」と稱へ、簪篋半七と共に將て、五條の宿所に移り住み、手馴れし平を刀に換へて、一郷の成敗を管り、秣の運送など勤儉するを身の務めとし、日毎に奈良へ出仕する程に、いと下ごまなる司なれど、その郷にしては威勢あり。この爲體に、佐保の郷人等は更なり、親しきも疎きも、「こよなき立身なり」とて羨みぬ。夫れ渴するもの水を求むるに、水を得て飽く時は、更きも湯を求め、湯を得て飽くときは酒をおもふ。是れ人慾の愼み難き所なれば、半六既に年々是りて、領主の家臣となると雖も、その職役の卑きを厭ひ、いかにもして近臣の列に入り、おはし時を得て、政事に與る事もやとて、暇ある日は親しく典膳が家に交加ひ、彼の人の爲に志を運びて、冬は障子の隙を張り更へて、寒夜に爐の火を吹き、夏は屋裏なる蜘蛛を掻きはらひて、炎天に身を曝し、奴僕に如く奔走して、その隙に媚びたりければ、典膳ふかく歡びて、二なき人にぞ思ひける。この典膳か妻の名を敷浪と呼びて、冢子曾太郎は丸歳、女兒園花四歳にぞなりぬ。凡そ人、手をもつ時は、その愛

他の子にも及ぼすが、人情の常なれば、典膳夫婦も、半六が兒子半七が藩附けて心ざまいと怜愍しきを傳へ聞きて、折々それが安否を問ふに、半六は既に便宜を得たりと歡び、信だちて答へけるは、「しらせ給ふ如く、某原艱苦の中に養育みたれば、子を教ふる事も心に任せず。今の身になりては、子どもによき事を見も習はし、君の爲身の爲に、文學武藝も、その心がけなくてはと思ひながら、師を擇ぶことの容易からねば、猶おのがまゝに生育てば、久後とてもおぼつかなし。男の童は、走りまはれも健輕にて、召仕ひたまふには、老いたるかたに勝ることもあるべし。折ふしは半七を呼ばし給ひて、茶のかよひなどつかまつらせ給ひなば、彼が爲には大なる僥倖なり」と、只管媚びていひこしらへ、次の日半七を將て、典膳が第に到るに、曾太郎はよき陪侍得たりとうれしみて、そのほとりを離さねば、典膳夫婦も、又憎からずもてなしつ、食事なども曾太郎ともろともにさして、わが子のごとく慈しみぬ。しかるに眞篠はその志、夫に似ず、半七がしばく奈良へ行きて、典膳が家に止宿するを、傍痛く思ひて、ある日夫にいへりけるは、「わが身幼かりしとき、父がわかき人にも教へ給ひしを聞き侍りたるに、君に仕ふるもの、公事にあらざれば、執權の門に到らずとなん。然るに蟻松ぬしは、一の老臣にておはするを、日來親しく交加ひ給ふすら、心あるものは「なめけなり。」とて爪弾し、僻める人は猶しとぞおもふめる。何事も新参にておはすれば、木にも附かず草にも附かず、只

信やかに、その職分を守りてこそ在すべきに、年齒のかざる半七さへ、彼處へ立ち入りし給ふはいかにぞや。稚きものは心つきなくて、人の怒りを惹き出す事も多かり。かかる筋は、御佛に對ひて經を説くがごとく、わらはが申すまでにはあらねど、おほつかなきに聞ひなる、恐惶みづからこゝろし給ひね。」といふ。そのいふところ理あれば、半六は少しはぢらひたるおももちにて、その後は半七を奈良へ將でのかす。典膳夫婦はかかる事をしらず、彼方より迎への人を遣はしなれば、二條はまきに回答へて、「けふは爰し侍れば参りがたし。翌よりは、手習讀書の入門さしはべれば。」と、いひこしらへて奈良へ遣らず、またおさんにも、半七と共に手習させ、わが子人の子の分別なく、慈愛しむほどに、おさんは半六夫婦を、主のごとく親のごとくに敬ひ仕へて、孝順更にたくひなし。二條は、この舉止を見てふかく歡び、言の紋あるときは、半七おさんにいふやうに御身一人、かくひとつに生育つこと、過世よりの縁にやあらん。日來いひ聞かしつるごとく、久後はかならず夫婦とすべし。しからは半七は彼が孤なるを憐み、おさんは又わが夫なりとおもひて侮らず、互に睦まじうし給へ」といひ諭すに、二人の童はよくそのこゝろを得て、あらそひ逆らふことなく、出居も諸共にして、外の童とは遊ばず。只一つの果を得ても、割きて二つにせざればたうべず。こゝろもち近郷の人ち、その故をしりて、一に容姿の端正なると、心狀の伶俐しきと、何れ劣りも勝りませず、こほよき一對

の夫婦なり。」と稱むる毎に、二人は顔を報うして、物の陰に隠れけり。かくてその次の年の秋の頃、簾が左右の腕、俄頃に腫れて苦痛に堪へず、病みてより七日が間湯も水も咽喉に下らず、心持死ぬべく覺えしかば、枕方後方にありける、夫と二人の童を見かへり、さて半六にいへりけるは、「わが身此度の病著は、癒ゆべうもおほえ侍らず。つらく來しかたを思ひつゝくるに、病みつきたりしは去年の秋、御身が米谷の桶を伐らんとて、曇日の法を修しはじめ給ひたる日にて侍り。これやこの身に報いけん、左右の腕の疼めるは、一二の枝を断りおとせし、棠りをわが身一つに棄けて、夫兒のうへに恙なくば、是れにます僥倖なし。しかはあれ、なからん後の心が、りは、半七おさんが事ごかし。願はくば簾が生きの中に、妹脊の縁を結ばして、儀式は整はずと、面のあたり杯さしてたびね。」といふ。半六聞きてうち點頭き、「桶の棠りならんと思へるは、究めて御身が惑ひなれど、半七におさんを妻はすることは仔細なし。しかれども、おさんはまだ十歳にだも足らず、半七もや、十一歳の童なれば、ゆくすゑ遙けき事なれど、御身が心やりともならば、そはともかくもすべし。折しもあれ今日は黄道吉日なり。日今彼等に杯させなば、おさんが父の亡魂も、よろこばしうこそ思ふらめ。しからば御身が命を延ぶる功德、是れにます事なし。」と應へて、俄頃に半七に袴著せ、おさんに衣被更へさして、簾が枕方へ左右に對ひ坐らし、焚婢に土器の用意さし、鬘蛇に銚子とりそへて二人

が間にするたり。そのとき筭篠は、や、身を起してわが子とおおきんを見かう見、涙を潸然と落したるが、又莞爾とうち笑みて、「塵に似つかはしき夫婦なり。玉椿の八千代までも、呪ふかたらひて、子孫影儲け給ふべし。」言あらためていふにしもあらねど、過ちにもせよいぬる秋、丹波部どのはわが夫の、斧をもちて命を断さしたれば、おきんが媽には冤家なれど、その過ちを償はんとして、貧しきときより養ひとり、今半七に妻はすれば、半六どのは丈翁なり、將養育の恩高きを省みて、等閑にな思ひ給ひそ。半七は亦義理ある妻といふを忘れず、久後いかなる事ありとも、生涯おきんを見捨て給ふな。かくいひしらするとも成長りて、思ひ忘るゝ事もありなん、互に忘れ忘れざる、誓ともなるべければ、今おきんが護身囊と、半七がとを交易へて、膚離さずば妹と夫の、誠を神も憐み給はめ。殊におきんは半七が、年歳とその名に象りし、十一月七日の誕生と、爹々の手づから寫し給へる、臍帯もその裏にあり。半七は又おきんが、名にし負ひたる三月の、しかも三日の誕生にて、わが書きつけたる臍帯は、護身囊に納れてあり。時にとりては是れも又、奇しくも故ありけなり。女の娘みごゝろなきは、百の拙きをかくとぞ。貞女義男の故事は、賢き人の記しおける書見てもしり給へ。他し人に心を移して、母が遺言に悖るものは、不孝の子不義の輩なり。よく臍帯の書をかためて思ひ懐ら給ふべからず。是れは是れ夫婦が上の誠めぞかし。おきんはまた三歳の時に、別れし母御ありと聞けば、神

涕に斬念して、ひかれよるべは二味線の、撥を割符に環會ひ親子の名告りし給へよ。半七も力を盡はして華洛へ上る序あらば、外ながら彼の人の、往方をより／＼聞き定め、その夙願を果さし給へ。忠孝の道はいふも更なり、聞かすべきは只是れのみ。命長くて諸共に、五十年忌の季までも、わがなき後を弔ひ給はば、草の原にていかばかり、うれしからめと思ふにも、名残をしや。とばかりに、掩ふに餘る恩愛の、涙に袖はそほぬれて、項に掛けたる手どもらが、護身囊をとりかへさし、夫のかたへ會釋すれば、半六やがて土器を、おさんが側にかしつくる、三々九度の勸杯も、今ぞ戴く親の恩、半七も語ともに、母の教訓身に入みて、涙に濁す味酒の三輪の亭環くりかへす、婚媾の式果てにけり。かくて後進縁は一言もいふことなく、みづから臨終を待ちたるが、その曠昏に、彌陀の寶鏡十篇ばかり唱へつゝ、卒然として絶斷れぬ。思ひ設けし事ながら、今更に淺ましくて、半六が悲傷はさらなり。半七おさんは、天に叫び地に倒れて哀しみ悼み、紅涙空しく枕を浸せり。さてもあるべきにあらざれば、半六は次の夜に、妻の送葬かたのごとく誓むに、丹波都が一周忌もこの日に當るをうて、共に經讀まして、追薦の佛事を執り行ひ、よろづ寂寥しくご日をおくりぬ。

なら坂の佞人

待つとはなしに半六は、妻の忌果てしかば、萬のごとく出仕して、典膳が宿所に交加ひする事、は

じめより親しかりけり。しかれども半七は、往に簀篋が阻めて後は、奈良へのゆくことなかりし程に、ある日典膳夫婦半六にいふやう、「何事の意に稱はざるやらん、久しく半七を見ず。わが子どもらも徒然がちなるに、曾太郎園花と諸共に、南園堂へ参らして、遊山させばやと思ふなり。母のなき子は、衣服何くれの事も便なからめ。親はかならず半七を將て來給へ。五七日こゝに留むるとも、何か苦しかるべき。」といふ。半六聞きて、「今にはじめず、かく懇切に聞え給ふ事親子が儻儻なり。亡妻はその性遠慮ある者なりければ、稚きものの親しく参ること、罪得がましき所行なり」とて、呼ばし給ふを固辭み候ひし。官ふ由を聞えしらせんには、半七もさこそ歡び候はめ。近きに將て参り候べし」とて、五條へ歸ると覺て、半七に縁由を物語りて、「奈良へのゆけ。」といふ。半七は母の遺言を守りて、「出づるにも入るにも、おさんと諸共にせん」と契りしかば、ひとり奈良へ行くことを歡ばず。おさんも又彼を放ちて遣ふことを喜ばず。いたくいひ懲らせば、潸然と泣きしをれて、立ちもあがりけり。程に、半六ほとくもてあまし、半七を曾太郎が武藝の師に入門さして、日毎に奈良へかまほし、それぞ日記に、典膳が方へ遣はしけり。かくてぞおさんも留むることを得ず、半七も推辭みがたくて、努めて奈良へ赴き、稽古果てて後、曾太郎に伴はれ典膳が家に日を暮す事も多かり。元來伶俐しき童なれば、ある日の夫婦その動止を見て、只顧に稱讚し、ある日典膳は妻の敷波にいふ様、「女兒園花は

僅かに五歳なれど、女の童は大人めくも早ければ、孫はまづ彼よりぞ見るべき。然らば今より婿を擇みて、生涯を安らかに過ぐさせんは、親の慈悲なり。我日來半七が擧止を見るに、その才の長けたること、廣き奈良の藩中に、二人とあるべうも覺えず。彼が父半六は、新參にて五條一村の吏なれば、わが女兒を遺嫁すべきものならねど、かかる筋は期に及びて、ともかくもなりなん。人は得がたくて喪ひ易ければ、まづ半六に情由をしらせて、彼が回答を聞かばやとおもふなり。御身がこゝろいかにぞや。」と問ふに、敷浪しばし尋思して、「半七が事は、わが身もさおもはざるにあらねど、近屬人のいふを聞きはべるに、半六が妻世にありし時、それが姉の女兒とやらんを養育み、久後はわが子に妻はせんとて、假に婚姻の杯さへ、事済ましたりとぞ。もしこの言實にて侍るならば、相語ひ給ふともかひなからん。よしや彼の人、御身が祿高くて、威權あるを羨み、異議なく承引く事ありとも、幼きよりのいひなづけし、妹着の中を引き裂きて、園花を遺嫁せんは、譏りを惹くの媒ならあ。よくよく思ひ廻らし給ひぬ。」と回答すれば、典膳聞きて冷咲ひ、「半七はなほ總角にてあるに、婚姻をとり締るるといふ事その謂れなし。こはとまれかくまれ、面のあたり半六に問ひてこそ。」といふ折しも、若黨何がし、外面より障子を細やかに押し開きて、「赤根氏の詣來給へり。」と告ぐるにぞ、典膳聞きもあへず、「それ此方へ」といへば、若黨は障子を齧の如くにして退出で、敷浪も次の間に入りぬ。浩かる

處に、咳三つ四つして、半六は書院の縁頼傳ひに入り來りて、その安否を訊問ひ、扱ひやう、このころは、木の葉落しとやらん申して、師走よりも却つて寒けし。これをめさるべくは、某毛を引きて進らすべし」といひかけて、携へ來れる袱包をうち開きつ、さし出すものを見れば、鴨一番を青き目籠に入れたり。典膳はその志の淺からざるを歡び聞え、ちかく爐のほとりに招きて、四表八表の話の序に、半七が伶俐しきを稱めていふやう、「我久後は女兒園花を半七に妻はせんと思ふ、心がまへありといへども、其許の内室世にありしとき、姪女とやらんにいひ名づけて、半七が妻と定めおきたる山、風聞あるをもて、深く望みを失へり、その事實言なりや」と問ふ。半六はこれを聞きて、満面に笑みを含み、「こは思ひもかけぬ事をうけたまはるものかな、新參の半六が兒子に、一の老臣の息女を、一妻はし給はん」と宣はするは、それこそ實言ともきこえ候はねど、亡妻が姉の手の、孤なるを養育むこと、これは人となる後に、婿を招りて、その家を繼がすべきものなれば、半七が妻にはしがたし。しかるを彼等が年紀も似つかはしくて、諸共に生育つを見て、さる風聞をするものありとも、みな推量の説なれば、論ずるに足らず」とて、誠しやかに陳ずれば、典膳忽地膝をすゝめ、「しかるときはこの婚縁整ふべし。さはいへこの事、今は人にしらがたし。半七も齡十を越え、園花が二八の春を迎ふるまではなほ遙けし。そのころには、其許も一等をすゝみ、半七も新たに仕へて、秩

縁父にまさせんとも、又親子もろともに、舊の紫實になさんとも、わが心一つにあれば、よも偽りは宣はじ。いよく其許に聖護なくば、けふは事のはじめなり、めでたく一戲酌むべし。」といふに、半六深く歡びて、「もしこの婚縁を破ることあらば、意の隨に罪なはし給へ、たえて恨みなし。」といふ。そのとき敷浪は、屏風の後より出でて半六に挨拶し、女兒が婚縁と、のひて、歡ばしきよしを聞え、やがて彼の鴨を煮こし、なほ種々の葷を添へて、賓主二人酒も遊び、終日相語ひ樂しみけり。かかれば半六は、はからずも立身の便宜を得て、はや老臣にも昇進したるこ、ちしつ、遂に婚縁が遺言を用ゐず。慾には義をも誓をも打忘れて、ます、典膳夫婦に媚び倂ひ、只顧わが兒の成長るを待ちわびて、引きも伸ばさまほしきにつけても、つらくと深念するに、由なき義理に絆されて、簪篋が臨終に、おさんを半七が妻と定めおきたれば、彼等輩ごゝろにも、母の遺言なりとて、いと睦ましく物すなるに、年間けてはいよ、引き離すに便なからん。その時この故障によりて、蟻松氏の婚縁、いたづら事となることあらば、わが親子いかになるからきめ見んも届りがたし。しからば今よりともかくもして、密かにおさんを迫ひ失ひ、後の患へを絶つにはしかじと、心一つに思ひ定めてしが、事は漏るゝに易しとて、かるくしく手を動かさず、専らその便宜を窺ひぬ。こゝに亦、近曾奈良の大佛のほとりに、笠松平三といふ藥商人ありけり。この平三はもと浪速人にて、旅芝居の俳優を興行し、

伊勢の古市、泉州堺、尾張の年魚知、美濃の稻葉山はさうなり、周防の山口、長門の下關、すべて都會繁華の地は、到らざる曲もなかりしが、去年の十月、五七人の俳優を將て、西國へ越く折しも、難風にその船を覆され、俳優等みな大魚の腹に落られたるに、その身は幸うじて、筑紫船に助け乘せられ、奇しくも活き残れども、遺らぬものは行李路銀にて、忽ち生活の本錢をうしなひ、いかにともせん術なきに、とかくして奈良まで立ち歸り、川上の南にかすけき旅宿を求め、日毎に大佛のほとりに出でて、あら筵布きまはし、鼓鼙鼓の膏藥をひさぐ。その打扮いかになれば、前には首尾具足したる熊の皮を置いて、熊膏藥といふ三個の文字を、筆黒に寫したる、紙の幟をおし立て、栴葉の頭巾を戴りて、丹田山木綿の古布子に、でんちゆうの袖なしをはおり、あるは貝に入れ、或は紙に押し許べたる膏藥を處せきまでにならべおき、鳥獸の聲音を假せて、往來の老弱を集合へしかば、人みな彼を口順みて、熊の平三郎とぞ稱へける。折しもあれ赤根半六は、高天神のほとりに所用ありて、大湯の門前を過るに、件の平三郎と暖氣なる日南方に座を卜め、彼此人に對じて、高やかにいふやう一世に、人の薬は影あれど、僕が製するところは、見たまふ如く熊の脂に、家傳の薬種を練りあはしたれば、衣服に附かず又痒觸せず。一たび用ゐる人は、一切腫物の根を斷ること、その功神のごとし。是れ則ち周の文王の夢に見給ひたるあら熊の脂をもつて、三國の名醫、華陀が製しはしめしを、猪ど

いふ、人の妻、嬖娥が盗んで月の中に走るとき、宋人が川に出でて、布を洗ふに通をうしなひ、彼の人に傳授せしを、吳客がその法を百金に買ひとつて、軍に勝つたる妙薬なり。僕弱かりしとき、猶夫なりしが、ある口山にて異人より、この薬方を授かりしかば、世の助けともなれかして、此度人の薦むるにまかし、南都に出でて賣り弘むるものなり。この膏薬一具を買ひ給ふ人あれば、鳥獸の聲をつかひわけて聞かしまるらすべし。往昔より鹿笛、鶯笛などとして、笛をもてその音を似するは珍らかならず、凡そ鳥獸は、引く音曲る音、急促る音の三つありて、不正半濁の音なれば、かならずしも人間とおなじからず。彼の笛をもて似する如き、譬へば犬のわんと鳴き、鼠のちうと鳴き、熊のはんと鳴き、鹿のひいと鳴く、又鳥のかあゝ、家鴨のぎやつく、總て急促るところに、隠々と響きある、眞の鳥獸に比ぶれば、笛の及ぶべきにあらず。よくその妙を得たるもの、唐山にては、孟嘗君が鶏鳴の客、日本にては、かくいふ平三、一只一人のみのもしこの中に、犬の叔母さま、家鴨の姉御など、ま在さば、僕が申すところ、虚なりや實なりや、よくしめておはすべし。」といふに、立ちこみたる老弱咄と笑ひて、膏薬を買ふもあり買はざるもありて、おのがさまふゝに別れ去りぬ。赤根半六は、鶴より人の後方に立在みて、竊かに平三に睛を著け、忽地に謀を生じて、人の別れ散るを待ち、聽て平三を物販に招きて聲を低うし、「言卒爾にはあれど、我は領主の案内にて、赤根何がしと呼ぼる

るものなり、今彼處にて、汝が面影を見るに、世を遁り給ひしわが兄に、よく似たるのみならず、その聲音さへつゆ違はねば、不覺になき人のなつかしきぞかし。その膏藥は、残りなく買ふべきに、汝われに伴はれて、一杯を酌まんや」といひかけて、懐中の紙入より、金一兩をとり出し與へしかば、平三大いに歡びて、「こははからざる縁俸なり。孔子の陽虎に似、阿邇志貴の天稚日子に似、壹岐直真根子が、武内宿禰に似たる故事は、俳優にもすることあれど、みな愛でたき鮮にしもあらぬに、おのれかしこくもよき人に似て、立所に膏藥を賣り盡し、剩へ酒を賜はらん」と宣はするを、争ひか推辭み候べき。誘給へ」と應へしかば、半六歡びて直に布きちらしたる筵を卷きをさめさせ、諸共に酒店に到り、奥まりたる座敷に入りて對ひ居りぬ。且くありて、女の童二人鈍子に杯とりそへて、般よき程にもて來たり。そのとき半六は、女の童に對ひ、「けふは高天神の會日なるに、客も夥なれば、汝等酒も添へあへざるよ。物ほしくば掌を鳴らすべきに、とく行けかし」といふに、女の童はふかくも推辭まず、「こゝろつきなきは、けふの事なれば恕し給ひぬ」といひて、外のかたへ退出ぬ。かくて半六は、平三と酒酌みかはし、やゝ半酣に及べるとき、後方を見かへりつゝ、密話きけるは、「鬪に汝をわが兄に似たりといひしは詭りにて、實は見るところありて、一大事を頼み聞えん爲に、こゝへ誘ひ來れるなり。まづこれを受け納め給へ」とて、再び懐中より五兩の金をとり出し、杯に添へてと

らするを、はしなくもとらず、「一大事と宣はすれば、問はずとも猜したり。僕賤しき活業はすなれども、四十に至るまで悪に與せず人を傷らす。五兩の金は得がたけれど、命に換へて何かはせん、まづ縁由をしらし給へ。倘し行ふべき筋ならば、承引く事もあらんか」と、いはせもあへず眼を睜り、小膝立てなほして、柄に手をかけ、「やをれ平三、男子と見ていひかけたるを、聞きて後に應へん」とは、武士を武士とも思はぬ一言、弓矢八幡堪忍ならず。かく女々しき汝とはしらず、可惜唇を動かして、心見られしこそ安からね。觀念せよ」と罵りつゝ、刀を閃かして敵らんとするを、鏡子を以て挂ふれば、酒はこぼれて散亂し、わが身に係る一生懸命、かい潛りノ、刀尖丁と受け止めて、呵々と冷啖ひ、「命惜しければこそ軋くも與せぬ。助かるまじき命ならば、後の禰も忠ふるに足らず、楚と頼まれ候べし。怒りを刀ともろ共に、をさめ給へ」と反ね返し、驢がぬ男だましひに、半六やをら刀を引き、「天晴手練、わが眼は違はず、まづその金を納めて後、事審かに相語ふべし」とくく」といそがせば、平三金をとつて座中に擲ち、「財に絆されて與する者は、事の破るゝに及びて、物の用にたち難し。さる徒と思ひ給ふか。縦ひ金は給はらずと、見もしらぬ人に東道されて、半日の酔ひを竭せしから、その報いをせでは稱ふまじ。何にまれ心くまなく聞え給へ」と誦ひしかば、半六ますます感激し、みづから金を拾ひ集め、赤銅鍋手に銀もて、柏葉に大の字の紋つけたる割檜枝を、鐺

の間より抜き出し、扇を開きて、金と共にその上に載せ、「我全く財をもて、其許を誘ふにあらず。この二品は、常座に寸志を表するのみ、まけてこれ納め給へ。事成就せば、別に報いをすべし」とて、丁寧にする、むるにぞ、平三しぶく、金と掃枝をとつて、懐に挟めしかば、半六や、こゝろ安堵で、額を合はし耳をとりかはしつ、閑談數刻に及び、遂に女の童を呼びて、酒を篩ぎ穀を添へさし、更に四五杯をかたぶけて、酒店を走り出で、やがて東西に別れけり。この日は夥の客、立ちかはり入りかはりせし程に、女の童もいそがしきに紛れて、彼の二人が密談を、聞くことたえてなかりしとぞ。

大柏の權輿

しかるにその次の日は、簞篠が百箇日の連夜にてありしかば、赤根半六は、法師に經を誦まし、又親しき友どちを招きて、物食はせなどするに、日もくれ客も歸りにければ、半六は、半七とおさんにいふやう、「佐保までは四里にあまる路なるに、汝たちまだ稚ければ、一度も母の蓼莪をさせざりし。翠は卒哭忌にて、佛事結願の日なるに、皆うち揃ひて、願成寺今地の宇へ詣つべし。つとめて起き給へ」といへば、半七もおさんも、いとほいある氣色にて、その夜は持佛堂に香もりそへて、もろ共に廻向しつ、常よりは遅く臥したれど、まだ曉けやらぬころに起き出でて、浴し髪を結はせ、用意既に整ひしかば、半六は一挺の轎に二人の童を乗して、奴隸等に昇かし、自ら轎に引きそうて、願成寺

へぞ詣でける。急ぐとすれど、冬の日の短きに、彼處に到りても是彼に時をうつし、かへる比及には口も西山に傾くにぞ、半六は轎夫どもが、杖する隙も待ちわびしとて、途より半七おさんを歩ませ、「右よ。」「左よ。」とて急がせば、二人の童は中々に、歩より歸るが氣もはるけしとて、岩屋谷の東なる、豊田の山本を過るに、天さへ結陰りて、今に暮れもしつべき様なれば、足の運びも殊さらに進みて、九折なる山路を、あへぎ／＼たどる折しも、一叢繁き枯尾花の、さら／＼と戦ぐと見えし、その形骸の大ききしたる荒熊、忽然と跳り出で、矢庭におさんを引き衝へ、路を横ぎり勢直に、雄手の山へ走せてゆく。奴隸等はいふも更なり、半六大いに驚きて刀の鞘に手はかけたれど、左右なくは追ひ留めず、「あれよく／＼。」といふ間に、熊も人も見えすなりしかば、半七奮然と笠を擦り、續いて山に登らんとするを、半六忙はしく引き留め、「やよ孩兒、氣色を變へて何地へくぞ。」と、問はれて父を倍と見返り、「そは宣ふまでもなし。看す／＼おさんを猛獸に衝み去られ、何の面目ありて、五條へ歸り候べき。叶はぬまでも追つ蒐けて、鎌を刺留めんとするの外他事なし。其所放ち給へ。」と回答へもあへず、ふり斷つて追はんとするを、半六は留めたる袖を放さず、「汝稚けれど、流石にわが兒なり。武士の家に生育つ者は、誰もかくこそあるべけれ。然れどもその身の力を量らずして、匹夫の勇に健るものを、世は野猪武者とて笑ふぞかし。よしや心は勇くとも、十一歳の小腕にて、彼の荒熊

に蒐け向はんは、薪を負うて火に近づき、石を抱きて淵に臨む、それよりもなほ危し。おさんが事は惜しめども返らず、汝もろともに命を隕さば、父が哀傷はいかばかりとや思ふ。われさへかくてあるものを、何事も命運の係るところと思ひ諦め、けふはこの儘に立ち歸り、さて獮夫等に巻獵さして、おさんが讎を復すべし。あしかれとて留めんやは。親の諫めを用ざるは、大なる不孝なり。とくと歸り給へ」といふ。理に迫められて、半七は眼中に涙を含み、山を向上けて嘆息し、ぜひなく思ひ留まりけり。かくて赤根半六は、わが子を將て五條へ立ち歸り、その夜の中に令れしらして、夥の獮夫を催し、次の日より、豊田岩屋谷の山々を巻獵さするに、「元來この處は、高峯にもあらねば、熊などの出であるく事、絶えて聞きも及ばず」とて、獮夫等は不審しみながら、七日あまり獵りくらしたれど、終に本意遂げずして已みぬ。半七は又おさんが爲に熊を殺して、怨みを雪めざる事を、いと遺憾く思ひて、只管彼が不幸を悼み、その日を亡口と定めて、母の位牌と共に、日々香花を手向くるを、身の務めとせしほどに、父の半六大いに諫めて、「稚きものには似けなくも、忌々しき念佛三昧かな。よしやいかに悼むとも、死したるものの歸るにあらず、努思ひたえ給へ」といふ。半七は父の仰せに悼らん事を怕れて、その後は只しのびくんに看經し、樂しからずぞ日をおくりぬ。是れはさておき、おさんはかの日、豊田なる山本にて、荒熊に含み去られ、山に入ることも十町餘り、更に活きたる

心持はせねど、今はかうと思ひしかば、なか／＼に泣きも叫ばず、心の中に神佛を念じつゝ、彼がまにまに引かれゆけば、熊は山ふかく入りて、おさんをやら引きおろしたるが、直に啖らはんともせず、忽地人の如く立つて、まづ後方を見かへるにぞ、おさんはいよ、驚き怪しみながら、逃ぐとも脱きじと思ひて、わろびれもせずうち齧り居るに、彼の熊人の語るが如く、「いかに小女さぞな怕ろしかりけん」といひかけて、みづから胸の邊より、その皮を引きめくりて、くる／＼と巻くを見れば、年の齡四十あまりなる大男が熊の打扮したるなりけり。尋常の女の童なりせば、男々しき擧止は得すまじきに、おさんはこの形勢を見て打ちも驚かず、「さては熊かと思ひつるに、獸にも劣りたる、盜賊にてありつるよ。汝わらはを奪ひ去りしは、花街などへ賣らん馬か、縦ひ元を喪はるゝとも、穢れたる隊に入るべきかは、殺さばはやく殺せ」といふ。その氣色從容として、死をだもおそれぬ健氣きに、彼の男は舌を巻いて不覺に感嘆し、「世に伶俐しき女子はあれど、未だ御身がごときを見ず。われは偷兒杜騙にもまらず、又人肉經紀にもあらず、人にたのまれて、かくは鬪りつるなり」といふ。おさん聞きて、「こはこゝろも得ぬ、汝わが衣を引剥ぎせず、また花街へ賣らんともせずは、伴ふともそのかひなからん。そも何人に頼まれたる、その名をしらせよ」といへば、大男うち點頭きつゝ、短刀に著けたる割掃枝をとり出し、「小女掃れを認めりや」と問ふに、おさんなほ不審しみながら、手にとりて

熟視れば赤銅餉子に銀もて、柏の葉に大の宇の紋あるは、まがふべくもあらぬ、養父半六どのの
掃枝なり、「汝いかにしてこれを持てる。さればわらはが猜せしに違はず、盜賊ならでなぞや」といへ
ば、「否その掃枝のぬし、密かに御身を殺せ」とて、我を相語ひ、鬪のごとく計らはしたり。かくの
にてはなほ疑ひ思ふべし、その故は如此々なり、筒様々々なり」とて、奈良にて半六に酒を強ひら
れ、金と掃枝を得たる事、また、「おさんを家に養育みては、半六親子が仇となるべき情由あれば、密
かに殺せ」とて頼まれしこと、首尾を説きしらし、「わが身は笠松平三と呼ばれて、賤しき活業はす
れど、不義の黄金にこゝち惑ひて、人を殺すものならず。しかはあれ、承引かまば、その座を去らせ
じ」と責む。實に思ひ定めたる氣色なれば、已む事を得ず頓掌し、一旦しか計るといへども、いか
にもしてその小女子を、助けん物をと深念しつ、事こゝに至りしが、いま御身の擧止を見るに、牝上
もおよびがたし。よひてます、彼の人の奸悪を推量り、さらに御身のいとほしくて、情なくも棄つ
るに忍びず。もし一身をうち任せんとならば、直に華洛へ將て上り、ともかくもして養育むべし、御
身がこゝろいかにぞや」といふ。おさんは縁故を聞きて、はじめてよ、と聲を立て、涙あやなき袖の
間より、はふり落つるをかき拭ひ、「わが身いかなれば、過世の悪業ふかくして、母には三歳の年に別
れ、父は非命に世を去り給ひ、生みの母とも頼みてし、その人も身まかりて、今は一人の養父の、老

いゆき給ふ後までも反哺の孝を盡さんと、思ふかひなく思ひきや、殺さんとまでに憎まるゝ、何過ちのあら熊に、たばかりとらし給はんとは、よしや御身のこゝろもて、命は助けらるゝとも、わが身ありては養父のみか、半七どのの爲ならずと、聞きては五條へ歸り難し。よるべなき身を憐みて、養ひとりて給はらば、千辛萬苦の世を経るとも、親とし仕へて再生の、思みは仇に思ひ侍らじ。まだ九歳の女の童が、ませたりと聞き給はんが、わが身にも又情愿ありて、齡盛りになるとても、遊女妾はいふも更なり、人の妻とはなり難し。こは深き故ありて、命の惜しきもその爲なれば、詳しうは後に申さめ。この一條だに承引き給はば、賤しき活業に世を渡るとも、推辭み侍らじ。」と回答へしかば、平三ますゝ、嗟嘆して、「われ色をしも好まねば、年は四十に餘れども、妻を娶らす同胞も、なきにつけては折ふしの、病みわづらひに老後の事、思へば心ほさかりしに、天この小女を賜はる事、はからざる幸福なり。心安かれ、富貴の家より、縁むすばんといはするとも、御身が情愿は破るまじ。口もはや暮るゝに、とくゝ」とて、やをらおさんを背負ひつゝ、夜に紛れて山を走せ下り、直に華洛へ上りて、半六が與へたる、五六兩の金を本錢とし、些の活業に年月をおりくぬ。こゝに于て、おさんは、父丹波郡が事、母の事、半六の條がこと、又如此々々の故によつて、いと夙くより半七と妹脊の縁を締むしこと、審かに物がたれば、平三はその至孝と、貞操の凡ならざるを感激し、且その薄

命を憐み、いかにもして彼が母に環會はせんとて、折々その往方を索ねしとぞ。このころ華洛に、笠屋夏といふ舞妓ありけり。もと是れ白拍子の流れにて、世に舞々と稱ふ。はじめ越前の幸稚が子弟、華洛にのほりて俳優をなせしより、今の夏に至つて専ら行はる。彼の幸稚は桃井直常の子孫なりといふ。舞の詞は、戦場の故事、世々の景迹、戀慕の癡情を述べて、その音曲三十番あり。是をもて管領執事と雖も、酒宴の席には必ず彼の夏を招き給ひしほどに、その家自ら衣食に富みぬ。又平三は、年來旅芝居を打了たれば、夏が家に疎からず。さるによつて、おさんを彼が弟子として舞々を習はするに、僅か四五年にして、その技を極めたるが、顔色の艶妖なるを猜みては、月も忽地雲に隠れ、容姿の勻やかなるにけおされては、花も羞ぢらふ風情なれば、人皆頻りに稱讚して、その舞さへ「却つて夏にも勝れり」といふ。さる程に平三は、おさんが二八の春の頃より、彼を舞々にしたてて、夏が家號を言らし、世に勝る、といふ心にて、笠屋三勝と名づけ、洛東祇園の社頭に于て、女樂を興行したりしかば、見物の老弱雲の如く集まり、霧の如く立ちこめて、その繁昌、昔貞和五年の六月に、足利尊氏卿、四條河原に棧敷を構へて、田樂を齎せしも、かくやと覺えて夥し。是をもて、三勝が舞の手に、都鄙の人を招きよして、その名高く聞え、牛打つ童も口順みて、これを見ざらん者は、人も蔑り我も恥かはしく思ひけるとぞ。三勝は世の人に面を見らるゝ事、いと淺ましくはあれど、父丹波

都が臨終に、執拗くも聞えおきし、彼の三味線の因果にて、今舞々となるならば、割符の撥も徒らな
 らで、母にあふべき便ともなりもやせんと、見物の老女には睛を著くれど、それかと思ふ人もなく、
 加旃大和にて、一たび夫と定めてし、半七がこと懐かしく、華洛へ上り給ふとも、互に年長稚貌
 うせ、見忘れやし給はん。もし名告りあふ導にもと、半七が家の紋なる、柏の葉の大の字を、舞の衣
 裳に縫はせしかば、世の人更に渾名して、大柏と呼びしより、後世舞々の名目となりて、幸稚大柏の
 二流に分る。大柏の事雍州府志に見ゆ。今大頭と稱ふるは大柏の訛りならんか。この大柏の打擲は、
 頭に天冠を戴きて、身に狩衣を被、腰には一振の太刀を佩びて大口の袴を穿き、大小の鼓にあはして
 舞蹈せり。凡そ俳優に、傀儡、田樂、刀狂、雲舞、連飛、輪脱、緒小桶、比丘彫等、種類おほしと雖
 も、今の歌舞伎は舞々より出でて、歌舞伎の名は却つて古し。文獻通考假婦伎に作かくてぞ平三は、昔には立
 ちまさりて、世を安らかに渡る程に、只三勝をわが家の瑤錢樹と鍾愛して、自ら舞の衣裳を背負ひそ
 の履をとつて、主君の如くに管待すを、三勝はわりなく止めて、「こは勿體なくも侍るかな。かかる所
 爲をして、わが身を笑はし給ひそ。」と、屢諫むれどもなほ聽かず、益他事なく冊きけり。

三七全傳南柯夢 卷之二

東部 曲亭馬琴編次

臥房の胡越

光陰矢のごとく、又梭のごとく、秋去り春來つて、蟻松興膳が女兒園花は、既に十五歳にぞなれりける。父の典膳は、豫てより赤根半六が一子半七を、女婿にすべき準備あるをもて、主君續井順昭へ、をり／＼彼の親子が事を吹擧し、ある日又申すやう、「半六五條の村主を承つてより、多年露ばかりも恐なし。加之兒子半七は、文武の才藝人に超えたり。僕、日來その舉動を見るに、近習に召使はれて、然るべきものか。夫れ俊徳を明らかにして、能を擧げ、不能を矜み給ふは君のこゝろにあり。しかれども長流船横たはつて、渡すものなくば、夜光も又燕石に劣りなん。賢を薦むるは愚臣が微忠なり。用ゐると用ゐる給はざるとは、尊慮にまかざるべうもや」と、言語を竭して聞えあけしかば、順昭これを語ひて、すなはち半六に五條の縣守を兼ねさし、新たに半七を召し出して、嫡子吉權丸の近習にぞ召使はれける。典膳蠱扇の沙汰をもつて、彼の親子を汲引すといへども、半七が心ごま

惻愴しくて、忠孝拔羣なる事は違はず。その爲體を見て、老臣もこれが爲に羞ぢ、主君もこれに對して容を改むること多かり。さるによつて半七は、いく程もなく近臣の上ですゝみて、職祿忽地父に超えたり。「續井の家隸多かる中に、文武の道に心を委ね忠信無二なるものは、厚倉二郎大夫友春と赤根半七とのみ、たえて肩を比ぶる人なし。然るに半七は、今茲やうやく二十歳なり。その年紀をもて論ずるときは、厚倉にも勝れり。」とて、心あるもの、これを稱讃するはなかりしとぞ。かくてその年の終りに、蟻松赤根の兩臣、その子の婚縁を、主君へ願ひ奉り、明春園花を嫁らして、秦晋の好みを締ばんとて、假に媒妁の男をこしらへ、迭にその用意をなんいたしける。そのとき半六は、わが子を近く招きていふやう「蟻松氏はわが親子には恩人なり。既にその蔭を蒙ること久し。倘し彼の人の吹擧によらずば、われも御身も山兒にて朽ち果てなん。それさへ忝きに此度最愛の女兒をもて、御身に妻はせんと宣はするなり。今日は殊さらに吉日なれば、雙方の願書を上るにこそ、この由を聞えしらせんとて呼びぬ。歡び給へかし。」といふ。半七聞きてしばし父の顔をうち睨り、「仰せには候へども、某むかし母の遺言によつて、おさんと婚縁を結びしかど、彼不幸にして猛獸に銜み去らる。しかりといへども、今に活けるや死せりやしらず、萬に一つも彼の女子、恙なくて世にあらば、母の遺言に悖るのみならず、彼に對して不義なり不信なり。男子二十にして室ありといへば、妻を娶る事

いまだ遅からず。よく／＼思ひめぐらして後に回答し奉るべきにこそ。」と、いひも果てざるに、半六たちまち氣色變つてみえたるが、また思ひかへしけん、呵々とうち笑ひ、「御身がいふ所理あるに似たれど、そは甚だ迂遠し。今に于て、おさんがこゝにあるをさしおきて、この婚縁を結ばば不義なり。いかにせん、彼荒熊にとられ、その屍を索ね得ずといへども、はや八九年音耗なし。枯れたる菜に花は聞くととも、それが存命へて歸り來ん日は、ありともおほえず。さるを假初の義理に頼がれ、一女子の爲に子孫の後榮をおもはざるは愚かなり。且上れる世には、人究めて命長し、このゆゑに三十にして娶るとも遅からず。降れる世はしからず、人生五十年、七十は稀なり、はやくより子を生ませざれば、父母衰老して、その子を教ふるに心ゆかず、御身學問したれば、和漢の故實はしりぬべし。然れどもそは杓子定規なり。わが子あしかれとて、かくいはんや、おさん憎しとて、この婚縁を結ばせんや。自ら思慮して、惑ひをとり給ひそ。」といふに、半七は觜頭を低れ、袴の間に手をさし入れ、黙然として居たりしが、且くしていふやう、「御慈しみのふかきことは、わきまへて候へど、信義の係るところ、いかにともすべなし。公事にあらずして、權ひある家に入るは、士たるものの恥なり。況して一の宿老の婿となりて、肩を聳やかさんは嗚呼がまし。人の貧富は天なり命なり、よしや生涯薪を燃りて世をわたるとも、心清くば、朱買臣にも恥づべからず。死灰の人に愛せられんは、愛せら

れざるにしかず、銅臭を嗅みて好みを縮ぶは、禍の端なり。まけて今しばし待たせ給へ。」といふを半六聞きもあへず、大いに急ぎて聲をふり立て、「やをれ半七、汝賢しらだちて、しばしわが旨に悖る。母の遺言のみを重んじて、父を否し、さ、やかなる義理に羈がれて、親に愛を失へとは、何れの書に記してかある。われ一日蟻松氏に約諾して、この婚縁を定めたるに、今忽地にこれを破らば、彼の人輩たゞに止まんや。それこそ大いなる禍の端なれ。所詮彼の人に憎まれては、わが親子は活き難し、是非に及ばず。」といきまきて、面色爛くなり又蒼くなり、猛に刀を引提けつ、外面へ走り出でんとするを、半七忙はしく臂を伸ばして、袴の裾を引き留め、「おん憤りの甚しきも、家の爲をおぼすことなれば、あしう聞き奉るにあらず。またび諫めて聴かざれば、號哭して従へといふ本文あり。此の上は御意の隨にてありなん。固辭み候はじ、固辭み候はじ。」と申すにぞ、半六漸く氣色を和け、「聞きわきたらば仔細に及ばず、わが家の幸福これにます事なし。汝日來の伶俐しきに似ず、か許りの事に思ひ惑ひしは、年の弱き故にこそ。いよ、婚媾整ひなば、夫婦睦まじく、舅姑に愛せられ、立身の階梯を踏みな放ちそ。」といふに、半七は畏みて、「仰せ承り候ひぬ。御心安かるべし」と應へしかば、父は大いに歡んで、やがてこの日願書をもつて、半七が婚縁の事を聞えあけし程に、その年の終りに、雙方故なく主君の許しを稟け、婚媾は正月の中旬と定めて、まづ聘禮をとりかはし

ぬ。さるからに半六は、屋根を葺き更へさし唄を塗らし、席薦の面を新たにさし、紙窗を貼りかへな
どするに、いとゞ短き冬の目を、心いそしく暮しけり。又蟻松が家には、園花が衣服調度の儲けに黄
金を費し、すべて美を盡さずといふ事なし。是彼に冬も果てて、新玉の年の始めになりければ、典
膳夫婦は、わが子の爲に黄道吉日を卜して、既に婚姻の日にもなりぬ。園花や、大轎に駕らんとする
とき、敷浪は女兒にいふやう、「婦は三界に家なし、百年の苦しみも又樂しきも、みな他人に任する身
なれば、只頼かにして妬みなきを、悔いこゝろとせよとは、物の本見てもしり給ひつらん。されば
幼き時は父母に従ひ、成長りては夫に従ひ、老いては子に従ふなる、この三従はいふも更なり、五
つの障りもありといへば、ひとりの女兒と愛やかせし、親の權威を笠に被て、夫に倦かれ給ふなよ。
一とたび夫の家を出でては、覆水盆にかへり難し。他し心を慎みて、誠をつくして齊眉き給へ。やよ
やよ。」と教へ諭せば、園花はしばゝ應へて、さていふやう、「稚きより汝が夫ごと、聞えしらし給ひ
しが、ふりわき髪も肩過ぎて、かくまゐり齊眉くものを、なでふ等閑に侍るべき。よしや身の愚かな
るより疎まるゝとも、生きて彼處を出でんとは、思ひ侍らず。」といふに、敷浪はさもこそと、うち黠
頭きつ、目送りけり。かくて園花五條に赴き、婚姻障ることもなく整ひつ、洞房花燭の景迹は、くだ
くだしきに、こゝには省きていはす。園花は稚きより、見もし見られもして、生ごゝろつきしより、

この人ならではと、こゝろに誓ひし婦夫なるに、年紀は二八の春にして、容止いと艶妖に、心慙いと
伶俐しかりき。又半七は今茲二十一歳にして、顔色の端麗なる事は梨花の雪をも欺くべく、文武に宏
才なる事は、竹林の隊にも入るべし。往古より佳人は才子に因み難く、駿馬は伯樂に遇ひがたし、か
かる夫婦は、實に天緣なめり。とて、或は羨み、或は妬しと思ふものも多かり。赤根が家には、歸寧
舅人の古席に日數経て、夫婦ます／＼睦ましく見えしかば、典膳も敷浪も「よき婿を擇み得たり。」
とて、歡ぶこと限りなく、敷浪はをり／＼五條へゆくを、身の樂しみといたしける。世の中の親ご、
ろ、なべてかくこそあらめ。しかるに半七は、父の命に忤り難くて、此度婚姻はなしたれど、おさん
が生死を聞き定めずは、縦ひ影の年は経るとも、他し女子には志を移さじと、思ひてし事なれば、
園花を娶りてもたえて一々も、ひとつに睡らず。さればとて又強面き氣色は見せずして、晝は殊さら
に他事なく相語ひ、坐するときは、席を隔てず、食するときは折布をならべ、いと睦ましく見ゆる程
に、半六はこの形勢におちゐて、潛かによろこび、わが子はじめの言語には似ず、園花と昵み語らふ
事、かくのごとくなれば、わが家の幸福このうへあらじとて、いよ、蟻松に佞媚ひ、わが子の新婦を
管待すこと、只賓客の如くせり。されば園花が兄曾太郎も、をり／＼奈良より來りて、半七と交參ら
ふこと、ます／＼厚かりしかば、藩中の諸士、赤根觀子を侮るものなく、却つて阿諛ふにぞ、半七

はいと心うきことに思ひける。さる程に園花は、こゝろに足らざる所あれば、靴を隔てて癩きを搔くがごとく、又啞子の苦きを舐るがごとくに思ひ迫れど、いひもしらさず。夜はいたづらに山鶴の尾上の月と在明けて對なき枕を恨みつゝ、春もや、暮れゆきて、四月にもなりにけり。この頃は、日の長き限りなれば、ある日敷浪は、奴婢を將て、歩より五條に到りつ、赤根が家に音なはするに、半六は奈良へ出仕して、半七は園花と共に、小座敷に居るよしを、焚婢がまうせしかば、敷浪は從者を出居の方に待たし、案内もさせず、只ひとり、半ば開けはなちたる亮隔を、二隔ばかり越えてゆくに、女兒も婿もこれをばしらで、半七は紙窗の下に、物の本を闔して見かへりもせず。園花はそのほとりに侍りて、何やらんものいひたけなれば、わかき夫婦のさし對ひ居るを、うち驚かさんは、心つたなき所爲なりと思ひて、立ちも入らず。なほ亮隔の陰に立在みて、扇を半ば押しひらき、胸のあたりをうち扇ぎ、をり／＼彼處を闔窺みたり。園花は半七に、ものいふやすがやなかりけん、たてて出す茶の茶杓にも、水漏らすまじと思へども、心おかる、夫に對ひ、一世の人は物に參り、遊山して日を暮す頃なるに、物の本のみ見給はば、御身の爲にあしかりなん。わらはがをきなき手まへなれど、これきこしめされずや、少しは心ほるけくもなり給はめ。といひかけて、さし出す茶椀を、半七はやをら手に稟けて喫みをはり、「けふは終日の休暇なれば心ゆりせられて、不圖見かゝりたる草紙の捨て難くて、

日の閉くるをしらざりし。われよりは御身こそ、うち守り居て倦みもし給ひけめ。」と回答するに、園花は、なほいはんとしていひも出でず、膝のあたりに手習うて、すみつきながらまだしらぬ、闇の留奇南の移香を、とめてほしさのわが袖へ、服らむ顔を押しあてて、芽出し楓のはつかはしさを、やうやくに思ひ堪へ、「何事の御こゝろに、稱はぬとも得わきまへぬ。身の愚かさ人にをうらむかと、おほさんはなほ鈍ましけれど、わが身こゝに参りて春も過ぎ、はや百日になり侍れど、眞の情を見せ給はず。さりとては又一とすぢに強顔くも聞え給はで、活けみ殺しみし給ふは、罵り打たるゝより苦しく侍り。夫婦の縁は出雲にて、神の結びせ給ふとぞ、心がらにてあふみなる、筑摩の鍋のかすゝに、むすびも果てぬ縁はありとも、吉備の中山なかゝに、あぢ瀉の海の鱷ならで、浮きたる戀はいさしらず、貞女兩夫に見えずと、稚きよりいひ諭され、亦稚きより親と親とが、こゝろに許せし婦夫とは人さへしりて侍るなる。心つきなき事あらば、打ちも懲らしもし給はば、かくまで物は思ひ侍らじ。推辭み難くて娶り給へど、豫てながむるます花の、朶に道をかへじとて、出てゆけがしの人めのみ、愛々しきに見せ給ふか、妬しと思へど恨みわぶ、よすがも獨り泣く許り、目睡みもせぬ枕には、涙のかゝらぬ夜間もなし。思ひほそりて他野の、露と消ぬとも一言の、怨みはいはじとたしなみても、女子ごゝろの淺はかにも、深き歎きのやるかたなさを、憐れとは見給はずや。心づよし。」とばかりに、

一辭よ、と泣き沈めば、半七聞きて歎息し、縁故を聞えねば、恨み給ふも理なり。われ婚姻のその
衆より、枕席を共にせざるは、御身いとほしと思へばなり。さら／＼思ふ練ふにあらさ。その事とて
にもしらせまほしく思ひしかど、明白に告ぐる時は、親の非を擧ぐるに似たり。とせんかくせんと、
躊躇ひて黙止したる、心苦しきは御身より、この半七こそ鞠るべけれ、今は置わに廣く離し、思ふ程
を聞ゆとも、かたらずしも、洩らし給ふな。抑われ稚きときに、結髪し女子あり、母の末期に嫁と
夫の杯さへさし給ひにき。それより先、わが父の悞ちにて、被に親を失はしぬ。このとき、養を養
育みて、成長るのち半七に交はし身の罪を贖はんと、誓ひ給ひしこともあり。始末をいへば却此々々
なり、養を請れば前様々々と、その條の事は、すべて密かに説きしらし、扱ひふやう。この故
に、われ此度の婚縁を、ふた、び三たび推辭みしかど、父は又々頼松氏の庇みに替され、更に嫁し
新東を遣へじとて通ひ給へば、父の命にも敷き難く、又彼の女子が思我業てかたし。件の女子は九
歳のとき、雲熊に誘ひ去られて、存亡定かならずとも、こゝに至つて年來の志を替さんば不我な
り。斯言こゝろよく、御身を妻りて、父の心を安くし、夫婦の名のみにて、枕席をともにせすば、御
身かならず父母に告げて奈良へ歸り給ふべし。一旦わが妻となるとも、なほ原の未適女なるときは、
御身に損なし。取なき珠に疵を著けず、かへさんものと思ふをもて、さて顔はありけるなり。浮

世の義理の絆には、終に結びも更へ難き、縁と思ひ諦らめて、我から奈良へ歸りてたべ。一日こゝに
あらせては、わが心一口安からず、飽きもあかれもせぬ人を、離別さするが信ぞかし。一生添はうと
思はずば、人の妻とはなり給はじ。誑られきと思はれんも、いと面なき所行なれど、聞きわき給へ。」
といふ聲も、外へ洩らさじ聞かせじと、近う寄るほど園花は、背向に退きて輾轉び、「縁故をしらし給
ふに、いかでかあしう聞き侍らん。宣ふ事はことごとくに、理ならぬよしもなし。わが身ありては御
心の安からぬと宣はすれば、秋にもあはで憂き鹿の、奈良へ歸らんと思へども、「死なずば夫の家を出
でじ。」と母にいひつる言の葉の、露もまだ乾ぬその間に、我から飽いて歸りしと、いはれうものかい
ひもせじ。我より先に結髪けし、人の生死をしるまでは、他し妻は娶るとも、一つ枕には睡らじと、
誓ひ給ひしその信を、半ばわが身に稟くるならば、妾側室で果つるとも、嗚な喜しく侍りなん。そを
羨ましと思ふほど、おき所なきはこの身なり。情ぞかし、慈悲ぞかし。横の裾、幬の外、せめて後方
に夜を明さし、人めばかりは妻と呼び、夫といはせて給はれかし。心はけふより尼法師、そるべきも
のを梓弓、そるまで宿の案山子ぞと、嚮し給ひね。」と、いひかけて泣く女兒より、泣かじと袖を嚙
み縮むる、亮隔越しに敷浪が、苦しき義理と恩愛に、婿と女兒が誠心を、聞いて忍ぶに忍ばれず、一
聲洩らす咳に、氣色する人ありと見て、半七も園花も、猛に形を改むれど、落つる涙と泣顔を、紛

らすすべはなかりけり。

華洛の僑居

浩かるところに、あるじ半六、奈良より退き来て、出居の方なる伊豫簾を掲げ、「こは園花が母君、いつの程にか訪はせ給ひし。半七はなどて、出でも迎へざる。」といふに、敷浪は氣色を見せじと含笑みて、「いな、わが身も只今参りしかば、婿も女兒もいまだしらす。妾が参るは常の事なり。うち捨ておきて休足したまへ。」といふ。是彼の聲を洩れ聞きて、夫婦はいそしく走り來つ、わりなく奥に誘引ふにぞ、みなもろとも一室に入りて、賓主の座をわかち、寒暖を述べ安否を問ふに、焚婢茶をもち來て敷浪にすゝめ、又主に進らせたり。そのとき半六は、わが子に對ひ、「今日猛の仰せ事あり。汝をも召さるべけれど、頼の事なれば、おのれにいへ」と宣はせしをもて、走り歸りぬ。豫てしむることく、郎君吉稚丸は、質弱多病にましますなれば、はや十八九歳になり給へども、童だちにて、おほるるなるべし。しかるに近曾、癆症めきたる氣色にて、且暮籠りがちに坐すなるに、醫療もいまだ驗を見せず。よりにて老臣談合し、「かかる煩ひには、薬花の地に出し進らせて、こゝろの隨に物見遊山さし進らせなば、その功、鍼灸薬餌に勝るべし」と聞えあけしかば、大殿詣ひ給ひて、「さらば潛びやかに洛へ上せよ。」とて、猛にその用意あり。然れども、「従者夥召俱し給はば、人にしらる、事もや」とて

これらをばいと宴し、近臣只三人と定められ、その徒には、今市全八郎、布施蝶九郎と、今一人は半七なり、「老いたる方には心をおかれんか。」とて、物馴れたる壯俊のむを擇まれたれば、「よろづにこころを用ゐる守り傳き奉れ。」との仰せなるぞ。」と、聞えしらすれば、半七は頭を低け、唯々として命を棄く、半六又敷浪に對ひて、「聞かせ給ふが如くなれば、早くとも半七は、この秋の末までは洛にあるべし。」姑さへなきわが家に、弱き女子をひとり在らせんはいと心ぐるし、母御のこゝに來ませしこそ幸ひなれ。けふよりは園花を奈良へ伴ひて、半七が歸るまで、預りてたびてんや。」といふ。敷浪は今ほのかに聞きたる事もあれば、こは便なしと思へども、女兒をこゝにあらせては、いよ、心もとなければ、すなはち應へしていふやう、「宣ふところ、わらはがおもふにおなじ。されどけふ將て歸らんは、なほ早し。半七が鹿島立を目送らして、奈良へ伴ふべし。園花、さは思はぬか。」といひかけて見かへれば、女兒はとかうの應へもせず、いよ、懶き氣色なり。かくて四五日ののち、吉稚華洛へ啓行ち給へば、半七は園花に別れを告げ、父と舅姑に身の暇をまうしつ、同僚布施今市等諸共に、主君の輪に引きさうて、若葉かきわき立ち出でたり。時は四月の中旬にて、星まばらなる黎明に、雲間を過ぐる杜鵑、歸るにしかじと鳴くといへば、園花が身に思ひあはして、名残をしさと木意なさに、血を吐くばかり歎きせり。さる程に、敷浪は縁由を典膳に告げ、女兒を奈良へ迎へとりしが、いゝる

日竊聞きして、半七が義を守る縁故、夫婦が問答を審かにしりて、驚き憂へ、一たびはその志の移らざるに感激し、又一とたびは、半六がかかる事をばふかく置みて、年来さまん、にいひこしらへ、これが爲に、わが女兒の一生を悞てりとおもふに、腹だたしきもいやませしが、威勢もて迫るとも、心のかぬものは男女の中なるに、愁ひにいひいでて、女兒が久後あしかりぬべきかとて、夫にも聞えしらせず、園花にも問はで、同じ歎きにふし柴の、しほノ、嘆息したりける。かかりし程に園花は、あぢきなしともいへばえに、いはでぞいと身を焦す、澤の螢もがれのく、六月の頃より、「心持あし」とて打臥したり。さればとて終日臥すにもあらず。父母はこれが爲に、薬何くれの事、きまふ、心を弱せども、想ひより病み患へば、醫師もせん術なく、後には常の事となりて、一日は起き、一日は臥し、顔の細りも日にさひぬ。是れは扱おき半七は、郎君を守り傳きて、洛に上り、洛東祇園の社頭なる、人の別業を購ひ得て、爰に僑居さし進らせ、彌井家の郎君なる事は更なり、近臣の名さへ隠して、何某彼某と稱へしかば、日來大和へ交加ひする商人すら、これをしる者なかりけり。かくて吉雅は二人の近臣を將て、下郎に橋を扛らし、割籠をもちし、洛中洛外の神社佛閣、名所古蹟を遊覽し、心はれやかに日を送る程に、病愈り果て、心持清々しくなりて、生平よりも健かなり、又奈良よりは、日にノ、飛脚到來して起居を尋問す。そのたびノ、園花は、病を推して書翰かい寫

め、果子乾鮑やうのものを、半七に贈り、又敷浪も、女兒が書翰に卷きそへて消息し、衣服何くれの事、参々にまうさすと、直にこなたへ聞え來し給へ、洛は鄰の園なれど、旅としなれば自在ならざる事おほかるべし。河傾か歸り給はん。女兒は日數のみ渡へつ、そなたの空を瞻望め暮し侍るなど、いと丁寧にいほせしかば、半七も西陣の織物、城殿の扇などを贈り遣はして、これが報いとす。是れより先、厚倉二郎太夫と、典膳が兒子藤松曾太郎と、互代りに洛に入りて、吉稚の安否を問ひ、又所用を承りて歸りしが、吉稚病癒えての後は、よろづを半七にうち任して、詣來ることも稀なるに、半七は七月の中旬に至りて、猛に寒熱し、假初に病み臥したるが、遂に瘵疾となりて、目を經れども起き得ず。いく間もあらぬ偏居に、主君の邊近く病み臥してあらんは、畏しとおもひて、今市布施に相語ひ、吉稚に聞えあけて、別に五條わたりなる小家を借りて、その身は一人の奴隸を俱し、其處に引き移りて保養す。そのとき今市布施等、吉稚に密語きまうすやう、「半七が病み頗ふよしを、奈良へ告げしらせなば、老臣等心もとなしとて、別人をもて、彼に代らするなるべし。その人もし君の御ころに、稱はぬものどもにてあらば、この風景を殺し候はんか。瘵病は、大かた三七日を限りに愈ゆるといへば、且くこの事を、奈良へしらせ給はでも、某等二人かくてあれば、何の障りか候べき。」と、信だちて申すにぞ、吉稚聞きて、しかなりとし、終にその事を奈良へいはせず、半七にもこのよ

し、こゝろを得ざるに、これも又、いく日もあらで愈ゆべきに、告げずして、父にも妻子にも、物を思はせぬにしかじとて、等閑にしていひもやらす。是れぞ全八蝶九郎がさまん、の計較して、主君に淫酒をすゝめたる、張本とよりにけり。そも彼の今市全八郎、布施蝶九郎の兩人は、續井譜代の郎黨なれども、その心ざま半七には無下に劣りて、實に奈良坂の兒手柏、いと憎むべき倭人なり。彼等は上に父母なく、下に妻子さへなく、只言を巧みにして君を歡き、飽くまで媚びて、傍難を思ふ事なし。夫れ信言は美ならず、美言は信ならず。宜なり佞言は、甘くして蜜の如し。吉稚丸なほ年少軟弱の公子なれば、これを慮らず、彼の兩人を寵しみて、二なきものとせり。因りて此度の從者にも擇み出し、却つて半七をいぶせく思ふ氣色なるに、半七猛に忠ひて五條の旅宿に退きしかば、全八蝶九郎はその隙を得て、吉稚に遊興を進め、半ばはおのれらが身の樂しみにいたし、舞へこのころ、洛に名だたる舞々、笠屋夏が女兒の小夏、弟子の三勝など夥よび集合へて、晝夜酒宴に侍らるるに、わきて三勝は、花の中なる花にして、一とたび笑めば、城を傾くるの美人なり。されば立ち舞ふ形容は、いにしへの紙玉舞にも勝るべく、愁へを含みてうたふときは、雨の海棠に、春の鳥の鳴くがごとく、亦是れ故郷を慕ふ池田の熊野、父を索ねかねたりし、鎌倉の微妙といふとも、これには不及と見えしかば、吉稚潛かに眷戀して、思ひ惑へる氣色なるを、全八蝶九郎はやく猜して、言の紋に、主君

に私語さしごき申し、「おのれら媒なつかつかまつるべし。」とて、聽きて三勝さんかつに、その由よしをいひしらし、さまんゝに
賺さかし誘いざなへども、三勝さんかつは舞々まじくこそすれ、結號けつごうけたる夫おとに逢あはずば、毒婦どくめにて果たまてなんと、思おもひ定めし事こと
なれば、財多たからおほき人ひとにも靡なびかず、又風流またみやび士しも見みかへりせず、すべて金銭きんせんをもて挑いざみ、威勢いせいに乘まかして遁せま
人の席せきへは、ふた、び來きる事ことなかりし程ほどに、今倭人いまわじん等らが、主君しゅくんの爲ために情じやうを述のぶるを聞ききて、うち腹はらた
て、一言ことの應おこへにも及およばず、その席せきの果はつるをまたで、「心持こころわづら煩わづらはし。」とて歸かへりしが、その後は呼よべど
も絶たえて來きたらず。至八蝶せいぱつてふ九郎くわうは、おもふに違ちがひてせん術すべなけれど、彼かれにも問とはで、主君しゅくんには、「翌あすの夜よ
あはし進まらすべし。」と、まうしつる言ことの已やみがたくて、二人密ふたりひそやかに談だん合ごし、「このうへは夥あまたの金かねをも
て、三勝さんかつが身みを贖あがふより外ほかなし。」とて、猛はげに典膳てんぜんが方かたへ書簡しよかんをおくり、用金ようきんの事ことをいひ遣つかはしぬ。糊かき
に半七はんしちが五條ごじやうに退しりぞきてより、吉稚よしわかの遊興いうきやうに費つぎやせし金かね、少々せうくのことにあらず。或あるひは五十金あそひ、或あるひは百金ひやく、
是こゝ彼の事ことにいひこしらへ、しばし、奈良ならより取とりよするに、半七はんしちが名なを書かき加くふるといへども、その
人は絶たえてこれをしらす。また吉稚よしわかは、今篤居いまあつゐして、よろづ妻むつまじ々々しいへども、元來もとこれらちん朱門しゆもんの公子こうしなれ
ば、金銭きんせんを手てにだにとらず、多くは二人ふたりの近臣きんしんに、掠かすめられぬこそ鈍とんましけれ。かかりし程ほどに、至ぜん
八蝶ぱつてふ九郎くわうは、「既に奈良ならへ金の事ことはいひ遣つかはしつ。まづ三勝さんかつが親おやを呼よびて、緣由このよしをしらせん。」とて、平へい
三ざうが家いへへ人を遣つかはしにけれど來きたらねば、二人ふたりは人ひといに焦燥いっせうち、打連うちつれだちて、二條河原にじやうがはらなる笠松かさまつが家いへ

に到り、全八郎まづ呼門ひて裏に入り、蝶九郎は外面に存在して、事の容子を張ひ、時宜によつて、共に平三を説き伏せんとす。そのとき全八郎は、あるじに對ひていふやう、「洛は世に揮りある旅なれば、主君の名はしらせがたけれど、三勝を愛でおぼすの餘り、一身を贖ひて、傍妻にせん」と宣はするをもち、この事を相語はん爲に來れり。身價は乞ふが儘にとらすべし。舞々の身にしては、こよなき體俵なれば、領承仔細あるべからず。」といふ。平三聞きて冷睨ひ、「某女兒に舞々は致さすれど、汗穢きところを賣りて、身の安樂をおもふにあらず。よしやこの事を三勝にいひしらするとも、彼には結髪の夫ありて、志金石より堅し。かかればいふとら益なし。是れまでいくたびか、媒をもておなじすぢなる事を、いはせし人あれども、女兒も承引かず、われも聽さずして、回答はみな斯くの如し。この外にいふべき事、聞くべき事なし。とくく歸りたまへ」といひかけて、つと奥に入りしかば、全八郎呆れ果て、立つしほもなく外面に出でて、蝶九郎にしかん、のよしを告ぐるに、蝶九郎は頭を搔きつ、もろともに物陰に到り、さていかにせんといふに、全八聲を低うし、彼の平三とやらんが、憎さけに回答せしは、わが主君を續井の郎君としらざる故に、思ひ悔るなるべし。さればとて主の名を明白にはしらせ難し。所詮わりなく三勝を奪ひとり、さて媒をもて、身價をおくらんに、彼は元來俳優家なり。一とたび錢を見れば、いかでか點頭かざらん。さはあらぬか」といへば、蝶九郎

つくぐと聞きて、「しかりといへども人のこゝろは單りがたし。彼もし承引かず、又うけ引くといふとも、その望み數千金ならば、毛を吹き疵を求むるにあらずや。」といふを、至八聞きもあへず、「御邊いまだわが肚裏を猜せず、わがしきりに三勝をすゝめしは、郎君に假託けて、本意を遂げんと思へばなり。かくいふは面なき所行なれど、おのれ三勝には、命も惜しとせず。今彼を身贖して、郎君に進らするとも、世の聞えを憚れば大和へは將て行きがたし。その用なき時にまうし賜はり、わが妻とせん事は、今しばしが程なり。御邊又我を助けて、この件の事成就せば、昨日奈良へいひつかはしたる用金は、すべてその懐へ挟め給へ。故いかにとなれば、途中などに埋伏せして、彼の女子を奪ひとらん、誰かわが們の所爲としらん。しらざれば身價をとらするに及ばず。よしや平三これを曉得つて、女兒をとり復さんと闘くとも、這奴を誑引き出して、撃ち殺さんはいと易し。」と、信だちて密語くにぞ、蝶九郎大いに歡びて、一議にも及ばず。「かかれれば黄金を得、御邊は又美人を得ん、何れも劣り勝りなし。この謀究めて妙なり。」といふ。浩かる所に走卒めきたる男、忙はしく走り來て、平三が家に呼門ひ、「おのれは管領晴元朝臣の御使なり。今夜猛に、賓の來ませるあり、よりて三勝を召せ。」と宣はするとぞ。黄昏過ぐるころ、むかへの轎を來すべければ、その準備して待ち候へ。」といひ果てて、又忙はしく走り去るを、至八は蝶九郎に密語きて、物陰より飛んで出で、矢庭

に彼の男が項髪を搔い隠んで引きかへせば、走卒は大いに驚き、「是れは」と一聲いはせもあへず、吭をいたく締むるに、手足を悶搔き睛をそらざまにし、忽地に息絶えたり。そのとき蝶九郎も走り出でて、彼の男が衣服袴を剥ぎとり、二人とかくして、屍をほとり近き、叢の中に投げ入れてふかく隠し、後を見ずして逃げ去りぬ。このとき半三は、管領家より召さる、ことをいはんとて、三勝が子舎にあり。往來の人さへ迹絶えたる折なれば、かくとしるものなかりしとぞ。

夜 轎 の 驟 雨

さても赤根半七は、五條の旅宿にありて、病むこと二十日にあまり、頃日全八蝶九郎が、郎君に遊興をすゝめ奉り、夥の舞子を呼び集合へる由を傳へ聞きて、大いに驚き、これを諫めんとするに、氣力おとろへて、起居も思ふにまかせず、頻りに心のみ焦燥ちつ、いたづらに目を過ぐせしが、八月の中旬に至りて、やゝおこたり果てぬ。翌はつとめて髪を梳かし、祇園の御旅筋に参りて、事の爲體を見ばやとて、その準備をいたし、久しく大和へ音耗をせざればとて、この旦奴隸を奈良へつかはせしが、いとゞしく言葉敵もなき宿の、ひとり徒然に堪へず、ゆく末來しかたを思ひつゞけて、不圖柱に懸けたる護身囊を見かへり、ひとり言していふやう、「これはおさんが護身符なるを、むかし母の遺言にて、わが護身囊と、迭代りにしつる事、おもへばこれも夢に似たり。そのとき母の宣ひし、

「汝が成長るの後、洛へ上る事あらば、おさんが母を索ねよ」と、聞え給ひし言の葉は、なほ耳底に
 残れども、わが母御さへ世に在さず。我のみ近屬洛にあれど、問ふ由もなきその人の、是れもこの世
 にありやなしや、記念こそ今は仇なれ是れなくば、忘る、隙もあり六んものを、こは誰が上を守り給
 ふ、護身囊」と世をはかなみ、かいとつて項に懸くる、折しもあれ外面に、咳きして、來る人ありけ
 り。金の鐔には庭のむら菊もけおされ、野袴の裾には、夕露の玉を轉ばし、諸折戸を押し開きつ、
 笠を脱ぎ捨つるを見れば、これ別人にあらず、厚倉二郎太夫春なりしかば、半七は端ちかく出で迎
 へ、「こは厚倉氏、何事のありて訪ひ給ふやらん。まづ此方へ」とて、上座に請すれば、厚倉對ひ坐し
 ていふやう、「其許の病著は、仄かに聞きしが、思ひしより顔色もよし、今ははや平癒し給ふならん」と
 といふに、半七答へて、「某いぬる月より、寢病にて、起居も自在ならず、君の邊ちかく、うち臥し
 てあらんは、無禮なりと思ひて、この所に退き、翌は癒えんあさては怠り果てんかとて、宿老へも聞
 えあけず父にも告げずして、思ひの外に目を過ぐせしが、何人に聞き給ひたる、いと不審しきことな
 り」といふ。そのとき厚倉こゑを低うし、「友春がその事を、しりたるには故あり。近曾吉稚君用金の
 事、近臣三人の連署を以て、しばし申し來さる、を、大殿ふかく怪し給ひて、某を召され、「汝密
 かに洛に判りて、事の爲體を見て參れ」と仰せしかば、いぬる月の下旬より、この地に來つて、をり

をり逗留し、金八蝶九郎がす、ぬによつて、郎君のおん行迹よからず、毎日に影の舞々を呼ばし、三勝とやらんが身を願ひ、これを妾にせんとして、それとはなしに、きのふ又影の金を進らすべきよし、例の連署大和へ到来せり。置むとすれどおほろけならず、われより先に、大殿へ聞えあけたるものやありけん。おん積りふかくして、昨夜猛に二郎大夫を召され、頃日汝に、吉種が事を捜り問はせつるに、等閑なるはこ、為得がたじ。既に彼のものゝ淫樂放蕩、世にかくれなし。事密かに説きしらするに及ばず。この事もし室町家より制度あらば、家門の滅亡鐘をめぐらすべからず。汝いそぎ洛に走せのきて、吉種主従を將て參れ。われ手づから首を刎り置べて、後の繼を續ふべし」と宣ひし、御氣色おどろしく、思ひかへし給ふべうもあらねば、畏まつて、この晩に奈良をたち出で、日今こ、こ來りぬなり。さるによつて、御邊が病み臥したるをもち、かでかしらざる事あらんや」といふ。半七は聞く事毎に、且驚き且憂へ、頭を低れ、手を又き、しばし沈吟みていふやうに、郎君のおん行跡、よろしからざるよしは傳へ聞きながら、この身柄に犯されて、諫め奉ることを得ず、心ぐるしく護ひしが、用金の事においては、某絶えてこれをしらす。さては今市布施の商人、君に淫酒をす、ぬ奉りしのみならず、われをさへ連係して、不忠の陰に入れたるか。かか憎し口をし」とて、齒を切つて置れば、厚倉かさねて、其許の姓名を載するといへども、件の連署一枚も、御邊の白

筆なりと見えねば、いひとつくに據あるべし。只いひとつきがたきは、郎君のおん悞ちなり。これを救ひまゐらせんには、忠臣その越度にかはつて、苦肉の計をなさずでは事ならず。惜しいかな、せん衛はありながら、その人を得ず。」といふに、半七聞きもあへず膝をすゝめ、「そはいかなる謀にて候ぞ。某身を殺して代り奉るべし、早く説きしらし給へ。」といそがせば、厚倉莞爾とうち笑ひて、「御邊は志父に勝りて、忠心無二なる事は、我よくしるが故に、實はわが胸中の苦計を告げて、その事を行はせん爲に來れり。さはいへ、その身不忠不義の汗名を厭ひては、この謀を行ひ難し。かくてもなほわがいふ所に從ひ給ふべきか。」と問ふに、半七答へて、「いかなる謀かはしらねども、おん悞ちをわが身に負ひて、君を救ひ奉らば、不義ともいへ不忠ともいへ、厭ふは却つて忠ならず。」と、義に勇む日本だましひに、厚倉數りに嘆賞し、「しからは今宵いかにもして、三勝とやらんを奪ひ去り、いづ地へなりとも立ち退き給へ。われは又夜の中に、郎君のおん供して、奈良へ歸り、さて大殿に申さんには、是彼縁故を糺明して候へば、吉稚君のしらし召せし事ならず、すべて半七が私情より起りて、三勝といふ舞々に惑ゆし、事な確君に儀託けんと較計みしが、既にその伎倆發覺れて、いひとつくに言語なく、狂に件の舞々を將て迷電せり。かく證據分明なれば、一旦のおん憤りを散らされ、御父子和順し給はば、公私の幸ひ甚しからん。」と申さん。しかるときは、巷談街談、忽ちそ

の趣を更へて、郎君のおん悪名を雪むべく、郎君是れより行運を慎み給ひて、君家泰山のやすきに
至らんこと、六な御邊の孤忠にあり。今こそあれ年を経て、その便宜を見あはし、御邊の忠義は二郎
大夫が命にかへて聞えあは、めでたく歸參さし申さん。こゝろ得給へ」と説き示せば、半七深く感激
し、「この謀行ひ易し。只うけ難きは、彼の舞々を奪ひ去り、一日なりともひとつに住まば、眞の
不義に似て潔からず、是れ丈夫のせざる所か。不便ながら刺し殺し、我又遙かにその地を去つて、
自殺せば後の患へもあらず。皆是れ忠義の爲にはあれど、罪なき女子を殺したる、半七が命を捐てな
ば、彼の女子の親族も、恨むるよすがなかるべし」と、いひも果てぬに厚倉は、頭を左右にうち掉り
て、「赤根氏の言違へり。彼も又人の子なり。なでふむじんに殺すべき。せめてはそれに添臥しさし、
不便をくはへて貧しくとも諸共に世を渡り、この事には預りしらぬ、三勝親手を引き放ち、憂きを見
する罪障を、贖はんこそ義士の所爲なれ。われ又方便を造らして、彼が身價を外ながら、半三とやら
んにとらすべし。血氣に乗して人を殺し、身を失ひたまふな」と、理を述べて留われども、半七は
れをうけ引かず、「いはじとは思ひしが、事ここに至つて已むことを得ず、心ぐるしき昔がたりを、聞
きてこそこそと察したまへ。某稚かりし時、結號したる女子あり。その名をばおさんと呼びて、わが
父には再生の恩あるものなり。不幸にして九歳の冬ゆくへしれずなりしより、今に存亡定かならず。

されば近曾園花を娶りし事、元來わが情愿にあらす。しばく、父に逼められて、その命に悖り難く、彼の園花を娶るといへども、いまだ牀席を共にせず。是れおさんが恩義をおもふにあり。しかるに今舞々の三勝とやらんを伴はば、所謂五十歩、百歩のみ。さはこの條の事によつて、多年の志を轉すべきにあらす。只これを一生の物いひをさめとおぼされて、老いてはいとゞ便なき、父半六が久後を、よきに頼み奉る」と、手を膝に置く忠孝を、神も佛も憐みて、端なく尊ひ去らせ給ふ、三勝は結號せし、おさんなりとは思ひもかけず、殺さんといふもあはれなり。厚倉は縁故を聞きては、諫めんやうもなく、たぐひ稀なる壯士に、濡衣を被せ命さへ、顧さするかとばかりに、涕うちかゝていふ事なし。秋の暮の短くて、鷄も甞に人相の祇園精舎の鐘の聲、常より耳もあらたまり、「既に時刻になりぬ」とて、厚倉やをら座を立ちつ、半七を見かへりて、「我ははや退るなり、まうすまでにあらねども、挂ひて爲損じ給ふな」と、いへば半七莞然として、「心易く思ひ給へ。甲夜より彼所を徘徊し、潛びよつて尊ひ去り、もし家にあらずと聞かば、歸る途中に埋伏せし、何れこの夜をいたづらに、あかしはせじ」と々間暮、八月の天のさだめなく、暫しは曇る雨霰ひ、出づべき月の出でやらねど、客と主が影二つ、磨きあけたる武士の、これや鏡といひつべし。此の日全市全八郎布施蝶九郎は、既に謀を定めて、管領家の走卒を濫り仕し、直にその所を走り去りて、日來認りたる於呂世の病夫、

足平脚平といふ悪棍に、金を與へてこれを相談ひ、日の暮るゝをまちて、蝶九郎は剣ぎとりし、衣服袴を被て、件の走卒に打打ち、二人の悪棍に轎を釣らして、笠松が家に到り、「管領家の迎へたり、とくく参り給へ」といふ。この時平三は眞葛が原に趣きて、いまだ歸り來らねど、やんごとなきおん方より、迎への轎さへ賜はりしを、いつまでか待たすべき。父の歸り給ふに、程もあらじとて、三勝は夕間暮の心忙はしさに、蝶九郎なりともしらず會釋して、外面に立ち出で、門の戸鎖して、鍵をば解れる家にもてゆき、「如此々々にて参るなる、今にもあれ父の歸り給はば、『舞の衣裳は、跡よりもたし給ひね。』と、言告げ給ひてよ。」と講へおき、聽て轎に乗り移るを、程もあらせず足平脚平、もろ肩入れて撞け出し、足に任して走せ去れば、蝶九郎は襦より物陰に立ち潛びたる、糸八と面をあはし、「僮倅よし。」と私語きあひ、轎に引きそひ走る折しも、半七早く三勝が家へ尋ね當て、と見れば門は鎖したり、鄰れる家に立ちよりて、それがのきぬる方を問へば、主人、東の河原を指さして、「尋ね給ふ三勝は、目今人に招かれてまゐりしなり。あれ見給へ、彼所へゆく提灯こそ、彼が乗つたる轎なれ。」と、聞きもあへず、半七倍と見かへりつ、「それやつては。」といひかけて、平三が如くに追つ蒐けたり。さかりける處に平三は、この日管領の走卒が歸りし後、猛に眞葛が原へゆくべき事出で來て、申下剋より其處に赴き、思ひの外に時を移せし程に、今は早、三勝が管領家へ参る比及ならんと

て、只顧ひたすらにこゝろ焦燥いらだち、昏くれたる道みちを喘あへぎ、三條河原さんじょうがはらを走り歸かへるに、河原がはらを東ひがしへ急いそがする、轎かこの内うちより半なかば垂たれたる振袖かきそでを、提灯ちていんの火光ひかりに見みれば、箱かほに大おほの字すずの摺箔すりはくして、紛まよふべうもあらぬ三勝さんかつなり。あな不審いぶかしと心こころづきては、轎夫かこがき共ども爲體いたくも、何なにとやらん怪あやしきに、引ひき添そひたる走卒はりしんそうは、晝ひる見みし衣服いふくを被おたれど、その人ひとにはあらず。今一人いまにん、手拭てのぎもて面つらを裏うらみたる武士ぶしは、向むかひに三勝さんかつが身みを償あがなはんとて、わが家いえに來きたりし人ひとに似にたれば、矢庭やにばに轎かこの棒端ぼうはつか纏つんで、二歩ふたしほ三歩さんしほ押し戻もどし、「こはわが女兒むすめを何地いづちへか將まさてゆくぞ。」と問とはれて、四人にんもるとも諸共もろともに驚ぞうじつとせしが、少すこしも騒さわがず、そは問とふまでもなし、管領家くわんれいけへ召まさるゝを、無禮むれいせそ。」と叱しかり退のけ、走はしり去うらんとするを、平三へいざうはなほ立ちふたがりて、一歩あしも運あげませず、「管領くわんれいへ召まさるゝならば、かくては路みちこそ違ちがうたれ。」いで郷導しやうどういたすべし。」といひもあへず、取とつたる棒端ぼうはつか引きめぐらせば、蝶てふ九郎くわんらう等大おほいに怒おこつて、「こは過言くわごんなり狼藉ろうじつなり。這奴しやつ息いきの根ねとめよ。」と鬨ひしくにぞ、轎夫かこがきどもは轎かこ引き居すゑ、打うつて蒐いつる息杖いきづえを、平三へいざう因いりとかい、溜くり、右みぎと左ひだりへ打ちかはし、つとつけ入りて足平そくへいが、息杖いきづえを奪うばひとり、諸鬨もろごう響ひびきて雄手おんてなる、小溝こみちへ撲ぶ地ぢと打ち倒たふし、這はひ上あらんとする處ところを、覺たひかけて打うつ杖づえに、眉間みげん四五寸すんぷ打ち割かかれ、泥どろに塗ぬみ入れて死ししてけり。續つづいて蒐いつる脚平きゃくへいは、胸むねさかいたく突き破やぶられ、「阿呀あつ。」と叫こゑびて仆たふれ墮おす。今市心いまいちこころ駭おどきながら、聲こゑをもちかけず、技打わざうちに、切きらんとする刃やいばの光ひかりに、平三へいざう早く身みを反ひり、息杖いきづえをもて受うけとゞめ、追おひつかへしつ疎そ

り締ひぶ。折ひしも降ふり來くる驟た雨りに、蹴か揚あけの泥どろの飛ひ花はな落ら葉は、いとも烈はしき太た刀ち風かぜなり。蝶て九く郎らうは其そのの隙ひまに、轡かの筵じ戸こ搔かき揚あげて、三さん勝かつを引ひき出だし、手て拭ぬぎを口くちにはませ、肩かたに引ひきかけ逃にげんとするに、半はん七しちもまた三さん勝かつをこの處ところに追おつ蒐さけ來きりしが、岸きしの柳やなぎの木こ隠かくれて、事ことの容よう子すはよくしりつ、咄あまひと忽たち地ぢ跳とり出いで、ゆくべき前まへに立たつたりける。蝶て九く郎らうは思おもひもかけず、半はん七しちに遮さり留とめられ、こゝろの中うち大おほいに驚あわて、逃にげとも腕こがしじと思おもひしかば、已おむことを得えず三さん勝かつをうち捨すてて、打うつてかゝる刃やいばのもとへ、半はん七しちが握にぎり固かめし拳こぶしを丁ちやうと衝つき出だせば、我われから臆おそをいたく打うたし、眼まなこ懸かみて刀やいばを捨すて尻しつぽんに押おと倒たるゝを、半はん七しちは見み向むきもせず、驚おどろきまどふ三さん勝かつを、膝ひざ下したに楚そと扛かき抱いだき、河か原はらに添そうて走はせ去さりけり。半はん三さんも全ぜん八はちもこの景ありさまに勢いきまひ腕ねけ、迷まだに呆あれて、打うちもあはず、雙たう方ほう一度いちどに引ひきわかれ一いっかへせ戻もどせと呼よびとむる聲こゑは只ただいたづらに、蝶て九く郎らうが耳みみに入りけん、身みぶるひして起おきあがり、仇かたも身み方も玉たま鐙だうの、路みちさへいと暗くらければ、彼かれ此これを索たづねめぐれども、早はやその人ひとは見みえすなりぬ。

三七全傳南柯夢卷之三 終

三七全傳南柯夢 卷之四

東都 曲亭馬琴編次

眞葛が朝風

今市全八郎、布施蝶九郎は、その夜さり三勝を誑きて奪ひ去り、や、三條河原まで來つるとき、笠松平三に撞見ひ、相語ひつる悪棍、脚平足平は、これが爲に打ち殺され、刺へ三勝は、赤根半七が引き攫ひて、往方もしらすなりしかば、夫の追ひ立てし鶉を、鷹に捉られたる心持しつ 平三をうち捨てて、これを追つ蒐け、泥に塗れつゝ、索ね廻りしが、終にあはず、眞葛が原のほとりにて、夜はしらしらと明けにけり。甲夜の鬪諍より引續き、暫しも立ち休らはねば、殆と疲勞れて腰うち伸ばし、互に面を見あはして、呆れて立在む折しもあれ、捕手の夥士ばら／＼と走り來て、直ととり圍き、矢庭に捕へんとて鬪くにぞ、全八蝶九郎は大きに驚き、「こは何故に狼藉す」と、いはせもあはず、野袴の裾結み掲げ、兩刀を斜にしたる壯夜、徐やかに進み出で、「やをれ佞人ばら、殿の仰せなるぞ」と呼びかけられ、布施今市はます／＼慌て、眼を定めてその人を見れば、これ別人にあらず、典膳が兒

子蟻松曾太郎なり。縁故さへ推量られ、猛き悪徳なれど、鞠うちまわきて、とかうの返答に及ばず、只呆れてぞ立つたりける。そのとき曾太郎は、至八蝶九郎を估とにらまへていふやうに、親鸞の盗臣、吉稚丸に淫酒をすゝめ進らせ、夥の用金を私し、夥へ舞々三勝を奪ひ去りて、三條河原を闊がし、管領家の走卒を縊りしこと、既に糞犯れたれば、逃ぐとも何地までか脱すべき。とく縛めうけよ。」とて、いきまさかたく罵れば、件の人冷睨ひ、「吾が儂嘗て郎君に淫酒をすゝめ、用金を私にしたる事なし。況いて三勝とやらんを奪ひ去り、管領の走卒を縊りしなどと、そは跡かたもなき事なり。思ひ悞りて、後悔なせそ」といはずもあへず、曾太郎呵々とうち笑ひ、「盗人悍々しとて、いへばいはるゝ物かな。きのふ笠松平三とやらんが門方にて、管領家の走卒を殺し、その衣服を剥ぎとりて、三勝を遁り出せし事、證據分明なり。頭陀平とく來給へ」と呼びたれば、「おつ」と應へて小松の陰より、年の齡四十あまりなる男、赤巻にて走り來つ、「いかに至八、蝶九郎とやらん、われを認めりや」と問へば、二人は驚として、「汝は昨の走卒なるか。蘇生しては適はじ」とて、逃げんとするに、夥兵ども立ち塞ぎたれば、逃げ出づる道もなし。「こは忌々し」と叱けば、曾太郎かきねて、近曾吉稚丸の御行跡、よろしからざる由、南都に聞え、大殿のおん憤りふかく、密かに厚倉二郎太夫に仰せて、御旅館の爲體を窺はし給ふに、世の風聞に違はず、みな是れ汝等が、君を欺きて、私慾に

耽ること、既に露顯す。さるによつて、二郎太夫、間者をもつて、毎日に汝等が出居に意を著くる程に、きのふこの頭陀平が縊り殺されたるとき、間者ゆきかゝりて訝しみ、そのほとりに遺したる扇を見るに、豫て認れる全八が扇なれば、いよく怪しみ、聽て仆れたる人を呼び活くるに、幸ひにして甦生れり。且く歸りて名氏を問ふに、「管領家の走卒に、頭陀平と呼ばるゝものなり。只今舞々三勝が家へ、殿の仰せを傳へて立ちかへる折しも、如此々々の男、後より走り來て、わが咽喉をいたく締むると覚えしが、その後をしらず」といふ。これ疑ふべくもあらぬ、全八が所爲なめりと猜して、直に頭陀平を將て、御旅館へ參る途中、われも又きのふの嘔昏に、奈良より來りて、二郎太夫と示しあはし、汝等を搦め捕らんとせしほどに、はしなく間者に行きあひ、審に一五一十を聞きて、頭陀平を伴ひ、通宵汝等が往方を索ねめぐりて、こゝに至れり。しかるに頭陀平、はやくも蝶九郎が衣服袴を見て、「あれこそわが物なれ」といふ。かかれば頭陀平を縊りしは全八蝶九郎が所爲なる事、問はずして分明なり。これによつて、思ひあはすれば、汝等頭陀平が衣服を剥ぎとりて著用し、「管領家の迎人なり。」と偽り、三勝を誑引き出せしこと疑ふべからず。もししからずば、三條河原にて、平三とやらんが、なでふこれを阻むべき。且汝等が相語ひつる、足平脚平といふものは、隠れなき悪棍なるよし、昨夜街の風聞にてしりぬ。さるからに、二郎太夫は夜の中に吉稚丸の御供して、奈良へ歸り、

われをとゞめおきて、汝等を搦め捕らするものなり。かくてもなほ陳するや。」と責め問へば、全八等
ます、周章き、恨めしきに蝶九郎が衣服袴を見かへるにぞ、蝶九郎はいと驚、裳脱けかねたる
秋蟬の、意に捉らる、心持せり。且くして全八蝶九郎がいふやう、「しかりといへども、吾が儕の
あしきにはあらず、赤根半七、久しく病と稱して、五條の旅宿に引き籠り、吉稚丸の悪想し給ふ三勝
を奪ひ去れり。しかるを半七は縛められず、こは遺恨にこそ。」と叱けば、曾太郎冷笑ひて、「人の非を
擧げ、おのが罪を脱れんとするは、そのこゝろいよ、穢し。あれ縛めよ。」といふよりはやく、「うけた
まはりぬ。」と夥兵ども、散動きたちて、まづ蝶九郎が衣服袴を剥ぎとり、全八と共に轟々と括りあぐ
るに、二人の悪棍は、拂ひ退け、搔ひ遣りて、こゝろのみ憚れども、手をとり足をとりに、いやが上
にをり累なりしかば、遂に逃ぐることを得ず、阿容々と縛められつ。そのとき曾太郎は、頭陀半に
衣服を返してこれを被せ、扱いふやう、「布施今市が奸悪憎むに堪へたりといへども、この事管領家へ
聞えては、這奴等はとまれかくもあれ、主君願昭の越度とならん。しかるときは夥の人の歎きなり。
通宵いひつるごとく、這奴等は大和へ將てゆきて、罪を家則にまかすべし。其許の一命に恙なきうへ
は、頼みを散らして、世に漏らし給ふな」として、丁寧に勸解びしかば、頭陀半點頭きて、「そはいは
るゝまでもなし。おのれ下郎なりとも、管領家の祿を汗す者なるに、人に縊られ、衣服を剥がれたり

とまうさば、却つていかなる罪をか得ん。二條わたりに、相識れる醫師もあれば、これを頼みてきのふ中途にて、暴に病發り、三勝が家まではえゆかず、醫師何がしが家に立ち寄りて保養し、思ひの外に一夜間せしとまうさん。かかれば、わが身にも恙なく、柳井家の越度にもならじ。いと、信だちて密語けば、曾太郎大きに歡びて、なほ言語を卑うして、その口を鎖むるに頭陀平いよ、意を得て、全八蝶九郎に對ひ、汝等我を誰とか思ふ、もしこの壯麗の面を認るにあらざば、わが身を捨てても引き摺り歸り、立地に怨を雪むべきに、かくは思ひしりつらん。と罵りて、さて曾太郎に目識し、體て別れ去りにければ、曾太郎は布施今市を引き立てし、大和を斥していそぎけり。かくて頭陀平は、彼の醫師が家にゆきて、縁山を物がたり、其の所より送られて管領の館に歸り、彰のごとくいひこしらへけり。是れより先管領の近臣は、その夕暮に及べども、頭陀平が應へを申さざるを怪しみ、日暮れて別に三勝が家に迎への人を遣はし、且その應へを問かするに、その人徒らに立ち歸りて三勝が門は鎖して、人ありとも見えす。といふ。そは不審しき事なり。とて心苦しう思ひながら、明白に主君に聞えがたければ、三勝は、いたはる事あり。とて参らす。と申し爲へ、その夜をすませしが、詰且頭陀平やうやくに歸り來つ。漢きのふ途にて猛に病起り、遂に三勝が家に判ることを得ざりし。といふ。近臣聞きて、一扱は彼の舞を、か他へゆきたるも咎めがたし。とて、再び問ふ事もなかりけり。

爰に又笠松平三は、その夜さり三浦河原にて、三勝が轎にかき乗せられてゆくを怪しみ、これを遮り留めて、四人の辭者と挑み闘ひしが、また一人の武士樹陰より、跳り出で矢庭に三勝を掻き攫ひ、忽然と走り去りしかば、余八幡九郎等を打捨てて、これを追ひ留めんとしつれども、符圖なるに風雨無しかりければ、終に及ばず。雨歇みて後、又萬の河原へ立ち歸ると、三勝平足平が打ち殺されたりとて、彼此人立ちつとび、市の正の下主來つて、その屍を展體し、ほとり近くは寄りもつかれず。こゝに至つて平三は、且驚き、且愁へておもへらく、われ一時の怒りに乗つて、一人の轎夫をうも殺したれば、自の罪は脱れがたし、三勝を奪ひ去りたる辭者どもは、わが推量に違はざめれど、これを明白に訴へ出でて穿鑿すべくもあらず。わが命は惜しむに足らねど、三勝が行方もしらず、又この寛みをも雪のすして自ら罪に當らんはいとくちをし。彼の辭者どもは、けふわが家に詣來て、「三勝が身置せん」といひつる旅客にて、霧にわが女兒、何がし殿とやらんの旅需に召されしとき、われも假初に面をおはしたる、その人の郎黨に似たり。よしや三勝彼等の毒手に陥ちたりとも、よろ阿容々々と伴はれじ。元來その心ちま貞しく、結髪の夫の爲に節操を守ること、世の人に勝れたれば、思ひかねて死にもやせん。しばし洛を脱れ去りて、しのびノノに三勝がゆくへを索ね、汝を救ひ出して後、ともかうもならめと深念し、家にも歸らず夜の中に、宇治のかたへ奔りて、平等院の片ほとりにふかく

嫁れ、潛かに洛の爲體を聞くに、一件の足平脚平は、隠れなき惡棍にて、死後に舊惡露顯ざり。こゝを
 もて、彼等を殺せし者の往方を、尋ね索むる事等閑なり」と風聞す。平三はこれを聞きしより、少し
 はこゝろおちゐたれど、猛に洛を立ち退きしかば、些の野へもなく、とやせまし、かくやならましと
 思ひくしけるが、昔もかく零落れたりしとき、奈良にて膏藥を賣りたるに、彼所は世をわたるに、便
 宜の地なれば、今度は南都へ赴くべしとて、やがて宇治の旅宿を立ち出で、直に彼の地に到りしが、
 昔相識れる人も、おほくは世を去りて、頼むべき陰もなし。しばしが程は、衣服を賣りなどして旅籠
 に宛てたれど、これも塌きていよ、衛なく、ふりたる笠を戴き、さゝやかなる柄杓をもちて、觀音の
 靈場を順禮する行者に打撈ち、毎日に南都の街衢を徘徊し、往來の人の袖に付き、あるは商人の店前
 に立在みて乞食し、やうやくその日の露命を繋ぎぬ。

百度の願事

厚倉二郎大夫友春は、密かに赤根半七と謀しあはし、彼に三勝を奪ひ去らし、相伴ひつる蟻松曾太
 郎は、親に立ちまざりて、忠義の狀成なれば、これには謀を抜けて、一全八蝶九郎を搦め取り、後よ
 り來給へ」と聞えおき、その身は半七が五條の旅宿より、直に祇園の旅館に参り、吉稚丸に、嚴君の
 怒り甚しき趣を告げ、今市布施が奸惡、半七が孤忠、總て潛びやかに演説し、とく／＼轎に乗さ

れ候へ、南都へおん供つかまつるべし」と申すに、吉稚丸は、是彼の事を聞きて、ふかく後悔し、且父の怒りを畏み、至八蝶九郎が奸佞を憎み、さるにても半七に不忠不義のぬれ衣を被せて、わが懐ちを離はんは、罪いよ、深し、たゞ明白に勸解び奉りて、もし許されずば、潔く自殺せんと回答へつ、思ひ定めたる氣色なるを、二郎太夫は頗りに感激して涙うちかみ、「道は續井家の郎君にてましますなり、然はあれど、君は一國一城の世子にて坐するに、いかでか小節にかゝらひて、身を塵芥のごとくなし給ふべき。今ごろははや、半七が彼の舞々を奪ひ去りたるにてあらんずらん。もし御懐ちを明白にまうさし給はば、彼が忠義はいたづらなり。彼を不忠の罪人となし給ふとも、大殿のおん讀り解けて後は、召しかへし給はんこと、君の御ころにあり。しかれば何事もしげしが程なり。二郎太夫が申すにまかして、とく／＼歸館あるべし」と、理を盡して諫めこしらへ、俄頃南都に誘引ひまゐらし、さて主君順昭に申すやう、「僕頃日、問者をもて、吉稚君のおん言行、近臣が出居を窺はせしに、稚君のおん懐ちには露言ばかりもなく、みな是れ近臣等がなせし僣事なり。その故は筒様々々なり。」とて、至八蝶九郎が爲體審かにこれを告げ、又申すやう、「赤根半七出頭して、吉稚丸の傳きを承りながら、「病苦あり。」と偽りて、ひとり五條の旅宿に引き籠り、舞々三勝といふ淫婦と密通し、人口を憚り、後難を怕れて、至八蝶九郎を相語ひ、彼の舞々を吉稚君にすゝめ進らせ、酒

宴に侍らせんと計較みしが、事發覺れて罪脱れ難くや思ひけん、三勝を伴ひて、何地ともなく透電せり。全八蝶九郎等は、後れて脱れ去らんとせしを、蟻松曾太郎、搦め捕りて引き來れり。かくの如く證據分明に候へば、日來の御憤りを散らされ、御父子の對面あらまほし。稚君は何事も思ひかけ給はぬに、御怒りの甚しき山を聞召して、うち驚き給ひ、直に浴を發駕ありて、今朝かへり入らせ給へども、ふかく畏まりて、老臣等にもあひ給はず、いと痛ましく見え給ふにこそ。」と、言語を竭して聞えあぐれば、順昭つくくくと聞き、「近臣等がうちも揃ひて、非法の擧止しつゝをしらで、父に愛を失はれんとしつる事、吉稚が越度なれど、彼は年なほ二十にも滿かず、いはば乳臭の孩兒なり。かばかりの過ちは免すべきか。近臣等が亂行はその罪を宥めがたし。就中赤根半七は、物の用にたつべく思ひて、老いたるかたにも立ち勝らし、日來重く用ゐるたるに、恩を稟けて恩をさらざる白徒なり。彼が往方は草を刈り拂ひても素ねよ。汝典膳ともろともに、全八蝶九郎を鞠問せば、半七がゆくへも、などかしれざらん。」とて、小膝を激きて仰すれば、「郎太夫謹んでこれをうけたまはり、又申すやうにかかるうへは、吉稚君に對面ましくして、老臣等が心をも安からしめ給へかし。」とまうせば、順昭「さらば誘引ひ來れ。」といふ。その時、郎太夫は、吉稚丸の子舎にいゆきて、一五一十を告げ、儂きて舊の所へ參れば、順昭ちかく吉稚を侍らし、「此度の事につきて近臣等が非法の擧止は、主の悞

おなれど、御身いまだ弱官なれば、ふかくも咎めず、以後を極み候へ」と教訓す。吉備は始終顔を
低れ、茶きよしをまうして退出けり。さる程に蟻松典膳は、君命を棄けて、二郎太夫とともに、全
八幡丸郎を責め問ふに、彼等は身の罪を軽うせんために、半七をあしごまにいひなし。吾が情愚か
にして、半七に誑かれ、三勝を誘ひ出すと雖も、三條河原より後の事は、何地へのきけんともなら
ず。すべて此度の奸計は、半七が心ひとつより出でたるに、却つて彼のものに脱れ去り、吾が情の
み、かく辛きめを見ること、是非に及ばす」とのみ回答へて、敷しく責め問へども、その外の事をい
はず。さるによつて典膳は、いよ、半七を憎み、「這双茶賣の孩兒なりんに、わが蔭を蒙りて近臣の上
に列なり、飛へ千々の寶にも換へじと思ふ、女兒園花を妻はせしは、その才を愛づればなり。しかる
を彼の犬白もの、近曾出頭して、明輩にも敬はるゝを、おのが才學とや思ふ、忽ち地にこゝろ虧りて、
君を欺き、明輩を相語り、舞々と交通して、われにさへ面目を失はすること、言語違斷の癖者なり。
半七が事は、とかく論ずるに足らず、その罪は父といへども脱れがたし。まづ半六に鞆腹を切らせず
ば、この世のやろかたなし」といきまきて、彼の父子を罵ること、面のあたりに居るかごとし。
園花は又、父の怒りの烈しきを見らにつけ聞くにつけて、妬しと思ふ氣色はなし、只半七が往方お
ほつかなく、いかなる樹の陰、草舎の簷下に立ち明し給ひけん。衣手うすき秋風に、又や病音の余り

はせざるか。久しく病みて坐せしともしらざりければ、音耗も等閑に過ぎたるを、心つきなしと恨み給ひけめ。男子と生まれたるかひには、婢妾もあるものを、況いて旅寢の徒然に、他し女子と假初の、契り結び給ふとも、命とらる、罪にはあらじ。然るを腹のたつまゝに、縁故もしり給はぬ、その参々さへ殺さんとは、理ともおほえ侍らず。それこそわが身の折みにて、舅を殺したりなどといはれんは、生くる日の物思ひ、死して後の迷ひなり。何事も折のあしくて、彼の人の在さねばあしざまにのみいふならん。さるをよく問ひも考へず、むじんなる事し給はば、わが身まづ、自害してうせ侍らめ。人しれぬ歎きして、待つかひもなき夫の、心の底は解けずとも、顔見てくらさば慰むる、よすがもあらんにこれは又、あはでの森となりまざる、けふやこの身の終りか」と父を諫め母にかこち、聲を惜しませ泣き沈めば、敷浪も半七を、け憎くは思へども、女兒が貞操のよいつねならぬに羞ぢて、漸くに思ひかへし、夫を諫め寛むるにぞ、典膳もかく園花に泣き歎たれて、勇きこゝろもよわりつゝ、終に半六が死刑を放べて、彼是の罪状をさだめ、二郎太夫と共に、主君に聞えあけて、まづ至八蝶九郎を追ひ放ち、半六はその子の罪によつて、ながく出仕をとゞめらる。かかりしかば、半六は、わが子の爲體を聞きしより、且驚き且怒り、只薄氷を踏むこゝちして、憂苦の中に日を過ぐせしが、終に出仕を止められ、一直のりいたすべきよし、典膳二郎太夫これを傳へ、僅かに命を繋ぐ許りな

る、月俸を賜はりければ、いとゞしく遺恨に堪へず、さればこそ半七が、日來博士ぶりて、親の諫めを用ゐず、この禍を惹き寄せり。遺奴憎しとは思へども、さすがに恩愛の悲しさは、その仕方も心もとなく、あるときは怒り罵り、又あるときは打歎き、天日明らかなりといへども、わが家のみはいと暗く、絶えて訪ふ人あらざれば、憂きを慰むよすがもなし。はに榮枯得喪は、四時の代替るがごとく、もえ出づる情の花、後る、も先だつとも、いづれか秋にあはざるべき。彭祖が命長かりしも、子孫には傳へがたく、石崇が富貴なりしも、生涯を過ぐすに足らず。徳なうして貴からんと願へば危く、富みて驕るものは亡ぶとかや、禍福吉凶を、龜の卜部に問はんより、尾を泥中に曳くにはしかず。半六はこのときに、米谷の桶を役りたることを後悔し、簞篠が諫めさへ、思ひ出でられて口をしけれど、今はそのかひなかりけり。さる程に園花はます／＼半七が事を思ひほそりて、病はじめに彌増しつゝ、再びうら臥してより、絶えて首を懸けす。元來思想精の事なれば、醫師も眉根をよせ、速かに平癒し難からん」といふに、典膳は安き心もなく、敷浪は口毎に奈良の大佛に参詣し、百度禱といふ事をして、「女兒が病著、頼に本復あらせ給へ」と請るの外、更に他事なかりけり。是れば扱おき、笠松平三は、奈良の巷を徘徊して、歌祭文を唱へ、乞食して日を過ぐすに、頃しも九月の二十五日になりぬ。けふは高天神の會日なればとて、彼の社頭に立在み、参詣の老弱に桶乞ひす。浩かる所に、

領主の代參かとおほしくて、從者五七人を將たる武士、門前の茶店に憩ひ、馬をば店前に繋かし、その身は奥まりたる所に入りて、主從割籠を披くにぞ、平三これを見て、聽てそのほとりいひき、從者に對ひて、「飢ゑたる顯禮の行者に、ものたべ。」といふ、この聲や漏れ聞えけん、主なりける武士、若黨を呼びて、しばし何事をかいひしらすれば、件の若黨こゝろを得て、平三を呼び入れ、飽くまでに飯を食はし、さていふやうに汝今飽きたればとて、翌まではよも有たじ。こゝに猶わが主の食み殘し給へるあり、「割籠と共にもてゆきて、夕餐にせよ」と宣はするなり」とて、わがて索もて眞中をしかと拵り、「これ提けてゆけ」といふに、平三は數回押し戴き、割籠を引提きつゝ、又社頭に至りて、錢をどひ、や、申の下剋に及びて、いつもの寢所を繕はんとて、大佛堂に赴きしが、又物ほしくなりしかば、高天神にて得たりける、割籠をひらくに、思ひもかけず、飯の中に一包の金ありて、三勝が身價と書いつけたり。こはいかにと驚き怪しむ、つくづくと思尋して、縁故を推量るに、三勝を奪ひとらしたるは、この領主などの、世の間えを憚り、わりなく奪ひ去らして後に、かく計らはしたるにや。また三勝が萬の養父は、五條の村主にて、結髪の夫も、彼所にありと聞けばそれらが所爲か、二つに一つは違ふべからず。遮莫我も許さず、彼も承引かざるものを、心藏く計策ながら、今更この金をもて、わが心を蕩さんとするこそ、いよ、腹だたしけれ、高天神の茶店にて問はば、彼の

武士の名氏もしれやせんとて、俄にその茶店に走り行き、「けしき割籠を披き給ひたる如此々の殿様、領主の御内にや、何と名告り給ふぞ。常にこゝに願ひ給はば、しりてぞおはすらん。しらし給へ」といふに、主人答へて、「彼の人ほけふはじめて願ひ給ひたれば、われもしらす」といふにすべなくて、つぎの日五森に赴き、赤根半六が事を問ふに、里人等が「いふやう」「半六ぬしは、近曾附が罷められておはするなり。縁故は子息半七といふ壯校、郎君のおん供して京に赴き、三勝といふ舞々と密通し、逐電したる罪によつてなり」といふ。半三これを聞きて、はじめて曉得り、さては三条河原にて、三跡を奪ひ去りたる壯校こそ、結髪の方と、赤根半七なりけれ。おもふに彼のもの、父の志に悖りかたかりしに、主の供して洛にあれば、その便宜を得て、密かに名告りあひ、夫婦もともに奔りけん。かからばなどて一言は、われにも如此と聞えざる。ともしらすして方人せし徒と挑み闘ひ、人身役すの罪を得たり。まことに親のこゝろ子しらすといふ、世の常言ぞ由ありける。もし實の女兒なりせば、かくまでにあるべからず。今は思ひたえたり、この身價も何せん、うち恨みつ、又思ふやう、さるにても不審しきはこの金なり、彼等さる爲體にて奔りたらば、この身價を贈らんや。これには深き故こそあらめとて、上にかくこの地おほつかなければ、彼の割籠を與へたる人に廻りあはまほしく、領主の藩中を徘徊するに、乞食なれば内へは入れず、ます／＼饑ゑに臨めども、伴の金をば一

枚もうしなはず。元來盟をもしらぬ罪人の身なれば、愁ひに人なみななる、世を渡らんとおもはず。なほ奈良の街衢を徘徊して、しのびくに三勝が在所を索ね、おもひの外に月日を過ぐして、四年あまりを經たりける。

夜半の月魄

さても赤根半七は、その夕三勝を追つ蒐け、三條河原にて、全八蝶九郎等が、平三と挑み戦ふときに追ひ著き、矢庭に蝶九郎を突き付して、三勝を小腰に扛き抱きつ、闇に紛れて走り去り、河原傳ひに北を斥して、古田の森をうち過ぎ、白河山の麓に至る比及に、雨も歇みて更闌けたり。日は出でながら、天はなほ結陰りて路くらく、往來も既に迹絶えしかば、やをら三勝を扛きおろし、扱ひふやう、縁由を告げずして理なくも將て來つれば、さこそ懼ろしとも思ひけめ。はじめそなたを誑引き出せし者どもも、わが朋輩にはあれど、彼等と謀しあはして、かく計策りたるにはあらず。彼は彼がしじもて、私慾の爲にし、我はわがしじもて、忠義の爲にす。密にいはんがながくし、まづその概畧を聞えしらすべし。いぬる頃そなたを祇園の旅館に召さし給ひたる郎君は、すなはちわが主君にて、やんごとなき人に在するなり。潛びて洛に遊び給ふから、近臣に至るまで、明白には名を呼ばず、淫酒に耽り給ふ事は、佞人ばらがす、めによれど、世に聞えなば、すべて郎君の越度となりて、いかな

る。親の出で来なんも量りがたし。さるによつて、大殿ふかく憤りおぼし、速かに召しかへして、愛子を手づから失はん。と敦閑き給へば、家隸等、みな手に汗を握りて、周章大かたならず。ともしらざれば佞人ばら、ひたものすゝめて、郎君を淫酒に誘ひ、なほふかき伎倆あるにや、そなたを欺きて、奪ひ去らんとせり。しかりといへどもわが身久しく病によつて、旅宿を興にし、且出居も自在ならざれば、これを諫め奉ることを得ざりしに、や、病著もおこたり果てなんとす、折しちあれ、けふ同志の忠臣潛びやかに、わが旅宿に詣来て、心中の機密を告げ、そなたを奪ひ去れ。といふ。これ他なし。我とそなたと密通し、その非を掩はん爲に、郎君に假託け、身贖の事を計較み、そのこと發覺れて奔りたりと風聞せば、郎君の御惡名を雪むべく、主家に禍なかるべし。と、相語はれしより親を捨て、身を捨て妻子を顧みず、みづから不義の濡衣を、被たる雨夜の暗紛れ、西施を投むる范蠡が、志はいたせども、それとは遙かに質かはり、縁も好みもなき人を、虐けて忠よ義よと、ものものしくいふをうたてくも、鈍ましくも思はんが、かくせざればわが主家危く、家隸老黨はさらなり、その妻子に至るまで、悉く離散せば、幾その人の歎きならん。身を殺して夥の人を、助くるなればと思ひ諦らめ、潔く撃たれてたべ。鬼々しとは思へども、忠義に換ふる慈悲はなし。然りとて、そなたひとり殺すにはあらず。我も又、所をかへて腹かき切り、仇も怨みもなき人を、殺せし罪を贖

ふべし。又そなたの親何がしには、それとしらせず折をもて、この報いをなすべきよし、同志の忠臣に聞えおきたれば、後の事は心易かれ、縁故はかくの如し。不便ながら、盛りの花を、散らす忠義の太刀風を、彌陀の利劍と觀念し、佛果を得よ。」といひもあへず、閃りと引き抜く刃の電、薄がくれに三勝は、「吐嚇。」と許り飛び退くを、二間譯なし。」と半七が、又突きかくるをかい溜り、雲隠かへす夜嵐に、山川の音凄まじく、「あれやノ。」と呼ぶ聲も、妻戀ふ鹿の友音のみ、應へて助くる人もなし。三勝は稚きより、舞に手馴れて身も軽く、半七は又始めより、こゝろ得さして殺せんと、思へば左右なく打ちかけず、追ひ廻し逃げ迷ふ。是れや叫喚、大叫喚、氷の地獄焦熱の、玉なす汗に身も冷えて、脱れかたなの下にたつ、三勝今はかうと見て、「やよ待ち給へ貝管に、身を脱れんとにもあらず、忠義の爲と宣はする、事をわきたる壯士の、逃ぐとて脱し給はんや。命とらるゝ迎へとも、いさしら河の山に来て、紅葉とともに散り果つる、身の秋をいかにせん。みな前世の悪業なりせば、人を恨むるよしなけれど、故ありてこの年来、生死もしらぬ母を慕ひ、浮世の義理に替されて、思ふのみにてえもあはぬ、人に一言遣したし。なからん後にその人に、傳へてたべ。」といふ聲も、涙にいと曇る夜の、顔は定かに見えぬども、思ひかねたる風情なり。半七も噓しぼたき、「鳥の死なんとする時、その鳴くこと悲しく、人の死なんとするときに、そのいふ事よしといへり。思ふ程は、何にまれ聞か

では、間先給へ。さらばとて三勝は、いはんとするに胸塞がり、しばし涙を押し拭き、一晩かほんき
事には侍れど、わが父笠松平三は、實骨肉の親ならず。遺世あしくて三歳の時、母乳母には生別れ、
父は又わが七歳の秋、斧に撃たれて非命に世を去り、洩れる人に恩を稟け、養はれては恨みを指て、
よし孝行は盡さずとも、不孝をせじと身を省み、出居の障子あけくれに、隔てす仕へし養母さへ、世
を早うして後は、いかなる故にか養父に疎まれ、九歳の冬人しれず、殺されんとしたりしが、かたら
はれし人の情にて命助がり、その人を父とたのみて、養育まれ、身丈伸びては反哺の孝に、舞々とは
なりはべれど、稚き時に結髪けし、夫に一たび重會ひ、母の生死しらまほしく、恥を捨てたる世渡
り、明諫、儻馬業、早歌に、人の心は慰むれど、わが情さは慰むる、よすがも絶えて泣顔を、なほす樂屋
の十寸鏡、くもらぬ操を舞衣の、露ばかりもわが夫に、しらせまほしとは思へども、烏帽子のかけ緒
うらとけて、音耗すればその父親に、捨てられたるの恨むに似たり。しからば夫もいかばかり、心く
ろしくおぼすらん。逢はずにあくがれ死ねばとて、阿翁の隠匿の世にしらし、夫に逢は見えむとて、
こゝと彼所にあひながら、遠離り居る誠心は、とゞかて今宵見もしらぬ、人に忠義をたて事して、今
の親には孝ならず、色情の糸逃けも走りしかと、なき名を人に譲はるゝは、いか許り悲しけれど、身
の悪業は欺けども及ばず、護身養は夫の記念、内なる換は母にあふ、割符にせよ。とて亡き父の、遺

せしも侍るなり。涙の雨は絶えず降る、笠屋三勝が身の果てを、なからん後に傳へてたべ。その夫の名は」と許りに咳りあけつ、掩ふ袖に、言の終りは口隠りぬ。半七は聞く毎に、思ひ當る事のみなれば、眼上にふりあけたる、刃も耳も側てて、數回嘆賞し、「舞子に稀なる孝心苦節、深く心に差づることあり。もしそなたの乳名を、おさんとはいはざるや」と、問へば三勝驚き怪しみ、「そをいかにしてしり給へる。もしその人か」と、思はずも、よらまくせしが眼のあたり、兎く刀に油斷せず、又走り退く間の方に、鳴きつ、渡る鷹が音も、女夫か友かと疑ひの、天より晴る、雲の間に、顯はれ出づる月影にて、始めて面をあはしつ、と見かう見れば稚顔と、衣服に染めたる大柏の、紋は互におほえあり、「こはわが夫にておはしけり」と、「津におさんにてありつるよ。こはノ、いかに」と諸共に、呆れまどふぞ理なる。そのとき半七は、刃をさめて、三勝を振り扶け、小草刈り布きもろともについで、さていふやう、「われ近曾、吉稚丸のおん供して、洛にありといへども、病著にとちこめられたれば、絶えて一たびもそなたに逢はず、元來主従、その名をふかく匿みたれば、續井家の郎君なりとは、思ひがけずやありけん。鶴にも雨夜なるに、心いそしき折なれば、聲は聞きつ、われも又、吾妹子なりとはしらざりき。稚きときに別れしかば、面がはりはしつれども、宵闇ならずばかくまでにあらじ。もし逸りて刺しも殺したば、さぞな悔しくあらんすらん。嗚呼危いかな危かりし。さるに

ても、そなたは豊田の山本にて、荒蕪に衝入去られしより、絶えて生死もしれず、大かたは世になき人と歎き思ひたるに、今の物語にてやうやく曉り得ぬ。みな是れわが父の、ふかき望みありをもて、人しれず失はんとはし給ひけめ。さるを露ばかりも恨むることなく、なほわが父の非をあらはさじとて、家にも歸り給はざる、その孝その貞、感激に堪へず。我は却つていひがひなくも、父の命せ悼りがたくて、近曾蟻松典膳の女兒園花を娶りたれども、前の誓ひは破らじと、終に一たびも、彼と交をともにせず、この年來朝な夕な、そなたは死せりや世にありや、しらし給へとて神佛に、祈願せし驗ありて、今日今宵危窮に迫りて、かく環會へること、これも夫婦の悪縁ならん。さて形なや」と世をはかみ、園花がことはさらなり、古稚丸病氣保養の爲、洛に遊び給ひしこと、今市金八郎、布施蝶九郎が奸悪、厚倉が誠忠、曾太郎が實行、すべて京奈良の爲體、一五一十を説きしらし、又いふやう、「父のよしあしをまうさんは、いと畏くも悲しけれど、昔丹波都どのに誓ひ給ひたることも、業利の爲に忘却し、蟻松氏と縁結ばん下ご、ろにて、そなたを失はんとし給ひしこと、われさへ面目なきに、それとしらさとも、又やそなたを殺さんとせしは、鹿忽の擧止に似たれども、もし一夜なりとらせば、身を潔くし難しと、思ひ定めし誠心は、誰が爲と思ひ給ふ。もしかからずば名告りある、よすがも絶えてあるべからず。寔に不思議の對面なり」とて、首尾をものがたれば、三勝涙を堰き

かねて、「てこ参々はとまれわが爲に、他し妻をばかさねじと、色にも愛でず情にも、引かれぬ人の忠義の
るに、うきたる色情の名にし負ふ、世にも勝れし志を、聞きては何か恨み侍らん。わかれて後はい
ひしらす、言の葉守の神は在ねど、柏の紋を舞の名に、呼ばるゝまでに思ひわぶ、君はまぎ／＼大和
路に、あむとしりつ、妹と夫の、山のかひなく隨てられ、心にかゝる朝な／＼、さくらも雲のた、ず
まい、そなたの空のふ鷹めては、月も日もわが爲に、照らし給はぬかとかこち侍りしが、や、名告り
あうて年來の志はいたしたり。かくは命も惜しからず、今の養父は平三と呼ばれて、卑しき世渡は
すなれど、心ごまは立ちまづりて、財寶の爲に惑はされ、信義を失ふ人にあらず。恩愛もいとふかき
に、思ふ程は孝行もまづきず、又母の生死も問ひ定めずして、儼なくなり侍る事、いと悲しくはあ
れど、縁故もしり給はぬ、園花どのとやらんに、生まれんは罪なほ深し。御身の忠義になるならば、
殺してたべことかき口説き、芝生に座を占め、堂を合はし、白く妙なる項を伸べ、一花咲ける壺百合
の、散らすを遅しとまつ程に、半七ます／＼嘆嘆して、「われそのはじめ、殺さんと思ひ定めしは、身
を潔くせんとしてなるに、既に吾妹手なりとしりて、これを殺すは義に違へり。さればとて夫婦もろ
ともに存命へては、事を忠義に假託けて、逃けも難れもしたりななど、いはれんは影護く、厚倉ぬし
へ願ふせなり。さればとて和女を殺しては、丹波都どのへ誓ひ給ひし、父母の言語も徒らなり。そな

たはとにかく存命へて、程程なば、半三どのに尋ねあひ、孝行を盡し給へ。義を守れば不孝なり、只
死すべきわが身ぞ。」と、いひつゝ、刀を抜きかくれば、三勝儀でて獲り留め、「こは淺ましき事なれ給ひ
そ。忠孝に身を殺し給はば、など三勝も諸共に、死ぬ。」とはいほで生き残り、物思へとは、情ある
言の葉に似て情なし。よしや人は何ともいへ、親と親とが誓ひつゝ、許せし御身の妻ならずや。も
ともに世を去りては、影様しとおほしなば、わが身こそ死すべきれ。いと理なしと恨みごら、携
添うたる刀の鞘に、落つる涙はしら鞍の、玉も数ます鞍人の数もかくや哀れなり。半七は三勝に
められ、つくふと思ひかへして刀ををさめ、「はにわれながら慢てり。そなたも殺さじ、われも死な
じ。濟かにこの地を立ち退きて、一日なりとも妻と呼び、夫と呼ばれ、年來の、節操に報はばじき母
の、庭の講へも思も義も、守袋ぞ絆しなる、今もこゝにこそかき分くる、鼠の鏡もあひ見ずは、粟
目公主の故事も、鏡に思ひ出でられつゝいざ給へ」とて身を起せば、わが身もこゝに上三勝が、頭
より外す掛籠も、是れやふた、び結ぶの神、迭身代りの形見さへ、企聚るも悪因縁。よしとれと
も郎君の御悪名たに雪めなば、夫婦がうへは数ならず。とはいへ父はわれ故に、罪得給はんまじと思
ひやる、大和にあらぬ山の袂を、ふりさけ置れば月露も、や、傾きて木の間漏る、遠寺の鐘も音づれ
て、草葉に集く蟲の聲、いと哀れを十寸徳の薄、かきわけて夫婦後になり、先にたちてゆく程に、

白河山をうち踰えて、湖水を見れば漣や、わがしがかくす陰もなく、天はほのくくと明けにけり、かくて半七三勝は、させる由縁はなけれども、近江國多賀莊は、佐々木の一族在城して、洛へも遠からず、世わたるに便宜の地なるよし、豫て聞けることもあれば、聽て彼所に起きて僑居す。然るに此のごろ三味線といふ樂器世に行はれて、これを嗜むもの多かり。これなん三勝が父、丹波郡が彈き初めたるものなれば、いと昔を忍ばれて、三勝は洛にありける日、よく做ひ得たりしかば、彼此の女の童に、彼の三味線を教へ、半七は男の童に、手跡の指南をして、艱難の中に月日を過ぐすに、その年の十月より、三勝有身りて女子出生す。親の手づから守り養育む子は、恩愛も一しほ深ければ、夫婦はたゞ掌の中の玉と慈しむ、その名を阿通と呼びつ、面影は父母に肖て、いと美麗なり。さる程に光陰矢の如く、又梭の如く、お通ははや五歳になりけるが、母の三勝が、毎日に彼此の女の童に教ふるを聞きなれて、まはらぬ舌に、櫛節唄ふも可愛し。かかりけれど、家は究めて貧しくて、只ひとり子を養ふだに、物足らぬことのみなれば、夫婦をりり談合し、この所世を忍ぶには、究竟の地なれど、山ふところなれば、絶えて大和の音づれを聞くよすがもなく、洛の景迹をしるによしなし。鎌倉は洛にも劣らぬ都會の地にて、諸國の人の集合ふ所なれば、外ながら、大和なる父の事も、又三勝が養父、平三が事を傳へ聞く、よすがもあらんか」とて、家財を活却して路費とし、親子三人多賀

の莊を首途して、中先道を下りけるに、時は九月の始めにて、住みつかぬ旅寢も寒し。のきく／＼て、水蘆刈る信濃なる、沓掛の驛に宿かりし夜、半七俄頃に發熱して、こゝち死ぬべく覺えしが、終に風濕となりて腰たたさず、藻鹽草かきあつめて、齎したる路銀も、こゝに至つて使ひ盡し、進退究まりて、いかにともすべなけれど、三勝はいとかひひしく看病し、しばしが程は、衣服を賣りて、旅籠を賃ひ、藥の價にしたれども、いく程なくそれも盡きたり。しかれどもしらぬ甲に來ては、物借るべき友もあらず。かかりせば今しばし、多賀にあれかしと悔い思へど、思ふのみにてそれもかひなし。一夜々々に寒けくなれど、親子が膚はなほ夏のまゝにて、又やお通さへ病みもせんかとて、父母はいとゞ心くるしく、お通は友もなき旅の徒然に堪はず、「この廣き宿よりも舊の狭き家が住みよし、翌は多賀へ歸らし給へ」とて泣きにけり。彼を見我を思ふにも、半七はいよ、肥だちかねて、鰻魚の泥に吻くに異ならず。されば三勝が心ほそさはいかならん、寢に是れ苦中の苦、この秋は只わが身ひとつの秋かとて、かこつなるべし。

三七全傳南柯夢卷之四 終

三七全傳南柯夢 卷之五

東都 曲亭馬琴編次

羈旅の宿の上

半七が宿かりし齊掛の客店は、驛稍盡處にて、いと大きやかなる家なれど、昔しのぶの生ひ茂る、埋れ井の車と共に、身上久しく廻りかね、綱代天井は中孕みて、雨漏に煤を糝り、壁の腰張悉く剥けて、長押より月をも引くべく、高麗縁の席薦處々切れて、藁を細とせし故事も思ひ出でられ、竹縁は斜に朽ちて、絃斷れし琴にも似たも。さればこ、二一夜を明すもの、或は廻國の修行者、或は伊勢參宮の男の童、囉齋物まねの乞兒などと、皆米はそなたより出して歌がし、枕一つを借りて、燈火だに置かす。牛は牛づれの一隊、鼻より脱ける訛聲にて、小曲子囂しく謠ふあれば、矢の跡の念佛を聞き咎めて、物あらがひする題目宗あり。聲の高さは山里の老翁、眼の光るは浦曲の家々にや、朝たちすとて、「草鞋穿きかへられな」と罵り、菅笠踏み潰されて、「同行の面汗せり」として、いきまよくをか。衆皆出で去りたる後は、大風の俄頃に風ぎたるごとく、掻きおとせし益の外には、とり遣した

るものなし。座敷いく間もあるかひには、三勝は一問を借りて、病みたる夫を臥さし、被褥もて、出居のかたを塞ぎたれば、かかる徒と物いふ事もあらねど、毎夜にかはる彼此人の、うち語らふ聲を聞きて、慰むる口もあり、又わがうへに思ひくらべて、世を觀する夕も多かり。かくて半七は、こゝに病み臥してより、思ひの外に口を過ぐし、物みな清り竭して、いよ、術なし。常言に座して食らへば山も空しといへり。よしやいかなる恥を忍ぶとも、夫を濟ひ、女兒をも餓ゑはさせじとて、三勝はます／＼志を勵まし、お通がもてあそびの三味線は、彼がいとほしむものなれば、近江を出づる時も、行李の中に包み入れて、もて來つるが、皮も破れたれば是れのみいまだ賣らさ。三勝はこれこそ究竟のものなれと思ひて、夜毎に笠を深くし、忍び／＼に彼の三味線を抱きて、街を徘徊し、人の門に佇立みつゝ、こゝろにあらぬ櫛節ななつし後投節ごうていせつといふ、を諺ひて、錢を乞ひ米を得て、その日／＼を過ぐせしが、お通をばよく睡らして出づるほどに、絶えてかくとは知らざりけり。半七は又三勝に、かく淺ましき所行をさすること、みなこれわが身ゆゑなりと思ふにも、いよ、世の中の形なくおほえて、顔色もや、憔悴れ、ある夜、三勝が出でゆくを日送りつ、嘆息し、うたてやな、我も一度は、續井家の近從に召され、君父の蔭とはいひながら、人なみ／＼の世を經しものを、忠義の爲に不忠といはれ、不孝の子となりしより、年豊かなれども、口を算へて食らひ、世は暖かなれども、わが眼には春色

なく、千辛萬苦にあふみ路なる、多賀に住みわびて出でたるが、又や旅寢に病む鴈の、妻子に憂きを見するこそ、わが病著より苦しけれ。さるを三勝が信々しく、晝は終日看病し、夜は恥を忍び門に立ち、親子三人が玉の緒を、三すぢの糸に繋ぎとむる、その三味線の手の内を、受くる扇は名も高き、舞の太夫のなす事か。しけれ松山筑波山、降りて今の籬節も、此邊の人には馬耳東風、かかる時にも藝は身を、助くる程の薄命、大和にありて三勝を、妻としお通を産ましなば、乳母に抱かし傳けて、假初の出居にも、商人等には會はせもせじ。それ悔しとは思はねど、我の身に三勝には、いくその物を思はせて、舞子に劣る乞食を、さしつゝ見つ、存命へては、たえて世にあるかひもなし。白河にて死すべかりしに、彼が心操を、いたづらにはなしがたさに、よしなや六年生き延びて、いと歎きをまさしたり。貧の病に身の病、片輪車の足腰たたで、いつまで思ひ沈むべき。愁ひにわが身あればこそ、彼等は人に寄りがたけれ。われなくば人も憐み、よろしき方に給事へて、立ちまざることもあらん。親はなくとも子は育つ、歎くは愚癡か子を思ふ、程には親をおもはなかに、父はいかにかなり給ふ。園花も今ごろは、他し縁や縮びけん。もししからずば恨むらん。とてもかくても活きがたき、わが身を捐てなば妻や子の、またうかむ瀬もありぬべしと、こゝろひとつに覺期して、さて翌の夜を待ちにけり。ともしらすして三勝は、その夜五六合の米と、二三十の錢を得て、二更の比及に立ちかへ

り、まづ夫の安否を問ひ、お通が睡轉けたるに枕さし、曉の炊ぎを誂へなどしつ、小夜更くるまで半七が腰を掻い擦り、行末來しかたを語り慰むるに、半七は今宵かぎりの名残ぞと思ひしかば、こゝろよけにうち晤譚ひつ。且くして三勝は、夫の睡れるを見て、潛やかに手を休めつ、物を引き被け、お通を掻い抱きて、夫の側に臥し、詰朝とく起きて火を乞ひ、粥を煮ぎして、夫と女兒に食はし、われは餘れるを暖めて終日看病す。その苦辛艱難は、比へんに物なかるべし。かくて三勝は、この日又宵の間に街に出でて、物を乞はんとするに、お通は晝寐したればにや、常にかはりていまだ睡らす。半七が顔の色も、きのふよりあしう見ゆるに出でかねて、とかくする程に、初更の比及にも向とす。あまりに思ひかねて、夫にいふやう、「この夜をいたづらに明しては、翌の炊ぎをいかにせん。しかばあれ、今朝よりわきて食もすゝみ給はず、お通さへ睡らぬに、迹を慕はば便なかるべし。今宵は出でずもありなんか。」といふに、半七答へて、「いなわが身食のすゝまざるは、起居自在ならで、内へ透かぬ故なれば、患へとするに足らず。お通をばともかくも、賺し爲へて睡らすべし。夜毎の事なれば、暈返は出でずもがなと思へども、翌の炊ぎに物缺けては、いよ、便なし。更けぬ間にとくゆきて、とく歸りたまへ。」といふ。三勝聞きて、「さらばしかいたすべし。枕方なる火桶に火も活けて、土瓶に湯もぬるましく侍り。座へ登かんとて、強ひて身を起し給ふな。お通に指燭を束らし、半行りつ、ゆき

給へよ。彼處の竹縁は、半ば朽ちて侍り。おなじくはわらはが歸るを待ちて物と、のへ給へ。」とて、丁寧ねんごうに聞えおき、さて三味線しんみせんを袖そでに抱かかぎて出でんとするに、お通つうははやくこれを見て、「母御はご何いちへか行き給ふ、など伴ともだはし給はざる。その三味線しんみせんはわが身のみに侍り、返し給へ。」と携たり著つく。聲高こゑたかしとは思へども、ことわりなれば、打ちも叱ちがらす。「そなたを將むてゆくべうは思へども、西の街ちまたには、おどろおどろしき豺いぬい出でて、人を噛かむといふを聞かすや。大人おとなしやかに留る主す致いたして、爹ととさまの陪さ從ぞうをせば、小麥こむぎの團子だんごを買かうて得えさせん。又この三味線しんみせんは、皮かはも破やれ、海老尾えらうびも缺かけてあり、皮張かはり更かへて得えせんに、暫しばし母ははに貸かしてたべ。」と、賺ずかされてうち點頭うなづき、「然しからば皮かはを張はりかへさし、とくもて來きて給たまはれや。」應おう、もて來こざらんや、もて來くべし。よく留る主すせよ。」といひかけて、夫かろとのかたへ注目めくはせし、尻しり切き草履くさげの穿はいて足早あしはやに、暗やみの方かたへと走はせ去こりぬ。折をりしもあれ、この夜よは合宿あひやどの旅客たびびともなく、物ものたべの翁おきな、只一人ただひとりこゝに歇とまりて、半七はんしち等らが次つぎの間まにあり。夕餐ゆふけも既すでにたうべ果はてて、庖厨くりやの方かたをさし覗のぞき、「この夜よの長ながさに、宵寢よひねせんはいとをし、其邊そこわたりを一稼ひとかせぎすべきこそ。」といひしらすれば、あるじの男見返をとこみかへりて、「扱さても慾よくにはふけぬ間に、歸かへり給へ。」と應おへして、うち笑わらへばうち笑わらひ、外面とのおたへ立たち出いでけり。かくて三勝みつかつは、こゝろは夫子つみこに引ひかれつゝ、彈ひかでかなはぬ締竹いとたけの、節ふしさへ音ねさへたちかぬれど、その身みはこゝの門かどに立たち、彼處かしこの簷下のきさに立た在すめば、我われに等ひとしき物ものたべの、目鼻めはなのあたり切きり

抜きし、紙の假面も怪しげに、撥もつ臂を曲物の、檜の胸に竹を挿、三條の絲をかけ聲も、くりかへしくり反し、おなじ唱歌を一口に、「とぞ申しける。」と唄ひつ、ひとつ街を徘徊す。按ずるに、この後も又「とぞ申しける」といふを食ありしにや。ちか頃ある人の所藏、おてゝ二隻六といふものを見しに又この圖あり。折しも九月十八日の月出でて、外より寒きやま里は、蟲の音絶えて遠碓の樋いそがしくなりまさる、世のいとなみぞ哀れなる。さる程に半七は、病み臥して旅の宿を、立つことかたき寤の、こし路に鄰る信濃國、脊掛にくつをれて、我から急ぐ冥土の旅、せめて一筆遣さばやと、墨斗に筆は染めながら、手さへふるひてそれも及ばず。とせんかくせんと思ひくしたるが、お通は日來記憶よく、多賀の莊にて女の童に、母が小曲を教へしとき、よく聞きとりて謳ひしかば、これを教へてなき後に、いはせんものをとひとり點頭き、「ややお通、久しく御身が謳歌を聞かず、母の歸り來るまでは、いと徒然に覺ゆるに、謳ひて聞かし給ひてよ。」と、いふは今宵の遺言を、いひ習はせん下心、とはしらねども稚こゝろに、物あらたまりては恥かはしく、「謳ふ事は唄ふべけれど、三味線なくてはいな、。」と、頭を挿るを理とも、いひ難ければ父はなほ、胸苦しさを紛らかし、微笑みて、「是れはさて、三味線なくとも唄はる、近ごろ流行る赤きものしなじな、唄ひ給へ。」といそがされ、「それも久しく唄はぬ間、うち忘れたる所もあらば、教へ給へ。」と愛愛しく、小膝なほせば半七は、「これで。」と母親が、忘れてのきし破扇を、遞與せばお通は拍子を

とり、聲こゑはりあけて唄うたひける。

赤あかき物もののしたく、左の唱歌は慶安二年の印本を草紙、上の巻、第二十九歌に見えたり。編者
の自註に、是れはひととせと申しゆらくの城の時分、京童の小歌なりといへり

一、まうそノ、赤あかい事こと申まうそ。むらさきののきもんがくに、妙めう覺かく寺じの二王門わうもん、百萬遍まんべんの御影堂みえいどう、天

滿みのかねのを、赤あかつらの明王みわう、天火てんくわ、いなづま、朱しゆすりばう、稻荷殿いなりだんの狐火きつねび、祇園殿ぎえんだんの犬子いぬこ、山

王わうの鳥居とりゐ、猿さるがしりは眞赤まつかいな、早川はやがは主馬しゆめの輝かほ、すはうか、紅梅こうばいか、ひさや、ひじゆす、ひぢ

りめんそに緋ひ緞どん子す、比古ひこどののひつしき、綿鑊殿わたなべだんのきんちやく、たんしやうどののもちやり、小野

木殿ぎどののかはらばな、あい殿どのの御門ごもん、ゆふけいのこしざし、朱しゆぎや、朱具足しゆぐそく、からのかしら、猩々しやうじやう

緋ひ、高雄たかぞうのもみぢにだんの山やまの岩いはつ、じ、けしの花はなにけいとうけ、御所ごしよ棟むねに石櫓いしがらのみ、ほりの木

のきりかぶ、鹽引しほひきのきり口くち、鱒ますのさしみ、いりえび、赤あかがひ、赤あかがに、赤あかにしにかざみのあしを

かうにもり、佛ぶつじやうばうのくちびる、同宗水しゆすいのほ、さき、朱屋しゆやのか、の口くちべに、茶屋ちややのか、の

まへだれ、よしやすのづきん、とうきのまくら、べにさら、朱しゆわん、朱しゆをしき、ちやつか、づす

か、朱しゆつほ、朱しゆからかさ、王わうのはなか、しゆぜんじ、さてはそ、のまん中まんちゆう、えいやまん中えいやまんちゆう

と唄うたひをれば、半七はんしちは、思おもはずもうち笑わらひて、長ながきことを忘れわすれませす、きてよくぞ唄うたひぬる。それ

にましてなほをかしき、書かきおきの事ことといふうた歌うたもあり。今父いまちちが教おしへんに、よく記おまえて母ははが歸かへらば、

唄ひて譽められ給へかし。褒美の辨得つべきぞ」とと、嫌されて稚子は、いと興ある風情にて、褒美に鮮賜はらば、何にまれ記え侍らん、教へ給へ」といそがしく、小膝す、めつ今宵死ぬ、父の遺言ともしらで餘念なきその貌見ては、唱歌も口に出でばこそ。心の調べ打亂れ、涙見せじとやうやくに、脇指でおろし聲細く、長く引く舞、急むる曲、只漫こくりかへし、繰りかへして教ふれば、お通は早く習ひ得て二母さま歸り給へかし。三味線弾かして唄ふべきに、などで歸り給はざる。彼の三味線の張出來ぬか。もし狩にや囁まれ給ふ、いとく遅し」と待ちわぶる、欠に睡りを催せば、父は女児を引き寄しつ、よく記えしか忘るなよ。唄はば母がいか許り、譽めもせん歎きもせん。常には暮る、と、寢よといふに、今宵は二更に程もあらじ、尿して来よ」と手をとれど、立つこと難き。寢の、膝を枕に睡りけ、呼び覺しても應へせぬ、わが子の顔をつくくくと、見れば思へば壯士の、勇き心も恩愛に、やるかたなきは涙なり。且くして涕うちかみ、噫われながらいひがひなし。忠義の爲に捨てし命を、妻や子に絆されて、けふまで活きたる悔しさよ。死せりと聞かば大和なる、園花が恨みも散れ、父の怒りも解けぬべし。とは思へども三勝が、夫の爲に乞食して、懶しとせぬ心操は、比稀なる貞女の鑑。家を失ひ今宵又、われにさへ捨てらる、夫婦一世の別れとも、しらで出で、しらで慕ひし、女兒は母より父がこの、面影を見忘れなば、年長け物の哀れをも、しる程悲しくあらんすら

ん。虬氣もなくして大きうなり、母に孝行盡せかし。五歳の辰子が三つの緒に、あはして唄ふ歌も今、親の末期の役にたつ、是れも過世の業因ならめ。返すくも教へたる、唱歌をな忘れそ。」と、寐顔を覗く暇乞、驚かせじと膝を引き、親子餓ゑても渴しても、昔忘れぬ兩刀は、父の像見の亂焼、亂れぬ武士の魂と、押し戴きて抜き放ち、襟寛けて中刀を、腹へ突き立てんとする折しも、間近く聞ゆる足音に、すは三勝が歸りしかと、刃を隠せばそれにはあらで、次の間の障子さと開けて、「こは暗いかな暗いかなとぞ申しける。」と亡語ち、呵々と笑ふ聲を聞けば、甲夜に徹りし旅客なり。彼にもしらせじ、三勝が歸らぬ隙にと心いそしく、又とりなほす刃の光に、不圖目を覺す稚兒が、泣き出す聲に引かれてや、三勝は喘ぎ、走り歸りつ、估と見て、「吐噎。」と内に飛んで入り、夫の拳に携り著き、とむる袂も翻り、はら／＼と落つる錢と米、搗ちて糶せたる周章なり。半七聲を勵まして、「怪我なせそ、其處放せ。」と、叱り退くれど三勝は、なほ引き留むる一生懸命、「縁故を聞くまでは、放ちはせじ。」と携る手も、涙に洗ふ水の刃、反ね退けんとすれど半七は、病疲れて思ふにまかせず、こゝろ頻りに焦燥ちて、「縁故を聞かんとならば、お通こそよくしりてあれ、わがなき後に問ひ給へ。留むるは却つて恨みなり。」と敦閑けば、三勝はその意を得ず、「お通が何をかしり侍らん、こは物にや狂ひ給ふ。」と、いふを半七は聞きもあはず、「ややお通、甲夜の唱歌を忘れな。」と、いはれて女兒は目を押し

拭ひ、母さまわらはは多さまに、書きおきといふ謳歌を習うて、よく記え侍りぬる。三味線を弾いて
給はれ。」と、ほこりかなるも鈍ましく、「さては多々の遺言を、なき後に傳へよとて、女兒に教へたま
へるか。夫の今般に三味線を、弾いてその手に遺言を、聞く母親はよもあらじ。理なき事をいはずと
も、多々に聞きたる事あらば、しらし給へ。」と急がせば、お通は頭を打擽りて、「三味線なくてはをか
しからず、皮張りかへん。」と宣ひたるに、なごてこの儘もて來給ひし。聞かまほしくば弾き給へ。わ
らはも褒美に餅を賜はらん。」と回答して、死なんとする父、とむる母の心もしらぬ哀れさを、
洩れ聞きてや次の間なる、旅客が擽擽らす、これも三すぢのいとけなき、女兒も耳を側つれば、三勝
は賺しかねて、「ややお通、あれを聞かずや、母はこの手を放されず、外ながら彼の撥音に、あはして
多々の遺言を、聞かしたまへ。」といふ顔を、さし覗きつ、うち點頭き、「母さまは泣き給ふか、泣き給
ふ程聞かまほしくば、唄ひ侍らん聞き給へ。」と、座を占めて手を膝におき、稚き聲をはりあけ、彼
の三味線にあはしつ、謠ふを聞けば、正に是れ、

「みす、かる、しなのの國に旅寢して、木曾の梯わたりかね、世を嫉捨の名にしあふ、病みて
伏屋の里遠み、何がうらみの山鳥、いたくな啼きそ更級の、田毎の月の影ならで、移ればかはる
千隈川、濡らさば袖とつまなしの、神も締ばぬ縁とて、契り淺間が嶽ならば、翠は煙とたちのほ

る、心をさごと久米路の橋、諏訪の湖氷るとも、只都井に歸りなば、東間の御湯の東の間も、寐覺の牀の寐覺にも、そのはらなりしをさな子は、は、き木とこそ慕ふらめ。かかる歎きにあふちの關も、こえて御取にさかえよと、思ふばかりぞ愁ひに、手をもち月の駒は食む、からき世を去る夢科の、言の葉露とかきぞ遣せし。」

と、唄ひ果つれば三味線も、乙の撥をぞをさめける。三勝唱歌を聞けば猶、悲しき事限りなく、一病著に身を恨みて、死なんと思ひ定め給ふは、理に似て理ならず。跡に残れる妻や子の、心も猜し給へかし。かからんとてか親と子に、驚へし三すぢの一の緒が、斷れて心にかゝるから、慌忙き歸りしも、夫の必死を救へとて、神の導き給ひけん。殺しはせじ。」とかき口説き、諫めても諭しても、半七たえて思ひかへさず、「わが心の中を唱歌にて、しりつ、とむるは聞きわきなし。其處退き給へ。」と焦燥ちつ、退かじと争ふ二親の、異なる氣色を稚子は、何事とも思ひわきまへねど、うら悲しきによよと泣き、彼方此方に拙筋りて、親子三人煩惱の、羈に狂ふ意馬心猿、繋ぎかねたる玉の緒も、今や斷れんと見えたりける。浩かる處に次の間より、蒸襖を押し開き、「やよ待ち給へ増どの。」と呼びかけつ、三味線引提けて立ち出づる。三勝これを見かへるに、甲夜に歇りし旅客は、笠松平三なりしかば、「こは思ひがけす。」とばかりに、恥かはしさと嬉しきに、暫し言語はなかりけり。

羈旅の宿の下

そのとき平三は半七に對ひ、「かく忽卒に呼びかけたるを、不審しくもおぼつんが、豫て女兒が物語りにて、聞きも及び給ふらめ、おのれは笠松平三なり。しかるに今宵、この驛路にて、われに等しく絃歌を賣り、彼此の門に立在む女子あり。笠もて面をかくしたれど、その聲を聞くに、わが女兒に似たり。それかと思ひながらはしなくは問はず、こゝに立ちかへりて窺ふに、果してそれなり。飛びたつ如くにありしかど、まづ御身が遺言の趣を聞かんために、名告りもあはず、この三味線めきたるものを、しかつめらしく探将らせど、五十に及ぶ老が手にて、稚き孫が誕に合はし、彈かれうものか愛らしき、聲を聞くきへ涙の種、忍びかねたる竊柱に、撥のあてども定まらず、あとへと戻る絲卷に、音締も濕る憂き思ひ、恩愛の棒かけて、御身が自害をひき留むる、調子ちがひの不骨者、かく淺ましき旅をして、東の果てまで呻吟ふも、三勝が往方をしらまほしき、圖らずも歌りあはして、いかでか壻を殺すべき」と、いひも果てすつと寄つて、矢庭に刃を奪ひとり、やがて帷に納めて、三勝に運與しつゝ、いふやう、「儂ふれば六年の昔、三條河原にて、御身を人に奪ひ去られしとき、われも脚平足平を殺したる罪、脱れがたくおもひて、その夜洛を逃げ去り、四年餘りを奈良にて過ぐし、高天神の茶店にて、領主の代參かとおほしき武士に割籠を惠まれ、大佛のほとりに到つてこれを披けば、思

ひもかけず飯の中に、一包の金を埋みて、三勝が身價と寫したり。事の爲體いと怪しければ、縁故を
しるますがもやとて、「豫て三勝に由縁あり。」と聞く、五條にいゆきて、赤根半六主の事を問ふに、里
人答へて、「彼の人は、その兒半七といふもの洛にありて、三勝とか呼ばる、舞々を誘引ひ逐電したる
罪によつて、永く出仕を止められ、直整し給ふなり。」といへり。こゝに至つて我おもへらく、三勝を
奪ひ去りたるは、結髮の夫半七にてありし。ともしらざれば方人せし徒と挑み争ひ、人を殺す大罪
を、犯せしこそ悔しけれ。かかりせば、なごて一言我にはしらさざりけると、恨みながら疑ひはなほ
解けず、彼の金を投りしもの、彼か是かと思ひまどひ、その細しきをしらん爲に、南都に乞食して、
年月を過ぐせしが、終に御身の往方もしれず。今はとて彼の地を立ちはなれ、それより諸國の靈場を
順禮して、此の秋善光寺へ詣で、なほ彼此を吟呻へども、始めより件の金は一枚も喪はず、年にも恥
ぢぬ小曲子を唄ひ、路すがら人の門方に立ち、形なき世に存命へたる效ありて、多年の志は致した
り。面をあはせし事はなけれど、彼は夫婦が中に儲けたる女兒、これは、「大和にあり。」と聞きし半七
殿なりけりとほ、襖を隔てて三勝が、「夫よ。」「わが子。」と呼ぶにてしりぬ。見れば又思ひしよりは、
夫婦が稚樹の花も移ろひ、我もかくこそ老いにけれ。さるにても彼の身價は、何者か贈りたる。半七
殿のなせし事か、六年以來の疑ひを、はらさし給へ」と信やかに、問へど恨みは露許りも、えいはぬ

男だましひに、半七はいよ、耽ちてや、さし俯いて回答せす。三勝いたく打泣きて、「養育の恩を償にして、罪を得し、物を思はし、淺ましい世を渡らし侍る、不孝は勸解ぶる言語もなければ、浮きたる情由にて弁れるにはあらず。みな是れ夫が忠義故に、不意に再會しつるなり。はじめをいへば筒様、筒様、終りをいへば如此々々なり。」とて、園花が事、吉羅丸の事、二郎太夫、曾太郎が事、を八、蝶九郎が奸惡に至るまで、一五一十を物がたり、且白河にての偽體、多賀の莊を住みわびて、近ごろ鎌倉へとて旅立ちたるに、半七が暴に病みて、進退究まり、物みな清り塌して、すべなき事、此彼審かに聞えしすれば、半七は聞く毎に嘆賞して已ます。そのとき半七は、やうやくに頭を擧げ、縁故は目今三勝が申せし如し。おのれ白河にて死すべかりしを、三勝に諫められ、かかる形容にて、切迫の二名告りあふこそいと面なけれ。示さる、三勝が身價のことは、和州續井家の老臣、厚倉二郎太夫友春が、しのびやかに贈りしなり。そのはじめ三勝を、結髮の妻おさんなりとは、我もしらす。彼を奪ひ去つて、郎君の御惡名を雪め、直に刺し殺して、われ又自殺し、情慾の爲にせざる、身を潔くせん物をと、只管思ひ定めたれど、恨みもなき人の女兒を虐ぐる、その罪はいと深し。せめて三勝が身價は、その親に與へ給へ。二與ふべし。」とて五條なる、旅宿にて厚倉氏と、後の事さへ相語ひおきしが、彼の人、言を食ますして、件の金を扱れるなり。然るに御身は義を守りて、その金を喪はず、

艱苦を厭はで三勝が、往方を索ね給ふこと、世にも稀なる大丈夫、半七が及ぶ所にあらず。いと頼もしく候へ。」とて、頻りに稱賛したりしかば、三勝も又嘆賞す。平三聞きて、「いな我、女兒に舞々はざしたれども、彼が粉黛の骸骨を賣りて、白の老樂をはからんとまではせず。これ志氣あるものの常なり。只御身夫婦が孤忠心烈は、日と同じうして語りがたし。この夫にしてこの妻あり、誠に一世の奇耦、天の結べる良縁なり。加之孫女兒が伶俐しけなる、容止も父母に似ていと愛でたし。年は何歳ぞ、名は何と呼ぶる、ぞ。」と問はれ、お通は雄手の指を開き、「年は斯う、名はお通と呼ばれ侍り。日来母御が、汝にも、祖父さまの在す。」と、いひしらし給ひしかば、見まくほしう思ひ侍り。いつまでも爰に坐せよ、爹さま母さま中よくして、譽められ給へ。」と、いはけなき言の葉は又二親の、袖にも露ぞおき餘る。平三は目を押し拭ひ、膝にお通を引き載しつ、「かかる女兒をもちながら、死なんと思ふ親も親、恩愛の絆しには、賢愚剛臆の差別なく、猛將勇士も異らぬものを、鬼々しきも事によれ。」と、恨むも親愍の喞言なり。半七は平三に諫められて、終に志を果し得ず、「こは死ぬるにも死なれず。」とて、しばしく歎息したりける。この時夜は既に更たけて、宿の主が臥したる、套房の方へ達ければ、この件の事をしらす。平三は膝に睡れる、お通を三勝に抱きとらし、胴巻の財布より奈良にて得たる、身價一包をとり出して、夫婦が間におきならべ、「三勝が苦節むなしからずして、今幸ひに、

彼が身價百金あり。これをもて、半七どのの醫療、心のまゝにせば、身の病著はいふも更なり、貧の病も又癒えなん。心づよく思ひ給へ。」と、いひ諭しつゝ、これを遞與せば、半七頭を左右に挿り、「男の好意はさる事なれども、その金は、わが夫婦の爲に用ゐるがたし。故にかにとなれば、前にもいひつゝのごとく、三勝を半七が結髪せし、女子としらざればこそ、厚倉氏、彼が身價を投りて、その親に酬ゆるなれ。もしはじめより、半七が自の妻なりとしらば、この金は投りもせじ、御身も又受け給ふべからず。しかるを今これをもて、自を安うせんとはかるときは、はじめの忠義もいたづらならん。只金はこの儘にて、折をもて厚倉に返し遣はし、又御身の一生は、夫婦がともかくもして養ふべし。しかせざれば義に違へり。そは思ひもかけざる事なり。」といふ。平三かさねて、「いはるゝ所實にしかなりといへども、今この金を返せばとて、只一夜の中に、大和へとゞくにあらず。しばしこれを借りて服薬し、病癒えて後、その缺けたるを調達へて、舊へ返すとも遅きにあらず。何事も平三にうちまかし給へ。」といふに、三勝も又さまざまに言語を竭して、やうやくに納得さし、さて次の日より、醫師に見せて、價貴き薬品をも厭はず、それがいふまゝに療治せり。さるからに宿のあるじ夫婦は、平三が半七等ともろともに、逗留するに至つて、はじめにも似ず、錢あるを見て訝しみながら、等閑ならず款待しけり。かくてまた二十日あまりを経て、半七が病著おこたり果て、手足舊のごとく健かにな

りしかば、三勝はいふもさらなり、平三ふかく歡びて、半七にいふやう、「しらぬ鎌倉に越かんより、おなじくは浪速へのきて、活業をし給ふべし。彼處は洛へも遠からず、われ又土地の人氣をしれり、かならず便宜を得つべきなり。」とて勸めしかば、半七これにしたがひて、親子四人、遂に番掛をたち出で、更に西を斥して走ること、十日あまりにして、浪速に到り、長町といふ所に借家して、皆もろともに膝を容れ、「何をがな活業にせん。」と議するに、平三は原來俳優の事に熟れて、鬘を作るにこゝろを得たり。これより思ひつきて、入鬘といふものを作りはじめ、半七は毎日に彼此にも出て、これを鬘ぐに、頭髮うすき者、「頭髮を太やかにするに、究めてよし。」とて、買ふ人も多かりけり。そののち三勝、又鬘といふ假髪を上み出して、平三とともにこれを作る程に、はじめの入鬘は、頭髮のみなれど、鬘は鬘の薄きを掩すなれば、魏宮に蟬鬘を製しはじめ、綠雲擾々として、曉鬘を梳るがごとく、婦女子おほいに珍重し、鬘を作り出したればとて、三勝半七を綽號して、長町の鬘屋となん呼びにける。さればはじめの笠屋をば、こゝらわたりの人はしらず、隠鬘屋と世をしのぶ、半七もこゝろの外に、商人となり下り、「住めば又住吉の、岸の姫松年預御達、假髪めされよ。この外にも、鬘結、眉掃、玉櫛膏」と、二年近く浪速津を、呼びあるけども脊掛にて、數日の療治に三勝が、身價を遣ひ減らし、又こゝに來つて、活業をいたすにも、本錢諸雜費、これ彼二三十金に及べるを、

なほ贖ふに至らず。いかにもして、件の金を舊の數にあはし、厚倉二郎太夫に返さばや。とて、親子夫婦これが爲に幾その心を盡し、夫は聊かも活業に懈らず、妻は又節儉を宗として、飲食も薄くすれど、毛より細き瘦世帯にて、二三十兩の金を、忽地に貨殖ぎ出すべうもあらず、これのみならで、半七は、父半六が安否、こゝろもとなければ、しのび／＼に奈良と五條の爲體を探り問ふに、半六は全なほ閉ぢこめられて、いといたう老いくたち、園花は、一たび患思病にうち臥してより、たえて首を擗けず、この七年が程、死にもやらず活きもせず。されば典膳夫婦はます／＼半七を恨み、女兒をさまざまに諫めこしらへて、再びよろしきかたに、縁を結ばせんとすれども、園花はいよ、志を固うして、承引かき、只具けても暮れても、半七が事のみに、思ひほそる。」と聞えしかば、半七は、「父もはや、一たびはよろこび、一たびは懼る、齡なるに、われゆゑに罪を得て、久しくからきめ見給ふこと、いと口をし。」とうち歎き、園花が心操も、不便には思ひながら、父を救ひ彼の女子を慰むるよしもあらず、三勝もこの事を聞きて、「園花が心の中を思ひやり、夫をおもふは、われも他もかはらぬものを、もしわが夫婦存命へて、浪速にありと聞き給はば、さこそ妬しと思ひ給はめ。」一たび縁故を聞えしらして後は、わが身は尼になるべけれ。」と、おもふ程を半七に告げ、「夫が忠義むなしからずば、大和へ歸らし給へ。」とて、あらゆる神佛に祈りけるとぞ。

主なき園の花

さても蟻松典膳が女兒園花は、往年半七が、舞々々と奔りしと聞えしころ、妬しと思ふ氣色なく、只身の形なきを歎くのみ。いよ、望みを失ひて、つくんと思ふやう、わが夫は人となりその心ごま貞しければ、舞々なんにこゝろ惑ひ、忠孝兩つながら缺き給ふやうはあらず。もし彼の舞々は、豫て聞えしらし給へる、稚馴染の結髪、おさんどのとやらんにてはあらざるか。然らば彼の人存命へて、洛にありけるに環會ひ、已むことを得きもろともに迹を聞うしたまふにや。とまれかくまれこの事には、深き故こそあらめとて、遠く慮る程、慕なきものはわが身にて、涙の雨に枕も朽ち、折れ日解けし長總の長き病著となりしより、針灸藥餌も驗なし。父母はこれが爲に、いとゞしく胸を苦しめ、さまざまにいひ諭して、半七が事を思ひ絶らせんとすれば、却つて病をますにすべなく、只典膳も敷浪も憤りを忍びて、半七が事をいひも罵らず。園花は、また密かに五條へ消息して、をり／＼半六が安否を問ひ、これは日来晴み給ふものなり、彼は堅やかならで、おん齒にあひ給はんかとて、狭もの廣ものの魚肉野菜、調理したるを贈り遣はし、また蟄居たまへば、氣の結ほれ給はんかとて、佳酒を贈るときもあり。春のをはり冬のはじめには、衣服の洗ひ濯ぎにも心を著けて、よろづ乏しからぬやうに贈ひ遣はすに、父母にはふかく匿して、こゝろ利きたる奴婢、只二人にこの條の事を與らしけ

り。半六は、園花がかく信やかなるに感涙を拭ひあへず、いかなれば半七は諒すくなき舞々に思ひかへて、かかる貞女をふり捨てたる。さまで虚けき者にはあらざりしが、舞々といふ老狐に連れられ、親をも妻をも思はぬよ。九つの世に生は變ふとも、半七はわが子にあらず。只園花のみ、實の女兒と思ひ進らするとて、心ほそき限り書い寫め、返事する日もありしとぞ。かくて春去り春來つて、既に七年を過ぐせしに、この頃たれいふとはしらず、半七は彼の舞々を妻として、浪速の片ほとり、長町といふところにある。今は商人となりて、葦屋と呼ばれ、假毛といふものを鬻ぎて活業とし、お通といふ女子さへ産まして、既に六歳になりぬ。大和へは十里に足らぬ浪速津に住ひて、世をも人も憚らぬ、嗚呼の白物なれ。」とて、藩中もつばら風聲す。園花は速くこれを傳へ聞きて、一度は半七が恙なきを喜び、又一たびは、父母もし聞きしり給はんには、主君の威勢ひを借りて、いかなる榮りかあらし給ふすらんとて、更に安き心もなし。あるとき又思ふやう、半七ぬしに不慮の事ありては、いかなれが身の妬みにて、父に勧め、辛きめ見する。二など、世の人はいふなるべし。よしやわが夫、舞舞を作して、何國の浦に在すとも、よそながらその安否をしるときは、慰むすがともなれど、わが身の心操は、言告げやらん便もあらず、とくこの風聲をいひ止めかしとて、いと胸くるしく思ふ折しも、果して典膳も、半七が事をよくしりて大いに怒り、密かに敷浪に縁由を物がたり、彼いかにして

年來の 價りを散らさん。」といきまくを、婢竊聞きして、鑿て園花にかくと告げにければ、園花打驚きて、さればこそわが思ふに違はぬ。今は只この身を殺して父母を諫め、夫を救ひて年來の、誠心をもしらし侍るべし。しかなりくと思ひ定めたれど、氣色にもあらはさず、頃しも年極の上旬、宵の寂も吹き舞れて、深げゆくま、氷る夜に、園花竊かに起き出でて、そと行燈を引き寄する、腕も細りて力なく、寢亂したる鬢の毛の、顔に懸るを搔いあげれば、只あやにくにはふり落つる、涙に墨を摺り流す、嫁入の時の硯箱、夫の紋とわが紋を、時繪ちらしも徒らに、夏毛秋毛とふる筆の、命毛も今宵限りなる、ともしり給はぬ父母の、歎きもそこそと推量られ、聖はわが身を啼く鳥の、迹の事さへ細々と、書い寫めては讀みくだち、かかる文にもめでたくは、親は祝ぎ進らする、候もこにて筆を留め、巻き納めんとするに思ひもかけず、いつの程より闕窺みけん、咳きして屏風搔い遣り、内に入るを見れば母親なり。園花阿呀と驚きつ、忙はしく遺書を、袂の内に取り返し、見れども母は見ぬ顔して、ほとり近う居ていふやう、「昨今は寒さも殊さらにおぼゆるに、久しく病みて坐しながら、小夜ふけて何をかし給ふ。流るゝ水にこゝろあれども、落る花にこゝろなしとか。鬼々しき半七を、なほいとほし給ふから、母が心も安からず、大和にあらゆる神佛には、願事もかけ盡し、顔の細りを見る毎に、わが身の病むよりなほ苦しく、咳き入り給ふ夜半の聲、聞けばとにかく睡られず。しか

るに今宵は常にかはりて、人をも呼ばず起き出で給ふは、近曾頼りに風聞ある、半七が事の心にかゝるなるべし。さはあらぬか。」と問ふに、園花は只涙さしぐみて、はかなくしくは應へせず、敷浪はつくづく、と、女兒の顔をさし覗き、痛ましや、わかき人の苦勞すとて、いと面瘦の見ゆるなり。このころの風聞を傳へ聞き給ひしかはしらねど、聞かしたもなきに黙止せしが、半七は舞々の三勝とやらんを伴ひ、商人となりて浪速にあり。女子さへ産ましたりとぞ。爹々この事をよくしり給ひて、いたく腹たて搦めとりて、年來の憤りをはらさんと、いきまき給ひつるを、とかくいひ寛めて、けふまでは過ぐしつ。又いひ出づるは今宵はじめなれど、御身が五條へ嫁り給ひし頃、半七は、誓ひつる由あり。とて、結髪せし女子の事を、御身に聞えしらし、「離別して奈良へ歸り給へ」といひつる事、又御身が誠心を告げて、かき口説き給ひし事を、竊聞きしたる事もあれば、此彼思ひあはするに、もし彼の三勝は、半七が結髪せし女子にはあらざるか。然れば彼の人の懐ちのみにあらず、よくも問ひ答へず、縁を締ばし、結びたる、親と親とが過ちなり。さればとて御身が事は、主君に聞えあけて、御許しを受け、婚姻を整はせし半七が正室なるに、縦ひ彼の人結髪の妻あればとて、そは、私の縁なり。とまれかくまれ半七は、大和へ歸ることかなはねど、君父に遠ざかりても、姉は夫に従ふが常の道なれば、密かにこの理を述べて、御身を浪速へ送り遣はすべう思ふなり。狭き女子のこゝろもて、か

ならずよからぬ所爲をして、歎きをなまさし給ひそ。御身が操は焼野の雉子、母が心は夜の鶴、夫を思ふも子を慈しむも、いづれか劣り、いづれか勝らん。こゝろ得たりや、こゝろ得給へ。やよ／＼。』といひ諭すにぞ、園花は目を押し拭ひ、「御慈愛の深きにも、なほ身の不孝はかこたれて、とかく申さんやうはなけれど、半七主の事のみは、親にも身にも實にも、かへて最惜しく思ひ寐の、強顔き人を夢にのみ、はや七年を過ぐせども、始めより嫌はれし、身を阿容々々と浪速まで、ゆきて恨みをいはるべきか。況いて仇なる舞々の、浮世に色香ます花の、三勝どのと園花を、譬へていはば深山木の、身のなる果てをかくとだに、聞えしらして笑はれなば、恥の辱にて侍りなん。又理に責められて、只假初の捨言葉、かけらるゝとも子さへある、妹夫の中を引き裂きて、姉姉と世に疎まれ、緘目の合はぬ蝶番、閑房の屏風の立つよしも、なくては連れ添ふかひもあらず。世にも人にも捨てられし、冬の扇の骨ばかり、病み競ひてありながら、我から倦かれに、「彼所まで、ゆけ」と宣ふは情なし。只顯はしきは彼の人に、異なる事もあらずして、いく百年も世に榮え、吉野の花の聞く頃は、大和の事も折ふしは、思ひ出して給はらば、なき身の後もいかばかり、喜しく成佛致すべし。親に先だつ不孝の罪、ゆるし給へ。」と合はす掌に、漲り落つる涙の瀑布、岩に墮かるゝ如くにて、われても末に逢はんとは、いはぬ操を母親は、わが身に思ひ比べつ、「貞女兩夫に見えずと、口にはいへど始め終り、

體かならぬは世の中の、人心にてあるものを、親も及ばぬ心操を、言の葉すゑの露ばかりも、いひし
らさねば彼の人の、しるよしもなきぞかし。母があしうは計らはず、何事もうち任し給へ。御身が兄
曾太郎は、半七が竹馬の友なれば、これをこそと思ひて、けふ密びやかに御身が年来の物思ひと、母
がおもふ程を、審かに聞えしにして相語うたれば、彼、自ら浪速に赴きて、半七が長町とやらんの
隠家をつね、時宜によらば對面して、縁由を述べて、その應へを聞きて、歸り來べし。といひき。よ
しや置き去りに去られても、夫婦の縁はいまだ断れず。婿が應へを聞きて後、ともかくもなるべきこ
とぞ。あまりに遠慮したまうては、いつ事の果つべうも侍らさ。さればとて半七を恥かしの、爹々や
母が潰れを、ほらさんとにはあらず。彼の人もあしからず、又御身が操もとゞくやうに、なるとな
らぬは曾太郎が、歸りて後にしり給へ。雨降りそ、多て土潤ふといへば、又よき事もなからずやは。
と、さまざまに諫めこしらふれば、園花いよ、うち泣きて、「こは勿體なし、わが身故、見上のはるば
ると、浪速へ赴き給ふとか。それを推辭ばおん慈しみに、憚る不孝をいかにせん、いかにせん」とて
泣き沈む、六の花とも消えかねて、今や七つの間なる、十二鐘ともろ共に、枕土半も落すなり。いさ
睡り給へ。と母親が、とる下も馳み身も冷ゆる、涙の氷わりなくも、臥障の内に誘ひひて、やうやく
自殺をとゞめけり。さる程に蟻松曾太郎は、母敷浪がしのびやかに、暗譚ひつることあるをもて、俄

頃かたに浪速なみのへ赴おもむきて、半七はんしちが隠家かくれがをたづね、その爲體ていを窺かぎひて、時宜じぎによらば面まのあたり、妹いもが心操こころなを
もしらせばやと思おもふに、元來もとより孝心かうしんふかき壯俊わかうどなれば、わが身みに事ことの出いで來きたるこ、ちしつ、「兩三りやうさん日出い仕し
せざる。」よしを、同僚どうりやうの們ともに頼たのみ聞きえ、父ちちには、「法隆寺ほりうじへ詣まうつる。」といひ爲こへて、次つぎの口俄くちが頃まに行たび
敷まを整とふるに、冬ふゆの日の短ひかくて、はや申下刻まのさびりになりけれど、心忙こころいそはしければ、從者ともじ只一人ひとを將も
て、漫そまろに立ち出いでしが、路一里みちばかりゆくに、日も暮くれなんとす。あまりに急いそぎで、懸袋ひうちふくろをとり忘わす
れつ、「闇くみなるにいと便びんなし。」とて、從者ともじを其所そこより走り歸からし、尼あまが辻つじに到いたつてこれを待まつに、既にすで
初更いっつの比ころ及ほびなれど、そのもの歸かへり來こざりしかば、餘あまりに待まちわび、遂つひに巷輪つじがを備やとうて、間巖くちやみちがを越こえ
てけり。そのとき二人ふたりの轎夫かこかきは、籠かごなる樹この下もとに轎かこを扛かきおろしつ、もろともにいふやう、「いと難なん
儀ぎなる巖いわを越こえたるに、身重尋常くわんじゆんじやうに勝かれ給たまへば、筋骨ねつこつを痛いためられ、彼かれも我われも脚氣けつが發おこりて、今は一足ひとあしも
運動あつうきがたし。定めさだめの建場たてばまでは、今暫いましが程ほどなり、こ、より暇いとがを賜たまはるべし。」といふ。曾太郎そたろうこれ
を聞ききて、頭巾かぶうち戴かりたるま、やをら轎かこより出いで、「病わづとあればせん術すべなし。さだめの所ところまでは、
なほ遙はるかなれど、足そくは數かずのごとくとりするなり。」と、聞きえしらしつ、腰こしなる打邊うちがの財布さいふを解ときて、
錢三緡せんさんしを運わた與たさんとするに、轎夫かこかきは手てにもとらで冷笑あつわらひ、「こはいかに思おもひたがへ給たまふ。かばかりの駄だ
賃ちんを賜たまはらんとて、こ、までは乘のせず。定めさだめの外ほかなる酒貨さかひはさらなり、かく脚氣けつがさへ發おこらし給たまふに、

薬の價をたまはるべし。いと心づきなし。」と鼓くにぞ、曾太郎、また一緡の錢を倍してさし出すを、一人の轎夫掻い取り早く、礮と投げかへして、眼を睜り、聲をふり立て、「百二百の半錢にて、人の命を買はるゝものかほ。こは我を欺くにこそ。」といきまけば、残る一人もすゝみ寄り、とかういはんは迂遠し、路銀も衣服も靴いで選與せ、とらしてのけ。と罵りもあへず、左右より引つ扶み、いと驚しく競ひ懸れば、曾太郎忽地大いに怒り、「扱は汝等賊なるよ。孤客と思ひ蔑り、可惜首をな喪ひせ」と、あごみ笑つて立つたる目前へ、閃かす息杖を、左と右へ入り錯はし、直に撲地と打ち落せば、こは口惜し。とて諸共に、つかみ著くを拂ひ除け、項髮捉つて雄手雌手へ、挫と投げれば岸破と起き、俊骨きながら前後より、組まんとするを寄せも著けず、足を飛ばして了と蹴倒し、手首背へ控胡し、轎のほとりへ押し著けつゝ、結び下けたる提灯の火光にて、始めてその面を見れば、此の轎夫は、別人にあらず、往に南都を追ひ放たれたる、今市金八郎、布施蝶九郎なりしかば、曾太郎まゝ、怪しみて、「羞をしらざる愚物ども、蟻松曾太郎を見忘れたりや」と、いひつゝ、頭巾を搔い覽れば、金八、蝶九郎も、や、その人なるを認つて、大いに驚き、「思ひかけず」と慌忙き、逃げんとするを起しも立てず、すらりと引き抜く刀の背打、肩腰の嫌ひなく、打ち居ゑて詰と觀まへ、無頼の兇賊、かかる景迹にてありながら、猶不忠不義の天罰とはしらず、却つて悪心増長して、旅客を引剝せんと致す。

その罪許しがたしといへども、潛びの旅なれば、奈良へ領てゆくことをせず、しばし首を濡がするなり。かくても羞ぢすや、なほ悔しからすや。」といひ懲らし、又數回打つ程に、全八、蝶九郎苦痛に堪へず、只「許し給へ、許し給へ」と叫びけり。そのとき曾太郎は、刀をさめ、腰に著けたる小提灯をとり出して、轆なる提灯の燈をうつし、遂に浪速をさしていそぎ去りしが、ゆくりなく更闇けたれば、その夜は半岡に宿かりて、彼の従者を待つに、次の日従者は深江にて追ひ著きけるとぞ。さる程に、全八、蝶九郎はやうやくに身を起して、まづ白脈を診り、打れたるところへ、唾を塗りて拊捺りなどし、直と呆れて、目を見あはしつゝ、蝶九郎がいふやう、「今夜稀なる猛客を乗したれば、よき鳥にこそと思ひつるに、幸なきときには眼も眩み、心まで鈍くなりけん、いかに闇なればとて、尾が辻にて足を定むるとき、汝も吾も、曾太郎なりとは思ひがけず、可惜肩を費し、剩へからきめを見たる、忌々しき。」と眩けば、全八も面を顰め、「七轉び八起きといへば、よき事もあり、あしき事もなくてやは」といふ。蝶九郎かさねて、「よき事といへば、けふよきことを聞きつ。汝もわれも恨みある、赤根半七は、彼の三勝を妻として、浪速の長町にありとぞ。この事もし實ならば、密かに這奴を結果け、三勝を奪ひ去り、遠く東の果てなどへ賣り遣はさば、今夜の損は補ふべし。」さばあらぬか。」といふを、全八聞きもあへず大いに歡び、「そは又金の蔓を掘り當てたり。しかはあれ半七は曾太郎に

も劣らず、柔術師法人なみに勝れたれば、僥々しくは計り難し。とせんかゞせよと示めあはし、後の山下に、聞く人もあらねば、なか／＼に憚る氣色もなく、聲高やかに舞踏ひつゝ、遂に空轡を扛き起し、これも平岡のかたへとてゆきぬ。抑件の全八蝶九郎は、七年以前に、奈良を追ひ放たれてより、攝津河内の間を徘徊し、到るところ悪しき友とのみ交らひ、よからぬ所爲を事と爲し、輕に、甲人等に憎まれ、いよ、便なくたひしかば、一人もろともに旅轡を昇きて、生活にすなれど、恥をしらざれば羞づることなく、動もすれば旅客を劫して、非法の錢を貪りとらんと計較ぬ。固に是れ、憎みてもなほ憎むべき癖者なり。

三七全傳南柯夢卷之五 終

三七全傳南柯夢 卷之六上

東 部 曲 亭 馬 琴 編 次

橋本の歌船

赤根半七は、心にもあらぬ世わたりのして、髪きに剛れたる浪速津を、「假毛々々」と呼び歩けど、利を射て妻子を安らかに、養はんとにはあらず。三勝が身價をもとの數にあはして、厚倉二郎太夫へ返さばやと思へども、細本手なる商ひにては、頼にその金調はず、駒くるしくも是年も暮れて、はや師走六日になりつ。この日もまた常のことく、假毛の箱を背負ひて、大和橋のほとりを過るに、客店の二階より、障子を細やかに押し開き、こなたを指さしつ、「あれ呼べ」といふ聲するを、わがことかとて立在めば、旅客の従者めきたる男、慌はしく走り出でて、半七を呼び入れ、「近曾この津に名たる、假毛髪とかいふものを、汝なりや」と問ふに、半七答へて、「おのれすなはちその商人なり。假毛をめさるべうもや」と、信だちていふ。奴隷點頭きて、「わが主は西園にて人にもしられ給ふ豪家なるが、家務につきて、久しくこの津に逗留し給ひつ、春は松の過ぐる頃及に、歸園し給ふとま

り、よりに「家裏に、假毛を夥買ひもてのかん」と宣はするぞ。汝が今齎したるは、いか許りの價物
にや、一つ二つ見せよ」といふ。半七聞きて、やをら擔箱を負ひ卸し、括りたる袱の四隅を打披き
て、一疊の假毛をとり出し、「これは入髪と稱へて、男の假毛なり。それは鬘髪と名づけたる、女の假
毛なり。こゝにありあはするものは、凡そ五六貫の價物なるべし」といふ。奴隸重ねて「わが主は親
族も多く、又毎日に交加ひする友どち、幾人といふ事をしらす。かかれば家裏も、又多分なるに、さ
ばかりの價物にては、事足るべうもあらねど、まづまうして見ん」といひかけて、件の假毛を携へ、
又忙はしく二階に走り登り、しばしありて、一握りの金をもて出でて、半七にいふやう、「この金は三
十兩あり。今これをとらするなれば、數の如く假毛を進らせよ。設し家に結ひたてたる價物なくば、
日數三十日を限りてもて來よ。價は目今、残りなくとらするなり」と宣ひき。然れば後の證據に手形
書い寫めてよ」といふ。半七はこれを聞きて、大きに呆れ、世に假毛を買ふ人はあれど、三十金の花
主は、思ひがけざる僥倖なり。天わが夫婦の誠心を憐み、今はからずして厚倉ぬしへ返すべき金を、
得さし給ふなるべしと、心の裏に深く歡び、墨斗より、束みじかき毫を抜き出して、手形をさら／＼
と書きをはり、「宛名は何とつかまつるべうもや」と問ふを、奴隸さて覗きて「殿の名は畏し、可介と
せよ。わが名にてよかんなん」と、いふに心得果てて、その手形を可介に遞與し、「宣ふ如く家にも三

十兩の價物はなけれど、この大晦日までは、結び立てて進らすべし。價は只今、半ば賜はつてもあるべきに、残りなく恵まし給ふぞ忝き」と、應へつゝ、金を取つて押し戴き、算へ果てて懐に挿め、假毛を悉く箱より出して、これをも可介に遞與し、纏て空嚢を背負ひて歸りける。半七が心中、いかに嬉しかりけん、氣色にさへ見えて哀れなり。然るにこの日、今市全八郎布施蝶九郎は、半七が長町なる家を窺ひ、折よく彼を打ち殺して、三勝を奪ひ去り、宿恨を消らさんとて、二人うちつれ立ちて、長町へ行く折しも、大和橋なる客店より、半七が影の金を得て出づるを闚窺ひ、潛かにその迹を跟けて、人なき處に到らば、打ち伏して金を奪ひとらんと計較みたるが、黄昏なれど年の終りなれば、人の往來も繁くて、その隙を得ず、たゞ徒らに、門方まで跟け來り、生垣の陰に隠ろひて、裏の容子を張ひけり。ともしらすして半七は、暮れ蒐る日の心忙しく、乾菜干つく諸折戸を、明けんとするに、三勝は夫の足音をよくしりて、「爹さま歸り給ひぬ」と、いへばお通は走り出で、入る間遅しと携り著く、恩愛の絆しには、活業の疲勞も厭はず、嚮箱を縁頼に扛き下して、わが子の手を取り、「扱もこの冷さよ。霜瘡は痛うないか、此と爰に居て暖めよ」と、引き寄する地爐より、三勝が汲んで出す、茶さへ妹背の水入らき、「けふは常より遅かりし」と、いふ間に平三は、引き散らしたる選毛片よして、貧には瘦せる小火鉢の炭團掻き起して邊ちかうもて出で、「半七殿寒風にては、思ふ程

の商ひもなかりけん。家に居てさへ堪へがたきに、さぞな全身も米りつらめ。やよ三勝、茶粥なりとも温かに、炊ぎてはやく進らせよ。」といふに、半七小味をなほし、「いな、物ほしうも候はき、何事もうちおきて、まづ申すべき事あり。三勝も歡び給へ。鬻に大和橋の彼所なる、客店へ呼び入れられ、良しき旅客の家裏に、價三十金の假毛を買はん」とて、金をば直に残りなく遞與し、三十日を限りて數のごとくもて來よ。」と誂へられたり。かかる花主は世に稀なり。去年より已む事を得ず、是彼に遣ひ減らしたる、彼の身價も三十兩なり。今これをもて、その缺けたるを補ひ、厚倉ぬしへ返しなば、心少しは安かるべし。これ見給へ。」といひかけて、金を懷よりとり出せば、平三はいふも更なり、三勝大きに歡びて、「そははからざる僥倖なり。是れも御身の忠孝を、神佛のあはれみて、かくは恵まし給ひけん。かからん端とて昨の夜延の、燈花も愁しみの眉を開く祥にて侍るめり。まづ神棚へ御燈を掲げて、酬恩をまうさん。」と、いひつゝとり出す燧箱、火ともし比の昏紛れ、潛び入つたる布施今市、縁頬よりさし覗き、點頭きあふともしらずして、平三は腰に著けたる鍵を撈り、押入の戸棚を押し開きて、厚倉が贈りたる、金を残りなくとり出し、これを半七に遞與していふやう、「貧しき家に不相應なる、預りものと思ふから、夜もうちとけては睡られず。翌は朝まだきに、われその金を奈良へもてゆき、潛かに御身の志を聞えしらして、厚倉ぬしへ返すべし。いよ、舊の數に合へりや、よ

く見給へ」といふに、三勝は、今燈をうつす行燈を、夫のかたへさし向くれば、半七はまづ二十兩の金を置きならべ、又平三が渡與せし金を、財布よりとり出して、と見かう見つ、眉を擧め、「こは不審し。けふ假毛の價にとて得たる金にも、續井家の刻印ありて、はじめの七十金に露違はず。さては大和橋なる旅客は、厚倉二郎太夫にてありけん。彼の人わが、們的苦心を知つて、假毛を買ふといひこしらへ、ふた、びこれを贈れるなるべし。もししからずば、見もしらぬ瘦商人に、その價物を後にして、この夥なる金をとらせんや。あなうたてし。」と呆れ惑ひ、搔きよする金は茶肆の、花ものいはねば面のあたり、主や誰とも問ふ由なく、共に呆る、三勝は、平三と面をあはし、思ひ惑へる油斷を見て、縁頼を踏み鳴らし、「七年以前三條河原にて、脚平足平を殺したる、笠松平三、市の正の仰せを稟け、搦め捕らん爲に向へり。覺期せよ。」と、罵りもあへず、蝶九郎つと走り入り、火鉢をとつて投げつくれば、行燈滅えて發と立つ、灰に咽びて翁も増も、意ならず周章し、驚きおそれ泣くお通を、抱き寄する三勝も、たえてせんすべなかりける。その隙に蝶九郎は、金を残りなく搔い廻みて、外面へ逃げ出づるを、半七やうやくに見て大いに怒り、「後姿は認りある悪棍の蝶九郎、こゝに來つて賊をなす、這奴のがさじ。」といきまきて、中刀搔いとり追つ蒐くれば、平三も後れじと、壁に掛けたる六尺棒を挟み、喘ぎく追ひゆくにぞ、三勝は聲をふり立てて、「物とり復さば追ひ捨て給へ。」夜の

道なるに謀られて、畏ちなし給ひそ。」と、呼べど早くも見えずなる、ゆく先いかにとおぼつかなく、灰はやう／＼おちつけど、猶落ちつかぬ胸を拵で、お通を賺しこしらへつゝ、碎けたる炭圍の環を、忙はしく爐の中に掃き入れて、行燈を引き起し、かくして又燈を點す。後方に忽地人ありて、物をもいはず抱き留むるを、呵呀と打驚きて、身を返り、掻い退けんとするに、その人引き留めたる袖を放さず、呵々と笑つていふやう、「別れてより六年あまり、既に七年を経たれば、面忘れやしたりけんのおそる、ものにはあらず、はじめ半七が同僚なりし今市全八なり。曩にそなたを伴ひ出でたるとき、三條河原にて、平三に遮り留められ、刹へ半七によき事を致されて、果ては南都を追ひ放たれ、牛馬にも劣りたる宇吉世をわたる事、みな是れ君ゆゑなりとおもへば、聞ゆべき恨みもあれどそれはいはず、否といふとも、應といふとも、直に東の方へ將てゆきなんの誘給へ」と引き寄するを、三勝はふり拂ひ、掻い遣りて走り退き、腹だたしさに聲ふり勦まし、「扱は夫の物がたりにて細しく知る、悪棍の全八なるよ。汝蝶九郎と諱し合はし、又や半七殿に寇せんとて、一人は金を奪ひ去り一人は残り居て、わが身に迫る横道もの、物いふも穢らはし、とく／＼歸れ、歸らずや」と、勇くは罵れど身ひとつの、人を呼ばんも鄰は遠し、流石に怖さ口をしこ、早く夫の歸れかしと、思ふ氣色を見て全八は、又呵々と冷睨ひ、「さういへばなほおもしろし。よしや一日、酒は飲まずもあれ、忘るゝ隙もなき君が、

往方を其首か是首かとて、この年來心を竭し、索ねあてたる寶の山、手を空しく歸らんや。かくても半七が事を、思ひ棄てすばいかにせん。この女の童なりとも將てゆきて、儂やらうに賣つて遣り、酒貫にせねば持にならず、誘來よ。」といひも果てず、項髮無手と引き廻み、あれやくくと叫ぶお通に、手拭銜して小腋に抱き、走り出でんとすれば三勝は、遣らじと留むるを突き倒し、臥しつ、携るを丁と蹴かへし、「欲しくば彼首の橋詰まで、些許出たべ。」と戯れて、闇のかたへと走り去る。三勝はやや身を起して齒を切り、憎しと思へど人質をとられていとゞせん術なく、わが身掬となるよりも、猶心苦しくて、聲を限りに、「やよ。」と呼び、子に引かれ行く夜、見失はじと追つ蒐けたり。かくてその夜も初更の太鼓、うち出で見れば夕月夜、六日の影のほの暗き、往來迹絶えし相合橋に、霜おきはえて風寒み、千鳥鳴くなる枯蘆の、穂がくれて橋梁に、釣船一艘歌りける。さる程に三勝は、ふり亂す黒髪の長町より喘ぎ、裳踏み反して追つ蒐ければ、至八はお通を引き抱へて、橋の真中に立ち留まり、欄干に身を倚せかけ、且くこれ待つ程に、三勝馳て走り來つ、諸手をかけて稚兒をとらんとするを至八は、背向になりて寄せも著けず、背の癬瘡を、ばりくと搔きながら、見かへりていふやう、「やをれ三勝、などてかく、物の憐れをばしらざる、諸共に。」といへば承引かず、「しからばこの童なりとも。」とて將て來れば、いづ所までもとて負縁るはいかにぞや。半七が事を弗と思ひ

絶えて、余八に従はば、こゝが妹育の相合橋、又従はじとならば、童が爲には三途の川、半七を思ひ棄つるとも、この童を殺すとも、二つに一つは絶體絶命、心を定めて應へせよ。いかによいかに」と逼められて、三勝は柳眉を逆だて、疾み見る睛に涙を含み、「藏きかな余八郎、稚き者を苦しめて舞むとも、わらはが心は石より重し、いかで轉ばす事を得ん。よしなき事をいはんより、お通を返せ」といきまきつ、又携りつゝを、擇と踏倒して、眼を隠らし、「面に似けなくしふねき街妻、ぞひなく殺生せねばならず。是れ見よかし」と欄干の上、にさし出す稚兒より、母は目も腫れ、神消え、「やよ待ち給へ、いふ事あり。」「しか止むるは従ふ意か。」「いな、いかでこの身を汗さるべきに。」「しからば只今手を放つぞ。」「それは餘りに情なし。」「情なしとは君が事、泣きたうても猿轡、きすが命の惜しければこそ、この兒は甚う戰慄へるなれ。かくても節操は破られずや」と、活け死しみ理なき胸責に、何と回答へん言の葉も、只泣き沈む折しもあれ、丁々はつしと打ちあふ太刀音、「奸賊布施蝶九郎、逃ぐとて何所まで脱すべき、蓬し返せ。」と呼び留むる、半七が勇き太刀風に、靡きたつ蝶九郎は、且戦ひ且走り、相合橋の欄干へ手をかけて、跳り入らんとする所を、半七刃を閃かして、背を一刀刀と歎れば、「阿呀」と叫びて彼此遠き、闇はあやなし危きそなたに、泥掣に縛とあふこ、ちん、三勝はこれを見て、「やよわが夫、お通を救うて給はれ。」と、叫ぶ折しも誰とはしらず、後方よりつと來りて、

お通を抱きて走り行く。全八は口力を發はして、蝶九郎を助けんとせしが、餘りに事急にして、終に及ばず。半七が撃つて蒐る太刀の下をかい潛り、柱へ縁はる三勝を丁と蹴倒し、柱刀引き抜きて、逆へ戦はんとするに、半七奮然として、獅子の怒りをなし、「わが子の仇人、其所な退きそ。」と聲ふり立て、踏みこみて撃つ程に、全八忽地辟易して、胸より乳の下まで、ばらりすんど飲り下ゆられ、さと漬る鮮血と共に、撞と倒るゝを乗り懸りて、數回胸前を刺しとほし、刀の血を押し拭うて、體に楚と納むれど、納まりかねたる今宵の殃危、身にもかへじと慈愛しめる、わが子と金を失ひて、夫婦迭に慰めかね、橋より下をさし覗けば、飲りし船も躑ぎかへり、跡なくなりし蝶九郎は、水に溺れてや死したりけん、又浪を潛ぎてや脱れけん、「お通が往方いとほし。」とて、衣は黒みし河水を、つづくくと見て茫然たるその時、三勝は、全八がお通を搔い觸みて走るを追ひ留めんとて、爰に來れる一五一十を、半七に聞えしらし、猶かき口説きていへりけるは、「お通が危窮の時に臨みて、御身も蝶九郎を追つ蒐けて、こゝに來給ふかひもなく、とりも留めぬわが子の魂の緒、六歳の年極の初めの六日に、命終るも前世の、業因にや侍りけん。あな胸痛や」と許りに、轉鞭びてよゝと泣けば、半七聲を勵まして、「お通が事は歎くとも及ばず、今蝶九郎を撃ち漏らして、既に金を失ひぬれば、厚倉二郎大夫に對して、わが志を述べ難し。とてもかくても半七が、忠義は今宵この川の水の泡となりたるな

り。さればとていたづらに歸るべきにあらず。まづ河原にそうて蝶九郎が生死を見定め、お通が往方を索ねばやと思へば、御身はこゝより長間に立ちかへりて、平三どのに縁由を告げ給へ、とく／＼と急がしたつれば三勝は、もろ共にともいひかねて、目を拭ひつ、夫にむかひ、「宣ふごとく、二人に一人は立ち歸り、参々に告げずは便なかるべし。よしや蝶九郎が生死しれずして、金をとり復すよしなくとも、翌は早天立ちかへり、参々にも談合し給はば、又よき事もなからずやは。かならずしも思ひ逼りて、悲しき事をな聞かし給ひそ。」と、丁寧にいひ諭せば、半七聞きうち點頭き、「われもさこそ思ふなれ。深けぬ間に。」といそがされ、妻のこゝろは跡へのみ、残る影なく入る月の、暗きに迷ふ愛惜の、やるかたなきは理なれど、歎くは愚癡と諫められ、「妾は泣かねど御身こそ。」、「いなそなたが。」と面をあはし、再び絞る相合の、橋の袂も子故の闇、立ち別れんとする折しも、後方に張ふ夜行翁、「すは人殺し」と呼ばはりて、打ち鳴らさんとする太鼓の聲を、斜にすつばと半七が、刀尖餘りて切り落す、提灯滅えて野干玉の、夜の浪音水鳥の、對に離れて三勝は、長町を斥して歸りけりとぞ。

長町の五味（上）

笠松下は、その夜より蝶九郎を追つ蒐けたるに、老の足なれば終におくれて、半七にさへ得あはさ。初更の比及に徒らに立ちかへりて見れば、半七はさらなり、三勝おつうも何地のきけん、燈火細

くして、裏には人ひとり居す。さては半七がいまだかへらざるを心もとなく思ひて、女兒は孫を伴ひて、出でたるよ。月も入るべきに、居つゝ待てかしと眩きて、暫しこそありけれ、や、更けのけど、婿も女兒も歸り來れば、落ちもつき難くて、提灯に火をうつし、引提げて出でながら、門の戸を鎖さんとする折しも、三勝は髪をふり亂し、洗足にて只一人歸り來つ、「そは爹々に坐さずや。」と、いふ聲も常に異りて、喚きへ泣き腫らしたり。平三見かへりて、「いかに半七には逢はざりしか、お通はなどて伴はざるやらん。」と、問ふに三勝忽ちよゝと泣きて轉輾ぶにぞ、平三はます／＼訝しみて、あつたしく扶け起し、引いて諸共に裏に入りて、猶しば／＼問ふほどに、三勝ははふり落つる涙の間に、相合橋にての爲體、全八が事、蝶九郎が事、お通を水中に投められたらん。」とて物がたれば、平三は聞きもあへず大いに驚き、「噫悲しきかな、孫は悪棍に殺されたるよ。されど半七が、當の敵全八を撃ち留めたるのみ、少しは心やりなりかし。然らば我も半七に方を變はし、蝶九郎が生死を見定めて、彼の金をとり復し、お通が事も聞き定めて來べし。よしや翌まで歸らずとも、おちるて家にまち給へ。かかる時にはわきて心を放しがたし。よく鎖して睡り給へ。」と聞えおきて、再び提灯に火をうつし、又六尺棒を突きたてて、裳を引折り走せ去りけり。かくてその夜も明け放れ、冬の晷は短きに、長き別れの悲しくて、三勝は只ひとり、わが子の爲に裝る香も、煙となりし夢の跡、家廟の障子引き開け

て、しばし念じて、又舊の地炕のほとりに座を占めて、形なき世に消え残る、身は埋火とさし對ひ、胸の鏡もうち曇り、とぎなき宿の物思ひ、この廣き浪速津に今をはるべとこの花も、昨夜のまゝに歸り來ぬ、夫と父はいかにぞと、いと長町に待ちわびて、心おちるぬ冬籠り、いさゝむら竹吹く風も、々々ぐれ近くなりけり。滑かる處に武士の、妻とし見えて襦袢の、前かいとりて括帶、練の帽子の白雪を、頭には戴けど、髪はいまだ四十あまり、盛り過ぎにき山茶花の、花田の油筆挨拶、藪包の行轡を、奴隸に扛らして門方なる、袴染の暖簾を打瞻め、みゆの屋とあれば憂ならん、案内よといふに心を得て、一人の従者が暖簾を、つとかき揚げてさし覗き、「假毛とやらん、蓑笠とやらんを高く、蓑屋とはこゝなりや。物申さん」と呼門ふを、三勝聞けども出でも迎へず、「蓑屋はすなはちこゝなれど、幸なき事の侍るによつて、父も夫も家にあらず。もし假毛を見給はんとならば、翌又來ませし」と許りに、「憂きに迫れば生業も、誰が爲にせん。」と亡語つ。門なる女房は、これを聞きて、轡をかきおろさし、従者等を其處に待たしおき、「ゆるし給へ」といひかけて、つと裏に入りしかば、三勝は、思ひかけねば顔うち曇り、「まづこ此方へ」と請するを、固辭もせで上座に、居替るも訝しく、「何處よ何事の、おはしまして訪はせ給ふやらん。門聞きたがへ給はずや」と、いへば茫然とうち笑みて、「さおもはるゝも理なり。半七は家に居給はずとか。そなたは豫て聞き及ぶ、舊は洛の大柏、笠屋

三勝どのなりや。」と、問はるゝも恥かほしく、「宣ふごとく、舞々の三勝は妾に侍り。」と答ふれば、膝を進め、「聞きしに勝る標致よし。物いひ様にて伶俐しさも、思ひやられ侍るかし、と許りにては、なほ不審しく思ひ給はん。わが身は彼の、そなた故に不忠不孝の人と呼ばるゝ、赤根半七が舅、大和國續井家の一の老臣、蟻松典膳が妻に侍り。」と聞きもあへず三勝は、顔銀やかに何となく、轟く胸を押し下けて、「さては夫の物がたりにて聞き及ぶ、園花さまの母御にてましますか。浪花の蘆も枯れ果つる、年の終りにはるゝと、訪はしたまふは故こそあらめ。」と、半ばいはきす。「晴三勝どの、大家の老臣を爰に被て、不義淫奔を責め罵り、恥かかせんとて來もせしかと、推量り給ふかもしらねど、絶えてさる筋にはあらず。色情は思案の外とやらん、引手影のその中にて、誠を見する密び寐も、度重なりてはたつ名も厭はず、かく對ひと侍て居たまふと、大和へも仄聞え、打腹たつかと思ひの外、なほこのまゝに園花が、夫の無事を歡びて、近屬は顔の色も、些は見直す母が嬉しさ、わが子を譽むるにはあらねど、妬みごと、ろは露ばかりも、なければこそこの七年、置去りに去られながら、親の諫めも聞き納れず、長き病著を幸ひにして、ふた、び嫁らぬその節操を、せめて半七に聞えしらしのびしのびに折節の、音耗もさしたさに、事の爲體を見定めてよ。」とて、園花が見なる曾太郎を、一昨この地へ來したれど、とかく女子は女子どち、半七はとまれかくまれ、三勝殿の思ふ程を、聞かすば

ことも果てじと深念し、夫典膳へは、園花が病苦平癒の立願に、天満の天神へ詣づるといひ爲へ、今朝且まだきに奈良を出でて、うちつけに訪ひはべり。聞けば女兒さへ擧げ給ひぬるとやらん。なに事も世過ぎ身過ぎ、縦ひ商人になり下りても、半七は恙なく、御身も無事におはするを、見れば恨みもなには測、あしかれとては訪はぬものを」と、思ふにも似ず親しみの、信々しさに三勝は、驚らる、よも驚くるしく、さし俯いて居たりしが、やうやくに頭を擡け、「縁故をしり給はねば、いかばかり恨み給ふとも、理ならずとは聞き侍らす。しかるを知つて信やかに、宣はすればいとゞたほ、御心の申推量られ、影護くも面なさの、身のいひわけに似たれども、わらはは故ありて稚きより、半七ぬしと結髪けし。縁故をいふ時は、阿翁のよしあしを、あけつらふ悲しきに、いはすとすれば事ゆかす。元來血氣の惑ひにて、色に愛で、愛でられし、妹着ならねばわが夫の、落にて迹を暗うせしも、ふかき忠義の爲なれど、是れも又あらはにはいひがたし。とてもかくても世の中に、頼む陰なき三勝が、たえて恨みもなき人に、恨みられなん罪障は、重きがうへの小夜衣、淫婦といはるゝとも、ふた、び夫が世に出でば、尼とも奈良へ歸参の事、神や佛へ合はず掌も、只これのみに侍りし」と、いひ果ててよ、と泣き沈めば、敷浪聞きて涕うちかみ、「さてはそなたは半七と、結髪せしその人なるか。縁由を審にはせねど、五條にて半七が園花に物がたるを、不圖聞きて初めてしりぬ。しかりとも、理

もていふときは、わが女兒は主君の御許しを受けて、結びたる縁なり。又そなたは稚きときに、親と親とが結ばれたりと、私の縁なれば、いひとくに後ぐらし。さればとて、子まである人を、むじんに去らして、心持よしとする、鬼々しきわが女兒にははべらす。よりにそなたを舊のごとく、半七に齊眉けて、これをば側室とし、又園花は、奈良と浪花と隔つとも、契りはかはらじと、半七が只一筆、消息して給はらば、耆婆遍鵲の藥劑にも、まして女兒は本復せん。これは是れ母がこゝろなり。又夫典勝が志はきにあらす。半六に欺かれ、可惜女兒を、虚氣き半七に妻あはして、面目を失ふのみならず、多くもあらぬ愛子をば、見殺しにする事よ。既に半七が在處したれば、搦め捕つて年來の、憤りを散らさでやは。といきまきつし。こは親の心にては、いと理なれど、それも又園花が、病著をます一つなり。思ふ事かなはねばこそ憂世なれ。いひ難き事なれど、夫の爲と思ひ諦らめ、われから飽かれて半七と、離別して給はらば、夫典勝が憤りも忽地に散れ、半六どのの善居も免り、差によりては半七が、歸參の願ひも稱ひなん、半七を罪なほし、半六どのに日の光も見せぬも、又見するも、そなたのこゝろにあるべきなり。痛ましや半六どののは、老のくり言世をはかなみ、舞々の老狐に妖れられたる愚者よ。わが子憎し。と罵るは人前ばかり、この七年が程閉ぢ籠められて、いとしく老い鏡ひ、慾に惑ひし自の恨ちを、泣き暮し給ふとぞ。思ひ死する園花や、子故に惑ふ半六どの

を、助くる上に半七も、發跡でて忠孝の、道にしも立ち返らば、孰かさなたを譽めざるべき。退れぬ契りを思ひたえて、別る、苦節は今の世に、稀なる女子といはれ給はば、三方四方の身の修まり、そなた親子が朝夕は、わらはと女兒が身に飾る、四時の衣服を薄くしても、よきに調ぎて進らすべし。私ならぬ私には、女兒が可愛きのみには侍らさ、聞きわき給へ、うけ引きて、給はれかし。」とかき口説けば、三勝は暈きかねて、涙の泉むすび果てぬ、妹存の中も胸の中も、裂くほど苦しき浮世の義理に、何とのうべの相合橋も、あはれぬわが子と夫にさへ、別れの櫛も膝に落ち、せめて彼處を死にどころと、われとわが身に暇を、齒る、髪を掻きあけて、一事をわきてかくまでに、聞え給ふこそ憐しけれ。わが身ひとつを退き侍りて、半七ぬしを世に出し、阿翁の直籠りも、許され給ふよすがともなるならば、これにます僥倖は侍らすこといふ顔を、つくなくとうち瞻め、そなたなり、園花なり、揃ひも揃ひし心操、容止のみかこゝろまで、美し過ぎて痛ましきも一人、日來伶俐しき女子にても、かかる時には愚にかへり、理も非も聴かぬ習俗なるに、かくてこそはるんと、浪速へ來つるかひはあれ。よしや半七と縁は離るゝとも、けふよりは女兒とも思ひ侍り。向にもいひつるごとく、とまれかくまれ朝夕の、煙は細くもたてさし侍らん。さていふ事のぬいひならべて、なほ問ひ殘せし事こそあれ。半七が洛にて、跡を暗うせしは、忠義の爲と聞え給ふこそこゝろを得ね。もし歸參のよすがとも

なるべき筋には侍らずや。明白にいひがたき事なりとも、いとほしと思ふ婿が上を、争でか人に漏らすべき、しらし給へ。」と語り問ふにぞ、三勝終に推辭むことを得ず、七年以前に半七が、二郎太夫と諱し合はし、古稚丸淫樂の悪名を雪めん爲に、結髪せし女子なりとはしらすして、三勝を奪ひ去り、直に殺さんとしつるはじめより、白河山にての爲體、多賀の宿居、信濃路の艱難はさらなり、平三が義に勇む、鋭き志に至るまで、涙とともに物がたれば、敷浪驚きてますく、嗟嘆し、「思ひきや半七は、比稀なる忠臣にて、其方は又薄命の貞婦ならんとは。その忠臣も不忠といはれ、操貞しきも淫婦と罵られ給ふから、腹だたくもあるべけれど、前世の悪業にて、善人も發跡でず、才あるも用られず、一生思ひ屈まりて、墓なくなるも多かめれ。世は形なきものに侍り、とはしりつ、も妹と夫の、中をむじんに引き離くるは、いぶせくも腹くろき、老女とのみな思ひ給ひそ。子をもつものは又人の子の、親の心もしらでやは。半七が女兒も、今茲ははや六歳になるとか。彼の人大和にあるならば、園花も今ごろは、子ども二人も産むべきに、わらはに血筋はあらずとも、婿が冢子なりせば見まくほし。なぞやかかく腹きたなく、匿して逢はし給はざる。その子が何をしるものぞ。」と怨すれば、三勝は思ひ忘れぬわが子のこと、「そのお通は。」といひかけて、幾度か目を押し拭ひ、「隔てて逢はし進らせすと、恨みたまふも理なれど、お通は儂なくなり侍り。」と聞きもあへすうち驚き、「そは何の頃よ

り病み侍りし、俄頃にまはに虻をのとりつめしか」と、問はる、程ほどなほ鞠むす苦くしく、病やまみて且まく介け抱はし、膝ひざの上うへにて死しすならば、同じ歎なげきもかくまでに、悔くしくは思おもほえじ。故ゆゑありて身みにもかへがたき金かねと共に、
崎さき昔むかし悪わる棍こんの全ぜん八はち、蝶てつ九く郎らうに奪うばひ去さられ、相あ合あ橋はしの夜よの霜しもと消きえはべり。さるによつて、父ちち平へい三さんも半はん七しちも、出いでてよりいまだ歸かへらず。子こに後おのれ夫をとに別わかる、便たづなきを察さつし給たまへ」と、回くわ答たへつ、又また決たを絞しぼりける。

三七全傳南柯夢卷之六上 終

三七全傳南柯夢 卷之六下

東都 曲亭馬琴編次

長町の五味(下)

敷浪嘆息し、「痛ましきかな、只ひとり子を失ひ、又や今この愛別離苦、心ほそごも思ひやる、その
 懶さを慰むる、陪從の童を進らすべし。」といひかけて、縁頬に立ち出で、外面を磨けば、豫てこゝろ
 ろや得たりけん、一人の奴隸、輜の戸を細やかに引き開けて、かき抱き來る稚兒を、三勝は遙かに
 見て、且不審し、且歡び忙はしく走り、「喃お通、嬉しや恙なかりしか。」と、思はず莞爾と打笑
 みて、抱きとれば小躍りし、「やよ母御これ見給へ。しらぬ叔さま阿婆さまが、この赤い衣三つも四つ
 も、縫ひ刺して俄頃に被せ、かかる木偶さへ賜はりし。」と、弄賣す間に敷浪は、舊の處に坐して又三
 勝に對ひ、「憂きを慰むる和女の陪從には、その女の童にますものあらじ。寔にこの子の命つよさ。わ
 が子曾太郎は、昨日よりこの長町を徘徊し、潛かに半七が今の爲體を窺ひながら、いひ寄る便を得ざ
 りしかば、はしたなくはこれを訪はず、されば旅寢の徒然なる儘に、昨夕堀江に赴く折しも、相合川

の邊にて鬪諍起り、打ち合ふ太刀の光にてこれを見れば、半七と全八なり。三勝と稚き女兒が周堂見
るに痛ましく、潛かにお通をかき抱き、河原つたひに走り退きしが、はからずも蝶九郎が手痕を負う
て、脱れ来るに出あひしかば、矢庭にこれを生拘りて、舊の宿に將て歸りつ、はじめよりこのお通を
半七が子としるから、一夜さ旅宿にとめて、さまざまにいひ慰めたりとぞ。しかるに、わが身もさ
きに曾太郎が旅宿に到着して、縁由を聞き、遂に轎にかき乘して、將て來りぬ。これやこの稚兒を
もて、その父に換へ、御身が憂苦を慰むる、心ばかりの贈りもの、納め給はばいかばかりか、歡ばし
く侍らめ」と、事審かに説き示せば、三勝つくくくと聞きて、抱きたるお通を、敷浪がほとりに押
し遣り、「おん好意は嬉しく侍れど、何れなりとも隻親に、離る、その子の薄命、大和へ伴ひおん身が
孫とも、見そなはし給はらば、貧しき母が養育には、まして久後たのもしからん。たとひ夫は何とも
いへ、思ひ絶えにき妹春の契り、互代りの護身囊を、この爐の中へ投げ入れて、願事復す産徳の、
庭療とも見給へかし」と誓ひをはり、白やかなる項に掛けたる、護身囊の紐かい外せば、はらりと落
つる三味線の、撥の片割かたへより、敷浪これを見て大いに怪しきやよ待ち給へ」と押し留め、「不
審しや、この撥の片割はわが身從來認りあり、いかにしてか所持し給ふ。もしそなたの乳名を、おご
んとはいはざりしか。護身囊に納めたる、臍帯のありもやする、しらし給へ」といそがせば、三勝は

と見かう見て、「さ宣へば葬々と、思ひ當る像見の二種。わらはが乳名はおさんと呼ばれ、丹波太郎といひつる人の、女兒にて侍るなり。さればおん身はこの年來、神に祈願をかけ塌し、思ひ慕ひ奉りし、母御にてましますか。」「うべ我こそは實の母なれ。」「こはくいかにかに。」と携る手に、お通も中へ引き寄して、果ては涙の川の字に、親子二人が袖の雨、淵淵と變る軟きなり。且くして三勝は、胸前を拵で下し、「三歳の年に別れ奉りて、面影は認めねど、名告りあふ時、撥を割符と参々の遺言、けふまで存命へ給ひなば、さこそ歡び給はめ。」とかき口説けば、敷浪はいと、面なき風情にて、「しらぬ事とて外がましく、いひつる事の悔しさよ。」と、しばし楯を押しゆるめる、懐よりとり出す、撥の片割をひとつに合はし、「思ひ出づるもいく年ぞや。前夫の浪々の、便なきまゝに、三歳のそなたに乳房を放し、夫婦倦かぬ別れして、わが身は洛へ上り、しかして後は夫や子の、往方何國としらざりき。さては参々はなき人の、數にさへ入りたまひしか。さは何比ぞ。」と問ふ母も、問はる、女兒ももろともに、胸ふたがりて願にも應へず、「さればとよわが父は、盲目となりて髪を剃り、いとざりけなき琵琶法師、名も丹波部と更めて、伊勢に四年の宿居、其處にさへ住みわびつ、御身の在處を訪はんとて、妾を將て首途し、はるる洛へ上り給ふ。是れなん死出のやまと路にて、山兒の斧に撃たれ、非命に世を去りたまひたる、首尾は簡様々々。」と、半六が事、橋條が事、奈良と洛の一五十一を、

物語れば敷浪は、わが子に羞べる身の幸福、綾や錦に装ひたてても、こゝろの襦袢は寔々しき、和女には遙かに劣りて、鈍くも缺けたる婦の道、夫に別れしその年に、浴へはのほりぬれど、給事せんよすがもなく、大和なる精井家の老臣、蟻松典膳といふ人の内室、世を早うし、跡に遺れる稚兒に、乳母を索むると聞きて、なほ乳汁の潤らざるを幸ひに、大和へ赴き、體てその家に奉公して、守り育てたるは曾太郎なり。かくて故郷へ消息し、わが身南都にある由を、夫の家へ告げ遣りしが、夫は近曾女兒を携へ、旅だちてより往方しれず」とて、終に届かぬ東路より、ふた、び仄る文卷川の、きそふ水まつとはあらねど、典膳どのに不圖思はれ、一夜ふた夜の添臥しに、早くも有身りて産めりし子は、半七へ妻あはせたる園花なり。さればにや世の人に、馬子船長とならべいはる、お乳の人も、猛に老臣の、後妻に引きあけられ、安らかに年月を送るにつけても、忘れがたきは和女の事、心のたのみは三味線の撥はふた、び合ひながら、稚きよりわが女兒を、育てさしたる思ある人、平三どのとやらんに一言の、禮謝いはれぬ悪因縁、姉の夫を妹に、對はせんとする羞しらす、逢き母がこゝろに似よとて、園花にも操を破り、半七が事を思ひ絶えよと、いく度かす、めても承引かさればせんすべなく、又阿容々と爰へきて、道理めかしてわり口説き、忠臣烈女の中をさく、おもへばわれは淫婦、愛に溺れて又愛を、失ふ因果は忽地に、親子三すぢのいと迫めて、天道の縛めは、割符を合はす

謂と撥、而目なや。」と身を投げ臥し、聲を惜しまず泣く母の、脊拊捺る三勝は、それを理ともいひかねて、「名告りあへば園花どのは、妹なれども異父兄弟、義理ある方に夫を配偶し、これを菩提の種にして、浮世の外の山ごもりは、なか／＼安く侍りなん。わらは思ひ諦らめたり。甚いたくな歎き給ひそ。」と、諫むればうち點頭き、「女兒としつては半七と、いよ縁を離らさねば、今の夫と半七どのに、母子始めより馴れ合うて、逃にけも奔はりしたりなんどと、疑うたはる、ともいひとき難し。よしなやはる／＼尋ね来て、孝と貞とは人なみに、勝れし女兒に嘆きをまさし、われも又いかばかり、憂きをましろの猿智慧が、仇となりぬる悔しきよ。せめてお通を將て歸り、養育まば丹波都どのと、そなたへの罪滅ほし、園花が爲には姪、わがなき後も疎かには思はじ。けふまでしらぬ祖母と叔母に、養育まる、この子の幸なき、春にもならばしのび／＼に、逢はしに來すであるべきぞ。」と聞えしらして潸然と、涙ぐみ居るお通を引きよし、「實の孫とも知らざりしが、この愛々しさに絆されて、他の子のこゝちはせざりし。恩がましく將て來つる、鬼婆々とな思ひ給ひそ。わが身はそなたの實の祖母さま、翌は大和へ伴ひかへり、欲しといふものは何にまれ、得さすべきぞ歡びたまへ。嗚呼胸苦し。」と立ちあがり、孫を引く手もちからなく、いひ賺されて稚兒は、「又木偶を貰うて來ん。母御よ翌は爹爹さまを、迎へに來してたまはれ。」と、いはけなき言の葉の、露は袂におき餘り、日送り見かへる親と子が、果敢な

き別れを告げわたる、諸行無常の鐘の聲、この入相はつねよりも、こゝろ細きそいやましぬ。かくて
敷浪は三勝に別れを告げ、や、外面へ立ち出でて、お通を乗する轎の内にも、よゝと泣く聲をもら
聞きて三勝は、「もし園花にはあらぬか」と、思ふものから走り出で、呼びとむる間に奴隸共、はや搦
け出す轎に、少し後れて敷浪は、小首傾け泣顔を、見せじと後に引き添うたり。折しもあれ編笠深
くしたる武士二人、右手左手に引き別れて、前より生垣の陰に竊聞きし、目今敷浪が歸るを見て、或
は歎息し、或はひとりうち點頭き、みち引きちがへて立ちわかれつ、往方もしれずなりにけり。三勝
それには心もとめず、遙かに彼方を見送れば、姿臙に黄昏れて、師走七日のけふはからずも、あふ
を別れの母親の、後影もわが子の貌も、見つるはこれを限りかど、思へば胸も板庇を、漏る夕月を心
あてに、ふたゝび裏へ泣きに入る、庵溜の障子をさど聞くを、誰そと見れば半七なり。そのとき半七
は、三勝に對つていふやう、「われ溝に背門より歸り入つて、一五一十を審に聞けり。みな是れ過世の
讎敵は、今親子となり、同胞となり、夫婦となりて、この煩惱をなすにこそ。父の墨居を許され給は
んは本意なれど、義を捨てて舅に佞媚ひ、豊阿容々々と南都へ歸らんや。加之相合橋にて全八を殺
せし事、夜行翁が訴へによりて、はや市の正より討手を向けらるゝと風聲す。しかりといへども、蝶
九郎をとり脱したれば、這奴等を賊なりといはんにも證據なし。且己むことを得すといへども、厚合

氏にいひつることを食みて、この七年が程、御身と諸共に世の營みを致し、剝へ身價をかへさずば、われは是れ亂離の人なり。何をもちて忠義といはれん。とてもかくても半七が、死ぬべきは今宵なり。さればとて、こゝにて自害せば、平三どのを係累せんか。彼の青山の酒ならで、無明の酔ひを千日寺の、草の原にて醒すにしかず。己みなんく」といひも果てず、走り去らんとする夫の裳を、三勝は慌忙きて引きとゞめ、一手を束ねて絞首刎ねられ、主親の面を汗さんより、自殺せんと思ひ定め給ふを、理ならずとは思ひ侍らねど、諸共にとは聞え給はで、なぞてかくまで三勝をいぶせき者にはし給ひつる。今宵に迫る身の憂きは、彼處にて聞き給はずや。妾まづこの處にて刃に伏し、君が年來の情に答へはべりてん」と、いひも終らず夫の刀に手を掛くれば、半七急に押しとゞめ、一けに思ひ懼ちぬ。濡れぬ先こそ露をも厭へ、夫婦が上も厭うてかひなし。今こそ御身もわが手にかけて、志を致さすべし。只悔しきは、白河にて得死なすして、平三どのの誠心を、他にするのみ面目なき」と、身を恨むこそ理なれ。三勝いたくうち泣きて、「有身の親、養ひ親と、親は夥もちながら、何れをいづれとわきがたき、恩を仇なる身の終り、せめて一筆遣さん」とて、かけ硯の蓋反ねかへし、墨は曲れど直なる管の、筆をこゝろと硯に浸し、出居の障子にかくばかり、

きかまほし身のうき時のかくれ墓なにかは山の奥ものかしき
と書い寫せば半七も、もろともに筆をとりて、

一画集第十四衣笠内府

かくれみののうき名を隠すかたもなし心に鬼をつくる身なれば
と、書き留め、筆をすつれば外面より、羣り來たる捕手の兵士、二相合橋にて人を殺せし半七を、搦め
捕らん爲に向うたり。縛め受けよ、といきまきて、跳りかゝるを引き被ぎ、雄手雌手へ撲地と投ぐる
を、飛び踰えて又組み著くを、ふり拂ひては打ち倒し、ばらりくと投げ退けて、誘給へこととて半七
は、妻の手を引き走り出づる、月には暗き諸折戸、わが門近く歸り來る、半七直とゆき違ひ、見返り
て、二そは、三勝、増殿にはあらずや、と問ふ隙も、荒男の兵士等が幕直に、半七遣らじと追つ、蒐け出
で、先に進むを半七が、足を飛ばして丁と蹴倒し、續いて懸るをとつて引つ布き、こゝ構はずにと
ゆふまぐれ、應へもやらず掌を合はし、ふし拜みつ、妹と夫が、又手を取りて死ににゆく、今宵一夜
を千日の墓なきものは命なり。

二 日寺の 柱

さても半七三勝は、往來絶ゆるを待つほどに、彼此にて夜を深し、涙の雨にはさして行く、かひこ

そなけれ夜の傘、しばし人前をしのべども、骨は誰にか拾はれん。竹田伏見も外に見て、只後髪ひけ
そりの、町を雄手に駈敵道、田毎に星の景氷る、身は捨て果ててなきものと、思へど寒き北風に、追
はれて西をたのむかな。師走七日を亡日とは、昨日までもしらざりし。跡に残せし稚兒の、父よ母よ
と啼くならば、春いかならん浪花津の、梅が笠屋と糞蟲の親の心は鬼ならで、黄金も玉も何かせん、
手にます寶なきものを、それさへ今は思ひ絶えて、喜怒哀樂もみな夢の、浮世としれどまだ醒めぬ、
爛酒煮賣夜商人、わが爲ならねど寒念佛の、鉦の音さへ何となく、耳あらたまる霜の聲、無常迅速東
の間に、千日墓に著きにけり。時に永祿某の年冬十二月七日なり。かくて半七三勝は、立てならべた
る卵塔の間なる、枯柳の下に座を占め、なか／＼に覺期を究めたれば、夫婦物いふべうもあらで、三
勝が十遍ばかり唱ふる念佛の聲を心あてに、半七やがて闇に覺く、腰の刀を抜きはなせば、墳の後に
又二人、苦痛の稱名今般と覺し。夫婦はこれを聞きて大いに怪しみ、「我に等しく又こゝにて、自殺
する人やある。やは後れじ」とて半七が、ふた、び刃をふり揚ぐれば、「やよし侍ち給へ。」と、呼
びとゞめつゝ、厚倉三郎太夫友春は、蟻松曾太郎と共に、蝶九郎に索をかけて、これを可介等に引か
し、飛ぶが如くに走り来る。跡に續きて平三は、お通を背負ひ、園花を扶け抜き、喘ぎ／＼追つ蒐け
來て、手に／＼さし出す提灯の、火光に照らす墳の後に、思ひもかけず敷浪と半六は、間五七尺を隔

てて自害し、半七等を見て忽地に辭切れたり。人皆この景運を見て大いに驚き、夫婦兄弟幼き、お通も共によ、と泣き、或は悲しむ或は呆れ、こはそもいかにとて、慌忙きつ、走り寄り、抱き起してさまんゝに馴れども、今ははや救ふべくもあらず。と見れば傍なる石塔に、二枚の遺書を貼りおきたり。そのとき二郎太夫す、み對ひて、半七等にいふやうに、各の哀傷いと理なれど、つら／＼この遺書の趣を見るに、赤根半六は、昔榮利を謀りて、木精の榮を肩ともせず、つひに米谷なる、老楠樹を伐をしれば、忽地悞つて丹波郡を殺し、更に約にそむきて三勝を失ひ、蟻松氏と婚縁を締結したる事は、みづから作せる業なりとは曉りながら、近曾半七は三勝を將て、長町に活業すと傳へ聞き、いよ、憤りに堪へずして、その虚實をしらん爲に、昨々潛かに五條の家を潛び出で、鶴に敷浪と三勝と、親子の名告りせし始終を竊聞きして、始めて夫婦の忠孝心烈をしつて、懺悔後悔し、こゝに來つて自殺するものなり。願はくは三條河原にて二人の悪棍を殺し、又昨夜相合橋にて、全八を殺せしものを半六なりと市の正へ訴へ、恩人笠松平三と、わが子半七を救ひ給はるべしとあり。又敷浪の遺書には、二人の女兒が心操の比なきに深く羞ぢ、且三勝が死を究めたる氣色を猜し、わが身これに先だちて自害す。願はくはわが子共等必死を思ひ留まり、厚食ぬし、わが夫を諫めて、是彼の身のをさまりを、よきに計らはし給へかし。返す／＼も孫のお通が事不便なり。典膳どのの年來の思

愛は、こゝろに耽つる事多くて、こゝろには申し遣さずとあり。かかれば親と親と、いひあはさねど、その身を殺して子を救ふ慈悲は、符節を合はしたるが如し。必ずしも死すべからず。又いたく悔い歎くべからず。時なるかな、君侯近曾二郎太夫を召さして宣ふことあり。『赤根半七は、わが家第一番の忠臣なり。彼古稚丸に従ひて、洛にありける日、主の淫樂を諫めて、遠ざけらるゝと雖も、ふかくこれを匿し、その身病ありと稱して、五條の旅宿に引き退き、絶えて口外へ漏らさざりしとぞ。我その比、仄かにこの一條を聞けり。よみて彼のもの舞々を將て逐電しつる事、亦是れ主の爲にすとは猜したれど、家の法度は私に更改め難ければ、且く忠臣を遠離けたる事いと不便なり。今ははや夥の年月を經たれば、罪を宥むべき時到来り。汝潛かに半七が在家を索ね、わが志を告げて、伴ひ來れ。』と仰せしかば、竊びて浪花に赴き、まづ間人をもて窺はするに、御邊三勝が身置をわれに返さんとするに、その金二十兩を遣ひへらして、いたく苦心するよしを聞き、假毛を買ふに假託けて、件の金を贈りしは、わが寸志なるを、櫛むべし、全八蝶九郎是れを奪ひ去れりとぞ。しかるに蝶松曾太郎、はからずも相合橋にて、轉び落ちつ、腕れ去らんとする蝶九郎を生拘り、這奴が盜むところの金は舊のごとくにて、わが手に返れり。かくて蝶九郎が白狀によつて、至八が隱匿いよ、發覺れたれば、證據として、この蝶九郎を市の正へ進らせ、御邊の罪狀を刪るべきよし、曾太郎に相語り、只今彼處へ

引かせんとす。寔に天の彰々たる事、曇らざる鏡のごとし。悪人終に亡びて、忠臣ふた、び天日を見
る。誰か快しとせざらんや。」と、事審かに説き示せば、曾太郎も又いふやうに、某浪速へ來りし
事は、半七どのに、妹が心操をしらせんとてなるに、わが母なほ心もとなく思ひて、わりなく園花を
轎に乗して、この地に來り、不思議に年來の本意を遂けて、離別の女兒三勝どのに再會すといへど
も、却つてその心烈に産ぢけん、張宿へは歸らず、中途より往方しれざるよし後に聞ゆ。園花も母に
件はれて長町に赴き、轎の中にありしかど、わが母馳おて、三勝どのにあはせず。彼いたづらにお
通を將て旅宿に立ち歸りて縁故を某に物がたる折しも、母の從者等走り歸りて、如此々々なり。と
告ぐ。よりにわが兄弟ふかく怪しみ、園花は病苦を忍び、お通を將て彼此を索ぬる折しも、はからず
して笠松平三に名告りあひ、御邊も又三勝どのと、二首の古歌を書き遣し、自殺せんとて出でたま
ぬるよしを聞きて、ます／＼周章し、やがて諸共にこゝに索ねきたれり。」といふに、平三も又説くこ
と一遍、理を竭して、自害を止めしかば、三勝、園花は更なり、半七は、親の慈愛のかくまでなる
に、君恩また黙止しがたくて、紅涙袖を絞りあへず、「死に後れたる悔しごよ。」とてかき口説きぬ。清
かる所に、編笠ふかくしたる武士一人、白楊の陰より進み出でて、笠を脱ぎ捨つるを見れば、藤原典
膳なり。そのとき典膳は、衆人に對ひていふやうに、すべてこの件の禍を釀せしこと、半六一個の快

ちのふならず、われも又其の初、君に申しすゝめて、楠を伐らしたる榮りを惹けるにや、愛に溺れて、よろづ私したる罪あり。しかるに今朝、敷浪が園花を將て、天満の天神へ詣る由をいふに、疑はしき所あれば、われも又酒かに奈良を出で、妻の迹を跟けて、そのゆく所を窺ひ、鬪に三勝と敷浪が始終の物がたりを竊聞きして、年來の憤りも消れ、五十餘年の非をさとりぬ。さてその時われに等しく、裏の容子を張ひたるものは、半六にてありけるか。彼も是も、皆わがための善智識なり。棄_{かんきて}思入_て無爲_に報_を恩_を者_をといへり。願はくは友春どの、典膳が致仕の事を、よきに執し給はるべし。」と述べたり、刃を抜いて直に鬢を剪り捨て、みづから夢幻齋と名告らん。といふ。二郎太夫聞きて、ふかく嗟嘆し、淳于棼が蟻宮の榮花も、思へば赤根が南柯夢、蟻に象る蟻松氏の發心悟道殊勝なり。然らばきのふ、わが買うたる蓑盞を、三勝が頭鬢とし、又假毛を半七が鬢に換へ、父と母との塚に築き籠め、嵐雪信女、月照信士と法號し、「赤根半七といふ商人、葦屋三勝といふ舞々と、情死せし。」と世に傳へなば、郎君のおん悞ちに代りたる、はじめの忠義も徒らならず、親の歿死に従はざる、孝子の道も虧くべからず。再世の夫婦、君父の命に従ひ、奈良へ歸參して家を興し、忠孝を全うせば、吾が黨の一大快事ならん。」と應へけり。時に典膳、又平三に對ひ、「其許は舊、梨園雜劇中の人なりと聞きしが、心ごまは武士も及ぶる所おほし。わが女兒園花、久しく夫に置き去りせられて、歸るとこ

ろなし。御邊今より、彼を養ひて女兒とし給はらば、われ又三勝を養ひ、曾太郎が姉として、さらに半七に妻あはすべし。しかるときは、三勝は半七が正室なり。園花又半七が側室となるとも、姉妹にして姉妹にあらず、孰かこれを譲るべき。この事承引き給へかし。」といへば、平三歡んで、一議にも及ばず、辨既に園園にをこまりぬ。さる程に半七、曾太郎、三勝、園花は、兄弟親族の名對面して、歎きの中の歡びを述べ、父母の亡骸を千日寺に葬りて、追善の佛事丁寧に修行し、しかして後皆うち連立ちて南都へ立ち歸りぬ。又曾太郎は、市の正へ縁故を審に訴へ、蝶九郎を進らせしかば、積悪脱れ難くて、蝶九郎は首を刎ねられ、又笠松平三は糞に脚平足平を殺したれども、彼等二人は、隠れなき悪棍なるによつて、死をもてその罪を贖ふに及ばず、永く放免を蒙り、やがて續井家に召されて、祿五十貫を賜はり、赤根半六に代りて、五條の村主を承り、半七は蟻松典膳に代りて、家老職をうけたまはり、職祿ともに肩を比ぶるものなし。これによりて、三勝を妻とし、園花を側室とし、厚倉と共に、一國の成敗をとり行ふに、聊かも私なかりしかば、君家ます／＼繁昌して、四民もべて父母の思ひをなさずといふ事なし。是れより先、續井順昭父は、半七、三勝等が忠孝を、ふかく賞して、懇切にこれを勞ひ、厚倉以下の家臣を呼び集へていふやう、「抑この件の縁故を考ふるに、われ過ちて驕奢に耽り、怪有の良材を索めて、米谷の圃を伐らし、無益の茶亭を造りて、樂しみを民と

ともせず、こゝをもて嫡男吉確、貧弱多病なりき。且彼が養生の爲に、洛に遊ぶに至りて、忽地家の艱み出で來なんとしつる事、みな木精の祟りなりけん。設し半七二郎太夫なかりせば、父子安然として、今日の歡會をいたす事、ありがたかるべし。」と頼りに慙愧し、俄に彼の茶亭を毀ちて、長く節儉をこととせしかば、上下安堵の思ひをなしたつ。こゝに至つて、半七が洛にて、吉確丸に苦諫せしとき、叩つて至八蝶九郎等に讒言せられ、久しく君邊を遠ざけらるゝと雖も、なほ郎君の懐ちを世にしらせじとて、「病によつて、五條に退き、保養す。」といひ拵へ、後終に三勝平三等にも實を告げず。たえて一度も口外せざりし事や、聞え、「この一條にて、その忠心思ひやらるゝ」とて、時の人稱讃せざるはなし。されば平三はお通を委ひ、後これに婿を招りて家を嗣がし、半七又子ども影を儲けて、世々續井家に仕へけるとぞ。

馬琴按するに、本草綱目卷二十四、木類下に、楠と樟を並べ出すと雖も別種なり。わが邦には、楠樟ともにくすと訓す。これを一種とするが如し。又按するに、搜神記に、呉の時敬叔、大樟樹を伐るに、血出でて物あり。人の面狗身なり。敬叔がいふ、「これを彭侯と名づく」と。乃ち烹てこれを食らふに味ひ狗の如しといへり。是れ則ち樟樹に木精ありし一證とすべし。楠も樟も究めて大木多し。佛語歸其角が、楠の天井に題する發句あり。作り得てよし。

八聲の楠の板間を瀧るしぐれ

又半七三勝が事、世にはうまふ、にいふあり。或はいふ笠屋三勝は、足利家の時の女伎なり。又千日寺にて情死せし三勝は、遙かに後の事にて、美濃屋何がしが女兒、おさんと呼ばれたる淫婦なり。今猶おさん半七が遺書といふものあり。好事のもの往々傳寫す。想ふに予が語説する、續井の家臣赤根半七と、大和五條の商人半七が事とよく似たり。然れども時代相距ること遙かにして、同名異人なりとするべし。女塚集を按ずるに、俳諧師嵐雪、ある年の秋、浪速に遊びて、ある屋敷が夢の跡を訪ふに、嵐雪月照と、石の塔婆に彫り入れたり。あるまじき事ならねど、思ひがけざりければ、

夢によく似たる夢かふ墓参り

と口號みたるよし見道（精しむらゝは何の所いふまはしむらゝといふ事を記さず、今法善寺難波新地にあり、土俗の遺るところの、半七おさんが古墳といふもの、金毘羅堂のこなた、わかひて左間にあれど、六字の名號のみを彫り著けたり。彼のものの事を徳備欄の戯曲に作りたるもの、予が眼を過ぐる所すべて四本あり。又彼等が遺書、當初人口に輪奐せしにや、呪竹といふものに、三勝半七が記念おくり、かきおき等の曲子あり、無益の辯なれど、只その概畧をいふのみ。）

作者馬琴きくしのまきんこの書を稿かうじをはるの夕ゆふ燈とうを掲かげ案あんを拊ぶし、ひとり嘆たんじて云いく、わかし信濃しなのの前司ぜんじ行長ゆきなが入道にふだうの平家物語へいけものものがたりは、原諒もとらたはせんとして作つくりたるを、後のちの人はよくも見みざれば、只尋常ただよのつねの軍記ぐんきとのみ思おもふゆゑ、今いまわが南柯夢なんかのゆめは、讀よませんとして作つくりたれど、聞きする者ものその戲じやうり曲きよくめきたるを笑わらふもあるべし。上の長短ちゆうたんとと物の巧拙かうせつは且しかもくいはす。所爲わざに雅俗みやくあり、又流行またりうかうあり。夫れ流行りうかうは人ひとにあるか、將まさ我われにあるか、われいまだこれをしらす。差支ちぢ。

客有問_レニ_ト於_レ予_ハ曰。曲亭先生。何_レ据_レ樂_ニ之_レ曲亭。予應_レ之_レ曰。漢書陳湯傳云。樂_ニ巴陵曲亭。陽_ニ。是_レナリ矣。亦問_レ。馬琴_ハ何_レ也。曰。取_レ卜訓鈔野相公_ノ句_ニ。才非_レ馬_ノ彈_{コト}琴_ト未_レ能_レ。身異_レ。鳳史_ハ吹_レ簫_ヲ猶拙_ト。以_レ爲_レ戲_ノ號_ト也。先生嘗_レ景慕_レ司馬相如_ヲ才_ト。是_レ以_レ名_レ解_ト字_ト道_ト士_ト。解_ハ蟹也。郭璞_ガ江賦云。瓊珩_ハ腹_ニ蟹_ノ水母_ハ日_レ蝦_ト。共_レ象_ニ名_レ於_レ蟹_ト也。王吉_ハ之所_レ夢_ト。亦是長卿_ノ故事也。客欣然_ニ而喜_ニ曰。善_レ哉_ト與_レ君_一夜_ノ話_ト。勝_レ似_レ十年_ノ學_ト矣。愚問常_レ以_レ爲_レ馬琴_ヲ熟字_ト絕_レ無_レ考_レ据_ト而_レ今_レ問_レ諸_レ子_ト。則豁然_ト得_レ其_レ淵源_ト。顧_レ昔_レ者_レ司馬長卿。蔡_ハ蘭_ハ相如_ハ爲_レ人_ト。復_レ名_レ相如_ト。今也曲亭子。慕_レ司馬相如_ヲ才_ト。而_レ名_レ解_ト稱_レ馬琴_ト。有_レ以_レ哉_ト。雖_レ和漢_ノ今昔_ノ異_ト其_レ趣_ト。宜_レ同年_ノ而_レ談_レ之_ト。先生聞_レ之_レ。咲_レ曰。二子_ハ蓋_レ知_レ彼_ノ玉_ト與_レ石_ト而_レ談_レ譬_ニ于_レ茲_ト也。差_レ夫_レ似_レ而非_レ之_レ者_ト。齊魯_ハ魯參_乎乎_ト。我_ハ爲_レ二子_ノ深_ク羞_レ之_ト。復_レ莫_レ言_ト。客唯_レ々_ト而_レ退_ト。予時_ハ方_レ稟_レ師_ノ命_ト。被_レ南柯_ノ夢_ヲ若_レ于_レ卷_ト。因_レ悉_ク次_レ是_レ語_ト。附_レ於_レ稿_ノ後_ト云_フ。

文化四年乙卯冬十月中洗 弟子東園 魁菴子書_ニ於_レ東都_ノ菱筵軒_ノ時雨窗_ニ

占夢南柯後記序

開元七年。道士高翁者。得神仙術。行部輟。道中息。邸舍隱囊而坐。俄見少年盧生。衣短褐。乘青駒。亦止。邸中。與翁言笑。盧生顯其衣裝。乃歎曰。大丈夫生世。不謂困如是也。翁曰。子談諧方適。而歎其困。何也。生曰。吾常志于學。自惟青紫可拾。今已過壯。將勸。非困而何。言訖而目昏思寐。時主人方蒸黍。翁乃探囊中枕。以授之曰。子枕吾枕。當令子榮適如志。其枕青磁。而囊其兩端。生俛首就之。見其囊。漸大明。乃舉身而入。遂至其家。數月。娶清河崔氏女。女容甚麗。生質愈厚。明年舉進士。登第。釋褐。轉渭南尉。俄遷監獄御史。轉起居舍人。知制誥。三載。出典同州。遷陳牧。移節。領河南道採訪使。徵爲京兆尹。是歲神武皇帝方事。除御史中丞。河西道節度。大破虜虜。歸朝。勳。恩禮極盛。轉吏部侍郎。遷戶部尚書。御史大夫。爲時宰所忌。以飛語中。之。貶端州刺史。三年。徵爲常侍。未幾。同中書門下平章事。同列復。具邊將交結圖。不執。下制獄中。官爲保之。歲死。投羅州。數年。帝知寃。復進爲中書令。封燕國公。生五子。有孫十餘人。後以年逾八十。病薨。盧生欠伸而寤。見其身方漚。於邸舍。曰。有來。其傍主人蒸黍未熟。生蹙然而興曰。豈其夢寐也耶。翁謂生曰。人世之適亦如是矣。生慨然良久。謝曰。

夫寵辱之道。窮達之運。得喪之理。死生之情。盡知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不_レ受_レ教。稽首再拜而去。右沈既濟
枕中記

蕉窗月を引きて景壁を射るゆふべ、秋蛩膝に鳴きて、吾が衣の薄きに驚く。牀に寝あれども、塵を掃はず、架に書を積めども、披くこと稀なり。この時や客の柴門を敲くなく、潮の塩蓬に寝むるなし。睡らんとするに、いも寐られず、机に隠つて坐し、天を仰ぎて嘘す。いまだその胸を喪はざるが故に、形枯木の如くならず、心死灰に似ずと雖も、聊か吾が生を樂しむに足れり。俄に見る浮雲月に顔して、孤燈の明らかなるを覺え、蒼馬稀に拂つて、夜のいたく深けたるを知る。於是馬鞍を靜慮に繫ぎて、聲色の慾なしと雖も、未だ智を忘る、こと能はず、鵬觀を逍遙に伴うて、大小の利を争はずと雖も、未だ名を捨つる事能はず、觀に呵し筆を弄し、意ひを費し譏りを醸す。羅貫三國の論、紫女啼獄の悔い、豈身後の談ならんや。生涯風流文墨の奴となる、因果歴々たり。我書を續るをもて、終日不言、これ暗に似たるにあらずや。遺話を演べ、輪廻を説く、是れ墮獄の悔いあるにあらずや。父母吾を生む、われ豈此くの如くにして、身を終ふるをもて可とせんや、勢へ已む事を得ざるのみ。書賈木蘭堂、常に南柯夢の續編を取せんと請ふ。しかれども彼の篇は、既に全く局を結びて、絶えて一物を遺さず、これを續ぐとも勞して功なし、夫れ流れ竭きて飲をもちむるものは、暫たに井を穿るにしかず、月没ちて明を求むるものは、更に燭を點するにしかず、不如々々と、推辭めども聽さず。願ふに彼の木蘭書賈は、曩に南柯の下に坐して、偶兔を獲たるものなり。宜なり株を守ることに、これ

その守るの癡なるにあらず、われその株を作ればなり。遂に編を嗣ぎ、藁を脱して、もてその慾に充て、題して南柯後記といふ。亦是れ再寐の夢物語を、鄭の薪者が甍に擬したり。若し荆軻の客人もこれを聞し、夢殿の先生もこれを取らば、書賈は必ず免を捨てて、亦いちはやく甍を獲つべし。

文化辛未立秋の日

曲亭主人識

占夢南柯後記總目錄

前 帙 四 冊

卷之一 南柯の接木 千日の夢の後 許儀の送葬

卷之二 冬田の晚稻 遠山の夕霞

卷之三 雨後の月曉 木末の墨瀧 米谷の嶺塚

卷之四(上) 池の中島の上 卷之四 下 池の中島の下 浮名の婦夫

後 帙 四 冊

卷之五 秋雨の笠松(上) 秋雨の笠松(下)

卷之六 羅旅の斬關 暮の夏花の上 暮の夏花の下

卷之七 天神川の治 過去の庵主 榎樹の手斧

卷之八 夜川の野航 合歡の花畑 柴舟の雨笠

統計八卷此の間又聲秋雨笠松爲三上下一題目二十一全聲レ爲三上下一各四卷なり。

全 部 目 次 果

年紀

永正元年 續井順昭米谷山の老楠樹を伐らしむ。丹波都臣死す。この時半七は十歳おさん八歳なり

永正二年 赤根半六が妻簀病死す、時に半七が年十一、おさんが年九ツ、假に婚姻の禮を擬す。

是の年の冬、おさん故ありて笠松平三に養はれ、その後舞妓となりて名を三勝と改む。永正三年

園花七歳、その父典膳婚縁を半六と議す。永正十二年 半七二十一歳、園花十六歳、春婚姻の禮あり、夏に至りて續井吉稚、近臣赤根半七、今巾全八、布施蝶九郎等を將て潛かに洛に遊ぶ、ときに吉

稚二十歳、園花が兄曾太郎と同庚なり。この秋笠松平三、御平足平を殺して奈良へ走る。半七三勝白

河由に再會して、共に亡命す、この時三勝十九歳なり。永正十三年 三勝二十歳近江の多賀の莊

に女兒お通を産む。永正十七年 半七二十六歳、旅店に信濃の香掛に病む。時に三勝二十四歳女

兒お通五歳、同十八年享祿と改元前べんに永 享祿元年 今然十二月の下旬、厚倉二郎大夫、暗かに金を

半七に與ふ。同じき月七日の夜、半六歌浪等 各子に代りて、浪花の千日墓に自殺し、蟻松典膳致仕

入道す、時に半七二十七歳、三勝二十五歳、曾太郎二十六歳、園花二十二歳、お通六歳なり。以上前編。

享祿三年 三勝二十七歳男子を大和に産む。この時父の半七半之進と改名して、その子を半七と名

享祿四年園花二十五歳はじめて男子を出産して、これを平作と名づく。天文九年三勝
 亦男子を産む。陶五郎隆春これなり。天文七年十一月七日典膳入道病みて家に死す。今茲の冬曾
 太郎亦その妻厚倉氏を喪ふ。これ二郎太夫が女兒なり。天文八年蟻松曾太郎が女兒初花、八歳に
 して玉枕御前の侍童に参り仕ふ、初花が妹夏山時に七歳、叔母園花に養はる。天文十四年續井順
 勝の息女徳姫十四歳上洛して、入道黄門一忍軒の養女となる。半之進が長女お通この年二十三歳、
 徳姫に従つて洛へ赴く。天文十六年徳姫十六歳今茲大内家と婚縁整ひて、周防山口へ赴く。厚
 倉二郎太夫父子、お通隆春仙野炊粟等之れに従ふ。天文十七年赤根隆春陶晴賢の養子となりて陶
 五郎と稱す。是の年笠松平三、外孫平作を養ひて家を嗣がせ、曾太郎が二女夏山を平作が妻とす。十
 月六日に至りて、平三病死す。同月十一日厚倉二郎太夫周防の山口に病死す。その子年人友善出奔し
 て往方をしらす。天文十八年赤松平作が妻十七歳、今茲男子を出産して之を平太郎と名づく。
 天文十九年赤根蟻松の兩家志を同じくして、半六敷浪箒が二十三回の法筵を聞かぬ爲に、こ
 の年の冬親族齊しく浪花の法善寺へ参詣す。時に半之進五十歳、曾太郎四十九歳、三勝四十八歳、園
 花四十四歳、お通二十八歳、後の半七十二歳、笠松平作二十歳、陶五郎十九歳、曾太郎が長女初花
 平介が妻夏山十八歳、平作が一子平太郎二歳なり。この段は後記の發端なり。餘は詳に篇の中に見え

たり。

南柯後記列傳姓氏畧目

なんかこうきれつでんせいしりやくもく

續井順勝 つゝみとしかつ はじめ吉
稚と稱す

玉桂御前 たまきりごぜん

刀治半七 かたなやはんしち

笠松平作 かさまつへいさく

刀治同樹 かたなやどうじゆ

炊粟郡太郎 かしぎろはかんたらう

園花 そのはな

阿通 おつう

員外姓氏 ゐんぐわいせいし

持明院入道一忍軒 ぢみやうゐんにふだういちにんけん

槐姫 みづらひめ

陶五郎隆春 たうごらうたかはる

仙野呂東二 せんのろとうじ

阿花 おはな

大内義隆 おほうちちたか

蟻松曾太郎 あまつそたらう

厚倉年人友善 あつくとほいとともよし

私卒丹二 わがぢうたんざう

夏山 なつみやま

大内義基 おほうちちもと

赤根半之進 あかねはんのしん はじめの
進名は半七

賣敗鐵者全介 うりかへてつぜんけ

三勝 さんかつ

晚稻 おしほ

陶權頭晴賢 たうけんとうはるかた

畧 目 畢

占夢南柯後記 卷之一 (前軼第一)

東都 曲亭 馬琴 編次

南柯の接木

往時享祿元年、前編に永祿とす。蓋し備書の手、冬十二月はじめの七日、半七が父赤根半六、三勝が母敷浪等は、各子に差ち、子に代りて、千日墓の霜と消えしより、俛仰の間二十三年を経たり。されば大和の續井家には、順昭既に世を逝りたまひて、嫡男吉稚丸、父祖の糞裘を承け嗣ぎて、伊賀介順勝順勝或は順と稱す。順勝に息女ありて、禮姫と呼ばれ給ふ。正に是れ錦の上に花を折り添へ、金の正に作る。と稱す。順勝に息女ありて、禮姫と呼ばれ給ふ。正に是れ錦の上に花を折り添へ、金の中に玉を琢きなすの容止なるのみにあらで、才賢く、心操風流びたまへば、華洛の由縁に就きて、持明院前中納言の入道一忍軒に養はれ、年歳二八の春の比、防長豊筑四箇國の守護、從二位兵部卿兼太宰大貳、大内義隆の嫡男、三位中將義基の北の臺にそなはり給ひて、大内家の居城たる、周防國山口の郷、鶴の嶺なる花の御所へ、入興し給ひしより、すでに四年の春秋を経て、今茲ははや、十九歳にぞなり給ふ。これによりて續井の執權、厚倉二郎太夫友春は、禮姫に冊きて、周防國へ赴きしが、

近頃なき人の數に入りければ、西國にても、大和にてもこれを惜しまぬものはなし。しかるに厚倉が子に、年人友善といふもの、父と共に大内家に仕ふる程に、あやまてる事ありて、忽地山口を逐電し、三年以來往方しれず。その子は父に似ざりけり。ことて、彼を譏るもの亦多かり。さて亦赤根半七が女兒お通は、稚少きより召されて、槐姫の陪童に参り仕ふるに、自然と手をかき、歌をよみ習ひて秀歌をきく。少なからねば、「小式部の内侍の童たちなりしも、かくやありけん」とて、奇しきものにぞ人はいひける。かくてお通は、槐姫に冊きて、暫く華洛にありし頃、持明院殿に學び奉りて、歌道の奥義を究めつ、弟陶五郎もろともに、姫君に供しまるらせ、周防國へ赴きて、大内家に扈從せり。これより先三勝は、更に男兒二人を生み、園花が腹にも、男兒一人を擧けたり。さるからに半七は半之進と改名し、三勝が腹なりし長男を半七と名告らするに、今茲ははや二十一歳になりつ。次男には笠松平三が家を嗣がせて平作と呼びたるが、後の半七には、年只一つのおと、にて二十なり。第三男は、槐姫に冊きて、西國へ赴きしが、はからずも大内家第一の執權、陶權頭晴賢が養子となりて、陶五郎隆春と名告るもの、十九歳にぞなりぬ。さればお通と後の半七と、陶五郎が母は三勝にて、笠松平作が母は園花なり、彼等は異母兄弟なれども、心さまの伶俐しき事は、劣らず勝らす。「これやこの、忠臣孝子の葉なり」とて、衆人に愛で羨まれ、めでたき軒のみうち續くものから、

盈つれば動くる浮世には、園花が父、蟻松典膳入道夢幻齋は、いぬる天文七年十一月七日に、頼に病みて往生の素懷を遂げ、笠松平三はおなじき十七年の十月六日に、老病身に瀕のながら、苦惱をおほえず、睡るが如く身まかりけり。されば三勝は、翼に典膳が養女となりて、半之進が正妻たり。又園花は、平三の父として、赤根が側室になりにつれど、莫逆異父の姉妹なれば、遂に新妻す願まらず、「殿皇女英の賢なるも、かくや。」と人は譽めの、めき、貞女の本にも引くなるべし。かくは平三世に在りし時、外孫のお通を養ひとりて、これが爲に女壻を擇み、家を嗣がせんと思ふ程に、才を慕ひ色に愛で、媒酌もて婚縁を、いひよるもの少なからねど、お通は才學世に務れて、見識男子にもたも勝れば、他人と苦樂を共にせん事を願はず、給事して身を終らんとて、遠く西國へ赴きしかば、平三忽地望みを失ひ、半之進が二男平作は、園花が腹にいできたれば、わが家を嗣がするに便りありとて、これを半之進に乞ひうけ、主君に聞えあけて免許を受け、母の園花諸共に、彼の平作を迎へとりて、わが家の家督と定め、亦蟻松曾太郎が次の女兒夏山は、園花が爲には姪にて平作とは従母昆弟なり、年紀も似つかほしき夫婦なるべしとて、かねて曾太郎に相談りて、平作は十八歳、夏山が十六歳といふ年の春、終に婚約を遂はし、始めて安堵の思ひをなせしが、是の年の冬、平三は身まかりぬ。かくて平作夏山は、蟻母園花に孝心厚く、妹夫の契りも薄からで、男兒をさへ擧げしかば、これを平太郎

と名づけつゝ、いと健かに生じたし、立ち習ふ程にもなりにければ、赤根蟻松等が歡びいへばさなり、園花が爲に初孫なれば、唯是れ掌中の珠、挿頭の花と慈愛し、靡さへそへず養育しけり。さる程に蟻松曾太郎は、父の典膳入道が世を逝りて後は、親とも思ひ思ひてし、厚倉二郎太夫は、周防の山口へ赴きて、彼處にて身まかり、その子隼人友善は逐電して、往方しれずと聞えしかば、いといたう惜しむつゝ、いよ、一己の才學をもてせず、同僚赤根半之進もろともに、かしこき人の舊規を温ね、政事に私なかりしかば、直きものは擧げられ、枉れるものも、その非を改め、鄰國ますく附屬ひて、續井の家繁昌し、室町將軍のおんおほえ、他に異なれば、順勝の息女、權姫は、西門筒園の大諸侯、大内家と婚縁繋ひ、更に續井の武威を倍すこと、皆是れ赤根蟻松兩執權の、善政のなすところなるべし。しかはあれど、花落りて葉を生ず。身のほど／＼に憂へあり、作の蟻松曾太郎は、二十年ばかりさきつ春、厚倉二郎太夫が女兒を娶りて、子ども二人まで生ませたるが、みな女子なり。剩へ妻は世を早うして、忘れがた見の一人の女兒を、初花夏山と名づけたり。しかるに長女初花は、幼稚より、後の半七と、結髪はしたれども、母のなき家にして、女子を育てなば、彼が爲によき事あらじ、人となるまでは。』とて、年わづかに八の秋より、主君の内室、玉枕御前の、女の童にまらせしかば、腰もとちかく召使ひて、手習、縫刺、絲竹の技、おちもなく習はしたまへば、いと艶やかに

生おひたちて、はや十九歳じゅうじゅうきゅうさいになりけるにぞ、今茲ことしは身の暇いとまを賜たまはりて、半七はんしちに妻つまはせんとして、父ちちの曾太そだ郎らうは、豫よてよりその準備こころがまえありながら、玉枕たままくら御前ごぜんの殊ことさららに、不便かたじけのものにし給たまへば、申しいづるによしなくて、かく思おもひつゝ、うちも過すぐせ、次つぎの女むすめ兒あら夏山あつやまをば、幼穉わがやきより園花そのはなに養やしなはして、これをば笠松半作かさまつはんさくに妻つまはせれば、婿むこにはましていち早く、初孫はつひらをさへ見みせてけり。かくてぞ蟻松曾太郎ありまつそだらうは、家嗣いえつぎがすべき男子おのこなければ、思おもふよしあれば、後妻こうさいを娶めとらず、伴ばんの半七半作はんしちはんさく等は、親おやにもをさ／＼方かたらざる、忠孝ちゅうかうの壯むさはなれば、女壻むすめにして不足ふそくなし。わが女むすめ兒あら等らとし長ながけて、子こ供ども夥おほたらんには、外と孫この中うちいづれにまれ、養やしなひて家いえを嗣つぎがするとも、未いまだ遅おそきにあらじとて、親族しんぞくより／＼事ことにふれて、後妻こうさいを薦すすむれどもうけ引ひかず、今いまなほ五十いそぢに足たらぬ身みの、年とし來き鯨夫しらぶしにてぞありける。さてこの條じょうは、前編ぜんぺん南柯夢なんかむ、第六卷だいろくまきのをはり、享祿元年十二月七日きやうろくげんじふにげつしちじつの夜よ、赤根半六あかねはんろく敷浪ふきなみ等らが、千日臺せんじつだいにて杜わづ死しせし以後いご、凡おほそ二十三年にじゅうさんねんの事ことどもを、かい摘つみて記しるすものなり。もし南柯夢なんかむを見みざる人ひと、或あるは見みて忘れたるもあらば、まづ前編ぜんぺんを熟覽じゆくわんし、更にこの條じょうをよく見みざれば、耳みみを塞ふさぎて物語ものがたりらふ如ごとく、説せつくといへども言ことひかて、聞きわきかたき事こともあるべし。

千日せんじつの夢む後ご

時に天文十九年てんもんじゅうきゅうねん、庚戌かうしゆじゆ秋あき、九月くわつの下した浣せんになりつ。今茲ことし十二月じふにげつはじめの七日ななかは、赤根半六あかねはんろくと敷浪ふきなみが

二十三回忌をむかへたるに、蟻松典膳夢幻齋が十三回忌、笠松平三と、厚倉友春が、三回忌にきへ相當せり。この諸靈位は、赤根蟻松兩家の爲に、親なり、舅なり、恩人なり、就中半之進と、三勝はその昔、愁ひに死に後れ、親と親とが倏ちに、命を譲し子に代り、なからん後の後までも、大和に名だたる妹と夫の、變らぬ契りを結びそへて、家の榮えを手向にせよと、かしこくも遣し給ひし、言の葉高き父母の恩、よしやよし野の山を亦、上つ、積みは累ぬるとも、これに比ぶればなほ低し。せめては浪花へ赴きて、法善寺の千日墓に、追善の筵を開き、衆僧の讀經に彌陀佛の、引接をねがはんとて、半之進は豫てより、三勝園花曾太郎等と、この事を相議ひしが、「追善の法筵は、稱月にしかずといへどと、年極は殊さらに公務も繁く、且春の營みに暇なし。加施、親族齊一彼處へ赴かんに、半七平作等は職の近習たり、君の邊に事ふる身の、よしや小霎時の旅にもあれ、時を嫌はで身の暇を、まうし給はらんは便なき所爲なり。おもふに十月のはじめの六日は、笠松阿翁の三回忌なれば一切の追薦供養を、この日にとりよして、執行はんこそよかめれ。」と、曾太郎がいふに任し、やがて主君伊賀介に、事の趣を聞えあけて、おの／＼行装をなせり。時に十月二日をもて、首途の日と定めしかば、園花は、その子笠松平作と、新婦の夏山、孫の平太郎等を伴ひ、蟻松曾太郎は、玉枕御前に給事する、長女御花をこへ、しばしの暇を乞ひまうして、これを携へ、朔日の薄暮より、是彼齊一く、

半之進が宅に聚ひ来て、悪もろともに啓行せんとて、甲夜よりこゝにあり。主夫婦半七等は、曾太郎園花が齎したる、偏提に酒を酌みそへて、しばしも席を立ちあへぬに、女隸は駄荷を造るとて、いと悪しく匂りあひ、上を下へとかへす折から、思ひもかけず、周防より、お通と陶五郎の來ませし。とて、私卒が報知けにければ、衆皆こはいかにと、打驚くまでに歎びつゝ、即て呼び入れて對面す。四年の再會あつらかなれば、親子同胞恙なきを、迭に祝し祝されて、さて半之進三勝等は、お通と陶五郎に對ひて、「今年は家廟の年回なれば、法筵を法善寺に開かん爲に、聖は浪花へ赴く由を説きしらし、汝達は、又いかなる故ありて、猛に故郷へ歸り來つる。傀儡には恙なくや在す、いと心もとなし。」とて、眉根をうちよせつ、問ふほどに、お通は莞やかにうち笑みて、「さおほし召すは理なれど、吾儕同胞が參りし事、一切あしきすぢには侍らす。猛に華洛と大和への、御使をうけたまはりて、十りたるまでに侍り。その故は、年來合戦やむ時なければ、諸國の土民疲れたり。されば麿仁の掬籠より、華洛も萬の華洛にあらず、いと甚う荒れ果てて、鄙の住居に似たりとなん。それには遠か立ちまざる、周防山口の熱蘭は、街衢を九條に開かして、平安京に擬へたり。されば西山東山、仰げばいよ、高倉や、姉小路と弟訓の、里の山縁の花の兒、梅の宮より嵯峨太秦、千木通を北野の松、現に十か八の花の御所は、比枝も及びぬ鶴の嶺、金閣銀閣建てつらね、長生殿には春秋の、富小路も

遠からず、不老門には日月おそき、雞鉾町、烏丸、樋もて黄金を堀河の、水の紋なる六角通、その水鳥の鴨河に、末なつかしき大和橋、祇園の社清水の、音羽の瀧に地主櫻、色香吉田の春の森、緑よりかけし柳の馬場、二丈三條大橋の、かかる繁花を何者の、祝してや口吟みけん、大内とは、めでたき文字、今しれり、裏の字畧せり、大内裏とは、例の人の癖なるべし。されば諸國の商賈等、聚合ふうへにも聚ひ來て、建てつゝけたるは、三里が程に棚を張る、衣の棚に、魚の棚、奇品唐物、琴茶書畫、交易賣買ままんゝに、朝市夜店絶間なく、民の窻の賑ひを、語り響ぎ聞き傳へ、落ちては更にのほりかねし、華洛の人も縁を求めて、おほちの陰を頼まん爲に、みな山口へ引き移れば、西へ西へと入る町の、客店、賣家、貸座鋪に、おのゝ、膝の客れかね侍り。かかれば姫の御養父にておはします、入道黃門一忍軒も、華洛に在するかひもなく、いと佯しくぞ思すらめ、「汝弟陶五郎もろとも、おん迎へにまゐるべし。その序に、大和へも立ちよりて、館の安否を問ひまゐらせ、縁由を申せ。」とて、姫の仰事うけたまはり、遙けき旅も隔てなき、道へれば弟なり、赴く先は故郷なり。只何となきいそがれて、一昨華洛へ參著し、一忍軒のおん方へ、姫の消息をまゐらせしかば、歡びたまふ事大かたならず、「行装何くれの事に、いそぐとすれど日子経なん、その間に汝等は、大和へゆきね。」と宣はするに、とるものも取りあへず、直さま來つれば案内もまうさず、ゆくりなくこそおほさめ。」と

一五十一を物がたれば、衆皆聞きてふかく歡び、「父祖の爲に菩提を帯ひ、迫害の法縁を聞かたに、親族の中一人たりとも、缺けなん事は本意ならず。さるを今招かすも、水陸遙かに隔てたる、お通陶五郎さへ來つる事、諸靈位も、さぞ満足におほすらめ。亦是れ君の賜なり。我が公田に雨ふつて、我が私に及ぼすとは、かかる事をやいふべからん。願ふに稀なる幸ひかな。」とて、いと々他事なく歡待せば、お通は榮えある心持しつ、十六の歳より二十八の、けふまでも思ひ忘れぬ、公さま婆さまの年回は、かねて獲へしものから、百里にあまる所の積藎處にをれば、鷹の翅を借らすして、頼に音耗もいたしがたし。大和にあらばうちも揃うて、菓参すべきにと、思ひ侍りしはきのふけふならねど、年極の忌日をこの月に、とり迎へ給はんとは、しらで來つるもみなおのが、幸ひに侍るなれ」と、いふを聞きかけて半之進は、お通を見かへりつ、嘆息し、「わが子どもらは多けれど、祖父祖母を見もしらす、御身は六歳の冬なりければ、その面影を夢ごゝろにも、認りてやある、忘れやしつる」と、問ふ父よりも問はる、女兒の、涙にいらへかねたりし、胸くるしきを推量る、三勝は園花と、思はず面をあはしつ、もろきは親の涙なり。曾太郎も鼻うちかみ、言後れせし陶五郎を、つくろくと見て小膝を進め、四年見返間に隆春は、まき男になり給ひたるな。おん身幼少より、眼ざしの凡ならざる、末憑もしく見えしかば、養ひとりてわが子にも、なさばやと思ひながら、未だ遅からじと油断し

て、陶氏に先せられしは、曾太郎が不幸にして、かへつて御身が幸ひなり。彼の權頭晴賢ぬしは、大内第一の執柄にて、周防富田の城主たるに、わが所帯を比ぶれば、九牛が一毛にだもなほ足らず。貧幅は天のなす所、他家を續ぐとはいひながら、季子にして親同胞にも、立ち勝りしは出来されたり。」と、稱すれば陶五郎は、唇を膝にとり直し、「こは小父公の言葉とも覺え候はず、義を結びて父子と六るもの、尸骸と德行をこそ擇め、いかでか縁の多少を論すべき。君命黙止しがたくして、陶氏に養はること、是れ全く隆春が運の究めとこそ思ひ候へ。言可惜しき申し條には候へども、大内多々良の鼻祖は、百濟國王東明八代の後胤、餘璋王第三の王子、琳璋といひし人、唐の亂を避けて、周防國佐波郡、陶生の浦の多々良濱に來り留まる。實にわが大日本、推古天皇の、十九年の事かとぞ聞えたる。亦新撰姓氏錄に載する處を考ふるに、多々良公は、御間名の國王、爾利久幸王より出でたり。欽明天皇の御時、天朝に投化して、金の多々利と、金の牟居を獻る。天皇特に譽めさせ給ひて、多々良公の姓をたまふよし見えたり。しかれば是れ傳ふる所、爾説にして、いづれが是なるをしらす。或はいふ、琳聖王子七代の後、長門守正慎が時、朝廷はじめて、彼の先祖の來りとままる地の名によりて、多々良朝臣の姓を賜はる。是れより家號を、大内とは稱したり。かくて正慎十七代の後胤、左京權大夫義弘朝臣、周防國山口に居城して長門石見豐前等の國を討ち從へ、明德のみだれに軍功あ

り、故に足利氏あしかがの義隆よしかを討つて、和泉紀伊の二箇國を加へ増して、義弘よしかに賜ひしかば、泉州堺に居城せり。しかばあれど、義弘よしか只管武功に誇りて、足利殿を蔑視し、終に鋒を争ふに及び、敵々に敵ひ負け、應永六年十二月二十二日、和泉路にて討死し給ひぬ。かかれども足利殿、その先功を捨て給はねば、子孫所領の地を失はず、義興よしかの時に至りて、また武功あるが故に、從三位に叙し給へり。就中なかつ當主あつな義隆よしかは、武畧ぶりやく父祖ふそにもいやまして、西にし數箇國を伐ちしたがへ、刺へ内裏造營の、料物を獻りて、二位の侍從兼太宰大貳に補せられ、頼りに進みて、從二位の兵部卿になり給へり。亦わが養父、陶隆順晴賢は、主君大内殿と同祖たり。佐古百濟の珠聖王子授化して、多々良港に著船の時、相ひ来る一人の臣下あり、これ陶山口の先祖なり。主家はこゝに二十八代、わが家も又二十餘代、氏といひ縁といひ、肩を比ぶるものもなければ、駈るときは久しからず、明白にはいひがたき、降春が歎き多かり。傳へ聞く晴賢の養父たりし、陶隆房入道道喜齋に、只ひとりの實子ありて、陶左郎隆豐といひけり。父の道喜は、富田若山の城に隱居し、五郎隆豐は山口にあり。一日隆豐、富田にいひき、父の安否を伺ふ序に、主君義隆の賞罰非法なるよしを演べて、あしざまにいひしかば、父の道喜つくろくと聞きて思ふやう、このもの未だ年二十にも足らずして、主君を蔑にするのこゝろあり、我死さば、必ず謀殺すべきのなりとて、密かに家縁にこゝろ得きして、情なくも隆豐を、刺し殺し

たりとなん。この事を傳へ聞くもの、或は掌を拍つて驚嘆し、たとひ見え透く悪事ありとも、子を殺す事はなし難きに、測いて善とも悪とも、定かならぬ一子を、主君の爲に殺したる、道喜は稀なる忠臣なり。とて、只顧に興むるもあり、或は眉をうち軋め、一父子の道は天性なり、しかるに一音の下に是非を決して、忽ちその子を殺す、道喜が心ざま虎狼より猛し。彼その子をだも愛せずして、いかでか主君を愛すべき。こはたゞ名を好むのみ、忠臣にはあらず。とて、爪弾する者もありけり。かくて陶道喜齋は一子をばうし、一ひつ、朋輩の子を養ひて、家を辨がせたりけるが、その身はいく程もなくて身まかりしとなん。かの養はれて陶氏の、家督となりたるものは、わが養父晴賢これなり。かれば五郎と稱する事、わが家にしては、不祥の名なるに、養父晴賢、某を、亦陶五郎と呼ばし給へば、これさへ快からず、熱陶の一族の、駭れる形勢を見候に、黨を樹てて私の恩を施し、比肩して民の心を得たり。されば大内の諸老臣、杉軍人佐、石田轉監、鷲津、杉原、宮、三吉等に至るまで、媚びを求めて家人にひとし。權威をさく、大内殿に、ますともいかで劣るべき。されど厚倉友春世を遷りては、安危を論するものもなし。主君と申し、養父といひ、富貴職祿その身にあまれば、なほ天命をおそれ給はず。壯なるものは必ず衰ふ、隆春をもてこれをいへば、危きこと。果、卯のごとし。某はじめよりこの事を思ふ故に、彼の養子と云ふことを願はず、しかれども、影の近習屋

從の中より擇ませ給ひし、主君のおん嫁納なれば、脱るゝに道なく、親族には遠離るゝ人にしらせぬ身みの憂苦うれは、外飾うはべばかりの幸さいはひにて、不幸ふかう最も甚はなし。さればとて陶氏すゐらうぢと、既に親子おつこの義ぎを結むすべば、榮いくるとも怖おそするとも、安危あんきを父ちちと共にせんと、思おもふより外まは今更いままたに他事たじは候まをはす」と、うちひそめきたる遠懷とほがひに、曾太そたう郎深らうく感嘆かんとんし二襟袖いせのまじくもいはるゝものかな。我わが御身おんみの上うへをもて、幸さいはひ多おほしといひつるは、傳たづへ聞ききたる事こともあれど、言ことを改あらけて試こころみたり。いよ、志こゝろざしを移うつさすして、をり、養父やしやうを諷ふう諫かんし、姉あねのお通とと心こころをあはして、君きみに忠義ちゆうぎを竭つし給たまへ。さはおほすや赤根あかぬし」と、會あ稽せきすれども半はん之の進しんは、只ただうち聞ききて黙もく頭づくのみ。よしなきことをいひ出いでて、母はは御おんにな物思ものおもはしそと、いはまほしさをえもいほで、情なさけ痛いたきお通とより、聞ききては心安こころやすからぬ、三勝園さんしょうえん花はないへば更さらなり、初はつ花はなも夏なつ由ゆも、思おもひ過あぐせど、理ことわりと、いふべき由ゆも怒いかしに、半はん七しちと平へい作さくは、父ちちの心こころを汲ひみかねて、いひ慰なぐさめんやうもみなく、その席せきもやゝしらけたり。さる程ほどに宗族そうぞく母黨ぼたう團座だんざして、庭にわの落葉らくえつとふり積たる、四年よんねん來きし方かたの物語ものがたりに、冬ふゆの夜よなれど長ながくもおほえず、鷄鳴けいめい曉あかつきを告つげにければ、お通と陶たう五郎ごらうは、浴ゆして衣服いふくを懸かへ、伊賀いげ介け玉たま杜つ御前ごぜんのおはします、筒井つつみの館たねに祇候しこうし、入道にんどう黃門わうもん一忍軒いんにげんの御迎ごむかひへとして、上洛じやうらくしたるよしをまうして、三位中將みちのうぢと、桃うづも崎さきの消息せうそくを進すすらすれば、伊賀いげ介け夫婦ふうふ、彼かの消息せうそくをひらかしつゝ、西園さいえんの事こと、姫君ひめぎみのうへを問とはせ給たまひて、酒飯せうはんをたまはり、「華洛わらくの序ついでに参まゐりなば、心こころいそぎせられ

なん、故に此方よりは留めぬなり。逗留はこゝろ任せたるべし。」とて、驪返書を賜はりしかば、法善寺詣の事をさへ申して退出つ。この時日は早、西に傾きにけれど、半之進曾太郎は、彼等を待ちつけて、足弱をば、轎に乘し、一族主従五十餘人、直さま大和を起行ちて、この日は三四里が程に宿りを求め、次の日浪花へ赴きて、旅館を定め、衆皆法善寺へ詣でしかば、寺僧出で迎へて、客殿へ誘引ひ、「法會の事、豫ての消息によつて、心得候ひぬ。施行の假屋は、金毘羅堂の、右手の方に修理はしたり。まづ長途の疲勞を勤り給へ。」と信だちて、丁寧に款待しけり。當下半之進は懐より、一枚餘りつぎあはしたる指に、法號俗名年月を、書き記せしをとり出でて、押し開きつ、寺僧に指し示し、「こは志す諸靈位なり。俗名赤根半六、蟻松典膳が妻敷浪と寫したるは、某が實父と姑にて、今茲十二月の七日は、二十三回忌に相當れり。又夢幻居士と寫せしは、これなる曾太郎園花等が父典膳これなり。これは今茲の十一月七日を、十三回忌の稱月とす。又俗名笠松平三と寫せしは、三勝園花等が義父なるが、この月六日は三回忌の稱月なり。又俗名厚倉二郎太夫友春と寫せしは、わが爲には恩人、蟻松氏の爲には舅なるが、これもこの月十一日は、三回忌の稱月なり。又俗名丹波都と寫せしは、三勝が實父、俗名藤條と寫せしは、某が實母なり。この中半六と敷浪の某は、當寺にあり。これを法會の正位とす。この餘多くは大和にて歿し、厚倉は周防の山口にて病死せり。但丹波都は歿

してより四十一年、羅條は四十年になり候へども、五十回忌をその法會にとりまして、共に廻向し給はるべしこと、辨詳かに演べ罷り、施物の目録にとり添へてさし出せば、曾太郎は私率兩三人に布施物をとり運ばして、處せきまで安排ぶれば、寺僧等にノ、受けとりて、方丈に運び納る、程に、住持の上人立ち出でて、追薦の志の篤きを唱實し、長途の疲勞を問ひ慰め給ふ。これより後に法持はくだしくして書き賜さす。この日は十月三日なり。授法會は翌日より、三百日と定め、清僧三十員を延請して、經卷の紐を解かしむ。かくて赤根嶮松の一疾は、旅館に立ち歸り、この夜より精進潔齋して、衣服を纏へ、毎日に法善寺の法筵に列坐して、讀經を聽聞す。既に結願の日になりにければ、講師法座に著きて、佛法の不可思議を説き、施主檀越の功德を演べ給へば、衆僧これを和讃して樂章管絃を奏したり。事の筋體善盡して、天衆もこゝに影向し、幽靈得脱脱びなしとぞ見えし。なきて法會果てにければ、施主の男女打ち連立ちて、施仔の假屋に入りしかば、走卒奴隸前後に警固し、堆高く積み累ねたる、五十六俵の白米は、十二回と二十三回の數にあはし、六十貫文の青砂は、三回七回五十年の、忌日の數を表したり。彼此より集合ひ來て、今か今かと待ちわびたるを兒共、馳の如くに羣だちて、或は嬰兒を肌に着け、老いたるを扶け引き、「婆をよ」、「家をよ」と呼子鳥、只啼々と餌に求食る、覆車の前の村雀、貫崎きする片羽鳥、燕、口の敗袋、量りこまねし一升に、彌陀の光も

錢龜の、手足隙なき福徳の、三歲鯉に袖乞に、犬もまじりて、「如是畜生、諸鳥、豷蟲、江河の魚鼈、悉皆成佛、平等利益」と、異口同音に唱へつゝ、歸るを兒を三勝は、つくゝと見て思ひいづる、かの信濃なる脊懸の、旅の宿に病み臥せし、夫にひかれて弾く三絃の、三すぢのいとゞ苦しくも、人の門邊にたち馴、さやけき月の愔きまでに、我も乞食をしたりしと、昔わすれぬ身の幸は、忍ぶにあまる袖の雨、笠屋裏屋と呼ばれつゝ、貧しくもありし浪花濤、何かは人の上ならんと、いはねどもそれと思ひやる、赤根も共に嗟嘆せり、さる程に、施行も既に果てしかば、衆皆假屋を立ち出でつゝ、冬枯れけらし草の原、なき名草むす暮参り、覺めすや今も夢によく、假たる夢かな夢の邊、二十三年千日の、はてし歎きぞいやませる、半之進は傍なる、石塔婆を指さして、「三勝これを見たまはずや、享祿元年十二月七日、嵐雪月照信士、月雪妙霜信女、一蓮託生、俗名和州五條新町、赤根半七、美濃屋三勝と、彫り著けしは、われとおん身とその夜さり、この處にて死ぬべかりしを、厚倉ぬしに諫められ、像見がはりの黄鬘と、假髪を纏めし標の石に、遺す夫婦が名は憂し」と、かき日説く夫より、袂の時雨をやみななき、三勝は園花と、かすく多き卵塔を、と見かう見つゝ、歎息し、「いひあはさねどその夜さり、親と親とが子をおもふ、心の闇に果せし、ふとこゝろ紙の遺書は、こゝらに貼りておき給ひし。悔いてかへらぬ水莖の、迹弔ふ今日の手向草、枯れにし時の面影は、今見るこゝちに侍るかしの。

父をば異にする同胞が、親の非業の死は異ならで、いづれも過世あし引の、由路に響く茶の桶に、掬たれて桶の露と消え、或は浪花津の、蘆の葉枯る、霜の夜の、月の劍につらぬかれ、かくは終るゝとの給ひし、親を思へば弱き時の、憂かりし事は数ならず、物足らぬともおもはぬ今は、貧しき昔が戀し。とて、返らぬ事をくり反す、涙はいとも誠なる。お通も諭押し拭ひ二定かにおほし侍らぬと、彼はその夜外筋るまに、負はれて跡を慕ひ來つ、この折戸より入りにき。」と、思ひぞいづる目標の、柳もいたく老いにけり。かくやありけん、とばかりに、彼首是首を見かへれば、そをいかにとも問ひかねて、冬の鶯隱口の、はつ花と諸共に、つくろくと立つ夏由も、憂きにはもれぬ葉木の點滴を、半七、平作、阿五郎も、身のほどよく、にうけて聞く、「生まれぬ前の愛別離苦を、今更こゝに思ひやる、覺めにし夢の往方かな。さめすも遺す親の名は、際石と諸共に、いつまでも世におきつもの、師長かれと斬るものを、甚くは歎き給ひそ。」と、諫むれば曾太郎も、うち咳きて聲を清まし、「なばらほとまれかくまれ、赤根生にはいと似けなし。われも親をば慕へども、女々しくうち歎くを、なき人の爲とせんや。とくく廻向し給へ。」と、子向の香草を折りそふれば、この一言に諫められ、おののく形を改めて、薄の員と七本の、卒塔婆に沃ぐ阿闍婆頂、衆皆齊しく額きて、法號俗名賜へつ、往生得脱正覺位、拔苦與樂と念じ果て、やうやく墓所を立ち出でて、更に寺僧に別れを告げ、從者等を

呼び聚へ、歩より去けば橋手を、後方に擽らしうちつれたちて、やがて旅宿へ歸りけるとぞ。

詭僞の葬送

赤根蟻松の堂は、法會齋ることなく、志を遂げにければ、次の日衆皆、入和へと歸り去くに、

お通阿五郎等は、既に續井殿の返書たまはりて、彼の地をば退出つゝ、私の旅ならねば、直ちに華洛

へ赴きて、一忍軒のおん首途をまち奉るべし」とて、名姓は聞きぬ袂をわかち、從者をひき俱しつ

つ、伏見街道を投して急がしけり。この下に話なし。茲に又、下の難波村の稻盡處に、敗鐵、古衣、

紙屑など、總て穢汁びたる物をのみ、買ひもし賣りもして生活とする、弁介といふ瘦せ商人ありけ

り。藻汐草かき集めてもまだ足らぬ、親子二人が且夕の、煙の價はありがひも、永きは母の病苦を、

子の手一つに看病りつゝ、孝行庸常あら海の、音しづまりてけふも又、融々とさし入るゝ、夕陽は結

句白屋に、栲衣一つの暖さも、小春日和と鶯の、細々鳴く門は寂寥し、浩かる處にこれも又、同じ

世渡る苦しきの、一荷にあまる古道具を、肩も挽げに擔ひ來て、遙かに裏面を見入れつゝ、一弁介は宿

に在るか、よき物影買うたるに、直ぶみさせん」と門口へ、重擔を撲地とれき下す。聲聞きしれば病

み臥せし、あるじの母は頭を擽け、枕に虎子に葉鍋、おき竝べたる枕邊は、人に見せんも憚りの、咳

逆々々と咳きて、裏より半面推し開く、二枚扇風と諸共に、竹のみ高く病體ひ、駄擽痛むわが腰を、

我と捺りて起き直り、二四五六のぬし來ませしか。全介は宿にあらねど、尻うちかけて願ひ給へ。今はや歸る所なり」と、呼び入れられて掻い撈る、擔籠の内の煙包をば一吹いぶさめ。と、上の靴に膝くみよせ、「やよ阿婆御、いつ來て見ても、葉の驗もまはりかねてや、その儘に頭座もあがらま。此しは彼の食へもやする。欲しうなくともたうべ給へ。近曾洛下のえせ連歌にも、人の身に葉とおほしめしと汁、食うて肥だたぬものはなし。我から心を鬼にして、食著き給へ」と信やかに、慰めながら腕を、伸ばす地炕の埋火に、和泉新出つきかぬる、煙草も物をおもはせたり。さらぬだに、働もどほしき留守の宿に、人の言葉の誠あるを、嬉しと思ふは世間の、なべての老のつねなれば、束ねし髪ともろ共に、白く剃けたる齒をあらはして、思はずも莞爾と笑み、商賈影計はすくなくならねど、全介とは心をしり、心しられし四五六ぬしに、身のしがかくすべうも侍らす。この春より吾儕が病著、貧の病を搦てまげて、藥劑も所帯も廻らねど、あらき耳をば聞かせじとて、憂き親もせぬ奇特もの、わが子を興むるにあらねども、こゝらに稀なる孝行に、愛でては小坂大坂の、商人達もこゝろよく、物貸してたまはる故に、けふまではかくてもあれ、慈母が計となりて、活業には得も出です、物の入りぬと借鏡は、只月毎に増すばかり。五七年以前より、婦むかへせよと薦めても、妾を娶りてはあつから、母の養ひ疎かになりなん。殊さら親の貯蔵なき、寒家を擇り好みて、婚縁結ぶものやは

ある。母だに在せばわれに於て、物足らずとは思はぬ。」とて、それなりけりにうけも引かず、とかくする程に吾儕の大病、買賣止めて半年あまり、親子坐食ひの胸苦しさを、猪し給へ。」といひかけて、堪へぬばかりに咳き入れば、四五六も嘆息し、「これは又えらい咳逆かな、一口咽喉を潤し給へ。湯薬やある。」と草鞋の、紐とき捨てていそがはしく、土瓶のぬる湯汲みて出す、片手に捺る鶴首、裏へ見えて痛ましく、さまゝくに刺れば、やようち捨てておかし給へ。早おちつきぬ。」といひつゝ、も、枕を杖に身を起せば、「喃その儘に平臥り給へ。」と、物うち被くるをかいやりて、「打臥してのみ侍る身は、しばしの程も身を起して、うち譚らふが保養に侍り。」とはいへよしない所へ来て、せでもの介抱困じ給はぬ。若きに似けなき深切を、今にもあれ全介が、歸らば見もし聞かしもして、歡ばし侍らんに、なごてかくまで遅きや。」と、心に待てばとにかくに、又いひ出づるわが子の事、さこそと思へば今さらにも、うち捨てても歸られず。これも浮世と四五六は、枕邊にひらき居つゝ、「いな阿婆御、浪連三界驅け巡りても、頃日の日の短きでは、果敢々々しき錢にもならず。けふも又素手ふつて、歸る事かと思ひの外、一指にあまる敗器を買うて、きて肩は減り込めど、庸夫買うては場尺にあはず、見かけて下せし肩休め、詞敵にならざとも、緩かに語らふべし。喃阿婆御、人には策の、見たふしのと、賤しまれても折節は、儲かるも又この高貴。喃阿婆御聞き給へ、けふも朝から一買を、と、呼び歩け

ども容易くは、福を授けぬ大黒間、玉手松本せりくたびれ、西へ傾く日古橋、小家の窗から呼びとめられ、財布かぎりにつけし直の、相違出来て六七百は、確かに利のある破産物、買つて兜の緒を締め賣り、分挿高名かくの傍、これ見給へ」と門戸口へ、走りをりつ、引きよして、ひとつづつに取り出す、佛器高杯供養膳、拾取紗の卓圍も、箔の剥けたる古本尊、白木の位牌ぬしや誰、なき身の後も子をおもふ、夜の鶴なる蠟燭興に、籠はふまれて三曲の、かうの煙にすゝびたる、乾津の花笛銅磬、脚の脱けたる經机、茶釜の尻も墨染に、けさまで炊きし羹の鍋、地獄の釜の二升ばり、これらは一つにうち累ね、内へ入子の米櫃は、のゆるびし伊丹樽、底には残る粟み米の、菩薩の行を勤めかねし、生道心がなまくしき、裳腕の穀としられたり。あるじの母は是彼を、熟と見て嘆息し「神社佛閣へ詣でては、寶篋まかぬものはなきに、佛の箔を剥がすとやらん、活業とはいひながら、尊き物をも利のためには、麤素被けて物ともせず、後の世さへに思ひやれば、さてもうたてし物體なし、南無阿彌陀佛」と念すれば、四五六呵々と打笑ひ「やよ阿婆御、涙もろい事宜ふな。古借の分散、女房置去り、單居の頓死頓滅、鬪宅の敗器引き捨て、賣るものの損、買ふものの得、出船出船は時の估雨、それを不便の、痛ましいのと、思うては、問屋の貨物が減らうとて、興販せぬとおなじ事、とばかりいへば凡夫の私意、おなじ活業すればとて、病む者の枕方へ、心ない佛の五器、位牌などは忌

はしからん、しからば閉帳いたさめ。」と、とりかたよすればうちほ、笑み、「いかで心にかげ侍らん、七難八苦も救はせ給ふ、佛の利益いと尊し。況いて聖ともたのまれぬ、老の病著は一向に、西方彌陀の引接を、待ち奉るのみにこそ。さはれ病の苦しきより、なほ苦しきは負債の呵責、去の晦日をいひくろめて、けふまでは延べたれど、今宵は是非に逃れがたし。この故に全介は、心あてのかたへ、金借りにゆきたれど、何處もおなじ霜枯時、思ふ半ばも調はぬか、日は暮るゝに歸りも來ず、貧の病は御佛も、救ふよしなくおはせばこそ、坊賈の手に售り渡され、火宅の恥を見給ふらめ。數ならぬ身を世にあり顔に、歎かば後世の罪をやまさん、はかなく物を思ほじと、思へど憂きを遺瀬なく、苦しき隨の老の讒言、聞きながし給ひてよ。」と、いと面な津にかき口説けば、「いな、さにあらず、さはあらす。常言にいふ膝とも談合、今宵觀れぬ負債とは、問はでもしれたる米家に、新家に、莊役どのへの未進ならん。それならば吾儕にまかして、心強く思ひ給へ。貧乏する一得には、かかる寄手を引きうけて、臨機應變の軍畧あり。友だちがひに全介に、なりも代りて討債兒を、追ひ歸して進らせん。おん身は物の陰に隠れて、何事なりともいはばいへ、時き一つし給ふな。しられては便なし。」と、ほこりかに説き諭せど、こゝろをも得ず顔を拂り、一人の所帯をいふにはあらねど、おん身に餘りの貯蔵ありて、救ひ給はするにはあらず。正なき事をしだして全介に祟りあらせなば、毛を吹き喪を求むる

なり、何かは人に頼るべき。かからん所爲はうけ引き難し。と、いはせもあへず打笑ひ、「文明うまの人は只、もの頭に心得て、今の世にはあひ難し。御身の八居て頼れなば、後くらしといふべきが、事みな吾情が引きうるに、奈介あしかれとてしかせんや」とかくしてはや黄昏れたり、まづ行燈をこゝと引き下す。棚の隅なる鏡筒、いとかひん、しく打ちつくる、發燭の硫黄に噓々と、噓る鼻をうち掩ひ、燭は點せどまいと暗き、瘦燈心を掻き起し、「うて是れからは飾り附け、細工は有流落成か緊要。兩婆御よ、あしく思ひ過ぐして、必ず音なたて給ひせ。爰へ／＼と、後方より、理なく腰を抱き起して、障子の内へ潛ぼする。折しもあれさや／＼と、革金剛の鐵の音、門口近く聞ゆれば、裏はや來たりと四五六は、こゝろ慌てて門を鎖し、却何がなと彼此を、見かへり見かへる飯米桶の、内には鍋釜いと重し。これ究竟と違はしく、蓋かい破せて卓圍と、共にかけたる醫索の、端いと長き十文字、楚と結びて引き捨てる、程もあらせず門の戸を、「開けよ／＼」と三人、破る、許りに敲きども、「おい」と應へて頼には入れず、くだんの桶を正面に、押し居うる經机の、片脚もたせる檜檜、上には位牌銅磬、香爐花筒按排ぶれば、ます／＼焦燥つ討債ども、「暮る、や暮れぬに門鎖しても、今夜は争で脱すべき。開けずやあけよ」と言れども、四五六騒ぐ氣色もなく、暫しは見せじと臂ちかなる、二枚屏風を逆様に、桶のほとりへ立て廻らし、ひとり笑みつ、うち咳き、口口をさらりと引き聞

くれれば、待つや遅しと米家の杵介「一番乗」と名告りかけ、提灯揮つて走り入る。二番は薪屋の樵斧
 右衛門、三番は敷井啓庵、物體つけて引きさがる。莊役の親平が、糞積も消えたる番袴の、塵埃鞭つ
 殿がほに、おの／＼苦蟲唾ひ潰し、踏めば陥る敗牀の、野郎席薦のその中へ、交る坊主も臂を張り
 て、左右へ頭を廻らし、一金と、のへて待ちもすべきに、余介は出でも迎へず、お懐さへ人なみに、
 影を隠さすべきや、人の物を遣うて果ては、留守を遣ふは大膽なり。是れまで物はいはねども、面を
 ば認りたる、八丁寺町の敗鐵殿、和主留守を預るから、この件の事は合點なるべし。七月九月と兩節
 まへ、豆板一顆藥代とらずに、毎日三貼の方劑は缺かさず、別煎煉藥人參まで、悉く進送つても、
 蛙の面へ水加減、煎じやうは常の如き、五貼七貼の風藥でも、三分體は世上なみ、況いて歴々の醫者
 達が、匙を投げたる大病人を、けふまでとりも留めしは、誰が蔭と思ひ給ふ。世にある人をかくまで
 に、療治するものならば、白銀巻物乾薑、二疊の玄關に置きあまる、鬘斗目麻上下の使者を受けん
 に、腰の牀摺は膿んだとも、潰れたとも挨拶せず。長袖の身にしあれば、書出しも配り難く、討債に
 もいなれずと、思ひ蔑るか。さもなくば、藥の效で生き延びたる、命が今更惜しうないか。活かす事
 こそ不得手なれ、をしくもあらぬ命ならば、もし殺すは吾儕が本事、人參を吞み過ぐしても、首溢る
 には及ばぬ」と、腹のたつ隨人體を、膝から崩す片胡坐、理窟並べて揉みに來る、按摩上りは鄙俗び

たり。療治違ひの口舌には、痛くなき腹さぐらるゝ、四五六は笑ひを忍び、飽くまでいはせて頭を掻き、宣ふ所みな有理。推量の如く、全介は宿にあらさず、さて老母は」と、いほども果てず、杵介撫弄右衛門左右より、帳面披いて眼を睜ひ、「こや留守に居る敗藏どの、古物買ふが活業でも、擇りも好んで全介が、古借錢は買はれもせじ。さりとて喧嘩を買はんとならば、おん身なりとて免し難し。これ聞き給へ、この春より進送つたる、飯米は蕨どのの、方劑にもます親と子が、露命を薬ぐ臍の綱、とやらかうやら朝々の、煙を立てさしたる薪の恩徳、一百何十何象は、涙もろさの慈悲を仇。昨日にはかならず。そ、思ひの外にいひ延ばされ、この月もはや六日たつ、全介を出し給へ。いふ事いうて取らねば去なぬ。」と、嘘く間へ親平は、膝すり容る、袴の稜を、つまみ出して打咳き、左右方ともに静まり給へ。いほる、所道理至極、ひさしい馴染の全介親子、莊役がひに承負うて、時あけて進らまへしと、いはまほしくは思へども、各位はさておきて、十月にあまる房錢の、未進積りてやまひとなりし、母御は可愛い事なれど、まづ吾儕から取る錢あり。」と、いうてあるじもなき宿に、長齋議は無益ならさや。察する所全介は、苦しきま、に母を負うて、逐電せしに疑ひなし。然れども吾儕が、追ひ留めん事を怕害れて、これなる男を残し置き、時を移すと覺ゆるぞ。遠くはゆかじ、誘たまへ、追ひ蒐けて引き戻さん。いかにやいかに。」と小豚を敵いて、左右を信と見返れば、心得たり。と應へもあ

へす、衆皆一齊く提灯を、引提けて立ち上れば、「やよ待ち給へ」と四五六が、慌忙き禁むれども、競ひ蒐りし癖なれば、心つよく押り拂ふ。彼首此首にとり著くを、縄りもよせず衝き倒されて、忽地礮と輾轉ぶ、響にたふる、屏風の裏に、無常を示す早桶は、魂魄こゝにあら備、地獄の制度も金による、慾を離れぬ討債等も、これほと呆れてとり落す、提灯と諸共に、忽地緩む怒りの弓弦、思ふ的さへ射外せし、知のり入れて居ならべば、四五六は鼻うちかみ、各位是れを見給へかし、おのれ活業のもどり道、全介許来て見れば、老母の臨終痛ましく、かかる時にこそちからにも、ならずは友たるかひもたければ、全介を練め激まし、後の事など物するに、「斷を買ふべき錢なし」とて、うち歎く人の子の、爲には胸のみいたみ樽、内には物もなき散を、をさめて今宵の發送を、告げまうこんとて全介は、香花院へまゐりしかば、留守に居る身の氣味わるき、嚮に障子のきら／＼と、鳴りつる事も候ひしこと、いへば衆皆目を注はし、我にもあらで行燈の、ほとも近く集合ふにぞ、聞くもなか／＼傍痛き、あるじの母は忍びかねて、這ひ出でんとしたりしかば、四五六早くも見返りて、「嗟夫出で給ふな、出で給ふな」と、いへば衆皆意を得ず、「やよ敗藏どの、出でな」とは何ものが、何處より出づるや」と、問ひつ、共に武者ぶるひして、肩と肩とをすりあはし、思ひかねてや觀平は、行燈の火を掻きたつれば、四五六も小膝をよこされれば、「出でな」といひつるは電鬼の事ぞかし。己が心の惑ひに

や、桶の内にてめり／＼と、物の響のしたるなり。もし寤寐に出でられなば、人はともあれ某は、いかなる辛きめをや見ん。跡丁寧に弔ふべきに、出でてからきめ見せ給ふな」と、奥へしらする。謎に、いひくろむれば、今更に、主の母は出でかねて、いよ、心は安からず。とも知らざれば、討債兒等は、項下寒くあはぬ齒を、嚼みしめて阿彌陀佛、彌陀佛々々々々と、且く念じて息を吹き、現に儚なきは人の命、長病とはいひながら、昨日けふとはしらざりし。餘病や發のし、急症にてとりや詰めし」と信やかに、はじめの勢ひ引きかへて、問ひ感むる世間の、人のこゝろに果ぞなき。四五六はさもこそと、笑顔かくしてうち點頭き、「いはるゝ如く頃日は、薄紙を剝ぐに等しく、顔の色も見なほせしに、聞けばきのふ杵介ぬしが、この後は貸さぬ」とて、しぶり／＼、三升、おかし給ひし米の中に、鼠の糞の澤山ありてや、全介親子はその飯を食ふと、忽ち食傷して、伸つつ反つつ苦しみが、辛うじてすこし癒えたり。されど彼の飯粒が、老母の齶の虚に入りて、とかくする程出でがたし。薪の龜牙を養齒にして、なほ出さんとしたりしかば、暫忽地睡れあがりて、疼痛むこと甚し。口嗽がんとて縁頬へ、漸くに這ひ出づれば、庇裏の椽落ちて、脊を撃たれ苦と叫び、息絶えなんとする程に、全介臨みて啓庵老の、加減の湯薬を只一日、飲ましたれば直きに往生。察する所飯に中てられ、薪の龜牙に齶を破られ、親平主の誇りがに、こゝは吾儕の家なり。』とて、苛く未進をば責め給へ

ど、雨の漏るに似しらぬ貌して、庇裏を腐らして、椽を落し、脊を撃たし、藪井氏の湯薬にて、終に止めをさされたれば、一件の四人はわが母の、讎敵なり」ととて全介が、恨みの涙諸共に、くり返したる物語り、いと理とは思へども、彼もこれも定業ならんに、執念く人を恨むなつと、ごまかくに寛め賺して、香花院へ走らしたり。金錢は原清物、人の命には換へがたし。人殺しの罪を得て、おのく獄屋に繋がれなば、何れの身をもて全介が負債をば債り給はん。あな苦々しと威されて、みな諸共に頭を掻き、世に食毒といふことはあれど、飯に中りしといふものを聞かず。薪の龔牙にて齧を腫らし、恨に脊を撃たせしは、薪家と屋主の罪にはあらず。詮ずる所皆庵老の方じちがひにもやあらん。いと、いはせもあへず眼を睜り、いなの、それは僻言なり。米に鼠の糞を交せて、升目を偷むは米屋の罪、悪木を薪にして、齧を腫らしたるは薪屋の罪、椽の朽ちたるを造りかへず、人に傷けたるは、屋主の越度ともいふべし。然るに彼の臨終に、長く苦惱をさせずして、忽地息を引きとらせしは、これわが匙に妙ある所、醫師にたまたま悞ちなし。」「否それは僻言なり。」「否疑ひは二人にあり、醫師は絶えてしる事ならず。」「いな御身こそ」と露しく、角ぐむ蘆の水かけ論、果ては打ち合ひ鬨みあふ、四人が中へ四五六は、諸肩袒ぎて推し隔て、「これはそも何事ぞ、證據もなき事争うて、同士撃をしたればとて、うけたる疑ひ、やはとけん。自餘人は免まれ角まれ、莊役どのにはいと似けなし、些しは

年に賜が給へ」と、いひ懲らされて額を剃で、「いはるれば一句もなす」とてもかくても全介に、疑はれては面々の、身にふりかゝる禍なるに、いづれを是れと定めんや、益なき同士撃われながら、僕ちをかきねたり。所詮おのゝ和睦して、誠を盡さば全介も、いかで憎しと思ふべき。所存いかにと親平が、扇を笏にとりなほして、こゝろ得がほに説き示せば、三人ひとしくうち點頭き、「莊役どのの宜ふごとく、ともかくもして全介を、寛むることこそ肝要ならぬ」というて今更すべし。かくまで損するをりなれば、是れまでの貫をなき物にして、盤帳をさりと消し、主人が寺より歸らぬさきに、扇を打ちもて送りゆかば、備工買はさぬ當座の合力、これにます善根あらじ。これではいかがあるべき」と、いへば四五六小膝を拍ら、「いしくも計らひ給ふものかな。主人が心はしらねども、某が扇をたすかる、思ふにましたる善根なれ。さればとて莊役どのに、早桶をば舁かされじ。提灯引提けて先に立ち、郷道をし給ひね。醫師どのは天窓役、寺より迎への所化代に、宗旨の經文こそ、ろ得給へ」と、いはれて頰りに頭を撫で、「よしや天窓は圓くもあれ、醫師に佛經誦まするは、茶坊主に引導をわたせといふより難題なり、況いて僕この年來、療治に暇絶えてなし。さるにまへて、大成論、十四經の假名附なりとも、一行も語には得讀めず。この事のみは許し給へ」と、遠巡するを聴かばこそ、衆皆理なく早桶の、ほとり近く撲地と引き居る、「かくいふ杵介、樵斧石衛門は、對にて亡者を

打ちもてのくに、御身ひとりの素手ふらして、徒らにやは遣るべき。経をしらすは念佛なりとも、題目
 なりとも唱へ給へ、とくく」と急がされ、腕れがたくや思ひけん、懐なる手拭を、額へ當てて汗
 を去き、「これはいかなる呵責ぞや、経をばしらぬ身なりとも」題目念佛は餘りにをさなし。法華經の
 第三に、藥草喻品ありと聞けば、日毎に匙へかけて知る、藥種の日にて間を合はせん、えへん／＼こ
 と、空咳き、机の上なる鐸かいとつて、こつ三つ四つうち鳴らし、「をんじイばくもん、ぶくりやうは
 んけい、さいしんかんきやう、につけいしやくやく、こうほくぢいわう、だいわうしようまア、まア
 わうかんざう、かんとうにんじい。」唱ふる程に四五六は、佛器花筒帆さへ、己が敗器をか集めて、
 桶の上に括り著け「これは亡者のこの年來、いとほしめる物なれば、香花所へ進らする。寺はすなは
 ち八丁目寺町にかくれなき、裏屋山四五六寺、七堂職具の靈場なり。とく／＼擡け出し給へ」と、
 おのが柵をさしとほせば、「いざ」と竹介塵芥右衛門、諸人入れて叩きあぐる。子ゆゑの闇にあらねば
 や、門簾は焼かぬ親平が、提灯に引きそつて、皆もろとも立ち出づれば、あるじの母は、聞くにも得
 堪はず、障子の内より坐行り出で、「戯れも事による、よしなやこれは何事ぞ。物借りてかへさぬの取
 か、思ある人を欺詐らば、後の榮りを何にせん。引き留めてたべ四五六ぬし、こや啼々と呼びかへ
 せど、啓庭が高やかに「かうぶしもつかう、たうきいせんきう、わうれんわうごん、ちようれいたく

しやア、ちんひいぼうふう、せんこつもつやく、たいさうわうばく、ぐわんざんたんたう、しやうき
やうにいへん、せんはふじやくじやう、外目もふらず、呷ふる聲にけおされて、老の誠の届かねど、
我とわが身を招魂、遠離りゆく提灯の、火の見ゆるまで手を抗けて、なほ「喃々」と呼び返せば、母
御よ、屢はれ給ふらん。全介目今歸りにき、やよ覺め給へくこと、搖り起されてうち驚き「原來夢
か」とばかに、われにもあらで茫然たり。

占夢南柯後記卷之一終

三七全傳 第一編 占夢南柯後記 卷之二

東都 曲亭馬琴編次

冬田の晩稻

苦しきは、やどれるきりの立ちこめて、寐るともしらすぬる玉の、夢はうつゝにまさりきと、形なき身をうち歎く、全介が母刀自は、やうやくに躬を起すを、子はかひなく、勤り扶けて、「母御よいかなる夢を見て、いたく魔はれ給ひたる。心持は何と在する」と、問ひ慰むればうち點頭き、「貧しき上に吾儕の病著、毎月にもす負債を、勸解びつゝ、いひも延べたれど、未おほつかなく思へばや、たまま目睡む夢にだに、討債兎に債られたり。おん身は出でて未だ歸らず、寺町の四五六ぬしが、例のわざをぎこゝろもて、「吾儕はけふなん死したり。」とて、討債兎門を欺詐りて、櫛を兎きもて出さずるを、「さはせぬものぞ。」と、呼び返せど、胸苦しくて聲は得たたず、なほ「嗚々」と喚ぶ聲のみ、現にてありけるかな。是れは正しくわが魂の、早出でたるにぞあらんすらん。世に在る效もなき人の、員に親より入りもせば、おん身が肩も休まるべし。願ふは西方彌陀如來、迎へとらせて給はせ。」と、う

らさみしくも霜に傷む、柵の落葉かき口説く、夢物がたりを全介は、聞きもあへさうち笑ひ、心よわきこと宣ふな、夢は祝ふ人による、さればにや、夢に泣くものは覺めて後、人の體態にあふことありと、世にはいひもて傳へたり。これは正しくわが母の、病おこたり果てたまふ、めでたき夢に侍るめり。よしや身に餘る負債ありとも、天道は人を殺さず、こゝろ誠に稱ひなば、神も守り佛も護りて、發跡づる時なからずやは返さる、日に返さんと、思へば負債も苦にならず。只緩かに保養して、花さく春にあひ給へ。極樂浄土は住みよくとち、見て來たるものもなければ、いそぎて赴く旅ならずにと、諫むれば目を拭ひ、其にも吾儕の愚癡なりし。世をば捨てねど、世に捨てられて、貧苦に得堪へず死を急ぐかと、思はれんはこゝろにす。人なみならぬ孝行を、盡してたまはするかひはなく、物ひとつ譲りも與へず、親の貧乏受けつがして、生ひさき祝ふ莊俊に、はやく劬勞をさするよと、又酸鼻む親の慈悲を、意に拜みて莞然と笑ひ、さのみ思ひに屈し給ひそ。翌の薪水の價借らんとて、友だち許のきたれば、影の物こそちから及ばね、まづこれをもてゆきねとて、耳掬れもせぬ錢五百に、舍利のやうなる米五升、惜氣もなくとらしたり。是れだにあれば十日あまりは、腹鼓うつて過ぐすべし。これ見給へ」といひかけて、猷の隅引きほどき、母の邊へさし寄すれば、それはこよなき僮伴なり。浪速の浦による潮の、からきは浮世の人ごゝろ、然るをかくまで信なる友は、抑何人にて侍

るやらん。四五六どのか、暮侶市か」と、問ひつゝ、米に埋みたる、五番の錢引き起し、下に布きたる紙牌を、とみかうみつゝ、眉を擧め、「施行す青番五百錢、白米五升、大和國續井の家臣、赤根半之進、蟻松曾太郎と、寫せしは心得ず。全介おん身はこの輩を、よく識りて坐するか」と、問はれて、「それは」と許りに、回答へかねつゝ、我からに、裏めどもるゝ法施米、氣色見せじとうちも騒がず、「否赤根とやらん蟻松とやらん、見もし聞きもし傳らぬなり。猷の破透より、漏る米を留めよ」とて、友だちがとらしたる、反故なればそのぬしを、しるべき由は候はず」と、いひくろわれれば頭を掉り、「いないなそれは偽りならん。寔に門邊を乞兒等が、ものがたりつゝ、ゆくを聞きしに「けふは千日墓に施行ありて、物夥まき給ふ。施主は大和の續井家にて、第一の執柄なりとぞ。今の世にはいと稀なる、大檀那に坐する」と、いひしを思ひあはすれば、これは施行の米なるべし、日開の煙たてかねて、乞食さするも在るにかひなき、母が病著故なれば、見おとして叱るにあらねど、臥房の障子紙破れて、隔てなきは視なり子なるに、なごやうちあけて「如此々々なり」と、いひしらしては給はらぬ。首は隠せど尾を隠さず、施行の牌の一字一文、得讀めぬ無筆に生育てしは、貧しき故といひながら、本是れ親の失ちなり。幼稚きときはいといたう、病もちに坐せしかば、こゝろの隨に育てんと、思うて教への道を缺き、筆もつすべもしらぬまでに、子をば捨てても親に似ず、自然とよろづに賢しくて、孝

行にして給はする、斯からんうへに手習はし、物讀みさする事もあらば、世にも人にも用ゐられ、身を立つるよすがとも、なるべきものを今更に、悔いて返らぬ年月を、變ふるのみすべなし。こと、かき口説く母の慇懃を、全介は身にしみて、いと面目なかりけり。且くして母親は、漸くに臥房を出でて、全介が手を携りつゝ、土座に推し居れば、全介ますます迷惑して、「こは何事をし給ふにか、物體なし」と忙はしく、舊の處にをらんとするを、理なくとめて恭しく、膝におく手に涙を湛へ、一襟襟の中より養ひとりて、氏も姓も告げ申さず、吾儕を實の母なりと、思はせ侍るは世にも又、罪いと深きことにはあなど、いひ難き筋ある故に、けふまでも告げざりしが、施行の二字を讀みも得解かず、施主を誰ともしらすして、親には匿す袖乞の、はかなき物を盡き捧けて、恥づる色なくもて來給ふ、御こゝろのする痛ましさに、言あらためてかくはいへ、ふかく怪しみ給ふべからず。吾儕は實の母にあらず、乳母晚稻と呼ばれしものなり。おん身が爺公は大和半園、伊賀半園を踏みしめ給ふ、續井殿の譜代の家隸、今市全八郎といひし人なり。尙だ壯りの年なりしかば、色と酒とに身をもち崩して、武士の行ひざまならず。然るに當主伊賀介殿、吉稚丸たりしとき、潛びて京師を遊覽し給ふ、供には今市、赤根、布施、この三人ぞ侍りける。吉稚弱少なるをもて、全八ぬしは同氣求むる、布施蝶九郎と相譚ひて、主君を淫酒に傾き進らせ、利へ主の要金を、夥横領したりしかば、事終に發覺

れて、布施もろともに禁獄せられ、苛く命を助かりて、大和を追放せられしと、聞えたるのみ往方も
しらす。程經てぞしる至八ぬしは、恥をも身をも省みず、馬を牽き轎を昇き、浮雲介となり下りて、
よからぬ所行を事としつ、彼の蝶九郎もろ共に、浪速わたりにながれ来て、故朋輩なる赤根生の、黄
金を奪ひその妻を、奪ひ去らんとせし程に、忽地赤根に追ひ迫められ、時は享祿元年、季冬六日の
事なりし、河風寒き霜の夜の、氷の刃に劈かれ、赤根が爲に世を去り給ふ、當時の風聞は、この津に
かくれなかりける。因果はめぐりあひ合橋の、下ゆく水はかへらねど、儂ふればけふははや、二十年
あまり三かへりの、連夜に當り給ふにこそ。これは是れ爺公のうへなれ、又母御前は至八主と、結び
定めし妻にはおはさず、華洛六條なる刀研、同樹といふ人のむすめ、名をば増穂と申せしが、幼稚き
より歌舞音曲を、笠屋夏に習ひつ、その伎をよくし給へば、舞蹈の異名を小夏と呼ばれ、師匠夏に
伴はれて、貴人の酒宴の席へ、まゐり給ふことありしに、いかなる過世の悪縁なりけん、吉稚丸の旅
館にて、舞蹈の袖ふりあはしたる、樂屋ぞめきの捨言葉もて、至八どのに蕩かされ、露の情を結ぶ夢
に、僅か兩々の假枕して、忽地に有身いつ、いくその物を思ひ給へど、郎は更に主とも名告らず、淫
奔心の冷むるにはやくて、その後は見もかへらず、又三勝に乗りかへんとて、犯せる科にゆくへしれ
ず、遺る像見は次の春、憂きを増穂の名にしおひし、末黒の薄いとせめて、うみ落し給へるに、男兒

なれど恥ぢがましく、世にしらすべき事ならねど、同樹どのは繼父にて、いと腹きたなき性におはせば、人きけがしに罵り給ふを、母御前は面なしとて、心病まして乳も出でず、祖母さまの様に、同樹どのにいひこしらへ、「乳母して嬰兒を、養育ません。」と聞えしかば、このとき吾儕は刀屋へ、おん身の乳母に参りにき。かくて母御前は、身を憂きことに思ひほそりて、産後とにかく肥だち給はず、その年の秋八月、契りし月もなかぞらにて、冥土の旅に起き給ふ。わろき折にはわろきことの、うちも續く物なりかし。僅かに閒一年ありて、おん身が三歳の秋の比、同樹どのは續井家より、風流士風流女とか號けられたる、陰陽二口の太刀を、「研ぎて進らせよ。」と、仰せ下されし事ありしかば、「家職の面目こよなし」とて、聽て大和へ起きて、件の太刀を研ぎ給ふに、悞つて風流士の刃を甚く毀ちたり。こは輕からざる科なれば、禁獄せらるべかりしに、この條の事を承つたる、續井の執權蟻松どの、聊か由縁あるをもて、殿のおん憤りをまうし寛めて、苛き沙汰に及ばねば、同樹どのは恙なく華洛へ歸り給ひにけれど、このまゝに活業せば、後の祟りもおそろしく、又幸ひにして祟りなくとも、此度のことを世にしらねば、京家の武士に誰か亦、刃を研がするもののあるべき。この處のみの照るものかは、他處にて活業するにしかじと尋思して、奴婢には身の暇をとらし、職を止め、宅を捨て、遠しく華洛を去りて、筑紫の方へと起き給ふ。その時おん身の祖母さまの、澗然とうち泣

きつ、さて吾儕に宣ふやう一汝がしる如く只ひとり子の、増穂を喪ひたる哀しみの、袖だにまだ
 乾かぬに、かかる家の難みあり、今この孫をいかにせん。住み馴れたる京に在るだに、同樹殿のいと
 如く、罵り虐げ給ふものを、往方定めぬ旅の空へ、これをしも伴はば、途にて餓死するにやあらん。
 隠すとすれど人にもしられし、これが父は、今市全八と呼ばれたる、續井の家隼なりしとぞ。流浪の
 後は往方をしらねど、名告りあひなば、親なり子なり、むごくはいかで物すべき。今熱ひにはなちが
 たさに、乳もなき祖母に伴はれ、鬼々しき同樹どのに、看死しに殺されんより、世の憐みに人となら
 ば、却つて孫が幸ひならん。さはれ今この火急には悪みて遣はす方もなし、情はかかる折にこそ。汝
 が子とも見て故郷へ、將てゆきて養育みてよ。いと罪深き事ながら、女兒が爲孫が爲に、同樹どのに
 は深く隠して、年々竊かにかきとりたる、銀六百匁餘りあり、行末の事賄ふに、物足るべくもあらね
 ども、千世もと祝ふ孫が爲には、松の葉におく寸志と思つて、これもてゆきね」と丁寧に、悪み聞え
 給ひしかば、最上の川にあらねども、いなといはれぬ稻舟の、綱手を失ふ主の零落に、己が涙の水ま
 して、深き歎きに善悪をわかねど、「心易かれ」とうけ引きつ、東も西もまだわかぬ、和君を負うて
 故郷の、この浪速津へかへりし後は、絶えて故主の在所をしらず。元來吾儕に夫あり、たま／＼擧げ
 し一子は、櫻津の中に死んで、世渡る樹さへまはらねば、吾儕は京の刀屋へ乳母に参りて二年の後、

夫婦ひとつに住みぬれど、又子を擧ぐる幸もなし。主にはあれど働くりなく、この稚兒を得たりしこそ、天より賜ふ子實ならめと、思へばいと可愛さの、八しほにまして養育みしが、いく程もなく臍疔にて、骨と皮のみ瘦れ、鍼灸藥餌に手を場す、全三年の醫師三昧、刺へ良人は時疫にて、ほかなくも世を去りしかば、彼の六百匁の養育銀も、残るは身空の吾儕と稚兒。さりとて人の手にはかけじと、糸綿纏りて細き世を、渡る寡婦が手ひとつにて、漸くに人となせし、和子は反哺の孝心深く、かくまでに世をふる蠶の、全介と呼ぶること、京よりの名にはあらず。同樹殿のいと憎けに、爺なし子とて名をもつけず、作りし人の定かならねば、這奴をば無銘の鈍刀丸と、呼ばすることよかめれりと、常に嘆み給ひしが、この浪速へ將て來てより、實父全八どのの名の一字と、わが良人介四郎の、名頭をとらあはして、全介と名づけたり。身の行ひはいふに足らねど、御身の實父も續井の退權人、始め彼の赤根蟻松と、肩を比べし同僚なりしに、しらぬ事とはいひながら、その子と生まれしかひもなく、親ならぬ親のために、乞兒の中に立ちまじり、彼の黨が施行を受くるは、常言にいふ氏より育ち、これはおん身が失ちならず、賤しき吾儕に生まれし、不幸を歎くに餘りあり。さはいへおん身が心ごまは、實父に遙かたちまさりて、末頼もしく見ゆるものから、けふの舉動似けなしと、見おとしてその素性を告げ、親の悪事を面り、恥かやかすと思ひ給ふな。今こそかくてあればあれ、今

宵の中も頼まれぬ、身の病著に息絶えなば、終におん身は實の親を、しる山のなかるべし。けふも告げん、翌はしらせんと、胸には絶えぬど折もなく、うちも過ぐせし昔語り、さこそ驚き給ふらめ。苦しきものは恩愛の、絆しにこそ。」と禁めあへぬ、涙に胸のいた鹿、忍ぶに餘る玉水や、もろしぐれする全介は、怒れる眼裏凄くじく、肩揺りおろす息を吻き、「形なやけふまでも、實の親をしらずして、仇人の施物をうけもちの、神ならぬ身こそ悔しけれ。われは野合の孤なりとも、父の行ひよからずとて、復讐の志なくば、鳥獸にも劣りなん、父の仇たる赤根が黨、この地へ寄りも集合ふこと、再び得がたき天の賜。千日墓を未だ出でじ、者奴等が歸るを埋伏せて、怨みを復すは今宵にあり。さは。」とて、蹴開く敗戸柵なる、故鐵買賣の鑄刀、縦ひ刃は鈍くとも、志鋭き健夫が、恨みの寢刃は石をも破る、やは脱さじと、腰に跨み、走り出でんとする程に、晚稻は呆れ迷ひつゝ、追ひさまに轉輾びしが、聽て裳に携り著き、「やよ和子よ、こゝろを鎮めて今刀白がいふことを聞き給へ。おん身が爺公全八ぬしの、赤根に撃たれ給ひしは、原是れ脱れぬ天罰ならんに、仇人といふは嗚呼ならずや。加旃祖母さまは、續井家の老なりし、蟻松典膳殿の前妻と、従弟どちなりしとぞ。この山祿ある同樹ぬし、寶刀の刃を毀ち給へど、沙汰にも及ばず歸されしは、蟻松殿の助けによれり。典膳今は世に在さずとも、施物の刺に曾太郎と寫せしは、その子なるべし。赤根蟻松は續井の執納、兩臣縁に

縁を重ねて、同題に異ならず」と、豫て聞きたる事も侍り。おん身が祖父母に由縁あり、愛はたる思
もあり松の、妻黨赤根を撃つときは、亡父の悪事をあらはすなり、善人を撃つ悪人となりて、本意を
ば遂ぐるとも、人を殺せば又殺さるゝ、國の法度は脱れ難し、親とも名告らで身を躲せし、全八どの
はとまれかくまれ、三歳の秋まで慈愛し、生育つ後の後までもと、分つ袂に涙を沃きて、草の露を
ちりふぐに、立ち去り給ひし祖母さまの、世にありやいさしらぬ火の、筑紫の積盡處までたづね索め
て、名告りあはんとは覺さずや。さがないおのが口ゆゑに、實の親の枉死を告げて、物をも思ひ思は
する、これも過世の悪報か、禍神の身に憑きたるか。かばかりの理を思ひ悞つ和子にはあらず、
よく聞きわきて留まり給へ。こや晴々とかき口説き、敵く席薦にたつ塵埃さへ、嗚咽る涙ぞやるせ
なき。全介は張りつめし、心の懐弓弛まねど、いる目を仰ぎて歎息し、「昔は主従今は親子、實の母よ
りいと高き、養育の恩を忘れ、名を求むるとな思ひ給ひそ。さらぬだに、老いての後の病苦を、看病
るものはわが外に、又あるべうも思はねば、今の命の惜しけれど、父の仇あるよしを聞きて、共に天
を戴かば、人にして人にあらず。彼の蟻松はわが祖父母に、恩と縁のあればとて、いかで赤根を放す
べき。二十九ヶ年親しみを、かさねし養母の大病に、かはらんと祈りしも、今は仇なれ實父の爲に、
この方寸は亂れたり。母の教へは何にまれ、等閑にせぬ全介が、幾たび思ひかへしても、歸らぬ首途

は冥途の先鋒、御身が先か、我先か、志だに果しなば、三途の河には筏となり、刀の山には車となり、死しての後に養育の、恩を返し進らすべし。これ今生の辭別、許し給へ。」と回答へもあへず、又立ち上るを引きとむる、老の拳の力なく、轉しつ襷びつ糸縁はる裳を、揮り拂ふ子はいと猛く、走り出でんとすれば外面より、忙はしく來る人ありて、思はず額を打ち合はし、「こは全介か。」「四五六か、あな折わろし」と眩きつ、袖すり抜けても出でがたき、入口狭き門柱、われから關を居ゑられ、心しきりに焦燥つのみ、舊のところへ座を占むれば、四五六は此彼を、見かへりて眉根をよせ、「常にはあらぬ全介が、顔の色のいとわろさ。お懐は又何事ぞ、病み體ひたる人の斯う、端ちかくうち臥して、頭だに掻けぬに、なぞ枕を進らせざる。ありなしのこといひ募りて、親子口説をしたりけん、見れば米も錢もあるに、なでふ氣を煎る事やはある」と、問ひ慰むれば全介は、怪しまれじと額を擗て、「けふはいかなる風の吹きてや、十日あまり訪はれざりし、四五六の來にけれど、茶だにぬるくて得も飲まず、酒一瓢買うて來ん」と、いひつ、立つを推し禁め、「餓鬼の物を脾蟲とやら、和主が酒を嘔まるべきか。無病で身ひとつ塚丁いでも、兔に角に儲からぬ、燈臺却つて根闇し。田舎を競らば思ひの外に、利を射る事もあらんかと、俄頃と思ひたつ由ありて、翌は大和へ起行てば、辭別もせまほしく、又去年の春より、夥計の敗鐵等が、二百よせの本錢講、和主は母御の大病にて、この

春より半年あまり、鐵錢一文かけはせねど、この月は物主なり。未進は後に贖はせんと、夥計兒にこころを得さして、永樂錢三貫の主にはすでに爲課せたり。これも和主が孝行を、神佛の構みて、かくは護らし給ふと思へば、錢の集まり果つるをまたず、半晌も疾く報知らして、歡ばせんとて來つるなり。物はとにかく時節をまたねば、願ふ事も成就せず。短慮は功をなさずとやらん、これは和主がよくしる所、いはでももの事いうてゐて、可惜日を暮さんより、彼の錢もて來てとらせんに、門戸鎖して俟ち給へ。誘いて來ん」と裳引折りて、足ばやに走せ去りぬ。當下晚稻は頭を擡けて、四五六を遙かに目送り、全介何とか聞き給ひし、短慮は功をなさずとなん。四五六ぬしは件の事を、しりて如此いひつるか、知らざるかはしらねども、和子の爲には教訓の、眞中にて侍るか。けふ撃たねば撃たれぬ仇かは。彼の赤根は續川の執柄、殊に親族員を悉して、親の菩提を弔はん爲に、この地へ來るものならば、従者も又多かるべし。然るに和子の單身つにて、志のみ猛くとも、鶏卵をもて石に擲ち、蟬鳴の臂を揚げて、轡を吐むるに異ならず。よしとは思はぬ事ながら、一筋に志すを、なか／＼に禁めはせねど、月を累ね年を積むとも、思ふ隨に撃ち得てこそ、眞に撃つとはいふべけれ。吾儕が餘命はいく口もあらじ、短慮は功をなさずといふ、金言を胸に藏めて、且くおもひ止まり給へ。やよ思ひとゞまり給へ。かくまで事をわきていふに、應へ給はねばせんすべなし、愁ひ迹に生き殘されて、

身の憂きかさをまさんより、刃に伏して我死なん。南無阿彌陀佛。と念じつゝ、全介が後方なる、刀をとつて五六寸、抜き放さんとしたりしかば、全介吐唾と携り禁め、「これは物に狂ひ給ふか。縦ひ今志を遂ぐるとも、母を死なして何かはせん。まづ此の刃を納めたまへ。」「しからば思ひとゞまり給ふか。」「それは又情なし。」「なまけなしとは和子にこそ。只この儘に殺してたべ。」と、死を究めたる彌母に、争ひかねて全介は、天うち仰ぎ嘆息し、「時は再び得がたけれども、親の歎きに思ひかへて、且く仇人に頸を續がせん。こゝろ易く思ひ給へ。」と、いひつゝ、刃を奪ひとれば、晚稻は胸を拊でおろし、「それ聞きて安心るたり。命を捨てて諫め侍るも、事皆和子の爲なれば、悪くな人を恨み給ひそ。今鳴る鐘ははや入相、浪速三街走り巡りて、物ほしくおはさんに、茶粥を炊ぎてたうべ給へ。」と、いはれて見かへる施行の米に、いとゞ恨みもますら雄が、袱包引きよして、眼を睜らし拳を握り、「君子は嗟來の食を受けず、孔子は盜泉の水を掬ばすと、物識る人は常にもいふを、何ごととも聴き解かざりしに、いまこそ思ひあはしたれ。よしや豫讓が舊衣は買ふとも、仇人の施物を、やは受けん。目今復す怨みの刀尖、思ひしるや」とひとりこち、刃を抜きて赤根が名簿を、二たび三たび刺しつらぬき、かへす刀に撃つ錢の、響いくすぢにか斷離れたる、楸の隅かいとつて、門邊へ撲地と投げ捨つれば、庭に降り布く初雪に、交る落葉に彷彿たり。これをや求食る塙御の、雀色時ふく風に、いさゝ

むら竹戦がして、羣たち來つるを見共、「こ、かく。」と全介が、門口狭しと亂れ入り、「悲田影計の面もちして、千日幕の施業をものせし、主人が面は認めたり。興次が手屬か、兼里が婢か、さもなき奴に物とられては、悲田垣下の一分たたき。とても足をば洗はせぬ、新賣乞児を引き搦りゆきて、煮屋人の酒買はせんに、とく／＼運歩め」と聞きて、さきに進みし二三人、全介が前後より、鳴響み引きたつる、拳をわがて搦りほどき、左右へ控と投げ著くれば、筋斗を打つて仆る、を、跳り踏えつ、又むら／＼と、驚ひ鬼る乞兒等を、右に控へ左に當り、或は蹴倒し踏みにじれども、大勢なれば物ともせず、晩稻は見るも危くて、人を喚ぼんも鄰家は遠し、救ふ由なき老の身は、腰さへ響へて立ちも得ず。全介は母親の鞠杖にや撃たれんと、思へば進退自在ならず、敗れたる席蓐の縁に跌き、滑しに倒る、を得たりも應と乞兒等は、春の山邊に生ひ出づる早蕨よりなほ繁き、拳を抗けて撃たんとす。滑かる處に四五六は、三貫の錢引き提けて、嘴ぎ／＼走り來つ、この形迹に吐唾とばかり、撃る乞兒をかたはしより、隻手嚙みに引きつけて、ぼらりすんと投げ退くれれば、晩稻はさらなり全介も、忽地これに立ちあらを得て、足踏みならし立ちあがれば、四五六馳て引提けたる、長鬚の錢とりなほして、全介が肩に被け、二さのみなほやりそ乞兒に棒撃、一旦の怒りに乗して、もし這奴等をうち殺さば、なかなかに事むべししく、靴のうへなる靴ならすや。短慮は功をなし難し、これその錢を踏費にして、

且しほくこの地ちを遠とほ離ざり、身みをも恥はぢをも隠かくせかし。こゝろ得えたりや」と友ともだちの、信まことを見みする青あを澹さしに、猛あせきこゝろを繫つながれし、全ぜん介すけは今いま更さらに、感かん涙なみだ坐まに禁とどめあへず、なほ躊躇ちゆうぢうふにぞ四し五ご六ろくは、晚おし稻なをやをら抱おこき起おこして、そのまゝ、脊せなに負おはすれば、全ぜん介すけ今いまはせんすべなく、走はしり去さらんとしたりしが、又また四し五ご六ろくを見みかへりて、數あまた回たがひ歎なげ息いきし、竹ちく馬ばの友ともにもあらざるに、思おもふにはます御ご邊へんが深しん切せつ、こゝろに羞はづるこ
と多おほかり、命いのちあらば他あたしひ、「この恩めぐみ惠みをばかへすべし。戀なまじひ我われを救すくはんとて、連まき累りになせられたまひ
そ。出いでてゆきての跡あとのこと。」「そはいはるゝまでもなし、吾わ儕ざいにまかして疾とくゆきね。」と、いそが
す程ほどに乞か兒ゐち等はら、みなやうやくに身みを起おこし、俊すのぶ儻たうきながら全ぜん介すけを、組ぐみ留とめんとする處ところを、四し五ご六ろくや
がてかけ隔たて、向むか鷹たか拂はらつて二に三さん人にん、地あつ炕りの裏うらへほり埋うづむれば、茶ちや釜かま轉まわびて發はつとたつ、灰はいに姿すがたをかすま
せて、出いでてゆくに負おはれたる、母ははもしばく四し五ご六ろくを、見みかへりてふし拜まがむ、日ひには涙なみだのみつの
里さと、住すみ捨すつる家いへは惜なしからで、名な残ごりは更さらにをし照てるや、難たは波はの浦うらのよしあしに、たえぬ歎なげきの浪なみだ風かぜ
は、たつも物もの憂うれき首かぶ途となるべし。

遠山とほやまの夕霞ゆふがすみ

却か説くわ敗たい鐵てつ全ぜん介すけは、みづから釀かせし殃わざはひ危ひも、塞さい翁おきなが心こころ地ちして、結け句くこの地ちを立たち去さらば、仇あだを撃うつ
よすがともなりなんものと思おもひしかば、四し五ご六ろくがいふにまかして、家いへを捐すて母ははを負おひ、その夜よ浪なみだ速はや

を逐電し、大和路投してゆく程に、添上郡今市の郷は、實父全八が苗字の地にして、續井の城下へ遠からず、この處に足を駐めば、怨を寛ふに便宜ならんと、胆の裏にて深念しつ。總て今市の郷に、いゆきて、旅宿をもとめ、とかくしてさゝやかなる、蔽屋を購へ得て、親子わづかに膝を寄れ、後の永樂錢三貫文を本錢として生業するに、この處にはさるえせ商人も稀なる故にや、浪速には立ちあがりて、世わたる便り多かり。かかもし程に年も暮れ、春のいとなみに慰められてや、晚稻が長き青苔も、おのづからおこたゐて、臥房かき掃ふまでになりにければ、全介はふかく歡び、活業に假託けつ、日にく平城へ交加ひて、竊かに赤根半之進を窺ふといへども、晚稻には深く匿して、氣色にもこれをしらせず。さはれ彼の老媪は、その性伶俐しき者なれば、大和へ來つるはじめより、全介がこゝろを猜して、しのび／＼にうち歎けど、如此見定めたる事のなければ、禁むるよしもあるはり。時に天文二十年、春二月の頃かとよ、平城なりける續井の館には、大和介順勝ぬし、一日赤根半之進蟻松曾太郎等を召しつどへて、士庶の賞罰を定めらる。事の序に宣ふやうに汝達豫てしれることく、近日米谷山に、夜な／＼妖光あり。その氣地中より起りて、中天に立ちのほり、由鳴り谷響ひ、草木これが爲に枯れ凋るよし、管林等が訴訟、頻りにこゝろにかゝるものから、われ昨夕、みづから城櫓に登りて、迥かに米谷の方を望むれば、現にも一道の赤氣天に沖りて、煙の如く霞に似たり。

ければ是れ管林等が告すところ、妄誕にあらざ。倚物を案するに、これは此れ、往時享祿二年の春
 先考 順 彼の山なる、木精の祟りを鎮めんとして、楠の根方に瘞め給ひし、わが家の寶劍たる、風流士
 の爲すところにあらずや。和漢の史傳に考ふれば、千早振る神の代に、山田大蛇が尾頭より出でたる
 劍は、常に雲をおこせしかば、天叢雲と名づけられしを、人の代となりて、日本武尊、草薙と呼びか
 へて、樹枝へかけ給ひたるに、劍より火もえ出でて、忽地その樹を焼きしかば、熱田の神と祝はれた
 り。又異朝には晉の時、斗牛の間に忽然と、雲氣の立ち升ること有りけり、時の大臣張華といふ者、
 深くこれを怪しみつゝ、博士雷煥といふものに問ひしかば、雷煥答へて、「これは寶劍の氣にて侍り、
 もし最上の劍、久しく土中に埋まるゝ事ある時は、その氣の天に沖ることあり、疑ひ給ふことかは。
 といひしかば、張華、有理」と始めて曉りて、鑿て雷煥を豐城の令として、件の處へ遣はせしに、雷
 煥獄舎の基を掘りて、一つの石函を得たり。潛かに開きてこれを見るに、内に兩口の寶劍あり。銘
 を刻みて龍泉といひ太阿と命く、この夕、斗牛の間に立ちたりし、紫氣復見えす。かくて雷煥は、
 南昌西山の土をして、卽ちこれを拭がするに、上もたき寶劍なれば、京師へ使を遣はして、その一口
 を張華に與へ、一口をば潛かにとゞめて、己これを帯びたりとぞ。龍泉太阿の二口は、千將英勃の劍
 これなり。文の道には疎からぬ半之誰が爲に説くは、釋迦の御まへの説經に假たれど、かかる和漢の

例をおもふに、いともかしこき事ながら、先考阿陽師の言葉を通じて、家寶の太刀をあへなくも、深山に埋め給ひしより、今に至つて二十餘年、遂に人間に歸ることなし。されば彼の太刀に靈ありて、主を慕ひ光を顯はし、われをして曉らしむ。是れをしも疑はば、却つてその祟りあらん。半之進は翌つとめて、米谷山へ赴き、彼の木精塚を掘り發かして、風流士の太刀をとり來れしからば件の妖火も、おのづから滅まつべし。努々憚ることなかれ。と、大息つて宣ふにぞ赤根蟻松面をあはし、且く回答もせざりしが、曾太郎は半之進に會釋して、小膝をす、あゝ殿の宣はするを、舌し奉るには候はねど、當初先君、風流士の寶刀を壓めて、米谷山なる木精の祟りを、壓め給ひたるましは、君弱少の御時におはしませしかば、わすれ給ふにやあらんずらん。いと憚りある申し條には候へども、むかし永正のはじめ、先君茶亭を造らんとて、良材を求めさし、彼の米谷なる大楠樹を、伐りとりし給ひしかば、その事を興り行ひたる。赤根親子がうへはさらなり、君のうへにも祟りありて、御父子の聞快からず。すでに事あらんとせし程に、これなる赤根半之進、及厚倉二郎太夫が忠義によつて、やうやく無異にをさまり、後遂に榮りなし。さるによつて、先君忽地、猛き御二、心を和けられ、彼の阿陽師がまうすに従ひ、まづ二日の寶刀、風流士風流女を拭かせんとて、華洛六條なる刀研、同樹といふものを召しよし給ひしに、同樹尖ちて砥石にうち中て、阿陽師の太刀たる風流士の、刃尖を毀し毀

ちたり。これ輕からざる越度なれど、格別の恩免を加へられ、同樹をそがま、追ひかへされしに、彼
 のものいたく羞ぢてや、京にも足を駈め得ず、妻子を將て逐電せし由、その頃風聞候ひき。豫ては風
 流上風流女を、二口ながら瘞めんと、定められたる事にはあれど、先君いと惜しみ給ふの餘り、風流
 女の太刀を留め、この代としてなほ外に、瘞むべきものやあること、寶庫を索めさし給へど、それに
 ましたるものもなし。思ひかねて阴阳师に、如此々々の由を告げ、兩口の太刀を残りなく、瘞めん事
 はこゝろにす、陽の方は刃尖も毀れたれば、この一口を瘞めんと思ふなり、吉凶いかに」と問はせ給
 ふに、彼の阴阳师答へてまうさく、「陽の太刀の刃の彫けたるも、物の怪の所爲で候なる。しかるに
 なほ吝にして、陰の太刀を留めたまはば、壓勝の術もかひなく候はんか、太刀は眼前ありて、後の
 祟りは未だ來らず、故に狐疑し給ふにや。用ゐられねば、是非に及ばず、枉けて一刀を留めんとなら
 ば、塚のほとりに二基の禿倉を建立し、嚴島の辨財天と、志貴の毘沙門を勧請し給へ。然らば後の
 殃厄を、他方にうつすよすがとなりなん。これ則ち辨財天は、風流女の太刀に代へ、毘沙門天は風流
 士の、刃の毀てるを補ふのみ。たゞ恐らくは、愛惜のやるかたなさに、陰の太刀を留め給へば、その
 餘波女子に榮りて、御子孫の患へをなすべし。努慎み給へかし。」と、直言憚る色もなく、指すが如
 くに勸へたり。抑件の陰陽師は、博士の聞えおはしましたる、南朝の大臣、北畠殿の庶流にして、

村上親實と呼ばれ、數世清貧を樂しみて、南都に賣下し、僅かに口を飼ふといへども、卜筮説相に妙なる事、我が朝にては泰親晴明、漢上にては京房郭璞なんどいふとも、これに加すべしと思はざりしが、惜しむべし親實は、身まかりてはや、十年に餘り候ひなん。されば先君、件くだものの勘文を半ばは信じ半ばは疑ひ、遂に風流女の太刀を留めて、風流士の太刀をのみ、米谷に瘞めしし、木精塚の東西に、二基の禿倉を建立して、駿島の辨財天女と、志貴の毘沙門天を勧請し給ひけり。この故にや、君臣和順しつ、赤根は忠孝の名さへ揚げて、更にその家を起し、館には福のみうち續きて、槐姫は思ひもかけず、大内殿へ入興し給ふころ、義隆豫て當家の重寶、風流十、風流女の兩刀あるよしを聞召し及ばれ、懸縁の敍をもて、只願懸望し給へば、先君これを推辭みがたく、すなはち風流女の寶刀をば、女壻引出として大内殿へ、贈り給はし候ひき。しかるに近曾故ありて、件くだものの寶刀をば執權陶晴賢が、主君大内殿にまうし賜はりて、祕藏すと傳へ聞けり。こゝにかさねて親實がいひつることを、此彼と思ひあはし候へば、先君惜しみて留め給ひし、風流女の一刀も、遂に當家に留まらず、遠く大内家の者となること、所以あることにて候べし。彼の嚴島の辨財天は、大内殿の所領にあり。加藤彼の寶刀の刃を賣ちたる刀屋同樹は、巖に都を遠電して、今は周防山口のほとりに在り。とか、告げたる者の候ひし。これも又故ありけなり。看、々々と思ひあはする事のみ候に、物の怪異にも、怕れ

給はず、先君の御志にも悖り給ひて、件の本精塚を發かし、寶刀をとりよし給はんこと、日來の賢
 き御こ、ろに、齟齬し給ひて物體なし。國家將に興らんとするときは、必ず禎祥あり、國家將に亡び
 んとするときには必ず妖孽あり、蒼龜に見はれ四體に動く。齊王三の善言をもて、毒惑退く事三度
 といへり。發塚の事は、勞思ひ留まり給ひて、米谷の兩社へ常帛を漕らし、又興福寺の大衆を延請し
 て、綱船を漕はし給はんこと、願はしく候。一と、言葉を濁し道理を述べ、面を犯して諫めけり。諸
 侯に争臣五人あれば、亡道の君といへども、その國を失はずと、聖語もこ、に思ひあはする。蟻松が
 誠忠の親には遙かたちまざり、高き操は顯はれたり。顯勝元來大度にして、練めを容る、こと蒼海の
 如く、是非を判斷し給ふこと、流れを決する如くなりしが、この時先代の餘殃、再び萌すべき因果に
 やありけん。忽地に氣色變り、童兒徒に拿したる、刀を取つて反うちかへし、やをれ有太郎、汝が
 賢しきなる、婦女子をば説くべけれど、男だましひもたらんもの、誰かはそれに與すべき。夫れ妖は
 德に勝たず、草木元來非情なり。彼の米谷の老舖は、すでに伐られて舊根は朽らたり。いかで榮
 をなすことあらん。よしや鬼魅罔雨といふものありて、彼の木に託りて奇怪をなすとも、われは是れ
 領主たり、且武を以て國を治む、この武德にはえも勝たせじ。されば劍は身を衛り、人を征し威德を
 倍す、神器の一種なるに、陰陽師に説き惑はされ、家寶の太刀を女々しくも、土中に埋め給ひしは、

恐れあることながら、これ全く先考の、おん悞ちとこそ思ふたれ。敵いかにとなれば、濃に太刀を埋めんと、思ひ給ひし志りより、風流士の刃は毀れたり。されば彼の同樹とやらんは、能あるものと聞きたるに、悞つて刃を毀せし事、寶刃の咎めにあらで何ぞや。加へば前年を経て、大内が所望に任し、風流女の太刀をさへ、彼處へ贈り給ひしかば、父の武徳惣地責へ、その次の年幸り給ひつ。亦是れ件の太刀どもを、失ひ給ひし故にあらさや。かくて又われにも、祥のよからねば、玉枕を娶りてより、夥の年を経にけれど、まだ男子といふものを得ず。剩へ昨夜臺に登りて、米谷山に立ち升る、妖氣を眺望せし時に、腰に帯びたる小刀の、忽然と脱け落ちて、左の裝を劈いたり。しかるになほ驚しきは、その痕はさ、やかなれども、刀尖に著きたる鮮血をいく度か、拭ひ去るに、絶えて拭ひもとれずして、焼き著けたるに異ならず。これも又、彼の風流士をとり復さずば、わが武徳ますく衰へ、戰場に身を殺す、前象にやあらんすらん。かくてもなほ諫むるか、殉死すべくは諫めもせよ。いかにやいかに。と敦閑きて、刀尖をつき著けつ、今一言かへし申さば、曾太郎は忽ちに、比干が胃をも裂かるべく、伍子胥が鵝夷にも盛らるべく、いとも危く見えたるに、蟻松は些しも騒がず、肩衣の腋引きのばし、袴の稜を押しひろめて、刃の下に身を捐りよし、なほ諫めんとしたうしかば、赤根は吐嗟と、押し隔てて、その身を盾に順勝の、押りもち給ひたる、刀の舞際楚と取り、凝り著きたりし刀尖

の、鮮血を借とうち観つ、左手を衝いて頭を低け、「君且く御こゝろを鎮め給ひて、まうす所を聞召されよ。曾太郎が諫言、理あるに似たれども、君を凌ぎ上を犯すは、是れ眞の忠臣ならず。半之進におきては、左も右も、君命に従ひ奉りて、米谷山へ馳せむかひ、木精塚のうちひらきて、寶刀を復し進らせなん。こゝに一篇の願ひあり。いかに許させ給ふべきや」といへば、願勝面を和せ、「汝も曾太郎もろ共に、いたく諫めもしつべきかと思ひたるに、きはなくて、予を敬せる言語應答、心底見えて祝著せり。さて願はしきは何事ぞ」と仰すれば、頭を擧げ、「世に願を續ふとき、形代を用てすることあり。これ天兒の餘波にして、重九上巳の流し灘、又雷鳴月の河社、全く女子の戮れならず。愚按を廻らし候に、今君の威徳もて、米谷の塚を發かし、寶刀をとり復し給はん。なでふことの候べき。しかはあれど、この御刀を鮮血に汗され、その血を拭ひとれざるは、これ又心に快からず。よりにこの御刀を、半之進に給はらば、別ち風流上の形代として、發ける塚にこれを埋め、この刀をもて彼の寶刀に、換ふれば物の障礙もなく、穢を重し、願を願うるよすがとなりもやせん。きは覺さずや」と争はぬ、風の柳のふか緑、いとも愛でたき良臣に、とき賺されて願勝は、襟ももちたる刀を放ち、「微妙じくも申したり。然らばその刀を、乞ふにまかして汝にとらせん、ともかくも計らふべし。米谷へは程とほきに、長齋議にか、づらひて、けふははや日も聞けたり。翌は早且彼

處に起き、麓の樵夫、管林等を召し集合へ、塚を發き太刀を取ること、第三日を過ぐすべからず。こころ得たりや。」と宣へば、半之進莞爾とうち笑ひ、「青海原の底ならば、探り獲がたき事もありなれ。壽永の亂れに失せたりし、日の御座の御劍はしらす、埋めたる寶刀を取るは、寶の物を取るよりやまし。かくまでに御心を勞し給ふ事かは。」と應へ申して賜はりし、刀を鞘に納むれば、翻勝歡喜面に露はれ、「さらば吉左右待つべきなり。退りて休らひ候へ。」とて、身の暇さへ賜はりて、體てを立ち給へば、曾太郎は遠はしく、主の袂を引き留むるを、「無禮なせそ。」と振り拂ひ、見返りもせず後堂へ、席を蹴立てて入り給へば、後方に侍りし小童從の、男の童等兩三人、いと苦々しげに身を起し、兩執權に默禮して、おの／＼主に引きそうたり。曾太郎は今更に、諫めんよしも慙ひに、赤根が心汲みかゝて、彼みちならぬみちのくの、ちかの鹽竈我からに、胸に煙の物思ひ、いふ事もなくさし對ひ、とばしば嘆息したりしかば、半之進、襟かき繕ひ、「いざ給へ蟻松ぬし、退出なん。」といひかけて、立ちあがらんとするを推し禁め、「且く候へ赤根生、日來の行ひざまに似けなく、詔りて君の非を信す、御邊の底意量り難し。抑米谷山の木精の祟りは、一朝一夕の事ならんや。事の濫傷は御邊の親たる半六郎、竊かに一己の榮利を謀り、彼の楠を伐りしより、千日墓の夢と覺めし、その祟りにはわが家さへ、連累せられて養母を喪ひ、父典膳が遁世も、みなこれ故とおもふにも、一とたびはおそれ一と

たびは、うらめじ更に及びがたき、昔を今にくり返す、彼處の妖氣は誰がうへならんと、安きこゝも
もたきものを、棟梁の臣として、太祿を食みながら、御邊は一言も諫めまうさず、塚を養き寶刀を取
る、御使をうけたまはり、嬉し親なるは心得ず。君と申し御邊といひ、心神忽地入りかはつて、もの
を推し道理に背く、これも木精の祟りにて、餘怨主従が皮膚にわけ入り、かくまでに狂はするか。わ
れにはまして才たかく、忠孝の名を揚げたる、御邊なればさはあらじ。君にとりては同僚なり、わが
私には内兄弟なり、潛かに思ふ旨ありとも、我には匿まるべうもあらず。實に米谷へ赴きて、塚を
養き寶刀を取りて、歸りまらんと思ひ給ふか。いかにノ、と小膝をす、め、腕まへつゝあたる忠臣
の、齒に衣著せぬ言の葉は、いと涼しく聞ゆれど、よくもえきかず冷笑ひ、「物々しき蟻松生、米谷
に氣のたつこと、木精の祟りか、寶刀の祟りか。神ならずはしる由なからん。しかれば楚と思ひ定め
ぬ、祟りをおそれて眼前、君の命を背くときは、忽地に罪被り、この身は市に棄てられて、妻子は路
頭に飢ゑつべし。父半六は米谷の、桶を代りて家を賣せば、わが身にも彼の萬樹を、寒錢樹と思ふ
のみ、なでふその祟りを懼れん。只恐るべきは生命を、否する祟りに候はずや。米谷への御使仔細な
し」と回答へもあへず、再び立つを立たしも果てず、刀の瑠璃きかけて、袴の裾を撰地と押し留め、
一漢の王莽は士に下り、齊の田氏は比肩して、是彼國家を奪ふに至る、忠臣と思ひの外、奸佞與權の

半を退、とも知らずして此の年來、謀られたるこそ口をしけれ。君の爲には暗をも殺す、通家の好みは私事、この佞人を撃取つて、扇の根を斷たん。そこな退きそ。と、我固き荒く、身を聞かして、抜きかくる、刃に速く頭を回らし、扇を以て推しとゞめ、一通り給ふないふことあり。この期に及びて何をか聞かん。脱れぬ所ぞ刃をうけよ。と、右手の臂を沈まして、勢ひ猛く又抜きかくる、鞘を廻んで揉ぢかへす。身を突き著けて、と坐し、一手對ひもせず命も惜しまず、冤にもかくにも君の爲に、捨つべき命をいたづらに、御邊と我と同士撃ちせば、其を忠臣といふべきや。日來は物に堪へ忍ぶ濕和の稱を得し蟻松ぬし、一旦の憤りに事の虚實を問ひも定めず、それがしを撃たんとせらるゝ、これも木精の祟りにこそ。まづその刃を納め給へ。と、騒がず怯まぬ大丈夫、取つたる鞘をかいやり放せば、曾太郎はなほ心放さず、刀を衝きたて膝くみなほし、うしかいふは表裏に似たり。君の爲には家を忘れ、命も絶えて惜しからずと思はば、なべて一言の諫言は申さざりし。日來は物に忍ぶとも、今これをしも忍ぶべくは、何事をか忍ばざらん。主家の安危この擧にあり。もしいふ所理あらば、僅かに命を助くべし。と、いはせもあへず、半之進は扇をあけて、音いと高し。と推し禁め、心わかる後方なる、紙門をやをら引き立て、一やよ蟻松ぬし、事成就するまでは、妻にも子にもしらせじと、思ひ定めて候へど、御邊の恨みやる方なく、この方寸をうちあけん。是れを末期の一句とも、聞きと

りて給ひね」といへば、曾太郎眉根をよせ、「如此聞きては心許なし。そのよしいかにもと思はずも、額に額をさし寄すれば、半之進聲をひそまし、「悔いてかへらぬ事ながら、米谷山なる楠を、伐りとりしより祿を得たりし、父が幸ひは幸ひならず、親子沈淪浮浪して、三勝さへに飢渴に苦しみ、當主も一旦佞人等に、贈されて沈樂し給ひ、御父子の間快からず、剩へ父と姉の、枉死も物の祟りなるに、我のみ不測に存命へて、長臣の列に加へられ、半白の齡に至るも、君と父との賜なれば、このつの世はかふるとも、争で不忠を存すべき。然るにその比、村上親實が勘文の旨に任せられ、先君遂に風流士の寶刀をもつて、木精塚に築き籠め給ひしかば、彼の祟り鎖まりて、君臣無妻を得たれども、寶刀二口を埋めん事、いと惜しませ給ふ故に、枉けて風流女の太刀を留め、これをば後に大内家へ、堀引出に進らし給ひつ。是れより先に親實が、潛かに人にいへる事あり「續井殿懸ひに、陰陽の太刀を分ちて、その一刀を埋め給へば、物の怪全く鎮まらず、男女の間に不幸あるべし。加旂殘し留められたる、風流女の太刀も又、その主に禰して、子孫斷絶するに至らん。虎を畫いて猫に類す、續井殿の吝嗇は、祟りを後にしる事ありなん。あな苦々しと眩しし。」と、彼の親實身まかりて、ほど經て我に告けたる人あり。此彼思ひあはするに、彼の風流女は大内殿、長臣賢晴に賜はりて、今は陶が家にあり。彼の寶刀を得つる年より、晴賢が歸國日來にまして、威勢主君を凌ぐに至る、陶が

滅亡近きにあらん。未然を察せし親實は、現に卜筮の聖ならずや。思へば是れすら物憂きに、近曾米谷に妖氣立ち升り、其を禱さんとして、わが君はおもはずも、薄瘴を負ひ給ひ、その血刀尖に刺て著きたら、ことみなよからぬ鮮なれば、誰かはこれを陸まざらん。諫むるよしはありながら、日來は言を容れ給ふ、わが君俄頃に暴々しく、宿老の臣たる御邊を、一刀に斬りも棄つべき、御氣色を察せし故に、命をしむとはあらねども、君臣不順も木精の祟りと、ふかくおそれて諫めまうさす。血に染みたるおん佩刀を、申し賜はりて候ひしは、君にあるべき禱を、半之進が身に負ひて、米谷山なる木精塚を枕にし、このおん佩刀をもて腹かき切らば、はじめ彼の桶を、伐りたる父が非を贖ひ、これよりしてわが君も、おもひかへさせ給はんには、木精の餘怨消滅し、主家忽地泰山のやすきにこそ至るべけれ。かくは思ひ定めながら、はやくも洩れてわが君の、知召さる、事もやと、一點ばかりも思ひ隔てぬ、御邊にさへうらあけず、しばしは物を思はしたり。このことうけたまはりしはごめまり、凡そ此度の天變地妖を、只某が一身に、負はし給へと只顧に、年來信じ奉る、和邇の里なる八幡宮、又米谷に勸請ありし、辨財天女、毘沙門天を、祈る外他事なかりし。」と、ひそめき告ぐる忠臣の、涙は胸に湛へたり。曾太郎は今さらに、いひつることの恥かはしく、「かくあるべきことながら、人の罪正に常なければ、思ひ足らずも疑うて、佞者人よ不正人よ」と罵りたるが面目なし。君の

爲には我も又、惜しむ命にあらざるを、才淺ければこゝろにす。御邊に先を踏されたり。天その孤忠を憐みて、國の難を議はし給はば、彼の周公の金縢の書、再び御邊がために披かん。とはいへ今古有り難き、續井の家の柱石を、米谷山の楠と、共に折かば見よりは、誰とともにか君を佐けん。無用の藤社は匠石も、見かへらずしてとことほに、壽しとは曾太郎が、うへにぞ人もいふべけれ。思ひおく事あらんには、心くまなくしらし給へ、うけたまはらん。」と慰めつ、勸解ぶれば赤根はうち點頭き、「忠臣は終りに臨みて、言必すしも私門に及ばず。わが妻孥は、御邊の姉と妹なり、わが子どもらは、御邊の外侄なり、何をかおもひ遣すべき。よしなき啣言人や聞く、誘給へ。」とていそがせば、曾太郎しばし、嘆嘆しつ、けふをかぎりと思ふにぞ、ゆくを別れの苔石滴、涙とともに留めかねて、こゝろに送り送らるゝ、屠所の歩みの未は過ぎて、漏刻響く申の時、枝に離るゝ、槐の間より、ひらく障子のほそどのを、うち繞りつゝ、後になり、先に立ちてぞ退出ける。正に是れ、かへらじとかねておもへばあづさ弓なきかすにいる名をぞとゞむる、と詠めるこゝろなるべし。かかりし程に、赤根半之進は、曾太郎に別れつゝ、宿所に歸り、さて三勝半七等に對ひ、俄頭の仰せを稟けたれば、翌は未明に起行ちて、米谷山に赴くよしを聞えしらすれば、三勝は熱と、良人の顔をうち磨り、「あはしき婦女の、愚癡なるかもしらす侍れど、何とやらん顔色のあしく見えさせ給ふこそ、心もとなく

侍るなれ。彼の米谷の物の怪は、阿翁の時に祟りを醸せし、縁故は子どもらさへ、かねてより傳へ聞きて、忌憚れ侍るものを、人もこそ多かるに、この御使を承け給ふは、願はしきことに侍らす。などてや推辭み給はざる」と、眉根うち翳めつ、諫むれば、半七も又父を諫めて「母公の宣ふ所、理」とこそ覺え候へ。勝母の里に車をかへし、朝歌の市に杖を曳かず、名の忌々しきすら君子は忌めり、況いてわが家に祟りをなせし、木精塚をあげかんこと、物體なく候はずや」といはせもあへず半七之進は、呵々とうち笑ひ、「武士の家に仕ふるもの、百萬騎の敵陣へも、馳け入らんはこれ常なり、君のためには水火をも踏むべし、かばかりのことを推辭むよしあらんや。怪しきを見て怪しまざればその怪しみ散ずといへり。母はともあれかくもあれ、半七は父の蹟を、踏むべき身をもていと女々し、必ず人に聞かれそ」と、取りもあへねば神ならで、親の底意をしる由も、慙ひに羞む、半七は母親と目を注はしつ、默然たり。かくて已むべきにあらねば、三勝はまづ笠松平作がり人を走らして、起行於米谷の事を告げ、半七諸共に、私卒炊爨ななど、そのほどくに分付して、主人が行路慮の準備などする程に、園花平作曾太郎等、こゝに詣來て、餞別をなせり。そが中に曾太郎のみ、半七之進の死を究めし、孤忠の趣をしりてければ、心の中鬱として樂しまねど、かくまで思ひ定めたるを、われからその妻子にしらして、事を悞たせじと思ひしかば、景色にもあらはさず。半七之進はなかに、

今宵かぎりの名残と思へば、曾太郎、平作、園花等を留めて、通竹酒もり遊び、鶏鳴曉を告ぐる比に、かひなくしく打拵ちつ、筒井金欄の陣羽織に、勝村緞子の野袴を穿き、筑紫鍛冶が打つたりける、二尺五寸の腰刀に、恩賜のおん佩刀を夾副へ、家に久しく仕へたる、私卒丹三等、八九人の奴隸を將て、槍を持たし、罈櫃を擔はし、轎子を舁かしつ、立ち出づれば、三勝園花いへばさらなり、二人の子ども蟻松も、まつにかひなき人を送りて、これやこの世の別れとは、しるもしらぬも立ちつくし、濡らすはおなじ袂なり。

三七全傳 古夢南柯後記 卷之三（前帙第三）

東都 曲亭馬琴編次

雨後の月魄

叢蘭しけらんとすれば、秋風これを破り、忠臣諫めんとすれば、庸主これを拒む。さはれ忠義の狗と成るとも、寵離の人と成ることなけれ。人生凡そ五十年、三寸呼吸絶ゆれば萬事休す。惜しめ惜しむ、身さへ骨さへ朽ちはてて、残るは後の名のみならずや。却説赤根半之進は、城を出で巾を離れ、米谷を投して赴くに、藤て宿願の旨あれば、道すがら神社佛閣を見ることに、必ず其處へ立ちよいて、斬念したりしかば、左に右く道もはかどらず、昨の雨に道さへ甚くぬかりければ、奴隸が肩を助けんとして、轎子はありながら、歩行よりぞゆく遅々と、春の夕暮霞こめし、賤夫が籬笆の紅梅も、日景に映じて色をまし、越路へ急ぐ天津鴈も、歸るといへど我は只、ゆきて歸らぬ旅にしあれど、君を思へば急がる、その日申の下刻には、米谷越の舊路なる、標木のこなたに長き、松原に來にけり。浩かる處に、年の齡六十あまりなる老女の、いと貧しきものとおほしくて、杉の衣の縫り刺したる、

針目太なるを、只一つ著て、木の皮の如くに、よれたる帯を前に結び、髻結みじかなる白髪かき亂しつゝ、俄頃に病發りぬと見えて、手さへ足さへ泥に塗るゝをも厭はず、道次にうち臥したり。半之進は、ゆきかひさまにこれを見て、ふかく憐み、やがて私卒丹三に、この老女を扶け起さし、みづからそのほとりに立ちよめて、名を問ひ宿所を尋ぬれば、老女は惱める目を聞き、赤根主従を、と見かう見て、苦しげなる息を吹き、「これは今市の里にて、いとかすけき活業をするものの母に侍り。しかるに去年は長き病著に閉ぢ籠められ、こゝち死ぬべう思ひ侍りたるに、過世の所業の、まだ減せずや有りけん、この春は大かたにおこたりて侍りしに、今朝しもわが子が、友だちと物あらがひして、その人に拳ち倒されたり。弱き者の憤ひにて、いたく恨み憤り、自をも忘れ親をもおもはで、矢庭に仇を打ちかへさんとて、菜刀引さけて走せ去るを、引き留めんとて追つかけ侍りしに、老の足なればかひなくて、彼此を索ねまどふほどに、身さへ疲れて忽地に、瘡發りて刀禰たちに、怪しまれ奉るは、いと心苦しう侍り。見奉れば、鐵櫃に牌を打ちて、續井家臣赤根半之進と寫し給へば、豫てより聞き及ぶ、守の執柄にこそ在しけれ。この松原は、一里が間人煙絶え、晝だに剪經の、人を追ふとか聞えたるに、こゝろして過りたまへ。とてもかくても野ざらしに、なるべかりける吾儕をば、うちおかし給はせ。」といふも哀れにおのが子の、冤ふ仇人を救はんと、おもふ情のいろ見えて、なほ外

事にかき口説く。とはしらねども半之進は、つくふ。聞きて歎息し、「竊奪道路に付る、あれば、國君の不徳にして、家宰の罪なり、われ苟くも宿老の臣として、かかる老女を救はば、大いなる不忠なれ。しかはあれど、今市へ送らんとせば、これより平城へ歸るに似たり。丹三はこの老女を、わが驛子へ扶け乗して、岩屋谷の廣村なる、村長が宿所に將てゆけ。我は宿願の旨あれば、汝達に引きわかれて、和邇の八幡宮へ参詣し、且くにして追ひ著くべし。とくく。」と急がせば、丹三は肩うち幫め、和邇へほこ、より十五六間あり。よしや私の物語なりとて、従者悉く俱したまはんは、便なきことにおほすとも、某をばめさるべし。今この老女が申せしごとく、このほとりに日を暮して、獨り行かんは實に危し」と、いはせもあへずうち微笑み、「丹三は聞きおちして、はや臆したりと覺ゆるぞ、わが腰には兩刀あり。縦ひ幾隊の野伏山客に撞見ふとも、いかで害怕る、ことのあるべき。とかくする程日脚は没りぬ、いそげく。」と、焦燥てば、生命脱るゝに道なくて、丹三はなほ眩きながら、老女をやをら引き立てて、驛子へ乗せんとするに、老女は涙さしぐみつゝ、そがま、には得も承らず、「今をもしらぬ露の命、何惜しかるべき物體なや、溝鼠に異ならで、泥に塗れしをも厭はせ給はず、仁田山紬の蒲團布きたる、驛子にさへ扶け乗して送やりらん。」と宣はするは、忝きまでに有り難く、なき身の後も高き恩恵を、忘れ奉るべうは思ひ侍らねど、心つよき子をもちて、人並な

らぬ身さへ貧しく、いくそばくその劬勞をせんより、只この隨に死なしてたべ」と掌を合はすれば、半之進は、左右に頭を掉り、やよ老女うけたまはれ、かく汝を勸る事、わが私の情にあらず。是れはこれ國守、續井殿の仁政なるを、推辭み奉らんは無禮なり。そのみならず、汝その子の猛きを追うて、却つてこゝにて身死る時は、その子を不孝に陷る。かくて親の慈悲といはんや。丹三も又なにかたのたふ、はやく乗せよ」と此彼に、説き示すにぞいとゞしく、老女はふかく感佩し、「續井殿の一老職、赤根のぬしは上を敬ひ、下を憐みたまふよしは、をさ／＼牛うつ童すら、いひちし語りもつぎ侍れど、かくまでにおはさんとは、思はざりけるおろかさよ。人の誠の嬉しきにも、わが子のことこそ護影けれ。ゆるさせ給へ」とやうやくに、行轡に這入れば、丹三やがて戸を引きたて、「しからば仰せに従ひて、岩屋村へ趣きなん。申すまでには候はねど、歩をいそぎて追ひ著き給へ。せめて晩れての用意に、これめさるべうもや」と、おのが腰にぞ著けたりける、小提灯を進らすれば、半之進は、左手に杖をもちかへつ、これを受けとり、「けふは中の七日なれば、月の出づるにほどちあらず。提灯を携へずもあるべけれど、汝が心をやすむる爲なり。もてゆくべし」と、袂に納め、既に右手なる畔道へ、立ちわかれんとして思ふやう、主君に申し賜はりたる小刀は、刀尖に鮮血著きたり。われいま和邇なる八幡宮へ詣づるに、鮮血の穢れをいかにせん。この丹三は、年來召仕うて、そ

の心をもしれり、小霎時これを預げばやと尋思しつ。従者おのゝ、主に對ひて別れを告げ、轎子を
擡げ起し、槍を肩掛け、行李を担ぎ磨ひつ、樺木のかたを望して、別れ去らんとする際に、半之進
連はしく、丹三を喚びとめ、「われ思ふよしあれば、此の小刀をば、小霎時汝に饋くべし。これは
汝もしるごとく、恩賜の一刀なれば、等閑にする事なかれ」といへば、丹三後方を見かへり、「しから
ば行李に著けられたる、夾しかへの中刀を、とり出し候はん」と、眞だちていふを推し禁め、「行李を
とかんは煩はし。たゞ須臾の程なるに、汝が腰の刀と換へなん。いざ」とて件のおん佩刀を、丹三に
遞與しにければ、丹三はまづ己が、中刀を取りて主に進らし、件のおん佩刀を、栗しく、うち戴きて
腰に帯びたり。半之進はこゝろいそしく、「やよ丹三、病める老女を道すがら、心もちめて働れかし。」
悉皆のきね。」と、促したつれば、従者はみなもろともに頭を低け、遂にわかれて走せ去りけり。半之
進は従者等を、木がくる、まで目送らつ、「われ今和邇の八幡宮へ詣つるとも、今宵二更の比及には、
岩屋村へ到るべし。彼處より米谷へは遠からず。従者等が長途に勞疲れ、熟睡したらんとき出し抜き
て、潛かに木精塚の邊に赴き、心しづかに腹かき切つて、君にあるべき物の怪の、祟りを負はばおの
づから、鑿井の家は安寧ならん。この曉を臨終と、しらで家には妻や子が、待ちつ、あらん不便な
り。理に苦しきは武夫の、わけ入る誠の道にこそ。」と、ひとりごちつ、つく杖も、曲らぬ心一筋に、

畔をめぐりていそぎ去く。さる程に丹三等は、轎子に病み臥せる、老女に物をとらして、驚り慰め、
樺本へと松原を、十町あまりの程に、枝葉隙なき竝松の、梢より日は暮れて、行くべきかたはいと
暗し。さては火を鑽りかけて、竝松にこれに移し、衆皆やうやく道をもとめて、亦八九町の程に、
月は出づべきころながら、この處は特に路狭く、老松小松左右より、彌が上に生ひ繁りて、書だにも
暗ければ、夜はしかすがに月も漏らず、ふり照らす竝松のみ郷導にして、衆皆呼びつ呼びかけられ、
辛くしてこの樹下闇を走り過ぐれば、只今月の昇るかとおほしくて、些し足もとの明くなるにこゝろ
嬌しく、月三は主の事さへ思ひやるに、かく八九人うちつれたちて、迭に人を使いにして、猶くる
ほしきに、背の樹間を只ひとり、辿る／＼も來給はば、艱苦に得堪へず便なかるべし。はや追ひも著
き給へかし。間近くや來給ふとて、各高く聲を立て、呼びかけては見かへれど、目ざしもしらぬ野
干玉の、鳥夜にはまどひ／＼つ、昇らんとする月を仰ぎて、亦白歩あまり走り過ぐるに、忽地背後
に筒音高く、飛び來る鐵丸丹三が、左の膝二三寸、擲り傷りて、轎子の戸を碎く許りにあなたへ礮と
打ち抜いたり。裏には「苦」と叫ぶ聲と、共に淺痕の丹三も、灸所なれば踏みも堪へず、響に應じて
倒れけり。衆人は豫てより聞きおちたるに、不意く今うちかけし鐵砲に、膽をひしがれ辟易し、轎夫
は轎子を投げ居る、或は鐵櫃を捨て、槍を逆に引つ提拵、松明さへにふりおとして、そが上に跌き

轉びつゝ、いよ／＼暗くて度を失ひ、身を脱れんとばかりに、暴風に尾羽を痛める雀の、只其鳴きに迷ふが如く、株に蹴かけ、泥にむりて、右往左往に散亂し、足に信して逃げ失せたり。かかもし程に撲大地と、梢を降りる地響きして、身長高き一個の癖者、ふりたる手拭もて面を裏み、長き一刀を帯びたるが、もてる鐵砲を裏離と投げ捨て、刀の琿推し放へつゝ、轎子の裏を目かけて、走りよらんとするところを、丹三岸破と身を起し、癖者まで。」と呼びとむるを、應へも得せず聲の下より、閃りと抜いてうちかくる、刃の光に身を反り、刀をもつて受けながし、六七合戦ひしが、何とかしけん丹三が、刃忽地鏗際より、發毀と折るれば心忙てて、すべなく主より領りたる、おん佩刀を引き抜き、癖者が膳を、刀尖さがりに丁と砍るを、拂ひ除けつゝ、踏み籠みて、打つ太刀風の烈しきに、丹三は失傷の鳥、鐵砲痕の特に痛みて、進退も自在ならず、拳やうやく裏へて、背を砍られ、胸前を劈かれ、鬨くを癖者は、得たりと蹴倒し、頸を、隻足に踏み居るで、吭かけてぐさし刺す、刃を染むる鮮血とともに、天にも影のさし潮や、松の杪をはなる、月を、うち仰ぎたる面魂、庸人ならず見えにけり。

木末の點滴

國に君ふければ、四民聚まらず、隊に主なければ從類全からず。されば半之進が從者等はみな悉

く臆せしにはあらざれど、嚮にその主にたちわかれて、人のこゝろひとつならず、しかも闇き夜に跡絶えたる、松原を過ることなれば、只管に歩をいそがんとおもふのみ、前後を見かへる違なき折、のくりなく鐵砲を折ちかけられしかば、更に敵に懸けむかはんとはえせず。或は一旦の虎口を避けんとし、或は事の爲體を半之進に告げんとて、四零八落に逃げ失せしかば、遂に丹三を撃たしけり。かかりし程に癖者は、丹三を思ふ隨に刺し殺せし、血刀引提けて轎子を、勢ひ猛く倍と睨まへ、怨敵赤根半之進、なほ呼吸あらばよくも聞け。往時享祿元年十二月端の六日、浪速なる相合橋にて、汝が爲に撃たれたる、今市全八郎が一子全介とはわが事なり。父が撃たれしそのむかしは、僅かに濼濼の中にある。されば年長けたる去年の冬まで、父をしらず仇をしらず。近曾養母の物がたりにて、共に天を戴かざる汝が事を初めてしれば、猛に大和へ住居を移し、この春より竊びくゝに狙ひ撃たんとしたれども、身さへ貧しく山縁もなければ、城中へ入る便りを得ず。老いたる養母の糾しとなれば、心にもあらで黙止せしに、宿き怨みを報ゆべき、時至つて圖らずも、汝、主君の仰せを受け、夜を日に繼ぎて、米谷へ赴くよし、昨日はやくもつたへ聞き、今朝より跡を跟けたれども、汝が従者夥なれば、かろくしく手を下さず、この松原を過る比、日は暮れなんと推量り、捷徑より走り先だち、こゝに待つこと久しかりき。いでその頭を受けとらん」と、聲高やかに罵りもあへず、轎子の戸を踵ひらけ

ば、月の光の隈なくも、さし入る、轎子の、裏は鮮血に塗れつ、臥したるものは仇人ならで、わが養母晩稻なり。是れはとばかり仰げさまに、駭き倒れ立たんとしては、泥にすべりて身を起し、やま母御、全介にて候ぞ。何故にこの轎下に、扛き乗せられて坐したる。わがうへを早くもしられて、かくや仇人に謀られけん。邂逅撃つべき時を得て、既に怨みを復せしと、思ひしものをこれはさて、淺ましとも口をしとも、いふことの葉のなか／＼に、懐ちなりとも今更に、いひときがたき天のいましめ、母の教へに従はざりし、罰は目前、五逆の罪人、くいひの八千たび百千遍、思へばこの身が恨めし。とて、蹠蹠しつ、聲を惜しまず、草をつかんで哭きしが、やうやくに涙を拭ひて、臥したる母を抱き起し、「晴母御、痲は淺く坐するに、心を鬼になし給へ」と、勸りつ又呼び活けつ、やをら轎下より扶け出して、己が腰に結びたる、三尺手拭引き解きて、傷口を楚と結び、又高やかに呼び話くる、その聲はじめて耳に入りてや、細やかに眼を睜り、「和殿は仇人を撃ちたがへて、心さへ亂れしか。母と呼ぼる、我にはあらず、勿論わどのが幼穉きとき、祖母さま祖父さまもろともに、家を捨て華洛を出で、鎮西の方へとて、適けき旅に赴き給ひし。そのとき和殿の祖母さまが、吾儕に憑み聞えつ、
『汝且くこれを生み、しかるべき人の子とも、なしてよ。』と宣はせしが、汝が手にせよとは承らず。さる時は世につれて、母と呼ばれ、子と呼ぶは、假初の私言葉、只いつまでも吾儕の爲に、和

殿は主なり、主の孫なり。よしや仇人と思ひたがへて、傷くることあればとて、五逆十惡といふよし
あらんや。心得ぬこといはる、よ」と、日來にかはる言の葉の、嚴と正しきに全介は、なほ悔い
る母の慈悲、玉なす釜に熱湯の、沸きかへる如き涙を拂ひ、「さ宣はするは全介を、惡虐殘忍の人にせ
じとて、身を殺しても今更に、言葉を設けて不孝の罪を、贖れよとの事にこそ。如此おほし召す仁慈
の、淺からぬにも淺ましや、御身が主の孫にもあれ、懸懸のうちより養はれ、かく人なみになりたれ
ば、私ならぬ母なり子なり。乳母といふともなか、に、母といふ字は削られず、言さへぐ夷狄の
國には、親を殺すもありとか聞けど、そは人にして人にあらず。人と生まれて人ならぬ、人といはれ
て一日も、この身を容るゝ里あらんや。うたてやな今の世に、善惡ありとも肩肩ありとも、その深淺
をいかにして、救ふとて濟はれんや。只おなじくは母御前の、絶えも果てざる息の下に、刃に伏して
犯せる罪の、百が一つを贖ふべし。許させ給へ」とかき口説き、刀を逆手にとりなほせば、晩稱に吐
唾と、身の苦しきを、忘るゝまでに携り禁め、「こは物狂はしき所爲をして、裳脱けかゝりしうつせ身
の、息の下なる吾情を捐てて、物思へとか情なし」と怨すれば顔を掻き、「左にも右にも全介を、助
けんとて二子にあらず、母にあらず」と宣ふは、理に似、理ならず、竹鐺に身を挽かれ、木の
柱に梃けらるべきを、わが私の心一つに、自殺せば身の罪を、重ねるに似たれども、来たに辨断れ給

はねば、傷けたるのみ、殺せしにあらす。せめてはこれを心やりに、冥土の先鋒ゆるさし給へ。」と、又とりなほす刃を禁めて、「あな悪かしや、聞きわきなし。吾情は和殿を養ひたる、母といはば母にもせよ、わがこの深痕は鐵砲にて、打られたる瘡にはあらす。よく展覧めて身の罪の、ありなしをしり給へ。」と、いふに全介意を得ず、「そは虚言にて候はめ。」と、いはせもあへず息を續ぎ、「身の悪かきに少きより、偽りをいはぬものを、向死として虚事を、いふものの世にあらんや。とくくこの痕見給へ。」と急がされて、全介は、疑ひつゝも血を拭ひ、結び添へたる布引きときて、肉白くはみかへる、瘡口をと見かう見れば、咽喉のあたり二寸あまり、僅かに喉は外れたれども、向く毎に血は流りて、目も眩れ心消ゆるが如き、涙の玉やかくすらん。志渡の浦曲の蛭ならで、さて乳の下に瘡四五寸、いづれも灸所の痛手なり。全介は月を欄に、つくんと見てふた、び驚き、「わが鐵砲の寛び違はず、轎子の戸を打ち抜きたるに、これは正しく刀痕、愚もしきかな天神、地紙も捨て給はず、はからずも母を殺す、罪をば辛く脱れたり。これをうれしと思ふにも、なほ悲しきは母の絶命、おし量るに半之進、這奴全介が母と知つて、誑引き出し刺し殺して、轎子へ隠せしに、幸ひにしてまだ締の、絶え給はぬやあらんすらん。そもいかにして我が上を、かくまで仇人にしられけん。實父養母の難敵、累なる怨みは這奴の頭を、粉に碎き醜になすとも、能かき赤根が往方はしりつ、米谷にて勝負を決せ

ん。きは。」とて小膝立て直し、握り詰めたる拳の上に、たぼしる涙の玉霰、碎けていとゞもの思ふ、孝子の歎きぞあはれなる。晩酌は苦しき息の下に、わが子の顔をうち瞻り、縁故をしり給はねば、その疑ひは、理なれど、世に誠ある人の心を、くめのさら山さら／＼に、和殿を離ともわれを父、和殿の母とも赤根ぬしの、しるべきやうはあらざるべし。男兒の生平といひながら、道ならぬ故に撃たれ給ひし、父の怨みを復さんとて、この大和路へうつり住み、活業に假託けて、毎日に平城へ交加ひつ、彼の人を寛び給ふと、豫てより猜したれども、流石にうちもあかし給はず。よからぬ所爲と思ひながら、禁むるによしもなかりしに、昨々より和殿の氣色こと更に怒りを含み、今朝未明より遠はしく、刀をさへ隠しもちて、走りいで給ひしかば、いよ、ます／＼心もとなく、うちもおかれず跡追うて、日の暮る、まで彼此と、索ね廻れど竟にえあはず、いたく疲勞れて忽地に、寤に駒をさしふさがれ、この松原のあなたなる、道次にうち臥したり。折しもあれ、旅する武士の、従者八九人を將て、轎子を焚らしたるが、吾儕を見かへりて深く憐み、丁寧の間はる、にぞ、病に重き頭をもたけて、不圖鎧櫃を向上くれば、續井家臣赤根半之進と牌を打ちたり。迭に面は認めねど、心に馳づる事のみなれば、名告りをもせず、只管に推辭みにけれど、彼の人元來上を敬ひ下を憐む、こゝろ深しと、豫て聞きしに一點違はず、さまざまに勸り、眞やかに説き諭して、吾儕を轎子に扶け乘し、岩屋村なる長が

宿所へ將てのけ。とて、私卒丹三とやらんに聞えおき、主は和邇なる神社へ、宿願の旨あればなから参らん。とて、従者俱せず彼處より、遙かに別れ去り給ひき。かくて道すがら、かの丹三とか呼ばる、人のいと丁寧に慰め、轎子の内なりける服紗物うち披きて、梨子ひとつとり出し、これは殿のめし餘せるなり。春の梨子は珍らかならんに、温かばこれをたうべよ。とて、おのが刀に著けたりける、刀手をそへてとらしたわ。主といひ家隸といひ、かくまで好意ふかかるものを、いかなる過世の悪業にや、わが子の實夫は腹きたなく、かかる仁者を謀らんとて、可惜命を隕しけん。これさへあるに全介が、父をおもへば生憎に、事の道理も聞きわけず、けふこのぬしの旅すれば、途にて狙ひ撃たんとて、宿を出でしに疑ひなし。あなうたてしとおもふにぞ、瘡ます／＼さし詰めて、身の苦しきに堪へねども、老が命はつゆ惜します、赤根ぬしに意なかれ、我が子も無事にあれかしと、苦しまま、に神佛へ、人しらのぬ掌を合はし、轉る外他事なかりしに、暮れてはいと。樹下暗き、この松原を過ぎがてに、打ちかけられたる鐵砲にて、丹三どのは矢庭に仕れ、轎子さへに打ち抜きたれど、却つて吾儕は恙なし。こは全介の所爲にこそ。こゝにて望みを果さねば、なほ跟け寛びてその度、命も終になつ蟲の、火蟲の我から焼かる、如く、彼の人の手に死にやせん。理せめても留まらぬ、わが子を憂ひ諫めんより、こゝにて死なば彼の人に、おのが誠も達すべく、全介も仇撃を、思ひとま

ることもやと、この身一つを恩愛と、義理にかへつ、暫近なる、彼の刀子を探り取り、咽喉乳の下劈
 けども、老の拳のかひなきは、消え果てもせぬ月の露、野にも山にもおきまどふ、心くるしき舞して
 たべ」と、いふ聲はや、弱れども、命つれなき杵葉の、落むなん程も遠からず、全介は聞く毎に、何
 と應へん術しらず、絞らあへぬ布子のそでを、しばく顔へおし當てつ、身を羞ぢつ身を恨む、
 憂き事はなほますら雄が、猛き心も軟り果てて、碎くる胸を敲き居ゑ、一啼母御、宜ふ所理なり。親
 の教へを受けずして、却つて親を誑りたる、おのが心の刺もて、仇をば撃たで養母を喪ふ、この世の
 不孝は、過世の悪業、天罰にはあるべけれど、悪人なりとも父は父、仇人を終に得撃たずとも、腹こ
 を借らね字みの、恩は大和にありとある、山より高き母をなぞ、非命には殺し給ふ。月日は歳を照ら
 さぬか。さるにてもわが母御は、さ許りの恵みも受けぬ、半之進を厚く思ひて、命だに惜しめ給はざ
 りし。婦人の仁も物による、心得がたく候」と、語れば僅かにうち點頭き、一如此問はれんと思ひし
 事よ、いはぬはいふにますとかいへば、恥かやかしき事ながら、せめて今般の罪滅ほしに、わが上
 詳に告侍侍らん。わが父は服部氏にて、原は山緒ある武士なりしが、いかなる故にや退隠して、城下
 郡、佐保の莊に僞居し、細き煙を立て給ふ、假初ながら十餘年、幸なき上に幸なくて、父母もろとも
 同じ月に、僅かに病みて身死り給ひぬ。その時吾儕は二八の秋なり。只一個の姉ありて、同じ郷なる

柴廣に、半六といふ者の、妻となりておはしたり。父母なくなり給ひし後、吾儕は姉夫に養はれ、ここに二年の月日を過ぐすに、わかき時の惑ひにて、近きほとりにひとりのをら、樵夫介四郎といふ壯家と、しのびあふ夜の數かさなりぬ。元來件の私夫は、酒を嗜み牌を投げ、身をわがま、になす性にて、あるかなしかの狩も、著がへの布子も貸しつくし、利へ姉と姉夫の、衣服調度を盡み出して、六な私夫がよからぬ遊びの、代とせし事發見れて、面目なきに夫もろ共、佐保の莊を遷軍し、二年餘り後此を、さそらひてやうやくに、浪速津に足を駐め、こゝに十年をふる續賣買、身より出でたる鋪なれば、夫婦共稼ぎに拵了けども、鑛鈔三文得も残らず。たましく擧げし一子は、坐草にてなくなりつ。世渡る楫のまはらねば、なほ乳の出づるを幸ひに、京へ上りて刀屋へ、乳母には委りつゝ、かくて和殿を育てしなり。然るに姉夫半六どののは、不憶き傳伴ありて、續井殿に見參し、五條の縣主となりし由、その比仄かに傳へ聞きしが、わが姉の簪條どの、その次の年に歿り給へば、身の悞ちを驚むらんにも既に便著を失ひつ。富める縁者を有ちながら、身の質しきを得も告げず、救はれもせず。後居立の道は絶え果てにき。大和津の國遠からでも、世を憚れば故郷の、そらいと遠くなつたしと、思ふにつけて奇しきは、半六どのを汲引け給ひしかか聞えたる、典膳ぬしの前妻に、由縁ある刀屋へ奉公し、わが外侄、前の半七とは同僚なりし、今巾全八どのの遺子なりける、和殿を子とし、母と稱は

る、みなこれ脱れぬ因果と思へば、いよく深くわがうへを、匿むものから大和なる、赤根氏の事
としいへば、耳引き立てて聞き漏らさじと物せしかば、赤根親子が浮沈の事、又全八殿のこと、外侄
の刀禰の上をさへ、おほろけならず傳へも聞けど、しらす貌してありつるに、法施米にはからずも、
受けし袋の口送り、聞はずがたりに彼の人と、和殿の参々の好友を、告げたりしより忽地に、父の仇
人を撃たんとて、日來にはます和殿が健氣さ、とても撃たれぬ仇なれば、思ひ絶えよと思ふにも、恥
かはしさに如此々々の、義理あるよしは得も告げず。憂き身の末に奈良取や、兎手柏にあらねども、
親子が心裏表赤根が爲に盾となり、只彼の人の矢面に、立ちてこの身を殺さんと、思ふ誠を捨て給
はぬ、神と佛の導きによ、年長けて歸る故郷の、山迹は死出の劍の山、今はからずも少き時に、別れ
せし外侄半七に、半之進、代りて死ぬるは冥土に在せる、姉妹の、姉妹の、姉妹の、半六ぬしへ恩報し、わ
が外侄はいはけなく、七歳か八歳のころなりければ、顔も認めず外叔母ありとも、しらでやあらんし
かはあれど、病みても死なば冥土にて、姉妹夫に面を背け、身の罪科に阿鼻焦熱の、呵責もいとま
すべきに、惜しからぬ身を今茲まで、存命へたれば此竹今、こゝろよく目を瞑るか。わが夫介四郎
どの、生涯貧しく世を送り、四十餘りの中ぞらにて、身死りしも又吾儕が、刃に伏して非命に死する
も、少き時の淫奔に、人を苦しめ身を苦しめし、造惡の報いなり。この理を以て推すときは、和殿

が父の仇人と指す者、天下にはあらざめれど、孝心深きに漢らすも、仇人の外叔母を撃ち留めたり、これらの道理を辨へて、人を恨みず身を愛し、家を興して亡き父の、汗名を雪めたまへかし」と、いふ聲次第に細れども、深處に屈せぬ長物語は、理にも雄々しく聞えたり。されば慢つて改われれば、君子も畏れ、死なんとして言ふことは、賢者もよしとこれをいへり。理にこの晩稱の老女こそ、わかき時の淫奔にて、一生を悞ちたれ、今悞ちをしる時は、姉妹縁にをさく、劣らず、微妙くその子を救はたる、男兒も差づる事多かり。全介は額に汗し、膝に手を駕し、耳を傾け、首より尾まで、つくんと聞いて嘆息し、「一かたならずかくの如く、因縁のあるよしを、一點ばかりもしらし給はば、わが母の世に在る程は、復讐の事思ひ絶えて、心をやすらへ奉るべかりしに、理なくも禁め給ふを、婦人の仁とのみ思ひて、けふの事をさへ告げざりし、皆これ己が悞ちなり。實父の怨みを復すとも、更に養母を喪はば、孝道とこれをいはんや。特に痛手を負うたる親を、草の上にかき居るて、其の死を待てば罪深し。喃母御、心を焦燥ちて長々しく、物いひ給はば殊更に、おん命も危かるべく、夜風病口に入りて、破傷風となる時は、療養終にとゞき難し。いざ負はれ給へ醫師許、伴ひ奉るべし」とて立ちよるを、振り遣りて頭を撞り、「虚氣きことをいふものかな。活きんと思はばはじめより、いかに刃に身を傷らん。思ひし事はいひ果てつ、只惜しまる、は親と子が、盡きぬ名残も一世の別れ、よ

しこれとてもせんすべなし。只吉き事をうちかきね、身のほど安く榮え給へと、草葉の陰より斬るのみ。南無阿彌陀佛。」と唱へもあへず、わが子の血刀をかいとりはやく、咽喉に突きかて吭かき切り、刃を抱いて礮と俯す。とゞむる隙もあら栲の、袖のみいと朽ちまざる、全介はもろともに、消えなん露の草の上に、臥したる母の亡骸を、抱き起して又囁り、更に善悪もわかざりしが、忽地驚と思ひかへして、かき亂したる鬢の毛を、拊であけて襟かき合はし、やをら刃を抜きとりつ、亡骸にうち對ひ、母の魂魄なほ去らずは、全全介が申すことを聞き給へ。わが父悪人なりといふとも、その子として仇を撃たずば、これ父を否するなり。然れども今こゝに、志を果すときは、又養母へ不孝なり。かかれば仇を撃ちがたし。仇を撃たずばあるべからず。某一女一字を識らねど、幸ひにして聞けることあり。むかし唐山の豫讓とやらんは、知伯が爲に衣を刺して、怨みを復せし例を思へば、われも今半之進が、轎子を打ちくたきつ、怨みを復すに擬ふべし。さればとて阿容々々と、存命へんは人にあらず、速かに自殺して、親の屍にふしかさなり、共にこの野の犬を肥さん。母御の神靈且く待ちて、冥土の旅の嚮導に、あされ候へ。」といひもあへず、諸肌ぬぎて血刀を、腹へ突き立てんとするに思ひもかけず、忽地背後に人影して、「待てよ。」と一聲呼びも果てず、無手と抱きとめしかば、全介は驚き怪し、身を反らし、頭を回らし、隈なき月に見返れば、これ則ち別人ならず、去年の神無月

六日の日、浪速にて別れしより、絶えて音耗せしりける、敗賊兒の四五六なれば、こはそもいかに、とばかりに、且差ちていふ處を知らず。常下四五六はわりなく刃を奪ひ取りて、鞘に納めつゝ、只管に嘆息し、「やまを介女だちの交はり塌させず、わが今こゝにきたりしを、奇しくこそ思ふらめ。われも不思議に思ふなり。うても去年の冬、和主は母御を負うて、何處ともなく逃れ去り、我もその次の日、活業の爲に改行して、この大和路へ赴き、六田下市などを押了つゝ、吉野の麓に存を迎へ、睦月の下旬より、標本に旅宿をかへて、彼此となく騙けあるけども、和主親子がこゝら邊に、ある由はしらさ。田中の里にしろ人いで来て、「蕎麥食はせんに、亭午より來よ」といはれしかば、けふは半日生業を止めて、彼處に赴き、日暮れて歸るこの松原にて、和主の母御が狂死の顯末、鬮より見もし聞きもしたるが、なほくはしきをしらんと思ひて、彼處の樹陰に闕窺をり、其音を忍ぶ袖の雨、たえて霽間はなかりしなり。寔に和主が母刀自は、備稀なる老女にこそぞ。又和主も男兒なれ、撃つに撃たれぬ仇人としりて、形なき身を恨み、自害言んと思ひ定めし、潔くは聞ゆれど、こゝにて死なば狗死なり。常言にいふ藤とも謀合、我にひとつの計較あり。母御の志に辱まず、和主が望みを果すべし。かくても狗死せまほしきか。こと、いへば全介容を改め、縁由をしられたれば、今更斷むべうもあらず。寔におん身にわが爲の、産物とこそ思ふなれ。浪華にては脱れがたき、絶を隠して踏躑を踏ら

れ、今亦必死の我を救うて、謀を授けらるゝ、いかで教へを受けざらん。説き示し給ひね」と、歎びあまる目に涙、額づく土もしめりがちなる、氣を引き立てんと四五六は、誇りかに打ちほ、笑み、「爰にて事を談ぜんに、逃去りし赤根が従者歸り来て竊聞きせば、謀は忽地洩れん。いと精しくは道すがら、密やかに示すべし。その耳貸しね」とさし寄りて、密語けぼうち點頭き、「しからば今夜森木と、虚空藏越の捷徑より、彼の出へ走せ登り、人しれず彼の太りを」とし、や、音高し樹には木耳、岩も物いふ憚れあり、月の光も二更は過ぎたり。近き山路を走りなば、丑三過ぐる比及に、必ず彼處へ到るべし」とくく」と、急がし立つれば、こゝろ得ながら全介は、「母の屍をいかにせまし」と、躊躇ふ間に四五六が、信と見返る鎧櫃、「これ究竟」と杓引き抜き、鎖ねお切つて物とり出し、「これへ」と亡骸を、籠て納めて彌陀憑む、これ忍辱の鎧櫃、力なげに全介が、肩に淺裏はありながら、やをら背負ひて身を起す、所定ぬ野邊送り。思へば去年の夢物語、借錢債を欺詐の、指もけふは實事となりて、かかる歎きにあふ坂を、蹙えて大和の土となる、人をよし野といひかねし、死花さかぬ身の末や、世は春ながらうき秋と、思ひくみつ、四五六は、先へたちてぞいそがしゆく。浩かる處に半之進は、いつの程にか歸り來けん。小松が中に身を濟まして、一五一十を得と張ひ、今全介と四五六が、走り去るを見て歩み出で、片三が屍のほとり、いくたびか索ねめぐりて、鮮血に染みたる

順勝の、御佩刀をかい取りつ、うち戴き、左手に提灯高く掲げ、着たに著きたる刀尖の、血をうら返し估と見て、扱はとあやしむ聲と共に、一町ばかり走り過ぎたる、全介も四五六も、おどろきながら見かへれば、月より明き提灯を、引提けて彼處に立つ人あり。おのが往方をしられじと、もろともに小石を掻いて、發矢と打てばあやまたず、打ち落す提灯の、火よりも先へ滅えてゆく、亡骸ながら三人へ、足に信して走せよりぬ。

米谷の硯塚

却説全介四五六は、只管に走りつ、岩屋谷と虚空藏名の閑なる、山田のほとりに來にけり。一月は甲夜より隈なくて、潛ぶに便りよからねど、途はや遙かに遠離れば、追人も争でこ、まで來べき、小霎時憩ひてこそ又走らめ。とて、此被九折なる樹下に立ちよりつ、株に尻をかけ、額の汗を押し拭ひなごする程に、と見れば左手の方は墓所にて、山田の畔に、舊き新しき石塔影建てり。當下四五六は、全介を見かへりて、「いかにあれを見給へるか。今はからずも、墓所のほとりに憩ふは、負ひたる母神の亡骸を、こゝへ葬る因縁ならぬ。さる重荷を背挑負うては、路を走るに自在ならず。とかくして天の明けなば、いひつる事もかひなけん。とくく瘞め給へ」といへば、全介は今更に、別れも爰に惜しまれて、何とも回答へ難ねたりしが、數回歎息し、「大和は母の本貫なれども、わが身には猶

帳なり。されば葬りの事、憑むべき寺もなし。この處へは骸骨を、藏めまゐらせんは便宜に似たれど、
 引導讀經の聲も聞かせず、捨つるが如く懸めんこと、その子としては忍びがたし。それら火急の一大
 事に、思ひかへよとならば、ともせんが、鋤鉄なんども齎し來ず、人に借りんも更闇けて、人家へは
 いと遙かなりこと、いはせもあへずいなその事はこゝろ易し、見給へ被處の土を穿り起して、深
 く穴を掘りたるあり。右手の柳塔へ倚せかけたる鋤鉄は、忘れておける物と見ゆ。思ふにこれは、此
 のほとりなる里人の死したるを、翌の旦闇に葬らんとて、甲夜より豫て張里坊に、掘らせたる夢な
 るべし。こゝへ懸ひしはじあより、われ彼の夢を見たりしかば、和主が母御をこの處へ、葬るべき
 因縁の、ありけんとはいひしなり。加梅今夜未谷へ赴くとも、木精塚を掘り起す、鋤鉄なくては、
 寶の山へ入りつゝ、空しく歸るが如し。然るに今ゆくりなく、鋤鉄さへに獲たる事、天の賜ならで何
 ぞや、しぶる事か」とと説き諭せば、全介「有耳」と點頭きて、遽はしく鐵櫃を扛き下し、件の鉄を
 かい取つて、別に穴を掘らんとするを、四五六急に推しとゞめ、全介よ、噫、和主は律儀なるものぞ
 かし。こゝへ理あよといはぬばかりに、掘りたるこの穴のあるを見すや。こゝへ、く」と指させば、
 全介はこゝろを得ず、「それは簡野も物によるべし。儘か一つの害を、掘るとも争でか時を移さん。
 今もし其處へ葬らば、人の墓を竊むなり。天も明けば忽地に、舊の施主に掘り捨てられて、終に身

の腹を肥さん。由なき事をいふものかな。」と叱けば、四五六は多くもあらぬ振振き拵て、「利土は備かに一を知れども、未だその二をしらざりけり。思ふに此の處は寺内にあらず。只一郷の墓所なれば、おのく定まる主ありて、他郷の葬りをば得も許さじ。しかるときは、その亡骸をこのほとりへ埋め難し。よしや竊かに埋むるとも、新たに掘りたる壤の蹟は、おのづからしらるべし。甲人等これを見、或は疑ひ或は怪しみ、終にこれを掘り起さば、叩つて母御の亡骸は、何處へ捨てられんも又量りがたし。しかるに今この夢へ葬るときは、彼の施主縁故を問はず、もし鬼神なんどのせし事かと、おそれ惑ひて、なか／＼に掘りもかへさず、彼の新葬もろともに、丁寧ねんざうに菩提ぼだいを修はんか。さるときは、われ一錢を費さずして、親の爲に讀經よみきやうさし、永く菩提を修はせん事、又儻たうたうなき好事ならずや。これ鳥鼠穴てうそあなを等しくする、謀はかりごととはこれなめりこと、誇りかに説き示せば、全介は思はずも、掌てのひらを押し地と拍うち一寔まことにおん身は吾が黨の文殊もんじゆなり。可惜男子あはらしうらなこに賣うるをさする事よ」と唱嘆しやうたんし、寔に母の亡骸を伴くだんの穴へ納めにければ、四五六はかひなくしく、鉄てつをもて壤を覆ひかけ、押しならし踏み替けて、さて傍かたむらにとり除けある、石塔せきだふをまろばし寄せて上に居ゑ、大山樺おほまきぎの枝折りとりて、墳墓おむらひの左右へ新し「とく／＼廻向まがうし給へ」と急がせば、全介は再び濡らす袖の露を、拂ひもあへず額ぬかつきて、身のいひわきもなき親の、後の世せめて安かれと、念ずれば四五六も、彌陀佛みだつぼつ、々々々、々々々とくり返し

たる亭環の、縁ならなくいとしく、心ほそまいやましぬ。かくて全介は、うち念じ、うち念じつ、頭を擡げ、彼の石塔を月光に、と見かう見て眉根をよせ、「この彫り著けたる方なる文字は、見なれたる心持ごする。四五六おん身にや讀めやせん、讀みくだちて聞かせ給へ」といへば、聞きかた透し見て、「文字を墨にて染めたるは、夏雲獨峯信士とあり。又逆朱を入れたるは、春月清光信女とあり。これは正しくその妻にて、頃日身まかりたりければ、親族こへ送葬して、同じ瑩へ埋めんとて、豫て穴をば掘らせしならん。」と、いふを聞きかけて全介は、思はず小膝を敲と打ち、「こは不思議なる事もありけり。わが養父介四郎どのの戒名を、夏雲獨峯とまうすなり。しかるにこの石塔に、おなじ戒名あるのみならず、夫婦とおほしく逆朱を入れて、春月清光と彫り著けたる、その夢へわが母を、葬るはそも前の世より、この山圃の土となる、因果にこそおはすらめ。さればこの戒名をとりも用ゐてわが母を、春月清光と稱へなん。奇なり、奇なり」と只管に、嗟嘆して已まざれば、四五六も、今さらに脱れぬ終の友がきを、こゝに結びしこ、ちせり。されば四五六が、思ひ量りしに一點錯はき、この夢を掘らせたりしは、虚空藏の屬村なる、大象名地の琵琶法師、木阿彌陀佛といふものなり。父の某甲は、十九箇年前に世を逝りて、母のみなりしが、六十の春のゆめと覺めて、病み煩ふこともなく、ある夜寢死に死にければ、木阿彌陀佛哀悼に堪はず、父の夢へ、台葬らんと

て今宵まづ、その夢を掘らせ、さて黎明の比及に、里人と諸共に、棺を舁きもて来て見れば、掘らせし穴は埋めてあり。「こは何ものか喪の中に、かくはしつらん」と怪しみて、再び壤を掘り起せば、鐘櫃の内に、年死の老女を納れたるあり。年の齡は、木阿彌陀佛が、母に等しく見えたるにぞ、誰かはこれに驚かざらん。「こは何者の所爲にや」と、ますく疑ひ惑ひつゝ、施主も道者も立ち集ひて、呆るゝもあり、畏るゝもあり、「只とり捨てよ」と罵るもありけり。當下村長且く尋思して、木阿彌陀佛等にいふやう、「大和は國のはじめなれど、神武天皇以降、他の夢を奪うて、おのが葬りをせし事を聞かず。願ふにこゝらの高峯には、鼻の高き刀禰達多かり。こは全く鼻高殿の所爲なるべし。さるを後の榮りをも思はず、腹だたしとてとりも捨てなば、却つて大きな殃厄にやあふべからん。只この鐘櫃なる亡骸をば、舊の如くによく瘞めて、そのほとりへ母御を葬り、花を手向くる時は、もろ共に手向け、卒堵婆を建つる日には、もろともに建て、すべて此彼一體の思ひをなして菩提を修はば、これにましたる、施徧鬼はあらじ。しかせんには榮りもなく、この功德によつて母御はさらなり、御身も地當二世安樂、疑ひあるまじ。」と説き示せば、衆々「有理」と稱賛し、聽て唵稱が亡骸を、舊の如くに埋めつゝ、その傍に穴を掘りて、木阿彌陀佛が母を葬り、母の石塔を新たに建てて、おなじ戒名を彫り著けたり。すべて此のころの人の心さま、素朴なるに、わきてこの邊は、山ふところの小

縣にて、人みな人の言を推さず。こゝをもて木阿彌陀佛は、村長が教へに悻らす件の亡骸を、何處の誰とはしらねども、わが母ともろ共に、香を焼き、花を手向け、月忌年宵の追善を、ひとつ筵にとり行ひけり。この善根を植ゑたればにや、後には彼の亡骸を、全介が母なりとするのみならず、その身に稀なる幸ひありけり。是れより先近郷の田夫牧童、緣由を聞き悞りてふかく怪しみ一人象なる木阿彌陀佛が母は、葬らるゝとき亡骸が二つになりぬ。世に離魂病とて、形影のふたつに見ゆる病ありとは聞けど、死して亡骸の、ふたつになるといふ事は、聞きも及ばぬ珍事なり。ゆきて見よかし、おなじ戒名を彫り著けたる石塔が、竝びて有るぞ」とて、殊更にいひの、しりけり。かかひし程に、彼の空に埋めたりし、主なき死骸の主出でたる頃、近郷の徒、又この由を傳へ聞き、「元來木阿彌陀佛が母の軀の、二つになりたるにはあらず。わろくも聞きたるものかな」とて、果ては笑ひて已みけれど、この事遂に人口に膾炙して、舊の主の出づる譬ひには、必ず「元の木阿彌陀佛」とぞいひける。この謠の濫觴は、鹽尻の明王百穀編にも載せられたれど、爰に説く處と、その事大同小異なり。且鹽尻には順慶の時の事とす。木阿彌陀佛が事、この下に語なし。却説全介は、母をば既に葬りつ。今後は後やすしとて、四五六と諸共に、彼の鋤鎌を携へつゝ、又只管に走る程に、幸くして米谷なる、木精塚の邊に來にけり。しかれども、まだ天は明けず、囁ぎもあへず走りにければ、石澗を結びて咽喉

をうるはし、さて平介は四五六に對ひ、櫛には事の邊しくて、全くおん身が謀を開き果てず。まづ行ふべきよしを、説きしらし給へ。」といへば、四五六答へて、「さればとよ、半之進に先だつて、この塚を掘り起し、彼の風流工の太刀を奪ひ取る時は、その咎め半之進が身單つにかゝりなん。しからば和主は手をも下さず、實定の思みを復すにあらずや。ときは得がたく失ひ見しとく、ひとと從せば、全介討きて深く歎び、「おん身が謀究めて妙なり。彼の太刀失せなば半之進は、生きて平塚へは歸りかたけん。よしや阿容々と歸るとも、續井殿の怒り烈しくて、安穩におかし給ふべからず。母の今般の言の葉に、悖らで復す怨みの刃は、彼の風流工にますものなし。さは」とて歎柄握りもち、河上なる方は山深み、情赤松生ひ茂り、簞竹が下の水の音も、委まぬ心潔き、朱の玉籬神閑びて、塚の左右に天倉あり、彼首是首と見かへれば、兩洲の鳥居に額を打ちて、蟬財天女見沙門天と、筆太に寫したる、金宇は月に照りそびて、尊くもあれど今宵より、心に著たる藤衣の、汗れを忌みて近、も参らす、挽き残したる櫛の、土より上一丈ばかり、大方石に化りたるを、鑿り碑石に用ゐつ、木精塚、二字を彫りたり。これを掘り葬かんに、よしや百人がちからを借るとも、一朝一夕になすべうもあらず。四五六も全介も、思ひの外のおほえて、具忙然とまほりてあり。かくて止むべきにあらねば、さりとともと思ひかへして、まづ試みに、櫛の株の露はれたる間を掘るに、正に是れ、風流

士の太刀、再び人間に返るべき時にやありけん、思ふには似ず株は朽ちて、柔かきこと塊に等し。兩人はこれに勢ひつきて、息をも續がず搦る程に、土中五六尺許りにして果して物あり、一是れなんめり。」と競ひ蒐りつ、兎角して引き出せば、紛ふべうもあらぬ寶劍の唐櫃なり。残雪は凍てまして、夜の山風膚を徹し、狼の遠音谷に響きて、毛骨栗然つばかりなれど、それをば屑とせず、兩人はます／＼力を盡はせ、錘を揉ぢ斷つてこれを見るに、筥は三重と覺しくて、櫃の中に又筥あり。この鎖をも漸くにねぢ放すに、第三の筥に至りて、いかにすれども蓋開かず。「か許りの事に時を移して、山路にて夜をあかし、半之進等にしられなば、謀りしことも仇となりなん。たゞ打ち碎け」と四五六が、ふり揚けて打つ鎖は、手にひッかして反ね返る、間を抜かず全介が、鉞柄高く礙と打つ、丁々發石と數回、打たれて筥は碎け飛び、風流士の太刀顯はれ出でたり。さればこそ、「とて全介が、取らんとするに奇なるかな。塚の中より吹き出す、魔風頻りに面を打ち、彼の風流士を中天へ、吹き揚ぎるとぞ見えたりし、太刀は須臾閃きつ、平城の方へ飛び去らんとす。時に毘沙門堂の門扉さつと開けて、異相の天王忽然と立ち地はれ、御手には長き鞘を取り、面を怒らし眼を睜り、虚空遙かに閃きゆく、太刀を追つ蒐け追ひ戻し、拿つたる鞘をとり伸べて、うち落さんとし給へば、太刀は追はれて慈ひに、平城の方へは得ものかき、萬の夢へ入らんとすれば、姫たる天女、辨天堂の上に立ち地は

れ、抱ける琵琶の敷をもて、徐やかに招きよし、これを取らんとし給ふ折、魔風再び吹き暴れて、月さへ暗くなる隨に、太月は舞りに光を放ち、その聲編を裂く如く、西を投してそ飛び去りける。正に是れ、天王天女の擁護によつて、順勝の身にあるべかりける、その禍を西へうつして、今茲八月下旬、大内陶が身に係る、家の亂れを今こゝに、しるやしるしの塚の鬼に、驚かされて全介も、四五六も手にもてる、勳鎧搦地と擲捨捨てて、甯へるが如く醒むるが如く、張りつめしよりはや欲む、このの弓といる月の、西を瞻仰めてついるたり。

占夢南柯後記卷之三終

三七全傳 第二編 古夢南柯後記 卷之四上 (前軼第四)

東都 曲亭馬琴編次

池の中島の上

因果報面の理、誰かはこのをおもはざらん。しかれども、一日の利に引かれ慾に迷ひ、不覺に禍胎を醸するときは、長に毒を流して、子孫その餘殃を受く、又憐むべし。されば赤根半六が如き、陽く領土の齟齬をたすけて、陰かにおのが榮利をはかり、米谷山なる靈木を伐りしより、その身猛に發跡でたれども、憂害に横死せしのみならず、一子半七も又流浪して、濡衣のなき名を立てられ、やうやくに天日を灑で、更に續井家の長臣となるものから、今亦罪なき罪を得て、うち歎くにはあらねども、その子、後の半七さへに傳なくも罪をまして、百折千磨の艱苦を経たる、緣故を索ぬれば、その親の爲これに只、忠義の爲とへす衛に、毫かすやあか根半之進は、その夜さり岩屋村なる、村長が家にいのきて、守の命をきこえしらし、「親はつとめて、農夫山樵等を召し集合へ、木精塚を發かして、風流士の寶刀をとり出すべき」と由を、一村の戸毎に令れさしつ、更闌け人定まりて後、單身酒か

に米谷へ赴き、狂かき切つてわが君を、諫め進らせんと思ひしかば、藤て一封の遺書を懐にしたれども、途におくれたる従者等が、私卒丹三が死骸を昇きもて来て、そのことかひ事、いと驚く罵る程に、春の夜なれば短くて、思ひの外に天は明けたり。清かる處に米谷の躰なる龜夫等、半之進が旅館に来て言すやう、一僕ども近屬は、米谷に妖火あるをもて、夜は彼の山に登る事をせりしが、昨夕丑三も過ぎたらんと思ふころ、山風いたく吹き起りて、山の振ひ動くこと、おそろしなごいふばかりなし。われも人も、枕安くはいも寐らず、只驚りて明くるを待つ程に、雷を襲くがとき音して、屋の棟近く聞えたるに、こは何事やらんとて、おそろしく紙窗の隙よりこれを見るに、一條の妖火西を投して飛び失せ候ひき。甲夜に村長より、令れししたる事も候へば、明くるを遣しと米谷なる、木精塚のほとりにゆきて見るに、塚は掘り發かれて、唐櫃やうの物打ち碎けたるあり。又その傍に、二挺の鋤鉞あり。鬼のせしか、人の所爲か、縁由はしり候はねど、まづこれらの趣を、告げ奉らん爲に、彼處より直に参りて候。」と述べ訖り、唐櫃の碎けたると、彼の鋤鉞を進らしければ、半之進大きに驚き、「そはわれみづから行き見て見ん。」とて、龜夫等を先に立たし、村長を後方に従へ、刀の腰に挟しもあへず、米谷山に走せ登りて、塚の壊れたるやうを見るに、塚に龜夫等がいふに違はず。つくくと思ふやう、「風流士の太刀の失せたるは、吉凶いかにも量りがたけれど、昨夜標本の

松原にてありし事といひ、今又こゝに鋤鉞を捨てたれば、人ありてこの塚を、發きたるに寢ひなし。然るに彼の寶刀、自ら靈ありて、飛び去せたるものか、是れも亦しるべからず。彼の妖火、西を投して飛び失せたり。といふによりて、再ねて尋思するに、陰の太刀風流女は、大内殿の長臣たる、陶晴賢が家にあれば、陽の太刀たる風流士これを慕ひて、つひに周防山口へ、飛びのきたるにはあらぬか、推量をもて、思ひ決めがたしといへども、風流士の失せたる故に、わが身に罪被りて、いかなる禍にあはばあへ、わが君無異に在さば、元來願ふ所なり。左につけて思ひ右くに就けて思ふに、昔村上親實が、いひつる事こそ著明しけれ。とて、なか／＼にうちも騒がず、遂に村長獵夫等を將て、山を下らんとするに、忽ち後方に、物の倒る、音、地に響かして聞えしかば、衆皆うち驚きつゝ、見返れば、彼の碑石にせられたる、楠の斷株が、自ら倒れしなり。こは／＼不思議とわれ先に、走りかへりて熟く視れば、石に化りたりける斷株、たゞ一夜に朽ちやしけん、老木の立枯れせし如く、西のかたへ倒れつゝ、幾段にか碎けたり。理に未曾有の事なれば、半之進は、左右に心やすからず、碑石の碎けたるを、一つ二つとりもたして、村長が宿所に歸り、さて丹三が亡骸を、近き山寺へ葬らせ、この後も、米谷に怪しき事もあらば、早速平城に告知せよ。と、村長に聞えおきつゝ、從者等を將て、第三日の亭午に、平城へ歸りにければ、まづ蟻松會太郎に、ありつる事を密かに告げ、おのが

宿所へは得も入らで、やがて君所へ参りつ、風流士の太刀の失せたる、又木精塚のおのづから、倒れ
て碎けたるよしを聞えあけ、件の敗れ唐櫃と、勦鎌と、碑石の碎けたるを見せまるらするに、伊賀介
頼勝、その報す所を審に聞きて、一とたびは驚き、一とたびは疑ひ、忽ち面に怒氣をあらはし、曲策
かゝりて、膝立て直し、「やをれ半之進、木精塚の碑石は、原是れ楠の斷株なれば、朽ちて倒る、事
もあるべし。件の太刀の、失せたりといふは、全く汝が虚言ならん。おもふに、汝も曾太郎と同意し
て、予を諫めんとは思ひながら、言の用られざらんよしをしる故に、一言も争はず、却つて曾太郎
を狭みし、頼勝を賺して、この結構をなすにこそ。曾太郎は面り、わろしと思ふよしを匿さず、甚
く諫めれば、その罪許すべし。汝は辯佞にして主を欺く、その罪決して許しがたし」と、糞ひ懸つ
て敦圀きつ、怒りにや堪へざりけん、佩刀の鞆に手をかけて、撃ちも棄つべく罵り給ふ。當下頼勝
の内室玉枕御前は、殿の甚く敦圀き給ふ聲の、生平ならぬが心もとなくて、女の童して、「見て参れ。
とて、遣らひ給ひけるに、馳て走り歸りつ、「如此々々」と報知すにぞ、常には出でさせ給はぬ、遠
侍のこなたまで出で給ひつ、正廳の廊に身を潛ましつ、事のやうを聞きて坐したりけるが、
目今頼勝の怒りに堪へずして、刀の鞆に手をかけ給ふを闕窺みて、吐嗟と許り走りより、襦を押し
開かしつ、半之進を後方に圍ひて、右手を著き、「わが君しばし怒りを押へて、わらはがまうすよし

を聞召せ。君のおん憤りはさる事に侍れども、この半之進は、半七たりし當初、君のおん恨ちを身に負ひて、百折千磨の艱苦を經たるものに侍らすや。加旃家の家うけたまはりてより、國御けく、民安らけなる、彼が功に侍るめれ。しかるに一日の寶刀に思ひかへて、手づから撃ちて棄て給はば、世の譏り人の嘲り、今眼前見るが如けん。たゞ舊功を思召し出されて、枉けて許させ給へかし」と、言語正しく諫め給へば、烈火の如き順勝も、當然る理にすべなくて、只疾視へて坐せしが、漸くにして箱に復りつゝ、扇を開きて胸うち扇ぎ、「人おのゝ始めあり、よく終りあるもの稀なり。渠奴が父半六は、編蓬の中より發跡でて、五條の縣守をうけたまはり、剩へ渠奴は、近臣の列に入りたるころ、をさゝく名を取り、家を興さんと思ひしかば、予が俣ちを補ひもしつらん。今に至りては、渠奴既に家の家たれば、つゆばかりも不足なし。こゝをもて權を賣り主を蔑る、その心さま、豈はじめの如くならんや。今度の罪は、決して免し難しといへども、玉枕かいふ所も、又黙止しがたし。宿所に罷りて閉ぢ籠り、再ねての下知を奪て。罷り立たすや」と、阿りたまへば、半之進は、唯々として、聽て御前を退きけり。このとき蟻松曾太郎は、半之進が事心もとなく、殿の御氣色、いかに坐すらんとて、潛かに遠侍にをり、その爲體を洩れ聞きて、いよ、胸苦しく思ふほどに、半之進は恙なく退出にければ、まづこれを歡び聞えなどするに、傍に人もなかりしかば、半之進は頗りに嗟嘆し、風

流士の寶刀紛失したれば、吾情ひに業谷にて、自殺するに術なく、阿容々々と歸りしかば、罪被ら
んこと、元來覺悟の上なり。もし只今殿のおん手撃にならんには、愚忠の難を書き遣てし一封惟
にあり。わが君これを、さば、やうやくに曉り給ひて、寶刀の事は立地に、思ひも絶え給ふよしと
あるべかりしに、玉枕御殿の止めさせ給ふをもて、思ひし事の一度ならず、いたづらになりしなり。
風流士の失せたる事、吉岡定めがたけれども、わが君愛惜のおもひを絶ち給はざらんには、難は難
ひがたけん。これ見給へ」といひかけて、懐に手を通し入れ、彼の遺書をかき携るに、何處へ遣し
たりけん。終に見えず。殿のおん前へ出づるまでは、懐にありと思ひしものを、もし彼處へや遣し
けん、今更に彼の一封を見られ奉らば、實事とはし給はで、さまん、にこしらへつ、詭欺などの
み思召さめ、こほ口をしき事したりけり」と、殊更に周章す。曾太郎は事の趣を聞き、且く尋思
し、「いな赤根ぬし、さのみ愁へ給ふな。御邊必死を究めながら、その事稱はず、徒らに歸り給ふも、
稀なる忠義を皇天の、憐れ給ふに似たるべし。しからば今はからずして、殿のおん前へおとしたる一封
は、長き御ころを和ぐるよすがとならんもしるべからず。長途の勞れも推量らる。三勝、半七、園
花母子も、心苦しく待ちつ、あらん、退り給へ」と慰むれば、半七はちからなげに、刀を杖に身を
起し一人間萬事塞翁が馬、吉きもよしと定めねば、凶きも凶しといひがたし。けふよりわれは舊居の

罪人、安危理亂を勘へて、君を輔佐して給はれ」と、いふ事毎に身を外にして、主の思ふ忠臣の、言の葉せめて哀れなり。さる程に三勝、園花、半七、平作等は、父に従ひて、米谷へ赴きたりし、私卒奴隸が物詣りにて、事の様はよくしりつゝ「殿の御氣色は、いかに坐すらん。わが家公の恙なく、疾く退りたまへかし」と、君所の方うち驚仰め、今かノと待ち侘びたるに、半之進は甚く憂ふる氣色もなく、罷り歸りにければ、妻も子供も、そのほとりに團居して、「いかにノ」と問ひにけれど、思ふ程をばいひもしらせず、「寶刀の失せたる由は、従者等に聞きつらん。この懈りによりて、勘氣を蒙り、「けふより籠り居て、再ねての君命をまち奉るべき。」旨を仰せられたり。平作はわが子なれども、笠松の家を續ぎたれば、させるおん咎めなし。園花もろとも立ちかへりて、家にある日は母に事へ、又出づる日は君に事へて、父が宿所へ立ち入るべからず。この旨こゝろ得候へ。」と、丁寧に説き示せば、平作は、扇を笥にとり直し、「仰せうけたまはり候ひぬ。但し標本の松原にて、家尊の轎子へ鐵砲を打ちかけ、丹三を殺せし辭者は、元來怨みを含むものか、これ疑ふべき最中なり。もしそのもの桶め捕らば、寶刀の往方をするよしあらんに、などてこれらの越を聞えあは給はざりし」と、眞だちて聞へば半七も、父がほとりに小膝をすゝめ、「平作がまうす所、理にこそ候へ。おん身に仇をなさんもの、思ひあたらせ給はずや。」といへば、三勝園花も、もろともに肩を頼め、「これはむかし

相合橋にて、わが所夫に撃たれたる、全八蝶九郎等に親族ありて、年來怨みを報はんとて、著け寛ひつ、撃ち損じ、なほ懲りまゝに米谷なる、寶刀を奪ひて家公を、罪に陥さんと謀りしならん。こはあらずや」といへどもあへず、半之進はうち咳き、「こはよしなき事をいふものかな。彼のを八蝶九郎等に、妻子ありし事を聞かず。よしや親族あらばおれ、渠奴等は犯せる科重き、天が下の罪人なりき。我が一刀に命を奪つとも、これを怨むるによしあらんや。すべてかかる時には、尾に尾を附けてなき事いふは、世間の習俗なるに、我から唱へ起すこと、さりとては愚かなり。再ねていひも出づべからず」と、氣色暴くいひ懲らせば、衆皆「有地」と應へながら、なほ疑ひは解けざりけり。かくて園花は、平作を將て宿所に歸りしが、この後は、主君に憚りて訪ひも來ず、半之進は三勝半七等、親子三人酌ち籠りて、日光だに見ずをる程に、妻も子供も、いかで半之進が志をしるべき。「風流士の太刀の往方をしらして、世間聞くなし給へ」と、神に佛に祈るのみ、又せん術もながき日を、暮し難ねたる身は春ならぬ、春もくれ夏圍けて、五月二十一日の事なるに、續井順勝は、長臣蟻松曾太郎を召びて宣ふやう、「赤根半之進を罪ある故に、眞に推整めおきしより、今ははや八九十日を経たり。しかれども風流士の太刀を出さず、信とその罪を糺すべう思へども、玉枕が理なく歎き諫むらうるさく、渠奴が舊功も黙止し難ければ、格外恩免の沙汰を加へ、けふより改めて百日を限りて、彼の太刀を出

さすべし。しかれども思ひの外に、膽太き老奸なれば、斯つて風流士をば、源叔が宿所へ観めなき
 たるか。これも又しるべからず。よみて猿丸半七を人保として、八海地の築島なる、四阿の裏に、捕
 八置かんと思ふなり。浪道傳てしる如く、昔年先考北山なる、寛延院の金閣に擬へて、茶亭を修造は
 んと覺せし比、後見に度く池を穿らせて、山河を洩ぎ入れ、池の中に二つの築島を造らして、一つの
 島には、講堂を建立し、又一つの島には、金閣の茶亭を修造ひ給ひしが、いく程もなく、閣をも亭
 をも壞たれて、今は僅かに一字の四阿あり。只將天堂へは、飛詣の巨橋を渡したれども、四阿はいた
 く荒れたるのみ、彼の島へは渡るべき橋なし。しかれば半七を携へおく船舎は、この處にますかたま
 たあるべからず。日に只三度の飯をば、小舟にて運ばして與へさせよ。いかに難の太き半之進なりと
 も、親として手を憐まざらんや。しぶとき心も手に引かれて、彼の大刀を出すことあらん。汝半之進
 が宿所にゆき前ひて、この旨を聞えしらし、半七を召し捕へて、影のごとくにせよ。もしつゆばかり
 も、私の意もて、半之進親子を捕まば、その罪業數と同じかるべし。かくの如くにしても、百日を
 いたづらに過さば、その度は許しがたし。半之進が珠白の首刎ねらるべし。と、信といひわたせ
 よ。とて、扇と別とを方になして、いきまき暴く御するにぞ、曾太郎は餘りに苛き仰せなりと思ひな
 がら、諫めて許さるべきにあらば、已むことを得ず、半之進が宿所にいひきて、生命を請説し、や

がて半七を引き立てて、かへり去らんとする程に、三勝は、夫のうへに胸を苦しめ、夜だに安くはいもねられぬに、今又わが子半七が、因徒となるをとゞめんと、思ふ涙に水まして、欄もなき淵は漸に、變る浮世を柳つのみ。「蟻松ぬしも情なし、おん身が獅子の平作ならば、身にかへて勸解ひ給はんに、血脈にあらぬ半七は、如堵といふ名のみにて、初花とまだ婚姻を、とりも結ばぬを幸ひに、此方の落が疎ましくて、腹きたなき事し給ふか。」と、子を思ふ道に迷ひてや、心の闇に打つ礫も、八つ當りなる恨みのかま／＼、瀆の眞砂と盡きぬは名残、惜しみ／＼と泣く。曾太郎は「理」と、思へど摩て半之進が、心をしればとりもあはず。半七は今更に、母の歎きの痛ましく、いと長やかに延びたりし、月額の毛を席蓆に著け、一母御前いたくな歎き給ひそ。父因徒となり給はば、いかばかりか悲しかるべきに、親に代るは子たるの道、よしや吾儕は火に焼かれ、水に浸され千萬無量の、阿責に命を隕すとも、二親ながら恙なくば、不幸の中の幸ひなり。半七が事は只、思ひ捨てて事をつひには君の怒りも解け、聞き日光を見給はん日のなからずやは」と慰むれば、三勝いよ、擡へかねて、はふり落つる涙を拭ひ、「賢くも聞え給ふ。おん身が志はさもあらぬ。辛く命を助けられ、今昔に語るとも、子を先だてて何かはせん。苑の御池の中島は、近くて遠き配所なり。浪風に犯されて、身を病まし給ふなよ。三度の飯も人の手を、待ちなばさぞな便なからん。おん身がひとと茶島に物思ふ

より、家に居て、おもひやる母が胸苦しさを、今の別れの哀しきに、ますとしりなば身を愛し、赦免のときをまち給へ、名残をしや。」とかき口説き、袂に携りて泣き沈めば、曾太郎も今更に、強顔くはひきはなちかねて、頻りに歎息したりしかば、半之進はつと身を起し、刀の瑞突き入れつ、三勝を撲地と押し退けて、聲をふり立て、「前よりわがおし黙りをるをよき事にして、さまふくのくり言、聞くもうたてし。日來はさしも雄々しかりしが、子には亂る、女子の愚癡、蟻松ぬしのおほさん程も、推量られて面ぶせなり。やよ半七、われ思ふ旨あれども、口外すべき事ならねば、母はさらなり、いまだ汝に告けしらせねど、凡そ此度の禍は、わが庶幾ふところなり。汝も又父が志をくむ事あらば、親をもて念とせず、主家の無異を祈るべし。こゝろ得たりや、よくこゝろ得よ。蟻松ぬし、仰せうけたまはり候ひぬ。いざ半七を召さるべし。とくく立て。」と呵る子を、目に角つけて見送れど、こゝろは共に芝折れたる、二十日あまりの軒葺蒲、晴れぬ思ひの五月雨に、濕りがちなる黒ばえや、又かき曇る三勝が、身のうき雲を吹きはらふ、風の便りも翌よりは、訪ふよしぞなきわが子の配所、園は名におふ八海の、池より深き恩愛を、思ひくみつ、曾太郎は、半之進に目禮し、半七を引き立て、のくも送るも上下の、折目高なる武士の、意地はかくこそありけれど、感する赤根が私卒も、又蟻松が従者も、共に袂をぬらしけり。正に是れ、

公道人情兩是非

若依公道人情缺

人情公道最難爲

順了人情公道虧

と賦したりける、世の諺をおもふなるべし。

占夢南柯後記卷之四上終

占夢南柯後記卷之四上

三七全傳 第一編 古夢南柯後記 卷之四下 (前軼第四)

東都 曲亭馬琴編次

池の中島の下

罪なくて、配所の月を見んといひし、大宮人は和歌の浦、船出もしらぬ、僻言たらん。不題赤根半七は、罪なき罪を家大人に、代ると思へばうしとせぬ、秣も戦ぐ秋風や、假初ながら九十餘日、八海の池の中島なる、四阿に因はれて、爰を配所となすわづも、なぐさめ難ねし寤寐なり。抑九山八海の池と聞えしは、當時鹿苑院の義満公、洛北に金閣を造らし、退隱の地を占めて、山水の美景をつくさる。しかるに永正のはじめに至りて、順勝の父續井順昭、點茶の風流を嗜むのあまり、彼の金閣に擬へて、三十餘町の後苑に、わたり五町の池を穿らせ、池の中には、二つの島を築かせて、これを鏡湖の池に擬へ、池中の奇石は夜泊石、龜山、赤松、島山、九山八海石に至るまで、その面影をうつせしかば、やがて八海池と名づけたり。かく壯觀を盡すといへども、驕りをませば身の仇多く、一家の難みいで來りて、順昭はじめてその非を曉り、享祿三年の春のころ、彼の茶亭をば毀たれたれど、東

南の葉島なる、辨天堂と、池の中島なる四阿のみ、そがま、に懸されたり。船中を來時財天を、ふま
く信じて給ひしかば、波の葉島に、突したるに身を、半船勝の時だにも、折々機嫌し給へども、北の
島には種もなく、後の四阿はおのづから、懸舞物き性が棟も、只としづくに朽ちまさり、月より外に
もるものは、輪の涙と、問より、秋風のみにぞ着る、あまたの岸の松の聲、鳴の羽がき百羽がき、
かき書されぬ物りひする、半七は只管に、父のうへ、母の嘆き、わが身にしめてうら悲しく、池の波
風もろともに、君の怒りのやはらぎて、親の難居ゆるさせ給へと、遙かあまたの葉島なる、辨天堂を
斬るのみ。元來聞き難なれば、岸の樹立に遮られて、中島よりは人影も見えず。只月の巳の日毎に、
玉枕、前四庭傳ひに、影の女房女の重を將て、辨天堂へ来るの船を、外ながら見奉れど、懼りおも
へば端ちかくはをらす。日に只二度の難をば、管園より奴隷して、給はするその舟すら、あまたの
岸に繋ぎてあれば、浪の通ひ踏度絶えして、こ、よも遙かに念するのみ、おなじ御池の中ながら、辨
財天へ参るによしなし。けに近くて遠きものは、鞍馬の九折とかや、清少納言が書けるそ宜なる。袂
首に見ゆる小舟ならぬと、身を繋がる、因徒は、近くて遠き神垣へ、運ぶ誠もと、かぬかと、形な
き世を驚かすつ、五月二十一日より、こ、にあること四箇月に餘りて、いそがぬ月日もゆく秋の、九
月朔日にたりにけり。来る月の三日は限らせ給ふ、百日にはや満ちぬ。家尊は恙なくや坐すらん。寶

刀の往方をしり給へるか。母御はさぞな思ひほそりて、病著にや臥し給ひけん。その音耗を聞きたやと、こゝろばかりは飛ぶ鳥の、翅なればいたづらに、家居の方をうち仰ぎ、又俯し沈めば水や空、空や水なる秋の雲、かはるにはやきおのが身の、往方もこゝに定めかねし、破捨山にあらねども、照る月見えぬ朝日に、何慰まん姫竹の、小ざ、が枝のうち戦ぐ、夕ぐれいと心憂し。半七信とおもふやう、至誠は神の如しといへり。誠をもて祈り申さば、いかでか納受の驗なからん。傳へ聞く辨財天女を念するものは、猛利不可思議大智慧聚、不可稱量福德之報を得んと、光明經に説かれたり。けふよりして三日が間に、父が越度を許されて、君臣和順ならんには、彼處の舟を夜の中に、こなたへ流して岸に著け、御堂へ参詣なさしめ給へと、毎夜々々に池水に浸り、垢離を執りて祈るといへども、天女も驗見せ給はず、はや三日になりにければ、半七深く望みを失ひ、この一日はわが父の、生死の際におはするならん。特にけふは巳の日なれど、玉枕御前の辨天堂へ、まるり給ふを見奉らず、これも又平事にはあるべからず。父はおん肚めさる、か、母御は何となり給はん。こは何とせんと許りに、岸邊に立ちて蹠蹠し、彼の舟こなたへ寄せ給へ、舟よ、と手を抗けて、招くかひなきいにしへも、かくとは聞くや鬼界の島に、法勝寺の修行俊寛が、ひとり華洛を慕ひけん、憂き身は同じ思ひなり。されば半七はこの五七日、夜も通宵ねぶらねば、腸斷たれ神勞れ、岸の松が根枕にし

て、寐るともしらず臥したりしが、夜風のそよと身に入むに、驚かされて身を起せば、日ははや暮れて星光も、初夏の比とおほしきに、半七が孝心を、天女納受し給ひけん、彼首の岸に繋ける舟の、おのづから纜解けてや、風も吹かぬにながれ来て、いつの程にか島根にあり。半七今此の舟を見て、争でか心勇まざらん。念願成就疑ひなしと、跳りかゝりて閃りと打乗り、其處ともしらす如法闇夜に、棹を操り水を掻き、辛くして辨天島へ乗り著けて、舟を岸に繋ぎ、かい探りつ、島に寄りて、天女の御堂に詣づるに、神燈はいと暗けれど、湖上の月を仰ぐが如く、煩惱の雲忽地露れて、闇浮の臺に登るに似たり。信心併しながら肝に徹して、感涙を拭ひあへず、暫し廣前に額づきて、父母の安泰を祈念するに、暗きかたに女子とおほしく一聲よ、と泣きにければ、半七大きに驚き怪しみ、其處にをるは何人ぞ。と、問ふ聲を聞きしりてや、「そは半七ぬしにおはするか、初花に待り」と應へて、にじりよりつ、又問はん、言の葉もたゞ泣くばかり。やうこそあらめと半七は、神燈の光に就きて、左見右見れば、紛ふかたなき、云號の外従母女初花なり。思ひかけねば、淺ましくて、又いふよしもなかりしが、且くして形をあらため、「おん身、玉枕御前に給事し奉る暇ありとも、夜をこめて人影なき、この葦島にたゞひとり、籠りゐるはこゝろ得がたし。吾儕中島に、因徒となりしより、絶えて父母の音耗聞えず、けふは寶刀を進らすべき、百日の限りなり。父はいかにかなり給へる、しるよし

あらばしらしてたべこと、問へば漸く頭を掻け、白き手をらて黒髪い、顔にかゝるをかい遣りつ、二後
 堂と正廳と隔つれば、心にかゝる外父公のうへ、聞くによしなく侍るかしのなほ憂き事の數まして、
 過ぎつる春日の下流、被首の島に因はれ給ひし、おん身が事を聞くにつけ、見るにつけては胸くるし
 く、夏の日ぐらし啼く蟬の、こゝち裳脱けて朋輩衆に、笑はれたるはいくそ度、已日々々はこの御堂
 へ、内難さまの御供して、参る時のみ遠外に、観る申島の四阿に、わが夫はひとり佇びつゝ、あらん、
 鬼が鳥峯の果てならば、思ひやるのみかくまでに、人しるぬ歎きはせじ、處は同じ苑の申も、鳥とい
 ふ名はあり磯海、ふかき縁は幼稚きより、親の許せし婿夫なれど、君所隔てて給事へ、をりふし顔を
 ぶり合はず、鈴の閑閑の中垣も、結ぶ纏手はありながら、只三指の他人むき、それすら憂きに外父公
 なり、閉君なる方ごまの、家の蠶みに夏瘦の、身はいとゞしく細りつゝ、秋とくらせば丈夫の上、ま
 だ一夜さも難枕、かはら舞子女郎花、そほつは袖の露の身の、こゝに別れて消ゆるとも、又瓊會ふ後
 の世を、遺るにかけて佛菩薩へ、朝な夕なに合はず掌も、合はし盡して頃日は、給仕も得せず局にの
 み、夜あかし泣きて侍りしが、亦この築島なる辨財天へ、埋なき願ひをかけまくも、かしこの人目こ
 この淵、私には参られず、奥深けて潜び出でばやと、思へどそれも毎努々々に、戸鎖しあれば得も
 かなはず、只甲冑の間の物に給れ、出でなばなぞか出でたらんと、わが夫おもへば怖さを忘れ、病

の臥男を脱け出でて、七夜詣づる天女堂、丈夫のうへをいへばさらなり、男婦 恙なく、身したつ
狭霧を吹きはらし、をさまる風も飄々の、松の齢に又千世まして、半七ぬしと後の世の、その後の
世もそはしてたべと、背向もえせで面向の、ひのもの斷ちに、鹽斷ちに、かけてさ斬る結願の、今宵
はからずこの御堂にて、おん身にあひしは辨財天女の、償き給ふにや侍らん。そもいかにして彼處よ
り、水を涉りて詣で給ひし。おのが心の迷ひより、狐貉のわづくれにて、眞の丈夫ならぬかと、
疑へば又今更に、怖さ嬉しき搗てまぜて、走り退きつ、伏し沈めば、半七聞きて嘆息し、結ぶは名の
みの婿夫なれども、生涯その身をまかせんと、思ひ給へばこそかくまで、心を盡せる勸詣で、女十
として夜を犯し、七たびこ、へ通はんこと、浮きたる所爲とはおもほえず、赤き心はしられたり。我
も又、親を思へば身を忘れ、辨財天女を遙拜して、父の厄難除かるべくは、彼首の舟をこ、へ寄せ、
一編參詣なさしめ給へと、夜は池水に垢離を執り、禱る日數は他にたちて、けふの一日は絶體絶命、
天女も感納し給はぬかと、心苦しき彌ませしに、勞れて小霎時目睡む程に、舟は申島に流れ寄つ。寮
來念願をしからずと、籠て飛び乗る小舟に棹さし、これなる御堂へ詣れば、はからずも昔妹子に、
瓊會いつ、縁由を、問へば又われに等しく、潛かに参る丹誠苦行、いひあはせねど合へる氣誠、災厄
消除疑ひなし。しかはあれど、武士の家に仕ふる男女は、私に席を共にせず、況いてやわれは因

徒なり。御身もまた病ありとて、局に籠りをりながら、關を越えて濟び出で、こゝへ詣つるのみならず、吾儕と憂苦を相談ふこと、今はしる人なしといへども、昔もものいふ世の誦、後に人もしこれをしらば、親の罪をますことあらん。とく、下向し給へかし、我もはや退らん。といひつゝ、立つを引きとめて、「頃日の夜の長さ、暮れてまだ間もなきものを、誰に待たる、身なればや、さは遽はしくたち給ふぞ。會話も聞きもしつ、聞かして暫し身の憂きを、慰めんとはおほさずや。おん身は今茲二十二の、年より弱く見え給へど、女子は殊に更け易く、二十といへば馳かしの、森ならなくに年の浪、よるといふ字は嬉しくも、なくて嬉しき君と我、ひとつによらば浦島が、一夜に齡老いぬとも、何かうらみん、夾衣、綻び縫はん待針の、待ちつゝあるをしりながら、心つよし。」と呷たれて、夫もいはきにあらねばや、強面くはえも立たず、「おん身はきこそわれをおもはめ、我は又親の事を、念する故にけふまでも、結ばざりける婚姻を、後やすく思ふなり。かくのみいはば人情を、えしらぬものと恨みもせんが、親に代らば死をだも辭せず。今果に妻あり子ありては、惜しまぬ命も惜しまれて、見苦しき死にさせんに、只身一つの半七は、かかる絆しのなきこそよけれ。縁と時節をまち給へ。」といはれてよ、と泣き沈み、「身を露ばかりも傷らぬを、孝行とこそ聞きはべるに、よしや爹爹の爲なりとも、死ぬるを孝と思召すは、こゝろつよぎの悞ちならん。云號けては妻てふものを、嬖嫌せねば

絆しとならずや、いと強而し。」と怨すれば、半七は今さらに、いひ脱るべき言の葉も、縛ひに立ちかねたり。浩かる處に、前面なる樹立の間より、燈燭の光閃々ときし出でつゝ、前には酒行の提灯もたせ、左右には鞆かけたる、手燭影に途を照らさせ、築島の反橋を、蹣然と足音高く、渡らして來給ふは、玉枕御前に在するやらん。こは時ならぬ物語で、思ひがけすと半七も、初花も周章き、辟け隠れんと思へども、只一條なる築島なれば、橋より外に路もなし。とやせまし、かくやせましと、胸うち騒けばさわぐほご、いとゞせん術なかりけり。

浮名の 婦夫

浩かる處に前驅の女房、手燭を抗けて堂内なる、男女を見て大きに驚き、「且く御先を馴め給へ。堂内に癖者の、潛まり居侍るなり。」と呼ばはれば、玉枕御前は鳥居のこなたに牀几を立てさせ、「曾太郎曾太郎。」と召させたまへば、遙か後方に侍ひける蟻松は、「阿。」と應へて、袴の襷をとりながら、御前へ参りにければ、玉枕御前言語正しく、「此如々々のものありと聞けり。掬め見よ。」と宣へば、曾太郎應て手燭を把りて、御堂の内なる癖者を、一人々々に引き出し、燭を抗けて熟見れば、こは淺ましこの癖者は、外姪半七と、女兒初花なりしかば、且驚き且怒り、「恥を思はぬ大自物、主を蔑り剩へ、親の面へ泥を塗る、淫奔は何事ぞ。」と、罵る聲のいと高く、扇を揚げて打たんとするを、玉枕御

前橋して、「涙禁めよ」と重き仰せに、曾太郎は只齒を切り、握り固めし拳の上に、熱りの涙を
 かゝる。身の怠りに半七も、初花も地に平伏して、置きぞ迷へる草の露、このまゝ消えよと念ずると
 は、玉枕はやく猜し給ひつ、始めより彼のもの共と、しれどもしらぬおももちして、女の帯に手燭を
 抗せし、「それなる癖者面をあけよ」と宣ふになほ恥かはしく、大地に窟づき動きもえせず、そのと
 き玉枕は、曾太郎を見かへりたまひ、「正五九月の巳の日には、缺かぎで詣づる天々堂へ、晝のほどに
 と思ひしに、今朝より勞る事ありて、いたづらに暮せしかば、身のおこたひも物體なく、其裏なれば
 甲夜の間、まるらんと思ひ立ちしかど、女子のみでは影護ぎに、曾太郎を將て來りしは、その癖者
 等が運のきはめ。面はよしやあけずとも、稚きより召仕ふ初花なり、半七なり、今さらに見たがへん
 や。半七は中島に、囚徒となりしと問けるに、けふは百日に及びやすらん。月額の長うなりたる故
 か、浪風に吹き曝されたる故か、思ふには倍す凄れなり。又初花は、痲著ありとて給事を、斷りま
 うせしその日より、いかにノゝと問はせしに、思ひの外におこたひすや、潜びてこゝへ詣でたるな。
 やよ淫奔もの、わが口觀今更に、聞えしらするよしはなけれど、こは曾太郎にいふことぞ。男女の
 密通は、重き禁斷としりつゝも、法を犯す、そはあるまじき事なれども、少きうへには絶えてなき、
 恨ちにはあらぬかし。しかはあれど、半七は觀たるものの、生死有亡定かならず、その身も囚徒と

なりながら、滔かに水を流り浪を感え、こなたへ通ふのみならず、何たのしみの亂淫淫會、不義とやせん不孝とやいはん。絶えて入たる地獄にあらず。初花も又しかぞかし。外父の凋落を外にして、天女の御堂へ夫を引き入れ、靈場を造し祭る、その罪障は五百世、浮む瀧のなとしらすや。この事君に聞えあけなば、彼等兩人が上はさらなり、半之進は一家滅亡し、曾太郎も又無事にはあらざ。然れば彼等が心より、道をしる親類兄弟まで、祀られざる鬼とならんか、悼いてもなほ悼むべし。抑わらはがこの御堂へ、月ごとに参るは何のためぞ。君はさらなり家子老黨、乳を懐内にあるとある、商人草の末までも、安かおとのみ斬りしものを、所も多きにこの靈園にて、稚きより召仕ふ、男女の命を斷たば、天女を恨み奉らんか、將わが身を叩たんか、主の心になりても見よ。彼等もまた親の手なり、淫を蒙り、迷ひを執り、こゝに會せしにはあらざめれど、いひ諱ありともいひ解くによしなし。且初花はいとはやくより、半しに云葉けて、給事の年季満ちなば、感觸をとり結ばせんと、観どもは豫てより、準備をしつるとか、聞きつることもありしかど、いまだ君の免許を得ざれば、夫婦なりとはいひがたし。とても脱れぬ罪人ならずや。初花は稚きより、わらはが使ふ女の子なれば、罪定のんこと論なり。半しはいかにせん、彼もわらはに任せんか。家の家たる曾太郎は、何とか思ふ聞かまほし。二人を憐む理非回白、かかる婦人は世におほく、有りがたきまでに、なき、仰せなりと

も應へかねて、身を悔いうらむ、侄女兒より、親はます／＼面なくも、脱れ得がたき身の恥を、掩ふに餘の袖の露、胸さへいたく塞がりて、畏まりつ、ついるたり。且くして曾太郎は、塵うち拂ひて膝に置く、拳を握り射を張らし、「淫奔もの共うけたまはりしか。凡そこ、に侍る女房達は、武士の女兒のみにあらず。或は坊人浮浪人、或は村長農夫、なんどの、女兒も孫もあるべけれど、武家に給事すれば、禮儀正しく、上さまのこと見習うて、物の善悪も辨ふるに、汝等は續井の譜代、家の政事を奉る、親にも絶えて憚らず、主を恐れぬ大膽不敵、この年來の奉公に、何見習うてかその態する。殊史に半七は、閉居久しき親の大難、その身も配所になりながら、父の生死の際みなる、けふに至つて配所を脱け出で、女子を伴ふ放蕩非法、よしやその身を八裂きに、創り苛みても親の恥辱を、贖ふには得も足らず。今にもあれ半之進が、締の趣を傳へも聞かば、腸熱えて怒りに逼り、いかになららんこれも轉てし。親の名を續ぎ名を穢す、四足兩翼の白徒等に、説き聞かするも穢らはし」と、理誣むる主親の、仰せはちもき身の悞ちに、半七はや、擧げ難ねし頭を掻き、「愚かなる身も親の窮難、わが上さまに打忘れて、女子を伴ひ候はんや。然りとも配所を越えて、この御堂へ参りし科は、脱れんとするとも脱れ難し。但し初花は病を忍び、外父の厄難消除の爲、竊かにこゝへ詣つる折は、からずしてこれと逢ひぬ。さればその罪も、半七より軽くやあらん。」と、いひつ、傍を見かへれば、

初花は目を拭ひ、「半七ぬしに過はなし。爹爹の越度を許さるべくは、彼首の船を吹きよせて、隠見せ給へとて、天女を祈念し給ひし、誠とゞきておのづから、舟中島へ寄りしかば、そのよろこびをまうさんとて、こゝへに詣で給ひしなり。身を忘るゝも親の爲、そを猶憎しとおほし召さば、初花を罪なはして、半七ぬしを許さし給へ。」いふ初花は女子の事、その恨ちもわれより輕し。只半七が首を刎ねて、助かるべくはこの女子を」と、いはせも果てず曾太郎は、血ばしる眼に聲も突く、「いはれざる品定め、罪輕くとも重くとも、賞罰は君の隨意、其を汝等に問ひ給はんや。縦ひ、密會せず。」といふも、柳下恵にあらざりせば、争でかは聽さるべき。密夫淫婦は輕重の沙汰に及ばず、覺期せよ」と甚く罵り、肩衣の腋引き延ばしつゝ、形を改め地に手を著き、「君夫人へ申し奉る。願はくは罪人等を、曾太郎に賜はらば、立所に首を刎ね、しかして後にこの趣を、殿に報知へ奉らん。偏に許させ給へかし」と、遮護ふ親は子どもらに、たほ生恥をかかせじと、思ふは慈悲と玉枕御前は、思ひくみつ頭を掉り、「いなそのことは許しがたし。最重き罪人は、その場を去らせず刑すること、續井の家風たるよしは、婦女子なれども、われよくしれり。しかりとも天女の御堂近く、血に穢さば、その祟り脱れがたけん。よりに思ふに、その罪人等はそがまゝに、この池水に柴浸にせん。如此するときは家法を破らず、天女の御堂も穢すに至らず。この旨聞きては彼のものどもは、半ば死してぞあらんすら

一人死すれば、靈と云ふ。半七初花が魂、この池水に漂へ、八時よくうけたまはれ。汝等處に、いじつら
 らで、親を思ふ誠より、明を踏えたるものならば、いと情むべきことなりかし。主君にこれを情むに
 皇天いかに憐れまごらん。一旦の野辱を及び、魂遠く大和を離れ、親に代りて風流士の、寶刀の往
 方をたづね求めて通ふならば、忠孝共に至からん。そのときにこそ萬患の、浮名を雪むる池水に、魂
 神再びかへれかし。親は落居、子は囚はれて、いたづらにたつ月と日を、百日千日繋ぬるとも、風流
 士を索ね出す、腹は絶えてあるべからず。さるるを汝等法を犯して、池水に沈められ、たましひ自在に
 天外を飛び渡り、寶刀の在座する事あらば、生けるにましたる幸ひならずや。又事之進が事は、と
 もかくも君を諫め奉りて、翌の命は保たすべしと、わらはが思ふことよしを、彼等が死して後の日
 に、一篇の題向して、得さする事のあるならば、告をもしらせよ衆婢。こゝろ得たりや」と謎に、
 かけて釋かす轉めの、索よりもなほ身を縛むる、思我には今、いよのめた 圖り、斬らる、よりなほ胸にこたへ
 る、半七初花いへば更なる、曾太郎は只練貫の、鬘斗目の袖に感涙を、裏みかぬれば列み居たる、女
 房達に女の輩、はした物ごへもろ共に、堂に跪を濡らしけり。且くして玉枕御前は、女の童に齎した
 る、銀砂物を聞かして、蟻松に對はせたまひ、「やよ曾太郎、樹のごとく辨財天へ進らせんとて齎した
 る、白銀十枚こゝにありしかれども、罪人に奪れたれば、今宵の参詣を止めなん。さるときは、こ

の白銀も藏れたり。彼等を水中へ沈めんに、原石なくては稱ふべからず。この白銀は究竟の銀石、兩人が袂へ納れさせよ。十萬徳土は遙けき首途、死しては冥土の路費とも、なるべきものぞ。」と外々しく、法施の銀を曾太郎に、とらしつゝ、又宣ふやうに、彼等既に罪定まれば、死したる者に異ならず。人は最期の念によつて、永く生を繋ぐとかや。云號けたる婦人の終を、今生に結び果てせば、未來極樂の餓鬼と云りなん。死後としいへば今許す。婚姻の杯せば、三三九品の淨上に生ぜらる。この清水を酒に擬へ、親も許して得させよ。」と仰すれば、曾太郎は面を背けて鼻うちかみ、這奴等はいかなる月と日の、下に生まれてかくまでに、高き恩恵を受くるらん。推辭み奉らんは物慣なし。冥加に歸る罪人なり。」と、應へ申せば、腰婢なる、龍田吉野がこゝろ得て、天女の御前の淨手鉢、楕杓を長柄高桶にて、婦夫を結ばす水飴、言祝せねど颯々の、松風の音に夜は深けたり。玉枕これを聞くと、此地に似つかはしき夫婦なり。かくては迷はで佛果を得なん。やよ曾太郎、長寛講して更閉けたり。此の罪人等をもろともに、かしこの岸より沈身に被けよ。こゝより見ゆる船形の、崖にうち中て骨を砕かば、なか／＼にこゝちよけん。舟の目當をたがへな。」と、仰するは彼の舟に、要せよとなりと曉わつづ、立ちかゝる觀の貌、これ見了めかと初花は、うち仰ぎつゝ、半七も、もろ共に合はす掌は、主と親とに辭別、物いひたさをいへばえに、磐樟舟の流し雛、襟上左右に掻い囀む、曾太郎は荒やかに、岸

より礮と衝き落す、水底ならぬ船の中、白銀さへに投げ入れて、浪のまに／＼推し流せば、玉枕御前
 はおん聲高く、「罪人等が死骸浮きあがらば、再び岸へよることあらん。曾太郎はこの夜の中に、水門
 を開かして、下狭川へ流しやれかし。いざ歸らん。」と徐やかに、牀几を立たせ給ふにぞ、銀燭畫燭
 續ぎかへて、手に／＼抗ぐる燈火に冊く夥の女房たち、前驅後従も嬬やかに、立ち並びゆく夜の花、
 中に強顔き蟻松は、易へぬ採に子を棄つる、浮世の藪や行植の、椀も檜も隔てねど、闇は善悪なき船
 の中、日送る半七初花が、火光日當にふし拜み、繫がぬ舟とゆく水の、往方は更に定めかねて、秋の
 夜長く歎くなるべし。

再編占夢南柯後記序

耶。人間萬事莫_ニ非_レ夢_ニ者_一。因_テ命_ニ是_ノ篇_一。以_テ覺_ニト蒙昧_ヲ云。

辛未初冬朔

玄
同
陳
人
識

唐人の詩を賦し文を作るに、掄子を左右の壁に貼して、常任坐臥にこれを見、これを吟じて、も
 し一字の損益あるときは、必ずこれを改むと云ふ。しかるに余が毎歳の著編は、只速かに成るをもて
 利とす。このゆゑに絶えて一とたびも原本を更めず。はじめ五六日、まづ時代を定め、地名を卜し、
 人名を撰み、許多の脚色を巧み出し、しかして藻を綴るに、筆は手の動くに任し、文は意に出づるに
 任して、且くも止まらず。もし手爾遠波のうちかさなりたる、將悞覽あるときは、粘してこれを改む
 るのみ。余嘗て蠟燭に一風をふす。文は雅俗をまじふといへども、雅言を好まず、これ婦幼に通じ易
 からざる故なり。又唐山の俗語を切りぬきにせず。これ讀む者文字目なれず。讀むに隨つて煩はしけ
 ればなり。但その態、雜劇に似たるあり。しかれども雜劇と同じからず。又雜劇に似たるあり。し
 かれども雜劇と合するが如き、件々里耳に入るをもて旨とするのみ。今年著はす所、明年は著忘る
 こゝをもて年々の著編、指を僂ふるに至るといへども、未だ嘗て勞を覺えず。所云著者蛇に當るる
 の類なるべし。

玄 同 陳 人 再 識

三七百餘
第三篇 占夢南柯後記卷之五（後軼第一）

東都 曲亭 馬琴 編次

附 言

凡そこの物語は、天文十九年にはじまりて、同じき二十一年に盡る。前後僕かに二年を經たり。蓋し前軼四卷に説くところ、天文十九年冬十月六日、赤根半之進、父子夫婦、蟻松曾太郎等、浪速の法善寺に、考 妣の菩提を弔ひし事、敗鐵介が養母晚稻が夢の事、孝子全介千日墓に施米を獲て、はじめて父の仇人を知る事、敗鐵四五六、暗に全介をたすくる事、蟻松曾太郎面を犯して、順勝を諫むる事、赤根半之進君命を受けて、米谷山へ赴く事、樺本の林原に、全介赤根半之進を埋伏せする事、晚稻自殺して、始めて素性を物語る事、赤根半之進更に主君の小刀を獲たる事、四五六、介夜米谷山なる木精塚を發く事、順勝怒つて半之進を砍らんとする事、半之進塾居の事、順勝曾太郎に命じて半七を池の中島へ誦す事、辨天堂に半七初花にあふ事、玉柱御前陽く法を正して、陰かに半七初花を助くる事、すべて十回、池の中島の段、前軼四卷こゝに盡る。この篇は松平作が

事に起りて、をさく半七初花が編束を説きたり。今登きて二軼(本書必要なきがゆゑに軼を分たず)とするものは、
例の書肆が所爲にこそ。

秋雨の笠松一七

半七初花が事、その曉に、曾太郎より消息して、密かに半七の進に告げにければ、赤根が宅更に
一斛の雲苦をまき、半七の進が憤れはさらにもいはず、三勢はいとしく、苦しきうへに勤を苦し
め、わが子の事をおもひやるに、玉枕御前慈悲深くおほしままに、半七初花は密かに命を助けられ、
池の小舟にうち乗せられて、水門より脱れ出でたりと聞けば、せめてものことにおほえて、又慰む
るよしあるに似たれど、さしつまるほ良人の上なり。限らざ給ふ日數もきのふにて果てたり。けふは
いかなる仰せやあらんと、問ふかたもなき物思ひに、眉根をひらく隙のなれば、置むとすれど私卒
飲火なんどのはや知りて、彼處に集會ひこゝに圍居て、主の陰事いふもうたてく、もたれ鞋に身を倚
せかけて、痞をしかと押ししてをり。浩かる處に腰元に使はるゝ、女の手邊はしく走り來て二園花さま
庭園さまの詣來たまひぬ。と告げにければ、三勢忽地頭を擡げ、こはこゝろ得ぬ、やうこそあらぬ
まゝ客房へ誘引ひてよ。」と急がしたつれば、應へもあへず走り去く程に、三勢は等取つて髪懸き
舞いで、帯を結びそへなどして、縁頼傳ひに客房の、障子引き開けつゝ、裏に入れば、園花は八丈絹

を京染にしたる袴衣に、白無垢の衣二つばかり下駄にして、いろくくと揃飾したる袴衣に、練の帽子を戴き、夏山は同じ絹の色異なるに、仁田出練の緋裏衣したる袴衣に、白無垢の衣二つか三つか襷ねて、しごらの練貫に緋の裏なる袴衣の下に、僅かに三歳児の平太郎が、蒸睡せしむ掻き抱けるが、共に帽子は素かり。従者は、後門の裏に憩ひるとおほしくて、庭の桑垣に、真なたより立てかけたる練箱の油單、垣より上に些し見えたり。當下三勢は、園花夏山等に對ひて、遂に秋の冷やかなる安否を訊問ね、恙なきを祝しつゝ、扱いふやう一家公裏に殿の勘氣を、蒙らせ給ひてより畏みれば、親族たりとも訪ひ訪はるゝ事をえせず、百日餘り中絶えたるに、けふはいかなる事のありて、新婦御さへ伴うて、俄頃にかくは訪はせ給ふ。物まうでのかへさにや、いと綺羅々々しき打拵にて、來給ひけり。と憂き事を、憂しとはいはばで外々しく、詰る底意を推量る、園花は心にか、わぞ、而前にはいひも咎めず。一敷ふらねども家公の側室、平作が母に侍れば、かばかりの衣著たらんとて、驚わすとは誰かはいはん。諸共に籠り居ぬ世の務めは疎ましけれど、それも良人の志に忤らざるとの變化性、心苦しさを推し給ひぬ。特にけふは限りある、日數も他に果てたれど、寶刀の往方はしれざるにや。加藤時夜、事の半七がこよなき懐かし出したり。と、藩中の風聞。人の目には戸も立てられねど、聞くるよしたき良人の閉門。この上に又いかなる祟りやあらんとうち歎けど、歎くのみなる女子のさ

ひなき。兒子平作は、いぬる月より瘧病にて、今に差えず、寒熱する病著には、何商議はらんとまもなし。只夏山とさし對ひ、とやらんかくやと思ひつゝ、思ひかねたる物詣で、かかる時には殊更に、憑むは神徳佛方と、春日の社へ月詣り、させる驗はなけれど、家公なりおん身なり、恙なく坐する事、これも春日の擁護ならめ。來よとの使は給はらねど、半七が事聞けばなほ、君所の沙汰も心ちとなく、賽を幸ひに、夏山侶れて推懸け客、物思はしき折なるに、心なしとな袂し給ひそ。打籠りて坐する故か、顔の色も常ならず。半七はいかになりけん。辛く命を助かりしは、玉枕御前の賜にて、哀しみの上の歡び。』と、人もこそいへ姉御前の、鞆を隔てて癒きを搔く、御心の申推量れば、いと痛まし。』と半ばいはせず、三勝は眉根を擗め、『なう園花どの、半七々々。』と名の隅の、圓くなる程宣へど、彼も又良人の肉身、おん身が生さぬものなりとて、さのみ憎けに宜ふな。勿論半七が不義不孝、こはいはでもの事ながら、その水元は御身が姪御、初花どのの淫奔に、引きこまれたるわが氣の悪かさ、智者も勇者も色には迷ふ、狐が落ちねばなかに、蕪の人には得もならし。いひ出して、給ふな。』と、些しの事も氣にかけて、日來に似けなく角芽だつ、茨の刺を柳の絲に、無理を通して、ち微笑み、一姉さまの何宣ふやらん、吾儕はおん身の妹ならずや。しからば侄の半七を、生さぬものと憎むべき、恨みがあるや、聞かまほし。』「いな恨みがあるかなきはしらねど、妹にもせよ園花ど

の、おん身が兄公は二代の執柄、氏といひ祿といひ、大和に聞えし名家の末、吾儕はおん身が姉なりとも、父は盲目、この身は舞妓、賤しい母が氣を棄けたる半七が淫奔を、笑ふとならば初花は、淫々に似ての淫奔か、叔母御に似ての淫奔か、おん身が心に問うて見たまへ、異父の姉妹でも、生涯まかする夫はひとつ、衰りめに榮りとやらん、日來の妬さを匿みあへず、新嫁御前侶れて被飾らせ、半七が事いひに来て、吾儕を夫に疎ませて、御身が母屋へすわらんとは、憑もしい妹君、かかる時には殊更に、吾儕も心つよう侍り。有つべきは只妹にこそ。」と。嘲み笑ひつむかひ火を、熾きつけられて園花も、忍ぶにえたへず面根やかなる、襦衣の衣紋かきあはし、「心得事宜ふかな、夫ほしさの僻事せば、少かりし時五六年、思ひ細りて病みはせぬ、花ある時だに藏ひたる、心は絶えてなきものを、諺にいふ諺文を、出し後れて四十あまり、齡もすでに小動ぎの、いそお近きに置かほしはなく、大難執りて何かはせん、兒孫の見るめも憂ぢ給はずや。嫌なればとて埋なきかすく、妹にはいふものか。」「應いでは。」と、膝立てなほせば、園花も思はずに、小膝す、むる。痛みに、夏山は後方より、しばし、密と引く母の袂も、只まろれと思ふかひなく、揮り放されて又携り禁め、「母さまこれは怪しからずや、腹たたしき事ありとも、閉ぢ絶められて坐す、母屋へ來まして壁高に、靜ひ給ふは大人氣なし、倚罕なる胞姉、賢な貞婦と譽められし、松の操を今さらにも、辱へて逃に仇なく、顔に

楓を見せ給はば、血で血を洗ふ世の禱り、影護しと後に只、悔しく覺す事もあらん。外伯母さまはいとゞしく、氣さへ心も結ほれ給へば、憎からぬ人を恨み奪ちて、生常にはあらぬ物いひごまも、有るべき事と聞き流し、懲めてこそ善道に、訪はせ給ひしかひもあれ。晴外伯母さま、眞の範姉妹に坐せばこそ、いふまじき事をも聞え、問答へまじき由をも問答へて、うち頼たし給ふものから、それも隔てぬ誠は誓一、世にいふ親の泣き聚りと、思ひ返しに許させ給へ。と、勸解びる健氣さ、恰割さを、こゝろに響むる園花と、背あはせの三勢は、見向きもやらず冷笑ひ、母御ひとりではいひ負けんかとして、加勢に來ませし新婦御寮、口狀はいと爽やかなり、吾儕も舌を巻きてぞ侍る。半七と云喚けし、初花はおん寺の姓御前、彼の淫奔に似給はば、平作ひとりも得も守らじ。早う子もちになり給ひて、心憂くこそ在るらめ。と、取りも著かれず嘲哂せられて、夏山は忽忽に、袖に夕陽の映しながら、袖は涙の塵催ひ、又いふ構もなかりけり。論は無益と園花は、兩帯引き締め立ちあがり、夏山朝も宜ふなし。病病する平作に、留守さしたれば心もとなし。いでれたたまへ。と急がせど、なほ立ちあかぬのをあらやかに、引けば忽忽落し覺されて、ふと覺る平太郎を、袖に抱き締め敷きつけても、泣き止まぬ子にせんすべなく、漸くに身を起す、夏山よりの園花は、こゝろ母屋に造れども、留まりかねし

孫郎、縁頼の障子引き開けて、出てんとすれば外面に、走りちがふ人音して、「君所よ、おん使さむらふ。」と、呼門へば、吐噓とばかり三人が胸に、犇と答へて立ちとまる。園花は今更に、歸るにもえ歸られねば、夏山を見かへりつ、「おん使あり。」と呼門ふ聲を、聞きてはいかで歸らるべき、今一時が家公の、生死定めにおはするぞ。此方へ來ませ。」と豫てより、案内しりたる上の宿所、先へ立ちつ、縁頼より、出居の杉戸露ふかき、替うち合はす夢の中、あくるもいとゞ佞びしらに、納戸のかたへ身を避けたり。

秋雨の笠松(下)

思ひ定めしことながら、三勝はいとゞしく、心も心な、あなる、牀の懸物引きなほし、物いそがはしくとり納るれば、半之進は衣裳を整へ、障子左右へ開かして、式臺まで出で迎へ、今かノと侍つ程に、庭門陝しと従者等が、舁き入る、轎子を、敷筵の半ばまで、横さまにうし著くれば、半之進夫婦禮儀正しく、轎子の戸を引きあけつ、と見れば使者は別人ならず、赤根が二男半作たり。享年ここに二十一、輪稚木の二代の笠松、身長高く相貌秀で、色いと白く又蒼く、病中これ月額は、熊毛の如く黒けねば、眼隣さへいかめしく、案湯の肩衣長袴、轎子より先づさし出す、刀を縁に、突き立てて搖ぎ出で、彼首是首を信と見て、「うち絶え候。家尊大人、外母公も恙なくや來する。親子の恩義

はこれ私、痲病にて籠り居れども、君命のがるゝに所なく、御使を奉りて、笠松平作發向せり。やよ從者等、汝おのゝ退きて門外に且くまで。とくゝといそがし立たし、誘赤根ぬし、役命なれば上座を、許し給へしと刀引提げ、牀の間を背になして、居長高く無手と坐す。扇つかひも重くれし。殊なる氣色に三勝は、呆れ果ててうら暗り、「君所より御使」と、いかめしく呼門ふを、何人ならんと思ひしに、此方の二郎の笠松どの、よしや君命なればとて、親を親とも思ひなしせぬ、虚物體は痲病の、熱にや浮され給ひけん」と、いふを見かへる半之進、「無禮なせそ。」と推し黙らせて、恭しく頭を低け、「けふの御使は豫てより、心まちいたすといへども、閉居の折なれば設けもせず、ありの隨なる管待も、乃ち守へ憚る質素、仰せの趣うけたまはらん。」と、おそるゝ席をす、むれば、笠松扇を膝に衝きたて、「赤根半之進譚んで承れ。汝いぬる二月十七日、米谷なる木精塚を發き、風流士の太刀を、とり出すべきよしの、おん使をまうし請ひながら、太刀は失せたりと偽りて、これを進らせず。前後二百日に近き光陰を、いたづらに送りしは、偏に主君を侮るに似たり。そのみならず、長男半七は、配所を脱け出でて、淫樂を事とせり。これ人たるものの所行ならんや。よりに件白徒をば、柴波の刑に行はれをほんぬ。併しながらその罪父子の間にあり。此犯すところ輕きにあらねど、格外的慈愛をもて、今日切腹せしむる條、仰せの趣件のごとし。」と、述べもあへぬに三勝

は、聞くにも得業へずはふり落つる、涙にかすむ目を拭ひ、いと恨めしきに平作を、つくんど見えて
哽せかへり、「親の危窮を身にかへても、まうし寄むるは子たるの道、さまで孝心あらすとも、父が氣
刎つおん使は、推辭むとも推辭まるべきに、選り擇まれしを身の幅に、柄を推して親の生を、踏みあ
らしに來る氣剛もの、專に逆の世なるかな。妹は姉を信づかしめに、新婦と孫とを將てぞ來る。子
は又親の死を疑す、使に立ちて天をもちおそれず。幼稚きときにはかくまでに、東々しとは思はざりし
に、園花のみか、その子まで、心神天魔に奪はれけん。使に立ちたする君も君、形なき身は惜しからね
ど、昔には似ぬ當家の成敗、伍子胥死して吳王滅び、范增去つて楚國傾く、世の常言も今更に、思ひ
やられて哀しや」と、世を恨み、又身を憐れみ、一聲高く泣き沈めば、平作はうち仰ぎて、呵々と冷
笑ひ、「あな日説いたり故事來歴、直躬が身を代へんとて、親を救うて名を取りしは、鶴ち神聖の取ら
ざる所、遠き漢土はとまれかくまれ、近く本朝保元の、むかしをいへば左典廩我朝朝臣、父房義を諒
したる、敕命なれば是非に及ばず。賞は臣の求むる所、罰は君の行ふ所、豈私をもて論ぜんや。こ
の故に男子たるもの、家に在つては親に事へ、出で仕へては縁に死す、忠孝兩つながら全くし難し。
よしなき怨言傍痛し」と、飽くまでに挾すれば、半之進亮齋と笑ひ、「保元の顯道は、先哲すでに
これを論ず。上は兄弟鬩に聞ぎ、下は親子仇をなす、綱紊れて人道立たず、わが君も又抑此なり。

使者の人體心得がたし。全く主君の御僻事。」と、いはせもあへず眼を睜り、「臣として君をさみせば、これを忠義といふべきか。さる馬鹿もの之主としらば、縛り頸刎たれぬ前に、袖を拂うてなどて去らざる。言承けせぬは命を惜しむや。」「いな争で命を惜しむべき。」「然らば仰せを推辭まる、や。」「いな争で仰せを推辭みまうさん。」「推辭ますば切腹の、用意々々。」といそがせば、半之進座を占めて、泣き沈みたる女房を、估と見やりて、「やよ三勝、豫て覺期の上なるに、とり亂すは武士の妻に似ず、縁高の折敷肚斷刀、とくノゝもて。」と焦燥つにぞ、是非もなみだをかき拭ひ、かき拂ひても沸きかへる、引提の水の湯となれど、さむるに早き夢の世と、思へども又思ひかねて、漸くに身を起し、「國遠ければ有斯りとも、お通爾五郎はいかでしろべき。せめて半七が宅にをらば、ちから草ともならぬしものを、たまノ、後房に妹はをれど、良人の末期をよそにして、面出しせぬは鬼か蛇か。わが腹貸さねど只ひとり、こゝらにをれども赤根どのの、子といふのみなる讎敵、とてもかくても吾儕のみ、はかなく物を思へとて、出雲の神や結びけん、今にはじめぬ悪縁の、絲の亂れをいかにせん。」と、溝然として納戸の方へ、去かんとするを遣りも過ぐさず、平作やつと聲をかけ、「内室且く留まり給へ。肚斷刀はこゝにあり。」と、いひつゝ、腰に懸る扇を取つて、半之進に投げ與ふるを、膝へも落さず右手に受け二扇を以て刀とは。」と、問へば平作膝すり寄せ、「武作法によつて自殺を許さるゝは、眞の武士に

あるべき事、縛り置劄たるべき、罪犯なれども當家の家、建ち一等を降されて、古例に任する弱腹、介錯は親子の好身、平作につかまつれ。」と、亦是れ君の命なり。」と、説き示せば半之進は、扇をとり直して嘆息し、「その罪にあらすといへども、志を述べるときは、君の非を認むるに似たり。實に謙言容れられざるをせる故に、米谷山にて肝かき切り、君に曉らせ奉らんと、思ひしことも扇の背、體離ひては今こゝに、死して益なき身の薄命、これまでなり。」と、もろ拙き、扇を取つて戴けば、するりと引き抜く平作が、刃の光に三勝は、覺期しつゝ、も忍ばれず。はしりよれば笠松は、「妨げすな。」と長袴の、襷蹴返して寄せつけねど、左手へ繞り、右手に携るを、半之進見るに得堪へず、妻の帯際引き戻し、膝におさへて動かせず。いざ介錯と合拿すれば、「健氣なり觀念あれ。」と平作は、父が背後に刀尖を、肩より閃りと突き出し、又閃かして引く刃を、とり直しつゝ、わが肝帯の、結目のあたりを弗と断れば、はらりと釋ける帯とともに、鮮血さつと瀆り、大腸小腸長やかに、はふり出づれば笠松は、暫しも得堪へず刃を捨てて、響居に撞と倒るゝ音に、倍と見かへる半之進は、なか／＼にうちも騒がず、「孩兒ふかくも謀りしよ。」汝こゝへ來つるはじめより、血色の常ならざる、ものいふ毎に呼吸繁きは、深癩負ひぬとしりながら、そのせんやうを見つるなり。父に代りて死なんと思ふは、子の志なるべけれど、汝には、笠松氏を言がせしかば、わが子にしてわが子にあらず。實父に孝を盡す

とも、養家を斷つは義にあらす。よしなきことをしてけり」と、聴く察する言の葉も、いまぞ散りゆく子のために、恩愛の涙落りかゝる、膝も放あば三勝は、慌忙き身を起し、平作を見て吐唾とばかり、「氣づよういひしも折れ易き、璽の簀戸の落ちてこゝろも隠れ髪、長き別れになりけるか」と、哽せかへりつ、やうやくに、抱き起せば平作は、眼を睜りて息を吹き、「爹々公外母御前假初ながら、心にあらぬ悪言を、さこそ憎しとおほしけめ。なき身と豫て思へども、はじめより明白に、主君の内意はつけ難くて、親を罵り死を促せしは、實事ならねど五百生、口なきものに生まれやせん。平作がけふの自役は、全く養家を斷つにあらす、只是れ君父の爲なり」と、いふ毎に流れ出づる、鮮血の上へ俯伏しに、仕れんとするを三勝は、昔より抱き留め、「やよ平作どの、焦燥ち給はば危からん。いふ事あらば聞きもせん、且く心を鎮め給へ。虚言なりとはしらすして、鳥獸に比へつ、いひ罵りたる女子の淺はか、家公の子なるもの、かばかりの志なからんや。さぶなかりけるわが口の、今はなかなか恥かはし。妹は何處にをることぞ、夏山御前はまだしらすや。親子夫婦一生の別れともなるべきに」といへば、平作頭を掻け、「母にも妻にも豫てより、覺期さして候に、今亦こゝに泣きまつはれては、おのが黄泉の障りとならん、只うち捨てて置き給へ。抑此度父兄の厄難いかにもして、救ひ進らせんと、千々に心を苦しめても、と淺ければ謀畧なく、けふと暮し翌とあかせば、はや限りあ

る日數も盡きたる。その夜兄父は濡衣の、なき名を立てしを親をおもふ、誠よりして早天の、憐み給へば幸くして、命に意なしといへども、これもまた父の罪をやまさん。所詮平作が命を捨てて、父兄の罪を贖はんと、思へどもわが君に、見參かなはぬ瘡病、とさまかうさま思ひかねて、母と妻とに趣意を告げ、親の歎きと吾妹子が、涙を親に擲り流し、たゞほつ／＼と遺傍に、通符筆を染めたるか、八聲の響も亂れ啼く、曉方に思ひもかけず、奉輪到來火急の召状、病を忍びてそがま、に、しごとく、參れと、仰せの趣心得がたく、取る物を取りもあへず出仕せしに、君邊近く召しよせられ、汝を呼ぶ事別儀ならず、是れより直に、半之進が宿所にいひきて、父に追腹切らせなば、笠松の家は恙なげん。否と申さば汝も脱れず。罪の次第は如此々々と、仰せうけたまはつて驚き入り、爰にて死なば萬に一つ、父を救ふに至るべしと、思ひ決めて此とも懸がす、主命には候へども、上天子より庶人まで、孝をもて國を納め、家を調へ身を修むるに、親に話腹切らせよと、子に仰するは、之を得ず、且半之進元來罪なし。忠臣を不忠として、その子に討たし給はんには、續井家の斷絶は、さらに難をのぐらすべからず。只願はくば平作が、命をめされて父と兄が、罪なき罪を許させ給へ。君のほとりを穢し奉らんは憚りあれど、事急なればかへり見せず。申さん由は只これのみに候しと、回答へも果てず、懐剣を引き抜きて、左手の肘へ突き立つれば、盾が君大きに驚き給ひ、早りたり壯俊、願勝

が宸意を知らせん。その刃を、引きまはしそ。と、達はしくみづから、某を留め給ひ、胸臆を窺ひて、實ふやうにいぬる頃、われ赤根の妖氣を見て、武をもて是れを鎮めんと思ひしかば、風流士の太刀をとり出すべきよしを、老臣どもに説き示せば、曾太郎はいたく諫め、半之進は諫めず。わが刃を犯せし刃をどうて、赤根へ赴きしは、彼のもの被處に自殺して、主を諫めんと思へるよし、實に半之進が契つて、とり遣したる一封の、遺書によつてはじめて知覺し、風流士の事は思ひ絶えたれども、故なくして半之進を許すときは、家法これより紊れやせん。かくいへば頼勝が、身の非を飾るに似たれども、臣として君に勝つを、いかに赤根が本意とせん。且くこれを推し絶めおきて、又せん術もあるべきにと思ひしが、わが宸意をばしらすして、半之進は世を憤り、もし自害する事もやと、思ひ過ぐして半七を、池の中島へ捕へおきしは、恩愛の辨を被けて、半之進が自殺を禁めん、爲なりけるにおもひきや、半七は又親を、思ふあまりに法を犯せば、罪磔死難しといへども、玉就がさひんくしく、彼等夫婦を延したり。然るに限れる日數も果て、暫たに半七が濡衣の、なき名さへ立てたれば、今更に半之進を免されず。さればとていつまでか、罪なきものを屈めおくべき。病著に臥したりとは聞きしかど、赤根が二男半作を窺かに召びて、わが思ふ旨をその父に、告げさせばよとて後鎮に召しよせ、言を設けて試みたるに、親の危窮とこゝろ得て、わが南無に託かき切る、孝心勇敢壽すくな

し。惜しむに堪へたる壯俊なれども、その深痕では助かりがたけん。しかはあれど、早めて殉死すと思ふな。汝父に代りて死するをもて、一旦いひつゝるわが意も違ち、半之進半七が罪免すべき道を得たり。せめてそのまゝ、苦痛を忍びて、實父の宿所へすぐさに起き、潛やかにわが意を傳へ、親子夫婦一生の離別をもせよかし」と、丁寧^{ていねい}に仰せ下されて、几帳^{きちょう}に被けられたる練^{ねん}を、自ら取つて平作が、臍口^{せきぐち}を結ばせ給ひ、感涙^{かんだい}數行に及び給へば、君恩^{くんおん}忽地^{いつち}身に溢れて、申すべき言葉もなく、只伏拜^{ふくはい}、伏拜^{ふくはい}、涙にかきくれやうやくに、遠侍^{とほざむらい}まですべり出で、病再發^{びやうさいはつ}と披露^{ひろう}して、心利きたる私宰^{わたくしさい}某^{なにか}甲^がを招きよし、ひそかにことの趣^{おもむき}を、母と妻とに告げさせつ。病中^{びやうちゆう}の使者^{しや}なれば、馳^ちて橋子^{はしこ}を許され、親^{おや}の家には來にけれど、主君^{まぬきみ}の恩命^{おんめい}を他人^{たにん}にしらせじと、思ふが故に、明白^{めいぱく}には演^のべも傳^{つた}へず、親^{おや}に對^{むか}ひて法外^{はふぐわい}なる、舉動^{たるとうどう}を早曉^{はやあき}りて、君命^{くんめい}を重んじ給ひし、室^{むろ}に父は父なりけり。昔^{むかし}がしれざる兄半七^{あにはんしち}、周防^{すおう}なる姉弟^{あねがへ}へ、便りもあらば平作^{へいさく}が、今果^{いまは}の一旬^{いっしゆん}傳へてたべ」とりわき悲^{かな}み進^{すす}らすは、母^{はは}の上妻^{うへつま}の事^{こと}、僅^{わずか}かに二歳^{ふたさい}なる平三^{へいさん}郎^{らう}を、外母^{あはは}御前^{ごぜん}孫^{まご}と歸^{かへ}して、生育^{そくよく}つ後に密松^{ひそくしょう}の、家^{いへ}をつがして給^{たま}はれ」と、いふ由^{よし}もはや秋蟬^{あきせみ}の、聲^{こゑ}かはりゆく秋^{あき}の森^{もり}に、三勝^{さんかつ}は應^いへんと思^{おも}へど胸^{むね}の鼓^つくるが如^{ごと}く、響^{ひび}つ響^{ひび}つ泣^なき叫^なべば、奥^{おく}にもよ、と聳^{こも}立てて、泣^なく園花^{ゆゑな}に真由^{まゆ}が、抱^{かか}ける見^みら友^{とも}首^{くび}して、親子^{こさん}三人^{にん}輾^あび出^いで、左^{ひだり}に右^{みぎ}に携^たれども、禁^{とど}めあへぬは無常^{むじやう}の風^{かぜ}、消^きえなんとするわが子の體^{てい}を、見^み果^はて

も得せず園花は、身も浮きぬべき船の雨へぼしけなる笠松を、萬歳とまで言祝ぎて、そだてて令妹は二十一、初孫早く擧けても、まだ一幅の附紐も、まほし合はせがわろければ、結句短き親子の縁、自殺のよしをしらせしより、新婦も吾儕も諸共に生きたる心持せざれども、只臨終にあはばやと、思ふ心を鬼にして、孫携へて來は來ても、端なく出でなといひこしたれば、亮隔一重を生死の境、もの苦しけに宣ふを、聞いて居る母女房は、共に刃に腸を、斷たる、よりなほ苦しきの、やるかたいかで侍るべき。姉君には三人の子あり、吾儕過世のよからねばや、只ひとりなる男兒の、武藝文道孝心まで、人なみに勝れても、亦人なみに勝れたる、天折しては何かはせん。その身一世の孝行を、けふ一日に盡すか。」と、かへらぬことを返す、口説きつ、咳き入れば、背捺らんと思へども、ちからだになき夏山は、「母も痛ましわが身はつらし。姉さまには先だちて、はやく夫に見えても、四年限りかとうしほの片鶉、翼は手向の草の原、露おく袖と褌たんよ、共に死なして給はれ。」と、良人のほとりにおとしたる、刃をとらんとしたりしかば、三勝園花傍より、抱き禁めつ、引き退けて、「死なんと思ふは、理なれど、乳だに離れぬ平太郎、せめて母親あらんには、成長るまでいかばかり、身の幅廣く思ふべし。死ぬるのみ貞女といはんや、絶えなんとする夫の、臨終正念す、めつ、後の世弔ふこそ貞女なれ。」と、いひは論せど母も外母も、涙にわかぬ歎きの數々、一なう園花どの、嚙にはいと口きがな

く、いひ罵りしに腹もたぢけん。かくあるべしとしらぬ身の、とても脱れぬ良人の運命、然らば妾も共に自殺して、赤根の家はけふより絶えなん。妹は側室といひながら、笠松の家をれば、平作夫婦この見まで、縁坐の尤めあらざじと、思うてこれまで争はぬ、妹といへど義理ある人へ、無理をならべし悪言は、しばしもこゝに置きともなさ。かうなるとするならば、よし歸らんと宣ふとも、引きも留めておくべきに、夏山どのまいといたう、腹だたくぞありつらん。さても面なし許してよ」と、勸解びる姉より、勸解びらるゝ妹と顔はなほ面ぶせ、「物體なきこと宜ふな。妹に隔意のあるべきか。始めよりかうくと、告げ進らすべき事ながら、主君の内意平作が、忠孝を他にせじと、思ひしのみの買詞、心になかけ給ひそ」と、いひ慰めつ慰められても、慰めかねし愛別離苦、二歳兒も蚌がしらせてや、母の膝より這ひ下りて、只片息なる父の顔を、さし覗きては「爹爹」と呼び、又覗きては「阿」といふ。是れはや親と子の顔の、あはせ了めとしりてかと、各目と目注はしつゝ、わつと哭けぱわつと泣く、平太郎が聲に平作は、色や、變る眼を開き、「母御は更なり夏山も、武士の女兒に似けなき慰傷、昨夜通宵泣き明しても、なほ泣き足らずや聞くも轉てし。やよ家尊大人、今日より閉居開門の赦免狀、真藏あれ。」と刃の下緒に、結び著けしを差し出す。半之進はこの時まで、手を又も眼を閉ぢ、黙然として居たりしが、「免狀」と聞きて形なぬめ、雙の手に押し戴きつゝ、うら聞きて讀み入

だち、微臣が孤忠室しからず、主君微慢の御こ、ろをひるがへし給へば、災害消滅續井家は、ますま
 才繁昌し給はんか。これ等しながら平作が、忠孝の致す所、わが子ながら竹府にとゞめて水く功の賞
 せん。適れ奇特と押し聞き、あふで唱ふ言葉の要一を承つて安堵たり。これまでなりと取り
 あぐる、同じ驚る母女房、三將も諸共に一喝くる露論は是非もなし。われから親に先だつとて、何か
 はいそぐ事のあるべき、南園花どの、同袍四人遠離りをれば、半七が七は更なり、お通隔五郎等が後
 に聞かば、さぞ大遺憾しからぬ。「理に宣はする事なりかし。半七はきのふ出でて、未だ遠くものか
 ぞめれど、召返さんには往方しれず、周防といへば西甯盡處、百里とやらん、二百里とやらん、あ
 りとし聞けば飛ぶ鳥の、廻借りてもつかの間に、文もかよはでおもひやる、西の天こそ懸しけれ。周
 防懸しや山口へ、音託したや築山の、御所より人の来よかし」と、とゞかぬするも遙かなる、天も歎
 きの霧雨に、冥冥したる大男子、折戸口より走り來つ、半之進をきつと見て、「注進さふ」と、呼ばは
 る聲と、共に寢室揺撼り捨つれば、下には腹巻簾小手籠常、縁頼ちかく身をよせつ、驚りに嚙ぎて
 吻とつく、息は肩より落り出す、長途の勞れと見てければ、半之進は忙はしく、淨手鉢なる柄杓を取
 つて、濯湯にしぼし咽喉を濯させ、「めづらしきかな、穂藪に掛きて、周防出口へ起きしより、はや
 四五年におよべども、面會するによしたかりし、故栗部太郎、注進とは心もとなし。火急の大事か、

いかにく」と、縁より小膝進むれば、「さん、さん、さん」と。言一朝には盡きすといへども、その本末を告げ申さる。抑、陶權頭晴賢は大内の權柄なるに、その威をさく、主君を凌ぐ。されば老臣、杉、石田、鷲津、坂良目、宮、三吉、杉原、日高に至るまで、その威に怖れて比肩せり。しかるに、二月の末、築山の御所に於て、寶劔を拾へるものあり。義隆これを驚するに、續井殿より贈られし、風流女の太刀に似たり。『是れなん、豫て聞き及ぶ、風流士の太刀にはあらぬか。大和より飛び來つて、わが家寶とならんには、未曾有の古事なり』とて、遂に晴賢に賜はりし、風流女の一刀を、召し進らすべし。』と仰するに、晴賢つや、従はず。却つて三件の寶劔をも賜はるべし。』と乞ひしかば、義隆大に怒らせ給ひて、陶を誅せんと思せども、冷泉治部が諫めによつて、且く猶豫し給ひしが、猶憤りに堪へ給はず、いかにもして晴賢に、白滅せんと謀らせ給ひて、尼子退治の大將に、即ち陶をさし向けられ、心腹の近臣たる、江良丹後を後陣として、中に挟んで討ちとれ。』とて、謀を授けらる。然るに江良はいひ効なく、心かはりて晴賢に、「如此々々なり。』と告げしかば、晴賢大に驚き怒り、
『さ、義六らば立地に、思ひしらし参らせん』とて、富田の稚山に近しつ、軍兵を聚むれば、時を移す安徳五郎、大宰小貳千壽丸、赤月一角を始めとして、同意の軍勢三千餘騎、忽ち雲到せり。頃は八月二十八日、義隆かくとは知召さず、玳瑁さして惣まん。』とて、龍の法泉寺に、三日、夜御座

を移され、遊山の興を催さる。浩かる處に晴賢は「わが軍兵等が出立ちを、義隆に見せ進らす」と披露して、二十九日の曉方に、法泉寺へ推しよせて、鬨を咄とつくりつゝ、惣門よりぞ亂れ入る。義隆主従五十餘人、思ひかけざる事なれば、脱れぬ所と殺つて出で、込入る寄手の賊兵を、或は射落し、突き伏せ難き伏せ、瞬く間に、三十餘人を撃ちとれども、敵大勢なれば物ともせず、鷹野彈正、驚津入道、新手を入れかへ息をも繼がせず、四方より火を放けて嘯き叫んで攻め入つたり。されば直の近習には、冷泉降豊、天野徳内、三浦、戸井田、仁保、石田、命を際と禦ぎ箭射盡し、引き組んで刺し違へ、思ひくりに討死す。その隙に義隆朝臣は、廣縁に走り出で、半弓とつて敵を拵へ、矢種も既に盡きしかば、小薙刀もてかけ散らし、自身に防戦時をうつして、今はかうとおほせしかば、客殿に走り入つて、心しづかに腹かき切り、

みよや立つけぶりも雲もなかざらにさそひし風の跡も残らず

と詠じつゝ、猛火の中に飛び入つて、茶毘の煙となり給ひぬ。いと、語りもあへず、聞きも果てず、「こはこはいかに。」と三勝園花、目と目を注はする夏山も、平作も耳を傾け、おのく齊しく驚けば、半之進膝立て直し、「鬨が反逆是非に及ばず、義基朝臣と頼朝は、恙なくや坐す、いかに。」と、問はれて炊粟、いと面なけに額を拵で、「されば中將義基朝臣は、築山の御所におはせしかば、晴賢やがて

御所へ推しよせ、迫腹切らせ奉る。痛ましきかな姫の御養父、持明院の忍軒も、陶阿波に撃たれ給ひつ。凡そ防長豊筑の四高國、みな晴賢に屬き従へば、天地反覆時節到来。しかれども、（此の處は、一貴殿の息女お通と、仙野呂東二に聞かれ、後門より落ち給ひしと、慥かに聞けど仕方なし。す。上の先途にえあはぬ果、何を面目にか存命ふべき。單身なりとも、賊軍のうちに走り入り、きり死に死なばやと思ひしが、たとひ賊兵二騎三騎、撃ちとつて死するとも、九牛が一毛なり。大和へ注進なさばやと、思ひかへして百四十里を、僅か五日に走せ上り、いふべき事はいひ果てたり。身の懶りの申譯には、かくの如しと、腰の刃を、肚へつき立てて引き繞らし、庭の井筒へ跳り入り、體て空しくなりしかば、半之進は今更に、これを憐み彼をおもふに、聞き捨てられぬ主家の大事、天うち仰ぎて歎息し、いぬる如月米谷なる、木精塚鳴動して、一條の妖火、西を投して飛び去りしと、龜夫等が告訴へたる、いとノ心にかゝりしが、原來彼の風流士の太刀、周防山口へ飛び來きて、大内家の仇となれるか、大和にあるべき禰の、遂に彼處へ移轉りしも、時なるかな命なるかな。こゝにます、親實が、下策神の如きをしる。奇なり、奇なりと嘆賞すれば、三勝塞がる駒かき討て、女津ながら雄々しきお通、姫君の御供して、一旦城を延つるとも、往くさきは無敵ならん。加旃、陶五郎が、父にや屬きけん、主にや屬きけん、緋の容子を聞かまほしと、いとゞ子母意に苦しき駒

を、園花さこそと推量り、せめて半七が彼處に在るか、しからずは厚倉ぬしの、けふまでも有向へ給はば、かかる紛紊の齋を、釋くよしも又あるべきものを」と、悔えば宿しき夏山は、思ふに思ひ難て執と觀の、御こ、ろ思ひやらる、と、響がましき女子ども、身の程ほどに軽くに、半之進突と身を起し、益なき言に時な移しそ。主君の脚氣免りたれば、直に君所に仕仕して、事の也告申さん。三勝は衣服をもて來よ。者共やある、供だての用意せよ」と、呼ばはる折柄、注進さふ」と呼門ひて、走せ來る者はこれも又、槐姫に傳けられたる、仙野日東二道徳なり。半之進これを見て、陶が反逆、義隆御父子に事ある由は、歎粟が注進によりてはや聞きぬ。槐姫のうへ心もとなし、とく述べ給へ。と、いそがせば、昌東二息を吻とつき、官爵高き嶽の峯、大内殿の榮華の夢も、老臣陶が謀反に覺めて、築山の御所、灰燼となりしかば、一忍軒の人道まで、はや撃たれ給へども、槐姫をばお通殿と、某これを冊きまるらせ、一方の園を伐りひらき、辛くして、小俣の郷のあふたなる、澤川の邊まで、延し進らせたけけるに、賊軍隙なく追つ蒐け來て、搦め捕らんと覺ひて懸る。ここに某返しあはして、且く防ぎ戦ふ程に、遂に姫君の往方をしらす。こは淺ましと周章し、もし大和路をこ、ろざし、給ふ事もやと思ひしかば、漫におん速を募ひつ、來るともしらず一晝夜に、二

二十里宛走せのほりて、今故郷へ來にけれど、驛おん往方をしる由なし。願ふに驛は囚はれ給ふか、然なくば撃たれ給ひけん。何れの時を期せんとて、面なき浮世に存命ふべき。ゆるし給へこと、いひも果てず、やがて刃を抜きかけて、自殺せんとしたりしかば、半之進急に推し禁め、二鶴に吹葉助太郎が、言下に命を懸したる、潮きに似たれども、真忠臣の所行にあらず、恥を忍び、身を保る、こゝより直に引きかへして、蒲崎実作、前後備州、驛の先途を見究めて、後日の忠義肝妻ならんこと、説き盡せば昌東二は、今更死ぬるにま死なれすと、思ひかへして刃を收め、「いざさらば引きかへして、再ねて安否を告げ申さん。爾。」と許りいひかけて、走せ去るを半之進は、且くと呼びとめ、こと急なるに貴殿の腰間、踏賣の用意心元なし。餓別せん」と、駄間なる、鎧儀の誦うち聞きて、扱け與へたる包銀一厚志斷するに堪へたりこと、掻し敷きつ、昌東二は、あとをら不見て萬歩に、折戸を出でてはや失せたり。今果なりける半之進は、絆の容子に氣を潰まし、「わが父出仕し給ふとも、半關五郎は逆臣たる時賢が養子なれば、わが君心をおき給はんか、不覺に出仕は危からん」と、いへば赤根はうち黙順き、「汝が意見その理あり、しかれども關五郎は、養父が野心を嫁てぞしりぬ。君を試する朝には異をじ。かゝる大事を入つてに、申さんは不忠なり」とくく、出仕の供だてせよ」と、煎燥てば、涙を禁めて三時が、昔より被する肩衣も、晴れの思ひの晴小籠、見立つる園花夏山は、莖負の爲に經

韓子、父は君所へ、子は死出の旅、迷はじものを三勝は、歎きいやます周防なる、女屍と季子と呼子
 鳥、おほつかなくも出でてゆく、主人を送る奥と門、従者ならぶ輪挾箱、奴隸がなほす中拔薬の、草
 屋穿くだに蓮はしく、種けり、たといふ聲を、ひく潮どきか平作が、撲逆と認る死骸の上に、身を投
 げふして園花と、夏山かわつと泣く、これやわが子の終焉ならんと、思へども亦見返るに、違なけき
 を背後にして、半之蓮は囁ぎく、君所を投して走せよきぬ。

三七
第三編 古夢南柯後記 卷之六（後帙第三）

東都 蘭亭 馬琴 編次

驛旅の新關

半七初花はその夜さり、玉毘御前のおん慈しみによりて、からく命を助けられ、水門より脱れ出でたれども、親の事のいいたう、心にはかゝるものから、主君の采地に濟まらんとは、守を恐れ奉らざるに似たり、直に大和を立ち退きてこそ、ともかくもせめと思ひて、城外にはとゞまらず、聽て初花を扶け據きつゝ、浪速を投して、通宵走る程に、次の日の重昏に、彼の津にいつきて旅宿を求め、こゝに五七日逗留して、平城の爲體を聞き定むるに、弟笠松平作が自殺して、父の罪を初解し申せしかば、半之進はやうやくこゝ、主の勅當を免られたるよし、仄かには聞えにけれど、平作が全果につきたる、主君顯勝の内意をば、人のしる由もあらねば、半七もいかで、これをば傳へ聞くべき。されど父が南居思免の沙汰は一定なれば、これのみ歡ぶに堪へたりといへども、具悼むべきは、平作が枉死なり。彼にはいはけなき子さへあれば、母御のなげきいふもさらなり、夏山がこゝろの申いか

にあるらんと思ひやるに、半七夫婦は今更に、わが身の秋は物かほと、更に歎きの數そひて、慰めかぬしゆく末も、まだ頃日の旅ながら、故郷のそらなつかしく、夫婦額をつきあはし、この事彼の事うち相諱ひつゝ、さて半七がいふやう、「限りある路費をもて、限りなき旅寢せば、つひに飢渴に苦しみて、市人の無につぎ、懸居の門にたち、主親の名さへ浮す事もあひなん。我は平作が兄ながら、志いたく芳りたれば、身を殺して親の罪を、贖ふ事を得せす。さればとて、浮きたる水の月に爰で、仇なる宿の花に括まねど、薄命の係る所か。我から色情の奴となりて、八海の御池に浮名を流し、阿容と存命ふるを、二親傳へも聞き給はば、憎みても憎みあかず、いひがひなしと思ひ給はん。しかりとも玉枕御前の、丁寧に諭させ給ひし事もあれば、故なくて招つる命にあらず、只身を碎き骨を粉にしても、風流士の寶刀を案ね出し、これを主君にたてまつりて、身の悞ちを勸解びまうさば、この世ながらに主親の、笑顔見奉る時もあるべし。われ惟ふに、いぬる如月米谷なる、木精塚の崩えたるころ、ある一タ一條の妖火、西を授して飛び失せたいと、風聲ありき。こは全く彼の寶刀の、塚より出でて西國へ飛び去りたるにやあらんやらん。むかし吳王の寶劍、おのづから飛び去りて、楚國へいひきしとか、漢土の書に見えたい。西としいはゞ果てもなけれど、陰の太刀風流女は、今見に、大内家の老臣、陶晴賢が家にあれば、飛び去りたるが一定ならば、風流士は、かならず彼の地に赴きたる

なるべし。きのふ街に出でて賣下うらやさんに問はせしに、わが思ふ所おもところにたがはず。こゝより直ただに周防すおうに赴ゆき、密ひそび／＼に彼の寶刀たからたちを索たづねなん、とは思おもへども、嗣ついでに弟おとが養父やうふなり。又大内殿またおうちどのは主君しゅくんの縁者ゆかりにておはしますに、いまこの態げんにて、明白みからさまには参まゐりがたく、外よそには憑たのり樹下このもともなし。おん身みは何なんと思おもひ給たまへしと問とへば、初花はつはな且かつく尋思しんしんして、「わらはが参まゐりの宣のたまはせしこと侍はべり。昔年むかし風流士ふうりゅうしの寶刀たからを拭ぬぐとて、快はやちて刃やいばを毀こぼち、こよなき面目めんもくを失うしなひて、遂つひに華洛みやこを逐おつて、刀かた治ち同樹どうじゆといふものものの妻つまは、妾めかけか参まゐりの寶母たからの爲ためには、親族しんぞくにて侍はべりしとぞ。かくて同樹どうじゆは、周防國すおうのくにに赴おもむきて、「何がしの郷あたりあり」と、聞ききたることの侍はべりしが、こなたよりも彼處かしこよりも、音耗おとづねしたることは侍はべらず。かかれば今いまなほ存命ぞんめいへて、ありやなきやはしらねども、尋たづね行ゆきて名告なつゆりをせば、舊ふるき好よしみを他あたにして、いかで強面つれなくもてなすべき、思おもひたち給たまへかし」と、回いら答へすれば、半七はんしち聞ききてふかく歡よろこび、「こは微妙いみじくも心こころづかき給たまふものかな。われも彼の同樹どうじゆが事ことは聞ききつ。彼かれが華洛みやこにありし日は、我われも御身おんみも、いまだ生うまれたるころなるべければ、世よにありなしは覺おぼえなけれど、當時たうじ外祖ぐわいそ典てん義ぎに、再生さいせいの恩おんを蒙あまりたるものなり」ときけば、よしやその子こ、その孫うまごの世よなりとも、無下むげにしらすとはいふべからず。今いま風流士ふうりゅうしの寶刀たからを索たづねんに、刀かた治ちに身みを倚よせなば、おのづから便宜べんぎを得えなん。いざ給たまへ、一日いちひもはやく彼の地ちへ赴おもむくべし」とて、夫婦ふうふしめやかに商議かたがらひつゝ、次つぎの日浪華ひなにはの客店やどりを出いでて、和泉いづみの境さかひまでの程ほどに、往ゆ

き返ふ人、みな星を空にして走る形勢、理に事ありと見えしかば、半七初花は、道次なる、市店に立ちよりて、そのやうを問ひつ、この日はじめて、陶が弑逆の事を聞きに、義隆御父子はさらなむ、持明院入道一忍軒を始めて奉り、忠義の志あるものは、悉く陶晴賢が爲に撃たれ、防長豊筑の四ヶ國は、はや陶が横領しつるよし、風聞かくれなかりしかば、半七夫婦大きに驚き、義隆義基撃たれ給はば、槐姫もいかで、安泰に坐すべき。よしや婦人の事なりとて、賊手を脱れ給ふとも、路頭に沈落したまふならん。神御はいかになり給ひし、弟陶五郎は、養父に與して、君を弑するものなりとは思はねど、これも又心もとなし、さらば夜を日に繼ぎても、彼の地へ走せくだり、槐姫の先途を救ひ奉らざば、何れの日にか忠義を揚さん。とく走りたまへ。」とて、半七は只管に、初花を扶掖きて、心ばかりは焦燥てども、途遙かなる旅なれば、女子の歩のかひなくて、十月の上旬、幸くして備後と安藝の境なる、三原の郷に來にけり。こゝよりゆく前は、みな陶が猛威に屬き従ふとか聞えて、酒多の本郷に新關を居ゑ、貴き難しきをいはず、凡そ男子たる者、陶が郎黨より遁しおく、關防牌面なくては、山口の采地へ入ることを許されず、僅かに尼法師は、その沙汰を脱れ、女子の五十以上のものは、入るを許して、出づるを許さず。こゝより周防の山口へ、五日路に足らねども、半七夫婦は、關の此方に抑留せられて、何にともせん術なし。女子はさる木契なくとも、容易く關を越えら

る、といへど、三里か五里の程ならぬに、ひとり初花を先だたして、山口へ遣はし、存りや亡しやも定かならぬ、乃治同樹を訪はせがたければ、半七は心にもあらで、沼多の木郷に旅寢をかきね、たゞ關の戸の聞くをのみ、今かノ、とまつ程に、今茲はこゝにむなしく暮して、天文二十一年になりつ。世は春ながら旅にしあれば、憂きを慰む方もなく、心ます／＼焦燥ちながら、後へ立ち返りても、何國へかゆくべき。さりとともと思ひかへして、こゝにあること六ヶ月に及びて、春も彌生の中旬になりつ。初めより、よろづ費えを省きたればこそ、玉枕御前の賜はしたる、十枚の白銀をもて路費とし、けふまで一よさも露宿をせず、いち日も餓ゑたる事はなけれど、これすら残りすくなになりぬ。今十日もかくてあらば、乞食するほかにすべあらじと思へば、心ほそさいふ許りなし。あまりに思ひかへて、有一日半七は、初花を伴ひつ、街頭へ出で、「この關何れの日にか聞くべき」と、人毎に問へば、「この月の下旬には開かるべし」といふもあり、或は「何れの日とか定むべき、今茲はかくてありなん」といふ。浩かる處に、瘡癩の痕かと覺しくて、その顔甚く爛れ皴れたる女僧、券縁の爲に乞食するにやあらん、背には綱代の笈を負ひ、口には彌陀の御名を唱へ、頻りに錫杖をつき鳴らしつ、三原のかたより來にけり。そが後方に、これもおなじさまなる女僧の、顔は前なるよりなほ醜くなりたる、いかなる過世にて、かくは瘡瘡神に憎まれたらんと怪しくて、生憎に人も見返る許りなるが、

笈の上には三歳か四歳ばかりなる稚児をかき乗せつゝ、共に念佛して、關のかたへゆく程に、しばしば半七夫婦を見かへりて、前なる女僧に走りつき、何事やらん私語くめり。半七は今この兩人の女僧を見て、初花にいふやう、「去年の秋、浪速に旅籠したるころ、法善寺なる千日墓へ詣でて、祖父へ手向をもすべく、硝平作が菩提をも修はんと思ひつゝ、只管に、心いそがはしき折なりしかば、やがてこゝまで来たれども、佛の道にはなほ疎かり。今はおほかた路費も竭きて、物がましき法事こそえならね。彼の尼達を呼び返して、布施せばや」といへば、初花答へて、「わらはもしか思ひ侍り」として、「遣ひ留め給へかし」といふに、半七は遽はしく、「反許り走り出でて、「こやく」と招き返し、腰に著けたる錢一疋を、伴の女僧に取りし。去年の九月三日に身罷りたるものあり。それが爲に、廻向してたべ。」といへば、兩人の女僧心得て、諸共に錫揮り鳴らしつゝ、彌陀經一篇を誦み訖り、さて半七夫婦にいふやう、「見奉ればいとわかきに、はやく菩提の道に志し給ふこと、いとありがたく侍れ。こゝらの人とは見え給はぬに、何處にか坐する」と問ふ。半七聞きて、「現に宜はする如く、去年の九月浪速より、俄頃思ひたつことありて、周防の山口へ赴くものなるが、こゝの新關に抑留せられて、いたづらに春を迎へ、路費も今は竭きんとすれども、ゆくべきかたへ得ものかす。おもふに尼御前たちは、常にこの關を越え給ふなるべし。備し關防牌なんどいふ物を齎し給はずや。錢に代へ

て賜はらば、夫婦が薄き衣を、洗濯しても買ひ取るべし。人を救へば即ち濡、慈悲は菩提の本なるに、と、初花もろとも掌を合はして、理なくたのむ樹の下に、涙の雨はまづ満りて、外の點滴に墨染の、そでぬらしつ、兩人の女僧は、うち點頭くのみ應へせず。且くして先達の女僧目を拭ひ、寒に長き旅のそらにて、路費の竭きたるばかり、すべなきものはあらじ。特に婦女子を携へ給へば、ひとしほ痛ましく思ひ侍るか。然れども、人に貸すべき牌兒はもたず。この關四月のはじめに至らば、必定開くとこそ聞きて侍るに、今しばし待たせ給へかし。と、信やかに慰むれば、夫婦はいよ／＼望みを失ひ、又いふよしもなかりしが、半七惱める額を拵で、宣ふ所さることながら、女子を携へて、かく旅路に呻吟へば、仇なる色に跡を埋め、遠く走るものならんと、思はれんは心にす。これなる女子はわが妻なるが、主の爲親の爲に、物を索ねてはる／＼と、周防へ赴かんとするに、彼の地の擾亂に便なくも、百七八十日を空しく暮せば、こゝにあること一日たりとも、千とせの秋を經るがごとし。明白には告げがたき、心苦しさを病し給ひて、善巧方便有るならば、かなはぬまでもこの關を、うちも感さして給はれ。と、只管憑み聞ゆれば、先達の女僧且く呻吟し、一やすがなく在するよし、精しう聞けばいふ、痛まし。貸すべき牌兒はなけれども、こゝに一條の方便侍り。見らる、ごとく、この同宿が負ひたるは男兒なれば、幼稚けれどもその員にて、村長に申し請ひたる、關防牌面一枚あり。う

ち歎かるゝが黙止し難ければ、をさなきものをば、笈の中に躲し入れ、ともかくもこしらへて、此の關だに越さすべけれ。おん身も關だに越え給はば、關防牌面を返し給ひね。やよ坊よ、人を救ふは出家の行狀、おん身こゝろ苦しくとも、且く笈の中に入りて、關のあなたへ過るまで、泣きもすな、音をもたてな。よくこゝろ得よ」と教へ諭して、驪を稚兒を抱きおろしつゝ、おのが笈の中へ躲し、さて頭陀囊より一枚の牌兒を出して、これを半七に遞與し、「吾儕は沼多川の東村に、かすけき草の庵を締びて、日毎に三原吉浦の縣へ出でて、乞食し侍るものなり。沼多村の南なる、拈華庵と索ね給はば、かくれあらじ」といふに、半七初花は感涙を拭ひあへず、「塞にけふの慈悲善根は、なき身の後もいかで忘れん、關だに過り候はば、牌兒を返し進らすべけれ」と、夫婦篤くよろこびを述べ、天へも升る心持して、欣悅面に見はれたり。先達の女僧これを見て、諸共にうち微笑み、禱には、周防の山口へ」とか聞え給ひしが、山口とのみ索ねては、廣き城下なるに、容易くはしれ難けん。いかなる人をか訪はせ給ふ、いとおぼつかなくこそ」といへば、半七答へて、「外祖が山縁のものなれど、二十餘年中絶えたらば、吾儕は只名を聞きたるのみ、精しき事はしるよしも候はず。舊き好みをこゝろあてにゆく方は、刀治同樹といふものに候」といらへすれば、女僧聞きてうち點頭き、「一件の同樹といふ人は、去年の冬遷化し給ひし、わが拈華庵の先住の爲に、舊き縁ある人なれば、吾儕も粗これを聞け

り。それは山口には在らず、天神山の彼方、水上の郷と索ね給へ。彼の人齡七十にあまれども、なほ健かなる由は、慥かに聞きて侍るか。日もはや暮れなんとすれば退るべく、關の鎖を下したてられぬ前に、とく／＼越え給へ。」と、いひかけて、撓けに笈を背負ひあけ、同宿の女僧もろ共に、遽はしく走り去りしかば、半七も初花も、黄泉に佛にあへるが如く、しばし背影をふし拜み、馳て旅宿に走りかへりて、物よくとり聚め、主人に別れを告げて、又忙しく走り出でつゝ、件の牌兒をもて、障はることもなく關を過りしかば、始めて吻と息をつき、直に沼多川の上下を、彼首此首と索ぬるに、拈華といふ庵は絶えてなし。日もすでに暮れにければ、せんすべなくて思ひ絶え、その夜亥中の頃及に、四日市といふ驛路までいゆきて、宿を求め、夫婦彼の女僧が事をうち相語ひつゝ、半七がいふやう、「初花は幼稚きより、玉枕御前に給事へて、宅にある日のなかりしかば、侄の平太郎が面影は認めぬなるべし。けふの尼法師が負うたる稚兒は、平太郎によく似たるなり。こは己が心の迷ひかはしらねど、慥かに誨へられたる草の庵を、索ねあてざるも不思議ならずや。」といへば、初花聞きて、「宣ふ所さもありなん。彼の尼刀禰達は、顔こそいとおどろ／＼しけれ、聲様は何とやらん、聞き熟れたる人の如し。思ふにこれは、日頃念じ奉る辨財天女の化現して、關を越えさせ給ひけん。いと尊くも有り難き、利益にこそ。」と稱賀すれば、半七、「有理。」と忽地曉りて、遂に再び女僧の庵を索ねず、

宿りをかさぬること五昔にして、周防國佐波郡山口鶴宰の城下より、遙かこなたなる、水上の郷に
 のきつ、刀治同樹が宿所を訪うて、萬き縁の藩を、再びこゝにとき明し、夫婦がうへを告げに
 れば、同樹は心よく承引きて、貧しき家に舍藏ひけり。

暮の夏の花の上

刀治同樹が事は、第二の巻、冬田の晩稻と題せし條下、全介が養母晩稻が昔物がたりにて、粗その
 名は聞えたれども、いまだその本末を詳にせず。原この同樹といふものは、近江の觀音寺の城下なる
 刀拭が家に年來事へて、大かたその業をよくしたり。しかるに京の刀拭同樹といふもの身まかりて、
 いとけなき女兒ひとりありけり。同樹が後家は、年齢二十ばかりのころなりしかば、媒妁ありて、今
 の同樹を入夫として、さて刀治の名蹟を立てたれども、このころ室町家の武威やうやくに衰へて、京
 も田舎も、年毎に荒れまさり、四民おのゝ活業のたつきを失ふこと多かり。これによりて今の同樹
 が時世に至りては産業衰微して、よろづ昔に似るべくもあらねど、華洛に萬き刀拭なれば、僅かにそ
 の餘波とて、闔宅五七口を鯛ふに足れり。是をもて女兒増穂には、白拍子の男舞など習はして、笹
 屋小夏といふ、裊號さへ呼ばしたりける。こはその母の情愚にはあらず、繼父同樹は生才さかしく、
 いと慾深きものなれば、女兒増穂に遊藝を習はし、すべて花會に生育たして、果ては華洛の紳士に給

を修造ひ、こゝにて焦けたる刃、錆びたる鐔などを、賣りもし買ひもして、世を渡るに、その性究めて腹きたなきものなれば、利慾に走りて人を欺き、焦けたる刃をよく拭ぎこしらへて、價貴く賣ることしばしなれば、妻の小田井は、これを傍痛きことに思ひて、言葉を喝し諫めにけれど、同樹は京にある時こそ、入夫にして、その身その家を續けば、十に二つは、妻にも物をいはしたれ。今すでに、遠く周防の氷上へ來て、更に世の經營をすなれば、よろづおのがまゝに擧動ひて、絶えて一言も、小田井が諫めを聽かず。とかくして又十年あまりを經る程に、同樹はますゝ貪婪のこゝろふかく、わろき所行のみ事とせしかば、小田井は身を形なく思ふにも、世の務めに繼がれて、心にもあらぬ夫をかきねたればこそ、家を失ひ孫を棄てて、しらぬ里に呻吟ひ來たれ、只ひとりなる女兒を先だて、只ひとりなる孫を棄て、心つよき夫の儼事を諫めかねて、歎きの中に身まからば、後の世いとゞ罪ふかし。佛の道に入らんにはと、ひとすちに思ひ決めて、良人同樹に身の暇を乞ひ受け、忽地に女僧となりて、安藝國高宮郡、沼田川の上に、草庵を締びつゝ、十年あまり行ひすまして、去嵇天文二十年、冬十二月十五日に、往生の素懷を遂けたり。此のころ行脚の女僧兩人、拈華と號し、微笑と呼ぼるゝが、小田井比丘尼の草庵に同宿してありしかば、纏ち庵主の遺言にまかし拈華比丘尼萬草に住持して、更に拈華庵と號し、先住の女僧の形見の遺物をば、みな悉く周防の氷上に遣はして、萬

の夫なれば、これを同樹にとらしたり。今茲同樹は七十餘歳に及べども、筋骨遒しくして、壯りの年にことならず、一身の皮をばすべて、慾にて張り詰めたれば、舊妻が物故りし由を聞くといへども、涙一滴落さず、種々の形見を獲て、俄頃^に得つきたりと、歡びつゝ、日來嗜める酒に代へて、いく程もなく喫み竭し、年もくれて長閑なる春にはあへど、錢のなければ、猶うち籠りてありけるに、思ひもかけず、三月二十一日の重昏に、大和國續井家の退糧人、赤根半七といふ壯俊、その妻を將て索ね來つ。精しく彼の夫婦が上を問ふに、半七が妻初花は、むかし同樹がこよなき恩を受けたる、蟻松典膳が孫女にて、半七も又血縁にこそあらね、典膳が孫なるよし、そのいふ所紛ふべうもあらず。舊縁といひ、舊恩といひ、脱るゝに道はなけれど、同樹は元來信に仗り、義に勇むものにあらねば、これらの故を懸念せねど、只初花が容止、なみくくと饒れていと艶妖なるを見て、肚裏竊かに較計む事あれば、一議にも及ばず、信やかに款待して、この口より件^の夫婦を止めつゝ、慫慂に勸り慰めけりしかれども半七等、かかる貧家に食客となりて、なすこともなく月日を送らんは、心づたなき所爲なり」とて、夫は刀を拭ぐ事を習ひ、或は同樹に代りて、村長縣正の第宅をうち廻り、妻は火を打ち、水を汲み、或は人の爲にふりたる衣をとき洗ひなどせしかば、同樹は結句身ひとつなりし時より、世を安く思ひながら、這奴等は、わが肚裏をばしらで、松苗の棟になるまで、こゝにをらんとてや、汗

水を流しつゝ、挿了ぐこそ究めたる白徒なれ。給銀といふもの取らぬ、よき小庵と炊爨を養き得たりけり。と、竊かにあさみ笑ふとは、半七夫婦はいかでしるべき、同樹がたのもしけなるに安堵て、春と暮し、夏と送りて、雷鳴月の炎暑堪へ難きをも物とせす、ます／＼活業に身をゆだねしかば、刀を拭ぐことこそ、僅か四五箇月の手練なれば、同樹にいたく劣りもすれ、四方の花主をうち巡りて、刀劍を匠作へ、このみの註文を承る事は、その性情柄しき壯俊なれば、同樹には勝れり」とて、人みなこれを稱美して「半七々々」とぞ呼びける。かかりし程に半七は、日來は同樹が心さまを疑ひて、こゝに來れる緣由を告げざりしが、彼がいよ／＼信やかに款待すを見て、いつまでか置むべき、今は同樹に相談ひて、風流士の寶刀を索ねばやとおもひて、有一日竊かに同樹に對ひて、この身夫婦の來歴、風流士の太刀のこと、一五一十を物がたり、／＼もし聞き給ふこともあらば、諸共に力を戮はして、彼の寶刀を索ね出し、某夫婦を忠孝の、人となし給はれかし。おのれ再び發跡づる日もあらば、厚く報いて生涯を、安らに過ぐさし進らせんとて、丁寧に相談ひしかば、同樹聞きて、こはよきことこそあれと、こゝろにふかく歡びながら、耳を側てつゝ、眉を竊め、原來和殿は忠孝の人なり。妻女は貞操の婦なり。われけふまで、浮きたる情のやるかたなくて、後ぐらくも諸共に呻吟ひつゝ、このわたゝまで迷ひ來給ひぬとのみ思ひしは、人の知らざる僻日なりき。いまだ聞き給はずや、大内殿のあへ

なくも攀たみ給ひしは、彼の風流士より事起れり。去歳の如月にやありけん、鶴峯の御所侍、一口の太刀を拾ひつ、これを大内殿に獻りしに、しる人ありて、『これなん續井家の重寶たる、風流士の太刀なり。』と、申せしかば、義隆ふかく歡び給ひて、眞に陶殿に賜はりたる、『風流女の太刀を返し進らせよ、陰陽一對として祕藏し給はん。』と仰せしに、陶殿は年來の威勢を憑み、承引かず、『その風流士をも、こなたへ賜はせ、陰陽一對として祕藏仕らん。』といふ。これより主従不和になりて、大内殿滅亡し給ひ、『防長豊筑四箇國の中なるもの、有像無像、猫も杓子も、筵上の野牙までも、みな陶殿の物となれば、件の太刀をば殊更に、晴賢祕藏し給ふ。』よし、この里人等をもさくいふゆり。かかれば彼の寶刀を、いかに欲しと思ふとも、七世の女孫にあふまで、取りも得がたき所行ながら、つらつら物を案するに、又よすがなきにしもあらず。故いかにとなれば、陶殿の郎君は、御身が弟なり、今既に親胞兄弟、東西に引きわかれて、隣敵の思ひをなすとも、肉縁の情、いかでその中にこもりらん、これ一つ。又おのれこの郷に、二十餘年の春秋を經たれば、鶴峯の御所ごまには、しる人いと多かり。これ彼の便宜につきて、まづ陶殿の御内にて、某甲某乙と聞えたる方ごまへ、和殿を立ち入らせ、ともかくもこしらへて試んと思ふかし。それにつきて、今の形勢にては事をなしがたし。假に同樹が養子と披瀝し、刀治の家名を相續さして、さて鶴峯へ將てゆくべし。このこといかに、うけ引

き給はんや。」と、信だちて説き示せば、半七夫婦は、坐に感涙を拭ひあへず、「弟陶五郎は殘忍の養父に與して、浮める雲の富貴を樂ふ、いと恐ろしきものなれば憑もしけなし。只わがうへをばふかく匿みて、物よくこしらへて給ひね。何にまれ宣ふよしは、固辭み候はじ。」と應へすれば、同樹は聞きあへず、大きに歡び、「本月十六日は、嘉祥日とて良き辰なり。この日まづ養子成の披露さすべけれ。」と豫てより用意しつ。扱本日になりしかば、莊役某甲を相譚ひて郷導とし、半七には袴を穿せ、羽織を被せ、朝より早く出でたして、郷の戸々、残りなくうち巡らせけり。これによりて初花も、「その名餘りに物々し。」とて同樹僅かに初の字を除きて、お花と呼ばし、これをば十五日の甲夜の間に、彼の莊役が女房を郷導として、近所合壁へ、相識の爲に遣はしたり。かかりしかば、お花は本日、鎮守の神社へ參詣して、行末の事祈らんとて、午より家を出でたるに、これさへ未だ歸らざりけり。

暑の夏の花の下

かくて同樹は獨りをる、宿は殊更口さみしきに、賀びを申さんとて、詣來る近邊の甲乙を、幾度か迎へつ、同じ挨拶する程に、夏の聲もや、おとろへて、午時の炎暑はとり返せど、困じ果てたる勞れは失せず、「今は訪ひ來る人あらじ。いでや持薬に氣つけして、獨樂せん。」とひとりごち、棚より陶器とりおろせば、忽地、芬と酒の香するに、眼を細くし涎を流し、蚊やり火鉢に炭ふき起して、陶器

の尻を灰に搦り埋め、小頸を傾け指を儂り、ひとり笑みして點頭く折から、ふりたる背布の襖包を、背負ひたる市人が、偶なる倭士の後れて来るを、幾度か見返りつゝ、同樹が門なる障子に手を掛け、瓦落々々破と引き開ければ、同樹はいたく駭きて、倒れんとする背へ手を突き、やうやくに膝立てなほし、「誰ならんと思ひしに、敗鐵の四五六よな。呼門ひもせで老いたるものを、うち驚かすことやはある。障子の骨をば鐵では編まぬ、開闔にこゝろせよ。漸く脚色みし一握向を、障子の音で聞けなくされたり。忌々しき和郎にてありけり。」と、駭けば四五六は、負ひたる包ときおろして、項より流る汗を拭き、「けふの炎暑に門さして、おん身が物を思ふとしらば、龜やかに障子を開けんや。全體この敷居鴨居は、坤へ歪みくねりて脾撓い吐では開けられぬ。」と、うち笑へばうち笑ひ、「四五六が亦しても、來ると聽て人の家の、荒を見出していはうでがな。銀だに貸せば造作するに」と、いへばほとくうち點頭き、「正月の三つある年、足なしに借り給へ。とはいへ何國の浦にても、ないものは余、あるものは借錢、去年の二月大和から、物を追うて思はずも、こゝへ來て一思案、西の都といひもてはやす、大内家の城下なれば、世わたる便著もよからんと、それなりけりに足を駐め、些し馴染も出来るや出來ずに、射りつ破りつの大合戦、漸く世間長閑けくなりても、一升瓢子はいつでも一升、けふの興敗、これ見給へ、五百が本錢で鉛刀光三口、まだ此の頃の後家鞘は、亭主の好きなる赤

鯽、夜食の菜にもなり難ねる。荒布に似たる敗下緒、望みはなしか」と猥より、ひとつ／＼にとり出せば、同樹は頭を左右へ掉り、竈木より龔牙の多い敗靴、鐵橋には劣りたる、焦刃を五百穴が興敗と、いうては齒莖はたち難し。猫に見られて竊かれな」と、嘲み笑へば四五六は、亦猥へ押しつ、み、「然らばこれをば納めもせんが、納まらぬは全介が事、吾儕が浪速に在りし日より、心くまなき友だちなれば、彼も又諸共に、この地方へ來ても本錢はなくて、果敢々々しき活業はえせず」とかくする程に氷上の郷に、刀冶同樹といふ人のあるよしを傳へ聞き、それは吾儕が外祖父にておはするなるべし、養母の遺言此彼もつて、孝順に養うて、寄る年を心易く、送らし欲いと彼が情愿、當今の壯俊には、珍らしい奇特なもの、おん身も歡びたまはんと、思うて箕に將て來たれば、思ひの外に強面く、爾後よせもつけられず、下物夥計で六齋の、市には春より中絶えず、面をあはする四五六が、面に愛でて全介と、祖孫の名告りし給ひね。」と、いはせもあへず頭を掉り、「肉縁はなけれども、昔をいへば孫でもあらんが、彼は元來參なし子、生まれぬ前から祖父祖母に、恥をかかせし出來損ひ、仇人の末と思ひ絶えて、襤褸の中に棄てたるに、今更名告をしても用なし。特に渠奴が面魂は、彼の猿樂の狂言の、太郎冠者めきて何處やらが、一節鴛抜けて三文の、働きはありとも見えず。生涯篤實律義者として、人に佛といはれては、この辛い世は撰からず。さるによつてこの同樹、齡七十にあまるま

で、仁義五常といふ事を、算盤には絶えてのせず、孫養はうより狗の五器、冷飯一椀食はしても、減りのたつ事しらすか。」と、煙管で敵く敗席薦、埃まじりにいぶされても、四五六騒ぐ氣色なく、「その儀ならば宣ふな。一體彼の全介は、生得きたる奸雄者、老實に見せて油断さし、馬市に出づる日は、よく生馬の目をも抜き、又寺参りする時は、佛の箱をも容易く割がす、老功の外祖さまにも、律義もとの見せたるは、他ち術に妙ある所、さりとては至らぬこと、いへば同樹は某果て、「さき聞けば棄てられず、今一度見なほすべし、翌伴うて來給へ」と、いひも果てぬに四五六は、術と立ちて外面へ、走り出でつ、さしまねけば、前より門邊に立在みたる全介は、肩に被けたる手拭取つて腰に夾み、襜歩に内に入りて、同樹が向ひに膝折りそろへ、「外祖さまの見立てちがへで、けふまでよせつけ給はぬは、燒きがまほりし老の體眼、旅に在つては護摩の灰、市に出でては鳶鷹、盜賊にこそ得ならね、一度足を揚ぐるときは、踵で申著をも切りつべく、人に酒を買はするときは、尻を破ること本事なり。狗には勝る孫がひに、おん身が骨をば全介に、拾はして給はれ」と、俄頃にする惡風俗、頼りに髻をかき撫づれば、同樹ほと／＼感嘆し、臂近なる髯鬚を、かい取つてあふぎ立て、「かくてこそわか孫なれ。さりながら、半七夫婦こゝにをれば、わが宿には留めがたし、所業あらばこなたより、折を見て招かん。」といへば、四五六小膝をす、め、いかなる由縁あるかはしらねど、現在孫のありながら、

半七に刀治を、續がせ給ふはこゝろ得ず。」と、語れば同樹はうちほ、笑み、「彼はわが故妻、小田井に遠き縁ありとて、この春索ねて來りしかば、信しやかに款待して、夫婦養子の披露するも、同樹が胸に物あるゆゑなり、それを實事とすることかは。」と、誇りかに説き諭せば、全介握れる拳を捺り、「彼の半七は續井の家隸、わが實父の仇人たる、半之進が子なるよし、四五六がいふにてしりぬ。養母の遺言黙止しがたくて、今は半之進を撃たずといへども、彼も又仇人の半體、仇人の杓は根を断ちて、葉を枯らさんも只この時。時は再び得んことの、かたな屋と名告るとも、祖父だに許し給はば、立地に怨みを復さん。あな歡ばし。」と思はずも、もてる煙管を丁と折る、忿怒の面色さもこそと、同樹は小膝を破と拍ち、「仇人の子なれば半七を、撃たんと思ふは現に有理。その議ならばいふ由あり、四五六は同腹中、今更匿むべうもあらず、半七お花が歸りなば、我如此々々のことありとて、這奴等を旨く欺詐るべし。その時四五六全介は、「小僕の縣正より、潛びやかにお花を迎へとらし給ふ。」と、偽りて徳輿乗物昇かして來よ。然れども半七は、己が日來欲しと思ふ、風流士の太刀を取らずば、お花を阿容々々とほ、えも遮與さじ。倘し、彼の太刀は。」と問ふ事あらば、四五六は豫て一封の證文を懷中して、これを半七に握らせ、「汝今宵、小僕の郷なる、縣正が宿所まで、その證文を持參せば、所望の太刀を賜はるべし。」とて説き賺して、體てお花を竹輿に乗して、山口なる撞木町の、女衞が宅へ將て

ゆきね。われ豫てお花が事を、よく相譚ひすましたれば、年こそ二十一といふとも、六あきにして二
十兩詰、二百金が物はあり。扱日も暮れて初夜過ぎて、我半七を偲うて小侯の縣正が宿所へ赴き、
件の太刀を受けとらんといはんには、渠必ず従ふべし。里遠さかる天神山、夜は籠も人跡絶えて面
に川あり背に藪あり、全介こゝに埋伏せして、親の仇人」と名告りかけ、たゞ一刀に斬り殺せよ。半
七既に死する時は、縦ひお花を程遠からぬ、花街へ售るとも後腹痛ます。四五六もこゝろ得たりや、
早りて氣色に曉られぬ。」と、孔明顔に説き諭す、膝にもたせし禪團、羽扇と見せて破れたり。全介は
つくふと、これを聞きてますく、歡び、「仇人の妻を詐偽りて、河竹の潮に立たするも、怨みを復す
これその一つ。然らばゆくをやりも過ぐさず、天神川の藪疊、寢刃あはして待たんす。」と、勢ひ猛く
應へたり。四五六は始めより、只點頭くのみ、「可し。」とはいはず。「同樹殿には金を獲させ、全介は仇
人を撃つ、現に談合は旨けれども、吾儕が腹へは絶えて溜らず、辛苦錢から定價して、ともかくもす
べけれど、もしその沙汰に及ばずば、暇まうしてすぐさに訴へ、氣の毒ながら老人に、索を被けてひ
かすべし。」と、いふに同樹は日鼻をよせ、「こやく四五六、四五六殿、吾儕に如才あるべきか。これ
斯う／＼とさし寄りて、手を握り合ふ袖の中、四五六莞爾と打笑みて、けふの相場は賤けれどら、
乗りか、つたる船なれば、お花が迎への走卒に、打拵つは究竟なる、興敗物の鉛刀光二腰、まづ談合

は調うたり。祝ひたまへ」と直足られて、同樹は弗と心づき、遽はしく火鉢より、陶器を引き出し、
「熱々」と指に耳を挟ませ、「餘り話説に質を入れて、缺代のなき小半合を、煎酒にしたるぞや。さば
れ四五六は下戸なりし。物こそあれ」と身を起し、家廟の障子推しひらきて、彌陀の御前の夏桃子三
四枝、折敷に載せてもをし氣なく、兩人が邊へさし出せば、四五六は冷笑ひ、「百金の前祝ひに、毛
毳三枝とは朝三暮四、吾儕はこれを、は狙なり」と、推し返しつゝ、項を伸ばして、家廟の裏をさし覗
き、「全介彼を見給ひね。進命婦をおもひ病みせし、清水寺の老法師が、草の庵に異ならで、持佛に代
へたる美人の畫像、彼はいかに」と指させば、全介も又呆れ果て、「色慾と無常の浮世といへど、これ
は又珍らかなり。宗旨は何ぞ」と低語けば、同樹煙管を笏にとり、「さればとよ、この畫像には縁起あ
り。汝達も聞きつらん、去歲の秋大内殿、俄頃に撃たれ給ひし頃、義基の北の臺、槐姫の往方定か
ならず、或は「猛火の中に入りて死し給ふ」とも聞え、或は「お通とかいふ女房が開きて、辛く脱れ
去り給ふ」ともいふ。さるによつて關殿安からず思召してや、姫の肖像を影畫かせて、懸田居中、殘
る隈なく觸れ知らし、「もしこの畫像に似たる女子あらば、搦め捕つて進らせよ、賞錢は乞ふによるべ
し」とて、こゝら邊へも戸毎に、彼の畫像を賜はせしは、去歲の冬の初めなりし。しかるに彼の半七
夫婦がこゝへ來て、姫の畫像を見て涙を落し、「主の姫君に坐する」とて、鐵引き延ばして表装し、物

物しく家廟へ懸けて、且々に額を著き、餅果などを供ふるを、傍痛く思へども、此方に深き校計あれば、そが隨にして詰りも問はず、この桃子も半七が、彼首の畫幅へ供物。全介もよう聞き、彼の畫像に似たる女子を、櫻姫と見るならば、引き捕へて物にせよ。擲了けば損のゆかぬ世間、縁起あらまし件の如し」と、説き示せば全介は、四五六を見返りて、「彼もこれも金の蔓、けふよの心を改めて、祖翁さまを見習はば、濡手で粟餅とる如く、よき夢をがな見もやせん」と、いへば四五六うち點頭き、「人はわろかれ我よかれ、死んでも命のあるものならば、那里か一度は寶の山、手を空しくして語らんより、戯房入りして半七お花が、歸りしころに再び來ん。さほ」と傍の袱包の、端かいとりて背負ひつゝ、全介もろとも立ちあがれば、同樹は外面うち仰ぎて、「門の棟に日影が落つれば、申時には程もなし、われこそ市の六齋毎に、四五六と出會へども、かけちがうて半七も、お花もいまだ四五六と、全介を認めねど、わろくものして曉られた。全介もようせよ」と、いひつゝ、漸く身を起す、裾に陶器を反ね倒せば、口より酒を吐きながら、滾々と轉びゆくを、慌忙引き起して、ひとり腹立つ眼を睨り、「あな我ながら忌々しき裾の蔽れよりして爛冷しを、席薦の野郎に飲ましたり。物體なや」と呟きて、溢れし酒を指へ染め、禿けたる天窓へ塗りつくれば、四五六は全介と、目を注して冷笑ひ、「熟柿に似たる禿天窓へ、酒を沃がば濯もや抜けん、供饗の棧子は啖はずとも、髪は醜劣

を賞翫せん、いざ給へ。」とて先にたち、跨ぐ闕は三尺口、二尺五寸の鑢刀、負うたるまゝ、に身をひねる、人啖ひ馬もじ首や、さすが同樹が孫なれば、小じりからけて全介も、急がはしげに歸りけり。浩かる處に半七は、傍なき蟬の薄羽織、土用半ばにあき人の、よき衣著たるにあらねども、鄰き戸々うち廻りて、かへさは妻も一すぢ道、二すぢ立ちの縞浴衣、まだ町なれぬ背帶、繻子のぬめりに風はしる、々ぐれ毎に露深き、お花もろ共かへり來つゝ半七只今さふらふ。」と、呼門ひつゝ、内に入れば、同樹見かへりて曠やかにうち笑み、「半七か、はわかりし、お花も共に歸りしな。宿に居るだに堪へがたきに、暑さもさこそと思ひやらる。半七は羽織も帷子も、脱ぎ捨てて涼み給へ、お花も浴衣に脱ぎ更へよ。」と信やかに慰むれば、いな、「宿に居るとは格別にて、途に出でては風に吹かれて、思ひの外に凌ぎ易し、喃お花。」一實にわが夫の宜ふ如く、片道は陰もいで來て、笠も荷になる風の涼しさ、前の月より雨氣はなけれど、塵埃のたたぬは田舎の一得、鎮守の社の實し、天神山のこなたにて、をりもよく、半七どのにゆきあうて、もろともにかへりしかば、日は没れかゝれど心づよくて、却つて歩は果敢ひかず、さぞ徒然におはしけん。」と、いへば同樹はうちほ、笑み、「わかか夫婦のうちつれ立ちて、世の務めやら保養やら、偶の事なれば、歩はかゆかぬ該ぞかし。湯を沸かして歸ると聽て、汗ながさせんと思ひしが、思ひしのみにて年老の、折屈みにかひなければ、留守したるのみ猫には劣

る。そののみならず歡ばしすと、また哀しさを搗て糺せて、そらうち瞻仰めて待ちわびし。」と、いひつゝ、眉を顰むれば、半七これを聞きもあへず、「そは何事の候て、心苦しく坐するぞ。親と悲み奉る、老人の物思ひを、しらす顔する半七ならず。假染ながら刀治の、屋號を冒すも不思議の縁、置まきに、一貝斯う／＼と、告げもしらして給ひね。」と、盡す信は妻もろとも、「商人の上は疎かにて、物の要にはたたきもあらんに、舊き由縁を忘れ給はで、良人の索ぬる彼の品を、とり復さんとての物思ひか、さらきば脱れぬ負債やある。」と、よしやいかばかりの借錢ありとも、半七どのにうち任して、さのみ劬勞なし給ひそ。」と、夫婦右より左より、いひ慰むれば嘆息し、「年弱きにはたちまざる、深切に絆されて、胸苦しさも又一倍、何か置まん聞き給へ。」おん身夫婦が心を盡す、風流士の寶刀の事、いぬる日はじめて聞きしより、さまざまに尋思せしに、小侯の縣正は、陶殿に由縁ありて、不便のものにせらるれば、富田へも鶴峯へも、常に参りて心くまなく、まうし承るものなるに、われ又彼の人の蔭を蒙ることおほかり。もしこの條の頭末を、縣正に密かに語りて歎きなば、汲引きせらるゝこともやと思ひしかば、いまだ和殿等には告げねども、をり／＼彼處へ赴きて、さまざまにこしらへたりの然るに、陶殿は、既に四个國の主になりて不足はなけれど、内室近ごろなくなり給ひつ、側室寥寥多かるものから、是れをと心に稱はせ給ふものもなし。汝が養子半七が妻花とやらんは、儲稀なる美人

なりと聞き傳ふ。もし彼のお花を進らせなば、萬に一つ半七が望みを遂ぐる事もあるべし。この外にば陶殿に、申しよらん術をしらせと、縣正の宣はするに、あるべき事とは思はねど、いなきといへば彌勒の世まで、風流士の太刀は返らせ、應といへば思ひ思はれし、夫婦の中を裂かでは成らま。事變易へんはいと易し。半七お花がこゝろはしらねど、承引くにしく事あらじと、わが胸ひとつに思ひ決めて、仰せうけたまはり候ひぬ。主ある女子に候へども、これが上には、亦二つなき條件なり。お花が事はともかくもして進らすべし。只彼の寶刀を障る事なく、申し賜はり候へと、應へして歸りしは、一晚の日の事なりじに、鬻に縣正どのより、猛に使給はりて、とくく參れとと急がさる。和婦夫婦は家に在らねば、留守憑むべきよしもなけれど、物もたぬ身の後易さは、門の戸鎖して彼の使者に、うちつれたちて小僕へ參れば、馳て閑室に招きよせられ、縣正どのの宣ふやう、汝が歎きまうすよしを、陶殿に聞えあけしに、件の大刀は、陰陽二口の名物にて、殊更に秘藏すなれば、いかに乞ひまうすとも、賜はるべきものにあらねど、美人をもて換へんと申せば、これも又黙止しがたしりわれ深窓の御達を喜ばず、只市中風流の少女を愛す。汝がまうす所の女子は、その趣よくわが意に稱へり。しからば潛かに、彼の花とやらんを進らせよ、太刀は引きかへて賜ふべし、と仰せたりき。よりにて花をばわが女兒にして、御所さまへまゐらせんに、その準備をせよ。この夕ぐれに密びやか

に、私幸兩人ばかりさし添へて、竹輿もて迎へとらすべし。この事いはん爲に汝を召びつ。この旨こころ得よかし」と宣はするに、ひとたびは歡び、ひと度は哀しみ、言うけして立ち歸り、和殿夫婦を待ちてをり、「私幸に諾ひし」と、叱らる、かはしらねども、彼の寶刀だにとり復さば、亦せんすべもなからずやは。寔に哀樂のやるかたなき、一つを得ぬれば一つを失ふ。夫婦がこゝろを推量れば、只涙のみ先だつ」と、いひつ、背向に伏し沈み、圓なる目をより赤めて、心苦しきおもちすれば、半七お花は目を注はし、察がる胸と聞く肩、いづれをよしと決めかねて、又いふこともなかりしが、お花は袖に涙を拭ひ、操を破り恥を忍び、かの方さまへ参らざば、いつかは寶刀をとりも獲ん。わらはは寔期して侍り」と、いひつ、も又目を拭へば、半七頼りに嘆息し、「よしや獲がたき寶刀を獲て、故郷へ歸る日はありとも、反逆の首領たる、陶晴賢が婢妾に、妻を賣りてはおん身が爹々、曾太郎殿に塵末來、絶えて面をあはせがたし。義理を辨へ恥辱をおもひ、人たる人になりてこそ、こゝろを盡すかひもあれ。このことのみはうけ引きがたし」と、いふをお花は聽しとも、いはれぬまでに形なき、身のゆくするはかくばかり、落つれば落つる谷水も、墮きとめかねし船の雨、今ぞ賣る身の迎への竹輿も、飄はこの世になき玉の輿、死なんと思ひ決めつ、涙を禁めて莞爾とうち笑み、いひがひなきこと宣ふな。身を汗してこそ馳にもならぬ。一日彼處へ参るとも、病に假託け側へ寄らず、われから

飽かれて歸らん、なでふ事の侍るべき。槐姫はけふまでも、おん往方さだかならねば、世の風聞の虚言ならで、勸宰にて猛火に焼かれ、むなしくこそなり給ひけめ。しかるに獲がたき寶刀さへ、取らずば生涯埋木の、世に出づる瀬にあひがたし。女々しく物を思ひがほして、後に悔のとも及びがたけん、たゆたひ給ふことかは。一と、夫おもへば身を捨てて、いとかひんしく激ませば、半七ますます嘆息し、「しらぬ里へ賣りも遣らば、かくまでに物を思はじ。陶は弟が養父なるに、半七が身の貧しさに、妻を貨に換へたるかと、陶五郎におもはれんは、いと口をしき所爲ながら、御身だにしかいふを、我又推辭むべきにあらず。浮世は苦海八海の、池の築島の配所より、こゝに到りてけふまでも、劬勞に劬勞を重ねこし、果ては仇人の側女となす、過世いかなる悪業ならん。暗話ぶるよしなき身の幸なき、みなわれ故の活地獄、ゆるし給へ。」といひかけて、襟に願さし入る、涙に隙はなか／＼に、お花はよと泣きしづみ、胸に密を押入の、柱にそうて起きも得ず。かくてはいかで果つべきとて、同樹はやをら頭を擦け、「哀しきは理ながら、別れといふもしほしの程、彼の寶刀だにとり復さば、ともかくもこしらへて、身を脱る、はいと易し。早暮れたれば迎への竹輿を、齎して人や來ん。やよお花、亂れし髪をつけ給へ。これは又痛い蚊ぞ。物いふ毎に目口をわかず、蚊々と走り込む。まゝ行燈を」と身を起すを、半七やがて推しと、め「脚もとの薄ぐらきに、老い給へばいと浮雲し。い

で吾儕が二と遠はしく、發煙に移す燈火の、花にお花は屈しノと、思ひくしたる櫛疊紙、涙もて解く白粉も、泣きがほ隠す薄化粧、憂しとはつけの毛筋立、今ぞ流れてゆく水權に、髪のおくれ毛かき拵でも、亂れて物を思ふあり。折しも鄰れる小屋の二階に、誰が手すさみの三紋も、外の哀れをしのびごま、生憎妙に唄ふを聞けば、

すつる身を、何たしなみの髪化粧、わかれの櫛のはかなくも、通り過ぎたる夏の雨、くもろはか
がみの咎ならで、胸の煙を蚊遣り草。この間おはながひとりとごつこと
ばあるべし。見る人するせよ。

同樹は縁に偏袒きて、あふぐ火鉢の燃えたつを、散けば廳で滅え易き、人の命は翌しらなくに、
ゆふべのまゝの黛も、うすき縁と尺長に、むすぶのかみの難面にくや。この間お花がひとりに
くやわれからねに髷つけて、やるかたごなき油手を、拭ふちからもなま竹の、指さへ細るうき身
かな。

浩かる處に四五六は、全介と諸共に、麻の袴の裾高く、とり繕ひて兩刀を、いかめしく挟み、後
方に竹輿を扛かしつゝ、刀治が門をさし覗き、あるじは在宿せられしか。縣正殿の仰せを稟け、お花
女郎を迎へとる、竹輿をこゝに齎したりこと、密びやかに呼門へば、同樹は縁より飛びおりて、恭
しく額を著き、短夜といひ、遠路のところ、各位を勞し奉る。させる設けはつかまつらねど、まつ

杯をたてまつらんこと、いひつゝ、立つを呼びとゞめ、一日の夜の短さ、しから女子を伴ふに、更闌
 けてはいと便なし。縣正の待ちわび給はん、そがまゝにて出されよ。衣裳調度は彼處にて、はや調へ
 て待ち給へり。とくノノといそがせば、お花は良人にうち對ひ、「はかなきものは人の命、今宵が一
 世の別れとならば、憑むは未來二世の縁、彼の一品だに手に入らば、それを故郷へ面目に、浮名を重
 めて主親へ、見参して忠孝の、名を揚す家を副ぎ給へ。いひ遣すことはかまノなれども、胸の疼痛
 くてえらいはず、小侯の人のいそがし給ふに、参り侍らん」といひかけて、解けたる帯を結びそふれ
 ば、半七も目を拭ひ、「苦しき浮世をわたるとも、夫婦もろ共に在りてこそ、又慰むるよすがとなれ。
 身を汗すとも心を汗さず、破る貞操が眞の貞操。よしや堪へ難き事ありとも、身を愛し命を保ち、再
 會の期を待ち給へ。短氣に溜りて此の上に、歎きをまさせ給ふな」といひ諭せば、涙に回答へて點頭
 くのみに、やうやくに縁に出でて、同樹に對ひ恭しく、丁寧に別れを告げ、良人のうへをいひ遣す。
 言葉のすゑはかき曇れど、月も隈なき夏の夜の、朝がましき蟲の音に、慰めかねつ半七も、端近く日
 送れば、同樹はやがてお花を扶けて、件の竹裏に委せしかば、半七やがて處に出でて、四五六介等
 に對ひ、「疑ひ奉るには候はれど、誠にこの女子をば遣らむつ。又某がをひまうせし、寶刀を今宵
 は賜はらさむ」と、問へば至介うち點頭き、「そのことは心易かれ。乃ち縣止殿より證文を賜はりぬ。

彼見給へ」と指させば、四五六は懷中より詩文をとり出して、月光に押しひらき、一つ刀消同樹、同じく半七等がどひまうす、風流士の太刀の事、右權頭殿より下し賜はる所實なり。依つて某これを頼り訖んぬ。この一紙を携へ來ば、件の太刀を運與すべき者なり。天文二十一年六月十六日、縣正小俣性司判」と、高やかに讀み了りて、聽て半七にとらせしかば、同樹も頭を傾けつゝ、聞き果ててうち點頭き、一かかる證據を給はれば、件の寶刀は半七が、手にあるとこれ同む。お花も歡び給へかし」と、いふ間にはや擽けあぐる、竹典にかはれし夜の鶴、手の糸にあらぬ夫の顔を、今とたゞと見かへれば、おろす痛もまよへしの雲、一聲啼きし杜鵑、血を吐くおもひと半七は、仇に折ふる、宿の花、あるとは見えてと、めあへず、人のなけきをわが歡びに、しあはしよしと四五六全介、只管竹典をいそが、つゝ、是うらかへして走せ去りけり。

古夢南柯後記卷之六終

三七全傳 第二編 占夢南柯後記 卷之七 (後軼第三)

東都 曲亭馬琴編次

天神川の凜

こ、も又天神山の名にし負ひて、科なき科を醸すかな。されば刀治半七は、風流士の太刀を取らんとて、その喪さり同樹と共に、忙しく宿所を出でしは、戌の初更にやありけん、元來伎倆ある事なれば、同樹は半七を誘引ひて、小俣へとて出でにけれど、縣正の第宅へは得らぬかす。こ、によるべき所あり。彼處は坂の多くて、老の足には術なし。二なんどいひ拵へて、途にて思ふ儘に時を移し、天神山の麓まで來にけり。このところ右手は高山嵯峨として、一條の谷川、その裾を繞り、左手は葦竹猜々として、百仞の龍路徑を遮る、喪風袖に入つて夏なきがごとく、明月峯をはなれて白晝に似たり。里遠離る小篠原、裳濡らしてわけゆく程に、半七とかくこ、乃得ねば、しばし同樹を呼び止め、是れは何處へのき給ふぞ。小俣の郷へまるらんには、弦を捨てて弓を取るなり。かくては路の便宜にあらず。夜もはやいたく深けたるに、翁途に滞りつ、小俣へ赴き、熟寐せし人の門を、敲かば

心なきに似たり。箕に宿所を出でしより、何とやらん宜はする、言葉の本末おほつかなし。もし野狐に憑かれ給ふか。さらずばあまりにこゝろを屈して、老耄れやし給ひけん。けしうはあらず候はば、吾儕に郷導さし給へ。」といひつゝ、先へ立たんとするを、同樹は疾視みつけて冷笑ひ、一齡七十に餘れども、物ひとつ忘れたることはなし。かかる良行は常にすなれど、錢白腕がして狐狸に、鼻毛數まるる同樹にはあらず。汝かゆく方へ得ゆかぬとて、親をば嘲哂するものか。人の齡の傾くばかり、世に口をしき物はなし。わづかなる由縁を由縁にせられて、百口かく夫婦を養ひ、家を續かし名を續かし、さまざまに劬勞せし、擧句の果ては嘲哂せられて、腹たたい事ばかり。さる恐ろしい心としらば、腰もえただぬ借錢負ひつゝ、味噌鹽に迫はれせじ。和主小僕へゆかんとならば、獨りゆきねといらへもあはず、師を回らし今來し路へ、立ち歸らんとしたりしかば、半七慌忙きつゝ、やうやく袂を引きとゞめ、よろづに心つきなくて、假初の言の葉より、腹たたい奉る、みなこれおのが罪ぢなり。殊さらに夜も深けたるに、半七ひとり参りては、いかで寶刀を遷さるべき。わろき事をば、こゝろくまなくいひ懲らし給はるは、半七が身にとりて、歡ばしくこそ思ひ候へ。枉けて小僕へ罰ひ給へ」と、勸解ぶれば同樹は頭を掉り、「ゆくことは始めより、ゆくとして宅を出でたれば、ゆかんとは思へども、いたく更けたれば今夜はゆかぬ。其處放さすや」と焦燥して、振りとる袂をまた引きと

め、よしんや宵は深けたりとも、太刀はお花と引きかへり、約束に候はずや。然らば今宵は延ばされず、物は油断に寸善尺麩、只いく度も半七が、わろき事あらば許し給ひて、小俣へ伴ひ給はれ。」と、暗話ふるを聞かぬ面もちして、足ふみ囃らし唇を打つ、「さて可い長脚蚊かな。かかる處に立在めば、手も足もふくれあがる。血の氣の薄い老人が、血を吸はれてたまる物かほ。やま半七、よしや小俣へ参ることも、縣正より馬はりし、證文をもてゆかまば、容赦なく太刀を運與し給はじ。さて忘れたり忘れたる。」と嘘はば半七は、懐たる機紙をかき探り、「いな證文は某が、懐中に候。」といひつゝ、懸てとり用せば、「それを見せよ。」と掻い取り早く、掖きも果てすす々に、引き裂き捨つれば半七は咄嘩と許り打騒ぎ、「止しく、太刀と引替へま。」とて、縣正より馬はりし許の書を引き裂き給ふは、解狂か、亂心か、こは何とせん。」と許りに、呆れて髯居に撲地と坐し、遺恨の源にかき放れたれ。同樹はきこそと齒莖をあらはし、足拍子をとりながら、啊々とうち笑ひ、「やよ自物、この證文が何になるべき。餘り念ひが怕ろしうに、一件をいうて聞かせん。縣正の汲引きをもて、お花を陶殿に進らせて、その代に風流士の太刀を賜はるなんどいひしは、皆悉く虚言にて、お花を花街へ売却なし、その身價を引きとつて、九十餘日食はしたる飯束の巻帳を、埒みくる同樹が校計、見る影もなき浮浪人の、半七が食ひ荒せし、お花を頭へ進らしたりとて、寶刀を和郎に馬はらんや。よく物を思うて見よ。主の犬

内殿うちのみやできへ、彼かの太刀たちゆるに滅亡めつぼうせらる。況なしてや和主わぬしが分際ぶんざいで、件くだんの太刀たちを取らんと思ふは、平城ならの大佛堂おほいぶつだうの梁うつはりを、蟻あひがひかんとするに似たり。かばかりしれたることわりを、しらで實事まこととおもひなす。是これを名づけて白物しろものとも、虚氣人うつけものともいふなりかし。註文ちゅうもんかくの如ごとくなれば、反故はごには劣おとる一筋つうを、目今いま引き裂さぎ捨すてたるは、和主わぬしに思おもひ絶きらせん爲ため、彼かの謄文しやうもんの虚實うそまこと、これにてはじめて讀よめたるか」と、わが奸州さうじやを奸邪さしよと、あかして罵ののし大膽無敵だいたんむてきに、はかられけりと半七はんしちは、突つきたる膝ひざを立てなほし、拳こぶしを握にぎり齒はを切きりて、向上へあぐる眼まなこに涙なみだを浮うかめ、「一日いちにち受うけたる恩おんあれば、かかる僣事ひんじし給たまばすとも、はじめよりうち明あかして、かう／＼と宣のたまはば、またせんすべもあるべきものを、百日ひゃくにち足たらす半七はんしちを、養やしなひ給たまひしその費つひえは、いかばかりとはしらねども、詐たな欺かりてお花はなを賣うりては、世よにいふ落穩りかた軼ひに等ひとし。」と、いはせもあへず眼まなこを隠かくらし、「虎落こもりとは誰たれをかいふ。老おいたる親おやをば子が養やしなふ、こは世よの間の常じょうなれど、我われは却かつて子を養やしなうて、借錢かきまの淵ふちに沈しんめば、それを見るめにいふせきに、女房にようぼう賣うつても親おやの貧苦ひんくを、救すくはうといふべき計はか。けふは女房にようぼうを賣うらんといふか、親おやはいふかと、こゝろにまでど心こころよく、しらす親おやするが腹はらだたしうに、風流士ふうりゅうしの太刀たちを密かどにして、お花はなを賣うらして半七はんしちを、孝行かうぎやうものといはするは、乃すなはちこれも親おやの慈悲じひ。然しかるをなぞや目に角かく立てて、親おやを白眼びやくまば比目魚ひりまにならん。湯出ゆで海老えびを見る如ごとく、面おもてをあかめて疾視たしかまばにらぬ、不孝ふかうもの奴め。」と立ちながら、裳ももを穿かけて

鐵と蹴る、蹄を楚と拿り、「身の幸なきに遠く来て、親ならぬ人を親と憑むも、風流士の太刀を引き
 提けて、一たび故郷へ歸らん爲、この故にこそ女房お花も、仇としりつゝ、給事へ、それさへ深く詐欺
 られ、恥辱に恥辱を累ねたる、半七が一期の薄命、お花が恨み思ひやる。舊の武士にてあらんには、
 匹夫下郎の泥臍に、父母の遺體を汚されんや。いと嗚呼なり。」と衝き放せば、倭登きながら踏みこた
 へ、「もとは武士でも諸侯でも、大臣攝家の嫡正でも、いま見る所は素浪人、けふより同樹が子となれ
 ば、泥臍を戴かするを、過分と思つて百拜せよ。刀の柄に手をかけて、和郎は親を何とする。親を殺
 せば竹鋸、この頸の根を挽かる、ぞ」と、足もて肩を揺り動かし、親といふ稱を炭に著て、罵りつ
 嘩みつ、蹴つ踏みつ、打ち惱まざる、半七が、單の衣も破れ口、堪忍袋の緒も締めあへず、頭髻も共
 に弗と斷れて、髪も心も亂れつゝ、再び打たんとふり揚ぐる、同樹が拳の下かい潛り、腕を取つて身
 を起し、「假にも親子の義を結べば、いふべき由をえもいはで、思ひの隨なる拳は受けたり。且く彼處
 へ休らひ給へ。」といひもあへず、提つたる腕を背へ揉ぢ向け、ちからに任して衝き飛ばせば、十歩餘
 り走りつゝ、川邊に掛けたる稻塚に、忽ち礮と衝きあたれば、裏より光りと閃く刃に、同樹は脚
 り著けられ、苦と叫びて倭登くを、倒しも果てず稻塚より、素やかなる手を伸べて、右手なる川へ水
 入と突き入れ、纏て稻塚かき披き、まづ半身を現はして、刃の鮮血を拭ひつゝ、腰なる鞆に納むる形

勢、こはこ、お得意と、半七は月光にと見かう見れば、姫嬬たる婦人なり。ますく、疑ひ惑ひつゝ、
樹立の下に身を倚して、且くこれを窺へば、件の婦人は徐やかに、歩み出でて袖うち拂ひ、つくづく
と立在むにぞ、やうありけりと半七は、樹陰を出でて跡に跟き、「そは何人ぞ」と呼びかくる、聲に忽
ち見かへる顔を、つくづくと見て亦おどろき、「こは婦御前におけさや」と、問はせもあへず手を抗
けて、「あな音たかし。」と推し禁め、立ちながら耳語きつ、又手を抗けて罵れば、痛ましきかな槐
姫は、露に宿り風に靡り、途の疲勢にたどつくしく、掛薬のあなたより、歩み出で給ひしかば、お
通は體て半の冊き、「幼少くおはせし時より、華浴へのほり給ひしかば、いまだ知召さざるべし。これ
はわらはが弟なる半七に侍り。」とまうせば、槐姫問して、「波風しくある世いた、すまひに、をし
からぬ身を存命へて、不思議に面を見らるゝよ」と宣へば、半七はおん前に畏まり、「故ありてこの春
より、本州にささらへば、しのびノへにおん往方を、彼此と索ね奉りしかひありて、圖らざる半七
が、今宵の危窮を姉に救はれ、姫君の恙なき、尊顔を拜し奉る。これわが武蓮の竭きざる所、歡び
これにますものなし。直に宿所へ侶ひ進らせ、憂き來しかたは緩やかに、訊ひ慰め申すべし。いざ給
へ。」として身を起さば、お通は姫を扶掖きて、主従三人月をあかりに、氷上の方へのかんとすれば、い
つの程にか左手右手、一反ばかり引きはなれて、事を窺ふ四五六全介、尻うちかけたる松が根に、煙

草の標を丁と打きて、「落人やらじ」と四五六が、高やかに呼びかくる、聲もひかきす半七は、腰なる
刀子抜き出して、はつしと打てば、身を引きて、袖で落せし煙管の小太刀、程もあらざす後がより、
一實父外祖の難敵、やは腕さじと「全介は、下駄取ぞ捨てて松陰より、走り出でんとする處を、お通
は吐時と見知りつ、、鋭鏡に打つ等を、丁と受けたる側の下駄、ひとはや落ちん衣の風、秋を節に
寛の霜、限なき月に主従は、誤はんとすれど滑びおへす、いとマ衛なく見えにけり」

過去の庵主

刀治半七はその夜より、天神川の邊にて、おもひもかけず神お通が、同樹を川へ飛び流して、危窮
をば救はれたれど、一日親と遊みしもの、難ひ殘忍のこゝろもて、我に聴くまで難面くとも、眼前に
殺せし事、かへつて心に執からず、後日の朝も動くるしけれど、既に權經に環會ひ奉れば、
この日來の本意は遠慮たり。主を思へばなかくに、身の誠危は見まかへらず、全介四五六が虎口を
脱れ、やがて親と姉とを誘引ひつ、、跡を埋めて間道より、氷土の郷へ立ちかへれば、丑三のころに
なりつ。此しほ心おちぬしかば、門の鎖を固くして、行燈の燈口を掩ひ、敷居のこへたにかまひる
てまうすやう、「半七が今此のづまにて、遠くうそらひ候を、姉はさならぬ君も、さこそ怪しうお
ぼすらぬ。そは後にこそまうさぬ。さても陶晴賢が道亂によりて、義隆義基奉たれ給ひ、金を積み玉

を敷きたる。泰山の御所灰燼となりければ、姫君とても恙なく、脱れ出で給はんともおもはねど、
御最期のやうをも聞かばやとて、女房お花も共に、周防を抜して旅だちしは、去年の秋にて被ひし
が、沼多の誓鬮に抑留せられて、心にもあらぬ月日を池に過ぐし、やうやくこの春、所懐の女僧が好
意にて、幸くも沼多の關を越え、この地に年来住居する、刀削同樹といふものは、お花が由縁あるに
つきて、夫婦こゝに身をよしつゝ、商賈にさへなり下りしも、姫君の御座方をしらまほしく、且風流
士の實力を索ねて、身の畏ちを頼はんと、思ふにかひなき夫婦が薄命。これより同樹に歌詠られて、
今宵に還る一瀬の浮沈を、結くる神の名にし負ふ、天神川のほとりにて、環會ひ奉りし、幸ひこれ
に何かはまらん。去歲より何處にか坐したる、また何の教ありて、意きを忘れたまひて、このわた
りには神吟ひ給ひし。心もとなく候。こと、身の憂きよしを掲てまげて、訊ひ奉れば、徳姫は、落
つる涙を袖もて拭ひ、定めなき世のた、さまひ、老僕家人に濁は事はれ、わが親君養父君、所夫さへ
無なくおり給へば、存命ふべくは思はねど、通がわりなく禁むるから、影なき世を忍びてをり。女僧
にあらんと思へども、これすらの大刹に在す、父母に今ひと度、見えてこそと願われ、切の上
をわたつ、住ひし方へかへり来る、心苦しき操してもまれ。わが身ひとつの歌をもて、半七夫婦
にいくばくの、眼書も敷くれば不便なり」と宣ひつゝ、ふたゝびおん目を拭き給へば、半七は貝額を

著き、涙に面を得もあけず、お通もそこそと推算る、主と弟が歎きのかずく、憂きにはもれぬ袖の雨、おなじ簷下に晴間まつ、心持はすれど氣を激まして、弟が方を佔と見やり二やよ半七、和殿夫婦が伶俦ひて、この里へ來たるよしは、故ありてはやしれども、音耗聞えんまもなく、思ふには似ず黙止したり。扱も去歲の八月二十九日、館には飛騨をへなくも、大寧寺にて自殺ましくて、麻の如くに紊れぬる、人の心に忠なければ、逆賊等が鋒鋭く、鶴峯寺へ陥されて、姫君に冊く者は、吾儕と仙野呂東二のみ、幸く圍みを破りぬけて、澤川のほとりまで、延し進らしにりける折、敵透間もなく追つ免け來つれば、呂東二聽て取つて還して、且く敵を挫ふる間に、龍の頸は斃れにけれど、これより主従只ふたり、晝は驟ろひ夜は走り、東を投して赴く程に、うき身の秋や安藝國、沼多の本郷に關を居ゑられ、進退こゝに究まりぬ。せん術なきに川上なる、草の庵に身を寄して、姫の上を説きしらし、ともかくも暫しが程、酒ばしまるらして給はれ、と憑みしに、庵主は老いたる女僧なるが、かひなくしくたのまれて、やがて姫君を舎藏じ進らし、さていふやう、白雲流水は、人間生前の逆旅にして、飛花落葉は、貴賤老幼の榮枯に齊し。かかる亂れにあひ給はずば、いかでか女僧が柴門へ、金枝玉葉に比へたる、姫刀鏽たちの來まさんや。今更にわがうへを、懸置み奉るべうもあらず。老尼は昔大和にて、風流士の寶刀を拭ぎ損じて、罪被るべかりしを、蟻松ぬしに救はれたる、月洞圓樹

が女房、小田井といふものに侍り。さる懐かしうしたたる、夫は京に住ますなりて、いはけなき旅を棄て、岡防の水上に定きて、臨なる世を渡るものから、御事のいやませば、世間いよ、影なく、とにかく夫を謀め難ねたる、これを菩提の種にして、明白に暇を乞ひ、十年以前に離別して、世と計り所縁につき、こゝに庵を結びては、なか／＼に身も安く、忘れて年を遣たりしこ、今はからずも山縁ありし、蟻松ぬしの主なりける、續井家の姫君の、先途を救ひまゐらすは、これぞ離別の夫にかたりて、舊恩を報うにこそ。御こゝろ安く思召せ。とて、信やかに語らひ慰め、おのが女児の事柄の事を、涙と共に物がたれば、恐もしくも又哀れにおほえて、主従袂を濡らしたり。かかりし程に秋も暮れ、無常月の上洗より、庵主の女僧務ることありて、病の牀に臥したるが、老いたる土の病者なればや、一日こゝちよく見ゆれば、次の日は首もあがらず、元來彼處は街道より、東へ入り南へ繞る、浮世に遠き山ふとこゝにて、そのほとりなるものならでは、尋ねわぶる草の門なれば、潜ぶに便りよけれど、庵主の爲に醫師なんどを、招くべきとす。がもなく、しのび／＼に看病も、吾儕の手ひとつなる折から、面こよなう醜くなりし、行脚の女僧ふたり来て、この夜の宿りを乞ひにけれど、こはもし怨敵の聞者よと、驚ひ思へば得も許さず。頃日庵主は如此々々にて、重き病に臥したれば、おん宿はかなはじ。』と、いとも難顔く推辭みしかば、行脚の女僧つくんと、聲を聞き裏を見入りて、『さいふ

ものはお通ならずや、我は平作が母園花なり。妾は夏山に侍るかし」と、いふ聲はその人なれども、面影はその人ならず。後方なる女僧が背に、負はれたる稚児は、平太郎にやあらんずらんと、思へども思ひ難ねて、應へもえせずまもりてをり。當下女僧は遽はしく、笈をかき下しつ、竹縁に尻をかき、かく面影の變りしかば、首告りつゝもなほ疑はるゝ、現にさもあるべき事なりかし。おん身がここに潛じて在れば、槐姫も恙なく、おはしますとは猜したり。わがうへ審に告げんと思へど、こゝはあまりに端居なり、許し給へ。』といひながら、後方なる女僧諸共に、綱代笠をかい取つて、草鞋を脱ぐときに、やうやくその人なりとはしりて、あな淺まし。何の故にか面を焼き、頭部をば剃り給ひし。こはく、いかにとうち騒ぐ、胸苦しさは父のうへ、弟のうへに事ありて、かかる姿になり給ひしかと、問はまほしさも、『端ちかし、先づこなたへ。』と誘引ひて、庵主へ縁山を告げ、その枕方に園居して、まづ事のやうを問へば、園花の尼答へて、兼谷山なる木精塚の事、風流士の寶刀の事、家尊の大人園居の本末、おん身夫婦が孝心より、却つて過を醸せし事、弟平作が、親の爲に命を願したる心操、仙野炊栗が早打して、周防の逆亂を告けたる事、一五十一を説きしらしつ、鼻うちかみ、貝ひとり子なる平作は、身を殺して親を救はんと思ひたる、覺悟の上の落命を、悔しとは思はねど、舎の花なる夏山が、後の歎きもいたましく、はつかに三歳なる平太郎が、今こそあれ人とならば、父の顔

だに認めぬを、遺憾しく思ひもせぬ。彼も痛ましこれも又、痛ましと思ひやる、わが身一つの秋ならねど、世ははつかうと観れば、わかかもしとき思はずも、妹夫の縁を八重締びして、姉御前を苦しめたる、因果忽地廻り来て、かかる歎きにあふにやあらん。この世だにかくの如し。罪障いまだ滅せずば、後世の難苦をいかで脱れん。さればこの身の暇をどうて、女僧にならばやと思ふにぞ、夏山も又もろともに、菩提の道へ入らんといふ。これも又理なれど、二十歳になるやならぬ身の、未だほつかなき出家を遂げなば、世の胡虜となることあらん。賢き人のいへることあり、出家は只出家の後、出家を堅固に遂げよとなん。一日の憂きに堪へず、哀しみ餘つて世を捨つるとも、老いくだちぬる身にあらねば、人も許さずわれも又、志の破るに易し。誓ひ空を變へずとも、只平太郎をばくむを、身の勤めとなし給へ。吾儕は齡も傾きぬ、且半之蓬殿には、わが姉こそ正嫡なれ。然れば良人に暇をどうて、今はや出家したればとて、笑はれもせど、誓めもせど、思ひ止まじ給ひねと、丁寧にいひ諭せしかば、夏山親を改めて、こは母突の宣ふ事とも誓え侍らす。一年弱しとて捨つる世の、何かは難き事の侍らん。母御前には良人あり、齡五十に近けれども、元來人にまぐれたる、無教にてましませば、四十のうへはまた超えぬ、女房とこそ人も見ぬ。わらはは既に良人なし、貞女兩夫に見えずと、幼穉き時に父母の、いひ教へ給ひたるを、今更に忘れんや。然れば母御はかくても在せ。夏山

こそ出家すべきものに侍り、と回へつ、さて嫁姑もろ共に親と良人にこれを告げ、身の暇も許はれ
と、しばしこひ類へども、親も良人も半之進ゆるし給はず。かくて平作が初日忌の遠夜に當
りつ、此の夕わが宿所に親族おのノ集會ひたる、その席上にて夏山は、父と外父とに申すやう、出
家の事を日來より、懇ひ奉れども許し給はず。こは妾が年わかければ、ゆく末心もとなしとて、許
されぬにやあらんすらん。心は親によるものならねど、又そのよしなきに侍らす。しかりとも、ふか
くも思ひ定めしを、いたづらにやは止むべき。これもて疑念をはれたまへ、といひもあへず、爐の火
の中へさしくべたる、火取の柄をしかと取り、

花は根にかへらばかへれ生きたがらつひの薪と身をばなしにき

と詠じつ、烈火のごとくに焼けたりける、火取を顔へ推しあつれば、けぶり忽地發と立ちて、一聲
苦と叫びもあへず、仰げごまに倒れたり。吾儕この形勢を見て、われも又かかる志はありながら、
夏山に先せられしは、生涯の不覺なれ。後れはせじと、火取をかいとり、

櫻木をぐだけば後の花もなし死出の山かせいざふかばふけ

と詠じも果てず火取を顔へ推し當てて、もろ共に倒れたり。さる程に親族いたく驚き騒ぎ立て、さまで
まに介抱せられしかば、や、人ごちあつきたるに、佛菩薩の冥助やありけん、夏山なり吾儕なり。顔

はこよなう罰れにけれど、つゆばかりも痛みを覺えず。當下わが所天は、わが兄を見せへりて、蟻松ぬし見給へりや。彼等身を捨てて出家を願ふ、勇猛堅固の志、賞するにあまりあり。蘭晴賢が述懐以來三十日に及べども、蘭の生死存亡、今にこれをしる由なければ、わが君御夫婦いといたう、心苦しくおほすめり。さるからに開謀者を遣はして、彼の地の屍體を撈り問はするに、安藝の沼多に蘭を居立て、周防のかたへ入るを許さず。然れども尼法蘭は、その沙汰をよめかれて、往還自在なりと聞き、幸ひなるかな園花夏山、面を燒きて尼とならば、よしや敵地へ赴きて、蘭の在所を索めるとも、誰かはこれを認るべき。良人に代り子に代り、彼等大功を立てんこと、この時ならし何日かを期せん、園花が出家の事、今ぞ望みに任すれば、夏山が身の願ひも諾ひ給へ、といはれしかば、わが兄莞爾と打笑みて、いふにや及ぶ女兒が出家を、立地に許すべし。彼等面を燒くといへども、痛みなきは頗る奇なり。とくく、出家を遂げよ、とて、この表延請したりける、老翁を導師として、戒を受け髪を剃り、菩提は拈華、夏山は、微笑と法名別はりて、宿志を果すのみならず、かゝる大事のおん使を、うけたまはるこそ今夏に、哀しみの中の歡びなれ。不幸の中なる幸ひかなと、我も思ひ人にもいはれ、蓮花の装ひを整へ、次の日は、はや道途せんとするほどに、わが姉は昨々より只管泣きて、おはせしごと、このときいよ、堪へがたくてや、落つる涙を拭ひもあへず、恥かしそ姉かひに、年來

夫とひとつにをれど、憂きはいやますわが子の上、こゝに下とぞらたかくやらんと、思ひやりつゝ、歎く苦しき。われにはまして園花どの、早くも露の世を避れ、身を雲水に任すること、羨ましく侍るなれ。せめてこの平太郎を、吾情が手親をみては、後やすく起行を給へ。名残をしや、といひかけて、また薄然と泣き給へば、わが兄も又宜ふやう、汝等愛ひ重を捨つるとも、生ある程は艱苦を奈何、然れど行脚に嬰兒を、携へんは便なき所行なり。そは三勢どのにうち任せよ。我又よきに頼るべしと、丁寧に諭し給へば、夏山の尼頭を推し、父と外母御前の淺からず、教へ給ふを推辭むにあらねど、凡そ殿の御内の黨、忠あるも思なきも、敵地へ是く事かなはず。しかるに吾情幸ひに、彼の地へいきて功を立て、君父の勲賞賜はるとも、捨て果てし世に何かはせん。男子は關を許されずとも、わづかに三歳なる平太郎は、ともかくもして超さば歸してん。何の爲には孝ありとも、させる忠義は聞えざりし。亡者の名代に、この子を携へゆきてこそ、草の原にて平作殿も、さぞな辱しと思ひ給はん。枉げてこれをばゆるしたまへと、只管に頼ひしかば、結御前はいふも更なり、わが兄ふかく感嘆し、わが女兒の情懇、いと理に覺ゆるかし。三歳兒なりとも武士の胤、父に代りて母もろとも、敵地へ赴き功を立てよ。心ありて面を燒き、心なくして忠に誓む。彼の豫讓が灰を呑み、身に漆をこしたるは物かは、と稱賛して、いと誇しげに見たて給へば、わが所天も只宮に、夏山を可しとして、密やか

に宣ふやう、仙野口東二取つて返して、頼のおん往方を察しといへども、彼の關に留められなば、これも又思みがたし。汝遠いかにもして、櫓に環會ひ奉り、關の鎖しの開くまで、深く潛はせ並らせよ。安藝國高宮郡、多治比の郷の地頭職、大江太郎乙就は、僅かに二百貫の主なれども、彼名家の後として、勇敢武畧當時に秀づ。只その身祿少なく、坎ひの微なる故に、晴實に隨從し、逆賊與黨の志を見はずといへども、裏には大内家の舊好を忘れず、不意に起つて晴賢を滅ぼさん。この人なるべし。われ又殿に聞えあけて、竊かに大江家に諜しあはし、頼の御駕に、道中を討滅ぼして、大内殿の怨みを復さん。この事ふかく心に秘めて、縁をもとめて大江家へ、便らば後に買けを得なん。ようせよ、と説き示し、送るもの袖に露、ほらひもあへぬ浮世の塵に、まじり道者は親子三人、もしこと成らなばこれぞこの、一生の別れよと、思へば星も進まねど、上心を注ぎしは只管に歩を急ぎ、いく宿りしてやうやくに、けふしも彼處の關を超え、西條のかたへとて赴くに、忽地に途にまどひつ、浮世に遠き柴門に、宿を乞へば思ひきや、頼の隠舎ならんとほ。是れ頼子が誠心を、神と佛の懺みて、導き給ふものなりと、首尾を演べ給へば、夏山比丘尼も涙のひまに、平作が最後の光景、物がたつてはうち軟く、おなじ宿の結しぐれ、晴る、よしなき一家の歎み、彼の世この世の消が事、外母従弟女の變れる前景、見るにつけ聞くにつけ、胸のいいたく案がたて、又慰め

んよしそなき。絆の趣を窺聞き給ふ。院は忙はしく、扇風の背より走り出で、園花夏山南女僧、さても雄々しき心操、感すればなほあまりあり。故郷を出で海山凌ぎ、飛錫行脚の難行苦行も、いふわれ故と聞く時は、けふの対面いと恥かし。愁ひに生き残りて、身を苦しめ、又人を苦しめ、いくその罪を造らんより、たゞ速かに自殺して、冥土にましますわが所天に、心操をしらし侍らん。もしこれとても大和なる、親のぬらしを得受けねば、事かたはじとて許されずば、枯華、微笑か弟子とへし、けふよりぞ入る御佛の、法のみちびきしてたべと、かき口説きつ、泣き捨へば、園花の尼より慰め、御こ、ろの中推量れば、痛ましきこと限りなけれども、御出家の事は未だ遅からず。女僧等がこ、へ来る途にて、人の密めき語るを聞くに、去歳の九月二かの日、大内殿の御君は、築山の御所に、おいて自害まし、猛火の中へ入り給ふと、世にはをさし、いふめれど、痛かに助け奉る人ありて、義基今に恙なく、ふかく濟びて在すといへり。この事もし實事ならば、御出家は卒衛にはべらん。陶五郎が舉動、養父晴賢が悪慮をたすくるに似たれども、その底意はいかにあるらん、善悪未だしるべからず。いそがい給ふことかはと、さまんくに慰め進らすれば、庵主の老尼はいと重き、病苦を忍びて身を起し、馬原來行脚の尼御前たちは、蟻松ぬしの息女なり、孫女にておはするよ。室に不思議の縁ありて、去歳の秋より、徳蓮主従を畜養ひまらさず、吾儕は刀治園橋が妻なり、首尾

は筒様々々と、昔を今に繰りかへして、わが上を説きしらし、「我も夫はありながら、はやくも菩提の道に入りし、事の様は似たれども、飽きもあかれもせぬ夫に、わかれて手の蒸の道に入る、尼御前たちの心操は、いと有りがたく侍るし。尼が老病身に逼れば、終焉も遠からじ。然る時はこの庵、忽ち無住となりて、姫主従の、身を寄せ給ふに便りよからず。是れのみ心苦しかりしに、今はからずもこの庵を、守るべき人を獲たれば、世の疑ひを遣くるに堪へたり。尼もし往生の素懐を述べば、拈華尼は後住となりて、明白に修行し給へ。この地の人氣は如此々となり、筒様々々とおちもなく、信やかに説き示せば、拈華比丘尼大きに歡び、扱は父が前妻の従弟女なりしと聞えたる刃治同樹の女房にておはせしか。舊縁こゝに鞠きすして、新尼等が師と仰ぐ、實に不思議の對面なり」とて、その夜は通宵語りあかしつ。かくて二人の新尼は、同宿と稱して、笈を背負ひ、錫を突き鳴らしつ、毎日に三原尼道へ出でて勞縁し、ある時は甲立多治比のかたに赴きて、大江家の虚實を探り求めなどする程に、其のとしの暮に及びて、庵主小田井尼遷化したり。豫ての遺言に任して、拈華比丘尼後住となりて、更に拈華庵と號し、微笑比丘尼諸共に、日に市へ出でて勞縁すなれば、近き里人等もこれを疑はず、よき後住を得て、小田井の道場を相繼せし。といひあへり。ある日に存立ちかへりて、彌生の申旬或一々ふたりの新尼は、例の如く勞縁して歸りつ、吾儕に對ひて、「けふは九半七夫

歸に逢ひぬ。彼等去歲の秋和泉の壘にて、隨が逆亂を傳へ聞き、目をかぞへて途を急ぎ、國防を盡して是く程に、沼多の新聞に留められて、六ヶ月の宿りをかぞね、路費竭きて術なしといふ。しかれどもわれも夏山も、雨影いたく變りければ、外母なりとも妹なりとも、名告らねばいかでしるべき。只半七の兵平太郎を討しけにうち見たるが、彼等心中に憂へを抱けば、これさへ侄とは思はざりけん。しらればしらぬ隨にして、外々しくその故を問へば、如此々々のことによりて、國防の山口へ赴き、刀治岡樹といふものを尋ぬるといへり。おもふに彼等は、神姫の先途を見まらざりて、又風流士の寶刀を索ね出して、犯せし過を免されんと願ふなるべし。然れども彼の寶刀の事は、館驛既に後悔し給ひて、思ひ捨て給ふものなれば、今更これを求め出すとも、勢するのみにてその功なし。名告りて事の趣を告げしらせ、庵へ將て來ばよと思ひしが、彼等は元來、その罪にあらずといへども、いまだ君より赦免を得ず。加旆廣くもあらぬ草庵に、わかき夫婦を引き入れなば、これより里人に疑はれて、神姫のうへに、又いかなる親のいで來なん。これも又影護し。その行く方は既に聞きつ。けふは名告らで立ちわかれ、壘のうへに事あらんとし、半七に功を立てきして、身の幅廣くするにはしかじと深念して、なほ外がましくこれをもてなし、わが柴門すら定かに告げず、只彼なる國防陣面をとらしたり。と物がたり給ひしかば、我もはじめて、おん身夫婦が、うき旅に年を越えたるよし

をしるから、心もとなきいやましたれど、忠義の爲に思ひかへて、只一たびの首耗もせせす。しかるにいぬる月、沼多の關の戸開きたるころ、拈華庵主のくりなく、仙野呂東二が、難の往方を案ね遣らするに逢ひにければ、難を受けたる計策を告げしらし。大江家の形勢を見て来たまへ。とて、これをば多治比の郷へ遣はし、彼の人の歸り來ば、一回、難告のおん俱して、大和へ赴かんとて待つ程に、呂東二は歸り來ず、何事やらん、沼多の近郷いと懇劇がしくなりにければ、難告こゝに在するよしを人にやしられたりけん、しからば呂東二の歸り來るを待ちがたし。備前備中までも、延しよるらせんと思ひて、王従が影を襲し、新尼たちを前に立たして、拈華庵を出でたるに、ゆくこといまだいくばくならず、野伏忽地四下に取りて、新尼たちは隔てられ、三原のかたへゆくことかなはず。かくはゆくさきこゝろもとなし、却つて山口の方へ走らば、野伏の害を免れ給はん。見半七は、米上の郷にありと聞けば、かかる時にこそ、弟に功を立てさせんと思つて、やうやくに虎口を脱り脱げ、王従ふたりたどるくも、晝は人なき樹陰に隠れ、夜のみ道を走りつゝ、天神川のほとりまで来たる折、あはれ身に人に撃ち懸らざるゝことの様を察聞くに、いたくおん身を奉つものは、刃而闘にこそあんなれ。道奴はよからぬものなるよし、前の庵主が物置ににしりぬ。うたてやな半七は、親戚士の實力を案ねん爲に、彼と親子の義を結びて、今この時責を受くるにこそ。難告を倉藏ひきまわらしたる、

尾には萬の夫なりとも、這奴を在らせば半七も、志を舒べがたく、姫君のうへいと危し。今忽ち不意に出でて、禍を斷つにはしかじと、思ふ心を鬼にして、扱ぞ同樹を砍り流しぬ。」と一五一十を物がたれば、半七しばし嘆息し、「外母園花どのはざらなり、平作といひ夏田といひ、世には稀なる孝烈の弟、弟婦を持ちながら、半七はいひがひもなく、只管寶刀を素ねん爲に、刀治同樹にはかられて、彼が子となるのみならず、女房お花を賣られたる爲體は、筒様々々。」と、夫婦が薄命を告げしらし、さるにても、悪棍の同樹が妻にも、又かかる眞實の比丘尼あり。只遺憾しかるは、某夫婦眼ありながら、縦ひ面影は變るとも、外母と妹をそれともしらず、抖擻の女僧とのみ思ひて、外々しく立ちわかれ、後に庵を素ねたれども、沼多川の東村には、さる柴門のなかりしかば、原來は信する辨財天の理化して、關をば越えさしたまひけんと、悪かにも推量りて再びは尋ねざりし、身の意りこそ面目なけれ。しかれども半七が、武運いまだこゝに塌きすして、姫の先途にあひ奉り、死をもて恩に報はんこと、これ平生の願ひなり。」と、回答へつ、或は歡び或は歎き、義心面に見はれしかば、姫は今更に、憑もしき心持しつ、お通もろ共半七お花が、薄命を憐み給ふ。會話に夏の夜の、夢なく開けて門にさす、旭は高く昇りけり。當下半七は窗の扉引きあけて大きに驚き、長物がたりに時を移して、思ひの外に天は開けたり。わが姉同樹を殺し給ふ折、二人の辯者左右に立つて、事の爲

體を張うた。一旦は逆を理めて、この處へ伴ひ奉ると雖も、這奴等かならず縣正へ訴ふべし。しかれば麻々と、主従こゝに在らぬ事は、薪の上に巢を營む燕にことならず。天の明けぬ間にこそ、煙の御供して、靴れ去るべう思ひしに、目も出でたればいと便なし。さればとて此の處は久懸の家にあらず。まづ姫君に湯洗を進らし、主従物よく纏へて、間道より走るべし。さほとて肩に火のつく如く慌忙きつ、支度やうやく調ふ程に、踏次の人目をしりおぼれり、お花がきのふ腕を括てたる、ふるき布の單衣をお通に散せ、お通が單衣をば、懷姫に被せ進らせ、半七は長やかなる刀を取つて馳込み、「奴も」「笠も」と急がす程に、外面に荒然と、人の走り來る音して、門の扉を打ち敲き、刀治むのはまた是めすや、刺探するには隠もあやなん。森惚れすによく聞き給へり。これは村長より御使承つたる、十箇村の歩牌場太郎なり。何かはしらねど、尋ね給ふよしあるに、半七を將てまゐれ」と宣はすれば、とくも乃とらに参り給へ」といかわしく呼びかたなり。半七はこれを聞きて、まはかたうへまと思へども、なか／＼にうちと懸かす、まづ姫君を奥へ潜ぼし、さてお通に密語くやう、「絆此にこゝにおよばば、このまゝには脱れ果つべうもあらず。某は歩牌と共に、村長許赴きて、ともかくもいひこしらへて、やがてを歸りまゐるべきに、婦御前様門と背門をよく鎖して、半七が歸るを待ち給へ。暑さ甚へがたく坐すべけれど、夜の方ごまをば納付なる、押入の上戸開へ、潜ばし給へ。」

といふ間に、また門の扇をうち敲き、「何れぞのはまた聞きませぬ。いつまでか待たし給ふぞ。」「侍長と申すの侍れは、つねはんとく／＼のきね」と云かざれば、半七はなほ鼻がすこおひ、「と應へて、單階より、半七にかけたる扇柄、並取つて穿くほどに、お通が當つる横返や、動さへいたや、半七は鼻が、いびつれてとへさすば、貝殻を脱けて歸らんものぞと、思ひ定めて騎共の、懸添して門の扉を、美落離とあけ、若さまに、扇と建てたる半七を、先へたたる場々節は、要足雜々々と、敗草履に敷かへて歸つたたしつ、なほいそがして斷て行きぬ。

槐樹の手斧

お通は住みつかぬ、家におゐる心胸を指で、今更脱れかたなやめ、扇の上をわたるより、おほ危きは壁のうへ、葉がうへも心もとなし。半七はとく歸れかし。住しも遠るも敵の中、廣き世界を帆布の、おあひがたき借被の單も、君が爲には焼かすべき、熱こそなれわしかすがに、濡る、はななち快なる、八しほにあまる物思ひ、わびつ、清てばけと長き、夏の日影もやうやくに、西へ傾くひつじの時、居庭の歩みか昔もせず、貝門の扉をほとと、敵は常に半七なるべし「思ふく歸りしよ、侍れわのいき」とひとりこゝろ、やをら門の扉引きあけて、と見れば彼は半七ならず、叶障とばかりうら懸く、気色を見せじと思へども、寝もつ朝におのづから、睡はわなく、保ひつ、「何處より來ました

る。半七は宿に在らず、翌また来ませと門の扉を、引きたてんとする手を楚と捕り、そのみい添せ
くし給ふな。わが宿にわが来るに、けふの翌のといふ事あらんや。抑、おん身は何ものぞと、問ひ
つ、聽てにむりあがれば、お通は直と呆れ果てて、且く顔をうちまもり、一わらははあるじ半七が、眞
實の神に侍り。この刀治は半七が名蹟相續せしと聞くに、わが宿とはなめけなり。留守するものを女
子と侮り、なき事をいひかけて、折もよくば、物を取りて走りんとての底意か。出でてのきね。と言
葉徒々しく、弱氣を見せねどとにかくに、心にかゝる納口なる、腹にぞ刺を痛めたる。いふ事いけし
て冷笑ひ、半七は刀治の、名蹟とならばなれ。同樹どのとは恨これ他人、我は敗賊の全介とて、刀治
の孫息子、京にて生まれ浪華にて、人となりて平城西園、跨にかけたる氣嗣もの、勿論養母の世にか
りし且は、孝行といふ事を、養しばかりは眞似ても見たれど、持步で辛い世は渡らねす。近事祖母に
しこまれて、わるい事には熱れ易く、律義篤實さりと止めて、護手に抱なる理を取り、本錢奪れず
聞かると、いふ事ならば何時でも半口。されど馬には騎つて見よ、人には添へといふ事あり。半七に
は、まだ面識にあらねども、姑御といへば疑ふたる。鍋にはいれやます臭い串、表裏なりとも吸はして
たべりと、いひつゝ、氣と抱きつくを、能き除けて走り退き、あななめけなる内物かな。みだりかはし
く手を出さば、幸きかを見て懐疑せたる、とくく、去きぬ。と感して、間かぬ懸してにむら寄り、い

な姉御、さのみ難面く宜ふな「歸れ。」と出でよ。」と追ひ立てても、爰より外に宿はなし。半七が姉御ならば、面識にもなるべき物を、全體御身は何處から、何日又こゝへは來ませし。」と、問はれて忽地さし詰り、應へかぬれば冷笑ひ、「そはいはれまじいはぬとて、いはせでやほと、いへば言葉に角がたつ。いはぬはいふにますは色情、一目看しより、命にかけて大誓文、男風流は二の町なれども、第一によく挿丁いで、小遣錢に事缺かせず。第二には朝起きして、飯炊き下して家々を起す。第三には水を汲み、洗濯衣の手傳ひする、夫にすれば得要向き。色ある返辭を聞かしてたべ。」と、又引く袖も荷し事の敗れにやなるべきと、思へば今更もて煩ふ、胸苦しさを笑ひに紛らし、「色は思案の外とかいへど、よく思うても見給へかし。御身はこゝの孫のり補、と宜ふに偽りなくば、同樹殿の子になりし、半七はおん身が爲に、假初ながら親ならずや。その半七が姉なれば、妾は即ちおん身が伯母、その伯母を犯さんとて、不義いひかゝるは是れ畜生。人は萬の靈なるものと、かしこき人のいひおきし、五常の道をしらすもあれ、畜生に異ならぬ、行ひごまはあまりなり。」と、恥かしむればうち笑ひ、「さて物々しき服忌令、禁忌繰りて害めても、いひは逃さぬ互の誓言、わが夫にせん。」とて、正しく贈りし壻引出を、はや忘れしか。」と抱き留むれば、やうやくにかい遣りつ、「こゝろ得ぬ事いはるゝよ。けふあうてけふ初めて、物いふ人に何をか贈らん。酔ひに紛れてか、様々なる根なし言聞く

いとまはなれ」と、いひつゝ、も又走り退くを、遣りも過ぐきき幣引き留め、一歩しき證據あるものを、
今更に續はれては、一分たたる男子の意持、これ見てもなほ諍ふや」と、いひも果てずに遠はしく、
俵よりとり出す、隻足の襦の下駄の真中、打ちこゝし、幣は、胸に覺えぬあるよしを、いほでも色
に映はれて、「それは」と許り口隠れば、再び目前に衝き着けて、「いかんこれをよくも見よ一神を誓ひ
て、天神川、葵と語りこむ水浴みせば、婿を祝ひ、昔風流、亦逢ふまでの像見ぞと、打ちかきて贈る
を、受けたる下駄は今宵の烏臺、思ひあうたる婿夫の道を、踏み違へじとて來しものを、婿に
てありけり。」と、下駄に寄せたる戀ならで、今ぞ讀めたる身の仇に、お通は結句うちも騒がず、「その
笠の引出物、いはるゝ如くおほえあり。見放してだに給はらば、婿夫の縁を結びもせんが、木を伐
るものは斧をもてし、娶れるものは媒による。迭に浮氣の轉び寐は、袷蒲團の薄情、二つ枕の間よ
り、秋風たちて未遂けず。半七が歸りて後に、彼にも縁由を告げ、さて媒妁を離うて。」と、半ばいは
さす頭を掉り、「いな半响も延ばされず。勿論夫婦の婚儀には、媒妁もあるべきはず、處を畧すも世に
往々あり、なくては解はぬは待女郎、これには奥なる地帯、引き揃り出して日に物見せんと、雲裏
けて立るあがれば、お通は叶塵とすがり留め、一原來昨々の形跡を、一から十までよく見果てて、し
かへしに來たる數體全介、半七はわが實父全八どの仇人の一隻、汝は父祖父の仇、彼も是も放され

ず。累なる怨みに眼前、槐蔭が首を纏ねて、陶殿へ送らする。妨はすなふと丁と躍る、星を抱きて
 此とら救さす、さ聞いては彼處の敷居を、一步なりとも踏えさせじ。女子にこそあれ主に謝く、赤根
 半之進が長女、通が命のあふん限りは、御君をやは棄たせじと、進はる力も女子の救なき、頭み縛
 ばされて、髻断離れ、髪も心も亂れ焼きなる、覺明覺りと引き抜きて、突きかくれば身を反り二腕れ
 よなと持つたる下駄に、刃を至理と打ち落し、杖む腕を背へ揉ち揚げ、壁に掛けたる緋袴を、かい
 と自ら早く摘め著けて、柱へ楚と繋ぎ留むれば、お通は頼りに驚きして、柳の眉を引きたてつ、眼を
 降し齒を切り、口をしや、もし半七が宿に在らば、かくまでには手ごめにならじ。去處より敵の刃
 の下を、いく還か脱れくして、けふ思はずも、殘忍無頼の惡鬼に、あへなくも撃たれ給はん。御君の、
 御運の徳、歎くにもあまりあり。庶幾生きながら、靈となりて善きまつはり、御君を救はでやは
 この半七はなぞで遅き、風まつ程なる燈の、花よりもなほ危き、御君のおん命を、助くる人はなき
 世かごとかき口説きつ、身を起し、走らんとすれば縛めの、案に案かゝる、意馬心猿、狂ふまいと哀
 れなる。その隙に奎介は、緩びし帯を結びをへて、裳を引折り刃を引提けて、ふた、びお通に立ち對
 ひ、やよ、赤根が長女、汝は祖父同樹どのの仇人なれば、第一に首引き抜きて、手向くべき奴なれど
 も、いきしほし活しおきて、櫛鬘が首を見せ、驚くまで物をおもはせん。いでや懸をこと、踵を廻

らし、納戸へ走り入らんとする、背に開くる門の扇の、音に信と見返りて、「歸りしものは半七なる」と、問はせも果てすこの形勢に、奮然と走り入り、「我を半七としる汝は、お花が迎への私卒なり」とて偽り來りし、同樹が夥計の悪棍なるよ。女子とおもひ侮りて、姉をばいたく縛むるとも、われ今ここに歸り來つれば、物とらんとする是姦奴、さぞな校計違ひけん」と、罵れば眼を騰らし、「盜賊とは過言なり、われを誰とか思ふらん。相合橋のほとりにて、汝が父に撃たれたる、今市全八郎が落胤、同苗全介なるをしらすや。親ならぬ親に守まれて、浪連にて人と成りしかば、近ごろはじめてわが實父の、仇人を赤根と傳へ聞きて、更に大和へ住宅を轉じ、樺木の松原にて、半之進を狙ひ撃つといへども、微連にして素意を果さず、友だちにこそ、のかざれ、風流士の太刀を追うて、この處へ來て思はずも、なき母の懸父たる、刃治同樹に襲合ひ、汝がこゝに在るをしれり。しかれば今の半七もわが爲には仇人の一隻、まづこれを撃ちとつて、聊か亡父の孝養に、供へんものぞと思ひしかば、更聞けて俵つ天神川の、水逆さまに流れてや、却つて汝等に謀られて、あへなく祖父を撃たしたる怨みをこゝに復さん爲に、汝が姉に幸きめ見せ、汝等が主と仰ぐ、樺木の首を削れて、汝が歸るを待たんとせしに、招かすも寄る夏蟲の、水蟲に似たる青蠅ども、押し並べて撃ち殺らん、觀念をよ」と勢ひ強く罵り返せば、半七は飄然と打走ひ、「原來汝はその昔、不忠非義の聞えあひて、わが父に撃たれたる、

全八が子なりしか。天罰脱れず落命せしは、汝が親の自業自得、とは思ひかけすして、復讐など
 人がましく、罵るは傍痛し。主と親とに寇をなす、汝を争で放すべき。刃を受けよ。」といきまきつ
 つ、袴の左右を袖みおけて、袖の間へ、あは、全介ます、大きに怒り、「無益の談言吐かんより、
 念佛まうせ。」と跳り莞つて、敵らんとすれば半七も、技きあはして丁々發止と、然しく打ちあふ舞音
 は、鍛冶が鑿に異ならで、刀尖より火を出し、一上二下手練の太刀風、あふり立ち、巻きかへし、愛
 けつ流しつ戦へば、お通は傍に降さの、見る目いぶせく立ちつ居つ、弟に力をそへんとは、思ふもの
 から縛しめの、索に引かれて輓び、又身を起して走りまゐるを、二妨けすな。」と全介が、足を飛ばして
 敵と闘る。灸所を撲たれて苦と叫び、控と倒れて起きも得ず。浩かる處に外面より、士卒百人餘を將
 て、いかめしく先を追はしつ、手親首楯かき托き、刀治が門ちかく、いで来るものは別人ならず、
 これ陶五郎屋春なり。今茲二十歳の角前姿に、身も高く人品秀で、大和錦の陣羽織に、金作りの大刀
 を佩き、正平革の身甲に、鹿の皮の行膝して、十五頭の鬘鬘に、踏踏みしむる意氣揚々、凛然として
 門邊に立在ふ。とく打入れ。」と下知すれば、先鋒ある兵二三十人、はらりと走り懸つて、打ちあ
 ふ刃を割つて入り、「陶五郎の職名なり、鎮まれやつ。」と搦し隔てて、半七と全介を、左右へ引き寄せ押
 取り巻けば、全介は齒を切り、半七は今更に、胸うち懸けど綱裏の魚、且く息を呑きてをり。當下

陶五郎は忽然として土座に、味凡を立てさし尻を掛け、刃半七承れ。汝は逆巻を喰ふよし、吾人あつて健かにしれり。さるによつて、眞に村長が召しよして、事の標を尋ねざるに、首を降りて首伏せす、一旦教ち歸せしは、その不意に出でん爲なり。身の仇なれども故主の息女、人傳には、心もとなく思ふゆゑに、降参みづから向うたり。標をとく出せ。といそがせば、半七は怒れる眼に涙を含み、「推参なり陶五郎。おなじ父母の骨肉なれども、汝晴賢に養はれてより、心ざま父兄に對す、頼りに養父が逆謀を翼けて、相傳の主君を害せば、天と人と共に害れず。誰か生きながら、その六み食らはんことを廻はざらん。然るになほ禪らず、こゝに來て、標を、害し奉らん」と謀るとも、「吾こゝにはましまさず」とく／＼歸れ。といはせも果てず、腕かへして信とにらまへ、「邊言なり半七、むかしは兄弟今は怨敵、身の中の腐る、をば、早く鐵ぞ除かざれば、その腐り除去がたし」と古人もいへり。君、臣を見る事、鷹芥の如くせられしかば、臣又君を難となす、父子兄弟もこれに同じ。大内殿の滅亡は、みづから招き、孽なるに、わが父を逆賊と、罵るは悲ひならずや。そはとまぬかくもあか。標は愛にあらず」と、陳すればとて實事として、立ち歸る降参ならず。論より正しき人あり。厚信、人とも出でよ」と呼び入られて外面より、「何」と應へていで來たる、敗鐵の四五六が、はじりには似ぬ毒々しき打打、飾磨組の四天に様眩當さして、朱鞘の兩刀いかめしく、

漢歩に歩み入るを、全介はつゝ、と、これを見て且果れ、一團五六えらき出世かなこと、いふをば絶
 えて見もかへらで、半七はうち對へ、一團に對きて、父と共に華洛に赴き、それより直ぐにこの地
 へ來たれば、汝はわれを見忘れけん。父二郎大夫が身まかりし後、不覺に淫酒に身をもち崩して、鶴
 峯を遂電し、漢華へいづきて、敗蹟の四五六となりさがりたれども、去歲の秋、父と、八立ち歸り、
 全團殿に尙稽して、むかしの武士に立ち歸る、厚倉主人友善が、奉公の手はむめに、一團の訴人せ
 し、證據はこれぞ」とさし出すは、夜べ打ちかけたる半七が、刃に附けたる小刀子なり。半七はこれ
 を見て、拳を握り齒を切り、一原來汝は二郎大夫の一手人なりけるよ。汝が大相に在りし日は、わ
 れ總角の頃なれば、その面影をよくも認めず。曩にはこれなる全介と示しあはして、一小僕よりの使
 と爲り、女房お花を奪ひ去り、今亦一團のおん在所を、敵へ告げてその死を促す、揃ひに揃ひし夫
 自物。半七が刃の目釘のつゝ、かん程は殺死せん、そこな退きそ」と罵りて、立ちあがらんとすれば團
 五郎、「這奴打ちすゑよ」と下知するにぞ、推取り巻いたる兵等が、揚ぐ、る筈に半七は、背肩腰亂打
 ちに、打ち惱まされて倒れけり。厚倉主人これを見て、胸々とうち笑ひ、「案内知つたる納戸の内、い
 で姫君のおん頭を鳴はらん」といひかけて、やがて奥へ走り入り、且くして聲をかけ、丁と打つたる
 太刀音に、半七はたゞ氣も半亂、お通もやうやく身を起せど、縛めの索と數ヶ處の撲傷に、脚腰たた

ぬ大傷の鼻、共音になくそ理なる。かかりし程に厚倉隼人は、鮮血下する。頼朝の、頭を引提けて
走り出で、諫て納戸に舍藏うたるを、某曩に背門より張ひ、その巢をばよくしりつ、殿いり百餘し
給へ」と、いとほりかにさし出す。姫の首級を陶五郎は、と見かう見て莞爾とうち笑み、「女流なれ
ども、義基の北の臺、續井順勝の女兒なれば、生けおかば後口の綱胎、わが父頻りに心を勞し給ひたる
に、御邊の忠訴によつて、忽地に頸を獲たり。されば此度の勲賞に、父二郎大夫が舊領を、還し與ふ
る所なり。富田の和歌山に在住して、なほ忠勤を勵まるべし。」と説き示し、携へたる首桶へ、姫の首
級をとり納るれば、厚倉隼人額をつき、「なほ向後も郎君の、吹撃を願ひ奉る。」と、媚ぶる言葉の尾
につきて、全介は貌を改め、「某も又願ひあり。嗚呼がましくは覺さんが、この半七には舊怨あり。
某が實父全八郎は、二十四ヶ年前に赤根半之進に撃たれ、又祖父同樹は、昨々お通に撃たれたり。
曩には養母の遺言によつて、いまだ宿志を果さずと盡も、彼もまた仇人の一隻なれば、半七を撃
ちとつて、聊か亡父の孝養に供へんとする折から、高貴の來臨便なくて、おもひの外に抑留せらる。
あはれ君、すでに兄弟の義を絶ちたまはば、半七お通を某に賜はれかしこと、いはれども果てず陶五
郎は、眼を睜く聲をふり立て、「この白徒胡亂なり。復讐には、式作法もあるべきに、當の敵を撃たず
して、この手を離つずは、おもふに逆奴は、野伏山宮ふんとなれども、四ヶ國の主改代の時を

うかゞひ、復讐なり。なんどといひこしらへ、名を取り祿をむさほらんと謀る、解者にてぞあらんやらん。這奴いましめよ。と、いきまけば、全介ひたと呆れつゝ、しきりに隼人を見かへるにぞ、厚倉はかたはら痛く、おそるゝ、小膝をすゝめて、陶五郎にむかひ、いな、郎君、かれはそれがし浪速にて、他事なくも交参ひたる、助藏全介といふものなり。時と物とをわきまへず、かろゝしく復讐の事を頼ひ申せしは、こよなき越度に似たれども、別にさせる伎倆はあらず。たゞ友善が面に託でて、全介をゆるし給へかし。と、言葉をつくして勸解びしかば、隆春やうやく面をやほらけしからばこの全介をば、隼人御邊に預くべし。いかに半七彼處にいましめられたはお通なるよ。汝等も主の相伴に、首刎ぬべき奴なれども、肉縁の好み一旦は見放すぞ。志をあらためて、わが父に降参せば、隆春よきに汲引して、世間廣くなしてとらせん。ものども續け。と徐やかに首桶を抱きつゝ、牀几を離れて立ちかへれば、前驅後従の猛卒力士、敬ひかしく威儀堂々、心ならずも全介は、厚倉に伴はれゆくを目送る半七が、ほらわたを斷つ遺恨の涙。おなじ恨みは姉お通、暴虐非道の弟隆春、虎におもねる厚倉隼人、かれこれ共に主の仇、何處まで遣るべきぞ。いで追ひ續いで撃ち留めんこと、刀を杖に半七が、心ばかりは早れども、ふしゝ痛む魚屋の鵜、姉は綱手に狂ふ猫の、花壇にあらぬ浮世の嵐、銅蝶の夢かまほろしの、身はうつゝ、なき同胞が、外面しばし睨まへつゝ、納戸のすを見かへりつゝ、

麻を打つしご敷きける

三七全傳南柯夢後記卷之七終

占夢南柯後記卷之七

三七全傳 編 古夢南柯後記 卷之八 (後映第四)

東都 曲亭馬琴編次

夜川の野航

昏すく、目の頭を運せし、半七お通が恨み、唸ふるに物なしといへども、大夏の將に倒れんとする時は、一木のよく柱ふべきにあらず。只濟を噓み、腸を斷つのみ、又せん術もなかりけり。かくてあるべきにあらねば、半七は忙はしくお通が索を釋き捨てて、面なげに驚き、「國亂れて忠臣あらはれ、家貧しうして孝子出づ、半七不肖の身を以て、君家の難みに命を惜しまず、偏に孤忠を盡さんと欲すれども、虎狼途に横はりて、事すてにこゝに及べり、姉御前は免も角もして、大御へ赴き、君と父とに事の趣を告給へ、某は速かに御願に迫り著き奉りて、冥土の御供つかまつらんに、いひも果てず刃を仕へ突きたてんとする處を、お通は急に推し留めて、潸然と涙を落し、「死なんと思ふは理に似たれど、死して忠義になるものならば、我こそ先へ死すべき身なれ。死して益なきことよしは、いはでも著きぬの怨敵、陶五郎なり。弟人なり、一月怨みてその後、に、仕なき切つて死ぬ

るこそ、曠の武士とはいふべけれ。心づきなく狼狽へて、世の却唐になりたまふなにと諫むれば、半七は、有理と曉りて明をもちぬ。御前の意見道理に觸へり。今堪へ難き恨みを堪へ、忍び難き事を忍び、灰を呑み身に漆さしても、嗣と厚食を粗糲も、しかしてのちに殉死るとも、實にこれ運きにあらず。しかれども果こゝに留まらば、家室もまた油断すべからず、一國御國へ身を運けて、忍び忍びに寛ふべし。御御前は直さに大和へ赴きて、これらの事を告げ給へ。同族諸共にをらんこと、謀なきに計たりの計といへば、お通はうち難直き。吾儘もしか思ふなり。兼に沼田の事を申しとき、野伏等に推して聞てられて、結華微笑尼に得逢はずなむ。かかれば野の星月團たちの、さぞな難事と申す。今、今宵は、御前の亡骸を、煙とにし奉り、灰を掻き背を敷か、これを携へて沼田へ赴き、彼星月團たちに、理由を告げしらすと、彼處へ奉り奉らば心と思ふ。お人身もまた安んじたまへ。退きて、星月團たちに對面し、又お花が生方を素ねたまへ、彼の同族を察たんとこと、一朝には謀りたまへ。早めて、美し給ふなとこと、丁寧にいへ。お通は、半七これに觸れて、志を激ましつゝ、控られたる身の理窟を忍びて、お通も其理窟より、御の亡骸を掻き出りに、彼で敷らしたる草敷の、堪く御前に焚火かしかば、その色とも見わかず、相触なれば背りし背の、半七も定り難む。まてに、淺ましきこといふべうもあらず。涙のみ目にふり落ちて、何せんまへなつの日の、暮る。ま

待ちて亡骸を、密やかに野外に出して、遂に一片の煙しこなし、遺骨をば壺に納めて、これをばお通が
 項に懸け、やがて同胞うち連れだちて、安藝の沼多へとてゆく程に、その夜通宵走りしかば、瀬川の
 あなたなる、八千川のほとりまで来にけり。十七日の月もや、傾きて、はや曉くるに近かり。こゝに
 て夜を明してこそ、其の川をば渡さめ。とて、同胞もろ共に夏草を折り布きて、小雲時懸はんとした
 る折、途より跡を跟けてや来けん。引割かと覺しくて、月額の跡長く延ばせし、身丈高き暴雄等、二
 三人、樹陰より走り出で、まだ年少き男女の、夜をこめて路を奔るは、仇なる色情に跡を聞かし、
 朝の便船を心當てに、大坂へとてのくにやあらん。つかれたらば竹輿なりとも、馬なりとも貸すべき
 に、酒價をだせ。と故動きつゝ、前に進みし大倭子、橋と寄りて半七が、胸前を無手と握り、右の
 拳を懐へ、さし入れんとする處を、拂ひ退けつゝ、身を起し、引き被ぎて墜と投げれば、後なる兩人
 の悪棍共、大きに怒りて聲をもかけず、刃を抜いて砍らんとするを、半七得たりと身を反り、右を柱
 へ左に當り、いとも烈しく戦ふほどに、投げられたる大倭子、漸くに身を起して、三人が申に押取り
 卷き、多勢を悪みに改りたつれば、お通は傍に見るも随く、弟に失ちあらせむとて、懐劍を引き抜き
 つゝ、悪棍等が後方より、一襲襲いてかゝりしかば、女子なれども侮りがたく、悪棍等は、既に背に
 敵を受けて、大刀すぢ忽地亂れにければ、半七勢ひ十倍して、踏み込んで撃つ刀に、中なる賊が調

を、三寸あまり丁と切り、かへす刃に左手なる、大倭子が右の腕を齧つておとせば、御はさまに倒るるを、お通はやがて取つて押へ、懐劍を取りなほして、胸前ぐさと刺し徹せば、二人の悪棍ます／＼瞻でて、刃を引きて逃げ走るを、半七は脱さじと喘ぎ／＼ぞ追つてゆく。その間に、お通は刃の血を拭うて、やをら室へ納めつ、立ち上り「やよ半七、長追ひなし給ひそ。やよ半七」と呼びかけて、跡を慕ひつこれも又、まだ明けやらぬ水の隈、河原に近き二枝路、おほつかなくも追つ蒐けたり。さる程に半七は、二人の悪棍を逐ふこと五六町にして、やうやくに撃ち留めしかば、更に舊の處へ走り歸るに、姉お通は何處へかのきけん。しば／＼呼べども應へせず。もし悪棍が支黨の、この處に隠れ居て、姉を掠めてや去きけんとおもふに、心もとなきいふばかりなし。あまりに素ねわびて川の上に赴くに、向には岸に繋ける船の、二艘ありしとおもひつるに、今見れば只一艘あり、原來わが姉は、川を渡し給ひけんとして、遽はしく水際に立ちて、船へ閃りと飛び飛れば、船桁にいたく縛められたる人あり。夜川の水煙にて、顔は定かに見えわかねど女子なり。猿鑓といふものを被けられて、手さへ背へ繋かれたる、こはわが姉にて在しけりと思へば更に問ひ諱らむるに及ばず、纏て繋めの素を解き捨て、猿鑓を外しつ、はじめてその顔を見れば、あなあさまし、姉にはあらで、おちんがけなき妻のお花にてあらしかば、こは／＼いかにと、ます／＼驚き、まづこれを刺り、且その故を問ふに、お

花はよ、とうち泣きて、夫の袂を顔におし當て、應へだに得せざりけり。且、して涙を拭へ、二主の爲
夫の爲に、ひとたび捨てたる身にしあれば、飽かて別れてゆく水の、環りあふ瀬は憑かれずと、うら
歎きたるに思ひきや、衣川の船ともろともに、繫ぎとめたる婿夫の縁、端きすこ、にて逢はんとは、
奴も一昨の黄昏に、小僕の懸止の使者なりこととて來つる悪徳等、わらはを彼處へ轉てゆかで、あやし
き小屋へ身を入れたり。その身體こはまたく、花街へ賣るにやあらんすらんと、推量れば心もぞれぬ
す、彼の寶刀に身を代へて、鬨が、妾となるだにも、生きて歸らんとは亦もほざりしに、浚いてや遊
女とならんには、靴のうへなる靴にこそ。只速かに自害して、身を潔くせんものぞと、なか／＼に
思ひ定めてしが、わがうへかくもなりゆけば、風流士の寶刀のことも、虚言なりとは推してしらるり
われは冤もなれかくもなれ、良人のうへいと心もとなし。かなはぬまでも脱れ出で、これらのことを
良人に告げ、その後死なば死にてん。しかなく、と忽地に思ひかへしつ、きのふの曠野に、物に
紛れて潜び出で、間道より走る程に、不覺に路に惑ひつ、水上の方へは得もかへらで、其處ともし
らぬ山路に入りて、物間はんに人にも人には逢はず。さて山路にて夜を更かし、又山路にて日を暮して辛
くして里へ出で、や、この處へ來りしに、いとおどろしき倭下ども、一二人走り出でて、矢速に
わらはに鎖鎖を衝ましつ、この船の中に繫ぎ置き、跡より又一人、よき鳥のいで來るぞ、それに

は男の借もあり、悔りて走らすな」と一人がいへば、こゝろ得現に、みな黙りて待ちておれ、かくて御身が、彼の悪棍等と戦ひ給ふを、此方より見ると驚も、間違ければ何人なるを知らず、物ははれねば呼びかけて、救ひを求めんよしもなく、うきを見るもの水と陸、濤に注む蟲のわれからと、音にのみなきて侍りき」と、いひかけて又よゝと泣けば、半七頼りに嘆息して、やをら背をひき捨つ別れしは一昨なれども、おん身が往方心もとなく、たうね逢はまく思ふものから、また一層の義ありて、安藝の沼多へと夜をこめて、赴く途にてはからずも、おん身が先途を救ふこと、哀しみの中の歡ひなり。まづ何よりか語るべき、彼の件の事どもは、彼の悪棍等が詐詭の計にてありしかば、風流士の賈方ととりも復さず、朝へその夜、天神川のほとりまで、彼の老翁に誰引き出され、猝既に體儀に及びし折、思ひもかけず姉に救はれ、絶縁に環會ひ奉りて、やがて宿河へ誘ひこゝる間に、はや訴ふる人ありて、おへなく職を撃たれたり。かかれば一日たうとも、存命ふべき身にあらず。社々き切りて悪棍の、冥土の縛縛せん物をも思ひしが、是れすら姉に諫められて、更に仇人を尋ねん爲に、且く彼の地を退きて姉もろ共に、沼多の拈華庵へとて赴くなり。はじめをいへば簡様々々として、お通が同郷を天神川へ流し流せし事、敗鐵金介がこと、彌五郎がこと、早合半人が頼のおん頭を問はたること、拈華庵の兩比丘尼は、外母園花と、お花が妹の夏山なりしこと、此後おちなく物かはれ

は、お花はつく／＼とこれを聞きて、或は驚き、或は哀しみ、或は恨み、或は怒り、涙を洗ふごとく、在間の月もこれが爲に、更に光をとゞむるに似たり。且くして半七は、忽地陸のかたを見かへり、今既にお花に環會ふといへども、霧に草叢等を追ふときに、姉の往方を失うたり。お花はこゝにて、彼の眞體を見たるらめ、女子の川を渡すを見ざりしや」と問へば、お花はうち點頭き、理に宜はする如く、霧におん身が悪視等を追ひ蒐けて、西の方へ走り去き給ひし時、跡に残りたる婦女子頻りに聲をふり立てて、「長追ひなし給ひそ」と、しば／＼呼びかけて立在みたるが、遂に左手に繋ぎたる、野船にうち乗りつゝ、みづから棹を操りて、向ひの岸へのぼりにき。原來姉御前におはしけり。」といふを、半七聞きも果てず、しかるときは心安し、われも向ひへ船を著けて、とく姉御前に逐ひ著かん」とて、遽はしく繩を解き捨てて、船を河中へ漕ぎ出しけり。浩かる處に一人の辯者、稚荻の中より飄はれ出で、引提けたる種島の、鳥鼠をとり直し、河中なる船を望みて、火蓋を切つて撞と發すに、半七はやく棹を抱きて、船に伏しにければ、丸は頂きの上を過りて、ぬしは身に悉なし。辯者はこの形勢に心慌てて、又遽はしく丸を籠め、再び狙撃たんとするとき、船は忽地向ひへ著きて、間遙かに遠離れば、辯者大きに焦燥ちて、鳥銃を裏離と投げ捨て、續きて向ひへ渡さんとして、船を索ねて河流へ、足早に走りゆく、傍の蘆荻をさら／＼と推しわきて、あらはれ出づるはこれも又、辯者と

おほしくて、手拭に面を裏返し、肩に受けたる金指輪を、布もて巻きて項に懸け、手鏡に屈せぬ高麗、河原を走る解者をつくらんと透し見て、「金介等て」と、呼び留むる、聲諸共に明鳥、森をはなる、朝風に、夏いと寒き八千川の、水よりしらむかはたれ時、はや旅客の出で來るかと、左右を見かへりつゝ、立ちよるをなほ招きよして、此彼しばし密語くなるべし。

合衆の花桶

天又二十一年、夏六月はつかの日、安藝國高宮郡、沼多のさとの邊なる、彼此人、隊をなし講を結ひ、拈華比丘尼が草の庵に、嚴島の辨財天を勧請して、三日三夜の法筵を開く事ありけり。その敷を索めれば、今茲は五月の初めより、絶えて一漉も雨ふらず、草木は枯腐れ、金石は流鏝れ、行人途を去りあへず、民の歡き大なりねば、雨乞の祈禱をせんとて、彼此の里人等、女僧が庵に又女を祀らし、或は五色の帯を建て、或は笛を吹き鼓を鳴らし、けふなん三日の結願なむとて、参詣の聖觀男、女、成道室に集會ふ程に、隊の長、講の頭等は、手織本綿の縮着衣へ、麻上下を着たるもあり、續學澤のふかぬ羅襪へ、葛の袴穿きたるもあり、密齋青道心等は、白妙の單衣に、襪衣したるもありて、いと器しく奔走し、「堂崎高洲の講衆は、六疊の房へ集合ひ給へ。」よし浦三原の二隊は、客殿へ圍居し給へ。西條の新講衆をば、柿の水引に隔りて居らせ、備後なるかんなべ衆へは、また酒を飲ませぬ

にや、布施は大人小兒をいはす、百文づ、、賭博と即ち引きかへ、半皿は茄子に油揚げの豆腐、糍粑
 混汁、詣日は葉胡蘿蔔のひたし物、香の物は、胡瓜の輪切、さて飯は食ひ放題、薄か織袋百文の布施
 物で、かくの如くの齋につき、如是きの法會に逢ひ、獲がたき廿兩を獲たらんには、かばり家をも
 のはなし。本道場は手取なれば、奥は殊更しく房もあらねど、各修行第一に、神妙に圍繞し給へ、
 百味の供物神酒などは、讀經果てて割賦すべし。履物へ裨著けて、更着を忘れ給ふな、履物は兼
 さぬぞ、よな。懐中物の用心し給へ、奥へくくと聲ふり立てて、聞けば目目へ流れ入る、汗もほと
 ほと拭ひあへず、施主も道者もつれ立ちて、客殿裏しと籠み入りけり。その日も午の貝吹きて、海詣
 やちと途絶えしかば、紛れ入りたる道俗二人、奥の方より、濡び出で、目と目を注はして點頭きつ、
 蹴近く寄りて縁に立在ひ、一えが祖翁、奥の爲體に、こゝろをつけて見給へりや。正しくこの途へ来た
 らんと思ひし半七が、霧だになきは不審し。といへば、同樹は手を抗けて、やま全介音高し。と強し
 禁めて、奥を見かへり、額をあらはして聲をほそめ。我もさは思へども、是弱を作うたれば、半七は後
 れやしけん。道すがらもいひつる如く、いぬる十六日小夜更けて、われ彼の半七を、天神川のほとり
 へ牽引き出し、さまんゝに罵りて、飽くまで這奴に腹をたたし、言葉質をとりて携ちつ廻つ、竊かに
 汝が来るを待ちしも、暗號ちがうて思ひもかけぬ、女の子に調を破り割かれて、河水に涙び落ちし

かば、山川の早瀬に推し流されて、浮きぬ沈みぬ幸くして、澤川へ流れ出て、彼處の里人等に助けあ
けられたるが、その時は死にやしけん、物ひとつ見えねど、流石に命運聞きざれば、忽地に、甦生の
て、氣力は始めに異ならず、やがて醫師に瘡口を縫はし、僅かに一日保養して、十八日の亭午、氷上
へ立ち歸りて、半七が事を問へばしるものあり。『這奴はその夜さり、五んじゆひめ 姫を宿所へ伴ひたるに、事
忽地に發覺れて、姫をば四五六の年人に撃たれ、世を形なくや思ひけん、姫のお通共おんどもどもに、華洛の方
へ赴くとて、この時あかきに起行せしといへり。』さて全介はと問ひしに、彼は陶殿たうてんに疑はれ、有人に
聞けられたり。』といふ。聞く事毎に本意違はず、腹のたつ事のみなれば、驚し半七が跡を追ひつゝ、
捷徑せいていを通宵よすがら走りて、這奴等より先へ抜け出で、八千川のほとりなる、龍介りゆうけい、鮎太あづた、石伏藏いしふせうと、呼ぶる
る、三人の野ぶさりを相譚うて、半七お通を待つ程に、龍介等はいひがひなく、三人齊しく、半七に
撃たれたれば、我も底氣味わろくなりつ、稲藁いなわらの中に隠るひて、始終面をも得出さず、這奴等か川を
渡すを、阿容々々と眺め居たるに、汝も又半七を追つ覺け來ず、船へ鳥銃ひづりを打ちかけたれど、間違ひ
れば當らず。かくまで間の悪き折に、毛を吹かば花をらとめん。這奴等が往方は定か二つあり、一旦
これをお走らして、追跡おひつにしくことあらむと思ひしかば、汝をば呼吸こゝろ密めたりき。然るにいとこゝろ得
がたきは、偶なる女子をお通とやらんなりと思ひしに、渠はわが四五六に密語きて、『撞木町へ將ての

け。とて誘引き出したるお花なり。彼の御妻はいかにして、腕れ出でたりけん、汝はこれらの趣を知らずや。」とひそめき問へば、全介聞きて眉根をよせ、「その夜さりお花が事をば、四五六に任したれば、吾儕は絶えてこれをしらす。天神川のほとりにて、おん身は撃たれ給ひぬと思ひしかば、次の日氷上の宿所へいのきて、半七お通を撃ち取らんとしたる折、陶五郎の來ませしかば、撃つべき仇人を得も撃たず。われは却つて陶殿に詰られて、四五六の隼人に聞けられ、富田の稚山八伴はる、途より竊かに取つてかへし、半七等が華洛の方へ、赴くよしを聞きしかば、夜を日に繼ぎて這奴等を追つ蒐け、八千川の邊にて、その背影を見たれども、水一條を隔てたれば、亦彼處にても撃ち漏らし、體かに爰へ來つらんとおもひしに、跡跟けらるゝとはやしめて、途をかへて逃げたるか。中途にて撃つべきものを、あまりにふかく慮りて、追ひ失ひしは遺恨なれ。」と、後悔すればうち笑ひ、「しか思ふは理なれども、途をかへてもこの處へ、來るよしは西條にて、半七が里人に、「沼多の拈華庵は何處ぞ。」と問ひたるを、竊聞きたることもあれば、とをに九つはたがふべからず。彼のお通奴は、いづ地へのきけん。われは這奴が面を認らず。奥なる羣集の中にや在る、全介汝はしらざるか。」と、問へば籍をさし合はし、「お通ははや來たりけん。嚮に奥にて見たれども、這奴にあうては半七を、撃たんすときの妨げならんと、思うて羣集に紛れ入り、そのちは奥へのかす。只こゝろもとなきは、半七が

往方にこそ」といひつゝ、外面眺望むれば、同樹も共に伸び上りて、忽地に指さし示し、「向ひへ来るは半七なり、後方なるはお花なり。衣の色こそ定かに見わかぬ、菅笠に認めあり。」と、いへば全介雀踊して、「現にく彼は半七なり、此度はいかで逃すべき」と、拳を擦れば同樹はさわがす、「逼いては事を失つものぞ、汝はまづ彼の處なる芭蕉の背に身を躲して、且く便宜を窺へかし。われは又、簀子の下に屈まり居て、汝が半七を撃つとき這ひ出でて、矢庭にお花を扛き攫ひつゝ、走りなん。拵ふるものあるならば、汝はこれらを殺り散らして、早くお通を引き攫ひ、我に續いて走り去れ。よしや怨みを復したりとも、玉を取らねば持にならず」と、諺しあはする祖と孫、勇むは同じ義と慾に、立ちわかれたる庭の隅、全介刀を引き抜きて、手來の竹を了と切り取り、杓筈かへす準備の竹槍、りう／＼とうち擲りつゝ、ひと引きしこきて、扱ひしからば吾儕は芭蕉の陰に、身を避けて、這奴を待たなん。とく／＼酒び箱へかし」と、急かすどもなほ懸がす、「早くてな失ちせも、八千川にて鳥銃を、放ちかけられたる事もあれば、半七も又油断はせじ。いふ程の事はし果てて、只彼の透を狙ひ撃て、瀧くな／＼と、見かへり／＼、やがて這ひ入る林の下、麩の糞を手に踏んで、あなやと土へこすりつけ、耳にかゝまる蜘蛛網を、掻き拂ひつゝ、躲れける。かたわし程に半七夫婦は、身をささ／＼にあへ物の、探ね當てたる二たの庵、遙かに柴の口をうち望みて、こゝなりけりと思ふにそ、日影に病め

るお花を見かねり、「この春おん身もろ共に、いく偏か案ねたれども、其處ともしれずそが儘に、訪は
 で過ぎにし草の庵、今さら思へば案ねむる、庵にはあらざるに、などで往にはしれざりし。加之
 面影の、いかばかり變ればとて、それとも思ひかけざりき、われながら愚かなり。これも夫婦が觀れ
 得ぬ、厄にあふべき鮮なりけん。おん身は甚く疲勞れたらぬ、今ははや心安し。」といひ慰むれば、嘆
 思し、「絶えて久しき叔母御前と、妹にあふは喜ばしけれど、袖はまだ乾ぬ濡衣の、なき名を雪むるよ
 すがもなく、彼此に身をおきかねて、詣來たるかと思はれんと思へば、面なく侍るかし。」と、いふに
 夫も嘆息し、「我はおん身にいや倍して、龜龜を竜家に撃たれ、神の往方を失へば、彼も此も面ぶせ
 かり、とばかりにして止むべきにあらず。外母の女僧に對面して、姉の往方を問ひ定め、志を演べ
 て後に、この草の戸を死所と、覺期は豫てしたるに。」と、いひつゝ、も又嘆嘆すれば、お花はしきりに
 酸鼻み、「心うき事宜ふな。撃らうたる、も時の運、おん身が忠義は皇天の、毎日に照らし給ふなる。
 とはいへ思ひ定めても、定め難きは爰別離苦、一度別れて又逢うて、別れの後はいかならん。」と、い
 ひかけて口隠れば、半七蚌を激まして、「無益の歎きは女子の愚癡、はや深門に來りしに、泣きがほな
 ほして入り給へ。」と、諫むる夫も影護くて、端なくほ得ら入らず。且く立在む夫婦が後方に、忽地影
 の人音するを、ゆくりなく見かねれば、折もこそあれ厚倉車人、腹巻に野袴穿きて、行装いかにし

き、赤銅造りの兩刀を、長やかに夾しひけらし、手親ら花桶引提げつゝ、従者を影將で、二神の唐櫃を扛き擔はし、柴門ちかく來るほどに、半七これを估と見て、「這奴は正しく身人なり、權左の權左、わが孤忠空しからず、このところにて撃ちとらば、姉と外母御へ手土産は、これにますものあるべからず、もし神明の冥助にあらざば、必ず姫の亡靈の、仇人を尋き給ふにこそ、あな喜ばしと筈強いと、且く天地を禮拜して、刀の華を口潤せば、お花は袂に携り著き、「こゝろ許りは猛くとも、彼等仇人は多勢、互角の勝負は、心もとなし。暫し潛びて便宜を窺ひ、思ふまゝに撃ちてこそ、敵の勝」とはいふべけれど、談むれば、うち點頭き、「御身が意見その利あり、折戸の陰に立ち頼るひ、従者等が退くとき、遣り通して身人を撃たん。さほ」とて夫婦立ち別れ、推せば忽然はらりと、餘子こほろ、諸折戸の、陰に隠れて窺ひけり。さる程に厚倉身人は、庭門候しと權左を、茶草庵の縁前に扛き入れさし、とく呼門へ」といふに、私室二人、心得て聲ふり立て、「庵主の比丘尼に物申さん。けふの法會の施主として、關殿の御内なる、厚倉身人友善し、自ら來歸し給へり。出迎へ給へ」と。呼ばはれども、奥は散動く人の聲、門はしるゝ、煙の音に、紛れてしほし願へ、せす。もばノ、呼ばれて茶草庵は、微笑を睨て忙はしく、縁願まで出で迎へ、こは思ひもかけぬ、甲人等が、私の宿願にて、辨財天を齋請し、只儀初に集會ひたるの由に侍るに、頭殿の御内のが、原、詣來給ふこそ

幸ひなれ。いざこたへ。」と請すれば、厚倉隼人は悠然と、上座にうちあがり、「やよ女僧たち、纏ひ里人等が、私の祈禱にらせよ、衆人心を一致にして、聞く法會は殊更に、天女も感應し給ふべし。われ一昨日富田にて、この事を傳へ聞きて、嘆賞のあまり、法會の料を助けん爲に、直ぎにさつから發向せり。彼を見よ、三轉の唐櫃には、白米五百袋、青漆百貫文これを布施す。又手親ら携へたる、一桶の活花は、今を盛りの合歡の花、槐樹と六見違へそ。これを天女に獻りて、陶殿の武運長久、わがうへにも幸ひあらせて、富貴延滿如意吉祥と、丁寧に祈念あれ。」と、ほこりがに説き示せば、拈華尼聞きてうち微笑み、「宣ふ趣こ、ろ得侍り。現にも盛りの合歡木、花を眉掃と名づけたるを、田舎人は訛りて、ねぶたの花と喚び做しつ。葉の状は槐に似たれど、花は殊更愛らしや、天女には眉掃の、名も似つかはしく侍るかな。」と、他事なく美むる二人の女僧、小頸傾け詠むれば、厚倉隼人うち點頭き、「一瓶の花より、なほ涼しきこの庵、且く茲にて汗を納れん。従者等は外面へ罷り出で、樹陰もとめてとく涼め。」と、いそがしたつれば従者は、折戸を出でて樹下陰、おもひくゝに憩ふほどに、兩女僧は客殿へ設けの席を修理はんとて、纏て奥へぞ入りにける。折こそよけれど、半七は折戸の陰より顯はれ出で、刀の反さうち返して、縁頼に走せのほり、「五逆の罪人厚倉隼人、半七を認めりや、今こそ復す頼の儀、刃を受けよ。」と罵りて、刀を抜いて丁と破るを、扇を以て受けとめ、「やよ

待てしげしいふ事あり」と、いはせもあへず引きて、透間もなく撃つて懸る。壯士の太刀風いと
烈しく、あしらひかねて厚倉は、花桶取つて受けなげせば、うちより落つる女の頭、半七信とこれを
見て、こは／＼いかにと、疑ひ惑ひて、思はず尻居に撲地と坐す。浩かる處に全介は、竹槍を引提け
て、芭蕉の陰より突いて出で、「一日撃たんと思ひ定めし、赤根が長男刀治半七」とても腕さむ仇人の
半隻、全介が手料理に戮刺しにしてくれんす」と、競ひ懸らんとすれば折戸の陰より、お花は吐嗟と
走り出で、身を盾にして全介を、遮り留れば物ともせず、「見苦しき女子の助太刀、汝も夫の相伴者
せん」と、竹槍を一揮繁扱いてお花が胸前、背へかけてごとと刺せば、槍は忽地發毀と折れ、お花が
姿は煙のごとく、滅えて跡なくなりしかば、さしちに猛き全介も、茫然として前後を失ひ、われにも
あらでつゝいるたり。半七はこの形勢に、ます／＼奇異の想ひをなし、「心得がたし厚倉半人が、携へた
る花桶より、滾び出でたる女の首級は、お花が前影によく似たり。これのみならず執拗くも、半七を
撃たんとする、全介を遮り留めて、竹槍に縫はれたる、お花が姿は消え失せて、全介も又放心せり。
彼を想ひ此を見るに、八千川の野航にて、ゆくりなく環會ひ、この處まで伴ひ來たる、吾妹子は世に
なき魂の、まに／＼に顯はれたるか。それかあらぬか、怪しや」と、思はず小膝たてなほし、刃を鞘に納
めても、まだ納まらぬ胸の雲、疑念は更にはれさむけり。當下半人はちかく居寄りて、扇を笏にとり

なほし、「やよ赤根生、縁故をしらせねば、さぞな隼人を憎しとも、反逆人とも思ひける。今こそ諱す
機密の謀畧、こゝろを定めて聞き給へ、抑某、父二郎太夫もろ共に、禮姫に聞き奉り、軍防
山口へ赴きて、兩年を送る程に、大内殿の騙害、聞きしには彌まして、目を驚かす事のみなるに、
老臣たる陶晴賢は、黨を樹て比周して、主を凌ぎ權を賣る、謀反の萌し顯はれたり。わが父友春、久
しからずして晴賢が、叛かん事をしる故に、ひとり心を勞せしかば、持病の積聚身を溜めて、鍼灸藥
餌もその效なく、今はかうと思ひてや、某を枕方に招きよし、陶が逆謀氣色に見はる。もし不虞の
事あらば、禮姫の上極めて危し。然れども、陶が阿黨の佞人、内外に充ち満ちたれば、汝孤獨の身
を以て、明白にこれを禦がば、却つて陶に殺されなん。然れば是れ禮姫の御爲ならず。悲しいかな、
われ死なば、大内家は亂れんか。汝は假に淫酒に耽りて、放蕩無頼と人に思はせ、この地をはやく逐
電し、京攝の間に身を溜めて、時々平城と周防の爲體を聞き定め、晴賢謀反せりと聞かば、一番に走
せ著けて、禮姫の先途を救ひ奉り、事いよく難儀に及ばば、密かに陶五郎隆春に底意を告げ、彼
の人の力を借りて、禮姫を救ひ遣らし、兼ては赤根蟻松の兩老臣と示しあげして、續井家の援兵を
申し請ひ、且大内家の舊好を忘れざる、西國の武士を相譚うて、晴賢を討滅すべし。陶五郎隆春
は、主命懸るゝに所なく、晴賢を父とすれども、その心ごま忠義ふかし、をこそ、實父半之進が、弱

冠の時に似たり。竊かに汝と力を戦はして、壺を救ひ奉らんものは、彼の壯校のみ。これらの事を胸に秘めて、わが遺言を忘るゝ事なかれ。もし利に惑ひ勢ひにつき、一點ばかりも不忠の志を扶まば、未來永劫親子にあらず」と密やかに説き諭し、その夜空しくなりしかば、某失情の哀しみに堪へずと雖も、君父の爲に譏りを思はず。幾程もなく淫酒の爲に、武器衣服を清却し、飽くまで人に疎まして、つひに山口を遼電して、流浪して浪速へ赴き、身ひとつ捧手をふる鐵の、四五六と改名して、平城の首耗西國の、形勢をしらん爲に、一つ處に宿を占めず、一昨年の冬浪速を去りて、去年の春まで大和にあり。然るに故主續井殿、御邊の父に命じ給じて、米谷山なる木精塚を發かし、風流士の寶刀をとり出させんとし給ふよし、我傳へ聞きてつら／＼思ふに、わかし陰陽師村上親實がいひつる由は、父二郎太夫が物語にて、聞きたる事もあるものを、いかなれば續井殿、みづから武勇に誇り給ふぞ。彼の寶刀を出し給はば、禍主従のうへにや及ばん。こはいかにせんとて、類りに憂へおもふ折から、敗鐵の全介が、標本の松原にて、御邊の爺々を撃たんとて、かへつて養母の自殺せしを哀しめる、その處へのきあはし、遂に全介をそゝのかして、木精塚を掘り崩し、風流士の寶刀を他所に埋めて、續井殿主従の、身にかゝるべき禍を、歎ひ除さんと謀りしに、彼の太刀忽地室中に閃き降り、西を投して飛び去りしかば、ます／＼心安からず、全介さへに誘引ひ立てて、やがて周防國へ赴

き、しのびくくに、風流士の寶刀の往方を索むれば、彼の寶刀の故に事起りて、大内殿主従の間快
 からず、晴賢俄頃に謀反して、義隆自殺し給ひぬ。これも又彼の寶刀の、祟りにあらずば米谷なる、
 本精の餘怨をこゝに轉じて、その禍の移りや來けん。しからば槐姫のうへいとも危し。いかにも
 して靈君のおん往方を索ねまるらし、亡父が孤忠を空しうせじと、夙に思ひ夜に思へど、絶えて靈君
 のおん在所をしらず。かかりし程にいぬる十六日、刀冶同樹が慾心にて全介に説き示し、天神川の上
 にて、御邊を撃たせんとしつ、剩へ御邊の妻女をば、我と全介に詐譎り取らし、撞木町へ將てゆけ。』
 と、いひしかば、われまた陽にはこれに興して、全介にだも底意をしらせず、陰かにお花を他所へ伴
 ひ、直さま天神川の上へ走りゆきつ、事の爲體を張へば、御邊の姉お通刀禰、同樹を川へ破り流し
 て、御邊を救ひ、同胞こゝに再會して、槐姫を誘引ひまるらし、氷上へ赴かんとするよしを、竊聞
 きするに、全介も又こゝに來つて、矢庭に御邊を撃たんとせしかば、われまた全介を助くるおももち
 して、却つてこれを遮り留め、御邊は更なり、槐姫を、故なく延しまるらせたれど、この事はやく
 も風聞して、次の日はしるもの多かり。かかれば姫のおん命、その危き事風前の燈に似たり。もし
 この時に、隆春の助けを得ずば、いかで靈君を救ひまるらすべき、とおもひしかば、やがて山口へ走
 りゆきて、竊かに陶五郎隆春に對面して、心中の機密を告ぐるに、隆春聞きて眉を蹙め、我もはやこ

の事を聞きしかば、心苦しうおもふなり。しかれども、槐姫は、刀冶が宿所に潛びおはするよし、人有つて、向に養父晴賢に告げたれば、凡常の計策にて、救ひ奉らんこと難かるべし。しかれども、年來深窓の裏に、冊かれ給ひたる、槐姫にましませば、男たるものは、わが養父と雖も、面影定かにはこれを認らず。年榮骨相、姫君に似たる女子をもて、御身代りになし奉り、御邊苦肉の計を行はば、萬に一つ姫君を、救ひ進らする事を得なん。彼の姫君に代らする、女子はありや。』と問はれしかば、われ忽地に思ふやう、霧に同樹を欺きて、他所へ潛ぼし居らしたる、半七が女房お花は、年榮といひ、面影といひ、彼を槐姫なりといひこしらゆるとも、誰かは疑ふべき。特に彼の女子は、姉夫曾太郎の女兒にして、わが爲には外姪なり。夫半七は、元來忠孝の壯俊なり。事急なれば半七に告ぐるに及ばず、如此々に謀らんとて、遂に降春に謀しあはし、走り歸りておもふ由を、お花女に告げしかば、義を見て勇む郎女の、なか／＼にうちも騒がす。風流士の寶刀の故に、冤家の間室となるだにも、主と夫の爲には厭はず。しかるを況いて姫君の、先途に代り奉りて、良人の身の幅ひろくならば、これにます幸ひは侍らす。池の中島にてぬくりなく、罪被りしも懺ひに、夫を留めしわらはが失ち、いひときがたき濡衣の、乾すよしもなかりしに、物に託して玉枕御前の、おんいとほしみ深ければ、助けがたき命助けられし、恩に報ふはこの時なり。今一篇わが所天の、面影見まくほしけ

れど、慙むに見つ見られれば、名残もいと惜しかるべし。おもへばこの世は假の宿、永き真上に露夫
の、契りを違へ給ふなと、言傳ててたべりといひかけて、後ひひ残す懸口の、はかなき別れを思ひや
れば、吾も涙にかきくれながら、よわる心を鬼にしつ、なほ十分謀らんとため、御邊をば村長がり呼
びよせざし、我は竊かにお花を將て、背門口より潜び入り、槐姫をば何となく、納戸より出し奉
りて、頼の衣裳をお花に被せ、お花が衣を頼に被せ、まづ頼君をば、準備の行輿に扶け乘し、頼お花
をば納戸なる、押入の戸欄に懸ろはし、密やかに人をつけて、槐姫をば他所へ延し進らしたれば、
陶五郎に呼ばれし時、われ外面より走り來て、やがて納戸へ跳り入り、外姪女お花が頸を刎ちて、隆
春に遞したり。かくよで深く謀りしかば、奸雄なる時賢も、絶えて友善を疑はず、又御邊同胞を追ひ
撃ちせま、されば幸くして槐姫の、おん命恙なかりしは、御邊の舍弟と妻女の功なり。われその
誠心を感ずるの餘り、且この處は、園花夏山兩比丘尼の、草の庵なるよし、槐姫の宣ふから、義女
お花が首級を贈りて、有縁の道心に非らせ、又頼君のうへを委ね、事の趣を告げん爲、法會の施主
に假託けて、夜を日に續ぎて走せ來れば、こゝにて御邊にあふのみならず、愛情の羈に牽かれて、暫
しその夫に黄縁り、さらに夫の厄難を救ふ、烈女お花が死後の貞操、而前に見てます、感佩、嗚呼
奇なるかな、奇なるかな。」と只管に歎賞し、一五一十を説き明せば、奥に忽地よ、と泣く、女子の聲

は拈華微笑尼、姊のお通も恙なく、はやこ、に來給ひぬと思ふものから、半七は、夢に夢見るこ、ちして、或は歡び或は哀しむ、「原來お花は、櫻子の御命に代りにけり、かくてこそ半七が汗名を雪むる貞操心烈、それとはしらす八千川より、作ひたるは世になき魂の、迷ひ出でて嬌夫の、別れ惜しむか不便なり。天晴候厚倉ぬし、御邊もしなかりせば、姫君いかで恙なからん。さるにても、古人二郎太夫友春ぬし、未然を察せし忠義の昔、凡慮の及ぶ所にあらず。浅ければ思ひもかけず、御邊を姫の仇として、撃たんとしたる半七は、悞ちをかさねたり。許し給へ。」と額を著き、涙をかくす壯夫が、見じと思へど今更に、生くるがごとき妻の首に、哀傷さこそと厚倉は、件の首級をとりあげて、花桶の内に納め、「天女を祀る法場に、鬮籠の汗穢いと恐し。庵主の女僧に附屬して、法堂果てて葬り給へ。」と、いひつゝ、逃せば半七は、花桶を兩手に受け、「櫻樹に似たる合歡の花、ねぶりて覺めぬ亡妻の、夜臺は則ち手向の花桶、嚮にこ、へ來つるとき、我を諫めし言葉の端にも、定めがたきは愛別離苦、一度わかれて又あうて、別れの後はいかならん。」と、心ほそげに軋てるを、女子の愚癡とのみ思ひて、「いひがひなし」とて叱りしを、心なしとや恨みけん、思へば不便の終焉かな」と、又くりかへす尋常の、いと哀れはいやましつ、鼻うちかみて厚倉も、頼りに啜嘆したりけり。

柴桶の雨笠

厚倉車人が物語を、夢のごとくに聞き居たる、全介はやうやく覺めて、勃然と身を起し、「仇に與せ
る四五六の隼人友善、妨げせば目にも見せん、半七諸共刃を受けよ。」と罵りつゝ、縁頬へ跳り上り
て、刀の鞘へ手を掛くれば、背布の幕をさりと掲げて、一人の武士走り出で、全介を遮り留めて、右手
に引提げし小刀を、抜きも放さずで破ち打てば、全介鎧を搔い廻みて、估とその顔をうち覗り、「去年
の春、標木の彼方まで、跡跟けたれば正しく認る。汝は赤根半之進、實父の仇人脱さじ。」と、跳り蒐
つて腰刀を、抜かんとするを抜かしも果てず、又丁々と打ち居るれば、全介ますます焦燥ちて、組ま
んとする手を楚と取り、「早給ふな半之進が、申し上るべき密事あり。今この小刀をもて、打ち進
らせしは私意ならず、乃ちおん父頼勝朝臣の、後事を感らし給ふ折檻、聽てご思ひ當り給はん。いと
仇なく候。」と、いはれて全介こゝろを得ず、「この期に及びて命を惜しむか、わが實父は今市余八、
養父は敗鐵介四郎、これより外に親はなし。戯言食ますと立ち上つて、勝負を決せよ。」と教圍けば、
半之進莞爾とうち笑ひ、「君の爲には一點ばかりも、命を惜しまぬ半之進、何狼狽へてか、僞りを申す
べき。君は正しく續井の嫡男、今市などを實の父と思召すは物體なし。いざあなたへ」と、恭し
く上座へ押し居れば、厚倉車人も席を下り、半七もその事の、頭木はしらねども、父の後方に居
代りて、各位等しく敬すれば、全介とにかく疑ひ惑ひて、手を又きつ、沉吟せり。當下半之進は、膝

行して席をすゝめ、縁故を知召さねば、疑惑したまふは理なり、儘ふれば三十あまり二年にや早な
りぬべし。永正十二年といひし春の頃、わが君頼勝朝臣、吉稚丸たりし時、積禮を保養のため、華洛
へ酒びてのほり給ふ。おん供には今市至八、布施蝶九郎、かく申す半之進も被ひし。しかるに倭臣布
施今市等、君に淫酒をすゝめ進らせ、華洛に名だたる白拍子、歌妓舞廳を集合へつゝ、長夜の飲そ
の度に過ぎたり。されば召さるゝ舞廳の中に、笠屋小夏といふものあり。彼は華洛の刀拭同樹といふ
ものゝ女兒にて、實の名をば増穂といへり。笠屋夏に歌舞を習ひて、わかしの千手微妙ともいひつべ
き手弱女なれば、吾が君不覺に御こゝろを移されて、有一夜小夏を御旅館へ止宿さし、よぼひつゝ、か
たらひ給ふに、小夏は元來吾が君を、積井の郎君なりとしらす。その名を問へば吾が君も、實の名を
ば告げ給はず。我は積井の近習の上、今市至八郎といふものなりと詐欺りて、二夜も契りをかき
ね給ふ由、某に密語き給ひしかば、こは物體なき御進止、あるべき事とも覺え候はず。もし平城へ
聞えなば、大殿の怒りつよく、御身のうへに候はんと、面を犯して、諫めまうせしかば、是れより
小夏を召されどれども、君も只某を、いぶせきものに思召し、今市布施等時を得て、讒言その間な
かりし程に、某はおん前を遠離けられ、病と稱して下宿に籠居し、ひとり心を勞せしが、果して君
のおん越度、平城へ聞えて御父子の間に、事いで來なんとしたりしかば、厚倉二郎太夫これを取き、

竊かに某が旅宿を訪うて、計策を謀しあはし、事成某が身に負ひて、その喪二載を嘗ひ去りしかば、大賤の御積り忽ち解け、橋樑和藪なし給ひき。かくて六年の春秋たちて、某夫婦召しかへされ、又いくばくの年を経れども、吾が君の御子には、植煙のみいで來給ひて、男子は絶えてましまさず、續片の靈緒絶えんかとて、君も物憂く覺召せども、人力の及ぶべきにあらず。さる程に、一昨年の初冬六日、浪速なる千日墓にて、某一家、蟻松一簇、施行の米を引きたりしに、集合したる貧人を丐多かる中に、年歳は二十八九なる壯俊の、いと妻々しく見えたるが、人の後方に立ち懸れ、施米を受けて歸るを見れば、その面影何となく、吾が君勢頼朝臣によく似たり。心得がたく思ひつゝ、深く意にもとめざりしに、去年の秋、標本の松原にて、某が轡子へ、烏籠をうちかけられし時、養母の自殺に愁傷する壯俊あり。某そのとき、和邇の八幡宮より歸さ、樹の陰に立ち懸れて、事の標を張へば、それが養母は某が母、某が妹晚稻なり。又壯俊は、刃治同樹が妻の孫、今市全八が實子なる由、來し方をかき口説くを、つくんと聞きて闕疑みるに、彼の壯俊はいぬる年、千日墓にて施米を受けたる貧人なり。見れば見るま、吾が君の、面影によく肖たり。折しもあれ、異に周防を逐電せし、厚倉一人いで來りて、敗壞の四五六と名告りつゝ、彼の壯俊を尋り慰め、晚稻の死骸を歸櫛に、納めつゝ、立ち歸る、彼の年人が爲體、實酒に家を忘れて、逐電すべき者にあらず。然るに彼

の人身を奪し、彼の壯皮を助くる事、思ふ所あるにこそと推量り、其の夜刀を打ち折られ、某が預けたる、主君恩賜の小刀を抜きあはし、彼の壯皮が鬣を、一太刀打ち著け敢なく撃たれし、私卒丹三が死骸のほとりに遺したる、件の小刀を取りて、提灯の火に、つくぐとこれを見れば、始めわが君頼朝朝臣、米谷山の妖氣を見んとて、櫛に奪りつゝ、このおん佩刀を走らして、膝口を突き傷り給ひし時、この刀尖に凝て著きし、主君の鮮血と壯皮の、鮮血とひとつに聚まりしは、埤に淨はれぬ親子の證據、我ながらこのおん佩刀を、いしくもまうし賜はりて、丹三には預けしよな。下郎なれども丹三が、彼の君に傷けて、一命を阻せしゆゑに、わが君おん子を襲け給ひつゝ。さるをわが叔母滝船老女が、櫛解の中より奪みまゐらせ、逆氣にも生育たせし、その功もまた賞すべしと、思へばいとゞ嬉しくも、又哀しきも限りなけれど、厚百年人傳き居れば、郎君のうへ心安しと、その養はそまゝ、追ひも留めず、木精塚を發きしも、君に禍あらせじとて、隼人が所爲とは薄しながら、心に秘めて人には告げず、兩居恩免の日を待ちて、このおん佩刀に聚合したる、御父子の鮮血を、吾が君に見せ奉り、ありつる事ども申したるに、吾が君御夫婦庶然と歎びたまひ、わかかわし時の過失は、老いての今の幸願となりぬ。わが給既に五十に及ぶものから、男兒なきをいといたう、心ぐるしくおもひしに、思はず實子を獲たりしは、汝等が丹誠によれり。晩船丹三が後の世を、丁寧に弔ひ得させ

よ。軍人が事は後日に實せん。竊び、にわが子の住むを索ねよ」と仰せつ、又この御旗手を御下され渡ひき、かくて大内家の擾亂によつて、某早く間諜者を、多治比山口へ遣はしつ、兩と大江の善悪忠實を窺はせ、一斯君は軍人と共に、水上の邊に在するによしを傳へ聞き、更に主君の御せを裏け、大江軍と謀し合はせて、時賢を討たんため、沼多の御旗の前きたる此、某竊かに當地に來りて、昨今御旗を欺害としつ、兩どの法會に假託け、後れて來ぬる軍兵を、この處へ集會せたり。君は則ち時賢無代の火藥車、全介を改めて、けふより細井小太郎頼隆と稱し奉るべき。言、大坂の御命なり、疑念を解れて御旗手を、受け收め給へかし」と、おろまなく説し、小刀を引き抜きて、刀尖を札を渡すれば、頼隆は察合へたる、鮮血をうろかへし、と死かう絶つ、胸に納め、三編戴きて腰に帯び、大息をきて影を更の一面目なや赤根父子、誰にいふ氏より育り、養母時賢の物がたりにて、「わが實父は、細井の退隱人、今市全八郎といふものなり」と聞きしかば、驚つて我には忠義ふかき、半之運親子を撃たんとぞし事、動轉ぶるにも餘りあり。軍人はわがよしをぞりしか、しりなほなぞてや告げざりし」と、問はせ給へば細井半人、敢然としてす、み出で二御不審はさる事ながら、某浪迹にありしとき、同じ敷織賣し給ふ、君の御旗を見奉るに、細井御旗に似給へり。大驚いとわかく坐せし時、某洛の歌妓無頼なんとて召されし事は、亡父二郎大夫が御旗手に、納きたる

事も候へば、もし頼井家の落胤には坐さずやと、思へば他事もなく交はりて、浪遊にては永樂殿三郎
文を贈りて危窮を救ひ、そののち標本の松原にて、自殺とせり、その父は頼井の退隠人、今市八
郎なるよしを、初めて聞けども、面影は、頼井殿に似たまへば、故こそあらんと悟初に、復讐の助方
すべき、勢ひは示しながら、竊かに赤根が所とせりて、酒防まで伴ひ参らせ、只頼井殿の落胤なる、
證據を見出す事もやと、年奉意をつけたりしに、いひあはさね三半之遊は、いち早くこれをしれり、
室に燈臺根附しとは、単人が事にて、候と、回答へ申せば、頼井は、ますく、感心料をらす、かひる
べき前象なりけん、われ近ごろ、夢にあつし人來つて、軍法則法の馬を習はし、讀書手紙を教ふる
こと、三四十歳に及びしかば、年奉は一文一字も、引かざりしわねなれど、學ばずして忽ち、文武
の道を讀んじたり。いと不思議の事ならずやと宣へば、半之進、それこそ御祖父頼朝公より、當
代に至るまで、數十年信仰したまふ、志貴の毘沙門の、権義にて候べし。現に歸に半之進を、曾たふ
と上給ひたる舉動皆悉く法に解へり。いと悪しう候と、稱へ申せば、傍より、半七喝せりと
披露して、「郎君これに」とさし向ければ、頼井一日に見くたれて、「忠臣不事二君、貞女不見二夫」と書
きたるなり。これは頼井が語にて、本是れ史記に出でたるを、對面説也に、又この語を讀したりに
と、説き示し給ふにぞ、赤根厚自感服し、「この語は常に世の人の、日遊の候へとも、何人の語せるよ

し、出處を定かにしるは稀なり。神明佛陀の守らせ給へば、龍に翼の名大將、合戦勝利疑ひなし」と
 祝しつゝ、厚倉真人又いふやう、「布施物に託けて、種痘をば、唐櫃の中に潛ばし奉りて、こゝに
 伴ひまゐらせしが、事に紛れて未だ出し奉らせず、骨氣に堪へずご坐すべき、同胎對面なし給へ。」と
 て、遽はしく庭へ下り、唐櫃の蓋うも開きて、槐癩のおん手を抜き、母屋へ誘引ひ奉れば、順啓
 は席を譲りて、威儀正しく、「我には年もほろかに劣れど、その母貴くおはすれば、妹なりとも輝に等
 し。さても晴賢が逆謀にて、百折の艱苦を経給ふこと、痛ましくこそ候へ。」と、慰め給へば槐癩、
 涙を袖にうけをきめ、「ゆくりなく兄公に、陽を對はする身の幸ひ、世に憑もしく思ひ侍り。但まはれ
 むべき初花が、妾に代りてあへなき横死」とゞめんよしもなかくに、けふの法會の折を得て、女僧
 ともなりて亡夫と、なき人々の菩提を弔ひなん。このこと許さし給へかし。」と、心ほそげに宣へば、
 厚倉隼人小膝をすゝめ、「姫君ふかくな歎き給ひそ。お花が横死は彼が情恚、義基朝臣はいぬる秋、
 築山の御所において、刀を肚へ突き立て給ひ、猛火の中へ飛び入らんとし給ひしを、隆春竊かに助け
 まゐらせ、心服の郎黨して、片山里へ潛ばしめるらせ、療治をさ／＼術を盡しつゝ、既に癡人となり給
 へども、御命恙なし。遠からずして御夫婦の、再會をなし進らせん」と、慰めまうせば槐癩、「原
 來わが所天は、なほこの世にこそ在しけれ。これぞ偏に陶五郎が、稀なる誠心のなす所、喜ばしや。」

と思はずも、掌を合はしつゝ、戒防の方を拜み給へば、厚倉半人は懐中より、隆春が髪は毛と、短冊をとり出し、扇に蔽して半之漢が、ほとり近くこれを置き、一頁痛ましきは關五郎、義父の逆心を諫めかね、とくにも腹を切るべかりしに、義基朝臣を教ひ出し、奉らん爲に得も死なす、二たび諫めて聽かれざれば、號哭して觀に従ふ。本來子たるの道なれば、今更に是非に及ばず、君命とはいひながら、反逆人を親としたる、隆春が一世の不幸りとともかくても身のなる果ては竹籠、木抄に首を渡され、大和に在す觀同地へ、恥を遣さぬ口をしさま、御進せめて隆春が志を父母に告げ、なき後には一紙の、趣向を憑むと、管の毛を押し切つて、短冊とも共に出されし、この世ながらの像見を、これ見たまへと指し示せば、半之漢その短冊を手にとりて、

黒髪の覆れずもがなあづさ弓をらてまていのりの道しほ

證 存

と二たび二たび聆じつゝ、半七と面をあらはし二れが子どもが心さま、いづれも劣り難い様を、關五郎の不幸にして、反逆人の手となりし。これも亂世の業因ならぬと、いひつゝ、滾す一滴、同じ恨みに事じし、弟の心を思ひやり、涙を禁めあへざれば、願啓も、これか爲に嘆息し、目を見れば、お給ふこそ、奥にもれ難く、常世の業因、お通も共に忍びあへず、聲より立ててよ、と泣けば、半之漢は見かへりて、郎君の出陣に、不許の笑聲奇怪なり、兩女衛は何處に在る。お通も共に、

わが齎したる御被長を、順啓君に進らせよ」と、呼びたつれば、やうやくに涙を禁め、拈華微笑が二人して、引きいつる鐵櫃、お通はわがて蓋取りて、武運を開く小櫻籠、五枚鍔の星兜、現に故郷の名にし負ふ、大和錦の陣羽織、綾小手奴袴、太刀六具、三人手々に被せまゐらすれば、順啓弓矢挟み、牀几に尻をかけ給ふ、その態度有つて猛からず。赤根厚倉左右に侍立し、暗號の笛を吹きたつれば、奥に集會ひし参詣の、講衆は甲人ならず、みな是れ納井の兵士ども、甲冑に身を固め、散動きたつて走り出で、廣庭隈と隊伍せり。當下厚倉が從者等も、外面より走り來つ、二つの櫃をうち披き、鏢一宿する程に、軍監左右に押し立つる、旗に書きたる二天の名號。一職島辨財天女、志貴毘沙門天王。一と高やかに唱へつ、諸軍齎しく一拜する折から、校討違うて出でもやらす、事の趣おちもなく、聞き果てたる刀治同樹は、こゝに始めて慚愧して、贗子の下より這ひ出でつ、いと面なげに頭を低け、二十餘歳のけふまでも、慾に固めし五體一心、佛とも法とも辨へず、造りし罪こそ悔しけれ。今思はずも忠臣孝子、義夫義婦、順孫の業まゐて、世にも稀なる心業、説き語したまふ清談を、聞きてはわが身が疎ましく、また針ましく絶かほしく、後悔今更その詮なけれど、貞節を許欺りて賣らんとし、忠臣孝子を虐きたる、惡報は今而り、この竹擲に貫かれん。南無阿彌陀佛」と唱へつ、折れたる竹筒擲い取りて、壯へつきたてんとしたりしかば、順啓は忙しく、「彼禁めよ」と宣へば、半七

やがて走り下りて、竹槍に携り止め、五逆十惡の罪人たりとも、懺悔にはその罪滅す。假にも親と遇ふし人の惡念を轉して、善心に歸する事、歡ばしくこそ被へこと、いひつ、槍の徳を奪つて、背に投じ捨つれば、船内は半七して、同樹を近く招きまし、我は櫻麻の中にして、孤となるのみならず、その父定かならざりしに、乳母して生まれしは、汝が妻の恩恵なり。又わが妹槐姫、去年よりこゝに身を寄せしも、汝が妻が恩恵なり。汝が妻はわが外祖母なり。汝肉縁なしといへども、わが外祖父なり。争でかは死すべき。提婆が悪も釋迦の方便、汝が妻の舊庵にて、なんぞ忽ち道心を發す事、これ又汝が妻の徳なり。われ凱陣の時を得ば、實母増徳、養母晚階、祖母小田井、義女お花、孝子半七等が爲に、永年の法會を修し、拈華微笑の兩比丘尼をば、必ず大和へ伴ふべし。汝は今日この草庵に住持して、お花等が菩提を修へ、五明八反の良田を、寄附して讀經の料となさん。餘命を靜かに送れかし」と丁寧に諭し給へば、同樹は感涙の如く、願啓禮懺を伏し身み、又半七等も身みけり。當下半七は、外母拈華尼、弟婦微笑等に、沼田の斬關を越え難ねたりし日、關防牌面を惠まれし喜びを述べ、顔のいたく變り給へば、それともしらで立ち別れし、いと愚かにこそ思しけん。とて、身の作りを贈語ぶる程に、お通も八千川の危難を脱れて、こゝへ來りし事を物がたれば、夏山は平太郎を呼びて、半七等に逢はしめするに、時刻もうつりぬべし。半之進天うも仰ぎて、一け

ふもはや申の時には遠からじ。いぬる日多治比へ遣はしたる、仙野呂東二はいまだ歸らず、大江家の消息いかにあるらん、心もとなく候」と、いふ言葉いまだ訖らず、衝と走り來る呂東二道能、陣營取つて跪けば、半之進借と見て、「待ちわびたりし仙野呂東二、大江家の吉凶は、いかに／＼」と、小膝を進めて、問へば呂東二鐙の袖を、引きあはして威儀を稱ひ、「されば某多治比へ赴き、再三謀しあはずれば、大江太郎之就朝臣、密かに晴賢謀殺の謀をめぐらし給へど、その便宜を得ざりしに、時こそ來つれ陶晴賢は、嚴島へ詣づる由、風聲をさ／＼かれくなし、このとき大江續井の軍船、不意に起つて攻め討たば、晴賢を虜にしつべし。きはれ久しく雨ふらねばや、宮島の邊干潟となりて、自在に船を進め難し。願ふ所は只雨のみ、もし終日雨ふらば、乙就が晴賢を、變應の夫役と爲り、開道より嚴島へ押しよせ給へ。彼處にて對面し、軍配をいひあはさん」と宣はせし、返書はこれ」と申し出せば、半之進受取りて、願齊に進らすれば、封皮推し切つて讀みくだち、「乙就の謀畧、その圖に當れり。刀治同樹懺悔して、善心に立ちかへれば、凡そこの件にありとあるもの、悪人は絶えてなし。只憎のべきものは晴賢のみ。しかれども雨ふらずば、容易く陶を討ちがたし。頼む所は天女の擁護、拈華微笑は讀經して、辨財天女を祈れかし」と宣へば、厚倉作人す、走出で、「吉の小野小町は、歌を詠じて、雨を覆たり。今のお通も幼稚きより、敷島の道にかしこく、秀歌をさ／＼多しと聞けば、

雨乞の歌を詠ませ、辨財天女を祝らし給へ。」といふに、順啓うち點頭き、「軍人いしくも申したりの。天地を驚かすも、元來和歌の徳と聞けば、通はこの旨こゝろ得て、準備せよ。」と仰すれば、お通は再三辭し申せど、槐姫傍より、他事もなく諭し進めて、姫君の料にとて、厚食が備したる五衣綱袴、手親らこれを賜はれば、お通は推辭むに言葉なく、退きて衣裝を更め、拈華微笑もろ共に、庭に出でつ、半ば濡れたる、曲演の邊に立てば、軍兵等心を得て、轉手に運ぶ經瓶、料瓶をとりそへて、準備既に整へば、いと晴れがましく見えにけり。かくて拈華微笑尼は、念珠を押し揉み合掌し、「能與摠持大智慧衆、大辨財天、神體は是れ安藝國、沼多郡宮島に、宮柱よしく建てて祝はれ給ふ。市杵島姫の神徳神慮空しからずば、今立地に雨ふらして、續井大江の兩義兵に力を發はしたる給へ。」とお通もろ共且く念じて、嚴島を遙拜し、兩女僧は「非しく、光明經の經を讀きて、三遍讀き、廣宜流布乃至得聞是經當令是等悉得猛利不可思議大智慧衆不可思議轉徳之報」と、讀經の聲の澄みわたる、いと多く聞えしかば、お通は小宴時うち案じて、墨摺りなかし筆を染めて、短冊に詠歌を書き讀し、筆を聞き、

日を經つ、民の草葉のかわはくにあぐみの雨をいかでそゝが、かくは三遍吟じつ、日上に捧ぐれば、天女感應したまひけん、庭の遣水浪たちて、一天依似に結露

り、風颯とおとし來つ、彼の短冊を空中へ、まき上するとぞ見えたりし、雷雨俄頃こふる注ぎ、草木も人も避れば、願啓同胞赤根厚倉、天に歡び地に喜ぶ。同樹はごらなり、軍兵等は、濡る、を厭はで、異口同音に、暫しは感じ止まざりけり。然るにわきて不思議なりしは、この雨拈華微笑の面を打つて、降り流す程に、爛れたる火傷の跡、洗ふが如く愈え消えて、舊の如くになりしかば、兩女僧の誠心を、天女憐み給へばこそ、一たび傷きたる容止の、かくまでに愈えたる事いとあり難き冥助なれとて、衆皆信心膽に徹して、末頼もしく思ひけり。願啓は殊更に、感電頓る氣色に見はれ、拈華微笑が讀經の奇特は、能因が和歌に劣らず、お通が詠歌は小野小町が、請雨に異ならず。かかれば能因の二字を分ちて、兩女僧が名に被け、能拈華、因微笑とやこれを呼ばん。又お通をば、小町に爰して、小野小通と唱ふべし。獲がたき雨をはや獲たれば、時を移さず出陣せん、蓑笠の準備せよと宣ふ折から、人馬共に直と濡れて、馳せ來るものあり。是れ則ち蟻松曾太郎なり。柴門に馬乗り捨てて、禰と入りつ、願啓、穗姫を見て驚き、二郎君姫君へ申し候はん。きても大殿いぬる室の、日夢の中に、毘沙門天影向して、告げ給ひしことあるをもて、今日この處に郎君姫君の、集合ひ給はんよしを知召され、曾太郎を遣はされる所なり。郎君當家の大將軍として、晴賢を撃ち給ふに、無官にておはしませば、敵これを侮らんか。よりにて室町殿へ申し請うて、大和介に任せらる。かつ姫君は、拈華微笑お

通算を將て、一圓平城へ歸館あるべし。御迎へのため參上せり」と演説すれば、順啓は、つゝしんで父の命を承け、且蟻松を勞ひたまふ。その隙に赤根親子厚倉は、華やかに鑑ひつゝ、先陣後陣と立ちならべば、微笑は涙さしぐみつゝ、平太郎が手とりて、半七が側へ押しやり、「おもふ程なる忠義を竭さで、空しくなりし父の代りに、足手纏ひに侍るとも、此の平太郎を伴ひ給へ。」と、いひかけて又うち泣けば、半七、「有塊。」と平太郎を、鑑の上に楚と負ひ、「親に代りて天折せし、弟笠松平作が、再びこゝに存命へて、忠義を演ぶる四歳兒の初陣、伯父もろ共に分捕させん。これらの事は念とせで、故郷へ歸り給ひなば、家なる母とこゝに在す、蟻松翁へお花が事を、言告げてたべ。」と許りに、鑑の袖を密と濡らす、雨はますくをやみなく、篠をみだして降りながせば、順啓廳を取りなほし、「時刻移らばいひがひなく、乙就に先せられなん、はや出陣。」と促し給へば、馬取の雜兵が、縁頼近く牽き居ゑる、月毛の駒も西に入る、「佛の利益、神の加護、めでたく凱陣遊ばせ。」と、送る郷君、女僧、お通は、修羅の巻を見捨てつゝ、大和へとゆく起程も、残る同樹は八重葎、しげ藤の弓朱の柄の槍の、赤根厚倉勇ましく、主を守護して立ち出でけり。

占夢南柯後記卷之八 大尾

昭和二年七月十五日印刷
昭和二年七月十八日發行

近代日本文學大學系
第五十卷

(非賣品)

編輯者

東京市麹町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麹町區內幸町一丁目六番地

野中次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麹町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座 二七八三番
三六八八番
振替東京 五二二九八番





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03045 2684